岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 100

南溝手遺跡1

岡山県立大学建設に伴う発掘調査
I

1995

岡山県教育委員会

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 100

南溝手遺跡1

岡山県立大学建設に伴う発掘調査
I

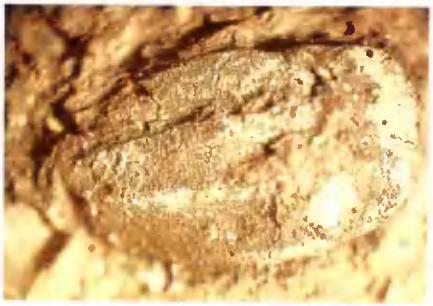
1995

岡山県教育委員会

1. 調査区全景（AT・DE・JY・IN・FU区）

2. 調査区全景（AT・DE・JY・IN・FU区）

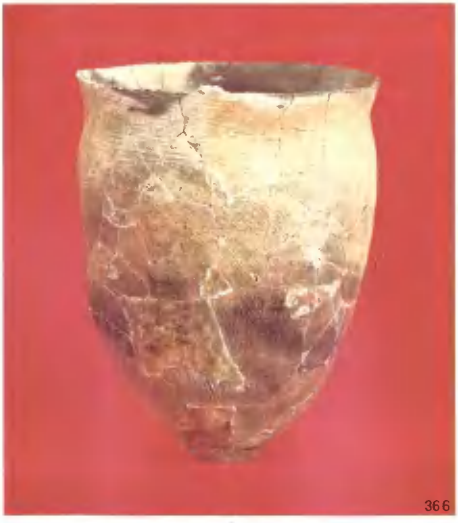
巻頭図版2



縄文時代後期後葉の籾痕土器

1. 縄文時代後期土器
（A地点）

2. 縄文時代晩期土器
（河道1）



3. 縄文時代晩期土器
（河道2）

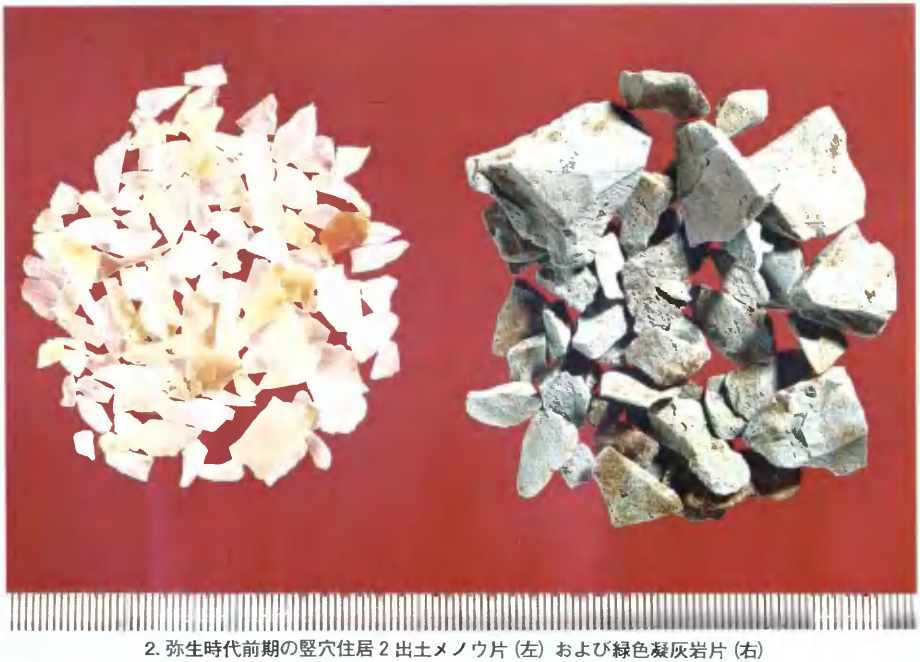
4. 縄文時代晩期土器
（河道2）

巻頭図版4

1. 弥生時代前期の竪穴住居 2

2. 弥生時代前期の竪穴住居 2 出土石器（玉砥石ほか）

1. 弥生時代前期の竪穴住居 2 出土管玉未製品（左）およびメノウ製品（右）



2. 弥生時代前期の竪穴住居 2 出土メノウ片（左）および緑色凝灰岩片（右）

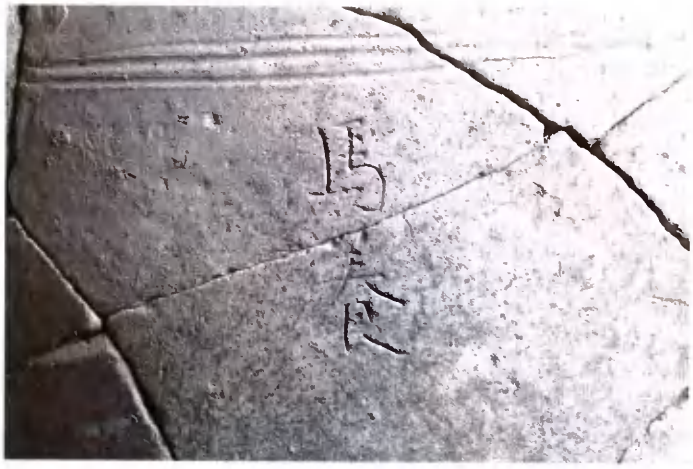
巻頭図版6

1. 弥生時代後期の竪穴住居 5

2. 弥生時代後期の井戸 3

1. 古墳時代の水田（水田８，JO区）

2. 水田層断面（EN区）



水田9（古代）畦畔出土「馬養」線刻須恵器

序

岡山県は、近年の情報化、国際化の進展、高齢化社会の到来という多様な社会の変化に対応しながら、人間尊重と福祉の増進を基本理念として、幅広い知識と高度な技術を身につけた人材を養成するとともに、学術研究の振興を図ることを目指して、岡山県立大学および岡山県立大学短期大学部を平成５年４月に設立いたしました。

岡山県教育委員会では、県立大学の建設に先立って、関係当局と繰り返し協議・調整を行い、やむなく破壊される部分については記録保存の処置を講じました。平成元年度の確認調査に引き続き、平成２年度からの発掘調査は、建設予定地内における主要な建物と付帯施設について実施いたしました。

今回報告します『南溝手遺跡１』は、報告書全４分冊のうちの第１分冊にあたるものです。この南溝手遺跡は縄文時代後期から中近世にいたる集落遺跡であることが明らかになり、数多くの学術的成果を得ることができました。なかでも稲作の開始期に再考を促す資料となつた縄文時代後期の籾痕土器や全国的にも最古級の弥生時代前期の玉作り関連遺物、さらには「馬養」銘を刻んだ古代の須恵器の出土など、特筆に値する内容をもつものも多く見られます。

この報告書が学術研究に寄与できるばかりか、文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史研究のための資料として広く役立つならば幸いと存じます。

発掘調査および報告書の作成にあたっては、岡山県立大学建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の諸先生から種々の御教示と御指導を賜りました。また、岡山県総務部県立大学建設準備室、岡山県土地開発公社、総社市教育委員会、ならびに地元の関係各位から温かい御理解と御協力をいただきました。末筆ながら、記して厚く御礼申し上げます。

平成７年３月

岡山県教育委員会

教育長　森　崎　岩　之　助

例　　言

1．本報告書は、岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部の建設に伴って岡山県古代吉備文化財センターが岡山県総務部から委託を受けて発掘調査を実施した南溝手遺跡の発掘調査報告書である。

2．岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部建設に伴う発掘調査報告書は4分冊にわたって刊行する予定であり、本報告書はその第1分冊にあたる。

3．南溝手（みなみみぞて）遺跡は、岡山県総社（そうじゃ）市南溝手に所在する。

4．発掘調査は、1990(平成2)年3月から1993(平成5)年3月まで実施しており、今回報告する調査区の調査期間は1990年3月から1992年3月までである。

5．発掘調査および報告書の作成にあたっては「岡山県立大学建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益なご指導とご助言をいただいた。記して深く感謝の意を表する次第である。

(故)鎌木義昌（岡山理科大学教授）　新納　泉（岡山大学助教授）
亀田修一（岡山理科大学助教授）　間壁忠彦（倉敷考古館館長）
近藤義郎（岡山大学名誉教授）　水内昌康（岡山県文化財保護審議会委員）
高橋　譲（ノートルダム清心女子大学教授）　山本悦世（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター）
中田啓司（元県立矢掛高等学校教諭）

6．本報告書の作成は1993年度に岡山県古代吉備文化財センターにおいて、文化財センター職員平井泰男、川崎新太郎、久保恵里子が担当して行い、遺物の復元・実測および遺物写真については文中に明記した方々の協力を得た。

7．本報告書の編集は平井が中心となって行った。また、各遺構の執筆については、基本的には発掘調査担当者が分担し、文責は文末に明記した。

8．本報告書に関わる自然遺物などのうち、一部のものについて鑑定・同定および分析を下記の諸氏、機関に依頼し、有益な教示を得るとともに、そのいくつかについては報文をいただいた。記して厚く御礼申し上げる次第である。

籾痕土器	渡部忠世（放送大学教授・京都大学名誉教授）
同上	武田和義（岡山大学資源生物科学研究所教授）
緑色凝灰岩の産地分析	藁科哲男（京都大学原子炉実験所）
赤色顔料の分析	本田光子（福岡市埋蔵文化財センター）
石器・石材鑑定	妹尾　譲（吉備国際大学助教授）
種子同定	パリノ・サーヴェイ株式会社
木製品樹種同定	畔柳　鎮（岡山商科大学教授）
C^{14}年代測定	社団法人日本アイソトープ協会
プラント・オパール、花粉分析	藤原宏志（宮崎大学教授）、古環境研究所
サヌカイト、ガラス溶滓分析	白石　純（岡山理科大学）

9．出土遺物ならびに図面・写真類は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡　　例

1．本報告書にもちいた高度は海抜高であり、北方位については第１・22・23図が真北で、それ以外は磁北である。なお遺跡付近の磁北は西偏６度40分を測る。

2．本報告書の遺構および遺物実測図の縮尺については明記しているが、おもなものについては一部例外はあるものの以下のように統一している。

遺構

竪穴住居・建物（1/60）　井戸・土壙（1/30）　土器棺墓（1/20）

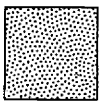
遺物

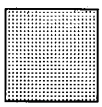
土器（1/4）　土製品（1/3）　石器・石製品（1/2，1/3）

鉄器・鉄製品（1/3）　玉類（1/1）

3．本報告書における土層名称については、各発掘調査担当者によって表記方法が異なっており、統一できていない。

4．本報告書に掲載した火処の遺構図においては、被熱している範囲と、炭・焼土の分布範囲とを下記のトーンで表している。


……被熱範囲


……炭・焼土分布範囲

5．本報告書に掲載した遺物の番号については、土器・土製品、石器・石製品、青銅製品、木器・木製品にわけて通し番号をつけ、土器以外については、下記の略号を番号の前に付している。

土製品：C　石器・石製品：S　鉄器・鉄製品：I

青銅製品：B　木器・木製品：W

6．本報告書に掲載した土器実測図のうち、中軸線の左右に白抜きのある図は、口径の不確かなものである。また、小片の土器については、傾きの不明確なものも多い。

7．本報告書に掲載した土器の拓本のうち口径のでない個体については、断面図の左側に内面の、右側に外面の拓本をのせている。

8．本報告書に掲載した地図のうち、第１図は国土地理院発行の1/50000地形図「岡山北部」を、第23図は国土地理院発行の1/25000地形図「総社東部」・「倉敷」を縮小、複製し、加筆したものである。

9．土器観察表における色調は『新版標準土色帖（1988年版）』（農林水産省・農林水産技術会議事務

局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）によっている。

10. 本報告書にもちいた遺構・遺物の時期については、弥生時代から古墳時代前期については第1表の編年対比表のように表記し、それ以外の時期については各執筆者の意向に沿っており統一していない。なお、本報告書における古代・中世については8世紀から16世紀までを指している。

時代＼遺跡			百間川(註1)	雄　町(註2)	上東・川入(註3)	南溝手1
弥生時代	前期	津　島	百間川前期Ⅰ			弥生時代前期前葉
		門　田	百間川前期Ⅱ	雄　町　1		弥生時代前期中葉
			百間川前期Ⅲ	雄　町　2		弥生時代前期後葉
				船　山　3		
	中期	南　方	百間川中期Ⅰ	高　田		弥生時代中期前葉
				雄　町　3		
		菰　池	百間川中期Ⅱ	船　山　5		弥生時代中期中葉
				菰　池		
				雄　町　4		
		前山Ⅱ	百間川中期Ⅲ	前　山　東		弥生時代中期後葉
				雄　町　5		
		仁　伍		雄　町　6	上東・鬼川市0	
	後期	上　東	百間川後期Ⅰ	雄　町　7	上東・鬼川市Ⅰ	弥生時代後期前葉
				雄　町　8		
			百間川後期Ⅱ	雄　町　9	上東・鬼川市Ⅱ	弥生時代後期中葉
				雄　町　10		
		グランド上層	百間川後期Ⅲ	＋	上東・鬼川市Ⅲ	弥生時代後期後葉
		酒　津	百間川後期Ⅳ	雄　町　11	才の町Ⅰ	弥生時代後期末葉
					才の町Ⅱ	
古墳時代	前期	王泊六層	百間川古墳時代Ⅰ	雄　町　12	下田所	古墳時代前期前葉
				雄　町　13	亀川上層	
			百間川古墳時代Ⅱ	雄　町　14	＋	
			百間川古墳時代Ⅲ	雄　町　15	川入・大溝上層	古墳時代前期後葉

註1　岡山県教育委員会が1977年から実施している「百間川遺跡群」の発掘調査で用いられている編年である。（文献『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅰ～Ⅹ』岡山県教育委員会、1980～1995年）

註2　「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』岡山県教育委員会　1972年

註3　「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(16)』岡山県教育委員会　1977年

第1表　編　年　対　比　表

本 文 目 次

序
例言
凡例
目次
第１章　発掘調査および報告書作成の経緯…… 1
　第１節　発掘調査の契機…… 1
　第２節　発掘調査の体制…… 3
　第３節　発掘調査の経過…… 7
　　１．　確認調査…… 7
　　(1)　一次調査…… 7
　　(2)　二次調査…… 20
　　２．　全面調査…… 23
　第４節　報告書の作成…… 27
第２章　遺跡の位置と環境…… 32
第３章　発掘調査の概要…… 36
　第１節　調査区の概要…… 36
　第２節　縄文時代後期の遺構・遺物…… 37
　　１．　概要…… 37
　　２．　出土遺物…… 37
　第３節　縄文時代晩期の遺構・遺物…… 42
　　１．　概要…… 42
　　２．　遺構・遺物…… 46
　　(1)　土壙…… 46
　　(2)　火処…… 57
　　(3)　土器溜り…… 58
　　(4)　柱穴…… 61
　　(5)　河道…… 63
　　(6)　その他の遺構・遺物…… 86
　第４節　弥生時代前期～中期前葉の遺構・遺物…… 104
　　１．　概要…… 104
　　２．　遺構・遺物…… 104
　　(1)　竪穴住居…… 104
　　(2)　建物…… 122
　　(3)　土壙…… 123
　　(4)　火処…… 154

(5) 土器棺墓…… 155
(6) 柱穴…… 156
(7) 溝…… 159
(8) 水田…… 175
(9) 河道…… 175
(10) その他の遺構・遺物…… 181
第5節 弥生時代中期中葉～後期の遺構・遺物…… 211
1. 概要…… 211
2. 遺構・遺物…… 211
(1) 竪穴住居…… 211
(2) 建物…… 224
(3) 井戸…… 249
(4) 土壙…… 269
(5) 土器棺墓…… 289
(6) 柱穴…… 291
(7) 溝…… 292
(8) 水田…… 313
(9) 凹地…… 318
(10) 河道…… 320
(11) その他の遺構・遺物…… 330
第6節 古墳時代の遺構・遺物…… 337
1. 概要…… 337
2. 遺構・遺物…… 337
(1) 井戸…… 337
(2) 土壙…… 342
(3) 柵列状遺構…… 342
(4) 溝…… 352
(5) 水田…… 353
(6) その他の遺構・遺物…… 360
第7節 古代・中世の遺構・遺物…… 361
1. 概要…… 361
2. 遺構・遺物…… 361
(1) 建物…… 361
(2) 土壙…… 372
(3) 柵列状遺構…… 373
(4) 溝…… 374
(5) 素掘溝群…… 392
(6) 土手状遺構…… 397

(7) 水田…… 397
(8) その他の遺構・遺物…… 405
第８節 近世以降の遺構・遺物…… 406
１． 概要…… 406
２． 遺構・遺物…… 407
(1) 土壙…… 407
第４章 まとめ…… 408
第１節 発掘調査成果の概要…… 408
第２節 縄文時代後期の稲作について－籾痕土器とプラント・オパール分析結果から…… 418
第３節 縄文時代晩期中葉の土器について…… 422
第４節 縄文時代晩期後葉の土器について…… 426
第５節 「孔列文土器」について…… 431
第６節 石器・石製品について…… 440
第７節 弥生時代および古墳時代前期の水田について…… 446
第８節 「馬養」線刻土器について…… 450
付載１、土器片附着の圧痕について…… 453
付載２、南溝手遺跡出土土器胎土のプラント・オパール分析結果について…… 457
付載３、南溝手遺跡出土の玉材石片の産地分析…… 460
付載４、南溝手遺跡出土土器の赤色顔料について…… 469
付載５、岡山県南溝手遺跡における自然科学分析 (1)…… 471
付載６、岡山県南溝手遺跡における自然科学分析 (2)…… 475

挿 図 目 次

第１図 岡山県立大学の位置（斜線部分）(1/50000) …… 1
第２図 第一次確認調査トレンチ配置図(1/4000)…… 8
第３図 第一次確認調査トレンチ１～５(1/80)…… 9
第４図 第一次確認調査トレンチ６～９(1/80)……10
第５図 第一次確認調査トレンチ10～14(1/80)……11
第６図 第一次確認調査トレンチ15～22(1/80)……12
第７図 第一次確認調査トレンチ23～27(1/80)……13
第８図 第一次確認調査トレンチ28～33(1/80)……14
第９図 第一次確認調査トレンチ34～37(1/80)……15
第10図 第一次確認調査トレンチ38～43(1/80)……16
第11図 第一次確認調査トレンチ44・45(1/80)……17
第12図 第一次確認調査出土遺物(1)(1/2・1/3)……17
第13図 第一次確認調査出土遺物(2)(1/4) ……18
第14図 第二次確認調査トレンチ配置図(1/2000・1/10000) ……20
第15図 第二次確認調査トレンチ47～65(1/80)……21
第16図 第二次確認調査トレンチ66～87(1/80)……22
第17図 第二次確認調査トレンチ88～96(1/80)……23
第18図 全調査区配置図(1)(1/4000)……25
第19図 全調査区配置図(2)(1/4000)……28
第20図 南溝手遺跡１調査区名一覧（第１分冊）(1/2000)29
第21図 南溝手遺跡１グリッド設定図（第１分冊）(1/2000) ……30
第22図 遺跡位置図……32
第23図 周辺主要遺跡分布図(1/40000) ……33
第24図 調査区地形概略図(1/3000)……36
第25図 縄文時代後期土器出土地点(1/1500)……37
第26図 縄文時代後期土器出土状況（A，B地点）(1/80)38

第27図　縄文時代後期出土遺物（Ａ地点）（1/4）……39
第28図　縄文時代後期出土遺物（Ｂ地点）（1/4）……40
第29図　縄文時代後期遺物出土状況および出土層位
（Ｃ地点）（1/30・1/60）……40
第30図　縄文時代後期出土遺物（Ｃ地点１）（1/4）……41
第31図　縄文時代後期出土遺物（Ｃ地点２）（1/2）……41
第32図　縄文時代後期出土遺物（Ｄ・Ｅ地点）（1/4）……41
第33図　縄文時代晩期地形概略図(1/3000)……42
第34図　縄文時代晩期遺構全体図(1)(1/1500)……43
第35図　縄文時代晩期遺構全体図(2)(1/500)……44
第36図　縄文時代晩期遺構全体図(3)(1/500)……45
第37図　土壙１(1/30)・出土遺物(1/4・1/3)……46
第38図　土壙２(1/30)・出土遺物(1/4)……47
第39図　土壙３(1/30)・出土遺物(1/4)……47
第40図　土壙４(1/30)……48
第41図　土壙５(1/30)……48
第42図　土壙６(1/30)……48
第43図　土壙７(1/30)……48
第44図　土壙７出土遺物(1/2)……49
第45図　土壙８(1/30)……49
第46図　土壙９(1/30)・出土遺物(1/4)……49
第47図　土壙10(1/30)・出土遺物(1/4)……50
第48図　土壙11(1/30)・出土遺物(1/4)……50
第49図　土壙12(1/30)……51
第50図　土壙13(1/30)……51
第51図　土壙14(1/30)・出土遺物(1/4)……51
第52図　土壙15(1/30)……52
第53図　土壙16(1/30)・出土遺物(1/4)……52
第54図　土壙17(1/30)・出土遺物(1/2)……52
第55図　土壙18(1/30)……52
第56図　土壙19(1/30)・出土遺物(1/4)……53
第57図　土壙20(1/30)……53
第58図　土壙21(1/30)・出土遺物(1/4)……53
第59図　土壙22(1/30)・出土遺物(1/4・1/3)……54
第60図　土壙23(1/30)・出土遺物(1)(1/2)……54
第61図　土壙23出土遺物(2)(1/4)……55
第62図　土壙24(1/30・1/5)・出土遺物(1/4)……55
第63図　土壙25(1/30)・出土遺物(1/4)……56
第64図　土壙26(1/30)……56
第65図　土壙27(1/30)・出土遺物(1/4)……56
第66図　火処17(1/30)……57
第67図　火処14(1/30)……57
第68図　火処18(1/30)……57
第69図　火処16(1/30)……57
第70図　火処23(1/30)……58
第71図　火処24(1/30)……58
第72図　土器溜り１およびその周辺出土遺物(1)(1/4)……59
第73図　土器溜り１およびその周辺出土遺物(2)(1/2・1/3)
……60
第74図　柱穴１（Ｐ１）（1/20）……61
第75図　柱穴２（Ｐ２）（1/30）……61
第76図　柱穴１（Ｐ１）出土遺物(1/4)……61
第77図　柱穴２（Ｐ２）出土遺物(1/4)……61
第78図　柱穴３（Ｐ３）～柱穴19（Ｐ19）出土遺物(1/4)
……62
第79図　河道１出土遺物（縄文時代晩期１）（1/4）……63
第80図　河道１出土遺物（縄文時代晩期２）（1/4）……64
第81図　河道１出土遺物（縄文時代晩期３）（1/4）……65
第82図　河道１出土遺物（縄文時代晩期４）（1/4）……66
第83図　河道１出土遺物（縄文時代晩期５）（1/4）……67
第84図　河道１出土遺物（縄文時代晩期６）（1/4）……68
第85図　河道１出土遺物（縄文時代晩期７）（1/4）……69
第86図　河道１出土遺物（縄文時代晩期８）（1/4）……70
第87図　河道１出土遺物（縄文時代晩期９）（1/4）……71
第88図　河道１出土遺物（縄文時代晩期10）（1/4）……72
第89図　河道１出土遺物（縄文時代晩期11）（1/2・1/3）…73
第90図　河道１出土遺物（縄文時代晩期12）（1/2）……74
第91図　河道１出土遺物（縄文時代晩期13）（1/3）……74
第92図　河道２検出状況(1/300)……75
第93図　河道２断面図（縄文～弥生時代中期）（1/80）……76
第94図　河道２出土遺物（縄文時代晩期１）（1/4）……77
第95図　河道２出土遺物（縄文時代晩期２）（1/4）……78
第96図　河道２出土遺物（縄文時代晩期３）（1/4）……79
第97図　河道２出土遺物（縄文時代晩期４）（1/4）……80
第98図　河道２出土遺物（縄文時代晩期５）（1/4）……81
第99図　河道２出土遺物（縄文時代晩期６）（1/4）……82

第100図　河道２出土遺物（縄文時代晩期７）（1/4）……83
第101図　河道２出土遺物（縄文時代晩期８）（1/4）……84
第102図　河道２出土遺物（縄文時代晩期９）（1/2・1/3）……84
第103図　河道２出土遺物（縄文時代晩期10）（1/4）……85
第104図　河道２出土遺物（縄文時代晩期11）（1/4）……86
第105図　河道２出土遺物（縄文時代晩期12）（1/6）……86
第106図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期１）（1/4）……87
第107図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期２）（1/4）……88
第108図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期３）（1/4）……89
第109図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期４）（1/2・1/3）……89
第110図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期５）（1/2）……90
第111図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期６）（1/4）……91
第112図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期７）（1/4）……92
第113図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期８）（1/4）……93
第114図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期９）（1/4）……94
第115図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期10）（1/4）……95
第116図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期11）（1/4）……96
第117図　第２微高地（西）出土遺物（縄文時代晩期１）（1/4）……97
第118図　第２微高地（西）出土遺物（縄文時代晩期２）（1/4）……98
第119図　第２微高地（西）出土遺物（縄文時代晩期３）（1/3）……98
第120図　第２微高地（西）出土遺物（縄文時代晩期４）（1/2）……99
第121図　第２微高地（東）出土遺物（縄文時代晩期１）（1/4）……99
第122図　第２微高地（東）出土遺物（縄文時代晩期２）（1/2・1/3）……100
第123図　第２低位部出土遺物（縄文時代晩期）（1/4）……100
第124図　第３低位部出土遺物（縄文時代晩期１）（1/4）……101
第125図　第３低位部出土遺物（縄文時代晩期２）（1/2）……102
第126図　第４低位部出土遺物（縄文時代晩期）（1/4）……102
第127図　トレンチ１・２断面図（1/80）……103
第128図　弥生時代前期～中期前葉地形概略図（1/3000）……104
第129図　弥生時代前期～中期前葉遺構全体図(1)（1/1500）……105
第130図　竪穴住居１（1/60）……106
第131図　弥生時代前期～中期前葉遺構全体図(2)（1/600）……107・108
第132図　弥生時代前期～中期前葉遺構全体図(3)（1/600）……109・110
第133図　竪穴住居１出土遺物（1/4・1/2・1/3）……111
第134図　竪穴住居２（1/60）……112
第135図　竪穴住居２中央穴（1/30）……112
第136図　竪穴住居２出土遺物(1)（1/4）……113
第137図　竪穴住居２出土遺物(2)（1/2・1/3）……113
第138図　竪穴住居２出土遺物(3)（1/2・1/3）……114
第139図　竪穴住居２出土遺物(4)（1/1）……115
第140図　竪穴住居２出土遺物(5)（1/2・1/5）……116
第141図　竪穴住居２出土遺物(6)（1/3・1/5）……117
第142図　竪穴住居３（1/60）……118
第143図　竪穴住居３柱穴断面図（1/60）……119
第144図　竪穴住居３中央穴（1/30）……119
第145図　竪穴住居３出土遺物(1)（1/4）……119
第146図　竪穴住居３出土遺物(2)（1/2・1/3）……120
第147図　竪穴住居３出土遺物(3)（1/3）……121
第148図　竪穴住居４（1/60）……121
第149図　建物１（1/30）……122
第150図　土壙28（1/30）……123
第151図　土壙29（1/30）……123

第152図　土壙30(1/30) …… 124
第153図　土壙31(1/30) …… 124
第154図　土壙32(1/30)・出土遺物(1/3) …… 124
第155図　土壙33(1/30) …… 124
第156図　土壙34(1/30)・出土遺物(1/4・1/2) …… 125
第157図　土壙35(1/30)・出土遺物(1/4・1/2) …… 126
第158図　土壙36(1/30)・出土遺物(1/4) …… 126
第159図　土壙37(1/30) …… 127
第160図　土壙38(1/30) …… 127
第161図　土壙39(1/30) …… 127
第162図　土壙40(1/30) …… 127
第163図　土壙41(1/30) …… 127
第164図　土壙42(1/30) …… 127
第165図　土壙43(1/30) …… 128
第166図　土壙44(1/30) …… 128
第167図　土壙45(1/30) …… 128
第168図　土壙46(1/30) …… 129
第169図　土壙47(1/30) …… 129
第170図　土壙48(1/30) …… 129
第171図　土壙49(1/30)・出土遺物(1/4) …… 129
第172図　土壙50(1/30) …… 129
第173図　土壙51(1/30) …… 130
第174図　土壙52(1/30) …… 130
第175図　土壙53(1/30)・出土遺物(1/4) …… 130
第176図　土壙54(1/30)・出土遺物(1/4) …… 131
第177図　土壙55(1/30) …… 132
第178図　土壙56(1/30) …… 132
第179図　土壙57(1/30) …… 132
第180図　土壙58(1/30)・出土遺物(1/4・1/2) …… 133
第181図　土壙59(1/30)・出土遺物(1/4) …… 134
第182図　土壙60(1/30) …… 135
第183図　土壙61(1/30) …… 135
第184図　土壙62(1/30)・出土遺物(1/3) …… 136
第185図　土壙63(1/30) …… 136
第186図　土壙64(1/30)・出土遺物(1/4) …… 137
第187図　土壙65(1/30)・出土遺物(1/4・1/2) …… 137
第188図　土壙66(1/30) …… 138
第189図　土壙67(1/30) …… 138
第190図　土壙68(1/30) …… 138
第191図　土壙69(1/30)・出土遺物(1/4) …… 138
第192図　土壙70(1/30)・出土遺物(1/4) …… 139
第193図　土壙71(1/30)・出土遺物(1/4) …… 140
第194図　土壙72(1/30) …… 140
第195図　土壙72出土遺物(1/4・1/2) …… 141
第196図　土壙73(1/30)・出土遺物(1/4) …… 141
第197図　土壙74(1/30) …… 141
第198図　土壙75(1/30) …… 142
第199図　土壙76(1/30)・出土遺物(1/4) …… 142
第200図　土壙77・78(1/30)・土壙77出土遺物(1/4) …… 143
第201図　土壙79・80(1/30) …… 144
第202図　土壙79出土遺物(1/4・1/2・1/3) …… 145
第203図　土壙80出土遺物(1/4) …… 145
第204図　土壙81(1/30)・出土遺物(1/4) …… 146
第205図　土壙82(1/30) …… 146
第206図　土壙83(1/30)・出土遺物(1/2) …… 147
第207図　土壙84(1/30)・出土遺物(1/4) …… 147
第208図　土壙85(1/30) …… 148
第209図　土壙86(1/30) …… 148
第210図　土壙87(1/30) …… 148
第211図　土壙88(1/30) …… 148
第212図　土壙89(1/30) …… 148
第213図　土壙89出土遺物(1/4) …… 149
第214図　土壙90(1/30) …… 149
第215図　土壙90出土遺物(1/4) …… 150
第216図　土壙91(1/30)・出土遺物(1/3・1/4) …… 151
第217図　土壙92(1/30)・出土遺物(1/4) …… 152
第218図　土壙93(1/30)・出土遺物(1/4) …… 152
第219図　土壙94(1/30)・出土遺物(1/4) …… 152
第220図　土壙95(1/30)・出土遺物(1/2) …… 153
第221図　土壙95出土遺物(1/4) …… 154
第222図　火処25(1/30) …… 154
第223図　火処29(1/30)・出土遺物(1/3・1/4) …… 155
第224図　土器棺墓1(1/20)・出土遺物(1/4) …… 156
第225図　柱穴20(P20)(1/20)・出土遺物(1/4) …… 157
第226図　柱穴21(P21)(1/20)・出土遺物(1/4) …… 157
第227図　柱穴22(P22)～柱穴36(P36)出土遺物(1/4)

…… 158
第228図　柱穴37（P37）～柱穴46（P46）
出土遺物（1/2・1/3）…… 159
第229図　溝1（1/300・1/30）・出土遺物(1)(1/2・1/3)… 160
第230図　溝1出土遺物(2)(1/4)…… 161
第231図　溝2・3（1/400・1/30）…… 162
第232図　溝2出土遺物（1/4）…… 163
第233図　溝3出土遺物（1/4・1/2・1/3・1/5）…… 163
第234図　溝4・5・6（1/500・1/80）…… 164
第235図　溝4出土遺物(1)(1/4)…… 165
第236図　溝4出土遺物(2)(1/4)…… 166
第237図　溝4出土遺物(3)(1/4)…… 167
第238図　溝4出土遺物(4)(1/4)…… 168
第239図　溝4出土遺物(5)(1/4)…… 169
第240図　溝4出土遺物(6)(1/4)…… 170
第241図　溝4出土遺物(7)(1/4)…… 171
第242図　溝4出土遺物(8)(1/2)…… 171
第243図　溝4出土遺物(9)(1/3)…… 172
第244図　溝4出土遺物(10)(1/2・1/3）…… 172
第245図　溝4出土遺物(11)(1/3)…… 173
第246図　溝5出土遺物(1)(1/3)…… 173
第247図　溝5出土遺物(2)(1/4)…… 174
第248図　溝6出土遺物（1/4・1/2・1/3）…… 175
第249図　河道1断面図（1/80）…… 176
第250図　河道1出土遺物（弥生時代前期1）（1/4）…… 177
第251図　河道1出土遺物（弥生時代前期2）（1/2・1/4）
…… 178
第252図　河道2（1/500・1/100）…… 179
第253図　河道2出土遺物（弥生時代前期～中期前葉1）
（1/4）…… 180
第254図　河道2出土遺物（弥生時代前期～中期前葉2）
（1/4・1/3）…… 181
第255図　第1微高地と第1低位部（1/600・1/80）…… 182
第256図　第1低位部および第1微高地出土遺物
（包含層下層1）（1/4）…… 183
第257図　第1低位部および第1微高地出土遺物
（包含層下層2）（1/4）…… 184
第258図　第1低位部および第1微高地出土遺物
（包含層下層3）（1/2・1/3）…… 185
第259図　第1低位部および第1微高地出土遺物
（包含層上層1）（1/4）…… 186
第260図　第1低位部および第1微高地出土遺物
（包含層上層2）（1/4）…… 187
第261図　第1低位部および第1微高地出土遺物
（包含層上層3）（1/4）…… 188
第262図　第1低位部および第1微高地出土遺物
（包含層上層4）（1/4）…… 189
第263図　第1低位部および第1微高地出土遺物
（包含層上層5）（1/4）…… 190
第264図　第1低位部および第1微高地出土遺物
（包含層上層6）（1/4）…… 191
第265図　第1低位部および第1微高地出土遺物
（包含層上層7）（1/4）…… 191
第266図　第1低位部および第1微高地出土遺物
（包含層上層8）（1/2・1/3）…… 192
第267図　第1低位部および第1微高地出土遺物
（包含層上層9）（1/4）…… 193
第268図　第2微高地（西）出土遺物
（弥生時代前期～中期前葉）（1/4）…… 194
第269図　第2微高地（東）および第2低位部出土遺物
（弥生時代前期～中期前葉）（1/4）…… 195
第270図　第2低位部（1/400・1/80）…… 196
第271図　第2低位部断面図（1/80）…… 197
第272図　第2低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉1）
（1/4）…… 198
第273図　第2低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉2）
（1/4）…… 199
第274図　第2低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉3）
（1/4）…… 200
第275図　第2低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉4）
（1/2・1/3）…… 201
第276図　第3低位部（北）（1/600）…… 202
第277図　第3低位部断面図（EN区）（1/80）…… 203
第278図　第3低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉1）
（1/4）…… 204
第279図　第3低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉2）

(1/4) …… 205
第280図　第３低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉３）(1/4)…… 206
第281図　第３低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉４）(1/2)…… 206
第282図　第３低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉５）(1/4)…… 207
第283図　第３低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉６）(1/4)…… 208
第284図　第３低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉７）(1/2・1/3) …… 209
第285図　第４低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉）(1/4)…… 210
第286図　弥生時代中期中葉～後期遺構全体図(1)（水田を除く）(1/1500) …… 212
第287図　弥生時代中期中葉～後期遺構全体図(2)（水田を除く）(1/600)……213・214
第288図　弥生時代中期中葉～後期遺構全体図(3)（水田を除く）(1/600)……215・216
第289図　竪穴住居５(1/60) …… 217
第290図　竪穴住居６(1/60) …… 218
第291図　竪穴住居７(1/60) …… 219
第292図　竪穴住居７中央穴(1/30)・出土遺物(1/4・1/2) …… 220
第293図　竪穴住居８(1/60) …… 221
第294図　竪穴住居９(1/80) …… 222
第295図　竪穴住居９断面図(1/60) …… 223
第296図　竪穴住居９出土遺物(1)(1/2)…… 223
第297図　竪穴住居９出土遺物(2)(1/4)…… 224
第298図　建物２(1/60) …… 225
第299図　建物３(1/60) …… 225
第300図　建物３、Ｐ１(1/30) …… 226
第301図　建物３、Ｐ２(1/30) …… 226
第302図　建物３出土遺物(1/4)…… 226
第303図　建物４(1/60) …… 227
第304図　建物５(1/60) …… 227
第305図　建物６(1/60) …… 228
第306図　建物７(1/60) …… 228
第307図　建物８(1/60) …… 229
第308図　建物９(1/60) …… 229
第309図　建物10(1/60) …… 230
第310図　建物10、Ｐ１(1/30)・出土遺物(1/4)…… 230
第311図　建物10、Ｐ３(1/30) …… 230
第312図　建物11(1/60) …… 231
第313図　建物12(1/60)・出土遺物(1/4)…… 232
第314図　建物13(1/60)・出土遺物(1/4)…… 233
第315図　建物14(1/60) …… 233
第316図　建物15(1/60) …… 234
第317図　建物16(1/60) …… 234
第318図　建物17(1/60) …… 235
第319図　建物18(1/60) …… 235
第320図　建物19(1/60) …… 236
第321図　建物20(1/60) …… 236
第322図　建物21(1/60) …… 237
第323図　建物22(1/60) …… 237
第324図　建物23(1/60) …… 238
第325図　建物24(1/60) …… 238
第326図　建物25(1/60) …… 239
第327図　建物26(1/60) …… 239
第328図　建物27(1/60) …… 240
第329図　建物28(1/60) …… 240
第330図　建物29(1/60) …… 240
第331図　建物30(1/60) …… 241
第332図　建物31(1/60)・出土遺物(1/4)…… 242
第333図　建物32(1/60) …… 243
第334図　建物33(1/60) …… 243
第335図　建物34(1/60) …… 244
第336図　建物35(1/60) …… 245
第337図　建物36(1/60) …… 245
第338図　建物37(1/60) …… 246
第339図　建物38(1/60) …… 246
第340図　建物39(1/60)・出土遺物(1/4)…… 247
第341図　建物40(1/60) …… 247
第342図　建物40出土遺物(1/4)…… 248
第343図　建物41(1/60)・出土遺物(1/4)…… 248
第344図　井戸１(1/30)・出土遺物(1/4)…… 249

第345図　井戸 2 (1/30)・出土遺物(1/3)…… 250
第346図　井戸 3 (1/30) …… 250
第347図　井戸 3 出土遺物(1)(1/4)…… 251
第348図　井戸 3 出土遺物(2)(1/4)…… 252
第349図　井戸 3 出土遺物(3)(1/4)…… 253
第350図　井戸 4 (1/60) …… 253
第351図　井戸 4 出土遺物(1/4)…… 254
第352図　井戸 5 (1/30)・出土遺物(1/4)…… 255
第353図　井戸 6 (1/30)・出土遺物(1)(1/2)…… 256
第354図　井戸 6 出土遺物(2)(1/4)…… 257
第355図　井戸 6 出土遺物(3)(1/4)…… 258
第356図　井戸 6 出土遺物(4)(1/4)…… 259
第357図　井戸 6 出土遺物(5)(1/4)…… 260
第358図　井戸 7 (1/30)・出土遺物(1/4)…… 261
第359図　井戸 8 (1/30) …… 262
第360図　井戸 8 出土遺物(1)(1/4)…… 263
第361図　井戸 8 出土遺物(2)(1/4)…… 264
第362図　井戸 8 出土遺物(3)(1/4)…… 265
第363図　井戸 8 出土遺物(4)(1/4)…… 266
第364図　井戸 8 出土遺物(5)(1/4)…… 267
第365図　井戸 8 出土遺物(6)(1/4)…… 268
第366図　井戸 8 出土遺物(7)(1/4)…… 269
第367図　土壙96(1/30) …… 269
第368図　土壙97(1/30) …… 270
第369図　土壙98(1/30) …… 270
第370図　土壙99(1/30) …… 270
第371図　土壙99出土遺物(1/4)…… 271
第372図　土壙100(1/30)・出土遺物(1/4) …… 271
第373図　土壙101(1/80)…… 272
第374図　土壙102(1/30)…… 272
第375図　土壙103(1/30)・出土遺物(1/2) …… 272
第376図　土壙104(1/30)…… 273
第377図　土壙105(1/30)…… 273
第378図　土壙106(1/30)…… 273
第379図　土壙107(1/30)…… 273
第380図　土壙108(1/30)…… 274
第381図　土壙109(1/30)…… 274
第382図　土壙110(1/30)…… 274
第383図　土壙111(1/30)…… 274
第384図　土壙112(1/30)…… 275
第385図　土壙113(1/30)…… 275
第386図　土壙114(1/30)…… 275
第387図　土壙115(1/30)…… 275
第388図　土壙115出土遺物(1/4) …… 276
第389図　土壙116(1/30)…… 276
第390図　土壙117(1/30)…… 276
第391図　土壙118(1/30)…… 276
第392図　土壙119(1/30)…… 277
第393図　土壙120(1/30)…… 277
第394図　土壙120出土遺物(1)(1/4) …… 278
第395図　土壙120出土遺物(2)(1/4) …… 279
第396図　土壙120出土遺物(3)(1/4) …… 280
第397図　土壙121(1/30)…… 281
第398図　土壙122(1/60)・出土遺物(1/2) …… 281
第399図　土壙123(1/30)…… 282
第400図　土壙124(1/30)…… 282
第401図　土壙125(1/30)…… 282
第402図　土壙126(1/30)…… 282
第403図　土壙127(1/30)…… 283
第404図　土壙128(1/30)・出土遺物(1/2) …… 283
第405図　土壙128出土遺物(1/4) …… 284
第406図　土壙129(1/30)・出土遺物(1/4) …… 285
第407図　土壙130(1/30)…… 285
第408図　土壙131(1/30)…… 286
第409図　土壙132(1/30)…… 286
第410図　土壙133(1/30)・出土遺物(1/2) …… 286
第411図　土壙134(1/30)…… 287
第412図　土壙135(1/30)・出土遺物(1/4) …… 287
第413図　土壙136(1/100)・出土遺物(1/2)…… 288
第414図　土壙137(1/30)…… 288
第415図　土壙138(1/30)…… 288
第416図　土壙139(1/30)・出土遺物(1/4) …… 289
第417図　土壙140(1/30)…… 289
第418図　土器棺墓 2 (1/20)・出土遺物(1/4)…… 290
第419図　柱穴46・47・48・49出土遺物(1/4)…… 291
第420図　溝 7・8・9・10・11(1/300)…… 293

第421図　溝7・8・9・10・11・断面図(1/40) …… 294
第422図　溝10出土遺物(1/4) …… 294
第423図　溝11出土遺物(1/4) …… 295
第424図　溝12・13・14・58(1/200・1/30) …… 295
第425図　溝9・11・16・17・18・19・20・21・22・23
(1/300) …… 297
第426図　溝9・11・16・17・18・19・20・21・22・23
断面図(1/50) …… 298
第427図　溝24(1/300・1/30) …… 299
第428図　溝25・26・27・28・29・30(1/300) …… 300
第429図　溝25・26断面図(1/40) …… 301
第430図　溝25出土遺物(1/4・1/2) …… 301
第431図　溝27・28・29・30断面図(1/30) …… 301
第432図　溝28・29・30・31(1/300・1/40) …… 302
第433図　溝32・33・34・35(1/300・1/60) …… 303
第434図　溝36(1/60) …… 304
第435図　溝37(1/300・1/30) …… 304
第436図　溝38(1/60) …… 304
第437図　溝39(1/30) …… 305
第438図　溝40(1/200・1/80)・出土遺物(1/2) …… 305
第439図　溝42出土遺物(1/4) …… 305
第440図　溝41・42・43(1/150・1/60) …… 306
第441図　溝43出土遺物(1/4) …… 307
第442図　溝44(1/20) …… 308
第443図　溝45・46・47(1/150・1/30) …… 308
第444図　溝45およびその周辺の出土遺物(1/4) …… 309
第445図　溝44・48～56(1/500・1/60) …… 310
第446図　溝51・53出土遺物(1/4) …… 311
第447図　溝55出土遺物(1/4) …… 311
第448図　溝56出土遺物(1/2) …… 312
第449図　溝57(1/100)・出土遺物(1/4) …… 312
第450図　弥生時代水田全体図(1/1500) …… 314
第451図　H16区（D地区）土層断面図(1/80) …… 315
第452図　FU区（C地区）土層断面図(1/80) …… 315
第453図　KY2区（B地区）土層断面図(1/80) …… 316
第454図　弥生時代水田層出土遺物（B地区）(1/2・1/4)
…… 316
第455図　弥生時代水田層出土遺物（A地区）(1/4・1/3)
…… 317
第456図　弥生時代水田層出土遺物（C・D地区）
(1/2・1/3) …… 317
第457図　凹地1(1/300・1/50)・出土遺物(1/4) …… 318
第458図　凹地2(1/300・1/50)・出土遺物(1/2・1/3) …… 319
第459図　河道2（弥生時代中期中葉～後期）
(1/500・1/60) …… 320
第460図　河道2出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉1）
(1/4) …… 321
第461図　河道2出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉2）
(1/4) …… 322
第462図　河道2出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉3）
(1/4) …… 323
第463図　河道2出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉4）
(1/4) …… 324
第464図　河道2出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉5）
(1/4) …… 325
第465図　河道2出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉6）
(1/4) …… 326
第466図　河道2出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉7）
(1/4) …… 327
第467図　河道2出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉8）
(1/4) …… 328
第468図　河道2出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉9）
(1/2・1/3) …… 329
第469図　遺構に伴わない土器（弥生時代中期中葉～後期）
(1/4) …… 330
第470図　第1微高地出土遺物（弥生時代中期中葉～後期）
(1/2) …… 331
第471図　第2微高地(西)出土遺物
（弥生時代中期中葉～後期1）(1/2) …… 332
第472図　第2微高地(西)出土遺物
（弥生時代中期中葉～後期2）(1/3) …… 333
第473図　第2微高地(東)出土遺物
（弥生時代中期中葉～後期1）(1/2・1/3) …… 333
第474図　第2微高地(東)出土遺物
（弥生時代中期中葉～後期2）(1/2) …… 334
第475図　第2低位部出土遺物（弥生時代中期中葉～後期）

(1/2・1/3) …… 335
第476図　第３微高地出土遺物（弥生時代中期中葉～後期）
(1/2・1/3) …… 335
第477図　第３低位部出土遺物（弥生時代中期中葉～後期）
(1/2・1/3) …… 336
第478図　第４低位部出土遺物（弥生時代中期中葉～後期）
(1/2・1/3) …… 336
第479図　井戸９(1/30) …… 337
第480図　古墳時代遺構全体図(1)（井戸・土壙・溝・水田）
(1/1500) …… 338
第481図　井戸９出土遺物(1/4・1/3) …… 339
第482図　井戸10(1/30) …… 339
第483図　井戸10出土遺物(1/4) …… 340
第484図　井戸11(1/30) …… 340
第485図　井戸11出土遺物(1)(1/4) …… 341
第486図　井戸11出土遺物(2)(1/3) …… 341
第487図　井戸12(1/30) …… 341
第488図　井戸12出土遺物(1/4) …… 342
第489図　井戸13(1/30) …… 342
第490図　土壙141(1/30) …… 342
第491図　古墳時代遺構全体図(2)（柵列状遺構）(1/1500)
…… 343
第492図　柵列状遺構１・２(1/200・1/50) …… 344
第493図　柵列状遺構３・４・５・６・７・８・９・10・
11・12・13・14・15(1/500) ……345・346
第494図　柵列状遺構３・４(1/200・1/80) …… 348
第495図　柵列状遺構５・６・７・８・９・10・11・12
(1/200・1/80) …… 349
第496図　柵列状遺構７断面図(1/60) …… 350
第497図　柵列状遺構13(1/80) …… 351
第498図　柵列状遺構14・15(1/200・1/50) …… 351
第499図　溝59(1/30) …… 352
第500図　溝60(1/60) …… 332
第501図　溝61(1/60) …… 352
第502図　溝61出土遺物(1/4) …… 353
第503図　水田８畦畔断面図(1/40) …… 553
第504図　水田８（Ａ地区）(1/600) …… 354
第505図　水田８（Ｂ地区）(1/600) …… 355
第506図　水田８（Ｃ地区）(1/600) …… 356
第507図　水田８（Ｄ地区）(1/600) …… 357
第508図　Ｄ地区土層断面図(1/80) …… 358
第509図　水田８関連出土遺物(1/4) …… 359
第510図　古墳時代黒灰色粘土層出土遺物(1/4) …… 360
第511図　遺構に伴わない古墳時代の出土遺物(1/4) …… 360
第512図　古代・中世遺構全体図(1)（水田を除く）(1/1500)
…… 362
第513図　古代・中世遺構全体図(2)（素掘溝を除く）(1/600)
……363・364
第514図　建物42(1/60) …… 365
第515図　建物42、Ｐ１(1/20)・出土遺物(1/4) …… 366
第516図　建物43(1/60) …… 366
第517図　建物44(1/60) …… 367
第518図　建物45(1/60) …… 368
第519図　建物46(1/60) …… 368
第520図　建物47(1/60) …… 369
第521図　建物48(1/60) …… 370
第522図　建物49(1/60) …… 371
第523図　建物50(1/60) …… 371
第524図　土壙142(1/30) …… 372
第525図　土壙143(1/30) …… 372
第526図　土壙144(1/30) …… 372
第527図　土壙145(1/30) …… 372
第528図　土壙146(1/30) …… 373
第529図　土壙147(1/30) …… 373
第530図　柵列状遺構16(1/100)・出土遺物(1/3) …… 374
第531図　柵列状遺構17(1/200・1/80) …… 374
第532図　溝63・64(1/500・1/60)・出土遺物(1/4) …… 375
第533図　溝64出土遺物(1/4・1/3) …… 376
第534図　溝65・66・67(1/600・1/60) …… 377
第535図　溝66出土遺物(1/4) …… 377
第536図　溝68・69・70・71(1/500・1/60) …… 378
第537図　溝71出土遺物(1/3・1/4) …… 379
第538図　溝72(1/300・1/80) …… 379
第539図　溝73～83(1/500・1/60) …… 380
第540図　溝73・74・77・79出土遺物(1/4・1/3) …… 381
第541図　溝84・85・86・87・88(1/200・1/60) …… 382

第542図　溝89～114(1/500) …… 384
第543図　溝84・88～112断面図(1/60) …… 385
第544図　溝101出土遺物(1/4) …… 386
第545図　溝113・114断面図(1)(1/60) …… 386
第546図　溝113・114・120(1/500) …… 387
第547図　溝113・114断面図(2)(1/60) …… 388
第548図　溝113出土遺物(1/4) …… 389
第549図　溝114出土遺物(1/4) …… 390
第550図　溝115・116・117断面図(1/30) …… 390
第551図　溝118断面図(1/30) …… 390
第552図　溝116・117・119(1/400) …… 391
第553図　溝119断面図(1/40)・出土遺物(1/4) …… 392
第554図　溝120断面図(1/30) …… 392
第555図　溝121断面図(1/30) …… 392
第556図　素掘溝群1・2・3(1/1500) …… 393
第557図　素掘溝群1(1/500・1/100) …… 394
第558図　素掘溝群2(1/500) …… 395
第559図　素掘溝群2断面図(1/100) …… 396
第560図　素掘溝群1・2出土遺物(1/4) …… 396
第561図　土手状遺構(1/300・1/80) …… 397
第562図　水田9・10と古代の建物・溝(1/2000) …… 398
第563図　水田9畦畔(1/150・1/60) …… 399
第564図　水田9畦畔内遺物出土状況(1/30)
　　および出土遺物(1/4) …… 399
第565図　水田9畦畔除去後の遺物出土状況(1/30)
　　および出土遺物(1/4) …… 400
第566図　水田10関連の出土遺物(1/3) …… 401
第567図　古代・中世の遺物(1)(1/4) …… 402
第568図　古代・中世の遺物(2)(1/4) …… 403
第569図　古代・中世の遺物(3)(1/4) …… 404
第570図　古代・中世の遺物(4)(1/3・1/2) …… 405
第571図　近世以降遺構全体図(1/1800) …… 406
第572図　土壙148(1/30) …… 407
第573図　土壙149(1/30) …… 407
第574図　河道1出土「孔列文土器」(1/3) …… 431
第575図　刻目突帯を有する「孔列文土器」(1/3) …… 433
第576図　B地区水田8層（IN区）断面図(1/40) …… 448
第577図　水田8全体図(1/2500) …… 449
第578図　「馬養」拓影（原寸） …… 450
付　図　弥生時代中期中葉～後期遺構全体図(1/600)

表　目　次

第1表　編年対比表 ……
第2表　全調査区一覧（南溝手遺跡・窪木遺跡） ……26
第3表　第一分冊対象調査区一覧 ……31
第4表　弥生時代前期土器編年対比表 …… 412
第5表　南溝手遺跡出土「ガラス溶滓」分析値 …… 412
第6表　出土種子一覧表 …… 417
第7表　「孔列文土器」出土地名表 ……435～438
第8表　出土石器・石製品一覧 …… 440
第9表　岡山県下における文字線刻土器一覧 …… 451
第10表　「馬養」を人名に持つ例 …… 451
第11表　竪穴住居一覧表 …… 479
第12表　建物一覧表 ……479・480
第13表　井戸一覧表 …… 480
第14表　石器・石製品一覧表 ……481～487
第15表　土製品一覧表 ……488・489
第16表　新旧遺構名称対照表 ……490～494

図　版　目　次

巻頭図版1－1．調査区全景
　　（AT・DE・JY・IN・FU区）
　　2．調査区全景
　　（AT・DE・JY・IN・FU区）
巻頭図版2　　縄文時代後期後葉の粒痕土器
巻頭図版3－1．縄文時代後期土器（A地点）
　　2．縄文時代晩期土器（河道1）
　　3．縄文時代晩期土器（河道2）
　　4．縄文時代晩期土器（河道2）
巻頭図版4－1．弥生時代前期の竪穴住居2
　　2．弥生時代前期の竪穴住居2出土石器
　　（玉砥石ほか）

巻頭図版５－１．弥生時代前期の竪穴住居２出土管玉未製品
（左）およびメノウ製品（右）
２．弥生時代前期の竪穴住居２出土メノウ片
（左）および緑色凝灰岩片（右）
巻頭図版６－１．弥生時代後期の竪穴住居５
２．弥生時代後期の井戸３
巻頭図版７－１．古墳時代の水田（水田８，ＪＯ区）
２．水田層断面（ＥＮ区）
巻頭図版８　水田９（古代）畦畔出土「馬養」線刻須恵器
図版１　遺跡周辺の地形（昭和60年）
図版２　第一次確認調査トレンチ
－１．Ｔ16（北西から）
２．Ｔ24（西から）
３．Ｔ28（北西から）
４．Ｔ34（南から）
５．Ｔ37（西から）
６．Ｔ39（南から）
７．Ｔ43（南東から）
８．Ｔ45（東から）
図版３－１．縄文時代後期土器Ａ地点出土状況
（Ｈ15区，東から）
２．縄文時代後期籾痕土器出土地点
（Ｈ15区，北東から）
３．縄文時代後期籾痕土器出土状況
（Ｈ15区，西から）
図版４－１．縄文時代後期土器Ｃ地点出土状況
（Ｈ16区，南から）
２．土壙３（ＩＮ区，南から）
３．土壙11（ＴＤ３区，南から）
図版５－１．土壙23（ＫＹ２区，南西から）
２．土壙25（ＫＹ２区，西から）
３．火処18（ＤＥ区，北から）
図版６－１．土器溜り１（ＤＥ区，東から）
２．河道２（縄文時代晩期）（ＪＯ区，南東から）
３．河道２南北土層断面（ＪＯ区，西から）
図版７－１．河道２縄文時代晩期土器出土状況
（ＪＯ区，北から）
２．河道２縄文時代晩期種子出土状況
（ＪＯ区，西から）
３．河道２縄文時代晩期杭検出状況
（ＪＯ区，南東から）
図版８－１．弥生時代遺構全景（ＡＴ・ＤＥ区，南東から）
２．弥生時代遺構全景（ＡＴ・ＤＥ・ＪＹ・ＩＮ・ＦＵ区，東から）
３．弥生時代遺構全景（ＡＴ区，北西から）
図版９－１．弥生時代遺構全景（ＫＹ３区，北から）
２．竪穴住居１（ＡＴ区，北から）
３．竪穴住居２（ＤＥ区，西から）
図版10－１．竪穴住居２中央穴（ＤＥ区，南から）
２．竪穴住居３（ＪＹ区，南から）
３．竪穴住居４（ＫＹ３区，北から）
図版11－１．建物１（Ｄ区，北から）
２．土壙55（ＡＴ区，南西から）
３．土壙59土層断面（ＡＴ区，南東から）
図版12－１．土壙70（ＤＥ区，東から）
２．土壙79・80（ＦＵ区，西から）
３．土器棺墓１（Ｈ12区，南から）
図版13－１．溝２・３（ＦＵ区南東から）
２．溝４土層断面（Ｂ－Ｂ′）（ＴＯ区，北から）
３．河道２（弥生時代前期）（ＪＯ区，西から）
図版14－１．第１低位部土層断面（Ｈ13区南壁，北西から）
２．第２低位部土層断面（ＪＹ区北壁，南から）
３．第３低位部（北）土層断面（ＥＮ区，西から）
図版15－１．竪穴住居５焼土・炭化材検出状況
（ＡＴ区，北から）
２．竪穴住居５焼土除去後検出状況
（ＡＴ区，北から）
３．竪穴住居５掘りあがり（ＡＴ区，南から）
図版16－１．竪穴住居６（ＡＴ区，北から）
２．竪穴住居７（ＩＮ区，北西から）
３．竪穴住居８（ＨＦ区，北から）
図版17－１．竪穴住居９（ＫＹ３区，北東から）
２．建物３（ＡＴ区，北から）
３．建物３，Ｐ１遺物出土状況（ＡＴ区，北東から）
図版18－１．建物３，Ｐ２遺物出土状況（ＡＴ区，南から）
２．建物10（ＤＥ区，東から）

3．建物31・32（ＴＤ５区，北から）
図版19－１．建物35・36（ＫＹ３区，西から）
２．井戸３（ＩＮ区，南から）
３．井戸４（Ｈ７区，東から）
図版20－１．井戸６遺物出土状況（ＴＤ４区，東から）
２．井戸８遺物出土状況（ＴＯ区，南から）
３．土壙99（ＡＴ区，北から）
図版21－１．土壙120（ＴＤ５区，北から）
２．土壙128（ＨＦ区，東から）
３．土器棺墓２（ＤＥ区，東から）
図版22－１．溝９・11（ＩＮ区，北から）
２．溝10（ＡＴ区，北西から）
３．溝９・11・22・23（ＫＹ１・２区，南東から）
図版23－１．井戸10・11作業風景（ＦＵ区，南から）
２．井戸10遺物出土状況（ＦＵ区，南から）
３．井戸11上層遺物出土状況（ＦＵ区，北から）
図版24－１．柵列状遺構１・２（ＥＭ区，北西から）
２．柵列状遺構３（ＫＹ１区，北西から）
３．柵列状遺構３・４（ＫＹ１区，北から）
図版25－１．柵列状遺構３土層断面（ＫＹ１区，南東から）
２．柵列状遺構３土層断面（ＫＹ１区，南東から）
３．柵列状遺構５・９・10（ＫＹ１区，北から）
図版26－１．柵列状遺構７（ＴＤ１区，東から）
２．柵列状遺構７土層断面
（ＴＤ１区東壁，西から）
３．柵列状遺構９（ＫＹ１区，西から）
図版27－１．水田８、Ａ地区（ＴＤ１・２区，北西から）
２．水田８、Ａ地区畦畔断面（ＴＤ２区，南から）
３．水田８、Ｂ地区（ＪＹ区、南から）
図版28－１．水田８、Ｂ地区（ＫＹ１区，北から）
２．水田８、Ｃ地区（ＥＮ区，東から）
３．水田８、Ｄ地区畦畔検出状況
（ＪＯ区，南東から）
図版29－１．水田８、Ｄ地区（ＪＯ区，南から）
２．水田８、Ｄ地区（ＪＯ区，西から）
３．Ｂ地区水田土層断面（ＪＹ区，北壁）
図版30－１．Ｃ地区水田土層断面
（ＥＮ区中央トレンチ，南西から）
２．Ｄ地区水田土層断面（Ｈ16区，西壁）
３．建物43検出状況（ＤＥ区，南から）
図版31－１．建物45（ＡＴ区，北西から）
２．溝63（ＡＴ区，東から）
３．素掘溝群３と溝71（ＥＮ区，東から）
図版32－１．溝73～77北半（Ｈ12区，南から）
２．溝84～88・113（ＡＴ区，東から）
３．溝113・114（ＡＴ区，北西から）
図版33－１．溝113・114（ＩＮ区，南東から）
２．溝113・114（ＴＯ区，西から）
３．溝113・114土層断面（ＡＴ区，東から）
図版34－１．溝119検出状況（ＦＵ区，西から）
２．溝119（ＦＵ区，東から）
３．素掘溝群１（ＤＥ区，東から）
図版35－１．素掘溝群２（ＫＹ２区，南から）
２．素掘溝群２（ＫＹ２区，北西から）
３．素掘溝群２（ＨＦ区，南から）
図版36－１．素掘溝群３（ＥＮ区，西から）
２．「馬養」線刻須恵器出土状況(1)
（ＴＤ１区，北から）
３．「馬養」線刻須恵器出土状況(2)
（ＴＤ１区，北から）
図版37　縄文時代後期・晩期土器
図版38－１．河道２出土縄文時代晩期土器(1)
２．河道２出土縄文時代晩期土器(2)
図版39－１．河道２出土縄文時代晩期土器(3)
２．河道１出土縄文時代晩期土器(1)
図版40－１．河道１出土縄文時代晩期土器(2)
２．河道１出土縄文時代晩期土器(3)
図版41－１．河道１出土縄文時代晩期土器(4)
２．河道１出土縄文時代晩期籾痕土器
図版42－１．河道１出土縄文時代晩期土器(5)
２．溝４出土弥生時代前期土器(1)
図版43－１．溝４出土弥生時代前期土器(2)
２．溝４出土弥生時代前期土器(3)
図版44－１．弥生時代前期土器(1)
２．弥生時代前期土器(2)
図版45　弥生時代前期土器(3)

図版46－1．弥生時代前期土器(4)
2．弥生時代前期土器(5)
図版47－1．弥生時代前期土器(6)
2．弥生時代中期土器
図版48　井戸2（1543）・井戸6出土弥生時代後期土器
図版49　井戸8出土弥生時代後期土器(1)
図版50　井戸8出土弥生時代後期土器(2)
図版51－1．井戸8出土弥生時代後期土器(3)
2．土壙120出土弥生時代後期土器
図版52　井戸3出土弥生時代後期土器(1)
図版53－1．井戸3出土弥生時代後期土器(2)
2．井戸10・11・12・出土古墳時代前期土器
3．古代・中世の遺物（土器・灰釉陶器・瓦）
図版54－1．土壙7（S10・11）と第2微高地出土縄文時代晩期石器
2．土器溜り1およびその周辺出土縄文時代晩期石器
図版55－1．河道1出土縄文時代晩期石器
2．第1低位部および第1微高地出土縄文時代晩期石器
図版56－1．竪穴住居2出土弥生時代前期石鏃
2．竪穴住居2出土弥生時代前期石鏃・石錐
図版57－1．竪穴住居2出土弥生時代前期石器
2．竪穴住居3出土弥生時代前期石器
図版58－1．出土石器（石包丁ほか）
2．出土石器（石鍬）
図版59－1．出土石器（太型蛤刃石斧）
2．出土石器・石製品
図版60－1．土製紡錘車
2．土錘・土製品・陶硯

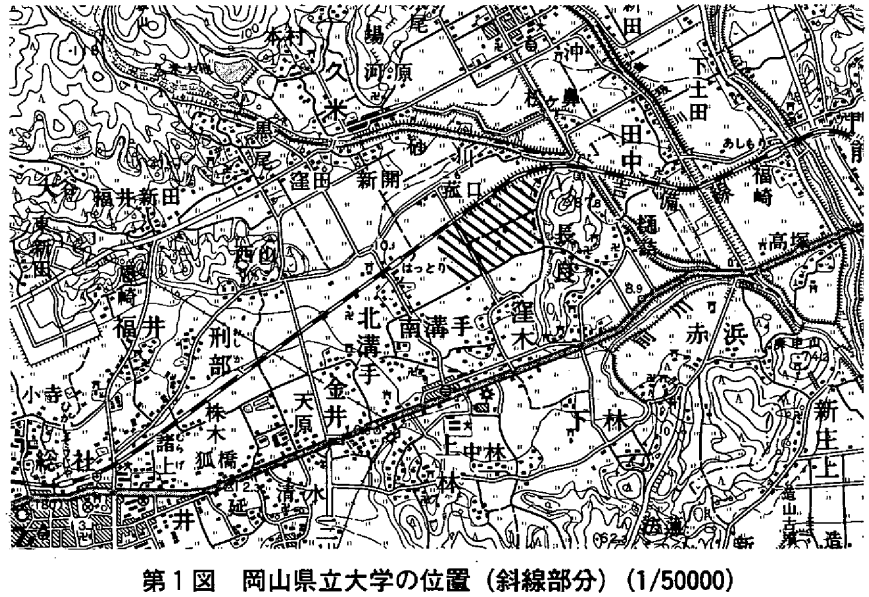
第１章　発掘調査および報告書作成の経緯

第１節　発掘調査の契機

これまで岡山県が大学教育にかかわってきたのは、岡山県立短期大学のみであり、早くから４年制大学の設立を望む県民の声があがっていた。県当局としては、1986（昭和61）年11月10日、『岡山県高等教育検討委員会（会長：小坂淳夫重井医学研究所付属病院院長）』を設置。全体会議３回、専門委員会７回の開催を経て、'87（昭和62）年12月21日、『岡山県高等教育検討委員会』から「岡山県における高等教育機関整備の基本的なあり方」についての答申があった。これをうけて、'88（昭和63）年５月、岡山県総務部に高等教育整備対策室が設置され、ここに初めて行政的窓口が開かれる。同年９月30日、『県立大学構想検討委員会（会長：高橋克明岡山大学学長）』を設置。全体会議６回、分科会14回を重ね、'89（平成元）年８月２日、『県立大学構想検討委員会』から「県立大学の基本構想について」の答申がなされた。

その建設地が総社市窪木・同南溝手にわたる水田地帯、約31haと決定したのは、1989（平成元）年12月であった。予定地は、北辺がほぼＪＲ吉備線で、東辺が長良山、西と南は新設の道路によって、囲まれる。建設前のこの一帯は「備中国服部郷図」が今なお残る広びろとした水田地帯であり、もし備中国府関連の遺構群に当たれば保存処置に腐心せざるを得なくなるだろう、と当初から予測された。したがって１日も早く、遺跡の概要をつかむ必要があったのである。

県事業に起因する発掘調査を担う、調査第一課は、平成元年度の事業として'90（平成２）年３月１日から同月13日まで、柳瀬昭彦課長補佐を責任者とし内藤善史文化財保護主任、椿真治主事などを配して、さっそく第一次の試掘調査にとりかかった。それは、広大な敷地全域にわたって、長さ５ｍ、幅２ｍの試掘溝を合計49カ所に設定して掘削し、土層関係や出土遺物を検証しながら、古地形の復元、および各時代にわたる遺構の粗密関係などを、とらえようとするものであった。およそ２週間で所期の目的を果たすことができた試掘調査の結果によれば、遺物の出土は、量的な多寡の違いはあってもいずれの試掘溝からも見られ、全面調査の必要があると判断された。また、幅約40ｍの旧河道が北西方向から東流しつつ南西方向へと走流すること、



第１図　岡山県立大学の位置（斜線部分）（1/50000）

および北東部においてかなり広い湿地帯が形成されているらしいなど、古環境についてもある程度の所見を得た。

年度の改まった'90（平成２）年４月、高等教育整備対策室を県立大学建設準備室に改組。この年から本格調査に着手することになり、柳瀬課長補佐に加え桑田俊明、小松原基弘、川崎新太郎、横山定、竹原伸之などの調査員が配属されて、まず計画変更の少ないと思われる管理棟（Ｋ区と略称）1585㎡および本部棟（以下、ＨＯ）1906㎡と図書館（以下、ＴＯ）1853㎡をとりあえず本年度の調査対象地とすることに決した。しかしなおこの段階においては、全体構想についての基本設計が描かれていたとはいえ、細かな実施設計を成し遂げるまでには至っていなかったので建設計画が煮つまるにつれ、管理棟予定地が変更をきたし、その調査は水泡に帰したのであった。

'90（平成２）年10月に至ってようやく実施計画が固まった。県立大学建設準備室から年度当初の計画を大幅に上回る事業計画が急にもちこまれた。それは、アトリエ棟、デザイン学部棟、情報工学部棟、学生会館、北学部共通棟、合わせて約9100㎡もの対象地を平成２年度の第４四半期中に完掘してほしいというものであった。所長をはじめ幹部職員は、それぞれ年間事業を推進しつつある段階において突如として持ち込まれたこの要望に、一様に頭をかかえこんだことはいうまでもない。とはいえ、県立大学の建設は県政の最重点施策であり、なんとしても期待にそうべく努力するほかはない、と全体計画の見直しを図りはじめた。ところが、いずれの調査現場も一人として余分な調査員を配属しているわけがなく、思案のすえ調査員数の多い山陽自動車道関連の遺跡にかかわっていた調査第二課の職員を、配転するほかはないという結論に達し、平成３年１月の年度途中から調査員15名の大部隊を送り込む異例の処置をとらざるを得なかったのである。こうして、この最大の難局をどうにか乗り切ることができたといってよい。

年度の明けた'91（平成３）年４月１日からは、ひき続き調査第一課の重点事業の一つとして位置づけがなされ、常時10名の調査員が現地に張りつき、調査を継続する計画が立てられた。おもな調査地としては、南学部共通棟、保健福祉学部棟、短期大学部に加え、学部棟と一体的な付帯施設としてのエネルギーセンターや浄化槽のほか、やがて各建物をむすぶ共同溝と排水溝の予定地などがあがってきた。なかでも、各学部棟を連結する共同溝は、平均７ｍもの幅をもって延々と伸び連なるもので、調査対象地の大幅な増加をもたらした。また保健福祉学部棟は６階建てで建設工事がおよそ14～15カ月を要するとのことである。そうであれば1993（平成５）年４月１日開学を実現するには、逆算すると平成３年９月までが調査の許容限度となる。そこで、９月にもまたふたたび大きな山場を迎えたため、この年にも調査第二課からの助力をあおぐとともに総社市や北房町から専門職員の応援を求めるなどして、どうにか新たな難局を切り抜けることができた。

継続事業となった'92（平成４）年度は、別添組織表に記したとおり10名の調査員が担い、常時９名４班体制で取り組むこととなった。すでに昨年において、主要建物の敷地に関してはほぼ全体にわたって調査を完了したばかりでなく、建物間を結ぶ共同溝・排水溝の一部にも着手していたので、この年は共同溝の残部分と正面の堀割、中道川および山陰川の付け替えに伴う場所が主要な調査対象地となったほか、部室棟、プールの建設地、渡り廊下部分についての発掘調査が加わった。これら調査面積の合計は約15000㎡。ちなみに足掛３年間にわたって実施した、この事業にかかわる発掘調査面積はおよそ60000㎡におよぶ結果となった。　（葛原）

第２節　発掘調査の体制

岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部の建設に伴う発掘調査は、岡山県教育委員会が岡山県総務部から委託を受け、岡山県古代吉備文化財センターが、平成元年度に確認調査を、そして平成２年度から４年度に全面調査を実施した。

今回報告する南溝手遺跡の調査区については平成元年度から平成３年度に実施したものである。平成３年度の調査においては、総社市教育委員会および北房町教育委員会の専門職員の応援を得た。

また発掘調査および報告書作成にあたっては、遺跡の保護、保存ならびに調査の専門的な指導および助言を得るために、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に「岡山県立大学建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱した。

岡山県立大学建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会

（故）鎌木義昌　岡山理科大学教授
岡山県文化財保護審議会委員
1990年４月から1993年３月まで

亀田修一　岡山理科大学助教授
1990年４月から

近藤義郎　岡山大学名誉教授
岡山県文化財保護審議会委員
1990年４月から

高橋　護　ノートルダム清心女子大学教授
1993年４月から

中田啓司　元県立矢掛高等学校教諭
1990年４月から

新納　泉　岡山大学助教授
1990年４月から1991年３月まで
1993年４月から

間壁忠彦　倉敷考古館館長
1990年４月から

水内昌康　岡山県文化財保護審議会委員
1990年４月から

山本悦世　岡山大学埋蔵文化財
調査研究センター
1991年４月から1993年３月まで

発掘調査

1989（平成元）年度

岡山県教育委員会
教育長　竹内康夫
教育次長　竹本博明
文化課
課　長　鬼澤佳弘
課長代理　河野　衛
課長補佐（埋蔵文化財係長）
伊藤　晃
主　査　藤川洋二
岡山県古代吉備文化財センター
所　長　長瀬日出明
次　長　河本　清

（総務課）
課　　長　　竹原成信
課長補佐（総務係長）藤本信康
（調査課）
第一課長事務取扱　　河本　清
課長補佐（第一係長）柳瀬昭彦
文化財保護主任　　内藤善史
主　　事　　椿　真治

1990（平成２）年度

岡山県教育委員会
教 育 長　　竹内康夫
教育次長　　杉井道夫
文化課
課　　長　　鬼澤佳弘
課長代理　　光吉勝彦
課長補佐（埋蔵文化財係長）
伊藤　晃
主　　査　　藤川洋二
岡山県古代吉備文化財センター
所　　長　　長瀬日出明
次　　長　　河本　清
（総務課）
課　　長　　竹原成信
課長補佐（総務係長）藤本信康
（調査課）
第一課長事務取扱　　河本　清
課長補佐（第一係長）柳瀬昭彦
文化財保護主任　　桑田俊明
文化財保護主事　　小松原基弘
文化財保護主事　　川崎新太郎
主　　事　　横山　定
主　　事　　竹原伸之
第二課
第一係
文化財保護主任　　光永真一
文化財保護主事　　広瀬隆明
文化財保護主事　　安井　悟
第二係
文化財保護主査　　中野雅美
文化財保護主事　　福田計治
主　　事　　久保恵里子
第三係長　　岡田　博
文化財保護主査　　野上和信
文化財保護主任　　栗尾昭和
第三課
第一係
文化財保護主査　　江見正己
文化財保護主任　　平井泰男
文化財保護主任　　川崎　肇
文化財保護主事　　平松義則
主　　事　　横山伸一郎
第二係
文化財保護主査　　岡本寛久
文化財保護主任　　吉久正見

1991（平成３）年度

岡山県教育委員会
教 育 長　　竹内康夫
教育次長　　森崎岩之助
文化課
課　　長　　鬼澤佳弘1991年12月まで
渡邊淳平1992年１月から
課長代理　　大橋義則
課長補佐（埋蔵文化財係長）
柳瀬昭彦
主　　査　　時長　勇
岡山県古代吉備文化財センター
所　　長　　横山常實

次　　長　　河本　清
（総務課）
課　　長　　藤本信康
課長補佐（総務係長）小西親男
主　　査　　平松郁男
（調査課）
第一課長　　葛原克人
課長補佐（第一係長）松本和男
文化財保護主任　　桑田俊明
文化財保護主任　　平井泰男
文化財保護主任　　光永真一
文化財保護主事　　川崎新太郎
文化財保護主事　　大橋雅也
文化財保護主事　　柴田英樹
主　　事　　久保恵里子
主　　事　　守屋佳慶

1992（平成４）年度

岡山県教育委員会
教 育 長　　竹内康夫
教育次長　　森崎岩之助
文化課
課　　長　　渡邊淳平
課長代理　　大橋義則
課長補佐（埋蔵文化財係長）
柳瀬昭彦
主　　査　　時長　勇
岡山県古代吉備文化財センター
所　　長　　横山常實
次　　長　　河本　清
文化財保護参事　　葛原　克人
（総務課）
課　　長　　藤本信康
課長補佐（総務係長）小西親男
主　　査　　石井　茂
（調査課）
第一課長事務取扱　　葛原克人
文化財保護主幹　　松本和男
課長補佐（第二係長）岡田　博
文化財保護主任　　平井泰男
文化財保護主任　　光永真一
文化財保護主任　　三上修二
文化財保護主事　　川崎新太郎
主　　事　　竹原伸之
主　　事　　久保恵里子
主　　事　　長門　修

市町村専門職員協力者

総社市教育委員会　　高田明人　　前角和夫　　高橋進一
北房町教育委員会　　島田宮子

発掘調査協力者

難波雅志　　浜本雅樹　　大谷博志　　山田悌史　　藤岡耕一　　錦戸　正

発掘作業協力者

赤木淳市　赤木　隆　赤木輝吉　赤木正輝　秋山孝一　秋山章子　浅沼正夫　浅沼美智枝
綾野博一　石井　啓　石井　基　石尾定子　石神清幸　板谷茂樹　井上勝海　今川和治
上田匡文　内田三郎　江尻泰幸　江本忠志　岡田衣江　岡田正人　岡本幸子　荻野繁子
小野孝士　小野知行　小原定子　小原　稔　貝原章介　垣内治郎　栢野キヨ子　栢野橙治
片山幸子　片山弥生　加藤光枝　川上静恵　河村桂子　岸本憲三　北谷洋子　木山　勇
葛原奎一　倉森佳子　黒江多佳子　黒江登代子　黒宮文子　古谷澄子　古谷武雄　小林君江

小見山清吉　小山笑子　坂本健治　笹井　操　佐藤幸夫　佐藤花江　三藤静子　白神武夫
末森一成　高尾佐恵子　高尾高子　高杉栄治　孝忠弘史　高塚妙子　竹内義文　武本　博
多田静江　橘　　清　田中春子　田辺清子　田野村光夫　津島コユキ　坪井忠彦　坪井伯美
坪井美智子　天場　勉　友野サヨ子　鳥越澄江　中島増美　中田唯志　中田正夫　永野登美子
中原　智　中村正夫　難波象一　難波好野　難波資博　難波美代子　二垣慶子　西田八重子
西谷利文　橋本知恵子　服部和代　服部早苗　服部照子　服部春子　服部好夫　林銀次郎
林　里美　林　　進　林　露子　林　南津子　深見　教　福永富貴子　藤岡澄江　藤本　享
藤原全平　本行喜代子　前田繁子　前田　茂　牧野　悟　牧野　毅　牧野須美子　牧野久江
万成久子　三垣おか　三垣登志夫　三垣久江　三上　茂　三上隆春　水畑清志　光岡一夫
光畑綾女　光畑菊江　本安　登　守屋鉄夫　守屋益男　森安通夫　柳川宏美　山田妙子
山田安子　山砥慶知　吉井昭子　吉井義明　脇本元典　渡辺　勲

井戸８（弥生時代後期）発掘調査状況

第３節　発掘調査の経過

１．確認調査

(1)　一次調査（第２～13図　図版２）

県立大学建設に伴う埋蔵文化財の取扱いについては、県教育委員会と県総務部との間で協議を重ねたが、その時点では予定敷地内の埋蔵文化財は、総社市教育委員会による備中国府跡緊急確認調査(註)で部分的に周知されていたに過ぎなかった。県教育委員会は、平成５年４月開校予定のこの事業については一連の工事工程を勘案すれば、早急に用地内の埋蔵文化財の状況を把握する必要があると判断し、協議の結果予定用地内全域を対象にしてトレンチによる調査に入ることとなった。

調査を実施するに当たり、用地買収が完了していない段階であり地権者の承諾が必要であることや構造物の規模や配置が未確定であるなどの制約があった。そのため、予定用地約31haのうち用地境に近い約50ｍ幅を除外し、その内側の校舎等の配置が予測される部分をおもに調査の対象とし、さらにそのうちの調査承諾のとれた地点に限定せざるを得なかった。

調査は現在の田面レベルから想定される旧地形を参考にして、約30～100ｍ間隔に２×５ｍのトレンチを45カ所設定し人力で掘り下げる方法をとり、さらに調査の過程で補足トレンチを４カ所追加し(調査面積計465㎡)、調査期間は平成２年３月２日～３月13日を要した。

調査の結果、大局的には微高地・旧河道(低位部を含む)・湿地とに３区分できる土層観察を得、以下にその概略を記す。

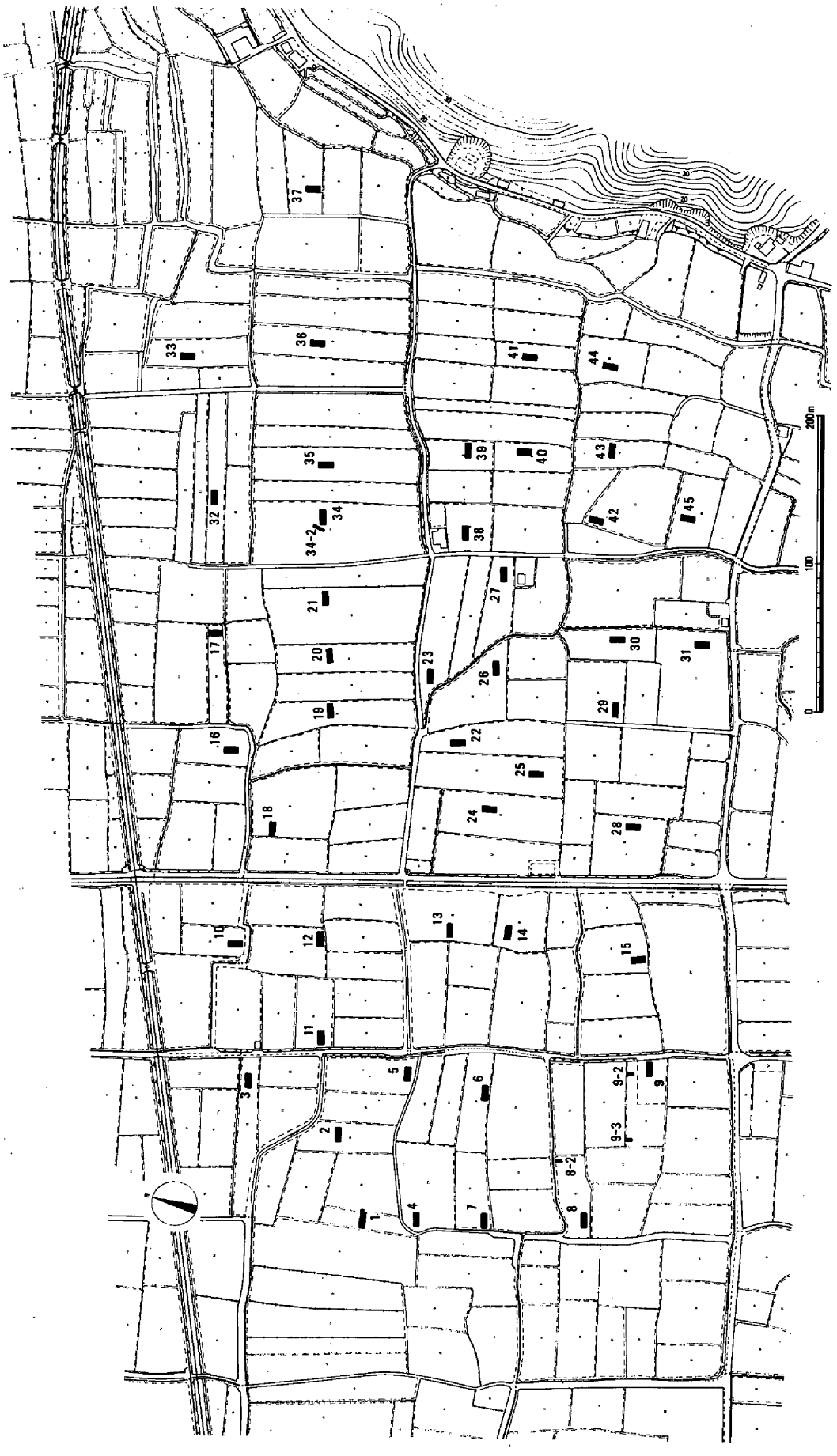
微高地

微高地は、用地内の約７割近くを占める部分が想定される。微高地にあたるトレンチ内の土層は、基本的には基盤層(黄色砂質土)の上面レベルが海抜約7.6～8.0ｍで、その上層には５～30㎝位の厚さの土器包含層(黒褐色～茶褐色の砂質土)が認められ、Ｔ－２～４・６・７・９・13・16～27・29・37～40・42・43・45が該当する。これらのトレンチのうち、Ｔ－２・25・37は柱穴、Ｔ－27・42・44は溝、Ｔ－24・25は住居址、Ｔ－３・９・43は溝または住居址と思われる遺構などが、それぞれ基盤層を掘りくぼめる形で検出されている。これらの遺構はおもに弥生時代後期と思われるが、なかでもＴ－24の住居址は弥生時代前期前葉～中葉の時期で、ヘラ描き沈線文を施した壺や甕が破片ながら比較的多く出土している。前期の住居址は、現時点では百間川沢田遺跡に次ぐ検出例であり、非常に注目される。また、Ｔ－４からは突帯文土器が数点出土しており、微高地上には縄文時代の終わりから弥生時代の初め頃の、沖積平野としては比較的古い時期の集落の存在も予測される。

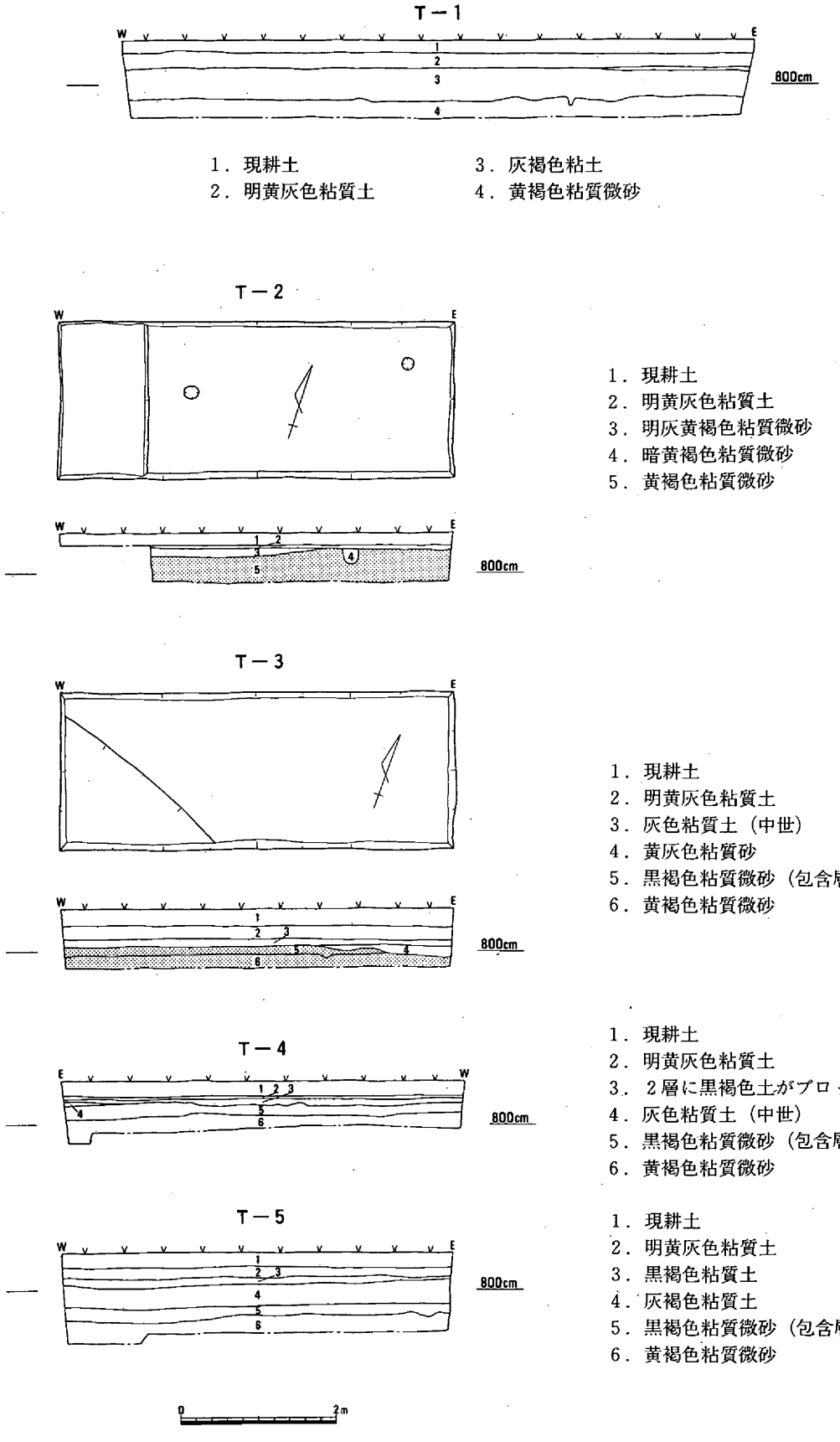
旧河道（低位部）

旧河道は、用地の南端近くにほぼ東西方向にその存在が想定される。これは推定で幅40ｍ前後、深さ1.5ｍ前後の規模と思われ、Ｔ－８・15などで旧河道の南肩が捉えられたこととＴ－28・31などの土層堆積状況による。旧河道の中心は、東からＴ－31・30・28・15の北・9-2の北・9-3・8-2・７と８の間を通る部分と推定されるが、Ｔ－8-2からＴ－１の方向に抜ける可能性もある。

低位部は、微高地を示すトレンチに囲まれていて、基盤層のレベルが周辺より20～50㎝位低い部分で、用地の中央から西寄りの一部と南東端部に想定される。Ｔ－５・10～12・14とＴ－44がそれに該



第２図　第一次確認調査トレンチ配置図（1/4000）



T－1

1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．灰褐色粘土
4．黄褐色粘質微砂

T－2

1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．明灰黄褐色粘質微砂
4．暗黄褐色粘質微砂
5．黄褐色粘質微砂

T－3

1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．灰色粘質土（中世）
4．黄灰色粘質砂
5．黒褐色粘質微砂（包含層）
6．黄褐色粘質微砂

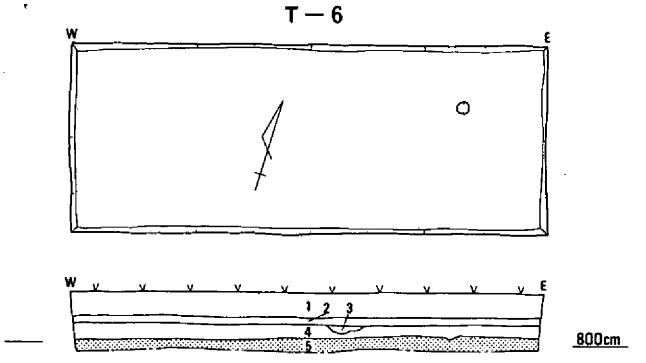
T－4

1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．２層に黒褐色土がブロック状に入る
4．灰色粘質土（中世）
5．黒褐色粘質微砂（包含層）
6．黄褐色粘質微砂

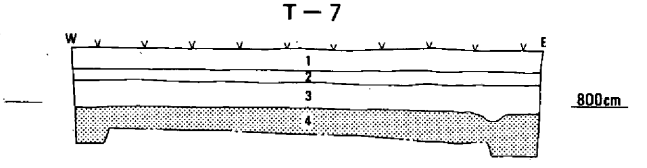
T－5

1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．黒褐色粘質土
4．灰褐色粘質土
5．黒褐色粘質微砂（包含層）
6．黄褐色粘質微砂

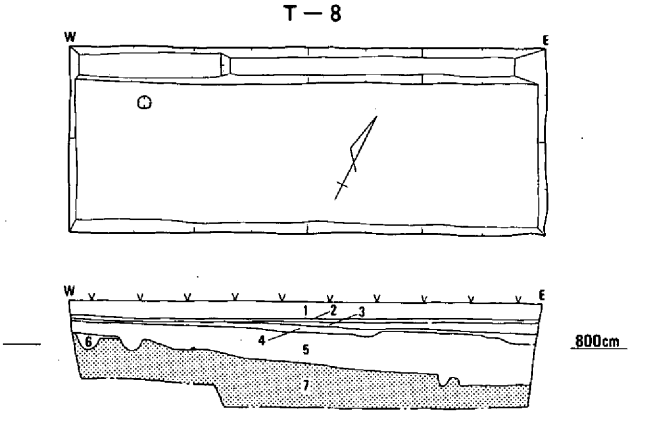
第３図　第一次確認調査トレンチ１～５（1/80）



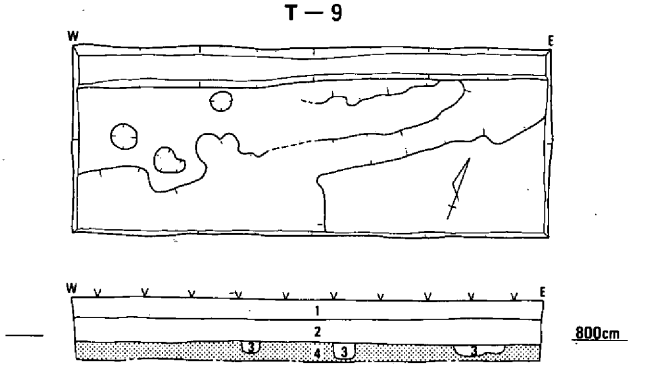
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．暗黄灰色粘質土
4．黒褐色粘質微砂（包含層）
5．黄褐色粘質微砂



1．現耕土
2．明黄灰色～灰色粘質土
3．黒褐色粘質微砂（包含層）
4．黄褐色粘質微砂

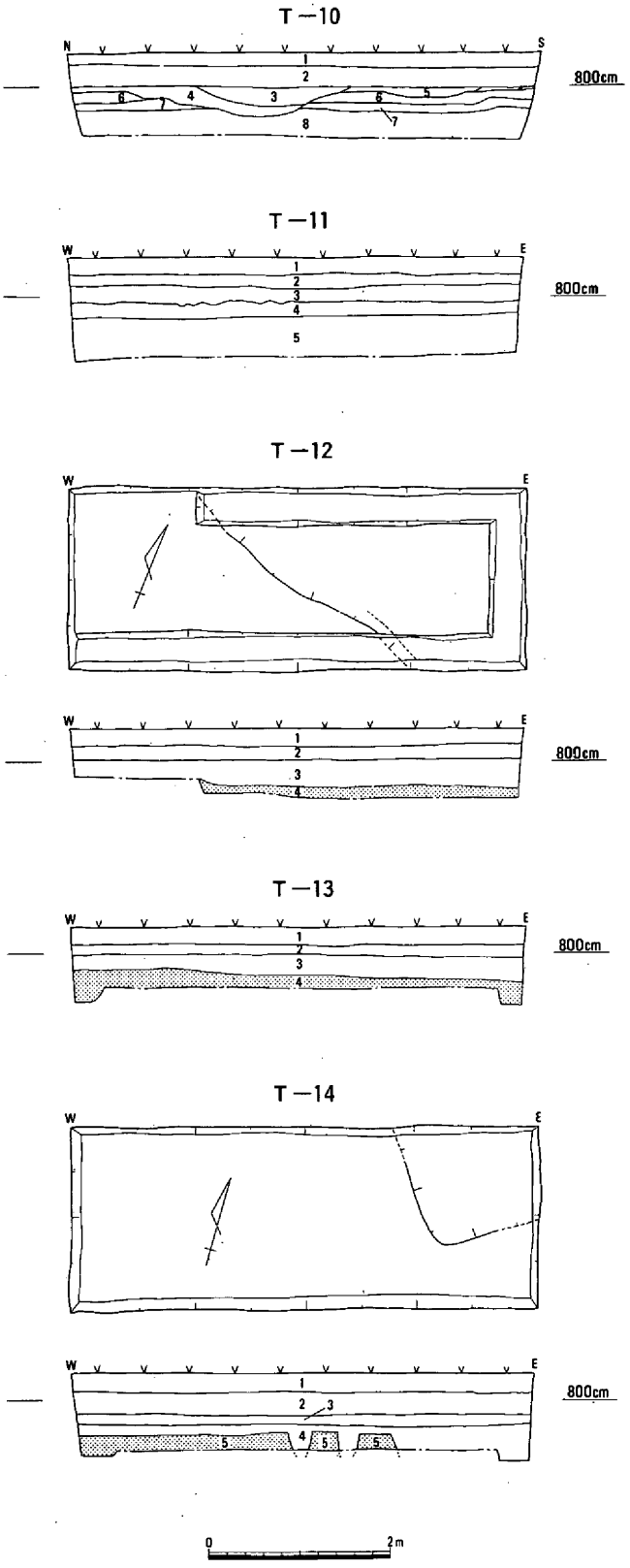


1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．灰色粘質土（中世）
4．暗灰黄褐色粘質微砂
5．黒褐色粘質微砂（包含層）
6．暗茶灰褐色粘質土
7．黄褐色粘質微砂



1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．黒褐色粘質微砂
4．黄褐色粘質微砂

第４図　第一次確認調査トレンチ６～９（1/80）



１．現耕土
２．明黄灰色粘質土
３．淡黄灰色砂層
４．灰色粘土
５．灰黄色粘質土
６．茶灰色粘質微砂
７．灰黒色粘質土
８．茶灰色粘質土

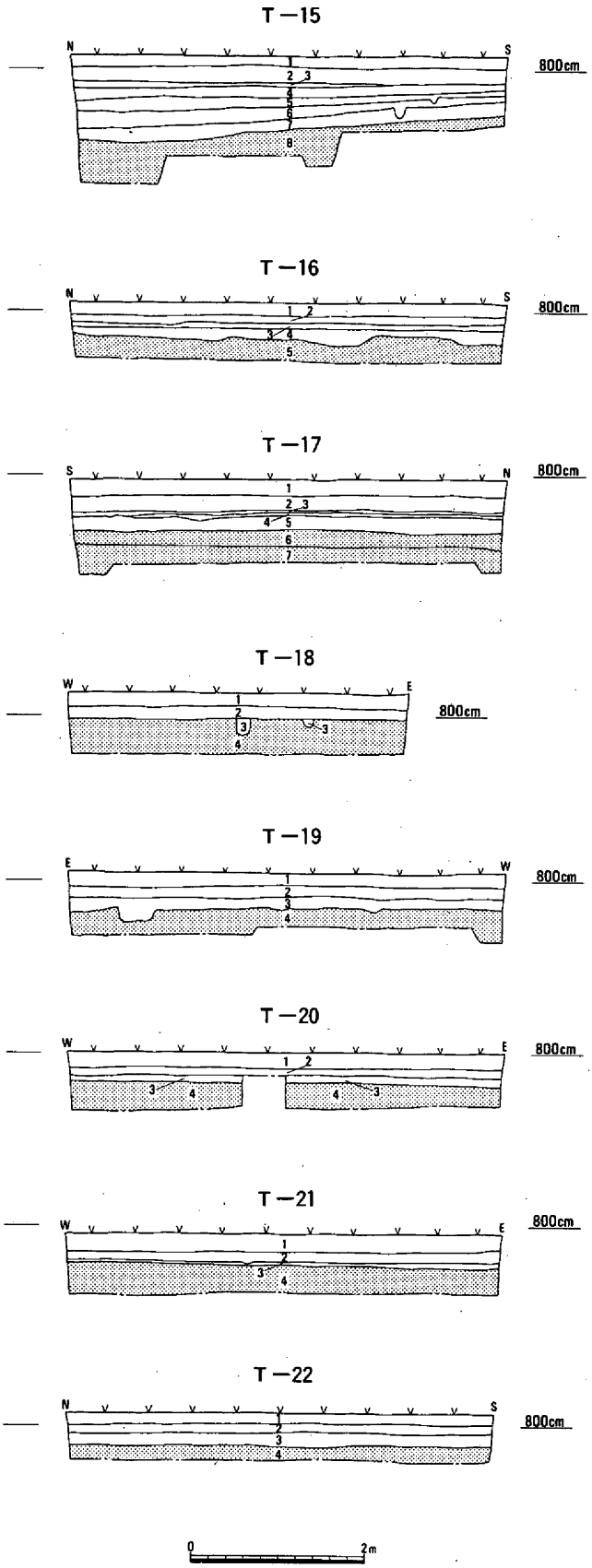
１．現耕土
２．明黄灰色粘質土
３．黒灰色粘土
４．暗黄灰色粘土
５．暗灰黄褐色粘土

１．現耕土
２．明黄灰色粘質土
３．黒灰色粘土
４．暗黄灰色粘土

１．現耕土
２．明黄灰色粘質土
３．黒褐色粘質微砂（包含層）
４．黄褐色粘質微砂

１．現耕土
２．明黄灰色粘質土
３．灰色粘質土（中世）
４．黒褐色粘質微砂
５．黄褐色粘質微砂

第５図　第一次確認調査トレンチ10～14（1/80）



T－15
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．灰色粘質土（中世）
4．暗黄灰色粘土
5．暗黒灰色粘土
6．茶灰色粘質微砂
7．灰茶色粘質微砂
8．灰茶色微砂

T－16
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．灰色粘質土（中世）
4．黒褐色粘質微砂（包含層）
5．黄褐色粘質微砂

T－17
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．　〃
4．暗灰色土
5．暗茶灰色粘質土
6．暗灰茶褐色粘質微砂
7．暗青灰色粘質微砂

T－18
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．黒褐色粘質微砂
4．黄褐色粘質微砂

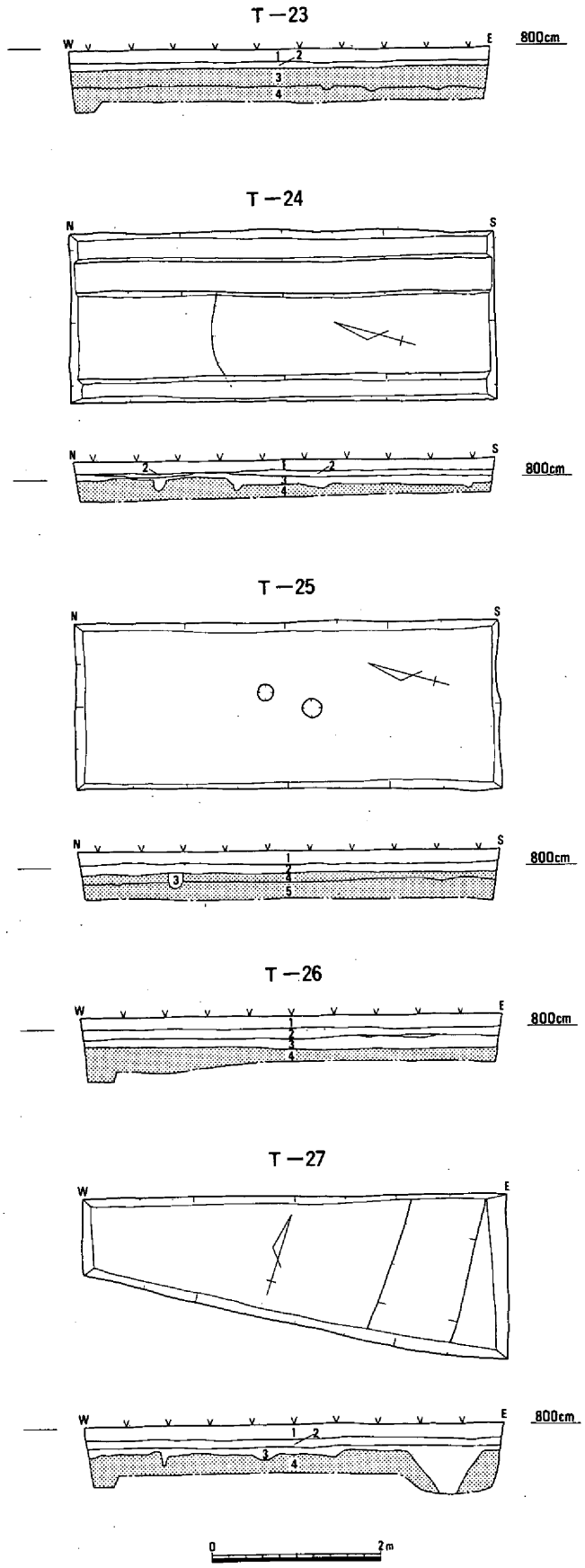
T－19
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．黒褐色粘質微砂（包含層）
4．黄褐色粘質微砂

T－20
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．灰色粘質土（中世）
4．黄褐色粘質微砂

T－21
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．灰色粘質土（中世）
4．黒褐色粘質微砂（包含層）

T－22
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．黒褐色粘質微砂（包含層）
4．黄褐色粘質微砂

第６図　第一次確認調査トレンチ15～22（1/80）



1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．黒灰茶色粘質微砂
4．暗黄灰褐色粘質微砂

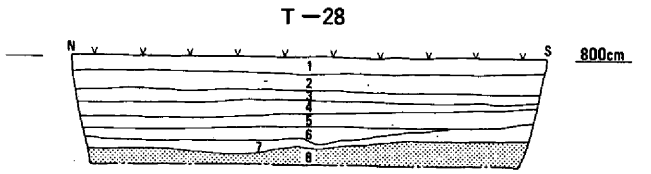
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．黒褐色粘質微砂
4．黄褐色粘質微砂

1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．暗灰茶色粘質微砂
4．黒褐色粘質微砂（包含層）
5．黄褐色粘質微砂

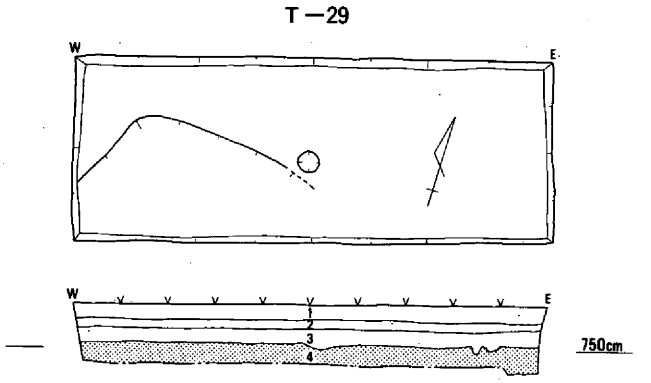
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．黒褐色粘質微砂（包含層）
4．黄褐色粘質微砂

1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．黒褐色粘質微砂
4．黄褐色粘質微砂

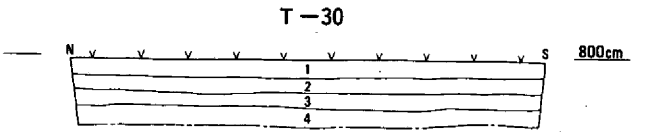
第７図　第一次確認調査トレンチ23～27（1/80）



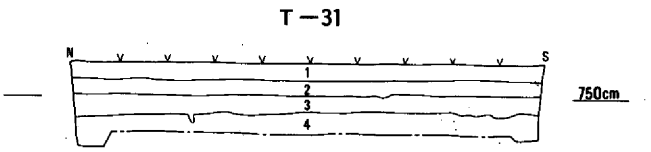
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．灰色粘質土（中世）
4．淡灰茶粘質土
5．暗茶灰色粘質土
6．淡茶灰色粘質土
7．淡黄灰色粘質微砂
8．灰黄色粘質微砂



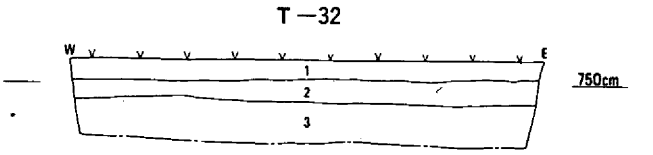
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．黒褐色粘質微砂（包含層）
4．黄褐色粘質微砂



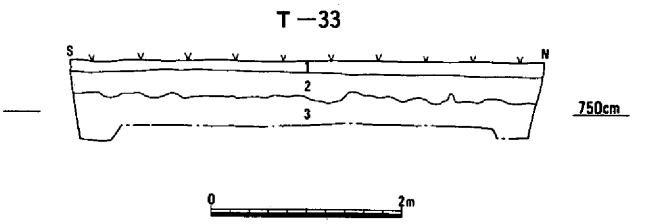
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．灰色粘質土
4．淡灰茶色～暗茶灰色粘質土



1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．灰色粘質土（中世）
4．淡灰茶色～暗茶灰色粘質土

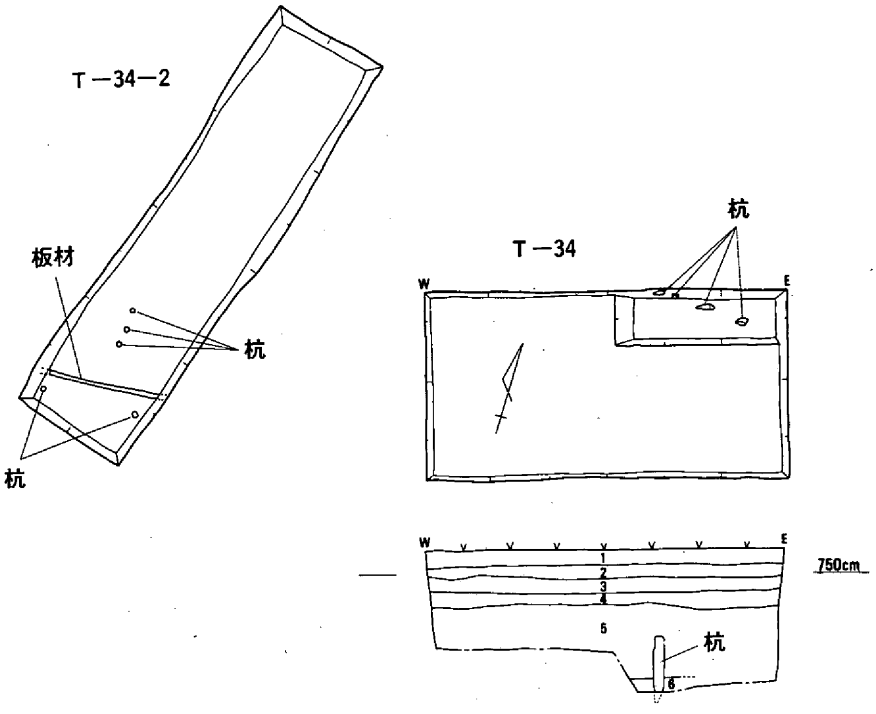


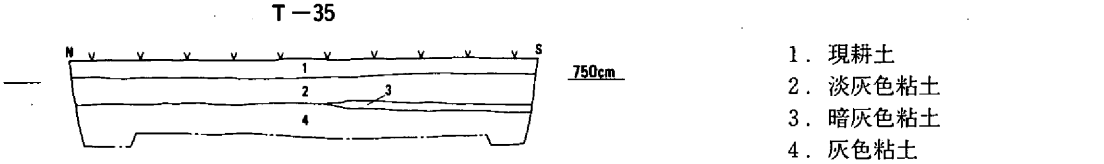
1．現耕土
2．淡灰色粘土
3．灰色粘土

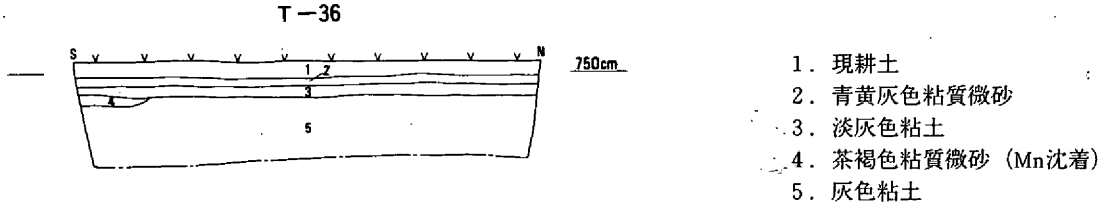


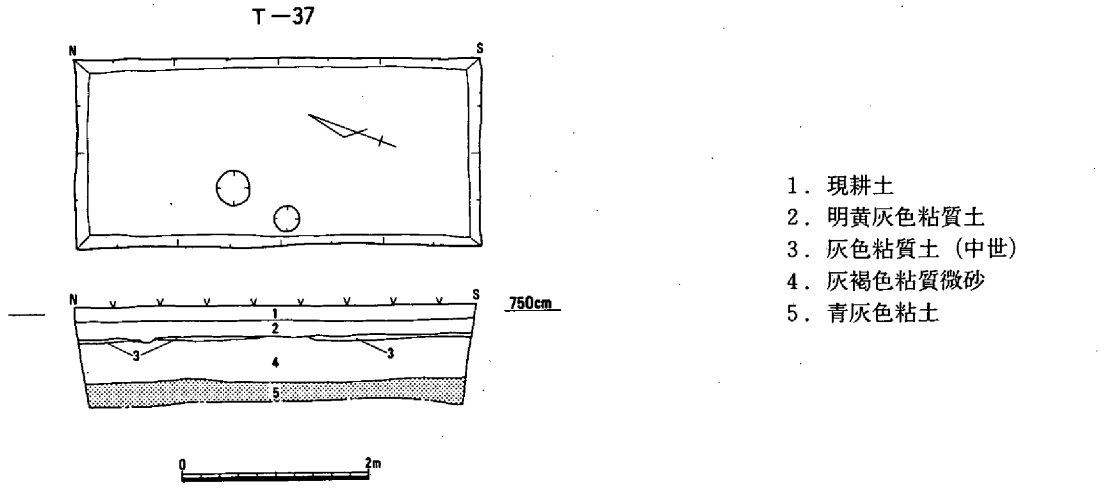
1．現耕土
2．黄灰色粘土粗砂混じり
3．暗青灰粘土

第８図　第一次確認調査トレンチ28～33（1/80）

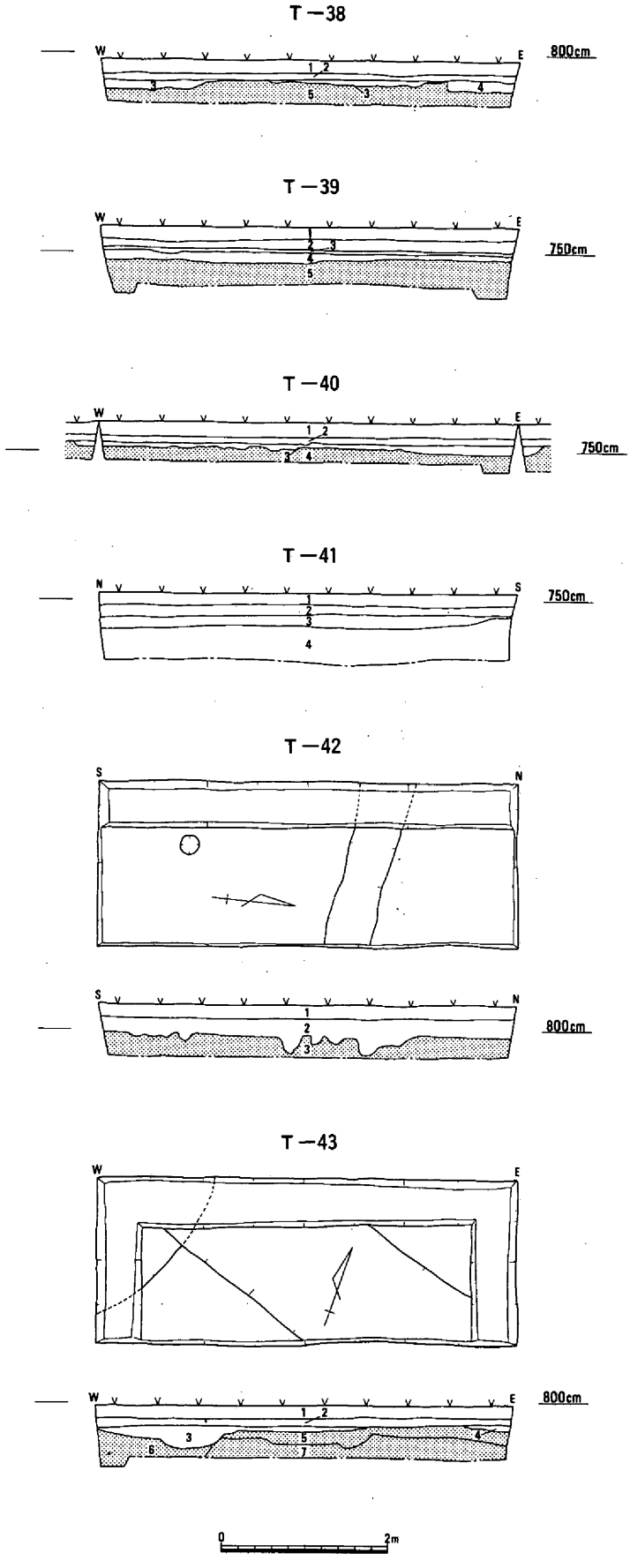








第９図　第一次確認調査トレンチ34～37（1/80）



T－38
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．灰色粘質土（中世）
4．黒褐色粘質微砂
5．暗灰黄褐色粘質微砂

T－39
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．黄灰色粘質土
4．黒褐色粘質微砂（包含層）
5．黄褐色粘質微砂

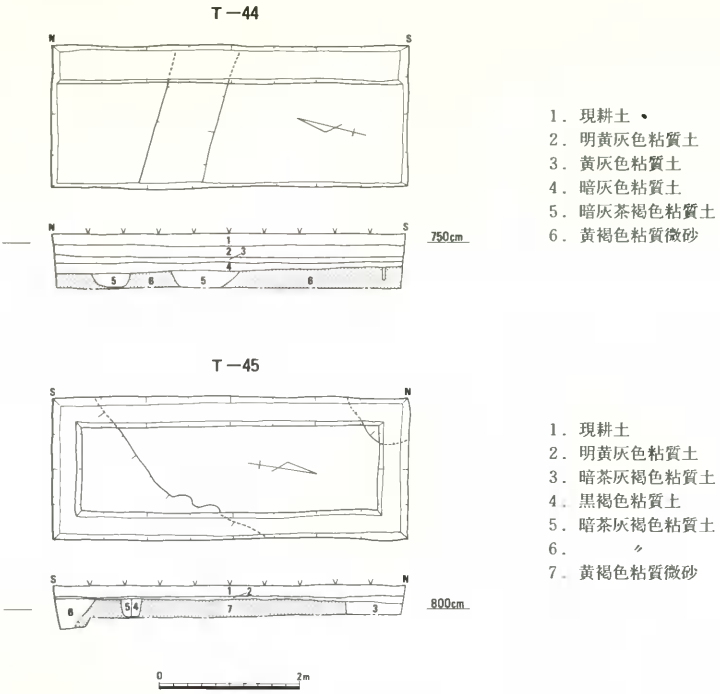
T－40
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．黄灰褐色粘質土
4．黄褐色粘質微砂

T－41
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．黄灰色粘質土
4．暗灰色粘質土

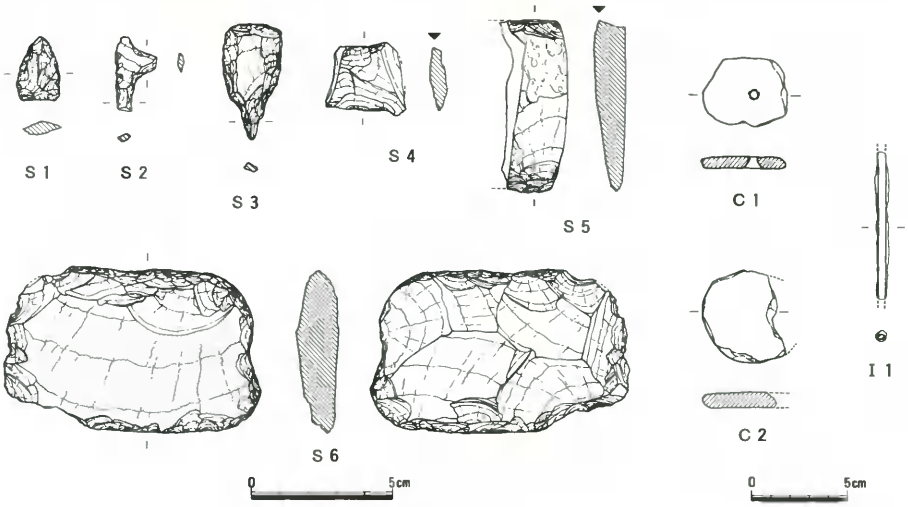
T－42
1．現耕土
2．黒褐色粘質土
3．黄褐色粘質微砂

T－43
1．現耕土
2．明黄灰色粘質土
3．黄灰色粘質土
4．茶灰褐色粘質土
5．黒褐色粘質微砂（包含層）
6．暗茶灰褐色粘質土
7．黄褐色粘質微砂

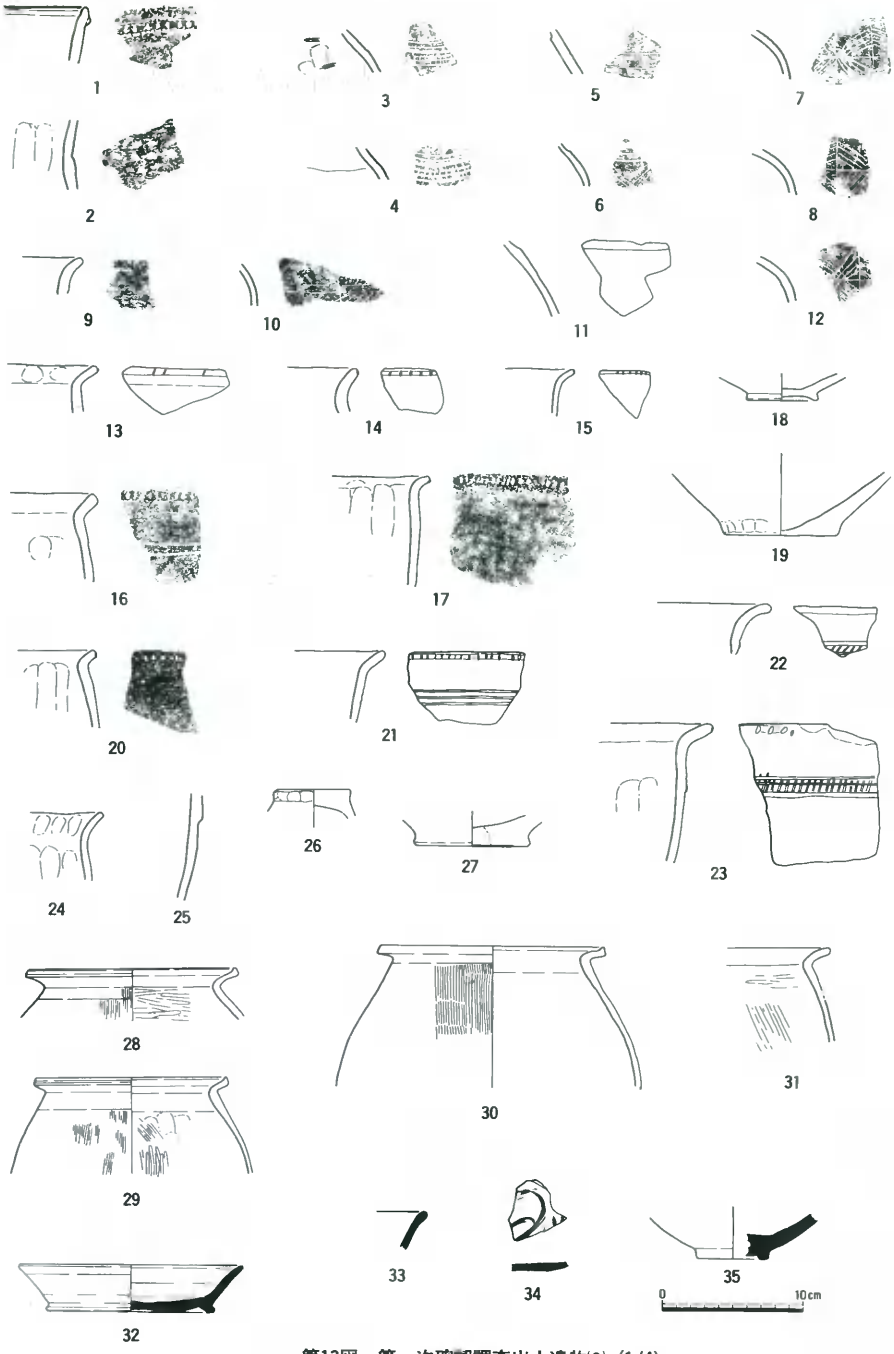
第10図　第一次確認調査トレンチ38～43（1/80）



第11図　第一次確認調査トレンチ44・45（1/80）



第12図　第一次確認調査出土遺物(1)（1/2・1/3）



第13図　第一次確認調査出土遺物(2)（1/4）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1	縄文土器	深鉢	口唇部刻目。刻目突帯。ナデ。	ナデ。	灰　5Y4/1	口縁部内面に凹線。
2	縄文土器	深鉢	ヨコ刺突文。ケズリ。	ナデ。	灰白　2.5Y8/2	
3	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文、刻目。	ヨコハケメ。	浅黄橙　10YR8/3	
4	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文、刻目。	ユビオサエ、ナデ？。	褐灰　7.5YR5/1	
5	弥生土器	壺	細く浅いヘラ描き沈線文。	ナデ？。	浅黄橙　7.5YR8/2	
6	弥生土器	壺	段。ヘラ描き沈線文。	ユビオサエのちナデ？。	にぶい橙　7.5YR7/4	
7	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。	ユビオサエのちナデ？。	にぶい黄橙　10YR6/4	
8	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。	ユビオサエのちナデ。	橙　7.5YR6/6	
9	弥生土器	甕	段。ユビオサエ。	ナデ？、ミガキ？。	橙　7.5YR7/6	
10	弥生土器	壺	細く浅いヘラ描き沈線文。		にぶい橙　5YR6/4	
11	弥生土器	壺	段。		にぶい橙　7.5YR7/4	
12	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。	ナデ。	にぶい橙　10YR7/1	
13	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。	口縁部ユビオサエ。	灰白　10YR8/2	
14	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ユビオサエ、ナデ。		にぶい橙　7.5YR7/3	
15	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ユビオサエ、ナデ。		橙　7.5YR7/6	
16	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線。	ユビオサエ？。	明褐灰　7.5YR7/1	
17	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ユビオサエ、ナデ。	ユビオサエ、ナデ。	灰黄褐　10YR4/2	
18	縄文土器？	浅鉢			橙　5YR6/6	
19	弥生土器	壺	胴部ヘラミガキ。底部ナデ。		にぶい黄褐　10YR7/2	
20	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ナデ？。	ユビオサエ、ナデ。	灰褐　5YR6/2	
21	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線。	ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/3	
22	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線。刻目。		灰白　10YR8/2	
23	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線、刻目。	ナデ？。	灰白　10YR8/3	
24	弥生土器	甕	ユビオサエ。	ユビオサエ。	橙　7、5YR7/6	口唇部刻目不詳。
25	弥生土器	甕？	ヘラミガキ？。段。		にぶい橙　5YR7/3	傾き不詳。
26	弥生土器	壺		ユビオサエ、ナデ。	橙　7.5YR6/8	
27	弥生土器	壺			橙　5YR6/3	
28	弥生土器	甕	口唇部凹線？。胴部タテハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	にぶい橙　7.5YR7/3	
29	弥生土器	甕	口唇部沈線。胴部タテハケメ。	胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
30	弥生土器	甕	胴部上半ハケメ。	胴部ハケメ？。	黒褐　5YR2/1	
31	弥生土器	甕	胴部ハケメ。	胴部上半ミガキ、下半ハケメ。	灰黄褐　10YR6/2	
32	須恵器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ヘラケズリ。	ヨコナデ。	灰　N7/	
33	青磁	碗	蓮弁文。		オリーブ灰　10Y6/2	
34	青磁	皿	底部露胎。	クシ描き文。	灰オリーブ　7.5Y6/2	
35	青磁	碗	高台、底部一部釉。	貫入。	灰オリーブ　7.5Y5/2	

当するが、とくに前者はトレンチの位置関係などからしてかなり複雑に展開するものと思われる。また、土層断面で確証は摘かめなかったものの、百間川遺跡群のように旧河道上部と低位部に水田址が存在する可能性もある。

湿地

湿地は、長良山の山裾を除く用地の北東部に想定される。この部分は現在もクリークが一部に残るなど周辺と比べても低いが、Ｔ－32～36・41がそれに該当する。土層断面には表土下１ｍ以上にわたって暗灰色～暗青灰色の粘土質の無遺物層が認められ、水田址が存在する可能性は少ない。ただ、Ｔ－34・34-2の表土下約１ｍのところにそれぞれ４本と５本の杭列や杭が検出されていて、地点的に微高地端部の護岸施設の存在も否定できない。

出土遺物

遺物は量的には差があるものの、湿地部分のトレンチを除く各々から出土している。総量は整理箱で５箱を数える。遺物の時期と種類は、縄文時代晩期・弥生時代前期～後期の土器や石器、古墳時代から奈良時代の須恵器や中世陶磁器などがあるが、量的にはＴ－24の住居址とＴ－15の河道斜面堆積からの出土土器(弥生時代前期～中期)が比較的多い。

以上の調査結果により、用地の北東部の湿地と思われる部分を除く大部分に、縄文時代から中世にかけての遺跡が存在することが判明したものである。　(柳瀬)

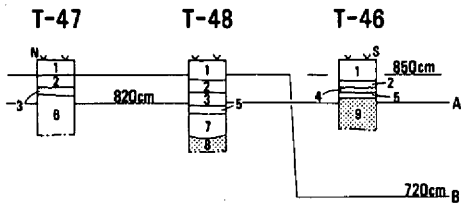
(註) 総社市教育委員会「備中国府跡　緊急確認調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』７　1989年

(2)　二次調査（第14～17図）

一次調査の結果を踏まえ、基本的には校舎等の恒久構造物および工事掘削にかかる部分について調査を実施する必要があるとの結論に達し、平成２年４月から本調査を実施することとなった。調査の過程で、11月になって用地の南西部分にあたる調整池の実施設計が示されたため、掘削の伴う約２万m²を対象にしての確認調査(二次調査)が必要になった。

この地点は、一次調査ではＴ－８・8-2・9-2・9-3などにより微高地と旧河道の存在が予測されていたが、掘削予定レベルと各地点での遺跡の上面レベルとの関係をより詳細に把握する必要があると判断し、予定地に設定した10ｍのグリッドを基にして計51カ所(Ｔ－46～96)を調査の対象とした。トレンチは１×1.5ｍ、深さ１ｍ前後の最小規模にとどめ、重機を使用した。調査の期間は、平成２年11月16・17日の２日間を要した。

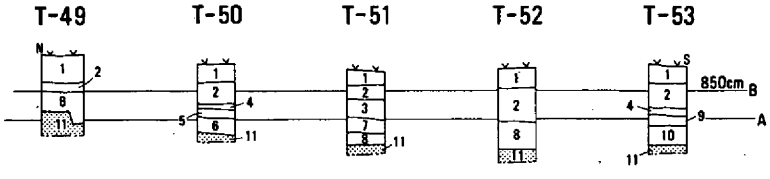
第14図　第二次確認調査トレンチ配置図（1/2000・1/10000）



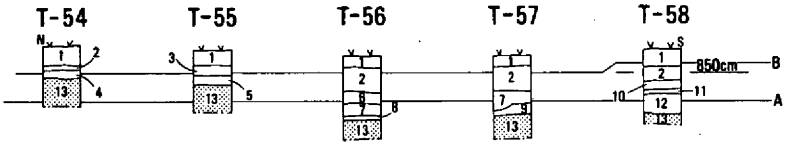
A　当初計画レベル

B　設計変更レベル

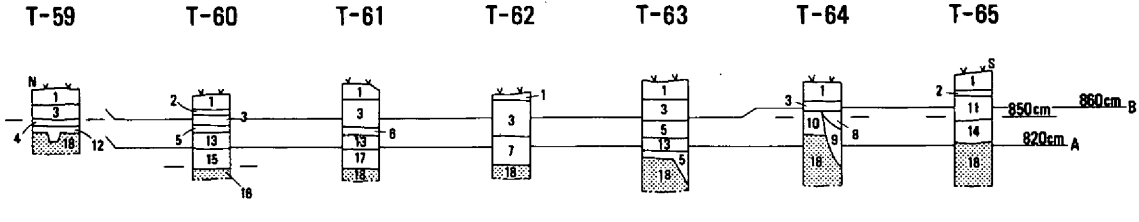
1．現耕土
2．黄灰色粘質土（近世）
3．灰黄色粘質土（中世）
4．灰色粘質土（中世）
5．暗灰色粘質土（　〃　）
6．暗茶灰色粘質土（包含層）
7．暗青灰色粘質土
8．青黄色粘質土



1．現耕土
2．淡灰色粘質土（近世）
3．淡灰黄色粘質土（　〃　）
4．淡灰褐色粘質土（包含層）
5．灰黄褐色粘質土（　〃　）
6．暗灰褐色粘質土（　〃　）
7．濃灰色粘質土（包含層）
8．暗灰色粘質土（　〃　）
9．灰褐色粘質土（　〃　）
10．暗黒灰色粘質土
11．灰黄色～灰褐色粘質土



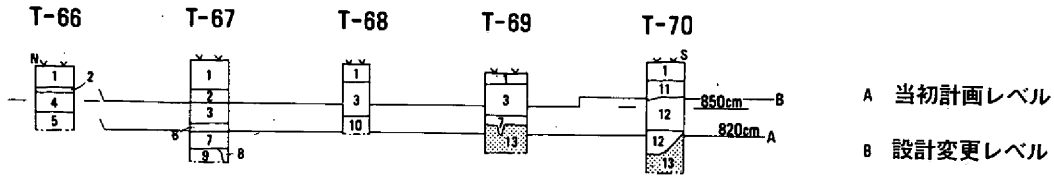
1．現耕土
2．淡灰色粘質土（近世）
3．黄灰褐色粘質土（中世）
4．暗黒茶褐色粘質土（包含層）
5．淡黄灰色土（包含層）
6．暗灰褐色粘土（　〃　）
7．暗灰色土（　〃　）
8．明灰色粘質土（　〃　）
9．灰褐色土（包含層）
10．暗黒灰褐色土（　〃　）
11．灰色土（　〃　）
12．灰茶褐色土（　〃　）
13．灰黄褐色粘質土



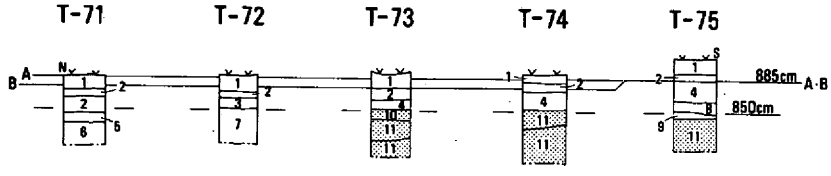
1．現耕土
2．淡灰黄褐色土
3．淡灰色土（近世水田）
4．灰褐色粘質土
5．灰色粘土
6．灰色土（包含層）
7．暗灰色土（　〃　）
8．淡灰褐色土（Mn沈着）
9．暗灰褐色土（有機質含）
10．淡灰褐色土（Mn沈着）
11．暗灰茶褐色粘質土
12．黒灰色粘質土（包含層）
13．暗灰色粘土（　〃　）
14．暗灰黄褐色粘質土（　〃　）
15．淡灰黄褐色粘土
16．淡黄褐色粘土
17．暗灰黄色粘土（包含層）
18．灰黄褐色粘質土

0　2m

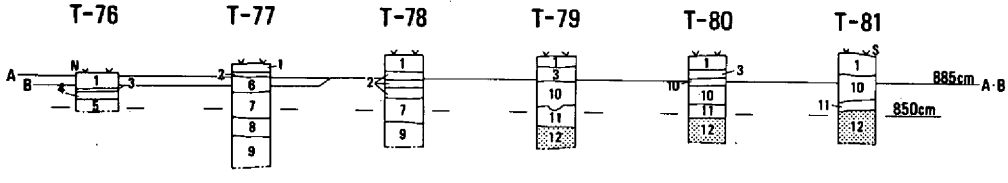
第15図　第二次確認調査トレンチ47～65（1/80）



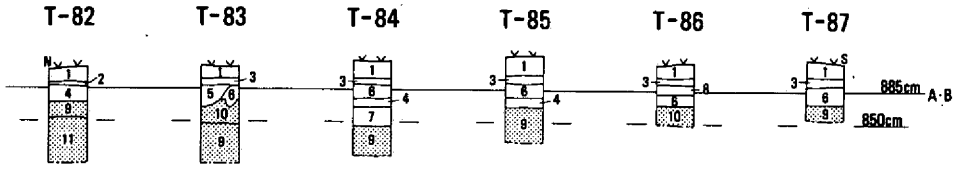
1．現耕土
2．淡灰色土（近世水田）
3．淡灰黄色粘土
4．灰黄色粘質土
5．暗灰黄色粘質土
6．暗灰色粘土
7．暗黒灰色粘土（包含層）
8．暗灰色土
9．灰褐色粘土
10．暗灰褐色粘土（炭を含む）
11．暗灰褐色粘質土
12．灰黄褐色粘質土
13．淡灰黄褐色粘質土



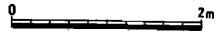
1．現耕土
2．淡灰黄色土（近世水田）
3．黄灰色粘土（中世）
4．暗灰褐色粘質土（包含層）
5．黒灰褐色粘質土
6．灰褐色粘質土
7．暗茶灰色粘質土
8．暗灰黄褐色粘質土（包含層）
9．灰黄褐色粘質土（　〃　）
10．暗灰黄褐色土
11．灰黄褐色土



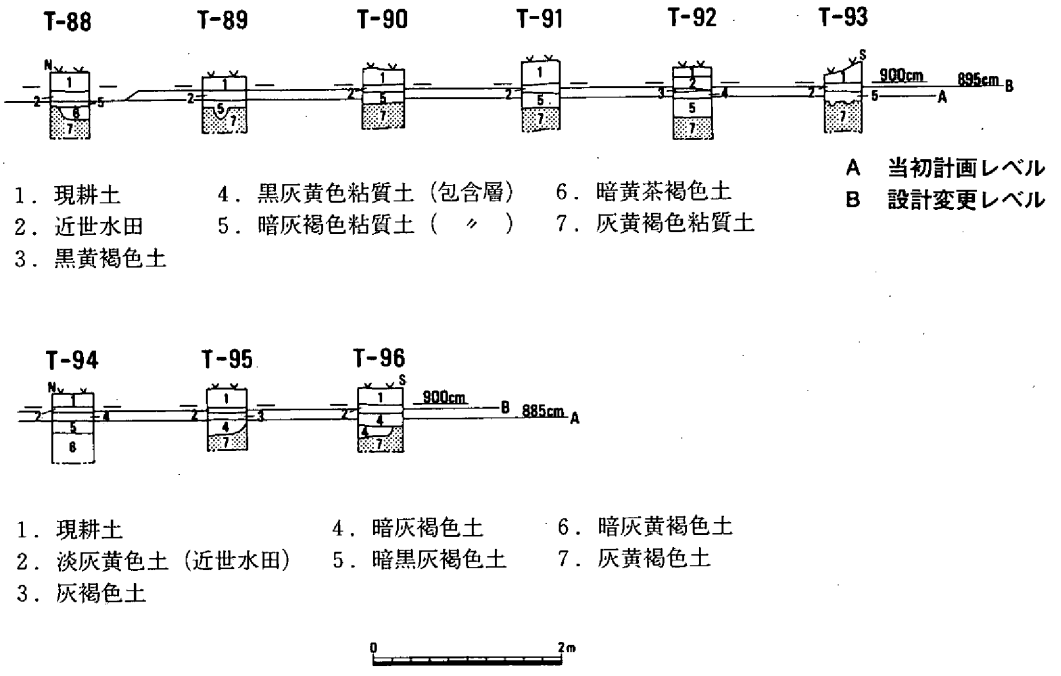
1．現耕土
2．床土・水田層
3．灰黄色土（近世水田）
4．淡灰色粘土（中世）
5．暗灰色褐色粘質土
6．暗黒灰褐色粘質土
7．明灰黄褐色土
8．灰褐色土
9．灰黄褐色土
10．暗褐色粘質土（包含層）
11．暗灰黄褐色土（　〃　）
12．灰黄褐色粘質土



1．現耕土
2．床土・水田層
3．淡灰黄色土（近世水田）
4．暗灰黄褐色粘質土（包含層）
5．淡灰黄褐色土
6．暗灰褐色粘質土（包含層）
7．灰黄褐色粘質土（包含層）
8．灰褐色土
9．灰黄褐色粘質土
10．灰褐色粘質土
11．淡灰黄褐色粘質土



第16図　第二次確認調査トレンチ66～87（1/80）



第17図　第二次確認調査トレンチ88～96（1/80）

調査の結果、旧河道は予測よりもかなり蛇行して対象地内に存在するようで、微高地はそれに分断される形で、Ｔ－49・54・55・59とＴ－46・58・64・65・69・70・73～75・79～93・95・96の２カ所の部分に広がっていることが判明した。実施設計の掘削予定レベルは、Ｔ－70と72を結ぶ線あたりから西側（以下西区）が海抜8.85ｍ、東側（以下東区）が同8.20ｍであり、断面図と照合すると、西区の西半部では包含層上面が辛うじて遺存し同東半部では表土あるいは床土内でどうにか削平が納まること、東区は微高地のほとんどの部分で包含層あるいは遺構上面に削平を受けることが看取された。

県教育委員会は以上の結果をもとに、最小限の掘削に留めて遺跡に影響が及ばないよう、県総務部に設計変更を申し入れた。その後県総務部から、西区は西端部で海抜8.95ｍ、中央部で同8.85ｍ、東端部で同8.75ｍにして地形に添って表土を剝ぐ程度の掘削に留め、東区は全体に30㎝上げて海抜8.50ｍ、一部南西端は同8.60ｍにし、調整池の容量の不足分は東区の東側を約10ｍ拡張することと同区南東隅に約45×20ｍの集水桝（底で海抜7.2ｍ）を設置することで解消できるという設計変更案が県教育委員会に提示された。検討協議の結果、当初計画では約２万㎡のうち６割以上について調査の必要があったが、変更計画では東区の南西隅と集水桝が調査対象にならざるを得ないものの全体の９割近くが保存されること、これ以上の設計変更は調整池の容量基準等からしてむづかしいことなどから、この設計変更案に添って調査を実施することになった。　（柳瀬）

２．全面調査

全面調査は平成２（1990）年４月から平成５（1994）年３月まで実施した。調査対象地となったのは工事によって掘削される範囲で、おもに学部棟、図書館、講堂、体育館などの建物や用水路、共同溝、調整池などであった。このため調査区は、不定形なものや小面積のものも多かったし、また調査員の班編成との関係で同じ調査区を区分して調査した地区もある。さらに発掘調査は建設工程とのからみで急ぐところから着手していったため、隣り合う調査区であるにもかかわらず年度を違えて調査せざ

るを得ない場合もあった。

調査区の名称については、それぞれの工事原因名の頭文字をアルファベットで表記することにした。

全体の調査区の位置および調査区名については、第18・19図に示したとおりである。また、各調査区の調査期間および面積については第２表に示したとおりである。なお、各調査区に対応する遺跡名については、現在の用地内における行政区名称に従い、南溝手遺跡と窪木遺跡という２つの遺跡名となっている。

発掘調査は国土座標に沿った形で基準杭を設定して行ったが、全体のグリッド割りは調査時点では実施しなかった。

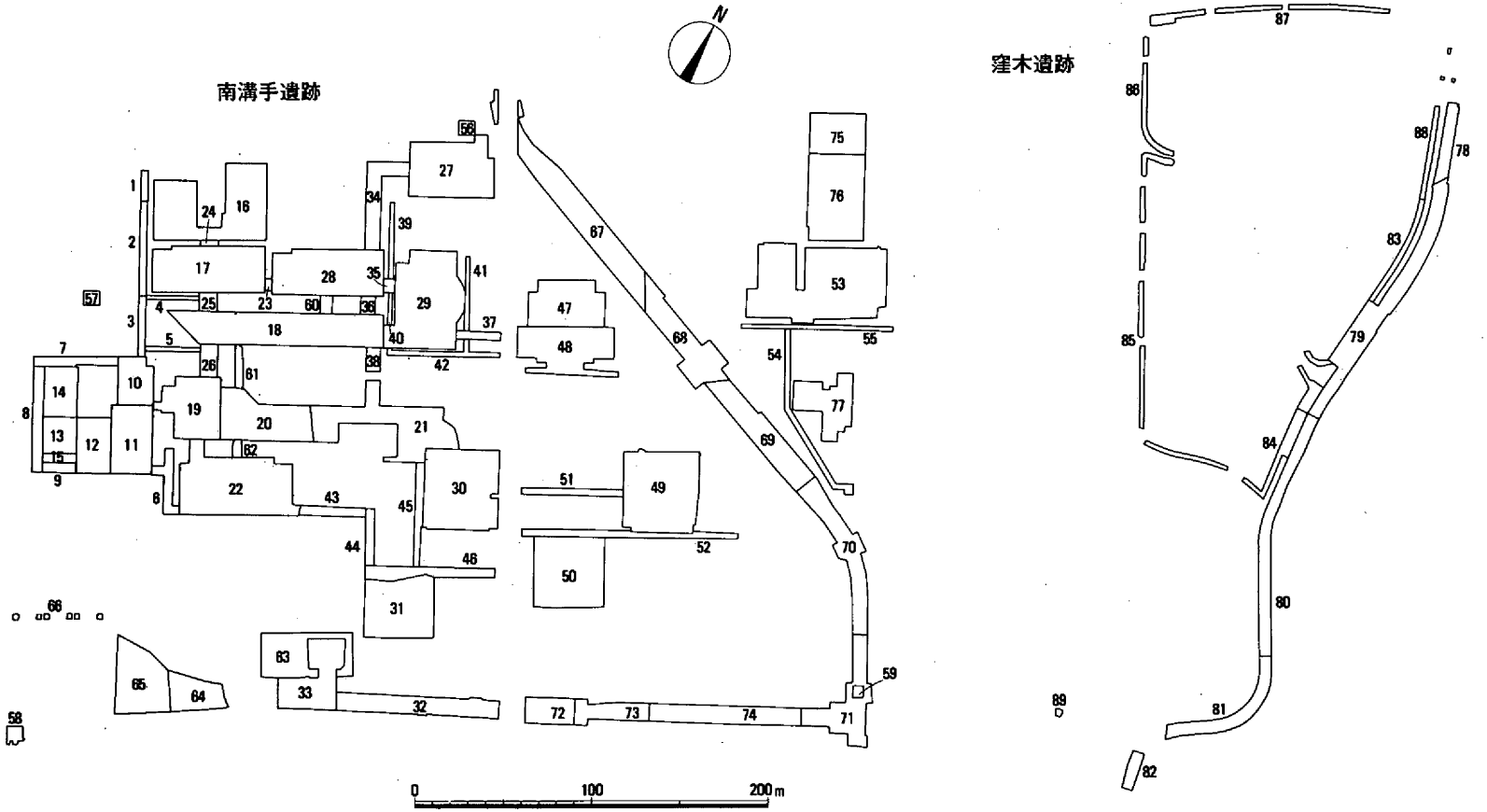
また、現耕作土および近世水田層までは重機によって除去したほか、その後も、深い河道の調査においては重機を使用して対応した。

発掘調査を開始した平成２年度の段階では、実施設計がなお十分に煮詰まっていなかったが、まず調査員５名の１班編成で着手した。最初に調査に入ったのは管理棟予定地であった。この調査区は調査終了間近に設計変更となり、調査はその時点で終え、保存措置を行った。その後本部棟（ＨＯ区）、図書館（ＴＯ区）の調査を進めた。ところが平成２年10月になって、実施設計がほぼ固まるとともに開学が平成５年４月に設定されたのに伴い、建設工事期間を差し引いた発掘調査期間が決定され、アトリエ棟（ＡＴ区）やデザイン学部棟（ＤＥ区）、情報工学部棟（ＪＹ区）など主要な学部棟を含む緊急を要する調査区（約9100㎡）が設定された。そのため急拠平成３年１月から３月までは調査員を増員し、21名による７班体制で調査終了をめざして、懸命の努力を払った。ＤＥ区で弥生時代前期の住居跡から管玉の未製品や玉砥石が出土したのはこの時期である。

平成３年４月からは新しい調査員10名と北房町教育委員会の専門職員１名（６月まで）の４班体制で各建物をむすび共同溝や排水路などの調査区の発掘調査を開始した。しかしその後、６階建てが計画された保健福祉棟（ＨＦ区）や短期大学部（ＴＤ区）など工事を急がざるを得ない調査区が設定されたため、これまた総社市教育委員会の専門職員３名の応援を受けるなどして、７月から９月まで６班体制で調査を完了させることになった。この時期にＴＤ１区で「馬養」銘須恵器が出土し、つとに注目を集めた。この時点でおもな校舎建設に伴う発掘調査は終了させることができ、その後は、再び４班体制でエネルギーセンター（ＥＮ区）、講堂（ＫＯ区）、あるいは浄化槽（ＪＯ区）などの調査を実施していった。Ｈ15区から縄文時代後期後葉の籾痕土器が出土したのはこの時期である。

平成４年に入ると、西側調整池（ＮＣ区）の調査に入ることになった。この部分は遺跡内で最も遺構密度の高い地区であったが、他調査区からの応援を得て、平成４年３月にはほぼ完了することができた。この時期の調査においてＮＣ３区では縄文時代後期中葉の土器がまとまって出土し、のちの土器胎土分析によってイネのプラント・オパールが検出された。またＮＣ３区のトレンチ調査で検出した縄文時代後期の集石遺構については、工事に影響がなくなったため図面作成、写真撮影等を実施したのち、砂によって被覆し、現状凍結を図った。３月22日にはそれまでに出土したおもな遺物や調査中であったＮＣ区とＪＯ区を中心とした現地説明会を開催し、約100名の人々が見学に訪れた。

平成４年４月からは常時９名の４班を編成して開始した。おもな対象地となったのは用地内のほぼ中央を流れていた中道川の改修工事（ＣＨ区）や掘割水路（ＨＷ区）、部室棟（ＢＵ区）などに伴う調査区であった。ＨＷ調査区では縄文時代晩期後葉の丹塗り磨研の壺や鉢、弥生時代後期の家屋線刻絵画土器が出土し注目された。平成４年の後半は、発掘調査も大詰めに近付き、おもに用地の東に位置する



1～5	H1～5（排水路）	19～21	KY1～3（共通棟南）	31	JO（浄化槽）	49	HO（本館）	59	ZC1（暫定沈砂池）	72～74	HW1～3（掘割）
6	H10（排水路）	22	HF（保健福祉棟）	32～33	YO1～2（余水吐）	50	K（管理棟予定地）	60	WR-E（渡り廊下）	75	PU1（プール）
7～9	H11～13（排水路）	23～26	K6～9（共同溝）	34～38	K1～5（共同溝）	51	K10（共同溝）	61	WR-A（渡り廊下）	76	PU2・3（プール）
10～15	TD1～6（短期大学棟）	27	EN（エネルギーセンター）	39～42	H6～9（排水路）	52	H20（排水路）	62	WR-C（渡り廊下）	77	BU（部屋棟）
16	AT（アトリエ棟）	28	JY（情報工学棟）	43	H14（排水路）	53	TA（体育館）	63～65	NC1～3（西調整池）	78～82	YA1～5（山陰川）
17	DE（デザイン棟）	29	FU（福利厚生棟）	44～46	H15～17（排水路）	54～55	H18・19（排水路）	66	TE（テニスコート）	83～88	HC1～6（東調整池）
18	IN（共通棟北）	30	TO（図書館）	47～48	KO1～2（講堂）	56～58	BO1～3（防火水槽）	67～71	CH1～5（中道川）	89	YK（野球場）

1～46，56～58，60～66は南溝手遺跡　　47～55，59，67～89は窪木遺跡

第18図　全調査区配置図(1)（1/4000）

山陰川の改修工事（ＹＡ区）や東調整池（ＨＣ区）とプール（ＰＵ区）の調査を行った。この地区では、それまで少なかった奈良・平安時代の遺構や遺物が多く検出された。

こうして、平成４年12月をもってほとんどの調査区の発掘調査を終了させることができた。その後平成５年３月にはテニスコート部分の調査を２週間実施し、すべての発掘調査が完了した。

発掘調査に関る埋蔵文化財保護対策委員会は平成２年度に３回、平成３年度に４回、平成４年度に３回開催し、その都度、貴重なご助言を賜った。　（平井）

調　査　区	調査期間	面積(㎡)	調　査　区	調査期間	面積(㎡)
Ｋ（管理棟予定地）	900416～900713	1,600	Ｈ20（排水路）	911025～911209	480
ＨＯ（本館）	900716～901127	1,906	ＮＣ３（西調整池）	920105～020331	1,063
ＴＯ（図書館）	901001～910116	1,902	ＴＤ４・５（短期大学部棟）	910812～911025	912
ＴＡ（体育館）	910107～910331	2,977	Ｈ11～13（排水路）	910701～910911	751
ＡＴ（アトリエ棟）	910107～910703	2,576	ＴＤ６（短期大学部棟）	910906～910918	97
ＤＥ（デザイン棟）	910107～910331	1,647	ＣＨ１（中道川）	920401～920706	1,681
ＦＵ（福利厚生棟）	910107～910331	1,983	ＢＵ（部室棟）	920606～921009	814
ＪＹ（情報工学棟）	910107～910331	1,683	ＨＣ３（東調整池）	920916～921211	596
ＩＮ（共通棟北）	910107～910331	2,077	ＨＣ４（東調整池）	920916～921211	212
ＹＯ２（余水吐）	910404～911015	972	ＨＣ５（東調整池）	920916～921211	430
ＨＦ（保健福祉棟）	910606～910920	2,106	ＮＣ２（西調整池）	920401～920408	300
ＢＯ１（防火水槽）	911011～911025	79	ＨＷ２（掘割）	920409～920618	434
Ｈ14（排水路）	911015～911022	200	ＨＷ３（掘割）	920506～920618	870
Ｈ18・19（排水路）	911018～911216	559	ＹＡ１（山陰川）	921001～921211	333
ＣＨ３（中道川）	911210～920311	1,024	ＹＡ２Ａ（山陰川）	920715～921211	747
ＹＯ１（余水吐）	910404～910704	925	ＹＡ２Ｂ（山陰川）	920618～920714	716
ＢＯ３（防火水槽）	910512～910627	78	ＨＣ１Ａ（東調整池）	920928～921211	189
ＺＣ１（暫定沈砂池）	910706～910711	43	ＨＣ１Ｂ（東調整池）	920715～020805	46
ＫＹ２・３（共通棟南）	910702～911022	2,802	ＨＣ２Ａ（東調整池）	920715～920828	148
Ｈ15～17（排水路）	911023～911213	863	ＨＣ６（東調整池）	921001～921211	172
ＮＣ１（西調整池）	911215～920331	898	ＣＨ２（中道川）	920401～920527	976
Ｋ６～９（共同溝）	910404～910513	349	ＣＨ４（中道川）	920513～920704	985
Ｈ１～５（排水路）	910510～910624	593	ＣＨ５（中道川）	920706～920930	945
ＢＯ２（防火水槽）	910512～910612	79	ＰＵ２・３（プール）	921001～921211	1,530
ＫＹ１（共通棟南）	910621～910904	1,020	ＨＷ１（掘割）	920401～920507	420
ＥＮ（エネルギー棟）	910905～911116	1,490	ＹＡ３（山陰川）	920609～921021	1,060
ＫＯ２（講堂）	911115～920312	1,274	ＹＡ４（山陰川）	920910～921013	530
ＫＯ１（講堂）	911204～920331	774	ＹＡ５（山陰川）	921007～921021	146
Ｋ１～５（共同溝）	910404～910612	956	ＨＣ２Ｂ（東調整池）	920728～920904	265
Ｈ６～９（排水路）	910516～910619	493	ＹＫ（野球場）	921126～921210	15
ＴＤ１～３（短期大学部棟）	910604～911011	2,017	ＰＵ１（プール）	921013～921209	770
ＪＯ（浄化槽）	911009～920313	1,284	ＴＥ１～６（テニスコート）	921203～921210	54
ＮＣ２（西調整池）	920124～920331	509	ＷＲ－Ａ（渡り廊下）	920508～920515	103
Ｈ10（排水路）	910701～910812	249	ＷＲ－Ｃ（渡り廊下）	920508～920515	58
Ｋ10（共同溝）	911025～911210	180	ＷＲ－Ｅ（渡り廊下）	920508～920515	72

第２表　全調査区一覧（南溝手遺跡・窪木遺跡）

第4節　報告書の作成

報告書の作成は、全調査区を4年次にわけて行うこととし、今回報告する第1分冊については担当者3名で、平成5(1993)年度に実施した。第1分冊の対象となった調査区は第19・20図に示した各調査区である。総面積は約28000㎡で、発掘調査時の遺構総数約860、出土遺物は約450箱であった。調査担当者、調査期間および調査面積は第3表に示した。

出土遺物の水洗・注記は発掘調査時にすでに終了しており、平成5年4月からはただちに整理、復元作業を開始した。復元作業は小片のものが多かったが作業は順調に進行し、実測遺物の選定抽出を行うことができた。実測土器の選定にあたっては、実測可能なものについては小片であってもできるだけ抽出するように努めた。

復元作業と並行して石器、土製品などの抽出も行い、台帳を作成し、実測の必要なものの選定を行った。このようにして選定した遺物については土器が約2200点、石器約550点、土製品・鉄器約130点などの実測を行うことができた。これらの実測作業は、調査員はもとより、補助員の協力に負うところが少なくない。補助員による実測図については調査員が絶えず点検を行った。出来上がった実測図については編集段階で一部割愛したため報告書に掲載できた土器は2071点、石器・石製品は520点、土製品は123点、鉄器は5点、木製品は3点である。

遺構については、担当者3名が調査区を分担して図面整理を行い、トレースについては、調査員および補助員が行った。今回報告する調査区については、報告書を担当する調査員が、直接調査に携わっていない調査区が約3分の1を占めていた。そのため、作業は発掘担当者との話し合いをもちながら進めるという状況であった。また、溝や水田など各調査区にわたって検出されている遺構についての理解のくい違いを解消する作業にも多くの時間を費やすことになった。特に全体図の作成にあたっては、第2分冊以降を考慮に入れて、新たに全調査区をカバーする20m単位のグリッド割りを国土座標に則って設定した(第21図)。

遺物写真については政田孝氏と米戸典子氏にお願いした。

編集作業においては、まず各遺構遺物の説明を時代ごとに節を分けて行うことにした。節立については遺跡の実態に則して行うこととし、そのため弥生時代中期については前葉を弥生時代前期に含めることにした。また、弥生時代中期後葉と後期前葉の遺構や遺物が多いため、これらはまとめて一つの節として取り扱った。さらに、古代と中世については、溝や素掘溝群などの一部が明確に区別できなかったため一つの節として取り扱うこととした。

遺構の取り扱いについて問題となったのは、土壙と柱穴である。実測可能な出土遺物のある土壙や埋土、形状のしっかりした土壙については報告書に土壙として掲載した。しかし、それ以外の現場では土壙として取り扱ったものの出土遺物もなく時期の特定が困難で、形状もしっかりしていない土壙の一部については、全体図に掲載したのみで個別に説明は加えなかった。また柱穴については時期を特定するのが困難なものが多かった。特に縄文時代晩期と弥生時代前期の区別が困難であり、後にのべるように弥生時代前期から中期前葉の全体図にまとめて掲載することにした。

水田の報告にあたっては結果的に水田の文章と平面図と断面図が組み合っていないレイアウトになったところがある。これは各時代ごとに節を分けたため各時期の水田を分離して説明することに

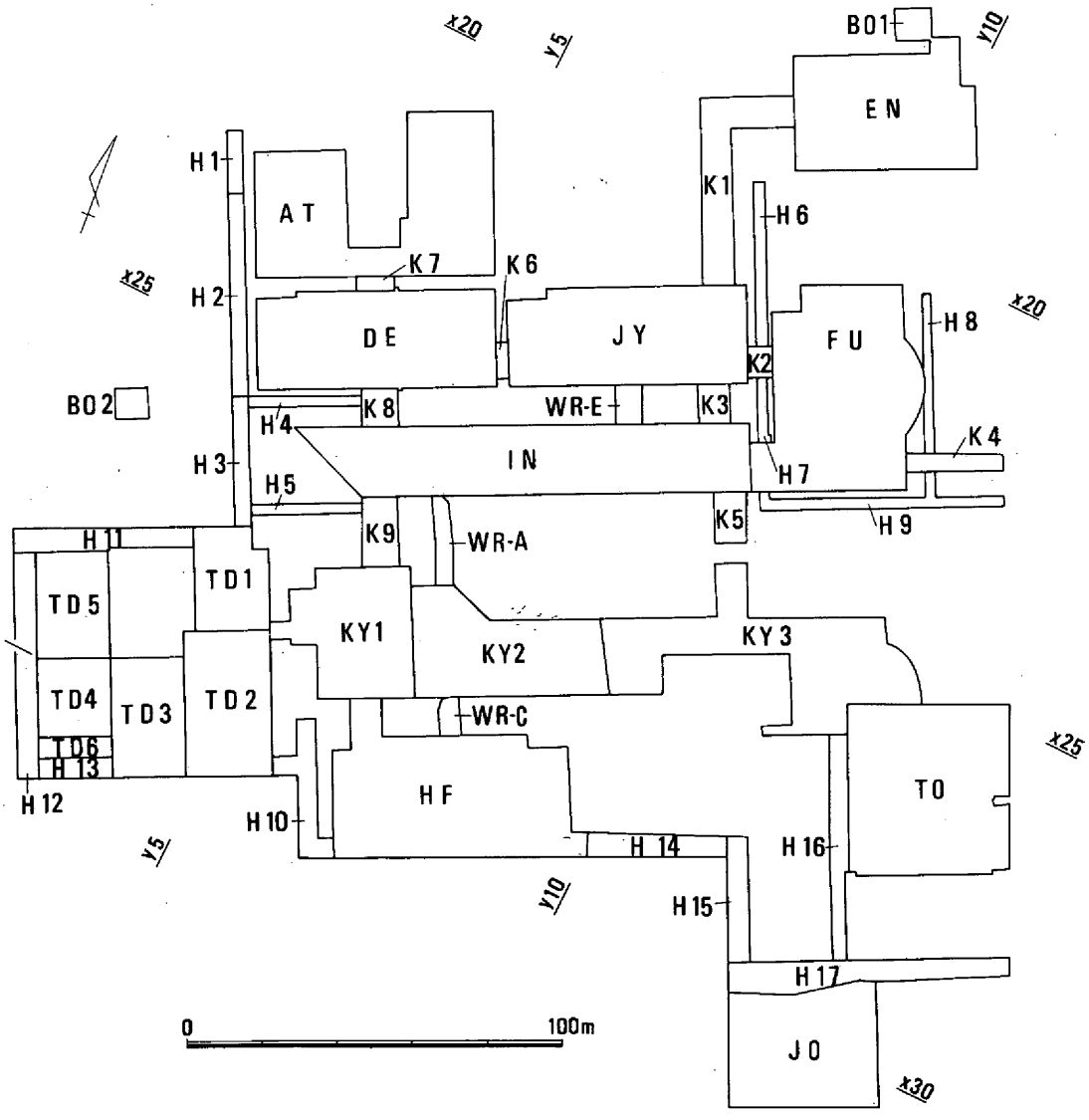
第19図　全調査区配置図(2)（1/4000）

なったこと、および水田が低位部に形成されており、低位部の堆積状況を示す断面図と水田層の断面図が重複することになったためで、読みづらい印象はまぬがれ得ないが、了とされたい。

遺物のうち土器・石器については観察表を作成した。そのため本文中では土器・石器自体の説明を省略したところも少なくない。

土器観察表はスペースの関係などから十分なものにはなっていない。特徴欄における記載のうち、縄文時代の巻貝はヘナタリ貝あるいはカワアイ貝を想定しており、アルカ属貝条痕としているのは貝の特定はできないが、ハイガイなどのアルカ属に属する二枚貝による条痕を指している。またケズリは原体は不明ながらも砂粒の動きが観察できたもので、通常ヘラケズリとされている調整である。ミガキは通常ヘラミガキと呼ばれている調整で、ハケメは板材による線条痕を指している。板ナデはハケメほど顕著でないが、板材でナデたような条線が観察されたものである。

色調については外面の色調のみを記載している。土器によっては複数の色調をもつものもあったが、

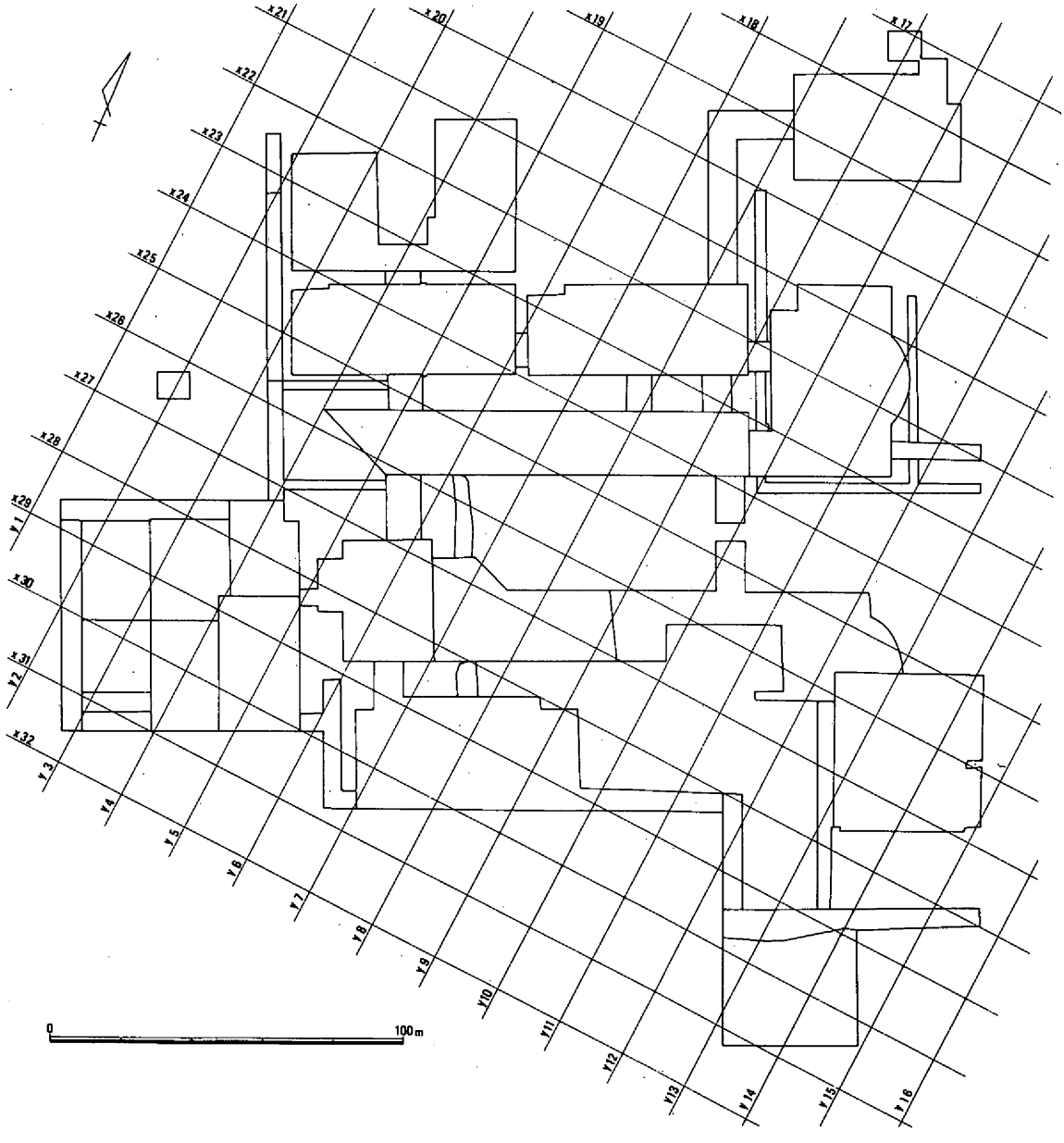


第20図　南溝手遺跡１調査区名一覧（第１分冊）（1/2000）

主要な色調のみを記載した。胎土については記載していないが、基本的には長石・石英・雲母といった花崗岩起源の砂礫を含んでおり、特徴的な胎土をもつ土器については備考欄に記載するようにした。

報告書に関わる自然遺物の鑑定、分析については一部の土壌のプラント・オパール分析および花粉分析や獣骨の鑑定を、発掘期間中に依頼した。また今回の報告書に関わる鑑定、分析については例言に記載した諸氏、機関に依頼した。

こうした分析、鑑定について問題となったのは土壌のプラント・オパールと花粉の分析について各報告書の分冊ごとにまとめて依頼することができなかったことである。これは、一つには発掘調査時において、縄文時代晩期あるいは後期の水田の存否が重要な問題となり、それらの可能性の考えられた土壌について優先的に依頼を行ったため、その後に計画された報告書の各分冊にまたがる資料の報告がまとめられることとなった。また、報告書が４年計画になったため、土壌の性格上最初の年度に全調査区のおもな資料の分析を依頼したためである。



第21図　南溝手遺跡１グリッド設定図（第１分冊）（1/2000）

こうしたことから、これらの報告文をどの分冊において掲載するかという問題が生じることになった。最終分冊にまとめて掲載する方法も考えたが第1分冊で報告する弥生時代の水田などについては、この分析結果が重要な根拠となっている。そのため、本報告では、プラント・オパールの土壌分析の結果については、古環境研究所の了解のもとに、第一分冊に関連する試料の結果についてのみ再編集したものを付載として掲載している。

文章の執筆については基本的に発掘調査担当者が分担し、文責を文末に記載した。しかしながら既に述べたように、多くの遺構・遺物について整理に携わることのできなかった発掘調査担当者が、他の用務を抱えながら執筆せざるを得ない状況にあったので、必ずしも文体を統一することはできなかったし、また説明不足の箇所も少なくない。

報告書の作成にあたっては下記の方々の援助を受けた。ここに氏名を記し、深く感謝いたします。

（平井）

報告書作成協力者

政田　孝　阿部典子　荒木孝子　板野桂子　遠藤七都子　大西信子　片山典子　熊代千津子
甲坂めぐみ　河内一美　小西洋子　小山幸子　斉藤直子　高田師子　田中淑子　坪井婦美
常見友恵　中野晴美　芳谷綾子　林真理子　林　幸恵　平田純子　松野千里　三垣佐知子
森田洋子　山形五美　横溝節子　米戸典子

調査区名	調査期間	面積m²	担当者
TO（図書館）	1990.10. 1～1991. 1.26	1902	柳瀬、桑田、川崎シ、横山サ、小松原
AT（アトリエ棟）	1991. 1. 7～1991. 7. 3	2576	光永、広瀬、安井、川崎シ
DE（デザイン棟）	1991. 1. 7～1991. 3.31	1647	中野、福田、久保
FU（福利厚生棟）	1991. 1. 7～1991. 3.31	1983	岡田、野上、栗尾
JY（情報工学棟）	1991. 1. 7～1991. 3.31	1683	江見、平松、横山シ
IN（共通棟北）	1991. 1. 7～1991. 3.31	2077	平井、川崎ハ、吉久
HF（保健福祉棟）	1991. 6. 6～1991. 9.20	2106	松本、柴田
BO1（防火水槽）	1991.10.11～1991.10.25	79	松本、柴田
H14（排水路）	1991.10.15～1991.10.22	200	松本、柴田
KY2・3（共通棟南）	1991. 7. 2～1991.10.22	2802	平井、守屋
H15～17（排水路）	1991.10.23～1991.12.13	863	平井、守屋
K6～9（共同溝）	1991. 4. 4～1991. 5.13	349	光永、川崎シ
H1～5（排水路）	1991. 5.10～1991. 6.24	593	光永、川崎シ
BO2（防火水槽）	1991. 5.12～1991. 6.12	79	光永、川崎シ
KY1（共同棟南）	1991. 6.21～1991. 9. 4	1020	光永、川崎シ
EN（エネルギー棟）	1991. 9. 5～1991.11.16	1490	光永、川崎シ
K1～5（共同溝）	1991. 4. 4～1991. 6.12	956	大橋、久保
H6～9（排水路）	1991. 5.16～1991. 6.19	493	大橋、久保
TD1～3（短期大学部棟）	1991. 6. 4～1991.10.11	2017	吉久、大橋、久保
JO（浄化槽）	1991.10. 9～1992. 3.13	1284	吉久、大橋
H10（排水路）	1991. 7. 1～1991. 8.12	249	葛原、高田、前角
TD4・5（短期大学部棟）	1991. 8.12～1991.10.25	912	葛原、桑田、高田、前角、久保
H11～13（排水路）	1991. 7. 1～1991. 9.11	751	正岡、高橋
TD6（短期大学部棟）	1991. 9. 6～1991. 9.18	97	正岡、高橋

第3表　第1分冊対象調査区一覧

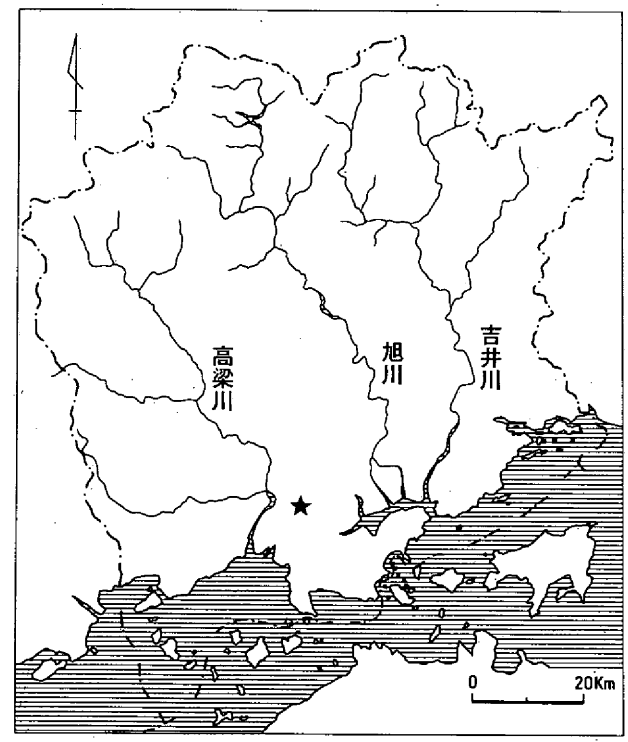
第２章　遺跡の位置と環境

南溝手遺跡は総社市南東部に広がる総社平野の東半部に位置する。総社平野は南縁を都窪丘陵などの低位丘陵、北縁を吉備高原南端の山地に挟まれた東西に細長い平野で、東端は岡山平野へと続いていく。もとは高梁川の乱流による氾濫原と考えられており、洪水や旧河道による沖積作用で形成された微高地上に遺跡は立地している。旧河道のひとつ、現在の前川にその名残をとどめる流れは、「備中国風土記」逸文の「宮瀬川」に比定され、古代の郡境にあたると考えられている[1]。この宮瀬川より南は窪屋郡、北は賀陽郡となり、当遺跡は古代の律令行政区画でいうところの賀陽郡に包括される。

さて、海浜部からやや奥まったこの平野に至るには高梁川・足守川を北上する川沿いのルートや、南部の丘陵の谷あいを抜けるルートが考えられるが、これらのルート沿いには著名な弥生墳丘墓や古墳、古代寺院などが数多く分布している。丘陵越えのルートのひとつに水別峠越えがあり、峠を北に抜けると古代の官道山陽道と交差する。この付近には作山古墳や宿寺山古墳などの大前方後円墳やこうもり塚古墳・緑山８号墳・江崎古墳といった巨石墳が築かれ、備中国分寺・備中国分尼寺が建立されている。さらに三須と上林の間を北へ抜けると総社平野中央部に至るが、そこは現在残る「北国府」「南国府」などの地名から備中国府推定地の最有力候補とされている[2]。南溝手遺跡はこの備中国府推定地に隣接しており、古代吉備政権の中枢の一画に位置しているといえよう。鬼ノ城はこの中枢域を見下ろす背後の山上に位置している。

総社平野内における集落址の調査から当遺跡周辺の歴史をふりかえると、当遺跡の南約１kmに位置する窪木薬師遺跡では旧石器時代のナイフ形石器が包含層中より出土している。しかし、これは平野内に人々が既に居住していたのではなく、近隣の丘陵上や台地上に遺跡が存在し、そこから流れ込んできたと考えられている[3]。総社平野周辺で現在確認されている旧石器時代の遺跡としては、高梁川をのぞむ北縁の丘陵上に位置している浅尾遺跡[4]・宝福寺裏山遺跡[5]が著名であるが、造山古墳の東側にある独立小丘陵上でもナイフ形石器が数点出土している[6]。

縄文時代早期には真壁遺跡[7]で遺構が検出されており、平野内でも一部で居住地としての利用が始まったようである。しかし、この遺跡以外に平野内に位置する遺跡はなく、まだまだ不安定な状態であったようで



第22図　遺跡位置図

● 墳墓　■ 集落　▲ 窯跡　□ 寺院跡　—•— 古墳群（「岡山市遺跡分布地図」および「岡山県遺跡地図」に準じる）

1．南溝手遺跡　2．窪木遺跡　3．窪木宮後遺跡　4．長良山遺跡　5．深町遺跡　6．栢寺廃寺
7．備中国府推定地　8．金井戸新田遺跡　9．明神遺跡　10．西山遺跡群弥生遺跡　11．尼子山古墳　12．西山１号墳
13．中山６号墳　14．奥ケ谷窯跡　15．金黒池遺跡　16．新山廃寺　17．鬼ノ城　18．千引かなくろ谷遺跡
20．随庵古墳　21．余町遺跡　22．足守庄関連遺跡　23．南坂遺跡　24．南坂２号墳　25．上土田４号墳
26．上土田１号墳　27．延寿寺　28．鶴免遺跡　29．生石神社境内弥生墳丘墓　30．大崎廃寺　31．三手遺跡
32．津寺・三本木遺跡　33．津寺遺跡　34．甫崎天神山遺跡　35．雲山鳥打弥生墳丘墓　36．足守川加茂遺跡
37．鯉喰神社弥生墳丘墓　38．矢部廃寺　39．矢部堀越遺跡　40．高塚遺跡　41．庚申山遺跡　42．鶴亀遺跡
43．窪木薬師遺跡　44．中林遺跡　45．折敷山遺跡　46．折敷山古墳　47．小造山遺跡　48．夫婦塚古墳
49．翁塚古墳　50．造山古墳　51．榊山古墳　52．千足古墳　53．造山古墳付６号墳　54．新池大塚古墳
55．法蓮23号墳　56．亀山塚　57．緑山８号墳　58．緑山17号墳　59．三須畠田遺跡　60．美野田遺跡
61．江崎古墳　62．山津田遺跡　63．備中国分寺　64．こうもり塚古墳　65．備中国分尼寺　66．清水角遺跡
67．三須廃寺　68．天満遺跡　69．作山古墳　70．真壁遺跡

第23図　周辺主要遺跡分布図（1/40000）

ある。当遺跡の東に隣接する小独立丘陵の長良山の西斜面でも縄文時代早期の押型文土器が出土している。[8]

沖積化が進行し、本格的に平野内へ人々が進出し始めるのは縄文時代後期から晩期にかけてのようで、当遺跡でも後期の遺構・遺物が検出されている。特に後期中葉の土器胎土からはイネのプラント・オパールが検出されており[9]、沖積平野への進出が稲作の導入といった生活基盤の変化に呼応するものとして注目される。

弥生時代前期になると、真壁遺跡や当遺跡だけでなく足守庄関連遺跡[10]や山津田遺跡[11]など広く平野内に遺跡が散見され、沖積平野の安定と微高地の拡大をうかがい知ることができる。当遺跡において検出された竪穴住居には「松菊里型」といわれる構造を持ち、またその一軒では管玉の製作を行っており、早くから対外的にも開けた地として注目される。

これ以降さらに平野部の集落は展開をみせ、多くは弥生時代中期後半から後期前半にかけて最盛期を迎えている。そうした中のひとつが、後期後半には墳丘墓を築き、古墳時代にいたっては大前方後円墳の造営主体となる一大勢力へ発展していったと考えられる。しかし、総社平野中央部には高塚遺跡[12]や津寺遺跡[12]、足守川加茂・矢部南向遺跡[13]といった大集落に匹敵するような集落は確認されておらず、実態は不明な点が多い。

古墳時代の集落についても不明な点が多いが、近年の総社市教育委員会による確認調査などで平野内の微高地とその上に立地する古墳時代集落が小規模ながら確認されており、少しずつではあるがその実態にせまる資料が蓄積されつつある。[14]同じ県立大学用地内の窪木遺跡[9]や当遺跡のすぐ南につづく窪木宮後遺跡[15]でも古墳時代前期および後期の竪穴住居が検出されており、当遺跡周辺にも継続して集落が営まれているようである。また、古墳時代後期になって急速に集落が増加したことが指摘されており、鉄生産の進展がその背景のひとつとして考えられている。[16]平野内においては窪木薬師遺跡で５世紀前半から７世紀前葉にかけての鍛冶集団の居住した集落[3]や、丘陵・山地では千引かなぐろ谷製鉄遺跡[17]といった６世紀後半における製鉄遺跡が発掘され、また随庵古墳[18]のように鍛冶道具一式を副葬する古墳が築かれるなど、鉄生産や鉄器製作と関連深い遺跡が多く存在している。また、奥ケ谷窯跡[19]といったＴＫ73型式に先行すると考えられる初期須恵器窯が発見されており、農耕に依拠するだけでなく、当時の先端技術のいちはやい導入と展開がこの地の経済基盤の一端を支え、さらに後の吉備政権をになう勢力を支えていったと考えられる。

古代においても当遺跡は、すぐ西には備中国府の比定地があり、白鳳期創建の栢寺廃寺[20]が隣接するなど変わらず備中中枢域にあったと考えられる。平野内における古代の遺跡の調査例は少なく、真壁遺跡で奈良時代の竪穴住居や平安時代の建物が検出され[7]、三須廃寺の西に位置する三須畠田遺跡[21]では奈良時代前半の丹塗土師器や布目瓦が出土したにすぎない。当遺跡においては、遺跡の立地から国府関連遺跡の検出が期待されたが、わずかに包含層中から平安時代に属する瓦や陶硯、灰釉陶器などが出土したにすぎない。その要因としては、古代以降の水田開発にともなって削平された遺構もあろうが、本来から僅少であった可能性が考えられる。この点については、今後のさらなる検討が必要であろう。

また、当遺跡周辺は条里制区画の残る地域としても古くから注目されているが、平野東端に位置する足守庄関連遺跡では、平安時代には条里に基づく地割が確認されている。[10]当地と足守地域は、郷は違うが、条里方向の同一性や足守地域を本拠地とする賀陽氏が栢寺廃寺の地に賀陽山門満寺を再建する[20]

など深い関わりのある地である。さらに当遺跡においても、溝の一部と畦畔のみであるが平安時代中頃の遺構で条里方向と一致するものが検出されており、足守地域と同じ頃に条里が導入された可能性が高い。

古代～中世における集落の調査例としては平安時代末から中世にかけての鍛冶関連遺構が検出された樋本遺跡[22]や屋敷地と考えられる真壁遺跡、中林遺跡[23]、金井戸新田遺跡[24]、清水角遺跡[25]などがある。当遺跡においても屋敷地や土壙墓が検出されているが大部分は水田域である。「備中国賀夜郡服部郷図」では当遺跡周辺は田畑として利用されていた事がうかがえるが、調査成果や調査地全面に中世以降水田層が継続的に堆積していることから、遅くとも中世には平野内の大部分が水田化され、現在と変わらぬ景観を呈していたと考えられる。（久保）

註

(1) 葛原克人「吉備豪族の誕生」『歴史手帖』４巻６号　名著出版　1976年
(2) 「備中国府跡　緊急確認調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』７　総社市教育委員会　1989年
(3) 「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86　岡山県教育委員会　1983年
(4) 「浅尾遺跡」『総社市史』考古資料編　総社市史編纂委員会　1987年
(5) 間壁葭子「高梁川下流域の無土器時代遺跡」『倉敷考古館集報』第２号　1967年
「宝福寺裏山遺跡」『総社市史』考古資料編　総社市史編纂委員会　1987年
(6) 黒住・雲山遺跡、甫崎天神山遺跡など。「山陽自動車道建設に伴う発掘調査８」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』89　1994年
(7) 「真壁遺跡」『総社市史』考古資料編　総社市史編纂委員会　1987年
(8) 「長良遺跡」『総社市史』考古資料編　総社市史編纂委員会　1987年
(9) 「県立大学建設に伴う調査」『岡山県埋蔵文化財報告』22～24　岡山県教育委員会　1992～1994年
(10) 『足守庄（足守幼稚園）関連遺跡発掘調査報告』　岡山市教育委員会　1994年
(11) 「山津田遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』１　総社市教育委員会　1984年
(12) 「山陽自動車道建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』19～21　岡山県教育委員会　1989～1991年
(13) 「足守川河川改修工事に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13～18　岡山県教育委員会　1983～1988年
(14) 鶴免遺跡、鶴亀遺跡、金井戸新田遺跡、中林遺跡など
(15) 「岡山県立大学進入路・排水路工事に伴う調査概要」『総社市埋蔵文化財調査年報』１　総社市教育委員会　1991年
(16) 「三須・畠田遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』２　総社市教育委員会　1993年
(17) 「鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査概報」『総社市埋蔵文化財調査年報』１　総社市教育委員会　1991年
(18) 『随庵古墳』　総社市教育委員会　1965年
(19) 「中国横断自動車道建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』24　岡山県教育委員会　1994年
(20) 「栢寺廃寺緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』34　岡山県教育委員会
(21) 註(16)に同じ
(22) 「樋本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』65　岡山県教育委員会　1987年
(23) 「平成４年度ほ場整備事業に伴う発掘調査の概要」『総社市埋蔵文化財調査年報』３　総社市教育委員会　1994年
(24) 「金井戸新田遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』３　総社市教育委員会　1994年
(25) 「清水角遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』１　総社市教育委員会　1984年
(26) 高重進「中世村落の復元－服部郷図による農業経営の分析－」『史学研究』第73号　史学研究会　1959年

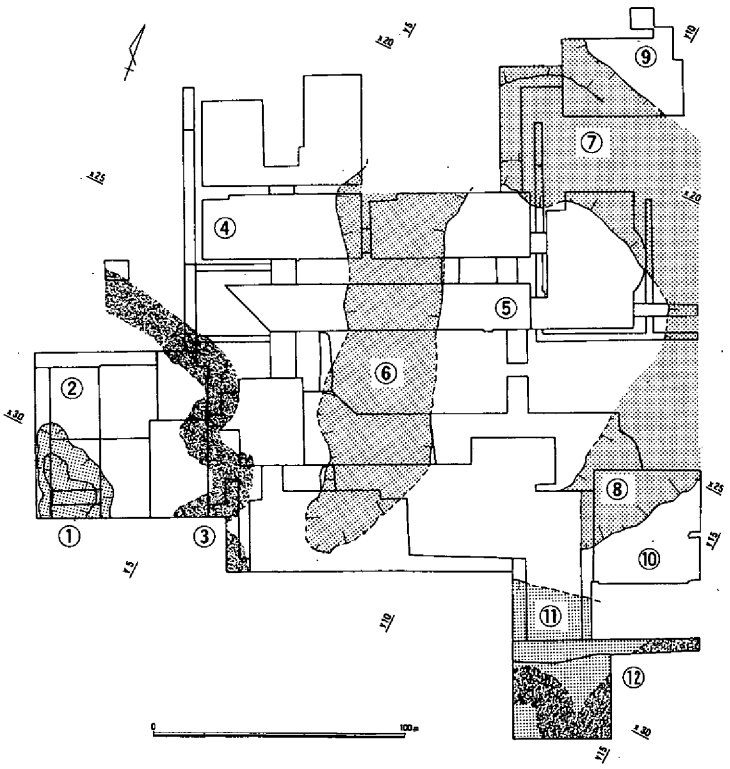
第３章　発掘調査の概要

第１節　調査区の概要

当該地の調査開始前の状況は、水田および畑地などであった。現耕作土直下には20cm前後の厚さの近世と考えられる水田層が、全体にわたって堆積していた。この近世の水田層を除去した段階で第24図④・⑨・⑩の第２微高地(西)と第３微高地(北)・(南)では、縄文時代晩期以降の基盤層である黄色土面に到達し、各時期の遺構を検出することができた。また、②の第１微高地および⑤の第２微高地(東)では上記基盤層に到達する部分と弥生時代前期から中期前葉と考えられる包含層が10～20cm堆積していた部分とがあったが、基本的には微高地状を呈していることが明らかになった。

一方、①の第１低位部は先述の弥生時代前期から中期前葉の包含層が谷状に堆積していた部分で、調査区の南端部では厚さ約80cmに達する。しかし、弥生時代中期中葉以降は微高地となり、その後古代には水田域となっている。また、⑥の第２低位部では古墳時代後半から中世の土層が20cm前後存在し、その下位に古墳時代前期前葉および弥生時代の水田層が確認できた。そしてこの水田層の下層には、弥生時代前期から中期前葉の包含層が北にむかって徐々に厚く堆積していた。⑦・⑧・⑪の第３低位部および第４低位部についても土層の厚さに相違はあるものの、基本的に第２低位部と同様の状況を呈していた。さらに、第１微高地と第２微高地(西)の間、および第４低位部の南には図の③・⑫のような河道１・２が確認された。この河道は縄文時代晩期の層までしか確認できなかったが、縄文時代後期から続いている河道で、弥生時代中期後葉まで規模は小さくなりながらも存続していたものと考えられる。この河道１・２の部分は、弥生時代後期から古墳時代前期前葉には水田域となっている。

なお、第１・２・３・４低位部については、縄文時代晩期においても範囲は不明確ながらも低位部であったと考えている。また第１・２微高地では、黄色土基盤層中から縄文時代晩期中葉の火処や土器・石器が検出され、縄文時代後期の土器も第４低位部などで出土している。　(平井)



①第１低位部　④第２微高地(西)　⑦第３低位部(北)　⑩第３微高地(南)
②第１微高地　⑤第２微高地(東)　⑧第３低位部(南)　⑪第４低位部
③河道１　⑥第２低位部　⑨第３微高地(北)　⑫河道２

第24図　調査区地形概略図 (1/3000)

第２節　縄文時代後期の遺構・遺物

１．概　　要

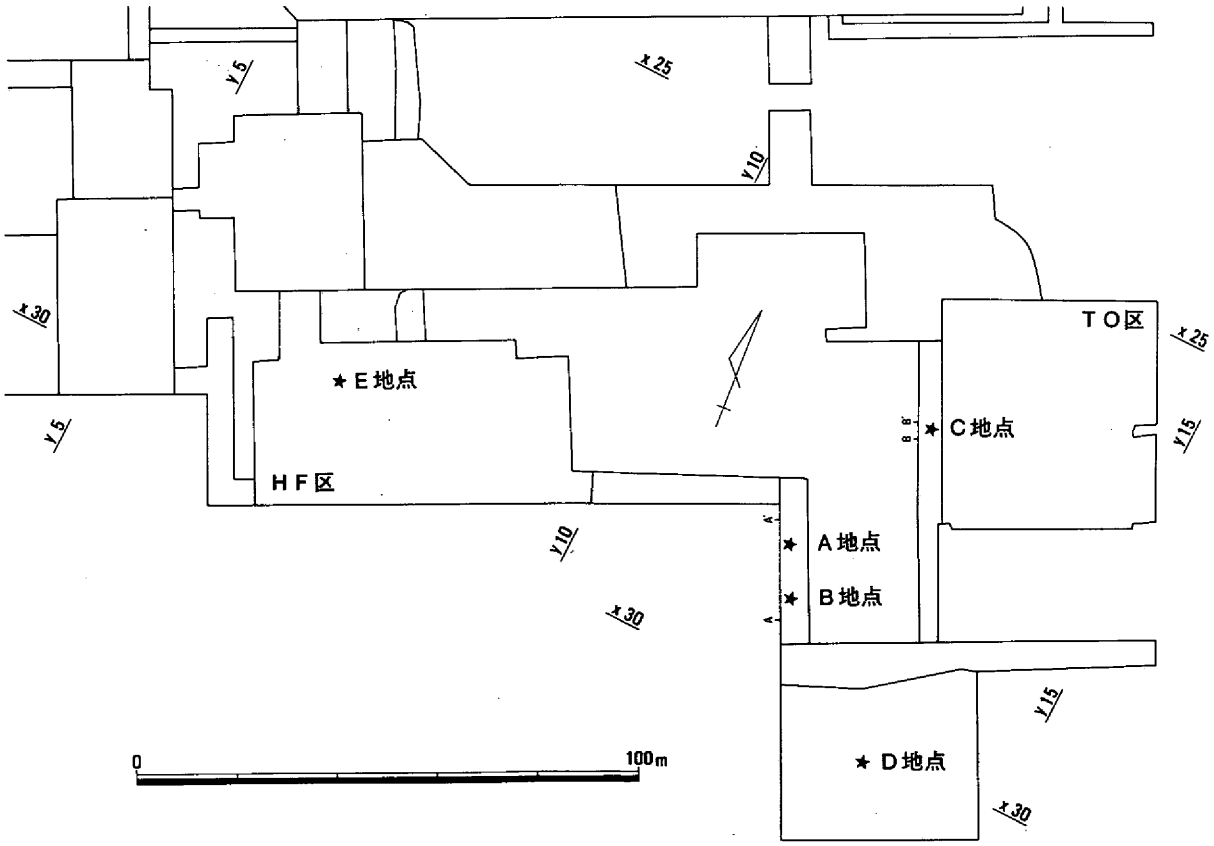
縄文時代後期の遺構・遺物については、明確な遺構は検出されず、遺物が縄文時代晩期以降の基盤層となっている黄色砂質土から、あるいは縄文時代晩期の河道中に混入した状況で出土した。

遺物が出土した場所は、第２微高地(東)および第３微高地、第４低位部にあたるＨＦ・Ｈ15・Ｈ16・ＪＯ区のみである。しかしながら出土状況はＡ・Ｂ・Ｃ地点でみられるように黄色砂質土上面から約１～２ｍ下位で、しかも少量の遺物が出土するのみという状況であり、他の調査区ではその深さまで調査が及んでいないところが多いため、他の調査区において縄文時代後期の遺構・遺物が存在しないとは言いがたい。　　(平井)

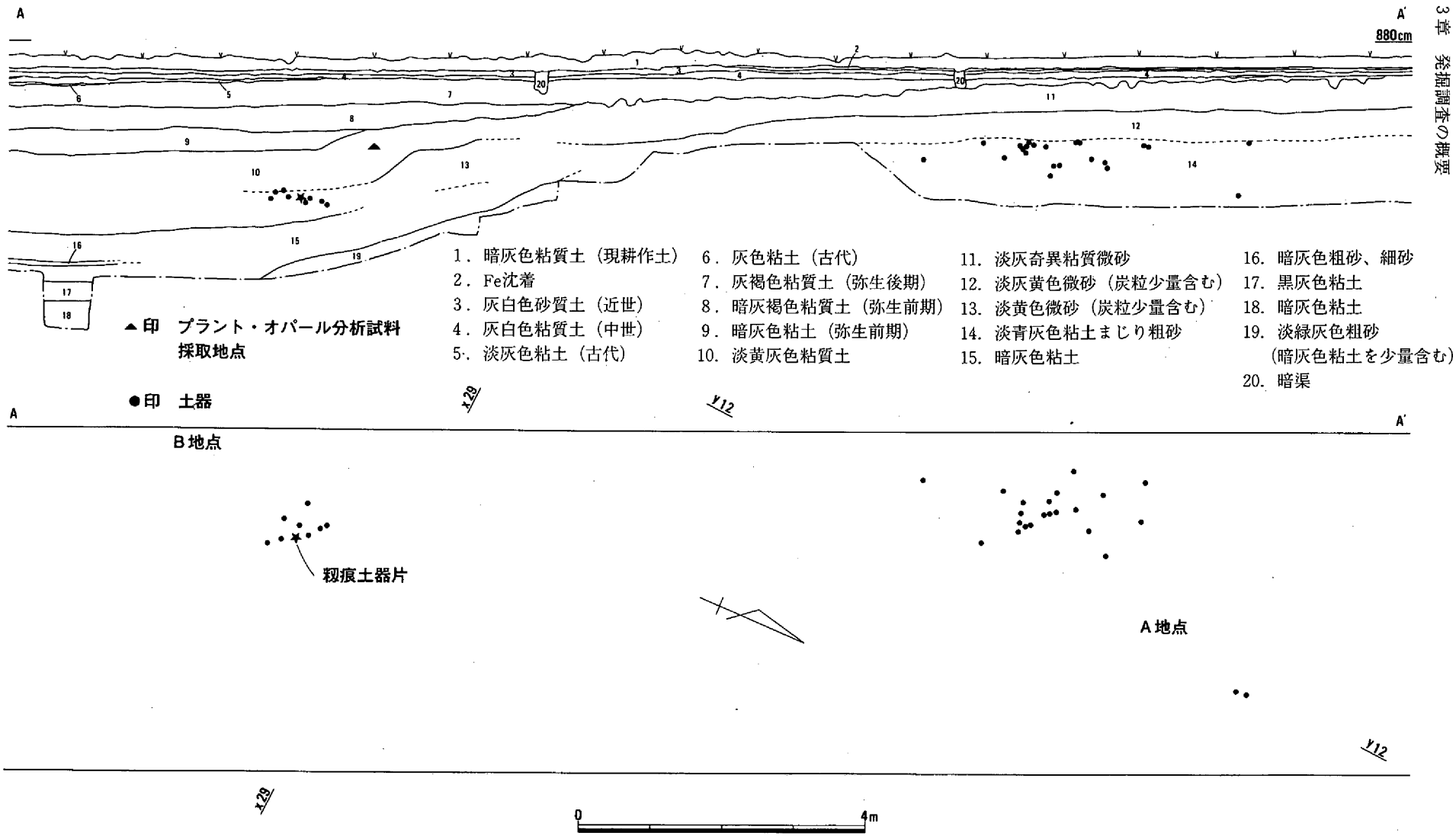
２．出土遺物

Ａ地点（第25～27図、図版３・37）

Ｈ15区の北半部で出土した土器をＡ地点出土の土器とする。土器は調査の最終段階で西壁の土層図作成のために側溝を深く掘り下げたところ、弥生時代の遺構面から約１ｍ下位で１点出土した。そのため、この土器の周辺を掘り下げたところ約６×４ｍの範囲の23か所で土器片を検出することができた。出土した土器の分布状況およびレベルは第26図に示したとおりである。土器は調査区の北西部に



第25図　縄文時代後期土器出土地点（1/1500）

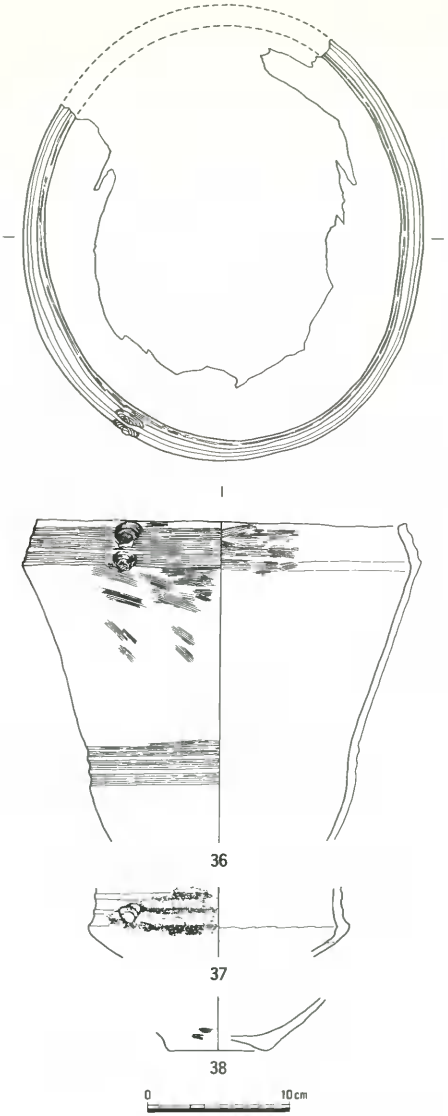


第26図　縄文時代後期土器出土状況（Ａ、Ｂ地点）(1/80)

まとまりがみられるが、出土レベルには同一個体であっても約30㎝の高低差がある。またこれらの土器は、土層の観察からは、何らかの遺構に伴っていたとは考えられなかった。出土した土器片は小片のものが多かったが、接合の結果２～３個体分にまとまることが明らかになった。第27図**36**は深鉢で底部を除いて全体の約3/4が復元できた。口縁部および胴部屈曲部には巻貝による凹線文を、そして口縁部には扇状圧痕が１か所認められる。また、胴部外面には巻貝条痕が一部認められた。**37・38**はいずれも小片である。これらの土器の時期は縄文時代後期後葉、瀬戸内編年の福田ＫⅢ式に併行するものと考えられる。

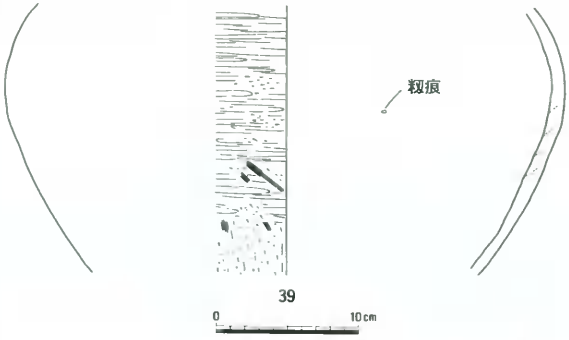
Ｂ地点（第25・26・28図、図版３・37）

Ｈ15区の南半部においてまとまって出土した土器をＢ地点出土の土器とする。土器は、弥生時代前期の溝５を検出後、その下層を掘り下げたところ９片の土器片が100×60㎝の範囲に20㎝以内の高低差をもって出土した。土層断面の観察によれば、これらの土器は南に向かって傾斜する斜面に堆積したものと考えられる。また、周辺には炭の小粒が認められた。出土した土器はすべて同一個体のものと考えられ、復元の結果第28図**39**のような形態であることが判明した。底部および口頸部は欠除しているが、胴部はやや肩の張る球形を呈する。外面は、下半部ではタテ方向のケズリのち一部に細い線条痕が認められる。上半部にはヨコ方向のケズリのち一部に斜めの細い線条痕が観察でき、最終的にはヨコ方向のミガキ調整が施されている。この土器の時期については県内ではあまり類例をみないも



第27図　縄文時代後期出土遺物（Ａ地点）（1/4）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
36	縄文土器	深鉢	口縁部、胴部巻貝凹線、巻貝扇状圧痕、胴部巻貝条痕のちナデ.	巻貝条痕のちナデ、ミガキ。			橙　7.5YR7/6
37	縄文土器	浅鉢	口縁部巻貝凹線のちナデ、巻貝扇状圧痕。	ナデ。			灰褐　7.5YR4/2
38	縄文土器	浅鉢	巻貝条痕のちミガキ？。	ナデ？。			灰黄褐　10YR4/2



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
39	縄文土器	深鉢	ケズリのちミガキ、条痕	籾痕			里 10YR6/1

第28図　縄文時代後期出土遺物（Ｂ地点）（1/4）

のであるが、福田ＫⅢ式前後と考えておきたい。

ところで、この土器の内面には籾の圧痕が確認できたが（巻頭図版２）、これについては後に述べたい（第４章第２節および付載１）。

Ｃ地点（第25・29～31図、図版４・37）

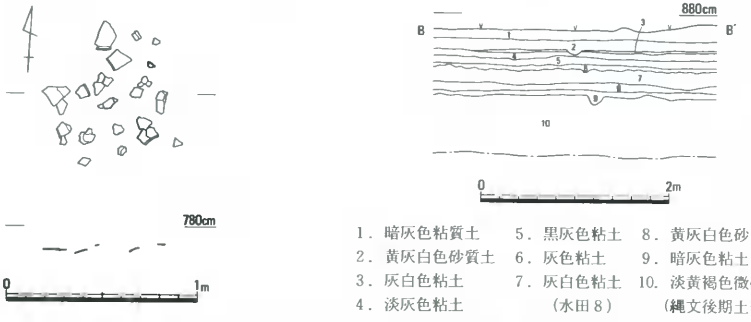
Ｈ16区の北半でまとまって出土した土器をＣ地点出土の土器とした。土器は第29図の10層中から出土し、その多くは図示したように土器溜り状を呈していた。出土した層位はＡ地点と同一のものと考えられる。第30図**40**の外面は巻貝条痕のちヨコ方向のミガキである。これらの土器の時期は、縄文時代後期末の福田ＫⅢ式併行期と考えられる。Ｃ地点では土器以外に石器も出土している。

Ｄ地点（第25・32図）

ＪＯ区の縄文時代河道２を掘り下げ中に出土した土器（第32図**46**）をＤ地点出土の土器とした。確認できた土器はこの１点のみであった。時期は縄文時代後期中葉と考えられる。

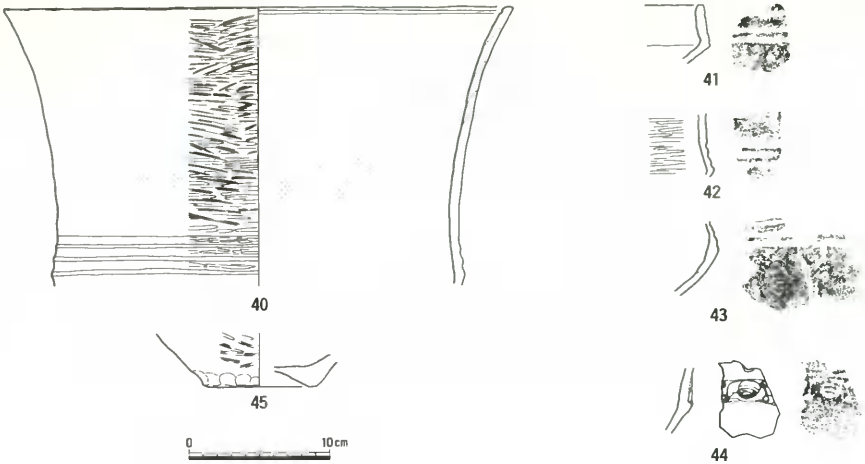
Ｅ地点（第25・32図）

ＨＦ区で出土した土器（第32図**47・48**）をＥ地点出土の土器とした。この土器は調査の最終段階で、縄文時代晩期以降の基盤層となっている黄色砂質土の状況を調べる目的で約１ｍ掘り下げたトレンチから２片のみ出土した。時期は縄文時代後期後葉、福田ＫⅢ式併行期と考えられる。



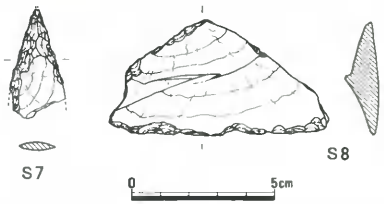
第29図　縄文時代後期遺物出土状況および出土層位（Ｃ地点）（1/30・1/60）

ところで、今回出土した縄文時代後期の土器のうち、36・39・40の土器片のプラント・オパール分析を宮崎大学農学部の藤原宏志教授に依頼したところ、36からはヨシ、39からはイネ・ススキ、40からはイネ・タケ・ヨシ・ジュズダマ・モロコシ・キビ族のプラント・オパールが検出されたとの報告を受けている（付載２参照）。　（平井）



挿図番号	種別	器種	特 外面	徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
40	縄文土器	深鉢	巻貝凹線のちミガキ。巻貝条痕のちミガキ。	ヨコミガキ？。口縁端部凹線。			褐灰　7.5YR4/1
41	縄文土器	浅鉢	口縁部巻貝凹線２本。				にぶい黄橙 10YR7/2
42	縄文土器	浅鉢	凹線、ミガキ。	ヨコミガキ。			灰黄褐　10YR7/2
43	縄文土器	浅鉢	口縁部巻貝凹線のちミガキ。胴部巻貝条痕のちミガキ。				灰黄褐　10YR5/2
44	縄文土器	浅鉢	巻貝扇状圧痕、刺突。				にぶい黄橙 10Y7/2
45	縄文土器	深鉢	巻貝条痕のちミガキ。	ミガキ？			黄灰　2.5Y5/1

第30図　縄文時代後期出土遺物（Ｃ地点１）（1/4）



第31図　縄文時代後期出土遺物（Ｃ地点２）（1/2）

挿図番号	種別	器種	特 外面	徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
46	縄文土器	浅鉢	縄文、押引き沈線。				オリーブ黒　5Y3/1
47	縄文土器	深鉢	巻貝条痕のちナデ　巻貝凹線、巻貝腹縁圧痕。	巻貝条痕のちナデ。			黒褐　10YR3/1
48	縄文土器	深鉢	巻貝条痕のちナデ。	巻貝条痕のちナデ。			黒褐　10YR3/1

第32図　縄文時代後期出土遺物（Ｄ・Ｅ地点）（1/4）

第３節　縄文時代晩期の遺構・遺物

１．概　　要

第33図はおもに弥生時代前期から中期前葉を中心とする地形概略図であるが、縄文時代晩期段階でも基本的に同様の地形であったと考えている。

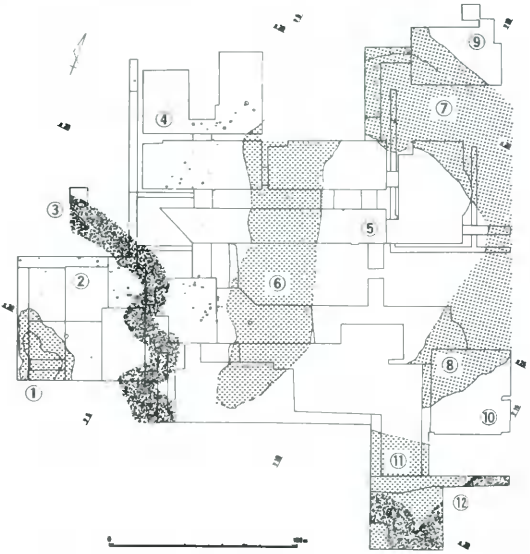
調査地の南西端には第１低位部が存在する。埋土中から出土した土器は弥生時代前期の土器が多いが、縄文時代晩期の土器も少量ではあるが含まれていること、および晩期の可能性のある土層が一部で確認されていることから、晩期段階においてもこの周辺が低位部になっていたと判断した。第２・３・４低位部についても同様に、範囲は不明ながらも晩期段階から低位部であったと考えている。

また河道１・２については晩期の遺物は多く出土したが、肩口の状況や底の確認については、調査区が狭いことや湧水などの問題から明確にすることはできなかった。

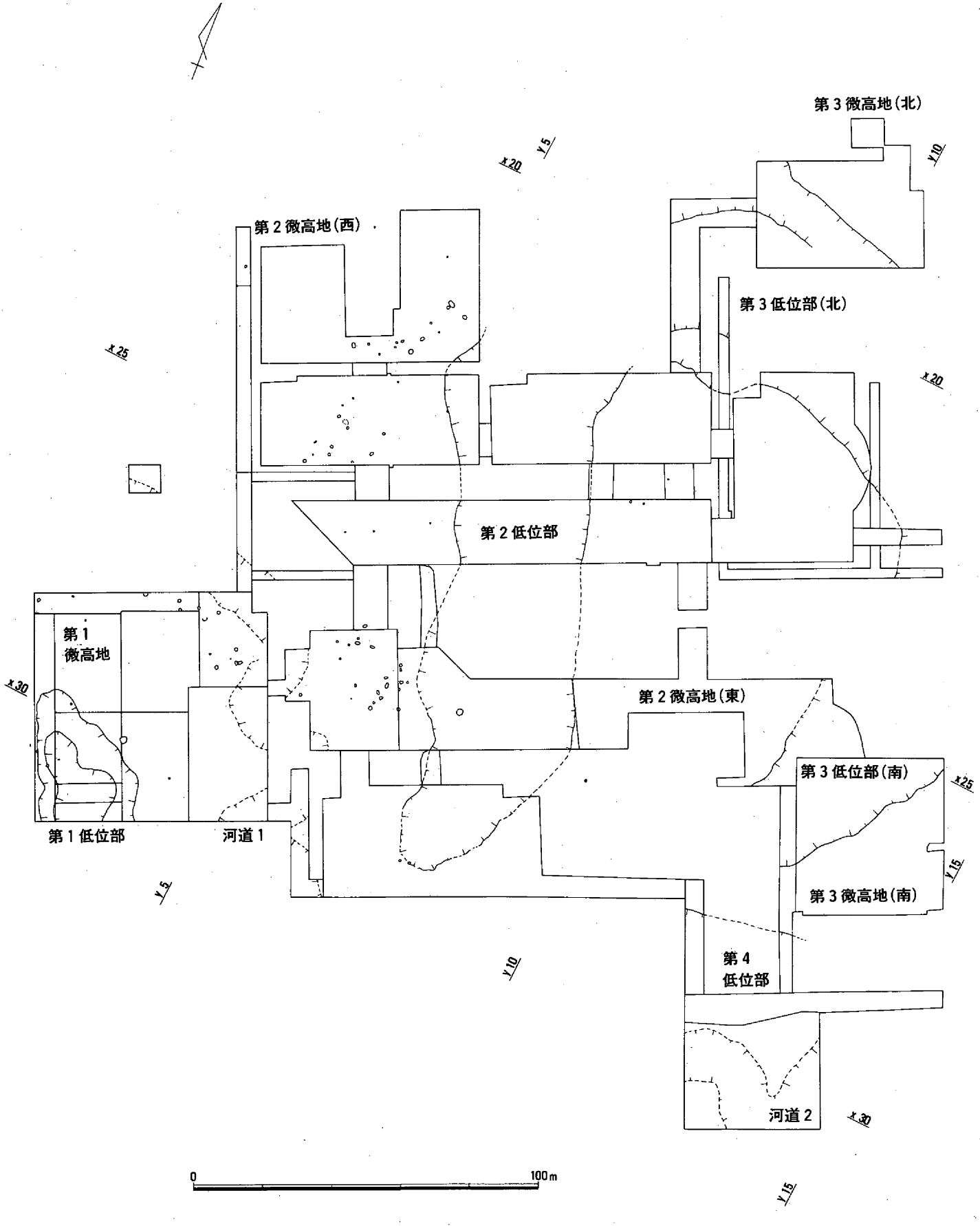
縄文時代晩期の遺構・遺物は大きく中葉段階と後葉の突帯文土器の段階とが確認できた。晩期後葉の遺構は土壙、火処、柱穴などが検出でき、竪穴住居や掘立柱建物は確認できなかった。これらは、河道１をはさんで第１微高地の北半部と第２微高地(西)にまとまりがみられる。土器からは時期的に大きな差は認められないので、この２つの地区の周辺に居住域があったものと考えられる。遺物は遺構に伴うものは少量で、まとまって出土したのはＫＹ１区の河道１の東肩部である。これらは東側に想定される居住域から廃棄されたものと考えられる。またこの河道から出土した遺物のなかには、刻目突帯文土器の深鉢の口縁部に孔列を施した土器があり、県内では初めての出土で注目される。

晩期中葉の遺物は、おもに晩期後葉以降の基盤層となっている黄色土中および河道２から出土している。ＤＥ区では土器溜り状を呈し、石器も出土している。土器が多く出土したのは河道２で、完形に復元できたものもあった。また河道２からはドングリやトチなどの種子も多く出土している。

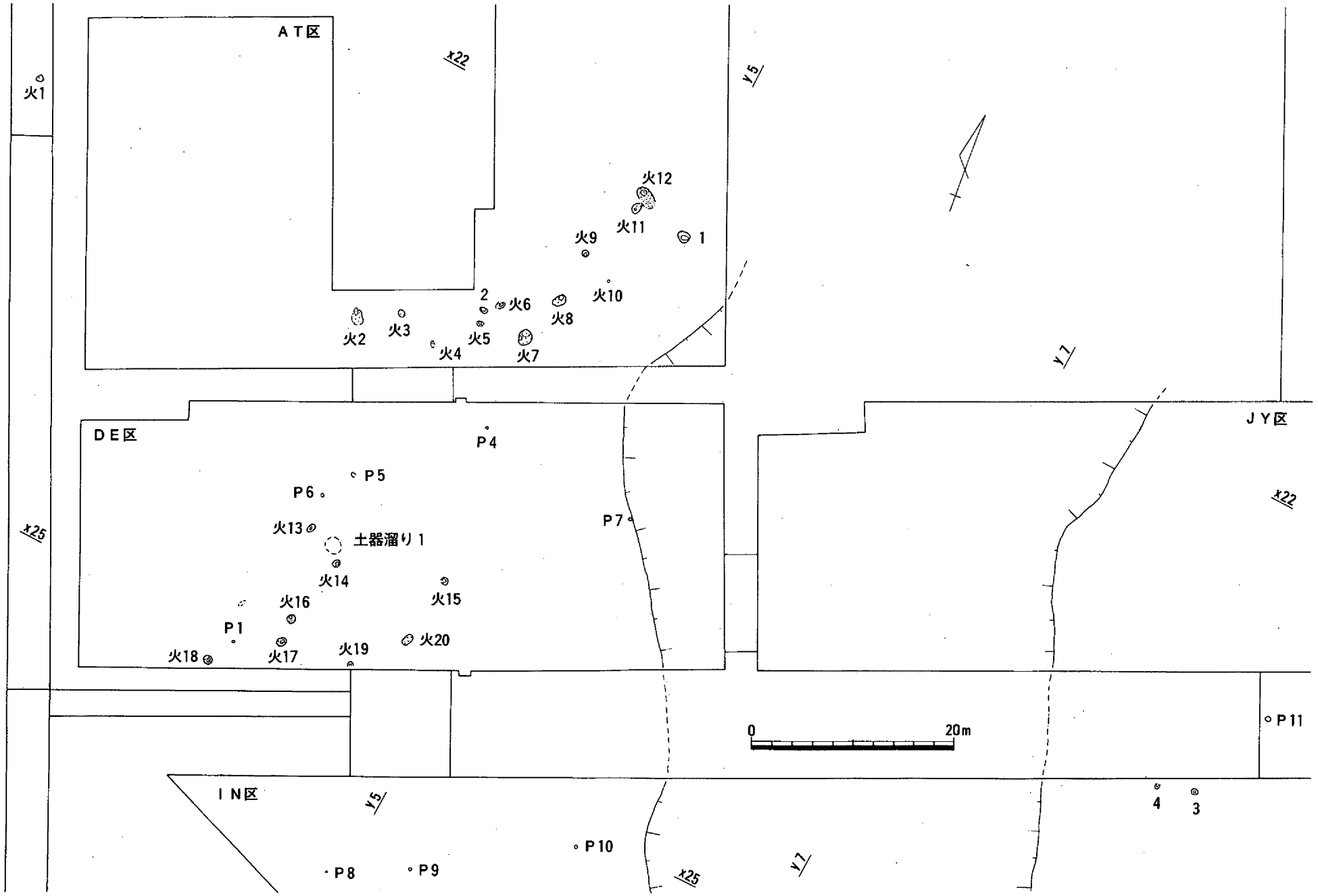
遺構としては、火処が第１微高地の北半部と第２微高地(西)の北半部の24か所において検出できた。土器との共伴例はないが、検出面などからこの時期のものと考えられ、周辺に居住域が想定できるのではなかろうか。(平井)



第33図　縄文時代晩期地形概略図（1/3000）

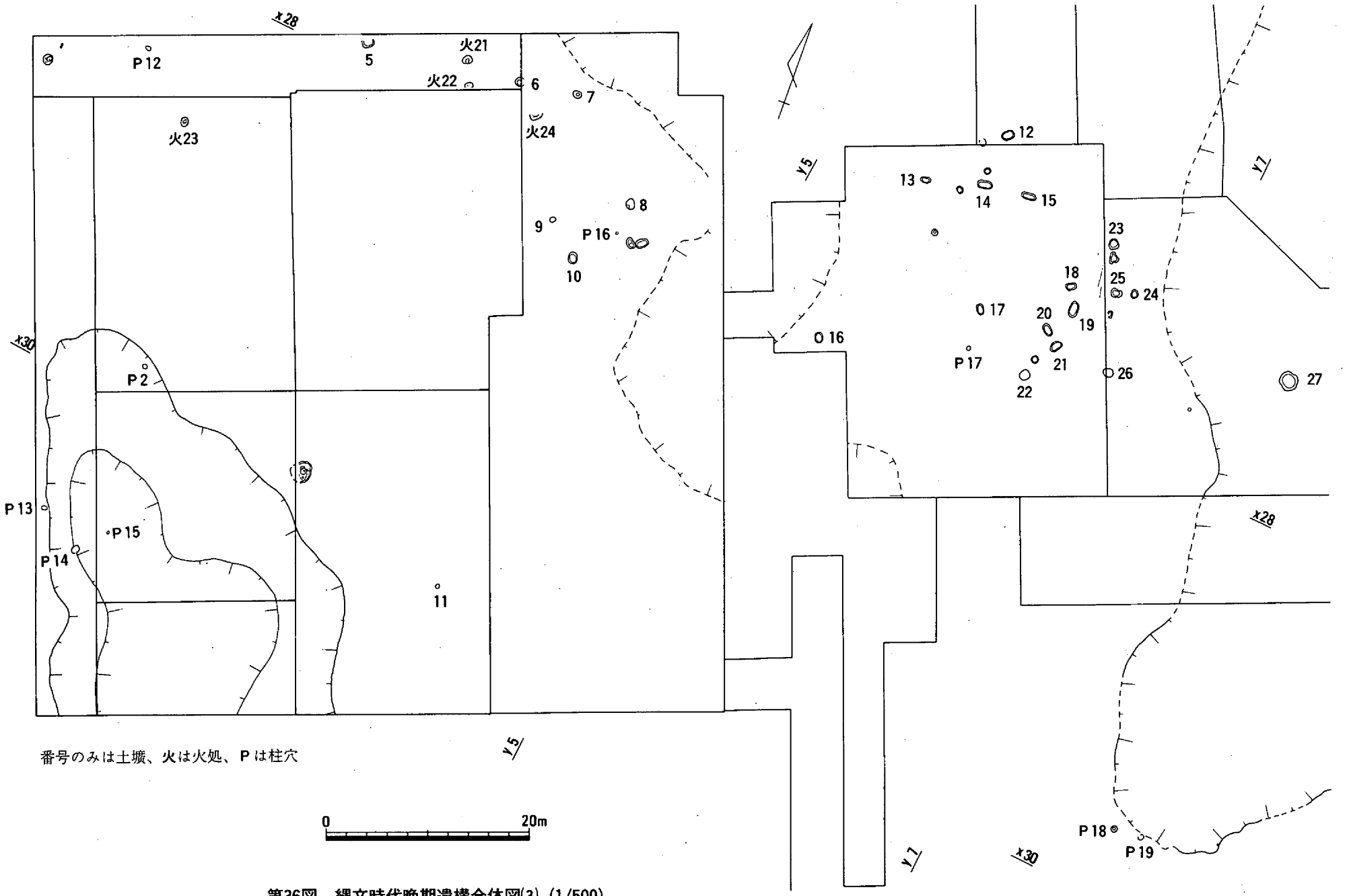


第34図　縄文時代晩期遺構全体図(1)（1/1500）



番号のみは土壙、火は火処、Pは柱穴

第35図　縄文時代晩期遺構全体図(2)（1/500）



番号のみは土壙、火は火処、Pは柱穴

第36図　縄文時代晩期遺構全体図(3)（1/500）

２．遺構・遺物

(1) 土　　壙

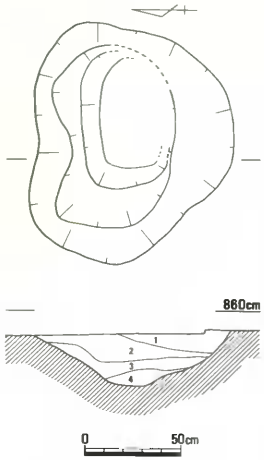
土壙１（第37図）

第２微高地(西)のＡＴ区南東部に位置し、土壙２との距離20ｍを測り、ＤＥ区から帯状に続く火処集中部の北端にあたる。

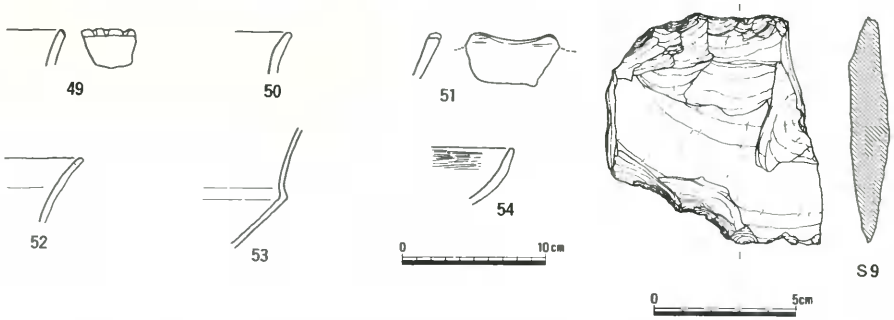
検出された平面形は不整楕円形を呈し、長径129㎝、短径102㎝、深さ30㎝を測る。部分的に２～３段に掘られた断面形は椀形を呈し、海抜8.2ｍの底面はほぼ平坦で、平面形は長径58㎝、短径30㎝の楕円形である。

埋土のうち、２～４層には炭片が含まれており、出土遺物には、縄文土器の深鉢**49・52**、浅鉢**50・51・53・54**の他に、サヌカイト製の石器**Ｓ９**がある。

時期は、出土遺物から縄文時代晩期中葉に比定される。　　（光永）



1．灰黄茶色土
2．暗灰茶褐色土
3．暗黄茶褐色土
4．暗灰茶色土



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
49	縄文土器	深鉢					灰白　2.5Y8/2
50	縄文土器	浅鉢					にぶい黄橙　10YR7/3
51	縄文土器	浅鉢	突起部分。	ナデ？。			灰白　2.5Y7/1
52	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。				にぶい黄橙　10YR7/2
53	縄文土器	浅鉢		ナデ？。			褐灰　10YR6/1
54	縄文土器	浅鉢		ミガキ。			灰白　10YR8/1

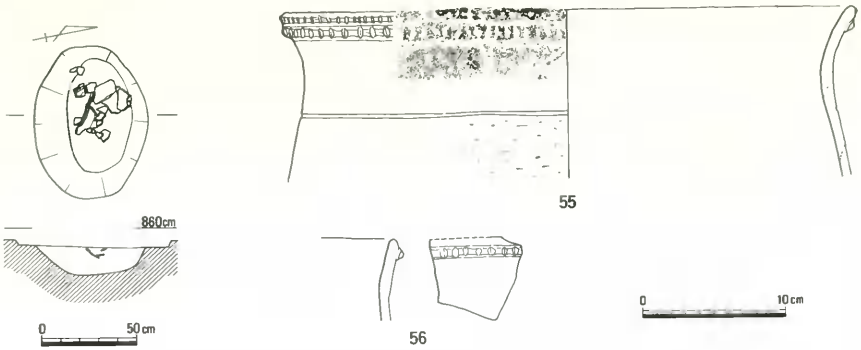
第37図　土壙１(1/30)・出土遺物（1/4・1/3）

土壙２（第38図）

第２微高地(西)のＡＴ区南中央部に位置し、火処５・６が近接して所在する。

平面形は82×60㎝の楕円形で、深さ15㎝の断面形は皿形を呈する。海抜8.35ｍでほぼ平坦な底面は平面形楕円形で、61×34㎝を測る。

縄文土器の深鉢**55・56**の出土により、縄文時代晩期後葉に比定される。　　（光永）

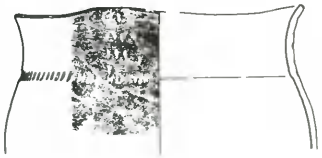


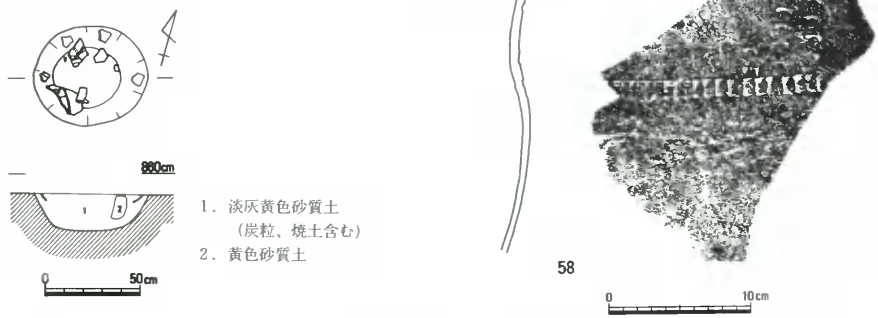
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
55	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部ケズリ？。	ナデ？。	米粒形	米粒形	褐灰　7.5YR5/1
56	縄文土器	深鉢			？	菱形	褐灰　10YR5/1

第38図　土壙２(1/30)・出土遺物（1/4）

土壙３（第39図、図版４）

第２微高地(東)に位置するＩＮ区で検出された土壙である。平面形は60×53cmのほぼ円形を呈し、深さは約20cmを測る。埋土は淡灰黄色砂質土で、炭粒、焼土粒および黄色砂質土ブロックを含んでいる。埋土中からは２個体分と考えられる土器片が少量出土している。**58**の土器には縦に３列、横に１列の半截竹管状の工具による刺突文が施されている。これらの土器から時期は縄文時代晩期中葉と考えられる。　（平井）





挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
57	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕のちナデ。胴部ケズリ。	波状口縁。	細長形		にぶい橙　7.5YR6/4
58	縄文土器	深鉢	頸部ナデ、刺突文　胴部ケズリ	ナデ。			灰白　10YR7/1

第39図　土壙３(1/30)・出土遺物（1/4）

土壙４（第40図）

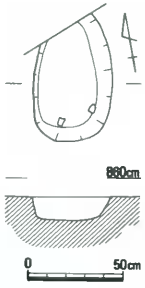
ＩＮ区の土壙３の西に位置する。平面形は、長楕円形を呈し、北端部は側溝で切られている。深さは13cm残存しており、埋土は土壙３と同じく炭粒や焼土粒を含む淡灰黄色砂質土である。埋土中からは土器の小片が出土しており、土器は土壙３と同じく縄文時代晩期中葉と考えられる。　（平井）

土壙５（第41図）

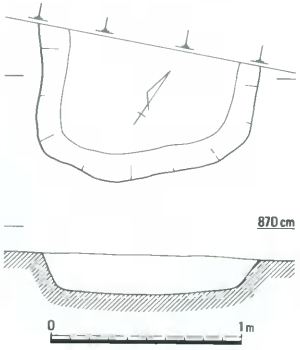
第１微高地の北部に位置する。平面形は隅丸方形を呈するが、北側が調査区域外へのびているため全容はわからない。現状では東西120cm、南北55cm以上、深さ30cmを測る。埋土中からは炭片しか出土していないが、検出中に周辺部から縄文時代晩期の土器片が出土したことなどから縄文時代晩期と推定した。　（正岡）

土壙６（第42図）

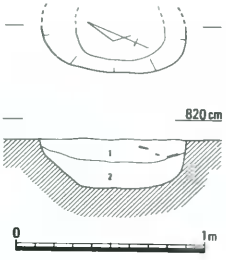
第１微高地の北東部、河道１の西肩口近くに位置する。側溝により東半分を切られているが楕円形を呈すると思われる。残存部で長さ65cm、深さ26cmを測る。埋土は２層に分かれ、下層には炭を多く含んでいた。遺物は少量の土器片のみだが、縄文時代晩期に属すると考えられる。　（久保）



第40図　土壙４（1/30）



第41図　土壙５（1/30）



１．灰黄褐色粘質土
２．茶灰色粘質土（炭含む）

第42図　土壙６（1/30）

土壙７（第43・44図）

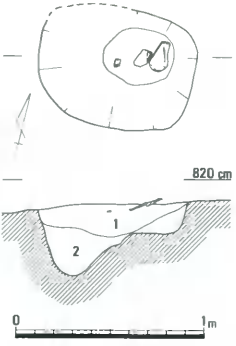
土壙６の西に位置する。83×63cmの楕円形を呈し、深さ19cmを測る。底面より浮いた状態で大形の剝片石器が２点出土しているが、このような出土状況は百間川沢田遺跡の「石器集積土壙」のありかたに類例を求めることができる。土器が出土していないが、埋土の状況により縄文時代晩期に属すると考えられる。　（久保）

土壙８（第45図）

土壙７の南東に位置する。96×91cmの円形を呈し、深さは24cmを測る。北壁下半はオーバーハングしており、底面も凹凸がある。埋土には炭を多く含んでいた。土器細片が少量出土しており、縄文時代晩期に属すると考えられる。　（久保）

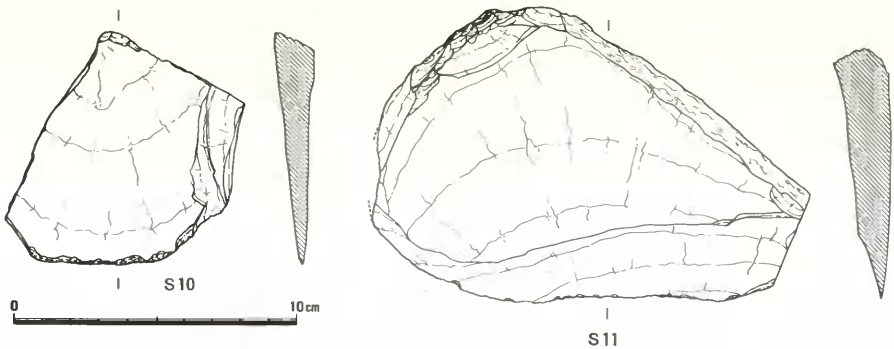
土壙９（第46図）

土壙８の西に位置する。64×52cmの円形を呈し、深さ14cmを測る。

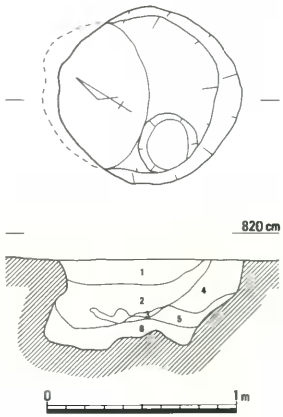


１．黄褐色粘質土　２．灰黄色粘質細砂

第43図　土壙７（1/30）



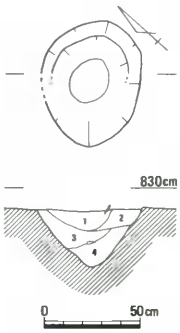
第44図　土壙７出土遺物（1/2）

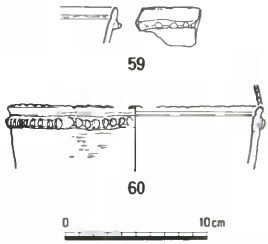


1．灰黄褐色粘質土
2．黄灰褐色粘質土（炭多く含む）
3．炭層
4．黄灰褐色粘質微砂
5．灰黄色粘質土
6．褐灰色粘質土（炭若干含む）

第45図　土壙８（1/30）

59・60ともに口縁から約１㎝下がったところに突帯をもつ深鉢で、口唇部と突帯上に刻みを施している。**59**の口唇部は丸くおさめているが**60**は面を持つうえ外面にはアルカ属貝条痕を残すなど突帯文土器のなかでも古い要素をとどめている。縄文時代晩期後葉に属すると考えられる。（久保）





1．黄灰褐色粘質土（炭若干含む）
2．黄灰色粘質土
3．灰黄褐色粘質土（炭多く含む）
4．褐灰色粘質土（炭多く含む）

第46図　土壙９（1/30）・出土遺物（1/4）

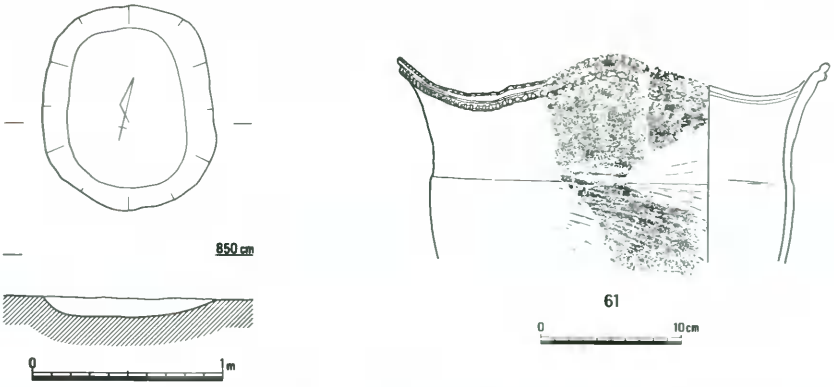
挿図番号	種別	器種	外面	内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
			粗	微			
59	縄文上器	深鉢		沈線、ナデ。	D形	菱形	にぶい褐 7.5YR6/3
60	縄文上器	深鉢	アルカ属貝条痕、ナデ。	沈線、ナデ。	菱形	D形	褐灰 7.5YR4/1

土壙10（第47図）

土壙９の南東に位置する。107×89㎝の楕円形を呈し、深さ５㎝を測る。土器は土壙上面で検出された。灰褐色粘質土で埋没していた。口縁部からやや下がったところに刻目突帯を付すが体部は板状工具の角を利用して段をつけて境界としている。縄文時代晩期後葉に属すると考えられる。（久保）

土壙11（第48図、図版４）

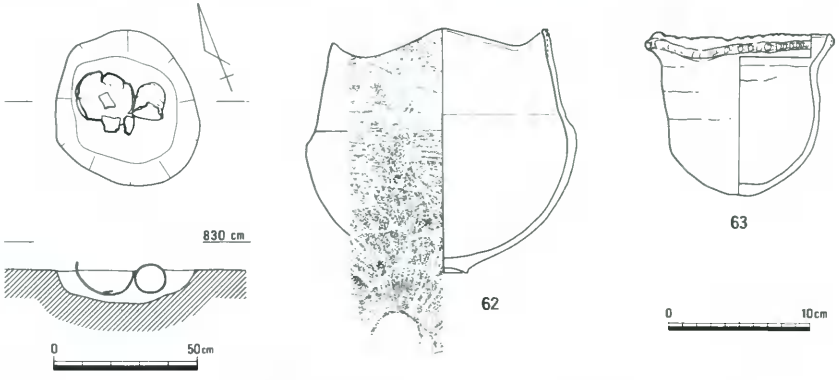
第１微高地南半中央部、土壙10の南に位置する。平面上場は35×49㎝の円形に近いが、底面では方形を呈する。暗黄褐色粘質細砂で埋没しており、検出面からの深さは12㎝を測る。土壙内からほぼ完形に近い土器が２点出土している。**62**は波状口縁の深鉢で、体部上半はナデもしくはミガキによって



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
61	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕、ナデ　胴部ケズリ	頸部アルカ属貝条痕、ナデ　胴部ナデ	菱形？	菱形	灰黄褐　10YR6/2

第47図　土壙10（1/30）・出土遺物（1/4）

平滑に仕上げ、下半はアルカ属貝条痕によるケズリを施している。底部には小さな凹み底を有する。**63**も深鉢で、口底部および突帯上に浅く不規則な刻みを施している。口縁上端は水平でなく、体部にも粘土紐接合部の凹凸を残している。底部は明確につくりださず、わずかに押しくぼめているのみである。これらは土壙中央に並んだ状態で出土しており、人為的に据え置かれたものと推察される。縄文時代晩期後葉に属すると考えられる。　（久保）

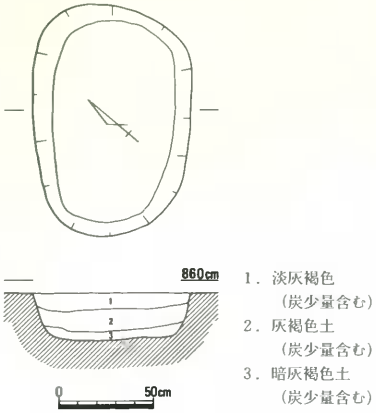


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
62	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部アルカ属貝条痕。煤。	胴部アルカ属貝条痕のちナデ			黒褐　2.5Y3/1
63	縄文土器	深鉢	ケズリのちナデ	ナデ？	菱形？	D形	灰白　[illegible]

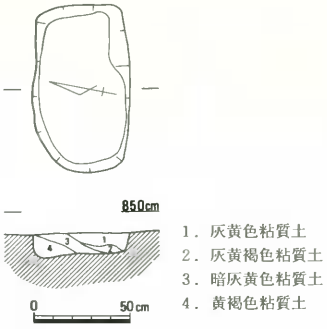
第48図　土壙11（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙12（第49図）

第２微高地（西）のＫ９区南端に位置し、土壙14との距離4.4ｍを測る。平面形は114×84cmの楕円形で、深さ35cmの断面形は矩形に近い。海抜8.28ｍでほぼ平坦な底面は、107×65cmの楕円形である。遺物は出土していないが、形状から後述する縄文時代晩期の土壙群に加えられる。　（光永）



第49図　土壙12（1/30）



第50図　土壙13（1/30）

土壙13（第50図）

第２微高地(西)のＫＹ１区で、土壙14の西4.5ｍに所在する。平面形は、長軸を土壙14・15と同様に東西方向においた89×51㎝の隅丸長方形で、深さ13㎝の断面形は矩形を呈する。海抜8.26ｍで平坦な底面の規模は78×44㎝を測り、遺物はないが縄文時代晩期の土壙群を構成する。（光永）

土壙14（第51図）

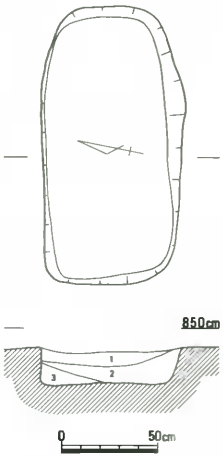
ＫＹ１区で、土壙13・15の中間に位置し、後者との距離2.8ｍを測る。平面形は148×76㎝の隅丸長方形で、深さ20㎝の断面形は矩形を呈する。海抜8.2ｍの平坦な底面の規模は136×62㎝を測る。突帯のついた縄文土器の深鉢**64**が出土し、これにより時期は縄文時代晩期後葉に求められる。（光永）

土壙15（第52図）

ＫＹ１区北東部に位置し、土壙23との距離8.5ｍを測る。検出された平面形は隅丸長方形を呈し、長軸長140㎝、短軸長59㎝、深さ10㎝を測る。断面形は皿形で、海抜8.42ｍの底面の規模は119×44㎝である。遺物は出土していないが、形状と位置から土壙14と同時期の可能性が高い。（光永）

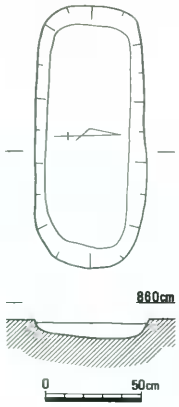
土壙16（第53図）

ＫＹ１区西端で、河道１への肩口に位置し、土壙群とは14ｍ以上離れる。平面形は100×73㎝の楕円形で、深さ29㎝の断面形は矩形に近いが、海抜7.35ｍの底面は平坦ではない。遺物は、突帯のつく縄文土器の深鉢**65**・**66**が出土しており、時期は縄文時代晩期後葉に求められる。（光永）

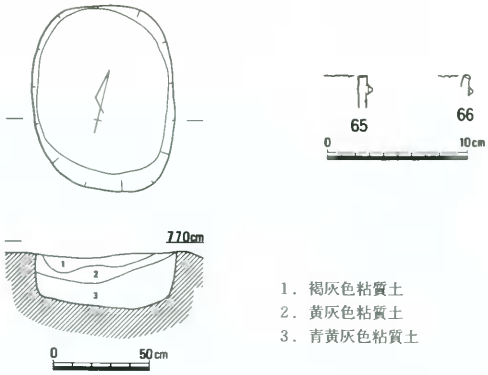


第51図　土壙14（1/30）・出土遺物（1/4）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
64	縄文土器	深鉢	ナデ	ナデ	斐形	斐形	にぶい黄橙 10YR7/3



第52図　土壙15（1/30）



第53図　土壙16（1/30）・出土遺物（1/4）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
65	縄文土器	深鉢	ナデ。突帯の下に刺突文。	ナデ。	D形	菱形	褐灰　7.5YR5/1
66	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	菱形	菱形	灰黄褐　10YR4/2

土壙17（第54図）

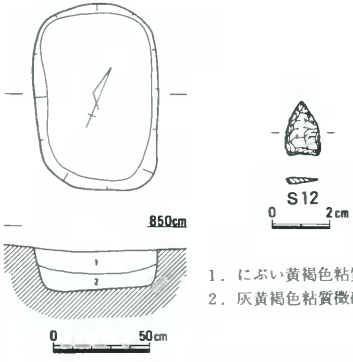
ＫＹ１区中央部に位置し、土壙20との距離5.8ｍを測る。平面形は100×65㎝の隅丸長方形で、深さ23㎝の断面形は矩形を呈する。海抜8.17ｍでほぼ平坦な底面の規模は、89×57㎝である。出土遺物にはサヌカイト製の石鏃**Ｓ12**があり、縄文時代晩期の土壙群を構成する。（光永）

土壙18（第55図）

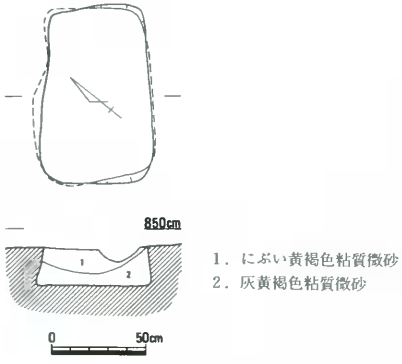
ＫＹ１区東辺中央部に位置し、土壙19との距離１ｍと近い。平面形は94×60㎝の長方形で、深さ19㎝の断面形は台形を呈する。海抜8.2ｍで平坦な底面の規模は93×64㎝を測る。遺物は出土していないが、形状から縄文時代晩期の土壙群に加えうる。（光永）

土壙19（第56図）

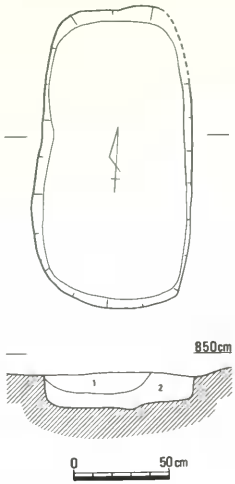
ＫＹ１区中央東寄りで土壙18の南に位置し、土壙20との距離1.3ｍを測る。平面形は162×85㎝の隅

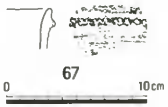


第54図　土壙17（1/30）・出土遺物（1/2）



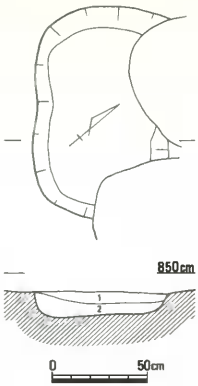
第55図　土壙18（1/30）





1．にぶい黄褐色粘質微砂
2．灰黄褐色粘質微砂

第56図　土壙19（1/30）・出土遺物（1/4）



1．にぶい黄褐色粘質微砂
2．灰黄褐色粘質微砂

第57図　土壙20（1/30）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
67	縄文土器	深鉢	アルカ風斜条痕。	ナデ？	？	菱形	褐灰　7.5YR4/1

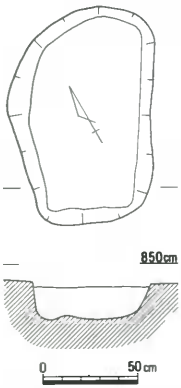
丸長方形で、深さ19cmの断面形は矩形を呈する。海抜8.21ｍの底面はほぼ平坦で、149×76cmの隅丸長方形である。縄文土器の深鉢67が出土しており、縄文時代晩期後葉に比定される。　（光永）

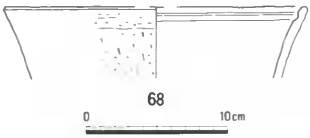
土壙20（第57図）

ＫＹ１区で、土壙21との距離0.6ｍと近接する。北東部を柵列状遺構３に削られているが、平面形は113×71cmの隅丸長方形に復元され、深さ13cmの断面形は皿形を呈する。海抜8.26ｍでほぼ平坦な底面の規模は94×57cmを測る。縄文時代晩期後葉の土壙群に加えうる。　（光永）

土壙21（第58図）

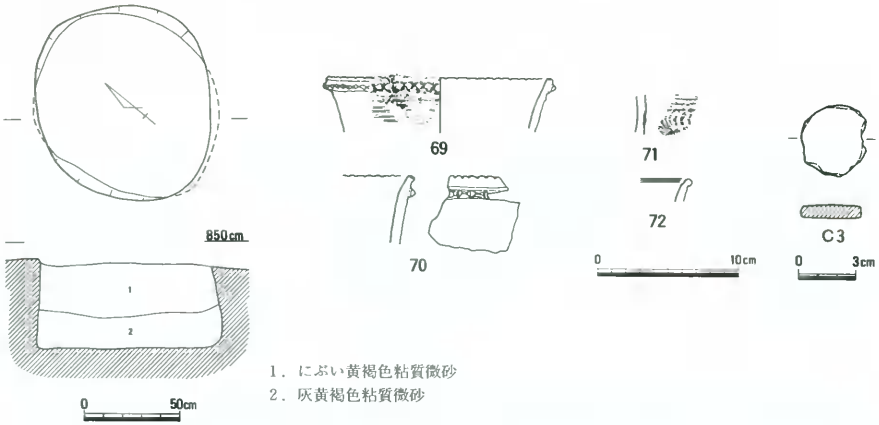
ＫＹ１区で、土壙20と近接しながらも長軸方向を直交させている。平面形は115×76cmの不整楕円





第58図　土壙21（1/30）・出土遺物（1/4）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
68	縄文土器	浅鉢	ケズリ	口縁部凹線			灰黄褐　10YR5/2



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
69	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	細長形？	楕形	黒褐　10YR3/2
70	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ？。	ナデ。	Ｄ形	Ｄ形	褐灰　10YR6/1
71	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ。Ｃ字刺突文。	ナデ。			にぶい黄橙　10YR7/2
72	縄文土器	浅鉢	沈線。	沈線。			黄灰　2.5Y6/1

第59図　土壙22（1/30）・出土遺物（1/4・1/3）

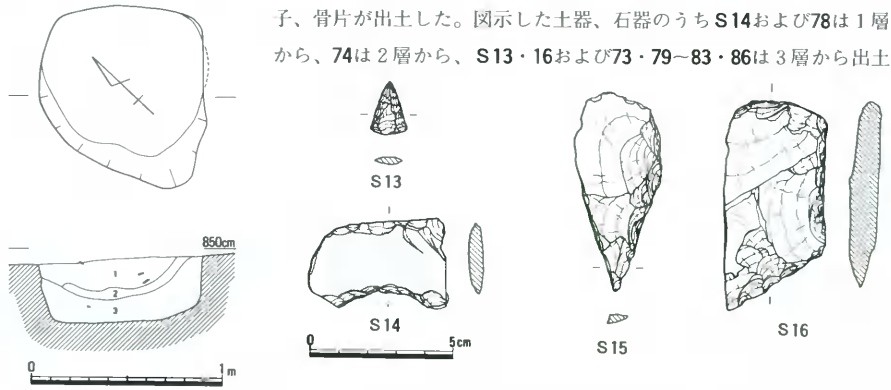
形で、深さ20cmの断面形は皿形を呈する。海抜8.21ｍの底面は100×59cmの規模である。縄文土器の粗製浅鉢**68**が出土しており、時期は縄文時代晩期後葉に求められる。　（光永）

土壙22（第59図）

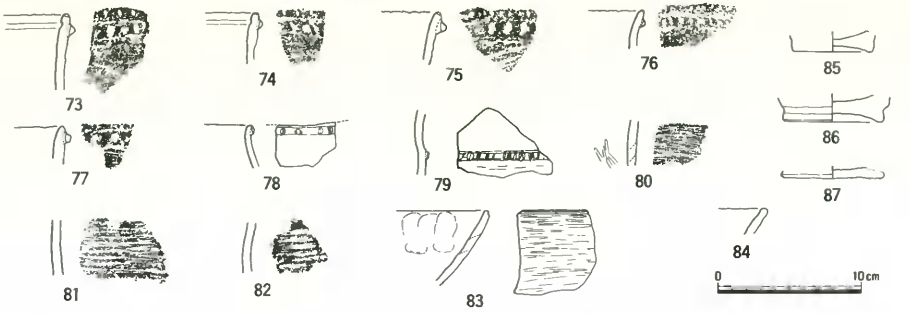
ＫＹ１区で、土壙21の南2.9ｍに位置する。平面形は105×91cmの楕円形で、深さ48cmの断面形は矩形から逆台形を呈する。海抜7.93ｍの底面は、104×95cmの規模を測る。縄文土器の小形深鉢**69**、深鉢**70・71**、浅鉢**72**、円板状土製品**Ｃ３**が出土しており、縄文時代晩期後葉に比定される。　（光永）

土壙23（第60・61図、図版５）

ＫＹ２区の北西部で検出された土壙である。平面形は107×93cmの不整円形を呈し、深さは33cmを測る。断面形は台形状で、一部袋状を呈していた。埋土は３層に分離でき、土器、石器および炭化種子、骨片が出土した。図示した土器、石器のうち**Ｓ14**および**78**は１層から、**74**は２層から、**Ｓ13・16**および**73・79～83・86**は３層から出土



第60図　土壙23（1/30）・出土遺物(1)（1/2）



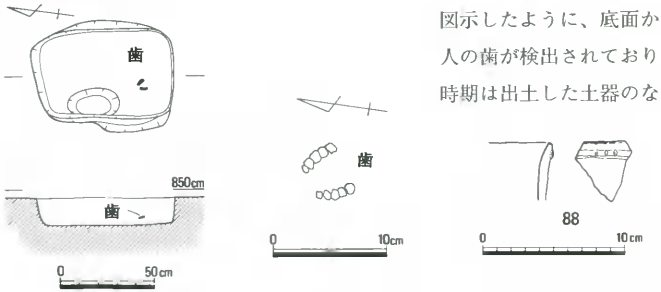
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
73	縄文土器	深鉢	ケズリのちナデ？。	沈線。	菱形？	菱形	灰白　10YR8/2
74	縄文土器	深鉢		沈線。	？	？	灰白　2.5Y8/2
75	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	細長形	菱形	にぶい黄橙　10YR6/3
76	縄文土器	深鉢			細長形	細長形	灰黄褐　10YR4/2
77	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ？。			菱形	暗灰黄　2.5Y5/2
78	縄文土器	浅鉢？	波状口縁。	ナデ。		米粒形	灰褐　7.5YR6/2
79	縄文土器	深鉢	頸部ナデ？。胴部ケズリ。			米粒形	灰黄褐　10YR6/2
80	縄文土器	深鉢	条痕。	ミガキ？。			にぶい黄橙　10YR7/2
81	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。			褐灰　10YR6/1
82	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。			橙　5YR6/6
83	縄文土器	浅鉢	ミガキ。口唇部赤色顔料。	ナデのちミガキ。			灰褐　7.5YR5/2
84	縄文土器	浅鉢	ナデ。	ナデ。			オリーブ黒　5Y3/1
85	縄文土器	深鉢	ナデ。	ミガキ？。			灰黄褐　10YR6/2
86	縄文土器	深鉢	ナデ。				灰白　10YR8/2
87	縄文土器	深鉢	底部ミガキ。	ナデ。			黄灰　2.5Y4/1

第61図　土壙23出土遺物(2)（1/4）

している。このうち**83**の土器の口縁端部外面には、わずかに赤色顔料が付着しており、分析の結果ベンガラとの報告を受けている（付載参照）。時期は縄文時代晩期後葉である。（平井）

土壙24（第62図）

ＫＹ２区の北西部、土壙23の南東部において検出した。平面形は一部肩が崩れているものの、本来73×46cm前後の長方形を呈していたものと考えられる。深さは15cmが残存しており、壁はほぼ垂直で、底面もほぼ水平である。埋土は炭粒が少量混じった黄褐灰色粘質土である。この土壙の埋土中からは図示したように、底面から約４cmの高さの位置で人の歯が検出されており、土壙墓と考えられる。時期は出土した土器のなかに一部弥生時代前期かとも思われる小片もあるが、一応縄文時代晩期後葉と考えておきたい。（平井）

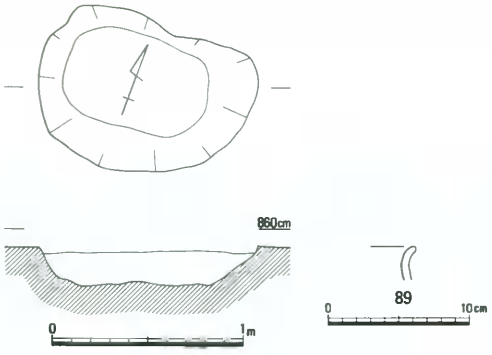


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
88	縄文土器	深鉢	ナデ。波状口縁。	ナデ？	米粒形	米粒形	褐　7.5YR4/3

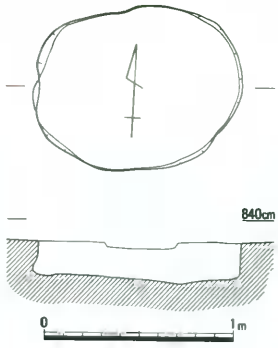
第62図　土壙24（1/30・1/5）・出土遺物（1/4）

土壙25（第63図、図版５）

ＫＹ２区の北西部、土壙24の西で検出された。平面形は114×85cmの不整楕円形を呈し、深さは約



第63図　土壙25（1/30）・出土遺物（1/4）



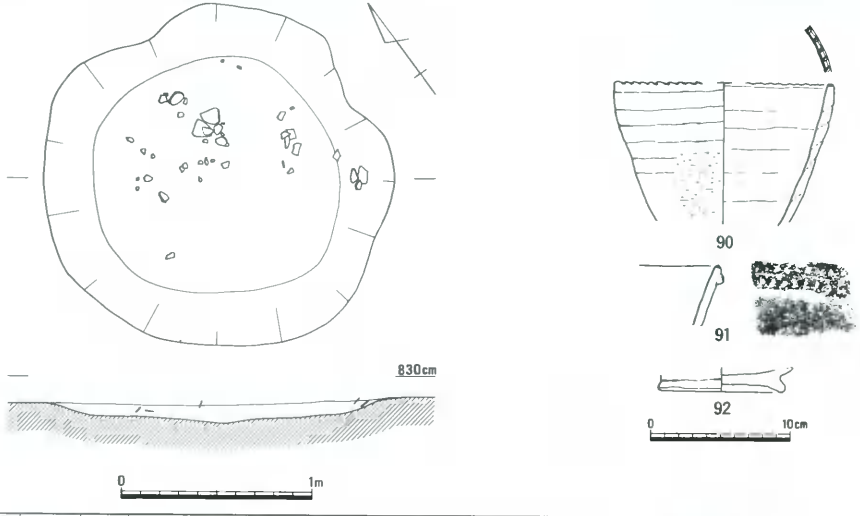
第64図　土壙26（1/30）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
89	縄文土器	浅鉢	ミガキ。				褐灰　10YR5/1

20cmが残存していた。埋土は、炭粒を含む黄灰色粘質土である。埋土中からは土器片および骨片、サヌカイト片が出土した。出土した土器片に一部弥生時代前期らしいものもあるが、時期は一応縄文時代晩期後葉と考えておきたい。（平井）

土壙26（第64図）

ＫＹ２区の西端部に位置する。平面形は107×87の不整楕円形で、深さは約20cm残存していた。西側の壁は一部袋状を呈している。埋土は黄褐灰色粘質土で、土器片が少量出土している。時期は明確ではないが縄文時代晩期後葉と考えておきたい。（平井）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
90	縄文土器	深鉢	ケズリ。粘土紐痕明瞭。		米粒形		にぶい黄橙　10YR7/2
91	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ？。	米粒形	米粒形	灰白　10YR8/2
92	縄文土器	深鉢	底部ケズリのち[illegible]。	ナデ。			灰白　7.5YR8/2

第65図　土壙27（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙27（第65図）

ＫＹ２区の中央部の第２低位部で検出した。平面形は184×152㎝の不整円形で、深さは約10㎝が残存しているにすぎない。埋土は黄褐灰色粘質土である。埋土中からは図示したような突帯文土器片が出土しており、時期は縄文時代晩期後葉と考えられる。（平井）

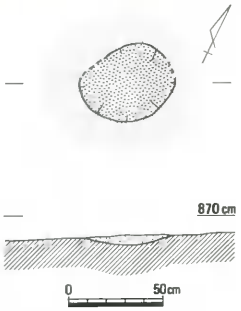
(2) 火　　処

火処１～12（第35図）

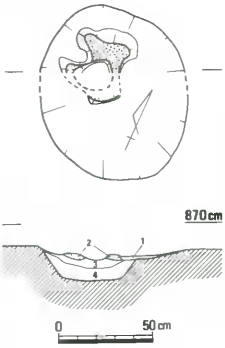
第２微高地(西)のＡＴ区南東部において、南北方向30ｍ、東西12ｍ程の範囲内で11基の火処が検出された。相互の距離は最大で６ｍ程度である。焼土粒の広がる範囲が径20～130㎝程度で、特に強く熱影響を受けたと考えられる部分でみると、径50㎝以下であり、厚さも薄く、下部に掘り込みを伴うものはない。Ｈ１区の火処１も遺存状況は同程度である。（光永）

火処13～20（第35・66～69図、図版５）

第２微高地(西)の中央部、ＤＥ区に形成された一群である。弥生時代前期遺構調査後、その基盤である黄色土層を10㎝前後掘り下げた段階で検出された。この層内からは縄文時代晩期後葉の土器が出土している。火処の形態は様々であるが50㎝から１ｍの範囲に被熱面と炭・焼土の分布が認められ、炉として機能していたと考えられる。被熱面の海抜高は8.5～8.6ｍ前後で、火処の状況は断面観察の結果、１）被熱部分のみを残すもの（火処17）、２）皿状の掘り方をもち、その上面が著しく被熱しているもの（火処13～15・18・19）、３）台形の掘り方をもち、その上面が著しく被熱しているもの、の３通りに分類することができる。この中で２）の下層については被熱影響部分とも考えられ、１）と同じく掘り方を持たないものかもしれないが、３）については明らかに人為的に掘りくぼめられたものと推察される。時期については遺物を伴わないので特定することは困難であるが、検出状況から弥生時代前期よりは古いといえる。また、後述する土器溜り１は、火処検出面と同じレベルで検出されており、同時期に形成された可能性も考えられる。（久保）

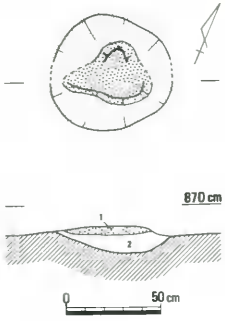


第66図　火処17（1/30）



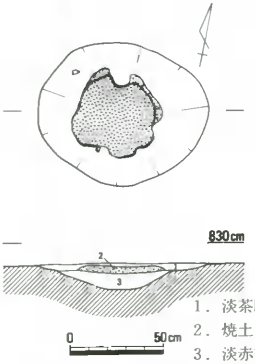
1．淡黄灰色砂質土
2．焼土
3．灰褐色砂質土（被熱影響面？）
4．淡黄灰褐色砂質土
（焼土、炭含む）

第69図　火処16（1/30）



1．焼土　　2．淡赤黄褐色砂質土

第67図　火処14（1/30）



1．淡茶灰褐色砂質土
2．焼土
3．淡赤褐色砂質土
（被熱影響面）

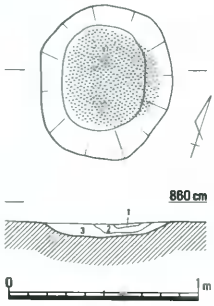
第68図　火処18（1/30）

火処21～23（第36・70図）

第１微高地の北端に位置する。火処13～20と同じく弥生時代の遺構の基盤となっている層の掘り下げ中に検出された。検出状況や規模、被熱面の海抜高に差は認められず、その性格や形成時期にも差はないと考えられる。前項の分類基準に合わせると21・22は２）に、23は３）に類する。　（久保）

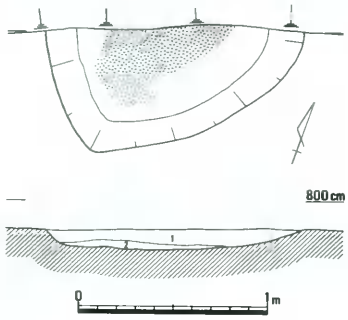
火処24（第36・71図）

火処21～23の東に位置する。同じ微高地上に形成されているが検出面および形態に差が認められる。河道１に設定したトレンチによって半分近くを破壊されているが、残存部で東西136cmを測り、円形に近いプランを想定できる。深さ11cmの皿状の掘り方を持ち、その底面に火を受けている。底面の海抜高は約780cmである。遺物が出土しておらず時期は不明であるが、検出面では火処13～23との間に１ｍ近い差があり、前者よりは古いと考えられる。　（久保）



1．焼土
2．灰色粘質土
（焼土粒含むが赤変はしていない）
3．赤灰色粘質土
（被熱）

第70図　火処23（1/30）



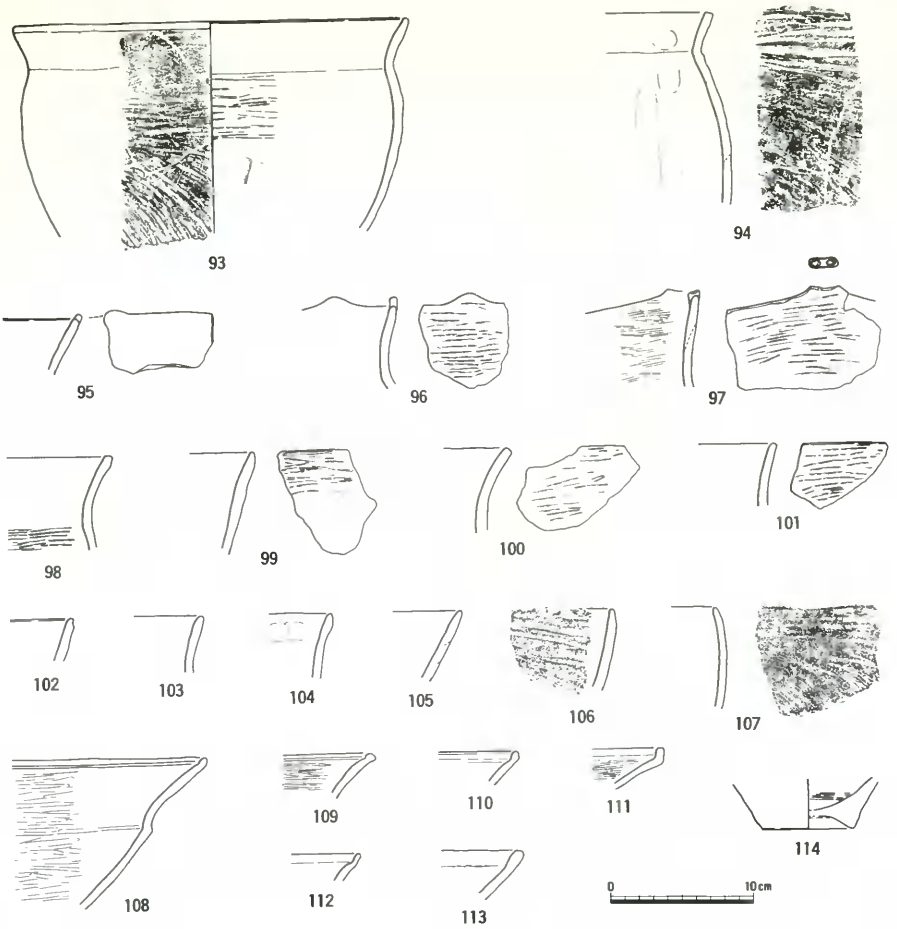
1．黄褐色粘質土
（焼土含む）
2．明赤褐色焼土

第71図　火処24（1/30）

(3)　土器溜り

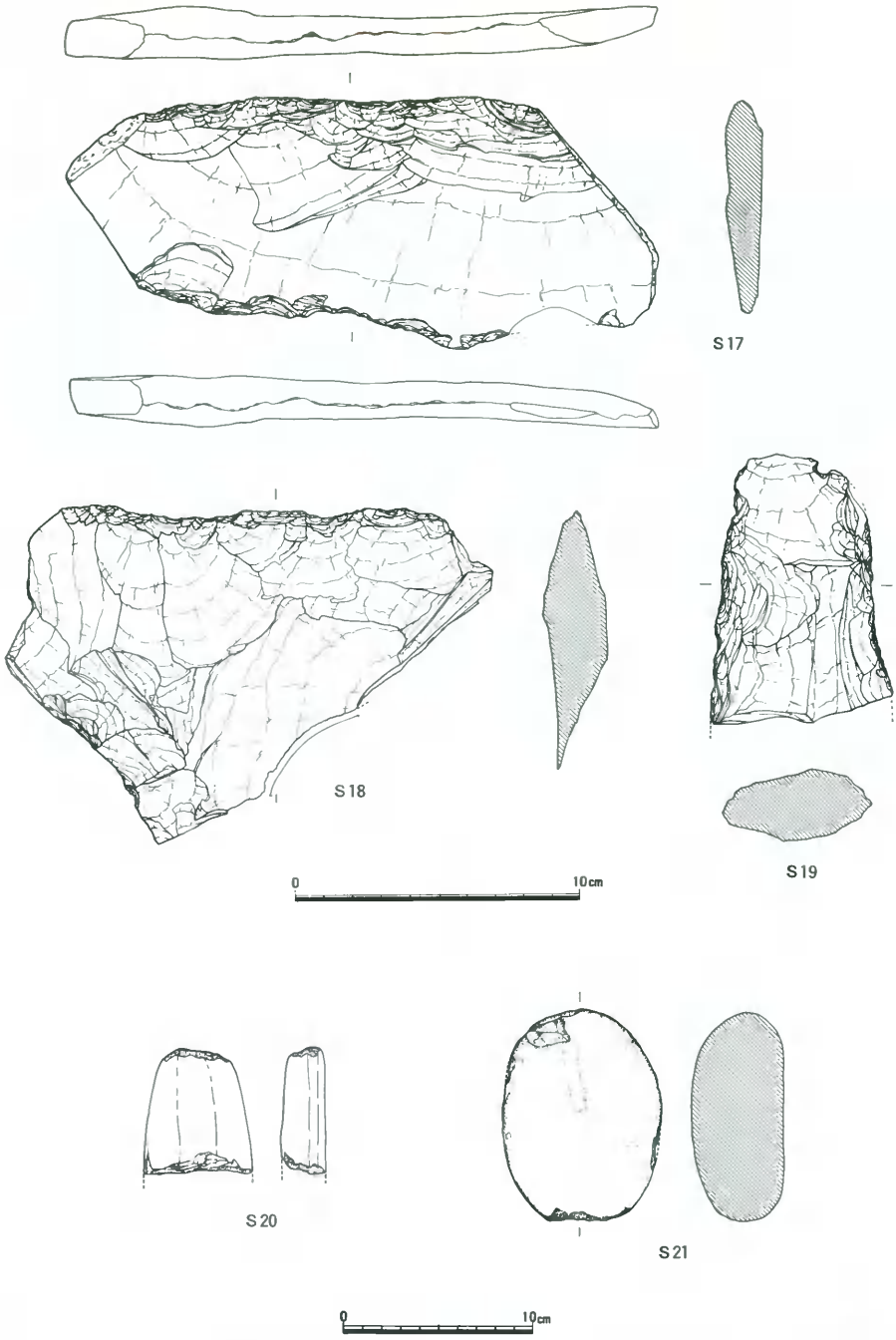
土器溜り１（第35・72・73図、図版６・54）

第２微高地(西)の北半に位置する。火処群と同じく基盤層の上面を除去した段階、突帯文土器を含む層の下位において検出されている。土器溜りとした土器集中部分周辺にも遺物が散在しており、同一レベル上に面的な拡がりをみせていたので、一括して扱った。なお土器溜り部分において何らかの遺構に伴う可能性を考えて精査を行ったが、掘り方等は確認できなかった。土器溜り部分から出土した遺物は**93・94・102・105・107～109**である。それ以外の土器および石器は周辺から出土したものである。深鉢**93～107**の器形は外半するものや内湾するものなど様々あるが、いずれも突帯や口唇部に刻目を持たない。**93・94**は「く」の字に屈曲する形態を有する。浅鉢**108～113**は平縁で、**108**のように屈折した杯部をもつと考えられる。口縁端部は肥厚気味で、**110・111**は上方への拡張がみられる。図示した以外にも土器細片が少量存在するが突帯を持つものは認められず、突帯文出現以前、縄文晩期中葉に位置付けられよう。また先にもふれたように同一の面において火処群を形成しており、その分布範囲も重なりを見せることから当期に属する生活面の存在を想定することができる。　（久保）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
93	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕のちナデ　胴部アルカ属貝条痕。	口頸部ナデ。胴部アルカ属貝条痕のち板ナデ。			黄灰　2.5Y6/1
94	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ。	ユビオサエ、ナデ。			黒褐　10YR3/1
95	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ？。			灰黄　2.5Y6/2
96	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。突起あり。	ナデ。	？		にぶい黄橙　10YR7/2
97	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。波状口縁？。	細かい条痕。			灰黄　2.5Y7/2
98	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	頸部ナデ。胴部アルカ属貝条痕。			黒　N2/
99	縄文土器	深鉢	ケズリ？。	ナデ			にぶい黄橙　10YR7/2
100	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕，	ナデ。			褐灰　10YR5/1
101	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。			明褐灰　7.5YR7/2
102	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕とナデ。	ナデ。			にぶい橙　7.5Y7/4
103	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕？。				灰白　10YR8/1
104	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕とナデ。	ユビオサエ、ナデ。			灰白　2.5Y8/1
105	縄文土器	浅鉢？	ナデかミガキ。	ケズリのちナデ？			褐灰　10YR4/1
106	縄文土器	浅鉢	ケズリ。	アルカ属貝条痕。			灰黄褐　10YR6/2
107	縄文土器	浅鉢	アルカ属貝条痕。	アルカ属貝条痕。			明褐灰　7.5YR7/1
108	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	口縁端部沈線、ミガキ。			黄灰　2.5Y4/
109	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	口縁端部沈線、ミガキ。			黒褐　2.5Y3/1
110	縄文土器	浅鉢	口縁端部ナデ。	口縁端部ナデ。			灰白　2.5Y8/2
111	縄文土器	浅鉢	口縁端部ナデ。胴部ミガキ。	口縁端部ナデ。胴部ミガキ。			明褐灰　7.5YR7/2
112	縄文土器	浅鉢	口縁端部ナデ。	口縁端部ナデ。			淡黄　2.5Y8/3
113	縄文土器	浅鉢	ナデ。	アルカ属貝条痕。			灰白　10YR7/1
114	縄文土器	深鉢	ケズリ，	アルカ属貝条痕。			橙　10YR8/

第72図　土器溜り１およびその周辺出土遺物(1)（1/4）



第73図　土器溜り１およびその周辺出土遺物(2)（1/2・1/3）

(4) 柱　　穴

柱穴１（Ｐ１）（第74・76図）

第２微高地(西)の北半に位置する。直径約30cmの円形を呈し、深さは26cmを測る。**115**は深鉢で、口縁端部は尖り気味になっており、体部にも突帯を持つ可能性があるがそれらしき破片はなかった。外面の沈線は先の尖った工具で一本ずつ垂下させている。縄文時代晩期後葉と考えられる。（久保）

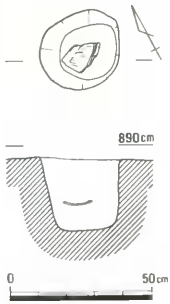
柱穴２（Ｐ２）（第75・77図）

第１低位部北端の緩斜面上に位置する。直径約40cmの円形を呈し、残存する深さは17cmを測る。土器は底より浮いた状態で検出されているが底部を下に正位にあり、意図的に埋置されたものと考えられる。土器上半の欠損は柱穴自体がかなり削平されたためで、元々は完形品であったと思われる。時期は縄文時代晩期後葉でも新しい頃に属すると考えられる。（久保）

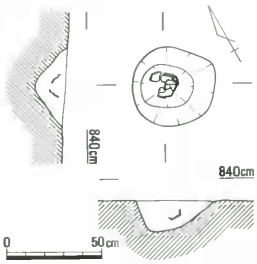
柱穴３（Ｐ３）～19（Ｐ19）（第78図）

時期不明の柱穴は多く検出されているがその中で図示しうる遺物の出土したものだけを単独の柱穴として扱った。いずれも円形を呈し、基盤と見分けのつきにくい埋土であった。Ｐ11を除いて全て調査対象地の西半において検出されているが、後世の削平に起因する点も大きく、一概に遺跡の性格を反映しているとは言えない。**117**～**131**は深鉢、**132**～**135**は浅鉢であろう。縄文時代晩期中葉～後葉と幅があるが、時期による埋土の状況や形態の差はよく判らなかった。

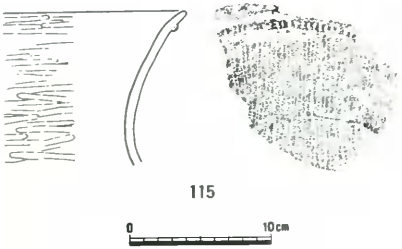
（久保）



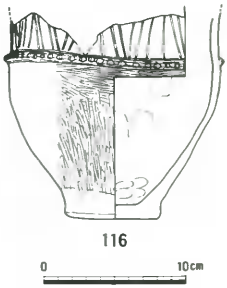
第74図　柱穴１（Ｐ１）（1/20）



第75図　柱穴２（Ｐ２）（1/30）

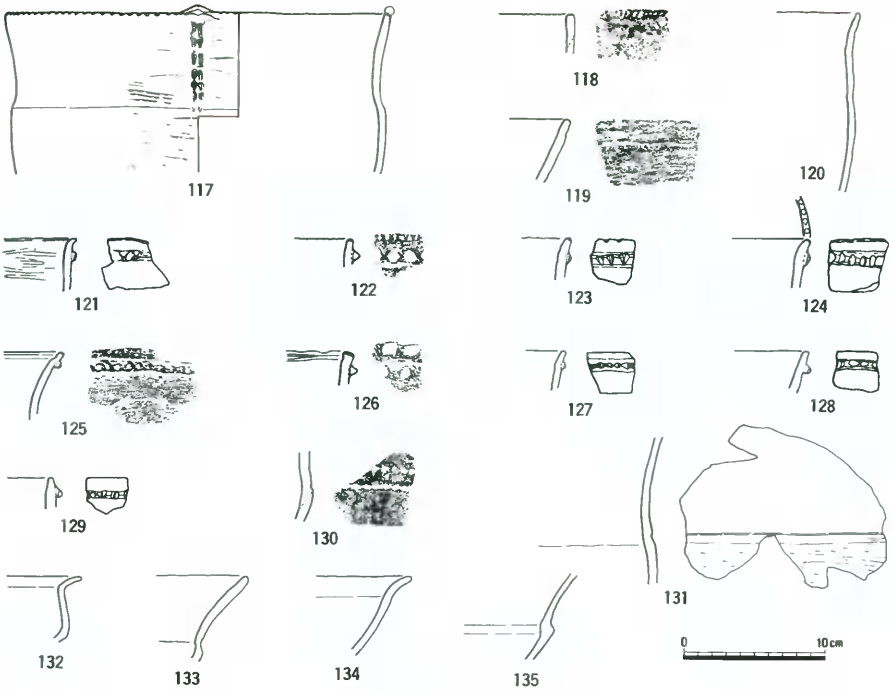


第76図　柱穴１（Ｐ１）出土遺物（1/4）



第77図　柱穴２（Ｐ２）出土遺物（1/4）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
115	縄文土器	深鉢	ヘラ描き沈線。	ヨコミガキ	?	細長形	褐灰　7.5YR6/1
116	縄文土器	深鉢	頸部ヘラ描き沈線、ナデ。胴部ミガキ。	ユビオサエ　ナデ。		菱形	にぶい褐　7.5YR5/3



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
117	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕のちナデ。胴部アルカ属貝条痕	アルカ属貝条痕のちナデ。			灰黄　2.5Y7/2
118	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ？。	小D形		橙　5YR6/6
119	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。			灰白　2.5Y8/1
120	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ。				灰黄褐　10R4/2
121	縄文土器	深鉢		アルカ属貝条痕？。		菱形	褐灰　7.5YR5/1
122	縄文土器	深鉢			細長形	菱形	灰白　2.5Y8/2
123	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ？。	菱形	菱形	にぶい橙　7.5YR7/4
124	縄文土器	深鉢		ナデ？。	菱形	米粒形	灰白　2.5Y8/2
125	縄文土器	深鉢	ケズリ。	口縁部沈線。ナデ？。	？	菱形	灰白　2.5Y8/2
126	縄文土器	深鉢	ナデ。	口縁部沈線。ナデ。	横長形	D形	灰黄褐　10YR6/2
127	縄文土器	深鉢				菱形	にぶい橙　7.5YR7/6
128	縄文土器	深鉢			？	菱形	にぶい黄橙　10YR6/4
129	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。		？	にぶい橙　5YR7/4
130	縄文土器	深鉢	押し引き刺突文。ナデ？。	ナデ。			にぶい黄橙　10YR7/3
131	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部ケズリ。	頸部ナデ。胴部アルカ属貝条痕のちナデ。			褐灰　7.5YR4/1
132	縄文土器	浅鉢	胴部ミガキかナデ。	胴部ミガキ。			黄灰　2.5Y4/1
133	縄文土器	深鉢	頸部ミガキかナデ。胴部ミガキ？。	ヨコミガキ。			褐灰　7.5YR5/1
134	縄文土器	浅鉢	ナデ？。	ナデ？。			灰白　10YR7/1
135	縄文土器	浅鉢	ミガキ？	ナデかミガキ			黒褐　2.5Y3/1

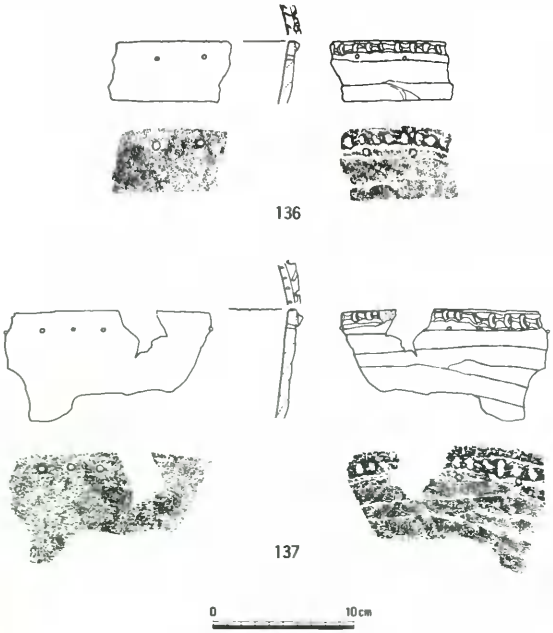
第78図　柱穴３（Ｐ３）～柱穴19（Ｐ19）出土遺物（1/4）

(5) 河　　道

河道１（第34・79～91・249図、図版37・39～42・55）

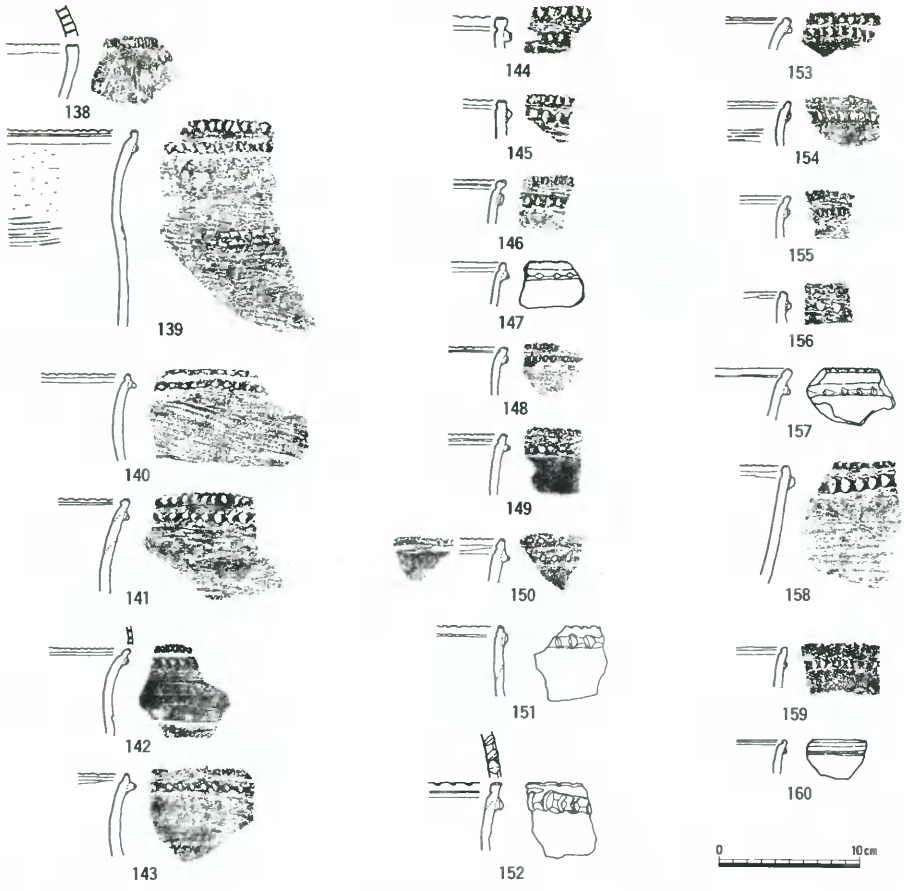
第１微高地と第２微高地の間に位置し、東西に大きく蛇行しながら南北方向に流走する。縄文時代単純の遺構でないため、当時期における規模は不明である。また、河道の底は砂地の湧水層に達しており、最も深い所で検出面から約３ｍ、海抜高にしても5.6ｍまで掘り下げたが底は確認できなかった。当河道の土層断面図は第249図に掲載しているが、堆積層のうち28層までは弥生時代前期以降の土器を含んでおり、縄文時代以前に遡りうるのは29・30層のみである。出土遺物の大半は河道東肩口の斜面堆積に伴うものであり、29・30層から出土した土器は**164**のみである。図示した遺物のうち**136**～**305**までは河道中央付近から出土した土器でＫＹ１区南端西斜面出土遺物がその主体を占める。**306**～**319**はその北側のＢＯ２・Ｈ３・Ｈ５区から、**320**～**338**はＨＦ区北西端西斜面から出土した遺物である。石器・土製品についても伴出土器に合わせて、第89図にはＫＹ１区南端西斜面、第90・91図にはＨＦ区北西端西斜面出土を一括して掲載している。（久保）

河道中央付近から出土した土器について、その器種構成をみると、壺・高杯・深鉢・浅鉢に分類される。前二者が**304**・**305**の各１点ずつのみであるのに対して、後二者は点数も多い。以下、深鉢について概要を記す。まず、器形からみると頸部がくびれるものが多く、調整方法にはナデの他にアルカ属貝条痕・ヘラケズリが認められる。口縁部片をみると、外面に刻目をもつ貼付突帯がつけられているが、その位置は口縁部直下のものから１cm程度下がったものまである。波状口縁を呈するものは少ない。**139**～**164**・**170**は、口縁部内面直下に沈線を巡らせるもので、角をもつ工具によって削り取られたような沈線も多くみられる他、**159**・**160**を除いて、口唇部の上面にも刻みが施されている。**165**～**169**・**171**～**199**は、口唇部に刻みをもつもので、さらに端部に面をもつものともたないものに分けられ、後者には上面というよりも外面上端に刻みをもつものがある。**200**～**216**は口唇部に



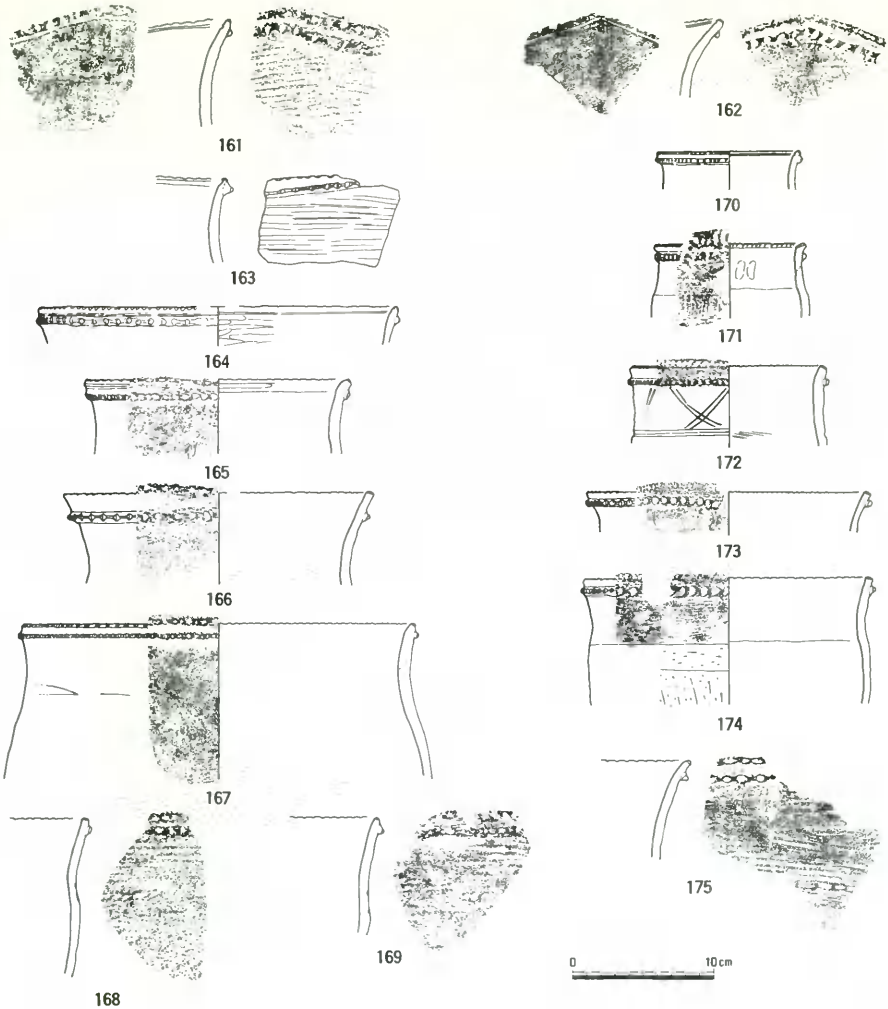
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
136	縄文土器	深鉢	ナデ。内から外へ孔列あり。粘土紐痕明瞭。	ナデ。	細長形	Ｃ形	にぶい褐　10YR7/2
137	縄文土器	深鉢	ナデ。内から外へ孔列あり。粘土紐痕明瞭。	ナデ。	細長形	Ｃ形	明褐灰　7.5YR7/1

第79図　河道１出土遺物（縄文時代晩期１）（1/4）



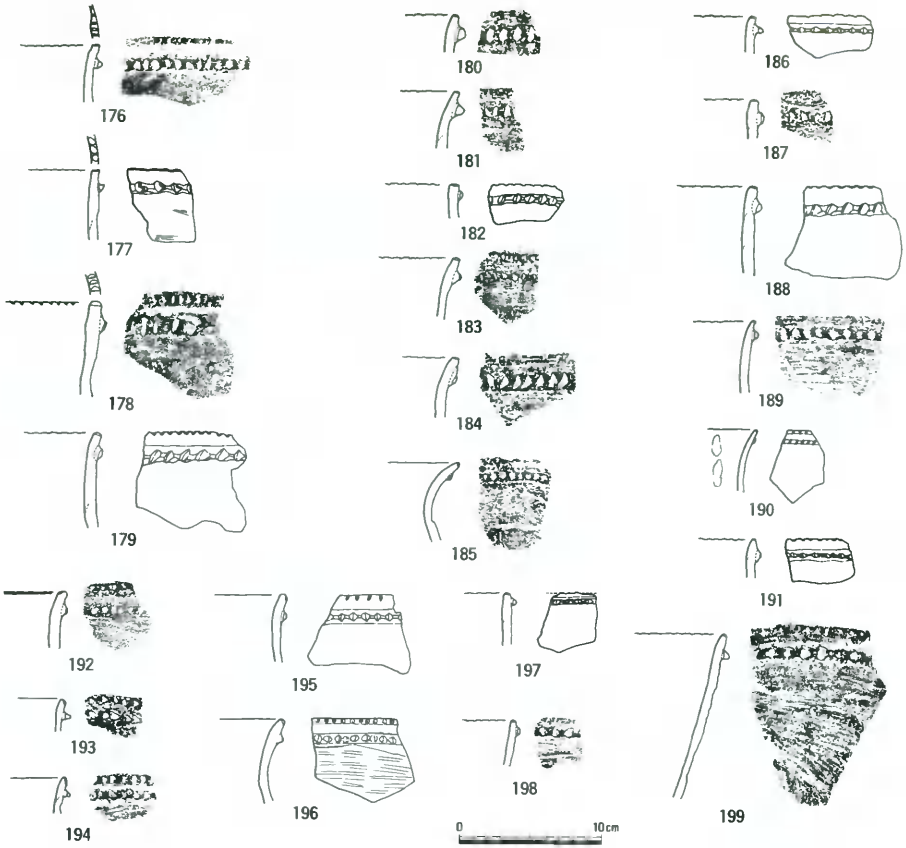
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
138	縄文土器	浅鉢	ケズリ。	ナデ？。	細長形		にぶい黄橙　10YR5/3
139	縄文土器	深鉢	ヨコケズリ、Ｃ形刺突文	頸部ケズリのちナデ。アルカ属貝条痕。口縁部沈線。	米粒形	Ｃ形	にぶい黄橙　10YR7/4
140	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕、ナデ。	口縁部沈線。ナデ	Ｄ形？	逆Ｄ形？	浅黄　2.5Y7/3
141	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ。	口縁部段、ナデ。	Ｃ形	Ｃ形	浅黄橙　7.5YR8/3
142	縄文土器	深鉢	頸部沈線、ナデ。胴部ケズリ。	口縁部沈線。アルカ属貝条痕のちナデ。	小Ｄ形	Ｄ形	灰白　5YR8/2
143	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ？。	口縁部沈線。ナデ？。	？	菱形？	灰黄　2.5Y6/2
144	縄文土器	深鉢	ナデ。	口縁部沈線。	Ｄ形	？	黄灰　2.5Y6/1
145	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	口縁部沈線。ナデ？。	？	Ｃ形	灰白　2.5Y8/2
146	縄文土器	深鉢	ナデ。	口縁部沈線。ナデ。	Ｄ形	Ｄ形	にぶい黄橙　10YR7/3
147	縄文土器	深鉢	ナデ。	口縁部沈線。ナデ。	横丸形	菱形	灰黄　2.5Y7/2
148	縄文土器	深鉢	ナデ。	口縁部沈線。ナデ。	菱形？	逆Ｄ形？	暗灰黄　2.5Y5/2
149	縄文土器	深鉢	ナデ。口唇部刻み２方向。	口縁部沈線。ナデ。	細長形	Ｄ形	灰白　2.5Y7/1
150	縄文土器	深鉢	ナデ。	口縁部沈線。ナデ。	Ｄ形？	Ｄ形？	浅黄　2.5Y8/3
151	縄文土器	深鉢	ナデ。	口縁部沈線。ナデ。	米粒形	菱形	明褐灰　7.5YR7/2
152	縄文土器	深鉢	条痕とケズリ。	口縁部沈線。ナデ。	菱形	Ｃ形	灰白　10YR7/1
153	縄文土器	深鉢	ナデ。	口縁部沈線。ナデ。	？	Ｄ形？	明褐灰　7.5YR7/2
154	縄文土器	深鉢	ナデ。	口縁部沈線。アルカ属貝条痕、ナデ。	？	細長形	褐灰　7.5YR6/2
155	縄文土器	深鉢	ナデ。	口縁部沈線。ナデ。	？	細長形	灰黄褐　10YR5/2
156	縄文土器	深鉢	ナデ。	口縁部沈線。ナデ。	？	Ｄ形？	灰黄褐　10YR6/2
157	縄文土器	深鉢	ナデ。	口縁部沈線。ナデ。	米粒形	菱形	灰黄　2.5Y7/2
158	縄文土器	深鉢	上半ナデ、下半アルカ属貝条痕。	口縁部沈線。ナデ。	逆Ｄ形	Ｄ形	灰白　10YR7/1
159	縄文土器	深鉢	ナデ。	口縁部沈線。		Ｄ形	灰白　10YR7/1
160	縄文土器	深鉢	ナデ。	口縁部沈線。ナデ？。		菱形	にぶい橙　7.5YR7/3

第80図　河道１出土遺物（縄文時代晩期２）（1/4）



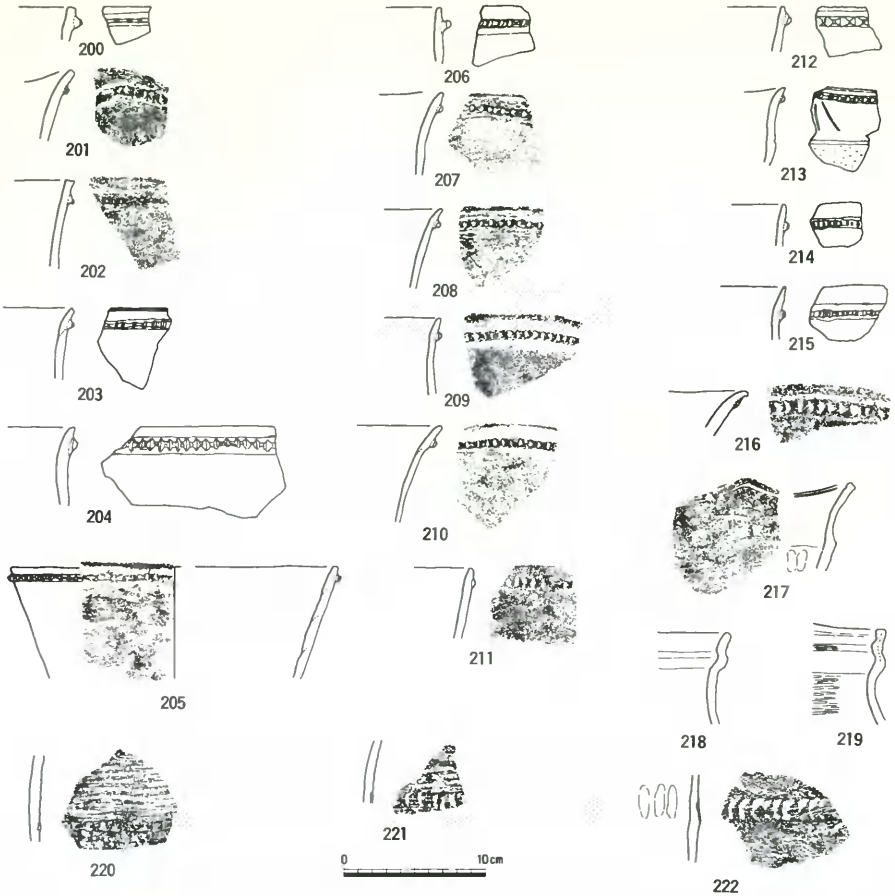
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
161	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。波状口縁。	口縁部沈線。板ナデ？。	？	D形？	にぶい黄橙　10YR7/2
162	縄文土器	深鉢	ナデ。波状口縁。	口縁部沈線。ナデ。	米粒形	米粒形	灰黄褐　10YR6/2
163	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ。波状口縁	口縁部沈線。ナデ。	？	？	灰白　2.5Y8/2
164	縄文土器	深鉢	ナデ。	口縁部沈線。ミガキ。	D形	D形	にぶい黄橙　10YR6/3
165	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ？。	横丸形	D形	褐灰　10YR6/1
166	縄文土器	深鉢	ナデ。口唇部刻みは不規則。	ナデ？。	D形	菱形	にぶい黄橙 7.5YR7/3
167	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部ケズリ	ナデ	菱形	菱形	にぶい黄橙　10YR7/2
168	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。C字刺突文。頸部一部沈線。		？	菱形	にぶい黄橙　10YR7/3
169	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕。刺突文	ナデ？。	？	？	灰白　2.5Y7/1
170	縄文土器	深鉢	ナデ。	口縁部沈線。ミガキ？。	米粒形	米粒形	褐灰　10YR5/1
171	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部タテのアルカ属貝条痕。	ナデ。	横丸形	細長形	灰黄褐　10YR6/2
172	縄文土器	深鉢	ヘラ描き沈線文。ナデ。	頸部ナデ。胴部アルカ属貝条痕	米粒形	菱形	褐灰　7.5YR4/1
173	縄文土器	深鉢	ナデ。口唇部刻み２方向。	ナデ。	細長形	菱形	灰　5Y4/1
174	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕のちナデ。胴部ケズリ。	ナデ。	？	D形	にぶい黄橙　10YR7/2
175	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。棒状刺突文。胴部ケズリ。		？	菱形	灰白　10YR8/1

第81図　河道１出土遺物（縄文時代晩期３）（1/4）



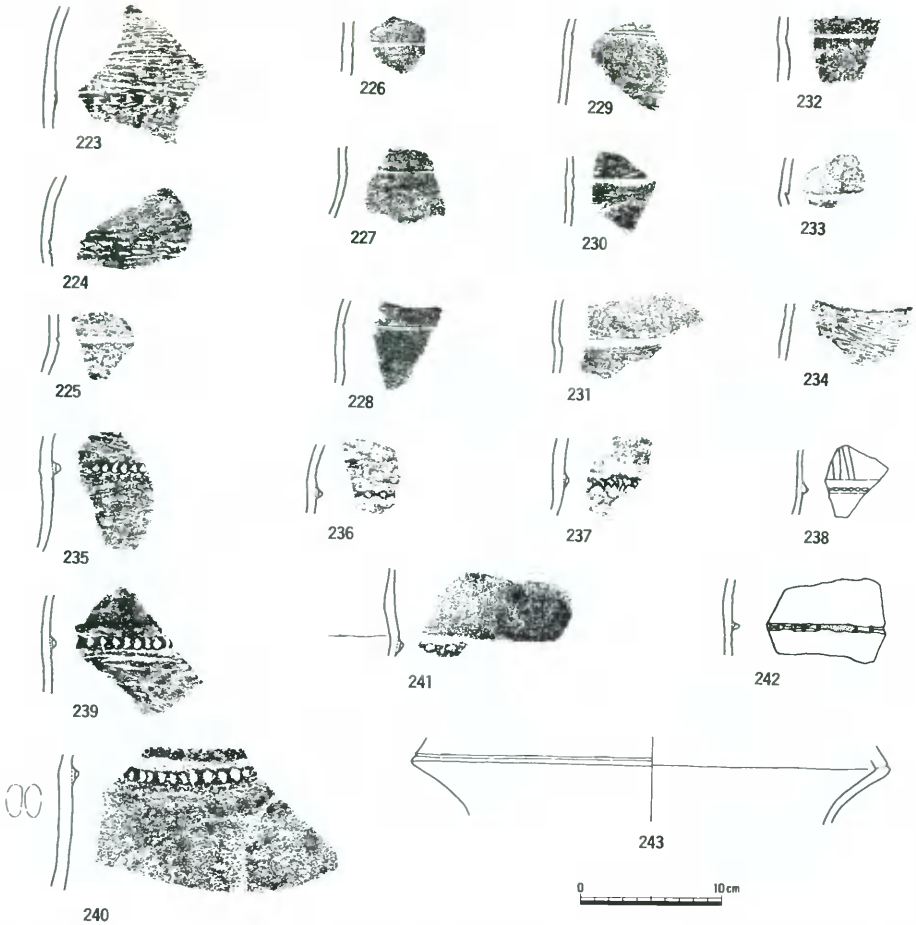
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
176	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	細長形	菱形	にぶい黄橙　10YR7/4
177	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	横丸形？	C形	灰白　7.5YR8/2
178	縄文土器	深鉢	ヨコケズリとナデ。	ナデ？。	D形	細長形	にぶい黄橙　10YR7/3
179	縄文土器	深鉢	ナデ？。	アルカ属貝条痕のちナデ？。	米粒形	D形	にぶい黄橙　10YR7/3
180	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	細長形	菱形	灰黄　2.5Y6/2
181	縄文土器	深鉢	ナデ。波状口縁。	ナデ。	細長形	C形？	褐灰　10YR6/1
182	縄文土器	深鉢	ナデ。口唇部刻みは不規則。	ナデ？。	米粒形	菱形	灰白　7.5YR8/2
183	縄文土器	深鉢	ナデ。	ヨコミガキ。	逆D形	細長形	灰黄　2.5Y6/2
184	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	?	D形	黄灰　2.5Y6/1
185	縄文土器	深鉢	ナデかケズリ。	ナデ。	?	D形？	黄灰　2.5Y6/1
186	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ？。	菱形？	菱形	灰白　10YR8/2
187	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ。	?	?	褐灰　10YR4/1
188	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ？。	ナデ？。	?	D形	明褐灰　7.5YR7/2
189	縄文土器	深鉢	ヨコのアルカ属貝条痕。	ナデ？。		菱形？	灰黄褐　10YR6/2
190	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	細長形	細長形	オリーブ黒　5Y3/1
191	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕？。		菱形	菱形	にぶい黄橙　10YR7/2
192	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ？。	?	?	褐灰　7.5YR6/1
193	縄文土器	深鉢	爪。	ナデ。	D形	D形	灰褐　7.5YR5/2
194	縄文土器	深鉢	ケズリとナデ。		D形	D形	にぶい黄橙　10YR8/3
195	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ。		菱形	灰褐　7.5YR6/2
196	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。		米粒形	菱形	褐灰　10YR5/1
197	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ？。	ナデ。	?	菱形	灰白　2.5Y8/2
198	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	?	D形？	灰黄褐　10YR6/2
199	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ、板ナデ。	D形？	C形？	にぶい褐　7.5YR6/3

第82図　河道１出土遺物（縄文時代晩期４）(1/4)



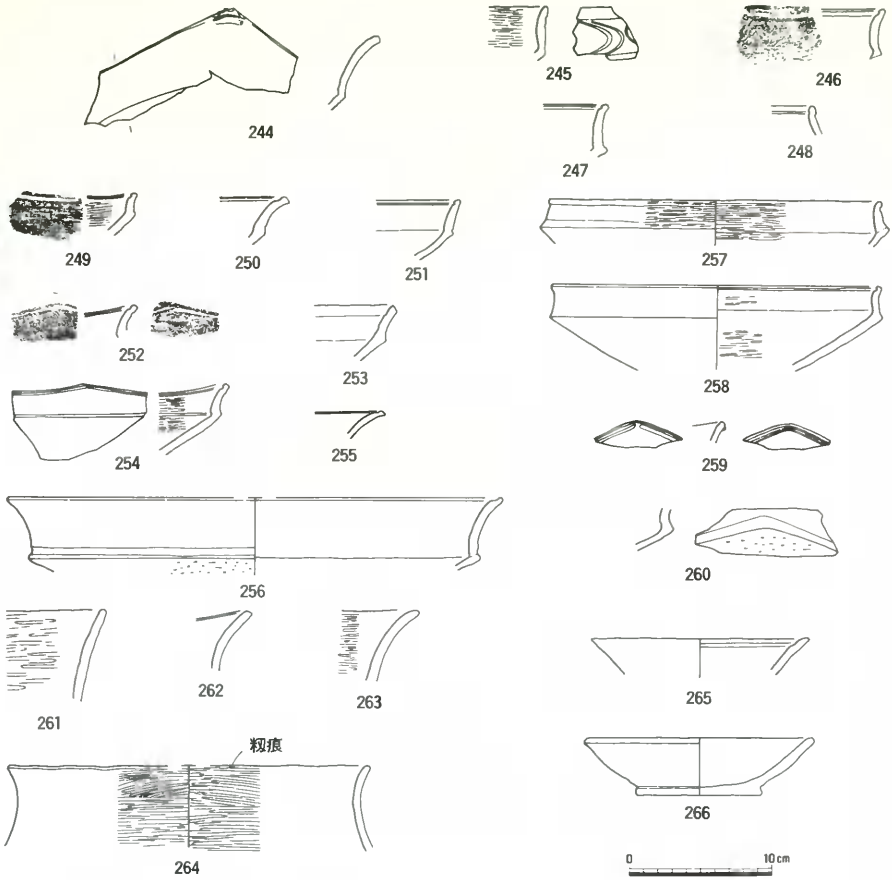
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
200	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ？。		菱形	灰白　2.5Y8/2
201	縄文土器	深鉢	ナデ。波状口縁。	ナデ		細長形	にぶい橙　5YR3/1
202	縄文土器	深鉢	ナデ。煤。	ユビオサエ、ナデ。		小菱形	灰黄褐　10YR4/2
203	縄文土器	深鉢	口唇部沈線。ナデ。	ナデ。		米粒形	褐灰　10YR4/1
204	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ		菱形	にぶい黄橙　10YR7/2
205	縄文土器	深鉢	ナデとミガキ。	ハケメ？。		菱形	黄灰　2.5Y6/1
206	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。		D形	にぶい橙　7.5YR7/3
207	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ。波状口縁。	ナデ？。		小菱形	黄灰　2.5Y7/2
208	縄文土器	深鉢？	アルカ属貝条痕？のちナデ	ナデ		小菱形	黄灰　2.5Y4/1
209	縄文土器	深鉢	ナデ。	ユビオサエ、ナデ。		D形	にぶい黄橙　10YR7/3
210	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。		菱形	にぶい黄橙　10YR7/3
211	縄文土器	深鉢		ナデ？。		細長形	褐灰　7.5YR4/1
212	縄文土器	深鉢		ナデ？。	？	菱形	にぶい褐　7.5YR5/4
213	縄文土器	深鉢	頸部ナデ、ヘラ描き沈線。胴部ケズリ。波状口縁。		？	D形	褐灰　7.5YR5/1
214	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ？。		米粒形	灰白　10YR7/1
215	縄文土器	深鉢	ナデ。	アルカ属貝条痕のちナデ？。		逆C形	灰白　7.5YR8/2
216	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ。	細長形？	逆C形？	にぶい黄橙　10YR7/2
217	縄文土器	浅鉢	ミガキ。波状口縁。	口縁部沈線。胴部ミガキ。			灰黄褐　10YR4/2
218	縄文土器	深鉢	ナデかミガキ	ナデかミガキ。			灰白　2.5Y8/2
219	縄文土器	深鉢	ミガキ。	ミガキ。			褐灰　10YR4/1
220	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ？。刺突文。	ナデのちハケメ？。			灰白　2.5Y7/1
221	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。C形刺突文。	アルカ属貝条痕のちナデ。			にぶい橙　7.5YR6/4
222	縄文土器	深鉢	ミケズリ。C形刺突文。	ミユビオサエ。			にぶい橙　7.5YR7/4

第83図　河道１出土遺物（縄文時代晩期５）（1/4）



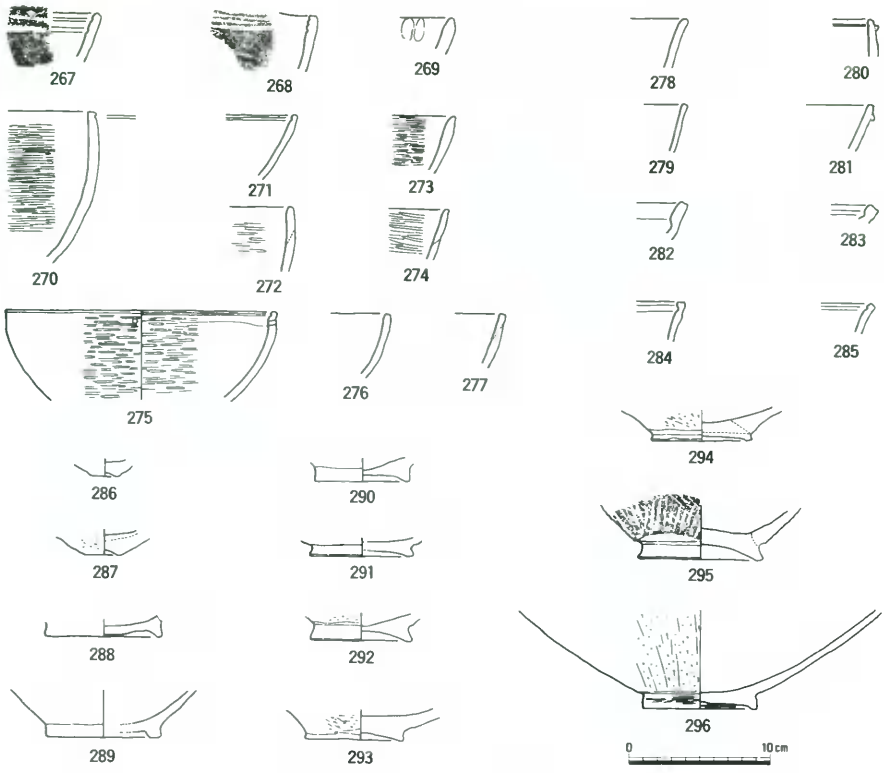
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
223	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ。	ナデ。			にぶい橙　7.5YR7/3
224	縄文土器	深鉢	ケズリ。刺突文。	ナデ。			にぶい黄橙　10YR7/4
225	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部ヨコケズリ、沈線。	ナデ？。			灰黄褐　10YR6/2
226	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部ケズリ、沈線。	ナデ。			灰黄褐　10YR6/2
227	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部ヨコケズリ。	ミガキ。			褐灰　10YR6/1
228	縄文土器	深鉢	ナデ？。沈線。	ミガキ。			灰黄褐　10YR6/2
229	縄文土器	深鉢	ナデ。沈線１本。	ナデ？。			褐灰　10YR6/1
230	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部ケズリ、沈線。				にぶい橙　7.5YR7/4
231	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部ヨコケズリ、沈線。	ナデ？。			褐灰　10YR4/1
232	縄文土器	深鉢	頸部ナデ？。胴部ケズリ？。	ナデ？。アルカ属貝条痕？。			灰褐　7.5YR4/2
233	縄文土器	深鉢	ナデ。沈線。	ナデ？。			灰白　2.5Y7/1
234	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕？。	ユビオサエのちナデ。			黄灰　2.5Y5/1
235	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕のちナデ。胴部ケズリ。	ナデ。		C形	灰黄　2.5Y7/2
236	縄文土器	深鉢	頸部ケズリのちナデ。胴部ケズリ？。	ナデ？。		隻形	灰白　2.5Y7/1
237	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部ケズリ。	ユビオサエのちナデ。		C形	にぶい黄橙　10YR7/2
238	縄文土器	深鉢	頸部ヘラ描き沈線、ナデ。胴部ケズリ？。	ナデ。		横丸形	灰白　2.5Y8/2
239	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部アルカ属貝条痕。	ナデ。		D形	灰黄褐　10YR6/2
240	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部ケズリ？。	ユビオサエのちナデ？。		隻形	明黄褐　10YR7/6
241	縄文土器	深鉢	ナデ。	ユビオサエのちナデ、ハケメ？		D形	灰黄　2.5Y7/2
242	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部ナデ？。	ナデ。		隻形	灰白　10YR8/1
243	縄文土器	深鉢	頸部ナデ、沈線。胴部ケズリのちナデ？。	ミガキ？。			褐灰　10YR4/1

第84図　河道１出土遺物（縄文時代晩期６）（1/4）



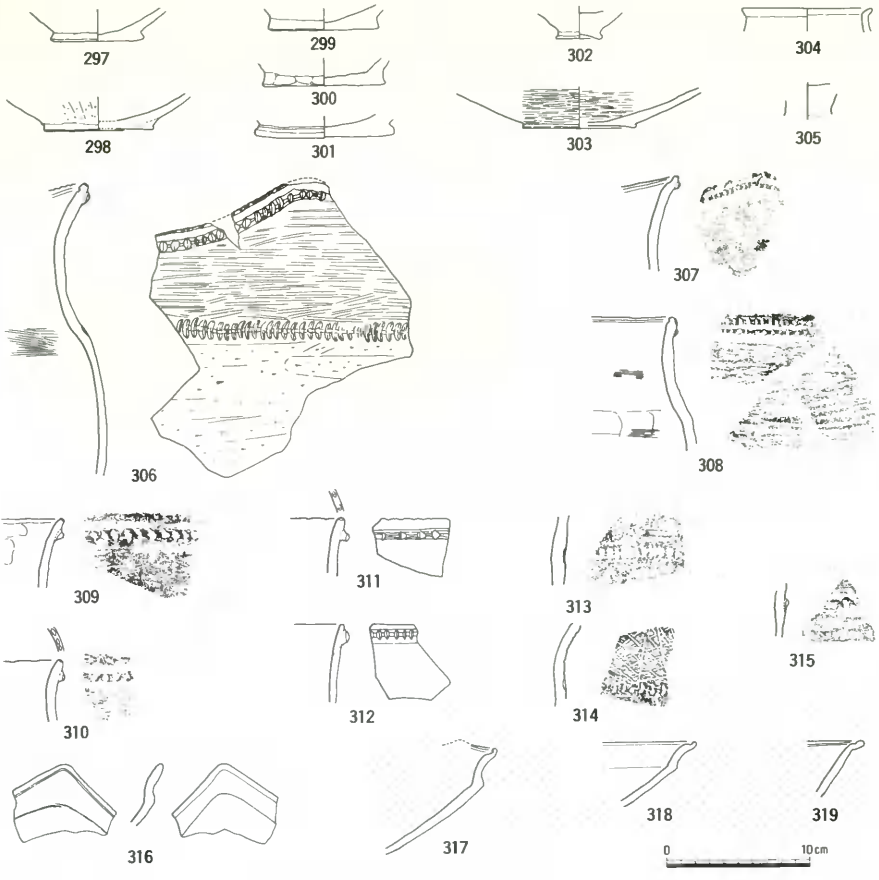
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
244	縄文土器	浅鉢	頸部ミガキ。胴部アルカ属貝条痕。	ミガキ。			黒褐　2.5Y3/1
245	縄文土器	浅鉢	口縁部ヘラ描き文。ミガキ？。	ミガキ。			褐灰　10YR6/11
246	縄文土器	浅鉢	ナデ？、ミガキ？。沈線。	ナデ？。ミガキ？。沈線			褐灰　10YR5/1
247	縄文土器	浅鉢	口縁部ミガキ？。胴部ケズリ。	ミガキ。沈線			にぶい黄橙　10YR7/2
248	縄文土器	浅鉢		沈線。			橙　5YR6/6
249	縄文土器	浅鉢	口縁部ミガキ、沈線。胴部ケズリのちミガキ。	ミガキ、沈線。波状口縁			にぶい黄橙　10YR6/2
250	縄文土器	浅鉢	口縁部ナデ？、沈線。胴部アルカ属貝条痕	ナデ、沈線			黄灰　2.5Y6/1
251	縄文土器	浅鉢	ミガキ？、沈線。	ミガキ？、沈線。			黒褐　10YR3/1
252	縄文土器	浅鉢	ミガキ、沈線。波状口縁。	ミガキ、沈線。			黒褐　10YR3/1
253	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ。	ミガキ。			黒褐　10YR3/1
254	縄文土器	浅鉢	ミガキ。波状口縁。	ミガキ、沈線。			灰白　10YR8/1
255	縄文土器	浅鉢		口縁部沈線。			灰白　2.5Y8/2
256	縄文土器	浅鉢	口縁部ミガキ？、沈線。胴部ケズリ。	ミガキ。口縁部凹線。			黄灰　2.5Y5/1
257	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			暗灰　N3/0
258	縄文土器	浅鉢	胴部ミガキ？。	ミガキ。口縁部沈線。			灰白　10YR7/1
259	縄文土器	浅鉢	無刻み突帯。	ミガキ。			灰　5Y5/1
260	縄文土器	浅鉢	胴部ケズリ。方形浅鉢。	口縁部ミガキ。胴部ナデ			褐灰　10YR5/1
261	縄文土器	浅鉢？	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。			にぶい黄橙　10YR7/2
262	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			褐灰　10YR5/1
263	縄文土器	浅鉢？	ミガキ。	ミガキ。			灰白　10YR8/1
264	縄文土器	浅鉢	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。口縁端部粘痕			灰褐　7.5YR6/2
265	縄文土器	浅鉢	ミガキ？。	ミガキ。段状の沈線			黄灰　2.5Y5/1
266	縄文土器	浅鉢	胴部ミガキ　底部ナデ、沈線	ミガキ？			黄灰　2.5Y6/1

第85図　河道１出土遺物（縄文時代晩期７）（1/4）



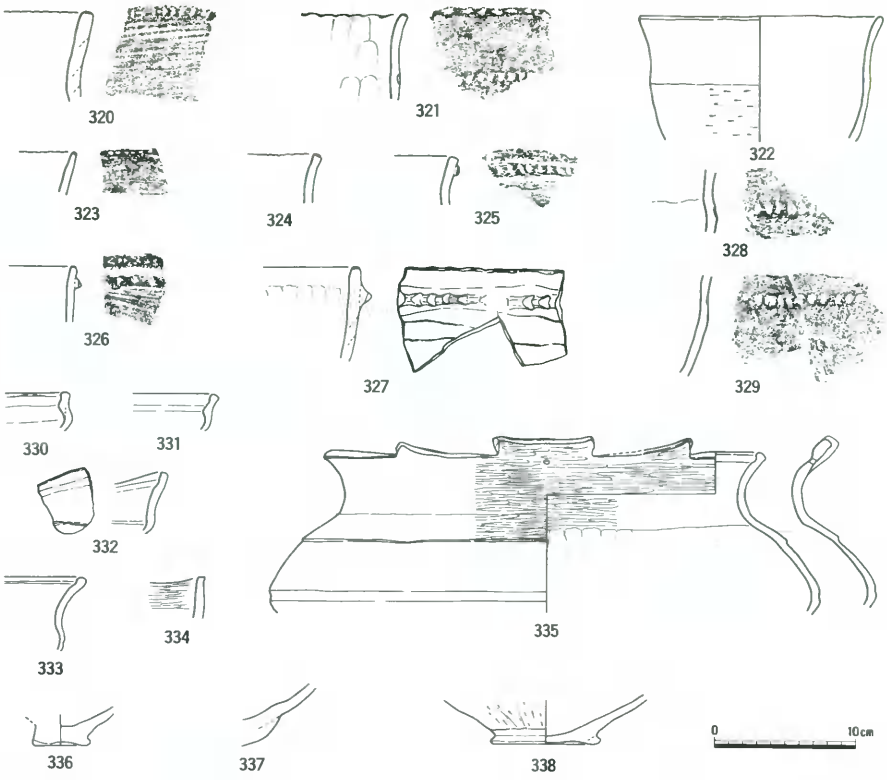
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部切み	突帯刻み	色調
267	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ナデ？。２本の沈線。			褐灰　10YR4/1
268	縄文土器	浅鉢	波状口縁？。	ナデ？。３本の沈線。			淡黄　2.5Y8/3
269	縄文土器	浅鉢					灰　5Y4/1
270	縄文土器	浅鉢	ヨコミガキ。口縁部沈線。	ヨコミガキ。			灰黄　2.5Y7/2
271	縄文土器	浅鉢	ヨコミガキ？。	ヨコミガキ？。沈線。			褐灰　10YR5/1
272	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			灰黄　2.5Y6/2
273	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ヨコミガキ。			灰黄　2.5Y7/2
274	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ヨコミガキ。			灰黄　2.5Y7/2
275	縄文土器	浅鉢	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。			黄灰　2.5Y5/1
276	縄文土器	浅鉢	ミガキ？。	ミガキ？。			黄灰　2.5Y4/1
277	縄文土器	浅鉢	ミガキ？。	ミガキ？。			灰　5Y6/1
278	縄文土器	浅鉢	ナデ。	ナデ。			灰　5Y4/1
279	縄文土器	浅鉢	ナデ？。	ナデ？。			灰黄褐　10YR6/2
280	縄文土器	浅鉢	ナデ？。無刻み突帯。	ナデかミガキ。沈線。			黄灰　2.5Y5/1
281	縄文土器	浅鉢	ミガキ？。無刻み突帯。	ミガキ？。			灰白　2.5Y7/1
282	縄文土器	浅鉢	ミガキ？。	ミガキ？。			黄灰　2.5Y4/1
283	縄文土器	浅鉢	ミガキ？。	ミガキ？。			灰黄　2.5Y6/2
284	縄文土器	浅鉢		口縁部沈線。			灰　N4/0
285	縄文土器	浅鉢	ミガキ？。	ミガキ？。口縁部沈線。			黄灰　2.5Y5/1
286	縄文土器	深鉢	ケズリ？。				にぶい黄橙　7.5YR7/4
287	縄文土器	深鉢	ケズリ。	ナデ。			にぶい橙　7.5YR6/4
288	縄文土器	深鉢	ナデ	ナデ？。			黒褐　10YR3/1
289	縄文土器	浅鉢	底部ナデ。				灰白　2.5Y8/2
290	縄文土器	深鉢	底部ナデ。底部楕円形。	ナデ。			灰白　10YR8/1
291	縄文土器	浅鉢	条痕？。	ナデ？。			灰褐　7.5YR6/2
292	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ。底部ナデ。	ナデ？。			明褐灰　7.5YR7/2
293	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ。底部ナデ。	ナデ？。			灰黄褐　10YR6/2
294	縄文土器	浅鉢？	胴部ケズリ。底部ケズリのちナデ				灰黄褐　10YR5/2
295	縄文土器	深鉢	胴部アルカ属貝条痕。底部ナデ。	ナデ？。			にぶい黄橙　10YR7/3
296	縄文土器	浅鉢	胴部ケズリ。底部ミガキ。	ナデかミガキ。			灰白　2.5Y8/2

第86図　河道１出土遺物（縄文時代晩期８）（1/4）



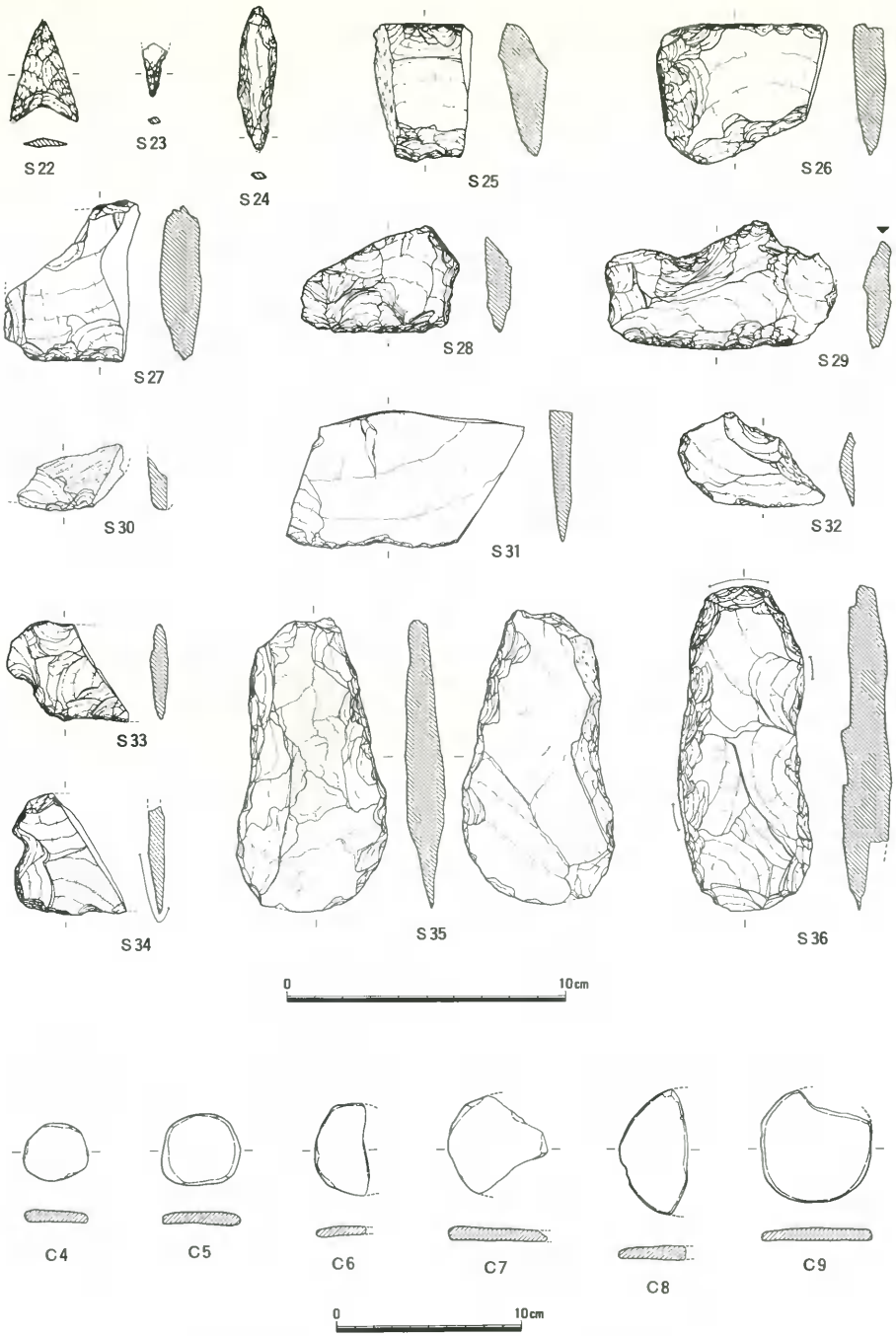
挿図番号	種別	器種	特	徴	口唇部	突帯刻み	色調
			外面	内面	刻み		
297	縄文土器	浅鉢？	胴部アルカ属貝条痕？。底部ナデ。	ナデ。			にぶい黄橙　10YR7/2
298	縄文土器	浅鉢	胴部ケズリ。	ミガキ？。			にぶい橙　7.5YR7/3
299	縄文土器	深鉢					灰白　10YR8/2
300	縄文土器	深鉢	底部ナデ。	ナデ？。			灰白　2.5Y8/2
301	縄文土器	深鉢	底部ナデ。	ナデ？。			にぶい黄橙　10YR7/2
302	縄文土器	浅鉢	胴部ミガキ。底部ナデ？。	ミガキ？。			黒　10YR1、7/1
303	縄文土器	浅鉢	ミガキ。煤。	ミガキ			明褐灰　7.5YR7/2
304	縄文土器	壺	ミガキ。	ナデ。			にぶい黄橙　10YR6/4
305	縄文土器	高杯？	ナデ。				にぶい黄橙　10YR7/3
306	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ、C形刺突文	ナデ、アルカ属貝条痕。口縁部沈線。波状口縁	菱形	菱形	灰褐　7.5YR6/2
307	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。口縁部凹線。波状口縁。	？	米粒形	灰黄褐　10YR6/2
308	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ、ハケメ？。口縁部沈線	D形	D形	褐灰　7.5YR4/1
309	縄文土器	深鉢	ナデ。	ユビオサエ、ナデ。	？	D形	灰白　10YR7/1
310	縄文土器	深鉢	ケズリ。	ナデ。	横丸形	菱形？	褐灰　5YR4/1
311	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ？。	？	D形	灰白　2.5Y8/1
312	縄文土器	深鉢	ナデ？。			米粒	灰白　10YR8/2
313	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部ケズリ、押引刺突文。	ナデ。		D形	灰黄褐　10YR4/2
314	縄文土器	深鉢	頸部ナデ、ヘラ描き沈線文。刺突文。	ユビオサエ、ナデ。			灰白　10YR8/2
315	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部ケズリ？	ミガキかナデ。			灰白　2.5Y8/1
316	縄文土器	浅鉢	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。方形浅鉢。	ナデかミガキ。口縁部沈線。			褐灰　10YR4/1
317	縄文土器	浅鉢	口縁部ナデ。胴部ケズリ。波状口縁。	ナデ。口縁部沈線。			褐灰　5YR5/1
318	縄文土器	浅鉢	口縁部ナデ。胴部ケズリ。	ナデ。口縁部沈線。			にぶい黄橙　10YR7/2
319	縄文土器	浅鉢	ナデ？。波状口縁。	ナデ？。口縁部沈線。			褐灰　10YR5/1

第87図　河道１出土遺物（縄文時代晩期９）（1/4）

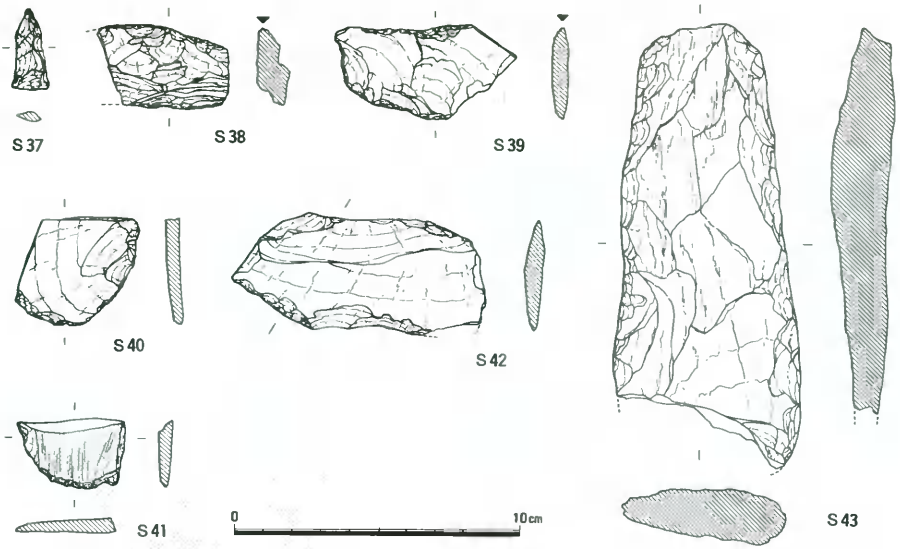


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
320	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ？。	細長形		灰白　2.5Y7/1
321	縄文土器	深鉢	刺突文。	ユビオサエのちナデ。	？		灰白　2.5Y8/1
322	縄文土器	深鉢	頸部ナデ？。胴部ヨコケズリ。	ナデ？。			にぶい黄橙　10YR6/3
323	縄文土器	深鉢？	ミガキ。	ミガキ。	逆Ｄ形		にぶい黄橙　10YR7/4
324	縄文土器	深鉢			逆Ｄ形		灰黄褐　2.5Y4/1
325	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕？。	ナデ？。		逆Ｄ形	黄灰　2.5Y5/1
326	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	？	楕形	灰　N6/
327	縄文土器	深鉢	ナデ。	ユビオサエのちナデ。	？	Ｃ形	褐灰　10YR6/1
328	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕のちナデ。胴部ケズリ、刺突文。	アルカ属貝条痕のちナデ			灰白　10YR8/1
329	縄文土器	深鉢	頸部ナデ、胴部ケズリ。刺突文。	ナデ。			にぶい黄橙　10YR6/3
330	縄文土器	浅鉢	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。			褐灰　10YR6/1
331	縄文土器	浅鉢	ミガキ？。	ミガキ？。			にぶい橙　7.5YR7/3
332	縄文土器	浅鉢	ナデ。波状口縁。	ナデ。			褐灰　10YR4/1
333	縄文土器	浅鉢	頸部ミガキ。胴部アルカ属貝条痕。	ナデ。			黄灰　2.5Y5/1
334	縄文土器	浅鉢	アルカ属貝条痕のちナデ。	ヨコミガキ。			灰白　2.5Y7/1
335	縄文土器	浅鉢	ヨコミガキ。穿孔あり。	頸部ミガキ。口縁端部挟り。			黒褐　7.5YR3/1
336	縄文土器	深鉢	底部ナデ。	ナデ。			浅黄橙　7.5YR8/3
337	縄文土器	深鉢		ナデ。			明褐灰　7.5YR7/1
338	縄文土器	浅鉢	胴部ケズリ。底部ミガキ？	ナデ？			明褐灰　7.5YR7/1

第88図　河道１出土遺物（縄文時代晩期10）（1/4）



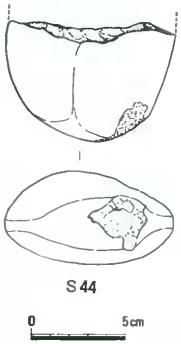
第89図　河道１出土遺物（縄文時代晩期11）（1/2・1/3）



第90図　河道１出土遺物（縄文時代晩期12）（1/2）

刻みをもたないもので、これにも面をもつものともたないものがあり、後者が多い。**220**～**242**は頸部から胴部への変換点にあたり、両者を画するにあたって、連続刺突文・沈線・貼付突帯をめぐらせる三者がある。外面の調整は頸部と胴部で変えられている場合が多い。底部については、径が小さく上げ底状を呈するもの、高台に近い上げ底を呈するもの、平底のものの三者が認められる。また、**167**・**172**・**213**・**238**には頸部にヘラ描き文が認められる他、**136**・**137**は「孔列文土器」であるが、これについては別稿に記す。浅鉢にあって特徴的なものとしては、**259**・**260**の方形浅鉢、**265**・**266**の椀形浅鉢、**244**・**251**・**257**・**259**・**262**・**285**・**302**の黒色磨研、**264**の籾痕などが挙げられる。

（光永）



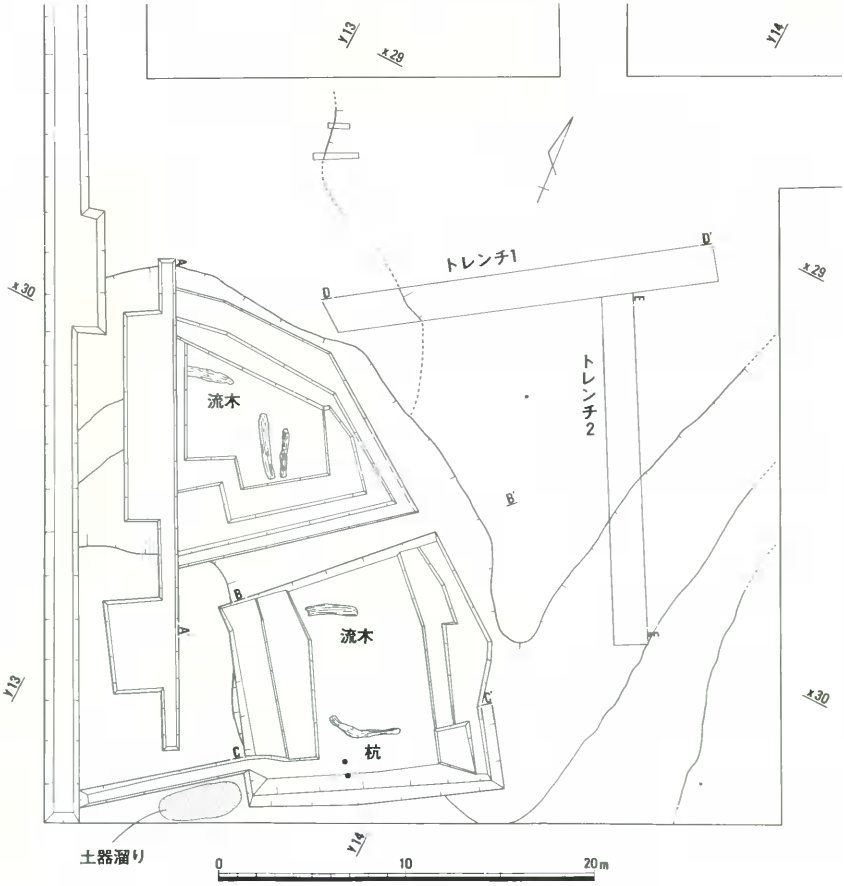
第91図　河道１出土遺物（縄文時代晩期13）（1/3）

河道２（第92～105図、図版７・37・38・39）

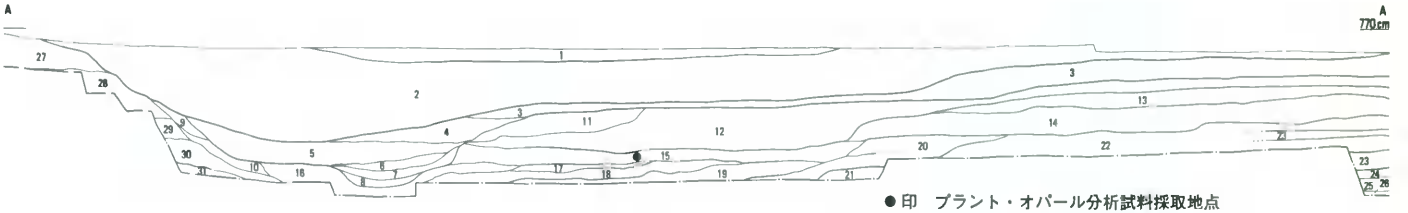
第４低位部、ＪＯ区で検出されたＳ字状に蛇行する河道である。時期については、縄文時代晩期から弥生時代中期までの遺物を包含しており、ここでは、縄文時代晩期の遺物を包含するものについて説明する。また、この河道２はＴＤ区で検出された河道１と同一のものであり、その下流にあたると判断している。なお、著しい湧水と土砂の崩壊のため調査の都合上、土層断面観察のトレンチを設定し、さらに調査区の西半部のみを現地表から約3.5ｍの深さまでを掘り下げるにとどまった。

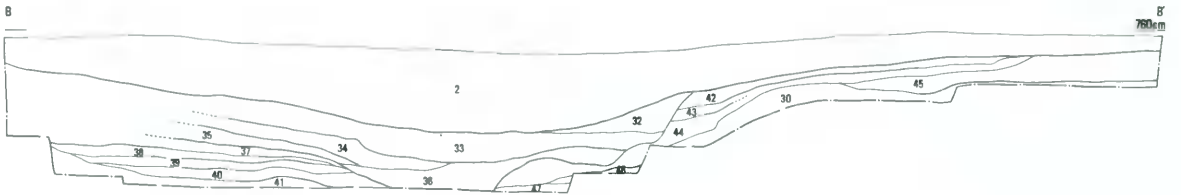
確認できた範囲では、幅約13～15ｍ、深さは２ｍを超え、海抜高では5.5ｍあたりに１つの底が認められる。土層断面の観察によれば、第93図Ａ－Ａ'の３～８層に見られる連続した堆積が存在し、その外側にも緩やかな傾斜を持つ堆積状況が看取される。これは、大きな低位部の堆積過程で、その

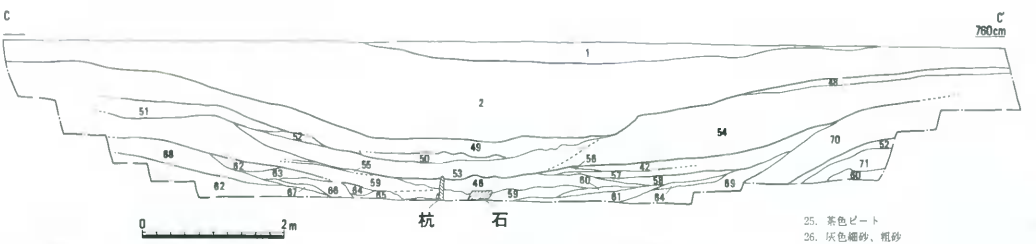
中を水流が蛇行し、流路を変えながら堆積が進行していったものと考えられる。埋土中には多くの植物遺体を含む粗砂層が互層状に認められ、径50～100cmもの流木が数多く埋没しており、激しい気候状況を想像させる。調査区南端部では、どの層位から打ち込まれたものかは不明であるが、海抜高5.5m付近で、第105図に図示したような加工痕らしきものがある杭を検出している。機能・用途・詳細な時期決定の確証はなく、不明といわざるを得ないが、少なくとも縄文時代晩期のなかにおさまるものと考えられる。植物遺体として多量に出土した種子類には、トチノキ、オニグルミ、エゴノキ、オカガシ、コナラなどがある。また、これらをサンプル資料としてＣ14年代の測定を行い、2610±90B.Pの年代を得ている。出土した縄文土器は、コンテナにして約10箱を超える。図示したもののうち、**339**～**365**は３～８層および49・50層に相当する層位からの出土である。**366**～**374**は、これより下位の54層を中心とした層位からのものであり、**375**～**481**までが、さらに下位に堆積を見る46層以下の砂礫層から出土したものである。また、**482**～**499**は、第92図に示した箇所で土器溜り状に出土したものである。これら河道２で出土した縄文時代晩期の土器には、突帯文の時期のものがほとんどなく、河道１と様相が異なる。　（大橋）



第92図　河道２検出状況（1/300）

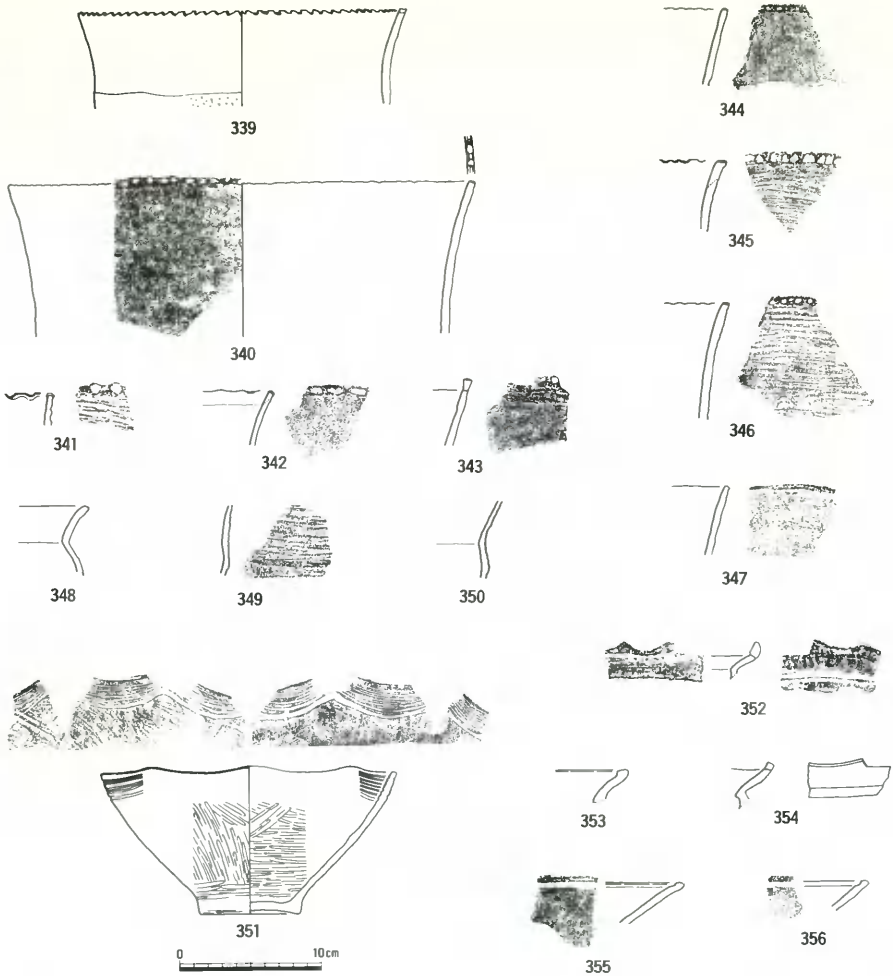






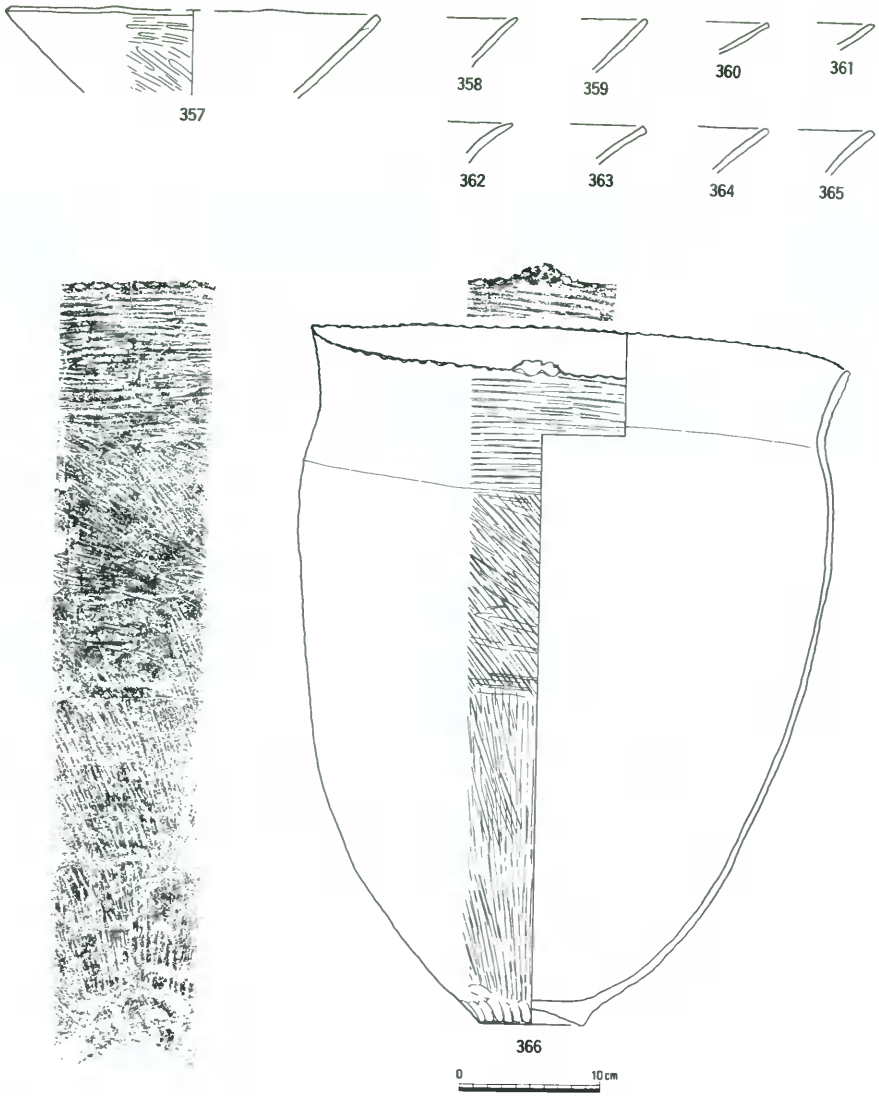
1　弥生時代中期中葉～後葉の河道２
2　弥生時代前期～中期前葉の河道２
3　灰オリーブ～灰色粘土
4　暗茶色粘土
5　暗～黒茶褐色シルト質粘土
6　灰色砂
7　淡茶色砂まじり粘土
8、淡茶色砂
9、灰茶色粘土
（植物遺体を含む）
10、淡灰色粘土まじり細砂
（植物遺体を含む）
11、黄灰オリーブ色粘土
12、灰色シルト質粘土
（炭を含む）
13、灰オリーブ色粘土まじり微砂
14、暗灰オリーブ色粘土まじり微砂
15、薄オリーブ色砂まじり粘土
16、灰茶色砂まじり粘土
（植物遺体を含む）
17、灰色粘土
（植物遺体を多く含む）
18、黄色粗砂まじり粘土
（植物遺体を含む）
19、灰色粗砂
（植物遺体を含む）
20、灰茶色粗砂まじり粘土
（植物遺体を含む）
21、明灰色粗砂
22、灰色粘土
23、暗灰色粘土
24、灰色微砂まじり粘土
25、茶色ピート
26、灰色細砂、粗砂
27、明黄褐灰色微砂
28、灰色細～粗砂
29、灰色微砂まじり粘土
30、灰色微～粗砂
（粘土まじり）
31、灰色砂礫
32、灰茶褐色粘質土
33　暗茶褐色微砂まじり粘質土
34、灰オリーブ～茶灰オリーブ色粘土
35、暗灰オリーブ色粘土
36、暗茶褐色微砂
37、暗灰色細砂まじり粘土
38、青灰～緑灰色砂礫まじり粘土
39、灰オリーブ色粘土
40　暗茶褐色微～細砂
41、灰褐色砂礫
42、灰～暗灰色粘土
43、暗～黒茶褐色シルト質粘土
（植物遺体を多く含む）
44、暗～黒茶褐色微～細砂まじりシルト
（植物遺体を多く含む）
45、灰オリーブ～薄灰茶色微砂
46、灰色～灰褐色微砂
47、暗茶褐色微砂まじり粘質土
48、薄灰色微砂
49、暗～黒茶褐色微砂まじり粘土
（植物遺体を多く含む）
50、暗灰色細砂
（植物遺体を含む）
51、灰オリーブ細砂
52、灰～オリーブ灰粘土
53、暗褐色粘土
（植物遺体を多く含む）
54、灰茶色微～細砂
55、薄灰色粗砂
56、灰～暗灰色細砂まじり粘土
57、灰茶褐色粘土
58、暗灰色微砂まじり粘土
59、暗茶褐色粗砂まじり粘質土
（炭、植物遺体を含む）
60、灰色粗砂
61、暗茶褐色粘土
62、暗オリーブ灰粘土
63　灰褐色粘土
64、黒茶褐色微砂まじり粘質土
65、茶褐色細砂まじり粘質土
66、灰～白色粗砂
67、暗褐灰色微砂まじり粘質土
68、オリーブ灰色細砂
69、暗灰～暗茶褐色細砂と粘土、植物遺体の混合
70、オリーブ灰色微砂
71、灰オリーブ色微砂まじり粘質土

第93図　河道２断面図（縄文～弥生時代中期）（1/80）



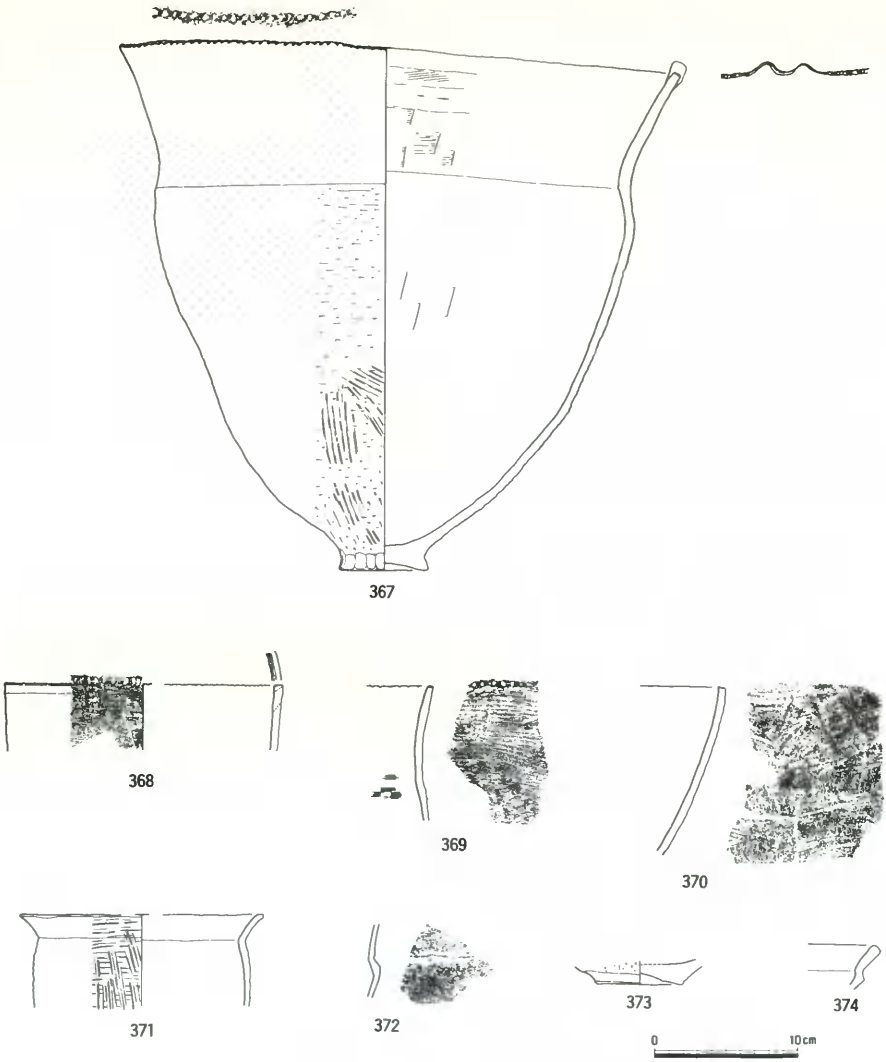
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
339	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕のちナデ。胴部ケズリ。	ナデ？。	逆Ｃ形		黄灰　2.5Y5/1
340	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	Ｄ形		灰黄　2.5Y6/2
341	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	逆Ｄ形		黒　2.5Y2/1
342	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ。	ナデ。	横丸形		黒　5Y2/1
343	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ。突起部分。	ナデ。	？		灰黄褐　10YR4/2
344	縄文土器	深鉢	ナデ。頸部下端強いナデ。	ナデ。	Ｄ形？		灰　5Y4/1
345	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	巻形？		灰黄　2.5Y7/2
346	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	横丸形？		黄灰　2.5Y4/1
347	縄文土器	深鉢？	条痕のちナデ。	ミガキ？。			灰黄　2.5Y6/2
348	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。			黒　5Y2/1
349	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ？。	ナデ。			灰黄　2.5Y6/2
350	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部アルカ属貝条痕とケズリ？。	ナデ。			黒　2.5Y2/1
351	縄文土器	浅鉢	ミガキ。５本の沈線。	ミガキ。５～７本の沈線。			黒褐　2.5Y3/1
352	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			黒褐　2.5Y3/1
353	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			黄灰　2.5Y4/1
354	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			オリーブ黒　5Y3/1
355	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。口縁端部挟り。			黒褐　2.5Y3/1
356	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。口縁端部挟り。			黒　5Y2/1

第94図　河道２出土遺物（縄文時代晩期１）（1/4）



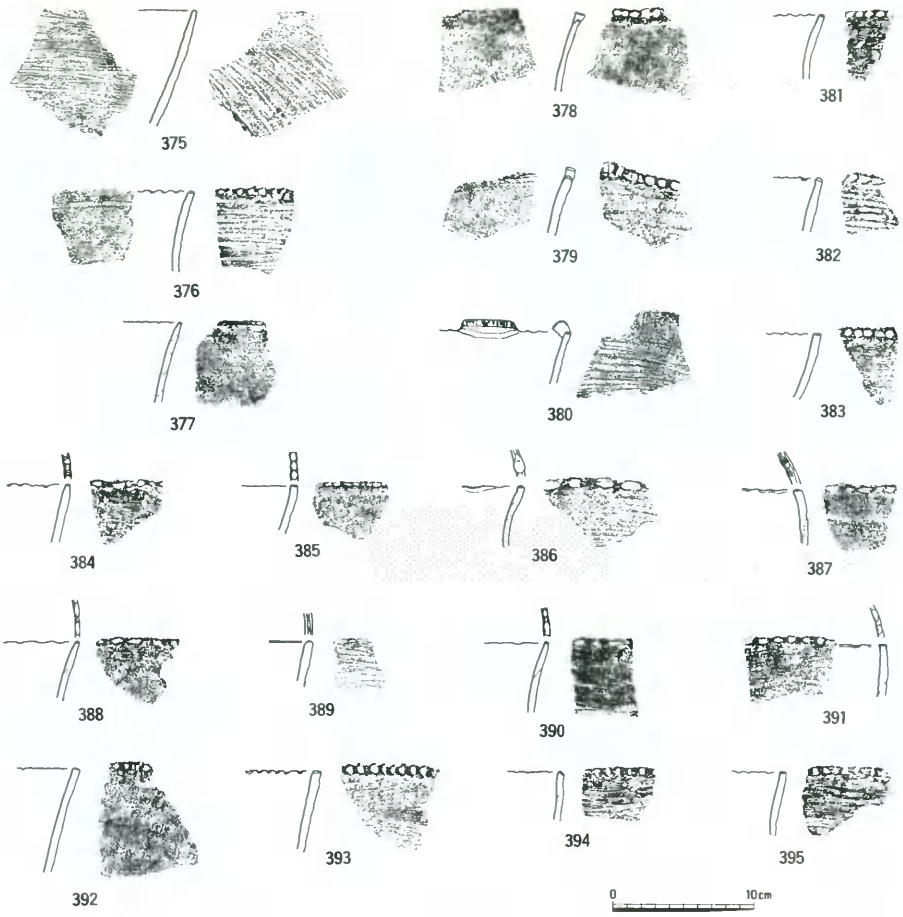
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
357	縄文土器	浅鉢	ミガキ。煤	ナデ。煤。			黒　5YR1、7/1
358	縄文土器	浅鉢	ナデ?。	ナデ?。			褐灰　10YR4/1
359	縄文土器	浅鉢	ミガキ?。	ミガキ?。			黄灰　2.5Y4/1
360	縄文土器	浅鉢	ケズリのちハケメ。	ナデ?。			黒　5Y2/1
361	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			灰黄褐　10YR5/2
362	縄文土器	浅鉢	ヨコミガキ。	ヨコミガキ			灰黄褐　10YR4/2
363	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			オリーブ黒　5Y3/1
364	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			黒　5Y2/1
365	縄文土器	浅鉢	ミガキ?。	ミガキ。			暗灰黄　2.5Y5/2
366	縄文土器	深鉢	アルカ風目条痕　棒状工具による条痕。	アルカ風目条痕のちナデ　突起は一カ所。	横丸形		にぶい黄橙　10YR7/3

第95図　河道２出土遺物（縄文時代晩期２）（1/4）



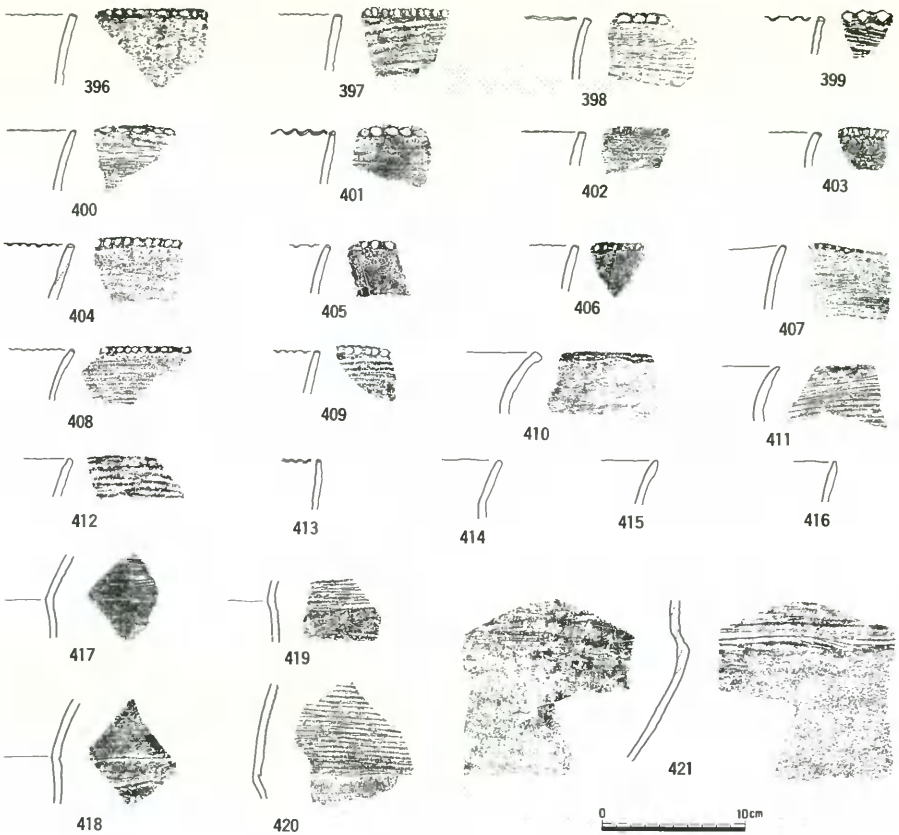
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
367	縄文土器	深鉢	口頸部ナデ。胴部アルカ属貝条痕のちケズリ。	板ナデとナデ。突起は一カ所。	蕨形		灰白　2.5Y8/2
368	縄文土器	深鉢	ヨコのケズリ。口唇部刻みは不規則。	ナデ。	蕨形		黒　5Y2/1
369	縄文土器	深鉢	口頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ。	ナデ、ハケメ。	米粒形		にぶい黄橙　10YR7/4
370	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。			黄灰　2.5Y4/1
371	縄文土器	深鉢	口頸部アルカ属貝条痕。胴部アルカ属貝条痕と条痕。	ナデ。			黒褐　10YR2/2
372	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。炭化物。			黒褐　2.5Y3/1
373	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ。底部中央磨滅。				灰白　10YR7/2
374	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			黒　2.5Y2/1

第96図　河道２出土遺物（縄文時代晩期３）（1/4）



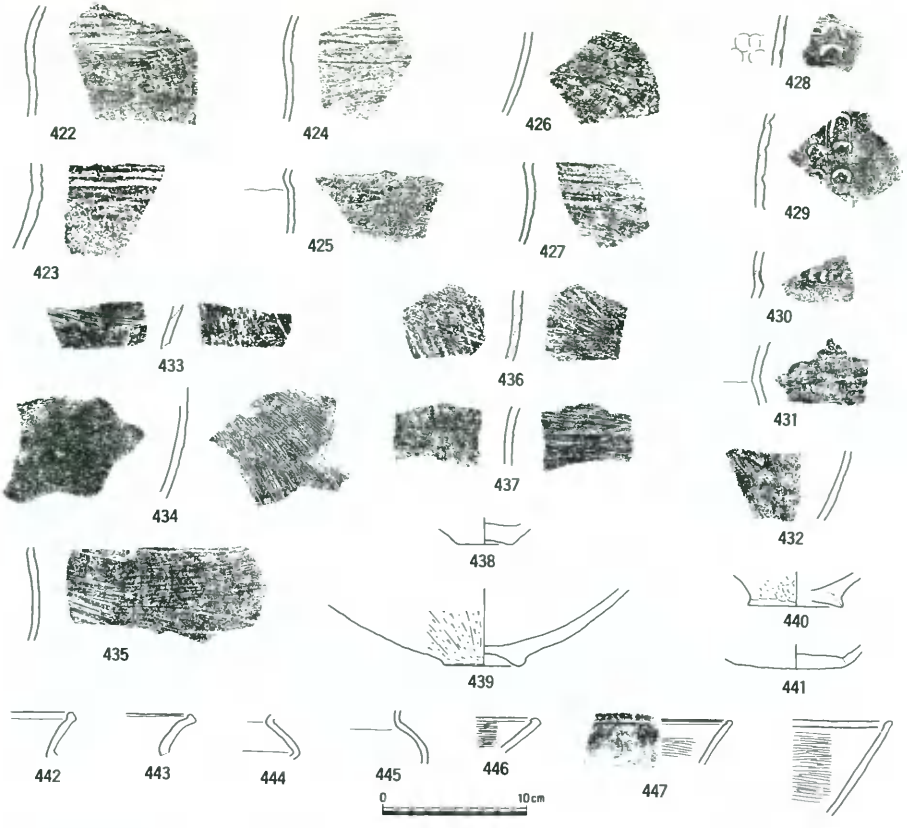
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
375	縄文土器	深鉢	斜めの１本ずつの条線。	アルカ属貝条痕			黒　5Y2/1
376	縄文土器	深鉢	ヨコのアルカ属貝条痕。	ナデ。	菱形？		黒　5Y2/1
377	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	細長形？		黄灰　2.5Y4/1
378	縄文土器	深鉢	ナデ。突起部分。	アルカ属貝条痕のちナデ。	横丸形？		黄灰　2.5Y4/1
379	縄文土器	深鉢	ケズリ。突起部分。	アルカ属貝条痕のちナデ？。	逆Ｄ形		灰黄　2.5Y6/2
380	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。突起部分。	ナデ。	横丸形		褐灰　10YR4/1
381	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ？。	ナデ。	菱形？		灰黄　2.5Y6/2
382	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	菱形？		黒褐　2.5Y3/1
383	縄文土器	深鉢？	ケズリのちナデ？。	ナデ。	？		灰黄褐　10YR6/2
384	縄文土器	深鉢	ケズリ。	アルカ属貝条痕のちナデ。	菱形		灰黄褐　10YR6/2
385	縄文土器	深鉢？	ナデ。煤とふきこぼれ。	ナデ。	横丸形		黒　5Y2/1
386	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	横丸形		灰黄褐　10YR6/2
387	縄文土器	深鉢	ケズリのちナデ？。口唇部貝殻刻目。	ナデ。	横丸形		灰黄　2.5Y6/2
388	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	横丸形		灰黄　2.5Y7/2
389	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕	ナデ？。	横丸形		黄灰　2.5Y4/1
390	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ。	ナデ。	菱形		黄灰　2.5Y4/1
391	縄文土器	深鉢	ナデ。ふきこぼれ。	アルカ属貝条痕とナデ。	横丸形		黒　5Y2/1
392	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	Ｄ形		黄灰　2.5Y5/1
393	縄文土器	深鉢	ケズリ？	アルカ属貝条痕？のちナデ。	Ｄ形		黒　5Y2/1
394	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	逆Ｄ形		黒　10YR7/1
395	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕	ナデ、ハケメ？	○		灰黄褐　10YR5/2

第97図　河道２出土遺物（縄文時代晩期４）（1/4）



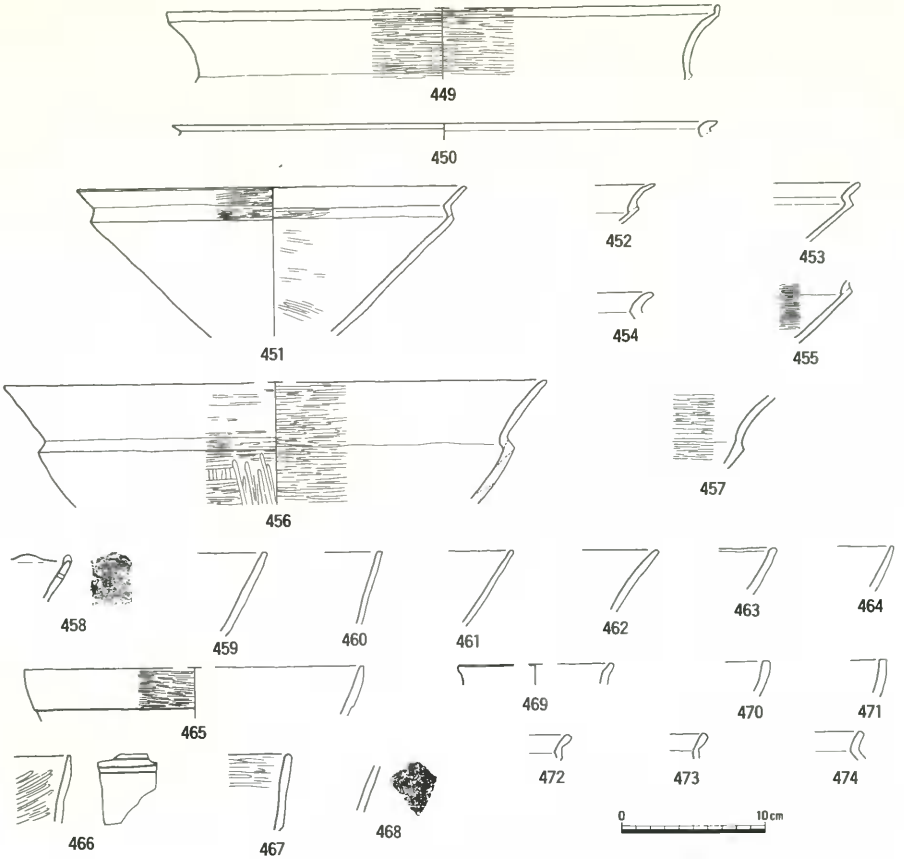
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
396	縄文土器	深鉢	ケズリ。ふきこぼれ。	ナデ。	逆Ｄ形		灰黄褐　10YR5/2
397	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。煤。	アルカ属貝条痕？のちナデ。	逆Ｄ形？		黄灰　2.5Y4/1
398	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	横丸形		黒　5Y2/1
399	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	菱形		灰　5Y4/1
400	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	横丸形？		灰　5Y4/1
401	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	横丸形		黒　5Y2/1
402	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	細長形		黒褐　2.5Y3/1
403	縄文土器	深鉢？	ナデ。	ナデ。	Ｄ形		灰黄褐　10YR6/2
404	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕？。煤。	ナデ。	Ｄ形？		黒褐　2.5Y3/1
405	縄文土器	深鉢	タテ条痕のちナデ	ナデ。	菱形？		灰黄褐　10YR5/2
406	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	Ｄ形？		灰黄　2.5Y6/2
407	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。波状口縁。	ナデ。	Ｄ形		黒　7.5Y2/1
408	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	菱形		灰黄褐　10YR5/2
409	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	アルカ属貝条痕のちナデ。	Ｄ形？		黒　2.5Y2/1
410	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ。	アルカ属貝条痕のちナデ。			黒褐　2.5Y3/1
411	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。			灰黄　2.5Y7/2
412	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。			暗灰黄　2.5Y4/2
413	縄文土器	浅鉢	アルカ属貝条痕。	アルカ属貝条痕？のちナデ。	Ｄ形		オリーブ黒　5Y3/1
414	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	？		灰黄褐　10YR4/2
415	縄文土器	深鉢？	ナデ。	アルカ属貝条痕のちナデ。			灰黄褐　10YR4/2
416	縄文土器	浅鉢？	ナデ。	ナデ。			灰黄褐　10YR5/2
417	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ。煤。	ナデ。			黒　5Y2/1
418	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部ケズリ。	頸部ナデ。胴部アルカ属貝条痕のちナデ。			黄灰　2.5Y6/2
419	縄文土器	浅鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部板ケズリ。	ナデ。			暗灰黄　2.5Y4/2
420	縄文土器	浅鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ。	ナデ。			黒　5Y2/1
421	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ。	ナデ。			黒　5Y2/1

第98図　河道２出土遺物（縄文時代晩期５）（1/4）



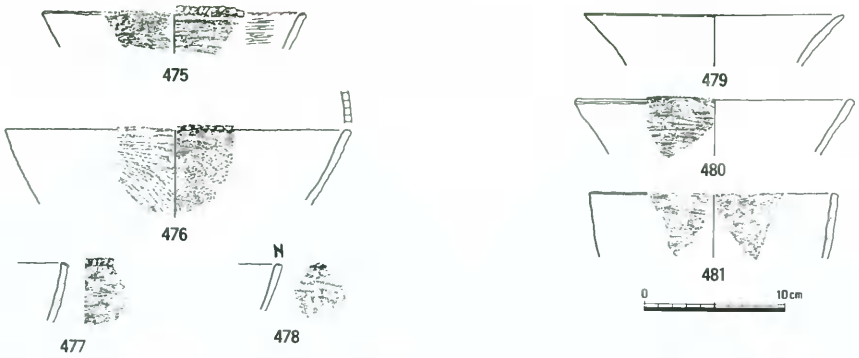
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
422	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ。	頸部ナデ。胴部板ナデ？。			灰黄褐　10YR6/2
423	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ。	アルカ属貝条痕？のちナデ。			黒　2.5Y2/1
424	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ。	アルカ属貝条痕のち板ナデ？。			灰黄　2.5Y6/2
425	縄文土器	浅鉢	胴部ケズリ。	アルカ属貝条痕のちナデ。			黄灰　2.5Y4/1
426	縄文土器	深鉢	ケズリ。	ナデ、板ナデ？。			灰黄褐　10YR4/2
427	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。			オリーブ黒　5Y3/1
428	縄文土器	深鉢	ナデ。タテ刺突文。	ユビオサエ、ナデ。			灰黄　2.5Y6/2
429	縄文土器	深鉢	ナデ。タテ刺突文。	ナデ。			黄灰　2.5Y4/1
430	縄文土器	深鉢	ケズリ。C形刺突文。	ナデ。			灰　5Y4/1
431	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部ケズリ。	頸部ナデ。胴部アルカ属貝条痕のちナデ。			黒褐　10YR3/1
432	縄文土器	深鉢	ケズリのちナデ？。	板ナデ？。			黄灰　2.5Y5/1
433	縄文土器	深鉢	ケズリ。	アルカ属貝条痕のちナデ。			黄灰　2.5Y6/1
434	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕？。	アルカ属貝条痕。			黒　7.5Y2/1
435	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。			黒褐　2.5Y3/1
436	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	アルカ属貝条痕。			黄灰　2.5Y5/2
437	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。			灰白　2.5Y7/1
438	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ。	ナデ。			黄灰　2.5Y4/1
439	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ。底部ナデ。	アルカ属貝条痕のちナデ。			黄灰　2.5Y5/1
440	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ。底部ナデ。	ナデ。			にぶい赤橙　5YR5/3
441	縄文土器	深鉢	ナデ。	胴部アルカ属貝条痕。底部ナデ。			灰黄褐　10YR5/2
442	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			暗灰黄　2.5Y5/2
443	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。口縁端部に狭り。			黒褐　2.5Y3/1
444	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ナデ。			黄灰　2.5Y6/1
445	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	頸部ミガキ。胴部ナデ。			灰　5Y4/1
446	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			灰黄　2.5Y6/2
447	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。口縁部沈線。			黄灰　2.5Y4/1
448	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			灰黄　2.5Y6/2

第99図　河道２出土遺物（縄文時代晩期６）（1/4）



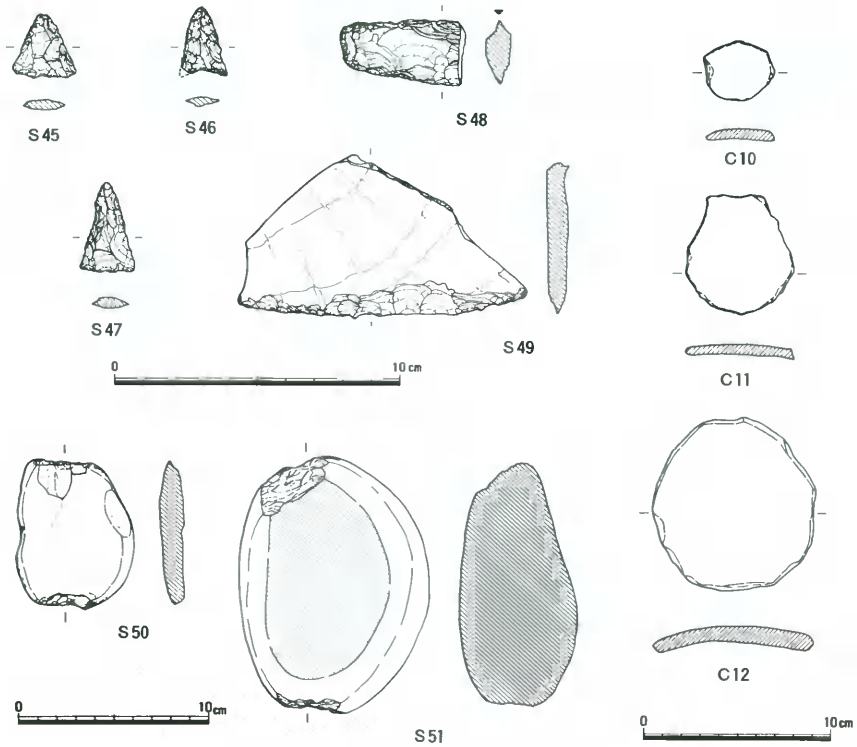
挿図番号	種別	器種	胎土 外面	胎土 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
449	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			黄灰　2.5Y4/1
450	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			暗灰黄　2.5Y5/2
451	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			灰黄　2.5Y6/2
452	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			黒　2.5Y2/1
453	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			オリーブ黒　5Y3/1
454	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			黄灰　2.5Y4/1
455	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			黒褐　2.5Y3/1
456	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			黄灰　2.5Y5/1
457	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			灰黄　2.5Y6/2
458	縄文土器	浅鉢	ミガキ。穿孔。	ミガキ。			オリーブ黒　5Y3/1
459	縄文土器	浅鉢？	ナデ。	板ナデ？。			灰黄褐　10YR6/2
460	縄文土器	浅鉢？	アルカ属貝条痕のちナデ？。	アルカ属貝条痕のちナデ。			黒　5Y2/1
461	縄文土器	浅鉢	ナデ。	ナデ。			黒褐　2.5Y3/1
462	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			黄灰　2.5Y4/2
463	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			オリーブ黒　5Y3/1
464	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			黒　5Y2/1
465	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ナデ。			黒褐　2.5Y3/1
466	縄文土器	浅鉢？	ミガキ？。３本の沈線。	ミガキ。			灰黄　2.5Y6/2
467	縄文土器	浅鉢？	ミガキ？。	ミガキ。			黄灰　2.5Y6/1
468	縄文土器	浅鉢	ミガキ。沈線。	ミガキ？。			オリーブ黒　5Y3/1
469	縄文土器	浅鉢？	アルカ属貝条痕のちナデ？。	ナデ。			黒褐　2.5Y3/1
470	縄文土器	浅鉢	ケズリ。	ナデ？。			灰黄褐　10YR6/2
471	縄文土器	浅鉢	ナデ？。	ナデ。			浅黄　2.5Y7/3
472	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			黄灰　2.5Y4/1
473	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			黄灰　2.5Y4/1
474	縄文土器	浅鉢	ミガキ？。	ミガキ？。			黄灰　2.5Y4/1

第100図　河道２出土遺物（縄文時代晩期７）（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
475	縄文土器	浅鉢？	ナデ。一部アルカ属貝条痕？	ミガキ。	C形		灰黄　2.5Y6/2
476	縄文土器	深鉢？	アルカ属貝条痕。	アルカ属貝条痕のちナデ。	D形？		黒　5Y2/1
477	縄文土器	深鉢？	ケズリ、ナデ。	ナデ。	D形		灰黄褐　10YR4/2
478	縄文土器	浅鉢？	アルカ属貝条痕のちケズリ。	ナデ。	細長形		暗灰黄　2.5Y5/2
479	縄文土器	浅鉢	アルカ属貝条痕のちナデ。	ミガキ。			にぶい黄橙　10YR6/3
480	縄文土器	浅鉢？	アルカ属貝条痕。	アルカ属貝条痕のちナデ。			黒褐　10YR3/1
481	縄文土器	深鉢	ケズリ、ナデ。	アルカ属貝条痕のちナデ。			灰黄　2.5Y7/2

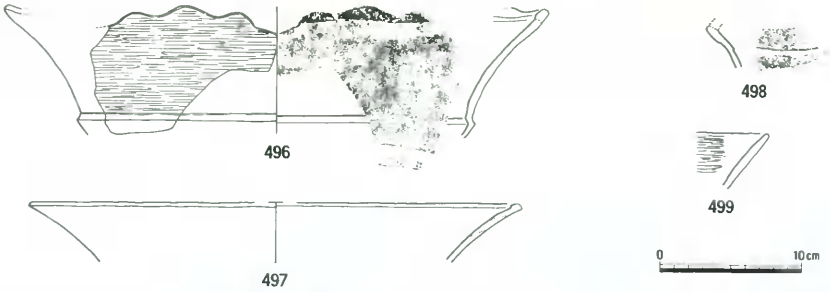
第101図　河道２出土遺物（縄文時代晩期８）（1/4）



第102図　河道２出土遺物（縄文時代晩期９）（1/2・1/3）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
482	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕、胴部ケズリのちアルカ属貝条痕？。	ナデ。突起あり。			にぶい黄橙　10YR7/2
483	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。タテ刺突文。	ナデ。	米粒形		灰白　2.5Y8/2
484	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	？		灰黄褐　10YR4/2
485	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	逆Ｄ形？		灰白　2.5Y8/2
486	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	楕形		黄灰　2.5Y4/1
487	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	横丸形		灰白　2.5Y8/2
488	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕、胴部ケズリ。	ナデ。			灰黄褐　10YR4/2
489	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕タテ２列の刺突文。胴部ケズリ。	ナデ。			灰白　2.5Y8/2
490	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕　胴部ケズリ。	ナデ。			にぶい黄橙　10YR7/2
491	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ。	ナデ？。			黒褐　10YR3/2
492	縄文土器	深鉢	ケズリか巻貝条痕	ナデ。縦痕？。			灰白　10YR8/2
493	縄文土器	深鉢	胴部アルカ属貝条痕　底部ケズリのちナデ？。	ナデ？。			黄灰　2.5Y4/1
494	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ、底部ナデ。	アルカ属貝条痕のちナデ。			黄灰　2.5Y4/1
495	縄文土器	深鉢	胴部ナデ、底部ケズリのちナデ。	ナデ。			にぶい黄橙　10YR7/3

第103図　河道２出土遺物（縄文時代晩期10）（1/4）



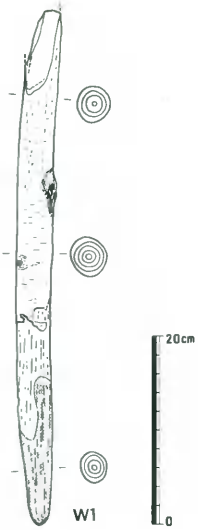
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
496	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			黒褐　10YR2/2
497	縄文土器	浅鉢	ミガキ？	ミガキ。			灰黄褐　10YR4/2
498	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			黒　10YR2/1
499	縄文土器	深鉢	ミガキ	ミガキ。			黄灰　5Y2/1

第104図　河道２出土遺物（縄文時代晩期11）（1/4）

(6)　その他の遺構・遺物

第１低位部と第１微高地（第34・106～116・255図）

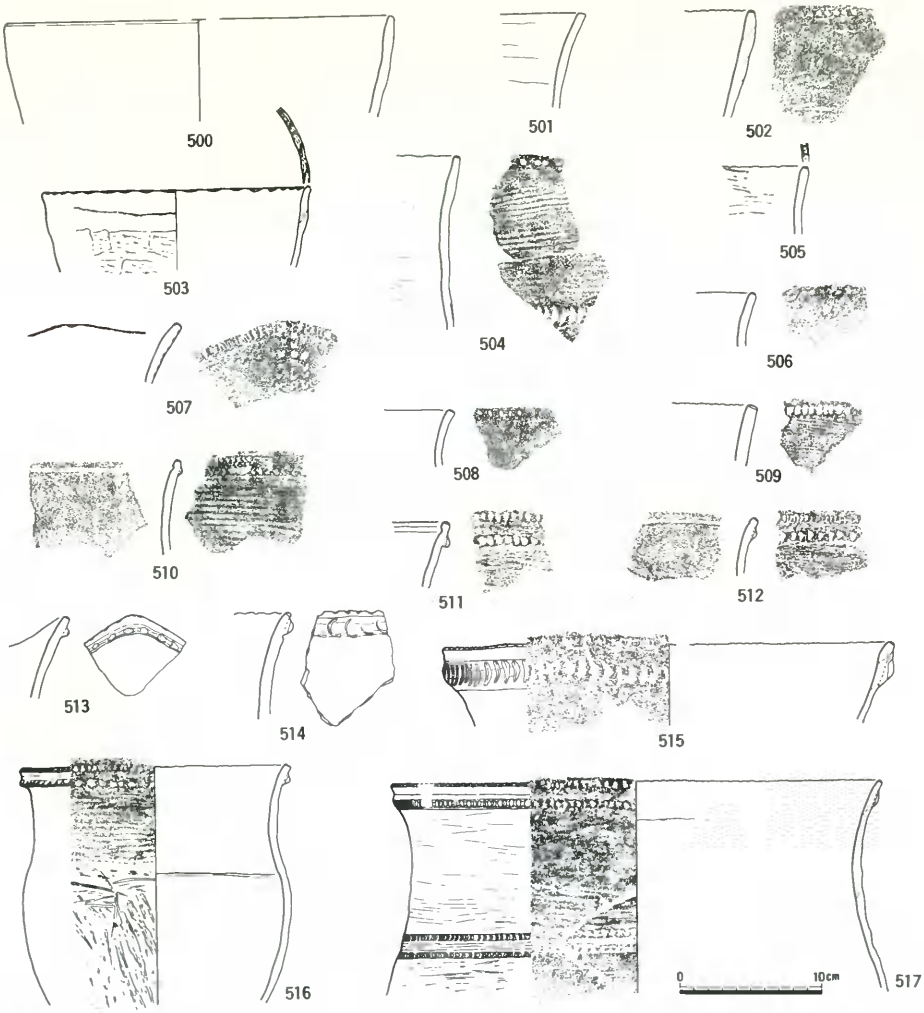
調査対象地の西側部分で、ＴＤ１～６区およびＨ11～13区にあたる。第255図にみられるように、微高地が北西から南東へ舌状にのびており、南西部が凹地状に落ち込んでいる状況が看取される。特にＴＤ６区、Ｈ13区を中心に深くなっており、この部分を低位部として扱った。しかし、微高地と低位部の境は明瞭でなく、微高地部分と低位部分に遺物を分けることも不可能であった。また当地区における晩期土器の出土状況は概要にも少しふれているが、縄文時代晩期以降の遺構の基盤層から出土する場合と、基盤層の上に堆積している包含層から弥生時代前期以降の遺物とともに出土する場合とがあり、前者を第106～108図に、後者を第111～116図に分けて図示した。両者とも縄文時代晩期中葉～後葉の遺物が混在しており、層毎の一括性を捉えられなかった。その要因として調査時に単一層のみを掘り分けられなかったこと、基盤層と縄文時代の遺構埋土が見分けにくく、遺構に伴うものも基盤層の遺物として扱ってしまった可能性があることなどが考えられる。しかし第255図の土層断面図第15層のようにここでは基盤の上面がさらに分層できるようで、当期に形成された包含層の存在を想定しうる。石器・土製品についてはそれ自体で所属時期は求められないので、基盤層掘り下げ中に出土したものを縄文時代晩期と考えた。その中でも、Ｈ11区の東端斜面からはまとまって出土しており第110図に示した。それ以外については第109図に示している。　（久保）



第105図　河道２出土遺物（縄文時代晩期12）（1/6）

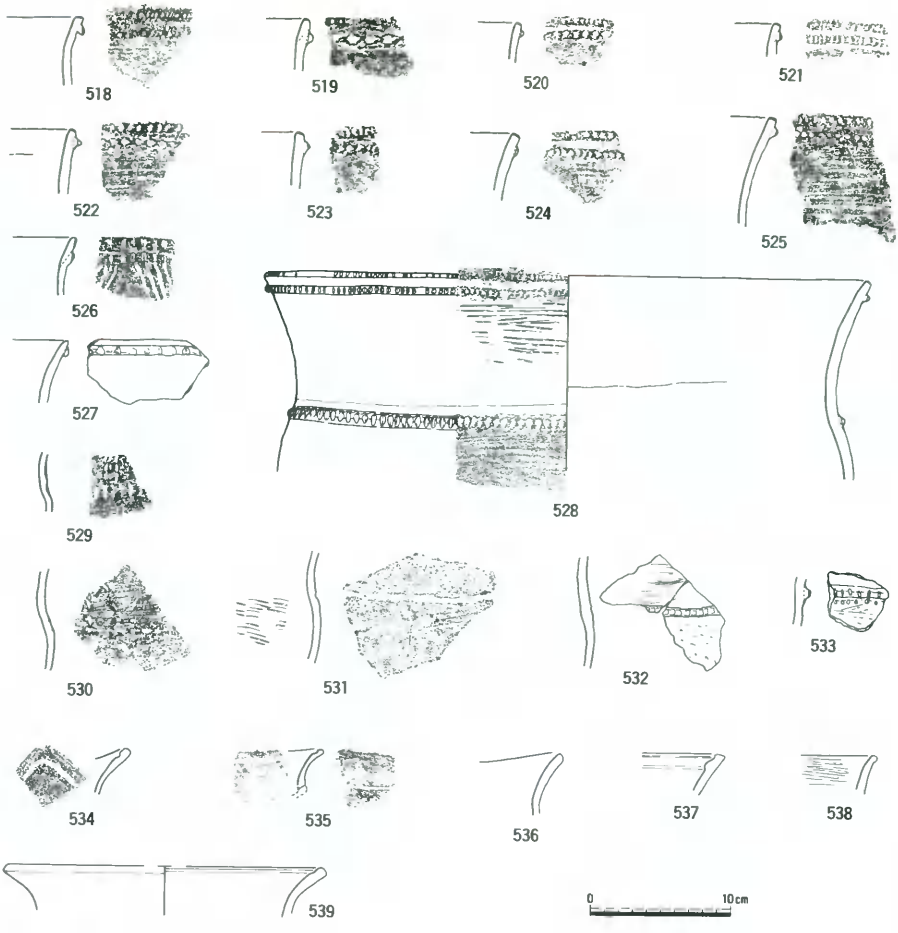
第２微高地（第117～122図）

第２微高地は調査区のほぼ中央部に拡がっている微高地で、第２低位部をはさんで西半部と東半部に区分して考えることができる。晩期の遺構はすでに記したようにおもに西半部で検出されている。さてこれまで記述してきた遺構以外としては柱穴や土壙状遺構がある。柱穴についてはその一部はす



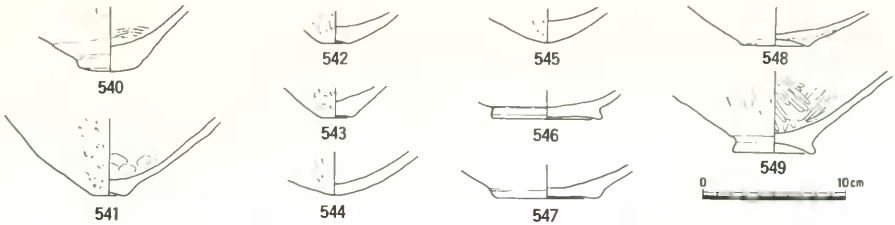
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
500	縄文土器	深鉢？	ケズリ？のちナデ。	ナデ？。			褐灰　7.5YR6/1
501	縄文土器	深鉢	ナデ。	ミガキ。			褐灰　10YR4/1
502	縄文土器	深鉢	ケズリ。	ナデ。	逆Ｄ形		浅黄　2.5Y8/3
503	縄文土器	深鉢	ナデ、ケズリ。口唇部ユビオサエ。	ナデ。			黄灰　2.5Y4/1
504	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕、ナデ。逆Ｃ形刺突文。	板ナデ？。	Ｄ形		灰褐　7.5YR4/2
505	縄文土器	深鉢	ユビオサエのちナデ。	アルカ属貝条痕のちナデ。	逆Ｄ形		灰黄褐　10YR4/2
506	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ。	ナデ。	菱形		暗灰黄　2.5Y5/2
507	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。タテ刺突文。		細長形		灰黄褐　10YR4/1
508	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ。	逆Ｄ形		浅黄橙　10YR8/4
509	縄文土器	深鉢	ハケメ？。	ナデ。	米粒形		黒褐　10YR3/1
510	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。口縁部沈線。	Ｃ、逆Ｃ形	Ｃ、逆Ｃ形	灰白　2.5Y8/2
511	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ？。	ナデ。口縁部沈線。	菱形	Ｄ形	にぶい橙　7.5YR7/4
512	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕？。	ナデ。口縁部沈線。	細長形	Ｄ形	灰黄褐　10YR4/2
513	縄文土器	深鉢？	ナデ。	ナデ？。	？	Ｄ形	灰褐　7.5YR6/2
514	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ。	菱形？	Ｃ形	黒褐　10YR3/1
515	縄文土器	深鉢	ナデ。	アルカ属貝条痕のちナデ。	細長形	逆Ｃ形	暗褐　10YR3/3
516	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ。	ナデ。	細長形	菱形	にぶい黄橙　10YR7/2
517	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ　逆Ｃ形刺突文	ナデ。	？	Ｄ形？	灰白　10YR8/2

第106図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期１）（1/4）



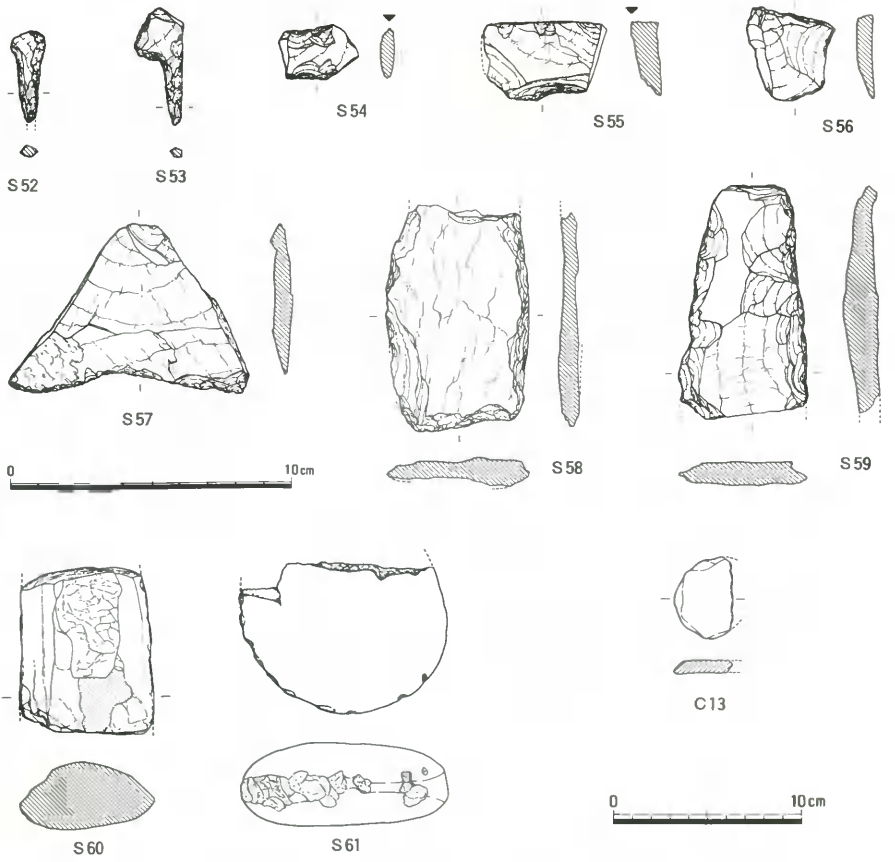
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
518	縄文上器	深鉢	板ナデ。	ナデ。	細長形	細長形	にぶい黄橙　10YR6/4
519	縄文上器	深鉢	ナデ？。	ナデ。	細長形？	D形	オリーブ黒　5Y3/1
520	縄文上器	深鉢	ナデ。	ナデ。	米粒形	C形	黄灰　2.5Y4/1
521	縄文上器	深鉢	ナデ。	ナデ。	細長形？	細長形	灰黄褐　10YR4/2
522	縄文上器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ？。	D形？	D形	灰白　2.5Y8/2
523	縄文上器	深鉢	ナデ。	ナデ？。	米粒形	菱形	にぶい黄橙　10YR7/2
524	縄文上器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	D形	？	にぶい黄橙　10YR7/2
525	縄文上器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	D形	D形	灰白　2.5Y8/2
526	縄文上器	深鉢	ナデ。ヘラ描き沈線文、刻み目は同時。	ナデ。	細長形	細長形	灰白　2.5Y8/2
527	縄文上器	深鉢	ナデ。	ナデ。		菱形	灰白　10YR8/1
528	縄文上器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕のちナデ。胴部二枚貝条痕。	ナデ。	小D形	細長形	灰白　2.5Y8/1
529	縄文上器	深鉢	頸部ナデ、刺突文。	ナデ。			灰黄褐　10YR6/2
530	縄文上器	深鉢	頸部ナデ、山形刺突文、ヨコ刺突文。胴部ケズリ。	ナデ？。			褐灰　10YR4/1
531	縄文上器	深鉢	胴部ケズリ、沈線。	頸部ナデ。胴部アルカ属貝条痕のちナデ。			にぶい橙　7.5YR7/4
532	縄文上器	深鉢	頸部ナデ。胴部ケズリ、押引刺突文。	ナデ。			灰黄褐　10YR6/2
533	縄文上器	深鉢	頸部ナデ。胴部ケズリ、ヨコ刺突文。	ナデ。			にぶい橙　7.5YR7/3
534	縄文上器	浅鉢	ナデ。波状口縁。	ナデ、ミガキ。口縁部沈線。			灰黄褐　10YR6/2
535	縄文上器	浅鉢	口縁部ナデ、沈線。	口縁部ナデ、沈線。			灰白　2.5Y7/1
536	縄文上器	浅鉢	ミガキ。波状口縁	ナデ。			黄灰　2.5Y4/1
537	縄文上器	深鉢？	ミガキ？。	ミガキ？。口縁部に段。			黄灰　2.5Y5/1
538	縄文上器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			灰白　2.5Y8/2
539	縄文上器	浅鉢	ミガキ？	口縁端部凹線、ミガキ？。			黒褐　10YR3/1

第107図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期２）（1/4）

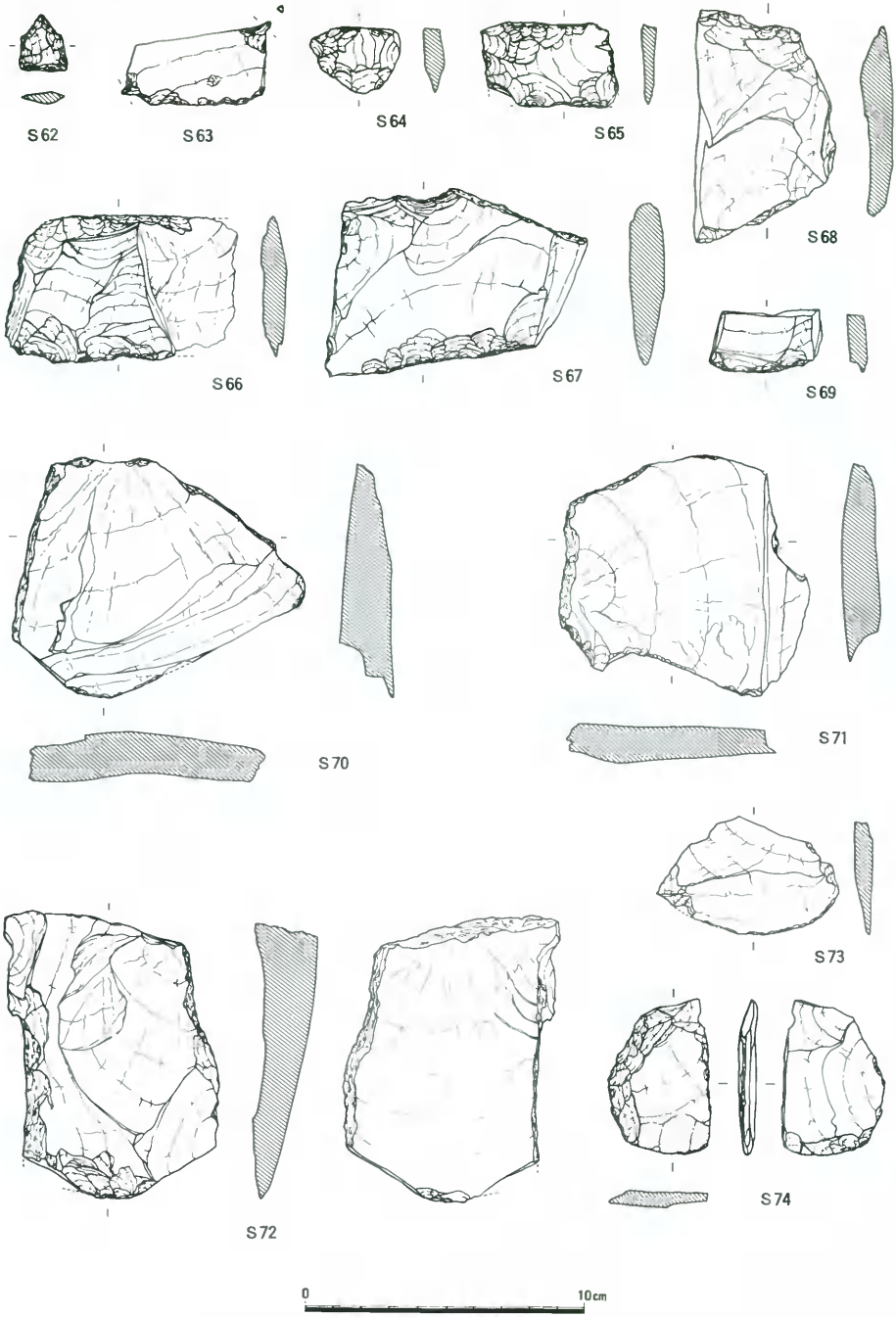


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
540	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ。	アルカ属貝条痕のちナデ。			にぶい橙　7.5YR7/3
541	縄文土器	深鉢？	胴部ケズリ。底部ユビオサエ。	ナデ。			にぶい黄　2.5Y6/3
542	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ。	ナデ。			灰白　2.5Y8/2
543	縄文土器	深鉢？	胴部ケズリ。底部ナデ。				にぶい黄橙　10YR7/4
544	縄文土器	深鉢	ケズリ。	ナデ。			浅黄橙　10YR8/3
545	縄文土器	深鉢	ケズリ。	ナデ。			灰白　7.5YR7/1
546	縄文土器	浅鉢	ナデ。	ミガキ。			灰白　2.5Y7/1
547	縄文土器	浅鉢		ナデ？。			にぶい黄橙　10YR7/4
548	縄文土器	深鉢	ケズリ。	ナデ。			にぶい赤褐　5YR5/4
549	縄文土器	浅鉢	胴部アルカ属貝条痕。底部ナデ。	ミガキ			にぶい黄橙　10YR7/4

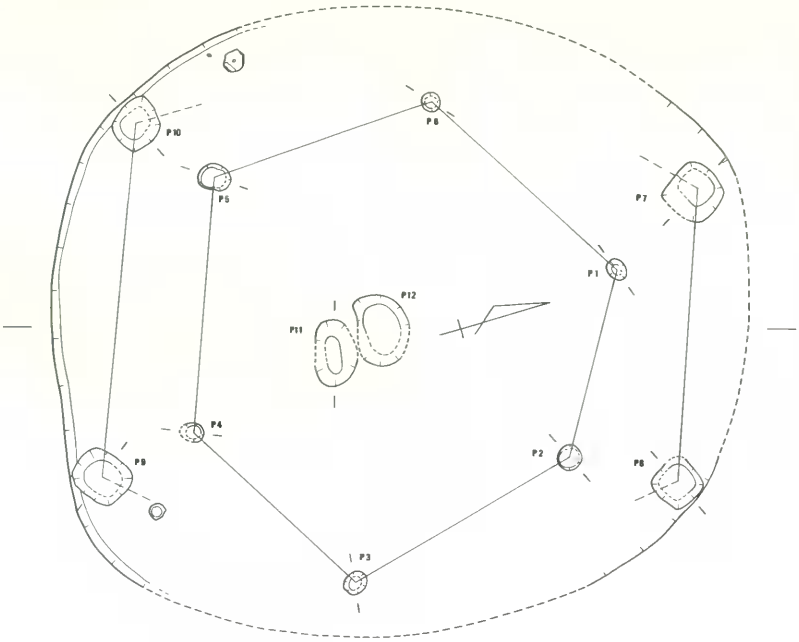
第108図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期３）（1/4）



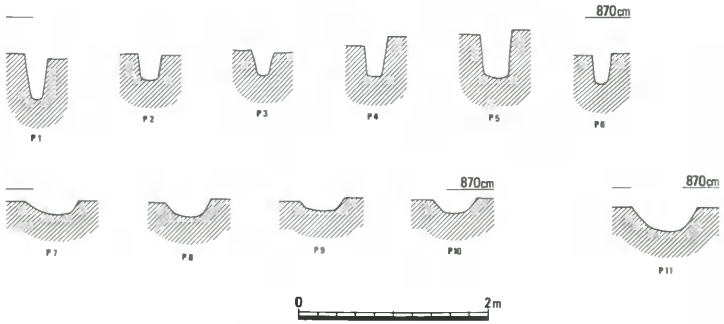
第109図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期４）（1/2・1/3）



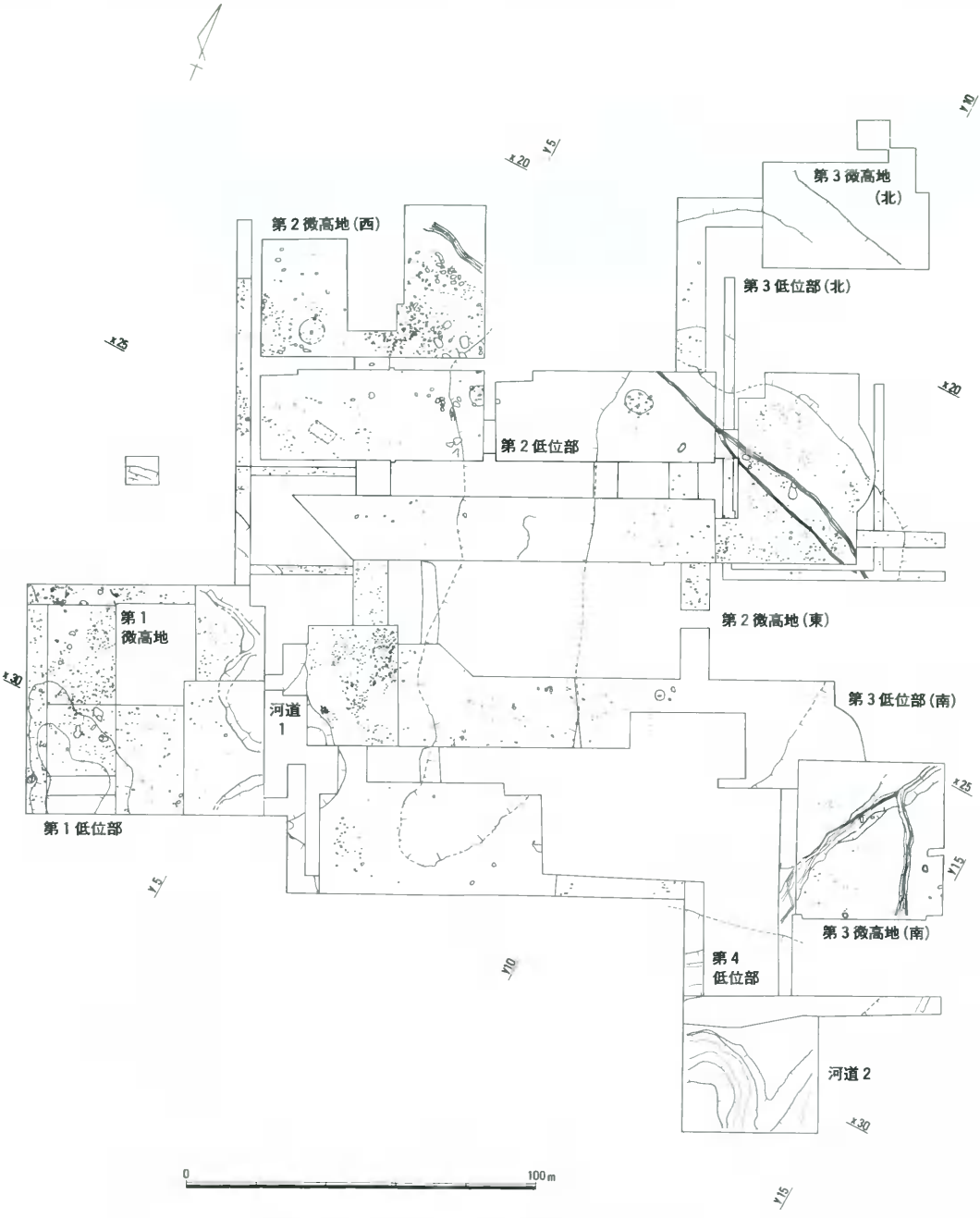
第110図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期５）（1/2）



1．灰茶褐色土　　2．暗灰茶色土（炭含む）



第130図　竪穴住居１（1/60）



第129図　弥生時代前期～中期前葉遺構全体図(1)（1/1500）

第４節　弥生時代前期～中期前葉の遺構・遺物

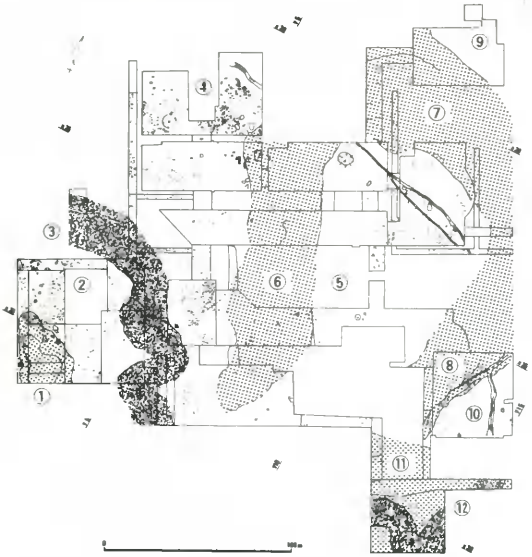
１．概　　要

この段階の地形は第128図に示したように大きくは３か所の微高地と４か所の低位部および河道１・２に区分できる。

遺構は竪穴住居、掘立柱建物、土壙、土器棺墓、火処、溝、水田などが検出できた。そのうち竪穴住居は４軒検出できたが、後世の削平によって残存状況は良くなかった。しかしながら、竪穴住居２では、多くのサヌカイト製石器や剥片とともに緑色凝灰岩製の管玉未製品や玉砥石が出土しており、玉作りが行われていたことが明らかになったことは重要であろう。掘立柱建物は１棟確認できたのみである。土壙は67基を報告しているが、それ以外にも土壙状の遺構は多数確認されている。土器棺墓は１基のみ確認できた。水田については、調査後の土壌のプラント・オパール分析によってその可能性が考えられたものである。河道１・２は同一の河道と考えられ、縄文時代後・晩期から引き続いている。

遺物は竪穴住居や土壙から出土したものは少なかったが、低位部の包含層や溝から土器が多数出土している。

今回検出した遺構・遺物の多くは弥生時代前期前葉から中葉段階のもので、当該期の集落や土器・石器などの様相を知るうえで重要であろう。（平井）



第128図　弥生時代前期～中期前葉地形概略図（1/3000）

２．遺構・遺物

(1)　竪穴住居

竪穴住居１（第132・133図、図版９）

第２微高地（西）のＡＴ区南西部に所在して、竪穴住居２との距離45ｍを測り、火処25、土壙31・32などが近接する。中央部を溝11・14に大きく削られ、北辺の遺存度も悪いが、平面形は最大径7.88ｍ程度の円形に想定される。壁体溝はなく、床面は壁際から中央部へ緩やかに傾斜し、海抜8.55ｍ程度となる。主柱穴はＰ１～Ｐ６の６本で、柱間は205～270㎝を測り、側壁との距離は約１ｍである。柱掘り方は径20～35㎝の楕円形で、柱痕跡は確認されなかった。中央穴Ｐ12は平面形76×54㎝の楕円形で、深さ25㎝を測り、隣接するＰ11よりも11㎝深い。Ｐ１・Ｐ２・Ｐ４・Ｐ５にそれぞれ対応する壁

側面は磨滅しており、磨滅部分に横方向の線条痕が観察できた。またこの磨滅部分を調整痕が切っており、再加工が行われたものと考えられる。時期は明確ではないが晩期のものと考えたい。　　（平井）

第４低位部（第33・126図）

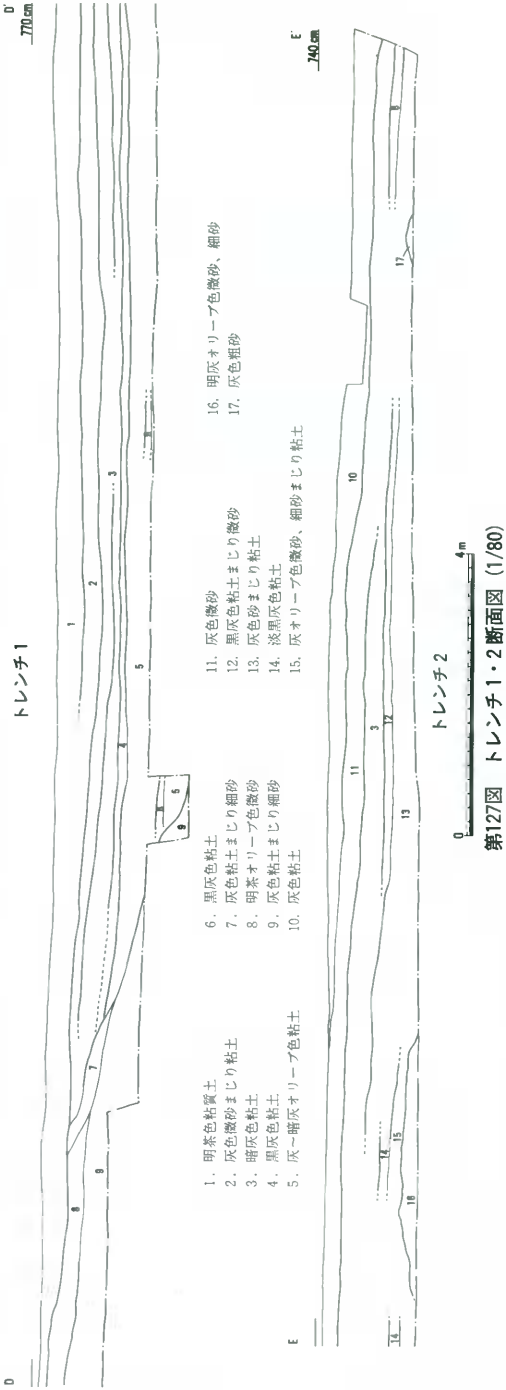
全調査範囲の東南部Ｈ15・16・17区、ＪＯ区に位置する低位部である。範囲については第２、第３低位部と同様に明確ではない。出土した土器は少量で、中葉段階と後葉段階のものがある。　　（平井）

トレンチ１・２（第92・127図）

ＪＯ区において、河道２の外沿部の土層堆積状況を把握するために設定した２本のトレンチである。このトレンチからの出土遺物はほとんどなく、各層位の時期判定については困難であるが、河道２との関係から縄文時代後期以降弥生時代前期までの間には少なくとも納まると判断している。

トレンチ１の観察によれば、西端から約４ｍ付近で東側に大きく傾斜する箇所が認められ、この傾斜の中に海抜高650㎝付近、および590㎝付近において水平堆積の２枚の黒灰色粘土層（第４・６層）が存在する。この傾斜のなかは、いずれも粘土で埋積しており、傾斜外は微砂・細砂を基調とした砂層である。

またトレンチ２でも、この黒灰色粘土層のうち上位の第４層と同一層位と考えられる12層が観察された。これらの黒灰色粘土層は現地での調査段階においては水田層の可能性もあると判断し、土壌サンプリングを行い、プラントオパール、および花粉分析を行ったが、いずれも、これについては否定的な結果を得ている。　　（大橋）

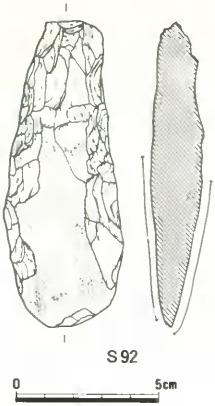


第127図　トレンチ１・２断面図（1/80）

図示した遺物は、遺構検出中や基盤層中および弥生時代前期以降の遺構から出土したものである。

土器は縄文時代晩期中葉から後葉の突帯文土器の段階までのものがある。なお図示した土器は小片のものが多く、傾き不詳のものも多い。

石器についてはその形態からだけでは晩期とそれ以降のものを判別することが困難なものも多いが、基盤層中から出土した石器を晩期のものとして図示している。このうちＳ75～78、81～84、86・87、89はＤＥ区の基盤層中から出土しており、土器溜りとして報告した縄文時代晩期中葉の時期に伴う可能性が高い。（平井）



第125図　第３低位部出土遺物（縄文時代晩期２）（1/2）

第２低位部（第34・123・270・271図）

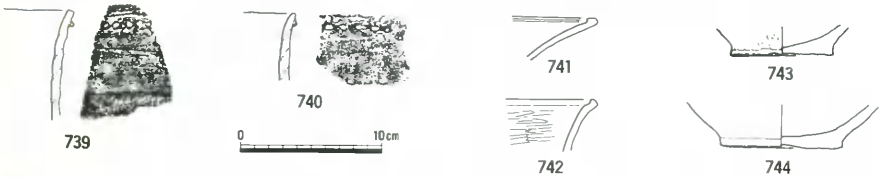
第２微高地のほぼ中央に位置し、微高地を西と東に分断する南北に長い低位部である。北に向かって深さを増し、第３低位部とつながる可能性も考えられる。縄文時代晩期以降の基盤層上面での地形は北半部のみであるが次節の第270図に示している。ＫＹ２区では低位部内で土壙が検出されているが、検出面の海抜高も約8.1ｍと安定しており、包含層の堆積が始まるまでに生活面として利用されていたことが窺える。また、713は１か所に集中して出土しており、土壙27のようなたわみ状の遺構に伴う可能性がある。この713以外の土器は包含層に混在していたもので、土壙27の後あまり時をおかずに低位部の埋没も始まったと考えられる。（久保）

第３微高地（第33図）

第３微高地は今回報告する調査範囲の東端部に位置する微高地で、北区（ＥＮ・ＢＯ１区）と南区（ＴＯ区）とに区分できる。この微高地からは縄文時代晩期の明確な遺構は検出されず、また遺物もほとんど出土しなかった。（平井）

第３低位部（第33・124・125図）

第２微高地（東）と第３微高地との間に拡がる低位部である。第33図に示した範囲は弥生時代前期～中期前葉段階のものであるが、多くはないが縄文時代晩期の土器も出土することから、範囲や深さは明らかではないものの晩期段階にも低位部になっていたと考えている。なお出土遺物がないため断定できないが、第277図の24層が晩期になるかも知れない。出土土器には中葉段階のものと（725～728）、後葉段階のもの（729～734）とがある。Ｓ92はＥＮ区で出土した流紋岩製の石鏃で、先端部の両面と

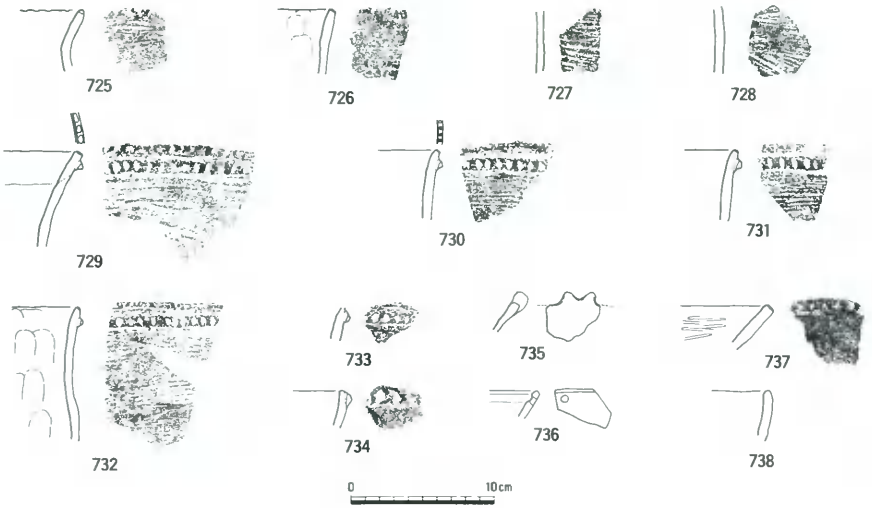


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
739	縄文土器	深鉢	ナデ。	アルカ属貝条痕のちナデ		D形	灰黄褐　10YR5/2
740	縄文土器	深鉢		ナデ。		横丸形	灰白　10YR8/2
741	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ			黄灰　2.5Y4/1
742	縄文土器	浅鉢		ミガキ。口縁部凹線。			暗灰　N3/
743	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ　底部ケズリのちナデ。	ナデ。			灰黄褐　10YR5/2
744	縄文土器	深鉢					褐　7.5YR4/4

第126図　第４低位部出土遺物（縄文時代晩期）（1/4）

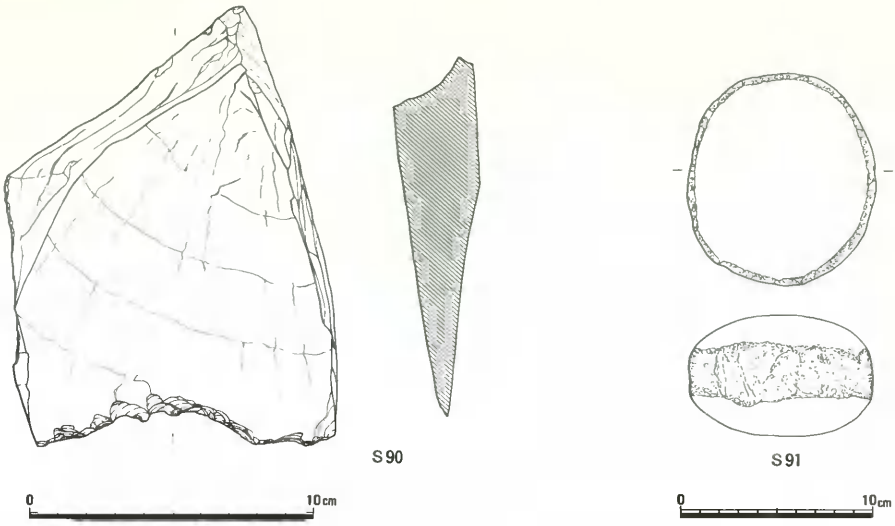
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
711	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	米粒形		灰白　2.5Y7/1
712	縄文土器	浅鉢			逆Ｄ形		黒　7.5Y2/1
713	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕、押引刺突文。胴部ケズリ？。	ナデ。	米粒形	菱形	にぶい橙　7.5YR7/3
714	縄文土器	深鉢		ナデ。	Ｄ形	Ｄ形	浅黄橙　7.5YR8/3
715	縄文土器	深鉢				菱形	にぶい褐　7.5YR7/3
716	縄文土器	深鉢		ナデ。	？	菱形	にぶい橙　10YR7/2
717	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。		？	にぶい黄橙　10YR7/2
718	縄文土器	深鉢			？	米粒形	灰白　10YR8/1
719	縄文土器	深鉢			？	菱形	灰黄褐　10YR5/2
720	縄文土器	深鉢	ケズリ？。	ナデ。		菱形	褐灰　10YR5/1
721	縄文土器	浅鉢？	ミガキ？。	ミガキ？。口縁部沈線。			灰白　5Y8/2
722	縄文土器	浅鉢					黄灰　2.5Y4/1
723	縄文土器	浅鉢					褐灰　7.5YR6/1
724	縄文土器	浅鉢？					灰　N5/

でに報告しているが、それ以外にも晩期の可能性のある柱穴がいくつか検出されている。しかしながら当該地では晩期の土器が基盤層中に多く含まれているため、晩期の土器のみが出土したからといって晩期と断定することはできなかった。そのため弥生時代中期中葉～後期と考えられる柱穴以外の柱穴については、晩期の可能性のある柱穴も含めて弥生時代前期～中期前葉の全体図の中に図示している。土壙状遺構については、ＫＹ１・２区の土壙12～26の周辺で５基検出している。

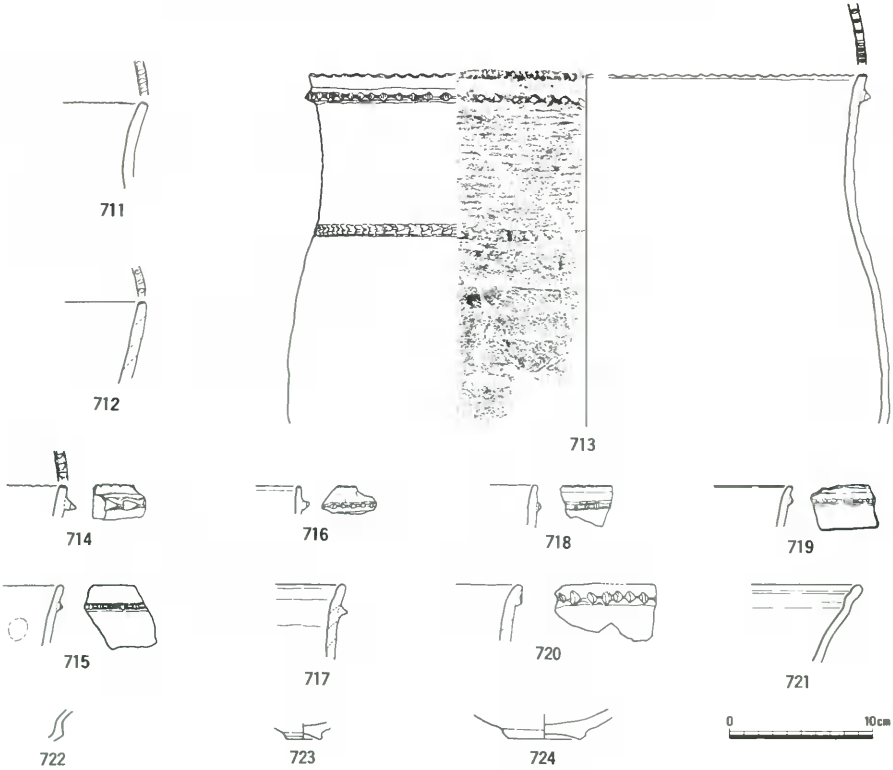


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
725	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。		？		褐灰　7.5YR5/1
726	縄文土器		アルカ属貝条痕のちナデ？。	ユビオサエのちナデ？。	細長形？		灰黄褐　10YR5/2
727	縄文土器		アルカ属貝条痕。	ナデ？。			灰黄褐　10YR6/2
728	縄文土器		アルカ属貝条痕。	ケズリ？。			にぶい橙　7.5YR7/4
729	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	横丸形	Ｄ形	灰白　10YR7/1
730	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	米粒形	米粒形	褐灰　10YR5/1
731	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	米粒形	小Ｄ形	灰黄褐　10YR6/2
732	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕　胴部ケズリ。	ナデ。	米粒形？	小菱形	にぶい黄橙　10YR7/2
733	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ？。	？	Ｄ形	灰白　2.5Y7/1
734	縄文土器	深鉢？				菱形	褐灰　10YR6/1
735	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			黄灰　2.5Y6/1
736	縄文土器	浅鉢	穿孔。波状口縁。				灰黄褐　10YR5/2
737	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。	小米粒形		褐灰　7.5YR6/2
738	縄文土器	浅鉢		ナデ？			灰黄褐　10YR4/2

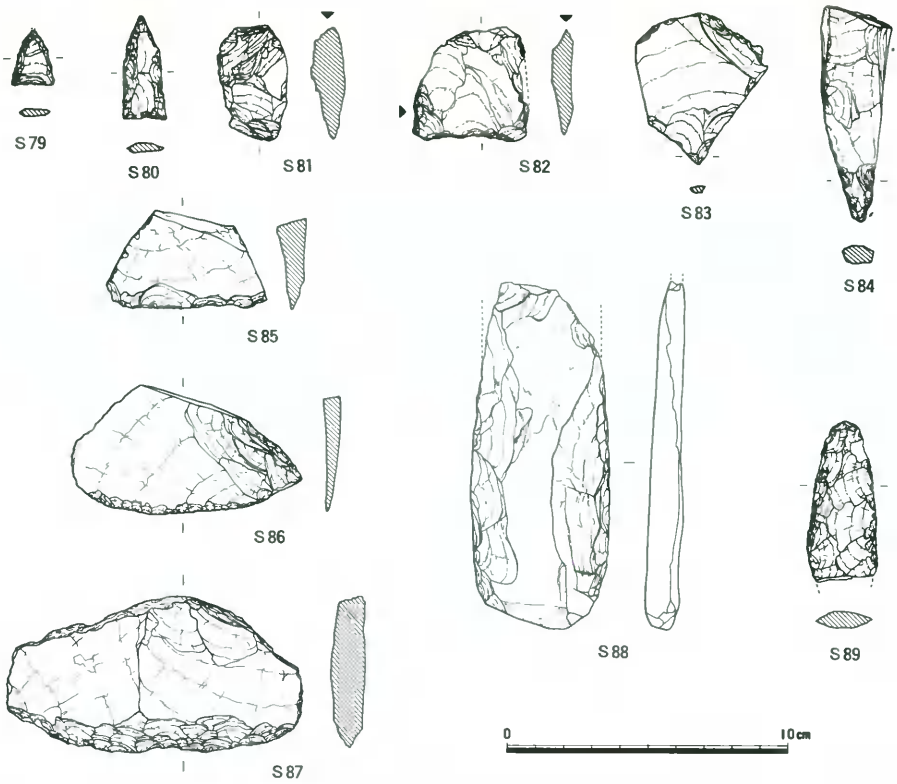
第124図　第３低位部出土遺物（縄文時代晩期１）（1/4）



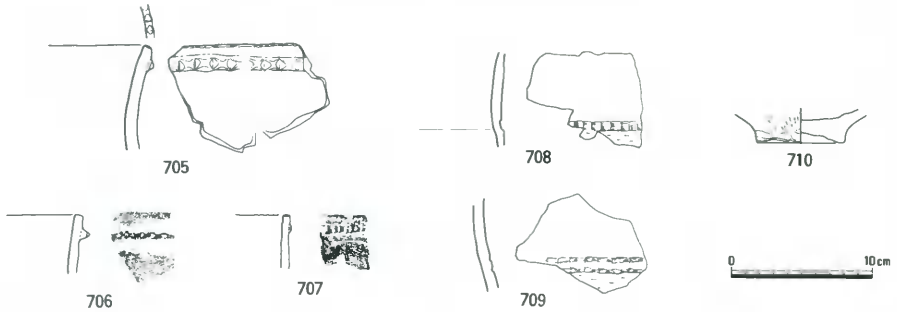
第122図　第２微高地（東）出土遺物（縄文時代晩期２）（1/2・1/3）



第123図　第２低位部出土遺物（縄文時代晩期）（1/4）

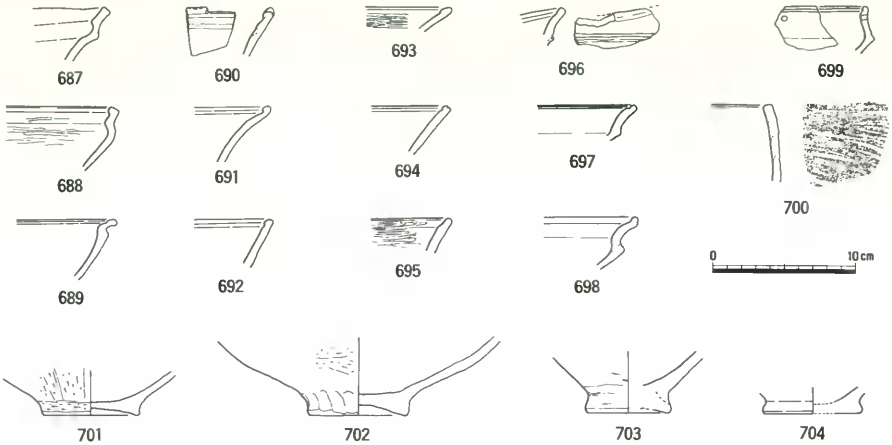


第120図　第２微高地（西）出土遺物（縄文時代晩期４）（1/2）



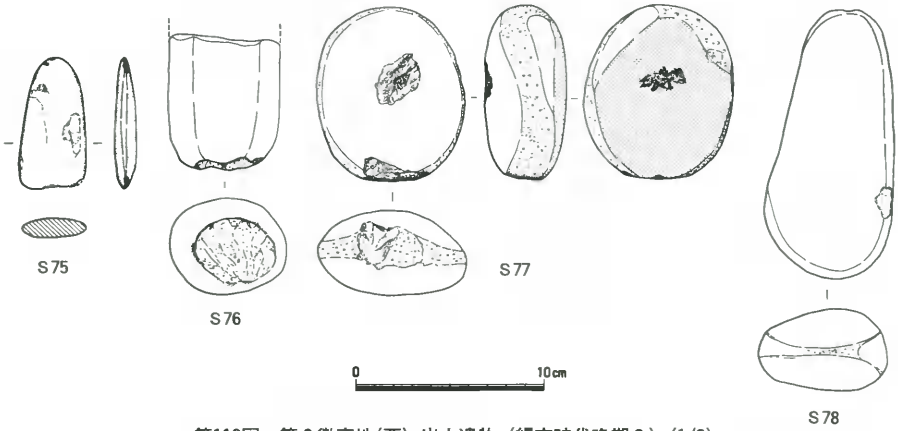
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
705	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ？。	横丸形	Ｄ形	灰白　2.5Y8/2
706	縄文土器	深鉢	ナデ。			小菱形	灰白　2.5Y7/1
707	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ？。	？	米粒形？	褐灰　10YR5/1
708	縄文土器	深鉢	頸部ナデ、押引刺突文。胴部ケズリ。	ナデ。			にぶい橙　7.5YR7/4
709	縄文土器	深鉢	頸部ナデ、押引刺突文。胴部ケズリ？。	ナデ。			灰白　2.5Y8/2
710	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ				橙　5YR6/6

第121図　第２微高地（東）出土遺物（縄文時代晩期１）（1/4）

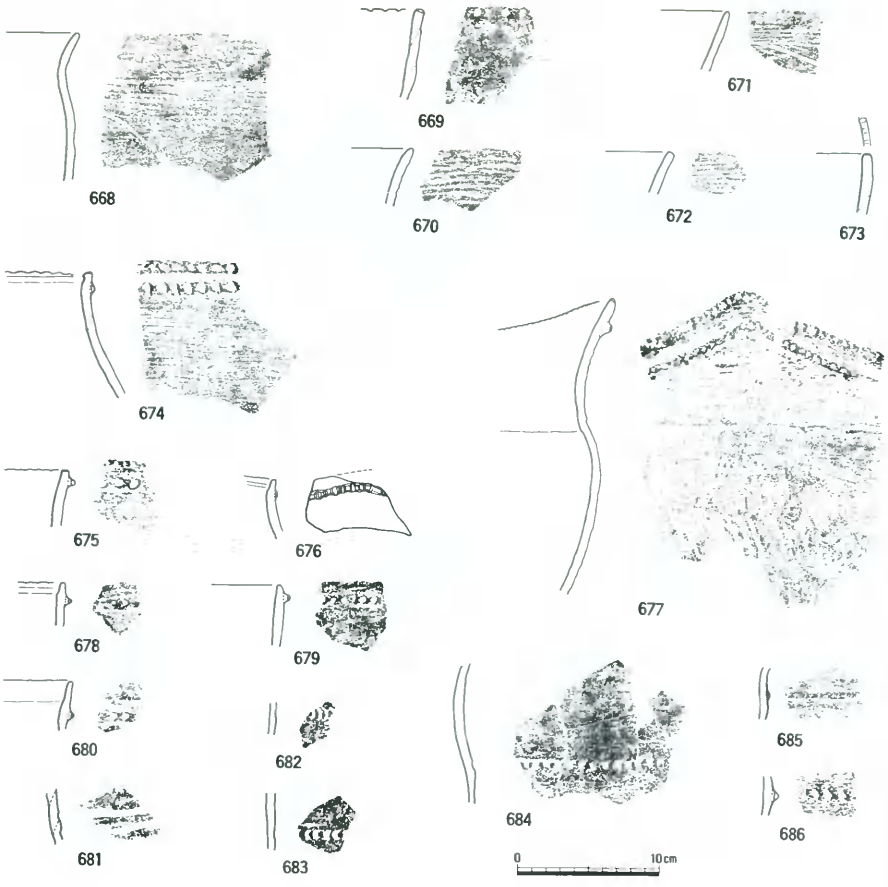


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
687	縄文土器	浅鉢	ナデ。波状口縁。	ナデ。			明褐灰　7.5YR7/1
688	縄文土器	浅鉢		ミガキ。			褐灰　10YR5/1
689	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ナデ。			黄灰　2.5Y4/1
690	縄文土器	浅鉢	ミガキ？。突起。	ミガキ？。			灰黄褐　10YR6/2
691	縄文土器	浅鉢					灰黄褐　10YR6/2
692	縄文土器	浅鉢	ケズリ。	ナデ。口縁部凹線。			暗灰　N3/
693	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			褐灰　7.5YR4/1
694	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。口縁部沈線。			褐灰　10YR6/1
695	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。口縁部段。			褐灰　5YR6/1
696	縄文土器	浅鉢	ミガキ？。沈線。	ミガキ？。沈線。			褐灰　10YR4/1
697	縄文土器	浅鉢	ナデ？。	口縁部沈線。			灰白　2.5Y7/1
698	縄文土器	浅鉢	ミガキ？。口縁部沈線。	ナデ？。			黄灰　2.5Y4/1
699	縄文土器	浅鉢	ミガキ。穿孔。	ミガキ？。			灰褐　7.5YR4/2
700	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。			灰黄褐　10YR6/2
701	縄文土器	深鉢	ケズリ。	アルカ属貝条痕。			灰白　10YR7/1
702	縄文土器	深鉢	ケズリ、ナデ。				にぶい橙　7.5YR7/3
703	縄文土器	深鉢	ケズリ？。				にぶい橙　7.5YR7/3
704	縄文土器	深鉢					黄橙　7.5YR7/6

第118図　第２微高地(西) 出土遺物（縄文時代晩期２）(1/4)

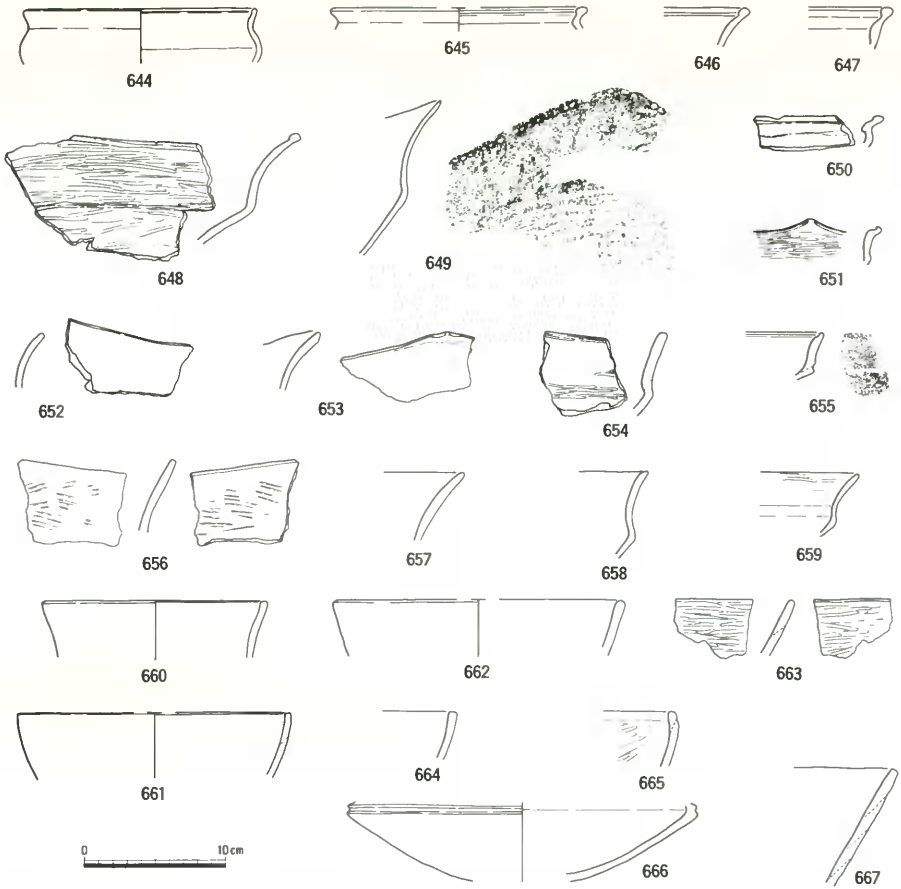


第119図　第２微高地(西) 出土遺物（縄文時代晩期３）(1/3)



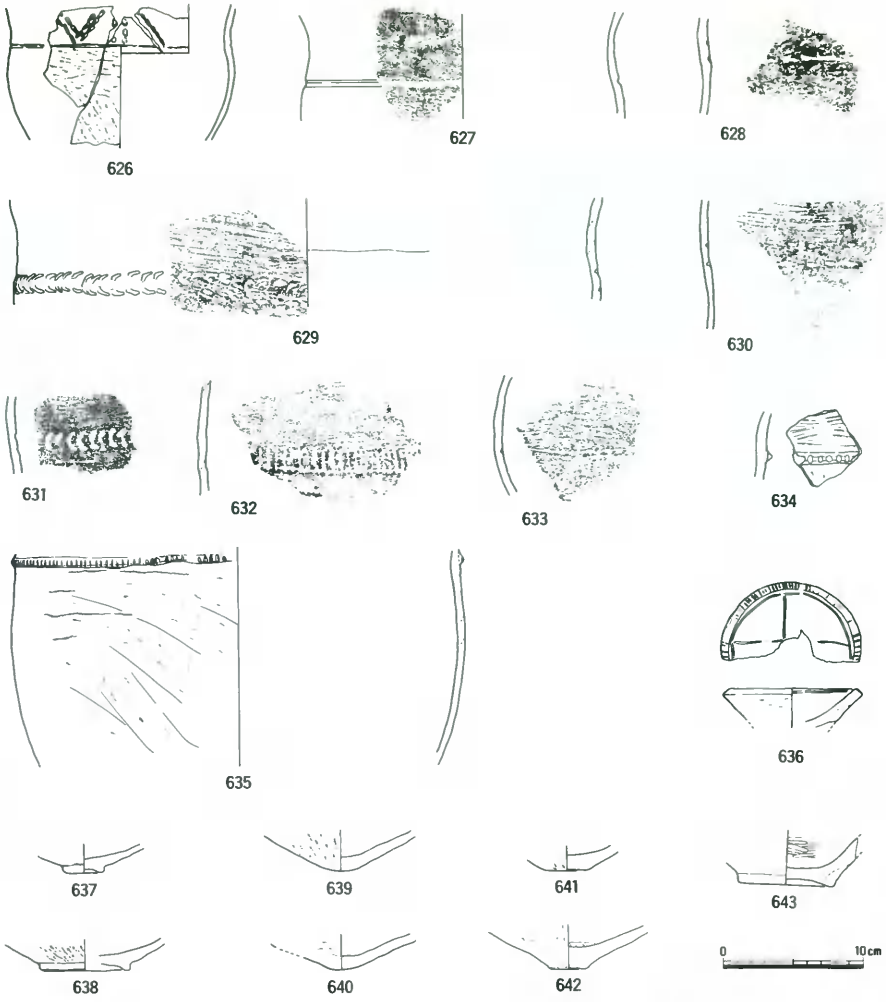
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
668	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	口縁部ナデ。胴部アルカ属貝条痕のちナデ。			浅黄橙　10YR8/3
669	縄文土器	深鉢	ケズリ？。		菱形		明褐灰　7.5YR7/2
670	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。				にぶい黄橙　10YR6/4
671	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ミガキ。			灰黄褐　10YR4/2
672	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。				灰　5Y4/1
673	縄文土器	深鉢？	ケズリ？。		菱形		褐灰　7.5YR4/1
674	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。口縁部沈線。	楕丸形？	菱形	灰黄　2.5Y6/2
675	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	小Ｄ形？	Ｄ形	褐灰　7.5YR4/1
676	縄文土器	深鉢	ナデ。波状口縁。	ナデ？。		米粒形	にぶい褐　7.5YR6/3
677	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。波状口縁。	頸部ナデ。胴部アルカ属貝条痕のちナデ。	小Ｄ形	菱形	黄灰　2.5Y5/1
678	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ？。	？	菱形	黒褐　5YR2/1
679	縄文土器	深鉢		ナデ。		菱形	灰白　10YR7/1
680	縄文土器	深鉢		ナデ。		菱形	にぶい橙　5YR7/3
681	縄文土器	深鉢	凹線。				褐灰　7.5YR5/1
682	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ。逆Ｃ形刺突文。	ナデ。			浅黄橙　7.5YR8/3
683	縄文土器	深鉢	ナデ。Ｃ形刺突文。	ナデ。			浅黄橙　7.5YR8/3
684	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ。Ｃ形押引刺突文。				にぶい橙　5YR7/3
685	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部ケズリ。	ナデ。		細長形	黒褐　10YR3/1
686	縄文土器	深鉢		胴部下半ケズリ？。		逆Ｄ形？	にぶい橙　5YR6/4

第117図　第２微高地（西）出土遺物（縄文時代晩期１）（1/4）



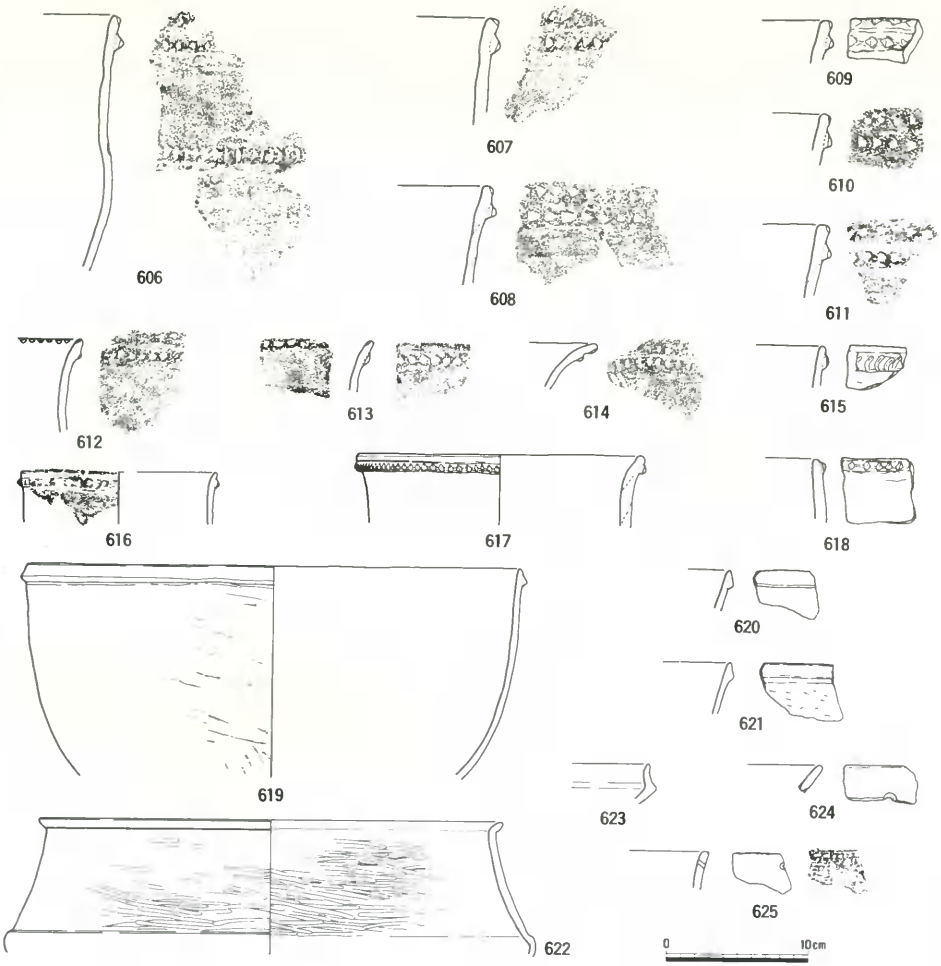
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
644	縄文土器	浅鉢		口縁部沈線。			黒　2.5Y2/1
645	縄文土器	浅鉢					灰白　10YR7/1
646	縄文土器	深鉢	ミガキ。				灰黄褐　10YR6/2
647	縄文土器	深鉢					黄橙　7.5YR7/8
648	縄文土器	浅鉢	口縁部ミガキ。胴部ケズリ。	ミガキ。方形浅鉢			淡黄　2.5Y8/4
649	縄文土器	浅鉢	口縁部ナデ。胴部アルカ属貝条痕。	ナデ。波状口縁。			褐灰　10YR5/1
650	縄文土器	浅鉢	ナデ。	ナデ。			褐灰　10YR4/1
651	縄文土器	浅鉢	ナデ。	ミガキ。			灰白　10YR7/1
652	縄文土器	浅鉢	ナデ。	波状口縁。			にぶい黄橙　10YR6/3
653	縄文土器	浅鉢	ミガキ？。波頂部に刻み。	波状口縁。			灰黄褐　10YR4/2
654	縄文土器	浅鉢					褐灰　10YR5/1
655	縄文土器	浅鉢	沈線。	ミガキ？。			にぶい黄橙　10YR7/2
656	縄文土器	浅鉢	アルカ属貝条痕のちナデ。	アルカ属貝条痕のちナデ。波状口縁。			にぶい褐　7.5YR5/4
657	縄文土器	浅鉢	ミガキ？。	ミガキ。			黄灰　2.5Y4/1
658	縄文土器	浅鉢					褐　10YR4/4
659	縄文土器	浅鉢	口縁部ナデ。胴部ケズリ。	口縁部ミガキ？。胴部ナデ。			褐灰　10YR6/1
660	縄文土器	浅鉢	ナデかミガキ。	ミガキ？。			黒褐　2.5Y3/1
661	縄文土器	深鉢	ケズリのちナデ。				黄灰　2.5Y4/1
662	縄文土器	浅鉢		ナデ。			にぶい黄橙　10YR7/2
663	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			褐灰　7.5YR4/1
664	縄文土器	浅鉢	ミガキ。				褐灰　10YR5/1
665	縄文土器	浅鉢	口縁部沈線。	ミガキ。			褐灰　10YR4/
666	縄文土器	浅鉢	胴部ケズリ。	ナデ。			褐灰　10YR4/1
667	縄文土器	浅鉢	ユビオサエ、ナデ。粘土紐痕。	ナデ			にぶい褐　7.5YR5/4

第116図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期11）（1/4）



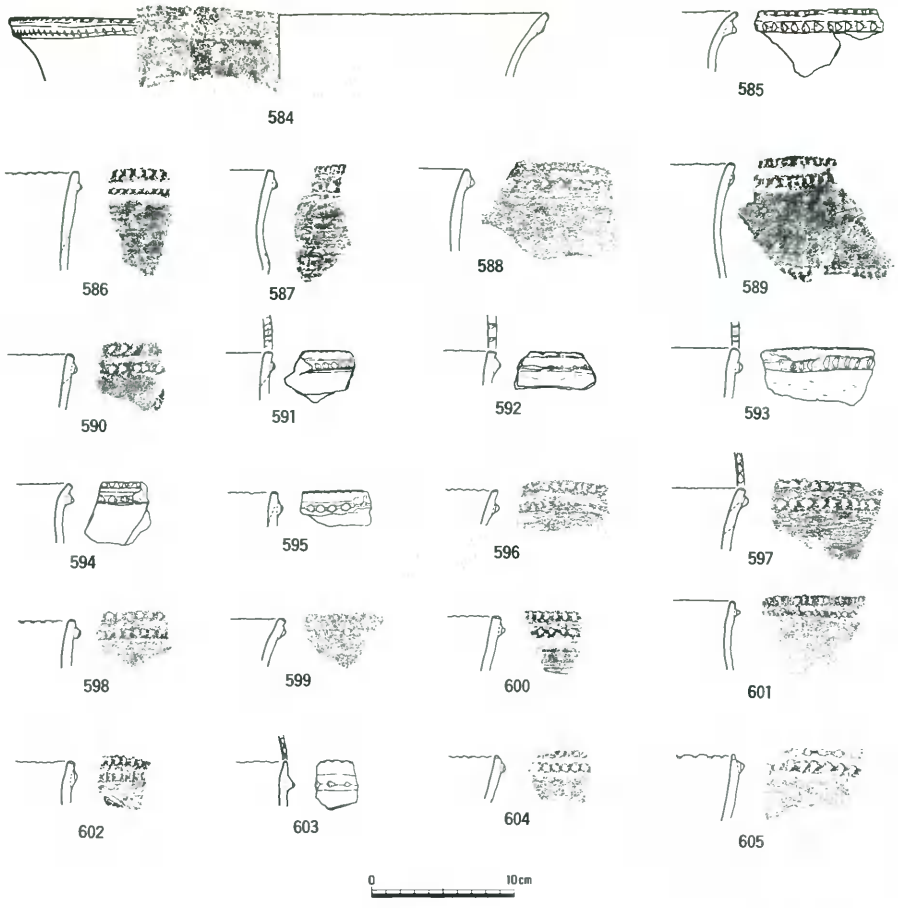
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
626	縄文土器	深鉢	頸部ナデ、刺突による山形文。胴部ケズリ。	ナデ。			黒褐　10YR2/2
627	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部沈線、ケズリ。				にぶい褐　7.5YR6/3
628	縄文土器	深鉢	頸部ナデ、逆コ形刺突文。胴部ケズリ。	ナデ。			暗灰黄　2.5Y4/2
629	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕、押引C形刺突文。	ナデ。			にぶい黄橙　10YR7/3
630	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕、刺突文。胴部ケズリ。	ナデ。			にぶい橙　7.5YR7/3
631	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕、C形刺突文。胴部ケズリ。	ナデ。			にぶい黄橙　10YR8/2
632	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕、コ形刺突文。胴部ケズリ。	ナデ。			灰黄褐　10YR5/2
633	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕、押引刺突文。胴部ケズリ。	ナデ。			褐灰　7.5YR5/1
634	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕。胴部ケズリ？。	ナデ。		整形	灰褐　7.5YR5/2
635	縄文土器	深鉢	胴部ケズリ。	板ナデ？。		細長形	灰黄褐　10YR6/2
636	縄文土器	浅鉢	ケズリのちナデ。	ヘラ描き沈線文。	細長形		にぶい橙　5YR7/4
637	縄文土器	浅鉢？	ナデ。				灰白　2.5Y8/2
638	縄文土器	深鉢？	胴部アルカ属貝条痕。底部ナデ。	ナデ。			にぶい褐　7.5YR6/3
639	縄文土器	深鉢	ケズリ。	ナデ、カキトリ。			灰白　2.5Y8/2
640	縄文土器	深鉢	胴部アルカ属貝条痕。	アルカ属貝条痕、ナデ。			にぶい黄橙　10YR7/2
641	縄文土器	深鉢	ケズリ。	ナデ。			浅黄橙　10YR8/3
642	縄文土器	深鉢	ケズリ。				灰黄褐　10YR6/3
643	縄文土器	壺？	ナデ。	ミガキ。			灰黄褐　10YR7/2

第115図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期10）（1/4）



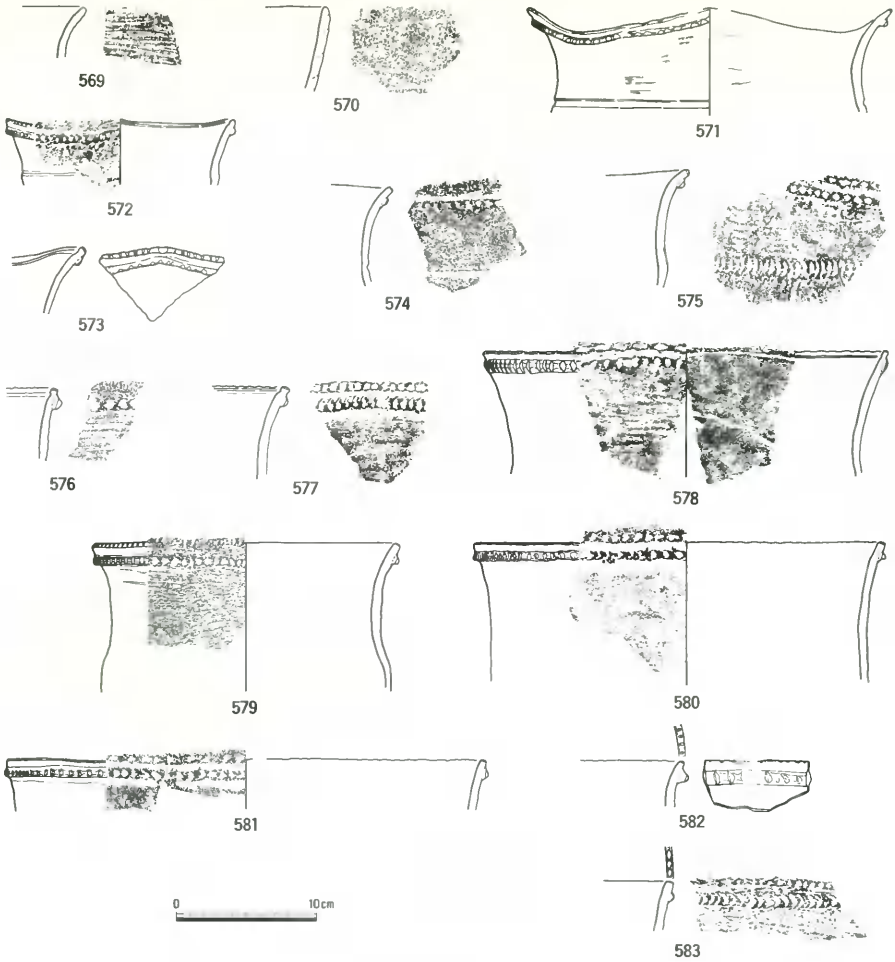
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
606	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕のちナデ。胴部ケズリ、連C形刺突文。	ナデ？。	D形	D形	にぶい橙　7.5YR7/3
607	縄文土器	深鉢	ナデ？。		D形	菱形	にぶい橙　7.5YR6/4
608	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ？。		D形	D形	にぶい褐　7.5YR5/3
609	縄文土器	深鉢	ナデ。		D形	D形	にぶい黄橙　10YR7/4
610	縄文土器	深鉢	ナデ。		D形	D形	灰黄褐　10YR6/2
611	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	D形	D形	にぶい黄橙　10YR7/2
612	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。口唇部内側に刻目。	？	D形？	浅黄橙　10YR8/3
613	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ。	横丸形	菱形	橙　2.5Y4/1
614	縄文土器	深鉢	ナデ。口唇部と突帯を同時に刻む。山形文。		細長形？	細長形？	にぶい黄橙　10YR7/2
615	縄文土器	深鉢	ナデ。			C形	灰白　2.5Y8/2
616	縄文土器	深鉢？	ナデ？。			菱形？	灰黄　2.5Y7/2
617	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ。		菱形	灰白　10YR8/2
618	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。		菱形	灰黄褐　10YR6/2
619	縄文土器	浅鉢	ケズリのちミガキ？。	ミガキ？			にぶい黄橙　10YR7/4
620	縄文土器	浅鉢	ナデ。	ナデ。			黄灰　2.5Y5/1
621	縄文土器	深鉢	ケズリのちナデ？。	ナデ。	D形	D形	灰　5Y4/1
622	縄文土器	浅鉢	ミガキ。	ミガキ。			明赤褐　5YR5/6
623	縄文土器	浅鉢					暗灰　N3/
624	縄文土器	浅鉢	ミガキ？。穿孔。	ミガキ？。			暗灰　N3/0
625	縄文土器	深鉢	ナデ。穿孔。	ナデ。	小横長形		褐灰　7.5YR5/1

第114図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期９）（1/4）



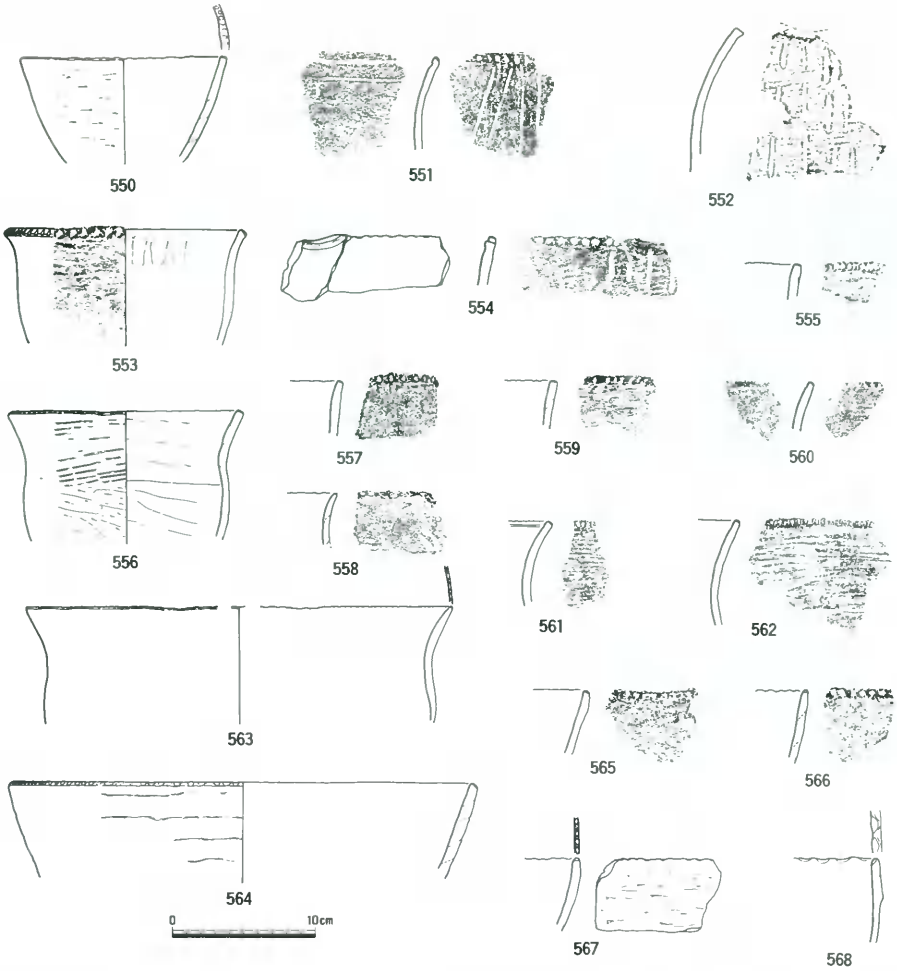
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
584	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	逆Ｄ形	Ｄ形？	黒褐　10YR3/1
585	縄文土器	深鉢	ナデ。		細長形？	Ｄ形	明赤褐　5YR5/8
586	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ。	ナデ？。	菱形	菱形	灰白　2.5Y8/2
587	縄文土器	深鉢	頸部ケズリのちナデ。胴部ケズリ、刺突文。	ナデ。	？	逆Ｃ形？	黒褐　10YR3/2
588	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕、ナデ？。	ナデ？。	？	菱形	明赤褐　5YR5/6
589	縄文土器	深鉢	ナデ？。押引Ｃ形刺突文。		？	米粒形？	灰黄褐　10YR5/2
590	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	Ｄ形	Ｄ形	にぶい黄橙　10YR5/3
591	縄文土器	深鉢	ナデ？。	ナデ。	米粒形	菱形	褐灰　10YR4/1
592	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	菱形	小菱形	にぶい黄橙　10YR7/3
593	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	細長形	Ｃ形	淡黄　2.5Y8/3
594	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	菱形	菱形	褐灰　7.5YR6/1
595	縄文土器	深鉢	ナデ？。		Ｄ形	菱形	暗灰　N3/
596	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	米粒形	米粒形	にぶい黄褐　10YR5/2
597	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	Ｄ形	Ｄ形	黒褐　10YR3/2
598	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	Ｄ形	Ｄ形	灰白　2.5Y8/2
599	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	菱形	菱形	にぶい黄橙　10YR7/3
600	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕？。	ナデ。	Ｄ形	Ｄ形？	灰黄　2.5Y7/2
601	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	細長形	菱形	灰黄褐　10YR5/2
602	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	Ｄ形？	細長形	灰黄褐　10YR5/2
603	縄文土器	深鉢	ナデ？。		横丸形	菱形	灰黄褐　10YR4/2
604	縄文土器	深鉢？	ナデ。		Ｄ形	米粒形	浅黄橙　7.5YR8/4
605	縄文土器	深鉢	ユビオサエ、ナデ。	ミガキ？	菱形	Ｄ形	灰褐　7.5YR5/2

第113図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期８）（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部	突帯刻み	色調
					刻み		
569	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。			灰黄褐　10YR6/2
570	縄文土器	深鉢	ナデ?。	ナデ?			にぶい黄橙　10YR7/2
571	縄文土器	深鉢	ナデ。沈線。	ナデ?。	菱形?	菱形	にぶい黄褐　10YR5/3
572	縄文土器	深鉢	頸部ナデ、胴部凹線。	ナデ?。口縁部沈線。	?	菱形	灰褐　5YR5/2
573	縄文土器	深鉢	ナデ?。	ミガキ。口縁部沈線	?	?	褐灰　10YR6/1
574	縄文土器	深鉢	頸部ナデ。胴部沈線、ケズリ。	ナデ。	?	?	にぶい黄橙　10YR7/2
575	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕のちナデ。胴部ケズリ	ナデ。	菱形	菱形	灰黄褐　10YR4/2
576	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。口縁部沈線。	細長形	C形	にぶい黄橙　10YR6/3
577	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ?、口縁部沈線。	横丸形?	C形	にぶい黄　2.5Y6/3
578	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。口縁部沈線。	横丸形	逆D形	灰褐　7.5YR4/2
579	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕のちケズリ。胴部ケズリ。	ナデ。	細長形	菱形	にぶい黄橙　10YR6/3
580	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕、ナデ。逆C形刺突文。	ナデ。	?	逆C形	灰黄褐　10YR6/2
581	縄文土器	深鉢	ナデ?。	ナデ?	?	逆C形	灰白　10YR8/2
582	縄文土器	深鉢	ナデ。		細長形	?	明褐灰　7.5YR7/2
583	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ。	ナデ。	横丸形	逆C形	にぶい黄橙　10YR7/2

第112図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期７）（1/4）

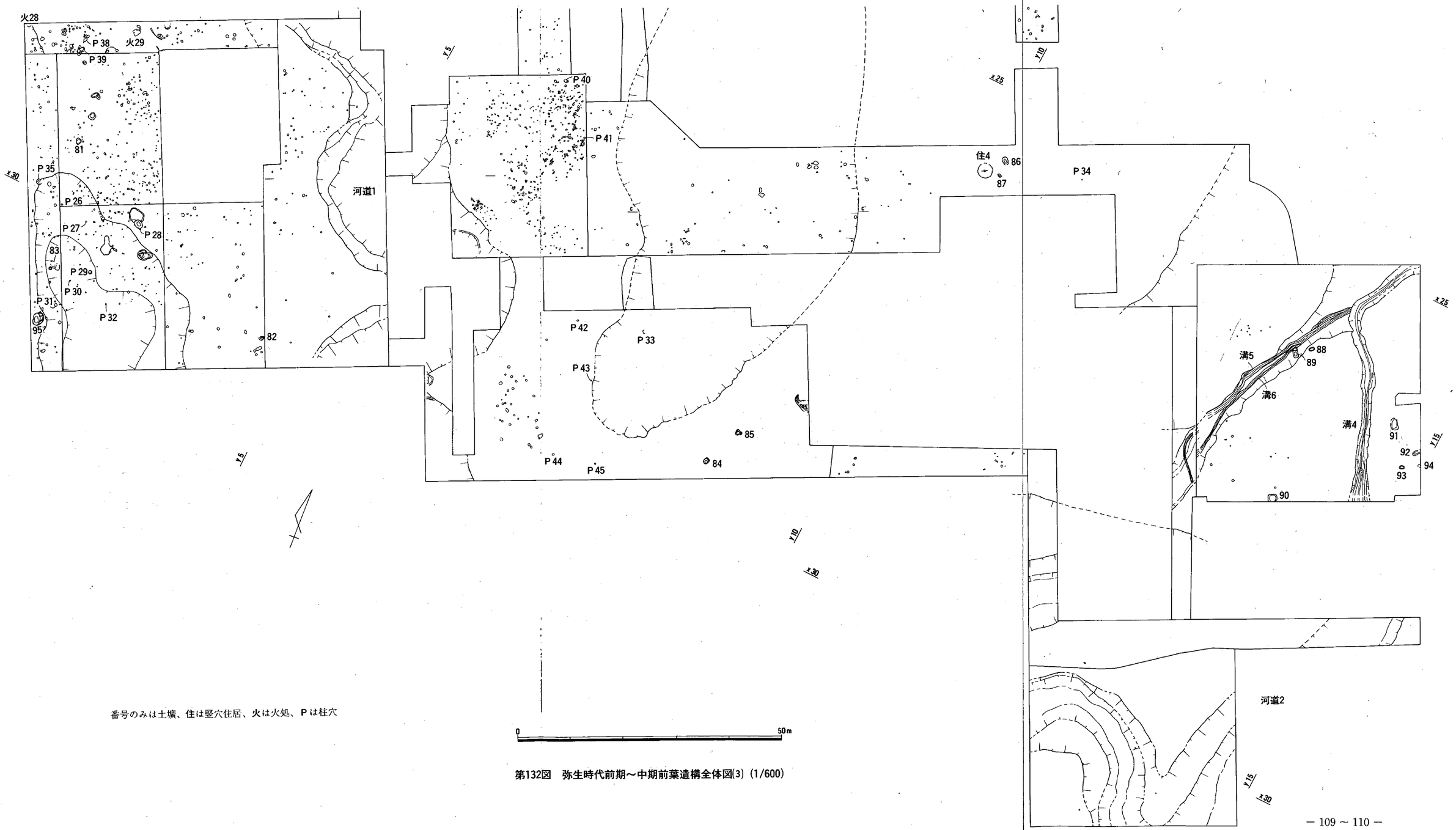


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	口唇部刻み	突帯刻み	色調
550	縄文土器	浅鉢？	ケズリ。	ナデ,	菱形		灰褐　7.5YR6/2
551	縄文土器	深鉢	ナデ。ヘラ描き沈線文。	ナデ。口縁部沈線。	米粒形		にぶい橙　5YR6/4
552	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。タテ沈線文。	ナデ。	？		にぶい黄橙　10YR6/3
553	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕、ナデ。胴部ケズリ。	ユビオサエ、ナデ,	D形		灰黄褐　10YR4/2
554	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。タテ沈線文。C形刺突文。	ナデ。	菱形		灰黄褐　10YR6/2
555	縄文土器	深鉢	ナデ。タテ刺突文。	ナデ。	D形		灰褐　7.5YR4/2
556	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕のちナデ。胴部ケズリ。	ナデ。	D形		黒褐　10YR3/2
557	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ？。	ナデ？。	米粒形？		にぶい黄橙　10YR7/3
558	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	D形		褐灰　10YR6/1
559	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕のちナデ。	アルカ属貝条痕のちナデ？。	D形？		灰褐　7.5YR6/2
560	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。口縁部沈線。	？		灰黄褐　10YR5/2
561	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ？。	D形		褐　7.5YR4/3
562	縄文土器	深鉢	アルカ属貝条痕。	ナデ。	細長形		灰黄褐　10YR6/2
563	縄文土器	深鉢	頸部アルカ属貝条痕？。胴部ケズリ？		横長形		赤褐　5YR4/6
564	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ。	菱形		灰黄褐　10YR6/2
565	縄文土器	深鉢	ケズリ。	ナデ。	D形		灰白　2.5Y8/2
566	縄文土器	深鉢	ナデ。	ナデ？。	菱形		灰白　2.5Y8/2
567	縄文土器	深鉢？	ケズリ。	ナデ。	菱形		にぶい褐　7.5YR5/3
568	縄文土器	深鉢	口縁部ナデ。胴部ケズリ。	アミカ属貝条痕のちナデ。	？		黒褐　10YR3/1

第111図　第１低位部および第１微高地出土遺物（縄文時代晩期６）（1/4）

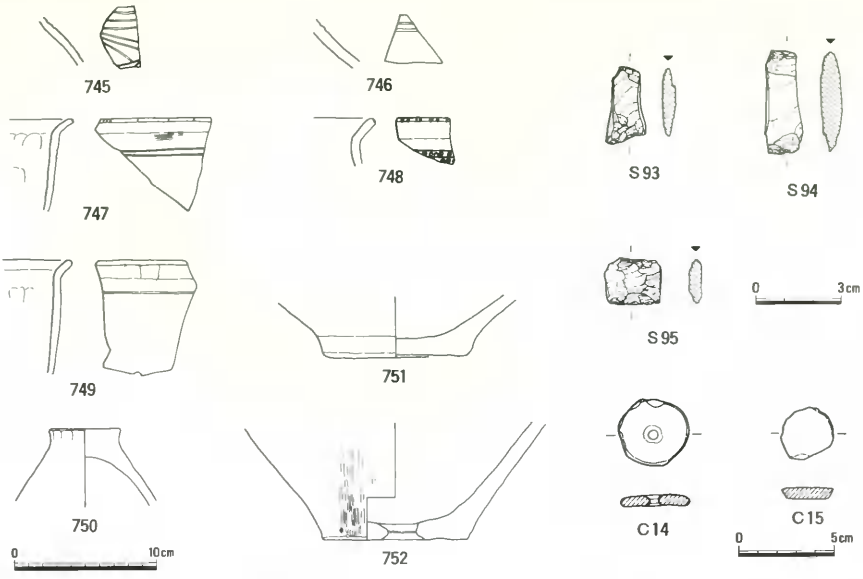
番号のみは土壙、住は竪穴住居、建は建物、墓は土器棺墓、火は火処、Pは柱穴

第131図　弥生時代前期～中期前葉遺構全体図(2)（1/600）



番号のみは土壙、住は竪穴住居、火は火処、Pは柱穴

第132図　弥生時代前期～中期前葉遺構全体図(3)（1/600）



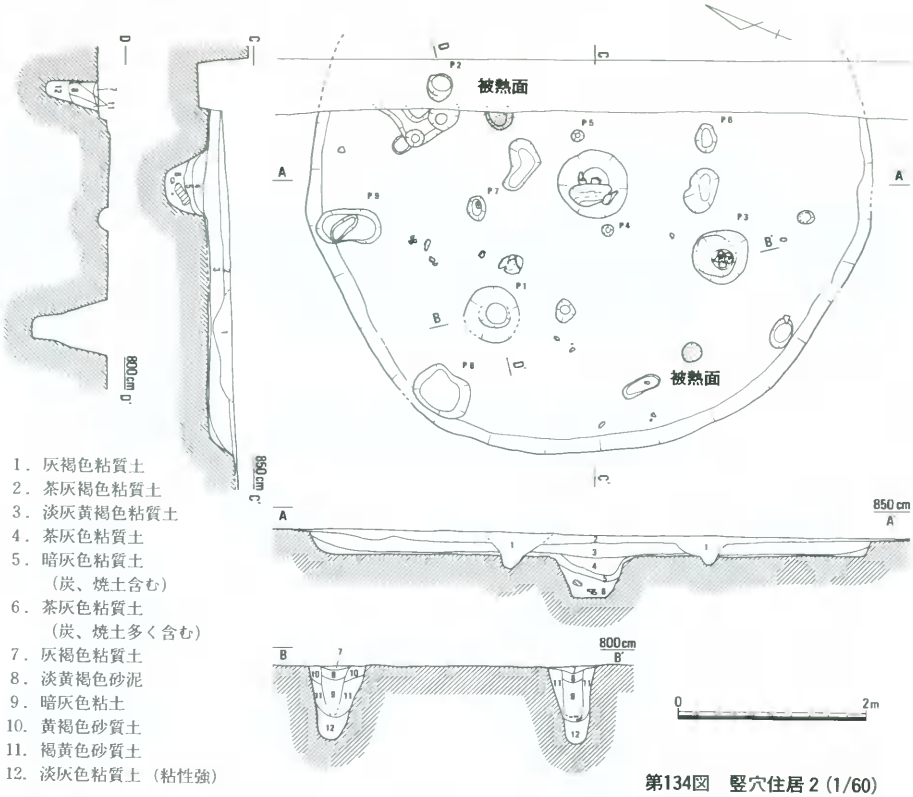
挿図番号	種別	器種	特 外面	散 内面	色調	備考
745	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。		明褐灰　7.5YR7/1	
746	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線。		褐灰　10YR5/1	
747	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヘラ描き沈線、ハケメ？。	ユビオサエ、ナデ？	にぶい褐　7.5YR6/3	
748	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヘラ描き沈線、竹管文。		灰褐　7.5YR6/2	
749	弥生土器	甕	口唇部刻目。１本のヘラ描き沈線。	ユビオサエ、ナデ？。	にぶい橙　7.5YR7/3	
750	弥生土器	蓋	ユビオサエ。	ナデ。	橙　2.5YR6/6	
751	弥生土器	壺			赤橙　10YR6/6	
752	弥生土器	甕	胴部ハケメのちミガキ？	ミガキ？	にぶい橙　5YR7/4	焼成後穿孔

第133図　竪穴住居１出土遺物（1/4・1/2・1/3）

際には、Ｐ７～Ｐ10の土壙が掘られている。平面形はいずれも隅丸方形で、１辺45～57cm、深さ10～16cmを測り、柱穴とは考えられない。Ｐ３・Ｐ６に対応する部分については不明である。出土遺物には弥生土器の壺**745**・**746**・**751**、甕**747**～**749**、蓋**750**、「甑」**752**の他に、土製紡錘車**C14**、円板状土製品**C15**、サヌカイト製の楔形石器**S93**～**S95**があり、時期は弥生時代前期前葉から中葉に求められる。　（光永）

竪穴住居２（第134～141図、図版９・10・56・57）

第２微高地（西）から第２低位部に向かって下がる緩斜面上に位置する。ＤＥ区東端にあたり、床面積にして約５分の２が調査区外となるため正確な規模は不明であるが、残存部から直径約６ｍの円形に復元できる。検出面からの深さは約25cmを測り、床面の海抜高は8.0ｍである。床面の残存状況は良好であったが壁体溝は確認されなかった。被熱面は２か所認められた。南側は面が赤変しているにすぎなかったが、北側については径30cm弱の範囲が浅くくぼんで非常によく焼けており、継続的に使用されたようである。主柱穴はＰ１～Ｐ３の３本検出されているが、本来は４本柱であったと考えられる。柱穴内埋土のうち、12層は非常によくしまっており、Ｐ３ではこの面に根石らしき割り石が敷いてあったことも考え合わせると、柱の沈下を防ぐため人為的に充填されたと考えられる。またＰ６・Ｐ７は小さく浅いものであるが、主柱穴間中央に対をなしてあることから束柱にあたるかもしれないと考えた。Ｐ８・９は65×45cmの楕円形を呈する深さ10cm程度の浅いものであり、Ｐ８上面から

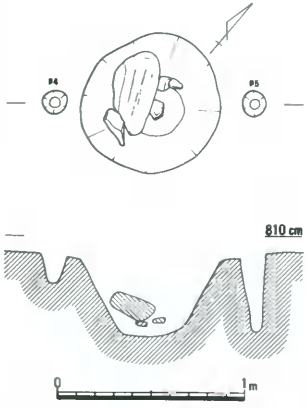


1．灰褐色粘質土
2．茶灰褐色粘質土
3．淡灰黄褐色粘質土
4．茶灰色粘質土
5．暗灰色粘質土
（炭、焼土含む）
6．茶灰色粘質土
（炭、焼土多く含む）
7．灰褐色粘質土
8．淡黄褐色砂泥
9．暗灰色粘土
10．黄褐色砂質土
11．褐黄色砂質土
12．淡灰色粘質土（粘性強）

第134図　竪穴住居２(1/60)

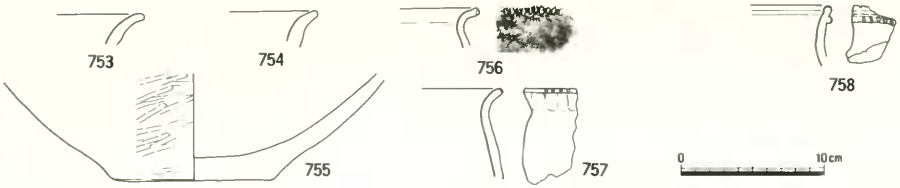
はＳ99・100が出土している。

中央穴は径75cm、深さ43cmの円形で断面は逆台形を呈している。被熱痕は認められず、灰や焼土の堆積もなかった。南北両脇にＰ４・Ｐ５を伴っており、深さはP.4で15cm、Ｐ５で40cmと差が大きいが、両者とも上面径13cm、底径８cmを測る。中央穴内からは甕757のほかＳ170～199が出土している。Ｓ197は重量17kgをこえる大型の砥石で、両面とも磨いて平滑な作業面をつくり、使用痕として幅１cm前後の筋や、打痕が認められる。後述するように当住居からは管玉の未製品が出土しており、玉砥石として使用されたと考えられる。Ｓ198は敲石としているが側面に研磨された面を持っているので磨石としても使用されたようである。これらの石器は出土状況からみると偶然に落ち込んだとは考えにくく、住居廃絶時に一括して投棄されたと想定される。



第135図　竪穴住居２
中央穴（1/30）

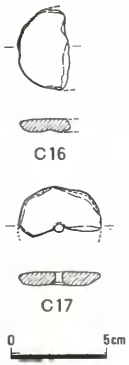
出土遺物のうち土器はごくわずかで、図化しうるものは６点にすぎなかった。床面で検出されたのは755だけで、757は中央

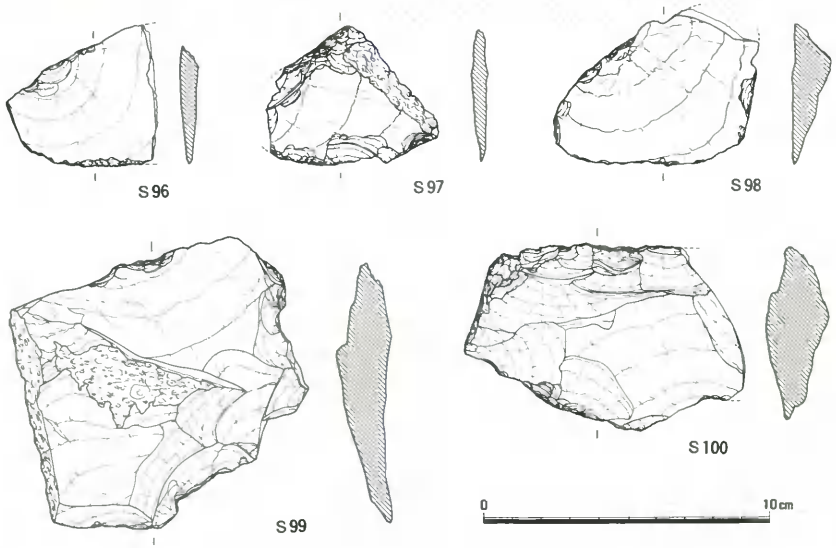


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
753	弥生土器	壺	段？。		淡黄　2.5Y8/3	
754	弥生土器	壺			橙　7.5YR6/6	
755	弥生土器	壺	胴部ミガキ。	ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/4	
756	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ナデ。	ナデ。	橙　7.5YR6/6	
757	弥生土器	甕	口唇部刻目。胴部ナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
758	弥生土器	？	口唇部刻目。貼付刻目突帯。	口縁部凹線。ナデ	明褐灰　7.5YR7/1	

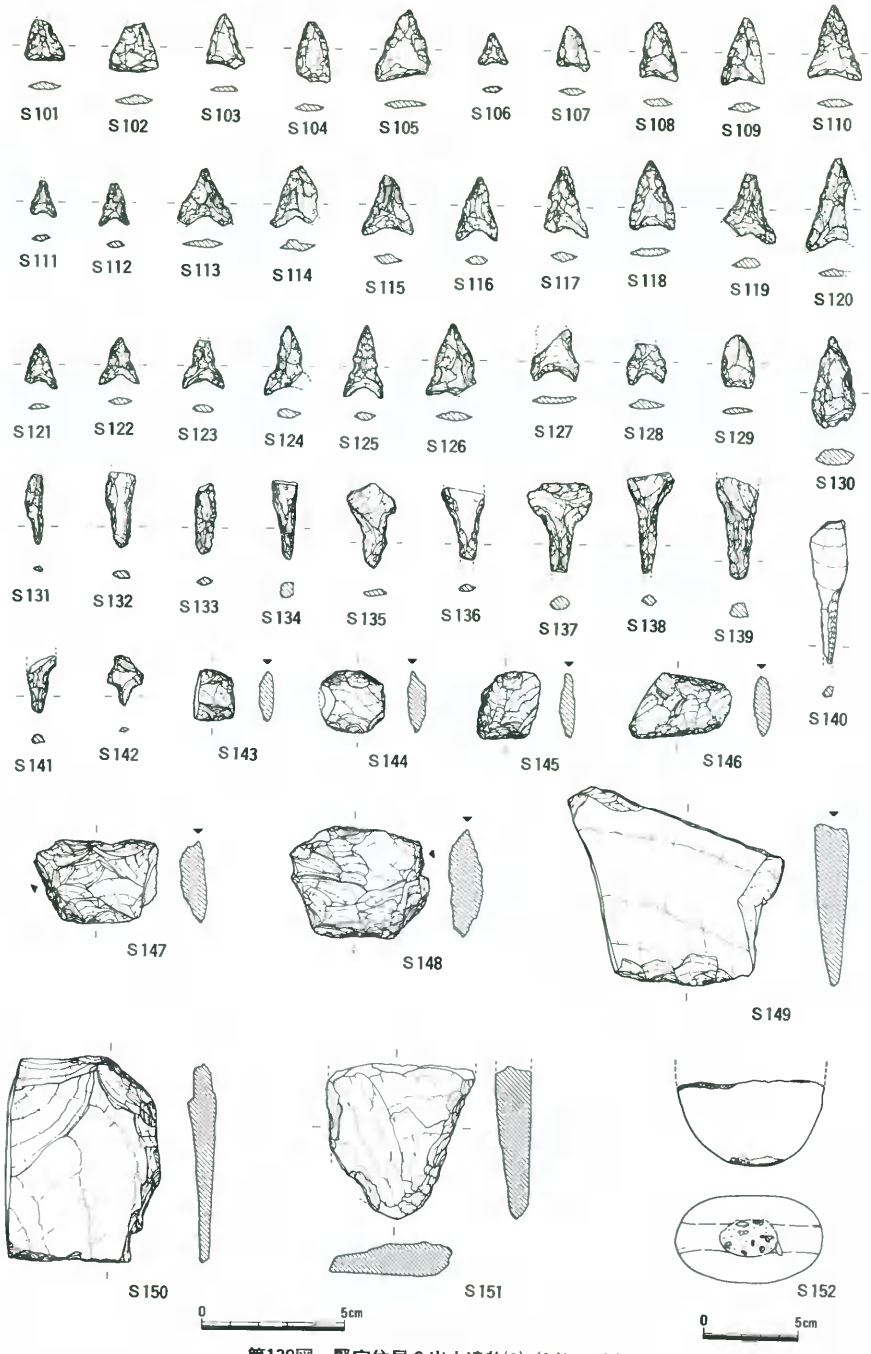
第136図　竪穴住居２出土遺物(1)（1/4）

穴、それ以外は埋土中から出土した。**753・754**は有段の壺の口縁部である。**756・757**は如意状口縁を有する甕で**756**は口唇部下端に、**757**は口唇部全面に刻みを施す。**758**は縄文時代晩期の深鉢で、口縁上端に面を持ち内面に沈線を残すなど突帯文土器の中でもやや古い様相を示すもので、混入したと考えたほうが妥当であろう。また、埋土中にかなりのサヌカイト片が混在していたので床上５㎝の限って土を持ち帰り、ふるいにかけながら水洗した結果、石鏃や石錐をはじめ多くの石製品および緑色凝灰岩製の管玉の未製品やその剝片、メノウ片などが検出された。中央穴埋土についても同様の状況が認められたので同じく土を持ち帰り水洗によって遺物の抽出を行った。その結果得られた製品の総数は200点近く、その内訳は石鏃97点、石錐21点、楔形石器24点、スクレイパー９点、コア１点、鍬１点、砥石２点、敲石２点などである。またチップ・フレイクを含めたサヌカイトの総重量は製品と合わせて３㎏をこえる。中央穴出土のものは第140・141図に、それ以外については第137・138図に図示している。

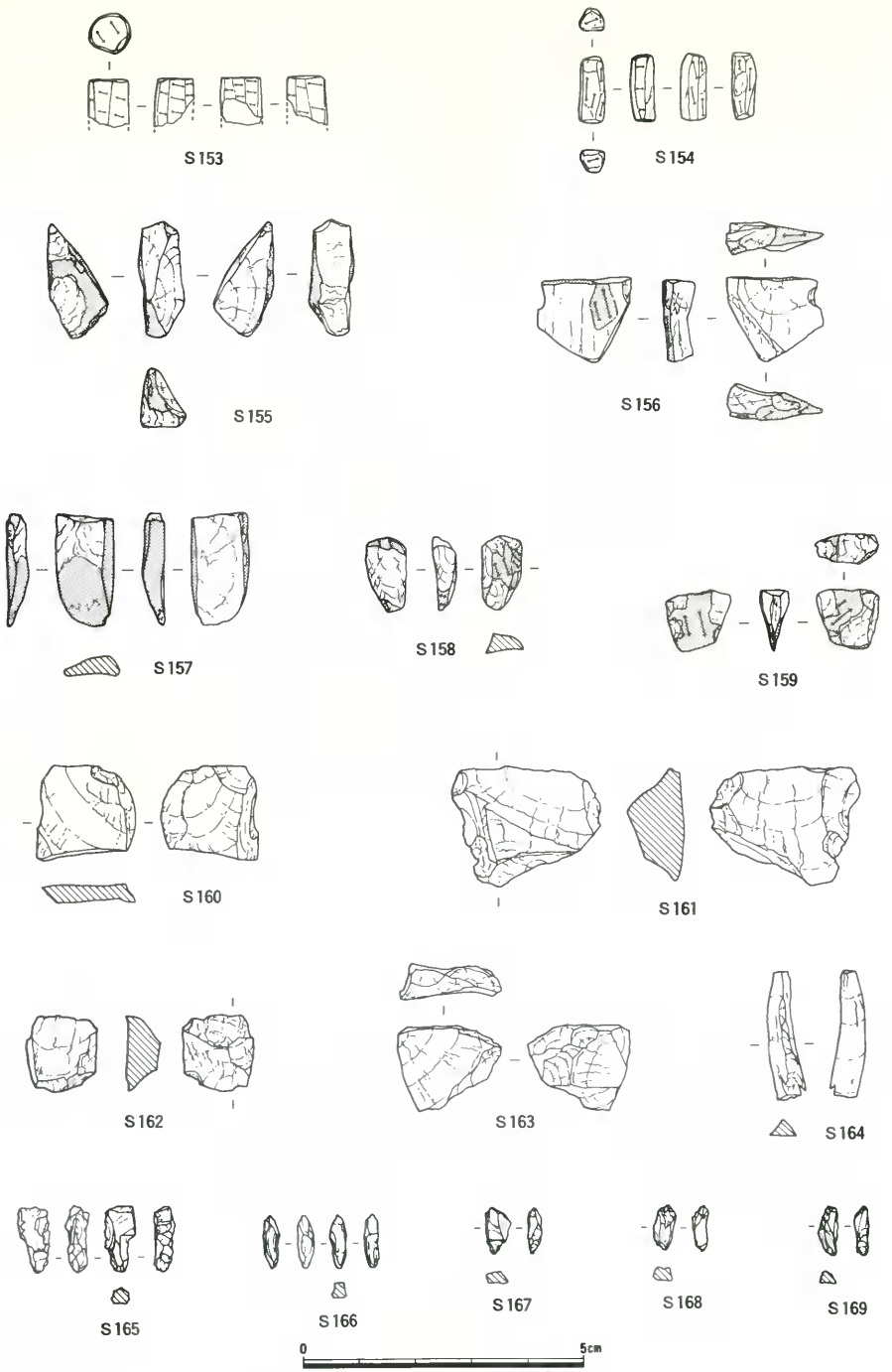




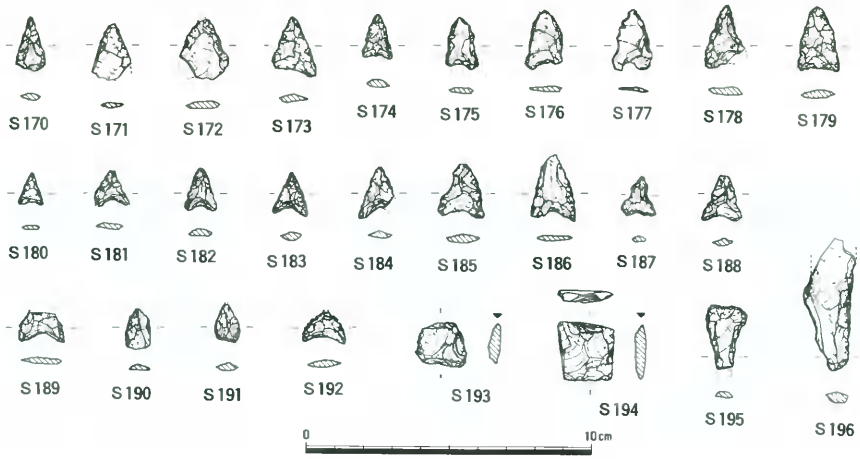
第137図　竪穴住居２出土遺物(2)（1/2・1/3）

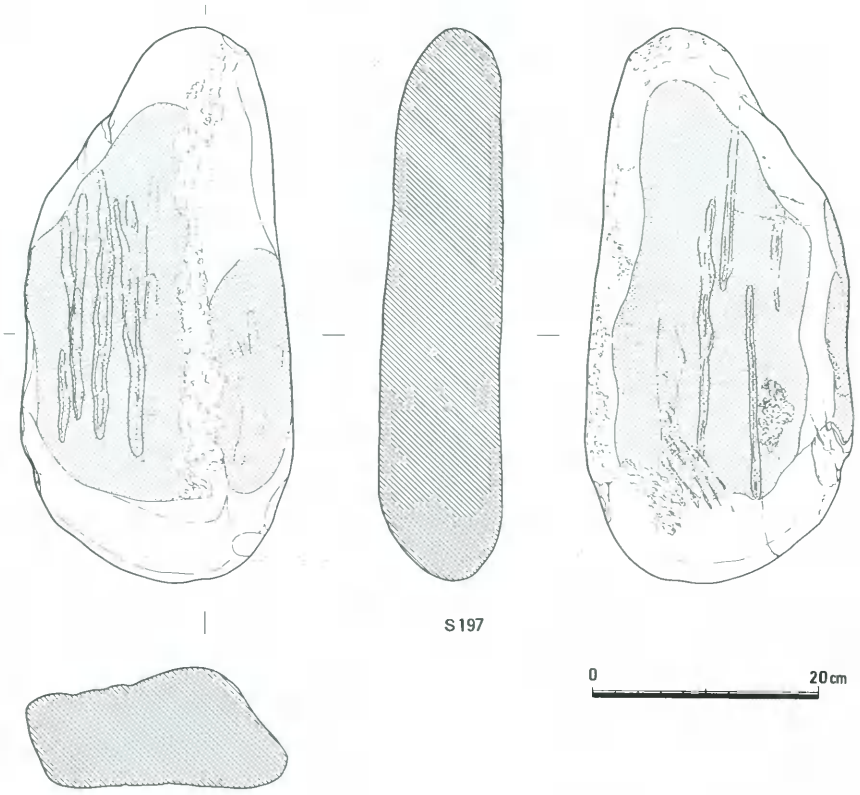


第138図　竪穴住居２出土遺物(3)（1/2・1/3）

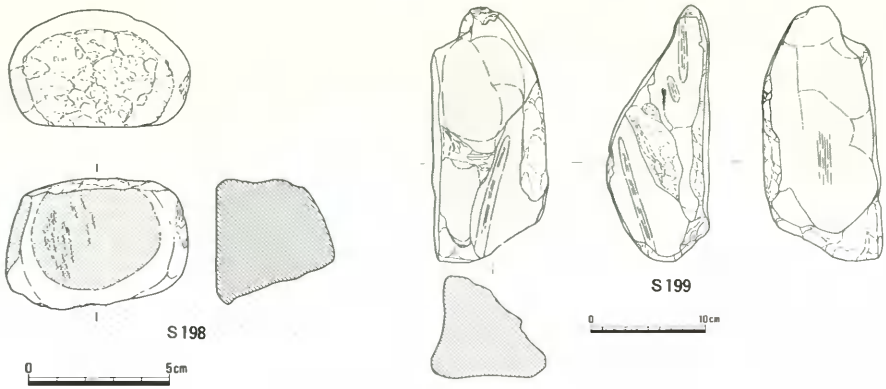


第139図　竪穴住居２出土遺物(4)（1/1）





第140図　竪穴住居２出土遺物(5)（1/2・1/5）



第141図　竪穴住居２出土遺物(6)（1/3・1/5）

管玉の未製品は**S153・154**の２点のみで、**S153**はかなり研磨が進んでおり、ほぼ円筒形に近く、上面も平坦になっているが穿孔はされていない。途中で折損していて長さは不明であるが、径８㎜、重さ0.54ｇを測る。**S154**は完形であるが研磨は**S153**ほど進んでおらず、上面観は台形に近い。長さ11.9㎜、最大径4.4㎜、重さ0.32ｇを測る。これもまた穿孔されていない。**S155～163**は緑色凝灰岩の剥片である。**S155～160**は不定形の剥片で、表面を研磨しているが、**S159**のようにこのまま研磨を進めても管玉となり得ない程小さいものもあり、これらが全て管玉製作過程での一段階を示すとは限らないようである。**S164～169**はメノウ素材のものである。**S165～169**は米粒状で厚みがあり、従来打製の錐とされていたものに近い形態を有する。表裏に平坦面を残し、両側面から押圧剥離を加えて錐部をつくりだしている。上下端に打痕が加えられているものもあるが、先端部に横方向の擦痕は認められなかった。図示した以外のチップやフレイクも含めた出土量は緑色凝灰岩で約66ｇ、メノウ片で約13ｇであった。

上述のとおり、当住居からは管玉の未製品およびその素材片、砥石やメノウ製の錐らしき工具も出土しており、住居内で管玉の製作が行われたことは疑いない。しかし出土量が少ないうえ完成品も出土しておらず、専業工房として使用していたかどうかは不明である。

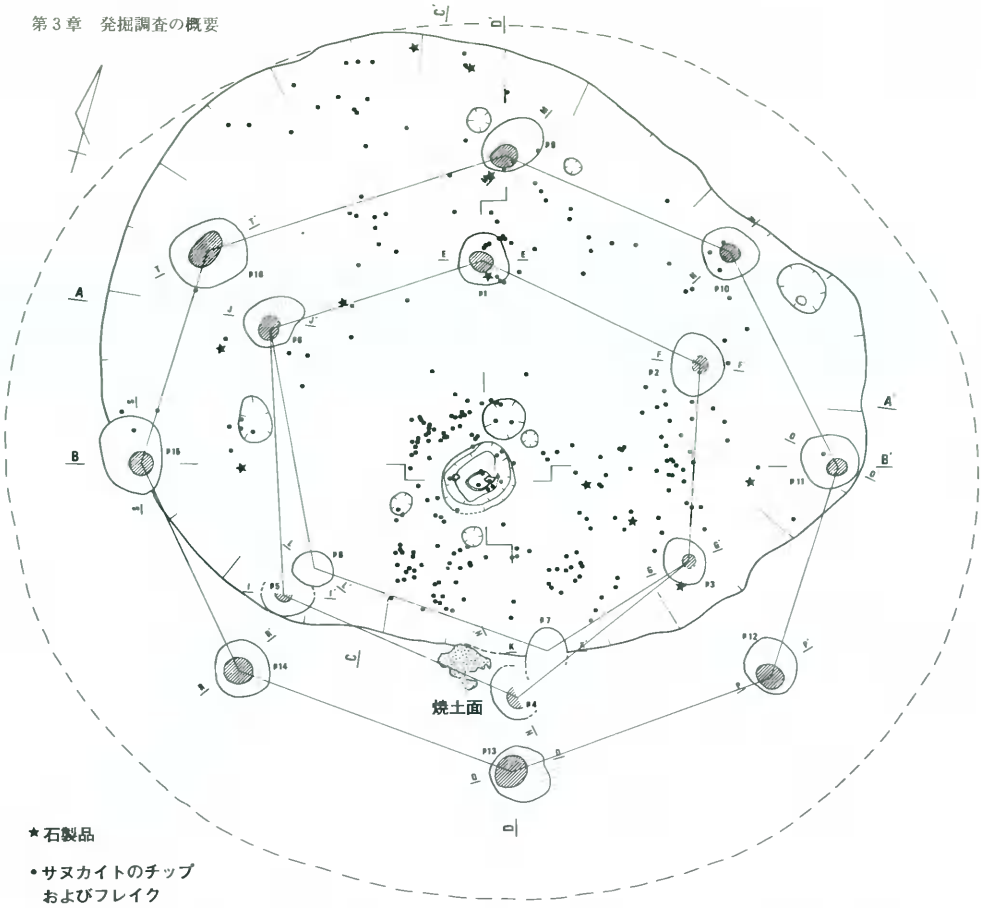
所属時期については出土遺物からは特定することが困難であるが、住居上面を被覆している包含層から弥生時代前期中葉に属する土器が出土しており、それ以前に埋没したといえ、前葉まで遡りうる可能性も考えられる。（久保）

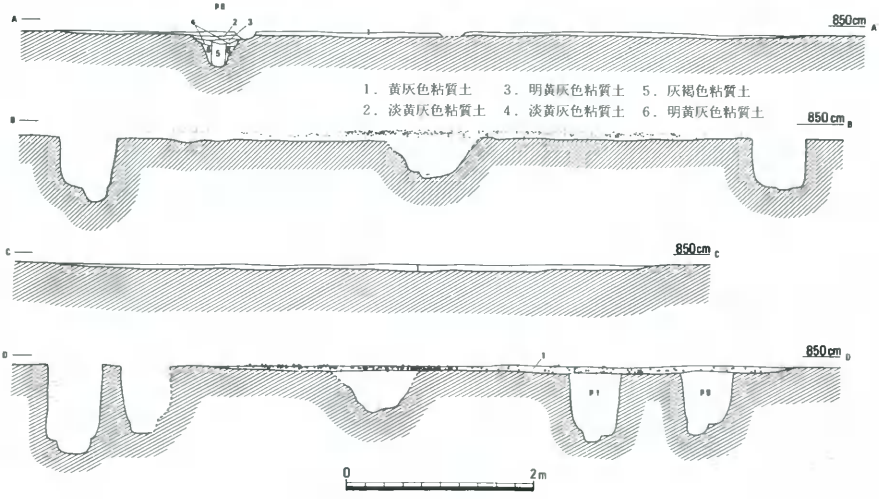
竪穴住居３（第142～147図、図版10）

第２微高地(東)の北西部、ＪＹ区中央東寄りから検出された。竪穴は上部を後世による削平を受け、わずかに床面の一部と柱穴を残すものであった。平面形態は柱穴の位置および残存する床面から東西にやや長い楕円形を呈し、床面推定規模は10.5×9.5ｍの約77㎡を測る大型の住居である。

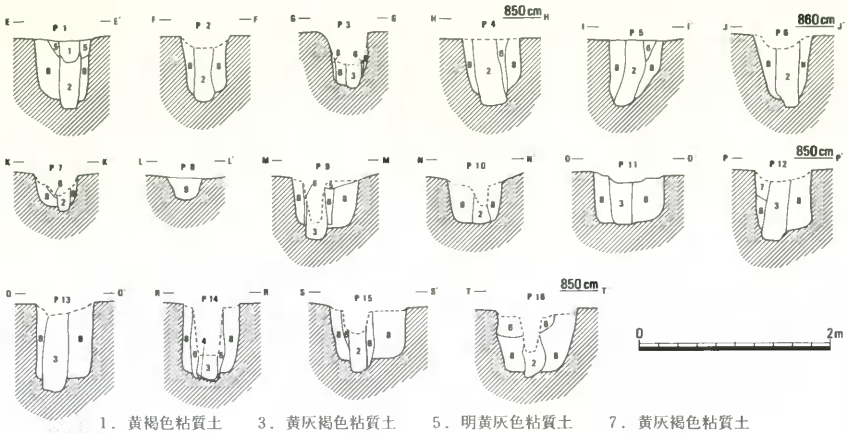
残存する床部分は東西８ｍ、南北約6.5ｍの平面不整楕円を呈す部分で、中央に向かいわずかに下がっており、覆土は中央付近で約５㎝を残すのみであった。覆土中からはドットで示すようにサヌカイトの剥片が石製品に混じって散在する状況であった。

主柱は外側を巡る８本（Ｐ９～16）および内側を巡る６本（Ｐ１～６）の形12本である。なお、内



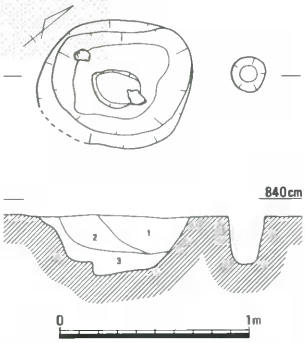


第142図　竪穴住居３(1/60)



1．黄褐色粘質土　3．黄灰褐色粘質土　5．明黄灰色粘質土　7．黄灰褐色粘質土
2．黄茶褐色粘質土　4．灰黄色粘質土　6．黄灰色粘質土　8．明黄灰色粘質土

第143図　竪穴住居３柱穴断面図（1/60）

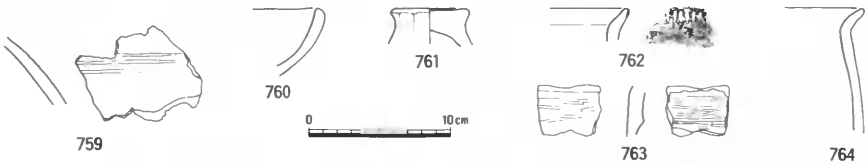


1．灰褐色粘質土　3．褐灰色粘質土（炭含む）
2．明黄灰色粘質土

第144図　竪穴住居３中央穴（1/30）

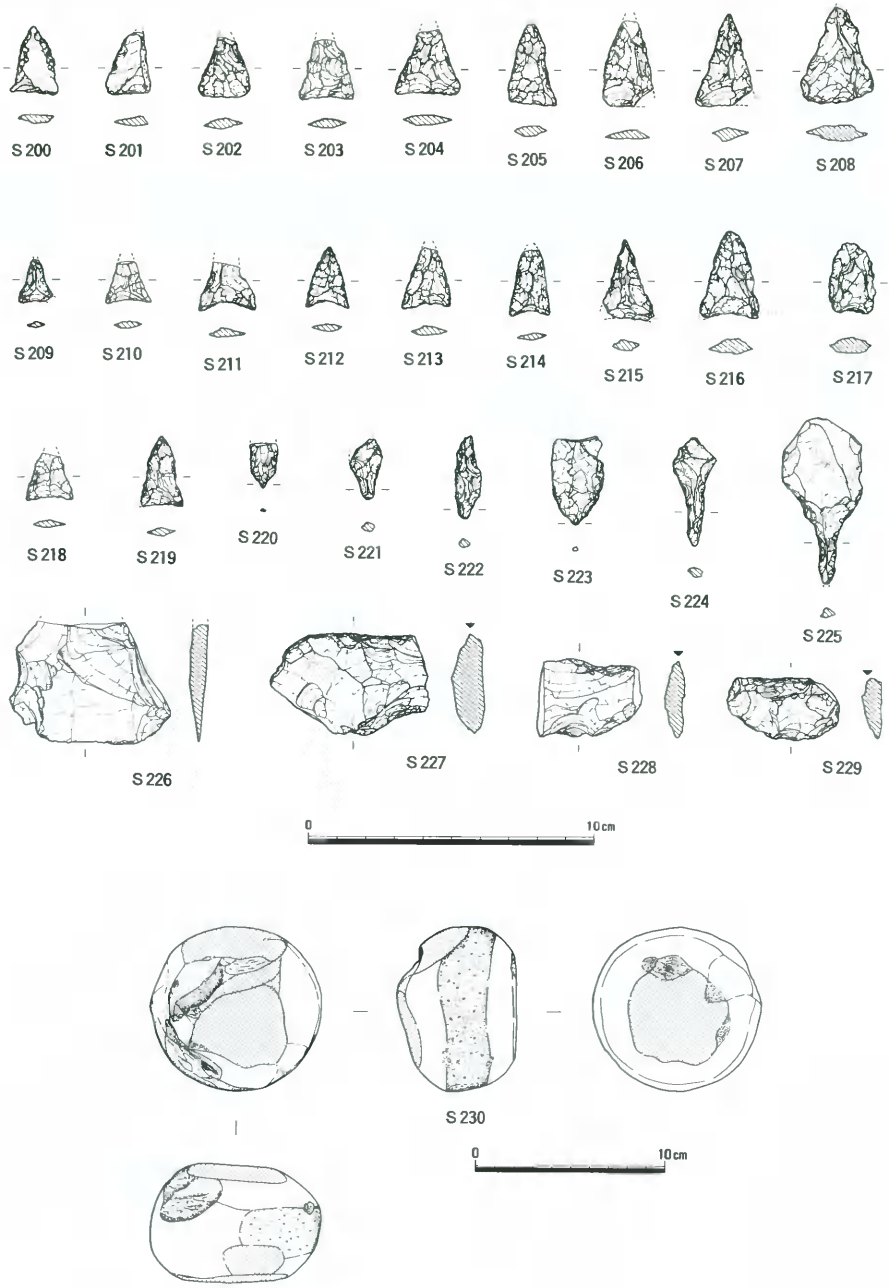
側のＰ７・８は他の柱穴と比べて浅く、後にＰ４・５に添えられたものと考えられる。外側を巡る柱穴は計60～80cm、内側のそれは径50～60cm前後と平面規模は小さい。床面からの深さは内外とも50～60cmを計測するものが多いが、外側のＰ13・14は80cm近く掘りこまれていた。また、主柱穴はいずれも柱痕跡が確認されており、径15～20cm前後の材が使用されたものと推定される。

中央穴は80×70cmの平面楕円形を呈し、深さは30cmを測る。底部は平坦ではなく、径約20cm程の更に掘り込まれた箇所が確認された。埋土は３層に分かれ、最下層は炭粒を多く含むものであった。土壙内からは**762・763**の土器片をはじめ石製品なども出土しているが、特に１層からは総計28個の未製品～完形品までを含む紡錘車が集中して出土した。なお、中央穴の周囲からは小柱穴状の土壙を検出しており、特に中央穴

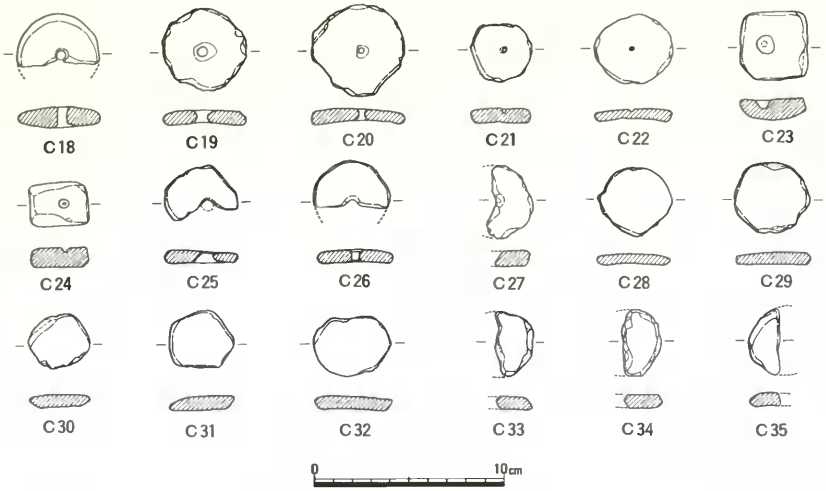


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
759	弥生土器	壺	トラ描き沈線。		明赤褐　5YR5/6	
760	弥生土器	鉢			黄灰　2.5Y5/1	
761	弥生土器	蓋	コビキサエ。	ナデ？。	褐灰　10YR6/1	
762	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヨコナデ？。	ヨコナデ？。	灰黄褐　10YR6/2	
763	弥生土器	甕？	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	浅黄橙　7.5YR8/4	
764	弥生土器	甕			にぶい黄橙　10YR7/2	

第145図　竪穴住居３出土遺物(1)（1/4）



第146図　竪穴住居３出土遺物(2)（1/2・1/3）



第147図　竪穴住居３出土遺物(3)（1/3）

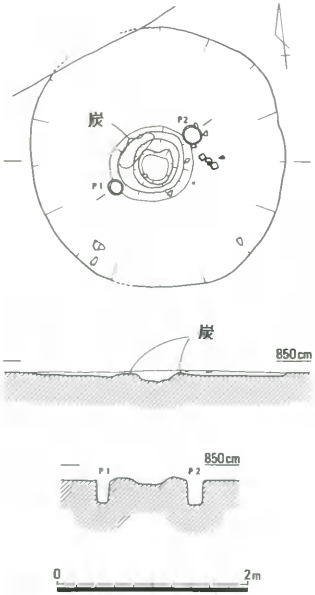
の主軸延長線上に径約20cm、深さ25cmの土壙を検出したが、相対する南西側からは精査にもかかわらず所在は確認し得なかった。

一方、床面からは３か所の焼土面が検出されたが、特に住居南部、Ｐ４の西から検出された焼土は厚さ約２cmを測る、異常に高熱を発した部分と推察された。

以上、当住居は覆土および柱穴等から出土した土器細片の特徴から弥生前期前葉～中葉にかけてのものと判断されるとともに、竪穴の規模および紡錘車、石製品のあり方など、単に居住人員の多寡の結果としてだけでなく、共同の作業場としての役割を担った場所の可能性を指摘できるのではなかろうか。（江見）

竪穴住居４（第148図、図版10）

ＫＹ３区で検出した。平面形はほぼ円形を呈し、規模は278×275cmである。埋土は淡褐灰色粘質土で、深さは約５cmが残存していたにすぎない。床面はほぼ水平であるが、壁の立ち上がりは不明瞭で、壁体溝は検出できなかった。この竪穴住居のほぼ中央部には、40×38cmの不整円形を呈する土壙が存在している。断面形は皿状で、深さは床面から約８cmを測る。埋土は住居全体の埋土と同じであった。またこの土壙の周囲には、幅15cm前後で高さ約２cmの土手状の高まりがめぐっており、その上面には一部炭層の分布が認められた。柱穴はこの土壙の両側に２本確認できたが、検出は非常に困難であった。出土遺物は埋土中および床面上から土器が少量出土したのみである。時期は弥生時代前期であろう。（平井）

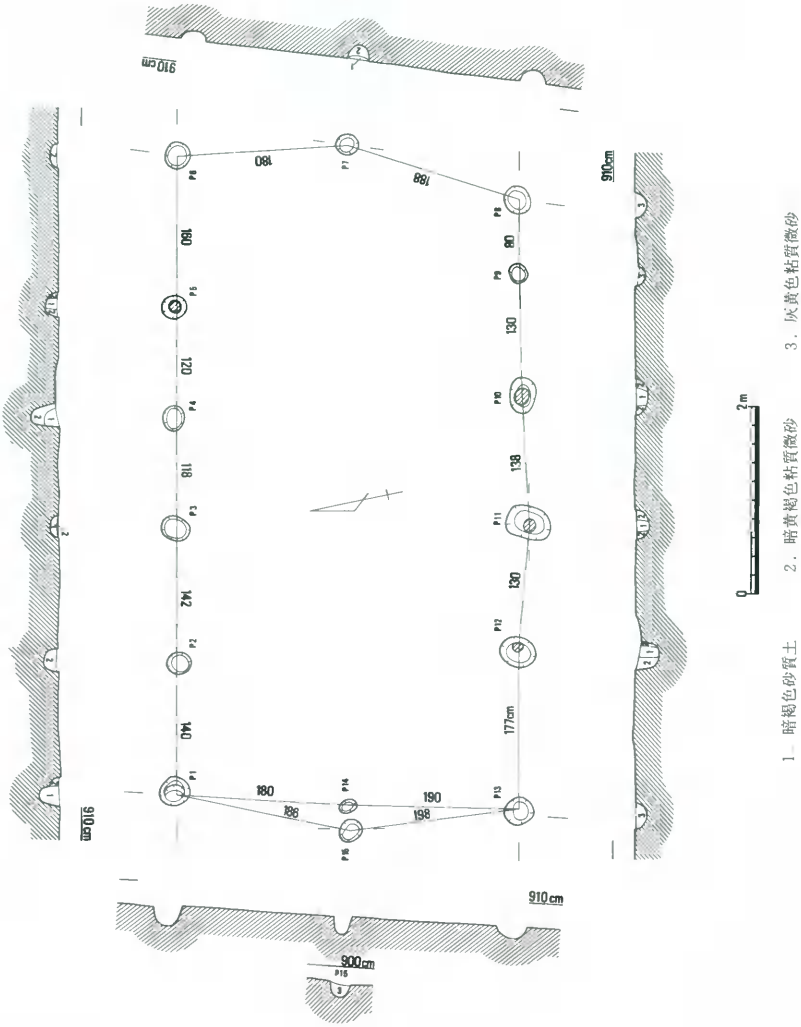


第148図　竪穴住居４（1/60）

(2) 建　　物

建物１（第149図、図版11）

第２微高地上に位置する。竪穴住居２からは西へ約40ｍ離れている。５×２間の規模を有し、桁行650～680㎝、梁間370㎝を測る。柱穴の規模や形態にはばらつきがあり、柱穴間の距離にも長短の差があるが南北両辺ともほぼ直線上に並んでおり、建物を構成する柱と考えた。ただしＰ８については柱間距離が他の半分程度でＰ６とは直に対をなしているとはみなしがたい。また、Ｐ７・14・15もその位置から棟持柱としているが、確実に建物を構成する柱となるかどうか断言できかねる。柱痕はＰ１・４・５・10～11で確認された。時期については出土遺物が無いため特定はできないが、柱穴埋土の状況より、弥生時代前期に属すると考えたい。（久保）



第149図　建物１（1/30）

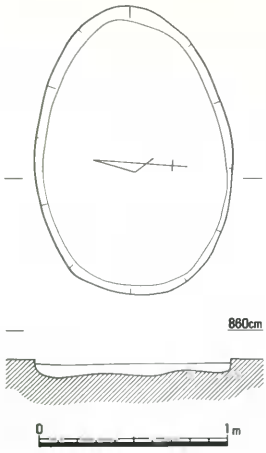
(3) 土　　壙

土壙28（第150図）

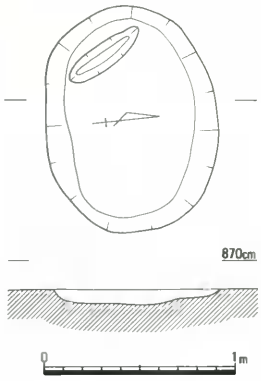
第２微高地(西)のＡＴ区北西部に位置し、土壙29との距離11.3ｍを測る。平面形は154×106㎝の楕円形で、海抜8.35ｍの底面には凹凸があり、埋土は淡茶灰褐色土である。遺物は出土していないが、検出状況から弥生時代前期の遺構と考えられる。（光永）

土壙29（第151図）

ＡＴ区西辺中央部に位置し、土壙30に近接している。平面形は119×91㎝の楕円形で、深さ８㎝の断面形は皿形を呈する。底面西端には45×13×５㎝の溝状のくぼみが認められた。埋土は暗灰褐色土であり、遺物は出土していないが、弥生時代前期に比定しうる。（光永）



第150図　土壙28（1/30）



第151図　土壙29（1/30）

土壙30（第152図）

ＡＴ区西辺中央部に位置し、竪穴住居１との距離11.5ｍを測る。調査区内では東半を検出したのみで全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈するものと想定される。深さ18㎝の埋土は灰黄褐色土１層である。検出状況から弥生時代前期に比定される。（光永）

土壙31（第153図）

ＡＴ区南西隅に位置し、土壙32との距離６ｍを測る。西端を失っているが、平面形は157×91㎝の楕円形で、深さ10㎝の断面形は皿形を呈する。埋土は暗黄茶褐色土で、炭小片が混じる。出土遺物はないが、弥生時代前期に比定しうる。（光永）

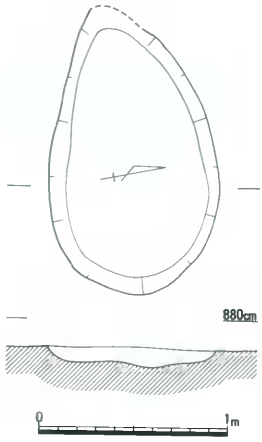
土壙32（第154図）

ＡＴ区南西部南端に位置し、竪穴住居１との距離1.5ｍと近接する。平面形は不整楕円形で、長径221㎝、短径83㎝を測り、深さ11㎝の断面形は皿形を呈する。埋土は暗黄茶褐色土で、炭小片が混じる。出土遺物はないが、弥生時代前期に比定しうる。（光永）

土壙33（第155図）

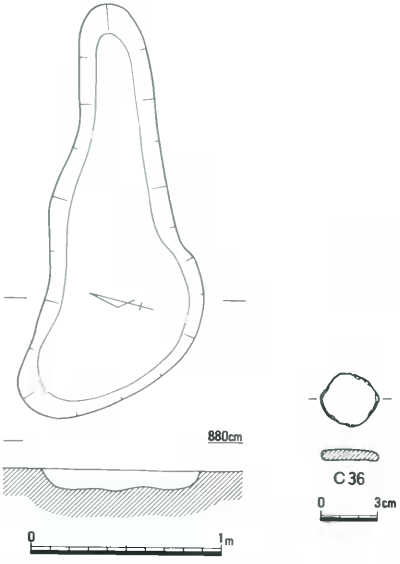
ＡＴ区北東部に位置し、土壙34との距離4.2ｍを測る。平面形は長軸を東西におく隅丸長方形で、

第152図　土壙30（1/30）

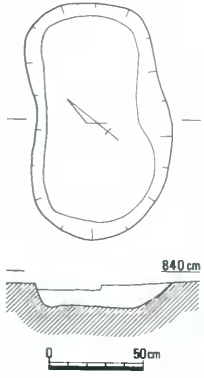


第153図　土壙31（1/30）

長軸長125㎝、短軸長71㎝で、海抜8.2ｍの底面はほぼ平坦である。深さ12㎝の埋土は暗灰茶褐色土で、炭小片が混じる。出土遺物はないが、弥生時代前期に比定しうる。　（光永）



第154図　土壙32（1/30）・出土遺物（1/3）



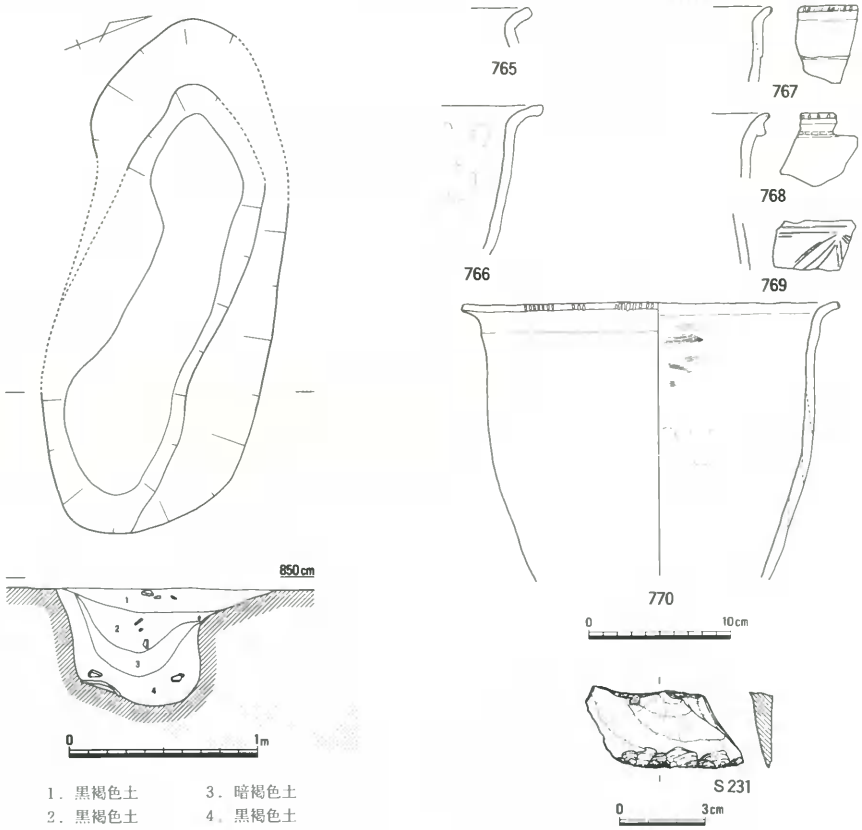
第155図　土壙33（1/30）

土壙34（第156図）

ＡＴ区北東部に位置し、土壙35を削り、土壙38との距離0.5ｍと近接している。いわゆる舟形土壙で、長径277㎝、短径113㎝、深さ62㎝を測る。２段に掘られており、ゆるく傾斜する上段に対して下段の側壁は直立に近く、海抜7.82ｍの底面は208×56㎝の規模である。弥生土器の甕**765**～**770**とサヌカイト製のスクレイパー**Ｓ231**が出土しており、弥生時代前期前葉～中葉に比定される。　（光永）

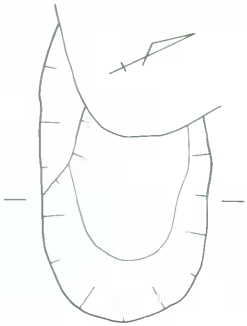
土壙35（第157図）

ＡＴ区北東部に位置し、北西端部を土壙34に削られている。平面形は楕円形に復元され、現存長径160㎝、短径90㎝を測る。深さ33㎝の断面形は椀形で、底面の海抜高は8.07ｍである。遺物は１層か



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
765	弥生土器	壺	口縁部ミガキによる段？。		浅黄　2.5Y7/3	
766	弥生土器	鉢？	口縁部ユビオサエ。胴部ハケメ。	ユビオサエのちナデ？。	黄灰　2.5Y4/1	
767	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。胴部段。		黒褐　10YR3/1	
768	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。。貼付刻目突帯。		明褐灰　7.5YR7/1	口唇部煤
769	弥生土器	壺	ヘラ描き木葉文。	ナデ？	灰白　2.5Y8/2	
770	弥生土器	甕	口唇端部部分的に刻目。胴部ミガキ？	胴部ハケメ、ナデ	灰黄　2.5Y7/2	

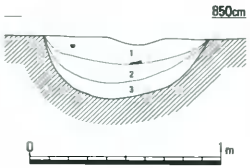
第156図　土壙34（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）



771

772

0　10cm



1．褐色土
2．褐灰色土
3．黒褐色土

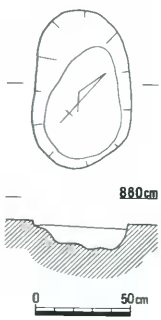
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
771	弥生土器	甕	口縁部ユビオサエ。	ユビオサエ、ナデ?。	灰白　7.5YR8/1	口唇部刻目不詳。
772	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。	ナデ?	にぶい褐　7.5YR5/3	

第157図　土壙35（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

らの出土で、弥生土器の甕**771・772**の他に、サヌカイト製の石鏃**S 232**がある。これらの遺物と土壙34との関係から、時期は弥生時代前期前葉～中葉に求められる。（光永）

土壙36（第158図）

ＡＴ区北東部に位置し、土壙33との距離9.8ｍを測る。平面形は83×52cmの楕円形で、深さ13cmで凹凸のある底面にいたる。底面は60×40cmの楕円形で、海抜高は8.32ｍである。弥生土器の甕**773**が出土しており、弥生時代前期中葉に比定される。（光永）



773

0　10cm

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
773	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。胴部浅い沈線。	ユビオサエのち ナデ。	橙　7.5YR7/6	

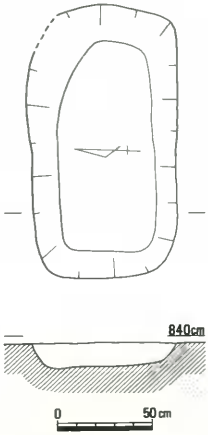
第158図　土壙36（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙37・38・39（第159～161図）

ＡＴ区北東部に位置し、土壙37と土壙38はほとんど接して、土壙35の南に近接する。土壙39はこれらの南西に2.3ｍ離れて所在する。

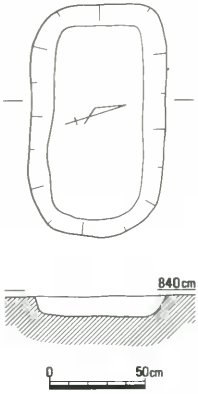
平面形は楕円形ないし隅丸長方形で、147×80×13㎝、105×52×11㎝、124×71×11㎝の規模を測り、断面形はいずれも皿形である。底面はほぼ平坦で、海抜高は8.25ｍ前後であり、平面形は楕円形ないし隅丸長方形を呈して、111×50㎝、87×29㎝、103×50㎝の規模である。

埋土はいずれも灰黄褐色砂質土であり、図示するに足る遺物は出土していないが、検出状況から、弥生時代前期に比定されうるものである。（光永）



第159図　土壙37（1/30）

第160図　土壙38（1/30）

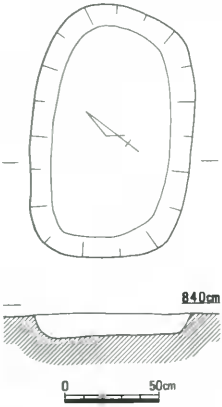


第161図　土壙39（1/30）

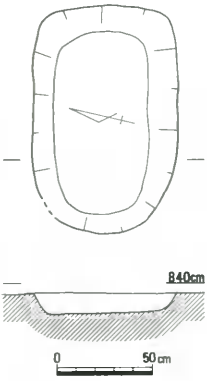
土壙40・41・42（第162～164図）

ＡＴ区北東部で、土壙38と土壙44の間に長軸を東西方向にほぼ揃えて近接して検出された。

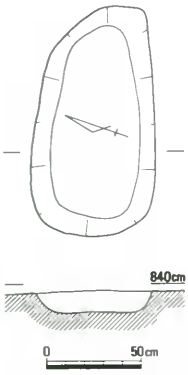
土壙40は平面形隅丸長方形を呈し、規模は134×85×11㎝を測る。断面形は皿形で、ほぼ平坦な底



第162図　土壙40（1/30）



第163図　土壙41（1/30）



第164図　土壙42（1/30）

面の海抜高は8.23ｍである。土壙41は121×76㎝の隅丸長方形で、深さ11㎝の断面形は皿形であり、海抜8.24ｍの底面はほぼ平坦である。土壙42の平面形は不整な隅丸長方形で121×65×11㎝の規模を測り、断面形は皿形を呈して、海抜8.25ｍの平坦な底面にいたる。

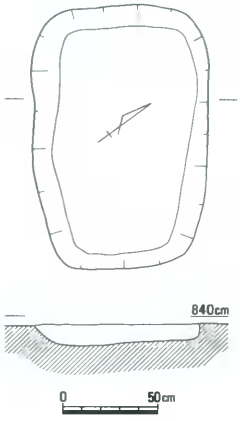
いずれも埋土は灰黄褐色土であり、小量の遺物の出土と、検出状況および遺構の形状・埋土から弥生時代前期に属するものと想定される。（光永）

土壙43・44・45（第165～167図）

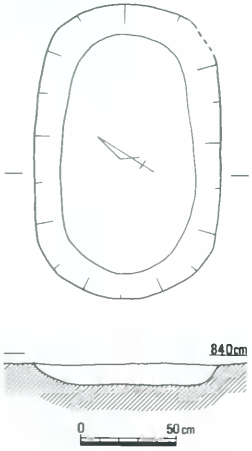
ＡＴ区北東部で、土壙40～42と土壙46・47の間に、長軸方向を異にしながら東西方向に並んで検出された。土壙43と土壙44との距離3.4ｍ、土壙44と土壙45との距離0.4ｍをそれぞれ測る。

土壙43の長軸方向は土壙36・39に近しく、平面形は141×93㎝の隅丸長方形で、深さ10㎝の断面形は皿形を呈する。土壙44の長軸方向は土壙40～42に近しく、平面形は157×99㎝の楕円形で、海抜高8.24ｍの底面はほぼ平坦である。土壙45は長軸を土壙44に直行させる119×73㎝の隅丸長方形で、深さ14㎝の断面形は逆台形に近い。

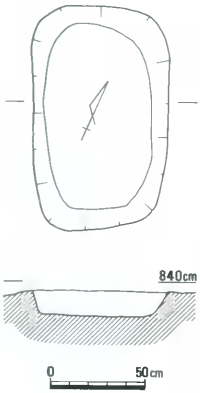
遺物は出土していないが、弥生時代前期に比定される。（光永）



第165図　土壙43（1/30）



第166図　土壙44（1/30）



第167図　土壙45（1/30）

土壙46・47・48（第168～170図）

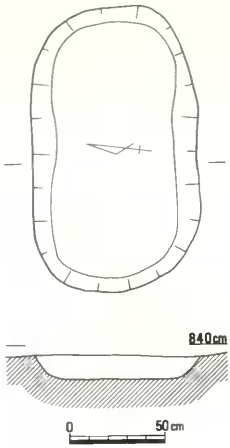
ＡＴ区北東部において、土壙46・47は土壙44・45の南に近接して検出され、土壙48はこれらの西約10.5ｍで検出されている。

土壙46の平面形は151×89㎝の隅丸長方形で、深さ13㎝で平坦な底面にいたる。土壙47も隅丸長方形で、137×82×10㎝を測り、海抜8.24ｍの底面はほぼ平坦である。土壙48の平面形は88×56㎝の楕円形で、深さ13㎝の断面形は皿形を呈する。

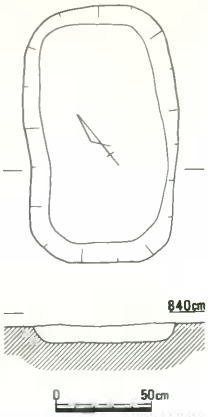
遺物は土壙46から少量出土したのみであるが、弥生時代前期に比定される。（光永）

土壙49（第171図）

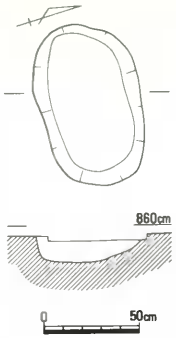
ＡＴ区南東部に位置し、南西端を土壙50に削られている。平面形は楕円形と想定され、現存長径68㎝、短径61㎝を測り、深さ17㎝の断面形は皿形である。灰黄色粘質土の埋土からは、甕**774**をはじめとする弥生土器が出土しており、弥生時代前期中葉に比定される。（光永）



第168図　土壙46（1/30）



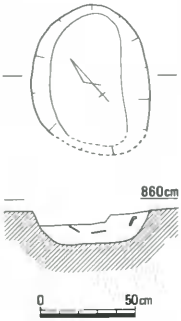
第169図　土壙47（1/30）

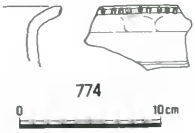


第170図　土壙48（1/30）

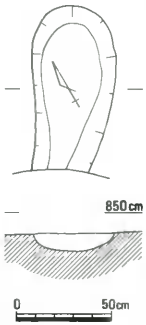
土壙50（第172図）

ＡＴ区南東部で、土壙49を削り、南西端を竪穴住居５に削られている。想定される平面形は楕円形で、現存長径87cm、短径43cm、深さ10cmをそれぞれ測る。小量の土器の出土と検出状況から、弥生時代前期に比定される。（光永）





第171図　土壙49（1/30）・出土遺物（1/4）



第172図　土壙50（1/30）

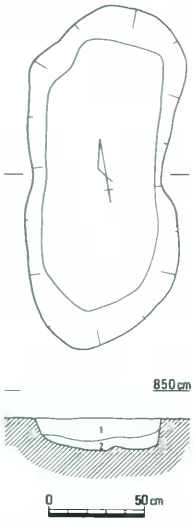
挿図番号	種別	器種	特徴		色調	備考
			外面	内面		
774	弥生土器	甕	口唇下端[illegible]目、胴部ヘラ描き沈線	ヨコナデ？	橙　7.5YR7/6	

土壙51（第173図）

ＡＴ区南東部に位置し、土壙48との距離1.3ｍを測る。平面形は185×80cmの不整な楕円形で、深さ17cmの断面形は皿形で、底面の海抜高は8.18ｍである。小量の土器の出土と検出状況から、弥生時代前期に比定される。（光永）

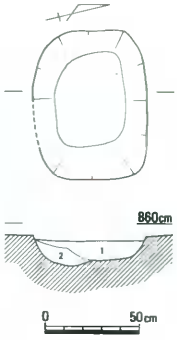
土壙52（第174図）

ＡＴ区南東部に位置し、土壙50との距離3.3ｍを測る。平面形は隅丸長方形で、79×60cmの規模を示し、深さ16cmで海抜高8.34ｍの底面にいたる。遺物は出土していないが、形状と埋土から弥生時代



1．茶褐色土
2．暗茶褐色土

第173図　土壙51（1/30）



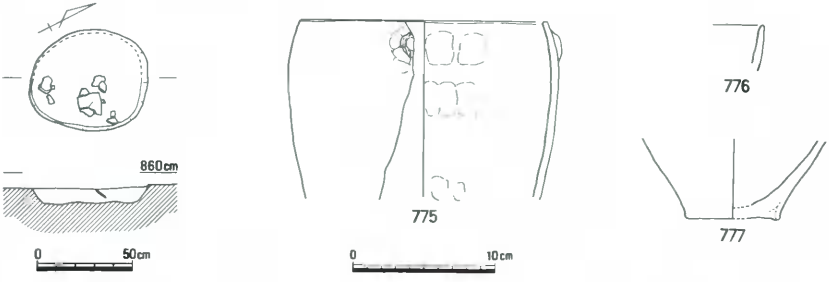
1．黄灰茶褐色土
2．黄褐色土

第174図　土壙52（1/30）

前期に比定される。（光永）

土壙53（第175図）

ＡＴ区南東部に所在し、土壙52との距離2.2ｍを測る。平面形は楕円形で、長径61㎝、短径53㎝を測り、深さ８㎝の断面形は皿形を呈する。底面はほぼ平坦で、海抜高は8.43ｍである。暗灰褐色土の埋土からは、甕**775・777**、鉢**776**をはじめとする弥生土器が出土しており、これらにより、時期は弥生時代前期前葉～中葉に求められる。（光永）

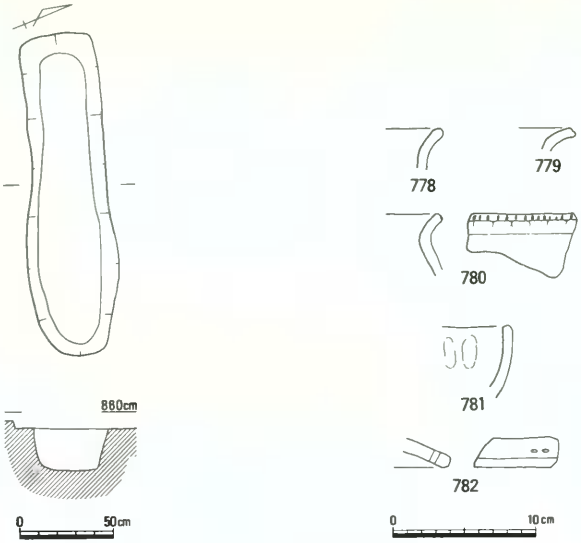


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
775	弥生土器	甕？	口縁部に貼付突起。	ユビオサエのちナデ？。	灰黄褐　10YR6/2	
776	弥生土器	鉢？			にぶい黄橙　5YR7/6	
777	弥生土器	甕	底部ナデ。	ナデ。	橙　2.5YR6/6	

第175図　土壙53（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙54（第176図）

ＡＴ区南東部に位置し、土壙52との距離1.5ｍを測る。平面形は171×49㎝の隅丸長方形を呈し、深さ22㎝の断面形は逆台形である。出土遺物には、弥生土器の壺**778**、甕**779・780**、鉢**781**、蓋**782**など



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
778	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線。ヨコナデ。	ヨコナデ。	にぶい橙　7.5YR7/4	
779	弥生土器	甕	ヨコナデ。	ヨコナデ。	明褐灰　7.5YR7/2	
780	弥生土器	甕	口唇下端篦刻目。口縁部ユビオサエ。		浅黄橙　10YR8/3	
781	弥生土器	鉢	ヨコミガキ。	ユビオサエのちナデ。	橙　2.5YR6/6	
782	弥生土器	蓋	摯孔２個。	ナデ？。	灰白　[illegible]5Y8/1	

第176図　土壙54（1/30）・出土遺物（1/4）

があり、これらにより弥生時代前期前葉～中葉に比定される。　（光永）

土壙55（第177図、図版11）

ＡＴ区南東部に位置し、土壙53との距離6.7ｍを測る。検出面での平面形は233×189㎝の隅丸長方形を呈し、海抜7.85ｍで平坦な底面も173×113㎝の隅丸長方形である。深さ68㎝を測る側壁は底面から40㎝程はほぼ直立し、その上部は緩く外傾する。５層の埋土のうち４層までがこの肩口に乗っており、３層には厚く炭の堆積が認められる。遺物は出土していないが、その構造から後述する土壙59等と同様に、弥生時代前期に比定される。　（光永）

土壙56（第178図）

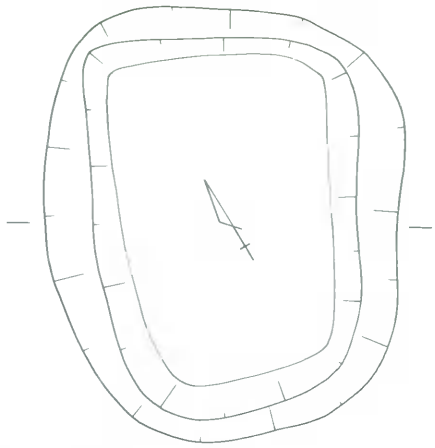
ＡＴ区南東部に所在し、南端を土壙59に削られている。平面形は隅丸長方形と想定され、現存長軸長140㎝、短軸長58㎝をそれぞれ測る。深さ12㎝の断面形は皿形で、底面の海抜高は8.4ｍである。小量の出土遺物と土壙59との関係から、弥生時代前期に比定される。　（光永）

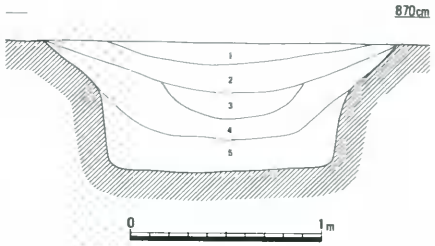
土壙57（第179図）

ＡＴ区南東部に位置し、土壙56との距離1.8ｍを測る。平面形は110×59㎝の楕円形で、深さ16㎝の断面形は皿形を呈する。ほぼ平坦な底面の海抜高は8.4ｍである。遺物は出土していないが、検出状況から弥生時代前期に属するものと考えられる。　（光永）

土壙58（第180図）

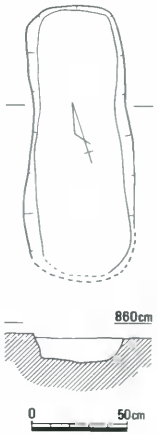
ＡＴ区南東部に位置し、土壙57との距離2.2ｍを測る。



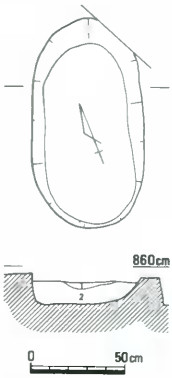


1．暗灰褐色土
2．暗灰褐色粘質土
3．炭
4．黒灰褐色土
（炭含む）
5．黄褐色土

第177図　土壙55（1/30）

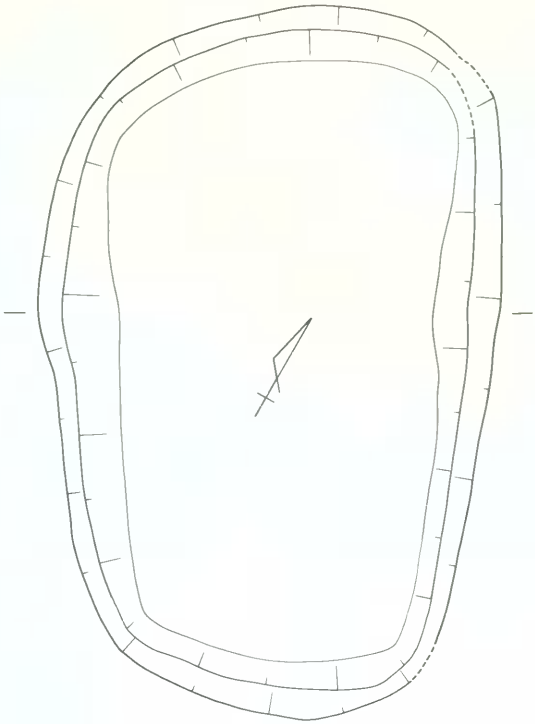


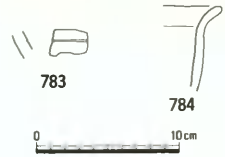
第178図　土壙56（1/30）

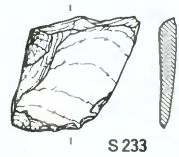


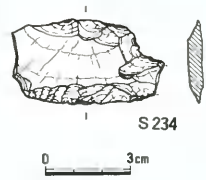
1．灰黄色土
2．黄灰褐色土

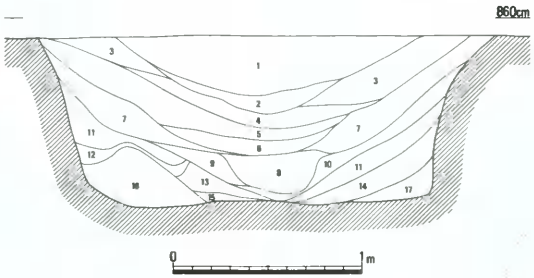
第179図　土壙57（1/30）











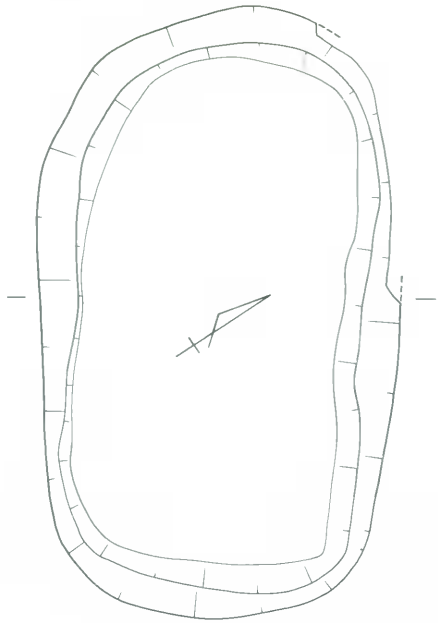
1．暗茶褐色土
2．暗茶色土（炭含む）
3．暗茶色土
4．暗黄茶色粘質土（炭含む）
5．暗灰茶色粘質土
6．暗黄灰茶色粘質土（炭含む）
7．暗黄茶褐色土
8．暗黄茶色土（炭含む）
9．灰黄茶色土（炭含む）
10．黄茶色土
11．暗黄茶色砂質土
12．灰茶褐色土（炭含む）
13．灰黄褐色砂質土
14．灰黄褐色粘質砂質土
15．暗褐色土（炭含む）
16．暗黄灰褐色砂質土
17．暗灰褐色砂質土（炭含む）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
783	弥生土器	壺？	ヘラ描き沈線。		浅黄橙　7.5YR8/3	
784	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。		橙　5YR6/6	

第180図　土壙58（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

平面形は隅丸長方形を呈し、検出面での規模379×245cm、底面での規模317×192cmをそれぞれ測る。深さ89cmの断面形をみると、側壁は直立に近く立ち上がり、上端で外に開いている。ほぼ平坦な底面の海抜高は7.59mである。埋土には炭片の混入が認められる。

甕784をはじめとする弥生土器の他に、サヌカイト製のスクレイパーS233・S234が出土しており、時期は弥生時代前期に求められる。（光永）

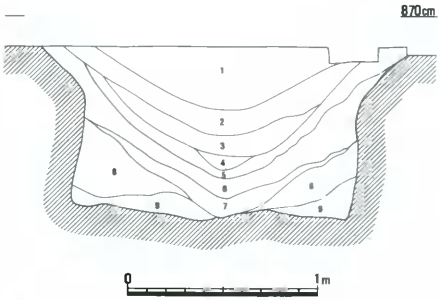


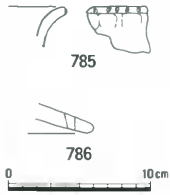
土壙59（第181図、図版11）

ＡＴ区南東部に位置し、土壙56を削り、土壙55との距離2.2ｍを測る。

検出された平面形は隅丸長方形で、327×190㎝を測り、海抜7.63ｍでほぼ平坦な底面も269×139㎝の隅丸長方形である。深さ90㎝の断面では、側壁が下から60㎝程度までは直立に近く立ち上がり、上端で緩く外へ開いている。埋土のうち、７層以上は中央のくぼむ凸レンズ状の堆積を示し、炭片の混入が認められる。

遺物は、弥生土器の甕**785**、蓋**786**などが出土している。これらの出土遺物と、土壙58などとの構造の近似性から、弥生時代前期に比定される。





1．茶褐色土
2．暗茶褐色土（炭まじり）
3．暗黄茶褐色粘質土（炭まじり）
4．黒黄灰色粘質土（炭まじり）
5．黄灰茶褐色土
6．暗黄灰茶色土（炭まじり）
7．暗黄灰茶色土（炭まじり）
8．黄灰褐色土
9．黄灰褐色粘質土

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
785	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ユビオサエ。	ナデ。	浅黄橙 7.5YR8/4	
786	弥生土器	蓋	穿孔		橙色 7.5YR8/1	

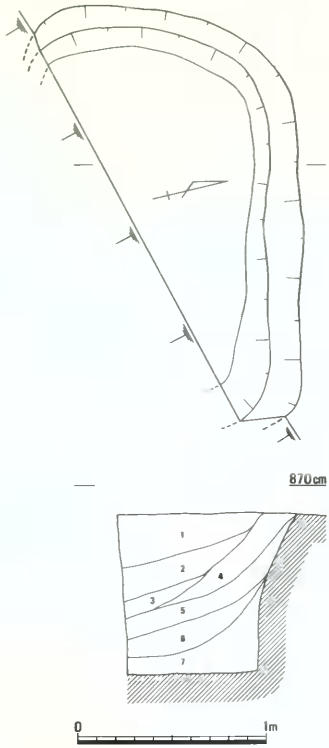
第181図　土壙59（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙60（第182図）

ＡＴ区南東部に位置し、土壙59との距離1.9ｍを測る。南半は調査対象外となったが、土壙55・58・59の類似遺構と考えられる。平面形は隅丸長方形と想定され、最低規模は210×150㎝である。海抜7.7ｍの平坦な底面から45㎝程度までは側壁が直立し、それ以上は外傾する。埋土には炭片を含み、２層においてこれが顕著である。弥生時代前期に比定される。（光永）

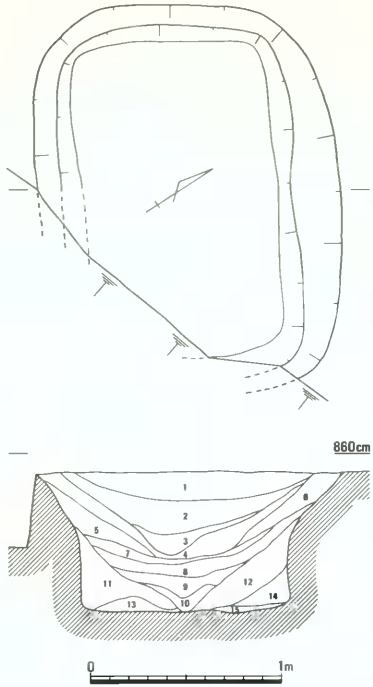
土壙61（第183図）

ＡＴ区南東部に位置し、土壙58との距離１ｍと近い。南隅を調査対象外におくが、土壙60等の類似



1．暗灰褐色土
2．黒灰褐色土
（炭化物多量に含む）
3．暗灰褐色粘質土
4．黄色土
5．暗青灰褐色粘質土
6．黄色砂質土と黒灰褐色粘質土が層状に交互に重なる
7．黄赤褐色砂質土

第182図　土壙60（1/30）



1．暗灰褐色土
2．暗灰褐色土
（淡黄色細砂質土まじり）
3．暗灰褐色粘質土
（淡黄色細砂質土、炭粒含む）
4．暗灰褐色粘質土と淡黄色細砂質土の混合（炭少量含む）
5．暗青灰褐色粘質土
6．暗青灰褐色粘質土
7．暗灰黄褐色土（炭含む）
8．暗灰黄色土（炭含む）
9．黄褐色土
10．暗灰色粘土と黄色土の混合（炭含む）
11．暗灰黄褐色砂質土
12．明黄褐色砂質土
13．暗灰色粘土
（炭少量含む）
14．暗黄褐色砂質土
15．暗灰色粘土

第183図　土壙61（1/30）

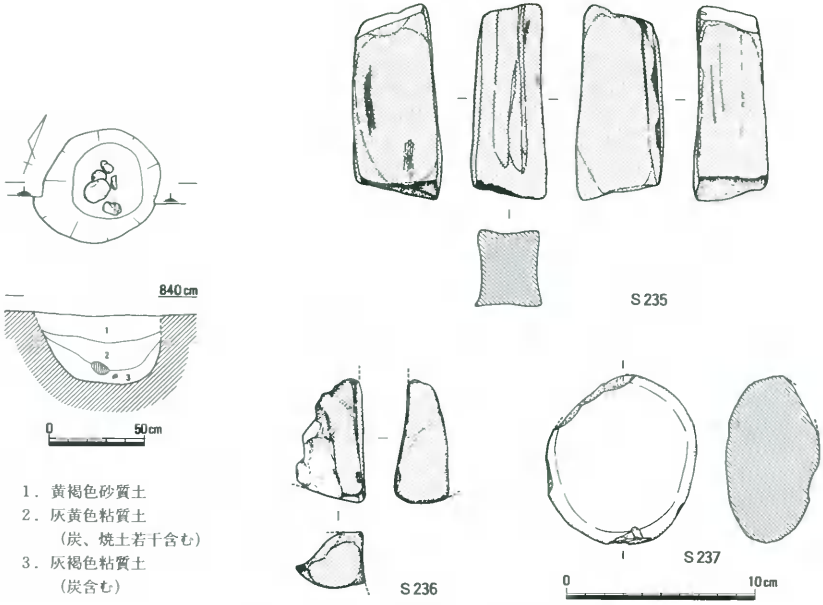
遺構と考えられ、平面形は隅丸長方形で、最低長軸長195cm、短軸長169cmを測る。海抜7.78mで平坦な底面から40cm前後までは側壁が直立し、その上部は外傾している。10層以上の埋土は凸レンズ状に堆積し、層状に炭の堆積が認められる。時期は弥生時代前期に比定される。（光永）

土壙62（第184図）

竪穴住居２の北にあり、住居と同じく低位部に続く緩斜面上に位置する。包含層除去後に検出された。北側を調査区側溝に切られているため正確な規模は不明だが、直径約60cmのほぼ円形を呈し、深さは34cmを測る。３層内の底面近くから石器がまとまって出土しており、住居の中央穴となる可能性も考えて周囲を精査したがそのような痕跡は認められなかった。石器しか出土していないため時期の特定はできないが、土壙63と同じ土で埋没しており、弥生時代前期と考えられる。（久保）

土壙63（第185図）

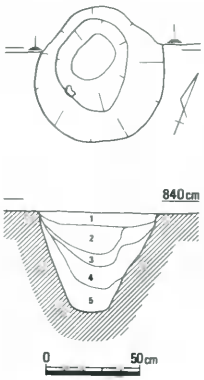
土壙62の西に隣接する。北側を側溝に切られているが、直径約70cmの円形を呈すると考えられる。深さは53cmを測る。３層は炭・焼土からなる層で、この層を境に上は砂質土、下は粘質土となる。時期は、図化し得なかったが体部細片が出土しており弥生時代前期前葉～中葉と考えられる。（久保）



第184図　土壙62（1/30）・出土遺物（1/3）

土壙64（第186図）

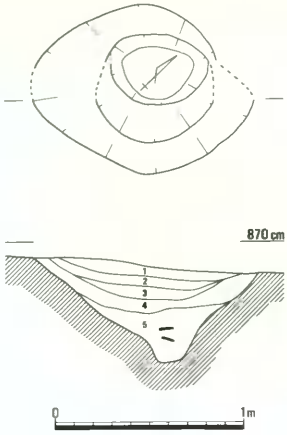
第２微高地上に位置する。117cm×90cmの不整楕円形を呈し、深さ56cmを測る。ロウト状に狭くなっており、底は径20cmの柱穴状にくぼんでいる。埋土は５層に分かれるが、１～４層には遺物を含まず、第５層からのみ土器が出土した。壺や甕などの土器片が比較的多く出土したが、図化できたのは４点の甕のみである。**787**は口縁から少し下がったところに突帯を付している。磨滅が激しく調整は不明だが、つまみあげたような狭い突帯上に浅く不規則に刻みを施している。部を持ち、端部はやや四角くおさめている。胎土は他の前期土器と同じく砂礫を多く含み、色調は灰白色を呈している。**789・790**は甕の体部片と思われ、段の上１cm弱のところに沈線を巡らし、その間に刻みを施している。弥生前期前葉～中葉に属すると考えられる。（久保）

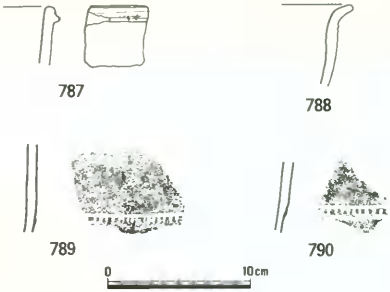


第185図　土壙63（1/30）

土壙65（第187図）

土壙64の東に位置する。170×131cmのそら豆のような形を呈し、深さは18cmを測る。出土遺物は底面から浮いた状態で出土しており、土壙内に廃棄されたものと考えられる。壺**792**は頸部に幅広の削り出し突帯を持ち、突帯上にはやや太目の沈線を螺旋状にめぐらしている。甕**793**は如意状口縁を有し、頸部に沈線を３本巡らしている。**S 238**は明確な敲打痕を持たないのでスクレイパーとした。時期は弥生時代前期中葉に属すると考えられる。（久保）

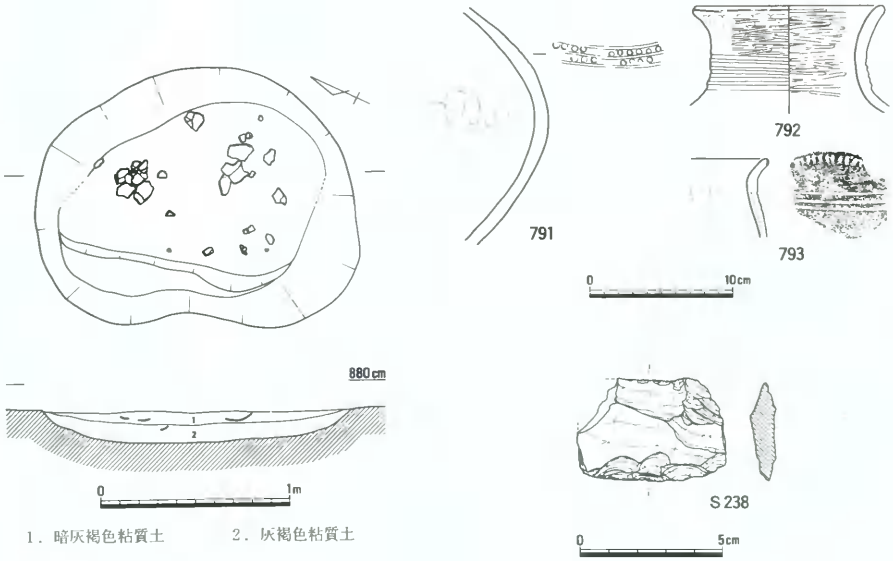




1．暗灰褐色粘質土　　4．黄灰色砂質土
2．淡黄灰色砂質土　　5．茶灰色粘質土
3．淡灰茶色砂質土

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
787	弥生土器	甕	貼付刻目突帯。ナデ。	ユビオサエ、ナデ	灰白　10YR8/2	
788	弥生土器	甕	口縁部ユビオサエ　胴部１本のヘラ描き沈線、ナデ。		灰褐　7.5YR5/2	
789	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、刻目。	ナデ？。	灰白　10YR8/2	
790	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、刻目。		灰白　2.5Y8/2	

第186図　土壙64（1/30）・出土遺物（1/4）



1．暗灰褐色粘質土　　2．灰褐色粘質土

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
791	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、竹管文、ヨコミガキ。	一部ユビオサエ	にぶい橙　7.5YR7/4	
792	弥生土器	壺	５本のヘラ描き沈線。ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	にぶい橙　5YR7/4	
793	弥生土器	甕	口唇下端部刻目、ヘラ描き沈線。	ユビオサエ、ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/3	

第187図　土壙65（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

土壙66～68（第188～190図）

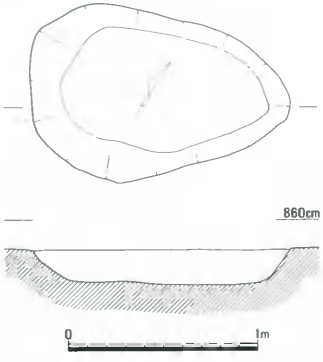
第２微高地上で竪穴住居２の西にある。微高地と低位部の境界付近に検出された浅く不整形な土壙の一群である。低位部前期包含層とよく似た暗灰褐色粘質微砂で埋没している。底面は安定せず、壙壁の立ち上がりも緩く、人為的に掘削されたものではないかもしれない。遺物もなく時期の特定はできないが、埋土が後述する土壙69と同じことから弥生時代前期と考えておきたい。（久保）

土壙69（第191図）

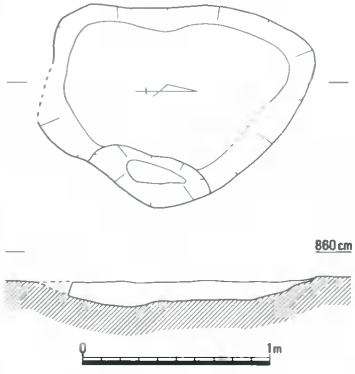
土壙66～68の南約10ｍ離れた所に位置する。前述の土壙と同じく暗灰褐色粘質微砂を埋土とする。不整形で深さも15㎝程度しかなく、これもまた人工的な土壙でないかもしれない。埋土中から甕の底部と考えられる**794**が出土している。弥生時代前期に属すると考えられる。（久保）

土壙70（第192図、図版12）

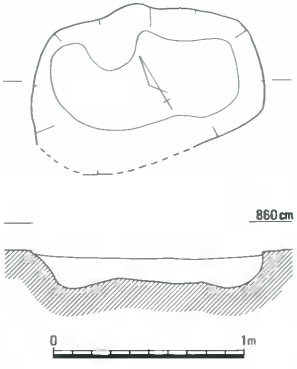
第２微高地北半で、土壙66～68と土壙69の間に位置する。微高地の東縁辺にあたり、上面を低位部



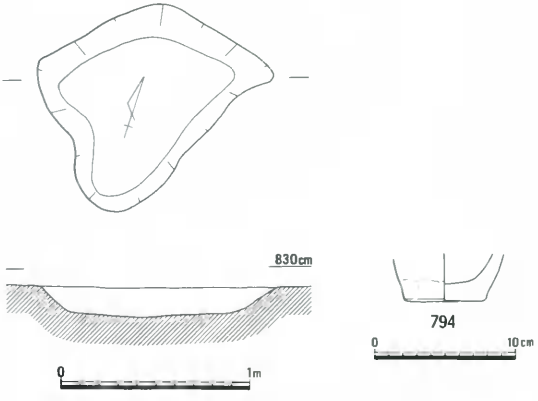
第188図　土壙66（1/30）



第189図　土壙67（1/30）

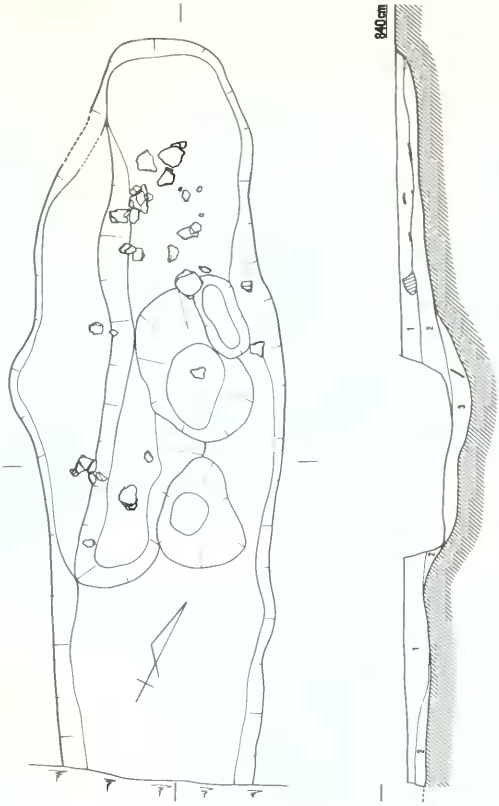


第190図　土壙68（1/30）



第191図　土壙69（1/30）・出土遺物（1/4）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
794	弥生土器	甕？			橙　2.5YR6/6	

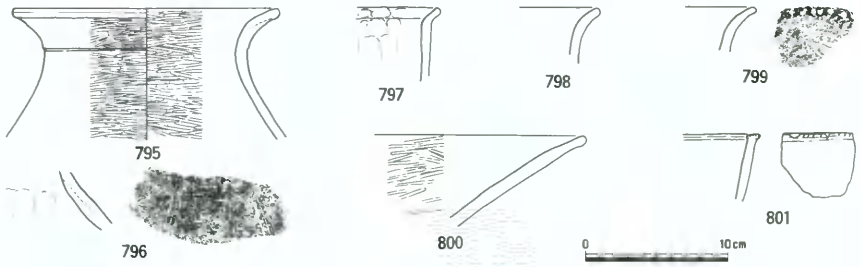


の包含層に覆われていた。南端が現代用水路に切られているため正確な規模は判らないが、残存部で長さ393cm、幅147cm南北に細長く、いわゆる舟形土壙と考えられる。底面中央は一段下がっており、最も深い所で34cmを測る。

出土遺物は比較的多く、土器以外にも円礫を利用した石器片やサヌカイト片も出土している。土器には壺**795**・**796**、甕**797**～**799**・**801**、高杯**800**、蓋などがあるが多くが細片であった。図示したものは全て上層から出土したものであるが下層との型式差は認められなかった。**795**は頸部に段を持つ壺であるが、この段は粘土接合部を利用したものではなく、下半をミガキによって低め、境界となる部分に沈線を施して作りだしたものである。**800**は内面を丁寧に研磨しているので高杯としているが蓋の可能性もある。**801**は直線的に立ち上がる口縁の上端に粘土を貼り足して突帯を作り出しており、突帯上には小さく刻みを施している。時期は、弥生時代前期前葉～中葉に属すると考えられる。　（久保）

土壙71（第193図）

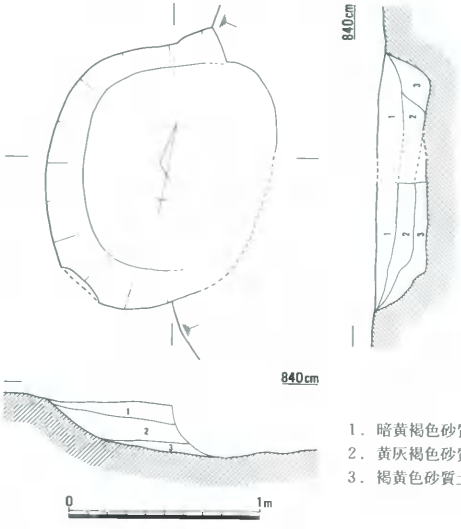
竪穴住居２の北西角に位置し、住居を一部切りこんで掘削されている。低位部の包含層を掘り下げる時点ですでに確認されていたが竪穴住居を先に掘りあげてしまった



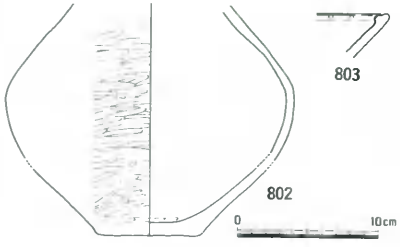
第192図　土壙70（1/30）・出土遺物（1/4）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
795	弥生土器	壺	口縁下部に沈線。ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	明赤褐　5YR5/6	
796	弥生土器	壺	細いヘラ描き沈線文。	ユビオサエ。	灰白　10YR7/1	
797	弥生土器	甕	口縁部ユビオサエ。	ユビオサエ、ナデ?。	赤橙　10YR6/6	
798	弥生土器	甕	口縁部ユビオサエ。	ナデ?。	灰白　2.5Y8/2	
799	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口唇部ユビオサエ。		にぶい橙　7.5YR7/3	
800	弥生土器	高杯?	口唇部ヨコナデ。	ミガキ。	淡赤橙　2.5YR7/4	
801	弥生土器	甕	口唇部貼付突帯。ナデ		灰白　10YR8/2	

ため、東半分を欠いている。残存部で南北138cm、深さ29cmを測る。埋土中から土器が数点出土している。**802**は壺で、底部から胴部にかけてくせをもたずに緩やかに立ち上がり、胴部もよく張っている。外面は丁寧にミガキを施している。**803**は高杯の口縁部と考えられ、口唇部内面を突帯状に肥厚させ、上面に浅く刻みを施している。弥生時代前期前葉～中葉の範疇におさまると考えられる。（久保）

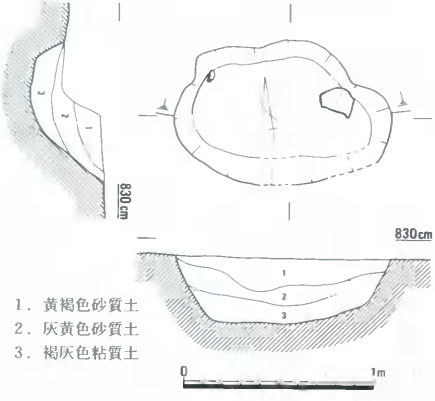


1．暗黄褐色砂質土
2．黄灰褐色砂質土
3．褐黄色砂質土



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
802	弥生土器	壺	ヨコミガキ。	ナデ。	橙　5YR7/6	
803	弥生土器	高杯?	ミガキ?。	口縁部刻目突帯。ミガキ。	橙　5YR7/5	

第193図　土壙71（1/30）・出土遺物（1/4）



1．黄褐色砂質土
2．灰黄色砂質土
3．褐灰色粘質土

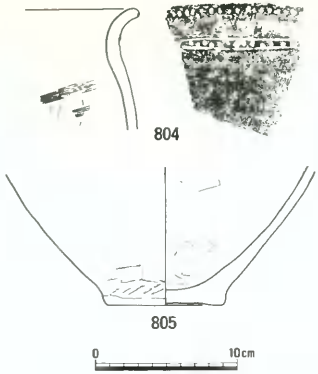
第194図　土壙72（1/30）

土壙72（第194・195図）

土壙71の南、竪穴住居２の南西角において検出された。土壙71と同様に竪穴住居２を切っている。残存部で114cm×76cmの楕円形を呈し、深さは34cmを測る。壺**805**は底部に器面調整時の板状工具痕によるくせを残しているが甕**804**は胴も張り、頸部に２本の平行沈線と刺突による文様帯をもつなど新しい傾向がうかがえ、竪穴住居２よりは新しいと考えられる。時期は弥生時代前期中葉前後、土壙71と大差ないであろう。（久保）

土壙73（第196図）

第２微高地（西）の北東部東斜面、ＪＹ区の西端



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
804	弥生土器	甕	口唇下端部刻目、ヘラ描き沈線、円形刺突文。ハケメ。	ナデ。ハケメ。	灰白　10YR8/1	
805	弥生土器	壺	底部ナデ	ナデ。	淡橙　5YR8/3	

第195図　土壙72出土遺物（1/4・1/2）

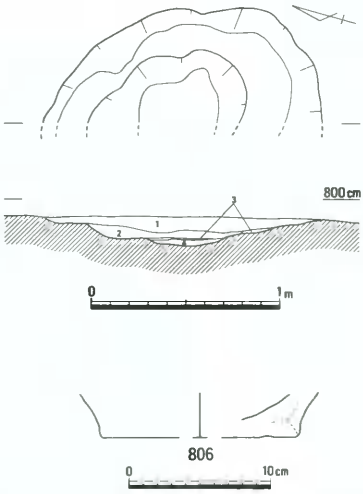
に位置する。径150cm、深さ15cmを測る、平面不整円形の凹地状を呈す土壙である。埋土に焼土粒を含む。遺物は図示した壺底部片の他、甕の胴部片が出土している。（江見）

土壙74（第197図）

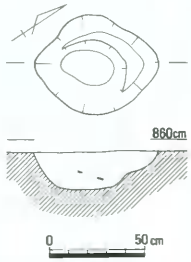
第２微高地(西)のＩＮ区に位置する。平面形は65×52の不整楕円形で、深さは約20cmが残存していた。埋土は、炭粒を含む淡褐灰色粘質土である。時期は出土した土器片から弥生時代前期と考えておきたい。（平井）

土壙75（第198図）

第２微高地(東)の北西部、ＪＹ区の東部に位置する舟形土壙である。主軸はほぼ南北方向に向く。規模は長軸310cm、短軸120cm、深さ18cmを測る。断面から明らかなように傾斜変換点の角度は緩く、平面

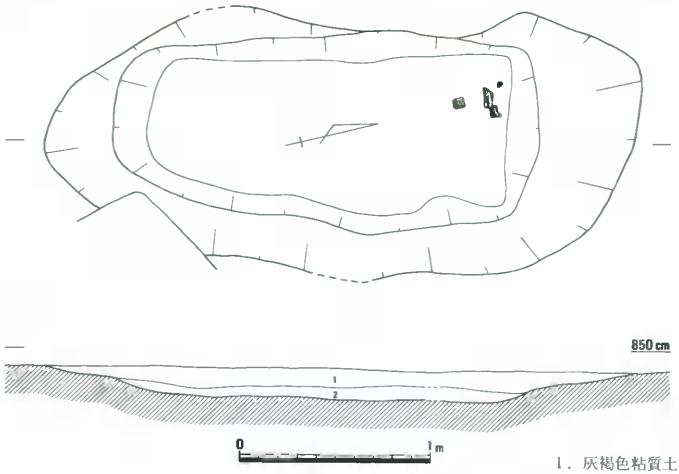


1．黄橙色粘質土
2．明黄橙色粘質土
3．炭層
4．明黄褐色粘質土



第196図　土壙73（1/30）・出土遺物（1/4）　　**第197図　土壙74（1/30）**

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
806	弥生土器	壺	ハケメ[illegible]ミガキ?	ミガキ	にぶい橙　5YR7/4	

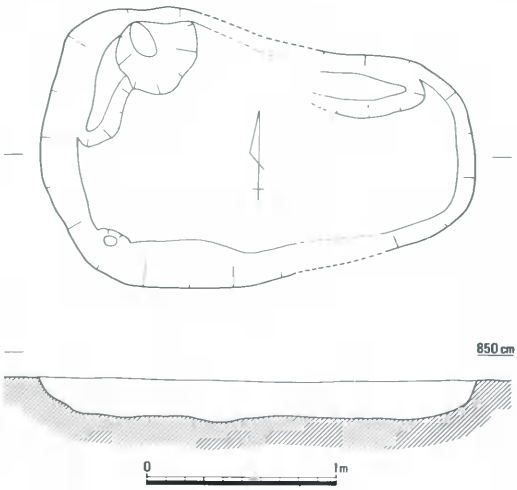


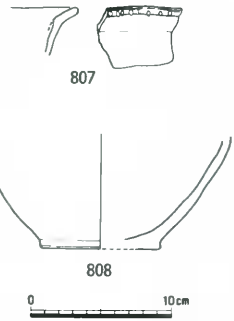
第198図　土壙75（1/30）

長方形(230×100cm)の底部に達する。底部は平坦で、その北部からは炭化材が数点検出されたが、他には土器数片が出土するにとどまった。（江見）

土壙76（第199図）

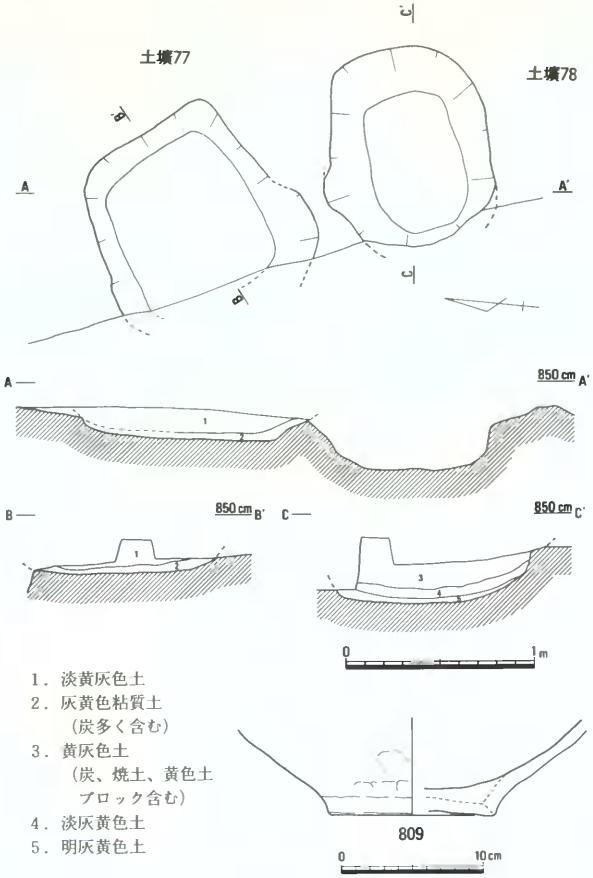
溝３の西端部に接して検出された不整な長円形を呈する土壙である。北辺の壙底は周囲よりも５cm前後深いくぼみがあって安定しないが、全体にほとんど平らといってよい。出土遺物には、サヌカイト細片のほかに**807・808**の弥生時代前期の甕・壺がある。性格・用途は不明であるが、壙底が平坦に掘削されている点は注意される。（岡田）





挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
807	弥生土器	甕	口唇下端部刻目　口縁部ユビオサエ。	ナデ。	灰白　10YR8/2	
808	弥生土器	壺？		ナデ。	灰白　10YR8/2	

第199図　土壙76（1/30）・出土遺物（1/4）



第200図　土壙77・78（1/30）・土壙77出土遺物（1/4）

土壙77・78（第200図）

平面図では、２基の土壙が並んで検出されたように見えるが、検出時の上面および土層の観察によって、土壙77が土壙78を切って掘りこまれたことが確認されている。土壙77の平面形は、図に掲げるように隅丸の不整方形を示し、わずかに小炭片を含む淡黄灰色土が埋積している。壙底近くの深さでは、炭が顕著に看取され縞状に堆積している。最下層では粗砂を含む粘質の土が埋積している。出土遺物には、**809**の壺形土器の底部がある。土壙78の壙底は、舟底のように丸みをもってわずかにくぼんでいる。埋積土中には、炭や焼土が多く含まれているが、土器細片のほかに見るべき出土遺物はない。４層と５層（最下層）の間には、黄白色を呈する粗砂混じりの粘土が薄く堆積している。

（岡田）

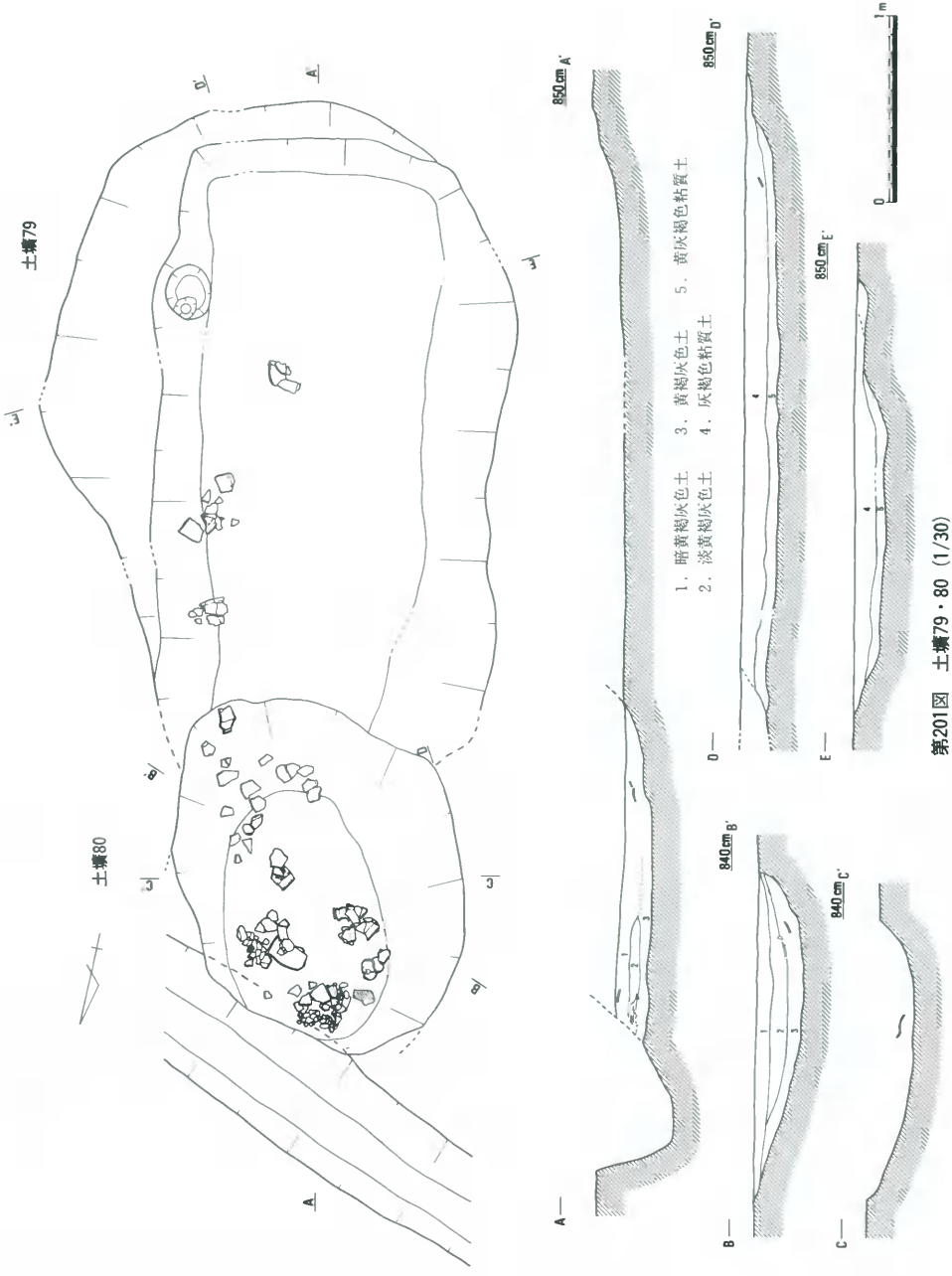
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
809	弥生Ⅰ式	壺	ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	淡黄 2.5Y8/3	

土壙79・80（第201～203図、図版12）

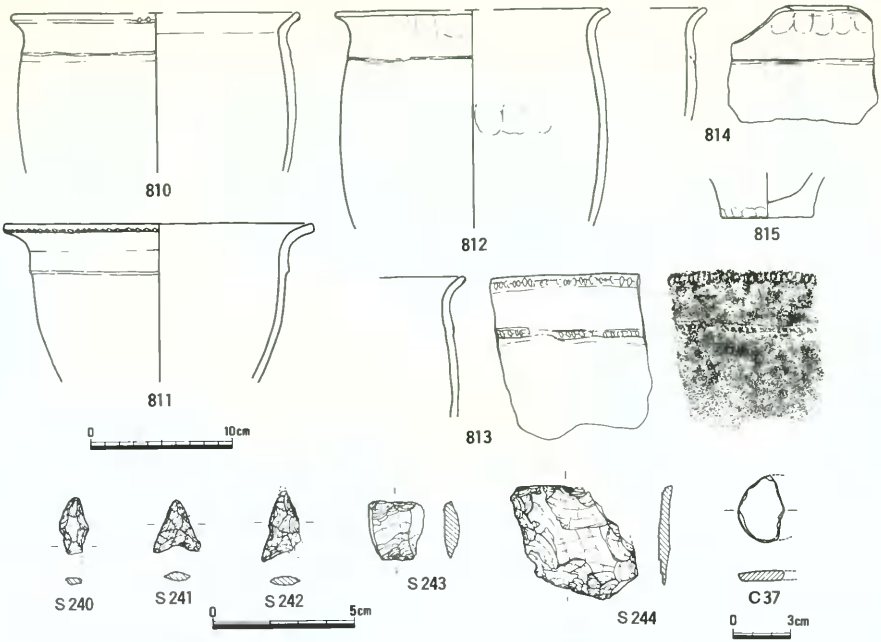
溝３の西側に位置し、土壙79は、土壙80に切られて検出された、不整な長円形を呈する土壙である。壙底は、角が明瞭な長方形を示し、いわゆる「舟形土壙」であった可能性が強い。出土土器は、すべて弥生時代前期前葉～中葉の甕である。体部上位に段あるいは、削り出しの刻目突帯をもつものなど、沈線文が明瞭に確立していない特徴が観察される。**C37**は、薄手の土器片の周縁を打ち欠いて円板状に整形した土製品である。土器以外の出土遺物にはサヌカイト製の石器**S240**～**244**がある。

土壙80は、不整円形を呈する土壙である。**817**は、口唇部に刻目が施され、体部上位に沈線と刻目で飾られた幅広な削り出し突帯をもつ。体部下位の２本の沈線との間には、４～５本を一単位とする複線鋸歯文が描かれる。土壙79の**812**などと比べると、**817**はヘラ描き沈線による文様の加飾が、やや顕著になっていくのではないかと見ることもできる。

（岡田）

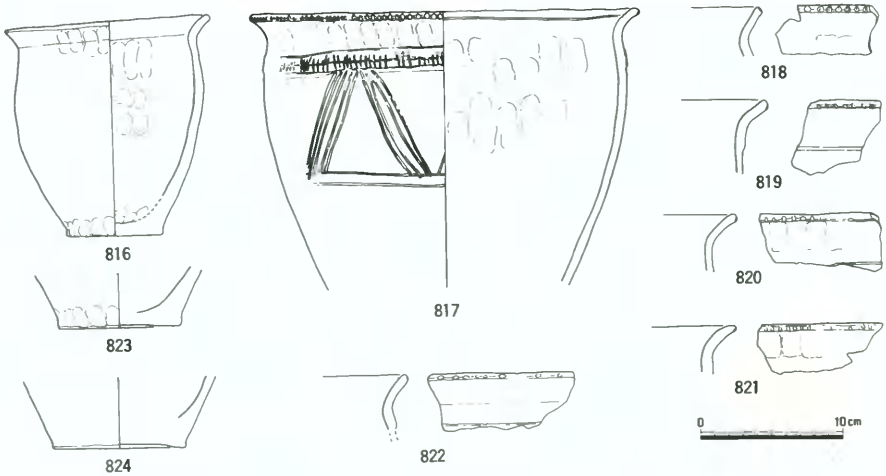


第201図　土壙79・80（1/30）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
810	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。胴部上半段。		橙　5YR6/6	
811	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。胴部上半段。		明赤褐　5YR5/6	
812	弥生土器	甕	胴部上半沈線による段。		橙　7.5YR6/6	口唇部刻目不詳。
813	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。胴部上半沈線、刻目、段。		明赤褐　5YR5/6	ナデによる段？。
814	弥生土器	甕	胴部上半沈線か段。		にぶい橙　7.5YR7/4	
815	弥生土器	甕		ナデ	橙　7.5YR6/6	

第202図　土壙79出土遺物（1/4・1/2・1/3）

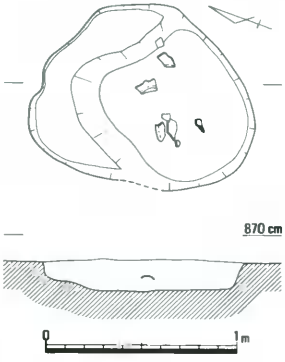


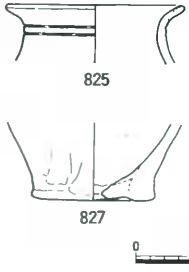
第203図　土壙80出土遺物（1/4）

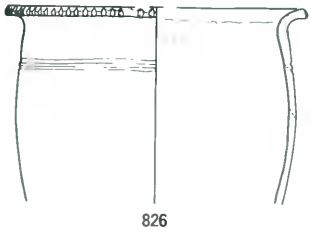
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
816	弥生土器	甕	口縁部ユビオサエのちナデ?。	ユビオサエ、ナデ。	赤　10YR5/6	口唇部刻目不詳
817	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。胴部上半ヘラ描き沈線、段。	口縁部沈線。胴部ナデ。	灰白　10YR8/2	
818	弥生土器	甕	口唇部刻目。ユビオサエ、ナデ。		灰褐　5YR5/2	
819	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。段。		橙　7.5YR6/6	
820	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線。		黒褐　10YR2/3	
821	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部ユビオサエ。		橙　2.5YR6/6	
822	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ユビオサエ。段。		にぶい褐　7.5YR6/3	
823	弥生土器	甕	底部側面ユビオサエ。		橙　7.5YR7/6	
824	弥生土器	甕			褐灰　10YR6/1	

土壙81（第204図）

第１微高地の西辺ほぼ中央で検出されたこの土壙は、平面形がいびつな楕円を呈し、径はおよそ１ｍ。床面は二段に成形され、北が高く、南がやや低い。検出面からの深さは、北端で約10cm、南端において約15cmを測る。低位の穴の形状は一辺約80cmの隅丸方形。中から弥生時代前期に属する甕・壺などが出土した。　（葛原）







挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
825	弥生土器	壺	頸部ヘラ描き沈線。		にぶい黄橙　10YR7/4	
826	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヘラ描き沈線２本。	ユビオサエ、ナデ。	灰褐　7.5YR4/2	外面煤。
827	弥生土器	甕	底部あげ底。ナデ。	ナデ。	にぶい褐　7.5YR6/3	焼成後穿孔。

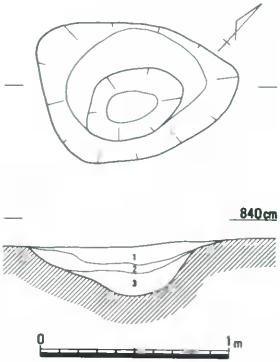
第204図　土壙81（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙82（第205図）

第１微高地南端に位置する。弥生時代前期の遺構面となる基盤層を約10cm掘り下げた段階で検出された。104×72cmの不整楕円形を呈し、深さ28cmを測る。埋土は３層に分かれ最上層には炭を含んでいた。縄文時代晩期に遡る可能性も考えられるが、埋土から弥生時代前期としておきたい。　（久保）

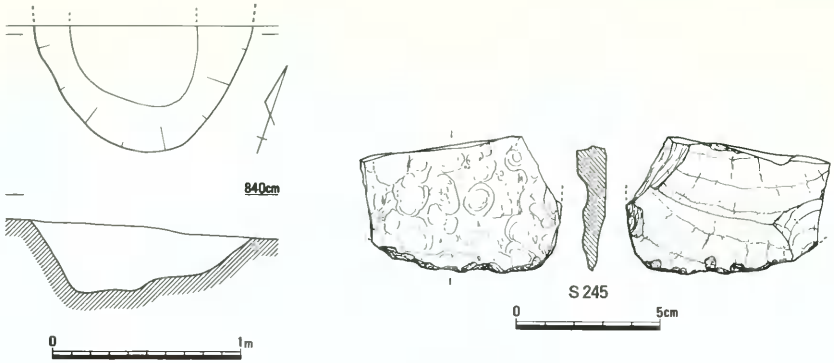
土壙83（第206図）

第１低位部が北へ向かって舌状にのび、この北端近くの西側に位置する。西から東に向かって緩やかに傾斜していて、微高地上面から少し下がったところである。平面形は楕円形を呈し、長軸143cm、短軸110cm、深さ26cmを測る。埋土中からサヌカイト製スクレイパー**S 245**が１点出土した。埋土の状況などから弥生時代前期と推定した。　（正岡）

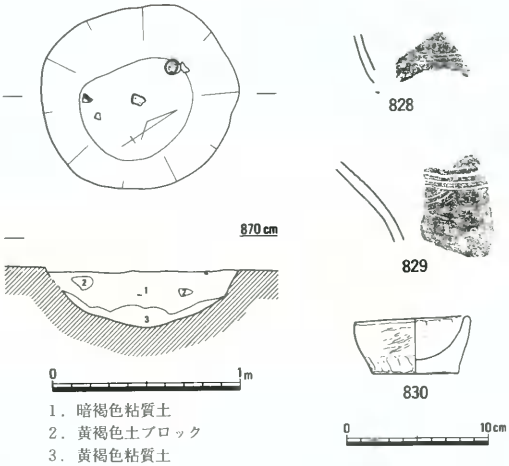


1．暗茶褐色粘質土（炭含む）
2．灰黄褐色粘質土
3．黄茶褐色粘質土

第205図　土壙82（1/30）



第206図　土壙83（1/30）・出土遺物（1/2）



1．暗褐色粘質土
2．黄褐色土ブロック
3．黄褐色粘質土
（炭含む）

土壙84（第207図）

本遺構は第２微高地（東）、第２低位部の南端近くで検出された。土壙の規模は105×95cmのほぼ円形を呈し、深さは29cmを測る。埋土は大きく２層に分かれる。上層は暗褐色を呈し、炭、土器を含み、黄褐色のブロック土が認められた。下層は炭混じりの黄褐色を呈する。遺物は上層から壺**828**・**829**、手づくね土器**830**が出土している。**829**には平行沈線と重弧文がみられる。弥生時代前期の遺構である。　（松本）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
828	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線３本。	ユビオサエのちナデ。	浅黄橙　10YR8/3	
829	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。ミガキ。	ユビオサエのちナデ。	にぶい黄橙　10YR7/3	
830	弥生土器	鉢	胴部ミガキ。底部側面ユビオサエ	ユビオサエのちナデ	にぶい黄橙　10YR7/2	

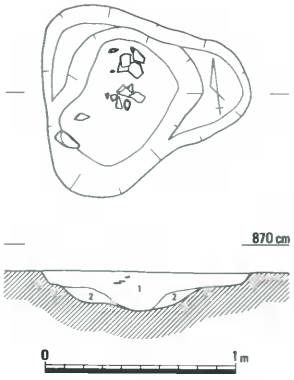
第207図　土壙84（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙85（第208図）

第２微高地（東）、第２低位部の南端部にあり、土壙127の北で検出された。土壙の規模は、上面が110×110cmのハート形で内側に65×90cm程の長方形を呈する掘り方を持つ二段掘りの土壙である。深さは検出面から20cmを測る。埋土は２層に分かれ、上層には炭、土器片、小円礫が含まれていた。下層は灰黄褐色の粘質微砂土であるが、遺物は含まれていなかった。弥生時代前期の遺構である。　（松本）

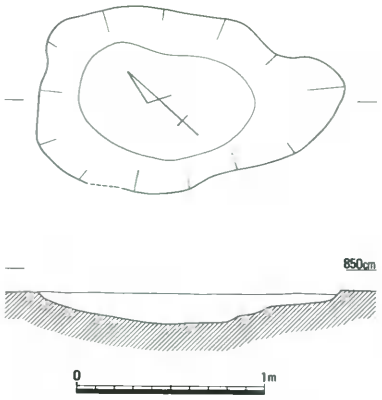
土壙86・87（第209・210図）

第２微高地（東）のＫＹ３区に位置する。平面形はいずれも不整楕円形を呈する。断面形は皿状で、深さは約20cm前後残存していたのみであった。埋土はいずれも淡褐灰色粘質土が一層のみで、出土遺

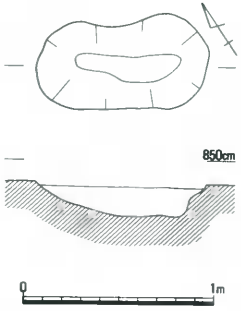


１．黒褐色粘質微砂　　２．灰黄褐色粘質微砂

第208図　土壙85（1/30）



第209図　土壙86（1/30）



第210図　土壙87（1/30）

物はなかった。

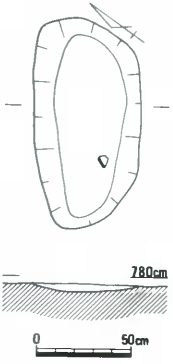
時期については、遺物が無いので明確ではないが、埋土の状況およびこれらの土壙の西隣に弥生時代前期の竪穴住居４が存在することから、弥生時代前期と考えておきたい。　　（平井）

土壙88（第211図）

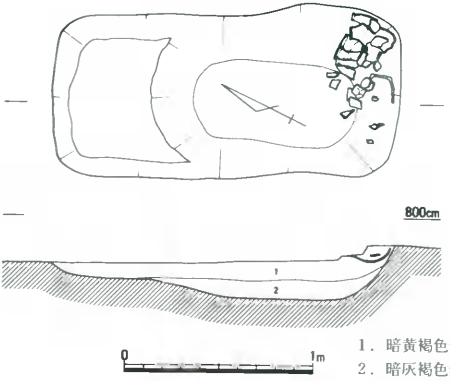
ＴＯ区の中央北寄り、第３微高地（南）から第３低位部（南）に至る肩部に位置する。上部を土壙136に削平され、底部のみかろうじて検出された。土器は甕の胴部片が１片のみの出土であるが、胎土から弥生時代前期と思われる。　　（柳瀬）

土壙89（第212・213図）

土壙88の南西の約８ｍ離れた地点に検出された、隅丸長方形の

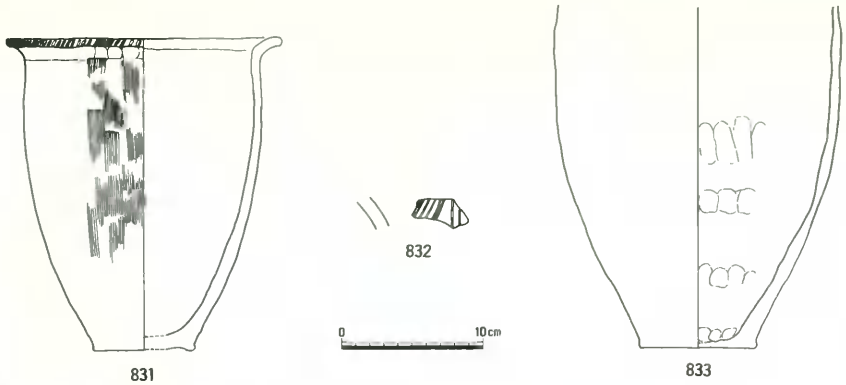


第211図　土壙88（1/30）



１．暗黄褐色粘質土
２．暗灰褐色粘質土

第212図　土壙89（1/30）

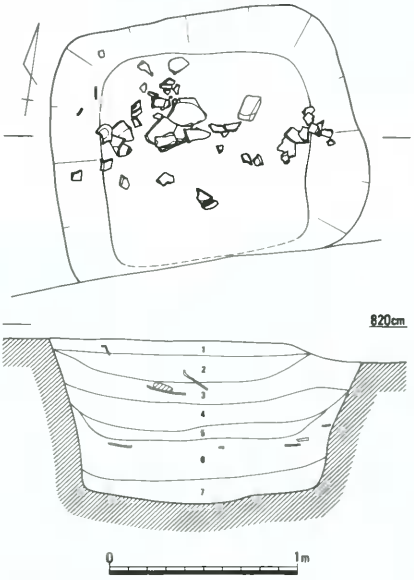


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
831	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。胴部細いハケメ。	ナデ。	灰白　10YR8/2	外面煤
832	弥生土器	壺	ヘラ描き木葉文。ミガキ。	ナデ。	灰白　7.5YR8/1	上下・左右不詳。
833	弥生土器	甕		ユビオサエ、ナデ。	灰褐　7.5YR5/2	

第213図　土壙89出土遺物（1/4）

土壙である。ただ、底の深さが段違いになっているところから、２基の土壙が重なっている可能性もある。土器は、１層の上部に**831**と**833**などが比較的まとまって出土しているくらいである。

土壙の性格は不明ながら、時期は**832**の木葉文などから弥生時代前期中葉が与えられる。　（柳瀬）



1．暗茶褐色砂質土
2．暗灰茶褐色砂質土（焼土含む）
3．明灰黄褐色砂質土（焼土含む）
4．暗灰黄褐色砂質土（炭化物多く含む）
5．灰黄褐色砂質土
6．青灰黄色砂質土（炭含む）
7．青灰色砂質土（炭含む）

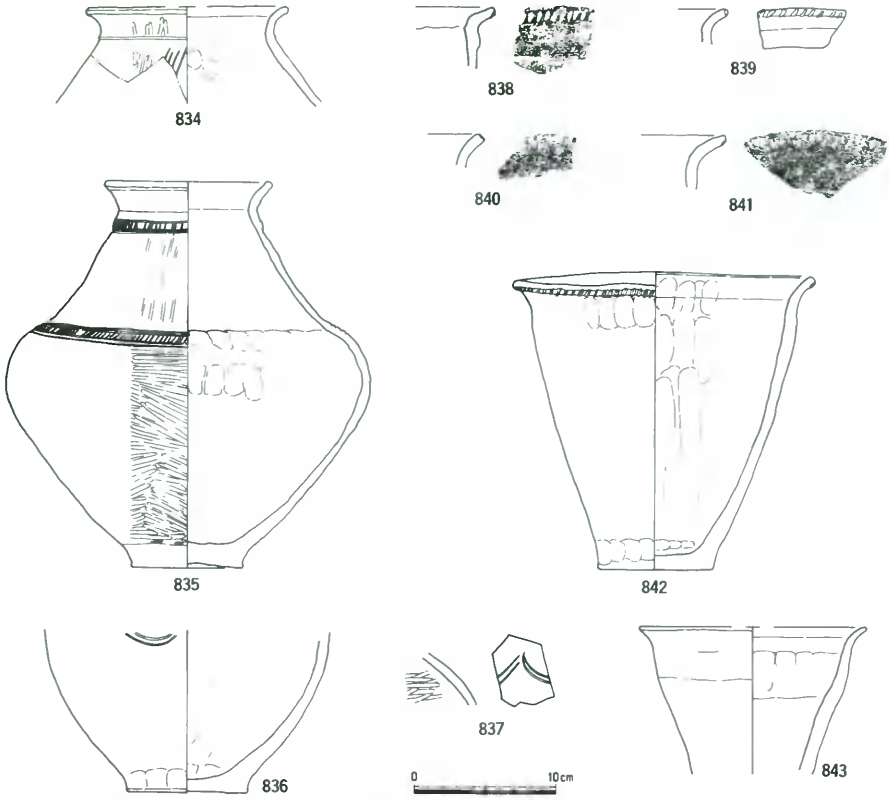
第214図　土壙90（1/30）

土壙90（第214・215図）

ＴＯ区の南端、第３微高地（南）の南西端に位置するほぼ隅丸方形の比較的深い土壙である。埋土は７層に細別されるが、３・６層に土器片の散布が顕著で、３層に焼土粒、４層に炭粒が目立つ。また全体に砂質で、色調も基盤層に似る。**834**・**835**の壺と**838**の甕は、口縁部下に段をもつなど古い要素を残すほか**836**・**837**には二重弧文を配す。時期は弥生時代前期前葉～中葉とみてよい。　（柳瀬）

土壙91（第216図）

ＴＯ区の南東隅の、第３微高地（南）に位置する。不整楕円形で比較的深い。埋土は10層に細別されるが、底に近いとくに７層の純灰層と10の炭層の存在は、他に比べて非常に顕著である。その中に骨片等は認められていないが、いわゆる灰穴の類であろうか。出土遺物に焼土塊のような**Ｃ38**の土製品、重弧文・格子目文の壺**844**・**845**や**850**・**851**の蓋があり、弥生時代前期中葉の時期であろう。（柳瀬）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
834	弥生土器	壺	頸部ヘラ描き沈線、沈線文。ミガキ。	ミガキ。	にぶい橙　5YR6/3	
835	弥生土器	壺	頸部ヘラ描き沈線３本、刻目。胴部ヘラ描き沈線４本。刻目。	胴部下半ミガキ。	灰白　2.5Y8/2	
836	弥生土器	鉢	ヘラ描き重孤文？。	ナデ？。	灰白　10YR8/1	
837	弥生土器	壺	ミガキ。ヘラ描き文。	ヨコミガキ。	灰白　10YR7/1	
838	弥生土器		口唇下端部刻目。ミガキによる段。		褐灰　7.5YR6/1	
839	弥生土器	甕	口唇部刻目。細いハケメ。		灰白　10YR8/1	
840	弥生土器	甕	口唇部刻目。ハケメ？。		灰白　7.5YR8/2	
841	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。沈線？。		褐灰　10YR6/1	
842	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部ユビオサエ。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　7.5YR7/1	歪みあり。
843	弥生土器	鉢？	ナデ？	ユビオサエ、ナデ？	灰褐　5YR6/2	外面煤。

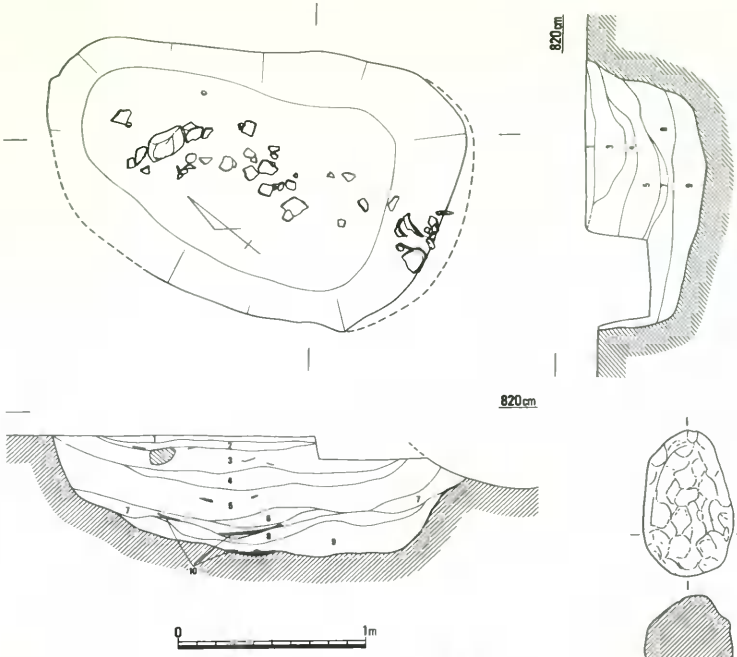
第215図　土壙90出土遺物（1/4）

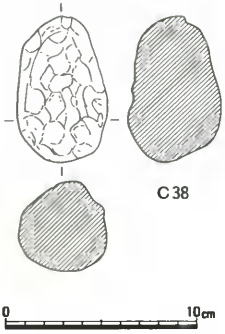
土壙92（第217図）

ＨＯ区の南東隅に近い、第４低位部に向かって徐々に下る肩部付近に位置する。遺構の一部は調査区外にのびる。埋土は基盤層によく似た暗黄色砂質土で、土器の細片を20数片含んでいた。そのうち図示できるのは口唇部外面に刻目を施す**852**の甕片くらいで、弥生時代前期前葉を示す。　（柳瀬）

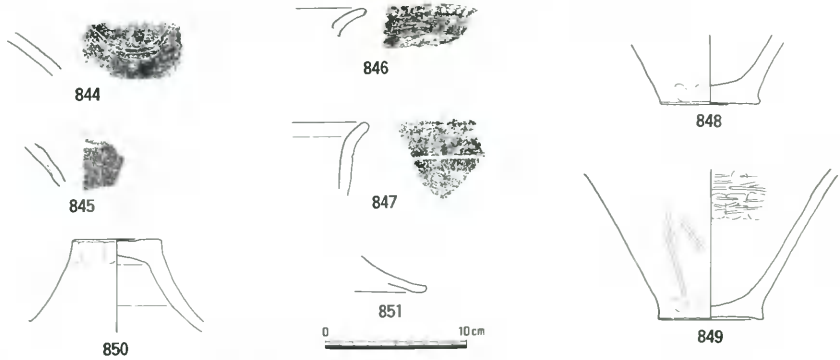
土壙93（第218図）

土壙92の南に数ｍ離れた位置の、同地形上に占地する不整形の土壙である。遺物は図示した土器のほかは２～３片の土器しか出土していない。埋土は、２層に炭・焼土粒が目立つ。**853**の甕は、口唇部外面に刻目、頸部に２本の沈線、胴上部に段をもつなど弥生時代前期の古い要素を残す。（柳瀬）



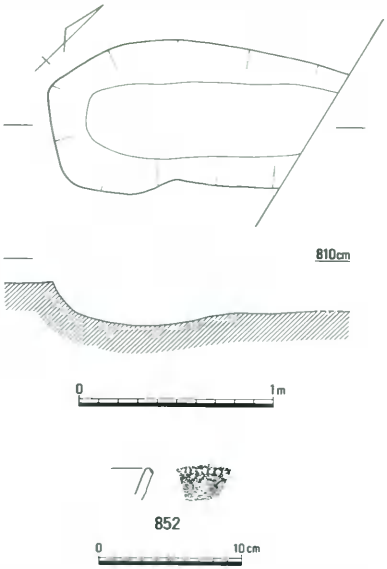


1．淡灰色粘質土
2．灰層（炭、焼土含む）
3．暗灰黄褐色粘質土
　（灰、炭、焼土塊含む）
4．灰層（炭、焼土塊含む）
5．淡灰黄褐色粘質土
　（炭含む）
6．灰黄褐色粘質土
　（炭含む）
7．灰層
　（一部炭層あり）
8．灰黄色粘質土
9．淡灰黄色粘質土
10．炭層

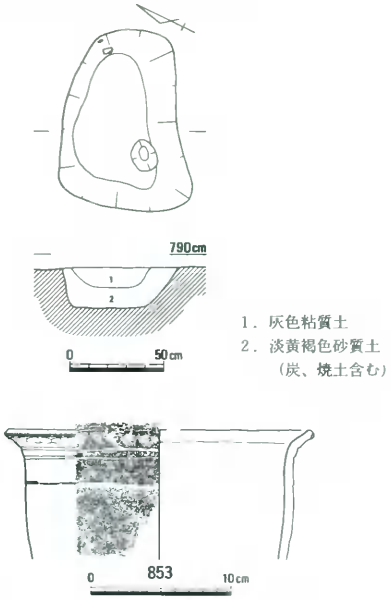


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
844	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。		灰白　7.5YR8/2	
845	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線。斜格子文。	ナデ。	淡橙　5YR8/4	
846	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。		灰白　10YR8/2	
847	弥生土器	甕	鋭い沈線１本。		橙　5YR7/6	
848	弥生土器	甕	底部側面ユビオサエ。		褐灰　5YR4/1	
849	弥生土器	甕	ミガキ？。	ミガキ。	明褐灰　7.5YR7/1	
850	弥生土器	蓋			灰白　7.5YR8/2	
851	弥生土器	蓋	ミガキ	ナデ	灰白　7.5YR8/2	

第216図　土壙91（1/30）・出土遺物（1/3・1/4）



第217図　土壙92（1/30）・出土遺物（1/4）

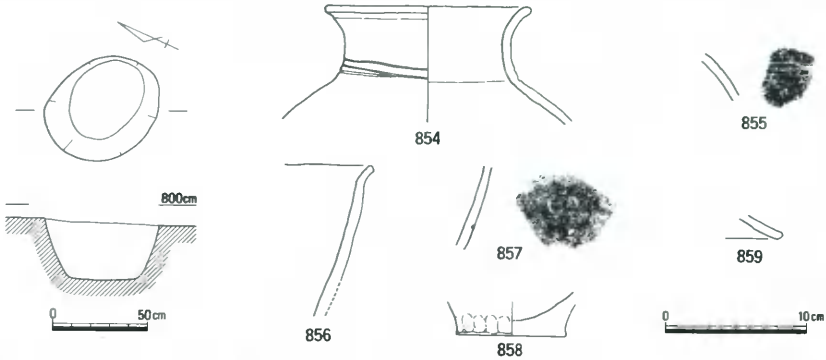


第218図　土壙93（1/30）・出土遺物（1/4）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
852	弥生土器	甕？	口縁下端部刻目。		明褐灰　7.5YR7/1	傾き不詳。
853	弥生土器	甕	口縁下端部一部刻目。ヘラ描き沈線、沈線状の段。		灰白　7.5YR8/1	

土壙94（第219図）

土壙93とほぼ同地形上に位置する、ほぼ円形の柱穴状土壙である。埋土は暗灰黄褐色の砂質土で、



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
854	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線２～３本。		浅黄橙　7.5YR8/3	
855	弥生土器	壺	細いヘラ描き沈線。		橙　2.5YR7/6	
856	弥生土器	甕？			褐灰　7.5YR5/1	
857	弥生土器	甕？		ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/3	胴部外面煤痕。
858	弥生土器	甕	底部側面エビオサエ。		赤褐　2.5YR4/8	
859	弥生土器	蓋		ミガキ。	淡橙　5YR8/3	

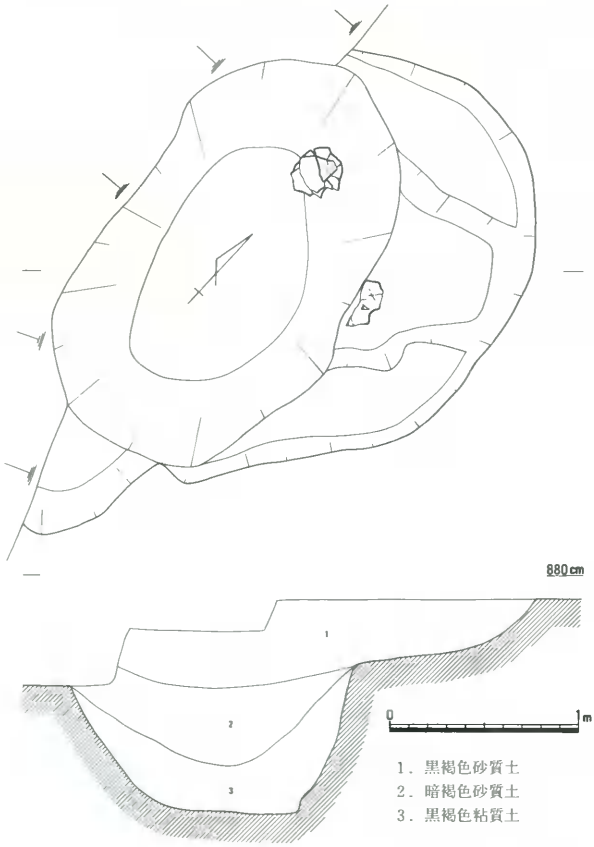
第219図　土壙94（1/30）・出土遺物（1/4）

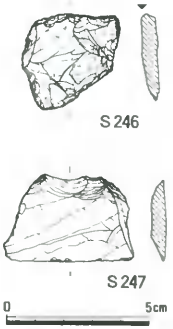
柱痕跡はない。小土壙にしては土器片の出土が比較的多く、なかでも特徴のある土器を図示した。**857**は甕の胴部小片ながら、籾痕跡が認められる。また、**859**は蓋片である。全体に器表面が磨滅していて観察はしにくいものの、**855**の沈線の多条化など弥生時代前期中葉以降の時期であろう。（柳瀬）

土壙95（第220・221図）

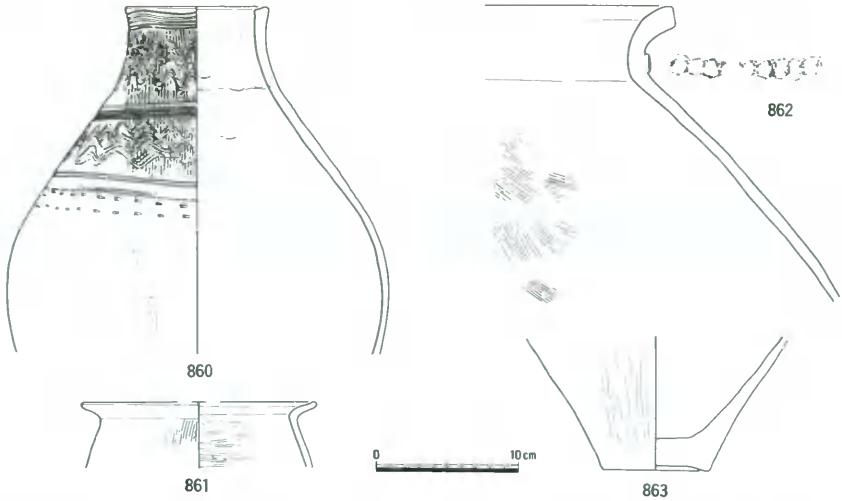
調査区域の西端部で、第1低位部の西側に位置する。東へ緩やかに傾斜しはじめる肩部にあたり、安定した黄褐色粘土をベースとして掘り込んでいる。平面形は南北に長い楕円形を呈している。深く掘り込まれたところの東側と南側に一段浅い部分がある。深くなる部分の大きさは長径230cm、短径135cm、深さ85cmを測る。底面はほぼ水平であるが、掘り込みの傾斜はかなりきつい。東側の浅い掘り込み部分は長径260cm、肩部から75cm外側へひろがっている。深さは25cmで、中央部分が10cmほど深くなる。南側の浅い部分は長さ62cmの小さなものである。土壙全体の深さは112cmとなり、上層は黒褐色砂質土で、やや大きな土器片が検出された。中層は暗褐色砂質土で、小量の土器片と炭化物を含んでいる。下層は黒褐色粘土で、炭化物がやや多く、底部には炭の層がひろがっている。

埋土中からは土器・石器が出土した。土器には無頸壺**860**、大型短頸壺**862**、甕**861**、底部**863**がある。無頸壺は口縁部をしぼり、しだいに胴部が膨らむ形状を呈し、口縁部外面にクシ描き平行文を施し、肩部へかけて、クシ描きの波状文、平行文、波状文、平行文とし、その下に刺突文を2段めぐらせている。石器にはサヌカイト製スクレイパー**S246・247**がある。時期は弥生時代中期前葉に比定される。（正岡）





第220図　土壙95（1/30）・出土遺物（1/2）



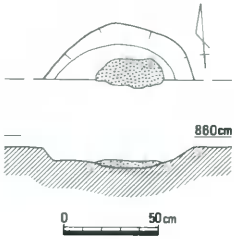
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
860	弥生土器	壺	クシ描き沈線、波状文　ミガキ。		にぶい赤褐　5YR5/4	
861	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	胴部ヨコミガキ。	灰白　7.5YR8/2	
862	弥生土器	甕	頸部貼付刻目突帯。ミガキ。	ハケメ	橙　2.5Y7/6	
863	弥生土器	壺	胴部タテミガキ。		褐灰　10YR6/1	

第221図　土壙95出土遺物（1/4）

(4) 火　　処

火処25（第130・222図）

ＡＴ区南西部に位置し、南半を溝10に削られている。現存規模79×31×12cmを測る平面形楕円形のくぼみの底面が、36×16×３cmにわたって焼土化したもので、熱影響は底面全体に広がっている。小量の弥生土器の出土により、弥生時代前期に比定される。（光永）



第222図　火処25（1/30）

火処26（第130図）

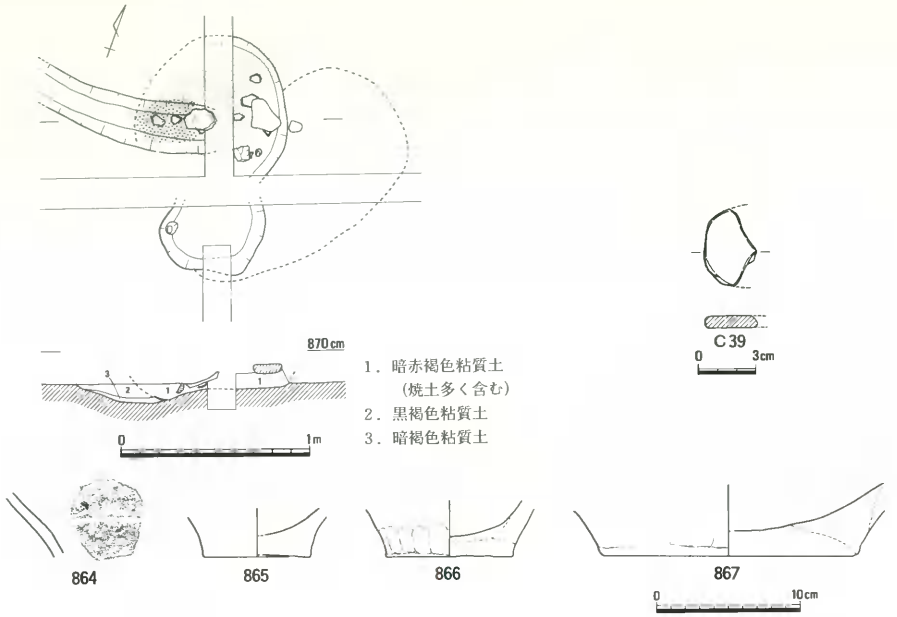
Ｋ７区に位置し、土壙65との距離7.2ｍを測る。90×85cmの範囲に焼土粒が集中して検出されたもので、中央部では深さ８cm程度まで堆積している。伴出遺物はないが、検出状況から弥生時代前期に比定される。（光永）

火処27（第130図）

第３低位部北半の緩斜面上に位置し、包含層除去後に検出された。焼土塊が集中していたため火処として扱ったが、被熱痕は認められなかった。縄文時代晩期のものとは明らかに異なるが、それが性格や時期の差によるものなのか分らない。検出状況から弥生時代前期と考えておきたい。（久保）

火処28（第131図）

第１微高地の西よりに位置する。微高地から西へ向かって緩やかに傾斜しているが、微高地の肩部から30cm西へ寄ったところである。調査区域外へのびているため全容は分らないが、現状でみると径50cm余りの焼土面である。上面から弥生時代前期の土器小片が数点出土した。（正岡）



挿図番号	種別	器種	胎土 外面	胎土 内面	色調	備考
864	弥生土器	壺	ミガキ。ヘラ描き沈線。	ユビオサエ、ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/4	
865	弥生土器	壺？		ナデ？。	にぶい黄橙　10YR7/2	
866	弥生土器	壺	底部側面ユビオサエ。		橙　5YR6/6	
867	弥生土器	壺		ミガキ？	橙　5YR6/6	底部外面籾痕

第223図　火処29（1/30）・出土遺物（1/3・1/4）

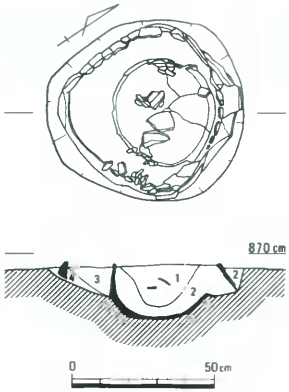
火処29（第223図）

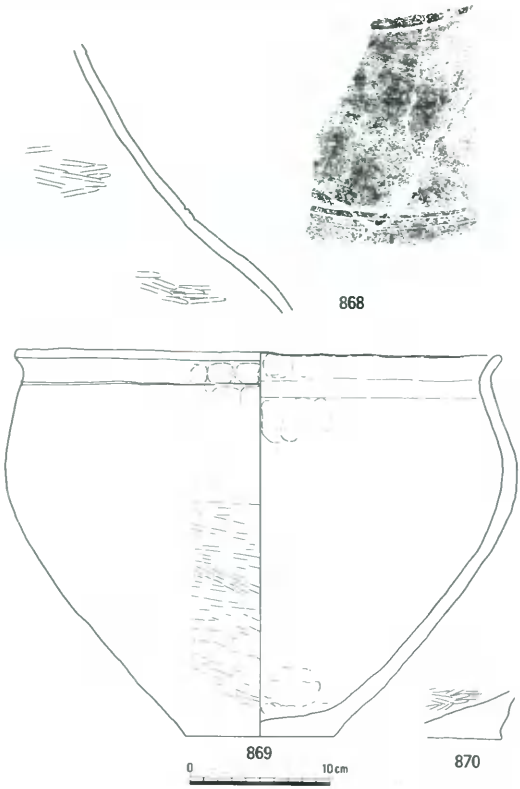
第1微高地の北部にあり、同微高地の調査区北端に位置する。西寄りに径30cmくらいの範囲が火を受けて赤変し、周囲に焼土や炭が広がっている。焼土面は少しくぼんでいる。焼土や炭の上には土器片や自然石が存在した。当初、住居跡の床面と推定して追求したが、柱穴等も確認されず火処とした。なお、火処の下層には湾曲した溝が一条ある。火処からは壺の肩部**864**と壺または甕の底部**865**～**867**、土器片を円形に加工したものの破片**C39**が出土した。**867**の底部外面には籾の圧痕が一個確認される。時期は弥生時代前期前葉～中葉に比定される。（正岡）

(5) 土器棺墓

土器棺墓1（第224図、図版12）

H2区中央部に位置し、土壙31との距離10.6mを測るが、後の削平により本来の構造の上半を削りとられている。103×96cmを測る平面形楕円形の土壙の中央を、さらに径40cm、深さ10cmほどの円形に掘り下げて、鉢**869**をやや北東方向に傾けた状態で据え、この上に縦に半截した壺**868**を置いて蓋としたもので、下底部の海抜高は8.35mである。土器の遺存状態から復元すれば、構築時の地表面の海抜高は、8.9m以上であったものと考えられる。鉢内部の埋土には、骨・歯等の遺存はなく、副葬品と考えられる遺物も出土していない。時期は、壺・甕に施された削り出しによる突帯および段の形状から、弥生時代前期前葉～中葉に比定される。（光永）





挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
868	弥生土器	壺	頸部ヘラ描き沈線１本。胴部ヘラ描き沈線３本。	ミガキ。	灰白　7.5YR8/2	
869	弥生土器	鉢	頸部ヘラ描き沈線。ミガキ。	ミガキ？。	橙　7.5YR7/6	
870	弥生土器	壺	底部側面ユビオサエ。	ミガキ。	灰白　7.5YR8/2	

第224図　土器棺墓１(1/20)・出土遺物（1/4）

(6) 柱　　穴

柱穴20（Ｐ20）（第225図）

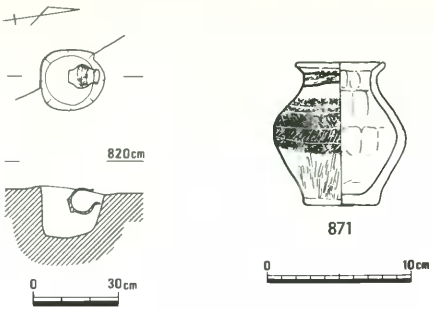
第２微高地の建物１のＰ12とＰ13の間に位置する。径23cmの円形を呈し、深さは18cmを測る。埋土は茶灰色粘質土で炭・焼土を多く含んでいた。出土遺物は完形の壺871のみである。底面より約10cm浮いた状態ではあるが、意図的に埋置されたものと考えられる。頸部には浅く細い２条の沈線をめぐらし、頸部の沈線と違って少し太めの線で胴部最大径付近に綾杉文を施している。外面はきれいに研磨され、丁寧に仕上げられている。弥生時代前期前葉に属すると考えられる。　（久保）

柱穴21（Ｐ21）（第226図）

第２微高地上、Ｐ20の東に位置する。径20cm弱の円形を呈し、深さ26cmを測る。埋土は淡茶灰色粘

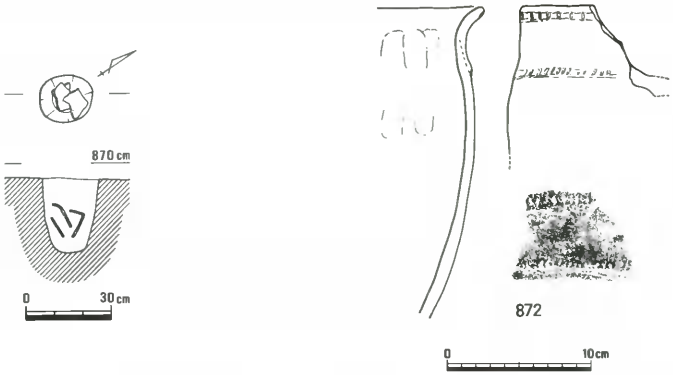
質土で柱痕は認められなかった。出土遺物は**872**のみで、P20と同じく故意に埋置したものかもしれない。甕**872**は口縁から4～5cm下がったところに粘土接合部を利用した段を持ち、段の上および口唇部下端をかるく刻んでいる。弥生時代前期前葉～中葉に属すると考えられる。

（久保）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
871	弥生土器	壺	頸部細い[illegible]ラ描き沈線。胴部[illegible]ラ描き沈線文。ミガキ	ユビオサエ、ナデ	橙　2.5YR6/6	

第225図　柱穴20（P20）（1/20）・出土遺物（1/4）

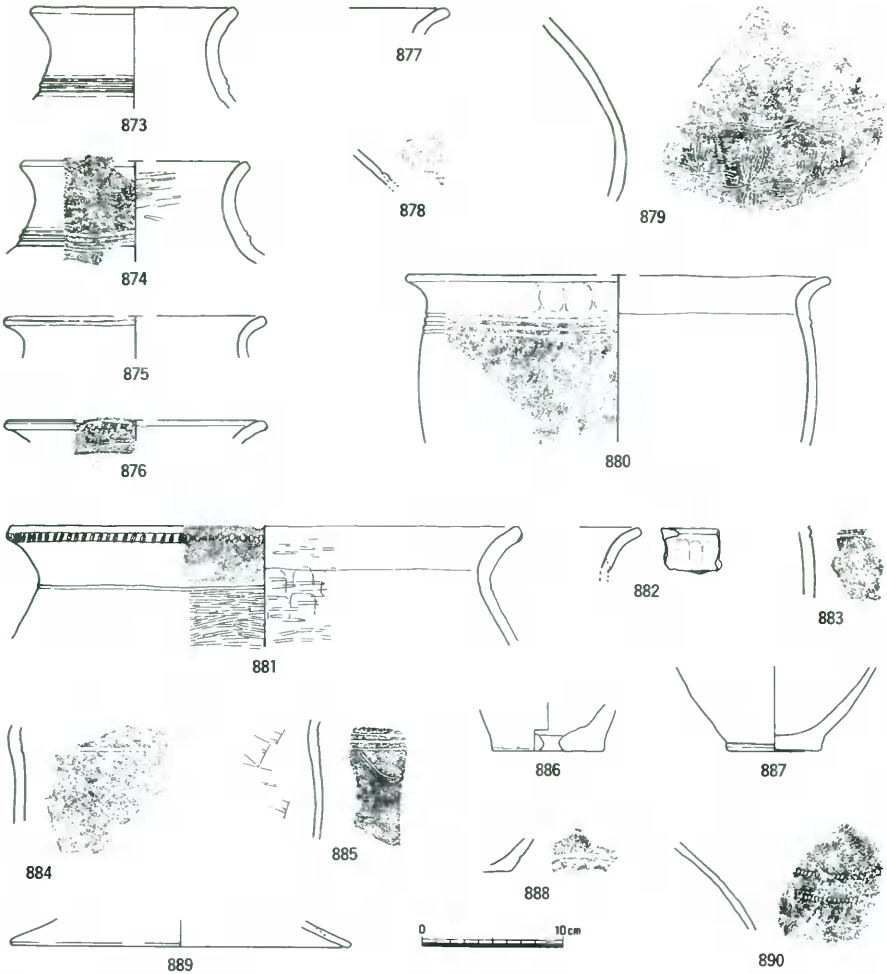


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
872	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部下位段と刻目。ハケメ。	ユビオサエ、ナデ？	にぶい橙　7.5YR7/4	

第226図　柱穴21（P21）（1/20）・出土遺物（1/4）

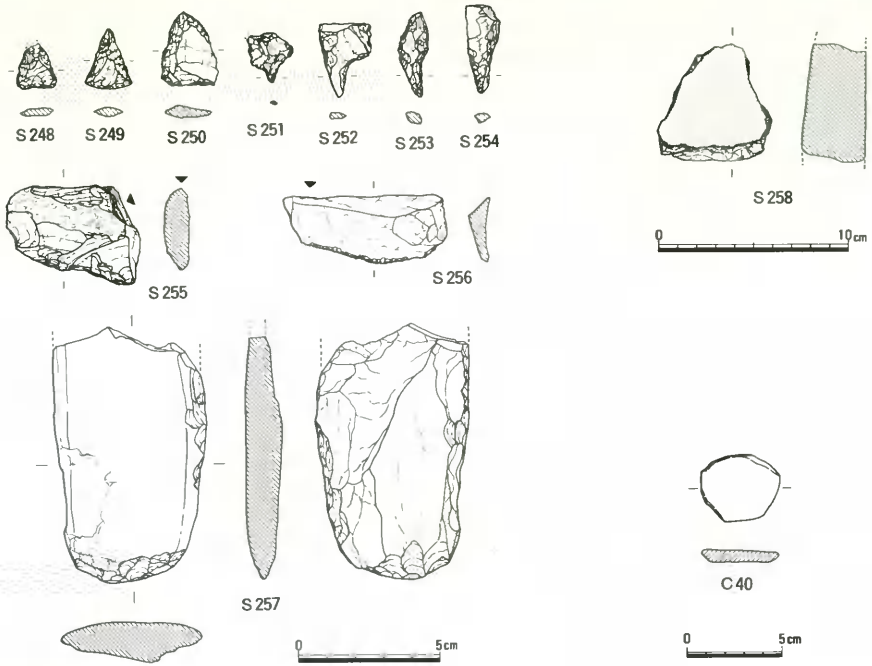
柱穴22（P22）～柱穴45（P45）（第130・131・227図）

柱穴の多くは土器の出土をみないため遺物から時期を特定することは困難であるが、建物や土壙などから、時期による埋土の違いをある程度捉えることができたので、遺物を出土しなかった柱穴については埋土の違いを基準に時期を分けることとした。主に縄文時代晩期は基盤に近い黄色系の土で、弥生時代前期は黄褐色～茶褐色、弥生時代中・後期は暗褐色～黒褐色の粘質土で埋没しており、特に弥生時代前期以前とそれ以降は比較的容易に識別できるようである。しかし、縄文時代晩期と弥生時代前期は見分けがつきにくいため、黄色～黄褐色の土で埋没したもののうち時期不明の柱穴は弥生時代前期に含め、全体図を作成している。また石器もそれ自体で所属時期を判断することはできないので、同様に当期に含めた。全体の状況としては微高地など比較的高く安定した場所に散在しているようである。低位部の範囲内に入るものでもせいぜい緩斜面上であり、グライ化しているような低い場



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
873	弥生土器	壺	頸部段とヘラ描き沈線。	ミガキ？。	浅黄橙　7.5YR8/3	
874	弥生土器	壺	頸部段とヘラ描き沈線２本。	ミガキ？。	にぶい橙　7.5YR7/3	
875	弥生土器	壺	ナデ？。	ナデ？。	にぶい褐　7.5YR5/4	
876	弥生土器	壺？	口唇部下端刻目。	口縁部細く浅い沈線１本。	灰白　2.5Y8/2	
877	弥生土器	壺	ナデ？。	ナデ？。	にぶい橙　7.5YR7/4	
878	弥生土器	壺	段とヘラ描き沈線。		灰白　10YR8/2	
879	弥生土器	壺	ヘラ描き木葉文。ミガキ。	ユビオサエ、ナデ。	橙　7.5YR7/6	
880	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線３本。口縁部ユビオサエ。		淡橙　5YR8/3	
881	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。頸部段、ミガキ。	ミガキ。	橙　5YR7/6	
882	弥生土器	甕	口唇部下位にヘラ描き沈線。	ナデ。	浅黄橙　7.5YR8/3	口唇部刻み目不詳
883	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線２本、タテハケメ。	ナデ？。	灰黄　2.5Y7/2	
884	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線２本、ナデ。	ユビオサエのちナデ。	にぶい橙　7.5YR7/3	
885	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線３本、波状文。	板ナデ。	灰白　10YR8/2	
886	弥生土器	甕	ナデ。	ナデ。	橙　7.5YR6/8	焼成後穿孔
887	弥生土器	壺	削り出し風の底部。		にぶい褐　7.5YR5/3	
888	弥生土器	壺？	底部側面ヘラ描き沈線。	ナデ。	橙　7.5YR6/6	
889	弥生土器	蓋	ナデ。	ナデ。	灰白　2.5Y8/2	
890	弥生土器	壺	クシ描き波状文。列点文。	ナデ。	橙　5YR6/8	

第227図　柱穴22（Ｐ22）～柱穴36（Ｐ36）出土遺物（1/4）



第228図　柱穴37（Ｐ37）～柱穴46（Ｐ46）出土遺物（1/2・1/3）

所には掘削されていない。特に第１微高地の北西部分および第２微高地（西）上のＡＴ区東半・ＫＹ１区、第２微高地（東）上のＦＵ区に多く、縄文時代晩期～弥生時代前期の遺構密度の高さと傾斜を同じくしている。（久保）

Ｐ22～46は遺物を出土した柱穴で、第227図に土器を、第228図には石製品および土製品を掲載している。**873**～**879**は壺、**881**～**885**は甕、**886**～**888**は底部、**889**は蓋である。**890**はクシ描き文を施した弥生時代中期前葉の壺片であるが、それ以外は前期中葉～後葉に属すると考えられる。**879**は細い沈線で有軸木葉文を描いているが縦の区画線を欠いている。**887**・**888**は底部と胴部の境付近に沈線を巡らしている。**Ｓ248**～**256**はサヌカイト製で、**Ｓ257**は偏平な川原石を半割して刃部に調整を加えた石鍬で、若干の磨滅と線状痕が認められる。**Ｓ258**は平滑な研磨面があり、砥石と考えられる。**Ｃ40**は土器片を打ち欠いて円形に整えたもので、この状態でいわゆる円板状土製品とするのか、穿孔して紡錘車とするのかは不明である。**873**と共伴するもので弥生前期中葉前後の時期が与えられる。（久保）

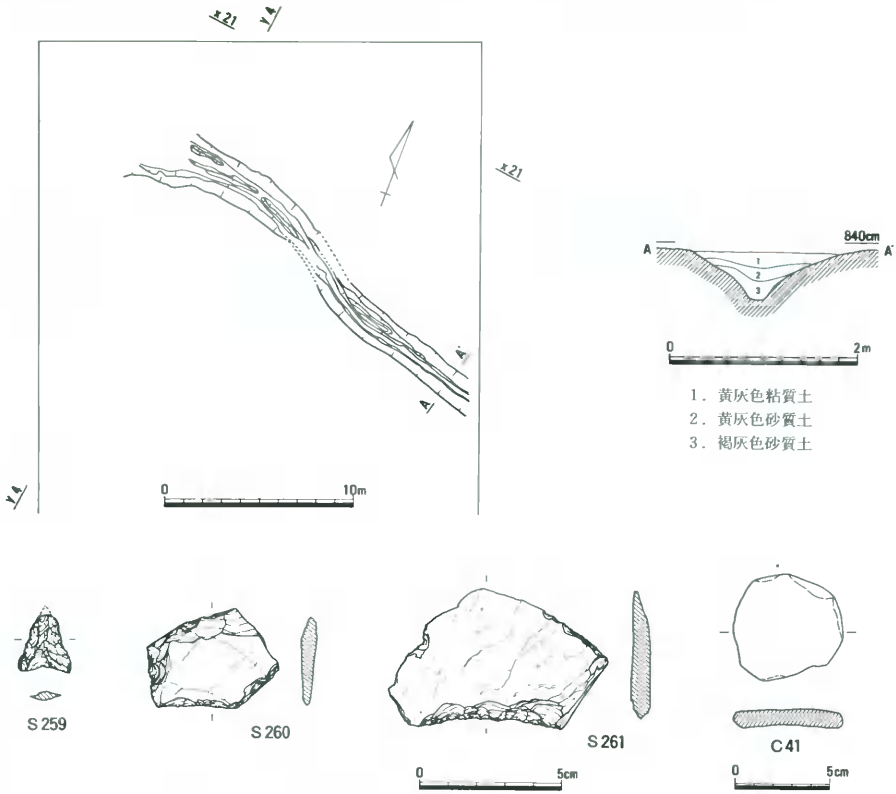
(7)　溝

溝１（第229図）

第２微高地（西）のＡＴ区北東部に位置し、若干の蛇行をみせる流路を東西方向に置くが、東は調査対象外に続き、西端は溝63・64に削られている。

上幅は160～220㎝で、深さ35㎝前後の断面形はＶ字形を呈し、溝浚えの痕跡を明瞭に残す部分では、底幅30㎝前後を測る。

出土遺物には、弥生土器の他に、円板状土製品**Ｃ41**、サヌカイト製の石鏃**Ｓ259**、スクレイパー**Ｓ**



第229図　溝１(1/300・1/30)・出土遺物(1)(1/2・1/3)

260・**Ｓ261**等があり、時期は弥生時代前期に比定される。　（光永）

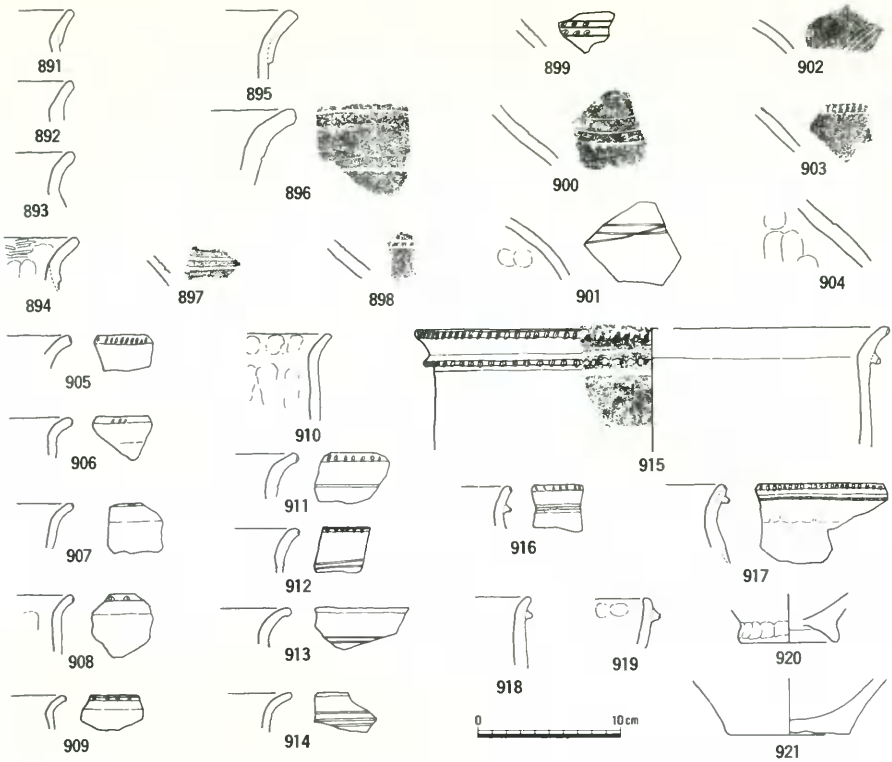
溝２（第231・232図、図版13）

第２微高地(東)北端部に位置する。検出面での規模は幅60～110㎝を測る。ＦＵ区北西から南東にかけて微高地の地形に規制されることなく直線的に流走しており、人為的に掘削された水路と考えられる。西端はＫ２区北西部分で溝３にぶつかるが、切られているのか合流するのかよく判らなかった。底面は西側のＫ２区にかかる部分で一段低くなっており、東から西へ流れていたと考えられる。西端と東端のレベル差は約10㎝である。出土遺物は如意状口縁の甕**922**で、頸部に沈線を巡らしている。時期は弥生時代前期中葉頃と考えられる。　（久保）

溝３（第231・233図、図版13）

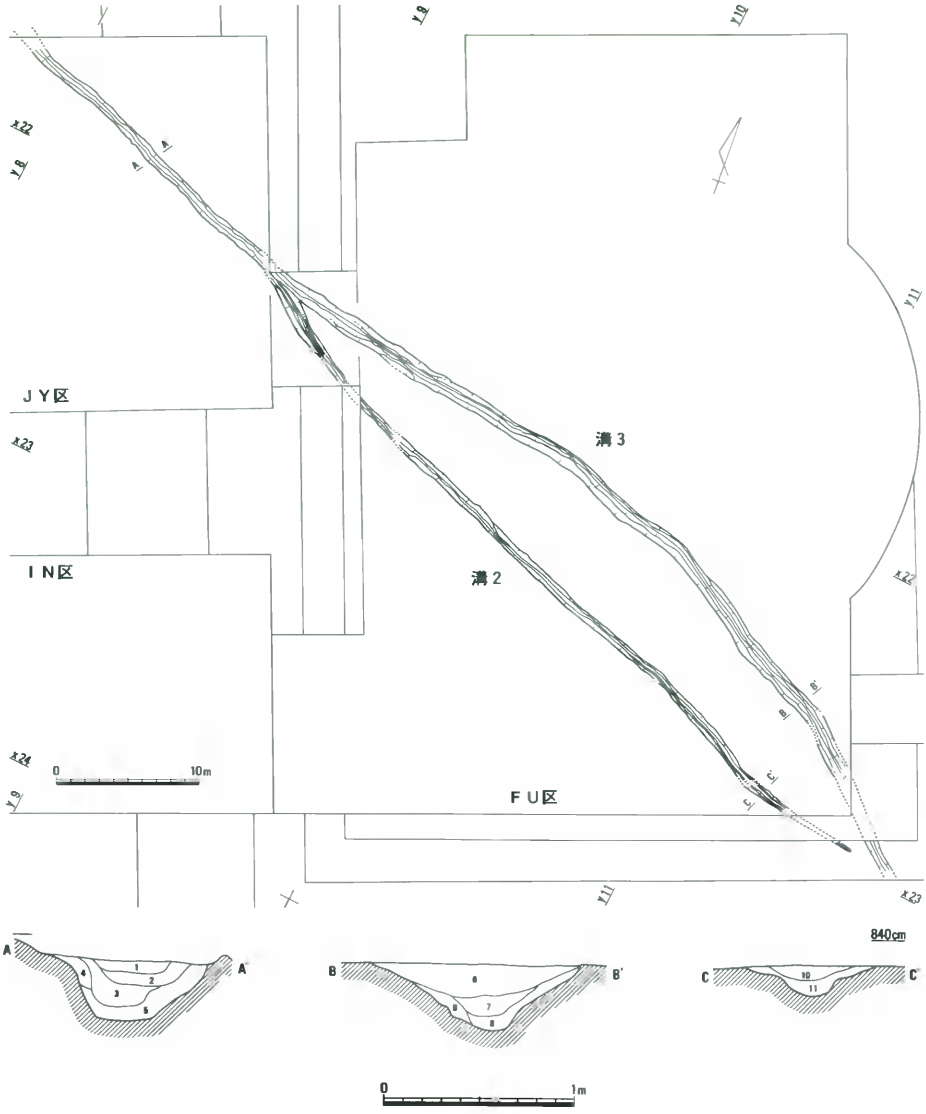
溝２の北側に平行して流走する。この溝も上面の削平が著しいが、検出面で幅70～135㎝、深さ40～50㎝を測る。底面の海抜高は西端で7.8ｍ、Ａ断面部分で7.95ｍ、Ｂ断面部分で7.9ｍ、東端で7.9ｍとなり、常に一定方向に流れていたとは考えにくい。西側の第２低位部と東側の第３低位部を結ぶバイパス的な性格も考慮に入れる必要があるかもしれない。

埋土中からは少量の土器細片と数点の石器が出土している。土器には壺**923**～**926**、甕**927**～**932**など



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
891	弥生土器	壺	口縁部下位に段。		灰白　10YR8/1	
892	弥生土器	壺？		ユビオサエ、ナデ。	灰白　10YR7/1	
893	弥生土器	壺？		ユビオサエ、ナデ。	灰白　10YR8/1	
894	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線。沈線による段。	ミガキ。	灰白　10YR8/1	
895	弥生土器	壺	口縁部下位に沈線による段。	ナデ。	灰白　10YR8/1	
896	弥生土器	壺？	口唇部ヘラ描き沈線、口縁部ヘラ描き沈線２本。		にぶい橙　7.5YR7/4	
897	弥生土器	壺？	ヘラ描き沈線２本		褐灰　7.5YR6/1	
898	弥生土器	壺？	ヘラ描き沈線２本、刺突文。	ナデ？。	灰白　10YR8/1	
899	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線３本、刺突文。		灰白　10YR8/1	
900	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線３本。		明褐灰　7.5YR7/2	
901	弥生土器	壺	細く浅いヘラ描き沈線２本。ミガキ。		にぶい橙　7.5YR7/3	
902	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。ミガキ。	ナデ？。	灰白　2.5Y8/2	
903	弥生土器	壺？	ヘラ描き沈線、刺突文。	ナデ？。	灰白　7.5YR8/2	
904	弥生土器	壺	沈線による段。ミガキ。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　10YR8/1	
905	弥生土器	甕	口唇部刻目。		灰白　7.5YR8/1	
906	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。		灰白　10YR8/1	
907	弥生土器	甕	口唇部刻目。		淡橙　5YR8/4	
908	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。		灰白　10YR8/2	
909	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。		灰白　10YR8/2	
910	弥生土器	甕		ユビオサエ、ナデ。	灰白　7.5YR8/2	
911	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線。	ナデ。	浅黄橙　10YR8/3	
912	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線２本。	ナデ。	灰白　10YR8/1	
913	弥生土器	甕？	ヘラ描き沈線３本。		灰白　7.5YR8/2	
914	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線３本。		灰白　10YR8/1	口唇部刻目不詳。
915	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部下位に貼付刻目突帯。	ハケメのちナデ。	橙　5YR6/6	
916	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部下位に貼付刻目突帯。	ナデ。	灰白　5YR8/2	
917	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部に貼付刻目突帯。		明褐灰　5YR7/2	
918	弥生土器	甕	口縁部に貼付突帯。		浅黄橙　7.5YR8/4	口唇部刻目不詳。
919	弥生土器	鉢？	口縁部に貼付刻目突帯。	ユビオサエ、ナデ。	灰黄　2.5Y7/2	
920	弥生土器	甕？	底部側面ユビオサエ。	ナデ？。	褐灰　10YR7/2	
921	弥生土器	甕	底部ユビオサエ。		灰白　10YR8/1	

第230図　溝１出土遺物(2)（1/4）



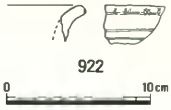
1．黄灰色粘質土　3．灰褐色粘質土　5．明黄橙色粘質土　7．黄灰色粘質土　9．淡黄色粘質土　11．褐灰色粘質土
2．青灰色粘質土　4．黄橙色粘質土　6．黄褐灰色粘質土　8．淡灰黄色粘質土　10．暗褐灰色粘質土　（黄色土ブロック含む）

第231図　溝２・３（1/400・1/30）

がみられる。**930**～**932**は突帯を持つ甕片である。**930**は如意状口縁の頸部に太目の断面三角形の突帯を付すもので、**931**は直口する口縁の端部から約１cm下がった位置につまんだような細い突帯を付している。突帯上には浅い刻みが施されている。**930**・**931**については胎土・焼成とも弥生時代前期に属する土器との差は認められなかった。**932**は体部片で、細く高めの突帯を付し、突帯上は深く菱形の

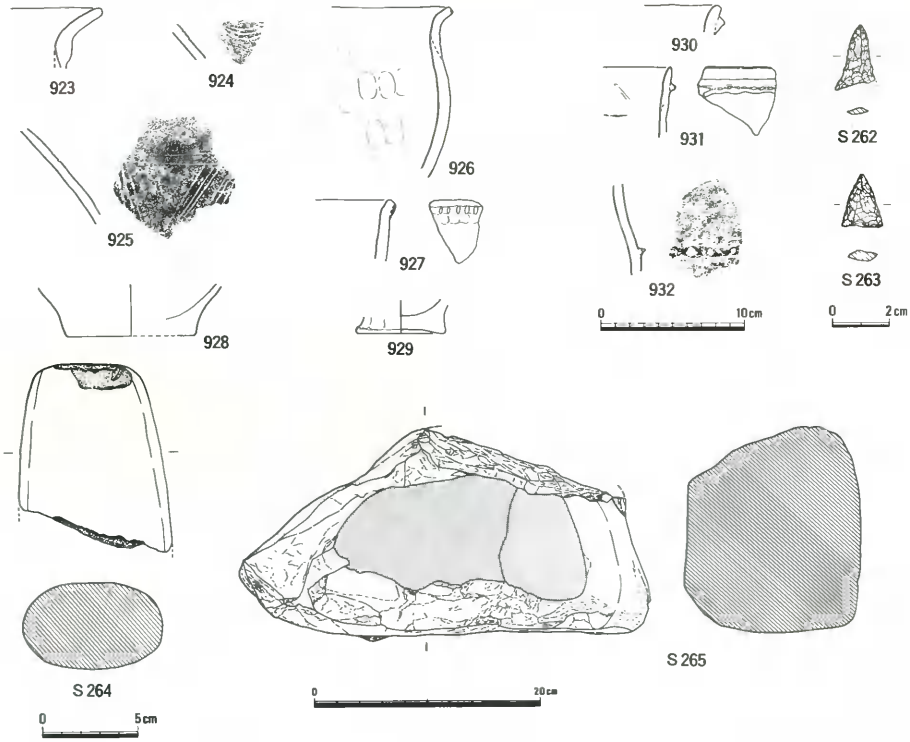
刻みを施している。胎土は他と変りないが色調は縄文時代晩期土器に近く暗褐色をしている。**S 264**は石斧の基部で溝の上層から出土している。**S 265**は平坦に磨かれた作業面をもつもので台石として使用されたと考えられる。

時期は出土土器および土壙80や溝２を切っていることから、弥生時代前期中葉前後に掘削され、あまり時間をおかずに埋没したと考えられる。（久保）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
922	弥生土器	壺	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線２本。		にぶい褐　7.5YR6/3	

第232図　溝２出土遺物（1/4）



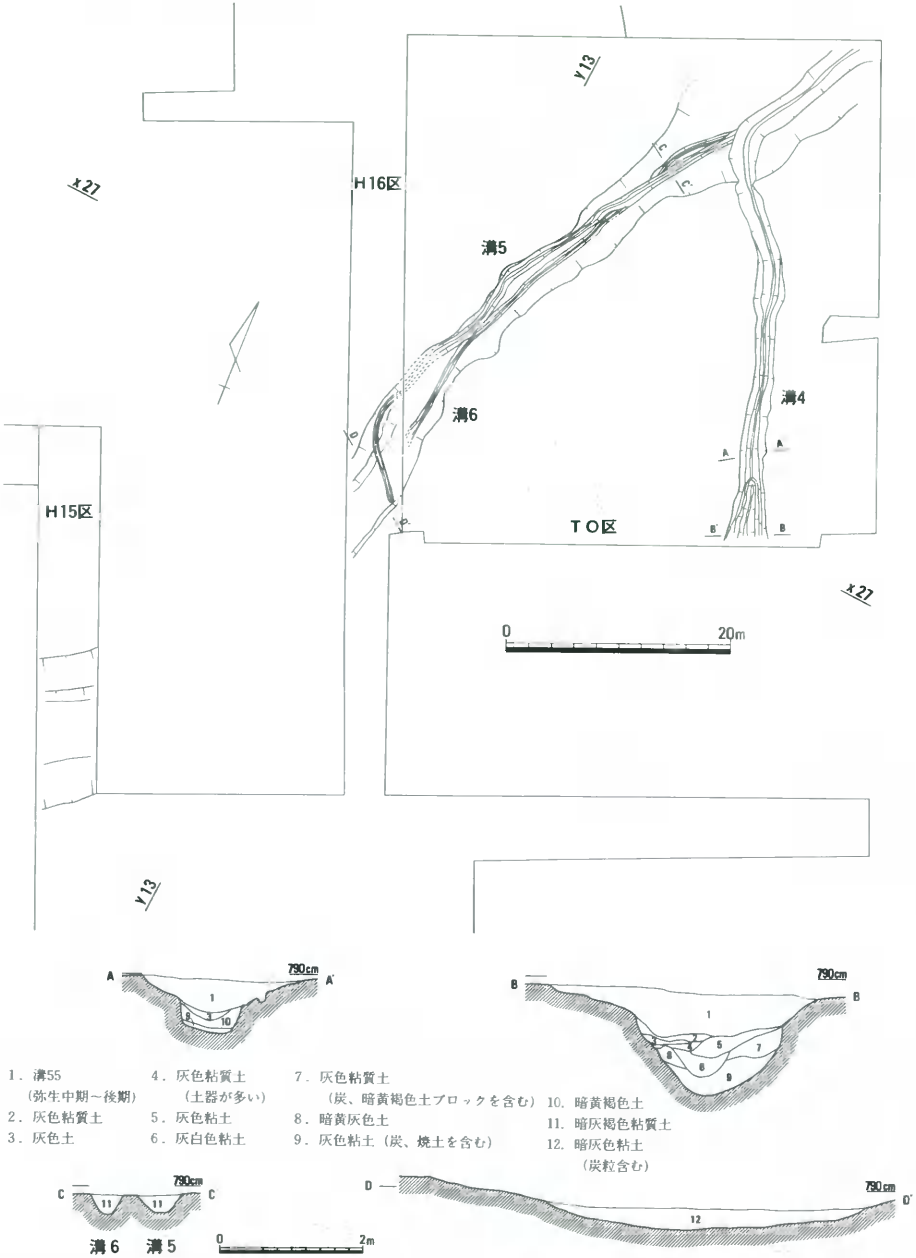
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
923	弥生土器	壺	頸部段。		にぶい橙　7.5YR7/4	
924	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。		灰白　10YR8/2	
925	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。	ユビオサエ、ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/3	
926	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヘラ描き沈線２本。	ユビオサエ、ナデ。	灰黄橙　10YR6/2	
927	弥生土器	甕	口唇部貼付？刻目突帯。		にぶい橙　5YR6/3	
928	弥生土器	甕			灰白　2.5Y8/2	
929	弥生土器？	甕？	底部側面ユビオサエ	ナデ。	橙　7.5YR6/6	
930	弥生土器	甕	口縁部貼付突帯。		灰白　7.5YR8/2	
931	縄文土器	深鉢	貼付刻目突帯。ナデ？	ミガキ？。	灰白　2.5Y8/2	
932	縄文土器	深鉢	頸部ナデ、貼付刻目突帯。胴部ケズリ。		黄灰　2.5Y5/1	

第233図　溝３出土遺物（1/4・1/2・1/3・1/5）

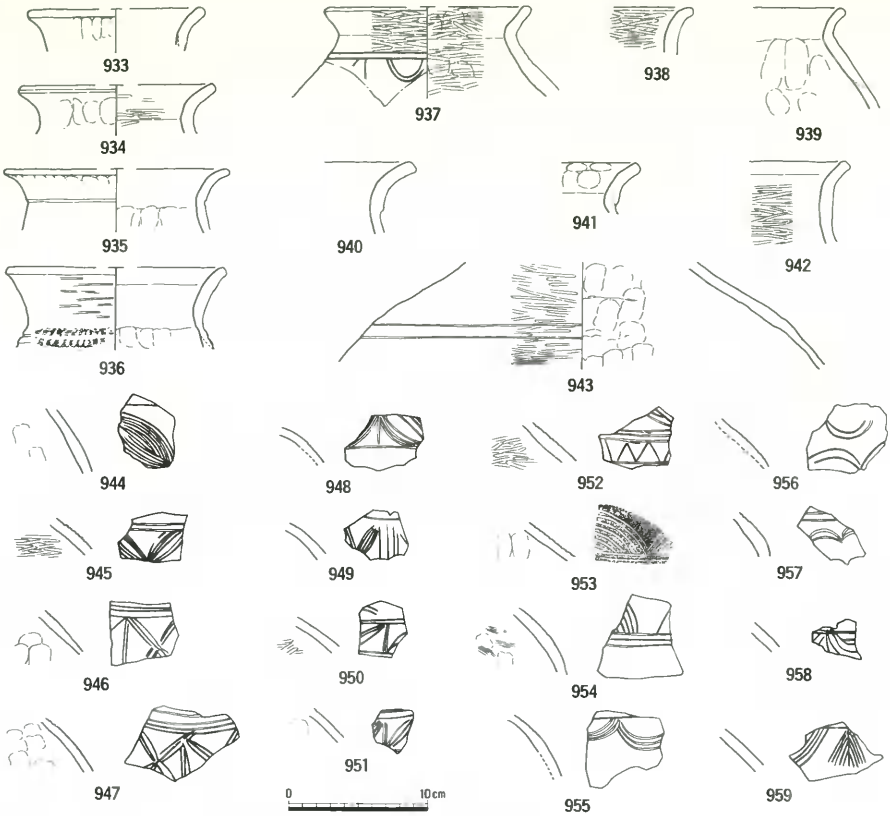
溝４（第234～245図、図版13・42・43）

ＴＯ区の東寄りに検出された、幅約90cm、深さ推定80～140cmの水路である。上部を後期前葉の溝

55がほぼ踏襲しており、溝４の肩部あるいは地点によっては底部近くから上を削平されたかたちになっている。また、南端近くで幅・深さとも規模を増し、調査区外に延びる。地形的には、第３微高

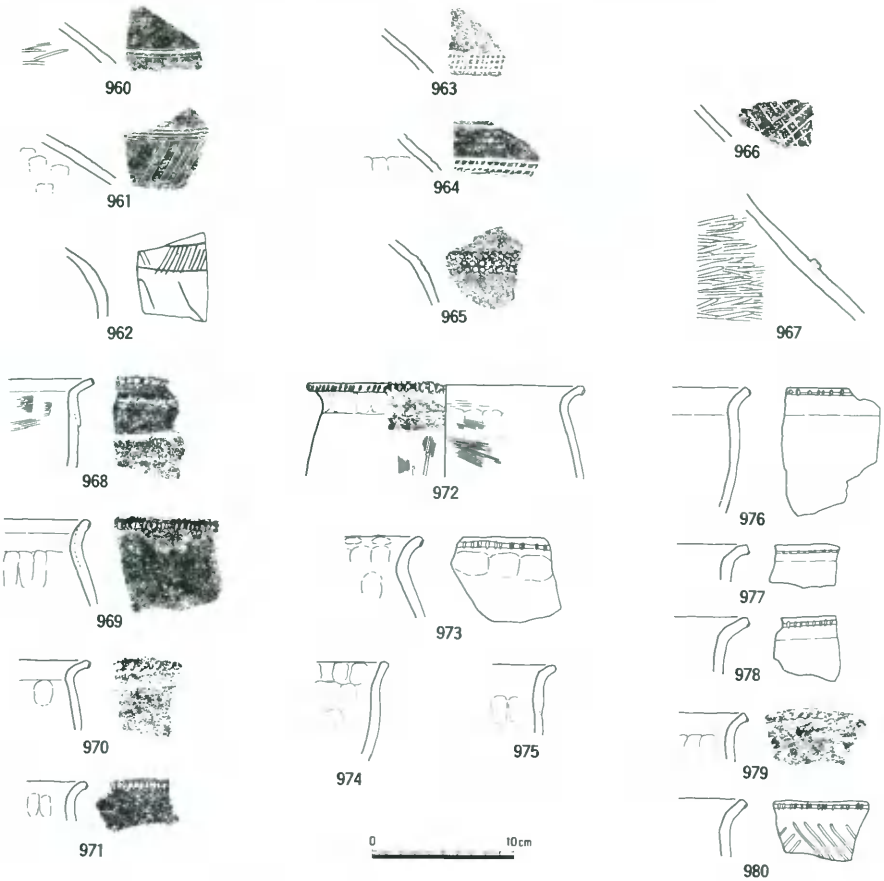


第234図　溝４・５・６（1/500・1/80）



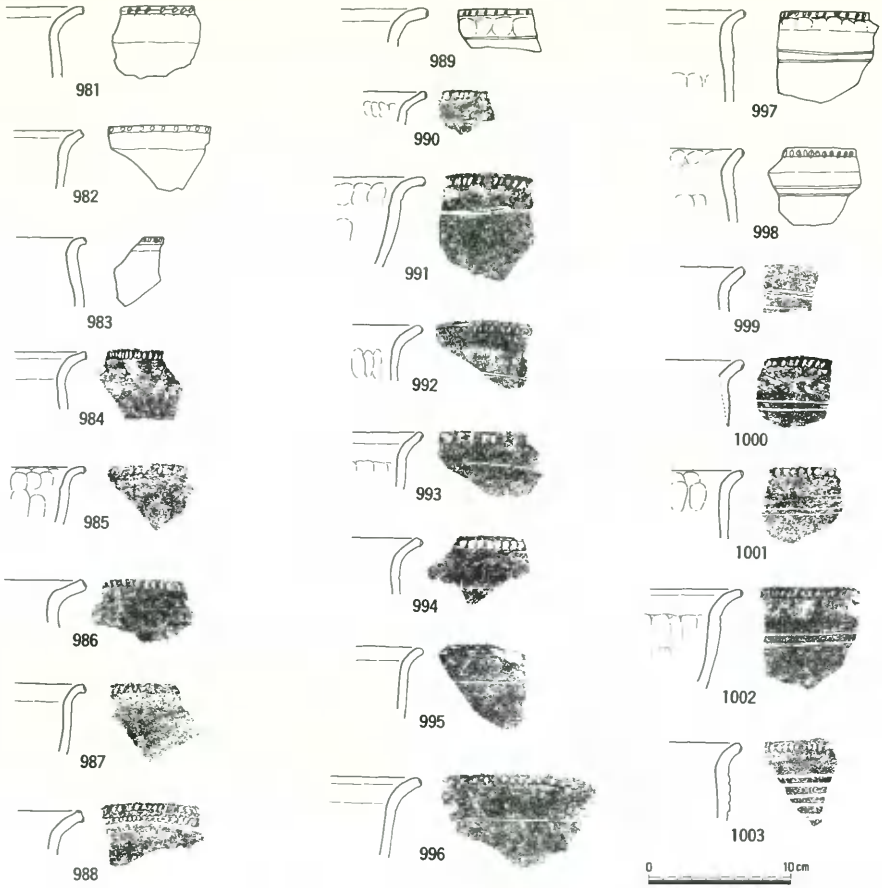
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
933	弥生土器	壺	口縁部ユビオサエ。		浅黄橙　10YR8/3	
934	弥生土器	壺	ユビオサエのちナデ？。	ヨコミガキ。	にぶい橙　5YR7/4	
935	弥生土器	壺	頸部工具による段。	頸部ユビオサエ。	にぶい橙　5YR6/4	
936	弥生土器	壺	削り出し突帯？に沈線、刻目。		浅黄橙　7.5YR8/3	
937	弥生土器	壺	細く浅いヘラ描き沈線文。ミガキ。	ミガキ。	灰白　2.5Y8/1	
938	弥生土器	壺？	ミガキ？。	ミガキ。	にぶい橙　7.5YR7/3	
939	弥生土器	壺	ナデ、ハケメ？。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　2.5Y8/2	
940	弥生土器	壺	ミガキによる段。		にぶい橙　5YR7/4	
941	弥生土器	壺	段、ヘラ描き沈線２本。		灰白　10YR8/1	
942	弥生土器	壺？	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	灰白　10YR8/2	
943	弥生土器	壺	鋭い沈線２本。ヨコミガキ。	ユビオサエ。	灰白　10YR8/1	
944	弥生土器	壺	ヘラ描き有軸木葉文。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　10YR8/2	
945	弥生土器	壺	沈線のよる段。無軸木葉文。	ヨコミガキ。	灰褐　7.5YR6/2	
946	弥生土器	壺	細く浅いヘラ描き木葉文。ミガキ。	ユビオサエ。	浅黄橙　7.5YR8/3	
947	弥生土器	壺	削り出したような段。細いヘラ描き木葉文。	ユビオサエ。	にぶい橙　7.5YR7/4	
948	弥生土器	壺	ヘラ描き無軸木葉文。		灰黄褐　10YR6/2	
949	弥生土器	壺	ヘラ描き有軸木葉文。		褐灰　7.5YR5/1	
950	弥生土器	壺	ヘラ描き木葉文。	ミガキ。	灰褐　7.5YR6/2	
951	弥生土器	壺	ヘラ描き有軸木葉文。		灰褐　7.5YR6/2	
952	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。	ミガキ。	褐灰　10YR5/1	
953	弥生土器	壺	太く浅いヘラ描き沈線文。	ミガキ。	橙　5YR6/6	
954	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。		褐灰　5YR5/1	
955	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。		灰白　7.5YR8/2	
956	弥生土器	壺	削り出したような段。ヘラ描き沈線文。		灰白　5YR8/1	
957	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。	ユビオサエのちナデ	灰白　10YR8/1	
958	弥生土器	壺？	ヘラ描き沈線文。ミガキ。		浅黄橙　7.5YR8/4	
959	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。		にぶい黄橙　10YR7/2	

第235図　溝４出土遺物(1)（1/4）



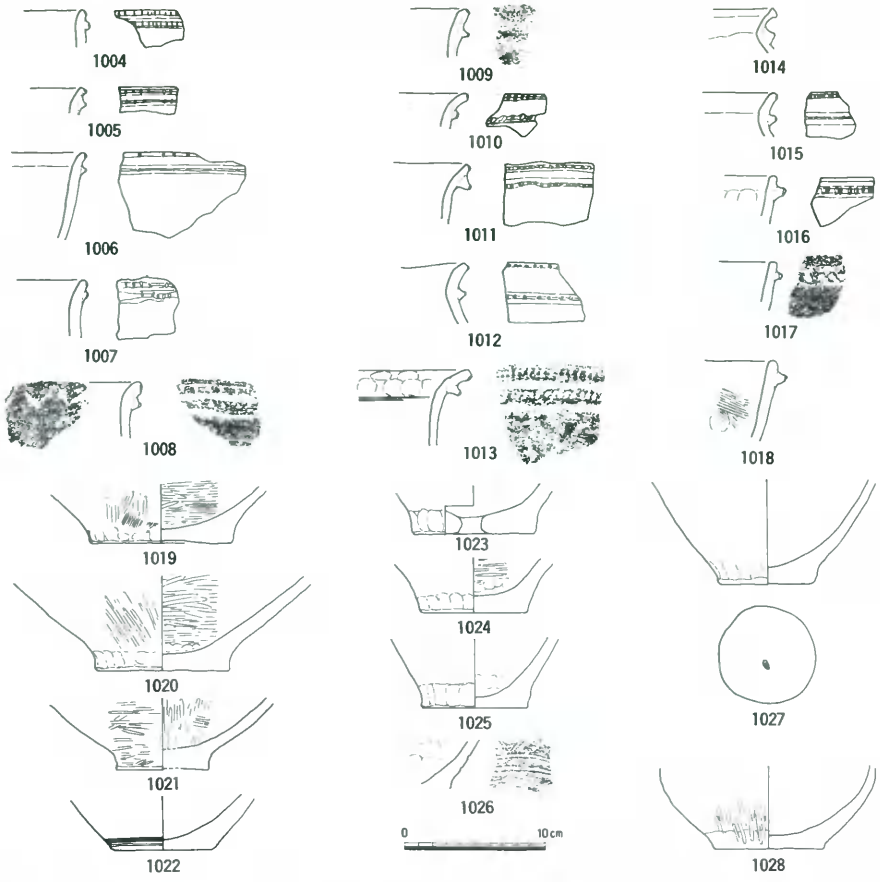
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
960	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線３本。	ユビオサエのちミガキ。	灰白　10YR8/1	
961	弥生土器	壺	太いヘラ描き沈線文。ミガキ。	ユビオサエのちナデ。	灰白　10YR7/1	
962	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。	ユビオサエのちナデ。	褐灰　7.5YR5/1	
963	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線４本。刺突文。	ユビオサエ、ナデ。	にぶい褐　7.5YR6/3	
964	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、刺突文。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　10YR7/1	
965	弥生土器	壺	円形刺突文。	ユビオサエのちナデ？。	淡橙　5YR8/4	
966	弥生土器	壺	太いヘラ描き沈線文。	ナデ。	灰白　10YR8/2	
967	弥生土器	壺？	貼付突帯上にヘラ描き沈線１本。	ミガキ。	灰白　7.5YR8/2	
968	弥生土器	甕	口唇部刻目。沈線による段。	胴部ハケメ？。	褐灰　10YR5/1	
969	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　7.5YR8/2	
970	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ミガキ？。	ユビオサエのちナデ？。	橙　5YR6/6	
971	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ユビオサエ。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　10YR8/2	
972	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。タテハケメ。	ハケメ。	橙　2.5YR6/6	
973	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ナデ？。	ユビオサエ、ナデ。	灰褐　7.5YR6/2	
974	弥生土器	甕		ユビオサエ、ナデ。	明褐灰　7.5YR7/2	
975	弥生土器	甕	ユビオサエによる段？。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　7.5YR8/2	
976	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。	ユビオサエ、ナデ？。	灰褐　5YR6/2	
977	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ユビオサエ。		浅黄橙　7.5YR8/4	
978	弥生土器	鉢？	口唇下端部刻目。ミガキ？。	ミガキ？。	灰白　2.5Y7/1	
979	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。	ユビオサエのちナデ？。	灰白　7.5YR8/1	
980	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線文。		灰白　10YR8/2	

第236図　溝４出土遺物(2)（1/4）



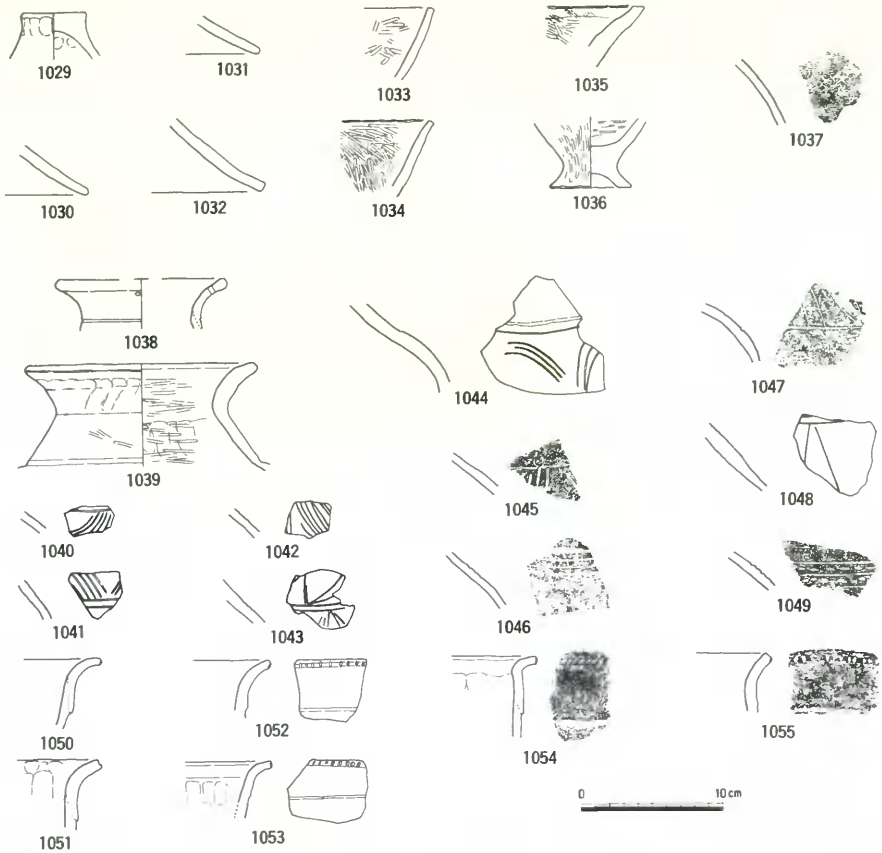
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
981	弥生土器	甕	口唇部刻目。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	灰白　7.5YR8/2	
982	弥生土器	甕	口唇部刻目。		灰白　2.5Y8/2	
983	弥生土器	甕	口唇部刻目。	ナデ？。	明褐灰　7.5YR7/2	
984	弥生土器	甕	口唇部刻目。胴部ナデ？、ハケメ？。	ナデ。	灰白　10YR8/1	
985	弥生土器	甕	口唇部刻目。ナデ？	ユビオサエのちナデ。	にぶい橙　5YR6/4	
986	弥生土器	甕	口唇部刻目。		淡黄　2.5Y8/3	
987	弥生土器	甕	口唇部刻目。		灰白　7.5YR8/2	
988	弥生土器	甕	口唇部両端刻目。		にぶい橙　7.5YR7/3	外面煤。
989	弥生土器	甕	口唇部刻目。太いヘラ描き沈線１本。	ナデ？。	灰白　2.5Y8/2	
990	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヘラ描き沈線１本。	ヨコナデ。	灰白　2.5Y8/2	
991	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。ヘラ描き沈線１本。ハケメ。	ユビオサエのちナデ。	灰白　10YR8/1	
992	弥生土器	甕	口唇部下端刻目。細いヘラ描き沈線１本	ユビオサエ、ナデ。	にぶい褐　7.5YR5/4	
993	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。太いヘラ描き沈線１本。	口縁部ヨコナデ。	灰白　10YR8/2	
994	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。太いヘラ描き沈線１本。	ナデ。	灰白　2.5Y8/2	
995	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線１本。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	明褐灰　7.5YR7/1	
996	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヘラ描き沈線１本。	口縁部ヨコナデ。	灰白　10YR8/2	
997	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヘラ描き沈線２本。	口縁部ヨコナデ。	灰白　10YR8/2	
998	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線２本。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙　5YR7/4	
999	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。浅いヘラ描き沈線４本。		橙　2.5YR6/6	
1000	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。鋭いヘラ描き沈線２本		にぶい橙　5YR7/4	
1001	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヘラ描き沈線２本。	口縁部ユビオサエ。	褐灰　5YR5/1	
1002	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヘラ描き沈線２本。	口縁部ユビオサエ、ヨコナデ。	浅黄橙　7.5YR8/2	
1003	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線４本。	ナデ？	にぶい黄橙　10YR7/3	

第237図　溝４出土遺物(3)（1/4）



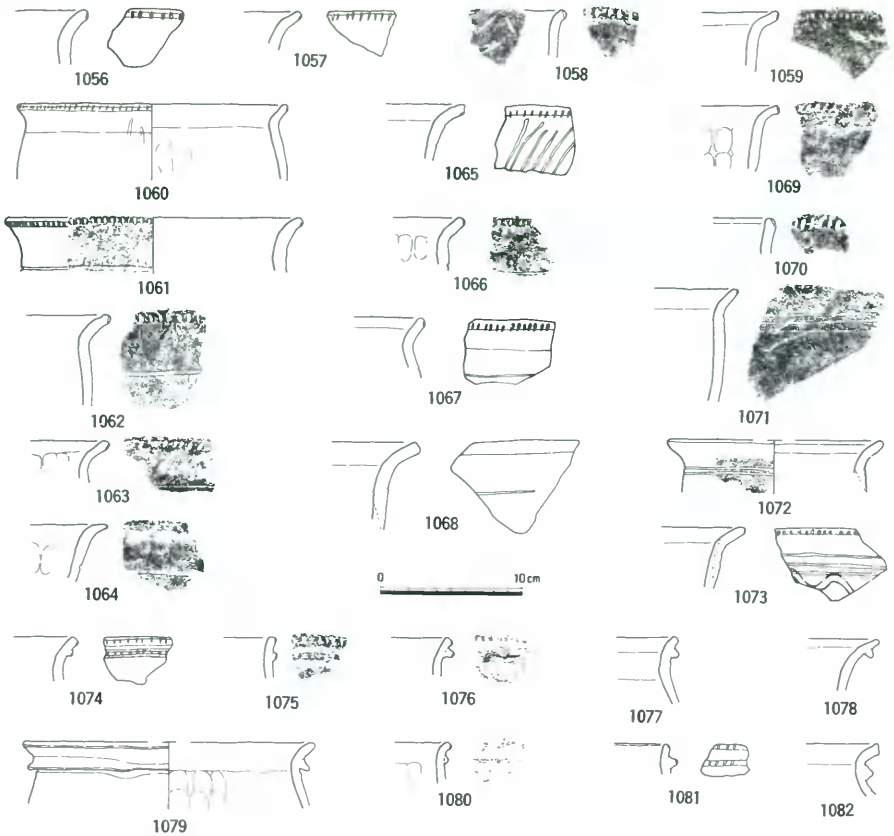
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1004	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部貼付刻目突帯。	ナデ。	灰白　2.5Y8/2	刻目は同時。
1005	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部貼付刻目突帯。	ヨコナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1006	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部貼付刻目突帯。		にぶい黄橙　10YR6/3	
1007	縄文土器？	深鉢	口唇下端部刻目。貼付刻目突帯。		褐灰　5YR5/1	
1008	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。貼付刻目突帯。ヘラ描き沈線。	口縁部鋸歯文。	灰白　2.5Y8/1	刻目は同時。
1009	弥生土器	甕	口唇部刻目。貼付刻目突帯。		にぶい橙　7.5YR7/3	
1010	弥生土器	甕	口唇部刻目。貼付刻目突帯。	ヨコナデ？。	にぶい橙　7.5YR7/4	
1011	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。貼付刻目突帯。ナデ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄褐　10YR4/3	
1012	弥生土器	甕？	口唇下端部刻目。貼付刻目突帯。ミガキ。	ナデ？。	灰白　2.5Y8/1	片口？。
1013	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。貼付刻目突帯。	ヘラ描き沈線？。	灰白　7.5YR8/2	刻目は同時。
1014	弥生土器	甕？	貼付突帯。ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白　2.5YR8/2	
1015	弥生土器	甕？	口唇下端部刻目。貼付刻目突帯。	口縁部ヨコナデ。	灰　N5/	
1016	弥生土器	甕？	貼付刻目突帯。ミガキ。口縁部ヨコナデ。		灰白　2.5Y7/1	
1017	弥生土器	甕？	貼付刻目突帯。ミガキ？。	ミガキ？。	にぶい橙　7.5YR7/4	
1018	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。貼付刻目突帯。	ハケメのちナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	外面煤。
1019	弥生土器	壺	胴部ハケメのちミガキ。底部ミガキ。	ミガキ。	灰黄褐　10YR6/2	
1020	弥生土器	壺	ミガキ。底部側面ユビオサエ。	ヨコミガキ。	灰黄　2.5Y7/2	
1021	弥生土器	壺	ミガキ。	ミガキ。	にぶい橙　7.5YR7/3	
1022	弥生土器	壺？	底部側面細いヘラ描き沈線３本。		橙　2.5YR7/6	
1023	弥生土器	甕	底部側面ユビオサエ。		橙　2.5YR7/6	焼成後穿孔。
1024	弥生土器	壺？	底部側面ユビオサエ。	ミガキ。	灰黄　2.5Y7/2	
1025	弥生土器	甕	底部側面ユビオサエ。		灰黄褐　10YR4/1	
1026	弥生土器	壺？	ヘラ描き沈線文。	ユビオサエ、ナデ？。	明褐灰　5YR7/2	
1027	弥生土器	甕	底部側面ユビオサエ。		灰白　2.5Y8/1	底部外面裸痕１。
1028	弥生土器	壺	胴部タテミガキ。底部ミガキ。	ミガキ？。	灰白　10YR8/1	

第238図　溝４出土遺物(4)（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1029	弥生土器	鉢？	ユビオサエ。		灰　5Y5/1	
1030	弥生土器	蓋	ハケメ。	ミガキ？。	灰白　2.5Y8/2	
1031	弥生土器	蓋	ミガキ。	ミガキ？。	浅黄橙　7.5YR8/3	
1032	弥生土器	蓋	ユビオサエのちミガキ。	ユビオサエのちミガキ。	淡橙　5YR8/3	口縁部内面煤
1033	弥生土器	鉢？	ナデのちミガキ。	ミガキ。	明褐灰　7.5YR7/1	
1034	弥生土器	鉢？	ユビオサエのちミガキ。	ミガキ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1035	弥生土器	高杯？	タテミガキ。	ミガキ。	にぶい褐　7.5YR6/3	
1036	弥生土器	鉢	タテミガキ。	ヨコミガキ。	灰褐　5YR5/2	
1037	弥生土器	壺	クシ描き沈線、波状文。	ナデ。	灰褐　7.5YR5/2	
1038	弥生土器	壺	頸部ヘラ描き沈線１本。		浅黄　2.5Y8/3	口縁部穿孔。
1039	弥生土器	壺	口唇部ヘラ描き沈線１本。頸部ミガキ、段。	ヨコミガキ。	灰白　10YR8/1	
1040	弥生土器	壺	細いヘラ描き沈線、沈線文。	ナデ。	暗灰　N3/	外面煤。
1041	弥生土器	壺	細いヘラ描き沈線、沈線文。		灰白　7.5YR8/2	
1042	弥生土器	壺	ヘラ描き有軸木葉文。	ユビオサエのちナデ。	灰白　10YR8/1	
1043	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、沈線文。		灰白　10YR8/1	
1044	弥生土器	壺	段を意識したヘラ描き沈線。ヘラ描き沈線文。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　10YR8/1	
1045	弥生土器	壺	太いヘラ描き沈線、沈線文。	ナデ。	褐灰　10YR6/1	
1046	弥生土器	壺	段を意識したヘラ描き沈線。	ナデ？。	黒　5Y2/1	
1047	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。		灰黄　2.5Y7/2	
1048	弥生土器	壺	細いヘラ描き沈線文。	ユビオサエのちナデ。	灰白　10YR8/1	
1049	弥生土器	壺	鋭いヘラ描き沈線、刺突文。	ナデ？。	灰白　10YR8/2	外面煤。
1050	弥生土器	甕	口唇部刻目。工具による段。	ナデ？。	にぶい橙　7.5YR7/3	
1051	弥生土器	鉢？	口縁部ミガキ？，工具による段。	ユビオサエ、ナデ。	浅黄橙　7.5YR8/3	
1052	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。沈線による段。	ナデ。	灰白　10YR8/2	
1053	弥生土器	甕	口唇部刻目。板状工具？による段。	口縁部ヨコナデ？	灰黄　10YR8/3	
1054	弥生土器	甕	口唇部刻目。工具による段。	口縁部ヨコナデ？，	褐灰　5YR5/1	
1055	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。沈線による段		灰白　2.5Y8/2	

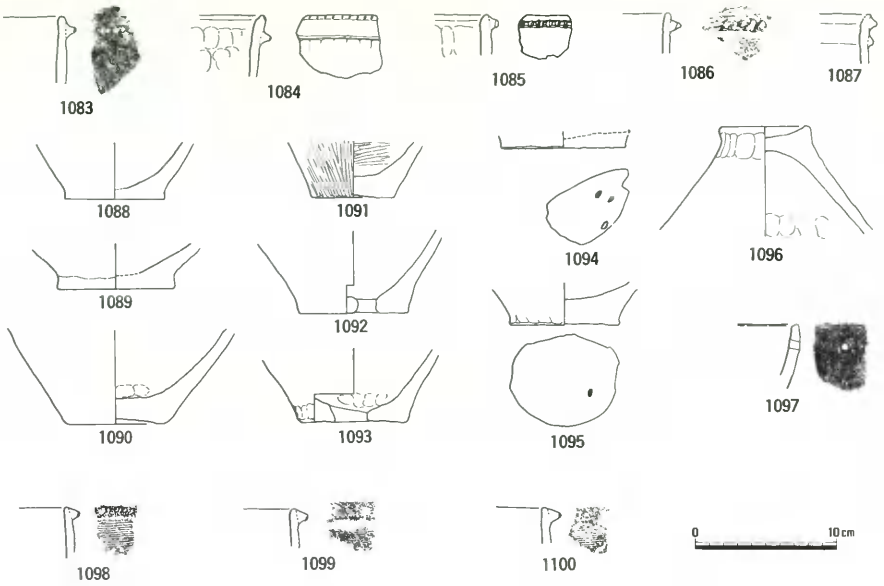
第239図　溝４出土遺物(5)（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1056	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。	ナデ？。	にぶい橙　5YR7/3	
1057	弥生土器	甕	口唇下端部刻目　口唇部沈線状の凹み。		灰白　10YR8/1	
1058	弥生土器	甕	口唇部深い刻目。	口唇部鋸歯文。	灰白　2.5Y8/2	
1059	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部ヨコナデ？。	口縁部ユビオサエ、ヨコナデ？。	浅黄橙　7.5Y8/4	
1060	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。	ナデ？。	にぶい褐　7.5YR5/3	
1061	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線。	口縁部ヨコナデ。	灰黄褐　10YR7/1	
1062	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線１本。	口縁部ヨコナデ。	灰白　2.5Y8/1	
1063	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線。	ユビオサエ。	灰白　10YR8/2	外面煤
1064	弥生土器	鉢？	口唇部刻目。ヘラ描き沈線１本。	ユビオサエ、ナデ。	淡橙　5YR8/4	
1065	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部ヘラ描き沈線文。	口縁部ヨコナデ。	灰黄　2.5Y6/2	
1066	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　2.5Y8/1	
1067	弥生土器	甕	口唇下端部刻目　ヘラ描き沈線１本	ヨコナデ？。	灰白　10YR8/1	
1068	弥生土器	甕？	ヘラ描き沈線１本。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	灰白　2.5Y8/2	
1069	弥生土器	甕	口唇部刻目。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	灰白　2.5Y4/2	
1070	弥生土器	甕	口唇下端部太い刻目。ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白　10YR8/1	
1071	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヘラ描き沈線３本。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	灰白　10YR7/1	
1072	弥生土器	甕	細く、鋭いヘラ描き沈線２本。	口縁部ヨコナデ。	浅黄橙　7.5YR8/3	
1073	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線、沈線文。	ナデ。	淡橙　5YR8/4	
1074	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。貼付刻目突帯。		灰白　7.5YR8/2	
1075	弥生土器	甕	口唇部刻目。貼付刻目突帯。		灰白　10YR8/2	刻目は同時。
1076	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。貼付刻目突帯。	口縁部ヨコナデ。	暗灰　N3/	
1077	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ　貼付突帯。		灰白　7.5YR8/2	刻目なし。
1078	弥生土器	甕	口縁部貼付突帯。		灰白　10YR8/1	
1079	弥生土器	甕	口縁部貼付突帯、ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	灰白　2.5Y8/2	
1080	弥生土器	甕	口唇下端部刻目	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙　5YR7/3	
1081	弥生土器	甕	口唇下端部刻目　貼付刻目突帯。	ヨコナデ。	灰白　2.5Y8/2	
1082	弥生土器	甕？	貼付突帯　ヘラ描き沈線？	口縁部ヨコナデ。	灰白　2.5Y8/2	

第240図　溝４出土遺物(6)（1/4）

地の幅の狭い部分に第３低位部と第４低位部とをつなぐ位置にある。溝底のレベルは、北東隅で標高約7.3mでほぼ真中あたりまで同レベルを保つが、それより南へは徐々に下がり、Ａ－Ａ'の位置では



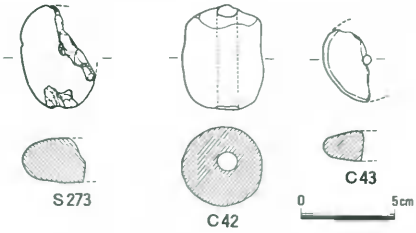
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1083	弥生土器	甕	口縁部貼付刻目突帯。	ユビオサエのちナデ。	淡橙　7.5YR8/2	
1084	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。貼付刻目突帯。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　10YR8/1	
1085	弥生土器	甕	口唇部貼付刻目突帯。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　10YR8/1	外面煤。
1086	弥生土器	甕	貼付刻目突帯。	口縁部ヨコナデ。	浅黄橙　5YR7/6	
1087	弥生土器	甕	貼付突帯。刻目なし？。	ヨコナデ。	灰白　10YR8/1	
1088	弥生土器	甕	底部側面ユビオサエ。	ナデ？。	灰白　10YR8/1	
1089	弥生土器	壺	底部側面ユビオサエ。	ナデ？。	にぶい橙　7.5YR7/4	
1090	弥生土器	甕			灰黄　2.5Y7/2	
1091	弥生土器	壺	胴部ミガキ。底部ミガキ。	ミガキ？。	灰白　2.5Y8/2	
1092	弥生土器	甕			にぶい黄橙　10YR7/2	焼成後穿孔。
1093	弥生土器	甕	底部側面ユビオサエ。		橙　5YR7/6	焼成後穿孔。
1094	弥生土器	甕？			灰白　10YR6/1	底部外面剥痕３。
1095	弥生土器	甕	底部側面ユビオサエ。	ナデ。	橙　5YR7/6	底部外面剥痕１。
1096	弥生土器	蓋？		ナデ。	灰白　7.5YR8/2	
1097	弥生土器	鉢	穿孔１。	ユビオサエのちナデ。	淡橙　5YR8/4	
1098	弥生土器	甕	口縁部貼付刻目突帯。クシ描き沈線。		橙　5YR6/6	
1099	弥生土器	甕	口縁部貼付刻目突帯。クシ描き沈線。	ナデ。	淡黄　2.5Y8/3	
1100	弥生土器	甕	口縁部貼付刻目突帯。クシ描き沈線。	ナデ。	灰白　10YR8/1	

第241図　溝４出土遺物(7)（1/4）

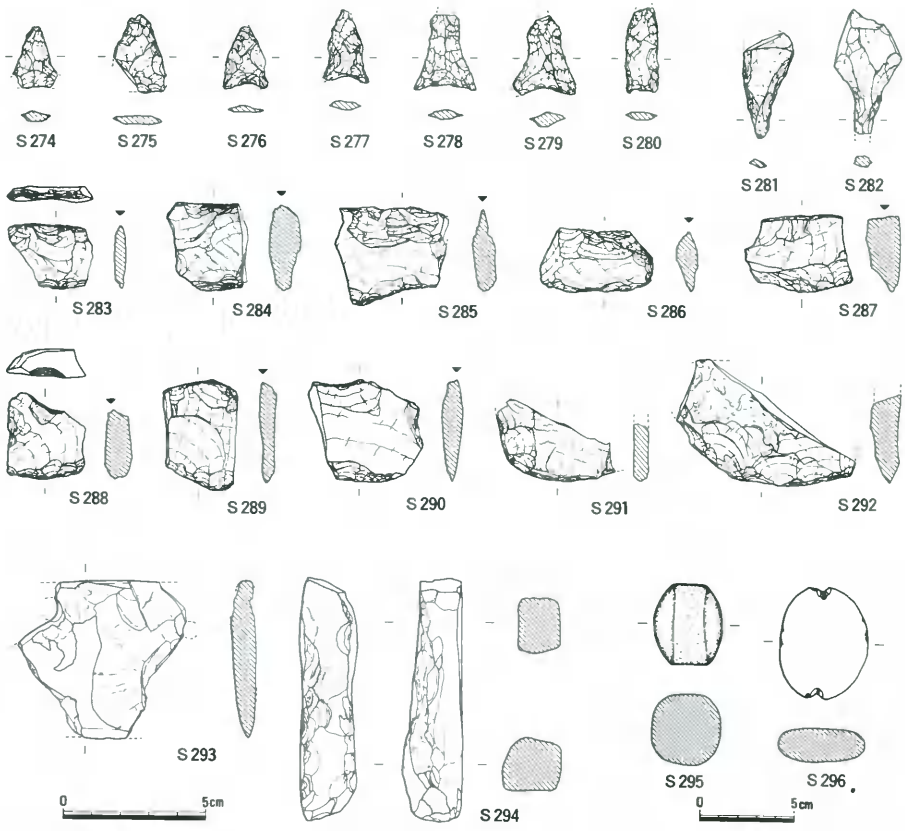
第242図　溝４出土遺物(8)（1/2）

約7.1ｍ、一段下がる手前で6.95ｍ、下がって南端まで6.2ｍを測り、南流していた可能性が強い。ただ、南へ10～15ｍの地点では縄文時代晩期から弥生時代中期前半に存在していた河道２の一部と合接する蓋然性が高く、河道２の水位によっては北流も考えられる。また、一段深くなる南端の部分ではＢ－Ｂ'で明らかなように、何度かの改修が行なわれたことが看取される。

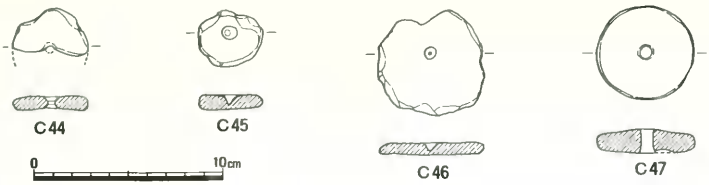
遺物は土器・石器・土製品などが比較的多く出土しているが、第235図**933**～第239図**1037**および第242・243図では溝底レベルの深くなるＡ－Ａ'より南の部分の、溝55（１層）に影響されず確実に溝４の埋土に伴う遺物を提示し、第239図**1038**～第241・244・245図はそれより以北の部分の、溝55と混在する可能性のあるものの中から明らかに前者と同時期と思われる遺物を抽出し掲載した。また、土器はほとんど細片であるが、特徴的なものは極力載せている。



第243図　溝４出土遺物(9)（1/3）



第244図　溝４出土遺物(10)（1/2・1/3）



第245図　溝４出土遺物(11)（1/3）

壺は口縁部下に段が顕著なものを含み、肩部には木葉文や重弧文、格子文や平行線文などのヘラ描き文を施す破片も多い。なかにはクシ描き沈線文を施す**1037**も含まれる。甕は、「く」の字状に短く外反するタイプと、無頸またはわずかに外反する口縁端部下に刻目をつけた突帯を１～２条めぐらせるタイプの二者および逆「Ｌ」字状口縁をもちその下部にクシ描き沈線文を施すタイプの三者がある。後者は中期前葉とみて間違いないが、前二者の前期の中での新旧あるいは並行関係についてははっきりしない。そのほかの土器では、比較的蓋の点数が多いことや壺の底部の籾痕跡（**1094**・**1095**）が注目される。石器は石鏃、石錐、楔形石器、スクレイパー、石包丁（**Ｓ293**）、柱状片刃石斧（**Ｓ272**・**Ｓ294**）などが出土しているが、なかで**Ｓ291**は器表面に擦痕が多数認められ、石鍬の可能性がある。

溝という性格上、比較的時期幅のある遺物が含まれているが、少なくとも弥生時代前期の中葉から中期前葉にかけて比較的長時間に渡って機能していたと思われる。（柳瀬）

溝５（第234・246・247図）

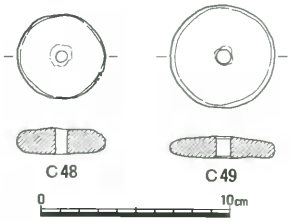
ＴＯ区の北北東隅からほぼ南南西、Ｈ16区のほぼ中央とＨ15区の南端にかけてつながる幅約３～13ｍの浅い谷状地形の最深部に検出された、幅約30～60㎝、深さ25㎝前後の溝である。層的には溝５は谷部の埋土を切って存在し、ほぼ並走する溝６に部分的に切られて存在するが、Ｈ15・16区では検出されていない。溝底のレベルは標高7.55ｍ前後で、どちらかというと南に幾分下がる。また、北東端で溝55に削平されていて、下部に重複する溝４との直接の関連はつかめなかったが、位置的にみて枝溝の可能性も否定できない。ただ、規模等からすればＦＵ区の溝２と結合するのかもしれない。

第247図の上段にはこの溝出土土器、下段にはＨ15・16区の谷状落ち込みの埋土中（第234図Ｄ－Ｄ'の12層に相当）の土器を載せている。どちらも断片的ながら他時期の土器の混入もなく、弥生時代前期の比較的古い様相を示す。（柳瀬）

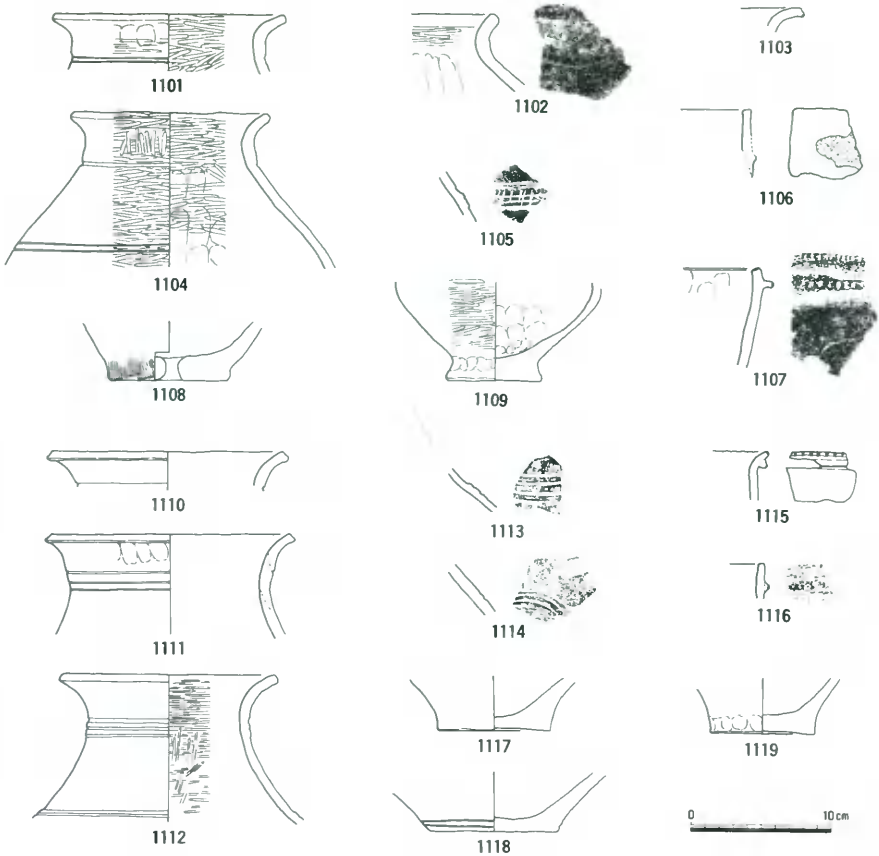
溝６（第234・248図）

溝５とほぼ並走し、Ｈ16区まで延びる幅約30～100㎝、深さ30㎝前後の溝である。位置関係、規模等から推察してＦＵ区の溝３に対応する可能性もある。溝底のレベルは、Ｈ16区の南端で標高7.82ｍ、北端で7.76ｍ、ほぼ中央からＣ－Ｃ'付近まで7.52ｍ、溝55との接点で7.42ｍを測り、40㎝もの比高差で北東方向へ流下する。

出土遺物の量は非常に少ないが、比較的大きな破片の壺、石鏃や完形の土製紡錘車などがある。壺**1120**は口縁部下に段をもつなど、弥生時代前期の古い様相を示す。（柳瀬）

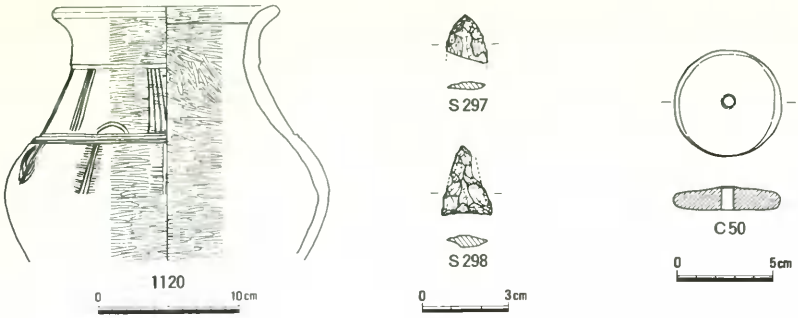


第246図　溝５出土遺物(1)（1/3）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1101	弥生土器	壺	細いヘラ描き沈線２本。ミガキ。	ミガキ。	灰白　10YR8/1	
1102	弥生土器	壺	細いヘラ描き沈線２本。ミガキ。	ミガキ。ナデ。	灰白　10YR8/1	
1103	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。		灰白　10YR8/1	
1104	弥生土器	壺	頸部深い、胴部細いヘラ描き沈線。	ミガキ。	灰白　10YR8/1	
1105	弥生土器	壺	削り出し突帯に２本のヘラ描き沈線、刻目。	ナデ？。	灰白　10YR4/1	
1106	弥生土器	甕	口縁部下位に突起痕跡。		灰白　10YR7/1	
1107	弥生土器	甕	口唇部刻目。口縁部刻目突帯。	ユビオサエ、ナデ。	黄橙　7.5YR8/2	
1108	弥生土器	甕	底部側面ハケメ。	ナデ。	灰黄　2.5Y7/2	焼成後穿孔。
1109	弥生土器	鉢	胴部ミガキ。	ナデ。	灰黄　2.5Y6/2	
1110	弥生土器	壺	ミガキ。段。	ミガキ。	にぶい橙　7.5YR7/3	
1111	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線３本。ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	にぶい橙　7.5YR6/4	
1112	弥生土器	壺	頸部削り出し突帯にヘラ描き沈線１本。ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	橙　5Y6/6	
1113	弥生土器	壺	削り出し突帯にヘラ描き沈線２本。ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	にぶい黄橙　7.5Y7/4	
1114	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。ミガキ。	ミガキ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1115	弥生土器	甕	口唇部刻目。口縁部貼付刻目突帯。ナデ。	ユビオサエのちナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1116	縄文土器	深鉢	貼付刻目突帯。		褐　7.5YR4/4	
1117	弥生土器	壺	胴部ミガキ？。	ナデ？。	灰白　2.5Y8/2	
1118	弥生土器	壺	胴部ミガキ？。底部側面細く浅いヘラ描き沈線。		にぶい橙　5YR6/4	
1119	弥生土器	甕	底部側面ユビオサエ。		灰褐　7.5YR4/2	

第247図　溝５出土遺物(2)（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1120	弥生Ⅰ器	壺	頸部凹線による段。胴部沈線による段。細いヘラ描き沈線文。	口縁部細いヘラ描き沈線。ヨコミガキ。	灰白　5YR8/2	

第248図　溝６出土遺物（1/4・1/2・1/3）

(8)　水　　田

水田１（第276・277図）

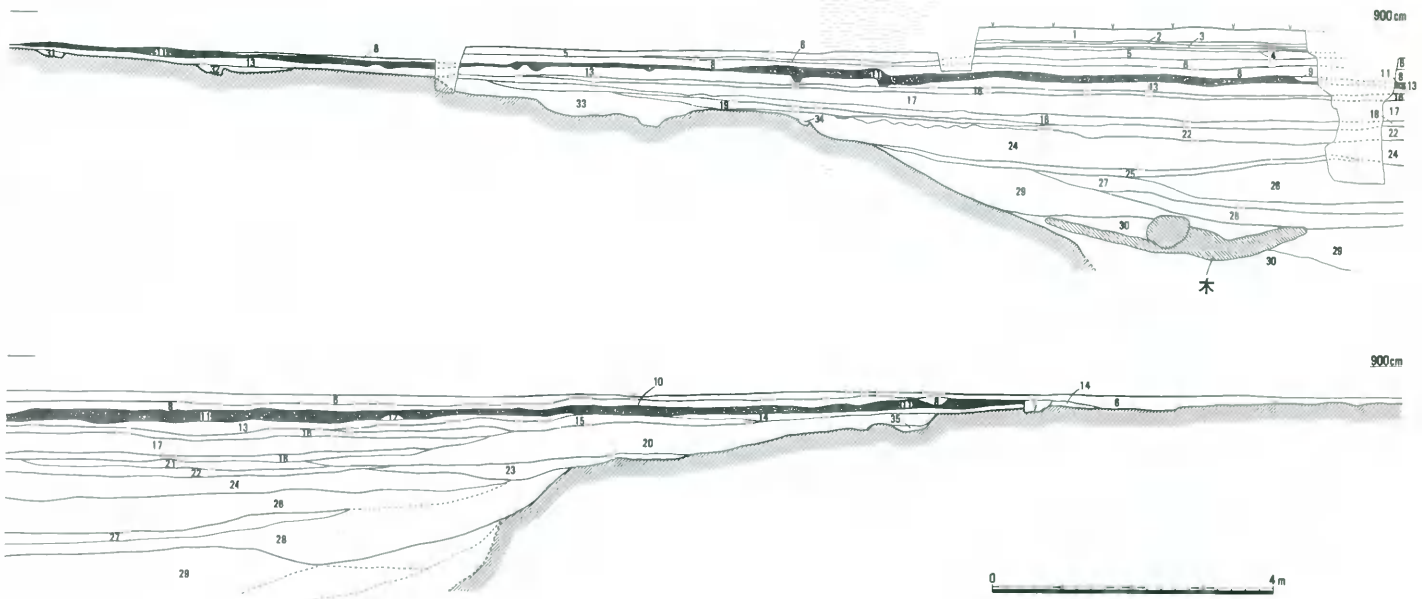
第３低位部(北)に位置するＥＮ区の谷状部分に堆積した弥生時代前期と考えられる土層を、プラント・オパール分析の結果(付載参照)から水田層と想定し、水田１としている。検出されたのは、ＥＮ区の南西部の第３低位部にあたる場所で、第276図のＡ－Ａ断面図である第277図の21層が水田１の土層である。発掘調査時においては、この土層が水田層であるとの認識がなかったため、畦畔の検出など水田跡としての意識的な調査は実施できていない。この水田層が広がる範囲については、明確ではないが、幅５～６ｍ、長さ40ｍの東西に長い帯状の範囲が想定できる。北側の微高地との比高差は約90cmである。この水田層の時期は、第277図の19～23層から出土した少量の土器が弥生時代前期前葉から中葉段階のものであることから、断定はできないがこの時期と考えておきたい。　　（平井）

(9)　河　　道

河道１（第129・249～251図）

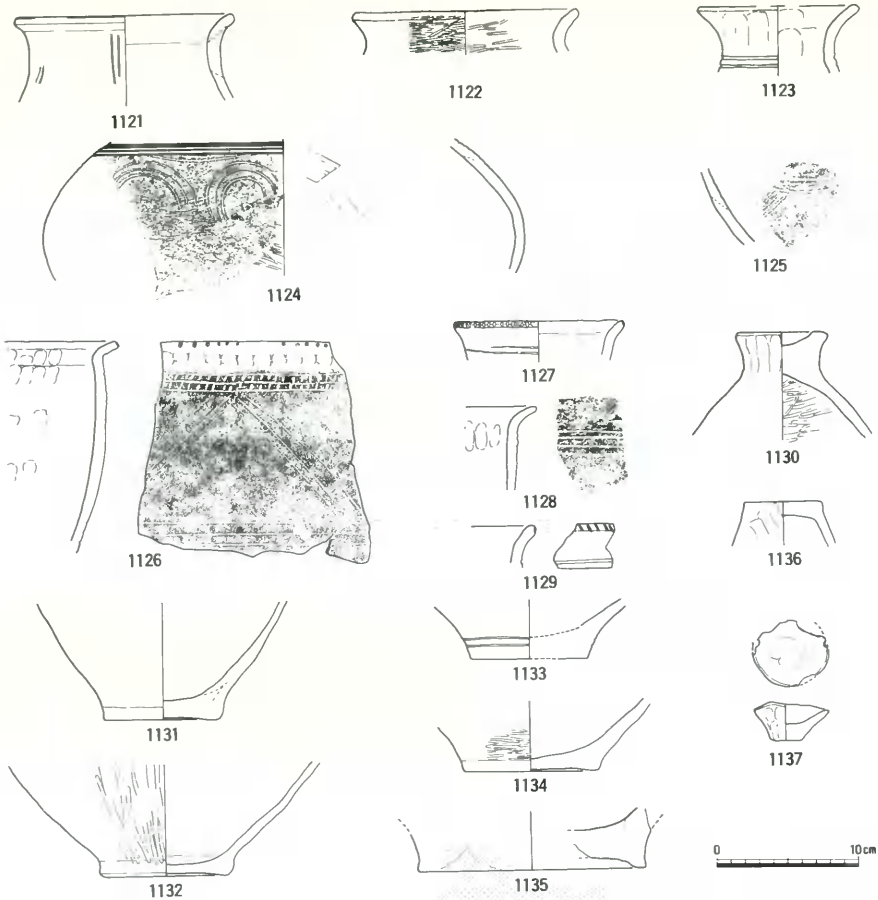
第１微高地と第２微高地の間に位置する。未調査部分が多く全容は明らかでないが、大きく東西に蛇行しながら北はＢＯ２区からＴＤ区の東端、ＫＹ、ＨＦ区の西端を通り、Ｈ10区へ抜けていく。河道内からは縄文時代晩期以降の遺物が出土している。埋没後水田として利用されているため当期における正確な規模は不明である。堆積層のうち、29層以下は前節で概述したように縄文時代晩期に遡ると考えられ、弥生時代前期以降堆積したと考えられる層は28層以上である。そのうち弥生時代前期の土器は20層以下で出土しており、主に26～28層に含まれていた。図示した土器のうち出土層位のわかるものは少ないが**1124**・**1132**は27層から、**1130**・**1134**・**Ｗ２**は28層から出土している。弥生時代前期中葉と考えられる。

1121～**1125**は壺で、**1121**は頸部に沈線を垂下させ、**1124**には重弧文を、**1125**には山形文が複数の沈線で描かれている。**1126**～**1128**は甕でいずれも頸部に沈線を巡らしている。**1126**・**1127**の口唇部には刻目が施されている。**1130**・**1136**は蓋、**1131**～**1135**は底部である。**1133**には底部外面に２本の沈線が



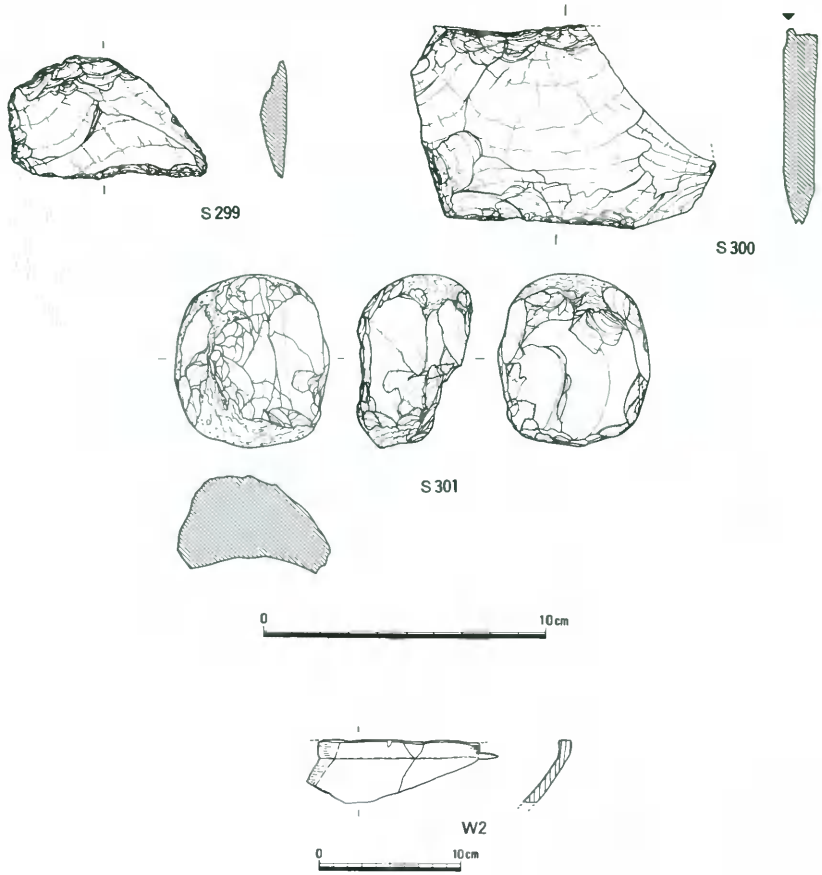
1．黄灰色砂質土（現耕作土）
2．にぶい黄色砂質土
3．浅黄色砂質土
4．黄褐色砂質土
5．暗灰黄色粘質土
6．灰黄褐色粘質土
7．暗褐色粘質土
8．黒褐色粘質土
9．褐灰色粘質土
10．灰色粘土
11．褐灰色粘質土（水田）
12．黄灰色粘土
13．灰褐色粘質土
14．灰褐色粘質土
15．薄茶灰色粘質土
16．濃茶灰色粘質土
17．灰褐色粘質微砂
18．灰黄褐色粘質微砂
19．にぶい黄褐色粘質土
20．茶褐色粘質微砂
21．茶灰オリーブ色微砂と粘質土の混層
22．灰オリーブ色微砂
23．黄灰オリーブ色粘質土
24．灰色粘質土
25．オリーブ黒色粘質土
26．灰色粘質土（炭含む）
27．黒色粘土
28．灰色粘土
29．黒灰～茶灰色砂まじり粘土
30．灰色粘土まじり粗砂
31．明黄褐色砂質土
32．灰黄褐色粘質土
33．にぶい黄橙色粘質土
34．褐灰色粘質土
35．茶褐色粘質微砂

第249図　河道1断面図（1/80）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1121	弥生土器	壺	頸部細いヘラ描き沈線文、ナデ	ナデ。	灰黄　2.5Y7/2	
1122	弥生土器	壺	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	灰黄褐　10YR6/2	
1123	弥生土器	壺	頸部ヘラ描き沈線２本。タテミガキ？。		灰白　10YR8/2	
1124	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線４本。ミガキ。	板ナデ？。	灰褐　7.5YR6/2	外面煤。
1125	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、沈線文。		明赤褐　5YR5/6	
1126	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヘラ描き沈線、刺突文　ハケメ。	ユビオサエ、ナデ。	浅黄橙　7.5YR8/4	
1127	弥生土器	甕	口唇部刻目　ナデ。	ナデ。	黒　10YR2/1	外面煤。
1128	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線４本	ユビオサエ、ナデ。	灰白　2.5Y8/2	
1129	弥生土器	甕	口唇下端部板による刻目、ヘラ描き沈線。		にぶい赤橙　10R6/4	
1130	弥生土器	蓋？		ミガキ。	赤褐　10YR5/4	
1131	弥生土器	壺	ミガキ？。		灰白　10YR8/2	
1132	弥生土器	壺	胴部タテミガキ。底部ミガキ。	ナデ。	灰黄　2.5Y6/2	
1133	弥生土器	壺？	底部側面ヘラ描き沈線２本。	ナデ。	灰白　10YR8/2	
1134	弥生土器	壺	胴部ヨコミガキ。底部ミガキ。	ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/3	
1135	弥生土器	壺	底部側面ナデ。	ミガキ？。	にぶい黄橙　10YR7/3	
1136	弥生土器	蓋	板ナデ。	ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1137	弥生土器	鉢	ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ。	灰白　2.5Y8/2	

第250図　河道１出土遺物（弥生時代前期１）（1/4）



第251図　河道１出土遺物（弥生時代前期２）（1/2・1/4）

巡らされている。**1137**は盃状の土器で口縁は水平でなく、内外両面に指頭圧痕を多く残している。**S 300**は上面に平坦面があるが、その一方の角にのみ敲打痕を残している。上下とも剥離が進行しているので楔形石器に含めた。**W 2** は椀形の木製品で両面とも平滑に仕上げられている。細片しか出土していないが比較的径が大きくなるようで、皿状になる可能性もある。（久保）

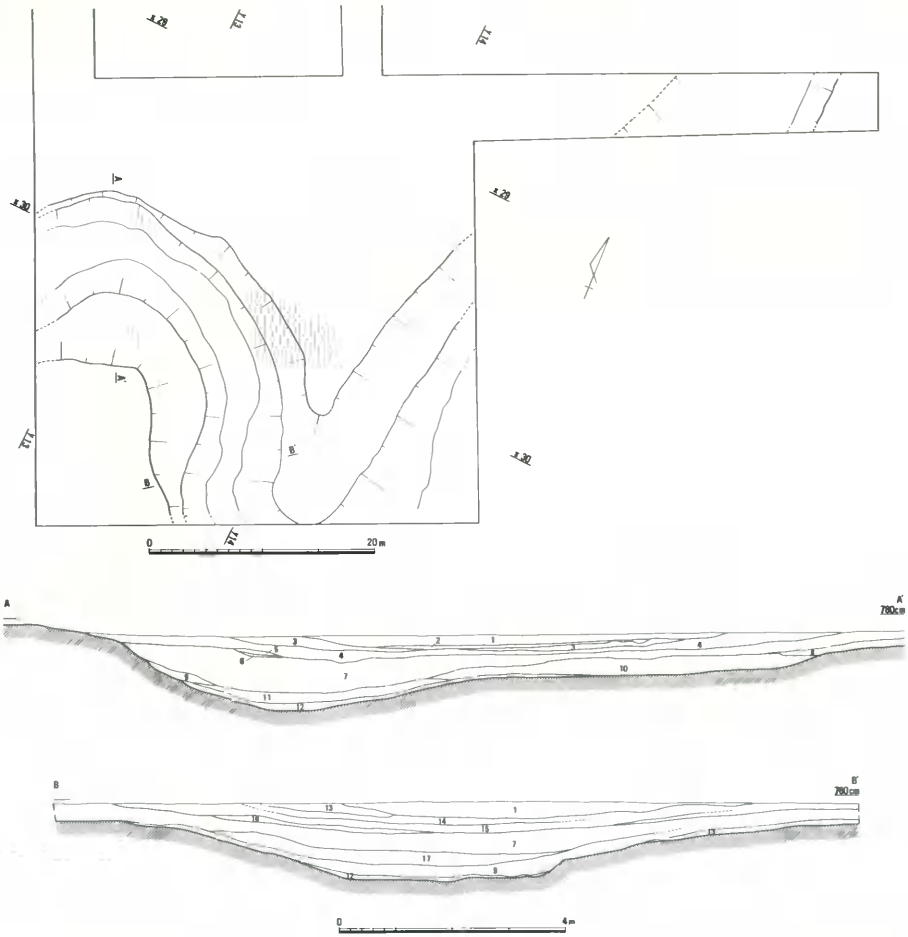
河道２（第252～254図、図版13）

ここでは、弥生時代前期から中期前葉の遺物を包含する層位について記述する。

溝の形状輪郭は、前段階の縄文時代晩期をほぼ踏襲しており、ＪＯ区ではＳ字状に蛇行している。また、縄文時代のものは調査範囲が狭く不明であったものの、この弥生時代前期の段階の河道の続きがＨ17区で検出された。第253図の土層断面図に示すように、検出面からの深さ150cmを測り、海抜高では6.1ｍ付近を底とする。底面には黒色粘土層（12層）が堆積し、水流が滞留し、枯渇化して腐植が

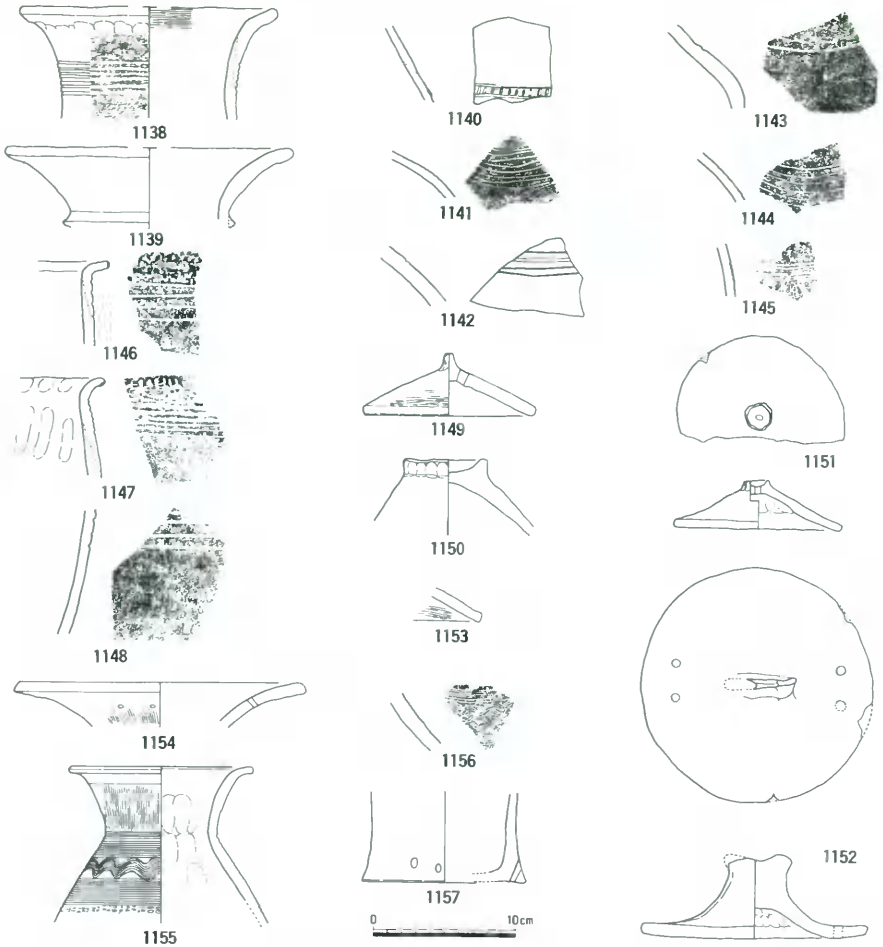
進行した段階が存在したことを想像させる。また、その上位には植物遺体を多量に包含するシルト状の堆積が認められた。弥生時代前期の段階においても河道は埋没しきっておらず、継続している。

出土遺物は小片が多く、量も前段階の縄文時代晩期および、次段階の弥生時代中期後葉のものと比較して少ない。図示した出土遺物は、**1138**～**1157**が弥生時代前期～中期前葉のものである。なお、**1158**～**1160**は、同一層位から出土した縄文時代晩期後半の突帯文土器であり、この時期まで12層の堆積が遡る可能性は残される。**C51**はスプーン形をとる土製品であるが類例がなく不明である。　（大橋）



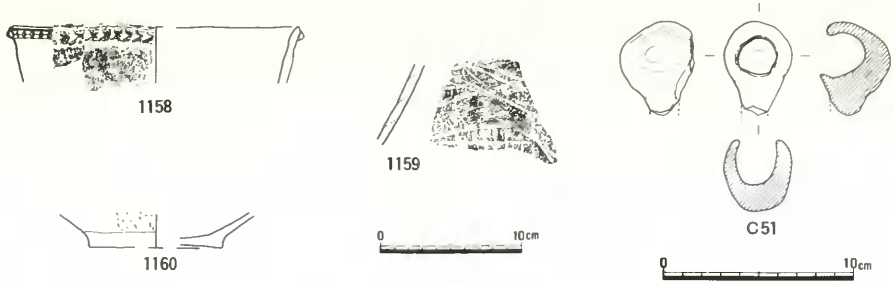
1．弥生時代中期中葉～後葉の河道2
2．灰色粘土
3．薄灰黄色微砂
4．灰～灰黄色粘土まじり微砂
5．暗灰色粘土まじり微砂
6．明灰色微砂
7．灰～暗灰色粘土
（炭を含む）
8．灰茶色粘質微砂
9．灰色微砂まじり粘土
10．灰オリーブ～暗灰色微砂まじり粘土
（炭を含む）
11．暗～黒茶褐色シルト質粘土
（植物遺体を多く含む）
12．黒色粘土
13．灰～茶色微砂（炭を含む）
14．灰オリーブ～茶灰色粘土まじり微砂
15．黒灰～暗茶灰色微砂まじりシルト
16．青灰色微砂
17．暗青灰色粘土

第252図　河道2（1/500・1/100）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1138	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線６本。	ヨコミガキ。	浅黄橙　10YR7/2	
1139	弥生土器	壺	頸部貼付突帯。ナデ。	ナデ。	橙　5YR6/6	
1140	弥生土器	壺？	ヘラ描き沈線、刺突文。	ナデ。	灰黄　2.5Y7/2	
1141	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。ミガキ。	ナデ。	浅黄　2.5Y7/3	
1142	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線　ミガキ。	ナデ。	橙　2.5YR6/6	
1143	弥生土器	壺	段。ヘラ描き沈線。ミガキ。		灰黄　2.5Y6/1	
1144	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線	ナデ？。	にぶい橙　7.5YR7/4	
1145	弥生土器	壺？	クシ描き平行線文、山形文。		灰黄褐　10YR4/2	
1146	弥生土器	甕	口唇部刻目。胴部ヘラ描き沈線４本。	ナデ。	橙　5YR6/6	
1147	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線７本。	ユビオサエ、ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/3	
1148	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線。	ナデ。	橙　5YR6/6	
1149	弥生土器	蓋	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	暗灰黄　2.、5Y5/2	
1150	弥生土器	蓋？	ミガキ。	ナデ。	明赤褐　5YR5/6	
1151	弥生土器	蓋	ナデ。	ナデ。	灰黄褐　10YR4/2	
1152	弥生土器	蓋	ユビオサエ、ナデ、一部ミガキ。	ユビオサエ、ナデ。	にぶい黄　2.5Y6/3	
1153	弥生土器	蓋	ミガキ。	ミガキ。	灰黄褐　10YR5/2	
1154	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ。穿孔。	ヨコナデ。	灰黄褐　10YR6/2	
1155	弥生土器	壺	頸部ハケメ。胴部上半クシ描き平行線文、波状文、刺突文。	口縁部ヨコナデ。	褐灰　10YR5/1	
1156	弥生土器	壺	クシ描き平行線文、波状文。		にぶい橙　7.5YR7/3	
1157	弥生土器	鉢	ミガキ。穿孔２孔１対？。	ナデ？。	灰黄褐　10YR5/2	

第253図　河道２出土遺物（弥生時代前期～中期前葉１）（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外	特徴 内面	色調	備考
1158	縄文土器	深鉢	口唇部貼付刻目突帯。ナデ。	ナデ。	黄灰　2.5Y4/1	
1159	縄文土器	深鉢	１本ずつの条痕	ナデ。	灰黄褐　10YR5/2	
1160	縄文土器	深鉢	ケズリのちナデ？。	ナデ？	灰黄　2.5Y7/2	

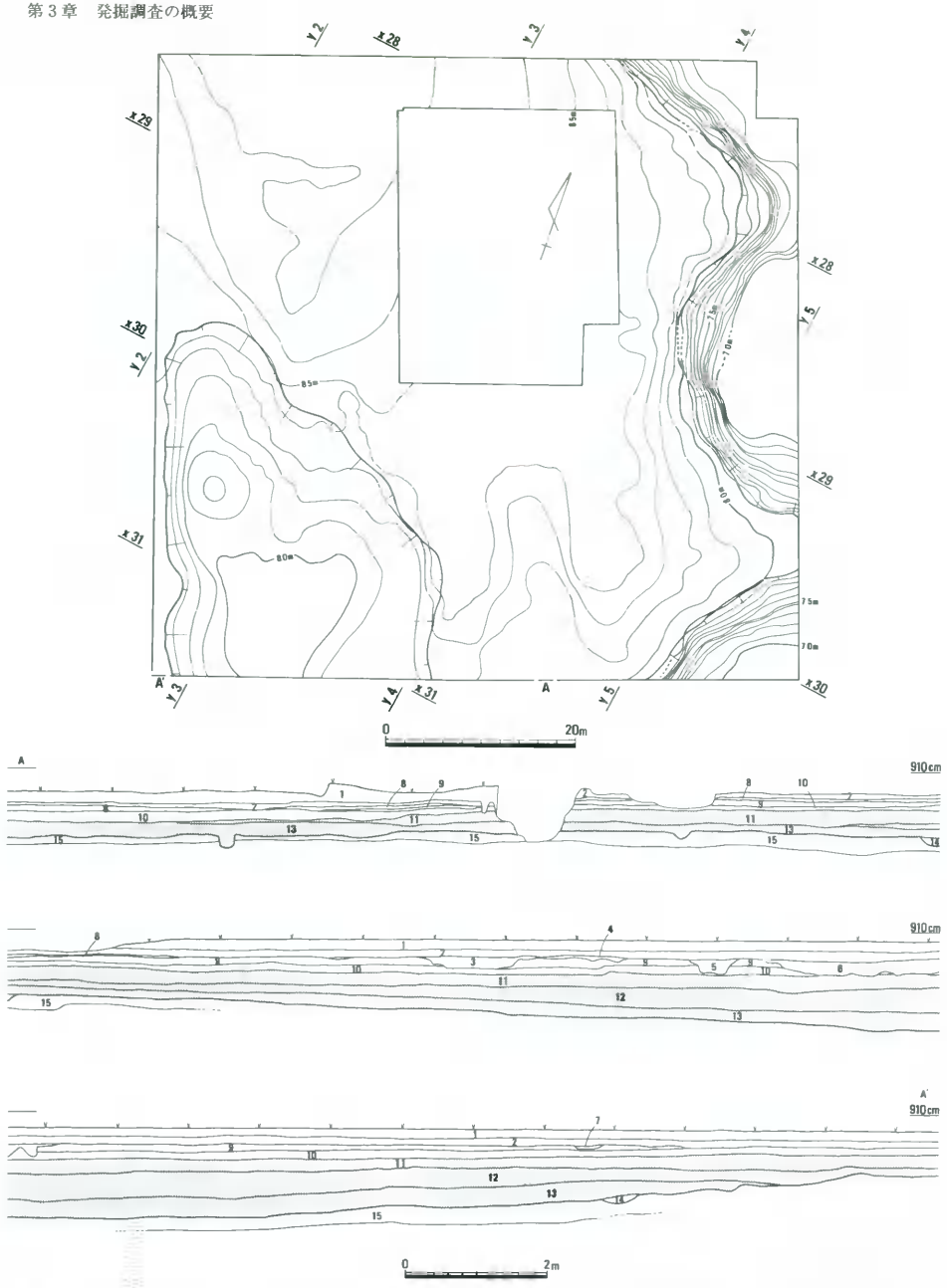
第254図　河道２出土遺物（弥生時代前期～中期前葉２）（1/4・1/3）

⑽　その他の遺構・遺物

第１低位部と第１微高地（第255～267図、図版14）

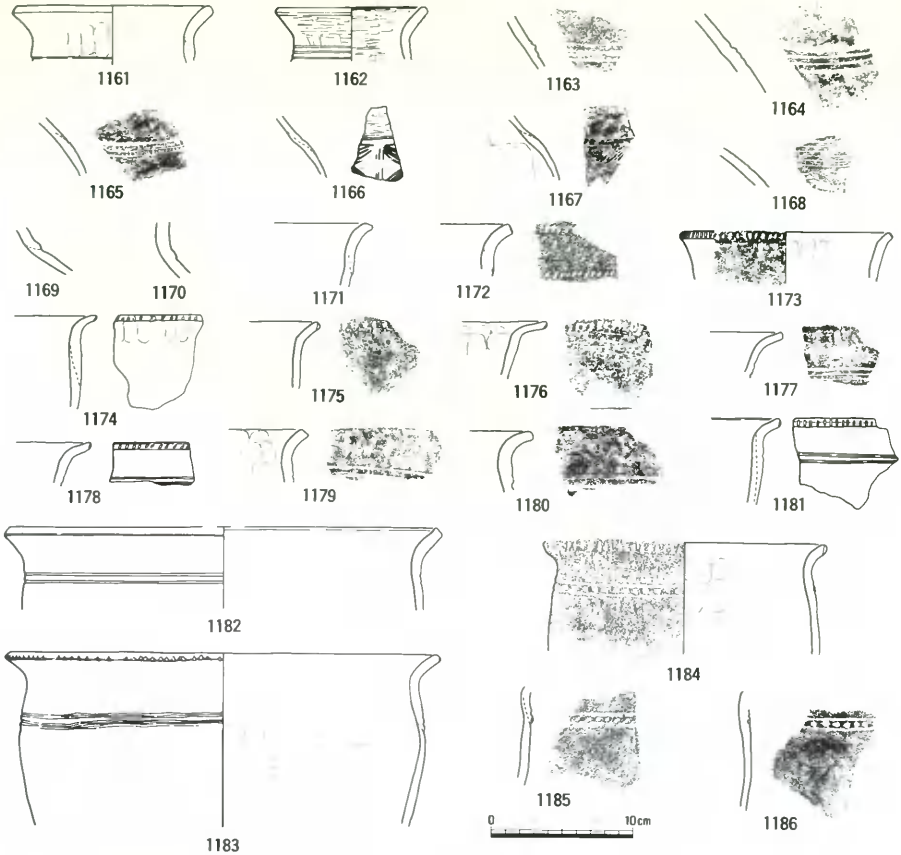
全調査区の南西部分にあたる。前節でも述べているように微高地と低位部の境界は明瞭でなく、南西角の凹地を呈する部分を低位部とし、実線でその範囲を示した。微高地上面と低位部底面の比高差は70～80cmを測る。弥生時代前期の遺物は主に11～13層から大量に出土しており、この３層を弥生時代前期包含層と考えている。調査区南壁の断面図をみると西には13層が拡がり、東には12・13層が拡がるようであるが、当調査区は複数に分割されているうえ調査担当者や調査期間も異なるため、各区での包含層の対応関係を明確に捉えることはできなかった。また各層ごとに掘り分けることもできなかったので、低位部内にあたるＴＤ６区、Ｈ13区、Ｈ12区南端の基盤直上の遺物のみ包含層下層出土遺物とし、それ以外は包含層上層出土遺物として一括して扱った。前者を第256～258図に、後者を第259～266図に図示している。また第267図は出土地点のよくわからないものを図示した。

下層出土遺物には壺、甕、蓋などがあり、**1189～1195**は底部である。細片が多く、径の復元できる個体はあまりなかった。傾きも不詳なものが多い。**1161～1170**は壺で、**1161**のように接合部を利用した段を有するものが存在する一方、**1169**のように段の上下にナデを加えて削り出し突帯状にしたものもみうけられる。**1163～1168**は肩部片で、段と沈線のみのものや木葉文、重弧文を施したものがみられる。**1165**は平行沈線間に刺突文を充填している。**1171～1186**は甕で、**1173**以外はすべて如意状口縁を有する。また段の上に刻みを施すもの、口唇部に刻みを施すが体部は無文のもの、平行沈線などの文様をもつものなどがみられる。資料点数も少なく細片であるため刻みの有無やその位置、体部文様の有無、口縁の角度などに相関関係を認めることはできなかった。**1185**は甕の体部片で粘土接合部の段の上下をヘラによる沈線で際どりし、突帯状にした上に円形の刺突をしており、みかけ上は刻目突帯を意識しているようにみうけられる。**1189・1192・1194**は外面が比較的平滑で、体部上方への開きも大きく壺と考えられる。それ以外は甕の底部と考えられ、指頭圧痕が顕著である。石器には石鏃、打製石鍬、敲石などがある。**Ｓ305**は一つの円礫が中央部分で割れた後、各々をまた個別の敲石として利用したようである。土製品はすべて土器片を再利用した円板状のもので穿孔は認められなかった。



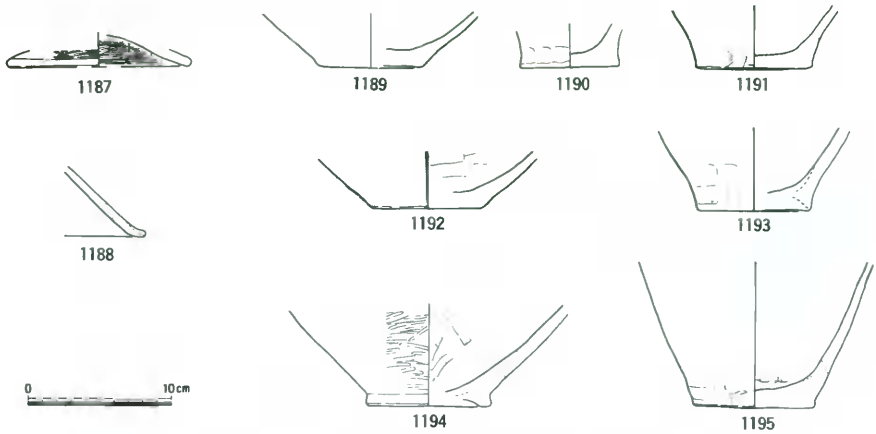
1．灰褐色微砂（現耕土）
2．明黄灰褐色微砂（中～近世耕土）
3．灰黄褐色粘質微砂（古代溝）
4．にぶい黄褐色粘質微砂（古代溝）
5．にぶい黄褐色粘質微砂（古代溝）
6．淡茶灰色粘質微砂（古代溝）
7．淡褐灰色粘質微砂（古代溝）
8．明灰褐色粘質微砂（古代水田層）
9．暗灰茶色粘質土（古代水田層）
10．暗茶褐色粘質土
11．暗茶色粘質土
12．灰茶褐色粘質土
13．暗茶褐色粘質微砂
14．褐灰色粘質土
15．明黄褐色粘質微砂

第255図　第１微高地および第１低位部（1/600・1/80）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1161	弥生土器	壺	頸部沈線による段。	ナデ。	橙　7.5YR6/8	H12区
1162	弥生土器	壺	頸部ヘラ描き沈線３本。ミガキ。	ミガキ。	灰白　7.5YR8/2	TD6区
1163	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線３本。ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	褐灰　10YR6/1	H12区
1164	弥生土器	壺	沈線による段。ヘラ描き沈線３本。	ミガキ？。	にぶい橙　7.5YR7/4	TD6区
1165	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線３本。竹管文。	ミガキ？。	灰白　10YR7/1	〃
1166	弥生土器	壺	ヘラ描き有軸木葉文。ミガキ。	ナデ。	にぶい橙　5YR7/4	H12区
1167	弥生土器	壺	ヘラ描き有軸木葉文。ミガキ。	ユビオサエ、ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/4	TD6区
1168	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線６本。沈線文。	ナデ？。	にぶい黄橙　10YR6/3	〃
1169	弥生土器	壺	段。	ナデ？。	灰白　2.5Y8/11	〃
1170	弥生土器	壺	削り出し突帯。ミガキ。	ミガキ。	褐灰　10YR4/1	〃
1171	弥生土器	甕	段。	ナデ？。	暗灰黄　2.5Y5/2	〃
1172	弥生土器	甕	口唇部刻目。口縁下位にヘラ描き沈線と刺突文。	ナデ。	灰白　10YR7/1	H12区
1173	弥生土器	甕	口唇部刻目。ナデ。	ユビオサエ、ナデ。	にぶい橙　7.5YR6/4	〃
1174	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部ユビオサエ		にぶい黄橙　7.5YR7/4	TD6区
1175	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ナデ。		淡赤橙　2.5YR7/4	H12区
1176	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ナデ。	ユビオサエのちナデ	灰褐　5YR5/2	TD6区
1177	弥生土器	甕？	ヘラ描き沈線３本。	ナデ？	灰白　2.5Y8/2	〃
1178	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線。		淡黄橙　7.5YR8/3	〃
1179	弥生土器	甕？	ヘラ描き沈線。	ユビオサエ、ナデ。	淡黄橙　10YR8/3	〃
1180	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線。		にぶい褐　7.5YR5/3	H12区
1181	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線２本。		灰白　10YR8/2	TD6区
1182	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線２本、ナデ。	ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/3	H12区
1183	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ナデによる段。ヘラ描き沈線	ナデ。	灰褐　7.5YR6/2	〃
1184	弥生土器	甕	口唇部下端深い刻目。ヘラ描き沈線２本と円形刺突文。	ナデ。	橙　5YR6/8	〃
1185	弥生土器	甕	段とヘラ描き沈線と刺突文。	ナデ。	にぶい橙　5YR6/4	〃
1186	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線２本の間に円形刺突文。		灰白　10YR8/2	〃

第256図　第１低位部および第１微高地出土遺物（包含層下層１）（1/4）



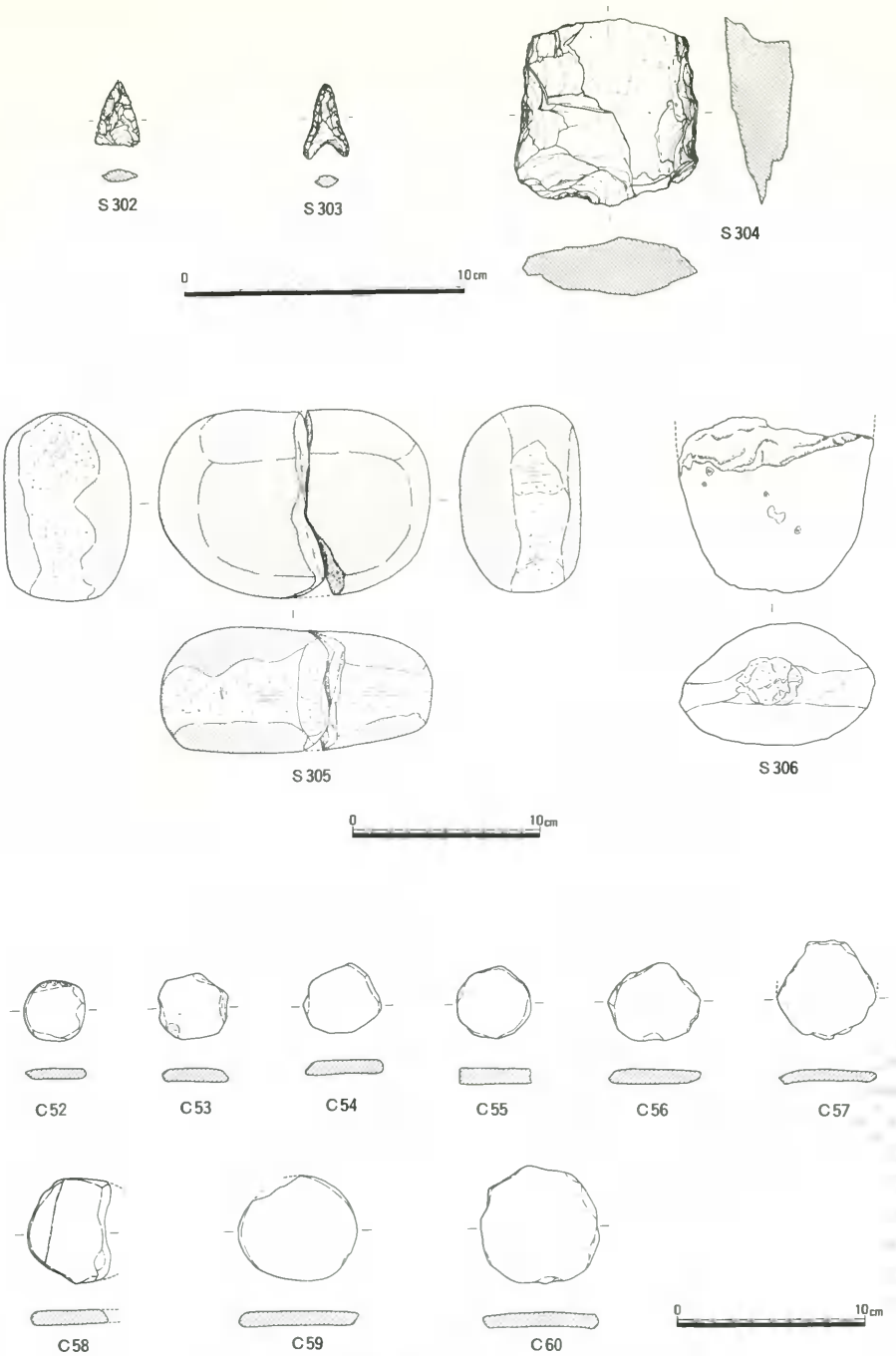
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1187	弥生土器	蓋	ミガキ。	ミガキ。	暗灰黄　2.5Y5/2	TD6区
1188	弥生土器	蓋？			明褐灰　7.5YR7/2	H12区
1189	弥生土器	壺	ナデ。	ナデ。	灰白　10YR8/2	〃
1190	弥生土器	甕	底部調面ユビオサエ		灰白　10YR8/1	TD6区
1191	弥生土器	甕	ナデ。	ナデ。	にぶい橙　5YR7/4	H12区
1192	弥生土器	壺	ミガキ。	板ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/4	TD6区
1193	弥生土器	壺？	ミガキ。		にぶい橙　7.5YR8/3	〃
1194	弥生土器	壺	胴部ヨコミガキ。	板ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/3	H12区
1195	弥生土器	甕	ナデ？。	ナデ。	灰白　10YR8/1	〃

第257図　第１低位部および第１微高地出土遺物（包含層下層２）（1/4）

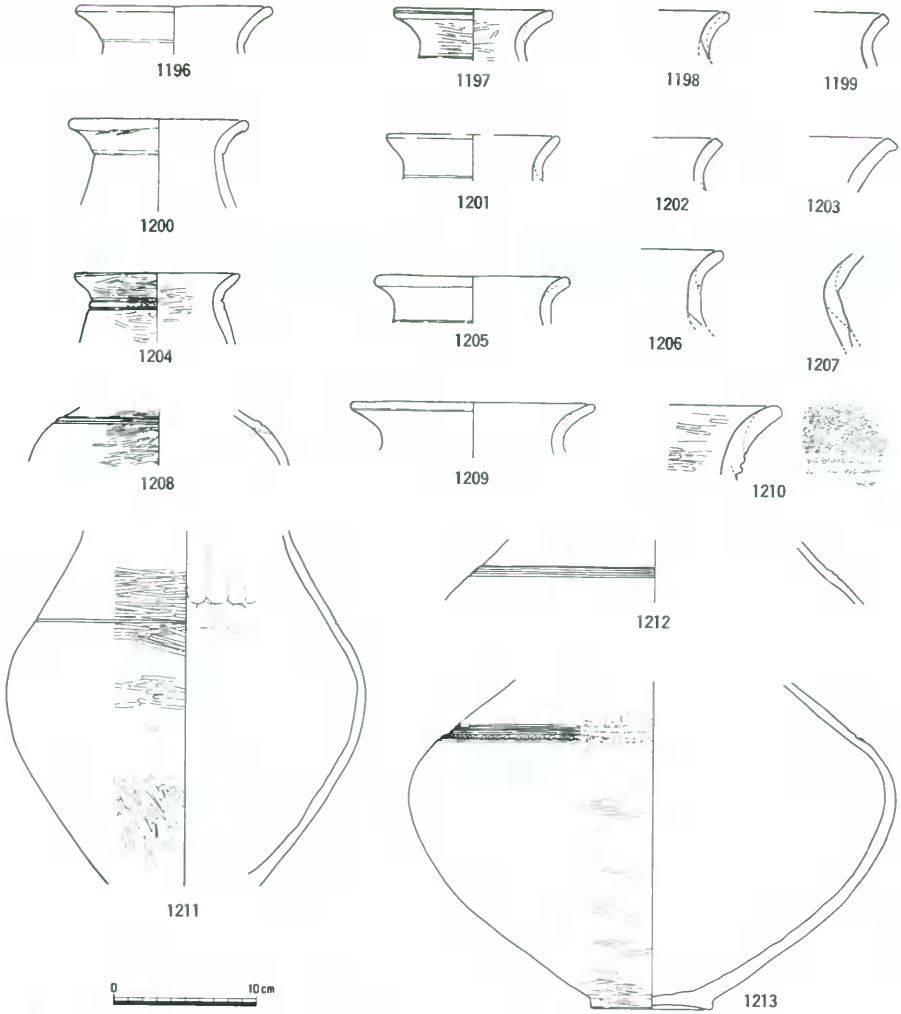
紡錘車の未製品になる可能性もあるがここでは円板状土製品としている。

上層出土土器には壺、甕、鉢、高杯、蓋などがあり**1296**～**1310**は底部片である。**1292**・**1293**は傾き不詳で器種も判らない。**1293**には内外両面とも口縁端部から５㎜下に浅い沈線を巡らしている。**1196**～**1232**は壺で、口縁部には段をもつもの、沈線を巡らすもの、無文のもの、段と沈線を併用するものなどがみられる。**1198**は外面にミガキを施す前に沈線を巡らしており、沈線間はミガキが及んでいないため縦方向の刷毛目を残している。**1199**は口唇部外面に沈線を施している。体部片には段および平行直線文を施すもの、縦に沈線を垂下するもの、ヘラ描き文をもつもの、貼付突帯をもつものがある。**1230**は突帯上に刻目を施している。**1211**・**1213**は**1260**と共にＴＤ４区で一ケ所に集中して出土しており、一括性を有する資料と考えられる。**1211**のプロポーションは縦に細長く卵形に近いが**1212**はかなり胴部のはった偏平なもので、縄文時代晩期の浅鉢のように小さく薄手の底部を有している。**1236**～**1259**・**1262**～**1291**は甕で、無文のものや口唇部に刻みを施すが頸部は無文のもの、突帯を付すもの、ヘラ描きや刺突による文様帯をもつものがある。第264図に図示したように中期前葉に比定される遺物も上層から出土しているが第11層上面に土壙95が掘削されており、上面から切り込まれた遺構に伴う可能性が考えられる。いずれにせよ包含層の下限を示す資料のひとつとなる。土製品には下層と同じく土器片を転用した円板状土製品の他、**C66**のように本来から紡錘車として作られたものも出土している。石器には石鏃、石錐、楔形石器、スクレイパー、打製石鍬があり、**S319**・**320**は太型蛤刃石斧の未製品と考えられる。

下層と上層を比較すると、上層出土の壺や甕に貼付突帯をもつものがみられ、甕の頸部の平行沈線

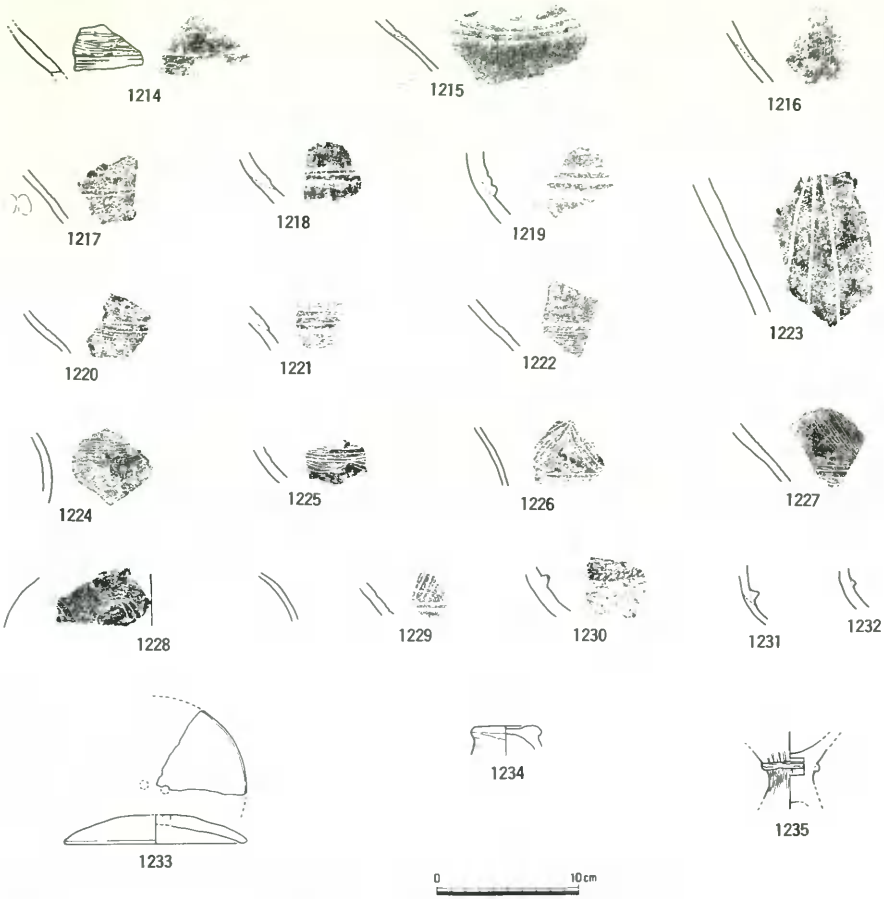


第258図　第１低位部および第１微高地出土遺物（包含層下層３）（1/2・1/3）



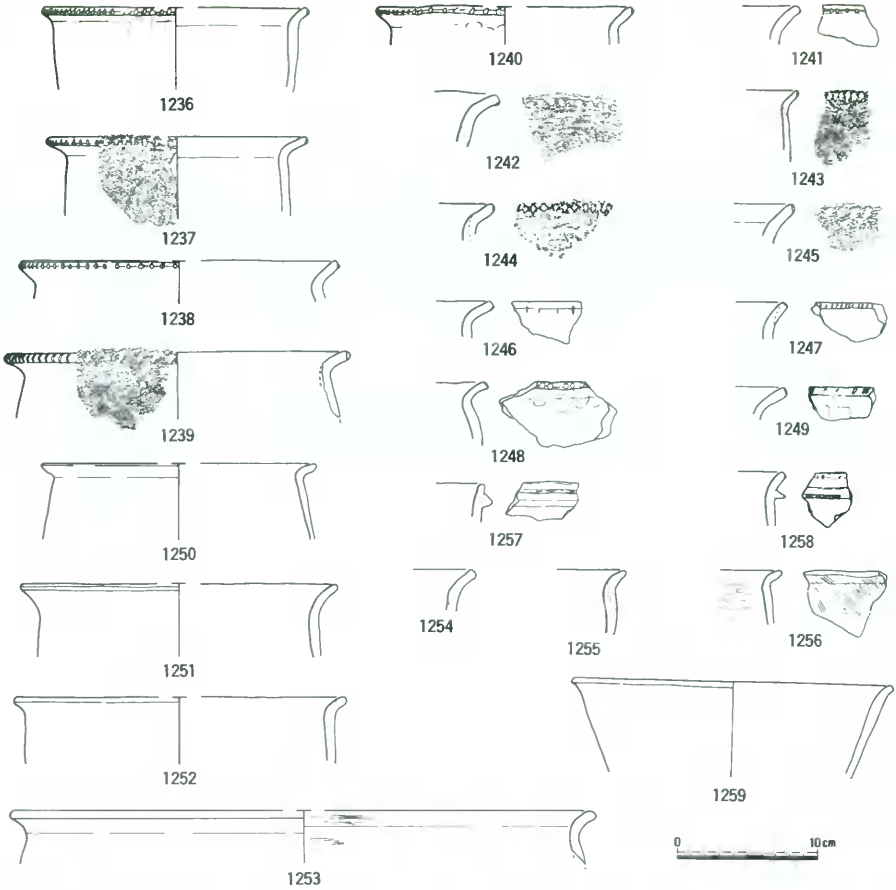
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1196	弥生土器	壺	頸部に段。		明赤褐　5YR5/8	TD5区
1197	弥生土器	壺	口縁部、頸部ヘラ描き沈線。ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	にぶい橙　7.5YR6/4	H12区
1198	弥生土器	壺	ナデ。	ナデ。	橙　10YR8/2	〃
1199	弥生土器	甕	ナデ。	ナデ？。	浅黄橙　10YR8/4	〃
1200	弥生土器	壺	粘土紐接合部と沈線による段。		橙　5YR7/6	TD5区
1201	弥生土器	壺	頸部ヘラ描き沈線。		灰白　10YR8/2	TD4区
1202	弥生土器	甕	口唇部細いヘラ描き沈線。	ナデ。	にぶい橙　7.5YR6/4	H12区
1203	弥生土器	高杯？	ヨコミガキ。	ナデ？。	褐灰　10YR5/1	TD4区
1204	弥生土器	高杯？	ヘラ描き沈線２本。ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	にぶい橙　7.5YR7/3	〃
1205	弥生土器	高杯？	頸部ヘラ描き沈線？。	ミガキ？	明赤褐　5YR5/6	H12区
1206	弥生土器	鉢？			にぶい橙　7.5YR7/4	〃
1207	弥生土器	壺	頸部沈線と段		橙　5YR6/6	〃
1208	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線２本。ミガキ	ユビオサエ、ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/3	TD4区
1209	弥生土器	壺	ミガキ。	ナデ。	灰白　10YR8/1	〃
1210	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線１本と段。ナデ。	ヨコミガキ。	灰褐　7.5YR5/2	〃
1211	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線１本。ミガキ	ユビオサエ、ナデ。	淡黄　2.5Y8/3	〃
1212	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線２本とケズリによる段。	ナデ。	にぶい橙　5YR7/4	〃
1213	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線４本と刻目。ミガキ。		にぶい黄橙　10YR7/3	〃

第259図　第１低位部および第１微高地出土遺物（包含層上層１）（1/4）



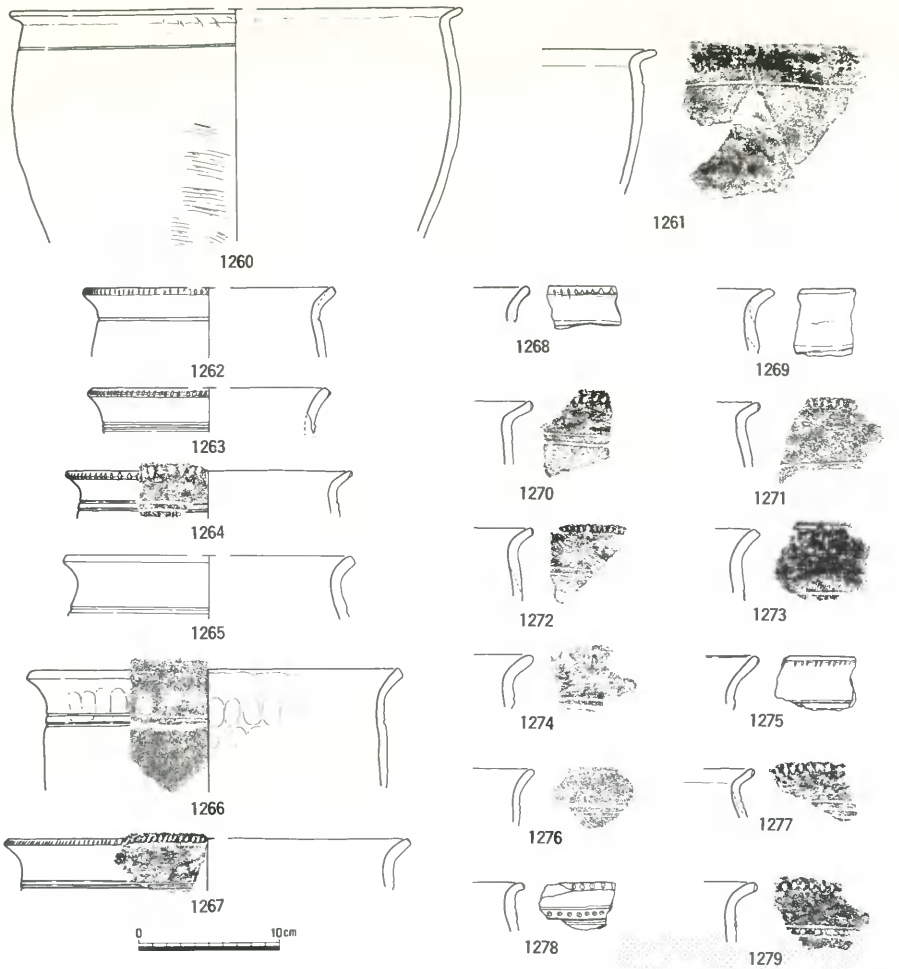
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1214	弥生土器	壺	細く浅いヘラ描き沈線４本、ミガキ。	ナデ？。	にぶい橙　7.5YR7/4	TD3区
1215	弥生土器	壺	削り出し突帯？にヘラ描き沈線１本。	ナデ？。	灰白　2.5Y8/2	TD4区
1216	弥生土器	壺	細いヘラ描き沈線文。	ナデ。	にぶい橙　7.5YR6/4	H12区
1217	弥生土器	壺	ケズリによる段とヘラ描き沈線１本。	ユビオサエ、ナデ。	橙　5YR6/6	TD5区
1218	弥生土器	壺？	段とヘラ描き沈線２本。	ミガキ。	灰白　2.5Y8/3	H13区
1219	弥生土器	壺	粘土紐接合部の段とヘラ描き沈線２本。ヨコミガキ。		明赤褐　5YR5/6	H12区
1220	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線３本。段？。		浅黄橙　10YR8/3	TD5区
1221	弥生土器	壺	粘土紐接合部の段とヘラ描き沈線３本。		橙　7.5YR7/6	H12区
1222	弥生土器	壺	ミガキによる段とヘラ描き沈線４本。	ナデ。	にぶい褐　7.5YR5/3	〃
1223	弥生土器	壺？	ヘラ描き沈線文。	ナデ。	明褐　7.5YR5/6	TD5区
1224	弥生土器	壺	細いヘラ描き沈線、沈線文。	ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	〃
1225	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線４本、沈線文。	ヨコミガキ。	にぶい橙　7.5YR7/4	H12区
1226	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、無軸木葉文。	ナデ。	橙　7.5YR7/6	〃
1227	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、無軸木葉文。	ミガキ？。	にぶい橙　7.5YR6/4	TD6区
1228	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文、ミガキ。	ナデ。	褐灰　10YR6/1	TD4区
1229	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、沈線文。	ナデ？。	にぶい黄橙　10YR7/2	H12区
1230	弥生土器	壺？	貼付刻目突帯。	ナデ？。	にぶい橙　5YR7/3	TD4区
1231	弥生土器	壺？	貼付突帯。		灰白　7.5YR8/2	〃
1232	弥生土器	壺	貼付突帯。ナデ。	ナデ。	橙　7.5YR7/6	H12区
1233	弥生土器	蓋	穿孔２カ所。		黒褐　2.5Y3/1	TD2区
1234	弥生土器	蓋	板ナデ。		にぶい橙　7.5YR6/4	H12区
1235	弥生土器	高杯	貼付突帯。タテミガキ。	杯部ミガキ。	にぶい橙　5YR7/4	TD4区

第260図　第１低位部および第１微高地出土遺物（包含層上層２）（1/4）



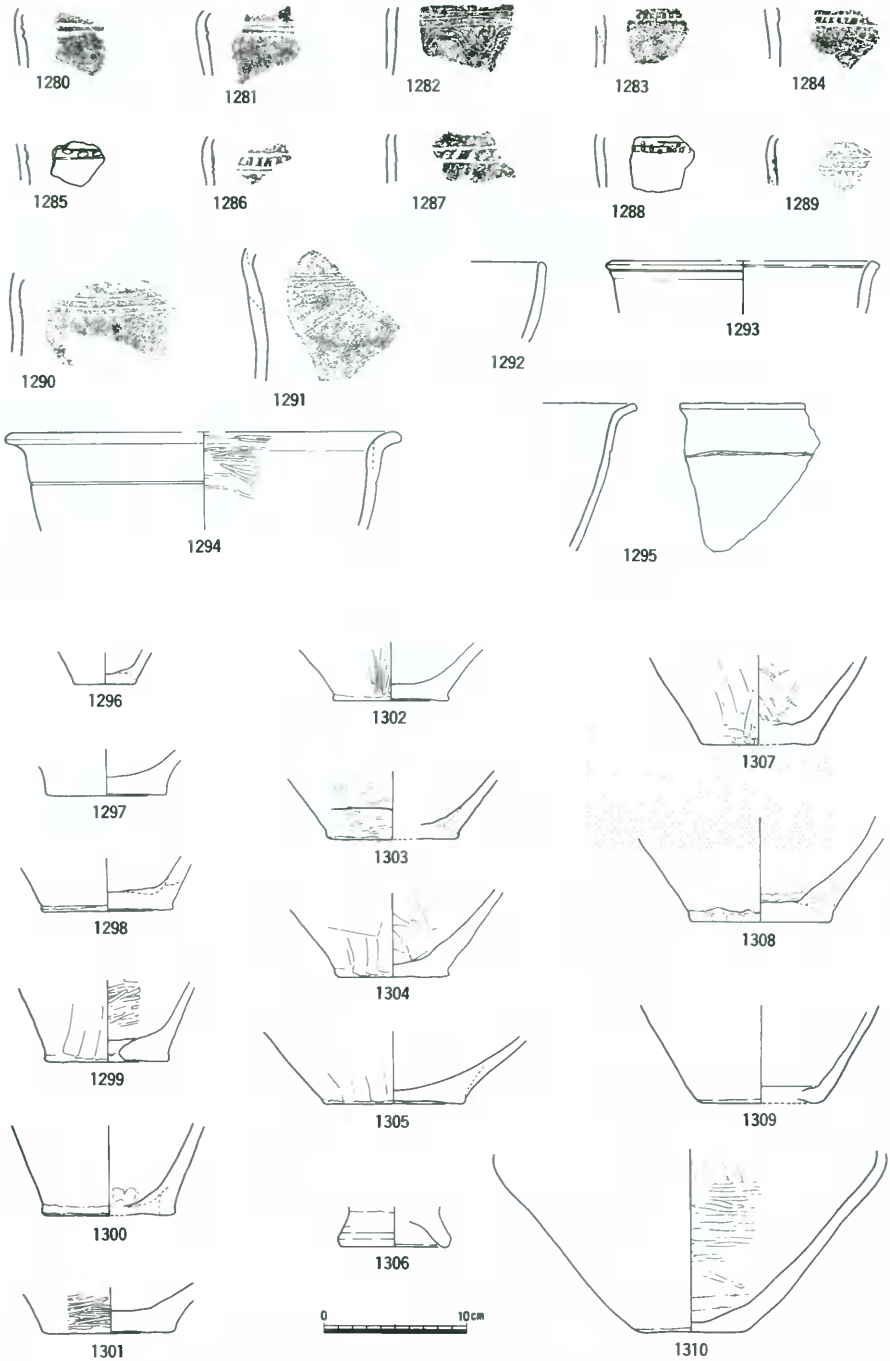
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1236	弥生土器	壺	口唇下端部刻目　ナデ。	ナデ。	にぶい橙　7.5YR6/4	TD4区
1237	弥生土器	壺	口唇下端部刻目　ナデ。	ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	〃
1238	弥生土器	壺	口唇下端部刻目。口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙　5YR7/4	〃
1239	弥生土器	壺	口唇部深い刻目。	ナデ。	浅黄橙　10YR8/3	H12区
1240	弥生土器	壺	口唇下端部刻目。ナデ。	ナデ。	にぶい黄橙　7.5YR7/4	TD5区
1241	弥生土器	壺	口唇下端部刻目。	ヨコナデ？。	灰白　10YR8/2	TD6区
1242	弥生土器	壺	口唇下端部刻目。ナデ。	ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/3	H12区
1243	弥生土器	壺	口唇下端部刻目。ナデ？。	ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/4	〃
1244	弥生土器	壺	口唇下端部刻目。ナデ。	ナデ。	灰黄褐　10YR4/2	TD5区
1245	弥生土器	壺	口唇部刻目。ナデ。	ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/3	TD3区
1246	弥生土器	壺	口唇下端部細い刻目。ナデ。	ナデ。	橙　7.5YR7/6	TD5区
1247	弥生土器	壺	口唇部刻目。ナデ？。	ナデ？。	にぶい橙　7.5YR7/4	TD4区
1248	弥生土器	壺	口唇部刻目。ナデ。	ナデ	橙　7.5YR7/6	TD5区
1249	弥生土器	壺	口唇部刻目。ナデ？。	ナデ。	にぶい橙　7.5YR6/4	TD4区
1250	弥生土器	壺	口縁部ユビオサエ。	ナデ。	橙　7.5YR7/6	〃
1251	弥生土器	壺	口唇部刻目無し。		にぶい黄橙　10YR7/4	H12区
1252	弥生土器	壺	口唇下端部刻目。段	ナデ？。	にぶい黄橙　10YR7/2	TD5区
1253	弥生土器	鉢？		ヨコミガキ。	にぶい橙　5YR7/4	TD4区
1254	弥生土器	壺	ナデ。	ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/4	TD3区
1255	弥生土器	鉢？	ナデ。	細かいヨコミガキ？。	灰黄褐　10YR4/2	H12区
1256	弥生土器	鉢？	ナデ。	ミガキ？。	灰白　10YR8/2	TD4区
1257	弥生土器	鉢？	ハケメ。	ミガキ。	灰白　10YR7/1	〃
1258	弥生土器	壺	貼付突帯。ナデ。	ナデ	灰白　10YR8/1	〃
1259	弥生土器	壺？	口唇下端部刻目。貼付刻目突帯	ナデ	にぶい褐　7.5YR6/3	H12区

第261図　第１低位部および第１微高地出土遺物（包含層上層３）（1/4）

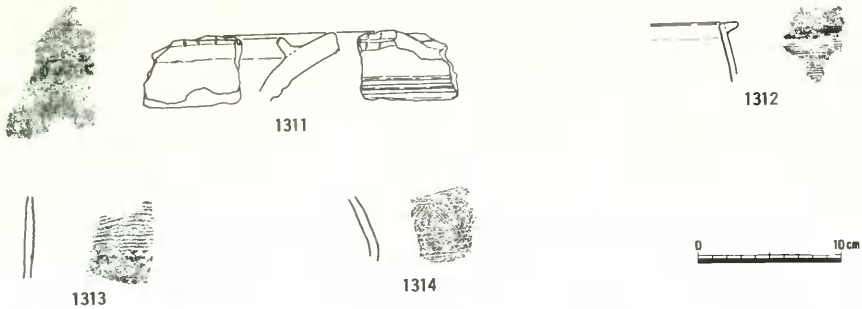


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1260	弥生土器	鉢？	頸部ヘラ描き沈線。胴部下半二枚貝条痕？のちナデ。	ナデ。	橙　7.5YR7/6	TD4区
1261	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線。		灰白　10YR8/2	〃
1262	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヘラ描き沈線。	ナデ。	浅黄橙　7.5YR8/3	〃
1263	弥生土器	壺	口唇下端部刻目。段とヘラ描き沈線２本。	ナデ。	浅黄橙　7.5YR8/4	〃
1264	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線２本。	ナデ。	橙　7.5YR7/6	〃
1265	弥生土器	甕	太いヘラ描き沈線。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ	灰黄　2.5Y7/2	〃
1266	弥生土器	甕	工具による段とヘラ描き沈線１本。	ナデ。	灰黄褐　10YR5/2	H12区
1267	弥生土器	甕	口唇部刻目。段とヘラ描き沈線２本。	ナデ。	にぶい橙　7.5YR6/4	TD4区
1268	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。粘土紐接合部の段。	ナデ？。	灰黄褐　10YR5/2	TD5区
1269	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線による段？。	ナデ？。	浅黄橙　10YR8/3	〃
1270	弥生土器	甕	口唇部深い刻目。ヘラ描き沈線２本。	口縁部ヨコナデ	にぶい橙　7.5YR6/4	H12区
1271	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線。	ナデ。	灰黄褐　10YR5/2	〃
1272	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。浅いヘラ描き沈線２本。	ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/3	〃
1273	弥生土器	甕	口唇部ヘラ描き沈線１本。頸部ヘラ描き沈線	ナデ。	灰褐　7.5YR4/2	〃
1274	弥生土器	壺	段とヘラ描き沈線１本。	ミガキ	灰黄褐　10YR6/2	TD4区
1275	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線２本。	ナデ。	褐灰　10YR4/1	H12区
1276	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線３本。	ナデ？。	浅黄橙　10YR8/3	〃
1277	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線３本。	ナデ？。	橙　7.5YR7/6	〃
1278	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヘラ描き沈線２本と竹管文。	ナデ。	灰白　10YR7/1	TD4区
1279	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線２本と竹管文。		灰白　10YR7/1	〃

第262図　第１低位部および第１微高地出土遺物（包含層上層４）（1/4）

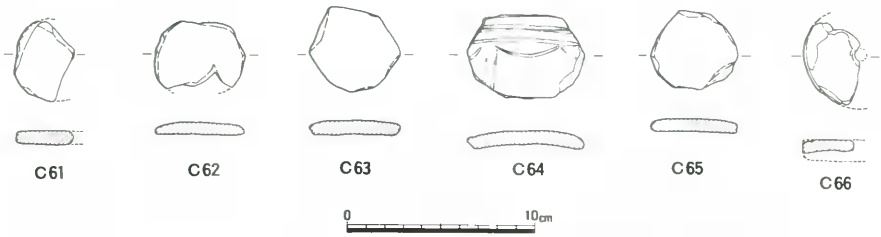


第263図　第１低位部および第１微高地出土遺物（包含層上層５）（1/4）

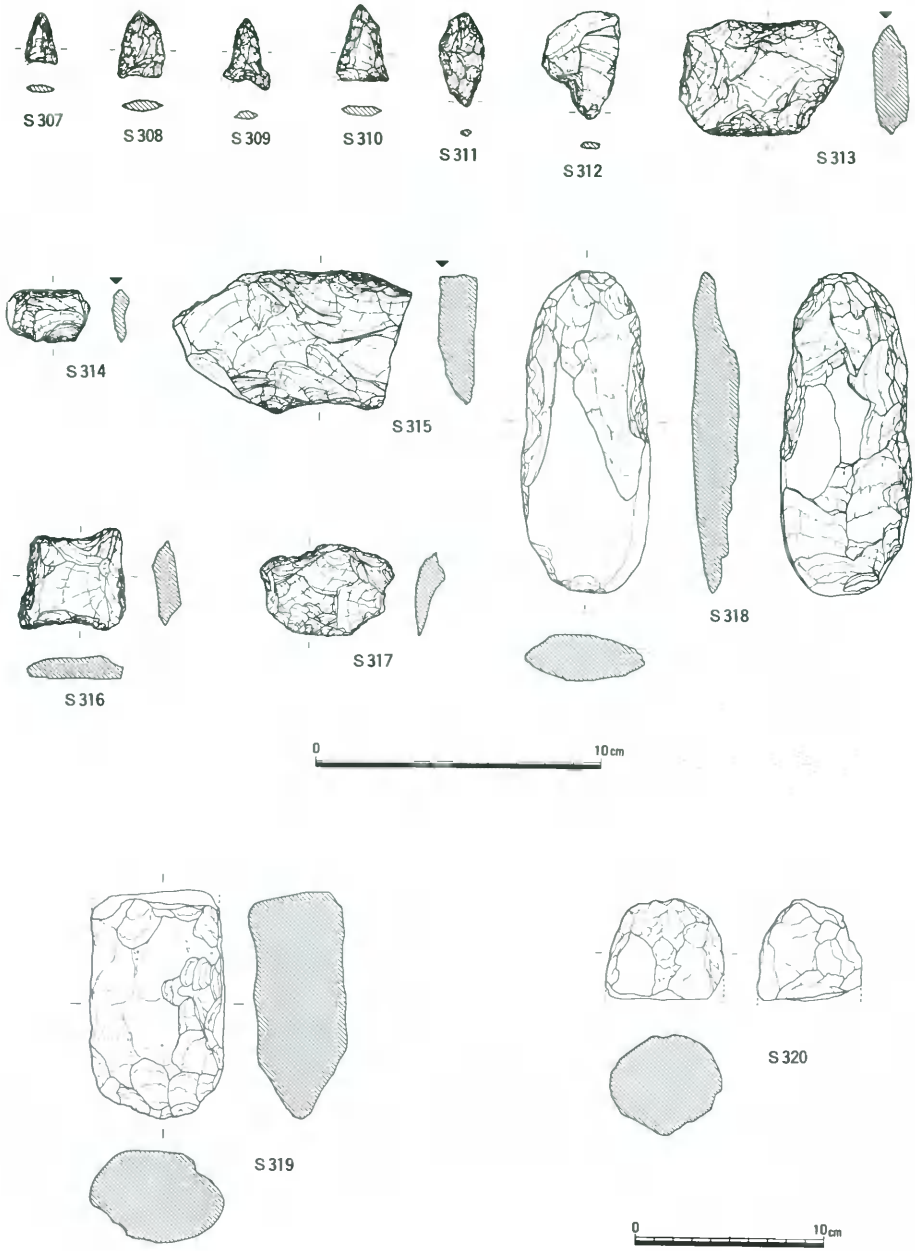


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1280	弥生土器	甕	太いヘラ描き沈線２本。	ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	H12区
1281	弥生土器	甕	削り出し突帯？にヘラ描き沈線１本。	ナデ。	灰褐　7.5YR6/2	TD4区
1282	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線。２本単位の波状文。		にぶい黄橙　10YR7/4	TD5区
1283	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線、刺突文。		橙　7.5YR7/6	〃
1284	弥生土器	壺？	削り出し突帯にヘラ描き沈線１本と刺突文。		褐灰　5YR4/1	H11区
1285	弥生土器	甕？	削り出し突帯？に刺突文。		黒褐　10YR3/1	TD4区
1286	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線３本と刺突文。	ナデ。	浅黄橙　10YR8/3	H12区
1287	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線２本と刺突文。		灰褐　7.5YR6/2	H11区
1288	弥生土器	甕	細いヘラ描き沈線２本と竹管文。		にぶい黄橙　10YR7/4	TD5区
1289	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線３本と円形刺突文。	ナデ。	灰白　10YR8/1	TD3区
1290	弥生土器	壺？	ヘラ描き沈線。	ミガキ。	灰白　2.5Y8/2	H13区
1291	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線３本。		にぶい黄橙　10YR7/2	TD4区
1292	弥生土器	鉢	ナデ。	ナデ。	灰黄　2.5Y7/2	H12区
1293	弥生土器	鉢？	ナデ。	ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/3	TD4区
1294	弥生土器	鉢	ヘラ描き沈線１本。板ナデ？。	ヨコミガキ。	淡橙　5YR8/4	〃
1295	弥生土器	鉢？	工具による段？。		褐灰　10YR6/1	H11区
1296	弥生土器	甕？		ナデ。	灰黄褐　10YR6/2	H12区
1297	弥生土器	甕	ナデ？。	ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/3	TD4区
1298	弥生土器	甕	ナデ。	ナデ。	灰白　7.5YR8/2	〃
1299	弥生土器	甕	ハケメ？。焼成後穿孔。	ミガキ。	橙　7.5YR7/6	H12区
1300	弥生土器	甕	ナデ。	ナデ。板ナデ？。	にぶい橙　7.5YR7/4	〃
1301	弥生土器	壺	ミガキ。	ナデ、ミガキ？。	にぶい黄橙　10YR7/2	H12区
1302	弥生土器	壺	ミガキ。	ナデ。	灰白　10YR8/2	TD3区
1303	弥生土器	壺	ミガキ？。	ナデ。	淡黄　2.5Y8/3	H12区
1304	縄文土器	壺？	板ナデ。	板ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/3	TD3区
1305	弥生土器	壺	胴部ナデ。底部側面ユビオサエ。	ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/4	H12区
1306	弥生土器	甕？	ナデ。		灰白　2.5Y8/2	TD6区
1307	弥生土器	甕	板ナデ。	板ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	H12区
1308	弥生土器	壺	ミガキ。底部側面ユビオサエ。底部外面剥痕１		明赤褐　5YR6/6	H11区
1309	弥生土器	甕			にぶい黄橙　10YR7/4	H12区
1310	弥生土器	壺		ヨコミガキ。	にぶい黄橙　10YR7/2	〃
1311	弥生土器	壺	口唇部ヘラ描き沈線１本と刻目。口縁部ヘラ描き沈線。	口縁部貼付刻目突帯。	橙　7.5YR7/6	H12区
1312	弥生土器	甕	口縁部貼付突帯。クシ描き沈線。	ユビオサエナデ。	黒褐　5YR3/1	TD6区
1313	弥生土器	甕	クシ描き沈線と刺突文。	ナデ？。	にぶい黄褐　10YR5/3	〃
1314	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、沈線文　ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙　7.5YR6/4	H12区

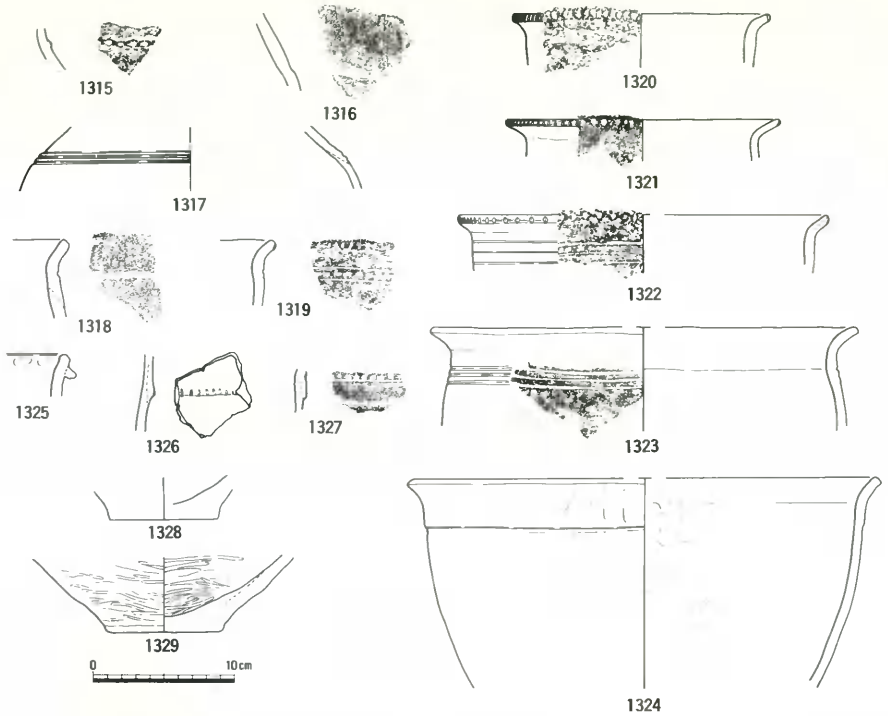
第264図　第１低位部および第１微高地出土遺物（包含層上層６）（1/4）



第265図　第１低位部および第１微高地出土遺物（包含層上層７）（1/4）



第266図　第１低位部および第１微高地出土遺物（包含層上層８）（1/2・1/3）



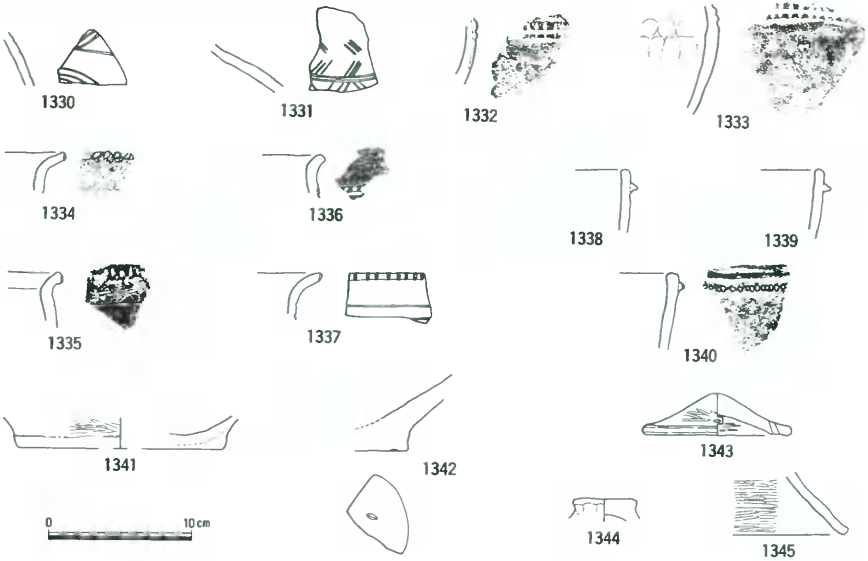
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1315	弥生土器	壺	貼付刻目突帯？。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　10YR8/2	H12区
1316	弥生土器	壺	ミガキ。段。	ユビオサエのちナデ。	明褐灰　10YR7/6	〃
1317	弥生土器	壺	段とヘラ描き沈線２本。	ナデ？。	灰黄褐　10YR6/2	TD2区
1318	弥生土器	甕	深いヘラ描き沈線１本。	ナデ、ミガキ？。	黄灰　2.5Y5/1	TD4区
1319	弥生土器	甕	口縁下端部刻目。ヘラ描き沈線２本と刺突文。	ユビオサエ、ナデ。	灰褐　7.5YR5/2	H12区
1320	弥生土器	甕	口唇部刻目。	ナデ？。	灰白　2.5Y8/2	TD4区
1321	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ナデ。	ナデ。	灰白　2.5Y8/2	〃
1322	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線。	ナデ？。	黒褐　10YR3/1	TD1・2区
1323	弥生土器	壺	太いヘラ描き沈線。ナデ。	ナデ。	浅黄橙　10YR8/3	H12区
1324	弥生土器	壺	口縁部工具による段、ヨコミガキ。胴部タテミガキ	ミガキ？。	にぶい黄橙　10YR7/2	H11区
1325	弥生土器	甕	貼付刻目？突帯。		にぶい黄橙　10YR7/3	H12区
1326	弥生土器	壺	段と沈線文。ナデ。	ナデ。	灰白　2.5Y8/2	TD1・2区
1327	弥生土器	壺	段、ヘラ描き沈線文、円形刺突文。	ミガキ。	橙　7.5YR7/6	H12区
1328	弥生土器	甕			橙　2.5YR7/6	H11区
1329	弥生土器	壺	ミガキ	ミガキ	にぶい橙　7.5YR7/3	TD1・2区

第267図　第１低位部および第１微高地出土遺物（包含層上層９）（1/4）

も３本以上になるなど新しい要素が加わっており、若干の時間幅を認めることができる。しかし、包含層上面に中期前葉の段階ですでに遺構が掘削されており、低位部の埋没は急速に進行し、遅くとも中期前葉には当地区の全面が微高地化されたと考えられる。（久保）

第２微高地（第268・269図）

第２微高地は全調査区のほぼ中央部に拡がっている微高地である。西側は河道１によって第１微高地と区切られ、北東部と東側には第３低位部が拡がっている。また中央部には第２低位部が南北に拡がっている。したがって第２微高地は西半部と東半部に区分して考えることができる。第２微高地の

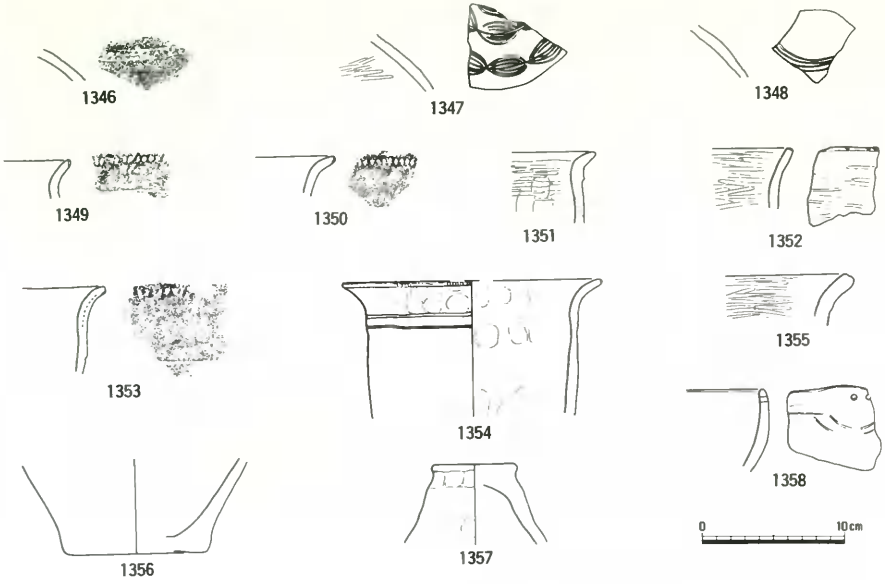


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1330	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、沈線文。	ナデ？。	灰白　5Y8/2	AT区
1331	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、沈線文。		灰白　10YR8/1	〃
1332	弥生土器	壺	段、ヘラ描き沈線２本と刻目。		褐灰　7.5YR4/1	H10区
1333	弥生土器	壺	段、ヘラ描き沈線２本と刻目。	ユビオサエ、ナデ。	褐灰　7.5YR4/1	HF区
1334	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。		黒褐　10YR3/1	AT区
1335	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線１本。	ナデ？。	灰白　5YR8/2	IN区
1336	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線２本と円形刺突文。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　10YR8/1	AT区
1337	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線２本。	口縁部ヨコナデ？。	灰白　10YR8/2	〃
1338	弥生土器	甕	口縁部貼付突帯、ヨコナデ。	ナデ。	灰白　7.5YR8/2	〃
1339	弥生土器	甕	口縁部貼付突帯。ナデ、ミガキ？。	ナデ、ミガキ？。	にぶい橙　5YR7/3	〃
1340	弥生土器	甕	口縁部貼付刻目突帯。ナデ？。	ナデ？。	にぶい黄橙　10YR7/3	〃
1341	弥生土器	壺	ミガキ？。	ナデ。	浅黄　2.5Y8/3	H10区
1342	弥生土器	壺	底部外面剥痕１。		灰白　2.5Y8/2	AT区
1343	弥生土器	蓋	ヨコミガキ。穿孔４個。	ヨコミガキ。	明褐灰　7.5YR7/2	〃
1344	弥生土器	蓋	ユビオサエ。		灰白　10YR8/1	〃
1345	弥生土器	蓋	ミガキ。	ヨコミガキ。	灰白　2.5Y8/2	〃

第268図　第２微高地（西）出土遺物（弥生時代前期～中期前葉）（1/4）

西半部ではこれまで述べてきたように、北半部のＡＴ区からＤＥ区を中心とする地域に竪穴住居や建物、土壙などが数多く検出されている。一方南半部ではＫＹ１区に土壙群が確認されている。さてこうした遺構以外には柱穴および柱穴状遺構、土壙状遺構などがある。今回報告する調査区において検出された弥生時代以前の柱穴や柱穴状遺構の埋土は大きく暗褐色系統と灰黄色系統のものの二種類が認められた。そのうち暗褐色系統の埋土の柱穴は出土遺物などから弥生時代中期中葉から後期と判断し、灰黄色系統の埋土の柱穴は弥生時代前期以前と考えた。しかしながら一部のものを除いて縄文時代晩期と弥生時代前期の柱穴の区別については判断が困難であったため、すべて弥生時代前期～中期前葉の全体図に掲載している。こうした判断のうえで柱穴の分布をみると、ＡＴ・ＤＥ区とＫＹ１区、ＦＵ区の周辺に多くが分布していることが伺える。個別に説明を加えなかった土壙状遺構についても同様な地区で検出されている。

出土遺物のうち土器については遺構検出中や弥生時代中期中葉以降の遺構に伴って出土した土器の



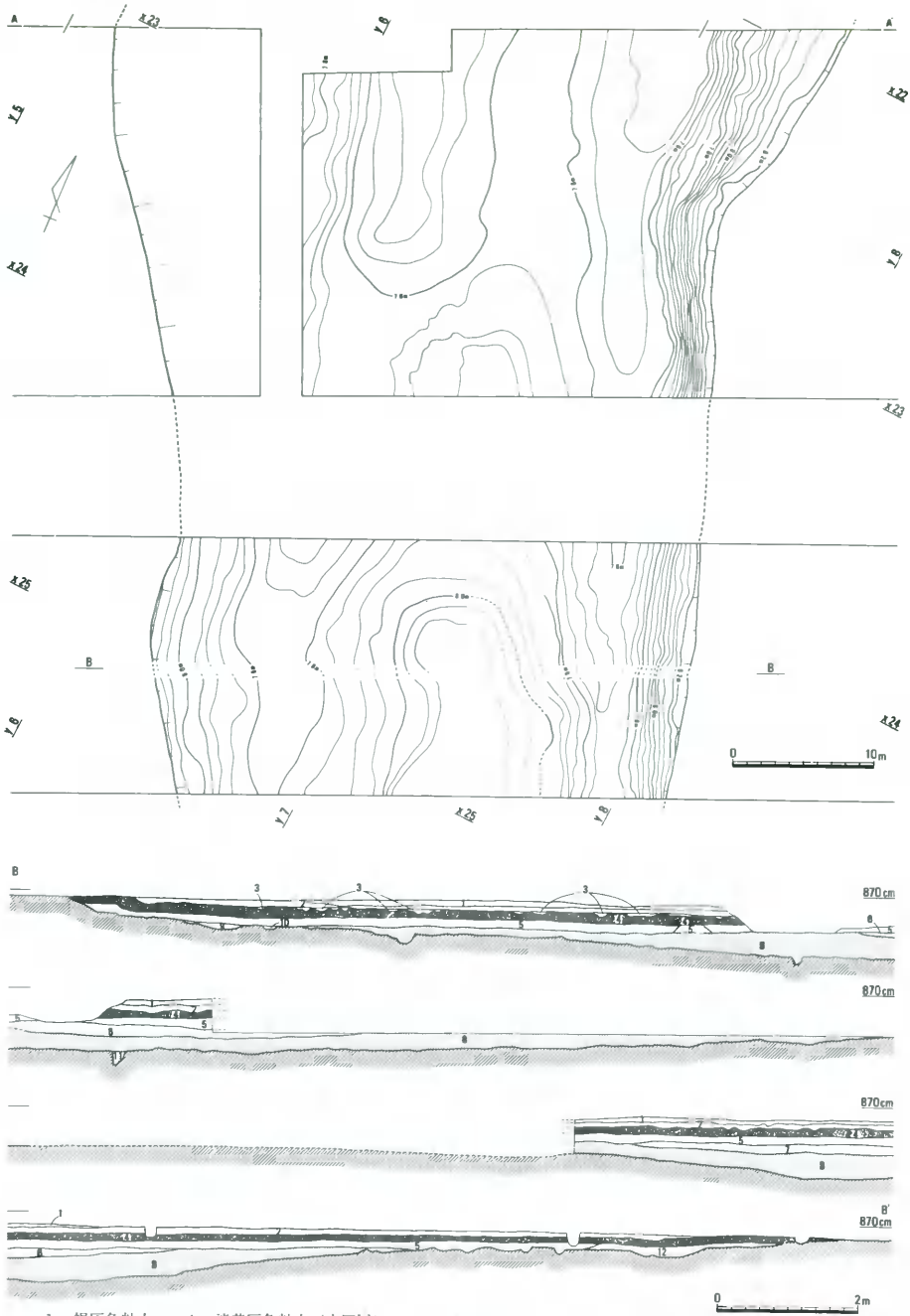
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1346	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線３本と竹管文。	ナデ。	灰白　10YR8/2	K2区
1347	弥生土器	壺	ヘラ描き有軸木葉文。ミガキ。	ヨコミガキ。	にぶい黄橙　10YR7/3	IN区
1348	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。	ナデ。	灰白　10YR8/2	KY3区
1349	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヘラ描き沈線。		にぶい黄橙　10YR7/2	HF区
1350	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ユビオサエ。		にぶい黄橙　10YR7/2	JY区
1351	弥生土器	鉢	口縁部下位に突帯？。ヨコミガキ？。	ヨコミガキ。	灰白　2.5Y8/2	HF区
1352	弥生土器	鉢？	口唇部刻目。ミガキ？。	ヨコミガキ。	褐灰　10YR6/1	JY区
1353	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。沈線による段。		にぶい黄橙　10YR5/4	FU区
1354	弥生土器	甕	口唇部刻目。ヘラ描き沈線２本。	ユビオサエのちナデ。	浅黄橙　7.5YR8/3	K2区
1355	弥生土器	壺	頸部沈線による段？、ミガキ。	ヨコミガキ。	灰褐　7.5YR4/2	JY区
1356	弥生土器	甕			橙　2.5YR6/6	HF区
1357	弥生土器	蓋	ナデ？。	ナデ。	灰白　2.5Y8/2	JY区
1358	弥生土器	鉢	ヘラ描き沈線文、穿孔２個残存。	ミガキ？	灰白　10YR8/2	〃

第269図　第２微高地（東）および第２低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉）（1/4）

一部を図示している。これらの土器は壺、甕、鉢、蓋などがあり、前期前葉から中葉のものが多い。**1330**～**1333**・**1341**・**1342**・**1346**～**1348**は壺である。**1330**・**1331**・**1347**・**1348**の外面には細く浅いヘラ描き沈線による文様が描かれている。**1332**・**1333**の傾きは不詳である。**1342**の底部外面には籾痕が確認できた。**1334**～**1340**・**1349**～**1350**・**1353**・**1354**は甕と考えられる。**1338**～**1340**は小片のため傾きは明確ではないが前期の突帯文土器である。**1351**は内外面にヘラミガキが施されており鉢ではなかろうか。**1334**は壺の蓋、**1344**・**1345**は甕の蓋と考えられる。なお第269図**1350**・**1352**・**1355**・**1357**・**1358**は第２低位部の弥生時代中期中葉以降の土層から出土した土器である。　（平井）

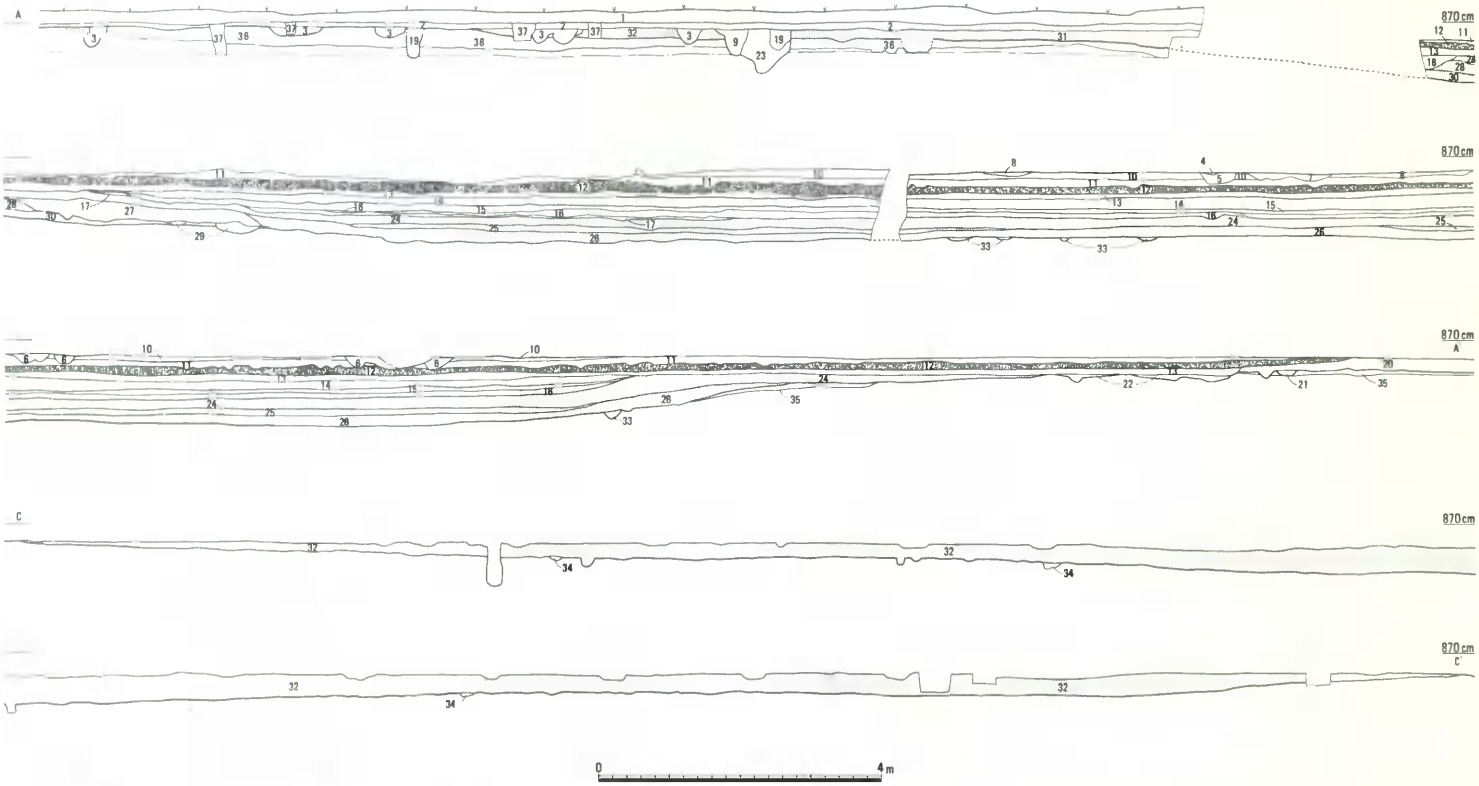
第２低位部（第270～275図、図版14）

全調査区の中央に位置する。おおよそ縄文時代の低位部とした部分全域に弥生時代前期の包含層が堆積している。Ａ－Ａ'断面では16層までは弥生時代中期後半の遺物が混在していたが24層以下には含まれず、前期の土器を主体としている。ＩＮ区においても同様の堆積状況を示し、Ｂ－Ｂ'断面の８層が前期包含層と考えられる。ＫＹ２区では第271図32層に後期の遺構が掘削され、32層上面で中



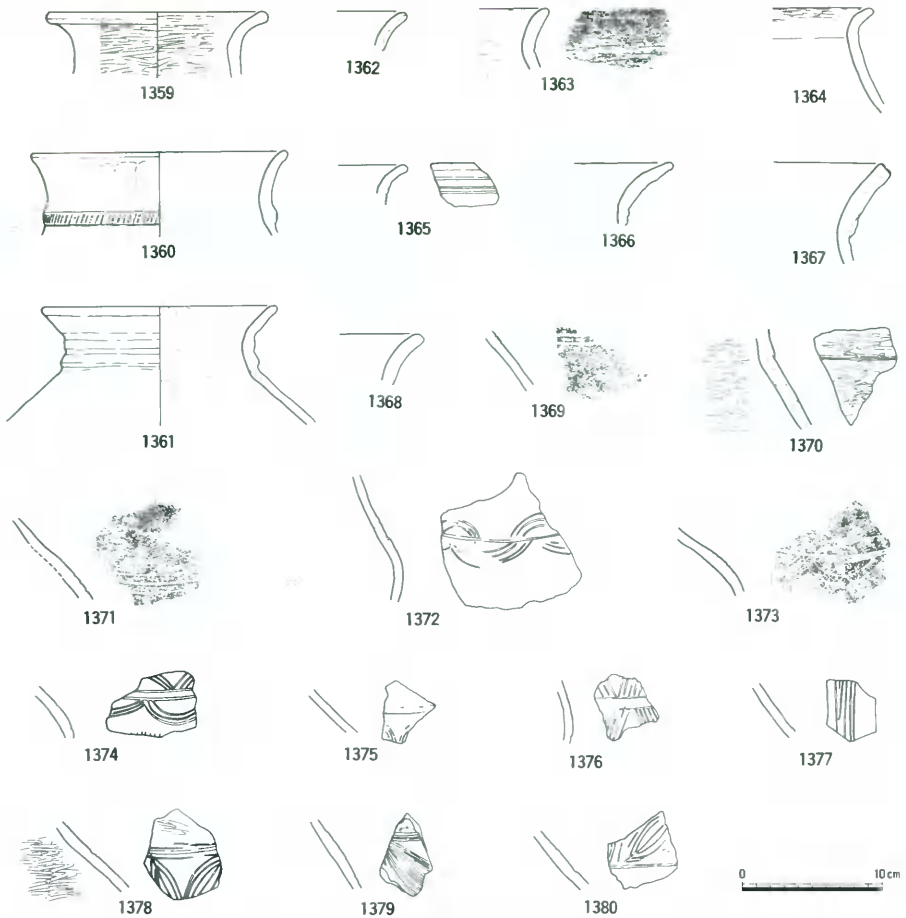
1．褐灰色粘土　4．淡黄灰色粘土（水田層）　7．褐灰色粘土　10．暗褐灰色粘土（溝11）
2．黒灰色粘土　5．橙灰色粘土　8．暗灰色粘土　11．暗褐灰色粘土（遺構）
3．暗灰色粘土　6．褐灰色粘土　9．暗褐灰色粘土（溝11）　12．暗褐灰色粘土（溝25）

第270図　第２低位部（1/400・1/80）



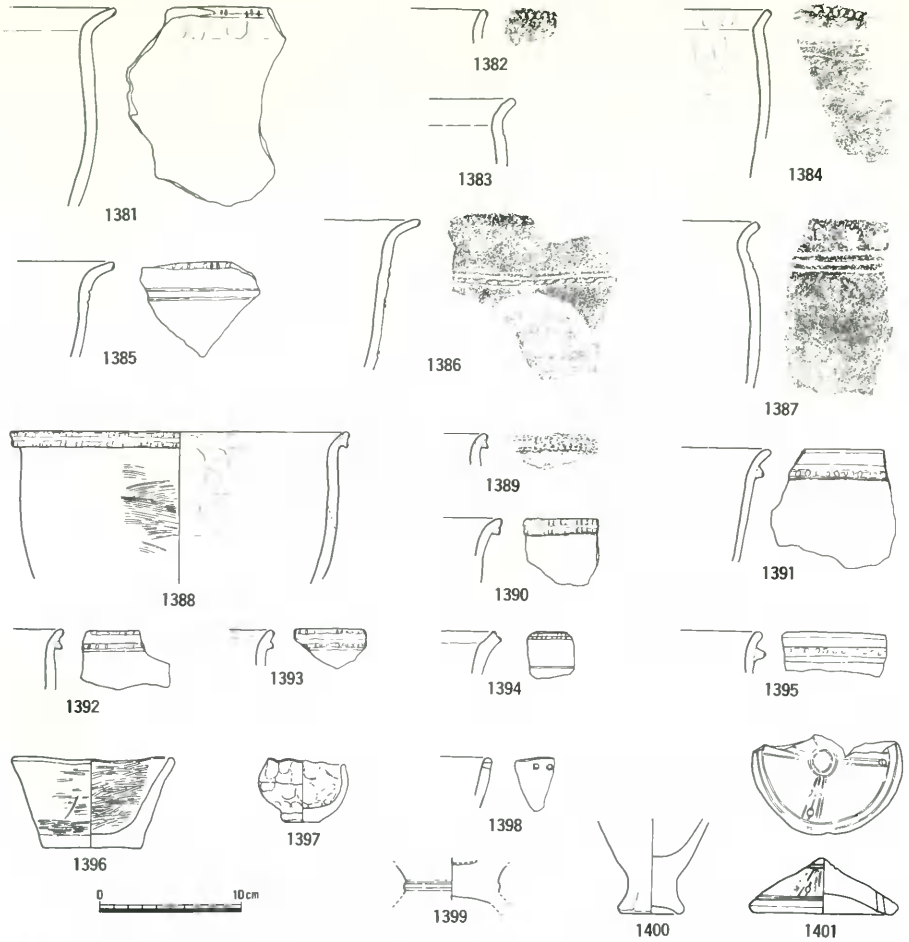
1．暗灰色土
（現耕土）
2．暗黄灰色土
（中～近世耕土）
3．淡灰色粘質土
4．褐色粘質土
5．灰白色粘質砂
6．淡黄色粘質砂
7．淡黄色粘質砂
8．灰白色粘質土
9．暗黄褐色砂質土
10．褐灰色粘質土
11．黒褐色粘質土
12．淡灰白色粘質土
（古・前・水田層）
13．灰白色粘質土
（弥・後・水田層）
14．黄灰色粘質土
15．灰黄色粘質土
16．灰白色粘質土
17．褐灰色粘質土
18．灰黄褐色粘質土
19．黒褐色砂質土
20．褐灰色粘質土
21．黄褐色粘質土
22．黄灰色粘質土
23．黄褐灰色粘質土
24．灰黄褐色粘質土
25．明黄褐色粘質土
26．灰褐色粘質土
27．褐灰色粘質土
28．灰黄褐色粘質土
29．灰黄色粘質土
30．にぶい黄色粘質土
31．暗灰褐色粘質土
32．灰褐色粘質土
33．灰黄色粘質土
34．淡灰褐色粘質土
35．灰黄褐色粘質土
36．灰黄色粘質土
37．暗渠

第271図　第２低位部断面図（1/80）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1359	弥生土器	壺	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	にぶい黄橙　10YR8/2	JY区
1360	弥生土器	甕	頸部に段？と刻目。		橙　5YR6/8	DE区
1361	弥生土器	壺	頸部に段と凹線？２本。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　7.5YR8/2	JY区
1362	弥生土器	壺	段を意識した沈線？。ミガキ。	ミガキ？。	にぶい橙　7.5YR7/4	〃
1363	弥生土器	甕	ミガキによる段。	ヨコミガキ。	褐灰　10YR4/1	DE区
1364	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部タテミガキ。	ミガキ？。	にぶい橙　5YR7/4	JY区
1365	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線３本。ミガキ。	ナデ？。	灰白　2.5Y8/1	〃
1366	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線２本。	ミガキ？。	にぶい橙　5YR7/4	KY2区
1367	弥生土器	壺？	口唇部ヘラ描き沈線１本、刻目。		灰白　2.5Y8/1	JY区
1368	弥生土器	壺	ミガキ。		にぶい黄橙　10YR8/2	〃
1369	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線２本と刺突文。		灰白　10YR8/1	〃
1370	弥生土器	壺	ヨコミガキ、段、沈線。	ヨコミガキ。	にぶい橙　5YR7/4	DE区
1371	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線３本。	ユビオサエ、ナデ？。	灰白　7.5YR8/1	JY区
1372	弥生土器	壺	段を意識したヘラ描き沈線と沈線文。		灰白　2.5Y8/2	〃
1373	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、沈線文。ミガキ？。	ユビオサエのちナデ。	にぶい橙　5YR7/4	DE区
1374	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、沈線文。		浅黄橙　10YR8/3	IN区
1375	弥生土器	壺	細いヘラ描き沈線、沈線文。ミガキ？。		にぶい橙　7.5YR7/4	DE区
1376	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、沈線文。ミガキ。	ミガキ。	黄灰　2.5Y4/1	JY区
1377	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線文。		灰白　10YR8/2	KY2区
1378	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線による段、有軸木葉文。ミガキ？。	ヨコミガキ。	暗赤褐　2.5YR5/6	JY区
1379	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線３本、有軸木葉文。	ミガキ？。	灰白　2.5Y8/2	〃
1380	弥生土器	壺	沈線による段、有軸木葉文。	ミガキ？。	にぶい橙　5YR6/4	DE区

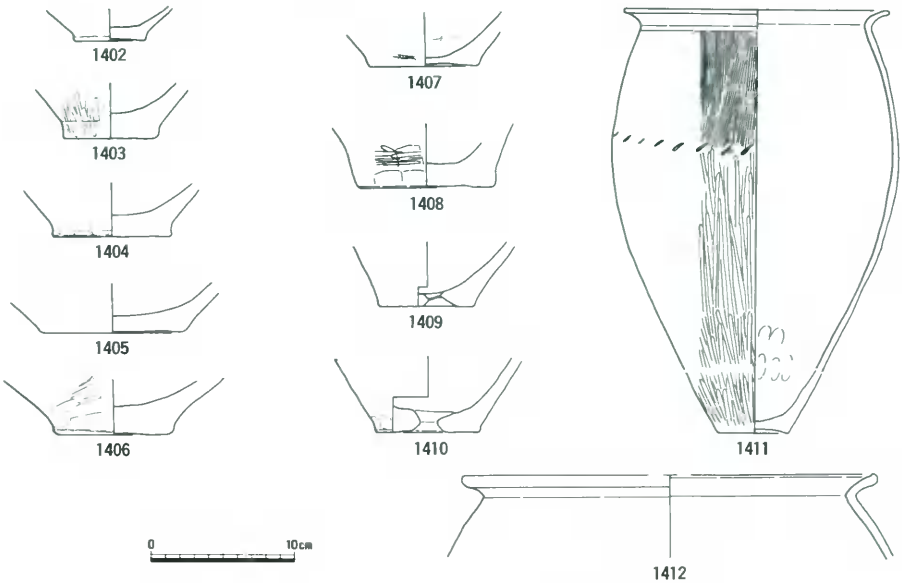
第272図　第２低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉１）（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1381	弥生土器	甕	口唇下端部刻目，口縁部ユビオサエ。	ユビオサエ、ナデ?。	浅黄橙　7.5YR8/4	JY区
1382	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ナデ。	ナデ。	灰白　2.5Y8/2	〃
1383	弥生土器	鉢	ヘラ描き沈線１本。ミガキ?。	ミガキ?。	灰白　2.5Y8/2	IN区
1384	弥生土器	鉢	口唇部刻目。ヘラ描き沈線２本。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　5YR8/2	DE区
1385	弥生土器	鉢	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線２本。ミガキ。	ナデ。	黄灰　2.5Y6/1	JY区
1386	弥生土器	甕			浅黄橙　7.5YR8/3	〃
1387	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線３本。		にぶい褐　7.5YR5/3	HF区
1388	弥生土器	甕	口唇下端部刻目　口唇部貼付刻目突帯　細かいハケメ。刻目は同時。	細かいハケメ	浅黄橙　10YR8/3	JY区
1389	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口唇部貼付刻目突帯。刻目は同時。		灰白　10YR8/1	〃
1390	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口唇部貼付刻目突帯。刻目は同時。		灰白　2.5Y8/2	〃
1391	弥生土器	甕	口縁部貼付刻目突帯。		にぶい褐　7.5YR5/4	〃
1392	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部貼付刻目突帯。ナデ。	ナデ	灰白　10YR7/1	DE区
1393	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部貼付刻目突帯。ナデ。	ナデ。	灰白　10YR8/2	JY区
1394	弥生土器	壺?	口唇部ヘラ描き沈線１本と刻目。口縁部ヘラ描き沈線１本。	ナデ。	淡橙　5YR8/4	IN区
1395	弥生土器	甕	口縁部貼付刻目突帯。		橙　7.5YR6/6	JY区
1396	弥生土器	鉢	ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	明褐灰　7.5YR7/1	KY2区
1397	弥生土器	鉢	ユビオサエ、ナデ。手づくね。	ユビオサエ、ナデ。	灰褐　7.5YR6/2	IN区
1398	弥生土器	鉢?	穿孔２個残存。		灰白　7.5YR8/2	JY区
1399	弥生土器	高杯?	脚部ヘラ描き沈線２本?。	ナデ。	浅黄橙　7.5YR8/3	JY区
1400	弥生土器	鉢	脚部側面ユビオサエ。		にぶい橙　5YR7/4	DE区
1401	弥生土器	蓋	ヘラ描き沈線文。穿孔。細かいミガキ。	ナデ。	灰白　2.5Y8/2	JY区

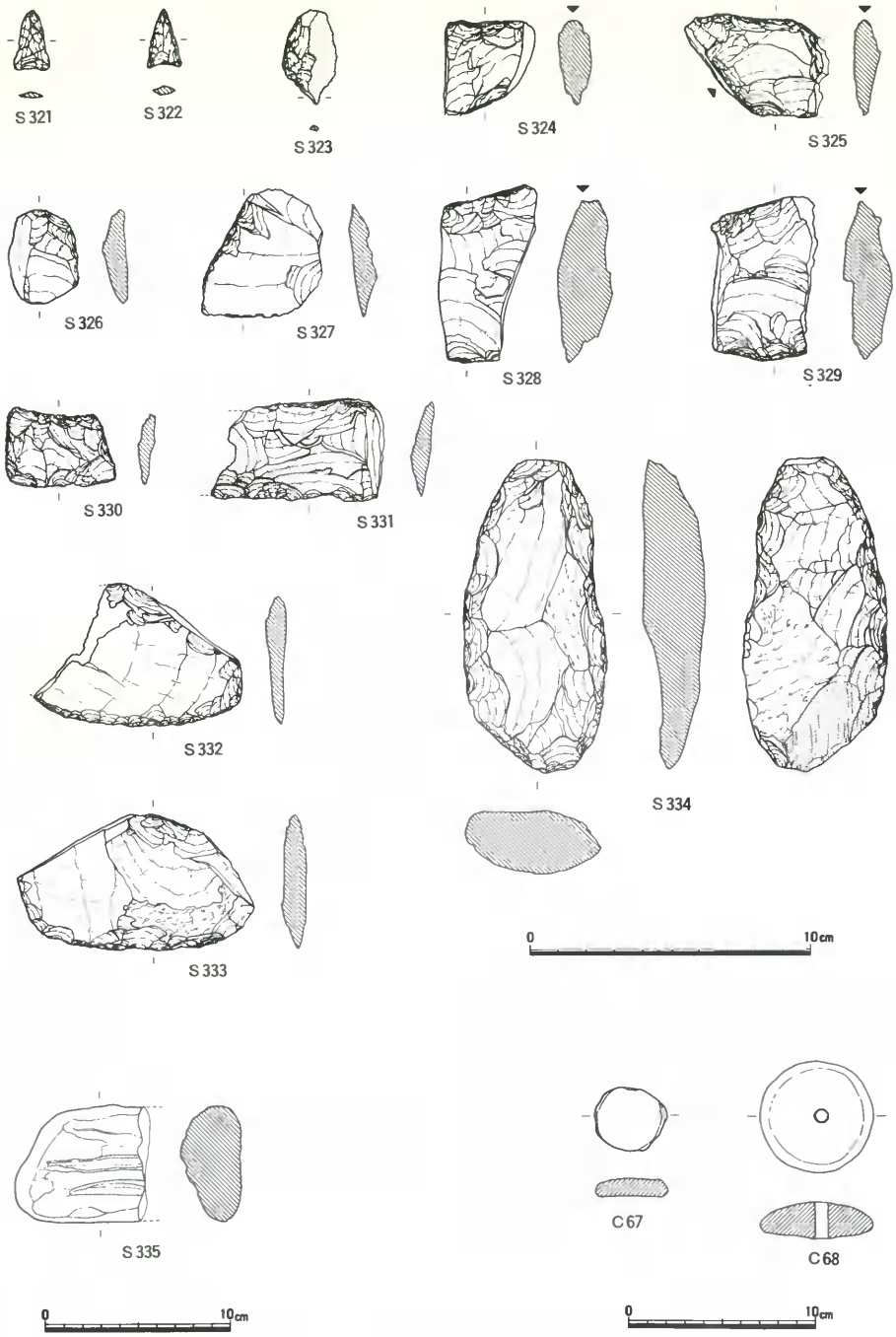
第273図　第２低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉２）（1/4）

期前半の遺物が出土しており、ＪＹ、ＩＮ区に対応すると考えた。また**1401**は24層と31層から出土した破片が接合している。この31層は竪穴住居２を被覆していた包含層に対応するものである。出土した土器には壺、甕、鉢、高杯、蓋、手づくね土器などがある。**1359**～**1380**は壺で、削り出し突帯を持つものがあるが段を有するものは認められなかった。**1381**～**1395**は甕で、これらにも段を持つものはなかった。**1389**～**1393**・**1395**は突帯を有していた。突帯には口縁直下に三角の突帯を貼付ける**1388**・**1389**と口縁から少し下がった屈折部にやや高めの突帯を貼付ける**1391**～**1393**がある。また口唇部を下方へ拡張させ突帯状に張り出させ、みかけ上は前者に近い**1388**がある。弥生時代前期中葉～後葉の遺物を包含し、ＩＮ区包含層上面において**1411**・**1412**が出土している。包含層最上面で中期前葉の遺物が出土するという状況は第１低位部と同様で、同時に埋没が進行していたと考えられる。石器には石鏃・石錐・楔形石器・スクレイパー・打製石鍬・砥石がある。**Ｓ323**は非常に平滑な面を有しており、砥石か磨製石器の破片を利用したものであろう。**Ｓ332**・**333**は定形的なもので石包丁の可能性も考えられる。**Ｓ335**には研磨溝が数条認められる。そのほか円板状土製品や紡錘車も出土している。　（久保）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1402	弥生土器	壺？	ミガキ？。	ナデ？。	浅黄橙　7.5YR8/3	JY区
1403	弥生土器	壺	ミガキ？。	ナデ。	灰白　10YR7/1	JY区
1404	弥生土器	壺	底部側面ユビオサエ。	ナデ。	褐灰　10YR6/1	〃
1405	弥生土器	壺			灰黄褐　10YR6/2	〃
1406	弥生土器	壺	ミガキ。	ミガキ？。	灰黄　2.5Y7/2	〃
1407	弥生土器	壺	底部外面縦痕１。	ナデ、ミガキ。	淡赤橙　2.5YR7/4	〃
1408	弥生土器	甕	ミガキ？。		橙　2.5YR6/6	IN区
1409	弥生土器	甕	ミガキ？。焼成後穿孔。		にぶい赤褐　5YR5/4	〃
1410	弥生土器	甕	焼成後穿孔。	ナデ。	灰白　2.5Y8/2	JY区
1411	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、刺突文、下半ミガキ。外面煤。	胴部粗いハケメのちナデ。	灰白　10YR8/2	IN区
1412	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙　7.5YR7/4	〃

第274図　第２低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉３）（1/4）

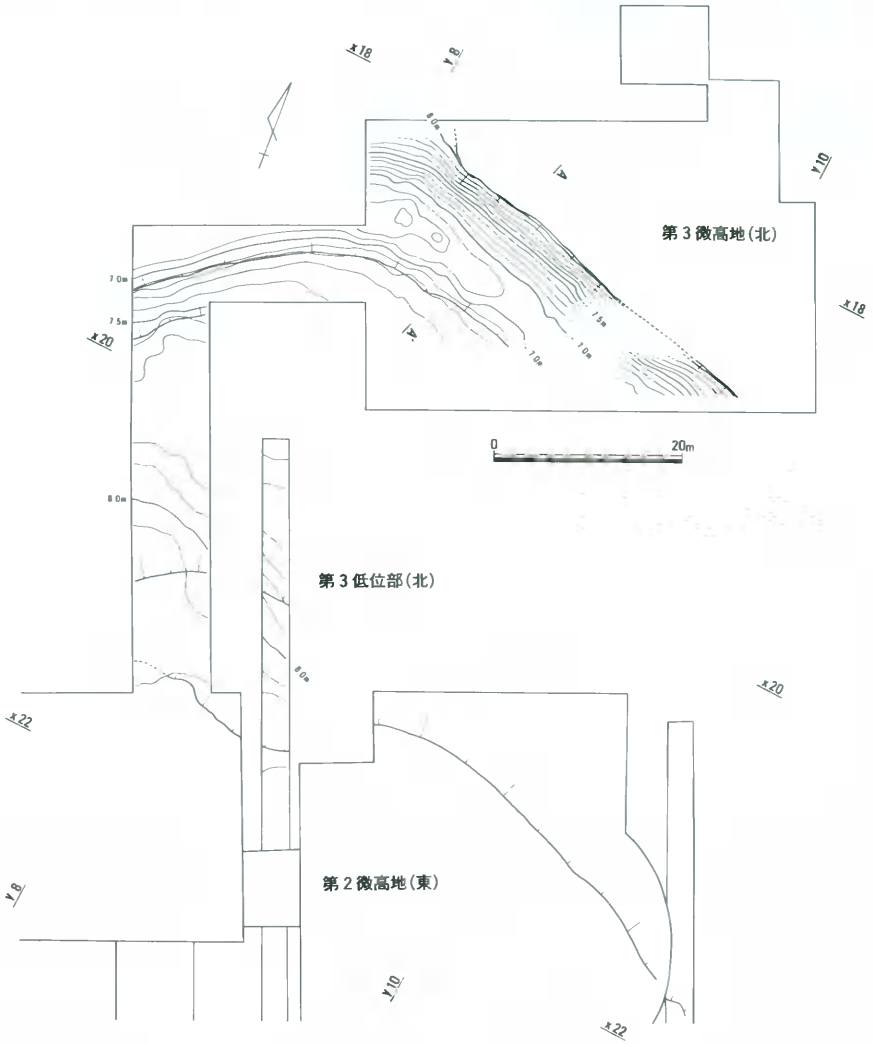


第275図　第２低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉４）（1/2・1/3）

第３低位部（第128・276～284図、図版14）

全調査区の北東部から南東部にかけて逆「く」の字状に拡がっている低位部で、大きく南と北に区分することができる。

南のＫＹ３区、Ｈ16区、ＴＯ区ではほぼ第128図に示したような範囲に弥生時代前期から中期前葉の包含層が拡がっていた。深さは中心部および北側に向かって徐々に深くなっており、最深部で検出面から約30cmを測る。この地区から出土した遺物は比較的多く、第278～284図にその多くを図示している。**1413**～**1436**は壺と考えられる。**1413**の頸部は接合部を利用した段ののちヘラミガキを施している。**1414**～**1416**の頸部は段ののち沈線が施されているように観察できた。**1424**・**1425**の頸部には細く



第276図　第３低位部（北）（1/600）

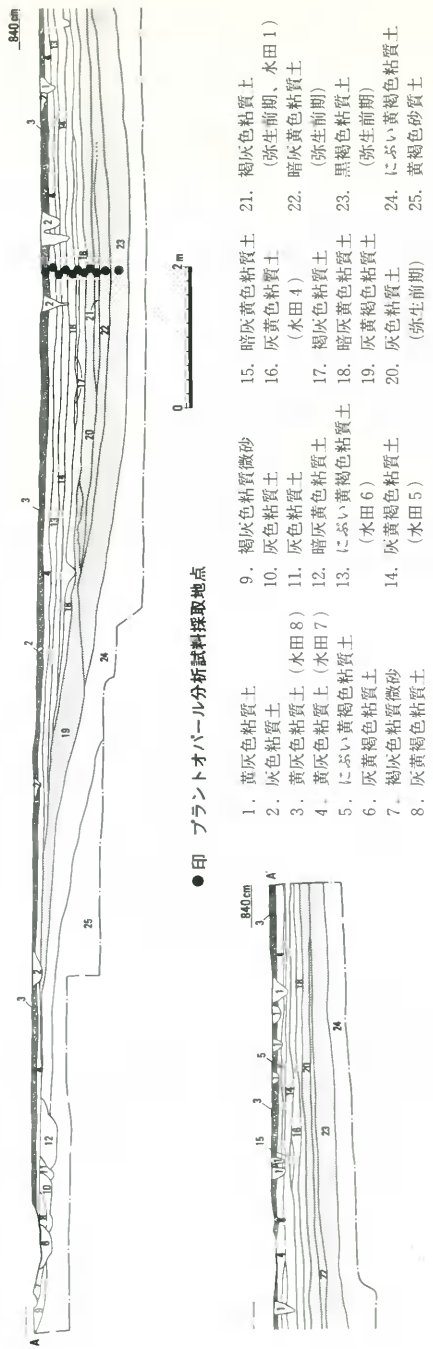
浅い沈線が２および３本施されている。**1426**～**1435**は胴部の破片で、おもに細く浅い沈線によって文様が描かれている。**1436**には貼付突帯が施されているが、傾きは不詳である。**1437**～**1451**は甕と考えている。**1440**には幅広の沈線が施されている。**1441**～**1443**には板？状の工具によって段状に整形されている。**1447**～**1450**は貼り付け突帯文土器で、**1448**・**1449**の刻みは同時に施されている。**1447**は縄文土器の可能性もある。**1458**の底部外面には籾痕が認められた。**1460**は縄文土器と考えている。**1461**の外面には細く浅いヘラ描きの沈線文が施されており、蓋の可能性もある。**1462**は高杯であろう。**1463**・**1464**の口縁部下には細く浅い沈線が１本施されている。また**1463**には底部側面にも細く浅い沈線が３本施されている。**1465**～**1467**は甕の蓋であろう。**1468**は中期前葉の壺と考えられる。

土器の他にはサヌカイト製の石鏃、石錐、楔形石器や安山岩製の太形蛤刃石斧、土製紡錘車などが出土している（第281・284図）。**S 340**は用途は不明だが左右に抉りをもつ大形石包丁状石器である。また**S 341**のスクリーントーン部分は磨滅が著しい。

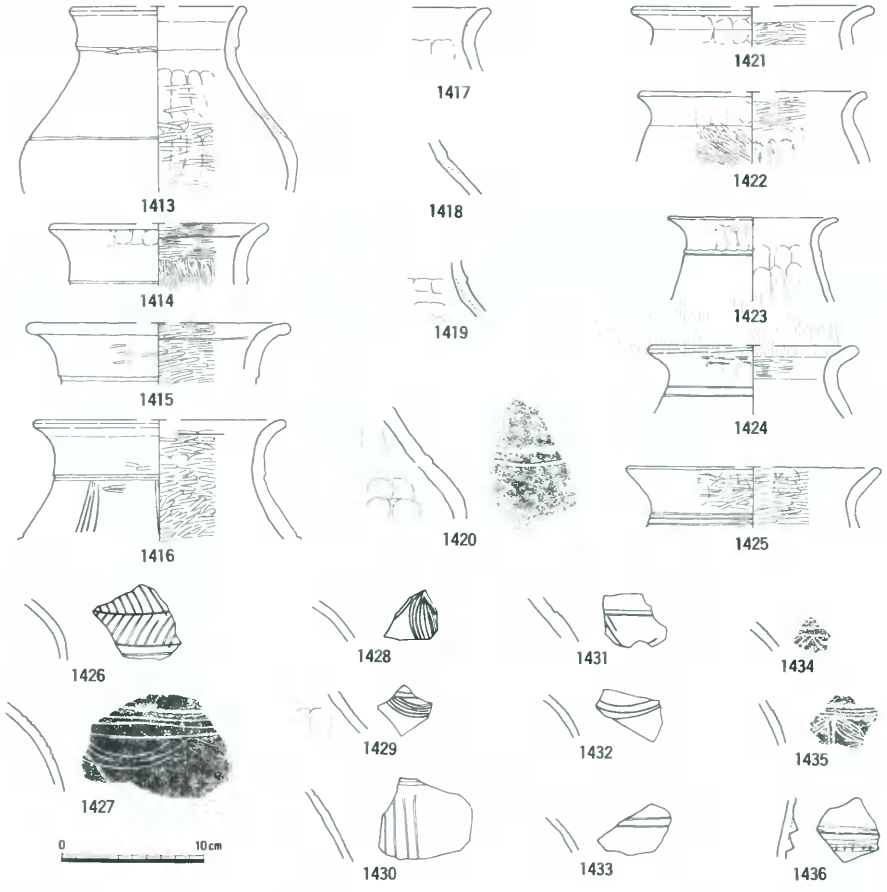
第３低位部の北部分は第276図に示したように幅50ｍ前後にわたって検出できた。深さは南半部では北に向かって徐々に深くなっており、第３微高地（北）に近い部分では幅約13ｍにわたって一段深く谷状になっており、最深部で微高地検出面から約130㎝を測る。

この谷状に深くなっている部分の土層断面図が第277図で、弥生時代前期の土層はスクリーントーンで示しており、図の19～23層に相当する。この土層からは少量の土器が出土しており、いずれも前期前葉から中葉のものと考えられた（第283図**1487**・**1489**）。この第３低位部の北部分は西に向かってカーブしており、第２低位部につながる可能性が高い。

なお**1487**・**1489**を除く第282・283図に示した

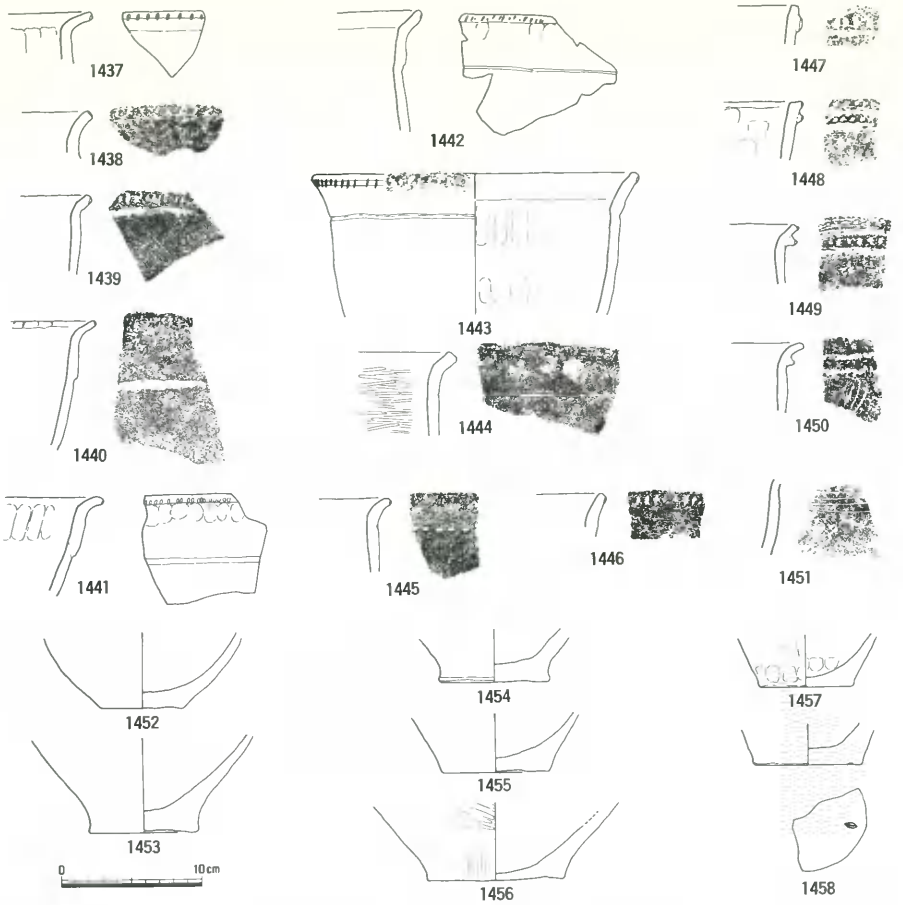


第277図　第３低位部断面図（ＥＮ区）（1/80）



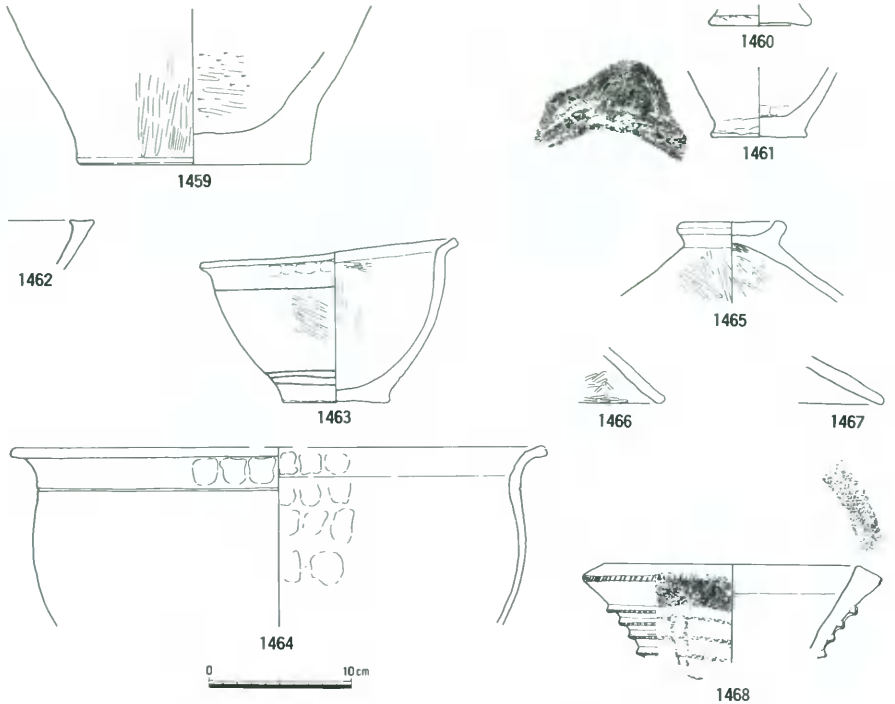
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1413	弥生土器	壺	頸部段。胴部ヘラ描き沈線１本	ヨコミガキ。	灰白　7.5YR8/2	TO区
1414	弥生土器	壺	頸部段のあと沈線。	口縁部細いヘラ描き沈線。	灰白　7.5YR8/2	〃
1415	弥生土器	壺	頸部段のあと沈線。ミガキ。	口縁部細く浅いヘラ描き沈線。	にぶい黄橙　10YR7/2	〃
1416	弥生土器	壺	頸部ヘラ描き沈線、沈線文。ミガキ。	口縁部細く浅いヘラ描き沈線。	灰白　5YR8/2	〃
1417	弥生土器	壺	細かいミガキ。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　5YR8/2	KY3区
1418	弥生土器	壺	工具による押し引きの段。ミガキ。	ナデ？。	にぶい橙　5YR7/3	〃
1419	弥生土器	壺	深いヘラ描き沈線。	ユビオサエ、ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/4	〃
1420	弥生土器	壺	工具による段とヘラ描き沈線１本	ユビオサエ、ナデ？。	浅黄橙　7.5YR8/4	〃
1421	弥生土器	壺	ミガキ？。	ヨコミガキ。	灰白　10YR8/1	TO区
1422	弥生土器	壺	ミガキ。	ミガキ。	灰白　10YR8/1	〃
1423	弥生土器	壺？	口縁部ユビオサエ。頸部ヘラ描き沈線１本。	ユビオサエ、ナデ。	橙　5YR7/6	〃
1424	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線２本　ミガキ。	ヨコミガキ。	褐灰　7.5YR6/1	〃
1425	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線３本　ミガキ。	ヨコミガキ。	灰白　10YR8/1	〃
1426	弥生土器	壺	細いヘラ描き沈線、沈線文。	ナデ。	灰黄　2.5Y7/2	〃
1427	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、沈線文。ミガキ。		にぶい黄橙　10YR7/3	〃
1428	弥生土器	壺	ヘラ描き木葉文。	ナデ。	灰白　10YR8/1	〃
1429	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、沈線文。ミガキ。	ユビオサエ、ナデ。	にぶい橙　5YR7/4	KY3区
1430	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、沈線文。ミガキ。	ナデ。	褐灰　5YR6/1	〃
1431	弥生土器	壺	段、ヘラ描き沈線、沈線文。		灰白　10YR8/1	〃
1432	弥生土器	壺	細いヘラ描き沈線文。ミガキ。	ナデ？。	にぶい橙　5YR7/3	〃
1433	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線２本、ミガキ？。		橙　5YR6/6	〃
1434	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、沈線文。ミガキ？。	ナデ？。	にぶい黄橙　10YR7/2	〃
1435	弥生土器	壺	段、ヘラ描き沈線、有軸木葉文。	ナデ。	灰白　10YR8/1	TO区
1436	弥生土器	壺？	貼付刻目突帯	ミガキ	灰黄褐　10YR6/2	〃

第278図　第３低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉１）（1/4）



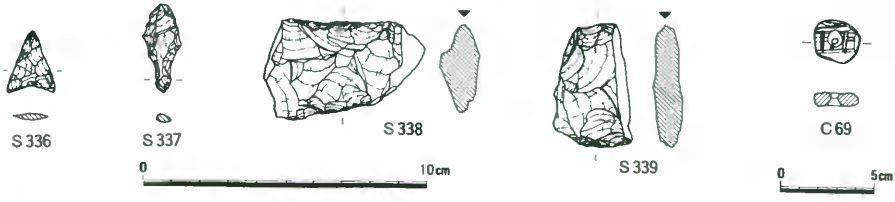
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1437	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ナデ。	ナデ。	灰白　2.5Y8/2	TO区
1438	弥生土器	甕	口唇部刻目。ユビオサエ。口縁部外面煤。	ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/3	〃
1439	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ハケメ。	ナデ？。	明褐灰　7.5YR7/2	〃
1440	弥生土器	鉢？	口唇下端部刻目。幅広の沈線による段。	ミガキ？。	明褐灰　7.5YR7/1	〃
1441	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。工具による段。	ユビオサエ、ナデ。	褐　7.5YR4/3	〃
1442	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。工具による段。	ナデ、ハケメ。	灰白　10YR8/2	〃
1443	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。工具による段。	ユビオサエ、ナデ。	灰黄褐　10YR5/2	〃
1444	弥生土器	甕	鋭いヘラ描き沈線１本。	ヨコミガキ。	淡橙　5YR8/4	〃
1445	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部下位に刺突文	ユビオサエのちナデ	にぶい橙　5YR6/4	〃
1446	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。		褐灰　7.5YR6/1	〃
1447	弥生土器？	甕？	口縁部貼付刻目突帯。	ナデ？	にぶい黄橙　10YR6/3	〃
1448	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部貼付刻目突帯　刻目は同時。	ユビオサエ。	灰白　7.5YR8/2	〃
1449	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部貼付刻目突帯。刻目は同時。	ナデ？。	灰白　10YR7/1	TO区
1450	弥生土器	甕	口唇下端部刻目？。口縁部貼付刻目？突帯　ヘラ描き沈線文。	ナデ？	橙　5YR7/6	〃
1451	弥生土器	壺	細いヘラ描き沈線。ヨコミガキ。		にぶい橙　5YR7/3	KY3区
1452	弥生土器	壺	底部ユビオサエ。		灰黄　2.5Y6/2	TO区
1453	弥生土器	壺	底部ユビオサエ、ナデ。	ナデ？。	橙　5YR7/3	〃
1454	弥生土器	壺	ミガキ？	ナデ？。	にぶい橙　5YR7/3	KY3区
1455	弥生土器	壺？			明赤褐　5YR5/0	TO区
1456	弥生土器	壺	ミガキ。		灰白　2.5Y7/1	〃
1457	弥生土器	甕	ミガキ、底部側面ユビオサエ。	ユビオサエ。	浅黄橙　10YR8/3	〃
1458	弥生土器	甕	底部外面剥痕		淡橙　5YR8/4	〃

第279図　第３低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉２）（1/4）

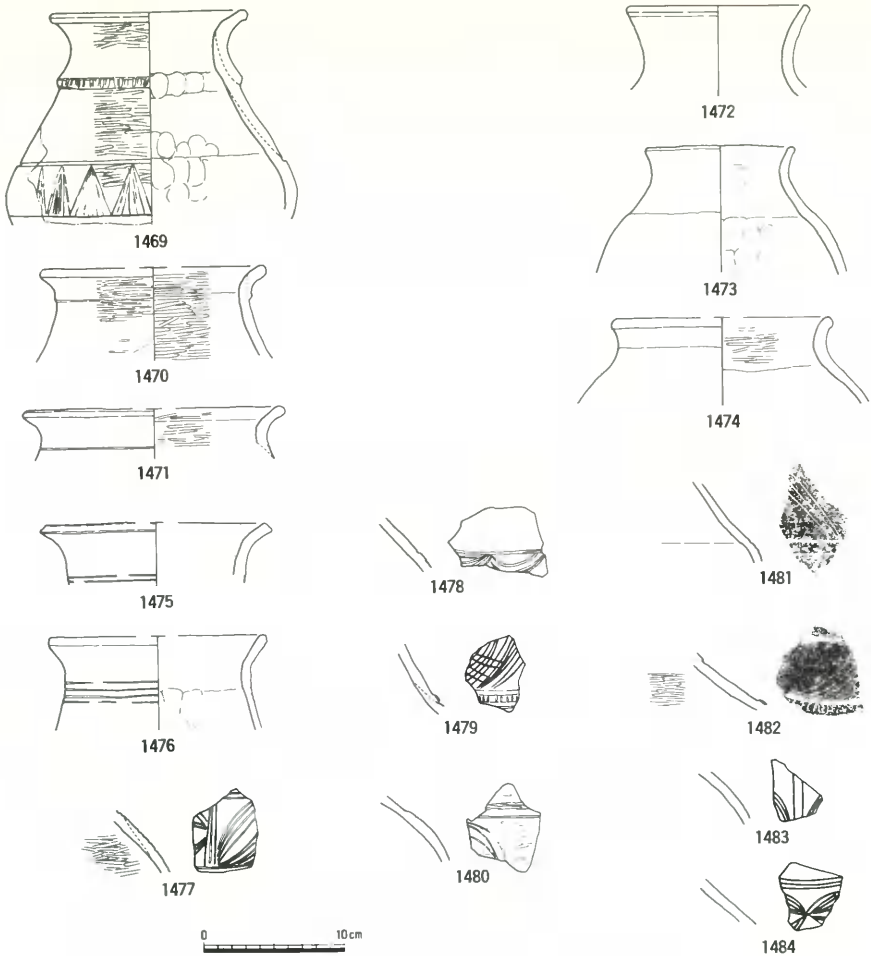


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1459	弥生土器	壺	ミガキ。	ヨコミガキ。	灰白　2.5Y8/2	TO区
1460	縄文土器？	浅鉢？			灰褐　5YR6/2	〃
1461	弥生土器	鉢？	胴部ヘラ描き沈線文。	ミガキ？。	灰白　10YR8/1	〃
1462	弥生土器	高杯？			にぶい橙　7.5YR7/4	KY3区
1463	弥生土器	鉢	胴部上半ヘラ描き沈線１本、下半３本。ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	灰白　10YR8/1	TO区
1464	弥生土器	鉢	口縁部下位ヘラ描き沈線１本。	ユビオサエ、ナデ？。	橙　2.5YR6/8	〃
1465	弥生土器	蓋	ミガキ。	ミガキ。	灰白　7.5YR8/2	〃
1466	弥生土器	蓋	ミガキ？。	ミガキ。	浅黄橙　10YR8/3	KY3区
1467	弥生土器	蓋			灰白　5YR8/2	〃
1468	弥生土器	壺	口唇部斜格子文。口唇部刻目。頸部貼付刻目突帯。		[illegible]赤褐　[illegible]YR[illegible]/4	TO[illegible]

第280図　第３低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉３）（1/4）

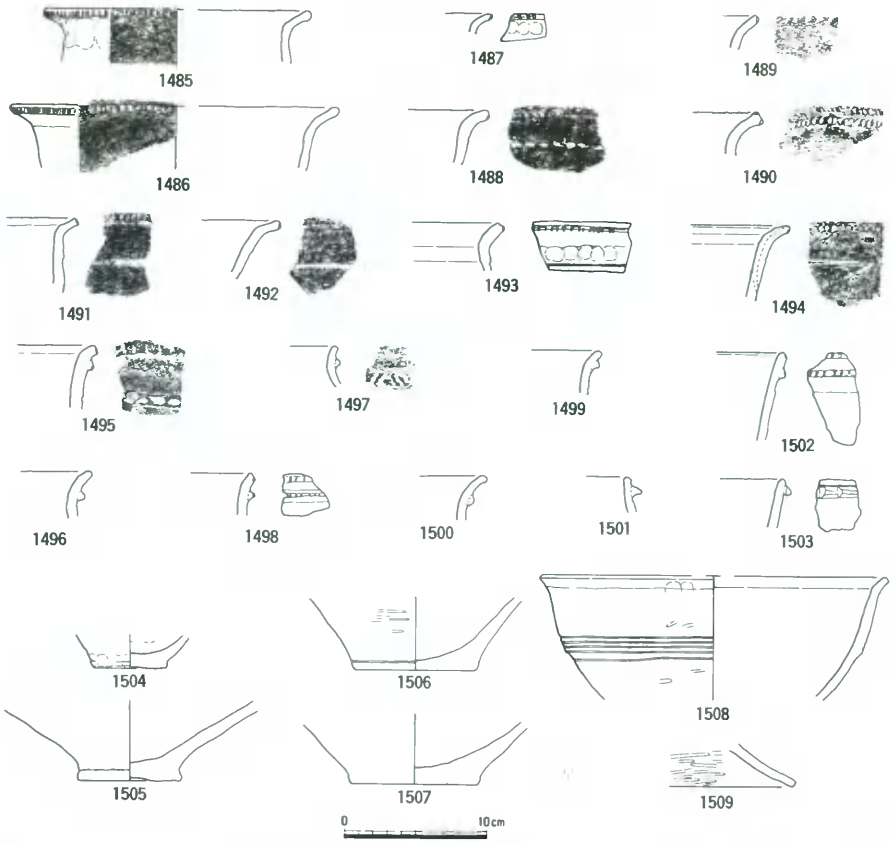


第281図　第３低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉４）（1/2）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1469	弥生土器	壺	頸部段に刻目。胴部ヘラ描き沈線文。ミガキ。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　10YR8/2	TO区
1470	弥生土器	壺	頸部段、ヨコミガキ。	ヨコミガキ。	にぶい黄橙　10YR7/3	〃
1471	弥生土器	壺	頸部ヘラ描き沈線１本。	ミガキ。	灰白　7.5YR8/2	〃
1472	弥生土器	壺	ミガキ？。	ミガキ？。	にぶい黄橙　10YR7/2	EN区
1473	弥生土器	壺	口頸部ヨコナデ？。	口頸部ミガキ？。	灰白　2.5Y8/2	TO区
1474	弥生土器	壺	ミガキ？。外面煤。	口縁部ヨコミガキ。	淡橙　5YR8/1	〃
1475	弥生土器	壺	頸部細く浅いヘラ描き沈線２本。	ミガキ？。	灰白　10YR8/2	〃
1476	弥生土器	壺	頸部細いヘラ描き沈線４本。		浅黄橙　10YR8/3	〃
1477	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、無軸木葉文。ミガキ。	ヨコミガキ。	明褐灰　7.5YR7/2	〃
1478	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、沈線文。	ユビオサエ、ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	〃
1479	弥生土器	壺	削り出し突帯に刻目。ヘラ描き沈線文。	ナデ。	浅黄橙　7.5YR8/2	〃
1480	弥生土器	壺	ミガキによる段。ヘラ描き沈線文。ミガキ。	ナデ。	灰黄　2.5Y7/2	K1区
1481	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線２本と円形刺突文。ヘラ描き沈線文。	ナデ。	灰白　7.5YR8/1	TO区
1482	弥生土器	壺	段、ヘラ描き沈線文、刻目。	ミガキ。	灰白　10YR8/2	〃
1483	弥生土器	壺	ヘラ描き木葉文。	ミガキ？。	灰白　10YR8/1	〃
1484	弥生土器	壺	ヘラ描き木葉文。	ナデ？。	灰白　7.5YR8/1	〃

第282図　第３低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉５）（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1485	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部ユビオサエ。	ナデ。	灰白　7.5YR8/2	TO区
1486	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部ヨコナデ？。	口縁部ヨコナデ？	にぶい黄橙　10YR7/3	〃
1487	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ユビオサエ。		にぶい黄橙　10YR7/2	EN区
1488	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部下位に刺突文。		にぶい橙　7.5YR7/3	TO区
1489	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。	ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/3	EN区
1490	弥生土器	甕	口唇部上下端に刻目。口縁部ヘラ描き沈線１本。	ヨコナデ？	灰褐　7.5YR4/2	TO区
1491	弥生土器	甕	口唇部刻目。ナデによる段。	ナデ。	灰白　7.5YR8/1	〃
1492	弥生土器	鉢？	口唇下端部刻目。凹線状の沈線。	ナデ。	灰白　2.5Y8/2	〃
1493	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。浅いヘラ描き沈線１本。	ナデ？。	灰白　10YR7/1	〃
1494	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。ヘラ描き沈線。	ナデ。	灰白　5YR8/2	〃
1495	弥生土器	甕	口唇部刻目　口縁部貼付刻目突帯　胴部ヘラ描き沈線２本と円形刺突文　刻目は同時	ナデ。	灰白　10YR8/1	〃
1496	弥生土器	甕	口縁部貼付突帯。		灰白　7.5YR8/2	〃
1497	弥生土器	甕	口唇部刻目？　口縁部貼付刻目？突帯　刺突文？。		にぶい橙　5YR7/4	〃
1498	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部貼付刻目突帯。	ナデ	灰白　5YR8/2	〃
1499	弥生土器	甕	口唇下端部刻目？。口縁部貼付刻目？突帯。		黄灰　2.5Y6/1	〃
1500	弥生土器	甕	口縁部貼付刻目？突帯。		灰白　7.5YR8/2	〃
1501	弥生土器	甕	口縁部貼付突帯。ヨコナデ？	ヨコナデ？。	灰白　10YR8/2	〃
1502	弥生土器	甕	口唇下端部刻目。口縁部貼付刻目突帯。		灰白　10YR8/2	〃
1503	縄文土器？	深鉢	口縁部貼付刻目突帯。		褐灰　7.5YR6/1	〃
1504	弥生土器	壺？	胴部ミガキ。底部側面ユビオサエ。		灰黄　2.5Y7/2	K1区
1505	弥生土器	壺	胴部ミガキ。	ミガキ	にぶい黄橙　10YR7/2	〃
1506	弥生土器	鉢？	胴部ミガキ　底部側面細く浅いヘラ描き沈線１本。	ナデ？。	灰白　2.5Y8/2	TO区
1507	弥生土器	壺		ミガキ？。	灰白　2.5Y8/1	〃
1508	弥生土器	鉢	胴部ヘラ描き沈線５本。ミガキ。	ミガキ？。	灰白　7.5YR8/2	〃
1509	弥生土器	蓋	ミガキ？。	ヨコミガキ。	灰白　7.5YR8/1	〃

第283図　第３低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉６）（1/4）

遺物は第３低位部の範囲内の弥生時代中期中葉以降と考えられる遺構および包含層から出土した遺物である。小片の土器については傾きの明らかでないものも多い。（平井）

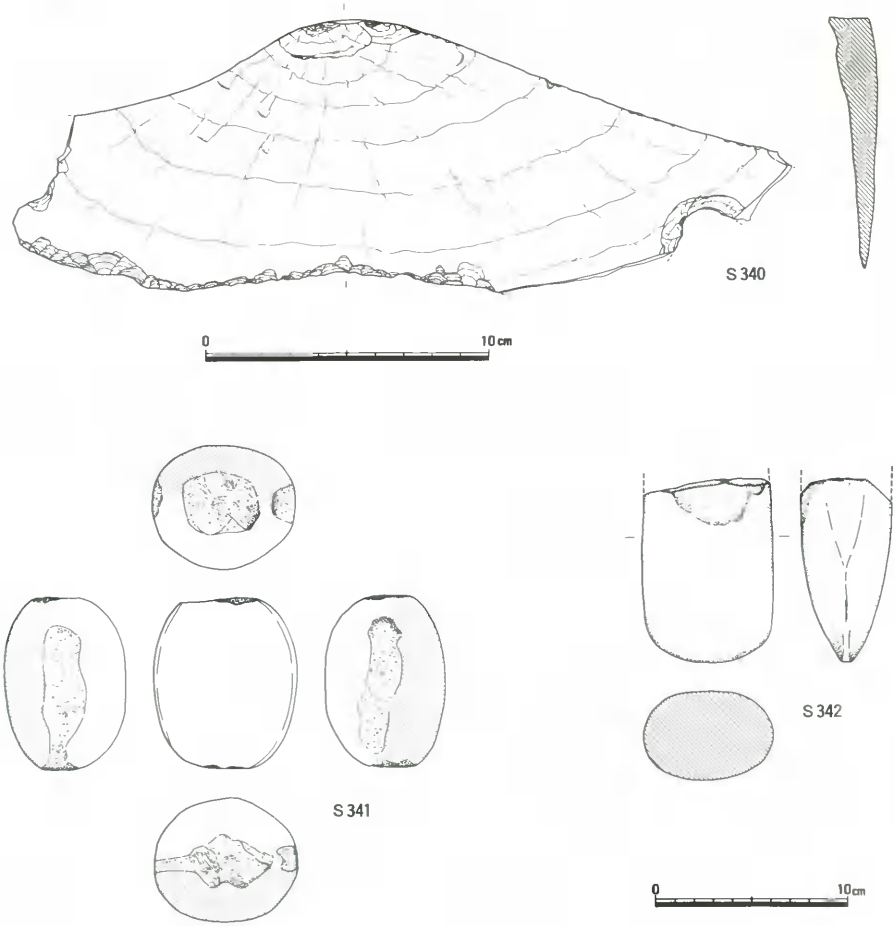
第３微高地（第128図）

第３低位部の東に拡がっている微高地である。今回調査の対象となったのはその一部で、北部分（ＥＮ区）と南部分（ＴＯ区）に区分できる。

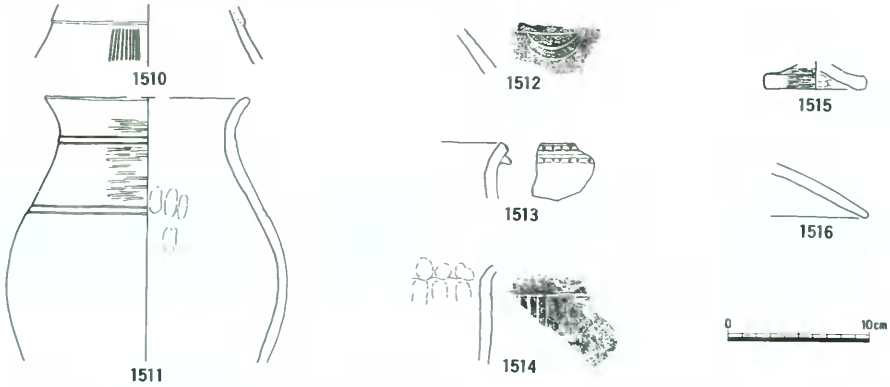
北部分では弥生時代前期から中期前葉の遺構・遺物は検出されなかった。南部分ではこれまで述べてきたような土壙や溝が検出されているが、これら以外には柱穴や土壙状の遺構が少数確認できたのみである。遺物は前述した遺構以外にはほとんど出土していない。（平井）

第４低位部（第128図）

調査範囲の南東部に拡がる低位部で、南には河道２が東西に蛇行しながら流れている。この低位部



第284図　第３低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉７）（1/2・1/3）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1510	弥生土器	壺	頸部段、細いヘラ描き沈線文。	ミガキ。	灰白　10YR8/2	H16区
1511	弥生土器	壺	頸部、胴部鋭いヘラ描き沈線。ミガキ。	ミガキ？。	灰黄褐　10YR6/2	〃
1512	弥生土器	壺	ヘラ描き沈線、沈線文。	ナデ？。	灰白　2.5Y8/2	〃
1513	弥生土器	甕	口唇下端部刷目，口縁部貼付刻目突帯。刻目は同時。		にぶい橙　7.5YR7/4	H17区
1514	弥生土器	甕？	ヘラ描き沈線、沈線文。	ユビオサエ、ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/4	〃
1515	弥生土器	蓋	ヨコミガキ。	ユビオサエ。	にぶい褐　7.5YR5/3	J0区
1516	弥生土器	蓋		口縁部内面煤。	灰黄褐　10YR6/2	〃

第285図　第４低位部出土遺物（弥生時代前期～中期前葉）（1/4）

のほとんどは後の弥生時代後期から中・近世に至るまでほぼ水田域として利用されており、弥生時代前期の状況は明らかではないが、微高地ではなく低位部であったと考えられる。

弥生時代前期の遺構としては前述した溝５以外には検出できていない。また遺構に伴わない遺物も少量出土したにすぎない。図示した土器は第４低位部から出土した弥生時代前期前葉から中葉の土器で、**1510**～**1512**がＨ16区、**1513**・**1514**がＨ17区、**1515**・**1516**から出土している。なお**1511**はＨ16西壁断面図（第451図）の22層から出土している。

（平井）

第５節　弥生時代中期中葉～後期の遺構・遺物

１．概　　要

弥生時代中期中葉～後期段階になると、それまでの第１低位部は微高地となり、第２・３・４低位部については多くの部分が水田域になっている。

微高地部分にはほぼ全面に遺構がひろがっており、時期はおもに中期後葉から後期前葉のもので、他に後期末葉のものがわずかに存在する。

検出されたおもな遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、井戸、土壙、土器棺墓、溝、水田などであるが全体的に後世の削平が著しい。竪穴住居は中期後葉３軒と後期前葉２軒が確認できた。このうち中期後葉の竪穴住居は第２低位部(東)でのみ確認できており、各住居は50ｍ以上の間隔があいている。一方後期前葉の竪穴住居はＡＴ区で２軒確認できたのみである。このように未調査区が多くあるものの、竪穴住居が少ないのが特徴である。一方、掘立柱建物は40棟確認できており、時期のはっきりしないものも多いが、ほとんどが中期後葉から後期前葉のものと考えられる。これらは切り合い関係をもつものや、近接しているものもあり、同時期に存在していた棟数は少なくなるものの、先の竪穴住居とは対照的に多いのが特徴である。また掘立柱建物には、柱の掘り方が大きく長方形プランの１×１間のものと、柱の掘り方が小さく桁行が２間以上のものがある。

井戸と考えた遺構は、中期後葉３基、後期前葉４基、後期末葉１基が検出できた。中期後葉の井戸は第２微高地(東)でのみ確認できており、先の竪穴住居とあわせてこの地区が中期後葉段階の集落の中心地であったことをうかがわせる。

土壙は46基を報告するが、これ以外にも遺物を伴わない土壙状の遺構が検出されている。

水田については調査後の土壌のプラント・オパール分析の結果に基づいていくつかの土層を水田層と想定したため、範囲や畦畔については不明確なものもある。

溝には用・排水路と、水田造成に伴う溝状の遺構とが検出できたが、各調査区間のつながりについては明確でないものが多い。

河道は中期後葉には埋没し、その後は水田化されていったものと考えられる。

遺物は、土器が井戸や河道からまとまって出土している他は多くなかった。また石器については、当該期以外に時期の特定できないものもこの節で報告している。　　(平井)

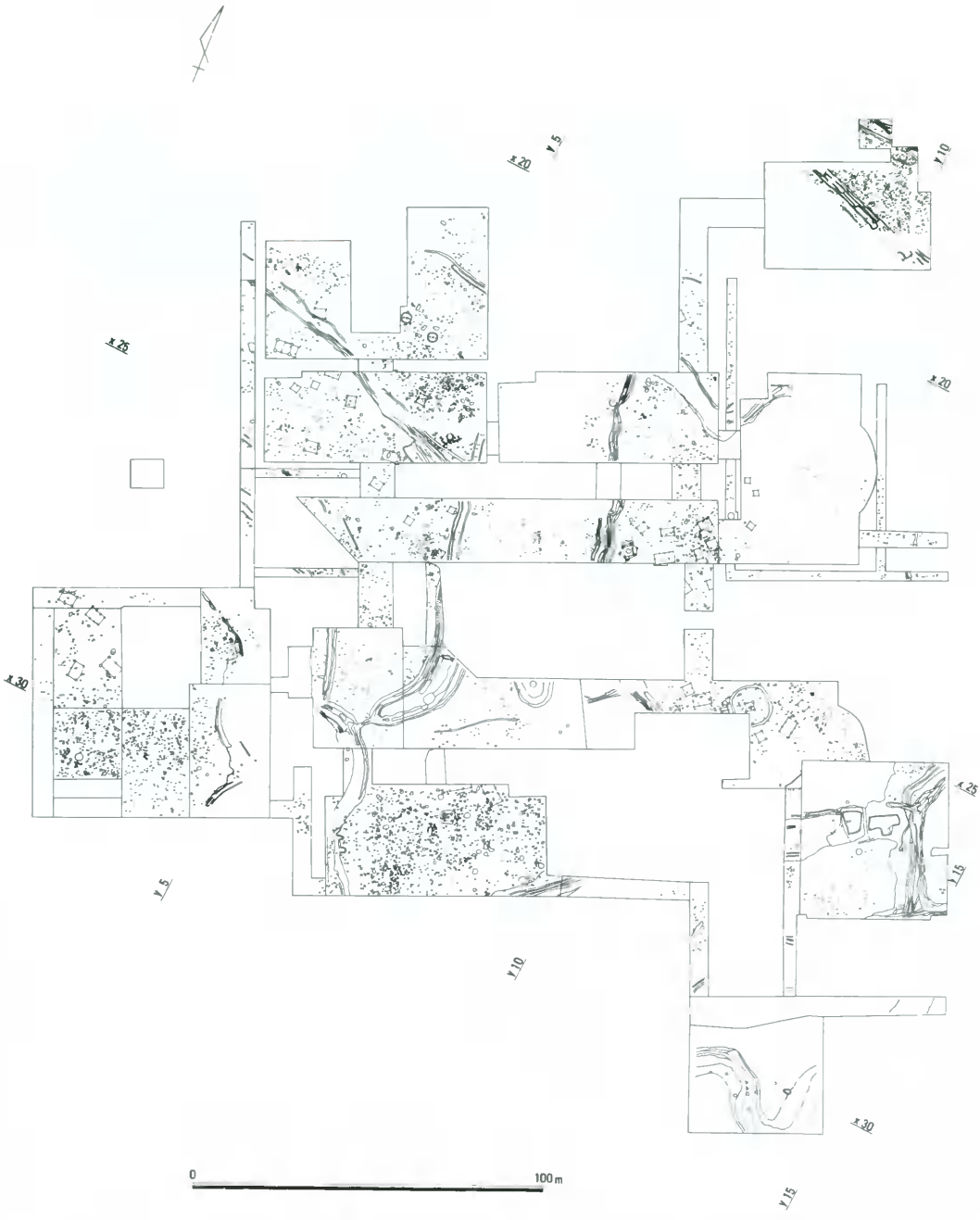
２．遺物・遺構

(1)　竪 穴 住 居

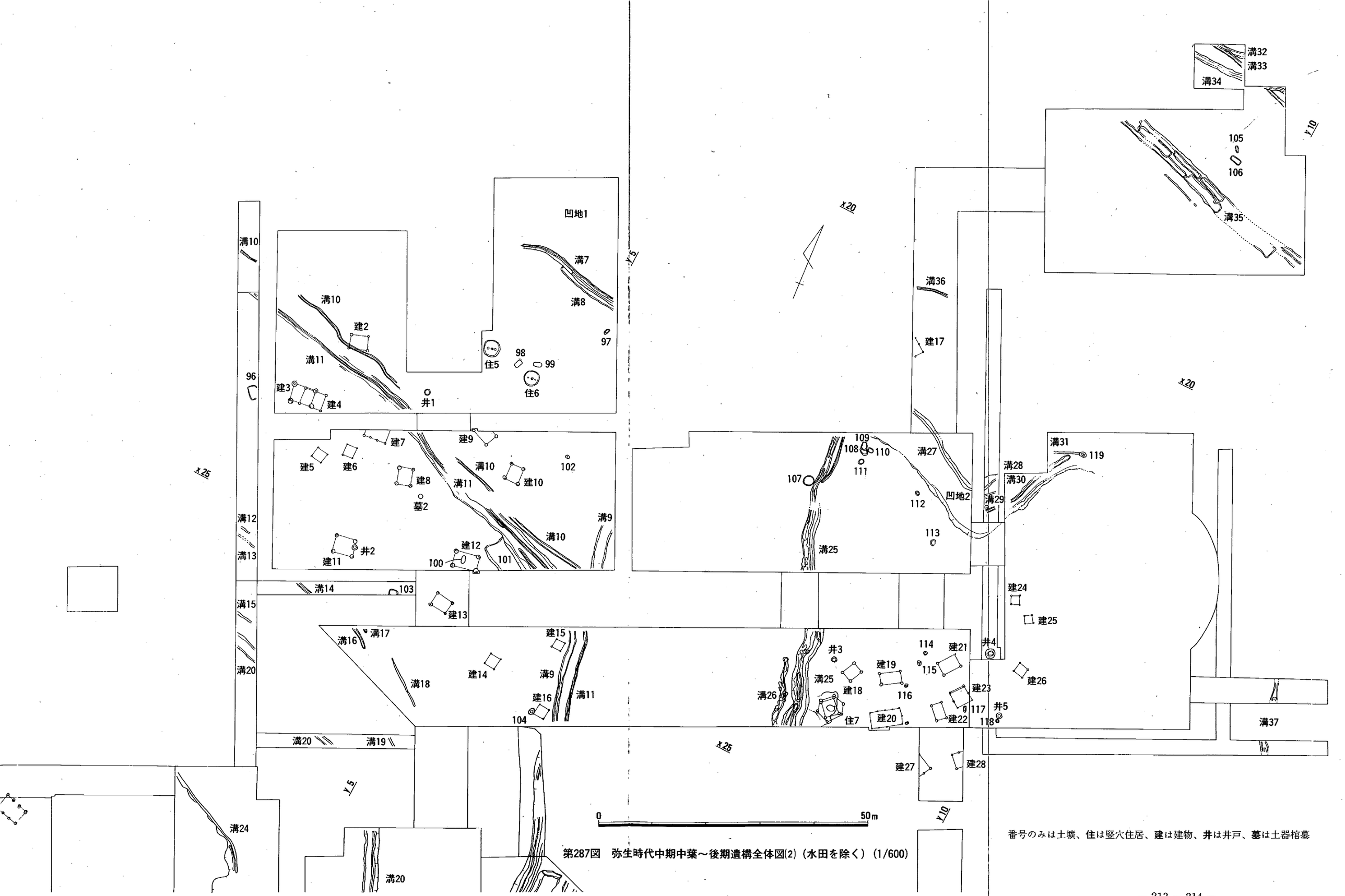
竪穴住居５　(第289図、図版15)

第２微高地(西)のＡＴ区南東部に所在し、竪穴住居６との距離６ｍ、井戸１との距離12.3ｍをそれぞれ測る。西半は当初の調査対象外であったが、この部分についてのみ調査範囲を広げて全掘した。

平面形は主軸を東西に置く隅丸方形で、南北長297㎝、東西長299㎝をそれぞれ測る。検出面からの深さは22㎝で、床面の海抜高は8.42ｍであり、面積は6.7㎡となる。壁体はほぼ直立し、幅13㎝、深さ10㎝前後の壁体溝が全周する。床面には貼り床はなく、ほぼ平坦である。主柱穴は２本で、柱間は

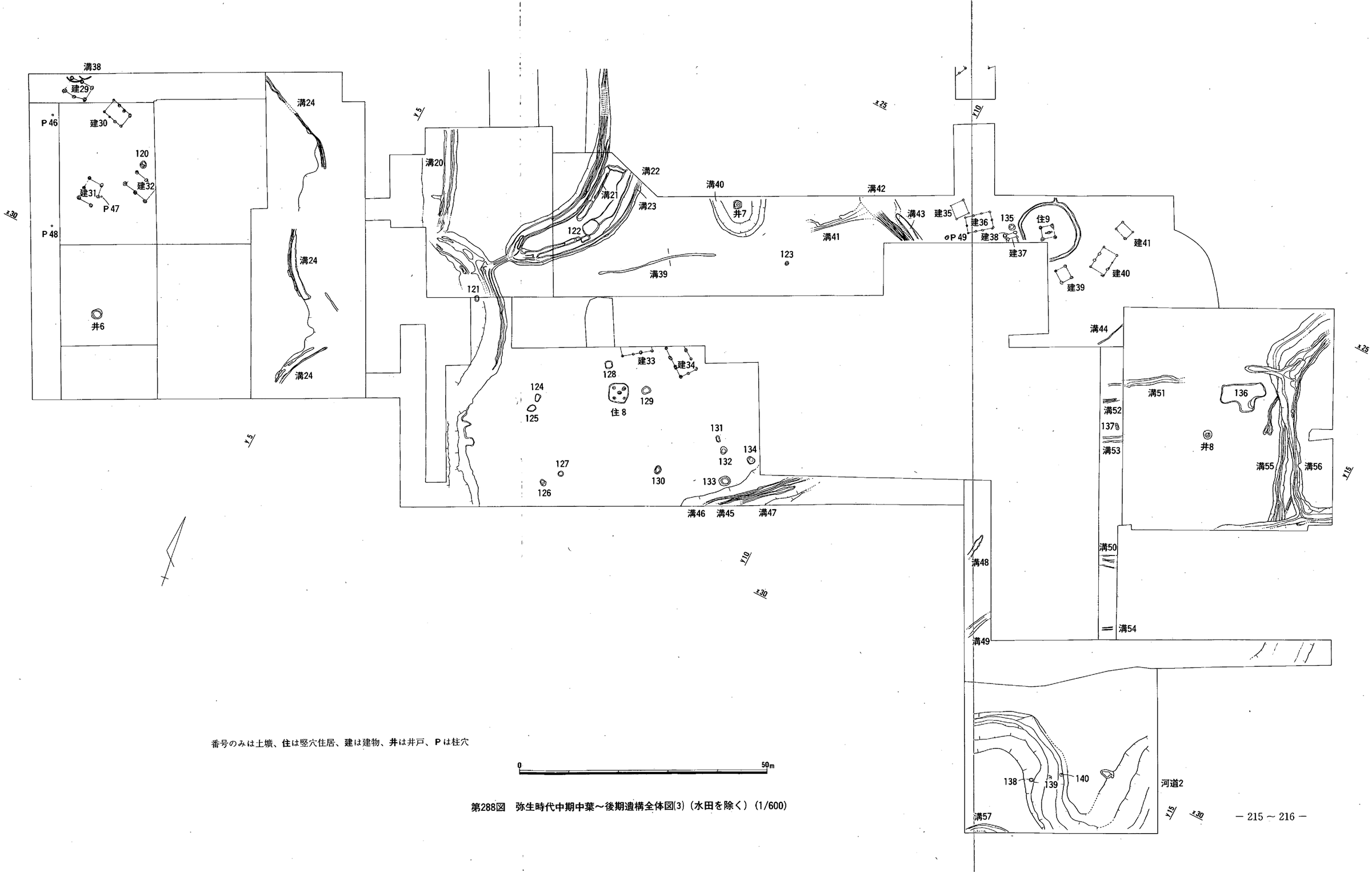


第286図　弥生時代中期中葉～後期遺構全体図(1)（水田を除く）（1/1500）



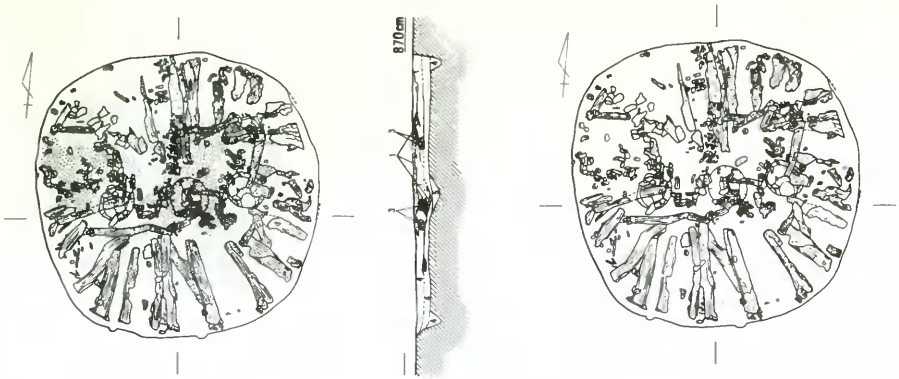
第287図　弥生時代中期中葉～後期遺構全体図(2)（水田を除く）（1/600）

番号のみは土壙、住は竪穴住居、建は建物、井は井戸、墓は土器棺墓



番号のみは土壙、住は竪穴住居、建は建物、井は井戸、Pは柱穴

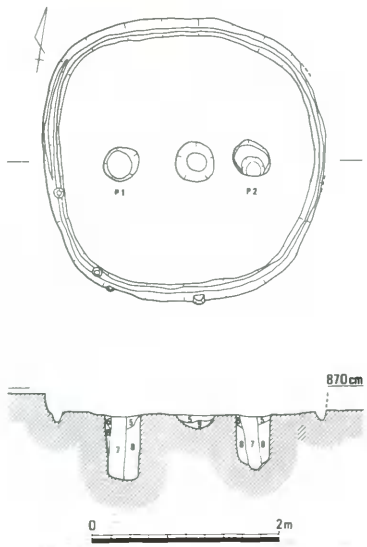
第288図　弥生時代中期中葉～後期遺構全体図(3)（水田を除く）（1/600）



1．焼土
2．炭化材（屋根材）
3．炭化材（棟木）
4．暗茶褐色土
5．褐灰色粘質微砂
6．黄色粘土
7．褐灰色粘質微砂（炭、焼土粒含む）
8．淡黄色粘質土
9．淡褐灰色粘質微砂

焼土

炭化材（屋根材）



第289図　竪穴住居５（1/60）

145cmであり、直近の壁体との距離は60cm前後である。柱掘り方は長径40cmと43cmの楕円形を呈し、深さは57cmと68cmで、いずれにも径15cm程度の柱痕跡が確認された。中央穴は主柱穴間のやや東よりに位置し、径40cm前後の円形で深さ13cmである。

この住居は焼失住居であり、炭化材及び焼土の分布状況は第289図左上のとおりである。中央部分では床面から８～15cm浮いた状態で炭化材の上に焼土が乗っており、周辺部では炭化材の下にも焼土が認められる。炭化材は構造材及び屋根材とも比較的遺存状況は良好であったが、いずれも床面から４～15cm浮いた状態で検出され、その間および下層には炭や焼土粒を含む暗茶褐色土が堆積している。構造材と考えられる炭化材を示したのが右上である。中央へ向いた垂木は検出時の幅20～30cmを測り、壁際での間隔20cm以上を示すが、主柱および棟木を識別することはできなかった。また、壁体に添う炭化材は認められず、壁体・床面ともに火災による熱影響と考えられる状況は認められなかった。

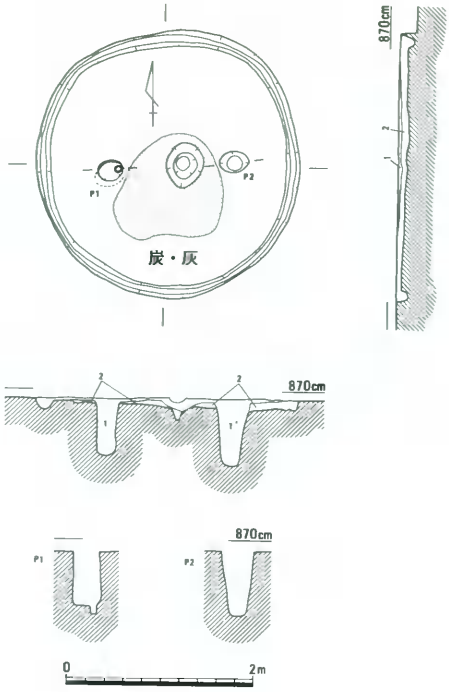
遺物は、中央穴・壁体溝を含む埋土中から弥生土器が小量出土しているが、いずれも小片である。時期は弥生時代後期前葉に比定される。　（光永）

竪穴住居６（第290図、図版16）

ＡＴ区南東部に位置し、土壙98・99との距離1.7ｍと0.8ｍを測る。

平面形は円形に近い隅丸方形で、主軸を東西に置き、南北長282㎝、東西長280㎝をそれぞれ測る。幅10～17㎝で深さ５㎝前後の壁体溝が全周しており、床面積は5.9㎡である。床面は南西部が高く、北東部へ向かってやや傾斜しており、北東部での海抜高は8.45ｍである。主柱穴は２本であり、柱間は125㎝、壁体との距離は55～65㎝である。柱掘り方は長径26㎝と31㎝の楕円形で、深さは65㎝を測り、西側の柱穴では底面に径７㎝の柱痕跡が認められた。中央穴は48×40㎝の楕円形で、深さ20㎝を測り、その南側に広く130×110㎝の範囲に炭・灰の掻き出しが認められる。

遺物は、柱穴を含む埋土から弥生土器が小量出土しているが、いずれも小片である。時期は、弥生時代後期前葉に求められる。　（光永）



1．暗茶褐色土
（炭含む）
2．暗灰茶褐色土

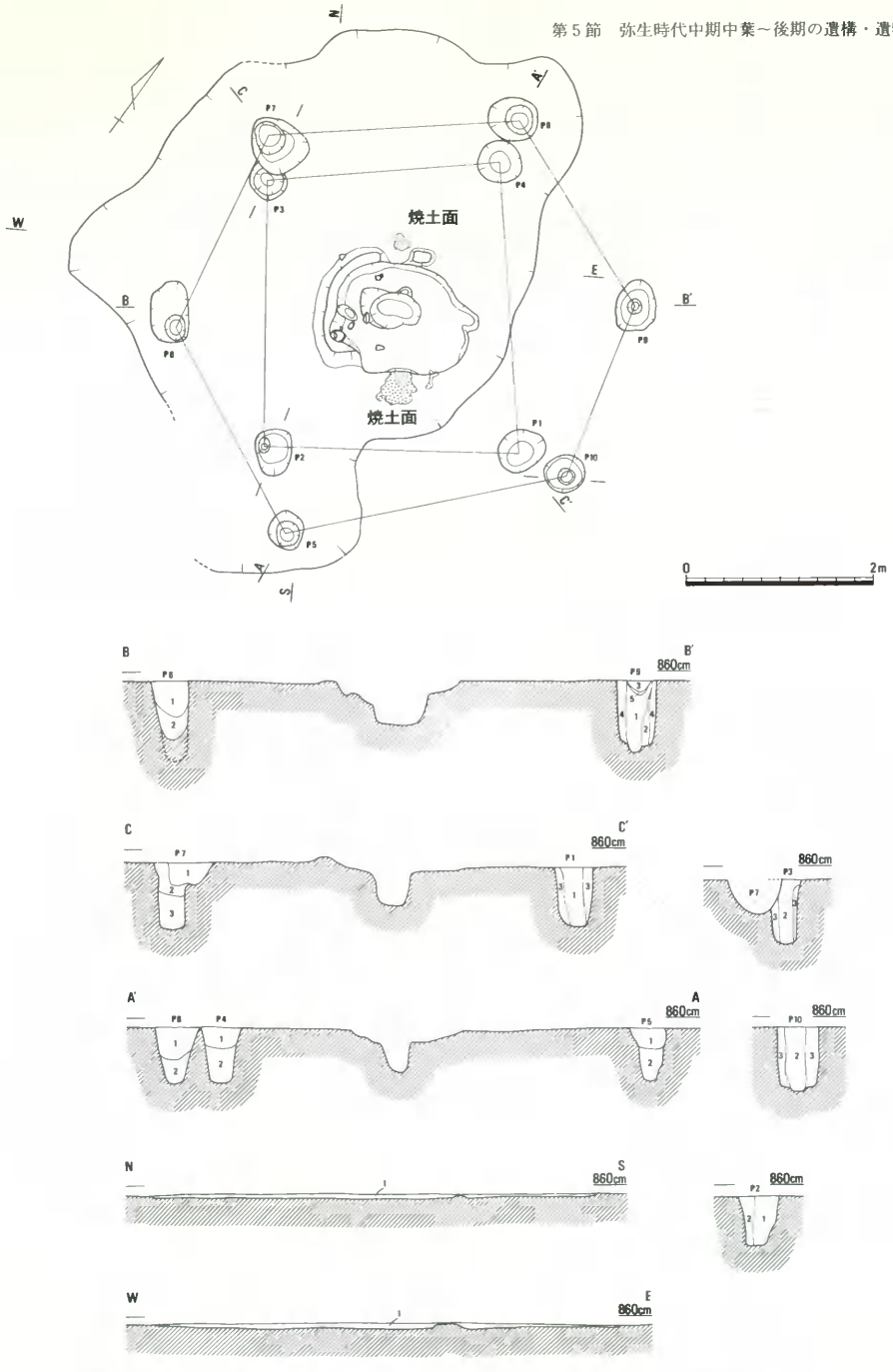
第290図　竪穴住居６（1/60）

竪穴住居７（第291・292図、図版16）

第２微高地（東）のＩＮ区の東半において検出した。検出時にはすでに床面の一部にまで後世の削平を被っており、住居の埋土は不定形な形で残存していたにすぎない。床面までの埋土の深さは最深部でも約５㎝にすぎない。したがって平面形は柱の配置からは円形と推定できるが明らかではなく、壁体溝も検出できなかった。

住居の中央部には土壙が掘られていた。この中央穴の平面形は二段掘りの状況を呈し、上段部は147×122㎝程の不整楕円形を呈し、下段部には中央部に約50×40㎝の柱穴状の掘り込みが認められた。深さは最深部で床面から約45㎝を測る。この土壙の埋土は、住居全体の埋土と明確な違いはなかった。またこの中央穴の西から北の縁辺には、第292図に示したように幅約20㎝の土手状の高まりが認められた。この高まりは断面図における２層の存在から盛土によってつくられたものと考えられる。さらにこの中央穴の北西部と南東部の縁辺部の土手状の高まりの存在しない床面上には焼土面が認められた。特に南東部の焼土面では強い比熱を被った痕跡が断面観察によって確認できた。

柱穴は合計10本確認できた。各柱穴の掘り方は基本的に約50×40㎝の円形～楕円形で、深さは床面から約50～80㎝を測る。またＰ１・３・９・10では柱痕跡が確認できた。それによると柱の大きさは直径15～20㎝の円柱であったと考えられる。

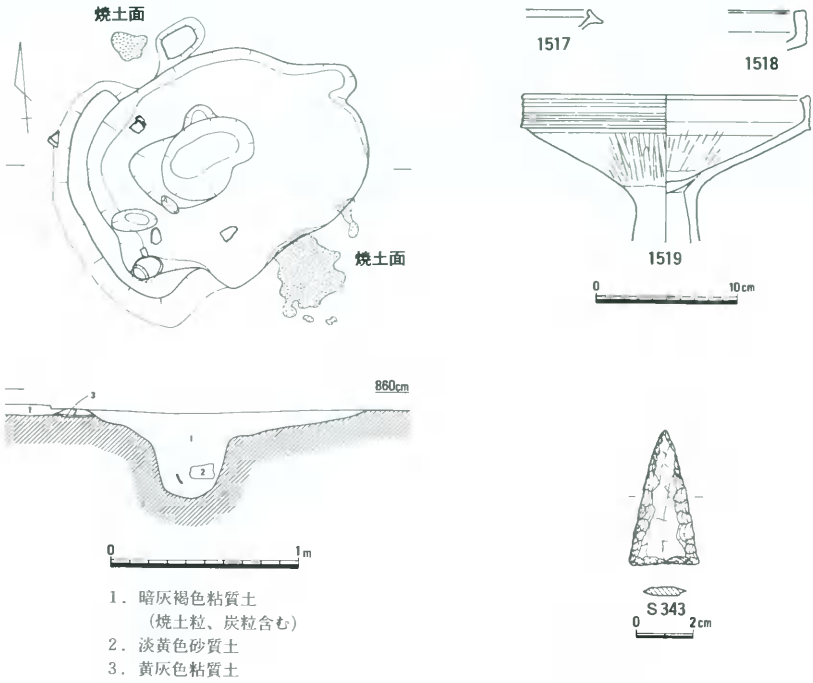


1．褐灰色粘質土　2．褐灰色粘質土（黄色粘質土ブロック含む）　3．黄灰色粘質土　4．淡黄灰色粘質土　5．暗褐灰色粘質土

第291図　竪穴住居７(1/60)

この竪穴住居は確認された柱穴の配置およびＰ３とＰ７との切り合い関係から、当初Ｐ１～４の４本柱だったものが、建て替えによってＰ５～10の６本柱になったものと考えられる。ただし中央穴については掘り直しは認められなかった。

遺物は埋土および床面上から土器・石器が少量出土したのみである。第292図**1519**と**S 343**は床面上から出土している。時期はこれらの出土遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。　（平井）

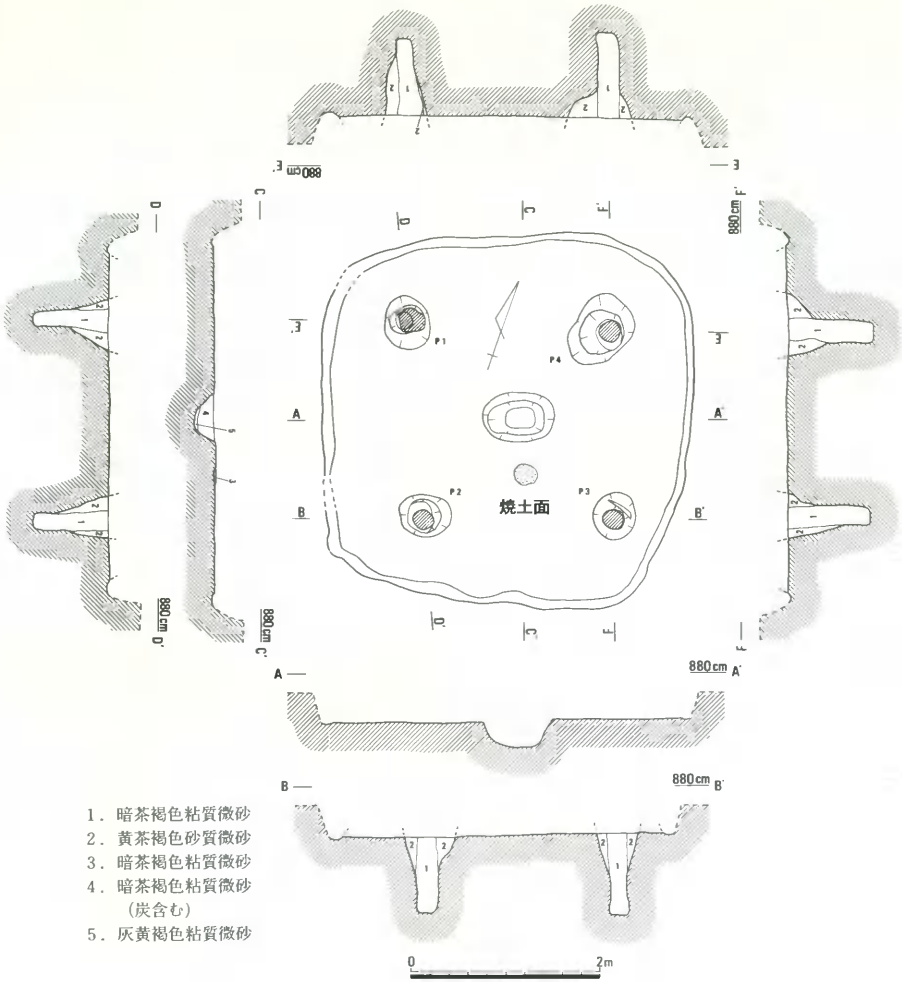


挿図番号	種別	器種	特徴		色調	備考
			外面	内面		
1517	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	灰白　10YR8/1	
1518	弥生土器	高杯	口縁部凹線４本。	口縁部ヨコナデ。	灰白　10YR8/1	
1519	弥生土器	高杯	口唇部凹線４本。杯部ミガキ。	杯部ミガキ。脚部ケズリ。	橙色　5YR8/1	

第292図　竪穴住居７中央穴（1/30）・出土遺物（1/4・1/2）

竪穴住居８（第293図、図版16）

第２微高地上の南に位置する竪穴住居で、壁体溝の深さ３cmとかろうじて検出できた。平面形は南がやや狭い隅丸方形で、一辺3.9mを測る。４本の主柱は壁体溝から50cm前後離れており、柱間は北・西辺で２m、南・東辺で2.1mを測る。柱穴の平面は径50cmの円形で、深さ80～90cm以上である。床面中央では楕円形のピットを検出した。長さ85cm、幅53cm、深さ21cm以上を測り、埋土中に炭が混じる。ピットの南東35cmでは焼土面を検出している。時期は弥生時代中期後葉と思われる。（柴田）



第293図　竪穴住居８（1/60）

竪穴住居９（第294～297図、図版17）

第２微高地（東）のＫＹ３区において検出した。検出できたのは６本の柱穴と中央穴および竪穴住居の周囲をめぐっていたと考えられる溝のみであった。周辺には建物35～41を検出しているが、柱穴の配置や中央穴の存在などから竪穴住居であると認識し、本来の住居の床面よりも深く後世に削平を被ったものと考えた。

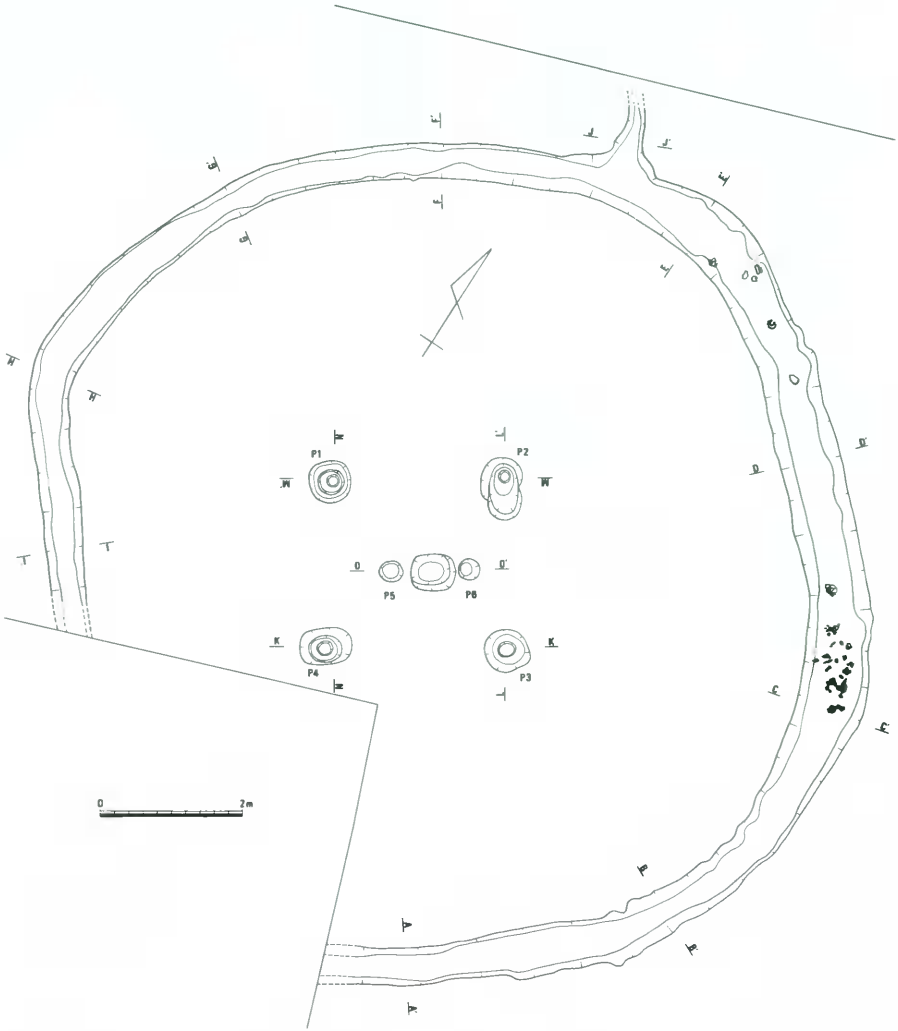
柱穴は中央穴を取り囲むようにＰ１～４がほぼ正方形に配置されている。これらの柱穴の掘り方は径60～70cmの円形で、深さは検出面から60～70cm残存していた。

一方これらの柱穴以外に中央穴の東西の両脇に、径約30cmのＰ１～４よりも規模が小さくて浅い柱穴Ｐ５・６が検出できた。このＰ５・６については、この住居の主柱穴になるのか、何らかの別の用

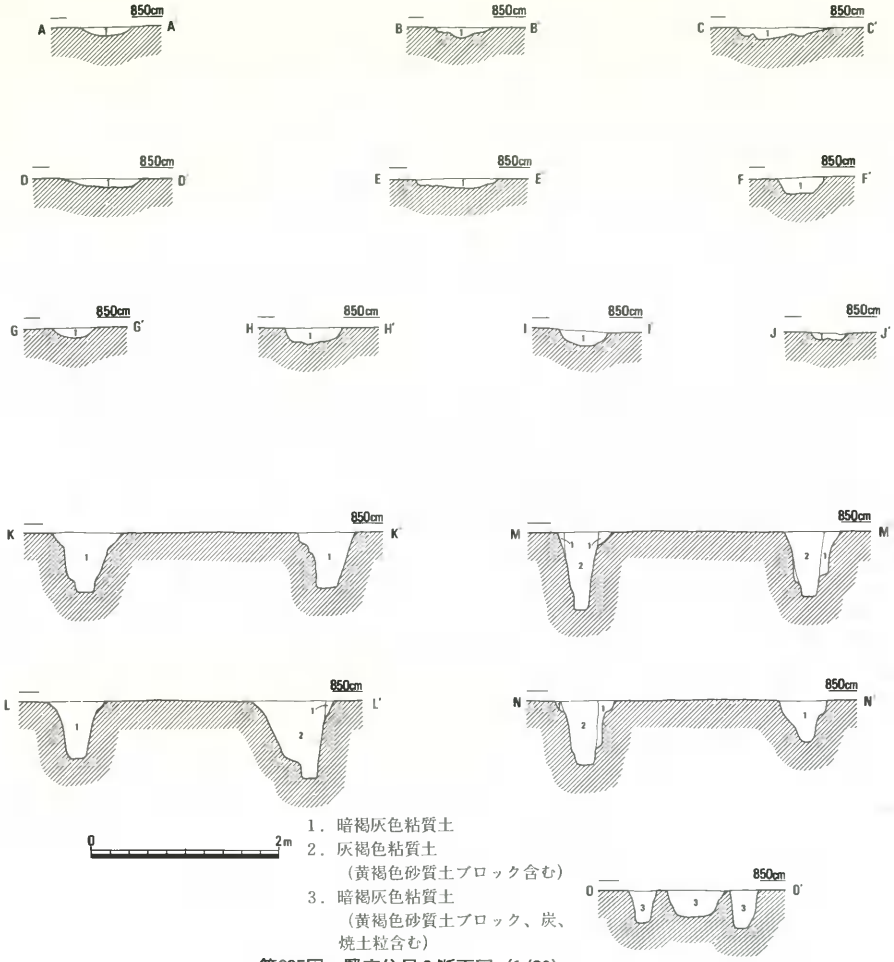
途に用いられたものなのかは判断できなかった。

竪穴住居の中央穴と考えた土壙は、平面形が62×54cmの隅丸方形を呈し、深さは29cmが残存していた。埋土はＰ５・６と同じ炭粒と焼土粒および黄褐色砂質土ブロックを含む暗褐色粘質土が一層のみであった。

ところで、注目されるのはこれらの柱穴や中央穴を中心としてその周囲をめぐるように検出された溝である。調査区外で未調査の部分があるものの、平面形は内法で約10.8×9.8ｍの隅丸方形状を呈する。また北側には、図のような突出部分が確認できたが、調査区外にのびており全容は不明である。検出できた溝の幅は、突出部以外では50～95cmで、深さは７～17cmが残存していた。底面には凹凸が



第294図　竪穴住居９（1/80）



第295図　竪穴住居９断面図（1/60）

あり、高さは海抜8.2～8.3ｍの間におさまっており、ある方向に向かって低くなる状況は認められなかった。なお突出部分は検出が遅れたため幅はせまくなっているが、本来は他と同じくらいあったものと考えられる。

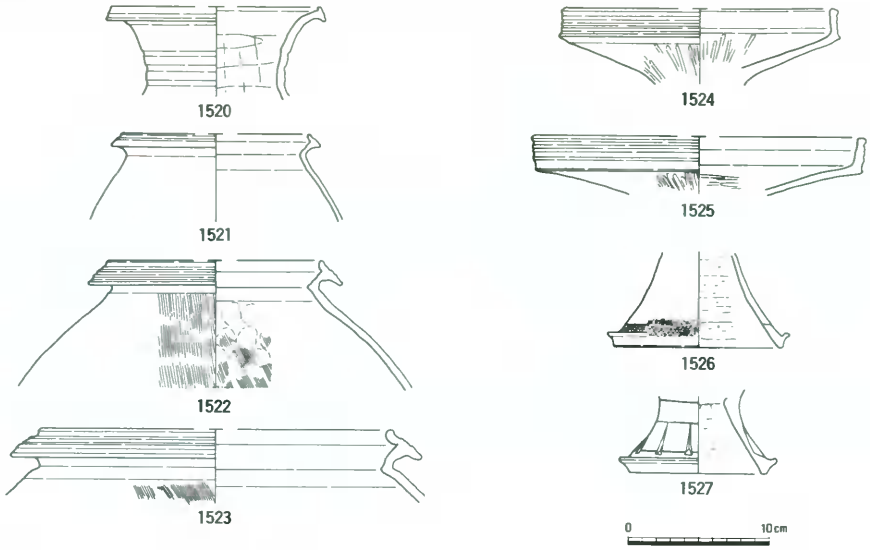
こうした検出状況からこの住居は本来約5.5×6.5ｍ前後の隅丸方形を呈する竪穴住居で、周囲に１～２ｍ前後の周堤が存在し、その外側に溝をめぐらせていたと想定できるのではなかろうか。

遺物は東側の溝の埋土中から炭片とともに第296・297図に示したような土器・石器が少量出土している。**Ｓ344**は鏃である。**1520**は壷、**1521**～**1523**は甕、**1524**～**1526**は高杯で、**1527**は台付き鉢の脚部ではなかろうか。

これらの遺物から時期は、弥生時代中期後葉と考えておきたい。

（平井）

第296図　竪穴住居９
出土遺物(1)（1/2）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1520	弥生土器	壺	口唇部ヨコナデ。頸部凹線３本。	口縁部ヨコナデ。頸部シボリ、ナデ。	浅黄橙　10YR8/3	
1521	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/3	
1522	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ハケメ。	褐灰　10YR4/1	
1523	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	灰黄褐　10YR6/2	
1524	弥生土器	高杯	口縁部凹線４本。杯部ミガキ。	杯部ミガキ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1525	弥生土器	高杯	口縁部凹線４本。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	灰白　10YR8/2	
1526	弥生土器	高杯	脚部下端ヘラ描き斜格子文。	脚部ケズリ。	浅黄　2.5Y8/3	
1527	弥生土器	台付鉢	ヘラ描き沈線３本。脚端部ヨコナデ。	ユビオサエ、ケズリ。	にぶい黄橙　10YR8/2	

第297図　竪穴住居９出土遺物(2)（1/4）

(2)　建　　物

建物２（第298図）

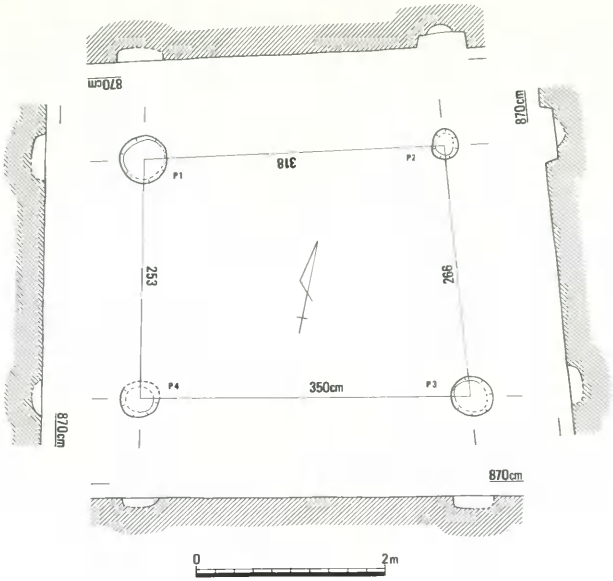
ＡＴ区南西部に位置し、溝10にＰ４を削られている。主軸を東西に置く１×１間の掘立柱建物で、平面形は台形を呈し、柱間は桁行で318cmと350cm、梁間で253cmと266cmをそれぞれ測る。柱掘り方の平面形はいずれも楕円形で、上層を側溝で削られたＰ２を除いて、長径41～50cm、深さ10～13cmの規模であり、柱痕跡は確認されなかった。遺物は出土していないが、溝10との関係から、弥生時代中期後葉に比定される。（光永）

建物３（第299～302図、図版17・18）

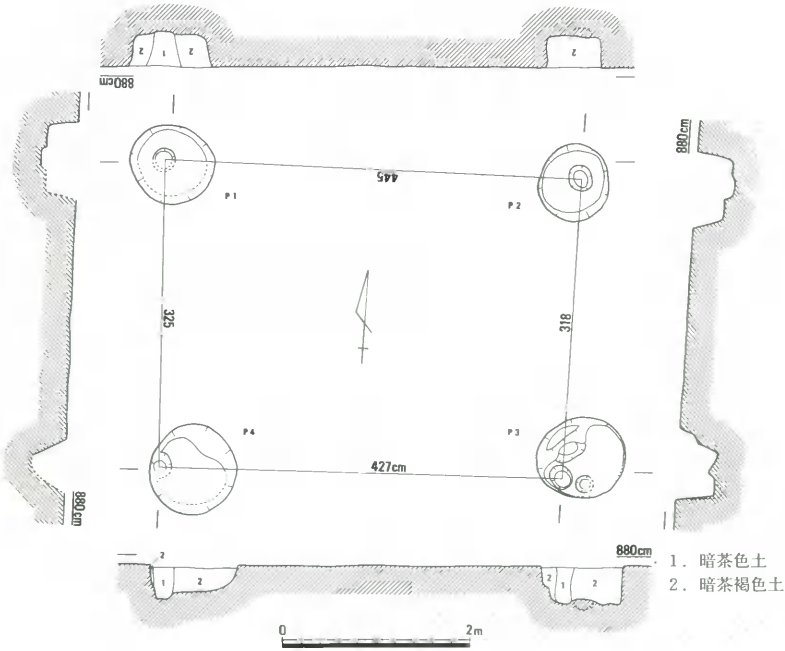
ＡＴ区南西隅に位置して、建物４と重複し、土壙96との距離６ｍを測る。

主軸を東西に置く１×１間の掘立柱建物で、平面形は長方形を呈し、柱間は桁行で445cmと427cm、梁間で、325cmと318cmをそれぞれ測る。柱掘り方の平面形は円形に近い楕円形で、長径83～96cmを測り、深さは35～42cmである。４本とも底面から５cmくぼんだ状態で柱痕跡が認められ、その径は12～17cmである。

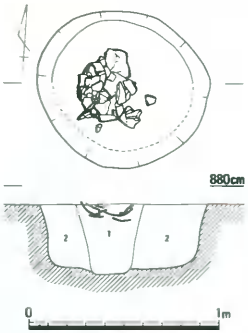
Ｐ１およびＰ２においては、柱抜き取り跡の埋土上層から弥生土器が一括出土している。Ｐ２にお



第298図　建物２(1/60)

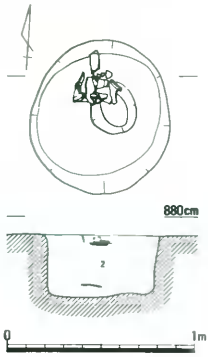


第299図　建物３(1/60)

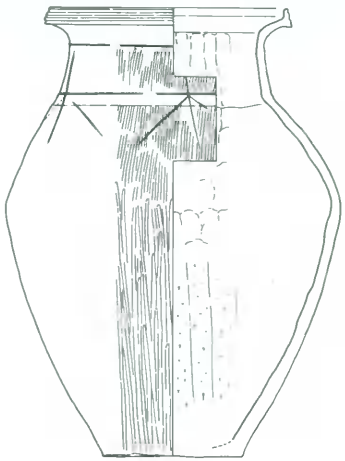


1．暗茶色土
2．暗茶褐色土

第300図　建物３、Ｐ１(1/30)

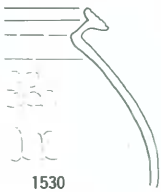


第301図　建物３、Ｐ２(1/30)



1528

1529



1530

0　10cm

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1528	弥生土器	甕	口唇部凹線３本。頸部、胴部ヘラ描き沈線文、ハケメ、ミガキ。	ユビオサエ、ケズリ。	浅黄橙　10YR8/3	
1529	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ナデ。	褐灰　10YR6/1	
1530	弥生土器	甕	口唇部凹線５本。胴部粗いハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ナデ。	灰白　5Y8/2	

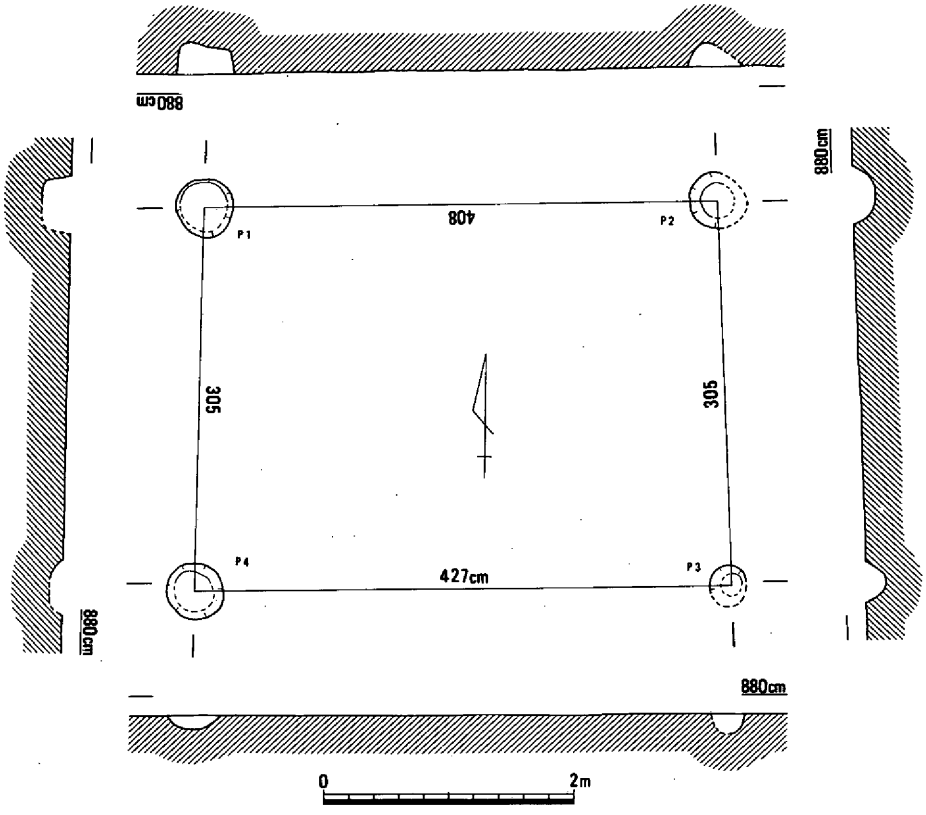
第302図　建物３出土遺物（1/4）

いては土層断面において柱痕跡が明瞭ではないが、平面的出土位置は柱抜き取り跡に相当すると考えられる。弥生土器の壺**1528**がＰ１から、壺**1529**、甕**1530**がＰ２からの出土である。これらにより、時期は弥生時代後期前葉に求められる。　（光永）

建物４（第303図）

ＡＴ区南西隅に位置して、建物３と重複し、建物７との距離９ｍを測る。

主軸を東西に置く１×１間の掘立柱建物で、平面形は長方形を呈し、柱間は桁行で408cmと427cm、梁間で305cmをそれぞれ測る。柱掘り方の平面形は円形に近い楕円形で、長径45cm前後、深さ10～



第303図　建物４(1/60)

25cmである。柱痕跡は確認されなかった。

遺物は、Ｐ４から少量の弥生土器が出土しており、時期は弥生時代後期に比定される。　(光永)

建物５（第304図）

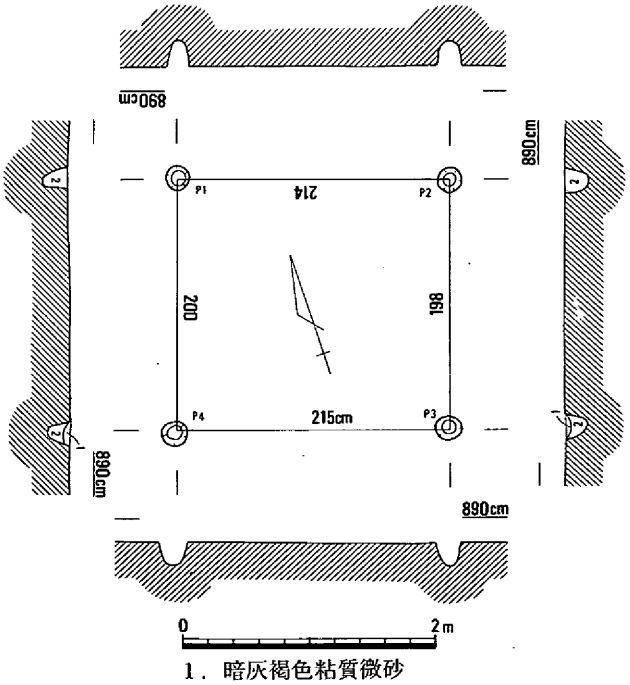
第２微高地(西)の北半に位置する。１×１間で、東西に若干長いがほぼ正方形に近い平面形を呈する。柱穴は径20cm前後と小さく、柱痕も認められなかった。深さは約20～30cmを測る。時期は埋土および周囲の状況より、弥生時代中期後葉～後期前葉と考えられる。　(久保)

建物６（第305図）

建物５の東に位置する。規模や柱穴の形態が類似しており、埋土も同じである。遺物は出土していないが建物５と大差ないと考えられる。　(久保)

建物７（第306図）

建物６の北東に位置する。北側は調査区外になり全体の規模は不明であるが、東西



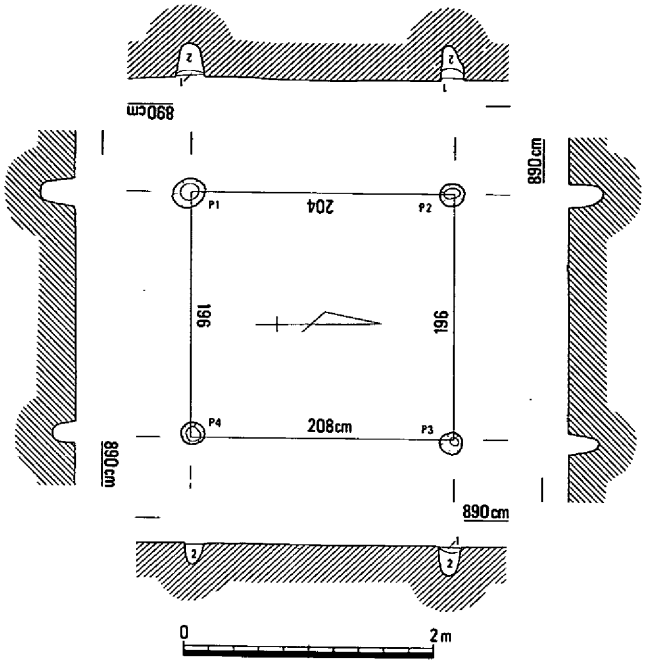
1．暗灰褐色粘質微砂
2．黒褐色粘質微砂

第304図　建物５(1/60)

３間分を検出した。柱穴は径30cm強の円形で、深さは12～20cmを測る。柱痕はＰ１～３で確認され、柱痕径は約14cmである。埋土の状況から弥生時代中期後葉～後期前葉に属すると考えられる。　　（久保）

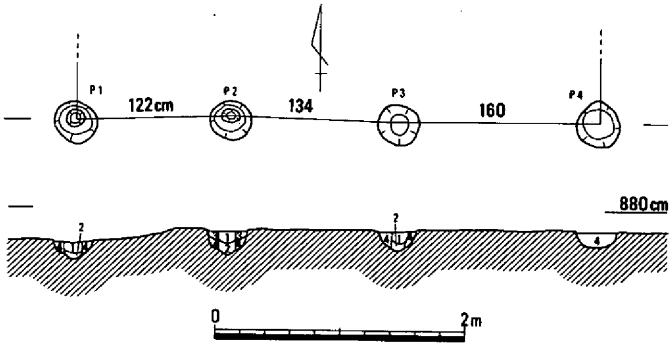
建物８（第307図）

建物７の南東に位置する。規模は１×１間で、桁行340cm前後、梁間260cm前後を測る。柱穴の規模は建物５～７と比べて大きく、径50～60cmを測り、深さは40cmをこえる。柱痕は４本とも確認されているが上面を褐灰色粘質微砂によって覆われており、柱の抜き取りがあった可能性が考えられる。柱痕の位置はいずれも外側の端による特徴を有している。柱穴内埋土のうち５～９層は基盤に似た黄色土と、黄色土のブロックが混在する暗褐色土との互層をなしており、版築状に丁寧に据えられた状況がうかがえる。図化しえなかったが土器細片が少量出土しており、弥生時代中期後葉～後期前葉に比定される。　　（久保）



１．暗灰褐色粘質微砂　　２．黒褐色粘質微砂

第305図　建物６（1/60）



１．暗褐灰色粘質微砂　２．暗灰色砂質土　３．暗灰褐色粘質微砂
４．暗褐灰色粘質微砂
（黄色土粒含む）

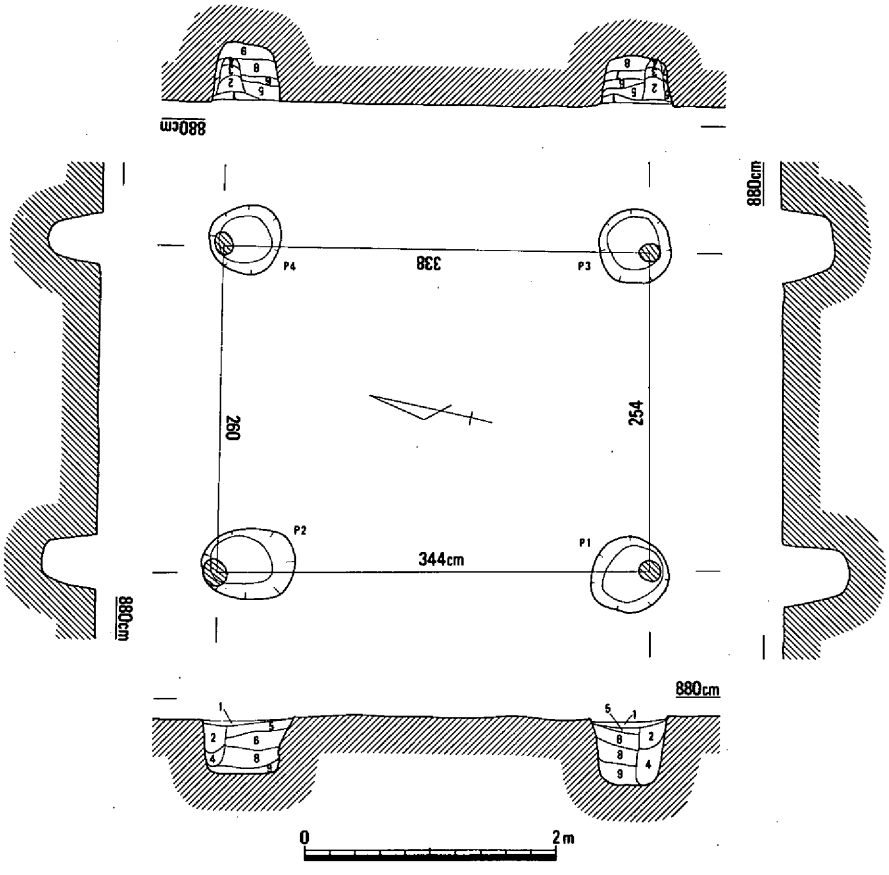
第306図　建物７（1/60）

建物９（第308図）

建物８の北東に位置する。調査区内ではＬ字形に３本の柱しか検出できなかったが、おそらく建物８に類似する１×１間の長方形の建物になると推定される。柱穴は径約55cm、深さ30～40cm、柱痕径10～15cmで、埋土は建物８と同一の状況を示している。遺物は出土していないが埋土の状況より、建物８と同時期もしくは大差ない時期に存在したと考えられる。（久保）

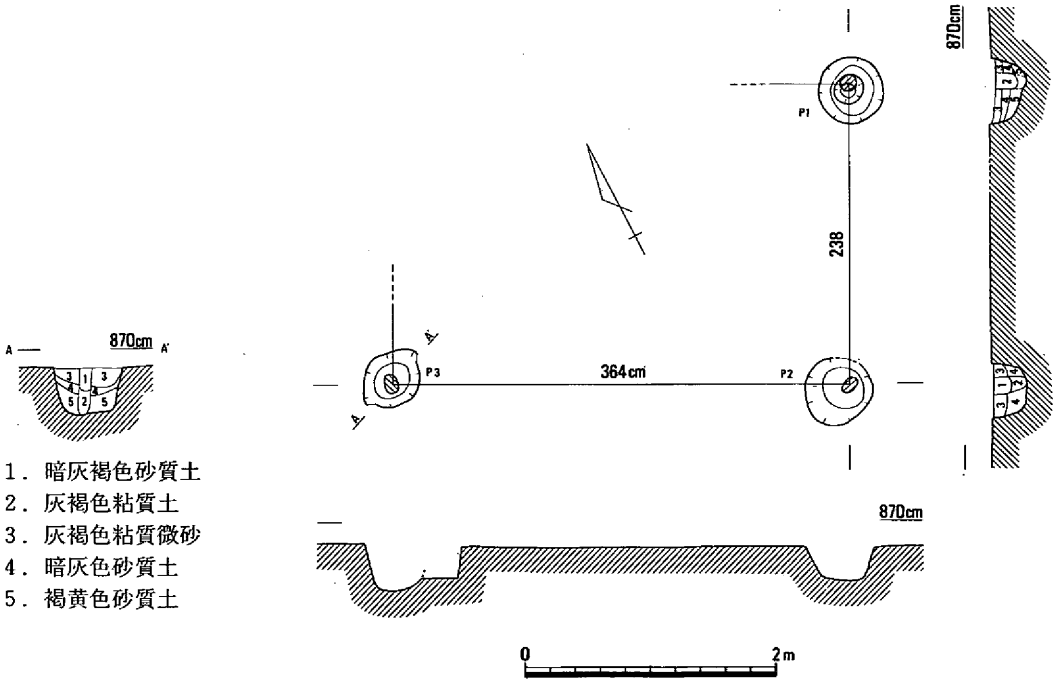
建物10（第309～311図、図版18）

建物９の東に位置する。１×１間の長方形の建物である。柱穴の規模は、Ｐ１は楕円形であるが他は径40～60cmの円形を呈し、深さは50～65cmを測る。柱痕径は15～20cmである。柱痕はほぼ中央に位置するが、埋土の状況は他と同じく版築状に互層をなす。Ｐ１およびＰ３においては柱痕内から土器が出土している。Ｐ１は既に破片の状態となった土器片をつめこんだような状態で出土しており、人為的に土器を埋めたと考えられる。柱痕抜き取りに際して何らかの行為が行われたと想定できる。柱痕内から出土した土器により、弥生時代中期後葉に廃絶されたと考えられる。　　（久保）



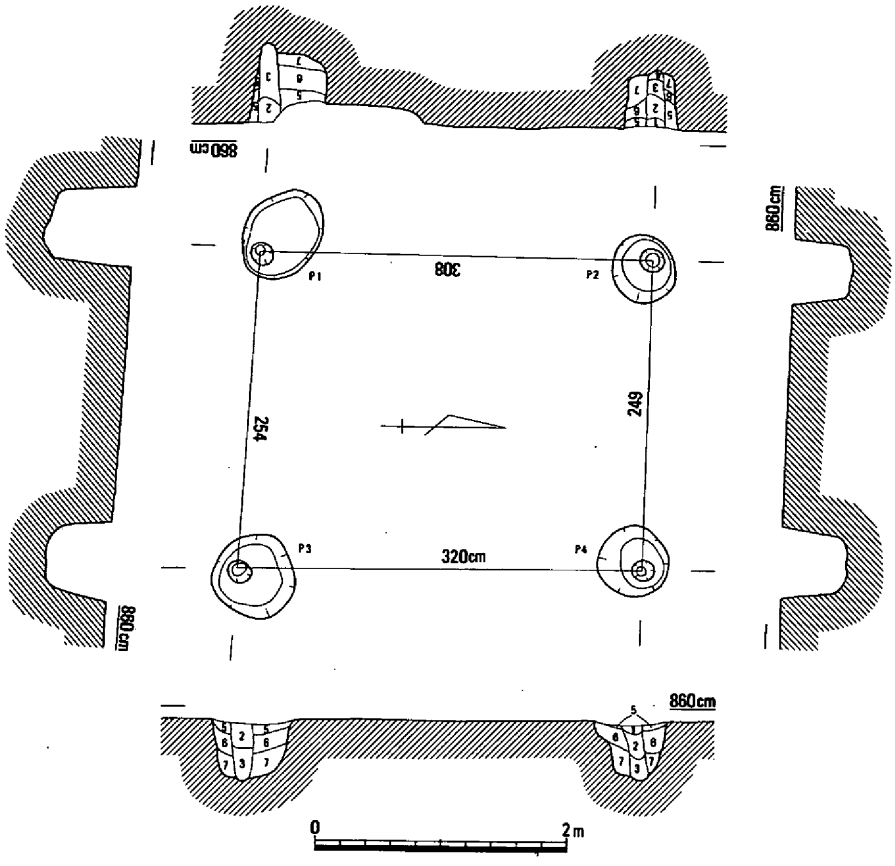
1．褐灰色粘質微砂　　4．灰白色粘質土　　7．灰黄色粘質微砂
2．暗灰褐色粘質微砂　　5．灰褐色粘質微砂　　8．褐黄色粘質微砂
3．暗灰色砂質土　　6．暗褐灰色砂質土　　9．黄褐色粘質微砂

第307図　建物８(1/60)



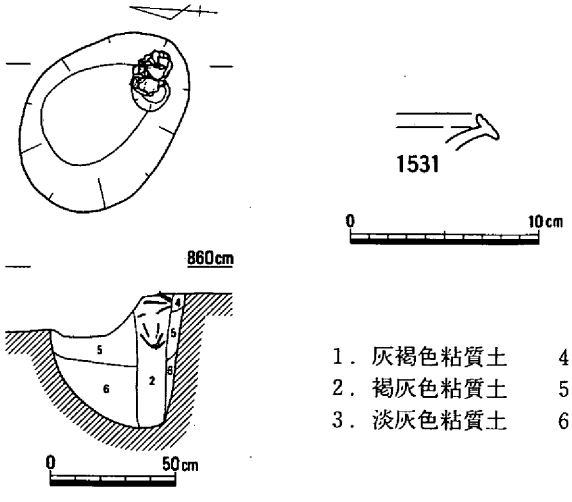
1．暗灰褐色砂質土
2．灰褐色粘質土
3．灰褐色粘質微砂
4．暗灰色砂質土
5．褐黄色砂質土

第308図　建物９(1/60)

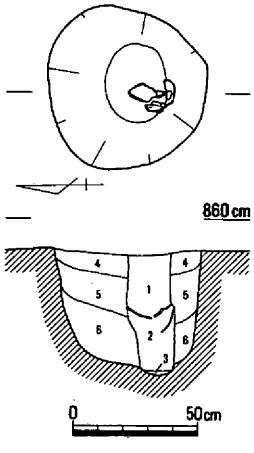


1．灰色粘質土　3．褐灰色粘質土　5．灰褐色粘質微砂　7．灰黄色粘質微砂
2．灰褐色砂質土　4．淡青灰色粘土　6．黄灰褐色粘質微砂

第309図　建物10（1/60）



1．灰褐色粘質土　4．灰褐色粘質微砂
2．褐灰色粘質土　5．黄灰褐色粘質微砂
3．淡灰色粘質土　6．灰黄色粘質微砂



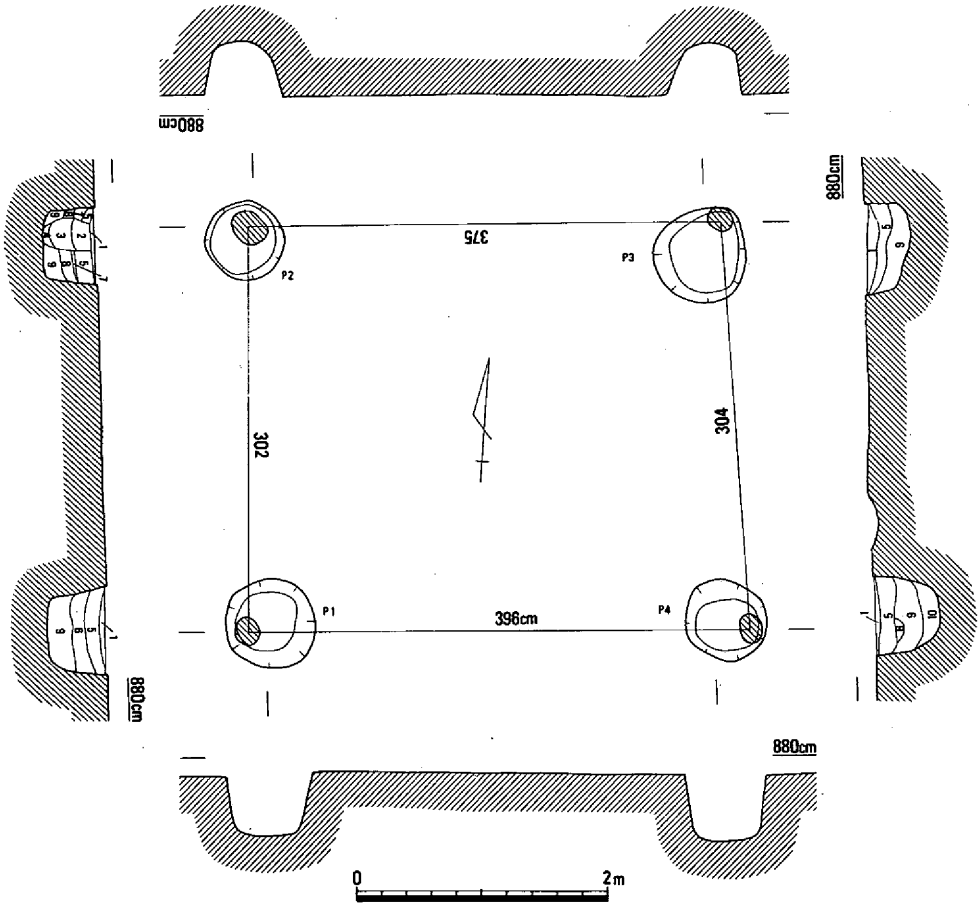
第310図　建物10、Ｐ１（1/30）・出土遺物（1/4）

第311図　建物10、Ｐ３（1/30）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1531	弥生土器	壺	口唇部凹線４本。ヨコナデ。	ヨコナデ。	浅黄　2.5Y8/3	

建物11（第312図）

建物５～８の南に位置する。１×１間の長方形の建物であるが、Ｐ４が東へずれているためややいびつな形となっている。柱穴は径60～70cmの円形を呈し、深さは40～50cmを測る。柱痕は全て確認されているが建物８と同じく柱穴の外側に寄っており、埋土の状況もほぼ同じ様相を呈する。柱痕径は太いもので25cmをこえる。Ｐ１・Ｐ３から土器細片が少量出土しており、弥生時代中期後葉と考えられ、建物８と併存していた可能性が高い。（久保）



1．褐灰色粘質微砂
2．暗灰褐色粘質微砂
3．暗褐灰色砂質土
4．灰白色粘質土
5．灰褐色粘質微砂（黄色土粒含む）
6．灰黄色ブロック
7．灰黄色砂質土
8．暗灰色砂質土
9．褐黄色粘質微砂
10．黄褐色粘質微砂

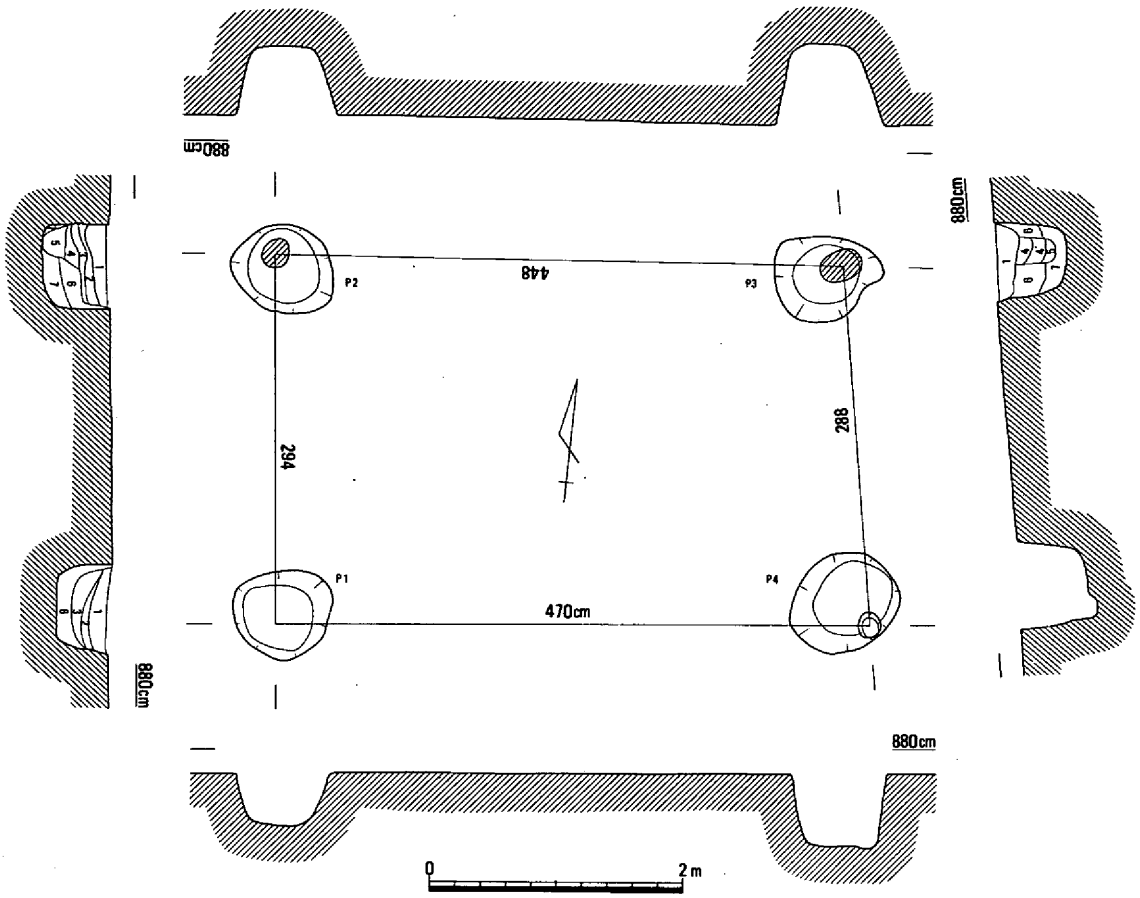
第312図　建物11（1/60）

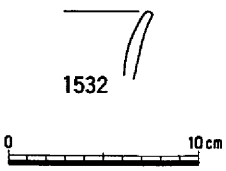
建物12（第313図）

建物11の東に位置する。同じく１×１間の建物であるがかなり東西に長く、長辺と短辺の比率は８：５となる。柱穴の規模は径70～80cmの不整形で、深さは45～60cmを測る。柱痕はやや太めで、径25～30cmをこえる。埋土の状況はこれまでのＤＥ区で検出された同様の形態を持つ建物と変わりなく、柱痕の抜き取りがここでも行われたと推定される。埋没時期も同じく弥生時代中期後葉～後期前葉と考えられる。（久保）

建物13（第314図）

Ｋ８区に所在し、建物12との距離5.3ｍを測る。主軸を東西に置く１×１間の掘立柱建物で、平面





挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1532	弥生土器	?	ミガキ？。	ナデ。	褐灰　10YR4/1	

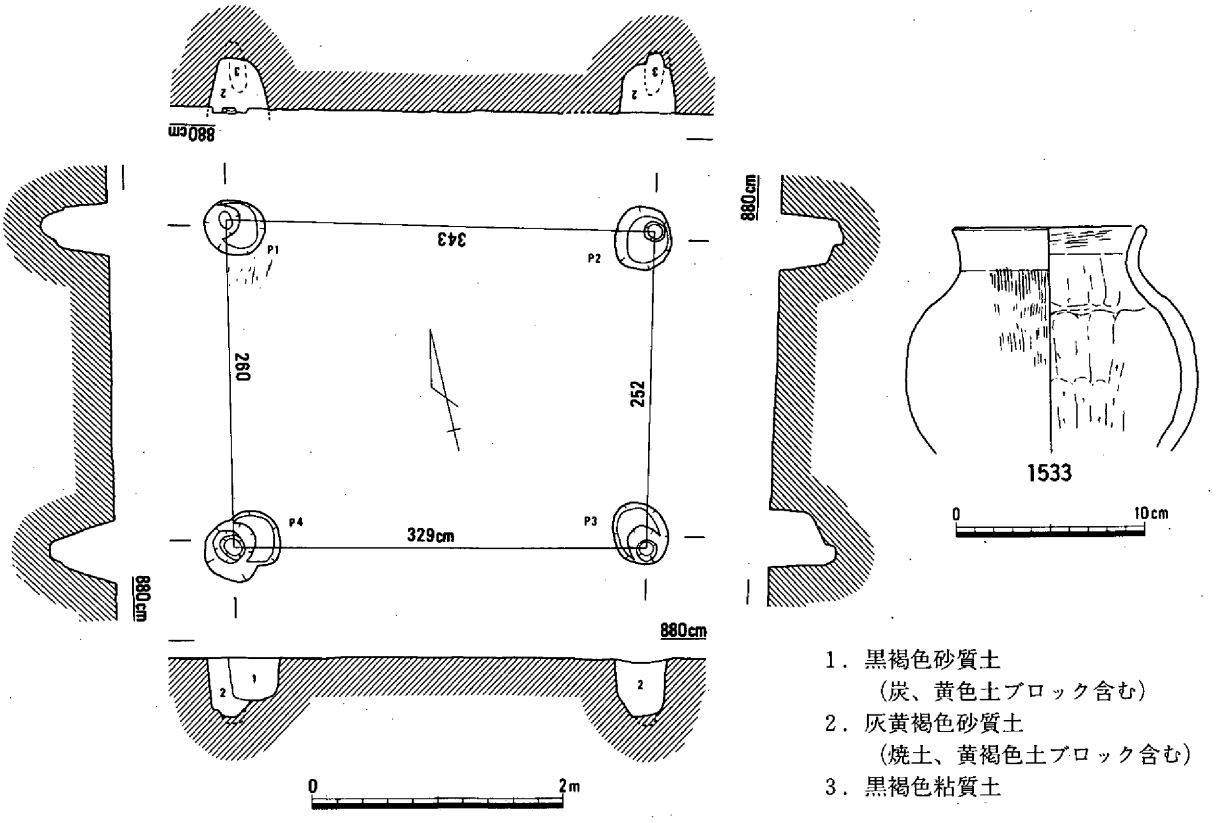
第313図　建物12（1/60）・出土遺物（1/4）

形は長方形を呈し、柱間は桁行で343cmと329cm、梁間で260cmと252cmをそれぞれ測る。柱掘り方は楕円形で、長径50cm前後、深さ50～55cmである。４本とも径10cm程度の柱痕跡が確認されており、Ｐ４では柱抜き取り跡を伴っている。弥生土器の壺**1533**をはじめとする出土遺物により、時期は弥生時代後期前葉に求められる。（光永）

建物14・15・16（第315～317図）

第２微高地(西)のＩＮ区の西半部において検出した掘立柱建物である。規模はいずれも１×１間で、柱穴間の中心距離もほぼ同じである。

各建物の柱穴の形・大きさは、建物14が径17～23cmの円形で、深さ23～40cm、建物15は径15～20cmの円形で、深さは30～35cm、建物16は径14～18cmの円形で、深さは25～40cm残存していた。このように、これらの建物の柱穴は同時期の建物の中では最も小さいグループに属するといえる。柱穴の埋土



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1533	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ハケメ。胴部下半ケズリ。	橙　5YR6/8	

第314図　建物13（1/60）・出土遺物（1/4）

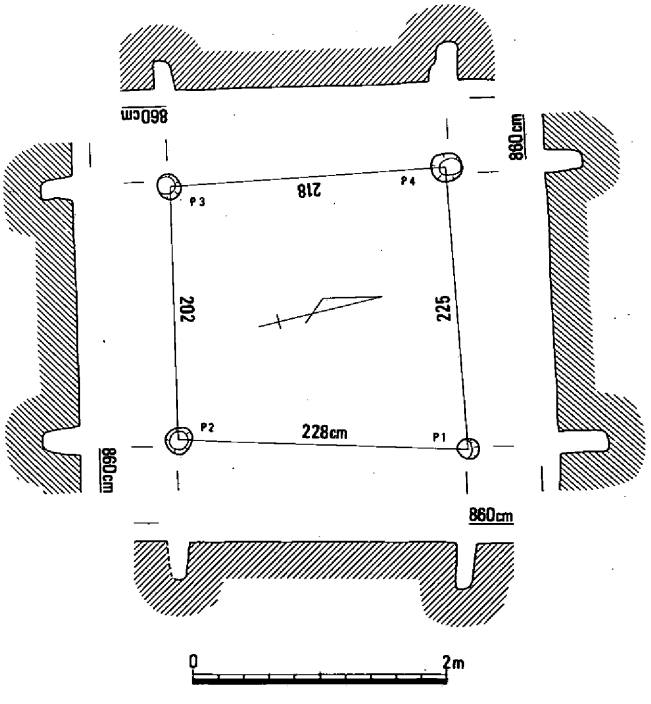
はいずれも暗褐灰色粘質土である。

各柱穴の配置をみると、いずれも正方形というよりは台形状を呈しているという共通点がみられる。またこれらはほぼ13ｍの間隔に存在しており、方位もほぼ同じであるといえる。

これらの建物の時期については、埋土中からの出土遺物が全くなかったため明確ではないが、埋土の状況から弥生時代中期後葉から後期前葉と考えておきたい。　（平井）

建物17（第318図）

Ｋ１区南半の微高地上に位置する。南西側は調査区外にのびるため全体の規模は不明であるが東西２間、南北１間を検出した。柱穴は径20cm前後、深さ17～25cmを測る。柱痕は確認されな



第315図　建物14（1/60）

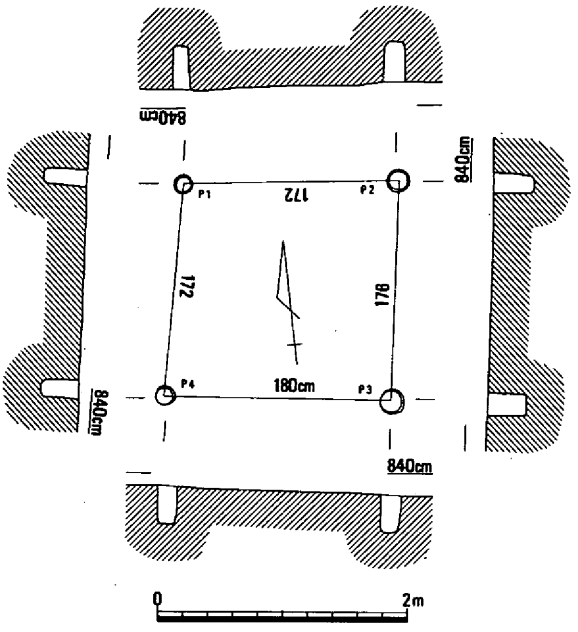
かった。出土遺物はないが埋土の状況により、弥生時代中期後葉～後期前葉に属すると考えられる。

（久保）

建物18（第319図）

第２微高地(東)のＩＮ区東半部において検出した掘立柱建物である。規模は１×１間で、柱穴の配置は長方形を呈する。柱穴の掘り方は径40cm前後の円形を呈していたと考えられる。柱穴の深さは検出面から約40～60cmを測る。また柱痕跡はＰ３で確認できたのみであるが、それから考えられる柱の太さは径約20cmである。

柱穴の埋土中からは土器片が少量出土しており、これから時期は弥生時代中期後葉と考えられる。　（平井）

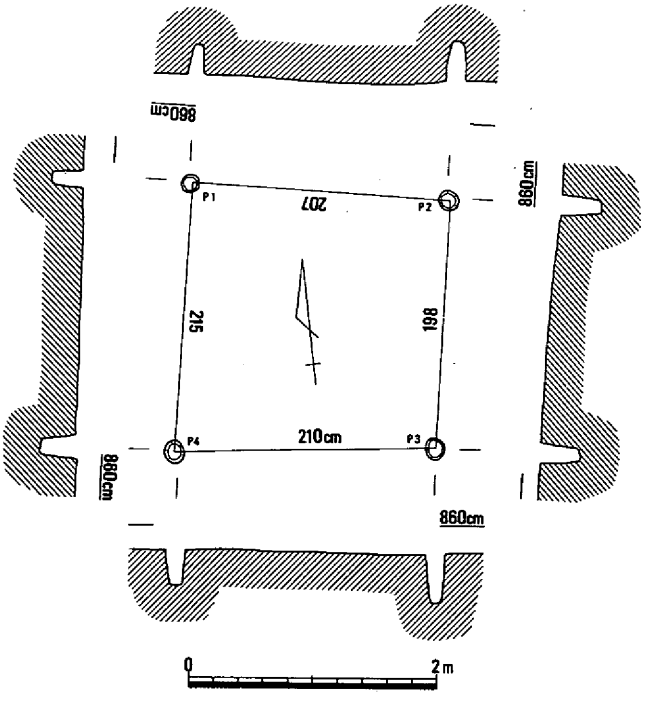


第316図　建物15（1/60）

建物19（第320図）

ＩＮ区の東半部の建物18の東において検出した掘立柱建物である。規模は１×１間で柱穴の配置はほぼ長方形を呈している。柱穴の掘り方は本来径50cm前後の円形であったと推定できる。深さは一定ではなく、検出面から33～67cmを測る。柱の太さについては、各柱穴で確認できた柱痕跡から径15cm前後の円形のものであったと考えられる。また柱は土層断面から抜き取られたものと考えたい。

時期は明確ではないが、埋土などから弥生時代中期後葉～後期前葉と考えておきたい。　（平井）



第317図　建物16（1/60）

建物20（第321図）

ＩＮ区の東半部の建物18・19の南において検出した掘立柱建物である。規模は柱穴の１本が側溝のため未検出ではあるが４×２間と考えられる。各柱穴は図示したように直線的には並んでいない。柱穴の大きさは建物18・19に比べて小さく、径15～25cmの円形を呈する。深さは検出面から18～37cmを測る。柱穴の埋土は淡黄灰色粘質土ブ

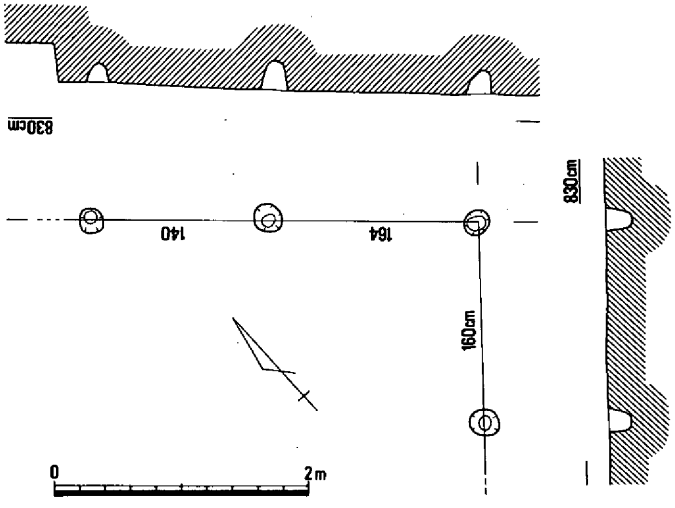
ロックを含む暗褐灰色粘質土である。

時期を特定できる遺物は出土していないが、埋土などから弥生時代中期後葉～後期前葉と考えておきたい。（平井）

建物21（第322図）

ＩＮ区東半部の建物19の東において検出した掘立柱建物である。規模は１×１間で、柱の配置はほぼ長方形である。各柱穴の掘り方は径40～45cmの円形で、深さは検出面から30～60cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土である。

時期が特定できる遺物は出土していないが、埋土などから弥生時代中期後葉から後期前葉と考えておきたい。（平井）



第318図　建物17（1/60）

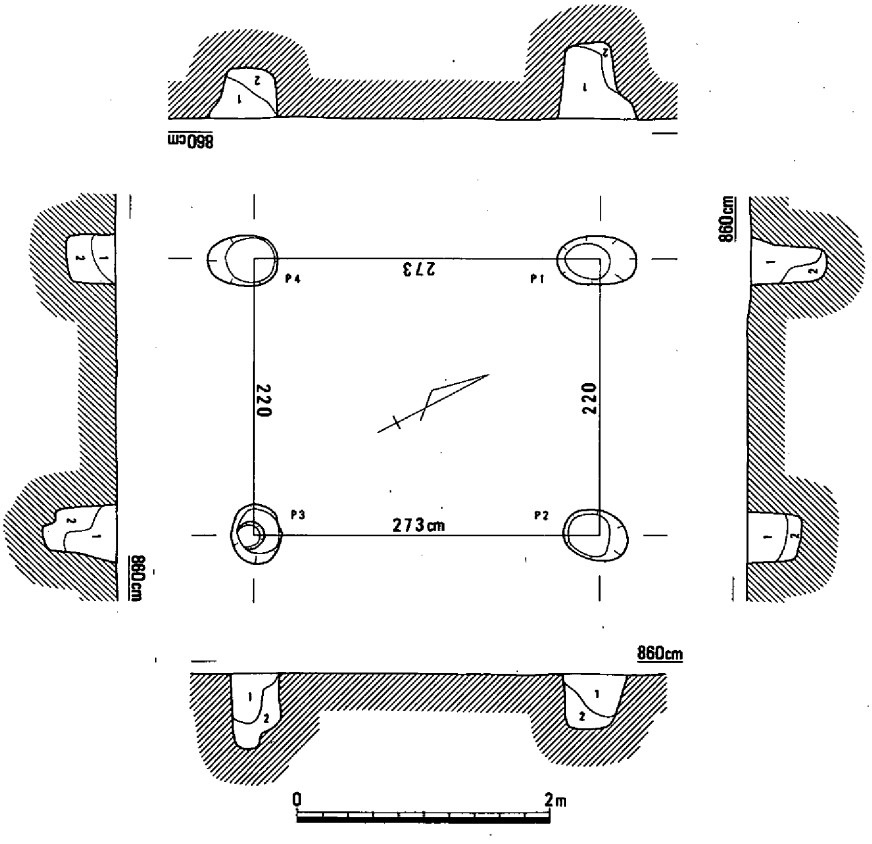
建物22（第323図）

ＩＮ区の東半部の建物20の東において検出した掘立柱建物である。規模は１×１間で柱の配置はほぼ長方形である。柱穴の大きさは35～70cm前後の円形および楕円形で、深さは検出面から55～78cmを測る。平面形は異なるが、面積は建物18にほぼ近い。

時期が特定できる遺物は出土していないが、埋土などから弥生時代中期後葉から後期前葉であろう。（平井）

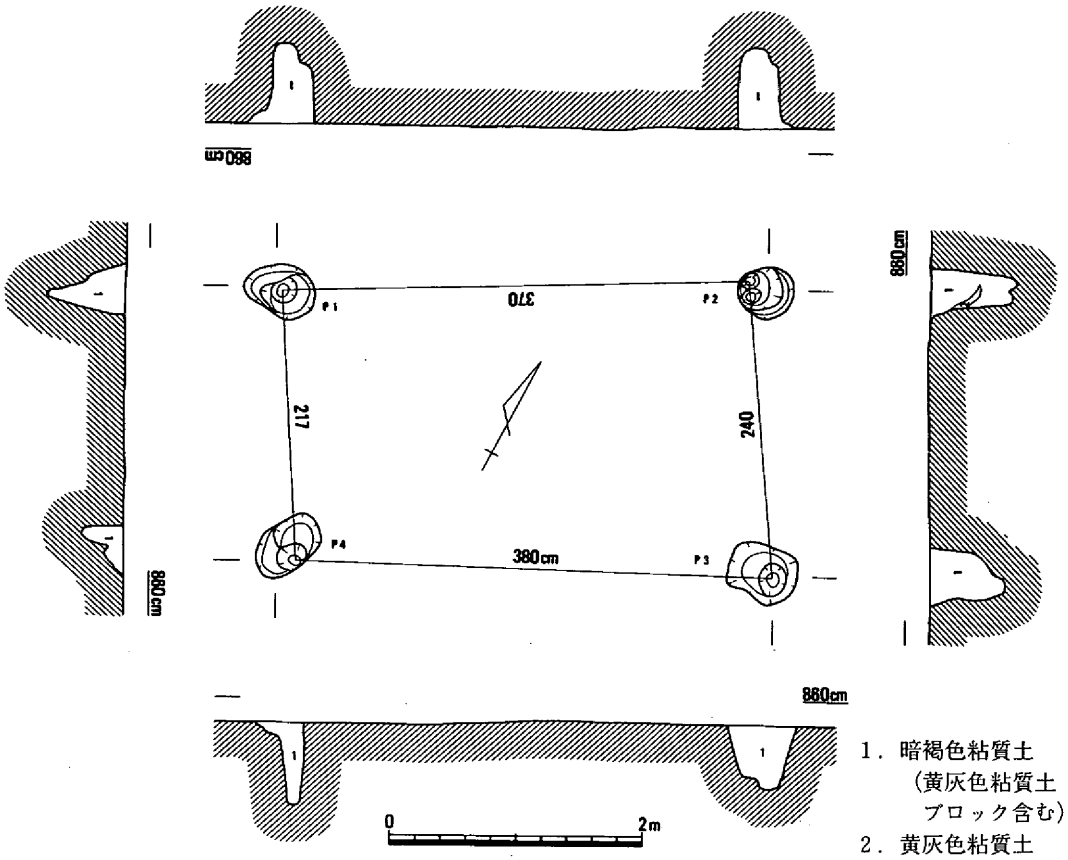
建物23（第324図）

ＩＮ区の東半部の建物22の東において検出した掘立柱建物である。規模は２×１間である。この建物は当初Ｐ１～６の柱で構成していたものが、その後Ｐ１・２をＰ７・８にして建て替えたものと考えて

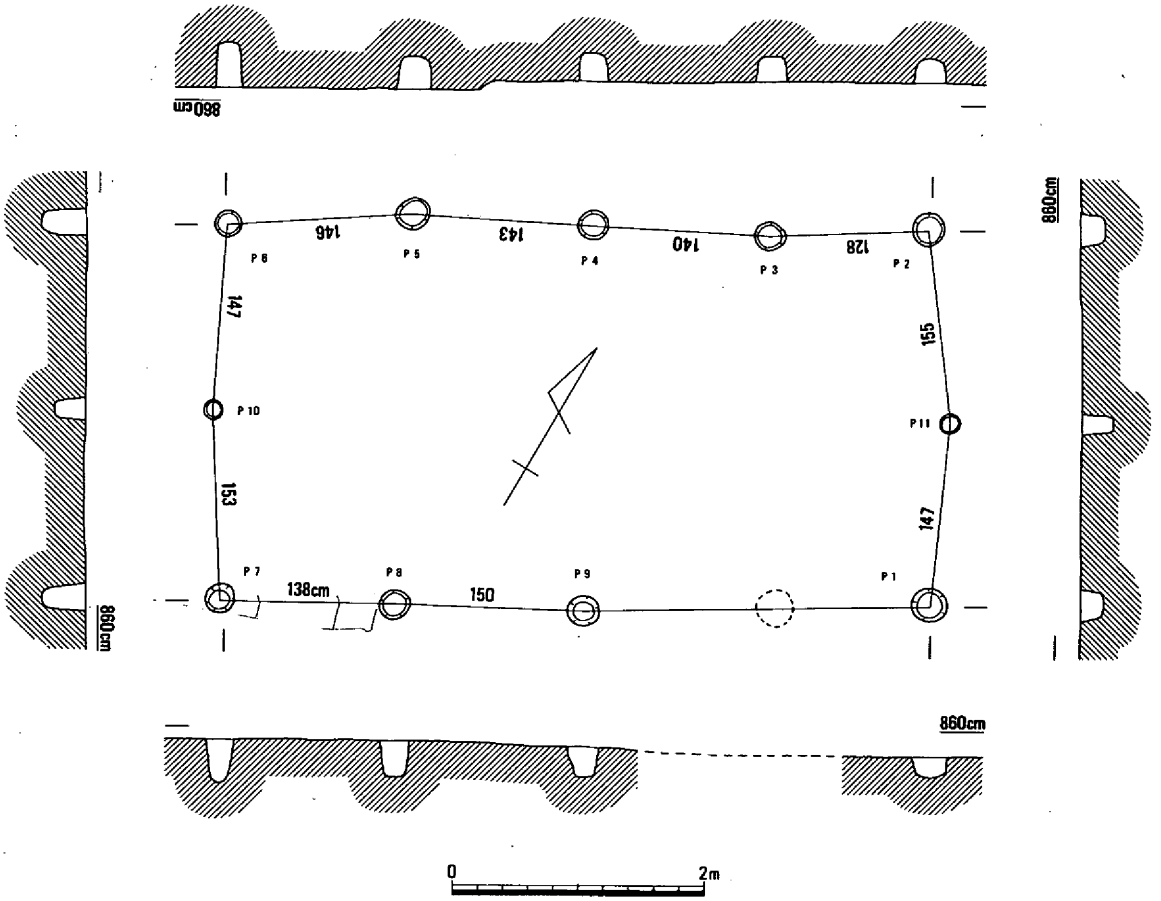


1．褐灰色粘質土（黄色砂質土ブロック含む）　2．暗褐灰色粘質土

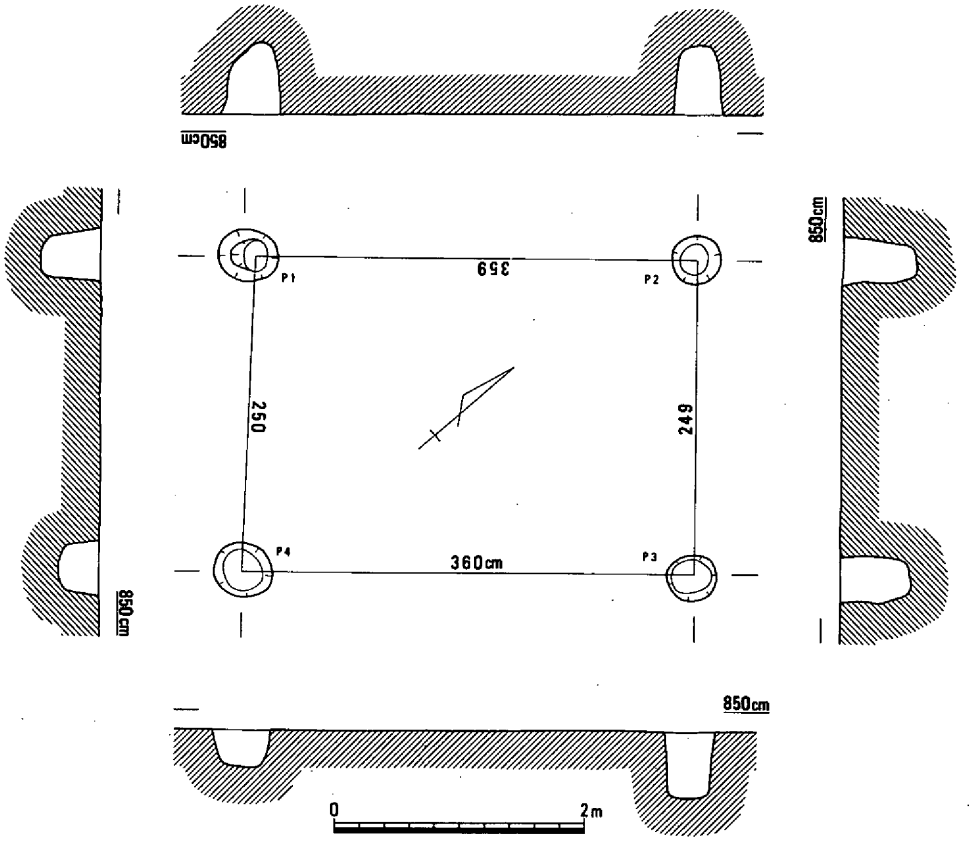
第319図　建物18（1/60）



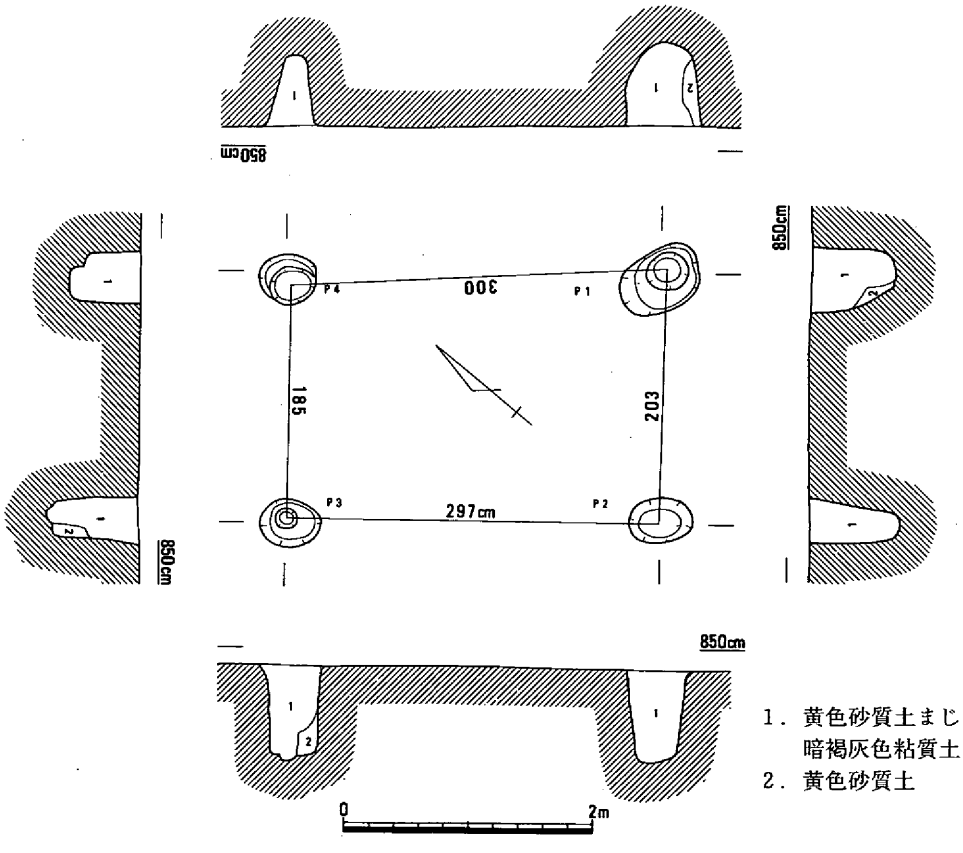
第320図　建物19（1/60）



第321図　建物20（1/60）

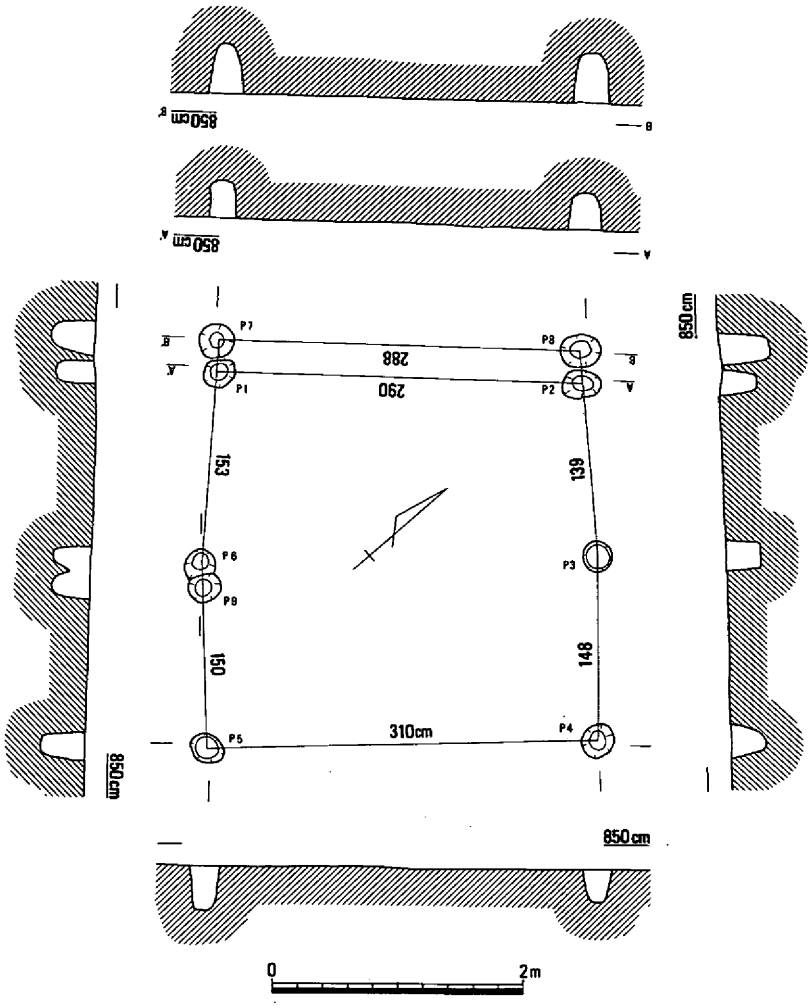


第322図　建物21（1/60）



1．黄色砂質土まじり
　暗褐灰色粘質土
2．黄色砂質土

第323図　建物22（1/60）

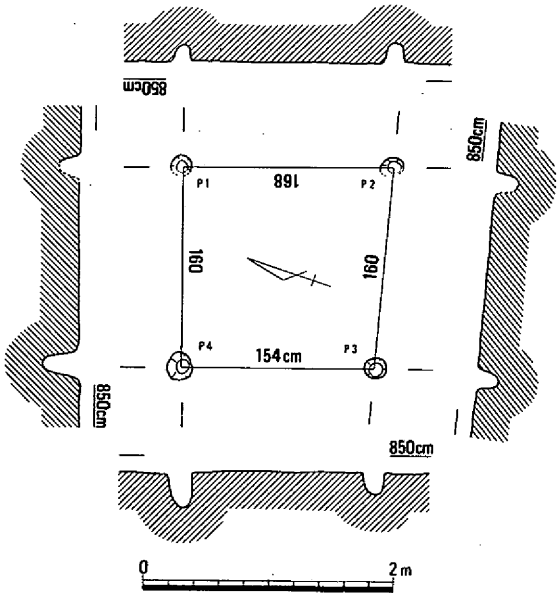


第324図　建物23（1/60）

おきたい。ただしこの建物の周辺には同規模の柱穴が多数検出されており断定はできない。Ｐ９についてはこの建物とは関連しないものと考えたい。柱穴の大きさは25～30cm前後の円形で、深さは検出面から27～40cmを測る。柱穴の規模、大きさは建物20と類似している。柱穴の埋土は黒褐色粘質土である。時期が特定できる遺物は出土していないが、埋土などから弥生時代中期後葉～後期前葉と考えておきたい。　（平井）

建物24・25・26（第325～327図）

いずれも１×１間の柱間を示す、小規模な掘立柱建物と想定される。４本の柱穴が、竪穴住居の屋内に掘りこまれたものとは考えがたく、そうとすれば、柱穴に囲まれた内側に、「火処」あるいは、中央穴の痕跡がわずかでも残されて当然といえよう。建物24・25は、ほとんど同規模で、柱間



第325図　建物24（1/60）

はおよそ140～170cmを測り、不整な方形を示す。柱間の芯心距離が、後世の５尺前後を測る点は注意される。柱穴の底は、丸みを持つ特徴があり、柱穴の大きさがそのまま柱の大きさを示すと考えられ、きちんと端面が切断されていない、心持ちの丸太材がほぼ垂直に立てられていたものと推定される。

建物26は、柱間184cm～191cmを測り、先の２棟よりもやや規模が大きい。しかもそれぞれの柱穴には、円形の柱痕跡がきわめて鮮明に観察されている。掘り方の埋め土よりもはるかに炭片・焼土細片の量が多い。（岡田）

建物27（第328図）

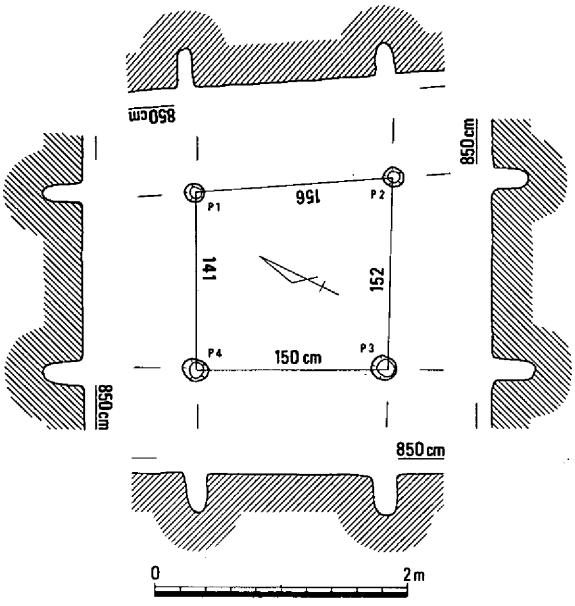
第２微高地(東)、Ｋ５区に位置する。西側は調査区外となるため全容は不明である。南北：東西の柱間距離はほぼ２：１でＰ１とＰ２の間にもう１本柱を想定して精査したが検出されなかった。柱穴は径35～40cm、深さ30cm強を測る。埋土は黒灰色粘質土である。柱痕は確認されなかった。出土遺物はないが埋土から、弥生時代中期後葉～後期前葉に属すると考えられる。（久保）

建物28（第329図）

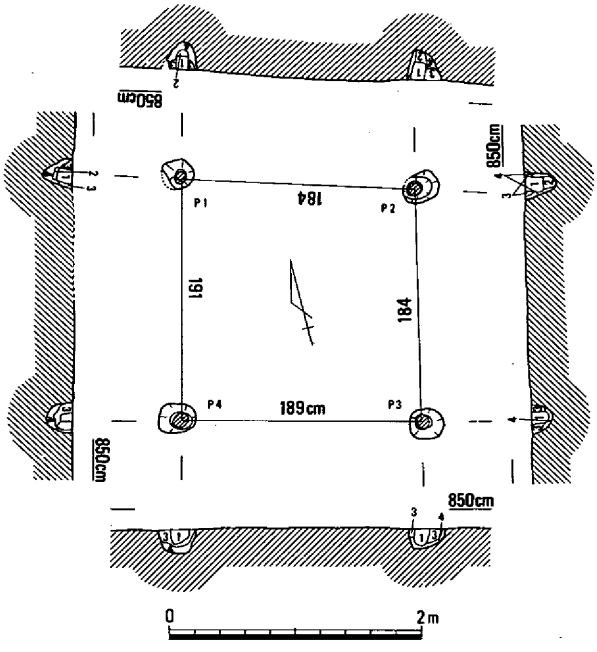
建物27の東に位置する。東側は調査区外にのびると考えられ、全容は不明である。柱穴は径25cm前後、深さ22～25cmを測る。建物27と比較すると、柱穴の規模はあまりかわらないが柱間距離は桁、梁とも２割程度短く、建物全体としてひとまわり小さくなると考えられる。主軸方向も異なるが、柱穴の埋土は同様の土で、同時期に存在していた可能性も考えられる。（久保）

建物29（第330図）

第一微高地の北寄りにあり、同微高地の調査区北西端に位置する。平面形は長方形を呈する２×１間の掘立柱建物である。柱痕跡を明瞭に確認することができ、それによると柱の太さは14～16cmである。四隅の柱を結ぶと

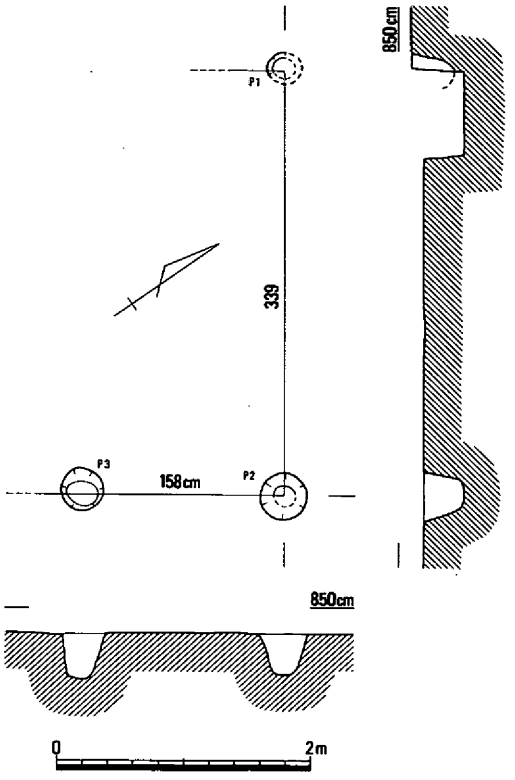


第326図　建物25（1/60）

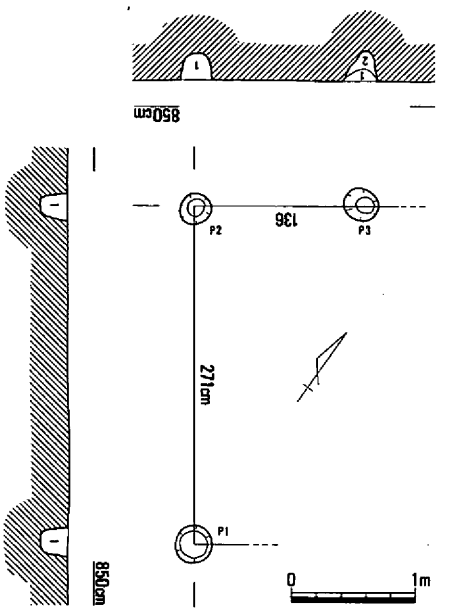


1．褐黒灰色粘質土　　3．黄褐灰色粘質土
2．黄灰色粘質土　　4．橙灰色粘質土

第327図　建物26（1/60）

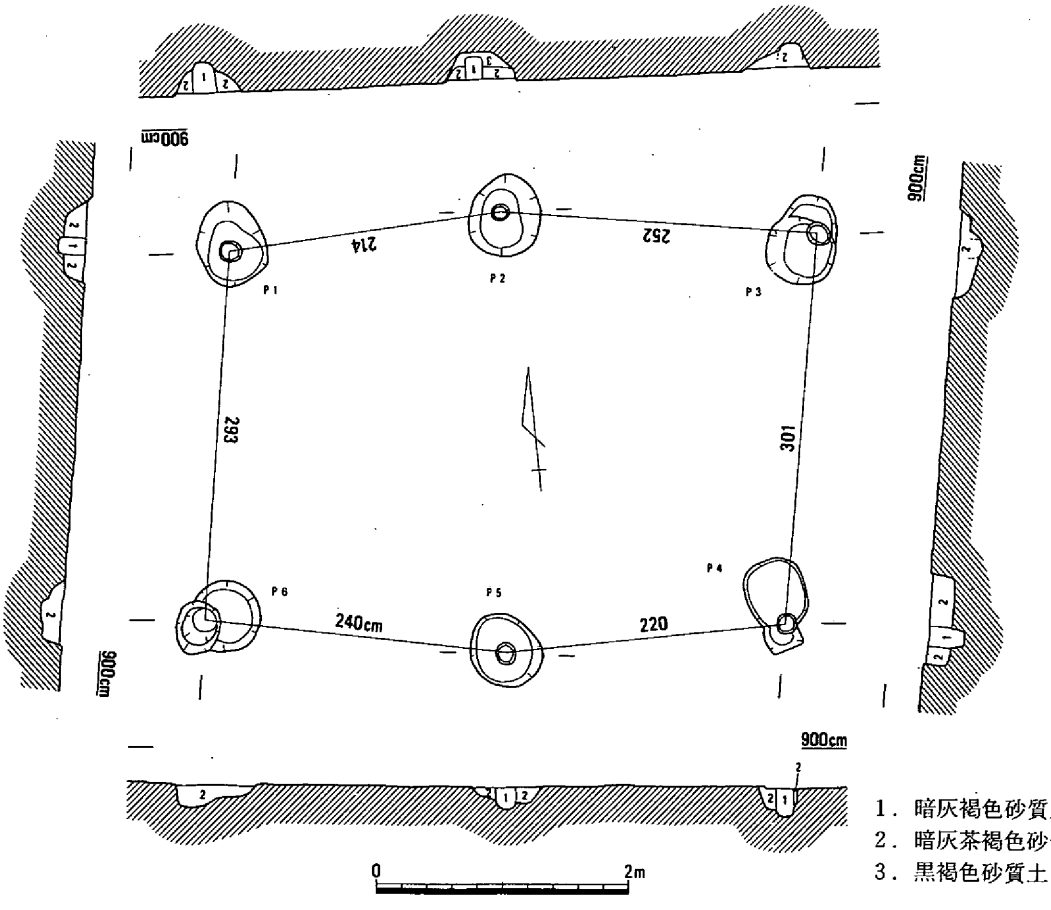


第328図　建物27（1/60）



1．黒灰褐色粘質土　　2．黄灰色粘質土

第329図　建物28（1/60）



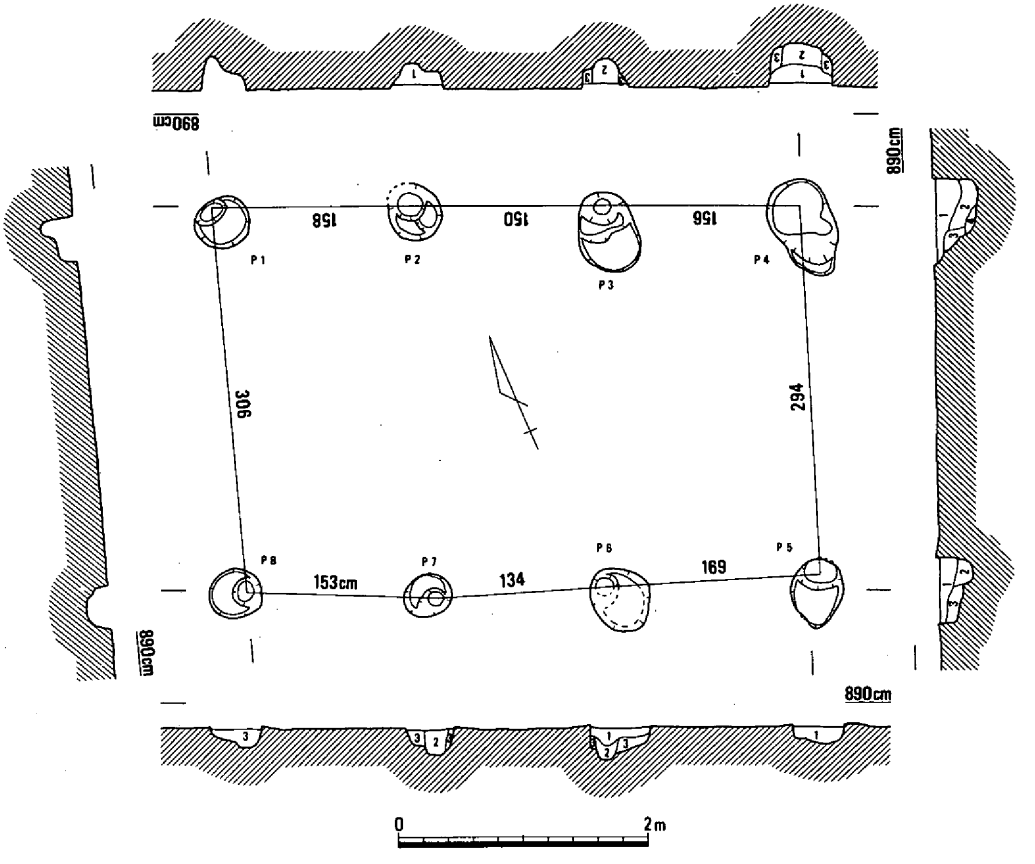
1．暗灰褐色砂質土
2．暗灰茶褐色砂質土
3．黒褐色砂質土

第330図　建物29（1/60）

中央の柱穴がいずれも20cm程外へ張り出す。規模は桁行約460cm、梁間約300cmである。主軸はＮ82°Ｗを示す。時期は周辺の遺構などから、弥生時代後期前葉と推定される。　（正岡）

建物30（第331図）

第１微高地の北端ちかくに位置する。３×１間の掘立柱建物で、棟は北西から南東を指す。梁間が３ｍ等間であるのに対し、桁行はばらつきがあり、134～169cmの中にあって平均150cmを測る。掘り方もまた大小の差を示すが、径40～50cm大のものが多く、その中には立ち腐った柱根が暗茶褐色土に置換されて残る。それらから柱材は、径約15～20cmの丸太材であったことがわかる。　（葛原）

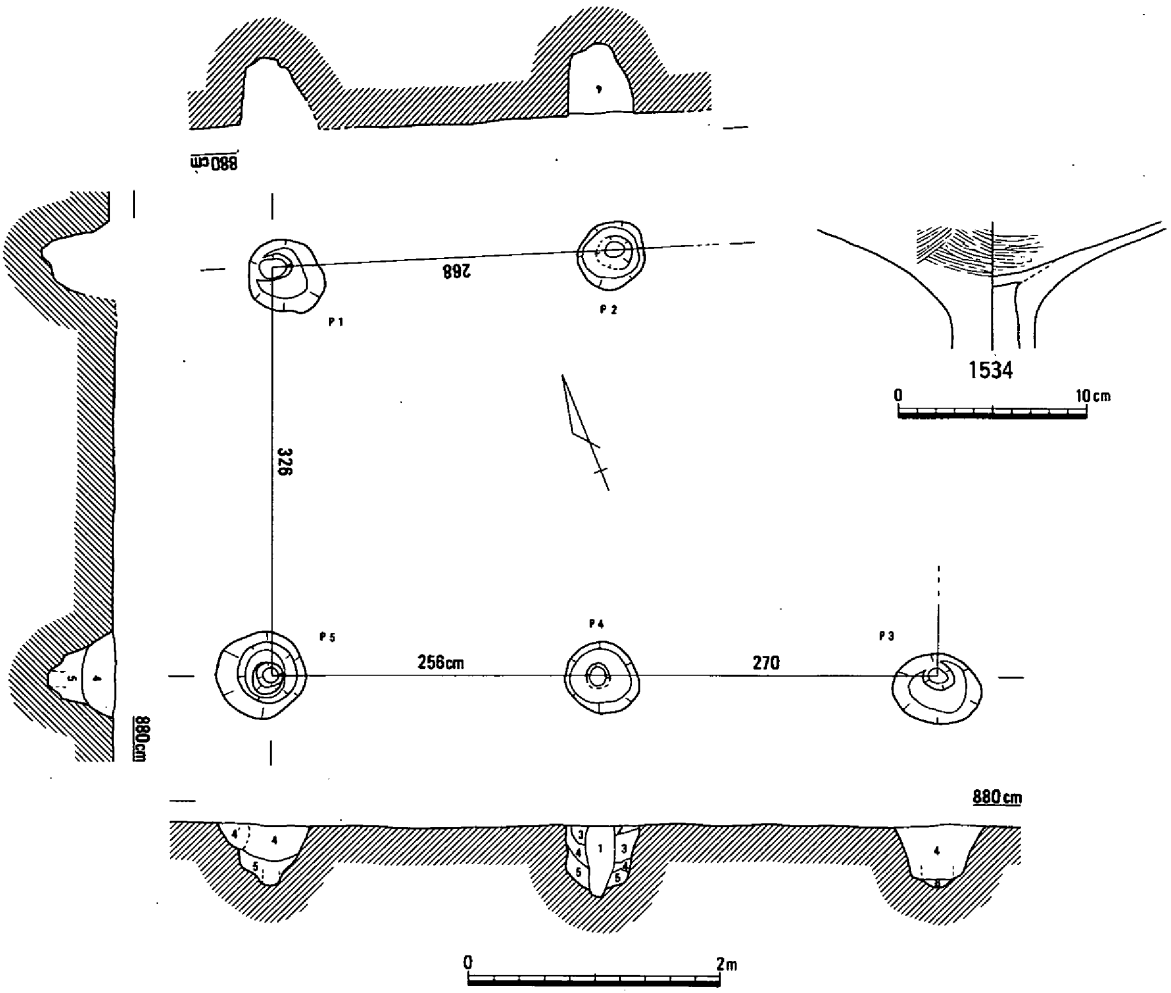


１．褐色シルト　２．暗褐色シルト　３．暗褐色粘質シルト　４．暗黄褐色粘質シルト

第331図　建物30（1/60）

建物31（第332図、図版18）

この建物跡は、第１微高地のほぼ中央に営まれたもので、２×１間の規模と考えられるが、北東角の柱穴１本が未検出である。ちょうどその辺りが調査区境となったため段差を生じ、わずか１本の柱穴を適確にとらえることができなかったのである。しかし、予想される位置付近で掘り方の一部と思われる肩口をどうにか検出している。梁間は326cm、桁行は約260～約270cmで、棟の方向は建物30とほぼ一致し、両者が一体的なものであったか否かはともかく、無秩序な建物配置でなかったことをうかがわせる。その間、約８ｍを隔てるにすぎない。柱痕は、暗灰茶色粘質土に置き換わって、円柱径はほぼ等しく20cm弱を測る。上層の埋土中にはおびただしい木炭片がみられ、焼失した可能性を暗示させる。　（葛原）



１．暗灰茶褐色粘質土　２．灰茶色粘質土　３．黄灰色粘質土　４．暗灰茶色粘質土　５．黄灰色粘質土

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1534	弥生土器	高杯	杯部ミガキ。	杯部ミガキ。脚部ケズリ。	にぶい橙　7.5YR6/4	

第332図　建物31（1/60）・出土遺物（1/4）

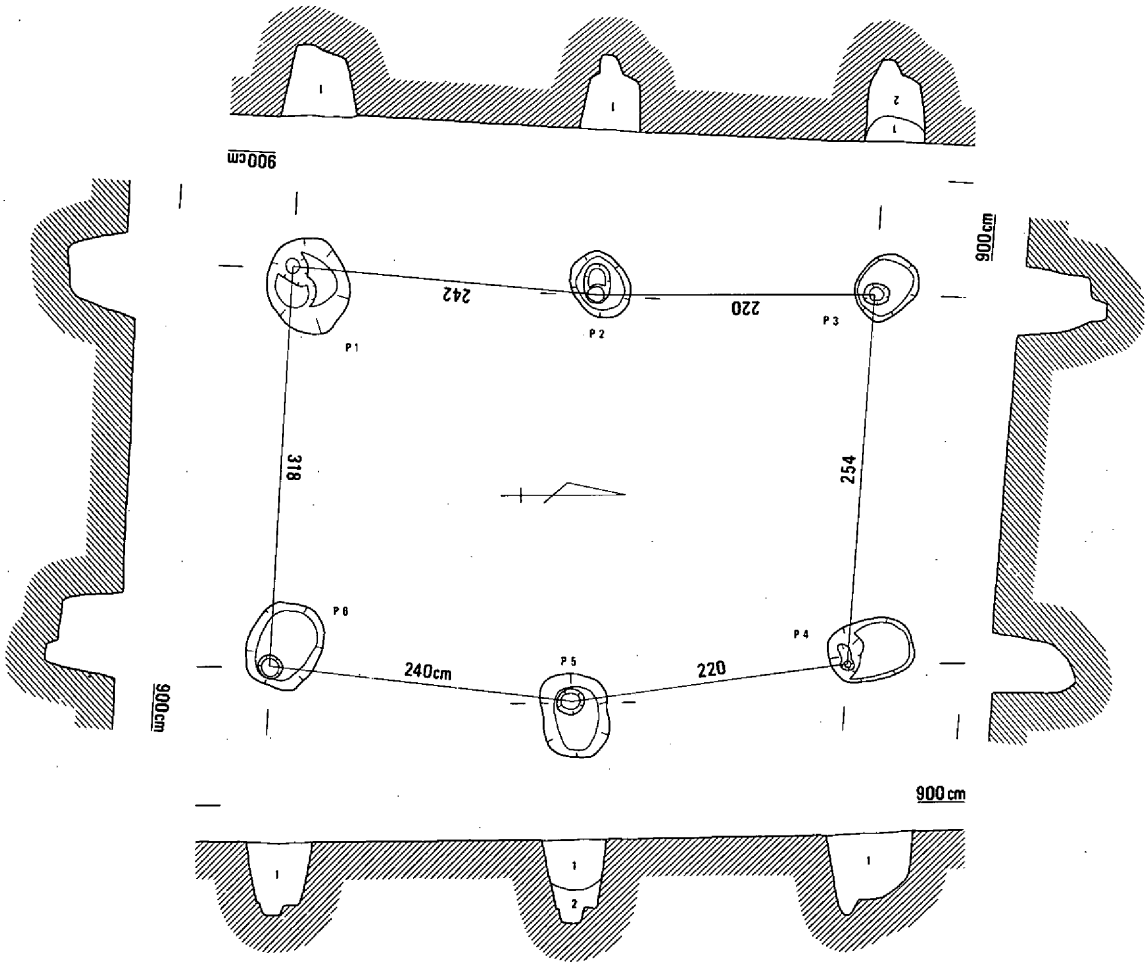
建物32（第333図、図版18）

この遺構は、第１微高地の西縁付近、建物31の西約４ｍに隣接して建てられた掘立柱建物で、平面形は建物31と同じく２×１間である。その掘り方は、長辺約55～約60cm、短辺45cm前後でいずれも小さな隅丸方形、形が似るばかりか、埋土中に拳大の黄色土塊が混じる点でも共通する。しかも掘り方は、長辺または短辺がまっすぐ規則的に並ぶことはなく、特に東辺の中柱が外へ突出した位置を占めるため、各柱の芯心を結ぶと、逆「く」の字に変形した形状となる。Ｐ４とＰ５からは丸い柱底部が立ち腐って木質をとどめて検出されたし、木質を失って土に置き換わったものも、掘り方底部よりさらに数cmないし10数cmほど低い位置で明瞭に看取できた。これらの径は、平均的にいって15cmばかりである。棟は建物31と相違して北東から南西を指し、建物31と直交にちかい方位をとる。梁間は北辺で254cm、南辺において318cmと広狭の差がみられ、桁行は北で220cm、南で240～242cmを測る。（葛原）

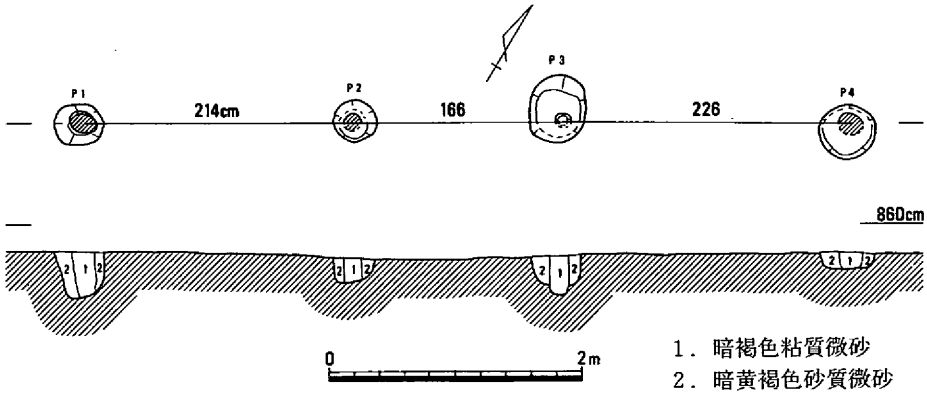
建物33（第334図）

第２微高地上の南、竪穴住居８の北８ｍに位置する掘立柱建物と思われる。桁４本の柱のみが検出

されていると考えられ、北東～南西方向に建つ。検出できた桁行は606cmで、柱間はばらつきがある。柱穴は平面円形で径30～50cmを測り、深さ14～38cmが残存している。平面円形の柱痕跡が確認できており、径15～18cmを測る。埋土の状況などから、時期は弥生時代中期後葉と思われる。　　（柴田）



第333図　建物32（1/60）



第334図　建物33（1/60）

建物34（第335図）

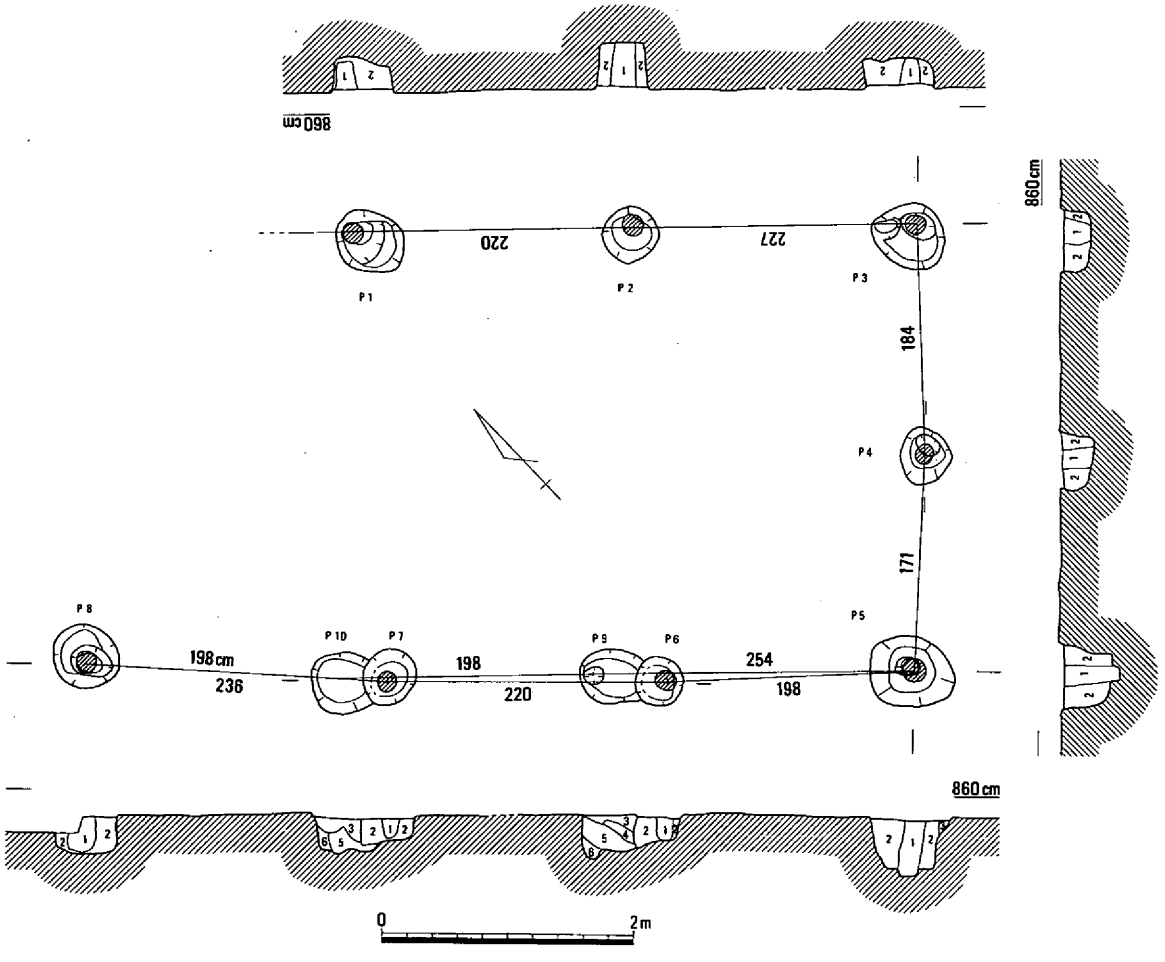
第２微高地上の南、建物33の東に隣接する掘立柱建物である。北西側は調査区外になり、規模など不明であるが、３×２間になると思われる。建物33とは直交し、北西－南東方向に建つ。検出できた桁行は650cm、梁間355cmで、柱間はややばらつきがある。また建て替えが行われたと思われる。柱穴は平面円形で、径40～55cmを測り、深さ25～50cmが残存している。平面円形の柱痕跡が確認できており、径15～20cmを測る。埋土の状況などから、時期は弥生時代中期後葉と思われる。　（柴田）

建物35（第336図、図版19）

第２微高地(東)のＫＹ３区において検出した掘立柱建物である。規模は１×１間で柱穴の配置は正方形にちかい。柱穴の大きさは径22～36cmの円形で、深さは検出面から13～23cmを測る。埋土は黄褐色砂質土ブロックを含む暗褐灰色粘質土である。Ｐ３で認められた柱痕跡から柱の太さは径約15cm前後と推定できる。時期が特定できる遺物は出土していないが、埋土などから弥生時代中期後葉と考えておきたい。　（平井）

建物36（第337図、図版19）

ＫＹ３区の建物35の東において検出された３×２間の掘立柱建物である。各柱穴の大きさは径27～35cmの円形で、深さは検出面から12～33cmを測る。柱穴の埋土は黄褐色砂質土ブロックを含む暗褐灰



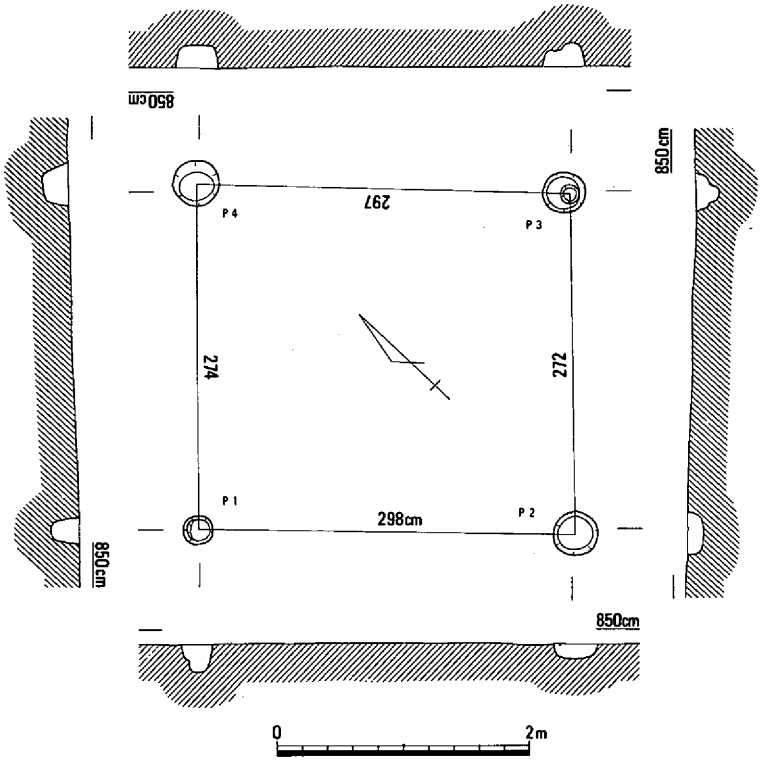
1．暗灰褐茶色粘質微砂（茶黄色粘質微砂ブロック多）　2．暗灰褐茶色粘質微砂（茶黄色粘質微砂ブロック少）　3．茶灰褐色粘質微砂　4．茶黄色粘質微砂　5．灰褐色粘質微砂　6．茶褐黄色粘質微砂

第335図　建物34（1/60）

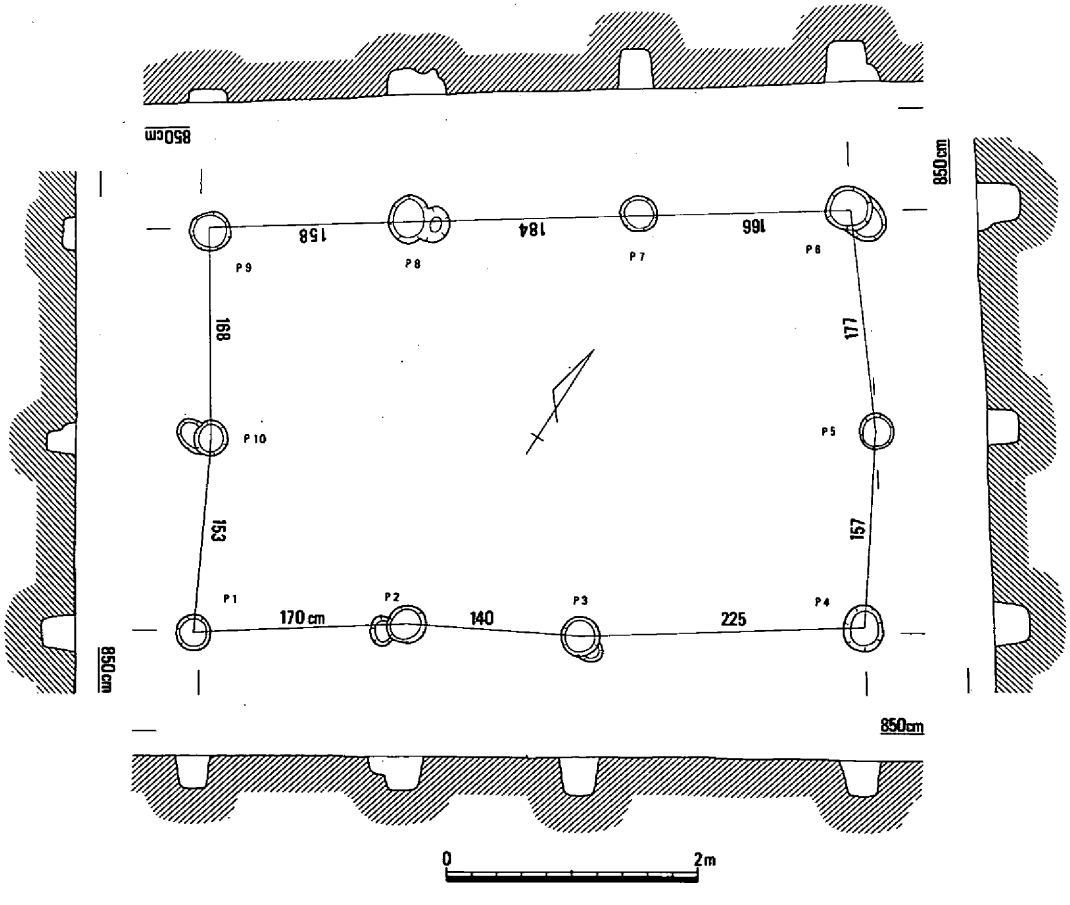
色粘質土である。面積は16.9㎡で、建物20とほぼ同じである。また建物の方向や柱穴の大きさの点でも建物20と共通性が認められる。時期が特定できる遺物は出土していないが、埋土などから弥生時代中期後葉と考えておきたい。　　（平井）

建物37・38（第338・339図）

ＫＹ３区の建物36の東南において検出した掘立柱建物である。いずれも一部が調査区外にかかるため規模は不明で、北側の柱穴が２本検出できたのみであるが、柱穴の配置および規模から東西に長い１×１間の建物であったと考えられる。建物37の柱穴の掘り方は径50～63㎝の円



第336図　建物35（1/60）



第337図　建物36（1/60）

形および楕円形で深さは検出面から約40～50cmを測る。建物38の柱穴の掘り方は径45～50cmの円形で、深さは検出面から60～70cmを測る。また建物38のＰ１・２では柱痕跡が確認でき、それによると柱は径約17cmの円柱であったと考えられる。

いずれも時期が特定できる遺物は出土していないが、埋土などから弥生時代中期後葉と考えておきたい。　(平井)

建物39（第340図）

ＫＹ３区の竪穴住居９の東南において検出した掘立柱建物である。規模は１×１間で、柱の配置は長方形を呈する。柱穴の掘り方の大きさは径43～60cmのほぼ円形で、検出面からの深さは50cm前後にそろっている。Ｐ１・４の埋土中から土器片が出土している。**1535**はＰ４からの出土で、これらの土器から時期は弥生時代中期後葉と考えられる。　(平井)

建物40（第341・342図）

ＫＹ３区の建物39の北東において検出した３×１間の掘立柱建物である。各柱穴の掘り方は本来径20～40cmの円形であったと考えられ、深さは検出面から７～25cmが残存しており、他の１×１間の建物に比べて小規模で、浅いのが特徴である。またＰ２では柱痕跡が確認でき、それによると柱は径約15cmの円柱であったと考えられる。

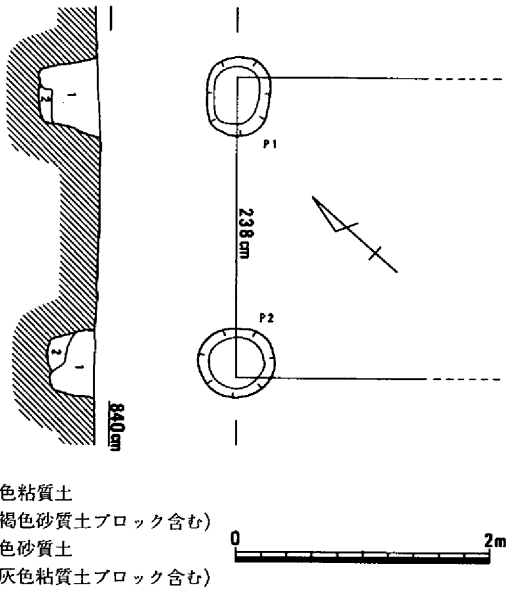
Ｐ１・３・４の埋土中からは土器がまとまって出土した。図の**1536**はＰ３から、**1537**はＰ１から出土している。上部が削平されているため明確ではないが、本来は１個体分の土器を壊して柱穴に埋納していた可能性が考えられる。時期はこれらの土器から弥生時代中期後葉と考えられる。　(平井)

建物41（第343図）

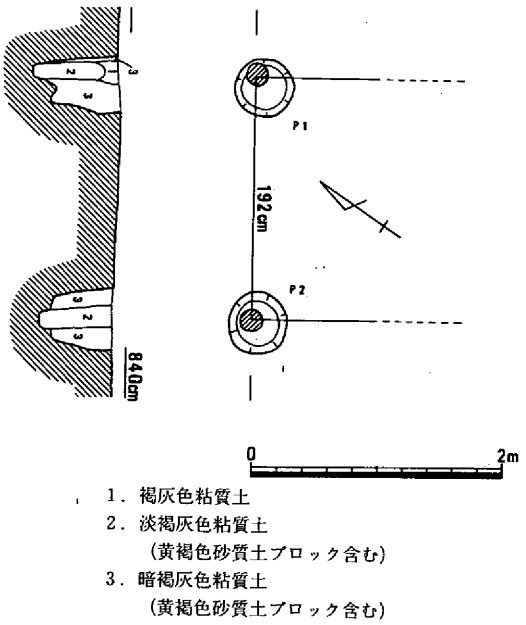
ＫＹ３区の建物40の北において検出した掘立柱建物である。規模は１×１間で、柱の配置は長方形である。各柱穴の掘り方は径36～42cmの円形で、検出面からの深さは42～60cm残存していた。

各柱穴の埋土の状況から柱材は底から約20cm前後の部分で切断され、抜き取られた可能性も想定できる。

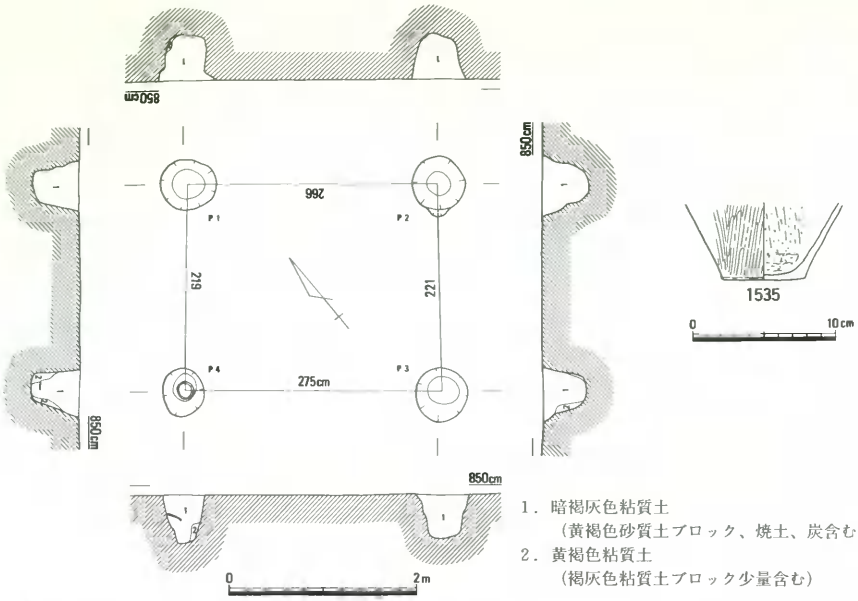
Ｐ２の埋土中から土器(**1538**)が出土しており、時期は弥生時代中期後葉と考えられる。　(平井)



第338図　建物37（1/60）

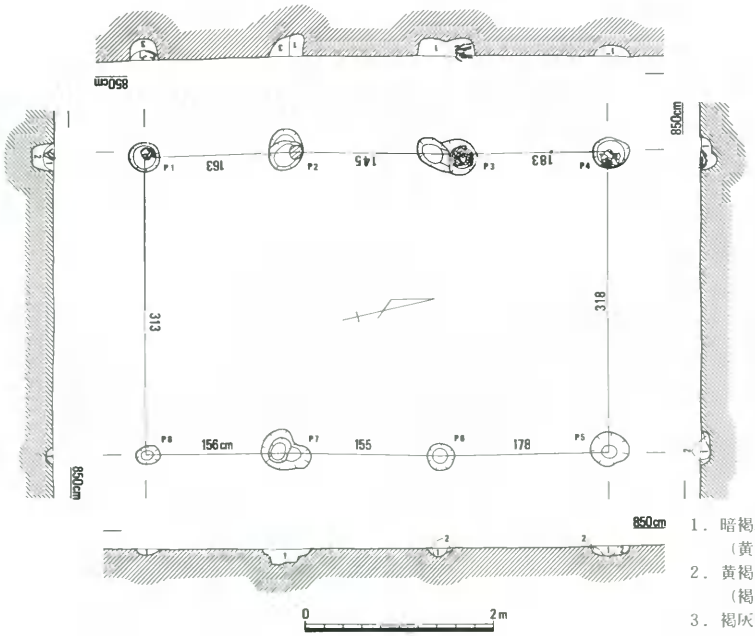


第339図　建物38（1/60）

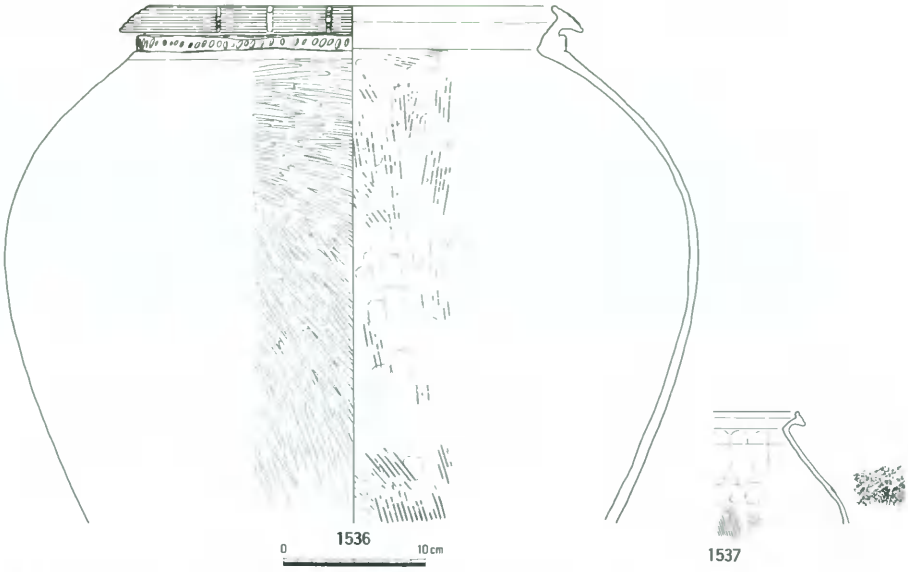


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
[illegible]	弥生土器	甕	胴部ミガキ　底部エビオサエ[illegible]ちオデ	ケズリ	にぶい橙　7.5YR7/4	

第340図　建物39（1/60）・出土遺物（1/4）

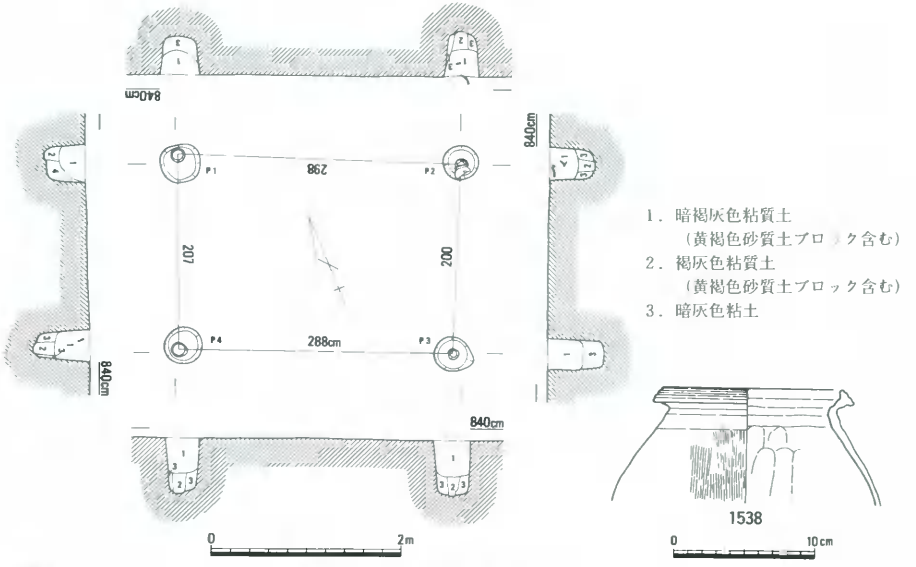


第341図　建物40（1/60）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1536	弥生土器	甕	口唇部凹線、格状浮文　頸部貼付刻目突帯　胴部ハケメ、ミガキ。	胴部ユビオサエ、ハケメ	灰黄　2.5Y7/2	
1537	弥生土器	甕	口唇部凹線３本　胴部上半ハケメ　下半ミガキ　刺突文。	胴部上半ナデ　下半ハケメ	浅黄　2.5Y7/3	

第342図　建物40出土遺物（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1538	弥生土器	甕	口唇部凹線、ヨコナデ　胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ　胴部ユビオサエ、ナデ	灰白　10YR8/2	

第343図　建物41（1/60）・出土遺物（1/4）

(3) 井　　戸

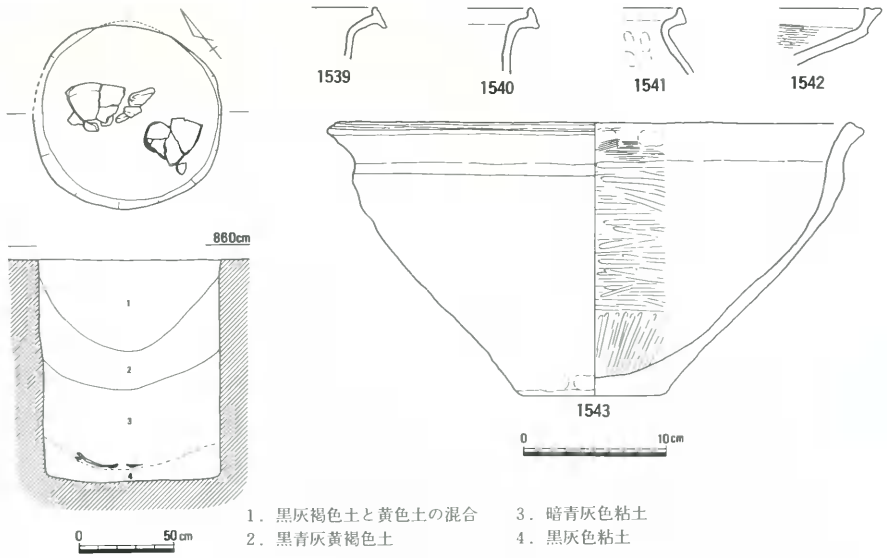
井戸１（第344図）

ＡＴ区南中央部に位置し、竪穴住居５との距離12.3ｍ、建物９との距離10.3ｍをそれぞれ測る。

検出面での平面形は径100㎝の円形で、深さ132㎝で海抜高7.37ｍのほぼ平坦な底面にいたる。断面形は矩形を呈する。埋土のうち、４層上面からは弥生土器の鉢**1543**と円礫５個が一括出土した他、１層には基盤層の黄色土塊が多く含まれていた。この他の出土遺物には、弥生土器の壺**1539**・**1540**、甕**1541**、高杯**1542**等があり、時期は弥生時代後期前葉に求められる。（光永）

井戸２（第345図、図版48）

第２微高地(西)の北半に位置する素掘りの井戸である。105×94㎝の円形を呈し、深さは107㎝を測る。底面の海抜高は約7.6ｍである。底面北側の掘り方は階段状になっており、埋土の堆積状況と合わせて、３～４回の掘り返された可能性がある。ただし、最終段階である。１～５層の底は湧水レベルに達しておらず井戸としての機能は有していなかったと考えられる。７～９層はグライ化した均質な粘土であり、井戸として使用された間の自然堆積層であろう。６層は基盤土と思われる黄色土のブロックを大量に含み、廃絶時に一気に埋められたようである。遺物は上層から台石**Ｓ345**が出土したほか土器細片が少量出土しており、弥生時代後期前葉に埋没したと考えられる。（久保）



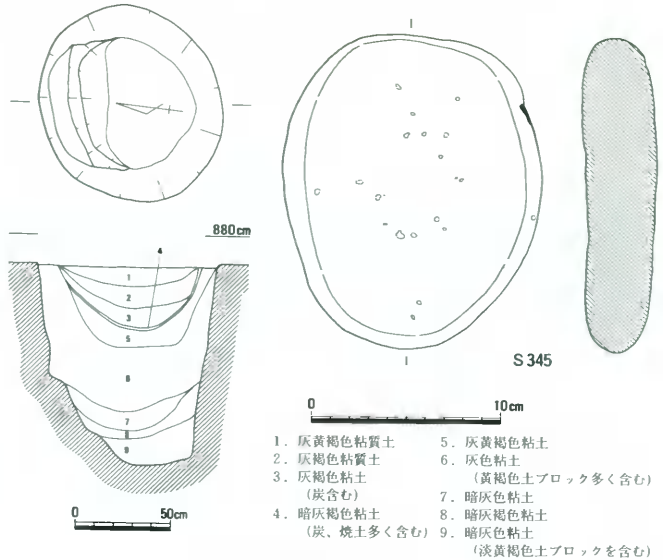
1．黒灰褐色土と黄色土の混合　　3．暗青灰色粘土
2．黒青灰黄褐色土　　4．黒灰色粘土

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1539	弥生土器	壺	口唇部凹線。	ヨコナデ	浅黄 2.5Y8/4	
1540	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部刺突文。	口縁部ヨコナデ。	橙 7.5YR7/6	
1541	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	胴部ユビオサエ、	橙 5YR6/8	
1542	弥生土器	高杯	口唇部ヘラ描き沈線１本。口縁部ヨコナデ。	杯部ミガキ。	にぶい橙 7.5Y7/3	
1543	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリのちナデ？ミガキ？	口縁部ハケ、のちミガキ。胴部ミガキ。	淡黄 2.5Y8/3	

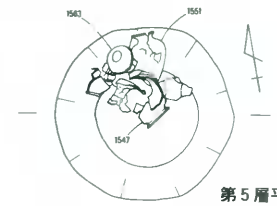
第344図　井戸１(1/30)・出土遺物（1/4）

井戸３（第346～349図、図版19・52・53）

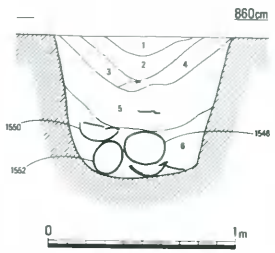
第２微高地(東)のＩＮ区東半部で検出した。平面形は径92～95cmのほぼ円形で、深さは検出面から約75cmが残存していた。底面の海抜高は約7.75ｍで、他の弥生時代中期の井戸が７ｍ前後であるのと比べて高い値を示している。埋土は６層確認できたが、大きくは１～４層と５・６層とに区分することができる。遺物はおもに５・６層からまとまって出土しており，個体数は図示したものがほぼすべてで、甕16、鉢４、高杯１である。図示した土器のうち、**1547・1551・1556・1559・1563**が５層から、他の土器は６層から出土した。出土した土器の特徴の一つは**1553～1557**以外は完形またはほぼ完形に復元できたことである。二つめは観察表に示したように出土した甕の口縁部に凹線を施したものと、クシ描き沈線を施したものとがあることである。これらの出土土器の特徴から、時期は弥生時代後期末葉と考えられる。　（平井）



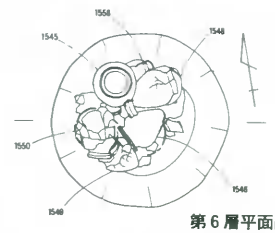
第345図　井戸２(1/30)・出土遺物（1/3）



第５層平面図



1．褐灰色粘質土
2．黄褐色粘質土
3．微砂まじり灰色粘質土
4．にぶい褐灰色粘質土
（炭、焼土含む）
5．暗褐灰色粘質土
（炭含む）
6．暗黄灰色粘土
（炭含む）

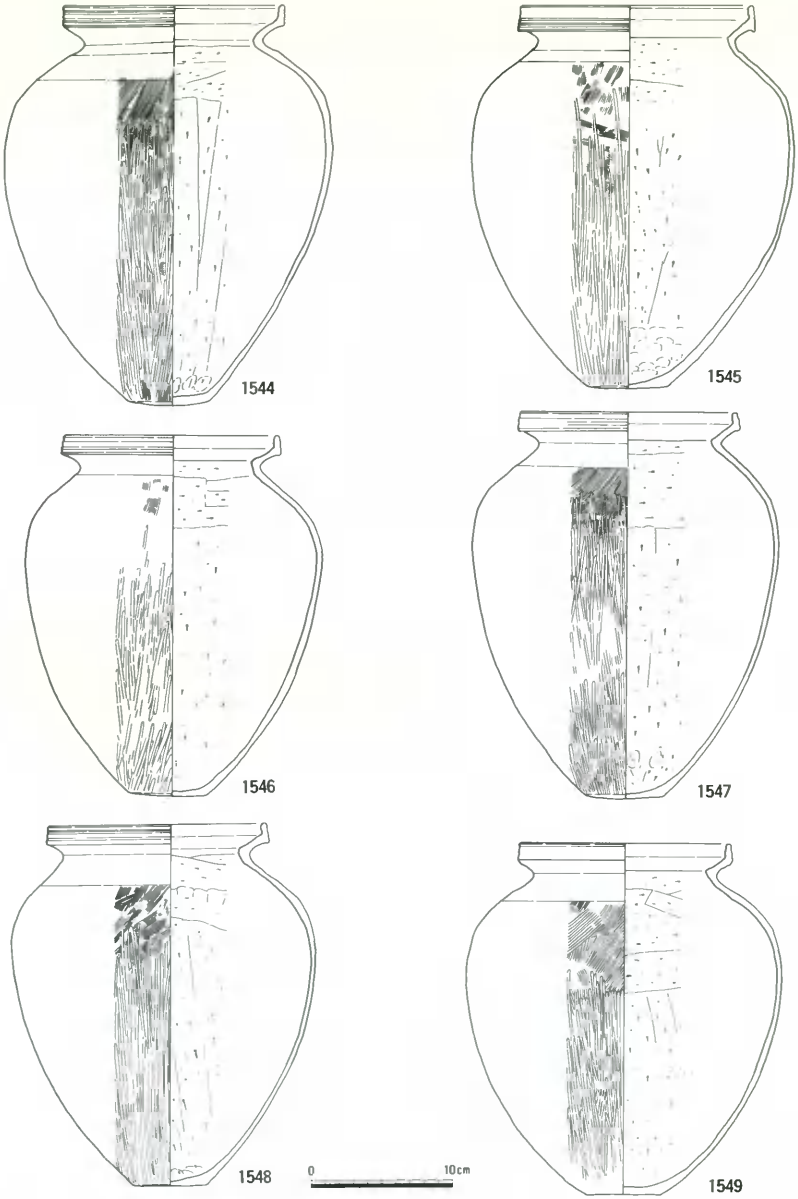


第６層平面図

第346図　井戸３(1/30)

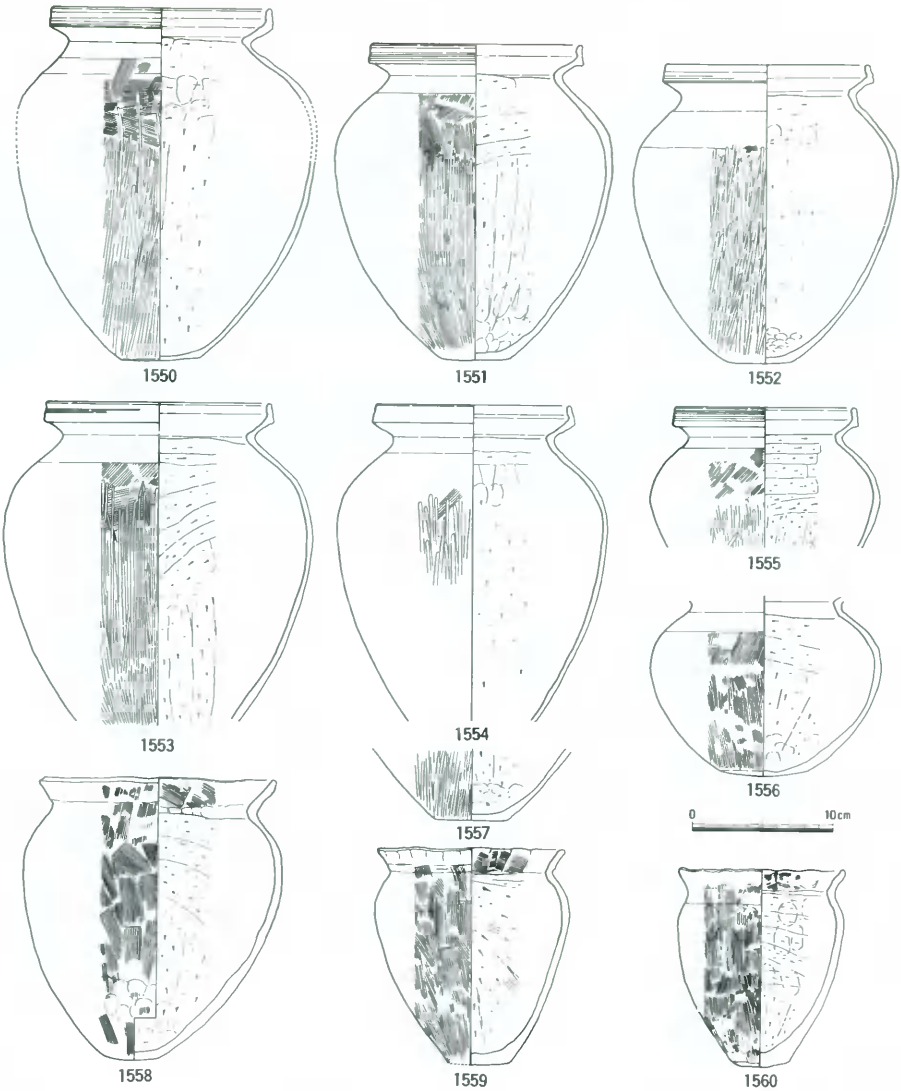
井戸４（第350・351図、図版19）

第２微高地(東)の北端、Ｈ７区に位置する素堀りの井戸である。肩くずれを起こしているためややいびつだが、205×184cmの円形を呈し、深さ128cmを測る。底面の海抜高は約７ｍと他と比べて低い。埋土は９層に分かれるが４層を境に埋土の状況は大きく変わり、１～４層(以下、上層と呼ぶ)が褐色系の土に黄色土ブロックを互層状に多く含むのに対し、５・６層(以下、下層と呼ぶ)は灰色系の粘性の高い土である。土器の多くは下層から出土



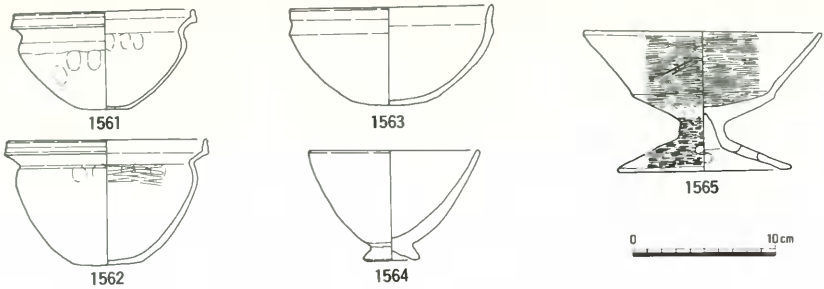
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1544	弥生土器	甕	口唇部クシ描き沈線、胴部ハケメのちミガキ。底部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙　10YR8/3	
1545	弥生土器	甕	口唇部クシ描き沈線、胴部ハケメのちミガキ。底部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/4	外面煤
1546	弥生土器	甕	口唇部凹線、胴部ハケメのちミガキ。底部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/3	
1547	弥生土器	甕	口唇部凹線、胴部ハケメのちミガキ。底部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/3	外面煤。
1548	弥生土器	甕	口唇部凹線？、胴部ハケメのちミガキ。底部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/3	
1549	弥生土器	甕	口唇部クシ描き沈線？、胴部ハケメのちミガキ。底部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙　5YR7/4	外面煤

第347図　井戸３出土遺物(1)（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1550	弥生土器	甕	口唇部クシ描き沈線。胴部ハケメのちミガキ。底部ミガキ	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/4	外面煤
1551	弥生土器	甕	口唇部クシ描き沈線。胴部ハケメのちミガキ。底部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/4	外面煤
1552	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメのちミガキ。底部ナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/4	
1553	弥生土器	甕	口唇部凹線？。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	淡橙　5YR8/4	外面煤
1554	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちミガキ。	胴部ケズリ。	淡橙　10YR8/3	
1555	弥生土器	甕	口唇部クシ描き沈線。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ	淡橙　5YR8/4	
1556	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部、底部ハケメ。	胴部ケズリ。	にぶい橙　7.5YR7/4	
1557	弥生土器	甕	胴部、底部ミガキ。	胴部ケズリ。	橙　7.5YR7/6	
1558	弥生土器	甕	口縁部ユビオサエのちハケメ。胴部ハケメ。底部ナデ。	口縁部ハケメ。胴部ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/4	外面煤
1559	弥生土器	甕	口縁部ユビオサエ。胴部ハケメ。	口縁部ハケメ。胴部ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/4	外面煤
1560	弥生土器	甕	口縁部ユビオサエ、ナデ。胴部、底部ハケメ。	口縁部ハケメ。胴部ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/6	外面煤

第348図　井戸３出土遺物(2)（1/4）

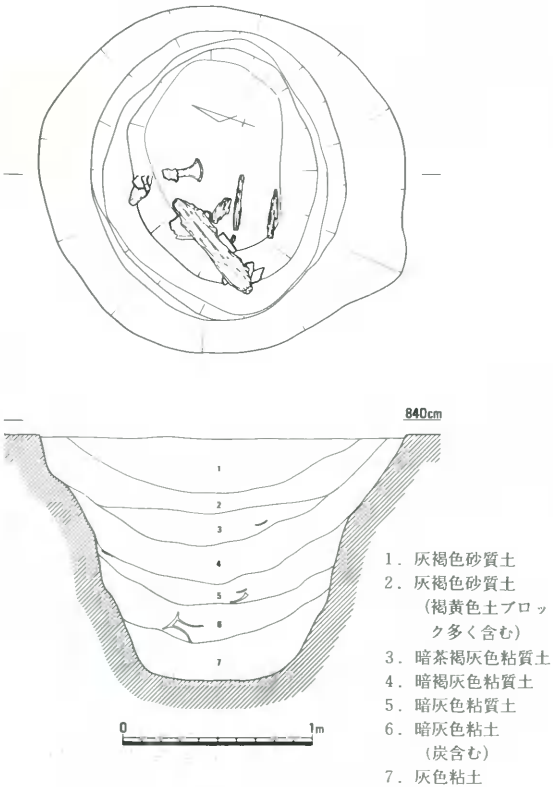


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1561	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ？。	胴部ユビオサエ、ナデ？	橙　5YR7/8	
1562	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。	胴部上半ミガキ。	にぶい橙　5YR7/4	
1563	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	橙　2.5YR7/6	
1564	弥生土器	台付鉢	脚部外面ユビオサエ。	脚部ヨコナデ。	浅黄橙　7.5YR8/4	
1565	弥生土器	高杯	ミガキ。脚部すかし孔４個。	杯部ミガキ。脚部ナデ。	浅黄橙　7.5YR8/4	

第349図　井戸３出土遺物(3)（1/4）

しており、木質遺物や炭化物も多かった。この５・６層を対象に土壌の水洗を行ったところヒョウタン類の種子が検出されている。最下層の７層は遺物や炭を含まない均質な粘土層で、自然堆積と考えられる。

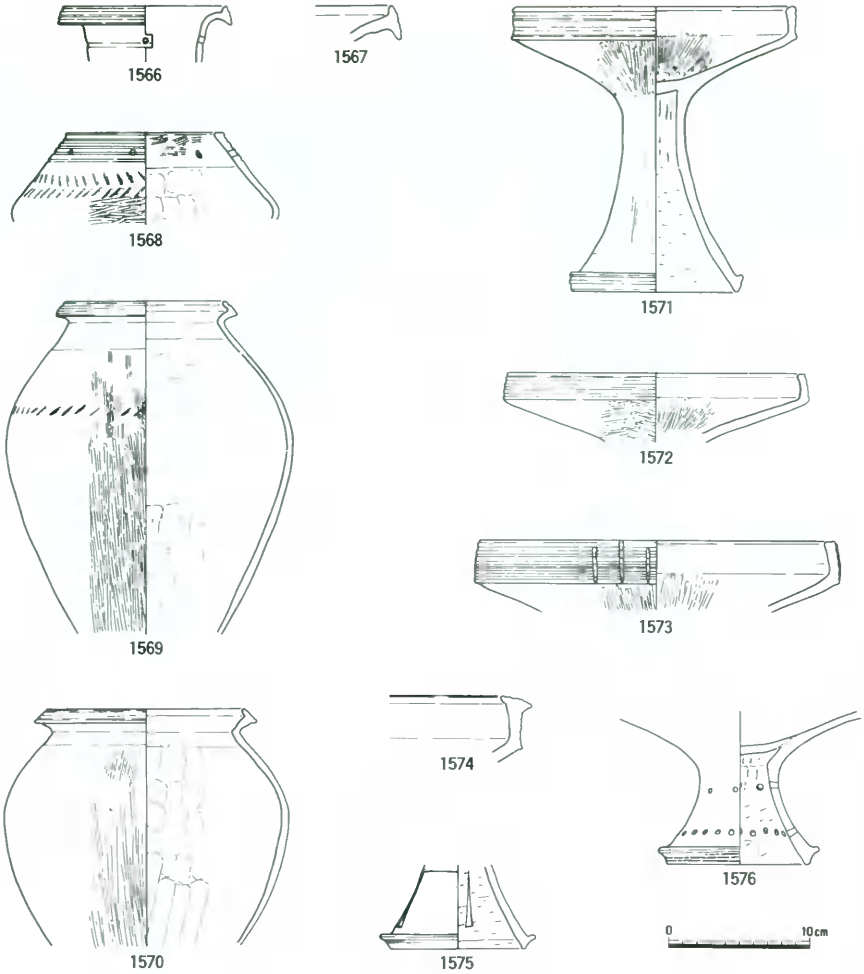
出土遺物には壺**1566**～**1568**、甕**1569**・**1570**、高杯**1571**～**1575**、台付鉢と思われる脚部**1576**などがある。このうち**1572**は１層出土、**1566**は第２層出土で、それ以外は下層出土である。上層と下層では明確な時期差は認められなかった。壺・甕ともに口縁端部を上方に折り返し、外面に凹線を施しているが、甕については下方への垂下は顕著ではない。体部内面ケズリも下半までしか施されておらず古い様相を残している。高杯は口縁が内傾気味に直立し、その外面に凹線を施すものであるが、**1574**のように口縁端部上面を拡張するという新しい様相を示すものも含む。以上の特徴から、弥生時代中期後葉で、従来の前山Ⅱ式の範疇に埋没したと考えられる。　（久保）



第350図　井戸４（1/60）

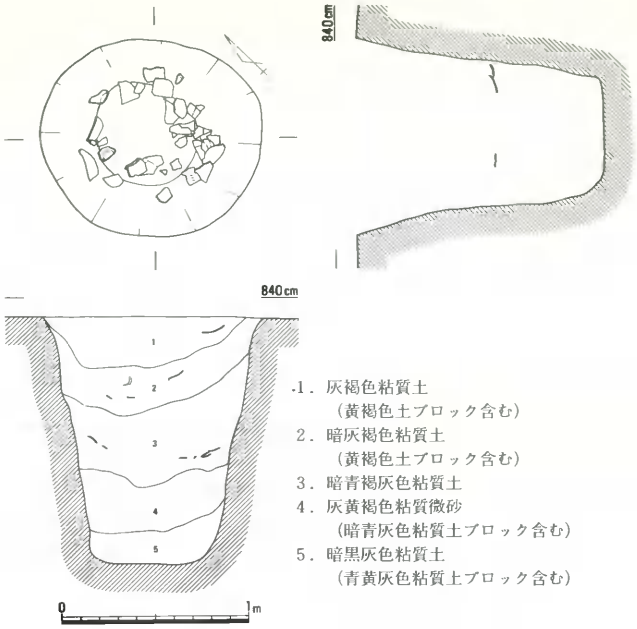
井戸５（第352図）

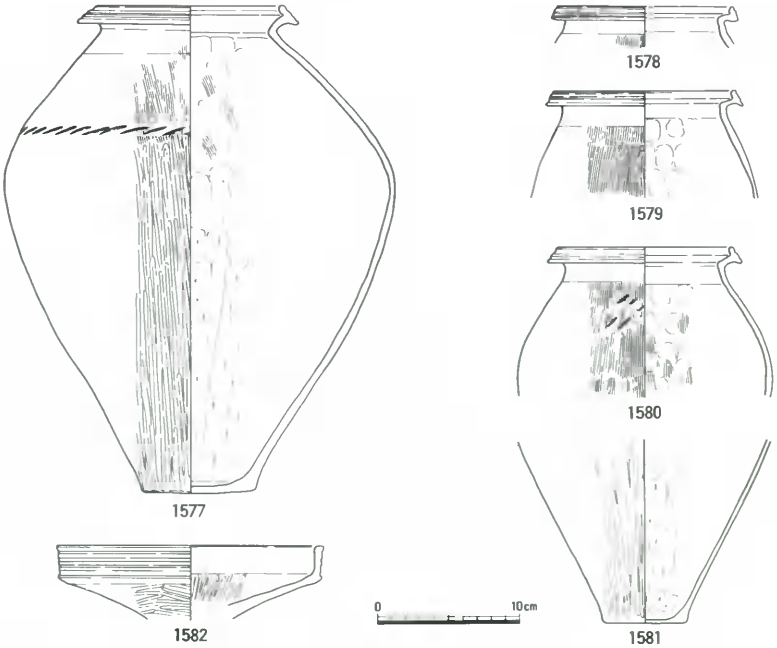
径約１×1.2m、深さ約1.3mを測るほぼ円形を呈する井戸である。井側・井筒などの構造物をもた



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1566	弥生土器	壺	口唇部凹線３本。胴部穿孔１個残存。	ヨコナデ？。	灰白　10YR8/1	
1567	弥生土器	壺	口唇部凹線８本。	ヨコナデ。	灰白　2.5Y8/1	
1568	弥生土器	壺	口縁部凹線５本。穿孔。胴部刺突文、ミガキ。	口縁部ハケメのちナデ　胴部ユビオサエ、ナデ。	灰白　2.5Y8/2	
1569	弥生土器	甕	口唇部凹線３本。胴部ハケメのちミガキ、刺突文。	口縁部ヨコナデ。胴部下半ケズリ。	灰白　10YR8/1	
1570	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部下半ユビオサエ、ナデ。下半ケズリ。	灰白　10YR8/2	
1571	弥生土器	高杯	口縁部凹線３本。杯部ミガキ。脚部ミガキ？	杯部ミガキ。脚部ヨコケズリ。	灰黄　2.5Y7/2	
1572	弥生土器	高杯	口縁部凹線４本。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	灰白　5YR8/1	
1573	弥生土器	高杯	口縁部凹線６本、棒状浮文。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	灰白　2.5Y8/2	
1574	弥生土器	高杯	口唇部凹線５本。口縁部凹線６本。	口縁部ヨコナデ	灰白　2.5Y7/1	
1575	弥生土器	高杯	脚部ヘラ描き沈線、すかし孔。脚端部ヨコナデ、沈線？。	ヨコケズリ。	灰白　2.5Y8/2	
1576	弥生土器	台付鉢	脚部上半すかし孔８個、下半すかし孔23個、脚端部沈線。	脚部ケズリ	黒色　10YR[illegible]	

第351図　井戸４出土遺物（1/4）





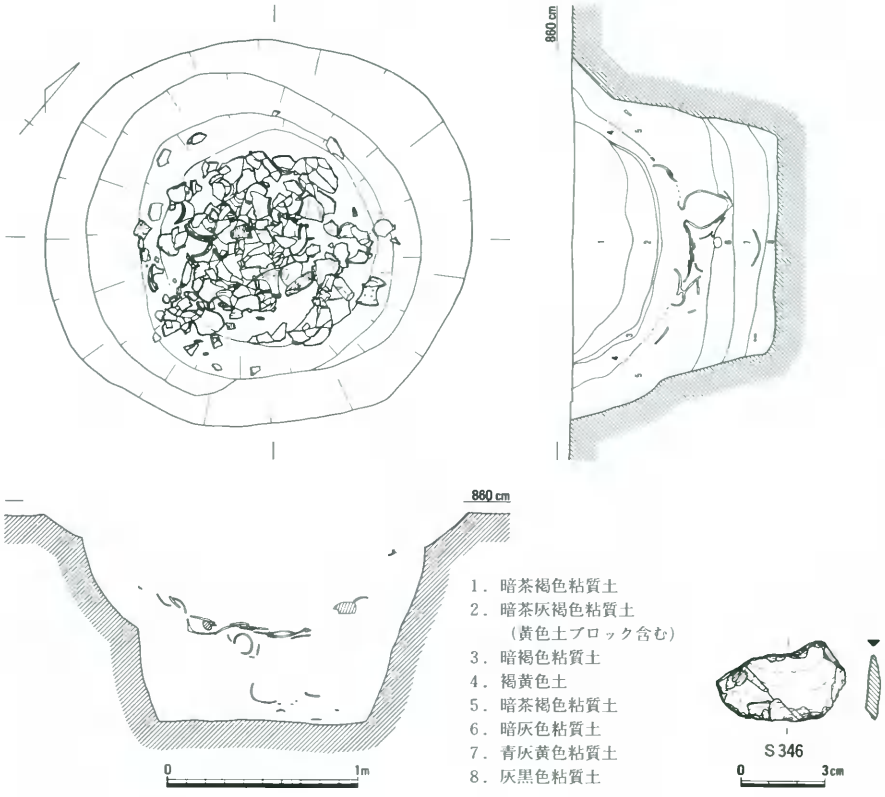
第352図　井戸５（1/30）・出土遺物（1/4）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1577	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ。	胴部ケズリ。	灰白　10YR8/1	
1578	弥生土器	甕	口唇部凹線３本。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ナデ？。	灰白　10YR7/1	
1579	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエのちナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1580	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ、刺突文。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ハケメ。	褐灰　10YR4/1	
1581	弥生土器	甕	口唇部凹線？。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	黄灰　2.5Y4/1	
1582	弥生土器	高杯	口縁部凹線４本。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	灰白　10YR8/1	

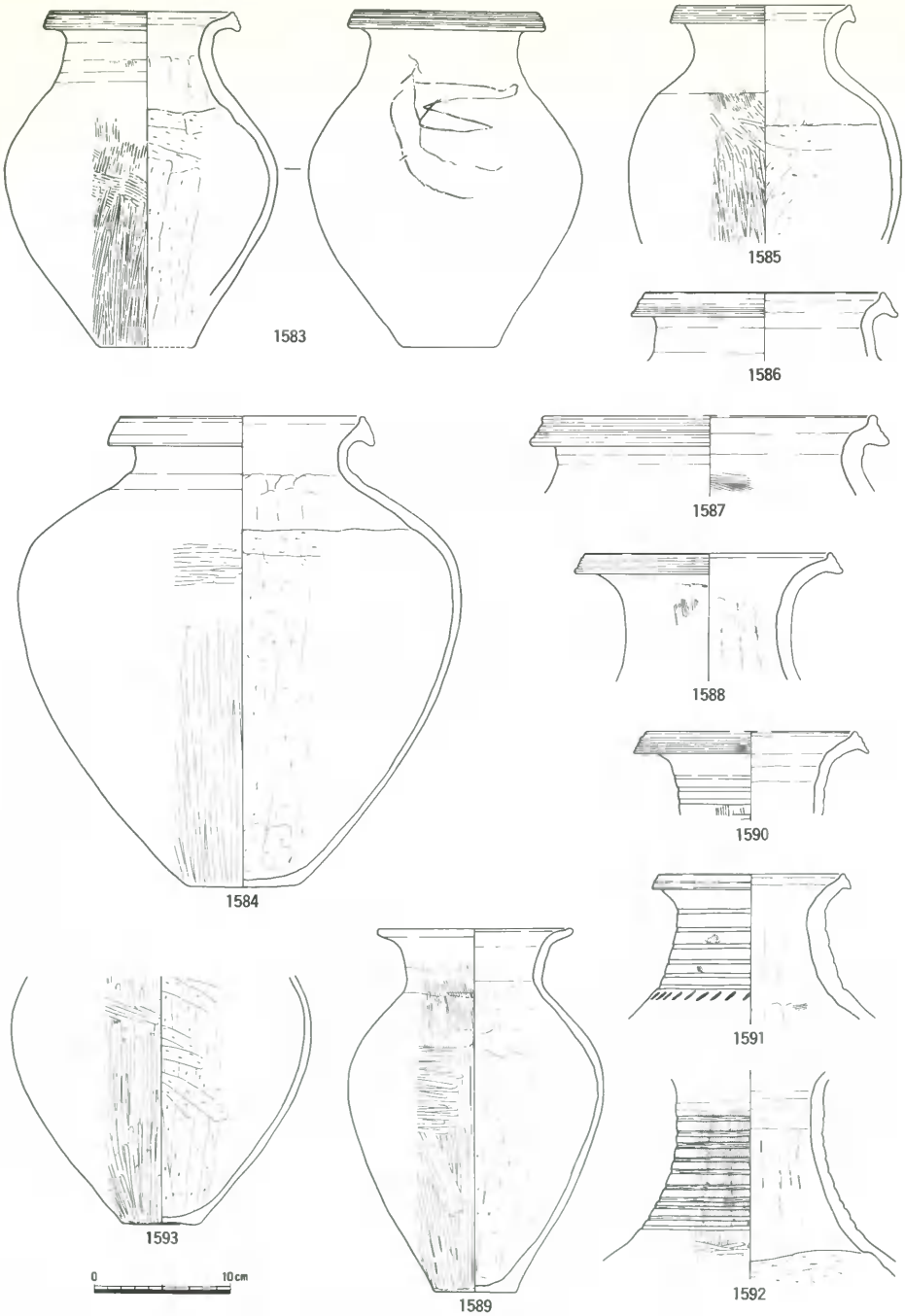
ない、素掘りの井戸と推定される。上層では(１・２層)、黄褐色土の塊が多く含まれ、しかも土器の出土が顕著である。２層では、とくに土器や炭の出土が目立っている。出土遺物には、均整のとれた完形に復することができた**1577**のほか、**1578**～**1581**の甕形土器の破片がもっとも多い。**1582**は高杯の杯部の一部分である。これらの遺物から、井戸の廃絶時期は、弥生時代中期後葉に比定される。（岡田）

井戸６（第353－357図、図版20・48）

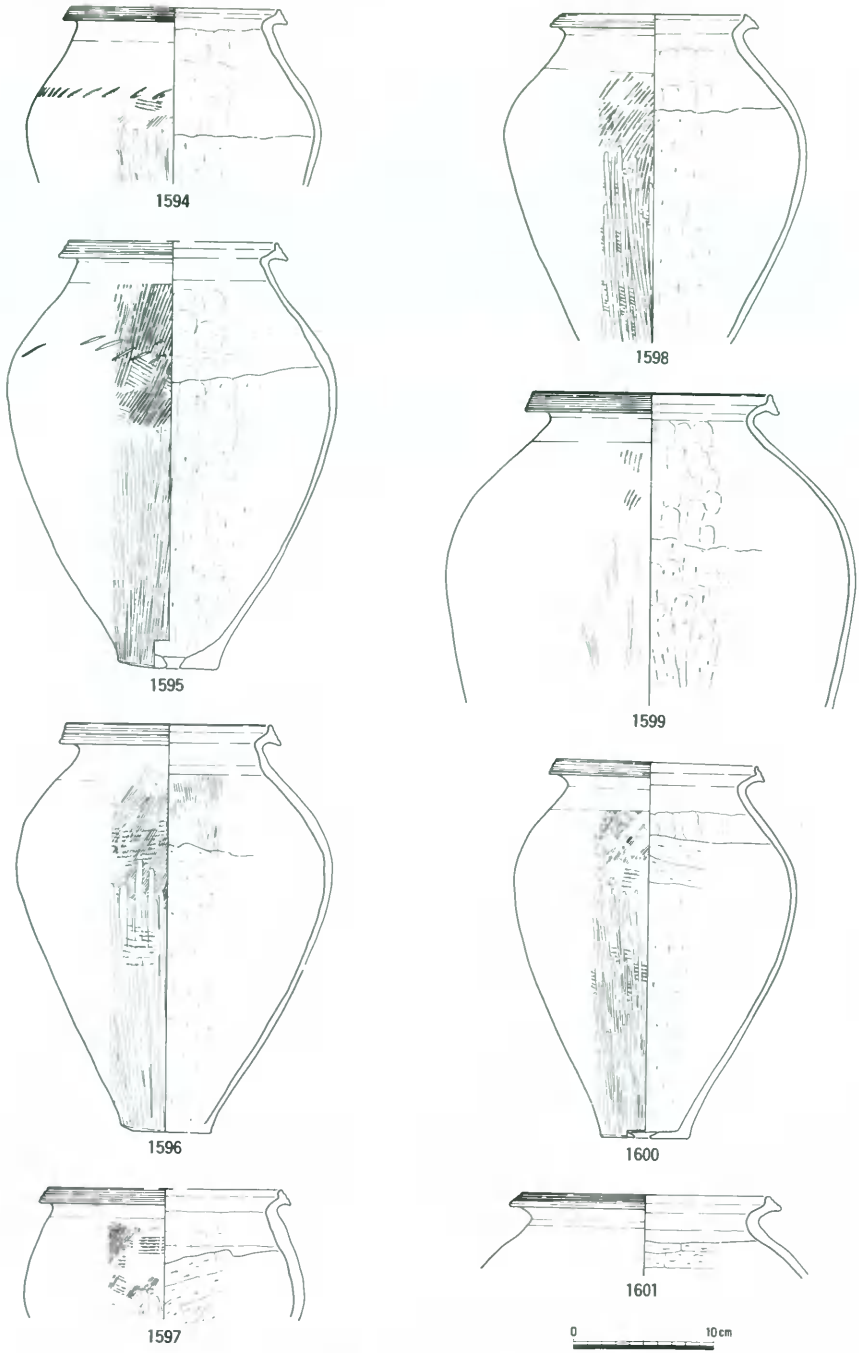
第１微高地上に位置する、素掘りの井戸である。弥生時代前期包含層を切り込んで掘削されている。検出面からの深さは約110cmで、底面の海抜高は約7.4ｍに達する。埋土は８層に分かれ、最下層の８層は有機質の多い粘土で自然堆積層と考えられる。５層は土器溜りを形成しているが、直上の４層は黄色土ブロックを多量に含んでおり、意図的に廃棄され、埋められた様子がうかがえる。１・２層も



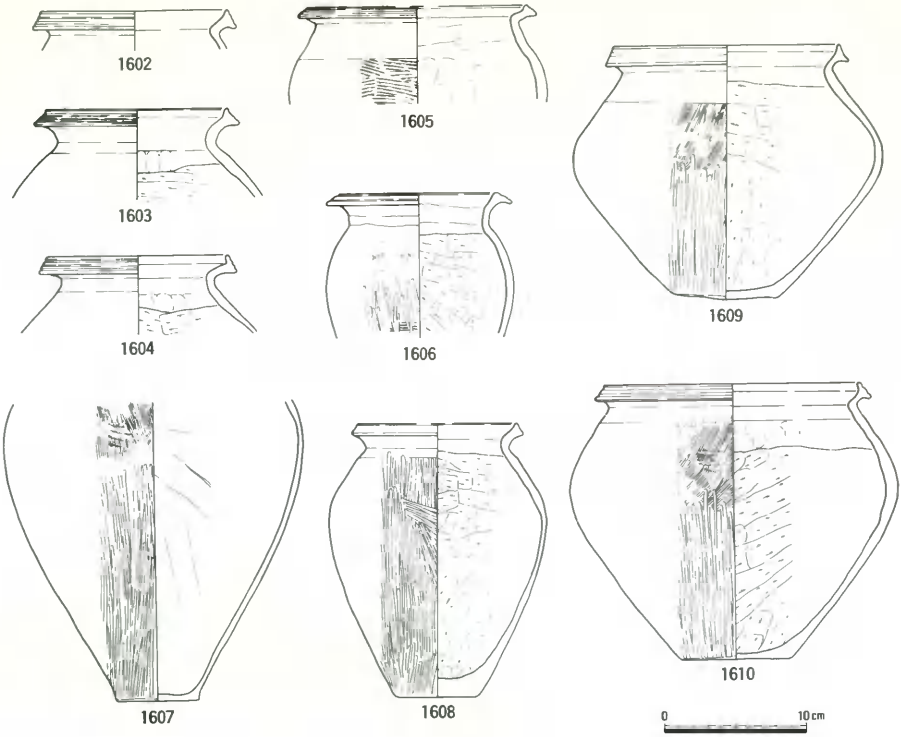
第353図　井戸６(1/30)・出土遺物(1)(1/2)



第354図　井戸６出土遺物(2)（1/4）

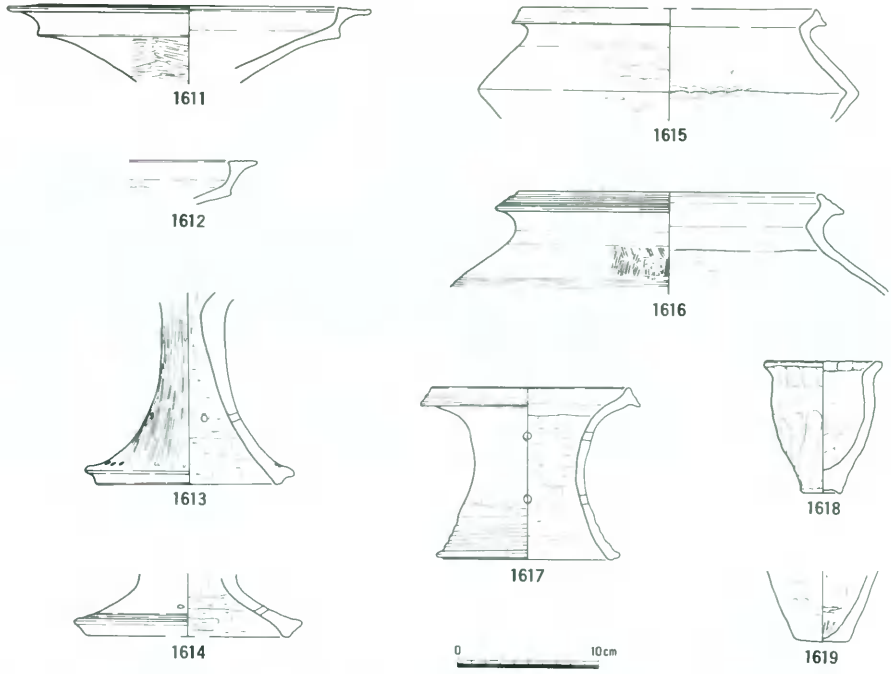


第355図　井戸６出土遺物(3)（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1583	弥生土器	壺	口唇部凹線３本。頸部ヨコナデ。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。胴部ケズリ。	橙　5YR7/6	
1584	弥生土器	壺	口縁部、頸部ヨコナデ。胴部ミガキ。	頸部ユビオサエ、ナデ。胴部ケズリ。	灰白　10YR8/2	
1585	弥生土器	壺	口唇部凹線３本。頸部ヨコナデ。胴部ミガキ。	胴部下半ケズリ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1586	弥生土器	壺	口唇部凹線３本。頸部ヨコナデ。	口頸部ヨコナデ。	橙　5YR7/8	
1587	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちナデ？。	灰黄褐　10YR4/2	
1588	弥生土器	壺	口唇部凹線３本。頸部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。頸部シボリ、ナデ。	浅黄橙　7.5YR8/3	
1589	弥生土器	壺	頸部ハケメのちヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ。	灰白　5Y7/2	
1590	弥生土器	壺	口唇部凹線４本。頸部沈線３本	口頸部ヨコナデ。	にぶい橙　5YR7/4	
1591	弥生土器	壺	口唇部凹線、頸部沈線６本、刺突文	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ、ナデ。	灰白　5YR8/2	
1592	弥生土器	壺	頸部ハケメのち沈線10本。	頸部シボリ、ナデ　胴部ケズリ。	にぶい橙　5YR7/4	
1593	弥生土器	壺	胴部ハケメのちミガキ；底部ケズリ、	ケズリ。	にぶい橙　5YR7/4	
1594	弥生土器	甕	口唇部凹線３本　胴部ハケメのちミガキ、刺突文	口縁部ヨコナデ　胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ。	黄橙　7.5YR8/8	
1595	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部上半タタキのちハケメ、刺突文。下半ミガキ、	口縁部ヨコナデ　胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ	橙　5YR7/6	焼成後穿孔。外面煤。
1596	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部上半タタキのちハケメ。下半タタキのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半ケズリ。	にぶい黄橙　10YR7/4	外面煤。
1597	弥生土器	甕？	口唇部凹線。胴部上半タタキのちハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ　胴部ユビオサエ、ケズリ	にぶい橙　5YR7/3	
1598	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部上半ハケメ、下半タタキのちミガキ	口縁部ヨコナデ　胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ	黄橙　7.5YR8/8	外面煤。
1599	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメ、ミガキ	口縁部ヨコナデ　胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ。	黄橙　7.5YR7/8	外面煤。
1600	弥生土器	壺	口唇部凹線。胴部上半ハケメ、下半タタキのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	橙　7.5YR7/6	外面煤。
1601	弥生土器	甕	口唇部凹線３本。胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	橙　5YR6/6	
1602	弥生土器	甕	口唇部凹線。	口縁部ヨコナデ	にぶい橙　7.5Y7/4	外面煤。
1603	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	胴部ユビオサエ、ケズリ	灰白　10YR8/2	
1604	弥生土器	甕	口唇部凹線３本。口縁部ヨコナデ。	胴部ユビオサエ、ケズリ。	灰黄褐　10YR4/2	
1605	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。胴部粗いハケメ	胴部ユビオサエ、ナデ。	にぶい橙　5YR7/3	
1606	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ　胴部タタキ、ハケメ、ミガキ	胴部ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/4	外面煤
1607	弥生土器	甕	胴部上半タタキのちハケメ　下半ミガキ　底部ナデ	胴部ケズリ。	橙　7.5YR6/6	外面煤
1608	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。底部ナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	橙　7.5YR7/6	外面煤。
1609	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。底部ナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	橙　7.5YR7/6	
1610	弥生土器	甕	口唇部凹線　胴部上半タタキのちハケメ、下半ミガキ	口縁部ヨコナデ　胴部ユビオサエ、ケズリ	橙　5YR7/6	

第356図　井戸６出土遺物(4)（1/4）



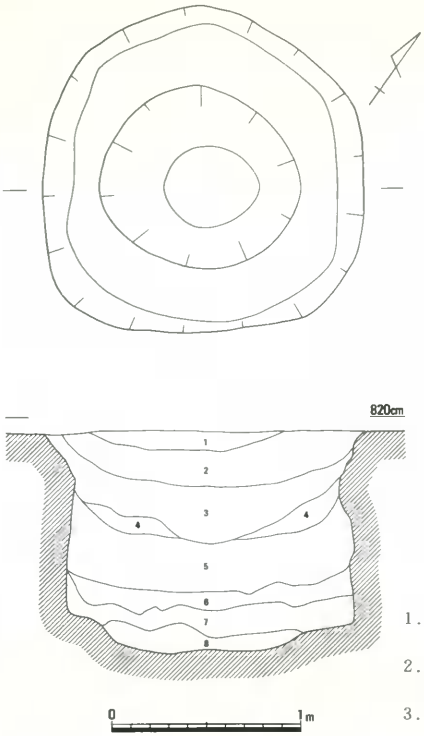
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1611	弥生土器	高杯	口唇部凹線５本。口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ？	橙　5YR6/6	
1612	弥生土器	高杯	口唇部凹線６本。口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。	褐灰　10YR5/1	
1613	弥生土器	高杯	脚部タテミガキ。すかし孔５個。竹管文。	シボリ、ヨコケズリ。	灰白　10YR8/2	
1614	弥生土器	高杯	すかし孔１個残存。脚端部ヨコナデ。	ヨコケズリ。	橙　5YR7/8	
1615	弥生土器	台付鉢？	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。		灰白　7.5YR8/2	
1616	弥生土器	台付鉢？	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。胴部凹線。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ。	淡黄橙　10YR8/3	
1617	弥生土器	器台	口唇部凹線。筒部ハケメ？。脚部凹線。脚端部沈線１本	口縁部ヨコナデ。筒部ヨコケズリ。	淡黄橙　7.5YR8/4	
1618	弥生土器	甕	口縁部、胴部上半ユビオサエ、ナデ。胴部下半ケズリのちナデ。	ユビオサエ、ナデ	にぶい黄橙　10YR7/2	
1615	弥生土器	甕	胴部ミガキ？。底部ケズリ。	ケズリ？	灰褐　7.5YR6/2	

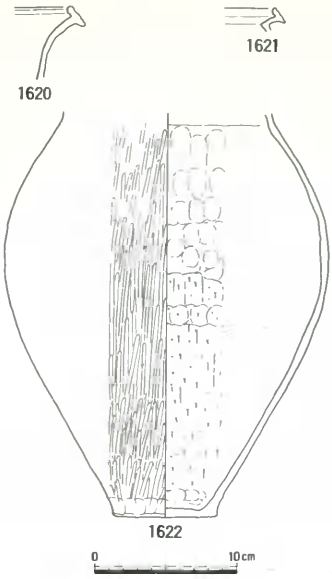
第357図　井戸６出土遺物(5)（1/4）

黄色土ブロックを含む土であるがブロックを含まない３層を間に挟んでおり、埋没後掘り返された可能性が考えられる。出土遺物には壺**1583**～**1593**、甕**1594**～**1610**、高杯**1611**～**1614**、鉢**1615**・**1616**、器台**1617**、手づくね土器**1618**・**1619**などがある。１～４層からは**1587**のほか細片が少量出土しているにすぎない。５層からは大量に出土しており、出土状況を第353図に図示している。**1584**～**1586**、**1591**～**1600**、**1603**～**1611**、**1613**～**1615**、**1617**、**1619**が出土している。これらのうち**1595**、**1596**は５層と６層から出土した破片が接合したものである。６～８層からは**1538**、**1588**～**1590**、**1601**、**1602**、**1612**、**1616**、**1618**が出土している。壺**1583**はほぼ完形で図示したような線描が施してあるが、線は細く途切れがちで意図的に描かれたかどうか定かでない。土器のほか石器も若干出土した。弥生時代後期前葉に埋没したと考えられる　（久保）

井戸７（第358図）

ＫＹ２区の弥生時代後期から古墳時代前期前葉の水田層を除去した後に検出した。平面形は171×169㎝の不整円形を呈し、深さは検出面から約115㎝残存していた。底面は微砂層のため明瞭ではな





1．黄褐灰色粘質土（焼土少量含む）
2．暗灰褐色砂質土（炭含む）
3．淡灰褐色砂質土
4．灰色粘質土
5．暗灰色粘土
6．青灰色砂質土
7．暗青灰色粘土
8．青灰色砂まじり粘土

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1620	弥生土器	壺	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口頸部ヨコナデ。	灰黄 2.5Y7/2	
1621	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	灰 N4/	
1622	弥生土器	甕	胴部タテミガキ。底部ナデ。	胴部上半ユビオサエ、ナデ。下半ケズリ	にぶい橙 5YR7/3	底部煤

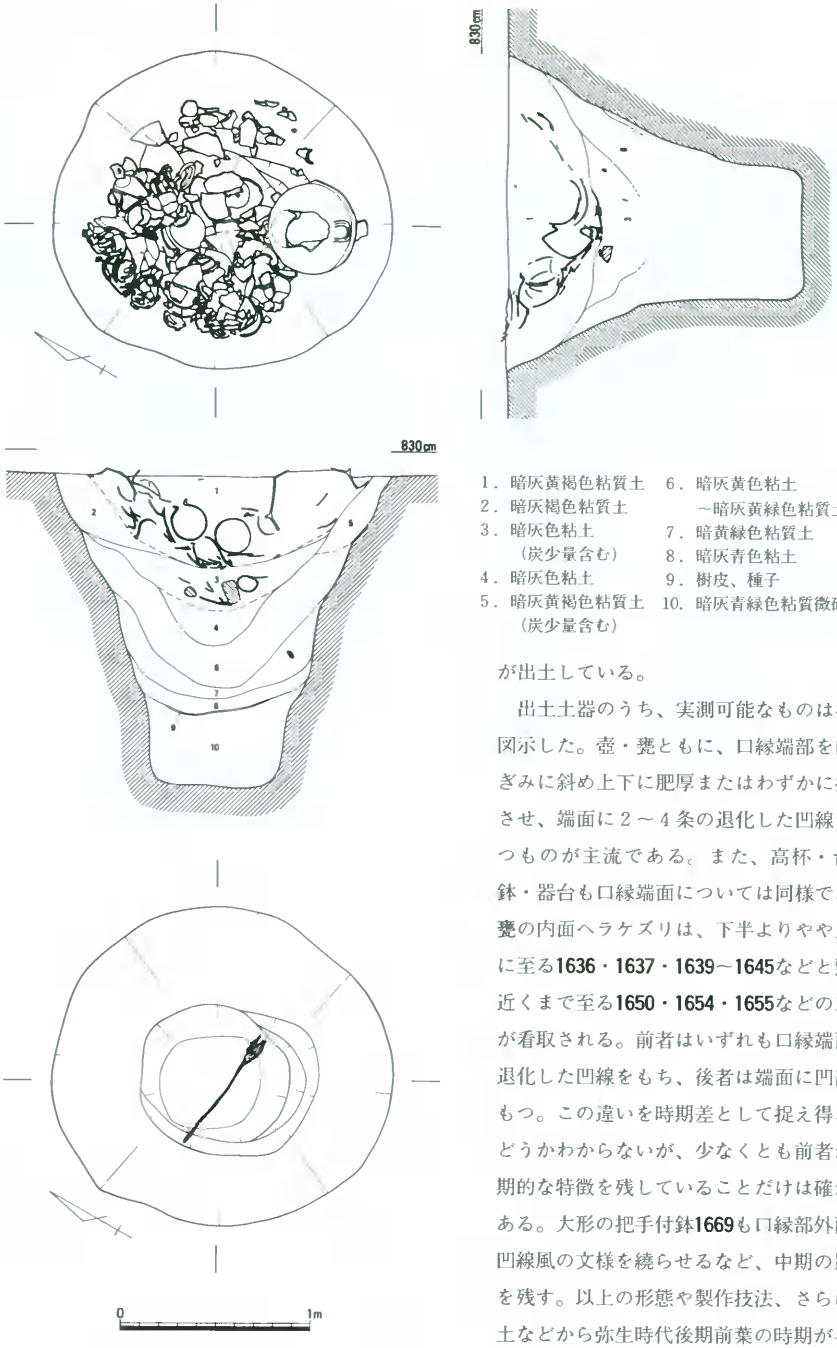
第358図　井戸７(1/30)・出土遺物（1/4）

かったが、中央がくぼんでいる。底面の海抜高は約6.95ｍである。埋土は８層確認できたが、１～４層（上層）と５～８層（下層）とに大きく区分できる。遺物はおもに下層から甕が少量出土しており、**1621・1622**は７層から出土した。これらの遺物から時期は、弥生時代中期後葉と考えられる。　（平井）

井戸８（第359～366図、図版20・49～51）

この井戸は、第３微高地の南西隅にあたるＴＯ調査区のほぼ中央に位置し、現水田床土直下の黄色基盤面に検出された。ほぼ円形の平面形を呈し、径のわりには底に向かってすぼまる漏斗形の断面形を示す。規模は、径170㎝前後、深さ166㎝を測る。

土層堆積は10層に細別されるが、全体的には土器溜りを呈する上位の１～３層、中位の４～８層、下位の９・10層の３層に大別される。中位の土層は中心に向かって低く堆積する、いわゆる自然堆積の状況を顕著に示す。土器類はほとんど隙間のないほど積み重なった状態で出土しているが、ほぼ完形あるいは完形近くまで復元できたものは４～５点にしか過ぎない。さらに、どの土器も器表面がかなり痛んでいて、器種構成から見ても日常生活土器以外になく、使用に絶えられなくなった土器の廃棄場にされた可能性が強い。土器以外では、３層から木材片、９層からヒョウタン類の種子と樹皮等

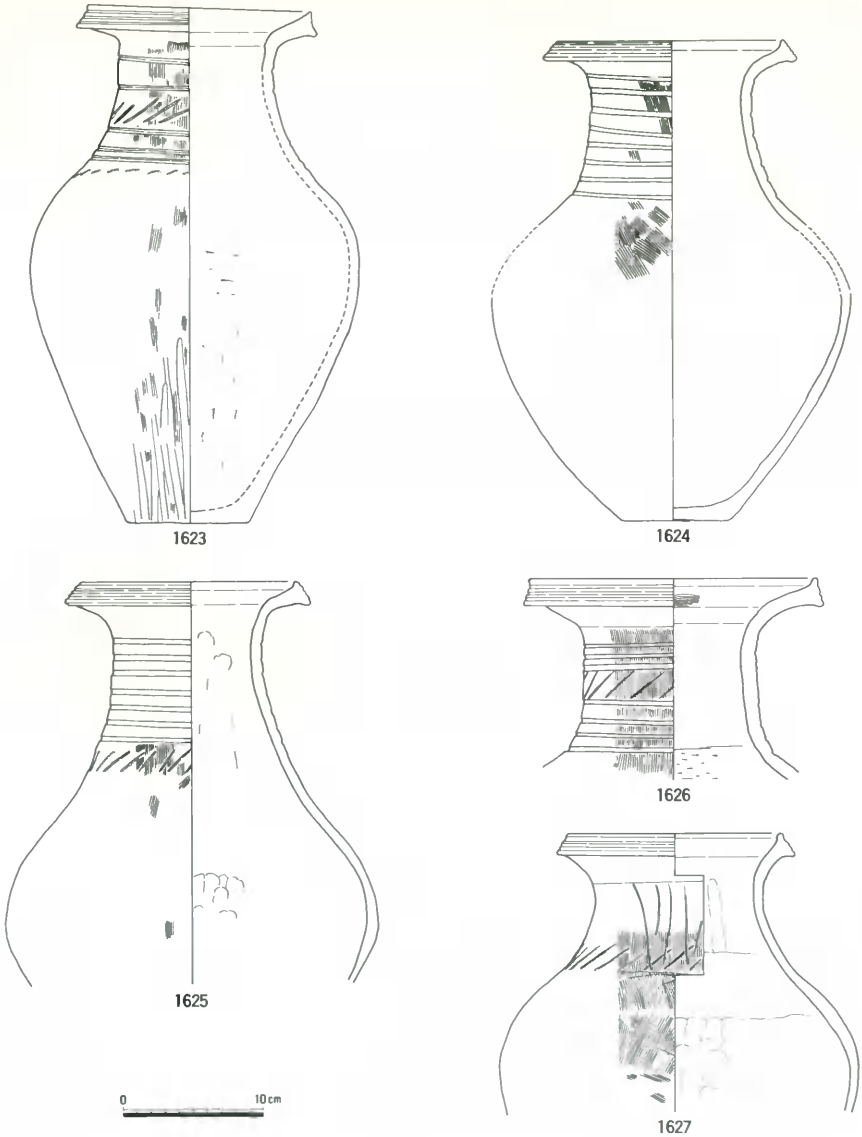


第359図　井戸８（1/30）

1．暗灰黄褐色粘質土
2．暗灰褐色粘質土
3．暗灰色粘土（炭少量含む）
4．暗灰色粘土
5．暗灰黄褐色粘質土（炭少量含む）
6．暗灰黄色粘土～暗灰黄緑色粘質土
7．暗黄緑色粘質土
8．暗灰青色粘土
9．樹皮、種子
10．暗灰青緑色粘質微砂

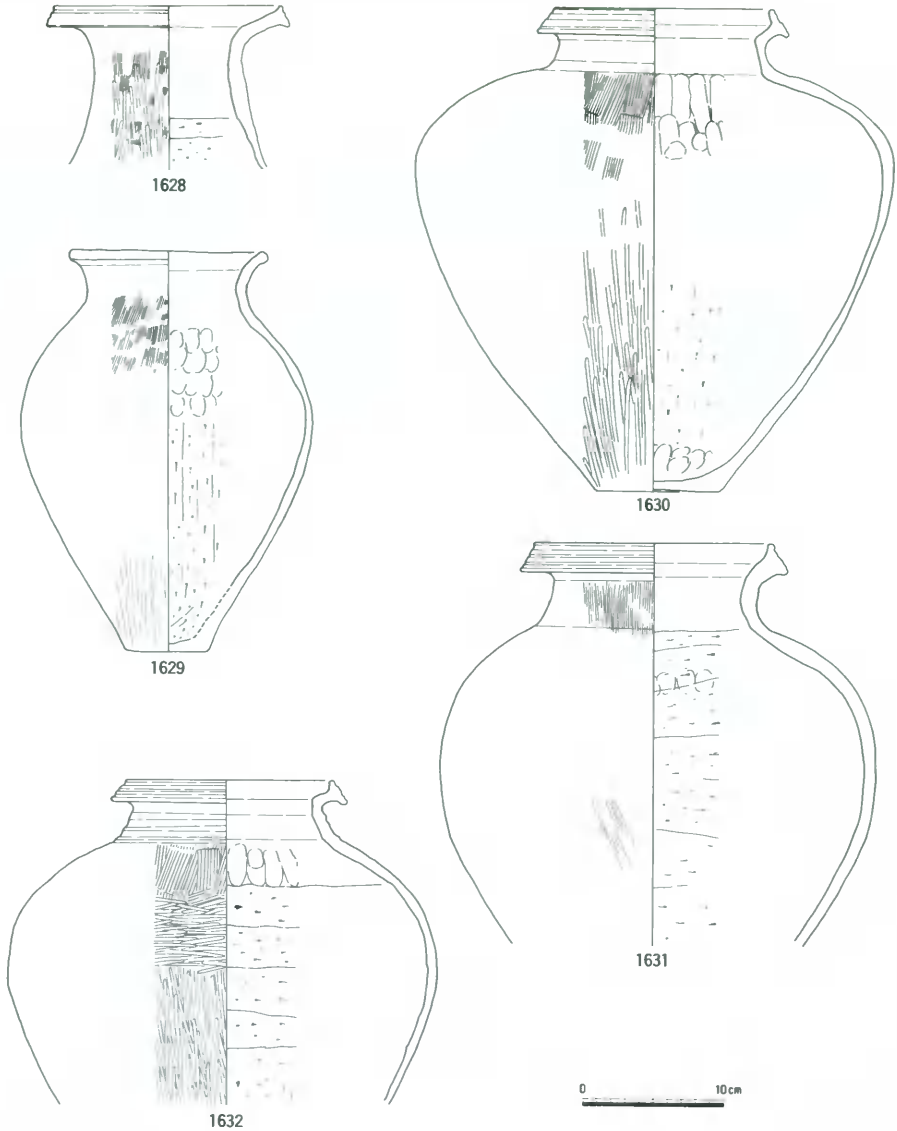
が出土している。

出土土器のうち、実測可能なものは極力図示した。壺・甕ともに、口縁端部を内傾ぎみに斜め上下に肥厚またはわずかに拡張させ、端面に２～４条の退化した凹線をもつものが主流である。また、高杯・台付鉢・器台も口縁端面については同様である。甕の内面ヘラケズリは、下半よりやや上部に至る**1636・1637・1639～1645**などと頸部近くまで至る**1650・1654・1655**などの二種が看取される。前者はいずれも口縁端面に退化した凹線をもち、後者は端面に凹部をもつ。この違いを時期差として捉え得るかどうかわからないが、少なくとも前者が中期的な特徴を残していることだけは確かである。大形の把手付鉢**1669**も口縁部外面に凹線風の文様を繞らせるなど、中期の影響を残す。以上の形態や製作技法、さらに胎土などから弥生時代後期前葉の時期が与えられる。（柳瀬）



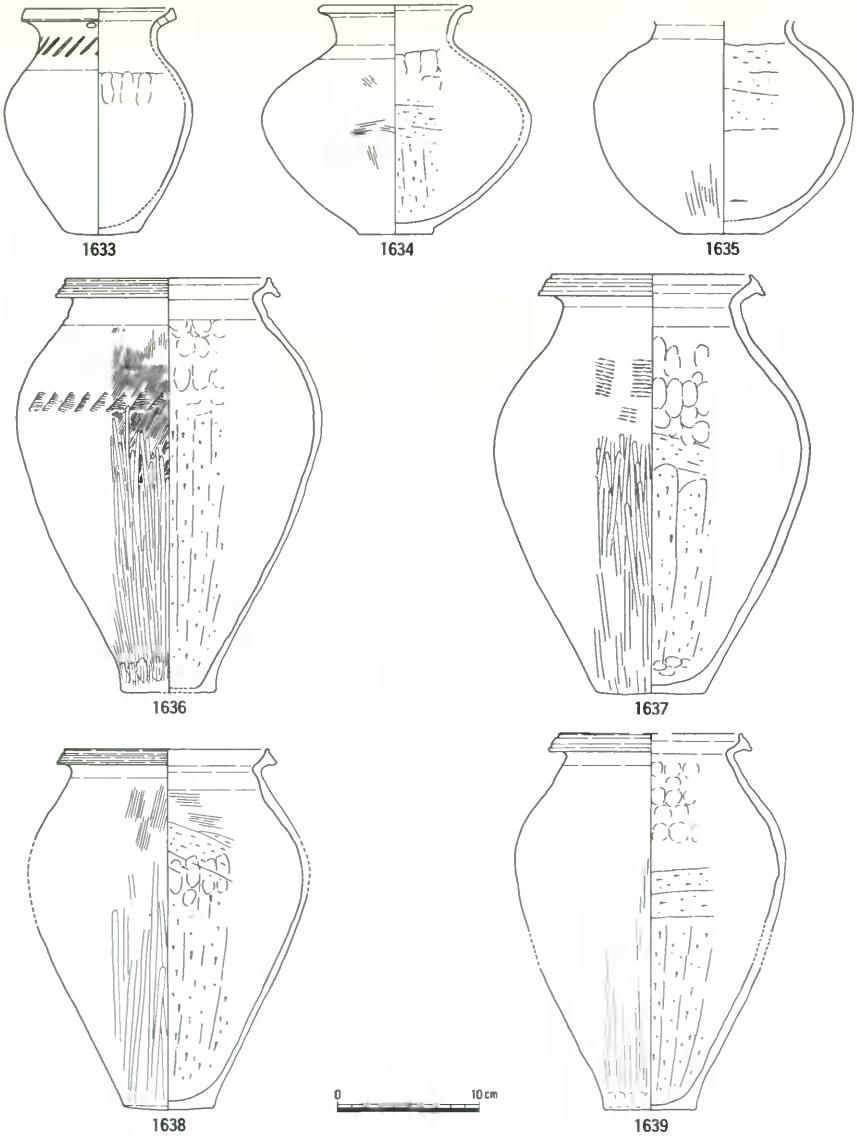
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1623	弥生土器	壺	口唇部凹線３本。頸部沈線、刺突文。胴部ハケメ、ミガキ。	口頸部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙　7.5YR7/3	
1624	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ハケメ、沈線。胴部ハケメ。	口頸部ヨコナデ。胴部ケズリ？。	橙　5YR7/6	
1625	弥生土器	壺	口唇部凹線４本。頸部ハケメ、沈線、刺突文。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。頸部、胴部ユビオサエ、ナデ。	淡橙　5YR8/3	
1626	弥生土器	壺	口唇部凹線３本。頸部ハケメ、沈線、刺突文。	口縁部ハケメ、ヨコナデ。頸部ナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/3	
1627	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ハケメ、刺突文、沈線文。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。胴部ケズリ？。	浅黄橙　7.5YR8/3	

第360図　井戸８出土遺物(1)（1/4）



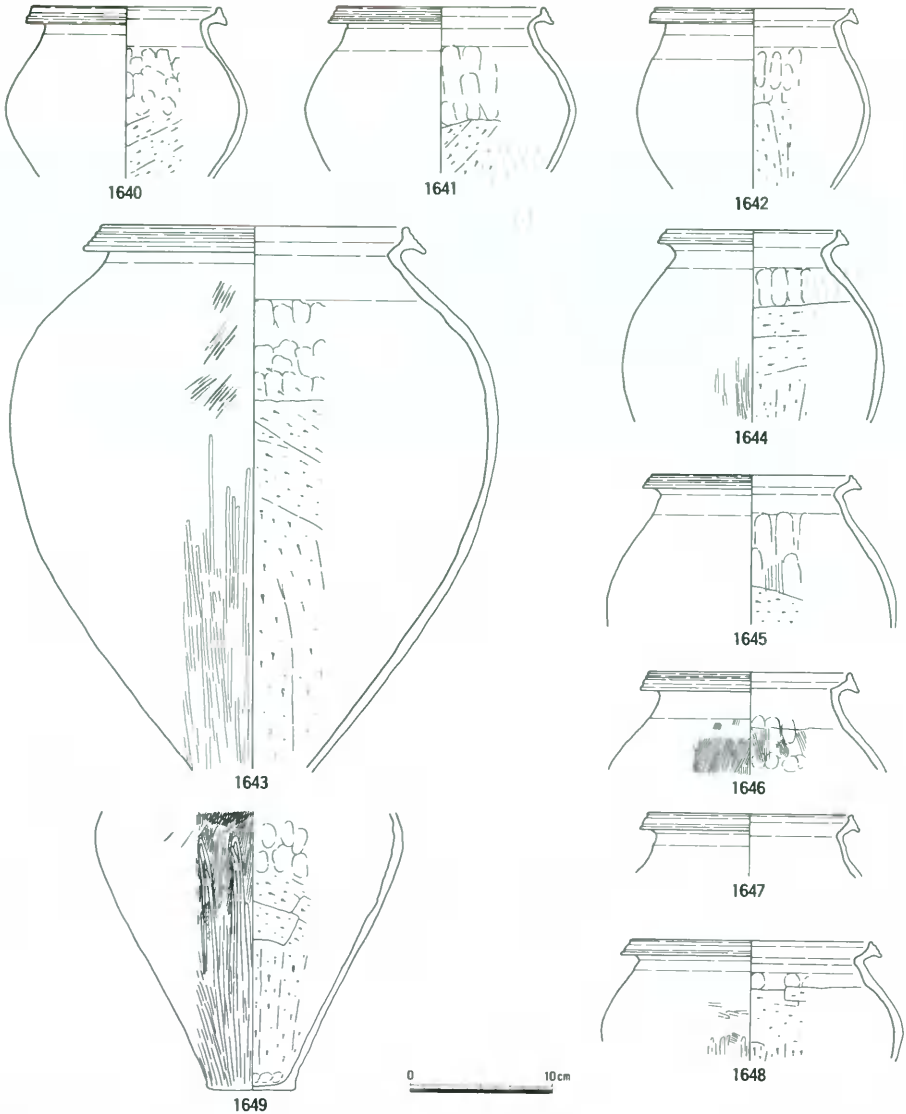
挿図番号	種別	器種	特徴		色調	備考
			外面	内面		
1628	弥生土器	壺	口唇部凹線、頸部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。頸部ナデ、胴部ケズリ	灰白　7.5YR8/2	
1629	弥生土器	壺	口頸部ヨコナデ、胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ。	灰白　2.5Y8/2	
1630	弥生土器	壺	口唇部凹線　胴部上半ハケメ、下半ミガキ　底部ミガキ	口頸部ヨコナデ。胴部下半ケズリ	淺黄橙　7.5YR8/3	
1631	弥生土器	壺	口唇部凹線４本。頸部ハケメ　胴部ハケメ？。	口頸部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白　7.5YR8/2	
1632	弥生土器	壺	口唇部凹線３本　頸部凹線　胴部ハケメ、ミガキ。	口頸部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ケズリ。	灰白　7.5YR8/2	

第361図　井戸８出土遺物(2)（1/4）



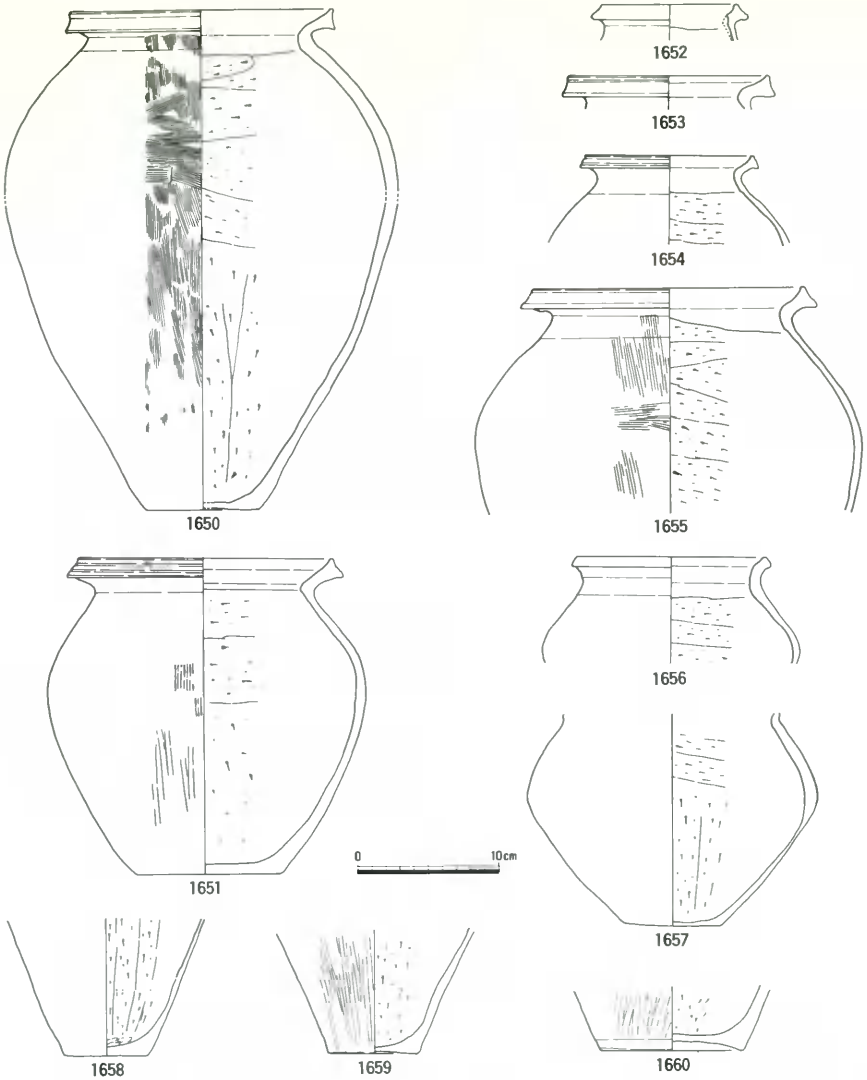
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1633	弥生土器	壺	口頸部ヨコナデ、刺突文	口頸部ヨコナデ。	淡橙　5YR8/4	穿孔１個残存。
1634	弥生土器	壺	口頸部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口頸部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、ナデ、下半ケズリ。	淡橙　5YR8/4	
1635	弥生土器	壺	頸部ヨコナデ。胴部下半ミガキ。	頸部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白　7.5YR8/2	
1636	弥生土器	甕	口唇部凹線、胴部上半ハケメ、刺突文。下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ	にぶい橙　7.5YR7/3	
1637	弥生土器	甕	口唇部凹線、胴部上半タタキのちハケメ。下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ	にぶい橙　5YR7/4	
1638	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部上半ハケメ。下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部上半ハケメ、下半ケズリ、	灰白　5YR8/1	外面煤。
1639	弥生土器	甕	口唇部凹線、胴部下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ	橙　7.5YR6/6	外面煤

第362図　井戸８出土遺物(3)（1/4）



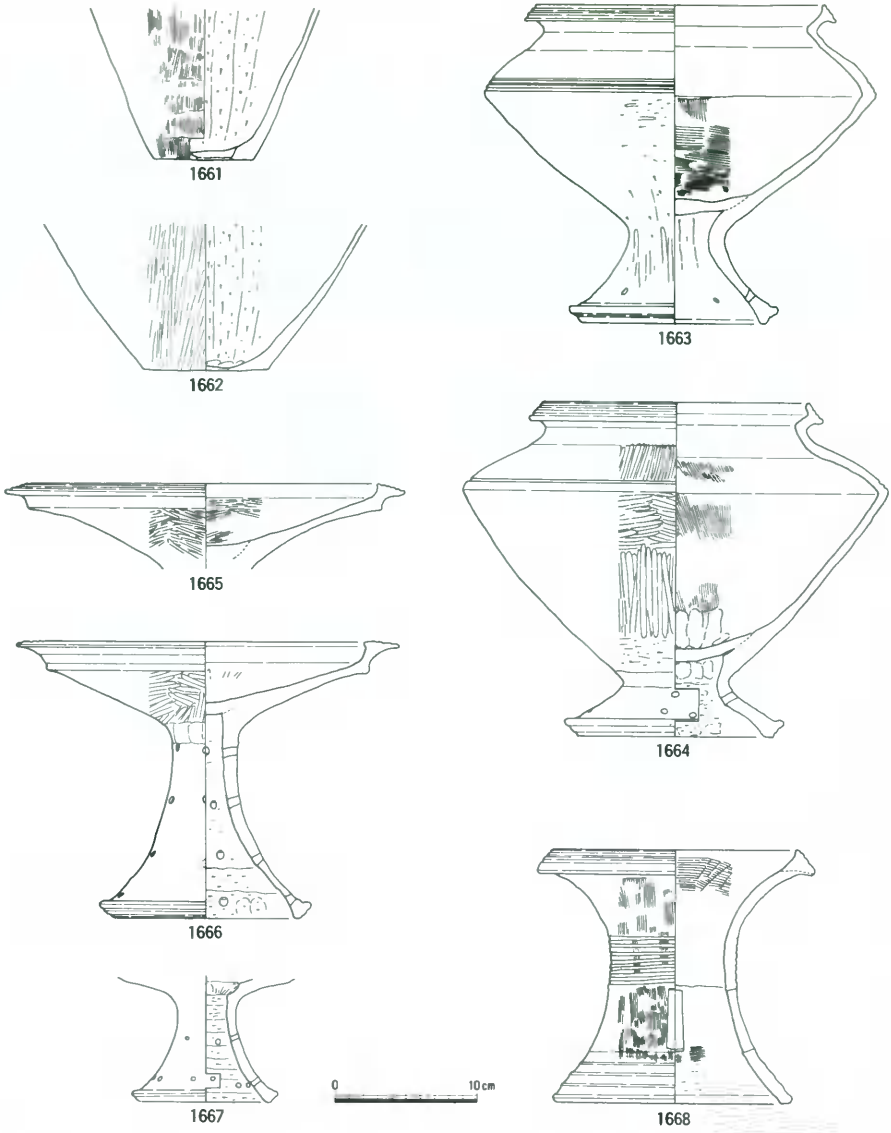
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1640	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ	橙　5YR7/4	
1641	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ。	淡橙　5YR8/3	
1642	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/4	
1643	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ケズリ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1644	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。胴部下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ケズリ。	橙　5YR7/6	
1645	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、ユビオサエ。下半ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/3	
1646	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ハケメ。	にぶい橙　7.5YR7/4	
1647	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ?。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ?。	橙　5YR7/6	
1648	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白　10YR8/1	
1649	弥生土器	甕	胴部上半ハケメ、刺突文。下半ミガキ。	胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ、	にぶい黄橙　10YR5/4	

第363図　井戸８出土遺物(4)（1/4）



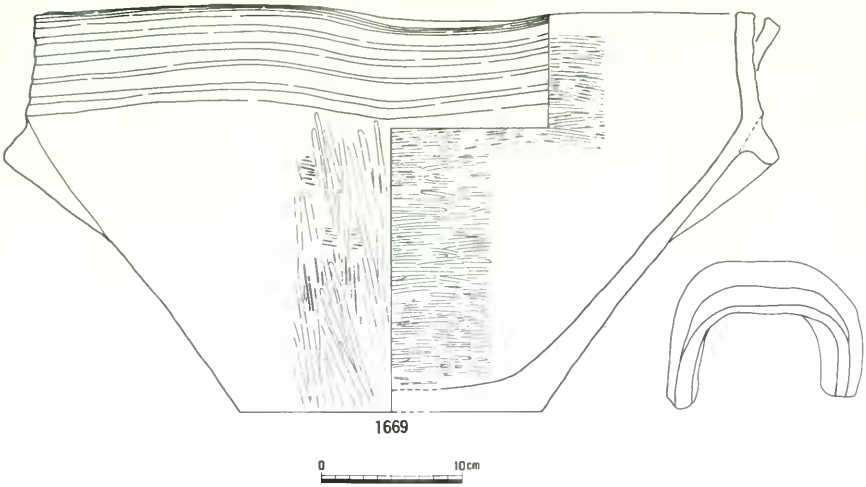
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1650	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/3	外面煤
1651	弥生土器	壺	口唇部凹線。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白　10YR8/1	
1652	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	淡黄　2.5Y8/3	
1653	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	浅黄橙　7.5YR8/3	
1654	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙　5YR7/4	
1655	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙　10YR8/3	外面煤
1656	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい褐　7.5YR6/3	
1657	弥生土器	壺？		胴部ケズリ。	橙　5YR7/8	
1658	弥生土器	壺	胴部ミガキ。	胴部ケズリ。	灰褐　7.5YR4/2	
1659	弥生土器	壺	胴部ミガキ。	胴部ケズリ。	にぶい橙　5YR7/4	
1660	弥生土器	壺	胴部ミガキ。底部ナデ。	胴部ケズリ。	にぶい黄橙　10YR7/2	

第364図　井戸８出土遺物(5)（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1661	弥生土器	壺	胴部ハケメ。	胴部ケズリ。	にぶい橙　7.5YR6/3	焼成後穿孔
1662	弥生土器	壺	胴部ミガキ。	胴部ケズリ。	灰白　10YR8/2	
1663	弥生土器	台付鉢	口唇部凹線。胴部ミガキ、沈線。脚部ミガキ、すかし孔6。	口縁部ヨコナデ。胴部下半ハケメ。脚部ケズリ?。	灰白　10YR8/2	
1664	弥生土器	台付鉢	口唇部凹線。胴部ミガキ、沈線。脚部ナデ、すかし孔	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。脚部ナデ、ケズリ	淡黄橙　7、5YR8/6	すかし孔3個4か所。
1665	弥生土器	高杯	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	淡赤橙　2.5YR7/4	
1666	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。脚部ナデ。脚端部凹線	杯部ミガキ。脚部ケズリ。	灰白　10YR8/2	
1667	弥生土器	高杯	脚部ナデ。すかし孔。	脚部ケズリ。	にぶい橙　5YR7/4	円板充填
1668	弥生土器	器台	口唇部凹線。筒部ハケメ、沈線。脚部凹線。	口縁部ハケメ。筒部ナデ。脚部ケズリ。	淡黄　2.5Y8/3	

第365図　井戸８出土遺物(6)（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1669	弥生土器	鉢	口縁部凹線、胴部ハケメのちミガキ、把手	口縁部ハケメ、胴部ハケメのちミガキ	灰白　7.5YR8/2	

第366図　井戸８出土遺物(7)（1/4）

(4) 土　　壙

土壙96（第367図）

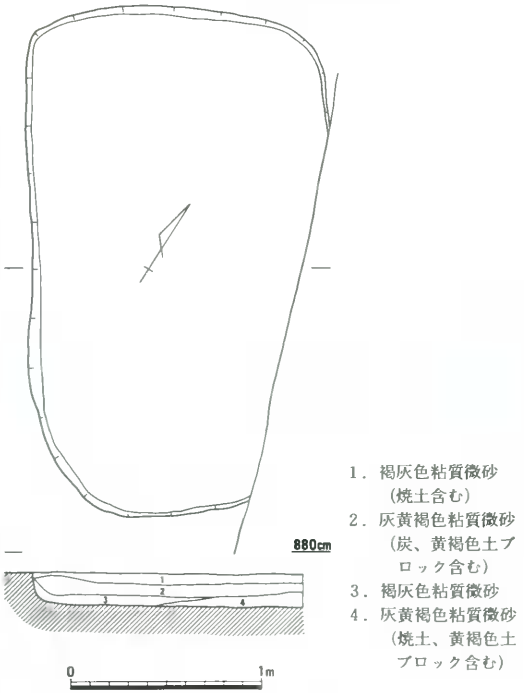
Ｈ２区中央部に所在し、建物３との距離６ｍを測る。東隅を調査対象外とするが、平面形は隅丸長方形と考えられ、長軸長271cm、短軸長160cmを測る。深さ17cmの断面形は皿形で、海抜高8.51ｍの底面はほぼ平坦である。少量の出土遺物から、弥生時代中期～後期に位置付けられる。（光永）

土壙97（第368図）

ＡＴ区南東部東端に位置し、溝８との距離3.3ｍを測る。南端部を欠くが、平面形は楕円形に復元され、現存長径106cm、短径65cmを測る。断面形は逆台形で、海抜高7.55ｍの底面はほぼ平坦である。少量の出土遺物から、時期は弥生時代後期の枠でとらえられる。（光永）

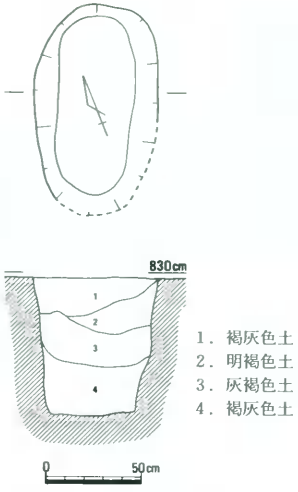
土壙98（第369図）

ＡＴ区南東部に位置し、竪穴住居６との距離1.7ｍを測る。平面形は158×87cmの隅

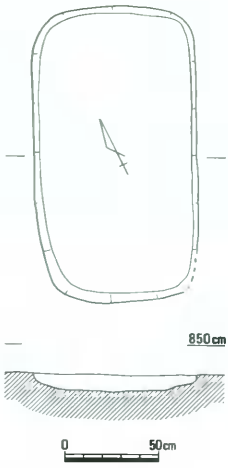


第367図　土壙96（1/30）

丸長方形で、海抜高8.25ｍの底面は中央部がゆるくくぼんでいる。少量の出土遺物により、時期は弥生時代後期の枠でとらえられる。（光永）



第368図　土壙97（1/30）



第369図　土壙98（1/30）

土壙99（第370・371図、図版20）

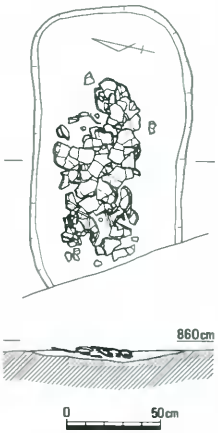
ＡＴ区南東部に位置し、土壙98との距離1.8ｍ、竪穴住居６との距離0.9ｍをそれぞれ測る。西端部を溝97に削られているものの、平面形は隅丸長方形に復元され、現存長軸長150㎝、短軸長84㎝を測る。断面形は凸レンズ状で、底面の海抜高は8.48ｍである。埋土からは、壺**1670**、高杯**1671**、器台**1672**をはじめとする弥生土器が一括出土しており、時期は弥生時代後期前葉に比定される。（光永）

土壙100（第372図）

第２微高地(西)に位置する。143×51㎝の長方形に近い平面形を呈し、深さは11㎝を測る。埋土には大量の炭・焼土を含んでいた。第４層は基盤が被熱の影響を受けた部分と考えられ、この場で火を焚いていたようである。遺物は西側中央にまとまって出土しているが細片ばかりで、図化しえたのは，壺**1673**・甕**1674**だけであった。時期は、弥生時代後期前葉に属すると考えられる。（久保）

土壙101（第373図）

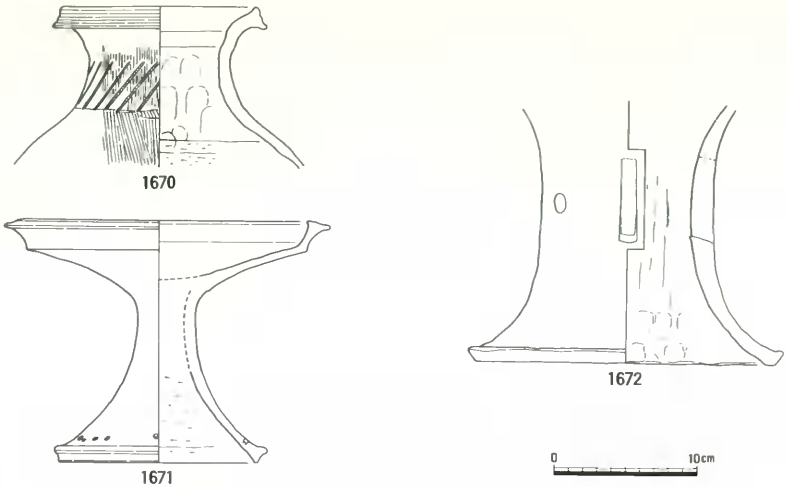
土壙100の東に位置する。東を溝11に切られ、南は調査区外に伸びるため全容は不明であるが、、残存部で420×250㎝、深さ35㎝を測る。西側がほぼ直角に近い角度を持つため、住居跡の可能性も考えたが、壁体溝や主柱穴らしきものは検出されなかった。時期の特定ができるほどの遺物は出土していないが、埋土の状況や切り合いから、弥生時代中期～後期前葉に属するであろう。（久保）



第370図　土壙99（1/30）

土壙102（第374図）

土壙101の北、ＤＥ区の北東隅に位置する。81×59㎝の楕円形を呈



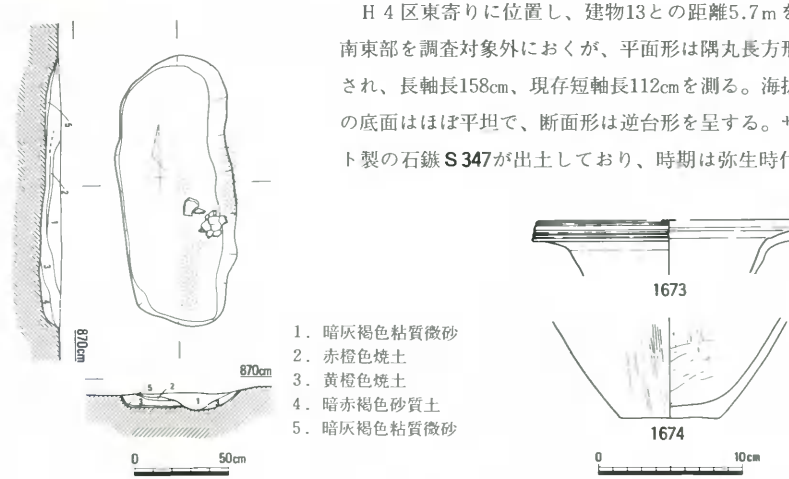
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1670	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ハケメ、刺突文。胴部ハケメ。	口縁部ハケメ。頸部ユビオサエ、ナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙　5YR6/4	
1671	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。脚端部竹管文。	脚部ケズリ。	橙　2.5YR7/6	
1672	弥生土器	器台	長方形と円形のすかし孔。	ユビオサエ、ナデ	橙　5YR7/6	

第371図　土壙99出土遺物（1/4）

し、深さは29cmを測る。出土遺物がないため時期の特定はできないが、埋土の状況により弥生時代中期～後期の範疇におさまると考えられる。（久保）

土壙103（第375図）

Ｈ４区東寄りに位置し、建物13との距離5.7ｍを測る。南東部を調査対象外におくが、平面形は隅丸長方形に復元され、長軸長158cm、現存短軸長112cmを測る。海抜8.33ｍの底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形を呈する。サヌカイト製の石鏃Ｓ347が出土しており、時期は弥生時代後期の



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1673	弥生土器	壺	口唇部凹線。口頸部ヨコナデ。	口頸部ヨコナデ。	灰白　2.5Y8/1	
1674	弥生土器	壺	胴部ミガキ。底部ナデ？	胴部ケズリ。	灰白　2.5Y8/2	

第372図　土壙100（1/30）・出土遺物（1/4）

中に求めたい。　（光永）

土壙104（第376図）

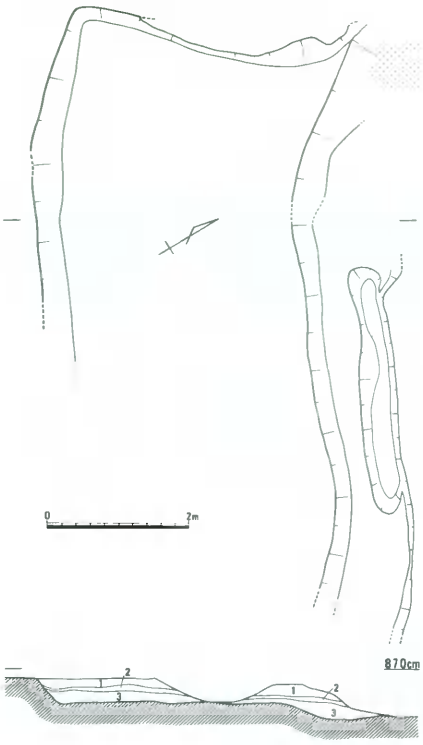
第２微高地（西）のＩＮ区西半部の建物16の西で検出した。平面形は135×93の不整楕円形を呈する。底面には凹凸があり、最も深い部分で検出面から約25cmを測る。埋土は大きく２層に分かれる。時期を特定できる遺物は出土していないが、埋土などから弥生時代中期後葉と考えておきたい。　（平井）

土壙105（第377図）

第３微高地のＥＮ区に所在し、土壙106との距離0.6ｍを測る。平面形は137×44cmの楕円形で、断面形は皿形を呈し、底面の海抜高は8.13ｍである。出土遺物は無いが、検出状況から弥生時代中期～後期に属すると考えられる。　（光永）

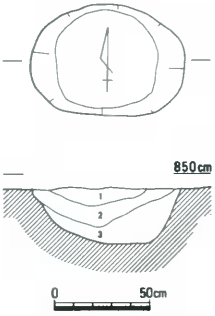
土壙106（第378図）

ＥＮ区北東部に位置し、溝35との距離5.5ｍを測る。平面形は主軸を東西におく長方形で、長軸長207cm、短軸長91cmを測る。深さ12cmの断面形は皿形を呈し、海抜高8.13ｍの底面はほぼ平坦である。遺物は出土していないが、埋土及び検出状況から、弥生時代中期～後期に比定される。　（光永）



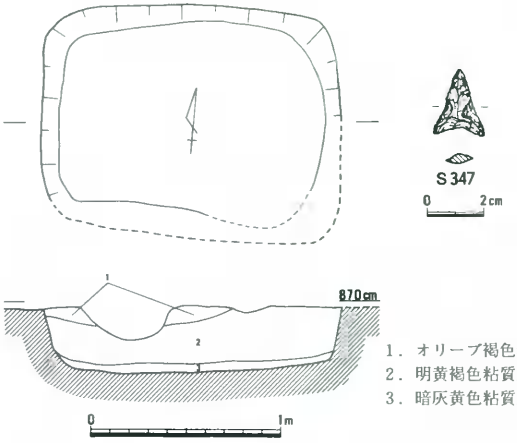
1．黄灰色粘質微砂　3．暗灰褐色粘質土
2．灰茶色粘質微砂

第373図　土壙101（1/80）



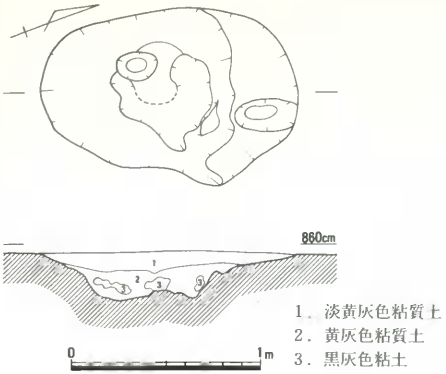
1．灰褐色粘質微砂
2．褐灰色粘質微砂
3．黄灰色粘質微砂

第374図　土壙102（1/30）

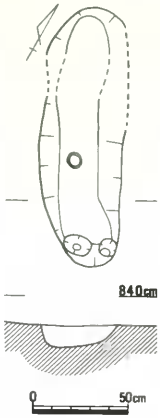


1．オリーブ褐色粘質土
2．明黄褐色粘質土
3．暗灰黄色粘質土

第375図　土壙103（1/30）・出土遺物（1/2）



第376図　土壙104（1/30）



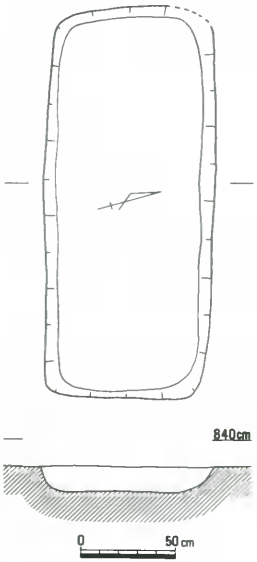
第377図　土壙105（1/30）

土壙107（第379図）

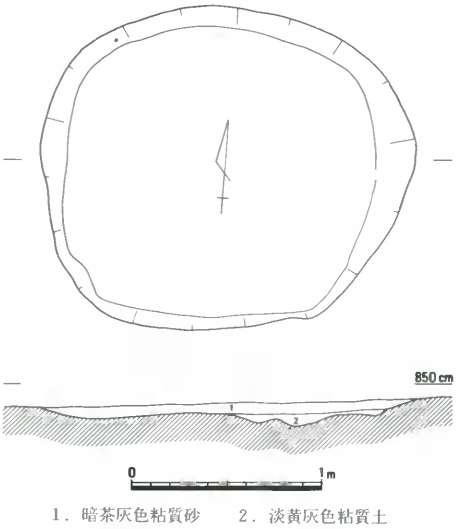
第２微高地(東)北部西寄り、ＪＹ区の中央に位置する。平面形は不整円形、断面皿状を呈す浅い凹地状の土壙である。規模は200×170㎝、深さ約10㎝を測る。遺物は皆無であったが、埋土の状況から当時期の遺構と判断し記載した。（江見）

土壙108（第380図）

第２微高地(東)北部中央、ＪＹ区の北部に位置し、土壙167に北側を一部切られている。平面は不正な長方形、断面は緩く落ち込む皿状を呈す。規模は170×110㎝、深さ約30㎝を測る。遺物は弥生時



第378図　土壙106（1/30）

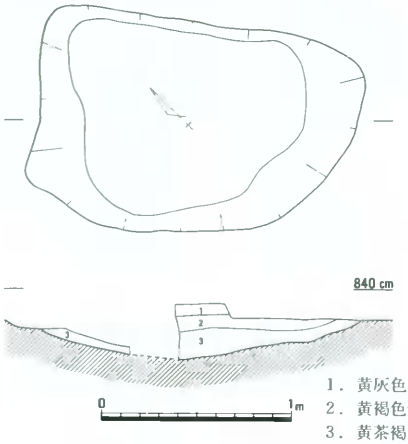


第379図　土壙107（1/30）

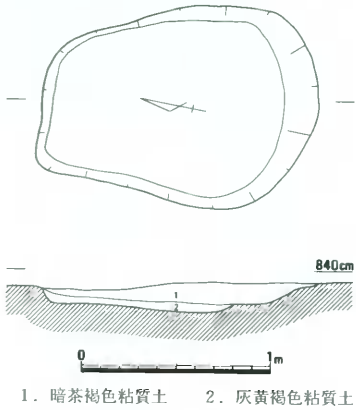
代後期と思われる土器細片が出土している。　（江見）

土壙109（第381図）

土壙108の東に位置する。平面は不整な長方形、断面は皿状を呈し、長軸は南北方向に向く。規模は150×100㎝、深さ15㎝を測る。遺物は主に上層から出土している。いずれも土器細片で、その特徴は弥生時代後期の範疇のものと思われる。　（江見）



第380図　土壙108（1/30）



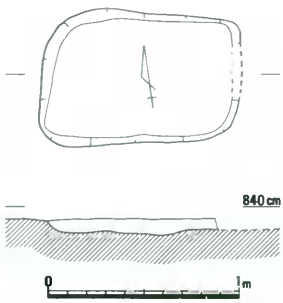
第381図　土壙109（1/30）

土壙110（第382図）

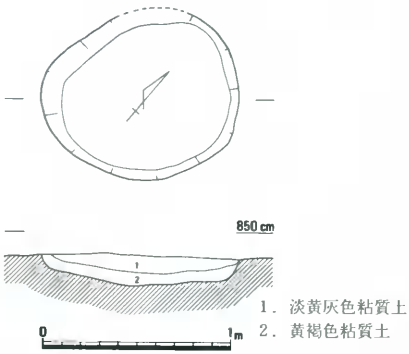
土壙166・167の東に接して検出された、ほぼ東西方向に主軸を持つ土壙である。平面は隅がやや丸みをもつものの長方形を呈す。東辺は小ピットにより切られている。長軸105㎝、短軸70㎝、深さ約10㎝を測る。遺物は甕の胴部片が出土している。　（江見）

土壙111（第383図）

土壙166・167の南約２ｍから検出された平面不整円形を呈す土壙で北西を一部小土壙に切られている。規模は径105×90㎝、深さ15㎝を測る。底部は平坦でなくやや凹凸を呈す。埋土中からの遺物の出土は皆無であった。　（江見）



第382図　土壙110（1/30）



第383図　土壙111（1/30）

土壙112（第384図）

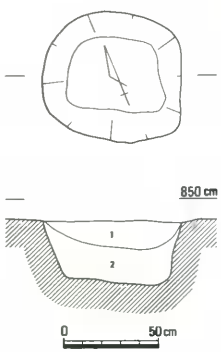
第２微高地(東)の北西、ＪＹ区の東部に位置する平面隅丸方形、断面逆台形を呈す土壙である。一辺約70cm、深さ約30cmを測る。埋土は黄灰色および灰褐色の粘質土からなり、遺物は弥生時代後期甕細片が１片出土するのみであった。（江見）

土壙113（第385図）

第２微高地(東)の中央、ＪＹ区の東部に位置する平面不整円形の土壙で、東部を土壙状遺構に切られている。径約100cm、深さ約20cmを測る。埋土は淡黄灰色粘質土で遺物は器表面磨滅の著しい土器細片が１片出土するのみであった。（江見）

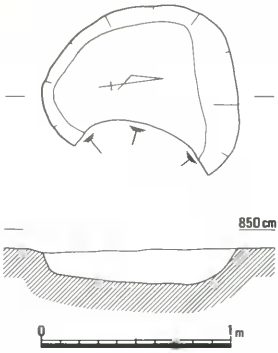
土壙114（第386図）

第２微高地(東)のＩＮ区東半部で検出した。平面形は70×66cmのほぼ円形で、深さは検出面から22cmを測る。断面形は台形を呈し、底面には１～２cmの厚さの炭層が認められた。埋土中からは土器片が少量出土しており、時期は弥生時代中期後葉と考えられる。（平井）

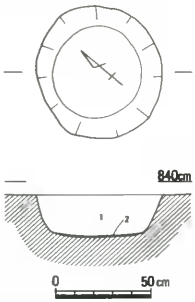


１．黄灰色粘質土　２．灰褐色粘質土

第384図　土壙112（1/30）



第385図　土壙113（1/30）



１．淡黄褐灰色砂質土　２．炭層

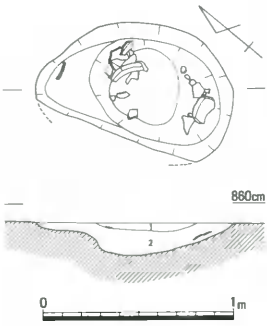
第386図　土壙114（1/30）

土壙115（第387・388図）

ＩＮ区東半部の土壙114の南で検出した。西端部は現代暗渠によって切られているが、本来は103×73cm程度の楕円形を呈していたものと考えられる。深さは18cmが残存していた。埋土は２層ある。遺物は図の２層から土器(甕・高坏)、サヌカイト製の石器(楔形石器)・剥片および作業台と考えられる石製品が出土している。これらの出土遺物から、時期は弥生時代中期後葉と考えられる。（平井）

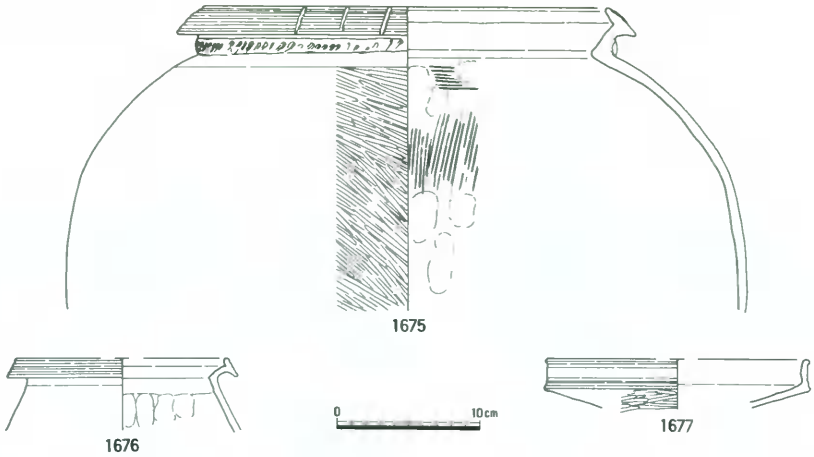
土壙116（台389図）

ＩＮ区の東半部の土壙115の南で検出した。平面形は68×59cmの不整円形を呈し、深さは24cmが残存していた。埋土は２層あり、土器片が少量出土している。これらの土器から時期は、弥生時代中期後葉と考えられる。（平井）



１．暗灰色砂質土　２．黒褐色粘質土
（炭、焼土を含む）

第387図　土壙115（1/30）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1675	弥生土器	甕	口唇部凹線、棒状浮文。胴部貼付刻目突帯。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ハケメ。	褐灰　7.5YR6/1	
1676	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ。	灰白　5Y7/2	
1677	弥生土器	鼓杯	口縁部凹線。杯部ミガキ	口縁部凹線。杯部ミガキ	にぶい橙　5YR6/3	

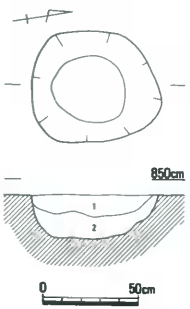
第388図　土壙115出土遺物（1/4）

土壙117（第390図）

ＩＮ区の東半部の建物23の東南部で検出した。平面形は127×50cmの長楕円形を呈し、深さは約14cmが残存していた。埋土は一層で、暗灰褐色粘土である。時期が特定できる遺物は出土していないが、埋土などから弥生時代中期後葉と考えておきたい。（平井）

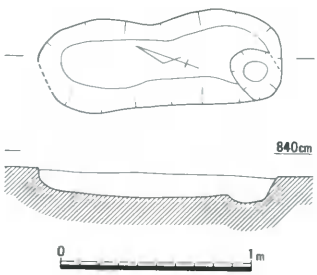
土壙118（第391図）

径約70cmを測るほぼ円形を呈する土壙である。壙底はほとんど平らで、しかも壁体は垂直に近い。上面が後世に削平されたことを考慮すると、本来は袋状土壙として掘りこまれた可能性が強く、現状はその下部といえる。出土遺物は、壙底に接して壺形土器の小片がわずかにみられた。（岡田）

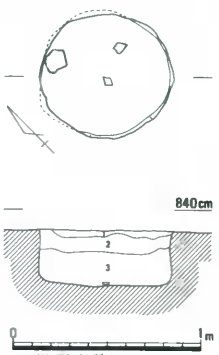


1．暗褐色粘質土
2．褐灰色粘質土

第389図　土壙116（1/30）



第390図　土壙117（1/30）

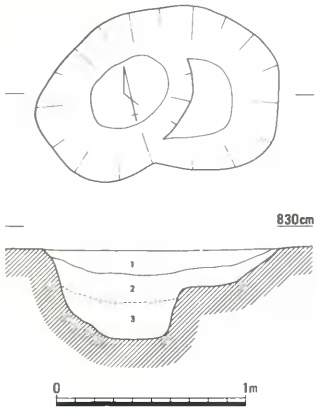


1．褐灰色粘質土
2．暗褐灰色粘質土
（黄褐色粘質土ブロック含む）
3．暗灰色粘質土
（灰黄褐色粘質土ブロック含む）

第391図　土壙118（1/30）

土壙119（第392図）

二つの、いびつな円形を呈する土壙が重なっているように見えるが、土層の観察からはひとつの土壙としてとらえられる。東側には、テラスのような段がついているように見える。埋積土は、下位に基盤層の黄色系の斑紋が目立つ。遺物は皆無である。（岡田）



1．暗黄褐灰色粘土　　3．青灰色粘土
2．黄褐灰色粘土　　（２層がグライ化）

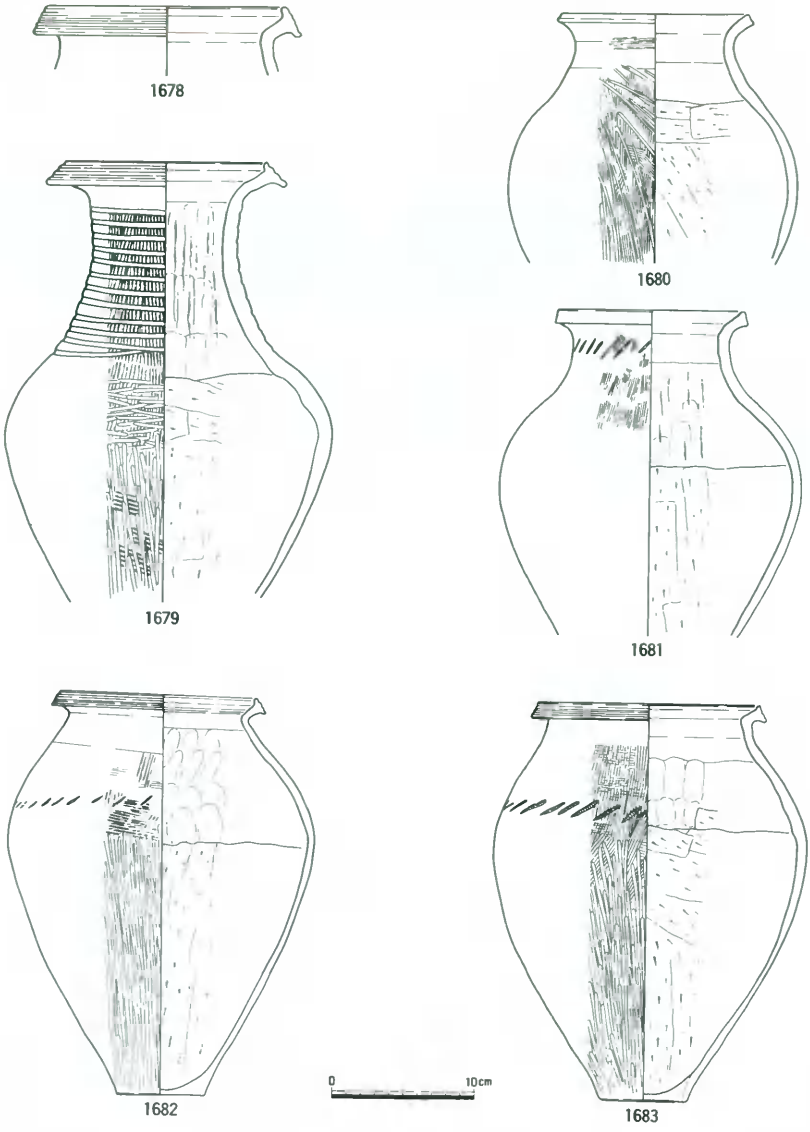
第392図　土壙119（1/30）

土壙120（第393～396図、図版21・51）

土壙120は、第１微高地の中央やや北寄り、建物31に北接した所で検出されたものを指す。平面形は北に張り出した隅丸の五角形状で、南北長1.45ｍ、東西長1.15ｍを測る。底は南半がほぼ円形を呈してわずかに低くなるものの、明瞭な二段堀りとはいい難く、検出面からの深さは、やや高い北辺で９㎝、南の最深部がそれより３㎝ほど低くなる程度である。周辺において、この土壙に伴う柱痕または杭列などは発見されていないので、単独の不整形土壙とみる以外ない。

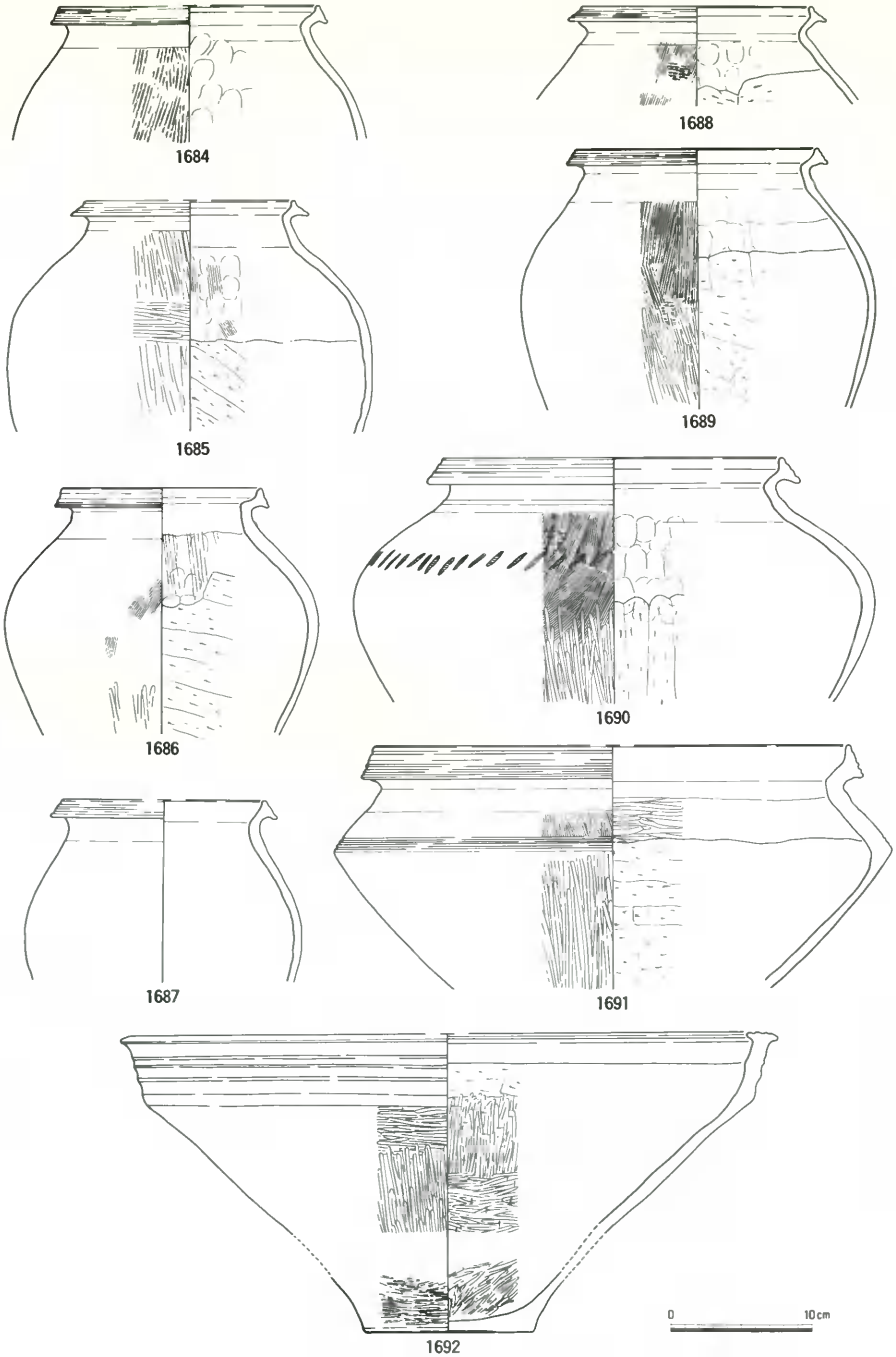
発掘の途時には、この土壙もふくめて土器溜り遺構と称したように、土壙の西肩口からさらに東方一帯にかけて、弥生時代後期前葉のかなり大形の土器片が散在し、注目を集めた。土器片のちらばる範囲は、土壙の西の肩部を起点として東へ約2.5ｍ、南北の幅1.15ｍのうちにおさまる。これら土器片を整理したのち、図上復元ができた点数は、壺５、甕８、高杯７、器台３、鉢２点である。甕には煤の付着したものが多く、これらは最小の単位で共同会食をおこなったのち直ちに廃棄された器種構成を示すもので、土壙はそのために穿たれた可能性があるのかもしれない。しかし、この土壙と土器溜りとが不可分の関係にあると断定しにくいのは、全体にわたる遺構の削平頻度が著しく東方において土壙の肩口を検出できなかったためである。（葛原）

第393図　土壙120（1/30）

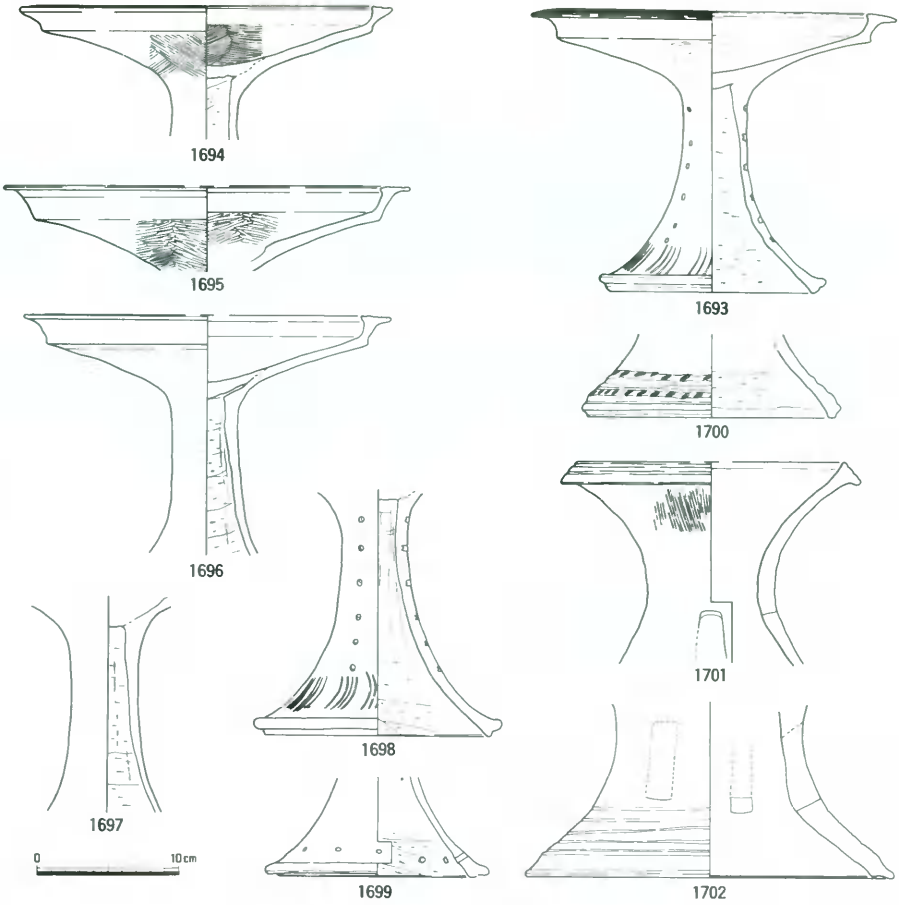


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1678	弥生土器	壺	口唇部凹線。口頸部ヨコナデ。	口頸部ヨコナデ。	橙　7.5YR7/6	
1679	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ハケメ、沈線。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙　5YR7/4	
1680	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ケズリ。	淡橙　5YR7/6	
1681	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。頸部刺突文。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ナデ、下半ケズリ。	橙　5YR7/6	
1682	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部上半ハケメ、刺突文。下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、ナデ。下半ケズリ。	橙　7.5YR7/6	外面煤。
1683	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部上半タタキのちハケメ、刺突文。下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、ナデ。下半ケズリ。	にぶい橙　5YR7/4	

第394図　土壙120出土遺物(1)（1/4）



第395図　土壙120出土遺物(2)（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1684	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部粗いハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ナデ。	にぶい橙　5YR7/4	
1685	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部上半ハケメのちミガキ。下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、ハケメ、下半ケズリ。	橙　3YR6/6	
1686	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、ハケメ、下半ケズリ。	にぶい褐　7.5YR5/3	
1687	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	橙　7.5YR7/6	
1688	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部タタキのちハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ。	橙　10YR8/2	
1689	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ナデ、ケズリ。	橙　7.5YR7/6	
1690	弥生土器	壺？	口唇部凹線。胴部上半タタキ、ハケメ、刺突文。下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ。	にぶい橙　7.5YR7/3	
1691	弥生土器	台付鉢	口唇部凹線。胴部上半ハケメのちミガキ、沈線。下半ミガキ	口縁部ヨコナデ。胴部上半ミガキ、下半ケズリ。	灰褐　7.5YR6/2	
1692	弥生土器	鉢	口唇部凹線。口縁部凹線。胴部ミガキ、底部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	にぶい橙　5YR7/4	
1693	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。脚部竹管文、沈線文。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。脚部ケズリ。	淡黄　5YR8/3	
1694	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ。脚部ナデ？。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。脚部ケズリ。	明褐灰　5YR7/2	
1695	弥生土器	高杯	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	にぶい橙　7.5YR7/4	円板充填
1696	弥生土器	高杯	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。脚部ミガキ？。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。脚部ケズリ。	黄橙　7.5YR7/8	
1697	弥生土器	高杯	脚部ミガキ？。	脚部ケズリ。	にぶい黄橙　10YR7/2	円板充填
1698	弥生土器	高杯	脚部円形刺突文。ヘラ描き沈線文。	脚部シボリ、ケズリ。	浅黄橙　10YR8/3	
1699	弥生土器	高杯	脚部ミガキ？。円形すかし孔。	脚部上半ナデ、下半ケズリ。	浅黄橙　10YR8/3	
1700	弥生土器	器台	脚部凹線、刺突文。	脚部ヨコケズリ。	橙　5YR6/6	
1701	弥生土器	器台	口唇部凹線。口縁部ハケメ。長方形すかし孔？		橙　5Y6/8	
1702	弥生土器	器台	脚部凹線。長方形すかし孔		橙　5YR7/6	

第396図　土壙120出土遺物(3) (1/4)

土壙121（第397図）

ＨＦ区の北西端に位置する。規模は105×78cmの楕円形を呈し、深さは検出面から67cmを測る。埋土は３層に区分され、１層には灰橙色土、２層に橙灰色土、３層には青灰色が埋積していた。遺物がないため時期決定が困難であるが、遺構検出面からみて弥生時代中期～後期頃と思われる。（松本）

土壙122（第398図）

ＫＹ２区の西半部で、弥生時代後期から古墳時代前期前葉の水田を除去した後に検出した大規模な土壙である。平面形は343×267cmの隅丸長方形で、深さは約95cmが残存していた。断面形は一部袋状を呈していた。遺物は少量の土器・石器が出土している。時期は出土遺物から弥生時代中期後葉と考えられる。この土壙の性格については何らかの貯蔵穴とも考えられるが、断定はできない。（平井）

土壙123（第399図）

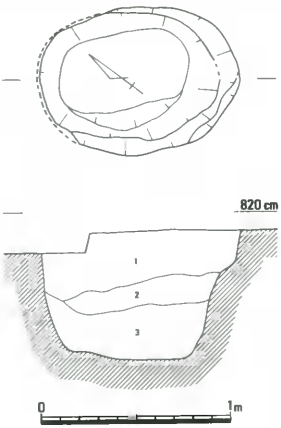
ＫＹ２区で検出した土壙である。平面形は84×63cmの不整楕円形を呈し、南側が一段浅くなっている。深さは検出面から30cmが残存していた。埋土は黄褐灰色粘質土が一層のみであった。出土遺物はなかったが、時期は弥生時代中期後葉と考えておきたい。（平井）

土壙124（第400図）

ＨＦ区の北西、土壙198の北で検出された。他の遺構によって切られてはいるが、規模は137×95cmの長方形を呈し、深さは検出面から14cmを測る。床面は平坦である。埋土は淡黄灰色の粘質微砂土である。遺物はないが、遺構検出面からみて弥生時代中期～後期頃のものと思われる。（松本）

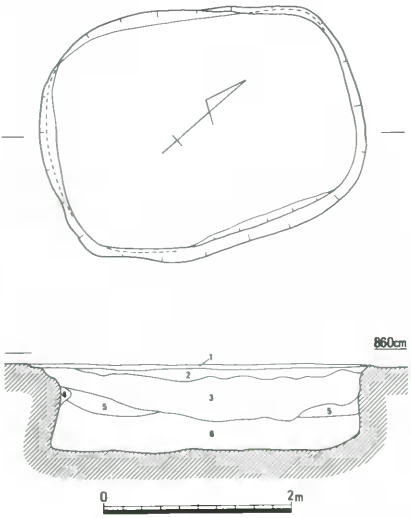
土壙125（第401図）

第２微高地上の南、竪穴住居８と西の水田との間に位置する。平面は不整形で、規模は172×120cmを測る。深さは15cmで、南西辺の一部を柱穴で切られている。床面はほぼ水平である。出土遺物はほとんど無いが、時期は弥生時代中期～後期の範疇におさまると思われる。（柴田）



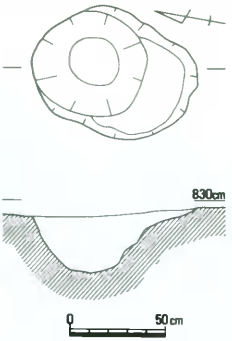
1．灰橙色粘質微砂
2．橙灰色粘質微砂
3．暗青灰色粘質土

第397図　土壙121（1/30）

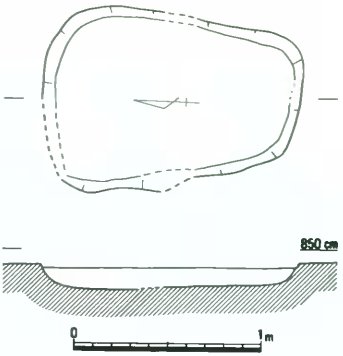


1．灰白粘質土
2．淡灰色粘質土
3．暗灰褐色粘質土（黄褐色粘質ブロック含む）
4．淡灰色粘質土
5．暗灰色粘質土（黄褐色砂質土が混じる）
6．黄褐色砂質土（暗灰色粘土が混じる）

第398図　土壙122（1/60）・出土遺物（1/2）



第399図　土壙123（1/30）



第400図　土壙124（1/30）

土壙126（第402図）

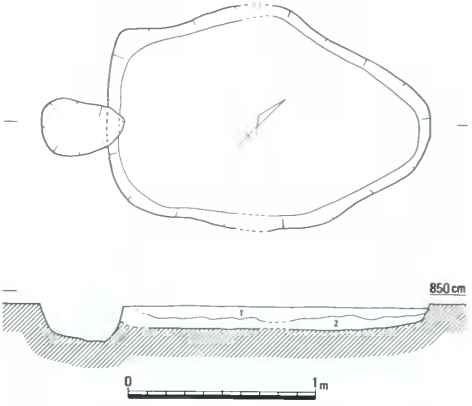
ＨＦ区の南に位置する。土壙の規模は142×105cmの楕円形を呈し、深さは検出面から21cmを測る。埋土は２層に区分され、上層には灰黄褐色の砂質微砂土、下層は淡黄褐色の砂質微砂土であった。遺物は出土していないが、遺構検出面からみて弥生時代中期～後期頃のものと思われる。　（松本）

土壙127（第403図）

土壙126の北で検出された。土壙の規模は105×95cmのほぼ円形を呈し、深さは検出面から79cmを測る。埋土は５層に区分され、とりわけ４層は黄灰褐色の粘質土とともに焼土と木炭が多量に含まれていた。遺物の出土はないが、遺構検出面からみて、弥生時代中期～後期頃のものと思われる。（松本）

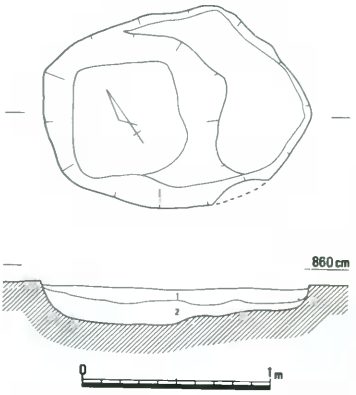
土壙128（第404・405図、図版21）

第２微高地上の南、竪穴住居８と建物33との間に位置する。掘り方平面は隅丸方形で、一辺147cmを測る。深さは26cmで、床面の西側がやや深くなっている。床面の20cm上で、遺物が出土している。



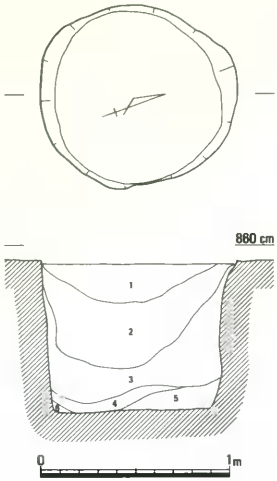
1．淡灰黄色粘質微砂　2．淡灰黄褐色粘質微砂

第401図　土壙125（1/30）



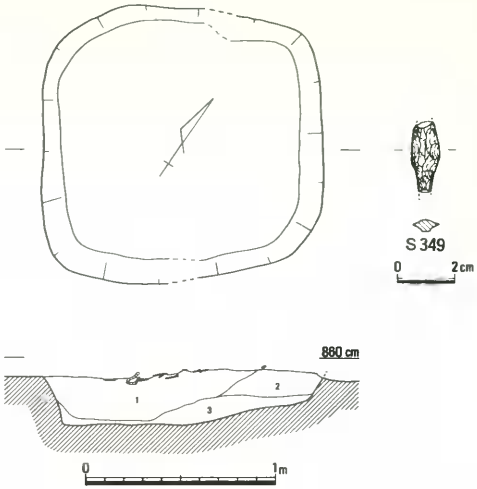
1．灰黄褐色砂質微砂　2．淡黄褐色砂質微砂

第402図　土壙126（1/30）



1．灰褐色粘質土
2．暗灰褐色粘質土
（黄褐色土ブロック含む）
3．灰褐色粘質土（　〃　）
4．黄灰褐色粘質土
（炭、焼土含む）
5．灰褐黄色粘質土

第403図　土壙127（1/30）



1．暗茶褐色砂質微砂
2．灰黄褐色砂質微砂
3．黄茶褐色砂質微砂

第404図　土壙128（1/30）・出土遺物（1/2）

図示した土器は壺が多く、他に甕や鉢がある。壺は口縁部外面と頸部外面に凹線、**1710**・**1711**は沈線でつないだ二重の竹管文と２列の刺突文が施される。頸部内面から外面はユビオサエやナデが多いが、ハケメも認められる。甕は平底で内面はヘラケズリが認められる。**1714**は肩の大きく張る鉢である。**S 349**は細身の有茎式石鏃である。時期は弥生時代中期後葉である。（柴田）

土壙129（第406図）

第２微高地上の南、竪穴住居８の東４ｍに位置する。掘り方平面は不整長方形で、規模は177×150㎝を測る。深さは15㎝で、床面はほぼ水平である。床面から浮いて土器片が出土している。**1715**は壺の口縁部で外面に凹線と円形浮文、内面にクシ描き波状文が施される。**1716**の甕は口縁部の凹線があまい。**1717**は壺で南面はハケメの後ナデを施している。時期は弥生時代中期後葉である。（柴田）

土壙130（第407図）

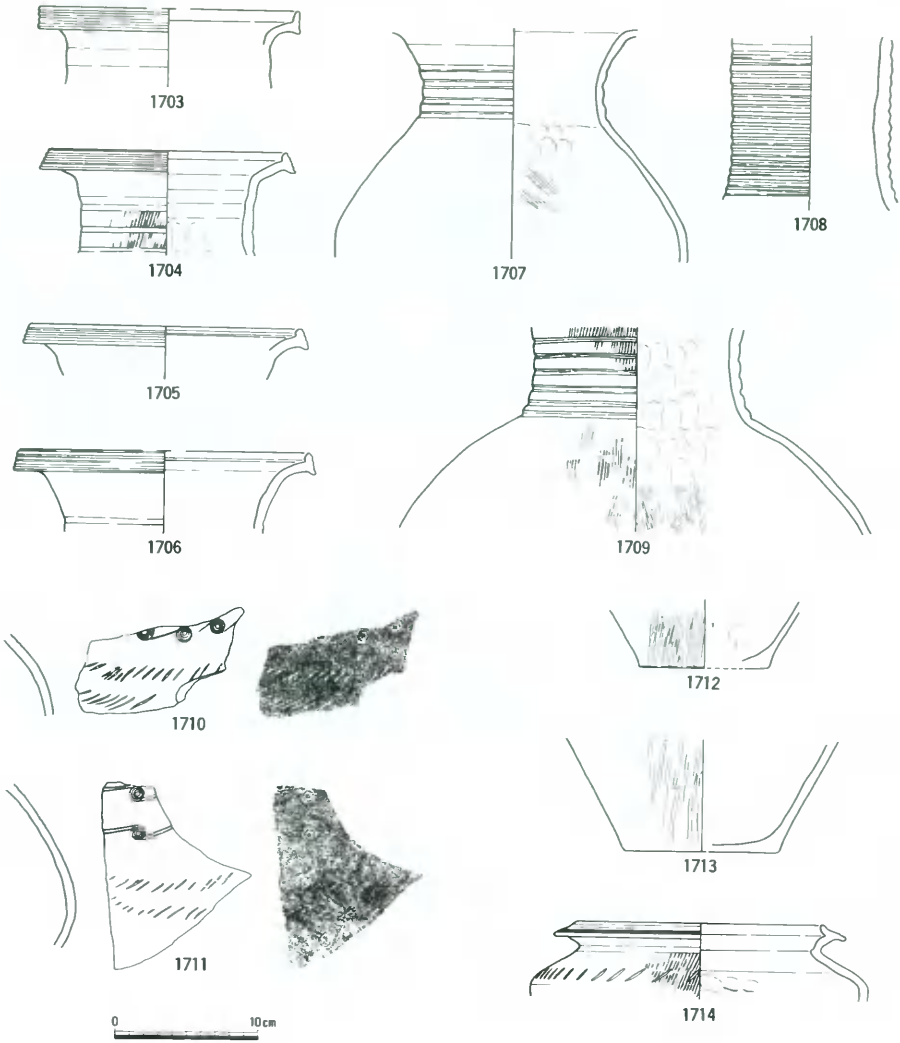
第２微高地上の南、竪穴住居８の南東16ｍに位置する。掘り方平面は楕円形で、規模は長径170㎝・短径126㎝、深さは71㎝を測る。床面は部分的に凹凸がある。時期を限定できる遺物の出土は認められないが弥生時代中期後葉と思われる。（柴田）

土壙131（第408図）

ＨＦ区の東に位置し、土壙132の北で検出された。規模は120×80㎝の隅丸方形を呈し、深さは遺構検出面から32㎝を測る。掘り方はほぼ垂直で、床面は平坦である。埋土は２層に区分される。遺物の出土はないが、遺構検出面からみて弥生時代中期～後期のものと思われる。（松本）

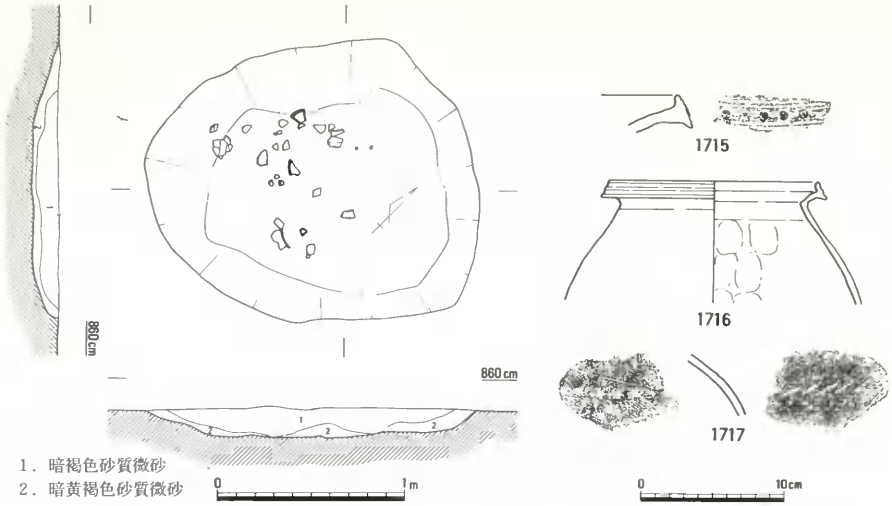
土壙132（第409図）

第２微高地上の南、竪穴住居８の東21.6ｍに位置する。掘り方平面は不整長方形で、規模は155×130㎝、深さは23㎝を測る。掘り方断面は皿状を呈する。時期を限定できる遺物の出土は認められないが弥生時代中期～後期の範疇におさまると思われる。（柴田）



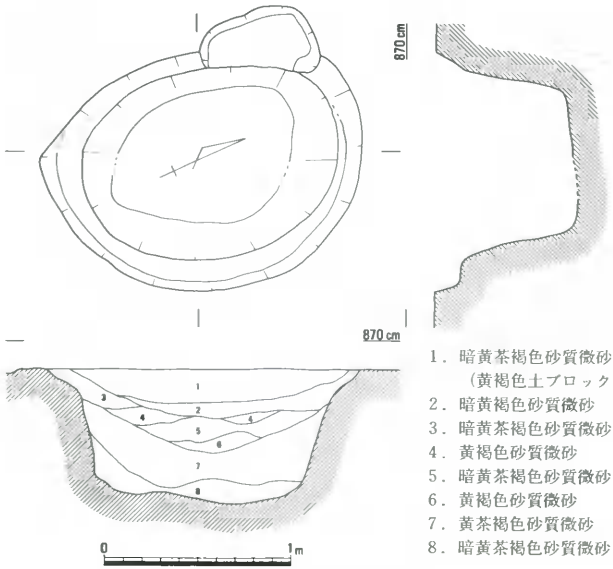
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1703	弥生土器	壺	口唇部凹線　口頸部ヨコナデ。	口頸部ヨコナデ。	灰白　10YR8/2	
1704	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ハケメのち凹線。	口縁部ヨコナデ　頸部ナデ。	灰黄　2.5Y7/2	
1705	弥生土器	壺	口唇部凹線。口頸部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ。	黄灰　2.5Y5/1	
1706	弥生土器	壺	口唇部凹線、頸部凹線。口頸部ヨコナデ	口頸部ヨコナデ。	灰白　7.5YR8/2	
1707	弥生土器	壺	頸部凹線４本。	頸部ナデ　胴部上半ハケメ。	褐灰　7.5YR6/1	
1708	弥生土器	壺	頸部凹線14本。	ヨコナデ、ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1709	弥生土器	壺	頸部ハケメのち凹線。胴部上半ハケメ	頸部ユビオサエ。胴部上半ハケメ？。	にぶい黄橙　10YR7/3	
1710	弥生土器	壺	二重の竹管文、ヘラ描き沈線文、刺突文、ミガキ		にぶい黄橙　10YR7/2	1711と同一個体
1711	弥生土器	壺	二重の竹管文、ヘラ描き沈線文、刺突文、ミガキ。		黄灰　2.5Y6/1	
1712	弥生土器	壺	胴部ミガキ。	ケズリ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1713	弥生土器	壺	胴部ミガキ。	ケズリ。	灰白　10YR8/2	
1714	弥生土器	鉢	口唇部凹線　胴部上半ハケメ、沈線文。	口縁部ヨコナデ　胴部ユビオサエ、ナデ。	橙　7.5YR7/6	

第405図　土壙128出土遺物（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1715	弥生土器	壺	口頸部凹線、円形浮文。口縁部ヨコナデ。	口縁部クシ描き沈線文。	淡黄　2.5Y8/1	
1716	弥生土器	甕	口頸部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ。	灰黄褐　10YR5/2	
1717	弥生土器	壺	刺突文。ミガキ。	ナデ、ハケメ。	灰白　10YR8/2	

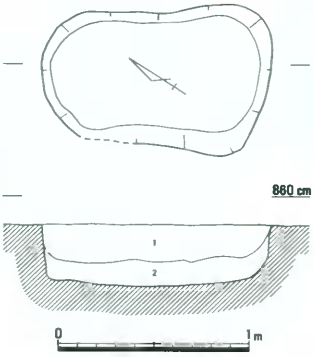
第406図　土壙129（1/30）・出土遺物（1/4）



第407図　土壙130（1/30）

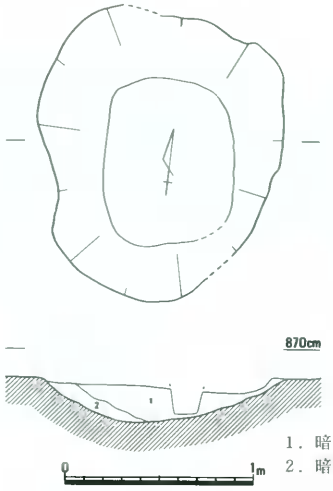
土壙133（第410図）

ＨＦ区の南東端に位置し、溝45～47の北西で検出された遺構である。土壙の規模は228×182㎝の楕



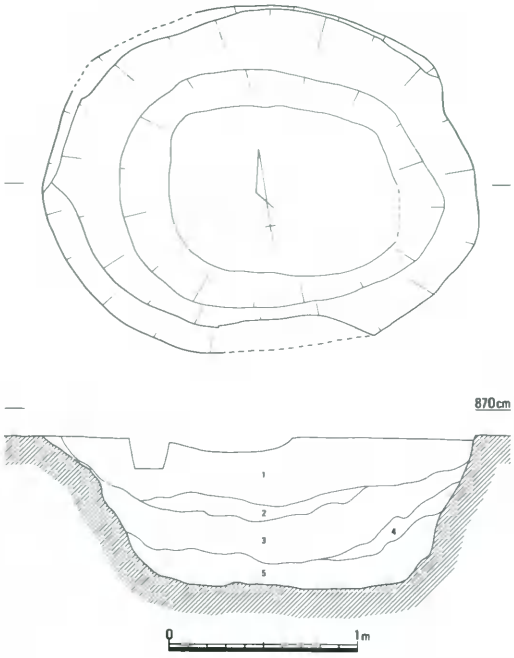
1．灰黄色粘質微砂　　2．褐黄灰色粘質土
（上部炭含む）

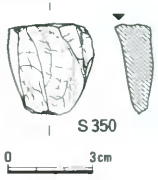
第408図　土壙131（1/30）



1．暗褐色砂質微砂
2．暗黄褐色砂質微砂

第409図　土壙132（1/30）





1．暗褐色砂質微砂
2．明黄褐色砂質微砂
3．灰茶褐色粘質微砂
（炭含む）
4．黄茶褐色粘質微砂
（炭含む）
5．茶褐色砂質微砂

第410図　土壙133（1/30）・出土遺物（1/2）

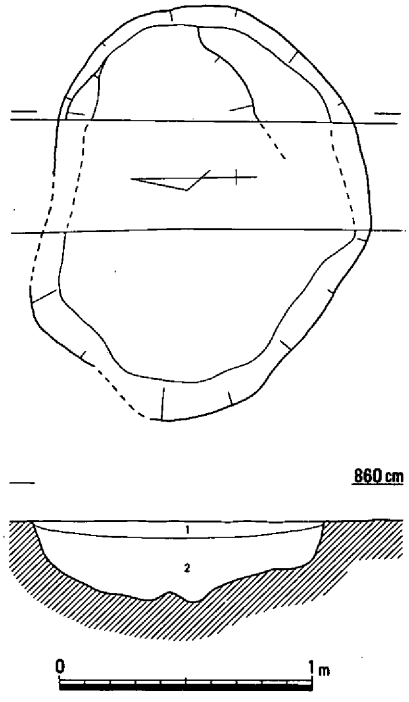
円形を呈し、深さは検出面から80cmを測る。床面はほぼ平坦である。埋土は５層に区分され、３・４層は炭混じりの粘質微砂層である。遺物は楔ないし石核の形態を呈するS350が出土している。上面には平坦な自然面が認められる。土器は縄文、弥生時代の細片が出土している。遺構検出面からみて弥生時代中期～後期頃のものと思われる。（松本）

土壙134（第411図）

第２微高地上の南、竪穴住居８の東28ｍに位置する。掘り方平面は楕円形で、規模は長径163cm・短径130cm、深さは32cmを測る。掘り方断面は皿状を呈する。時期を限定できる遺物の出土は認められないが弥生時代中期～後期の範疇におさまると思われる。（柴田）

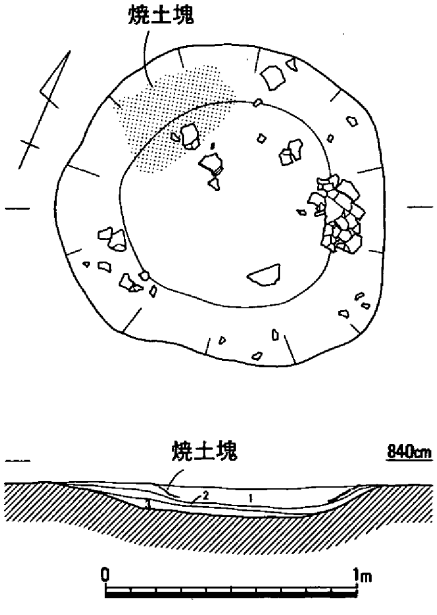
土壙135（第412図）

ＫＹ３区の竪穴住居９の西で検出した。平面形は131×127cmの不整円形で、深さは検出面から11cmが残存していた。断面形は皿状で、埋土は３層に区分できた。また北西部には一部炭、焼土塊の分布がみとめられた。出土遺物は土器が１層の底面に接した状況で出土しており、時期は弥生時代中期後葉と考えられる。（平井）

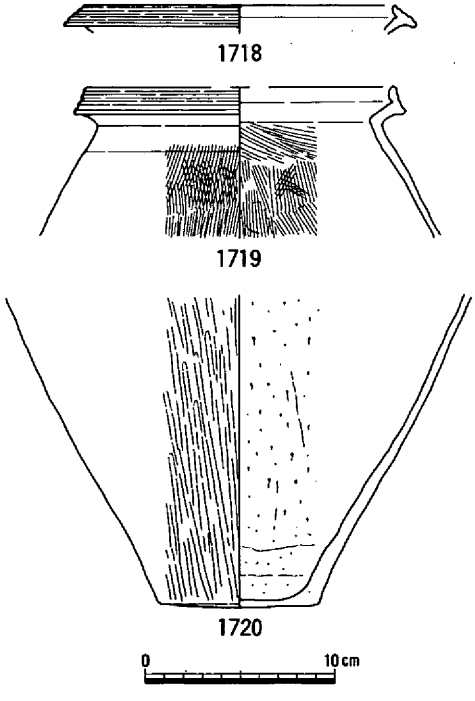


1．灰褐黄色粘質微砂（炭多く含む）
2．淡灰褐黄色粘質微砂

第411図　土壙134（1/30）



1．褐灰色粘質土（黄褐色砂質土ブロック、炭、焼土含む）
2．炭、灰、焼土
3．暗褐灰色粘質土（黄褐色砂質土ブロック、炭、焼土粒含む）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1718	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	黒褐　2.5Y3/1	
1719	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	にぶい褐　7.5YR5/3	
1720	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ？。	胴部ケズリ。	にぶい黄橙　10YR7/3	

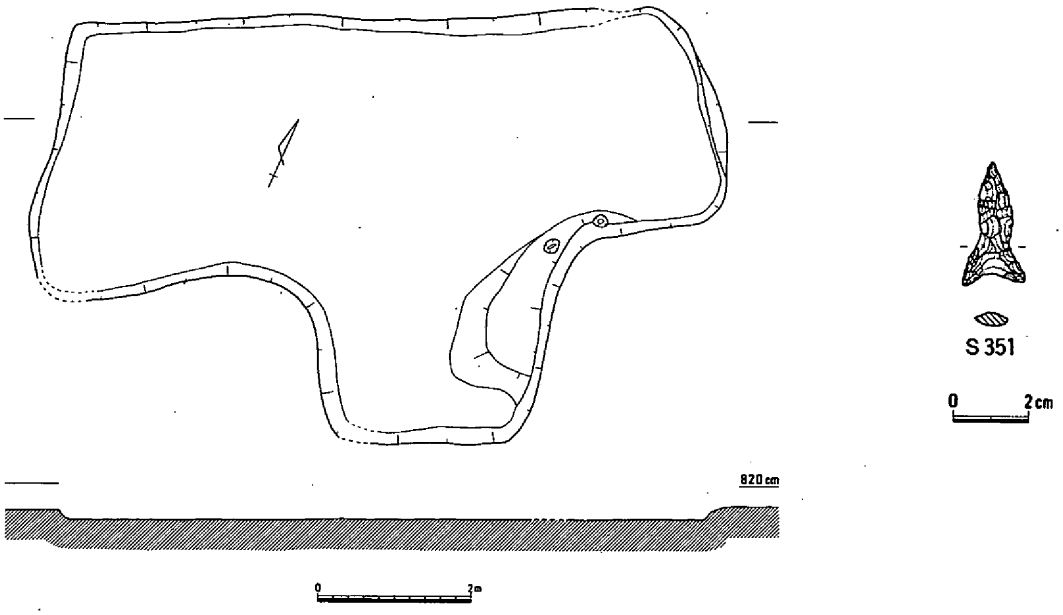
第412図　土壙135（1/30）・出土遺物（1/4）

土壙136（第413図）

ＴＯ区の中央北寄りの、第３微高地から第３低位部に向かう緩斜面に位置する。平面形は北向きで逆凸字形を呈し、最大長約９ｍ、深さ約20cmを測る。

埋土は黄色の基盤層塊を含む暗灰色粘土で、その上部は黄灰色～淡黄灰色粘質土(弥生時代後期～古墳時代前期前葉の水田層か)で覆われている。

土壙の性格は不明ながら、埋土に弥生時代後期土器片も含み、前・中期には遡ることはない。(柳瀬)



第413図　土壙136（1/100）・出土遺物（1/2）

土壙137（第414図）

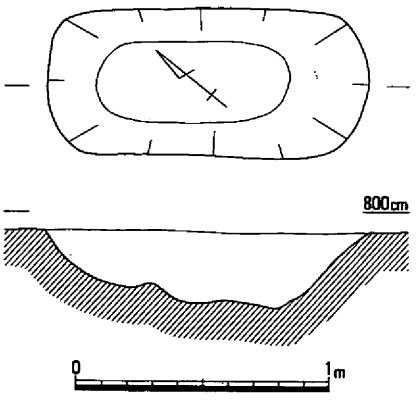
Ｈ16区の北半部で弥生時代後期から古墳時代前期前葉の水田層を除去した後に検出した。平面形は127×59cmの隅丸長方形を呈し、深さは最深部で検出面から約30cmが残存していた。埋土中からは土器片が少量出土しており、時期は弥生時代中期後葉から後期前葉と考えておきたい。　(平井)

土壙138（第415図）

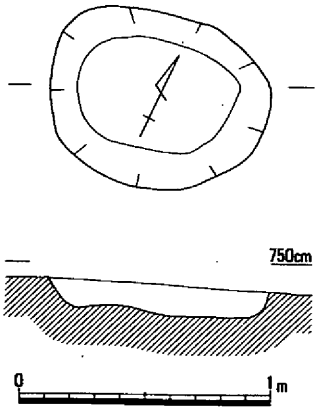
土壙138は、ＪＯ区、河道２の右岸側で検出された。87×70cmの不整楕円形の平面形を呈し、浅い皿状の断面である。深さは13cmを測り、底面海抜高は7.28ｍを測る。図示していないが、弥生時代中期～後期の土器の小破片が出土している。　(大橋)

土壙139（第416図）

土壙139は、土壙135の東側に位置する。89×65cmの規模を持つ不



第414図　土壙137（1/30）



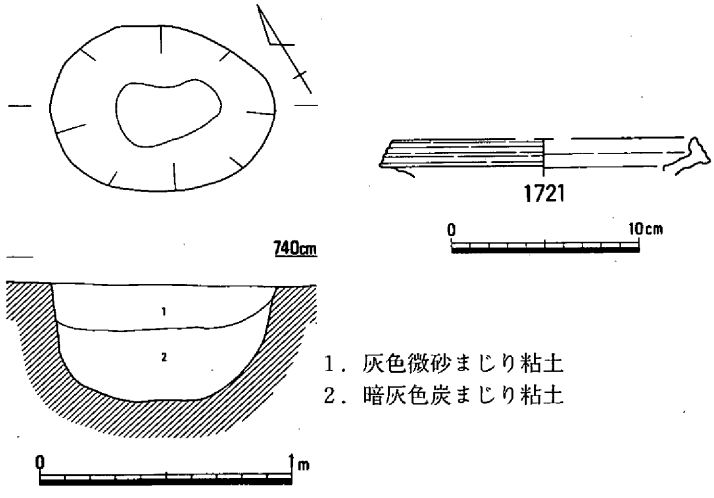
第415図　土壙138（1/30）

整楕円形の平面形である。やや深い椀状の断面であり、深さは46cmを測る。底面の海抜高は6.84ｍである。図示したのは、甕の口縁部の小破片であり、土壙の時期は弥生時代中期後半～後期前葉と考えている。　（大橋）

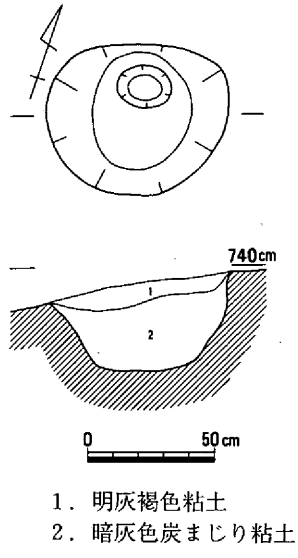
土壙140（第417図）

土壙140は、河道２の左岸側に位置し、土壙139の東側で検出された。70×60cmの不整楕円形の平面形を呈し、底面が一部分５cmほど深くなり、最下部までは45cmの深さを測る。底面の海抜高は、6.93mである。出土遺物は細片微量であり図示していないが、弥生時代中期後半～後期前葉と考えている。

第４低位部にあたるＪＯ区では、土壙138～140のほかに７基の土壙状の遺構が検出されたが、いずれも出土遺物はなく詳細は不明であり図示していない。しかしながら埋土の共通性等の点から、河道２の埋没過程ないしは埋没後、弥生時代中期後半から後期のものと理解している。またこのことから、河道２の埋没後、第４低位部に広がる後述する古墳時代前期前葉の水田の利用開始までの間に、短期間ではあるがこれらの遺構が営まれるやや安定した状態が存在したことが想定される。　（大橋）



第416図　土壙139（1/30）・出土遺物（1/4）



第417図　土壙140（1/30）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1721	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙　10YR7/3	

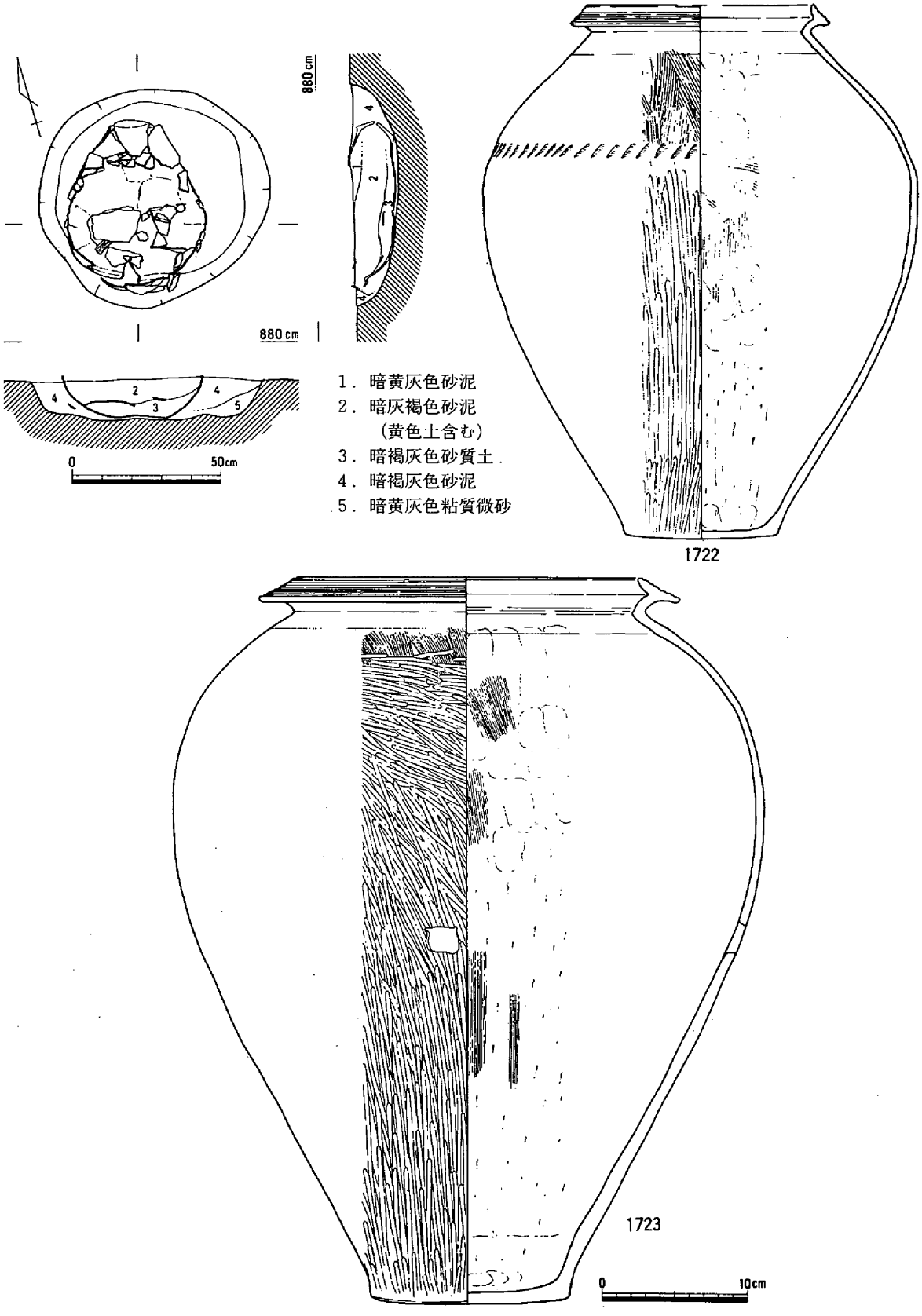
(5)　土器棺墓

土器棺墓２（第418図、図版21）

第２微高地(西)北半に位置する。建物群の中に位置しており、集落内にあたる。上面がかなり削平されているようであるが、残存部は78×71cmのほぼ円形を呈し、深さは28cmを測る。

土器内堆積土のうち３層はその上面まで土器が落ち込んでいることから土器が土圧で崩れる前に堆積したと考えられる。この層を対象に水洗いを行ったが何も検出しえなかった。

棺本体とされていたのは**1723**で、穿孔された部分を下にして埋置されていた。**1722**は底部を北に、**1723**の口縁の上に重なった状態で出土しており、蓋として利用されたものと考えられる。**1722**の口縁は**1723**の中に落ち込んでおり、双方とも埋設当初から半身を打ち欠き、合せ口の土器棺に転用しているようである。口縁端部の下方への拡張は顕著であり、弥生時代中期後葉に属すると考えられる。　（久保）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1722	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、刺突文。下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ナデ、ハケメ。下半ケズリ。	にぶい橙　5YR7/4	
1723	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちミガキ。	胴部上半ナデ、ハケメ。下半ケズリ。	橙　5YR7/6	胴部に穿孔。

第418図　土器棺墓２(1/20)・出土遺物（1/4)

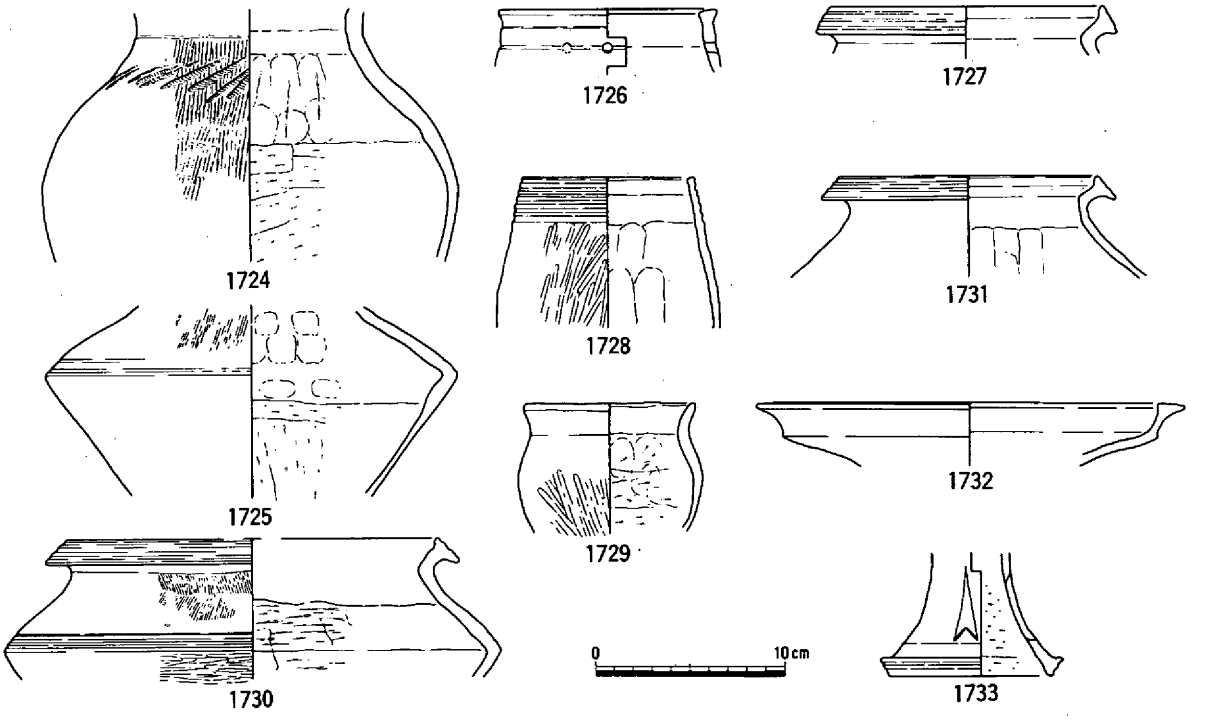
(6) 柱　　穴

概要

弥生前期の項で概述したように、時期を特定できる遺物を出土する柱穴はあまりなく、当時期においても時期の決定は埋土の状況によって判断した場合が多い。確実に弥生時代中期後半～後期に属すると考えられる遺構の埋土をみると、おおむね暗褐色～黒灰色で、それ以前の遺構や包含層より濃いという傾向がみうけられる。そこで柱穴も色調を基準として分け、時期の不明な柱穴についてもここに含めた。基準が曖昧なため調査区によって密度にばらつきが認められるが、一応の傾向は反映しているものと考えた。弥生時代前期と比較すると、微高地上だけでなく、かつて低位部であった部分にも緩斜面に柱穴が少数ではあるが散見され、微高地部分の安定および拡大が看取される。　(久保)

柱穴46・47・48・49（Ｐ46・47・48・49）（第419図）

Ｐ46～48は第一微高地に、Ｐ49は第２微高地(東)に位置する。いずれも弥生時代後期前葉と考えられる土器を出土している。Ｐ46～48は径40cm前後で深さも20cmをこえるが、Ｐ49は浅いしみこみ状のもので、柱穴でないかもしれない。図示した土器のうち**1724**はＰ48から、**1725**～**1727**はＰ46から、**1728**・**1733**はＰ49から、**1729**～**1732**はＰ47から出土している。高杯脚部1733の矢羽根状のすかしは伊予地方に特徴的だが、胎土は在地産との差は認められなかった。　(久保)



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1724	弥生土器	壺	胴部上半ハケメ、刺突文。下半ミガキ？。	胴部上半ユビオサエ、シボリ。下半ケズリ。	にぶい橙　5YR7/4	
1725	弥生土器	壺	胴部上半ハケメ、凹線。	胴部上半ユビオサエ、下半ケズリ。	橙　5YR6/6	
1726	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。円形穿孔。	口縁部ヨコナデ。	橙　5YR6/6	
1727	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	橙　5YR6/6	
1728	弥生土器	壺	口縁部凹線。ミガキ。	ユビオサエ、ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1729	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙　7.5YR6/4	
1730	弥生土器	台付鉢	口唇部凹線。胴部上半ハケメ、沈線。下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ、ケズリ。	橙　5YR6/6	
1731	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ。	にぶい橙　5YR7/4	
1732	弥生土器	高杯	口唇部凹線。杯部ミガキ？。		橙　2.5YR6/8	
1733	弥生土器	高杯	脚部ナデ、矢羽根すかし孔。脚端部凹線。	ヨコケズリ。	灰白　10YR8/2	

第419図　柱穴46・47・48・49出土遺物（1/4）

(7) 溝

溝７（第420・421図）

第２微高地(西)のＡＴ区北東部に所在し、凹地１の南端を西から東へ流れる。西端は溝63に削られ、東端は調査対象外へ続く。平均的な規模は幅70cm前後、深さ20cm程度であり、やや北寄りに掘られた底部の幅は15cm前後を測る。検出状況から弥生時代中期～後期の枠でとらえたい。　(光永)

溝８（第420・421図）

ＡＴ区北東部で溝７の南に接して位置し、西端を丸く閉じて、東端は調査対象外へ続く溝で、調査区東側壁の観察によれば溝７と同時期に存在していた可能性が高い。幅140cm、深さ12cm前後の規模で、底面は比較的平坦である。　(光永)

溝９（第420・421・425・426図、図版22）

ＤＥ区、ＩＮ区、ＷＲ－Ａ区、ＫＹ２区で検出した。各調査区で検出できた幅や深さは異なっており、ＤＥ区では幅約230cm、深さ約20cm、ＩＮ区では幅約100cm、深さ約15cm、ＷＲ－Ａ区では幅約60cm、深さ約10cm、ＫＹ２区では幅約70cm、深さ10cmである。底面には凹凸がみられ、底のレベルは一定していない。いずれの調査区でも古墳時代前期前葉の水田層除去後に検出されており、またＫＹ２区では弥生時代後期後葉の土器を含む土層の除去後に検出できた。また後に述べる溝10との関連などから、時期は弥生時代後期前葉から中葉と考えておきたい。この溝の性格については、断面の形状から用・排水路ではなく、また水田範囲の肩部に位置することから、水田造成あるいは耕作に関連した溝と考えたい。　(平井)

溝10（第420～422図、図版22）

Ｈ１区、ＡＴ区、ＤＥ区にわたって検出された溝で、一部を中世溝や現代溝によって切られている。検出できた幅は50～80cm、深さは検出面から20～30cmを測る。底のレベルは北西から南東にむかって低くなっている。時期はＡＴ区の埋土の上層から**1734～1737**を含む土器がまとまって出土しており、弥生時代後期前葉に埋没したものと考えられる。この溝の性格については、第２低位部に存在していたかも知れない同時期の水田の用水路の可能性も考えられるが、実証はできなかった。　(平井)

溝11（第420・421・423・425・426図、図版22）

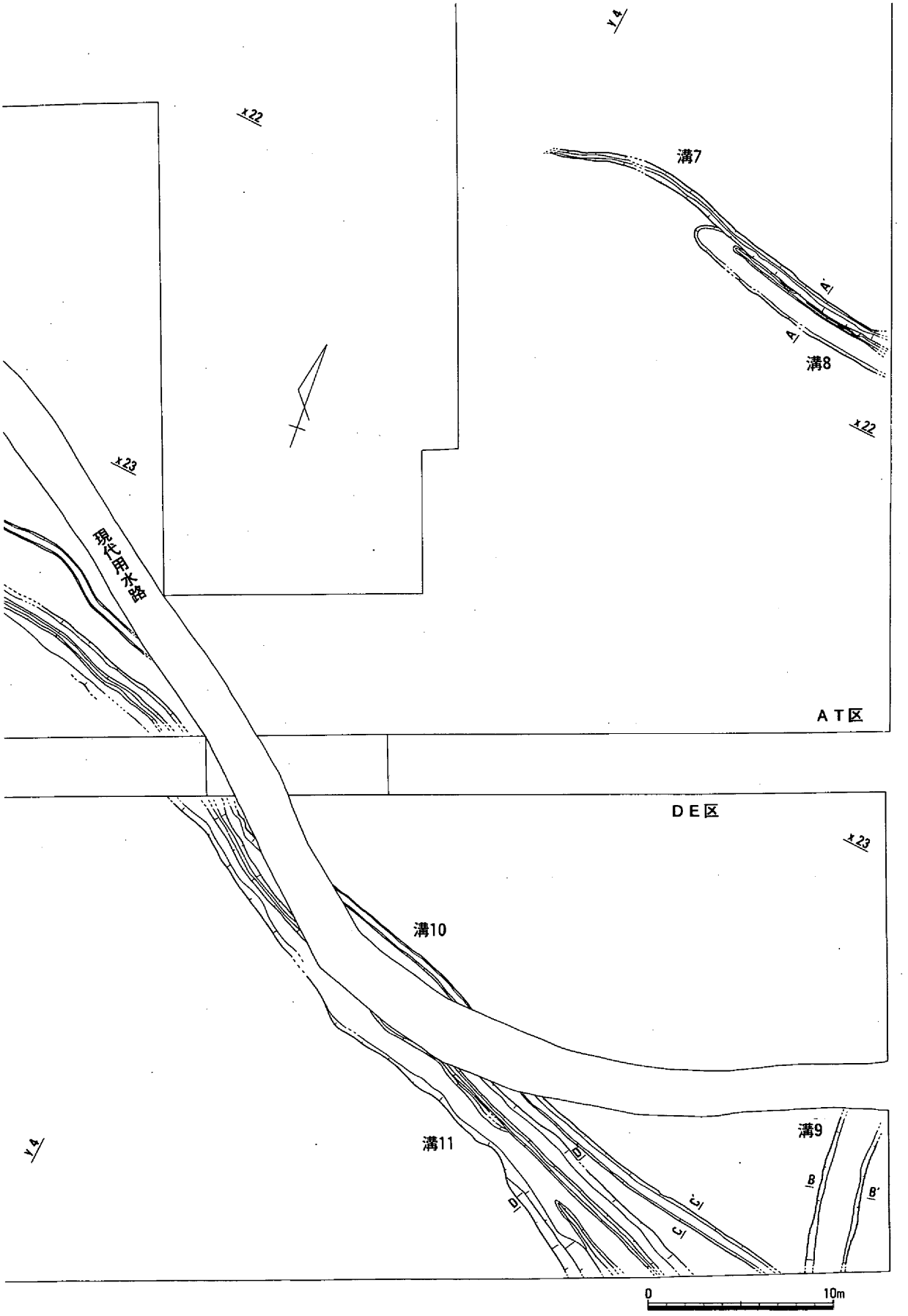
Ｈ２区、ＡＴ区、ＤＥ区、ＩＮ区、ＷＲ－Ａ区、ＫＹ１・２区、ＨＦ区にわたって検出された。各調査区とも後世の削平によって本来の幅、深さは不明である。断面形は底に近い部分が逆台形を呈している。またＤＥ区のＤ－Ｄ'の断面では７層の上位に４～６層が堆積しており、本来溝11は７層のみで、４から６層は掘り直した溝の堆積かとも考えられるが、他の調査区では明らかではなかった。またＫＹ１区では後に述べる水田８のＡ地区とＢ地区をつなぐ形で検出できた。時期はＡＴ、ＤＥ区で第423図のような土器が出土しており、弥生時代後期前葉に埋没したものと考えられる。　(平井)

溝12・13・14（第424図）

溝12・13がＨ２区に、溝14がＨ４区に所在し、いずれも流路を東西におく。第２微高地西端から約15ｍ前後の位置にあたり、後の溝58に踏襲されて、溝13・14と一部重複している。検出された幅と深さは、溝12が25×６cm、溝13が50×８cm、溝14が40×９cmで、溝13・14が同一の溝である可能性をもつ。溝13の南に検出された溝状遺構とともに、弥生時代中期～後期の枠でとらえられる。　(光永)

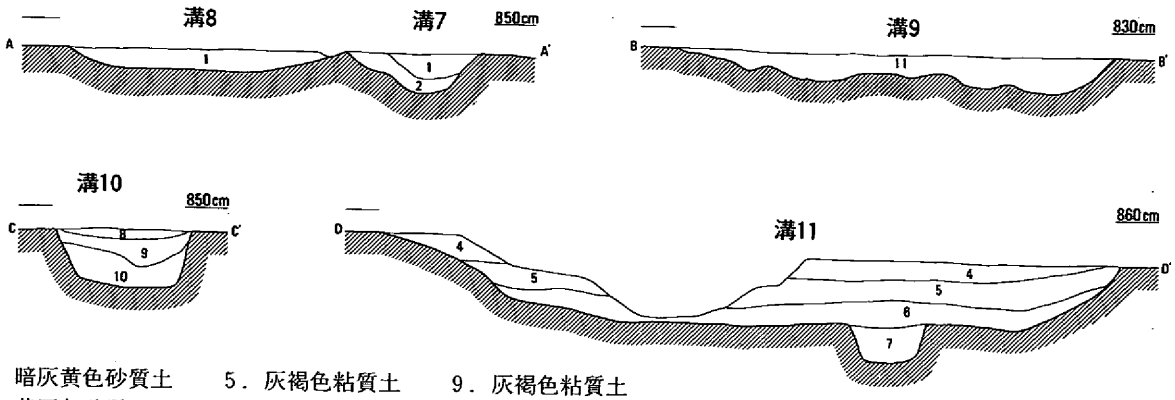
溝15（第287図）

Ｈ３区において、第２微高地西端に添って検出された。東端は浅く終わっているが、規模は幅が



第420図　溝７・８・９・10・11（1/300）

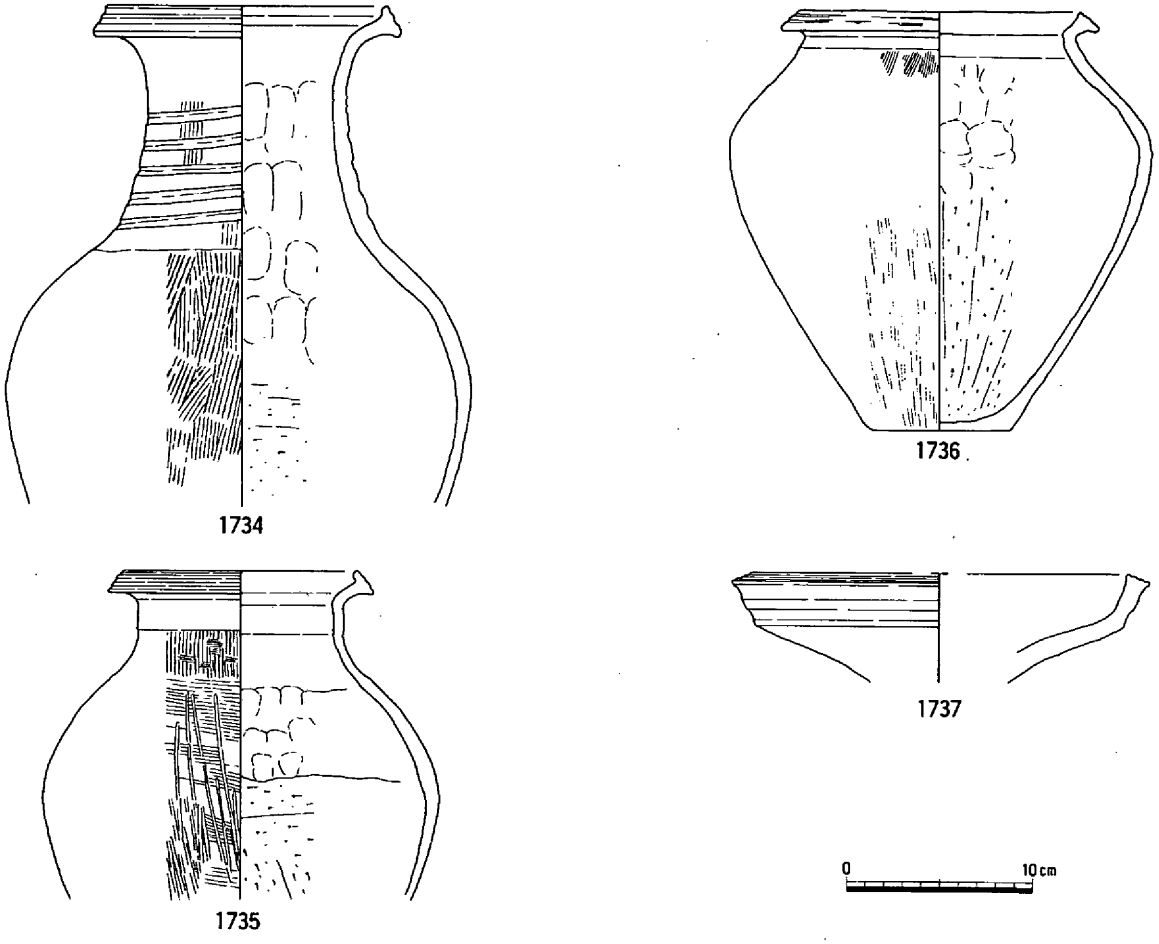
25cm、深さが３cm程度で、断面形は凸レンズ状を呈し、底面の海抜高は8.53m前後である。少量の弥



1．暗灰黄色砂質土
2．黄灰色砂質土
3．にぶい褐色砂質土
4．暗黄灰色粘質土
5．灰褐色粘質土
6．灰色砂質土
7．褐灰色粘質土
8．淡灰黄色粘質土
9．灰褐色粘質土（焼土、炭含む）
10．暗灰色粘質土
11．暗灰茶褐色粘質土

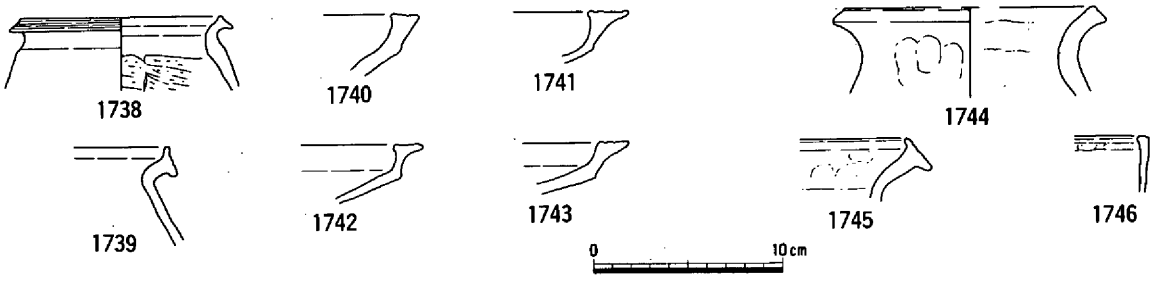
0　1m

第421図　溝７・８・９・10・11断面図（1/40）



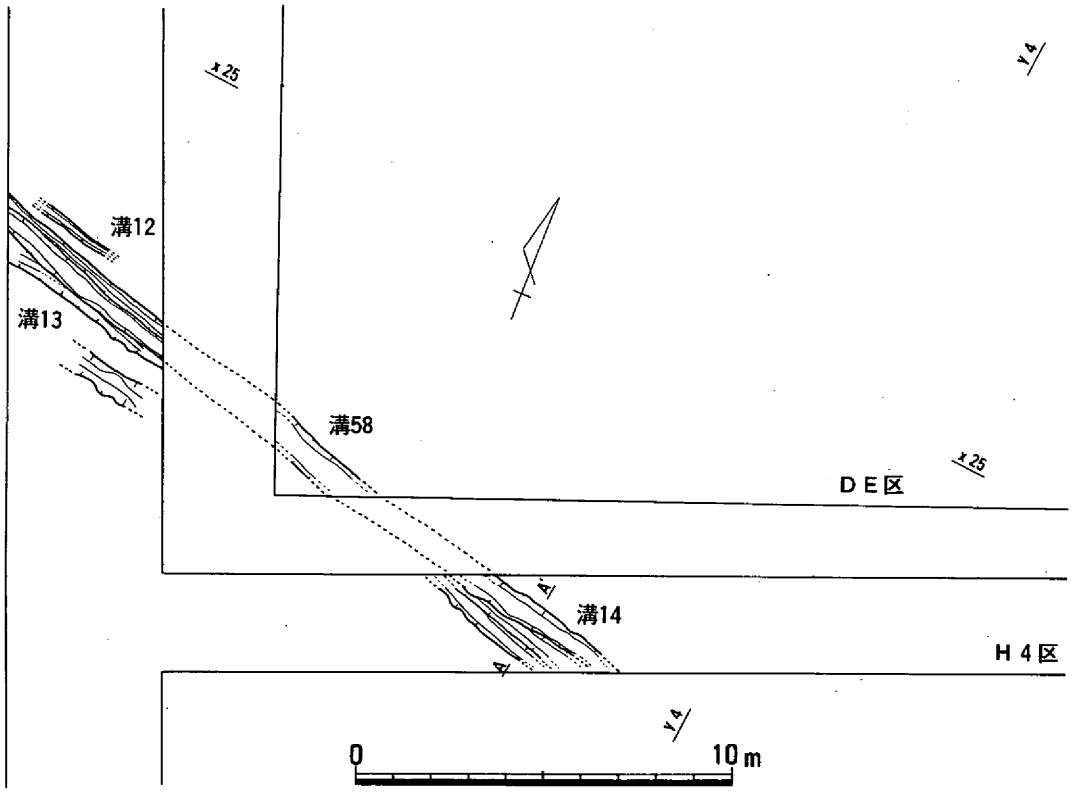
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1734	弥生土器	壺	口唇部凹線。頸部ハケメのち凹線。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ、ナデ。胴部ケズリ。	橙　5YR6/6	
1735	弥生土器	甕	口唇部凹線。胴部ハケメのちミガキ。	口頸部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、ナデ。下半ケズリ。	灰白　10YR8/2	
1736	弥生土器	甕	口唇部沈線？。口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ。下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエ、ナデ。下半ケズリ。	にぶい橙　5YR7/4	
1737	弥生土器	高杯	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ？。	口縁部ヨコナデ。	橙　2.5YR7/6	

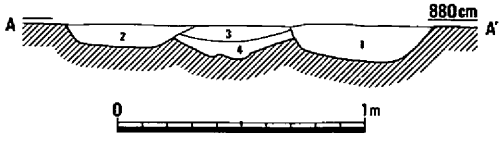
第422図　溝10出土遺物（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1738	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白　10YR8/2	
1739	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ナデ。	浅黄橙　7.5YR8/4	
1740	弥生土器	高杯			橙　5YR7/6	
1741	弥生土器	高杯	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙　7.5YR7/4	
1742	弥生土器	高杯	口唇部凹線？。口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ？。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ？。	にぶい橙　7.5YR7/4	
1743	弥生土器	高杯	口唇部凹線？。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	赤橙　10R6/6	
1744	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	灰白　10YR8/2	
1745	弥生土器	壺	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙　5YR7/4	
1746	弥生土器	壺？	ヨコナデ？。	ミガキ？。	黄灰　2.5Y4/2	

第423図　溝11出土遺物（1/4）





1．淡褐灰色土（溝14）
2．灰褐色土　（溝13）
3．褐灰色土　（溝58）
4．暗褐灰色土（溝58）

第424図　溝12・13・14・58（1/200・1/30）

生土器が出土したのみであるが、弥生時代中期～後期に属すると考えられる。　（光永）

溝16・17・18（第425・426図）

ＩＮ区の西端部において検出した溝で、いずれも後世の削平によって底部が５㎝残存していたのみである。これらの溝については、検出された位置から溝12・13・14と一連のものではないかと考えておきたい。時期は明確ではないが弥生時代中～後期と考えておきたい。　（平井）

溝19（第425・426図）

Ｈ５区東寄りで、第２微高地西端から約10ｍ離れて位置し、東辺の一部を柵列状遺構３に削られている。幅40㎝、深さ５㎝程度で、弥生時代中期～後期に比定される。　（光永）

溝20（第425・426図）

Ｈ３・Ｈ５・ＫＹ１の各区において、第２微高地西端に添って水田６・７の下層で検出された。規模は、Ｈ５区において幅１ｍ程度である他は幅２ｍ前後を測り、深さは12～27㎝で、断面形は凸レンズ状を呈する。底面の海抜高はＨ５区で8.2ｍ前後であるのに対して、ＫＹ１区では8.1ｍ程度であり、50ｍで10㎝の勾配を示すこととなる。南端は、ＫＹ１区西部中央付近で不明瞭になっている。時期は、出土遺物と水田６・７との関係から、弥生時代中期～後期の枠でとらえたい。　（光永）

溝21・22・23（第425・426図、図版22）

ＫＹ１・２区で後に述べる水田８およびその下層を除去した後に検出した溝である。いずれの溝も肩はしっかりしておらず、底面も凹凸が著しかった。特に溝21・22については部分的に切れる場所もあり、切り合い関係もはっきりしなかった。また溝23は水田８の肩に沿うようなかたちで検出されており、形状から西側の溝９との共通性が考えられる。これらの溝の時期は検出状況から、溝９・11とほぼ同時期の弥生時代後期前葉～中葉と考えておきたい。また性格については、その形状から水路とは考えられず、水田造成あるいは耕作に関連する溝と考えたい。　（平井）

溝24（第427図）

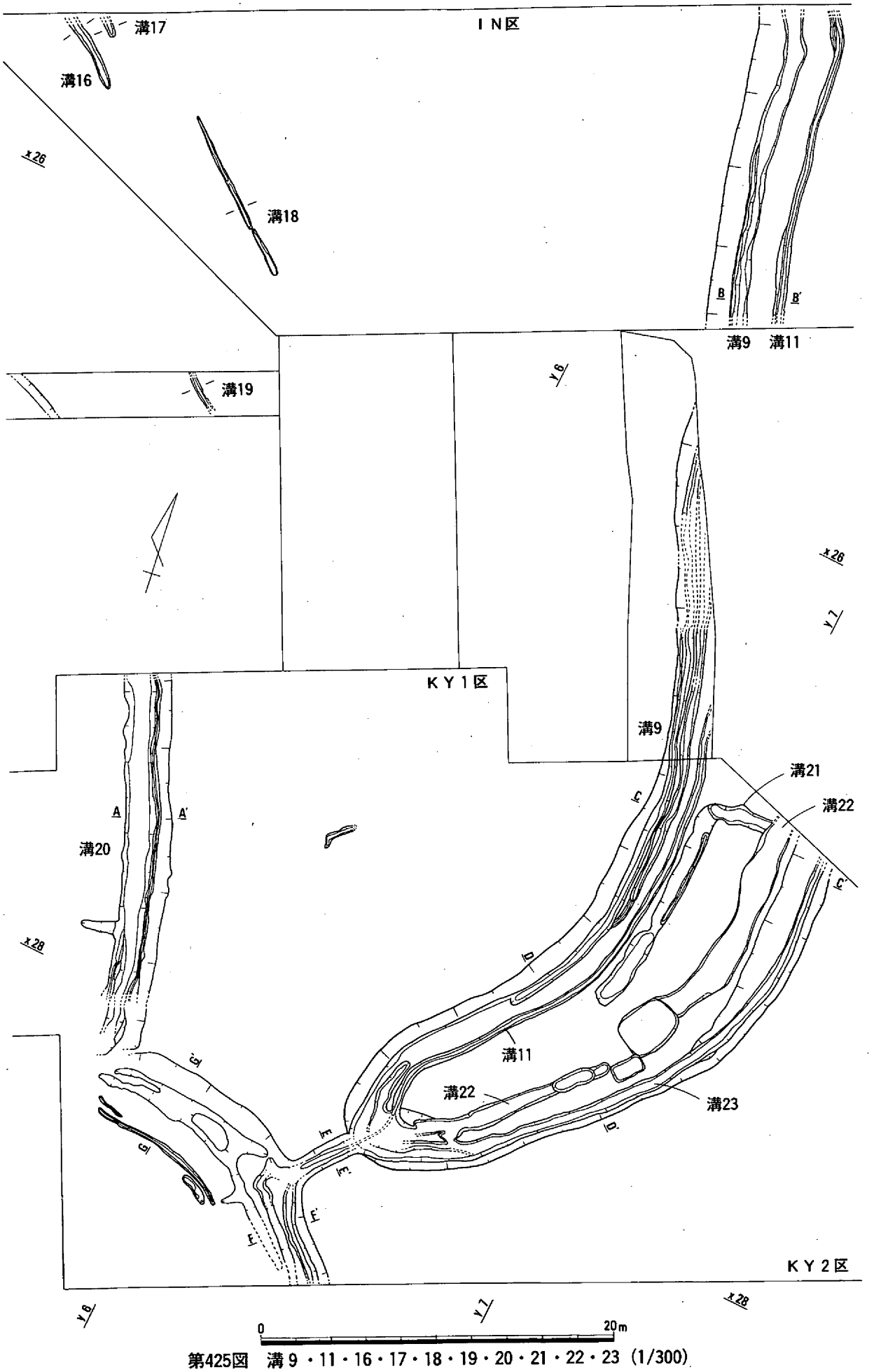
第１微高地の東縁辺部に沿って掘削された溝状遺構の一群である。幅は広いもので約１ｍ、細いものでは20㎝程度しかなく、深さも検出面から20㎝未満と浅い。検出面上面は後述する古墳時代前期前葉に埋没した水田層に被覆されており、その時点で大きく削平を受けているようである。出土遺物が無いため時期の特定はできないが、埋土および検出状況から弥生時代中～後期に属すると考えられ、河道を挟んだ対岸に位置する溝20と対を成し、水田の拡張に伴う掘削痕と考えられる。　（久保）

溝25（第428～430図）

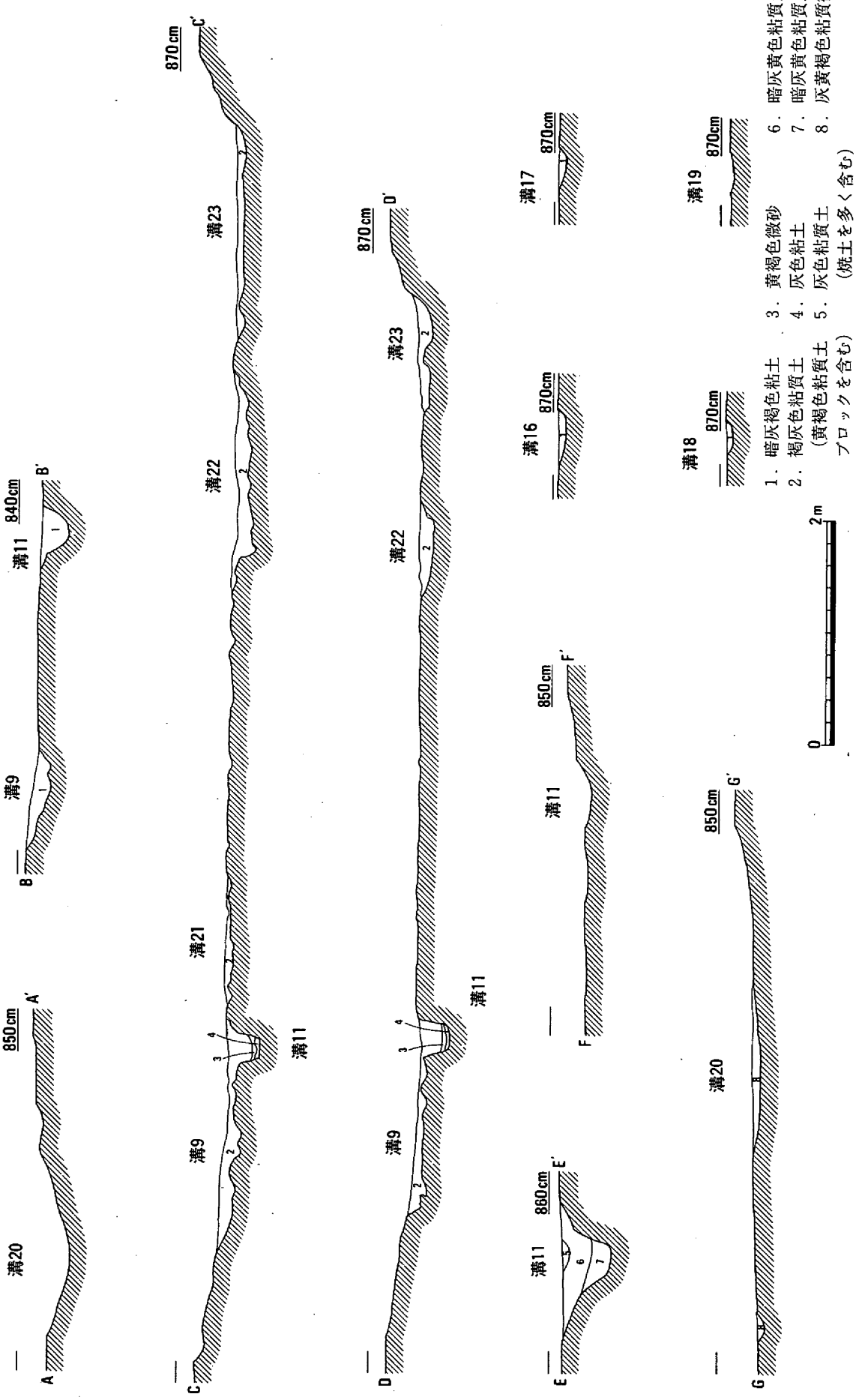
ＪＹ区とＩＮ区の東半部で古墳時代前期前葉の水田８を除去した後に検出した溝である。またＷＲ－Ｅ区にも本来は続いていたであろうが、検出はできなかった。幅は後世の削平のために、ＪＹ区では２条に分離された状況を呈するなど一定しておらず、底面も凹凸が著しかった。また方向は直線的ではなく蛇行しているが、これは水田８の肩部に沿ったためと考えられ、この溝が水路ではなく水田の造成或いは耕作に伴う溝である可能性も考えられるが断定はできない。埋土中からは土器（高杯など）、楔形石器が出土しており、時期は弥生時代中期後葉には埋没したと考えられる。　（平井）

溝26（第428・429図）

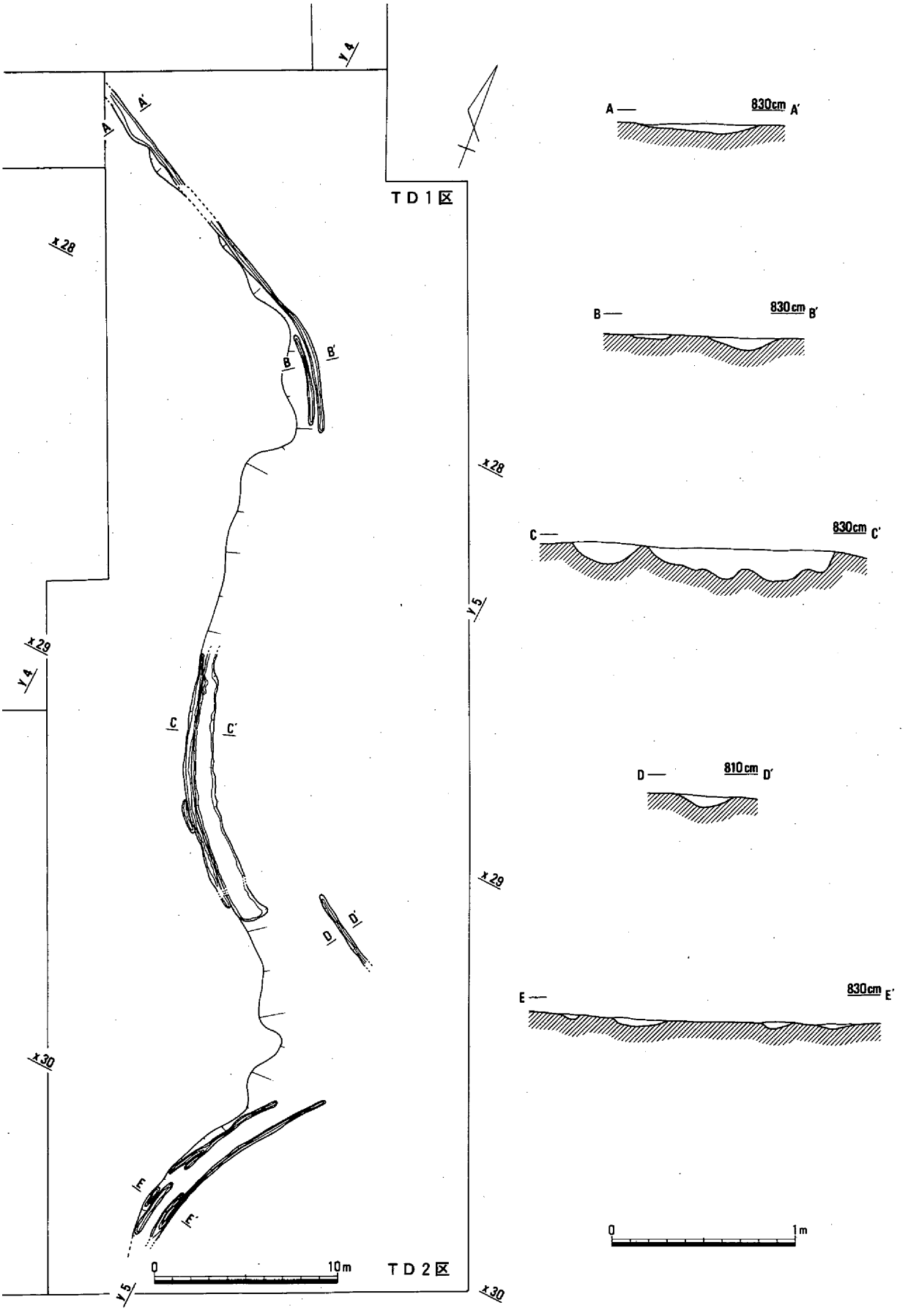
ＩＮ区の溝25の西において水田８の土層を除去した後に検出した。幅は一定しておらず、肩もしっかりしていない。底も凹凸が著しい。長さは約13ｍが検出されたのみで、方向は溝25に併行している。その形状からも、時期・性格とも溝25と共通したものと考えられる。　（平井）



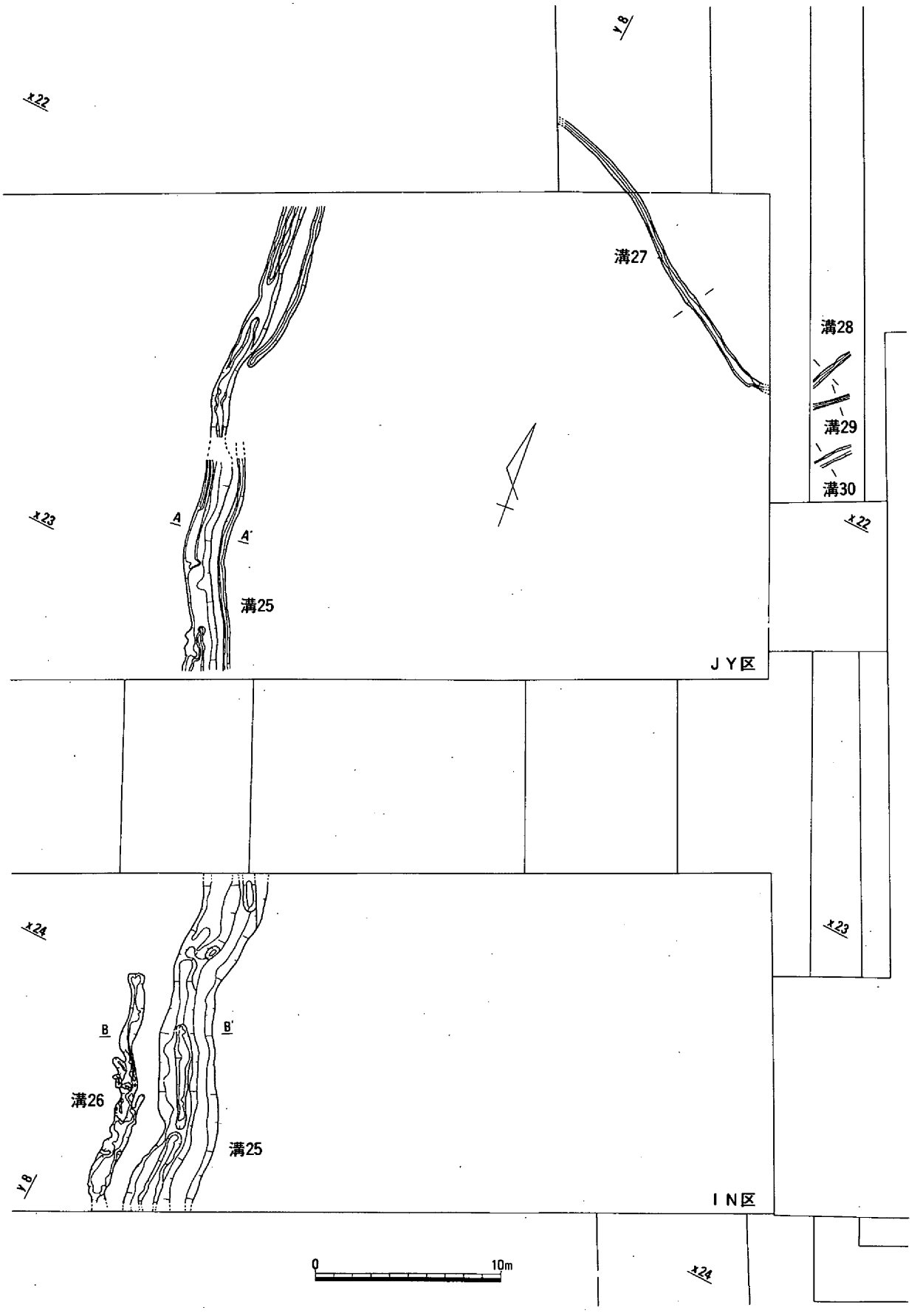
第425図　溝９・11・16・17・18・19・20・21・22・23（1/300）



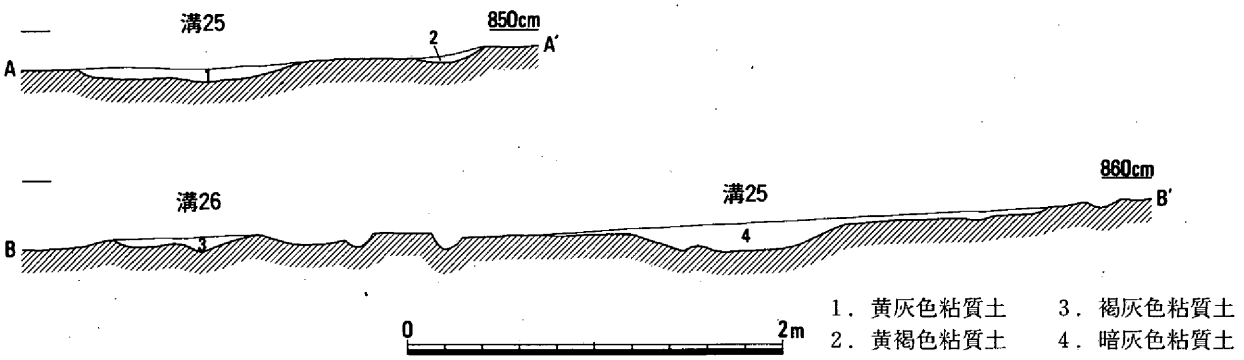
第426図　溝９・11・16・17・18・19・20・21・22・23断面図（1/50）



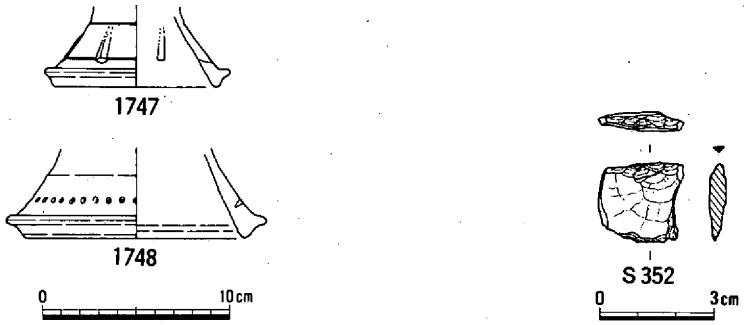
第427図　溝24（1/300・1/30）



第428図　溝25・26・27・28・29・30（1/300）



第429図　溝25・26断面図（1/40）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1747	弥生土器	高杯	脚部ヘラ描き沈線、すかし孔。	ケズリ。	灰白　2.5YR8/1	
1748	弥生土器	高杯	脚部円形刺突文。		淡黄　2.5Y8/3	

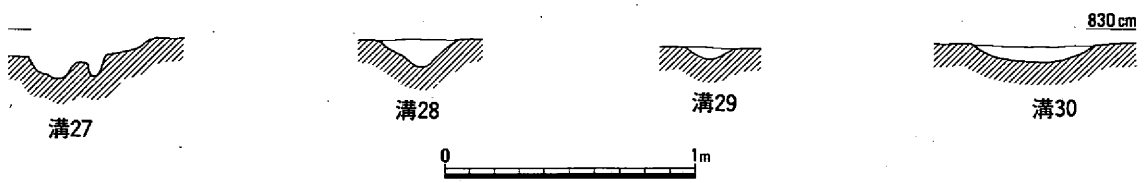
第430図　溝25出土遺物（1/4・1/2）

溝27・28・29・30（第428・431図）

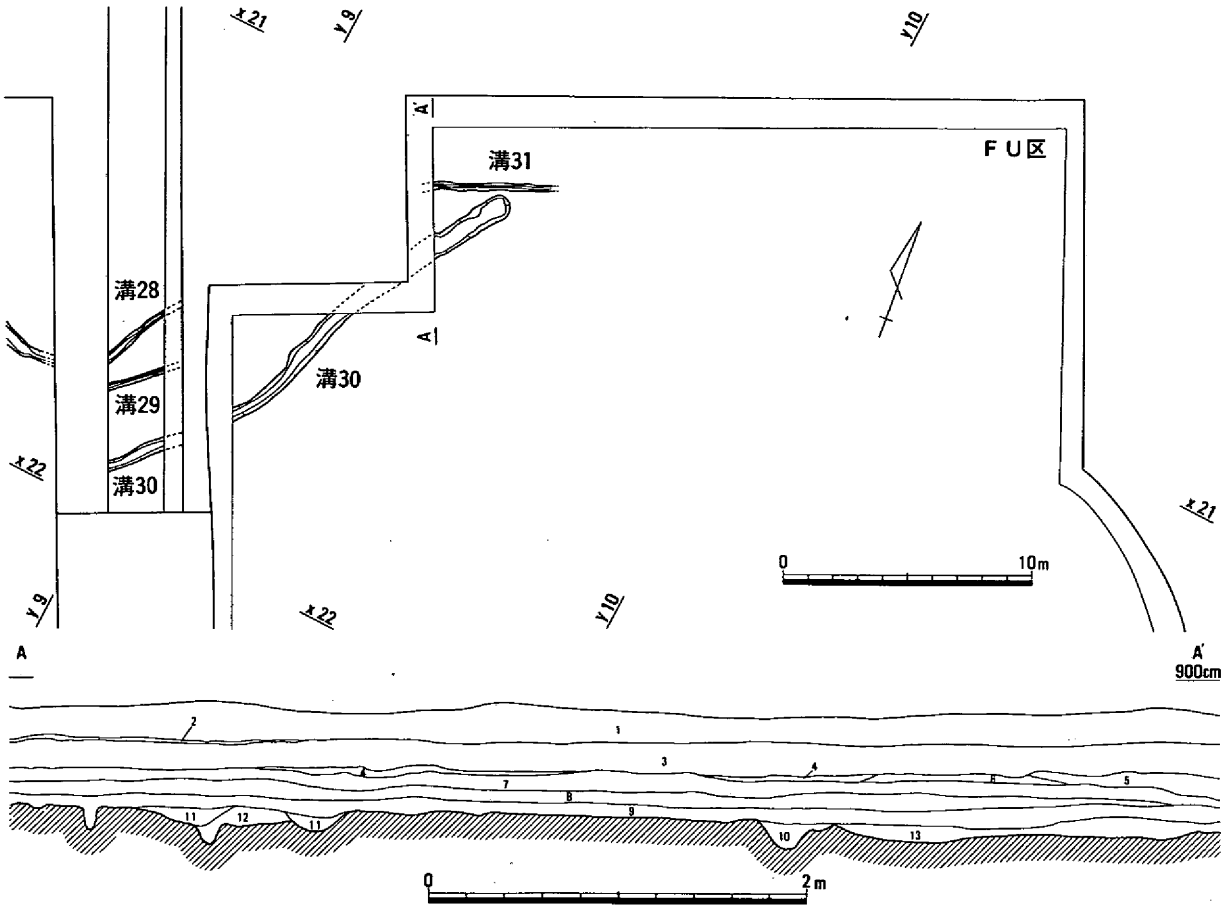
第２微高地(東)の北端、ＪＹ区の北東隅からＨ６区の南端、ＦＵ区の北西隅にかけて検出された溝群である。Ｈ６区を境に後述する凹地２の肩口に沿うように大きく向きをかえているが両端とも調査区外にのびるため全容は不明である。これらの溝の埋没時期は遺物が無いため特定はできないが、弥生時代前期中葉の溝３を切ることから少なくともそれよりは新しいと考えられ、弥生時代中～後期の範疇におさまると考えた。（久保）

溝31（第432図）

溝30の東端北側に位置する、幅30～40cm細い溝である。溝27～30と同じく暗灰褐色粘質微砂で埋没しており一連のものとも考えたが、底面の海抜高も約８ｍと前者より10cm程度深く、時期も性格も異なるものかもしれない。しかし、断面図にみられるように溝30と同じ９層によって上面を被覆されていることからこの期に含めて考えた。（久保）



第431図　溝27・28・29・30断面図（1/30）



1．明灰色粘質細砂
2．暗灰褐色粘質微砂
（５～６面のFe層がある）
3．明白黄色粘質細砂
4．灰黒褐色粘質土
5．黒褐色粘質土
6．白黄色粘質微砂
7．白褐灰色粘質微砂
8．淡褐灰色粘質微砂
9．褐灰色粘質微砂
10．暗灰褐色粘質微砂
（溝31）
11．暗灰褐色粘質微砂
（黄色土ブロック含）
12．明灰褐色粘質微砂
13．暗灰黒褐色土

第432図　溝28・29・30・31（1/300・1/40）

溝32・33（第433図）

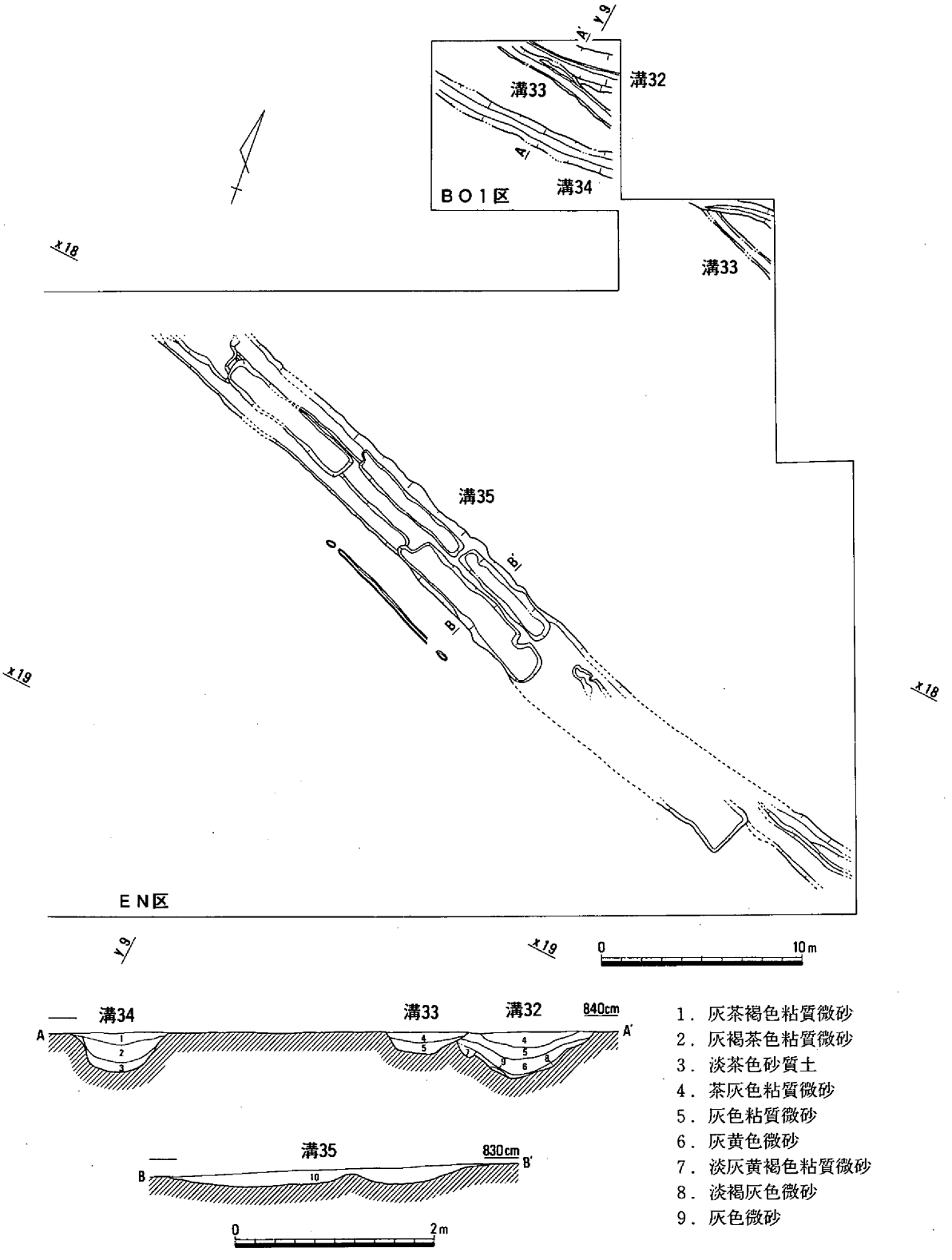
ＢＯ１区北東部からＥＮ区北東隅で検出された。溝32はＢＯ１区のみで確認され、距離約2.7ｍで溝34と平行し、溝33に削られる。上幅140cm、深さ45cm程度で断面形は椀形を呈し、底面の海抜高は7.8ｍ前後である。溝33はＢＯ１区で溝32を削り、ＥＮ区で溝34に削られる。上幅80cm、深さ20cm程度で、断面形は不整逆台形を呈し、底面の海抜高は8.05ｍ前後である。少量の弥生土器が出土しており、時期は弥生時代中期～後期に求められる。（光永）

溝34（第433図）

ＢＯ１区からＥＮ区北西隅で検出された流路を東西におく溝である。溝35との距離約15ｍを測り、ＥＮ区で溝33を削っている。上幅95cm、深さ40cm程度で、断面形は「Ｕ」字形に近く、底面の海抜高は7.9ｍ前後である。少量の弥生土器により、弥生時代中期～後期に比定される。（光永）

溝35（第433図）

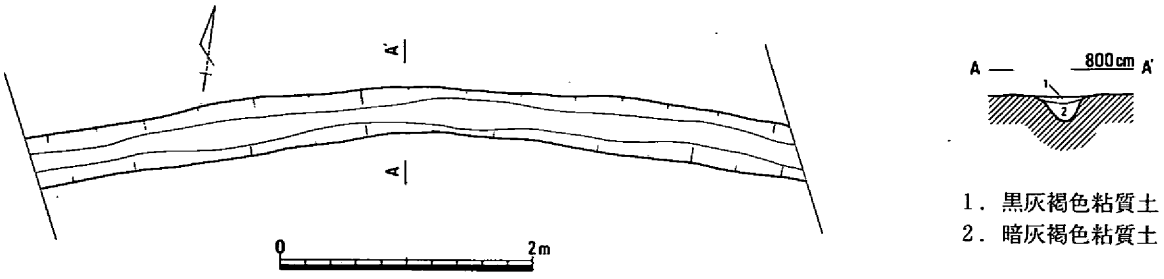
ＥＮ区で、第３微高地の西端に添って、水田８の下層から検出された。１条の水路として認識されるものではなく、細長い土壙の集合体とでも表現される遺構である。ほぼ全容の検出された一つの単位の規模は、小さいもので5.7×１ｍ、大きいもので8.5×1.7ｍを測り、深さは10cm前後で、断面形は皿形を呈する。少量の出土遺物と水田８との関係から、時期は弥生時代中期～後期の枠でとらえられる。（光永）



第433図　溝32・33・34・35（1/300・1/60）

溝36（第434図）

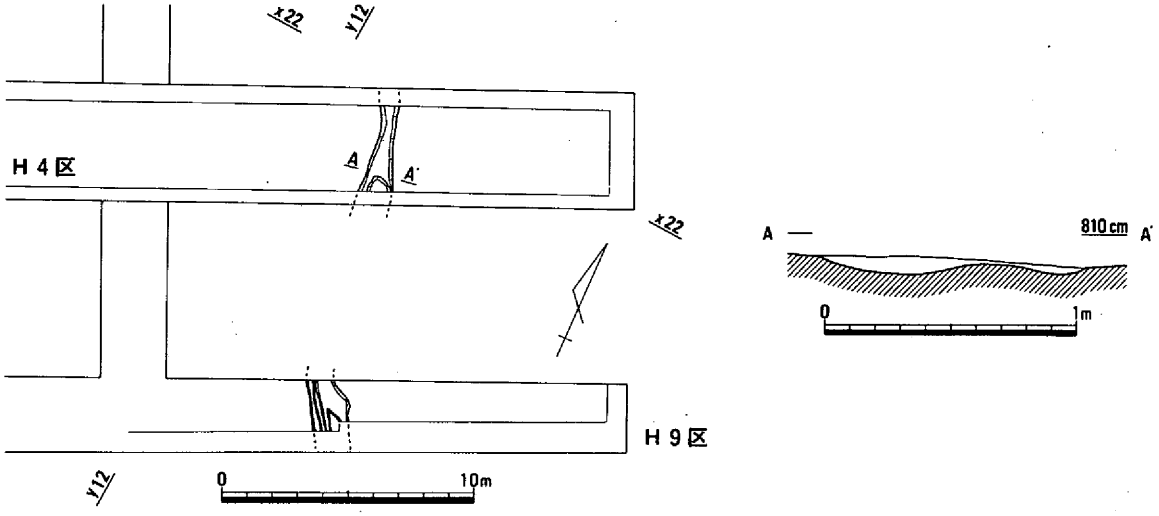
第２微高地(東)のＫ１区中央部で検出された幅40～50cmの溝である。東西両端とも調査区外のびるため全容は不明であるが、若干弧を描いており、微高地の傾斜に沿っているようである。出土遺物はないが埋土から弥生時代中期～後期のものと考えられる。　(久保)



第434図　溝36（1/60）

溝37（第435図）

第２微高地(東)の東端で、第３低位部に向かって下がる緩傾斜面上に位置する。未調査部分をはさんでＫ４区およびＨ９区に分かれて検出されたが、同じ暗茶褐色粘質土で埋没しており、同一の溝と考えられる。Ｋ４区部分から土器細片が出土しており、弥生時代中～後期と考えられる。　（久保）



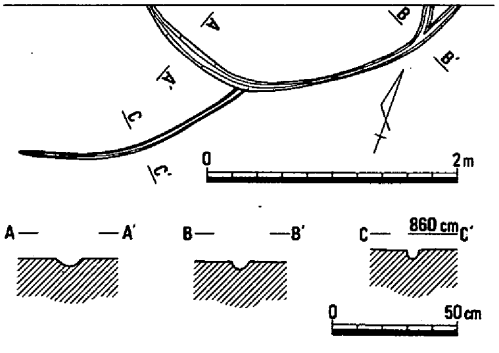
第435図　溝37（1/300・1/30）

溝38（第436図）

第１微高地の北寄りに位置する。黄褐色粘土層の上面において、弧状になる細い溝が検出された。竪穴住居跡の壁体溝と推定して追求したが、柱穴も検出されないことから明確にできなかった。西側にも細い弧状の溝が一部みられる。溝の大きさは、よく残っている所で、幅10cm、深さ３cm程である。出土遺物もなく、時期は確定できない。（正岡）

溝39（第288・437図）

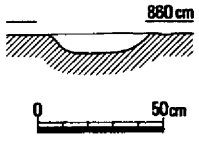
ＫＹ２区の中央部においてほぼ東西に約24ｍ検出された。幅約30cmで、深さは約８cmが残存していたにすぎない。埋土は暗褐色粘質土が一層のみで、時期・性格ともはっきりしないが弥生時代中～後期と考えておきたい。　（平井）



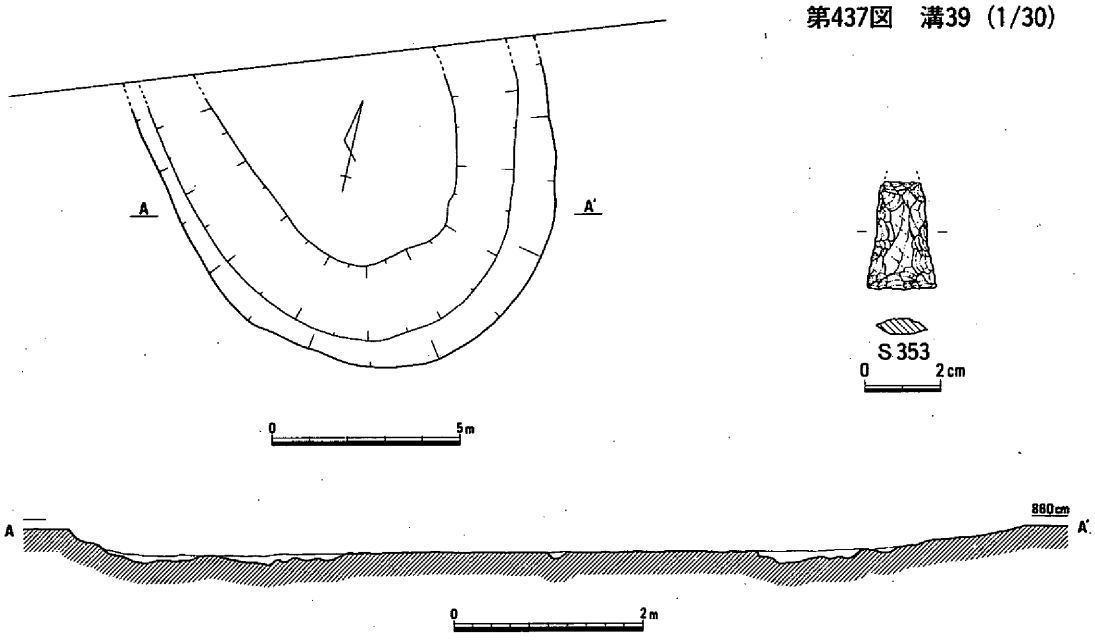
第436図　溝38（1/60）

溝40（第438図）

ＫＹ２区中央部の古墳時代前期前葉の水田層およびその下層を除去した後の基盤層の面で検出した溝である。深さは15cmが残存していたのみで、底面も凹凸が著しい。肩も明瞭ではないが、ほぼ水田８に沿ったかたちで検出されたため、この溝は水田の造成あるいは耕作に関連したものと考えられる。時期は弥生時代中～後期と考えておきたい。（平井）



第437図　溝39（1/30）



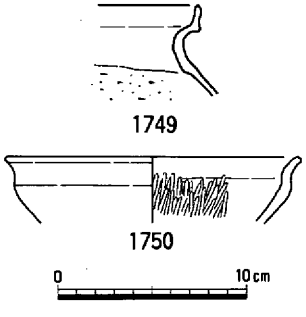
第438図　溝40（1/200・1/80）・出土遺物（1/2）

溝41（第440図）

ＫＹ３区において溝42に取り付く形で検出した。長さは約10ｍが確認できたのみで、肩はしっかりしておらず、幅も一定していない。深さは３～15cmが残存しており、東に向かって低くなっている。時期を示す遺物は出土しなかったが、埋土などから弥生時代中～後期と考えておきたい。（平井）

溝42（第439・440図）

ＫＹ３区の西半部において検出した。大部分を中世溝113・114によって切られている。本来の形は明らかではないが、残存していた部分からは第440図のように復元できる。埋土は大きく上下に２層分離でき、底面には幅約20～40cmの一段低い部分が溝状に３本確認できた。時期は溝43をきっていることおよび出土土器から、弥生時代中期後葉以降に掘削され、後期末葉までには埋没したものと考えられる。（平井）

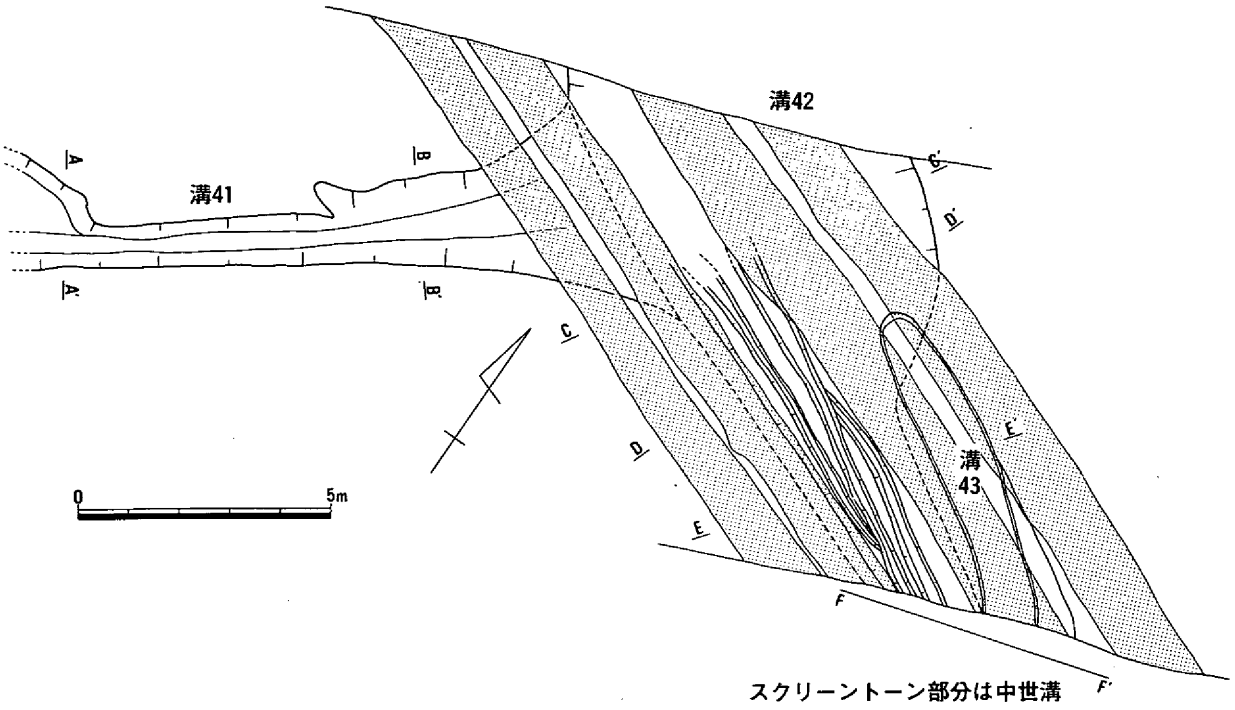


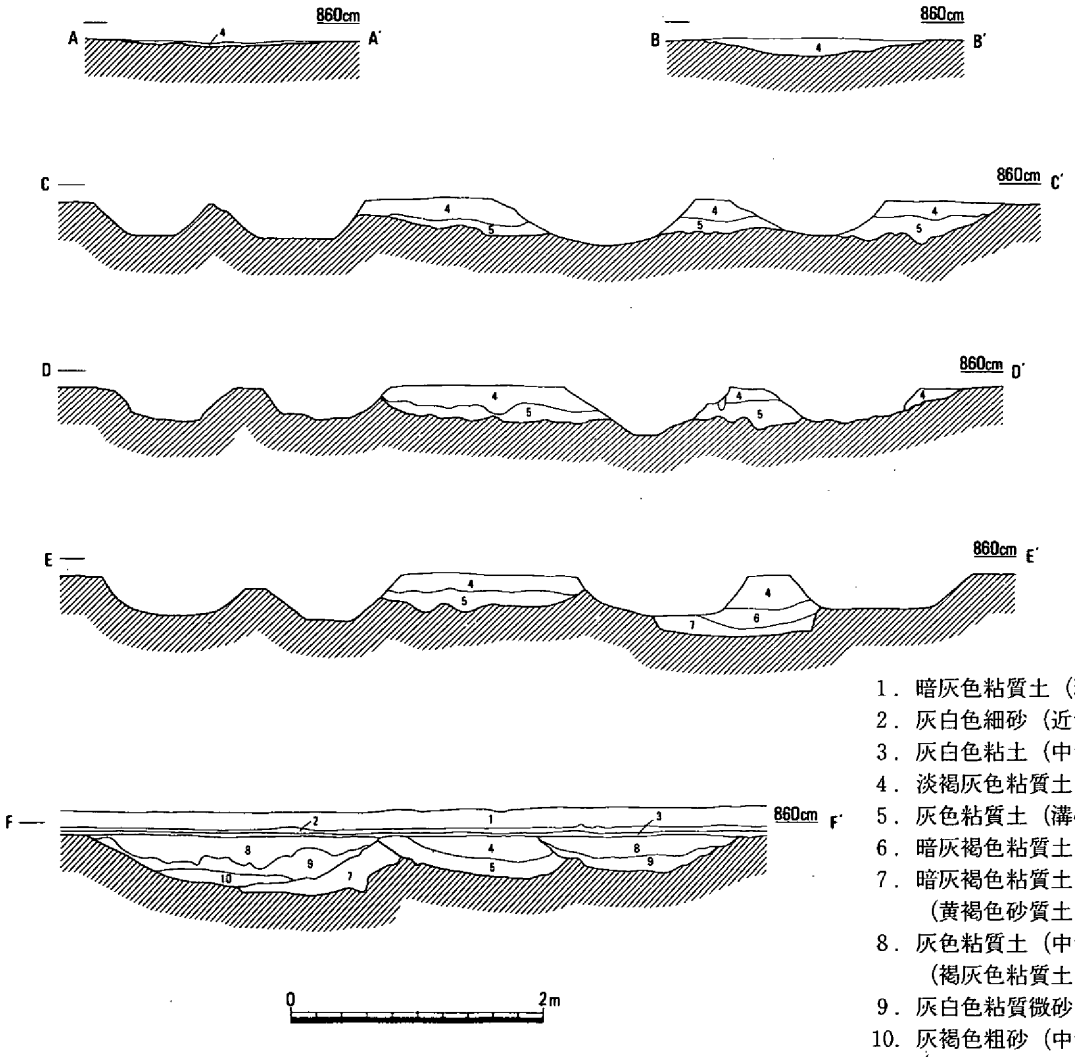
第439図　溝42出土遺物（1/4）

溝43（第440・441図）

ＫＹ３区において溝42に切られる形で検出された。平面形はやや

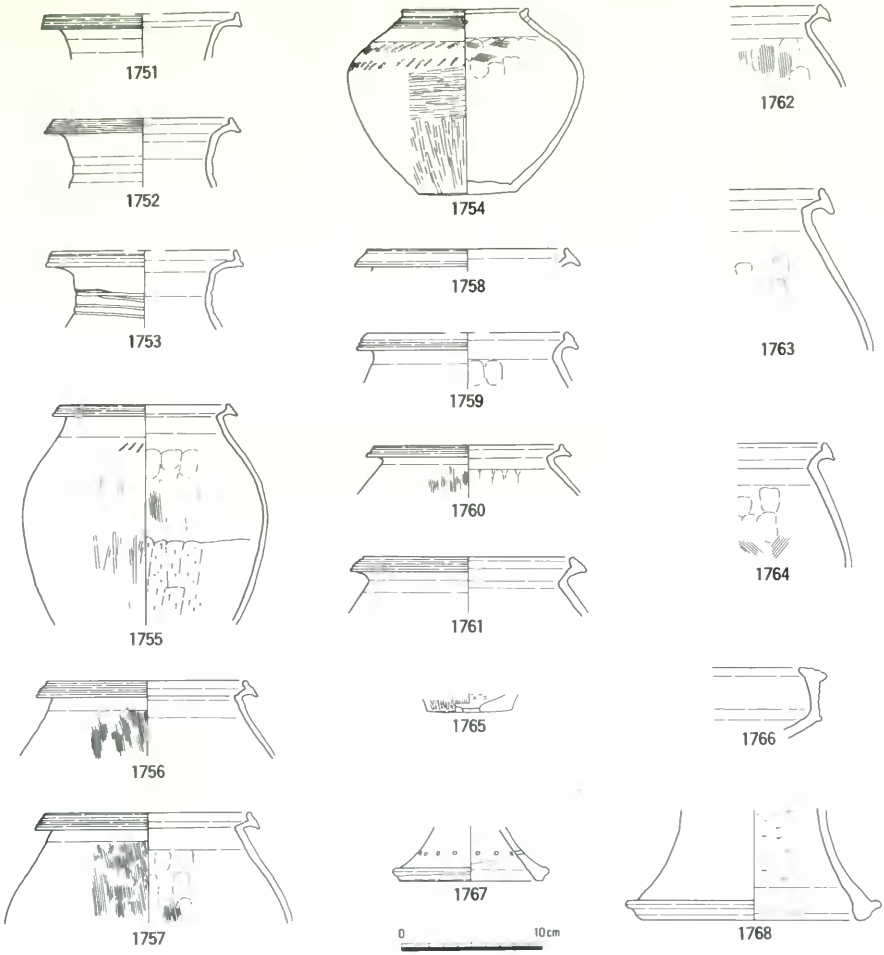
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1749	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	胴部ケズリ。	にぶい橙　5YR6/4	
1750	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	にぶい橙　7.5YR6/4	





1．暗灰色粘質土（現耕作土）
2．灰白色細砂（近世）
3．灰白色粘土（中世）
4．淡褐灰色粘質土（溝42）
5．灰色粘質土（溝42）
6．暗灰褐色粘質土（溝42）
7．暗灰褐色粘質土（溝43）
（黄褐色砂質土ブロック含む）
8．灰色粘質土（中世溝）
（褐灰色粘質土ブロック含む）
9．灰白色粘質微砂（中世溝）
10．灰褐色粗砂（中世溝）

第440図　溝41・42・43（1/150・1/60）



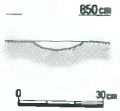
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1751	弥生土器	壺	口唇部凹線、頸部凹線、口頸部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	淡黄橙　10YR8/3	
1752	弥生土器	壺	口唇部凹線、口頸部ヨコナデ、頸部凹線	口縁部ヨコナデ	灰白　2.5Y8/2	
1753	弥生土器	壺	口唇部凹線、口頸部ヨコナデ	口頸部ヨコナデ	にぶい黄橙　10YR7/3	
1754	弥生土器	直口壺	口縁部凹線、胴部上半刺突文、下半ミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ハケメ	淡橙　5YR8/3	
1755	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ、胴部上半ミガキ、刺突文、下半ミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部上半ユビオサエ、ナデ、ハケメ、下半ケズリ	黄灰　2.5Y4/1	
1756	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ナデ	にぶい黄橙　10YR7/2	
1757	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ナデ、ハケメ	にぶい黄橙　10YR7/2	
1758	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ	黒褐　7.5YR3/1	
1759	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ	黒褐　10YR3/1	
1760	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ナデ	灰褐　7.5YR6/2	
1761	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ	にぶい黄橙　10YR7/2	
1762	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、ハケメ	にぶい黄橙　10YR7/2	
1763	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ナデ	にぶい黄橙　10YR7/2	
1764	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ナデ、ハケメ	にぶい黄橙　10YR7/3	
1765	弥生土器	甕	胴部ミガキ、底部ケズリ	胴部ケズリ	黒褐　10YR3/1	焼成後穿孔
1766	弥生土器	高杯	口唇部凹線、口縁部凹線	口縁部ヨコナデ	灰白　2.5Y8/2	
1767	弥生土器	高杯	脚部ナデ?、円形透孔、脚端部凹線、ヨコナデ	脚部ケズリ、脚端部ヨコナデ	淡黄　2.5Y8/3	
1768	弥生土器	高杯	脚端部凹線、ヨコナデ	脚部ケズリ、脚端部ヨコナデ	にぶい黄橙　10YR7/2	

第441図　溝43出土遺物（1/4）

カーブを描いており、長さ約6.5m、幅約1.2が残存しており、北東部は丸く途切れている。断面形は、底の部分では逆台形を呈している。こうしたことから、この遺構は単なる溝ではなく、何らかの周構あるいは細長い土壙の可能性を考えた方がよいかも知れない。埋土中から壺・甕・高杯などの土器が出土しており、時期は弥生時代中期後葉と考えられる。　（平井）

溝44（第442・445図）

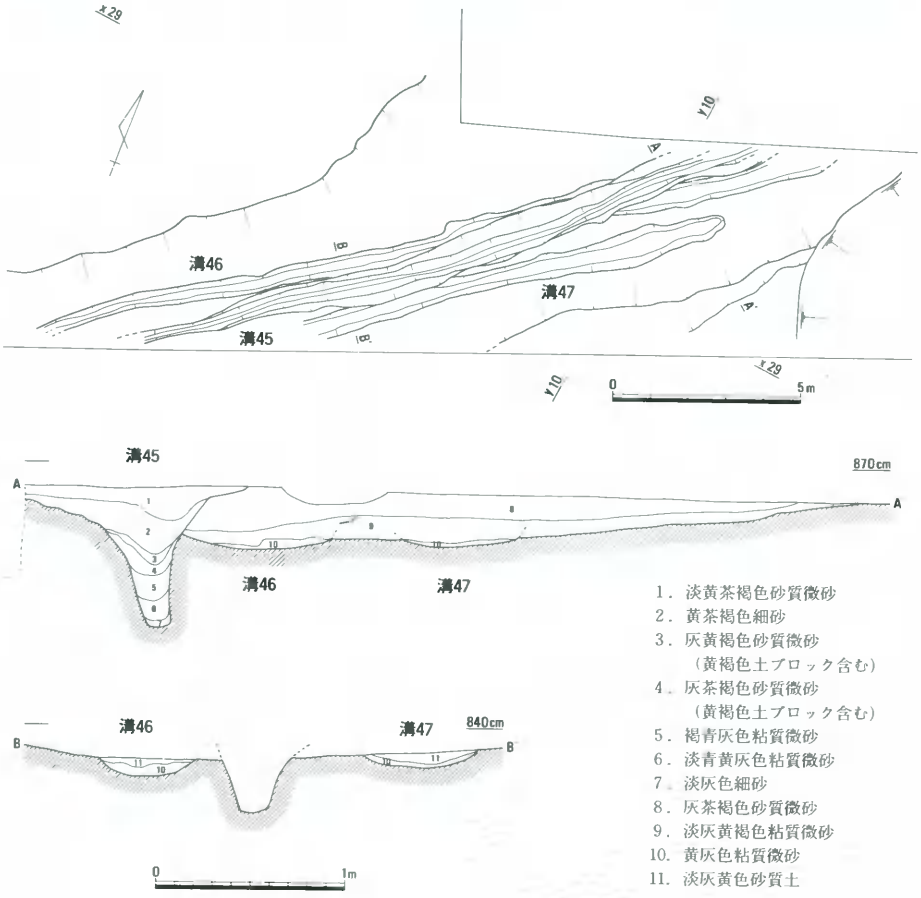
ＫＹ３区の東端部において検出した。幅は15cm前後で深さは３cm前後が残存していたにすぎない。埋土は灰黒色粘土が一層のみであった。時期・性格ともはっきりしないが弥生時代中～後期のものと考えておきたい。　（平井）



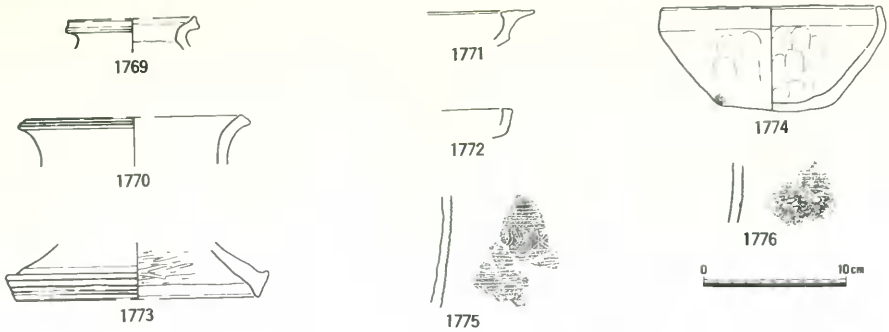
第442図　溝44（1/20）

溝45・46・47（第443・444図）

第２微高地上の南に位置する３条の溝で、北東から南西方向にのびる。８層等の包含層を切り込む溝45は断面が細長い箱形を呈し、上面で幅90cm、底面での幅12cm、深さ73cmを測る。底面は酸化鉄の



第443図　溝45・46・47（1/150・1/30）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1769	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ？。	灰白　2.5Y8/2	
1770	弥生土器	壺	口唇部沈線２本。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	橙　5YR6/6	
1771	弥生土器	高杯	口唇部凹線　口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1772	弥生土器	高杯	口縁部凹線。		にぶい橙　5YR7/4	
1773	弥生土器	高杯	脚部ナデ。脚端部沈線４本、ヨコナデ。	脚部ミガキ。脚端部ヨコナデ。	にぶい橙　5YR7/3	
1774	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ナデ。	にぶい橙　5YR6/4	
1775	弥生土器	甕	ヘラ描き沈線、沈線文。ミガキ？。		明赤褐　5YR5/6	
1776	弥生土器	壺？	ヘラ描き沈線、刺突文。		橙　5YR6/8	

第444図　溝45およびその周辺の出土遺物（1/4）

沈着が著しい。この溝からは**1771・1773・1775**が出土しており、溝の時期は弥生時代後期初頭と思われる。溝46・47は非常に浅く、断面形は皿状を呈する。幅は60cm、深さは９cmを測る。断面等でも確認できなかったが、９層から掘り込まれている可能性もある。時期は明確ではないが、弥生時代中期から後期におさまると思われる。８・９層の出土遺物は弥生時代中期～後期である。　（柴田）

溝48（第445図）

Ｈ15区の北半部に位置する。検出できたのは長さ約5.5ｍ、幅１ｍ前後で、深さは10cm前後が残存していたのにすぎない。

時期、性格とも明らかでないが、弥生時代中～後期のものと考えておきたい。　（平井）

溝49・50（第445図）

Ｈ15区の南半部とＨ16区の南半部においてそれぞれ溝59・60に切られる形で検出された。いずれも本来の幅、深さはあきらかではないが、溝49は幅約100～140cm、深さ約30cm、溝50は幅約200～250cm、深さ約25cmが残存していた。

この溝の性格については、溝59・60にほぼ沿うかたちで掘削されており、溝59・60が古墳時代前期前葉の水田８に伴う水路と考えられることから、水田８以前の時期に存在していた水田に伴う水路と考えたい。

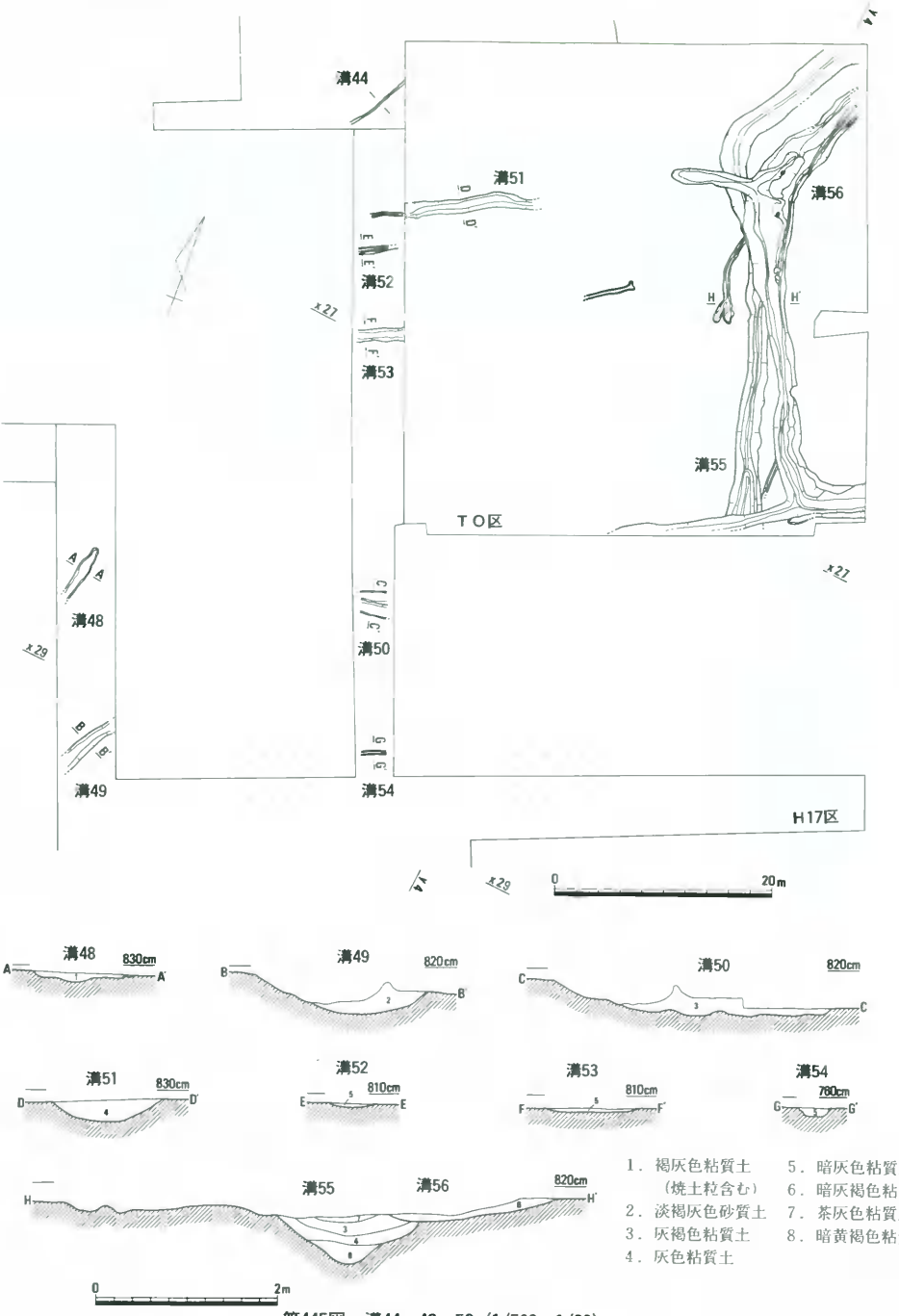
時期を推定できる遺物としては埋土中から弥生時代後期の土器が出土している。　（平井）

溝51（第445・446図）

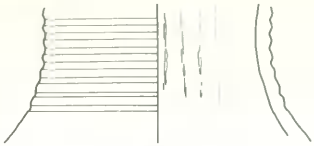
Ｈ16区とＴＯ区の北半部の微高地上においてほぼ東西方向に検出した。規模は後世の削平のため一定していないが、ＴＯ区では幅約120cm、深さ20cm前後が残存していた。埋土中からは図示した壺が出土しており、時期は弥生時代中期後葉と考えられる。　（平井）

溝52・53（第445・446図）

Ｈ16区の北半部において、古墳時代前期前葉の水田８およびその下層の土層を除去した後に基盤層



第445図　溝44・48～56（1/500・1/60）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1777	弥生土器	壺	頸部凹線。	頸部シボリ痕。	灰白　10YR8/1	
1778	弥生土器	高杯	胴端部ヨコナデ、すかし孔	胴部ケズリ	にぶい橙　7.5YR6/4	

第446図　溝51・53出土遺物（1/4）

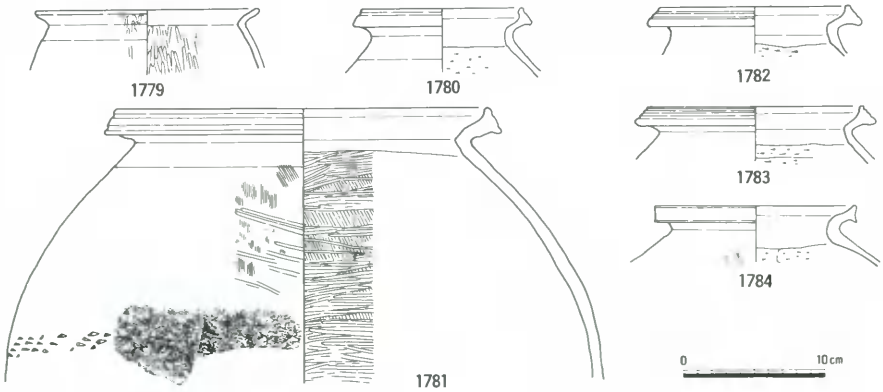
の面で検出した溝である。溝52は幅40cm前後、深さ約５cm、溝53は幅110cm前後で、深さは３cm前後が残存していたにすぎない。肩はしっかりしておらず、底面も凹凸が著しい。またいずれも水田８の肩に沿って検出されていることから、水路ではなく、水田の造成あるいは耕作に関わる溝と考えられる。埋土からは土器片が出土しており時期は弥生時代後期と考えられる。（平井）

溝54（第445図）

Ｈ16区の南半部において古墳時代前期前葉の水田８を除去した後に検出した。幅30cm前後、深さ約10cmが残存していたのみである。時期・性格とも明らかではないが、土層関係などから弥生時代後期のものと考えておきたい。（平井）

溝55（第445・447図）

ＴＯ区の東寄りに存在する溝４の上部に重複してみつかった幅２～2.5ｍ、深さ50～60cmの溝である。第234図断面の１層に対応する。そして、東側に並走する溝56にも一部切られている。溝底のレベルは標高7.3～7.5ｍを測り、用排水の両機能を有していたと思われる。遺物は前期の土器や石器が



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1779	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ。	明褐灰　7.5YR7/2	
1780	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/3	
1781	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ、胴部ハケメのちミガキ、刺突文。	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメのちミガキ	にぶい黄橙　10YR7/2	
1782	弥生土器	甕	口唇部沈線。口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ？。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白　2.5Y8/2	
1783	弥生土器	甕	口唇部沈線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙　10YR8/3	
1784	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ。	にぶい橙　7.5YR7/3	

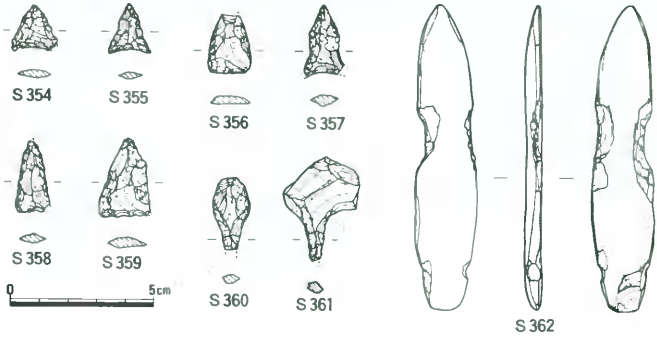
第447図　溝55出土遺物（1/4）

多く出土しているが、第447図の土器により中期後葉～後期前葉に機能していたとみられる。（柳瀬）

溝56（第445・448図）

溝55の東側に一部接して並走し、ＴＯ区の南西隅でＴ字に分岐する幅2.5～４ｍ、深さ50cm前後の溝である。分岐して南西方向に延びる枝溝は溝49・50に対応し、微高地端部（水田との境）に繞らせた用水路と思われる。溝底のレベルは北端で標高8.06ｍ、中央で7.78ｍ、分岐点で7.56ｍを測る。

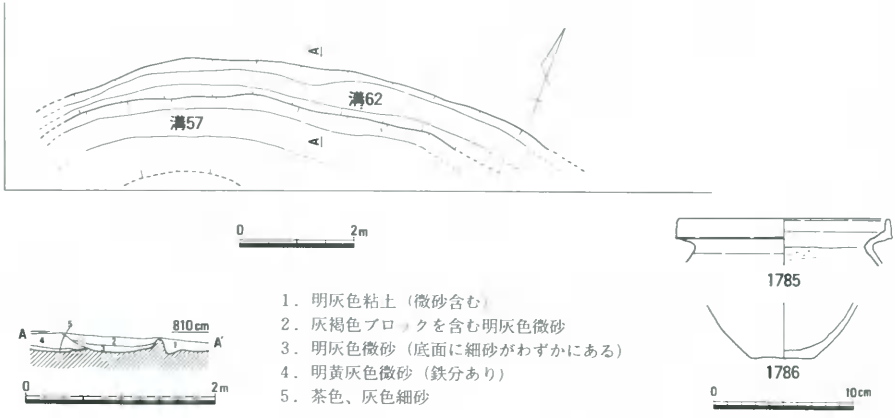
遺物は前期から後期の土器・石器を含むが、溝55・61との関係から後期後葉とみてよい。石器のうち**Ｓ362**は頁岩系の磨製石剣と思われるが、半面が剝離して部分的にしか磨面が看取されない点や基部の抉りとは別に中央上部に打ち欠いた抉りがみられる点などから、制作中に破損したため短剣あるいは石槍に転用した可能性が強い。（柳瀬）



第448図　溝56出土遺物（1/2）

溝57（第449図）

ＪＯ区南西隅で検出された流路を東西にとる溝である。後述する溝62と重複し、北側の立ち上がりが切られているため幅は不明である。第449図断面図の４・５層が相当する層位であり、２・３層は溝62にあたる。埋土は灰色を基調とした微砂・細砂であり、特に４層には鉄分の沈着が見られた。図示した出土遺物は、甕の口縁部と底部である。溝の時期は弥生時代後期末葉と考えている。（大橋）



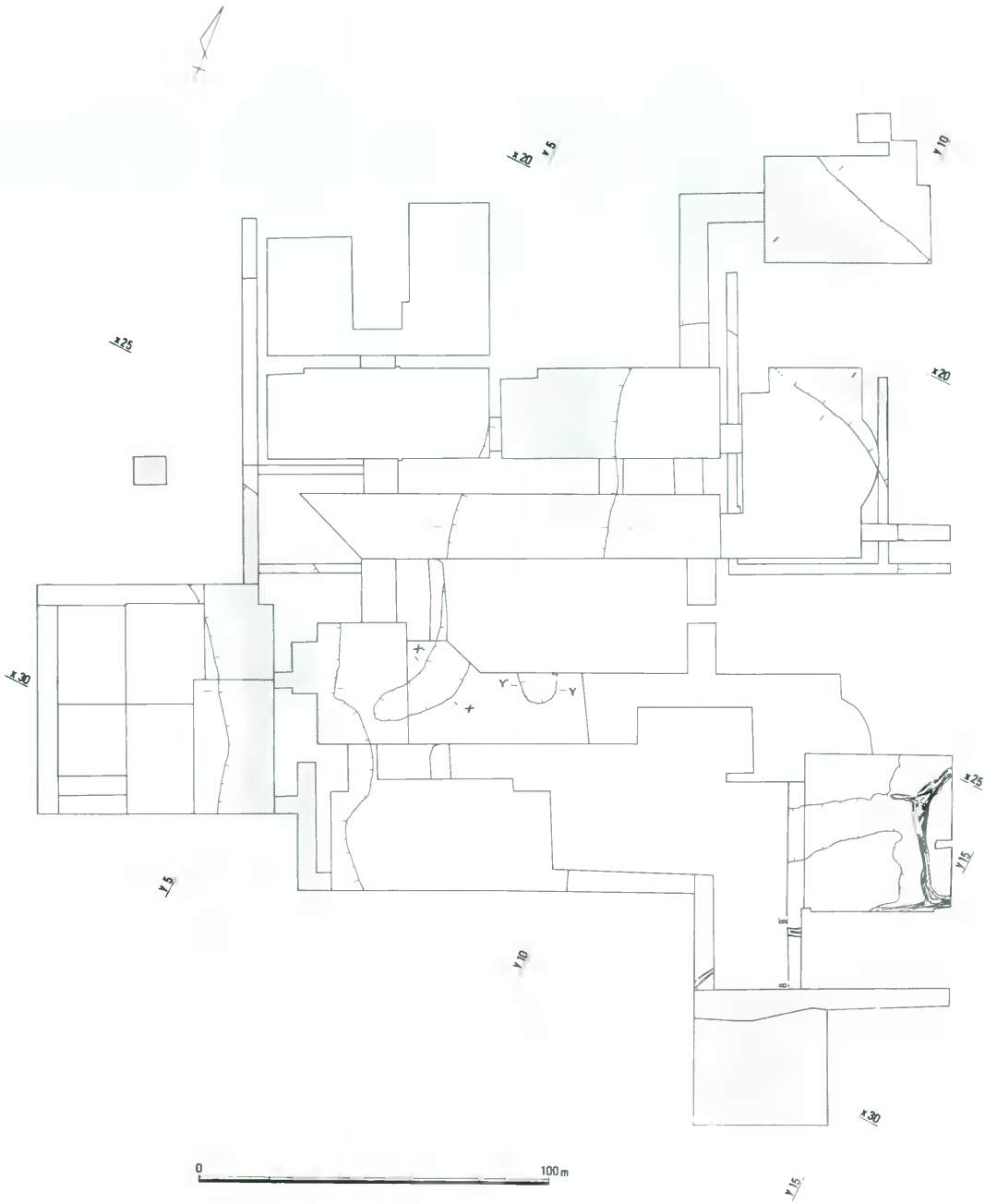
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1785	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙　5YR7/3	
1786	弥生土器	甕	胴部、底部ミガキ？	胴部ケズリ	黒　10YR2/1	

第449図　溝57（1/100）・出土遺物（1/4）

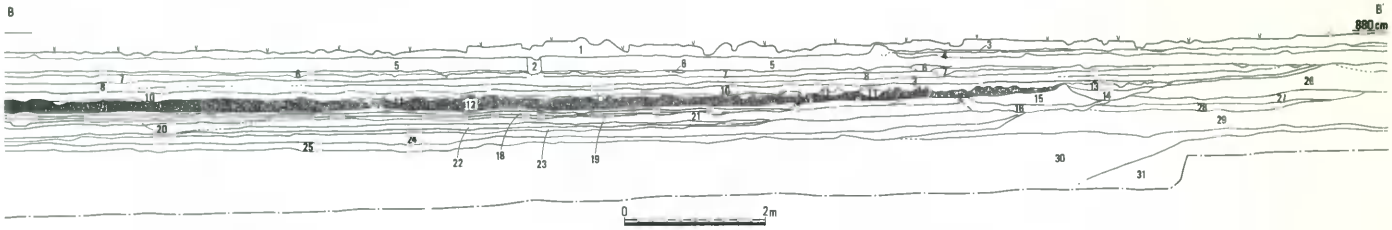
(8) 水　　田

水田２・３・４・５・６・７（第450～456図）

河道１・２および第２～４低位部では、水平堆積層が複数枚確認されており、当初から水田の可能性を考えて調査を進めていたが畦畔等の直接的な証拠は検出されなかった。しかしプラント・オパール分析を実施したところ、稲作の行われていた可能性が高いという報告をうけ、それらを水田として認定した。分析に出した土壌は第２低位部南端にあたるＫＹ２区、第３低位部北端のＥＮ区中央および同南端のＨ16区中央、旧河道２にあたるＪＯ区中央において採取している。詳しい結果は付載５・６にゆずるが、これら水田と判断された堆積層の下位にあたる層から水田２、３、４、５、６、７とした。また河道１上をＡ地区、第２低位部上をＢ地区、第３低位部上をＣ地区、第４低位部上をＤ地区と仮称して、記述を進めることとする。水田２はＤ地区のＨ17区北壁採集試料を基準とする。資料採集地点の断面図はないが第451図の24層に対応する。底面の海抜高は7.2ｍを測る。断面図をみるかぎりでは低位部肩口に沿った狭い範囲にのみ存在し、全面には拡がらない可能性も考えられる。時期は、ＪＯ区東壁において対応する層の上面から河道２が掘削され、また直下の25層から弥生時代前期中葉の土器が出土していることから前期後半から中期前半の間に堆積した層と考えられる。水田３もＨ17区北壁を基準としており、第451図の21層に対応する。レンズ状に堆積しており、底面の海抜高は肩部で約7.7ｍ、最も低い所で約7.3ｍを測る。平面的な拡がりや他の調査区との対応関係はよく判らなかった。遺物は出土していないが、15・16層が溝50にあたるので、弥生時代中期前半～後期前半以前に堆積したと考えられる。水田４は第277図の16層を基準としている。底面の海抜高は7.5～7.7ｍを測る。時期は、遺物が出土していないが、20層以下が弥生時代前期の包含層であり、３層は古墳時代前期前葉の水田層であることから、その間のある時期に営まれたとしか言えない。水田５は同断面図の14層を基準とする。底面の海抜高は最も低い所で約7.8ｍを測る。この層に対応する層は各地区で確認されており、広域に拡がっていたと考えられる。第450図には水田５が分布していると予想される範囲をトーンをかけて示した。時期は、Ｄ地区では旧河道２の上層にあたり、弥生時代後期前半の溝に切られていることから、弥生時代中期後半～後期前半の間で考えることができる。水田６は水田５直上の13層を基準としている。底面の海抜高は約８ｍを測る。Ａ地区においてのみ対応する層を確認している。時期は遺物がないので水田５より新しく水田７より古いとしか言えず、弥生時代中期後半～後期に埋没したと考えられる。水田７は同断面図の４層を基準とする。プラント・オパールの密度は同地点で採取した試料中最も高い。Ａ・Ｃ地区では対応する層を確認している。底面の海抜高は7.9～8.0ｍで、どの地区においても肩口は微高地上にまで拡がっており、この時期に水田域が急激に拡大されたと想定される。Ｄ地区では直接対応する層が確認されなかったが、直上の水田８および直下の水田６を合わせた３層は灰白色～淡灰色の粘質土で色、質ともに似ており、部分的には単一に見える所もあるので、後述するＤ地区水田８が複数の水田層に分層される可能性が考えられる。またＡ地区やＣ地区で確認された水田６から水田８までの堆積状況は、Ｂ地区南端にあたるＫＹ２・３区の堆積状況に似ており、第453図の３層が水田６に、２層が水田７にあたる可能性が高い。第455図の遺物はＡ地区水田７から出土しており、ＫＹ２区２・３層から出土した遺物と時期的にも矛盾はない。弥生時代後期後葉に属するもので後述する水田８との時期差はあまりなく、連続的に営まれた可能性が考えられる。第456図の石製品や土製品はＣ・Ｄ地区から出土したもので水田５～７のいずれに伴うかはよくわからなかった。（久保）

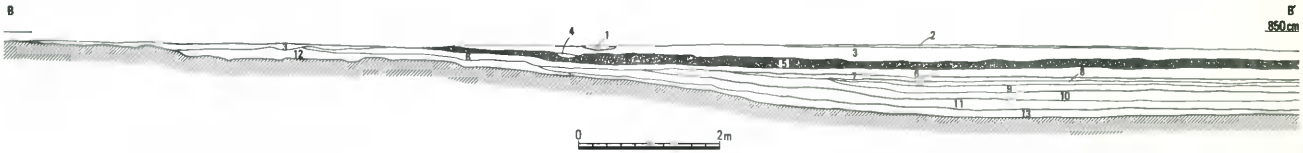


第450図　弥生時代水田全体図（1/1500）



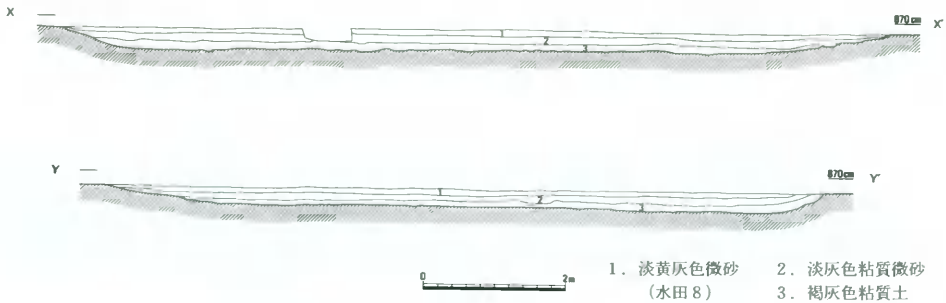
1．暗灰色粘質土（現水田耕土）
2．暗渠
3．Fe層
4．褐灰色粘質土（近世）
5．黄灰白色粘質土（近世）
6．灰白色粘土（中世）
7．淡灰色粘土（古代）
8．淡黄灰色粘土（古代）
9．灰色粘土（古代）
10．黒灰色粘土
11．淡灰色粘土
12．灰白色粘土（水田８）
13．灰白色粘質土（溝60）
14．灰白色微砂（溝60）
15．淡灰色微砂（溝50）
16．暗褐灰色粘質土（溝50）
17．19．褐灰色粘土
18．黄灰白色粘質土
20．22．24．黄灰白色粘質土
21．淡褐灰色粘土
23．褐灰色粘土
25．暗灰色粘土
26．暗褐灰色粘質土
27．黄灰白色粘質土
28．黄褐灰色粘質土
29．淡褐灰色粘質土
30．淡灰黄色粘質土
31．淡黄色粘質土

第451図　H16区（D地区）土層断面図（1/80）

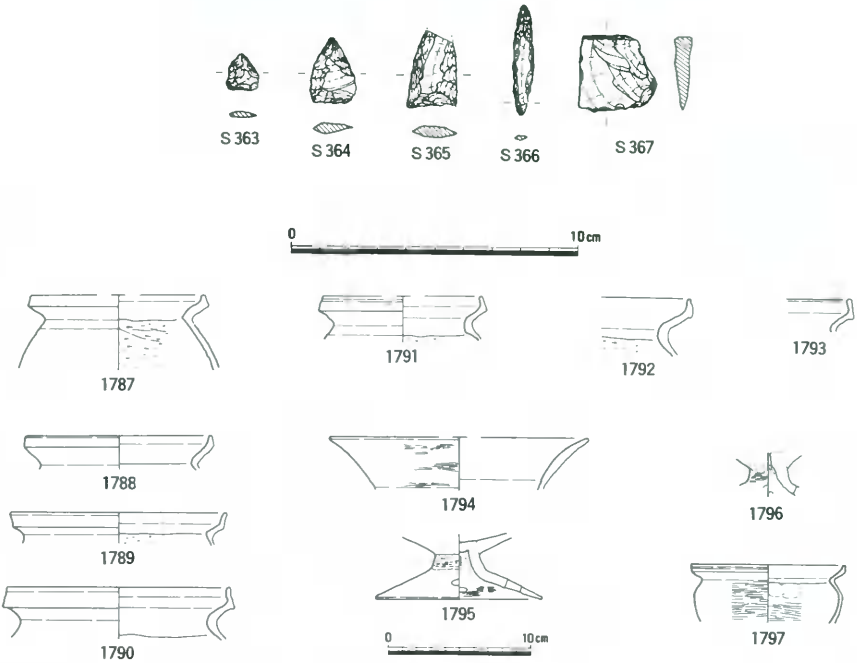


1．淡黄灰色粘質微砂
2．灰色粘質土
3．黒色粘土
4．淡暗灰褐色粘質微砂
5．灰褐色粘質微砂（水田８）
6．暗灰褐色粘質土
7．濃褐淡暗灰色粘質土
8．淡黒褐色粘質土
9．淡暗灰色粘質微砂
10．淡黒灰褐色粘土
11．黒灰色粘土
12．にぶい暗灰褐色粘質土
13．黒色粘土

第452図　ＦＵ区（Ｃ地区）土層断面図（1/80）

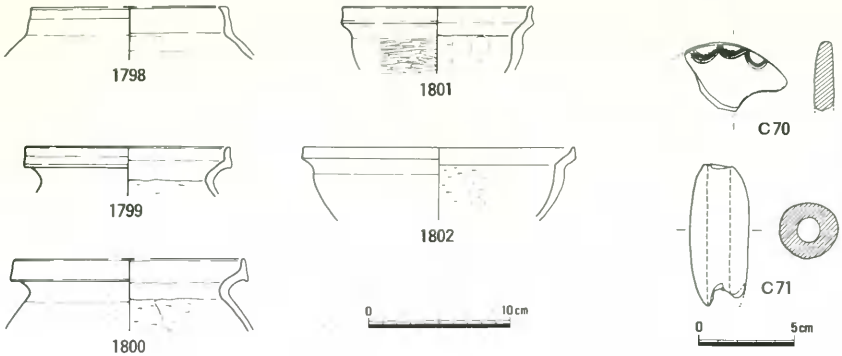


第453図　ＫＹ２区（Ｂ地区）土層断面図（1/80）



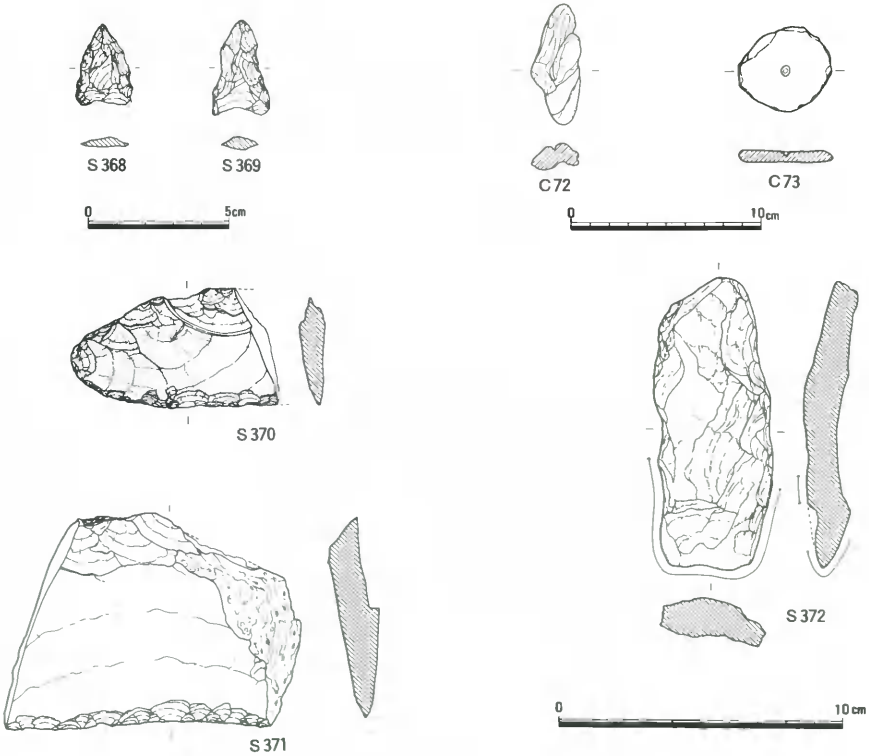
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1787	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ。	灰黄褐　10YR6/2	
1788	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	褐灰　10YR4/1	
1789	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙　10YR6/3	
1790	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	橙　7.5YR7/6	
1791	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙　10YR7/4	
1792	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙　10YR8/3	
1793	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1794	弥生土器	高杯	口縁部ミガキ。	口縁部ミガキ。	橙　5YR7/6-7/6	
1795	弥生土器	高杯	脚部面取り痕、ヨコミガキ。円形すかし孔４。	脚部ハケメ。	橙　2.5YR6/6	
1796	弥生土器	高杯	脚部面取り痕、ヨコミガキ。円形すかし孔。	脚部シボリ痕、ナデ。	橙　7.5YR7/6	
1797	弥生土器	鉢	口縁部内線、口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ミガキ。	にぶい黄橙　10YR7/4	

第454図　弥生時代水田層出土遺物（Ｂ地区）（1/2・1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1798	弥生土器	壺？	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	橙　5YR6/6	
1799	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白　10YR8/2	
1800	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白　10YR8/2	
1801	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリのちナデ？。	黒褐　7.5YR3/1	
1802	弥生土器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ？。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	浅黄橙　7.5YR8/4	

第455図　弥生時代水田層出土遺物（Ａ地区）（1/4・1/3）

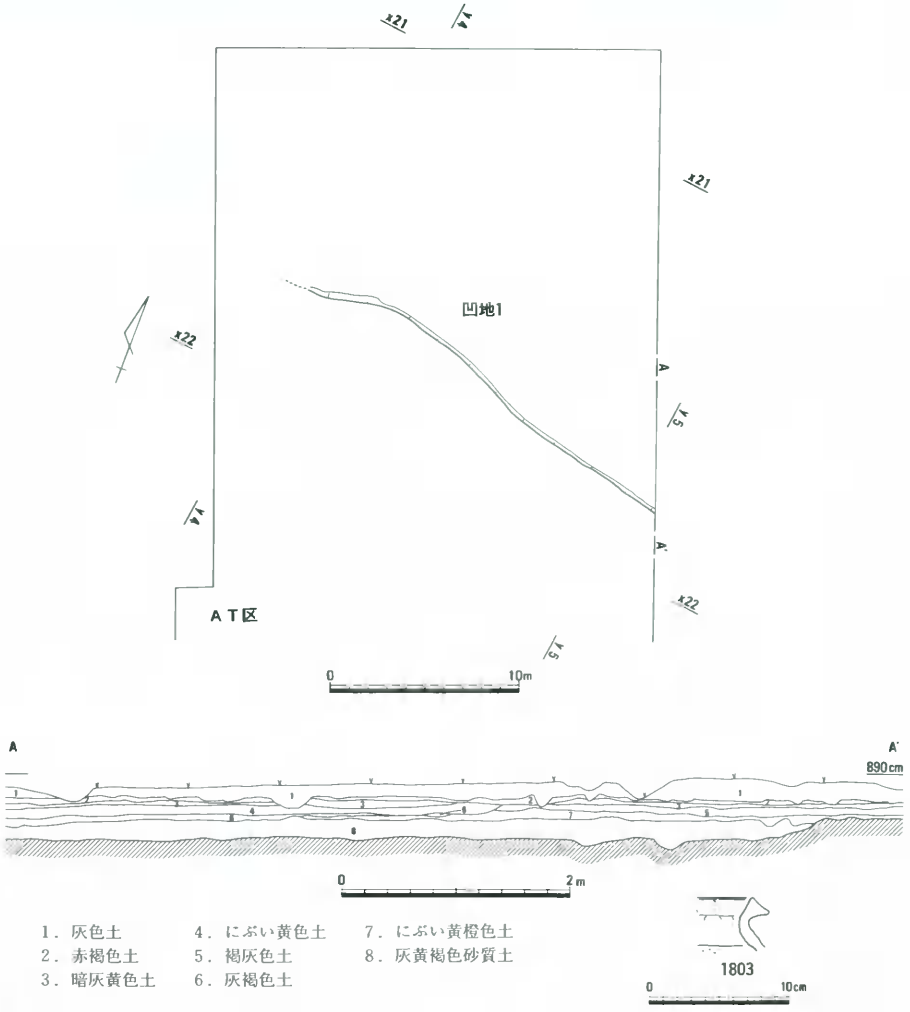


第456図　弥生時代水田層出土遺物（Ｃ・Ｄ地区）（1/2・1/3）

(9) 凹　　地

凹地１（第457図）

第２微高地(西)のＡＴ区北東部において検出された。もともと緩やかに北に傾斜していたと考えられる基盤層に、東西方向に約15cmの段を設け、その北側を平坦に削り出したもので、その海抜高は8.55ｍ前後である。調査区東側壁の観察によれば、この平坦面は段の北約15ｍまで続いていたと想定される。南端には溝７・８が掘られており、時期は弥生時代中期～後期の枠でとらえられる。（光永）

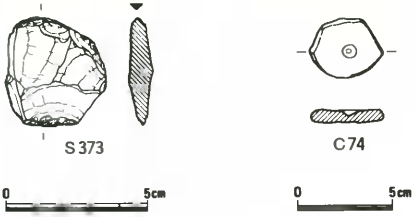


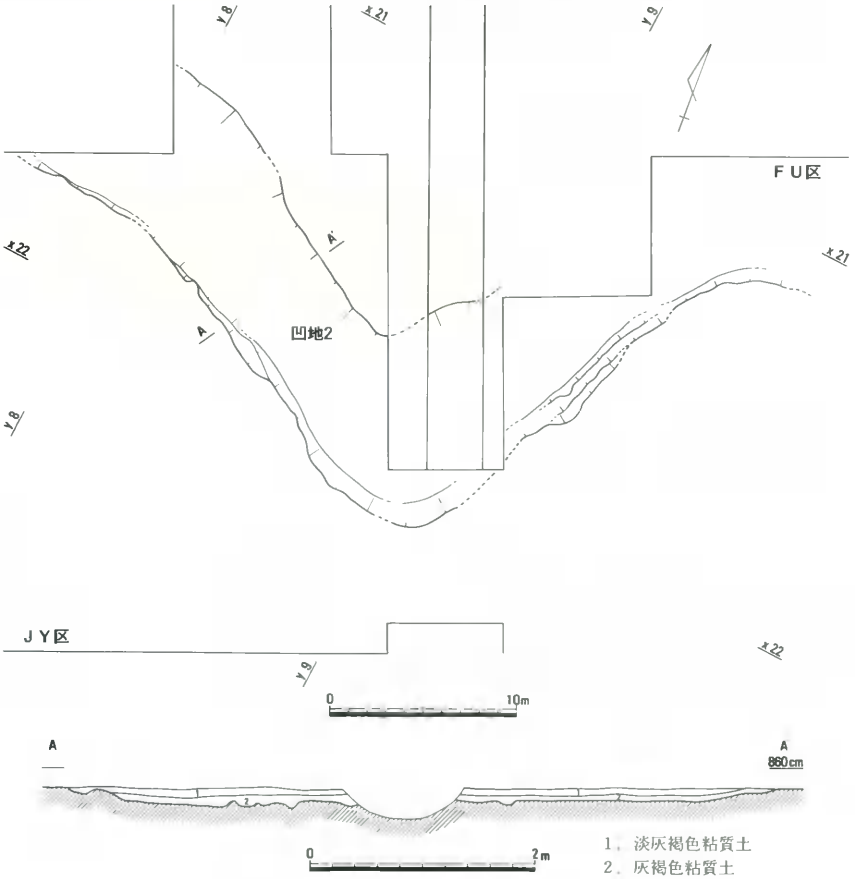
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1803	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ，胴部ケズリ	にぶい橙 7.5YR7/4	

第457図　凹地１(1/300・1/50)・出土遺物 (1/4)

凹地２（第458図）

第２微高地(東)北端に位置する。ＪＹ区の北東端からＫ２区でほぼ直角に向きを変えＦＵ区北西端にいたる。規模は幅６～８ｍ、深さ10～15cmを測る。側壁は皿状に緩く立ち上がるが、南端は若干急になっており、段を成す部分もある。褐灰色～灰白色粘質土によって埋没しているが、Ｃ地区の弥生時代水田層と考えられる層に対応する可能性が高く、また両肩口に沿って溝28～30が検出されているという状況は溝21～23と水田の関係を想起させるもので、この凹地も水田として利用された可能性が高い。未調査のため確認はできていないが第２低位部に営まれた水田にとりつく可能性もあり、西と東に拡がる水田域をつなぐものとなるかもしれない。埋土中からは弥生時代中期後葉～後期と考えられる土器片が出土しており、土層堆積状況からも矛盾がない。　（久保）





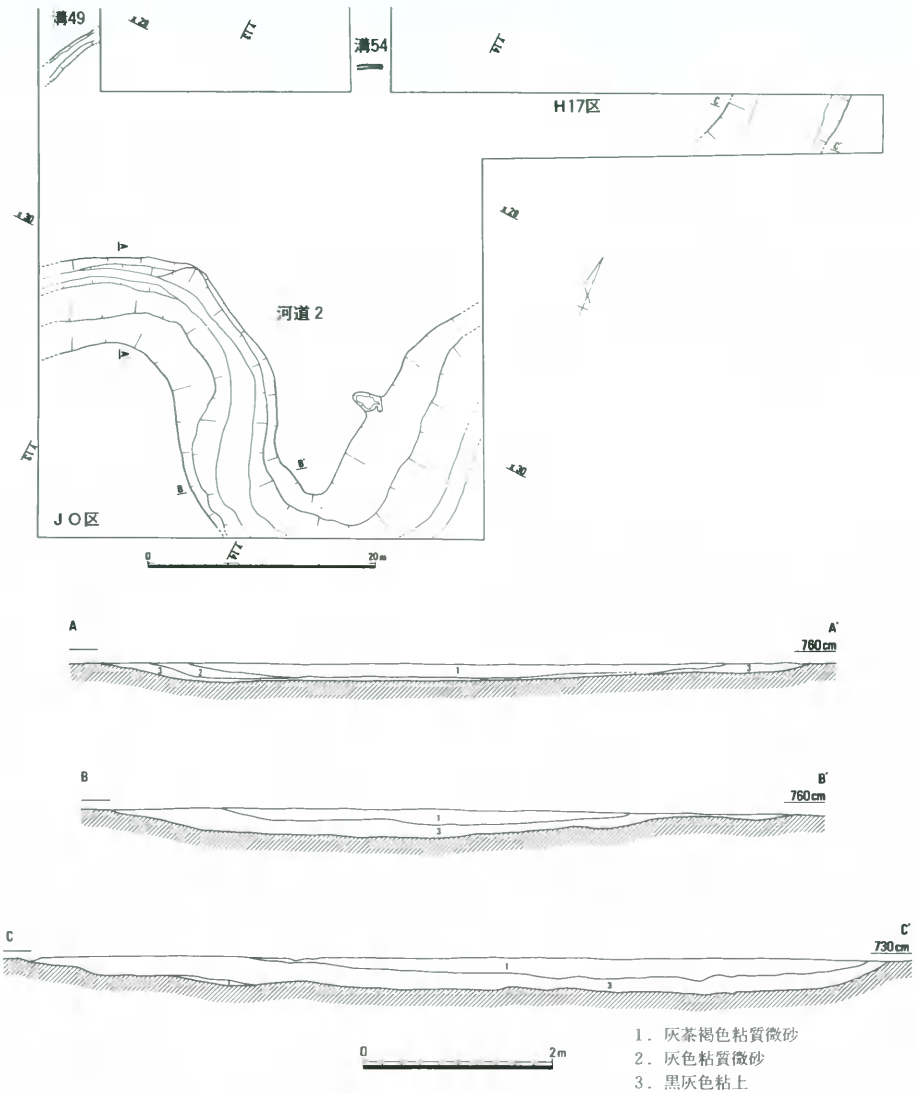
第458図　凹地２(1/300・1/50)・出土遺物（1/2・1/3)

⑽　河　　道

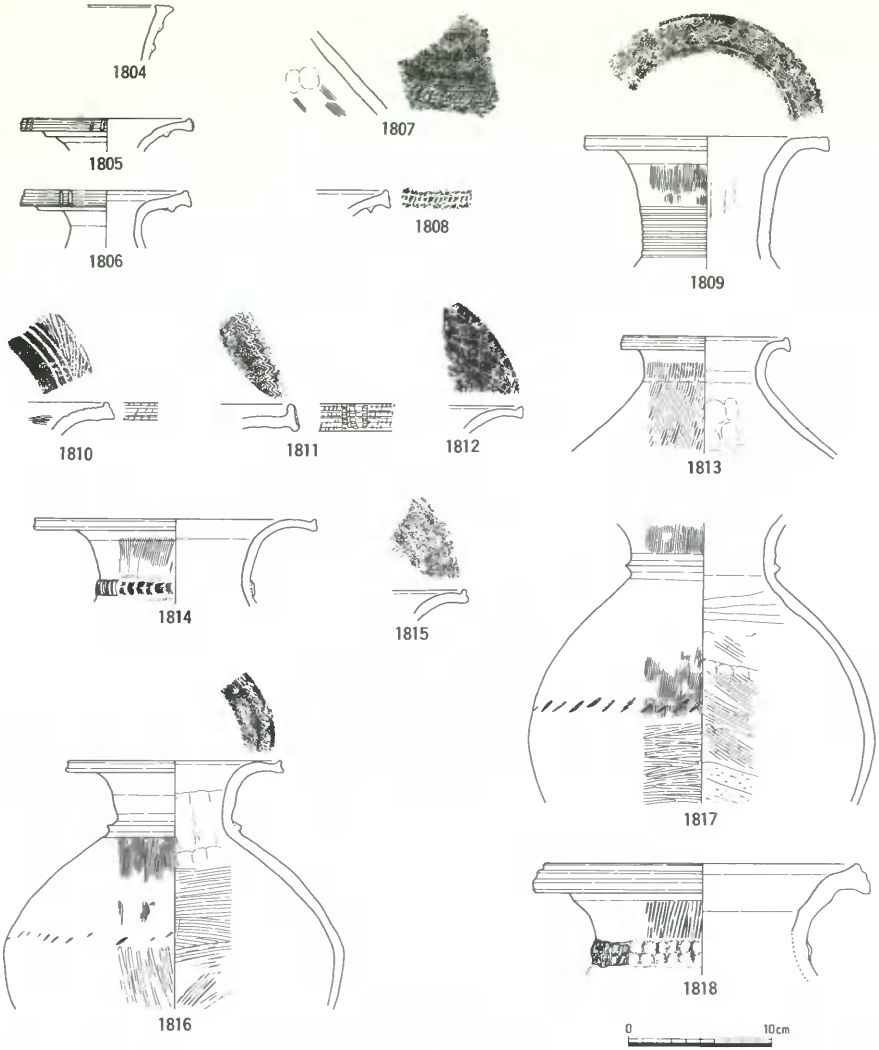
河道２（第459～468図）

前述したように、河道２は確認できる限りにおいては、縄文時代晩期に遡り、堆積が進行し弥生時代後期前葉段階には完全に埋没していたものと考えている。ここでは、弥生時代中期後葉から後葉段階の遺物を包含した層位について述べる。

河道の輪郭は前段階と同様であり、堆積過程の進行から、やや規模が小さくなるものの、大きくは

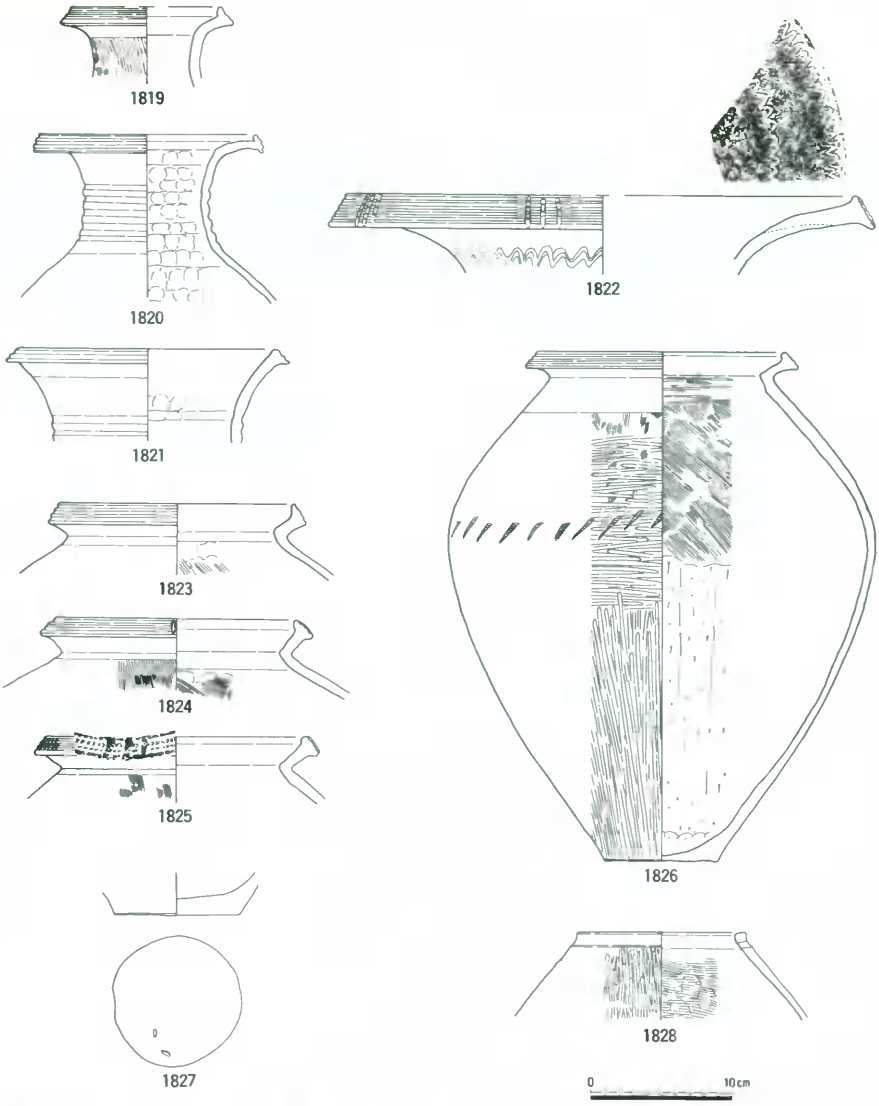


第459図　河道２（弥生時代中期中葉～後期）（1/500・1/60）



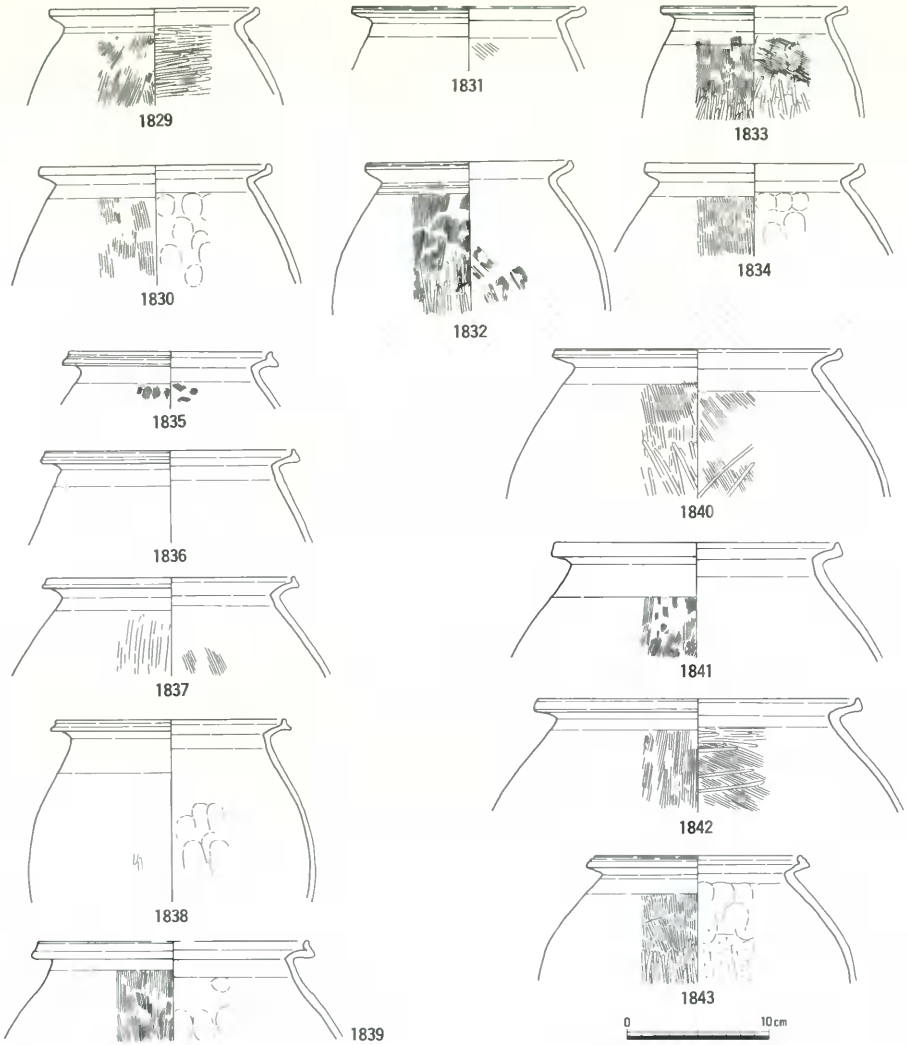
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1804	弥生土器	壺	口唇部凹線、口縁部貼付突帯。		にぶい赤橙　5YR5/4	
1805	弥生土器	壺	口唇部凹線、棒状浮文、口縁部貼付突帯　ミガキ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙　5YR7/4	
1806	弥生土器	壺	口唇部凹線、棒状浮文、口縁部貼付突帯　ミガキ。	口頸部ヨコナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1807	弥生土器	壺	クシ描き半行線文、波状文、刺突文、細かいハケメ。	ユビオサエ、ハケメ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1808	弥生土器	壺	口唇部凹線、刻目　口縁部貼付突帯。	口縁部ヨコナデ。	灰褐　7.5Y4/2	
1809	弥生土器	壺	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ　頸部ハケメのち凹線。	口縁部クシ描き波状文、頸部シボリ痕、ナデ。	明褐灰　7.5YR7/2	
1810	弥生土器	壺	口唇部凹線、刻目。口縁部ヨコナデ。	ヘラ描き沈線、刺突文、ミガキ。	明褐灰　7.5YR7/2	
1811	弥生土器	壺	口唇部凹線、棒状浮文、刻目。口縁部ヨコナデ。	クシ描き波状文。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1812	弥生土器	壺	口縁部ミガキ。	ヘラ描き斜格子文、ミガキ。	褐灰　10YR6/1	
1813	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。頸部、胴部ハケメ。	口頸部ヨコナデ。胴部ユビオサエ。	灰白　5Y8/2	
1814	弥生土器	壺	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ、貼付刻目突帯。	口縁部ヨコナデ。	灰黄褐　10YR6/2	
1815	弥生土器	壺	口縁部ヨコナデ。	クシ描き波状文。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1816	弥生土器	壺	口唇部凹線、口頸部ヨコナデ、貼付突帯。胴部上半ハケメ、刺突文、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。頸部ユビオサエ、ナデ。胴部ハケメ。	黒褐　10YR3/1	
1817	弥生土器	壺	頸部ハケメ、貼付突帯　胴部上半ハケメ、刺突文。下半ミガキ。	頸部ナデ　胴部上半ナデ、ハケメ、下半ケズリ。	灰白　10YR8/2	外面煤
1818	弥生土器	壺	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ、貼付刻目突帯。	口縁部ヨコナデ。頸部ナデ。	灰白　10YR8/2	

第460図　河道２出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉１）（1/4）



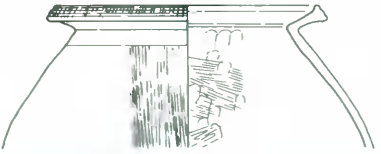
挿図番号	種別	器種	特徴		色調	備考
			外面	内面		
1819	弥生Ⅰ器	壺	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。	浅黄橙　7.5YR8/4	
1820	弥生Ⅰ器	壺	口唇部凹線、口頸部ヨコナデ、頸部凹線。	頸部、胴部ユビオサエ、ナデ。	灰白　2.5Y8/2	
1821	弥生Ⅰ器	壺	口唇部凹線、頸部凹線、ミガキ？。	口縁部ヨコナデ、頸部ユビオサエ、ナデ	灰白　2.5Y8/2	
1822	弥生Ⅰ器	壺	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ、クシ描き波状文。	口縁部ヨコナデ。クシ描き波状文。	灰白　10YR8/1	
1823	弥生Ⅰ器	甕	口唇部凹線、刻目、口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ？	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ハケメ。	にぶい褐　7.5YR5/4	
1824	弥生Ⅰ器	甕	口唇部凹線、棒状浮文、口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエ、ハケメ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1825	弥生Ⅰ器	壺？	口唇部凹線、棒状浮文、刻目　口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙　5YR7/4	
1826	弥生Ⅰ器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ。胴部ハケメのちミガキ、刺突文。	頸部ミガキ　胴部上半ハケメ、下半ケズリ。	にぶい黄橙　10YR7/3	
1827	弥生Ⅰ器	壺	ナデ。		灰白　7.5YR8/2	底部外面剥痕２
1828	弥生Ⅰ器	壺	口縁部ヨコナデ、穿孔。胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	浅黄　7.5YR8/3	

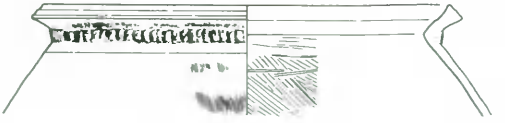
第461図　河道２出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉２）（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1829	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ	にぶい橙　7.5YR7/4	胴部上半籾痕１
1830	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ナデ	灰白　2.5Y8/2	外面煤
1831	弥生土器	甕	口唇部沈線、口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ？。	にぶい橙　5YR7/4	
1832	弥生土器	甕	口唇部沈線、口縁部ヨコナデ、胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	橙　2.5YR6/6	
1833	弥生土器	甕	口唇部沈線、口縁部ヨコナデ、胴部上半ハケメ、下半ミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部上半ハケメ、下半ミガキ	にぶい橙　5YR4/1	外面煤
1834	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1835	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	黄灰　2.5Y6/1	
1836	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ、胴部粗いハケメ？。	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ？。	灰白　10YR8/2	
1837	弥生土器	甕	口唇部凹線？。口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ、ハケメ	灰白　2.5Y7/1	
1838	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ？。	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ナデ。	灰白　2.5Y8/2	外面煤。
1839	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ナデ	灰白　2.5Y8/2	
1840	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ、胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメのちミガキ	灰黄褐　10YR6/2	
1841	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ナデ。	灰黄　2.5Y7/2	
1842	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメのちミガキ	浅黄橙　7.5YR8/4	
1843	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ、胴部ハケメのちミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部上半ユビオサエ、ナデ、下半ケズリ	灰白　2.5Y8/2	外面煤

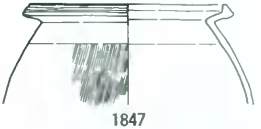
第462図　河道２出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉３）（1/4）

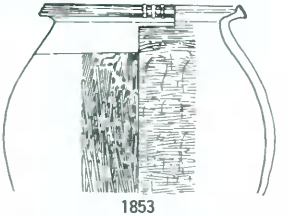

1844

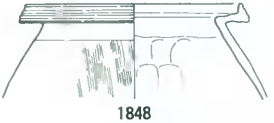

1845

1846

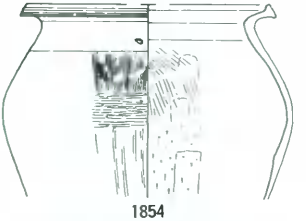
1852

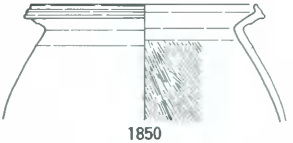

1847

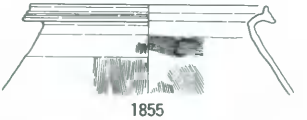

1853

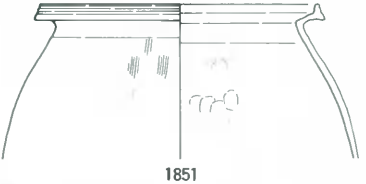

1848

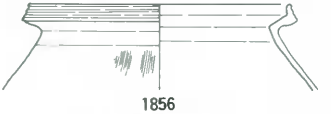
1849


1854


1850


1855

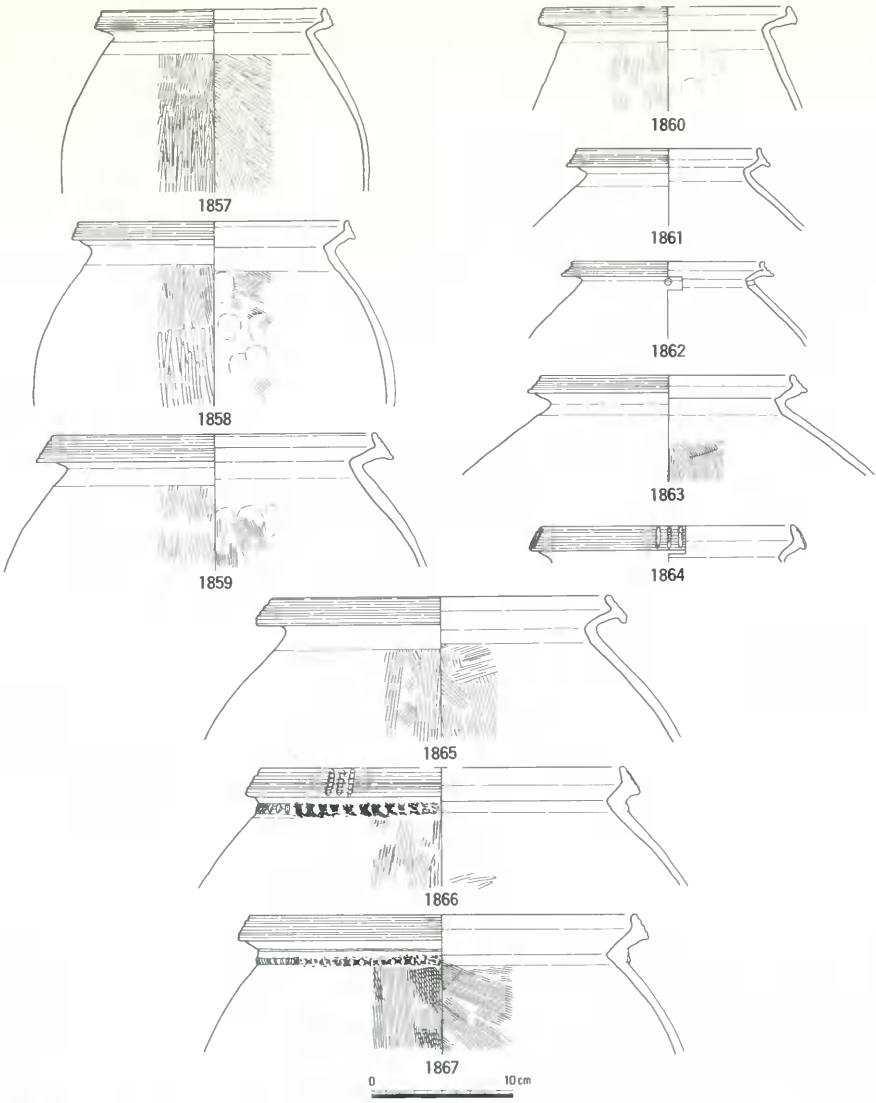

1851


1856

0　10cm

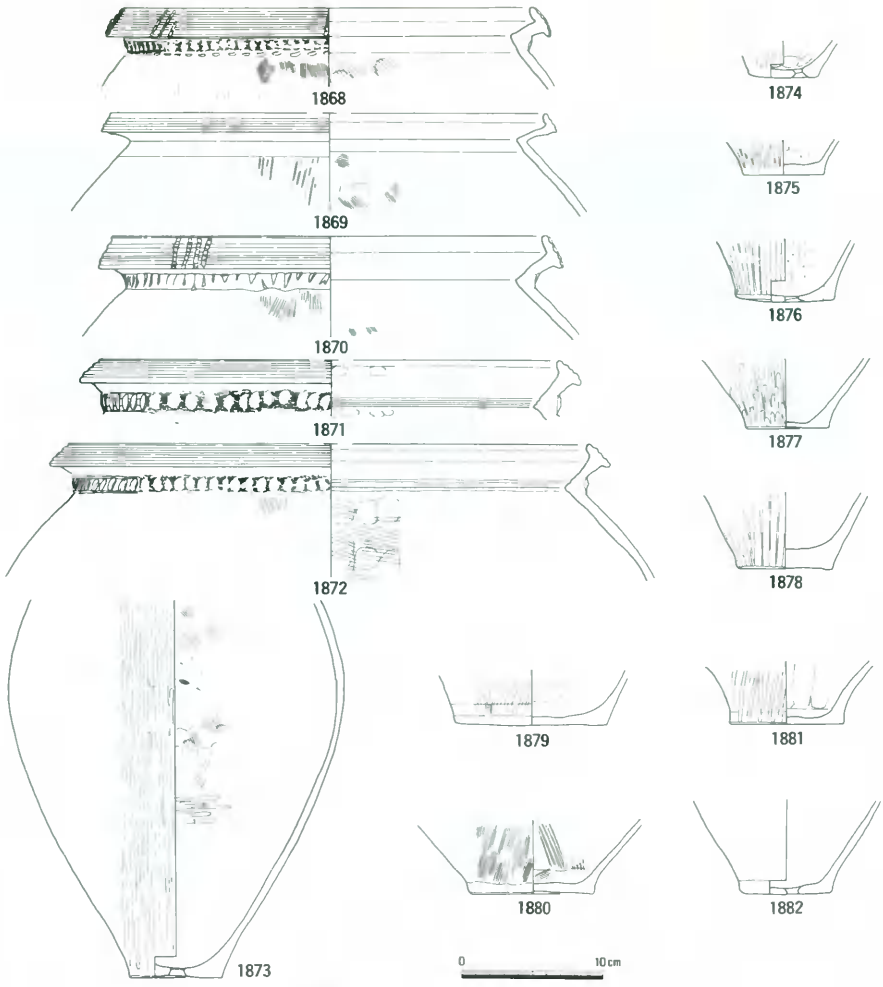
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1844	弥生土器	甕？	口唇部凹線、刻目　口縁部ヨコナデ　胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ　胴部ユビオサエ、ナデ、ハケメ。	灰白　7.5YR8/1	
1845	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部貼付刻目突帯　胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメのちミガキ。	褐灰　7.5YR4/2	外面煤。
1846	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ　胴部ユビオサエ、ハケメ。	灰黄　2.5Y7/2	外面煤。
1847	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	灰黄褐　10YR5/2	
1848	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ　胴部ユビオサエ、ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/2	外面煤。
1849	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ　胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ　胴部ユビオサエのちナデ。	灰黄　2.5Y7/2	
1850	弥生土器	甕	口唇部凹線　口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ？。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	灰白　10YR7/1	外面煤。
1851	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ　胴部ハケメ、ミガキ？。	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ナデ。	灰黄　2.5Y7/2	外面煤。
1852	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ　胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ　胴部ハケメ。	灰黄　2.5Y7/2	
1853	弥生土器	甕	口唇部凹線、棒状浮文。口縁部ヨコナデ　胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ。頸部ハケメ　胴部下半ケズリのちミガキ。	灰褐　7.5YR6/2	外面煤。
1854	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ　胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半ケズリ。	灰白　10YR8/1	胴部上半赤彩？
1855	弥生土器	甕	口唇部凹線　口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	灰黄　2.5Y6/2	
1856	弥生土器	甕	口唇部凹線　口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ　胴部ユビオサエ、ナデ。	黄褐　2.5YR6/3	

第463図　河道２出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉４）（1/4）



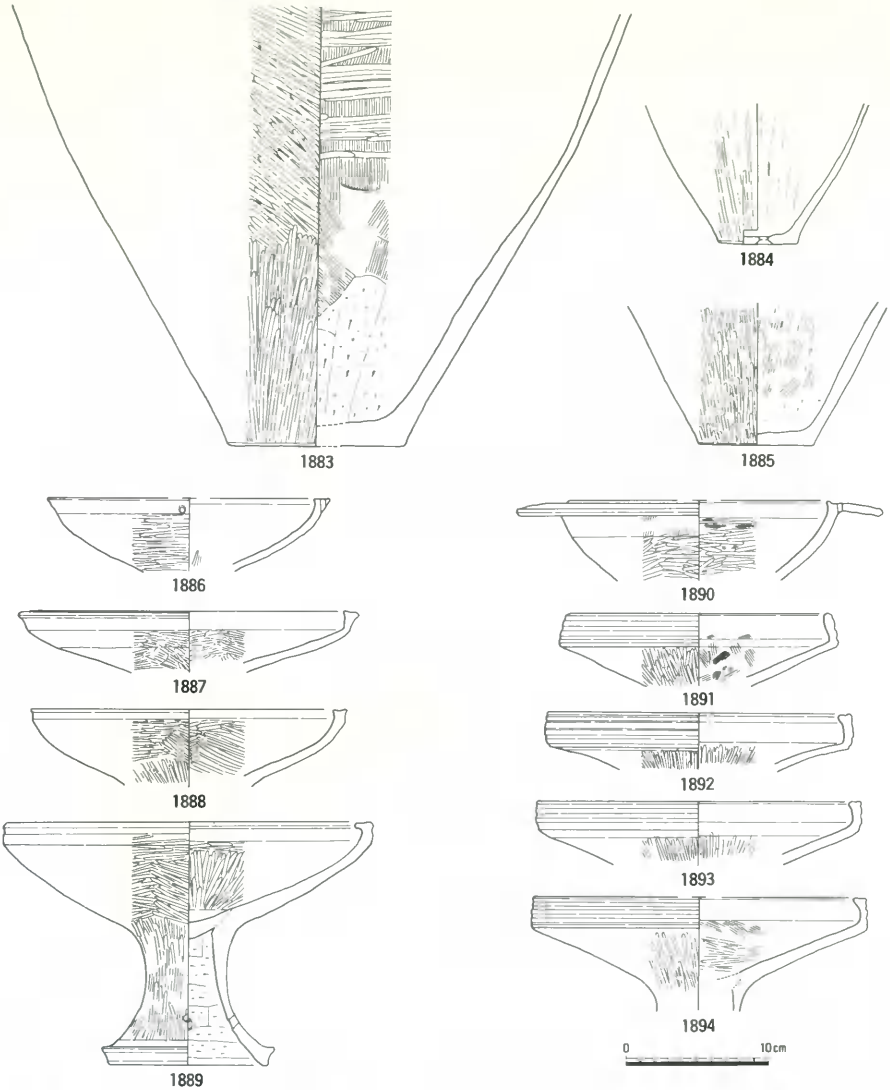
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1857	弥生土器	壺	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ、胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部粗いハケメ	淡黄　2.5Y8/3	外面煤
1858	弥生土器	壺	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ、胴部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ナデ、ハケメ	灰白　10YR8/1	外面煤。
1859	弥生土器	壺	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ。胴部粗いハケメ。	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ナデ、ハケメ	浅黄　2.5Y7/3	
1860	弥生土器	壺	口唇部沈線、口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ナデ。	灰白　2.5Y7/1	
1861	弥生土器	壺	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ？	灰白　5Y8/2	
1862	弥生土器	壺	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ、穿孔。	口縁部ヨコナデ	淡黄橙　7.5YR8/3	
1863	弥生土器	壺	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	にぶい黄橙　10YR7/2	
1864	弥生土器	壺	口唇部凹線、棒状浮文。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	灰白　2.5Y8/2	
1865	弥生土器	壺	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ。	灰黄　2.5Y7/2	
1866	弥生土器	壺	口唇部凹線、口縁部貼付刻目突帯、ヨコナデ、胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ、胴部ミガキ？	灰白　10YR8/2	外面煤
1867	弥生土器	壺	口唇部凹線、口縁部貼付刻目突帯、ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	灰黄褐　10YR4/2	

第464図　河道２出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉５）（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1868	弥生土器	甕	口唇部凹線、棒状浮文、口縁部貼付刻目突帯、ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	灰白　2.5Y8/1	
1869	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエのちハケメ	にぶい黄橙　10YR7/2	
1870	弥生土器	甕	口唇部凹線、棒状浮文、口縁部貼付刻目突帯、ヨコナデ、胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	灰白　10YR8/1	
1871	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部貼付刻目突帯、ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、沈線２本	灰白　2.5Y8/2	
1872	弥生土器	甕	口唇部凹線、口縁部貼付刻目突帯、ヨコナデ、胴部ハケメ、ミガキ。	口縁部ヨコナデ、沈線、胴部粗いハケメ	灰白　2.5Y8/2	外面煤
1873	弥生土器	甕	胴部ミガキ、底部焼成後穿孔。	胴部ケズリのちハケメ、ミガキ	灰黄　2.5Y7/2	胴部内面剥離。
1874	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ。	ナデ？。	褐灰　10YR4/1	焼成後穿孔。
1875	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ。	胴部ケズリ？。	灰白　10YR7/1	
1876	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ。	胴部ケズリ。	黄灰　2.5Y6/1	焼成後穿孔。
1877	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ。	胴部ケズリ？。	明褐灰　5YR7/2	
1878	弥生土器	甕	胴部ミガキ、底部ナデ。		黄橙　10YR7/3	
1879	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部側面ヨコナデ。底部ナデ。	胴部ケズリ。	灰黄褐　10YR4/2	外面煤。
1880	弥生土器	壺	胴部ハケメ	胴部ハケメ	灰白　7.5YR7/2	
1881	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ユビオサエのちナデ？。	胴部ナデ。	橙　5YR6/6	外面煤。
1882	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ。		灰　5Y4/	焼成後穿孔。

第465図　河道２出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉６）（1/4）

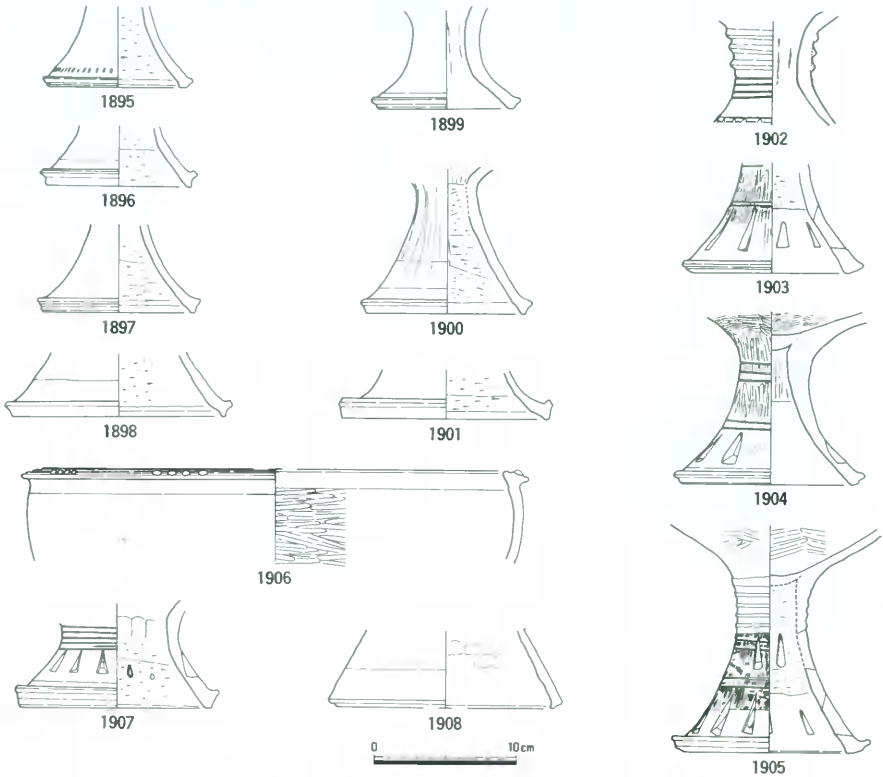


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1883	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ミガキ	胴部ケズリのちハケメのちミガキ	にぶい黄橙　10YR7/2	
1884	弥生土器	甕	胴部ミガキ。	胴部ナデ	にぶい褐　7.5YR6/3	焼成後穿孔。
1885	弥生土器	甕	胴部ミガキ。	胴部ケズリのち粗いハケメ	灰白　10YR8/1	外面煤
1886	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ、穿孔、杯部ミガキ	口縁部ヨコナデ、杯部ミガキ	橙　7.5YR7/6	
1887	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ、杯部ミガキ。	灰白　2.5Y8/2	
1888	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ、杯部ミガキ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1889	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ、杯部ミガキ、脚部ハケメのちミガキ、円形すかし孔。	口縁部ヨコナデ、杯部ミガキ、脚部ケズリ	灰白　2.5Y8/2	
1890	弥生土器	高杯	口縁部ヨコナデ、穿孔、杯部ハケメのちミガキ。	口縁部ヨコナデ、杯部ハケメのちミガキ	褐灰　5YR5/1	
1891	弥生土器	高杯	口縁部凹線、ヨコナデ、杯部ミガキ	口縁部ヨコナデ、杯部ハケメのちミガキ	にぶい黄橙　10YR7/2	
1892	弥生土器	高杯	口唇部凹線、口縁部凹線、ヨコナデ、杯部ミガキ。	口縁部ヨコナデ、杯部ミガキ。	橙　5YR7/6	
1893	弥生土器	高杯	口唇部凹線、口縁部凹線、ヨコナデ、杯部ミガキ	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ	灰白　2.5Y8/2	
1894	弥生土器	高杯	口縁部凹線、ヨコナデ、杯部ミガキ	口縁部ヨコナデ、杯部ハケメ、ミガキ、脚部ケズリ	灰白　2.5Y7/1	

第466図　河道２出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉７）（1/4）

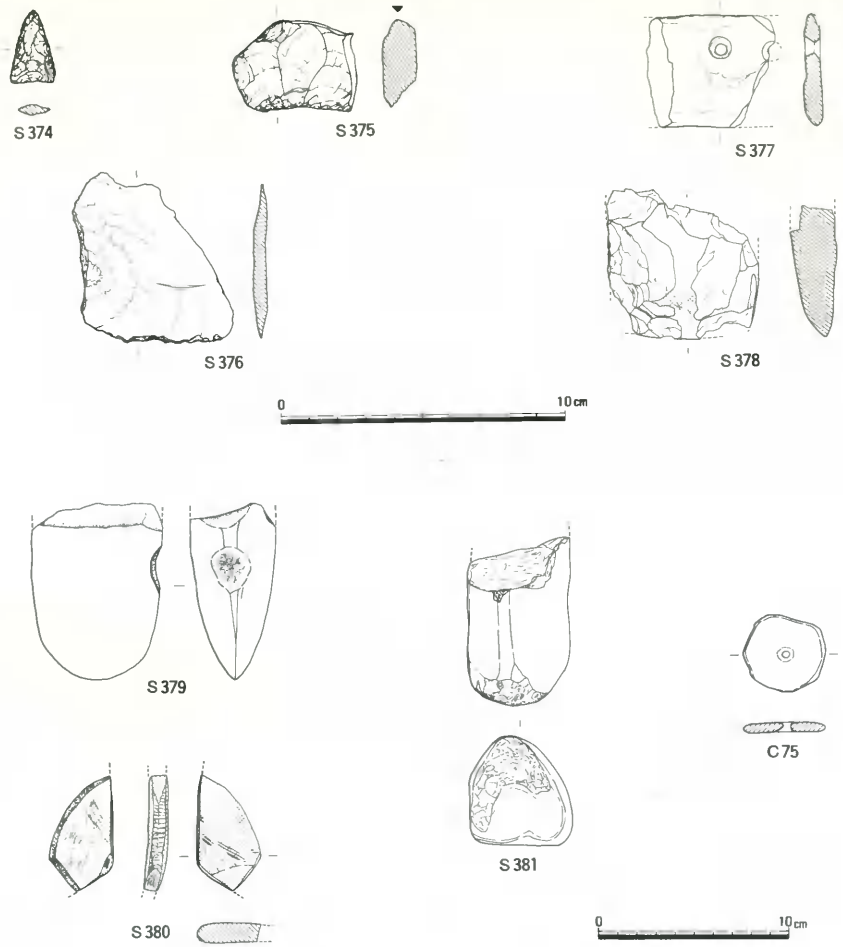
異ならない。検出面から確認できた深さは、30～40cmほどであり、海抜高にして、7.3m付近で底と判断している。溝底には、炭を多量に含んだ黒灰色粘土層（３層）が堆積し、その上位には灰色を基調とした微砂層（１層）がある。コンテナにして約50箱を超える多量の遺物が、この１～３層に集中していた。

図示した出土遺物は、比較的形状のわかるものに限った。1804～1826が壺、1828は無頸壺、1829～1872が甕、1886～1901が高杯、1906・1907が台付鉢、1902～1905は、高杯もしくは台付鉢の脚部であ



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1895	弥生土器	高杯	脚部刺突文。脚端部ヨコナデ。	脚部ケズリ。脚端部ヨコナデ	灰黄　2.5Y7/2	
1896	弥生土器	高杯	脚部ミガキ。脚端部ヨコナデ	脚部ケズリ。	灰白　2.5Y8/2	
1897	弥生土器	高杯	脚端部凹線、ヨコナデ	脚部ケズリ。脚端部ヨコナデ	灰黄　2.5Y7/2	
1898	弥生土器	高杯	脚部ナデ。脚端部ヨコナデ、沈線。	脚部ケズリ。脚端部ヨコナデ	灰白　2.5Y8/2	
1899	弥生土器	高杯	脚端部凹線、ヨコナデ	脚部シボリ痕。脚端部ヨコナデ。	灰白　10YR8/1	
1900	弥生土器	高杯	脚部ミガキ？　脚端部ヨコナデ	脚部ケズリ。脚端部ヨコナデ	灰白　5Y8/2	円盤充填
1901	弥生土器	高杯	脚端部ヨコナデ	脚部ケズリ。	灰白　2.5Y8/1	
1902	弥生土器	高杯？	脚部貼付突帯、ヘラ描き沈線、すかし孔	脚部シボリ痕、ナデ。	にぶい橙　7.5YR7/3	
1903	弥生土器	高杯？	脚部ヘラ描き沈線、ミガキ、すかし孔。脚端部凹線	脚部上半ケズリ、下半ヨコナデ。	灰黄　2.5Y6/2	
1904	弥生土器	高杯？	杯部ミガキ。脚部ヘラ描き沈線、ミガキ、すかし孔	杯部ミガキ。脚端部ヨコナデ。	褐灰　5YR6/1	
1905	弥生土器	高杯？	杯部ミガキ。脚部凹線、ヘラ描き沈線、ハケメ、すかし孔。脚端部凹線。	杯部ミガキ。脚部上半ケズリ、下半ヨコナデ	浅黄　2.5Y7/3	
1906	弥生土器	台付鉢	口唇部凹線、円形浮文。口縁部ヨコナデ。胴部ミガキ	口縁部ヨコナデ。胴部ヨコミガキ	灰白　10YR8/1	
1907	弥生土器	台付鉢	脚部ヘラ描き沈線、すかし孔。脚端部凹線、ヨコナデ	脚部ケズリ。	灰白　10YR7/1	
1908	弥生土器	？	ヨコナデ、ナデ	ユビオサエ、ミガキナデ	灰白　2.5Y8/2	上下不明

第467図　河道２出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉８）（1/4）



第468図　河道２出土遺物（弥生時代中期中葉～後葉９）（1/2・1/3）

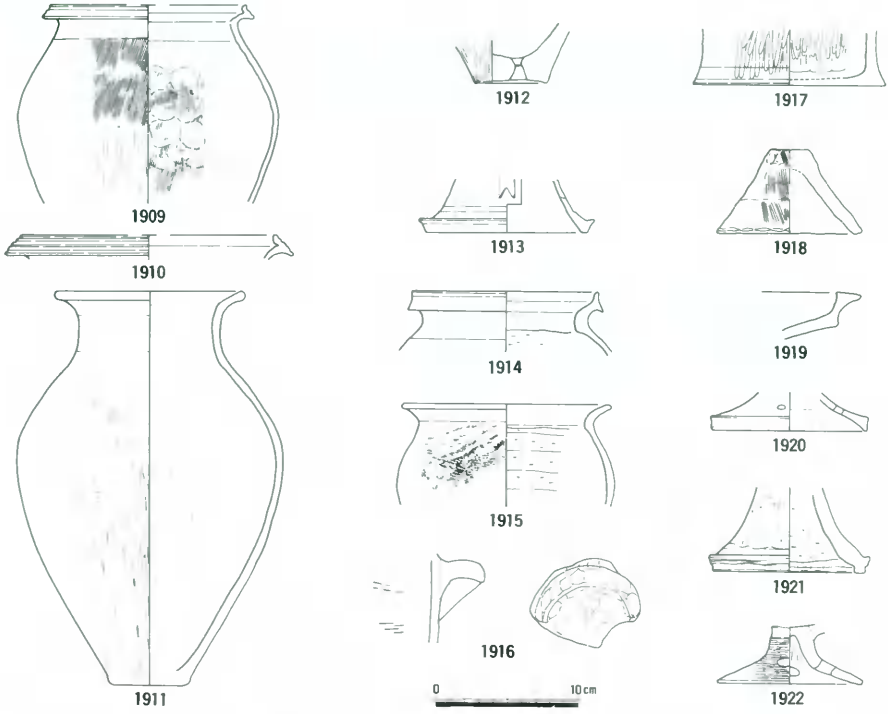
り、**1908**は同じく脚部と考えられるが器種・器形は不明である。なお、壺および甕の底部として**1827**・**1873**～**1885**を図化しており、うち**1827**には、米粒圧痕が見られる。石器は７点図示したが、全体量としては少ない。その他に土製紡錘車（**C 75**）がある。

図示した出土遺物で見るように、この中には弥生時代後期後葉のものは無く、河道２の流路は、ほぼこの段階には、消滅していたものと考えられる。また、開始段階は不明であるが、少なくとも古墳時代前期前葉には、河道２を含むこの低位部を利用して、水田が拡がっていると推測される。なお、河道２と同一と考えられる河道１については、ここで確認された弥生時代中期後葉から後期前葉の遺物を包含する層位は明らかではなく、堆積過程が異なっていたものと判断される。　（大橋）

(11)　その他の遺構・遺物（第469～478図）

これまで述べてきた遺構以外には、遺物の出土していない不整形な土壙や柱穴、溝状遺構などがある。また人為的かどうか明らかでない穴も多数見つかっている。なお今回報告する調査区は竪穴住居の残存状況で想定できるように、後世の削平が著しいため、柱穴や土壙のなかに竪穴住居や建物としてまとまる遺構が全く無いとは言い切れない。

遺物は土器、土製品、石器、石製品を図示した。このうち石器・石製品については、その多くが形状からは時期を特定できなかったため、前節までに記した縄文時代後期から弥生時代中期前葉までの確実な遺構、および包含層以外から出土した資料を掲載している。その多くは縄文時代晩期から中・近世に至る遺構の検出中および古墳時代以降の遺構から出土した石器、石製品である。

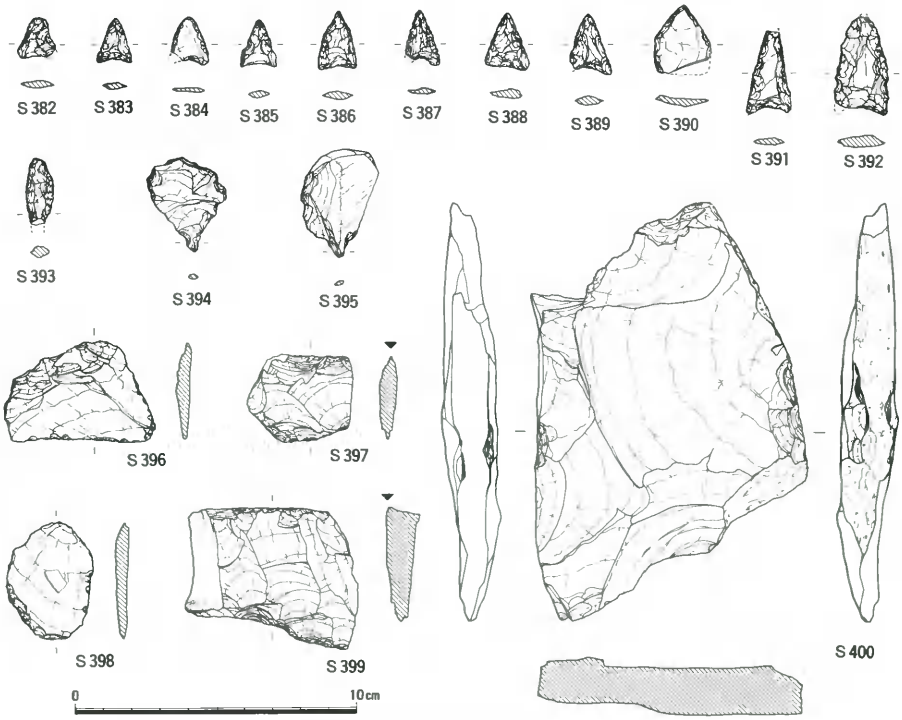


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1909	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ユビオサエのちハケメ。	灰褐　7.5YR5/2	
1910	弥生土器	甕	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	褐灰　7.5YR6/1	
1911	弥生土器	壺	口頸部ヨコナデ。胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口頸部ヨコナデ。胴部上半ユビオサエのちハケメ。下半ケズリ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1912	弥生土器	甕	胴部ミガキ。底部ナデ。	ナデ？。	明赤褐　5YR5/6	焼成後穿孔
1913	弥生土器	高杯	脚部矢羽模すかし孔。脚端部ヨコナデ。	脚端部ヨコナデ。	灰白　2.5Y8/1	
1914	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白　2.5Y8/2	
1915	弥生土器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部上半タタキ。下半ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白　2.5Y8/2	
1916	弥生土器	鉢？	把手ユビオサエ、ナデ。	ヨコハケメ。	褐灰　10YR4/1	
1917	弥生土器	鉢	胴部、底部ミガキ。	胴部ミガキ。	灰白　10YR8/2	ジョッキ形
1918	弥生土器	蓋？	ハケメ、ナデ。	ナデ。	灰黄　2.5Y7/2	
1919	弥生土器	高杯	口唇部凹線。口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。杯部ミガキ。	灰白　7.5YR8/2	
1920	弥生土器	高杯	脚部円形すかし孔。脚端部ヨコナデ。	脚部ケズリ。	赤橙　10YR6/6	
1921	弥生土器	高杯	脚部ケズリ。脚端部凹線、ヨコナデ。	脚部シボリ痕、ケズリ。脚端部ユビオサエ。	にぶい橙　7.5YR7/3	
1922	弥生土器	高杯	ハケメのちヨコミガキ。円形すかし孔4	脚部シボリ痕。裾部ヨコナデ。	橙白　5YR7/4	

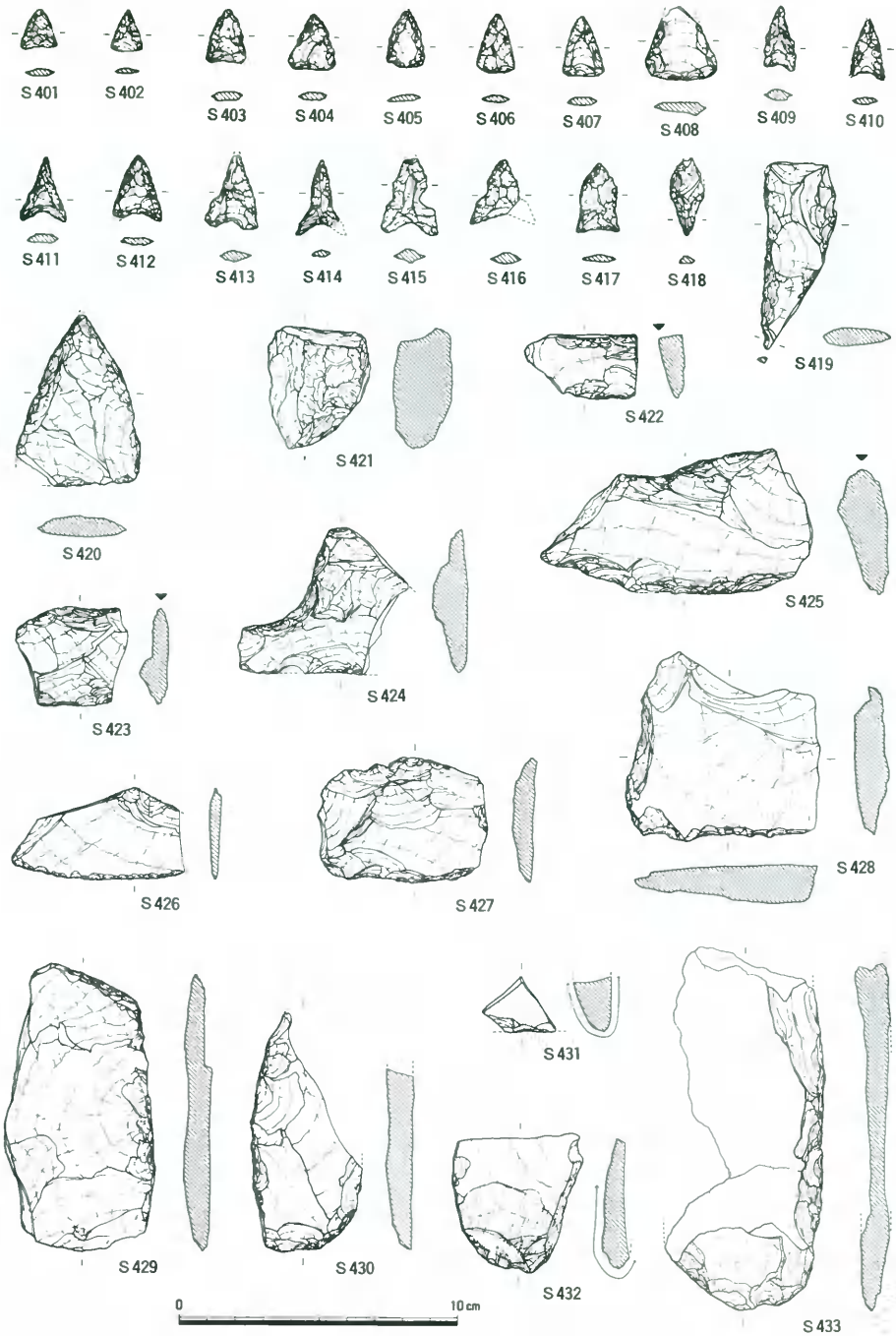
第469図　遺構に伴わない土器（弥生時代中期中葉～後期）（1/4）

土器の出土は少なかった。これは遺物包含層などが後世の削平によってほとんど存在しなかったためと考えられる。第469図**1911**は第１微高地から、**1909**・**1910**・**1917**・**1921**は第２微高地から、**1912**～**1916**・**1918**・**1920**・**1922**は第４低位部から出土している。**1913**は小片であるが、脚部に矢羽根すかしが確認できた。同様な矢羽根すかしは**1733**の土器にも認められた。時期は中期後葉であろう。**1916**は**1669**のような鉢の把手ではなかろうか。**1917**はジョッキ形土器と考えている。**1918**は蓋と考えているが鉢の可能性もある。**1922**はＴＯ区の水田８から出土した土器で、後期末葉と考えれる。

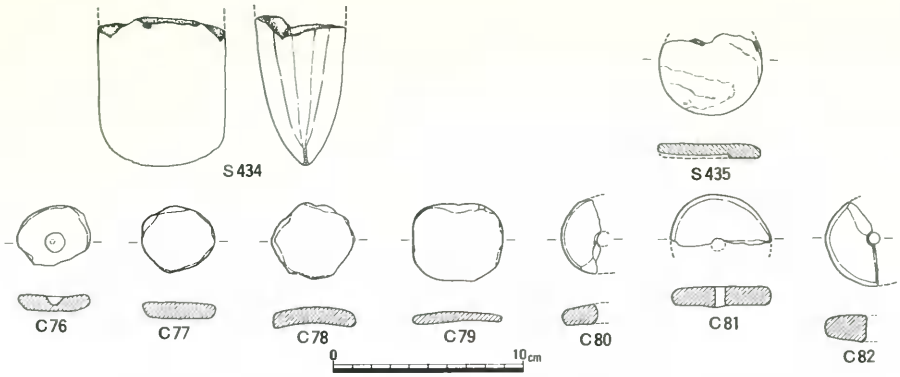
石器・石製品および土製品については出土地区別に図示している。第470図**Ｓ382**～**393**は鏃と考えているが、**393**は錐の可能性もある。**Ｓ394**・**395**は錐で、先端部に使用によると考えられる磨耗痕が観察できる。**Ｓ396**・**398**はスクレイパー、**Ｓ397**・**399**は楔と考えている。**Ｓ400**は石核で一部敲打痕が認められた。**Ｓ418**・**419**は錐である。**418**の先端部は磨耗している。**419**はスクレイパーを転用した錐で、最終的には楔として使用した可能性がある。**Ｓ420**は尖頭器と考えた。**Ｓ421**は両極技法により縦長剥片を取った石核と考えられる。**Ｓ422**～**425**は楔であろう。**Ｓ426**・**427**はスクレイパーであろう。**Ｓ428**は長さが短いが鍬と考えた。**Ｓ429**はスクレイパーと考えたが、鍬の可能性も考えられる。**Ｓ430**はエンドスクレイパーか。**Ｓ431**は全面が強く磨耗し、線条痕が観察できる。鍬か犂であろう。**Ｓ432**も先端部が磨耗し、線条痕も観察できる。エンドスクレイパーとしたが、鍬・犂の可能性もある。**Ｓ433**は結晶片岩製の鍬である。先端部は磨耗している。**Ｓ434**は太型蛤刃石斧である。第473図**Ｓ436**～**441**はスクレイパーとした。**Ｓ442**・**443**は石包丁である。**Ｓ444**は流紋岩製の、**Ｓ445**はサヌカイト



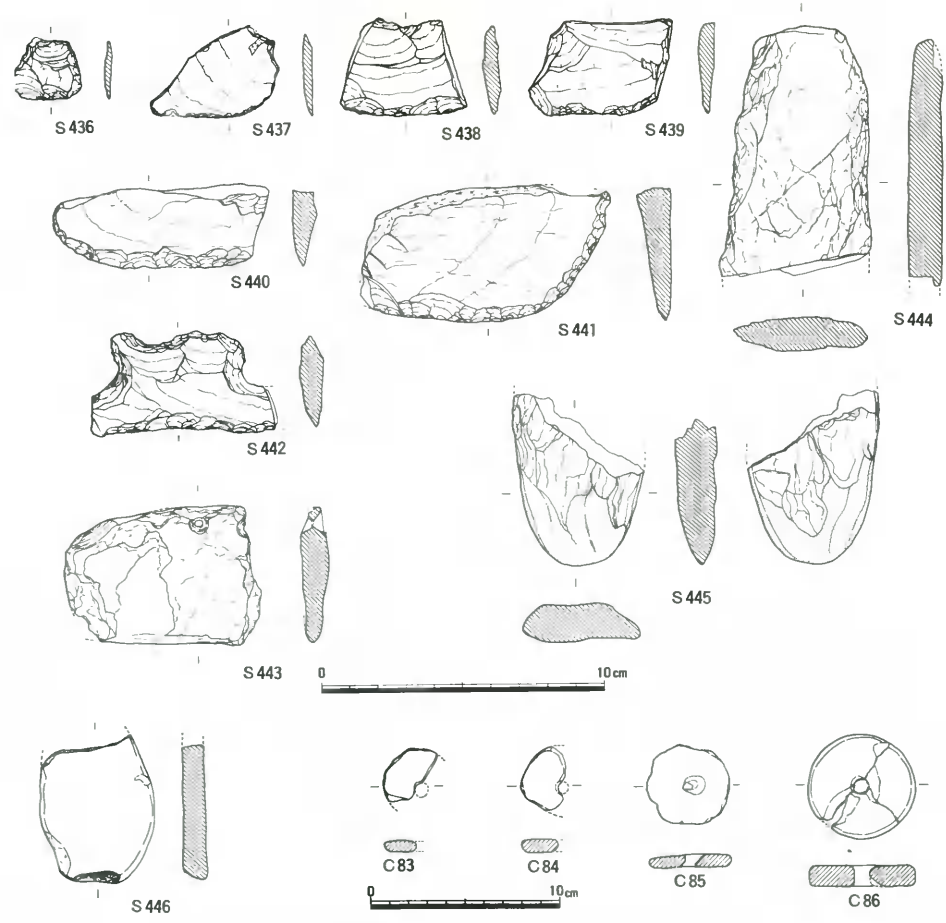
第470図　第１微高地出土遺物（弥生時代中期中葉～後期）（1/2）



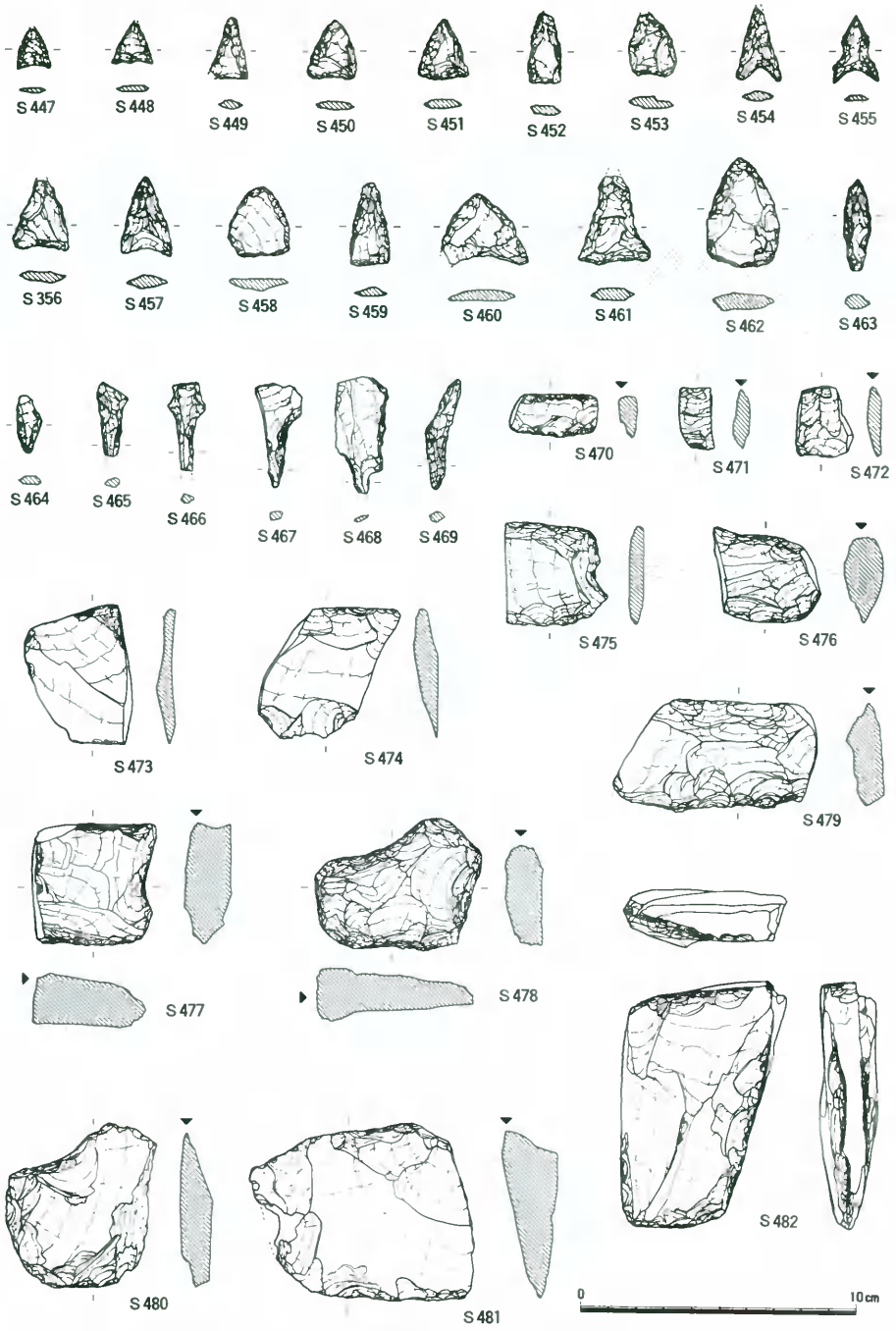
第471図　第２微高地（西）出土遺物（弥生時代中期中葉～後期１）（1/2）



第472図　第２微高地（西）出土遺物（弥生時代中期中葉～後期２）（1/3）

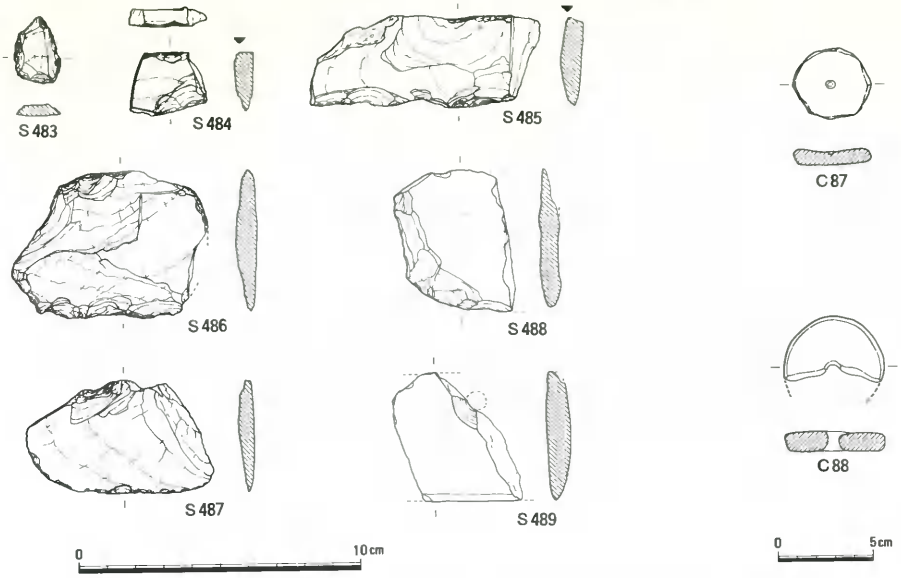


第473図　第２微高地（東）出土遺物（弥生時代中期中葉～後期１）（1/2・1/3）

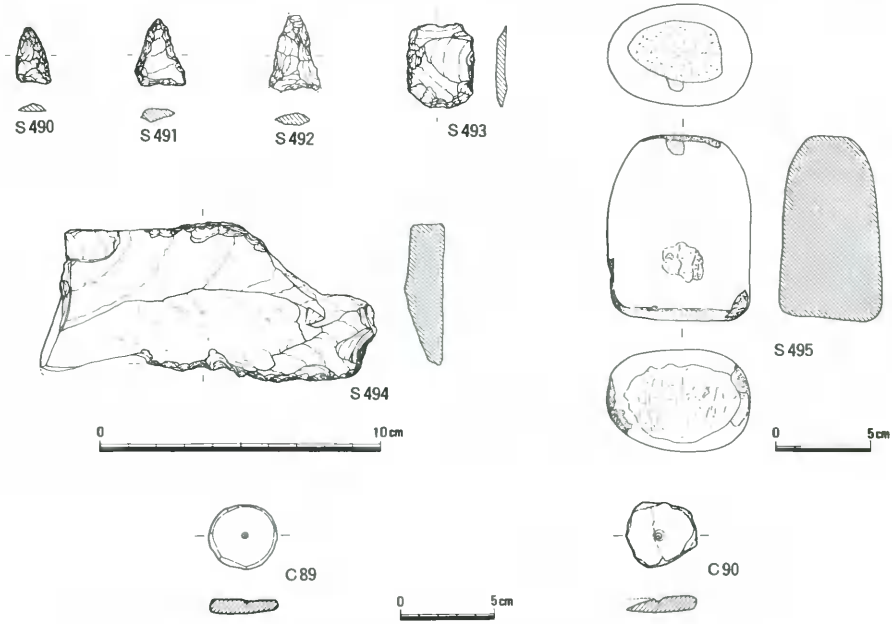


第474図　第２微高地（東）出土遺物（弥生時代中期中葉～後期２）（1/2）

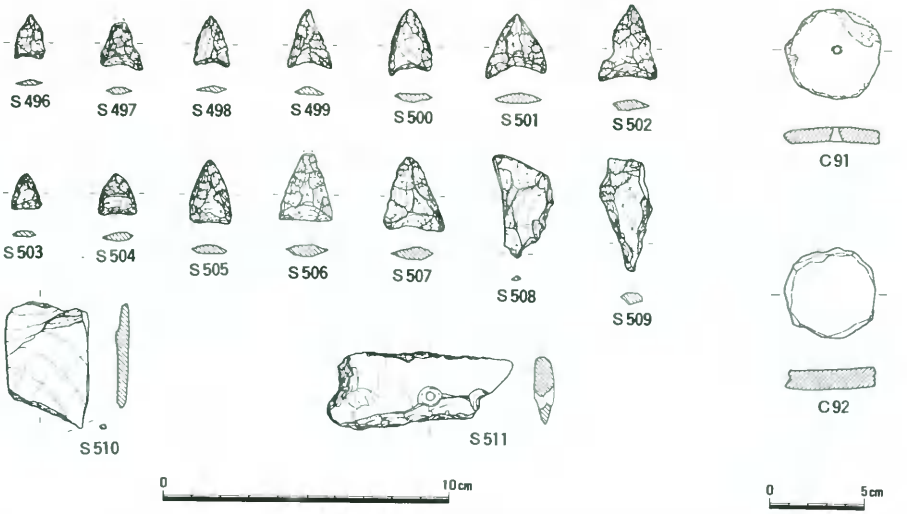
製の鍬である。第474図**S447～463**は鏃、**S464～469**は錐で**464**の先端は磨耗している。**S470～482**は楔と考えた。なお**475**は石包丁からの転用であろう。**S482**は２方向からの敲打痕が観察できた。第



第475図　第２低位部出土遺物（弥生時代中期中葉～後期）（1/2・1/3）



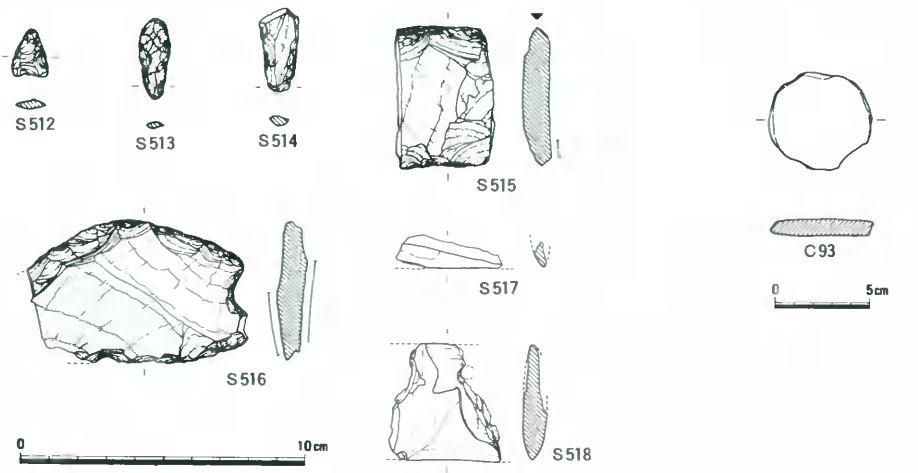
第476図　第３微高地出土遺物（弥生時代中期中葉～後期）（1/2・1/3）



第477図　第３低位部出土遺物（弥生時代中期中葉～後期）（1/2・1/3）

475図Ｓ483は鏃、Ｓ484・485は楔、Ｓ486・487はスクレイパー、Ｓ488・489は磨製石包丁と考えている。第476図Ｓ490～492は鏃、Ｓ493はスクレイパー、Ｓ494は楔、Ｓ495は斑岩製の敲石である。第477図Ｓ496～507は鏃、Ｓ508・509は錐で先端部は磨耗している。Ｓ510はスクレイパーを錐に転用している。Ｓ511は頁岩製の磨製石包丁を抉りを入れて打製石包丁にしたのではなかろうか。第478図のＳ512は鏃、Ｓ513・514は錐、Ｓ515は楔、Ｓ516は打製石包丁、Ｓ517・518は磨製石包丁と考えている。

図示した土製品のうちＣ79とＣ81は紡錘車は土器片の転用ではない。これらはＪＹ区から出土しており、この地区には弥生時代前期の遺構や包含層から同様な形態のものが出土していることから、時期は前期と考えるべきであろう。　（平井）



第478図　第４低位部出土遺物（弥生時代中期中葉～後期）（1/2・1/3）

第６節　古墳時代の遺構・遺物

１．概　　要

検出できた遺構は少なく、井戸、土壙、溝、柵列状遺構、水田などである。前期前葉段階では井戸１基と水田およびこの水田に伴うと考えられる溝が検出できた。竪穴住居や掘立柱建物は確認できず、従前までの居住域が他地域に移動した可能性が考えられる。のちにＡ～Ｄ地区にわけて説明する水田８は洪水砂などの明瞭な土層によって覆われていなかったため畦畔の検出は困難な地区が多かった。

前期後葉段階の遺構としては、ＦＵ区において井戸が４基まとまって検出できたのみであった。また水田層の検出できた地区には６世紀から７世紀前半までに堆積していたと考えられる黒灰色の粘土層が確認できた。また柵列状遺構については後述するように注目すべき遺構ではあるが、時期・性格とも明確ではない。　　（平井）

２．遺構・遺物

(1) 井　　戸

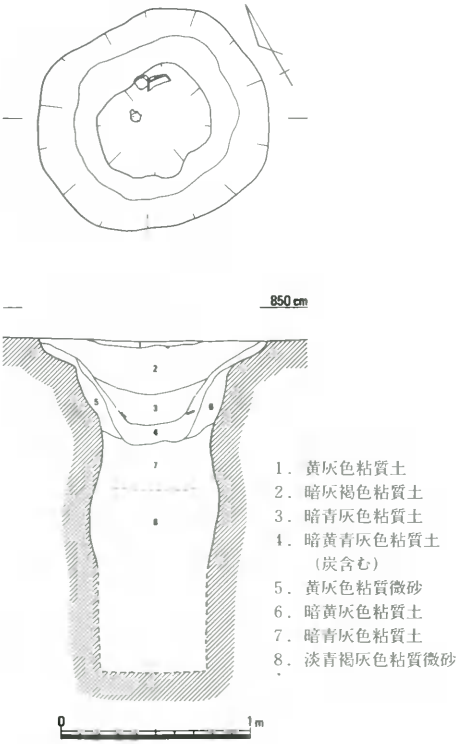
井戸９（第479・481図）

第２微高地（東）の北東側肩口で、４基の井戸と推定される遺構が検出された。大小・深浅様々な形状を示すが、いずれも井戸と考えてよいだろう。古墳時代前期の遺構は、この周辺では見当らず、おそらく井戸以外の遺構は、後世に削平されたものと考えられる。当時、この場所が湧水量・水質など恵まれていたことと推察される。

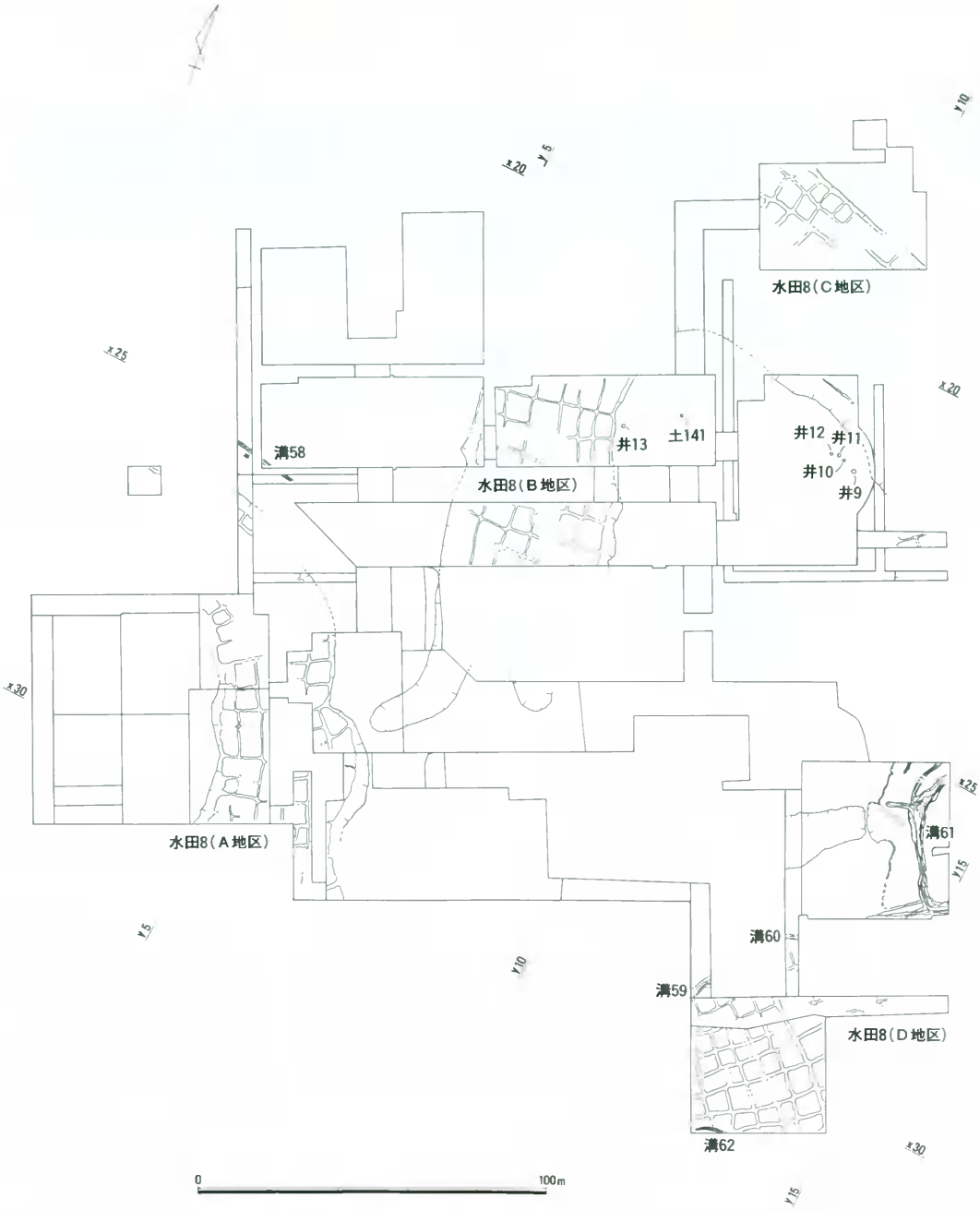
井戸９は、これらの井戸のなかでももっとも深く掘り込まれた井戸で、平面形も一際大きい。上部が失われていなかったのならば、優に２ｍを越える深さが推定される。

検出状態の断面形では、最上位は広がり、下部と段差がついて下方はやや膨らむ。井底は、崩落のため明確ではない。

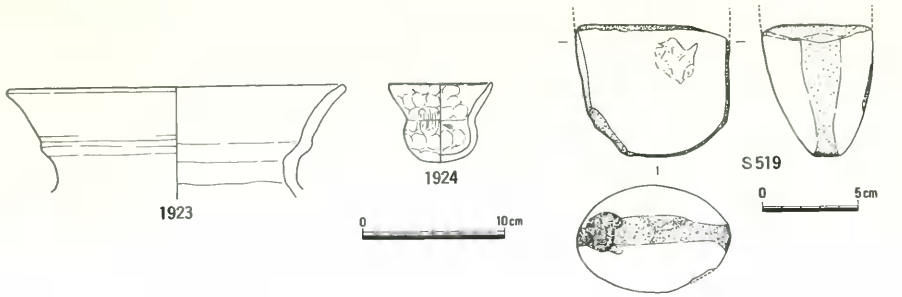
出土遺物は、３層上位で主に認められた。**1924**は、比較的精巧な作りのミニチュアの小型丸底壺である。**S519**は、明らかに蛤刃石斧の転用品で、周縁を用いた敲石の可能性が強い。　　（岡田）



第479図　井戸９（1/30）



第480図　古墳時代遺構全体図(1)（井戸・土壙・溝・水田）（1/1500）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1923	土師器	壺	口縁部ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ？。	にぶい橙　2.5YR6/4	
1924	土師器	壺	ユビオサエ、ナデ。頸部ミガキ。	ユビオサエ、ナデ、ハケメ	灰黄　2.5Y7/2	小型丸底壺。

第481図　井戸９出土遺物（1/4・1/3）

井戸10（第482・483図、図版23）

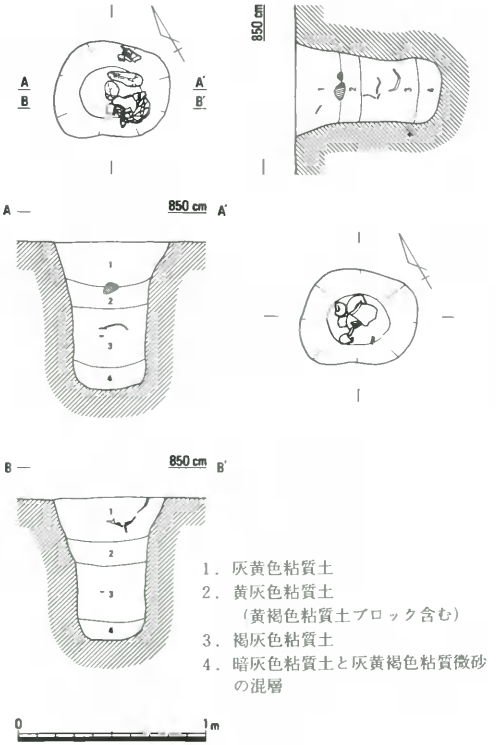
井戸９の北西方約４ｍ、井戸11の南東に位置する。

平面形は、長径60cm、短径50cmを測るややいびつな長円形を呈している。井底までの深さは、約75cmで丸みをもって終わる。

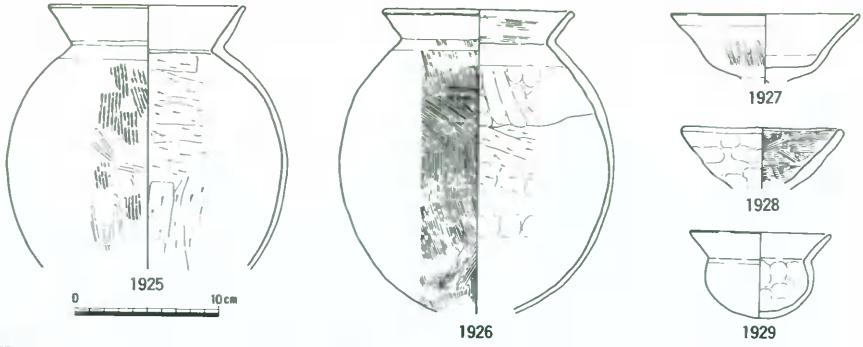
出土遺物は、上層・下層からそれぞれ土師器の破片がまとまった状態で出土し、前者からは、**1911**の甕、後者からは、**1912**～**1929**の甕・高杯・鉢・小型丸底壺などがみられる。土器以外では、10～20cm前後の円礫が、第２層の下位から数個出土している。いずれも自然礫で、人為的な使用痕を残すものはみられない。井戸の埋積土の中でも、２層と４層（最下層）からは、炭が多く含まれている。　（岡田）

井戸11（第484～486図、図版23）

井戸10のすぐ西側で検出された。堀り方はほぼ円形を呈し、約90cmで井底に達する。井戸の上位の周壁では、段がつき井底にかけては丸みをもってやや膨らんで終わる。井底は、淡黄白灰色のシルト質の粘土で、わずかな湧水



第482図　井戸10（1/30）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1925	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメのちミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ	にぶい橙　7.5YR7/4	
1926	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ	口縁部ハケメ、ヨコナデ、胴部上半ユビオサエ、ナデ。下半ケズリ、ナデ。	にぶい黄橙　10YR6/4	外面煤
1927	土師器	高杯	口縁部ヨコナデ。杯部ハケメのちナデ?。	口縁部ヨコナデ。杯部ナデ。	明褐杯　7.5YR7/1	
1928	土師器	鉢	ユビオサエ、ナデ。	ハケメ、ナデ。	灰黄褐　10YR6/2	
1929	土師器	壺	口縁部ヨコナデ、胴部ナデ?	口縁部ヨコナデ、胴部ユビオサエ、ナデ。	明褐灰　7.5YR7/1	小型丸底壺

第483図　井戸10出土遺物（1/4）

が看取された。

出土遺物は、中層から下層にかけて集中して認められた。大半は甕・壺・高杯・鉢などの土師器であるが**1930・1931・1935**のよな完形品が含まれている。また、**S520**のような石製品が出土しており、使用によって磨滅した片面は火を受けている。小型の作業台として使われた可能性が強い。　（岡田）

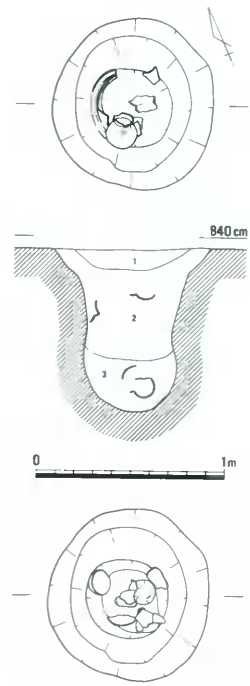
井戸12（第487・488図）

微高地肩口でまとまって検出された４基の井戸のうち、もっとも北側に位置する井戸である。これらの井戸は、合い前後する時期に掘り込まれたもので、当時は恵まれた湧水が得られた地点であったことが推察される。井戸の断面形は、逆台形を呈していて通常の井戸の掘り方とやや形状が異なる。井底はほぼ平坦で、わずかな湧水が認められる淡灰黄色の微砂質の粘土層に達している。出土遺物は、上面からミニチュアの甕形土器**1938**、中層から下層にかけて**1936・1937**の甕形土器などがある。

（岡田）

井戸13（第489図）

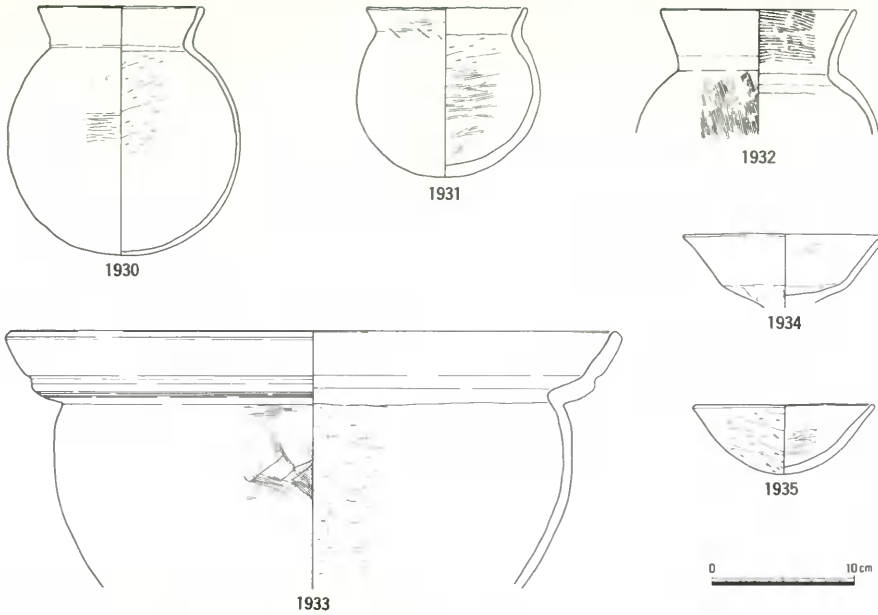
第２微高地（東）の北西部、ＪＹ区の中央に位置する素掘りの井戸である。平面形は１辺約90cmの隅丸方形を呈す。検出面からの深さは130cm、底部の海抜高は7.1mを測る。壁の傾斜は急でほぼ直線的に掘り込まれていた。埋土は上層（１～３）、中層（４・５）、下層（６～８）の３層に大別され、遺物はおもに上層から土師器甕・高杯などが出土している。いずれも小破片で



1．黄灰色粘土
（灰褐色土ブロック含む）
2．淡黄灰色粘土
（灰褐色土ブロック含む）
3．淡黄灰色粘土

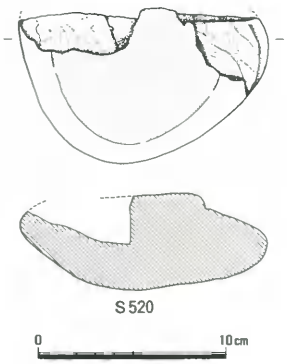
第484図　井戸11（1/30）

あるが、その特徴から古墳時代前半期のものと判断される。　（江見）

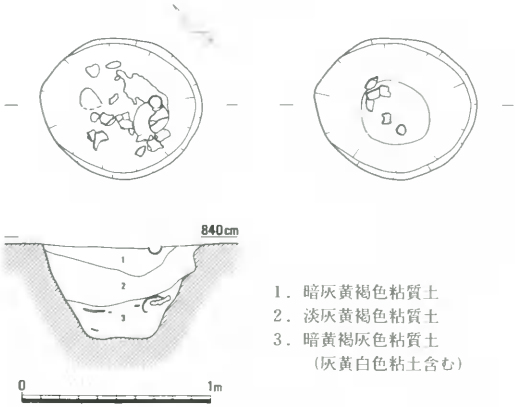


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1930	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部上半ハケメ？。下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。胴部下半ユビオサエ？。	灰黄褐　10YR6/2	外面煤。
1931	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部上半ケズリ。下半ミガキ。	灰白　2.5Y7/1	内外面煤。
1932	土師器	壺	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ハケメ。胴部ケズリ。	灰白　2.5Y8/1	
1933	土師器	鉢	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙　7.5YR7/4	
1934	土師器	高杯	杯部上半ヨコナデ、下半ユビオサエ、ナデ。	杯部ハケメ？、ナデ。	淡橙　5YR8/3	
1935	土師器	鉢	ケズリ、ナデ	ナデ、ミガキ	黒　N2.5Y2/1	

第485図　井戸11出土遺物(1)（1/4）

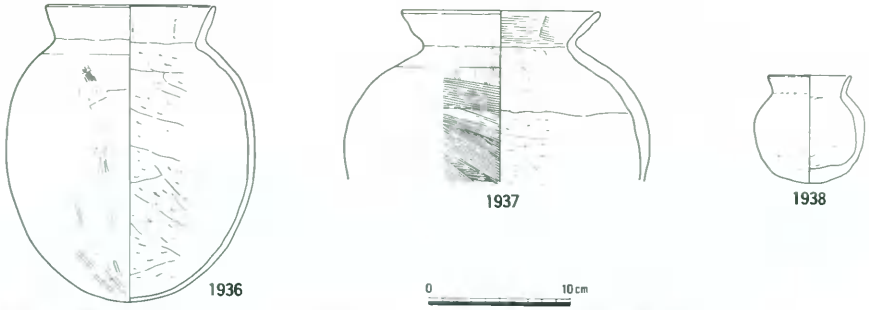


第486図　井戸11出土遺物(2)（1/3）



1．暗灰黄褐色粘質土
2．淡灰黄褐色粘質土
3．暗黄褐灰色粘質土
（灰黄白色粘土含む）

第487図　井戸12（1/30）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1936	土師器	甕	口縁部ヨコナデ　胴部上半ケズリ　ハケメ。下半ナデのち ミガキ	口縁部ヨコナデ、胴部ケズリ	灰白　7.5YR8/1	外面煤
1937	土師器	甕	口縁部ヨコナデ　胴部ハケメ	口縁部ユビオサエ、ハケメ　胴部上半ナデ、下半ケズリ	灰白　2.5Y8/2	外面煤
1938	土師器	甕	ユビオサエ、ナデ	ユビオサエ、ナデ	赤橙　5YR8/3	手づくね

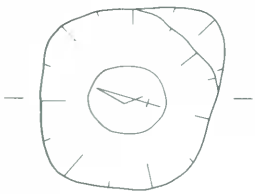
第488図　井戸12出土遺物（1/4）

(2)　土　　壙

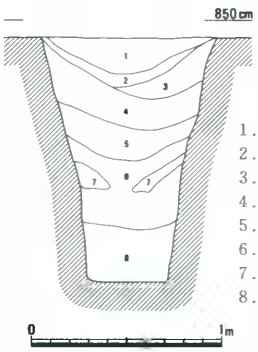
土壙141（第490図）

第２微高地(東)の北西部、ＪＹ区の東部に位置する。１辺約60㎝、深さ25㎝を測る、平面方形を呈す土壙である。埋土は基盤層よりやや灰色をおびる粘質土で、これより古墳時代前半期の特徴を持つ甕の細片が出土している。（江見）

(3)　柵列状遺構

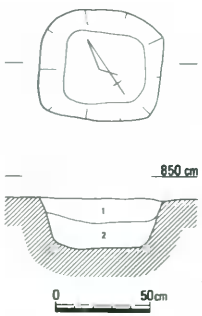


ここでいう柵列状遺構とは、かつて「柱穴状遺構列群」として報告されたもので、平面形が楕円形で断面形が「Ｕ」字形の柱穴状遺構２基がその長軸を平行させて隣接して掘られたものを１単位とし、これがその長軸方向に歩幅程度の間隔をもって列をなすものをさす。河道１から第２微高地(西)において集中して検出された他、第３微高地にも所在する。時期的には古墳時代後半に出現し、古代にも類似遺構が認められる。（光永）



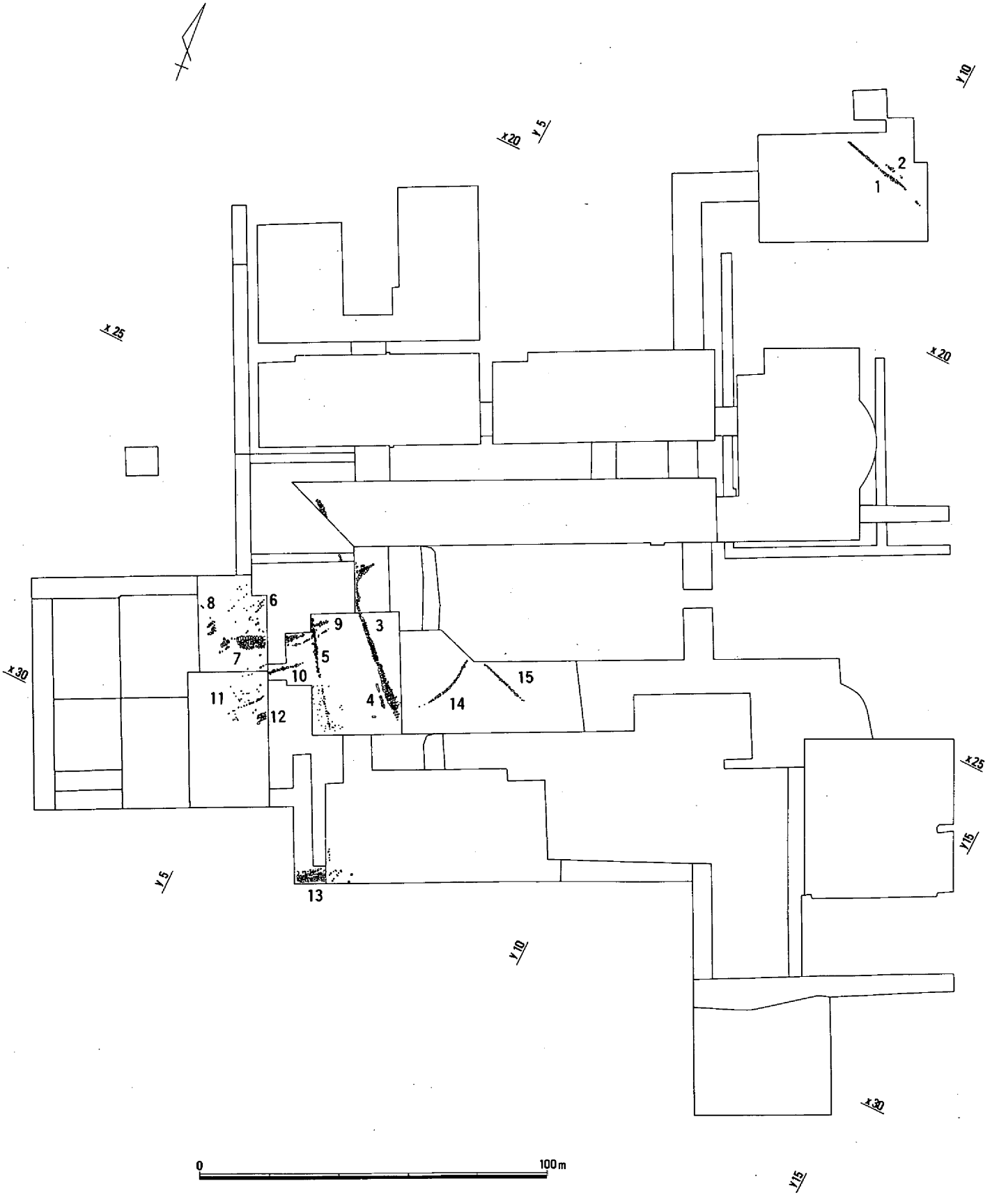
1．暗茶灰色粘質土
2．黒褐色粘質土
3．暗黄灰色粘質土
4．黄灰色粘質土
5．暗黄灰色粘質土
6．灰色粘質土
7．明黄色粘質土
8．淡黄灰色粘質土

第489図　井戸13（1/30）



1．淡黄灰色粘質土
2．灰褐色粘質土

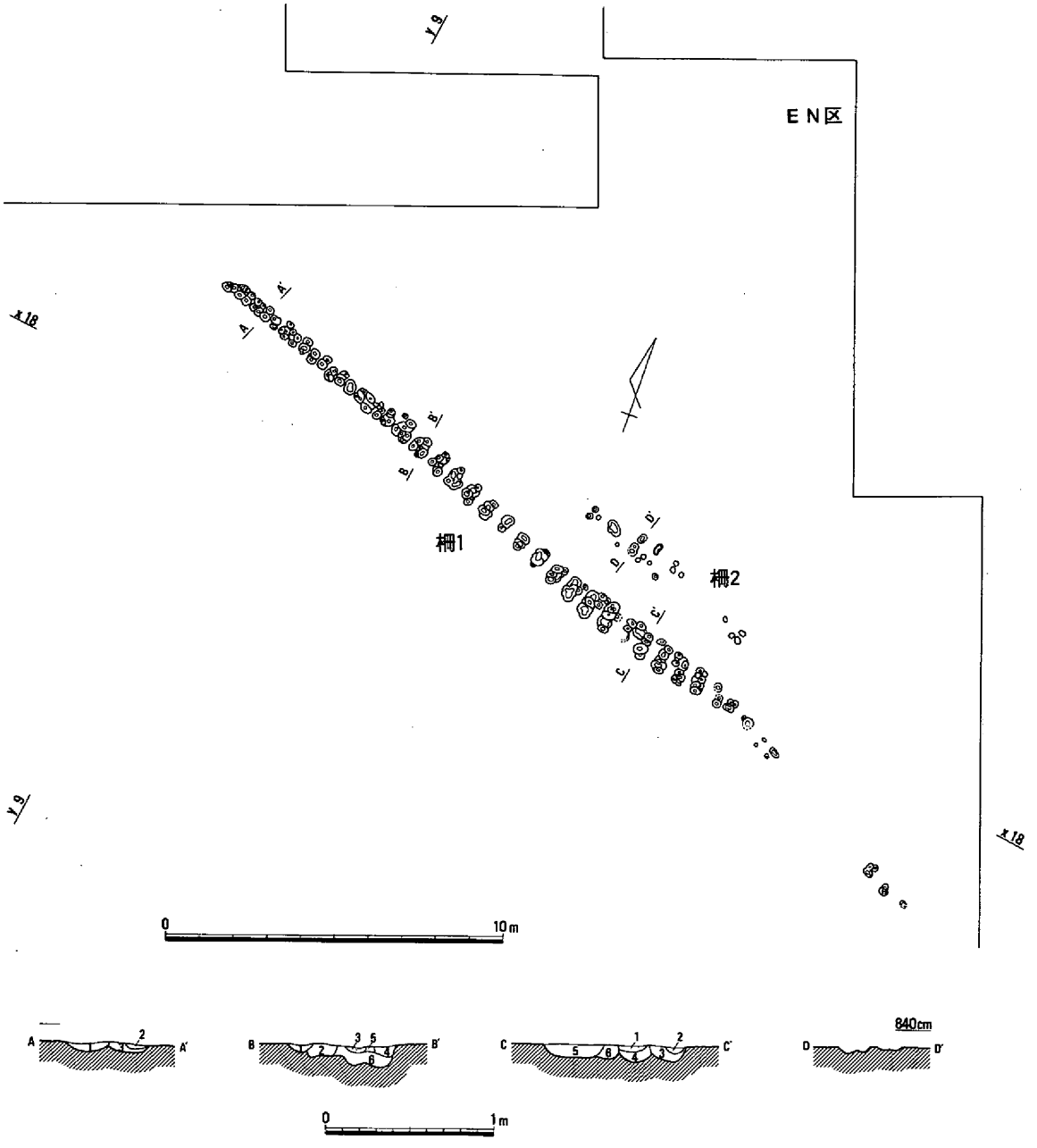
第490図　土壙141（1/30）



第491図　古墳時代遺構全体図(2)（柵列状遺構）（1/1500）

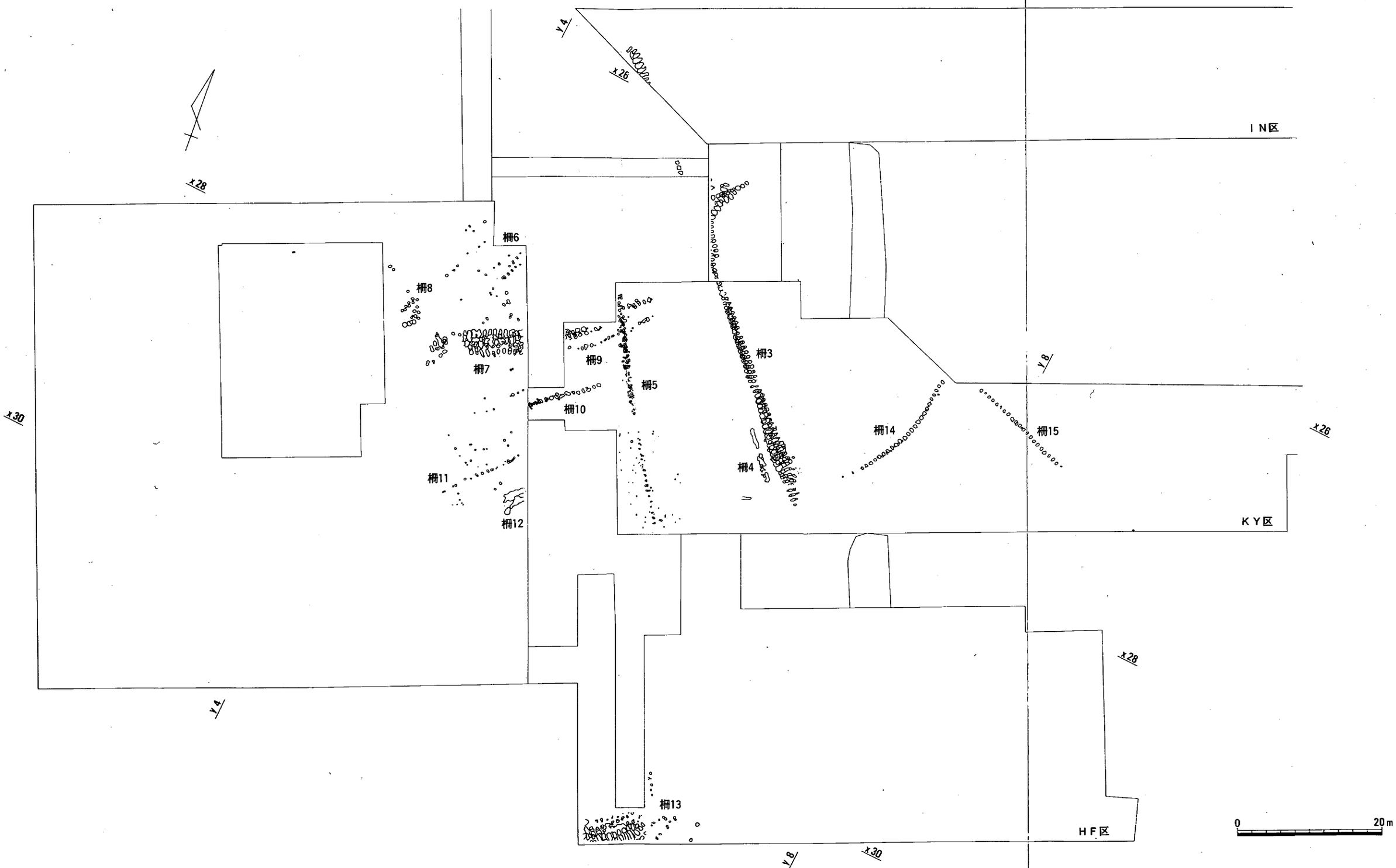
柵列状遺構１・２（第491・492図、図版24）

ＥＮ区の第３微高地南端に添って検出されたほぼ直線を描く柵列状遺構であり、水田８の北端から北へ６ｍの位置にあたる。柵列状遺構１は延長28ｍにわたって検出され、少なくとも３列が重複している状況が確認できる。柱穴状遺構は遺存状況の良いところで、40×25×25cm程度の規模を示し、１対の間隔は20cm程度、単位相互の間隔は70cm前後である。埋土は基本的に微砂であり、粘性に若干の差が認められる。柵列状遺構２は、柵列状遺構１の北1.3ｍでこれに平行して延長６ｍが検出された。遺存状況は良くないが、２列が確認できる。柵列状遺構１からは少量の土器が出土しているが、時期を明確にできるものはない。（光永）



１．黄灰色微砂　　３．褐灰色粘質微砂　　５．灰黄色粘質微砂
２．暗黄灰色粘質微砂　　４．黄灰色粘質微砂　　６．にぶい黄色粘質土

第492図　柵列状遺構１・２(1/200・1/50)



第493図　柵列状遺構3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15 (1/500)

柵列状遺構３・４（第491・493・494図、図版24・25）

柵列状遺構３は、第２微高地(西)のＩＮ・Ｈ５・Ｋ９・ＫＹ１の各区で検出され、基本的には延長68ｍの直線を描き、Ｋ９区においてこれから東へ８ｍ程分岐する列が認められる。直線部分のうち特に重複が顕著なＫＹ１区南半では６列以上の重複が認められ、この重複はＩＮ区においても３列以上が確認される。また、Ｋ９区での分岐については、直角に分岐する１列と弧を描く２列以上が確認できる。重複のため個別の柱穴状遺構の形状規模を明確にできるものは少ないが、遺存状況の良いＫＹ１区南においては、芯心距離20～30㎝を測る一対の柱穴状遺構が上部で連結して80×50㎝の楕円形を呈するものもみられる。単位相互の間隔は70㎝前後を基本としながら微妙にずれを生じ、これが積み重なって複雑な重複を示している。底面の海抜高は一つの列にあっても上下しており、各単位が規模を揃えて掘られたものであれば、これが当時の地表面の凹凸を示すものかもしれない。

柵列状遺構４はＫＹ１区南に位置し、柵列状遺構３の西１ｍでこれに平行して延長7.5ｍが検出された。構造的には単位が不明確で、柵列状遺構と呼びにくいが、埋土が柵列状遺構３と共通する。

須恵器の出土により、時期は古墳時代後期の６世紀後半～末に比定される。（光永）

柵列状遺構５（第491・493・495図、図版25）

ＫＹ１区の第２微高地西端に位置し、Ａ地区水田８の上面で、その東端から約４ｍ西側に直線的に検出された。柵列状遺構９に先行し、柵列状遺構10との関係は不明である。

北半の状況からは複数列が重複しているものと思われるが、個別の柱穴状遺構は浅く、この部分で単位を明確にすることは難しい。南半では、20×15㎝程度の柱穴状遺構が芯心距離20㎝程度で一対となり、単位相互の間隔は70～80㎝である。

水田８および柵列状遺構９との関係から、古墳時代の遺構と考えられる。（光永）

柵列状遺構６（第491・493・495図）

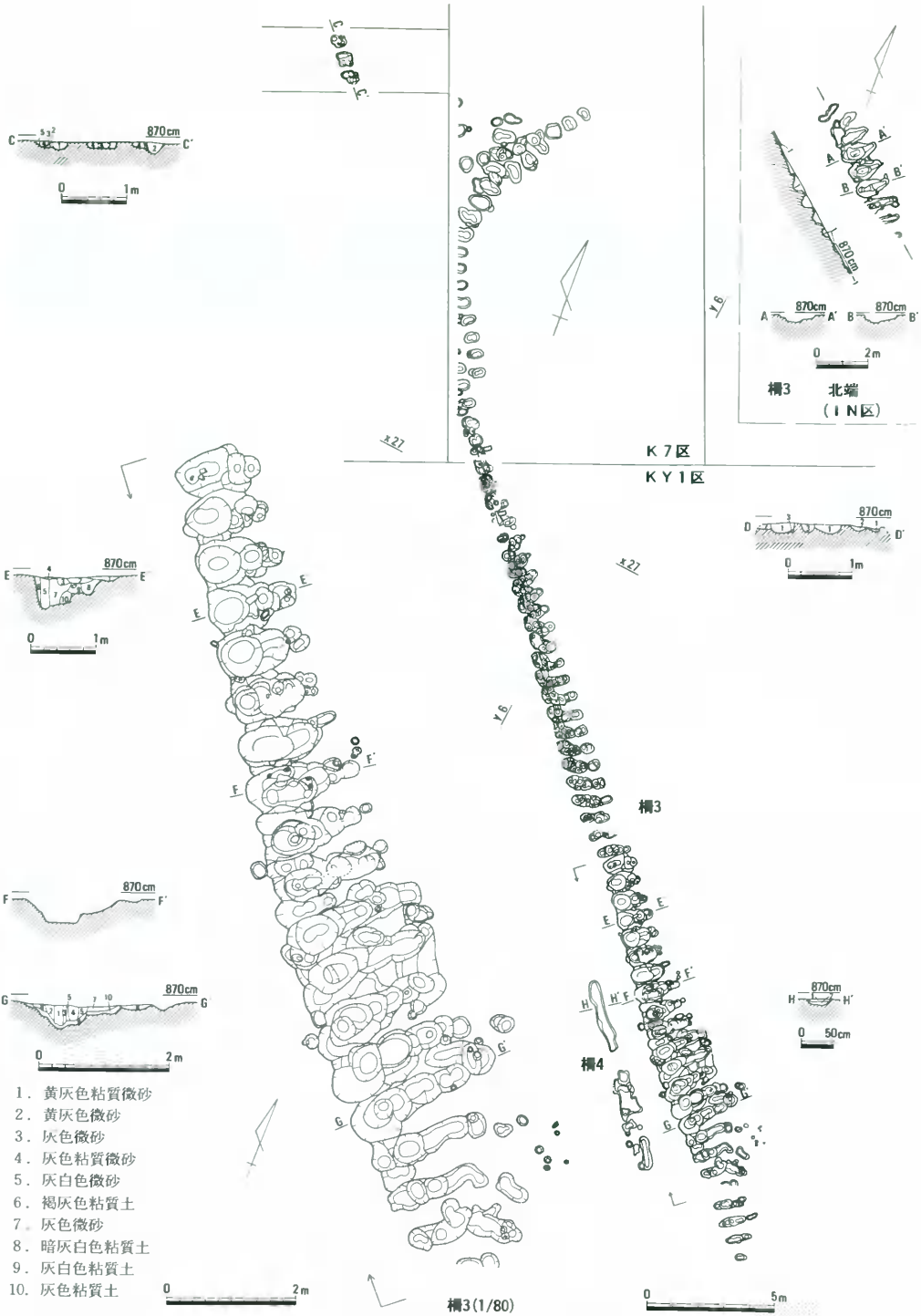
ＴＤ１区北東隅に位置する。古墳時代から古代にかけて堆積したと考えられる堆積層除去後に検出された。径20㎝前後、深さ10㎝たらずの小柱穴で構成されており、10×15ｍの範囲に散布するなかでおおよそ南北に規則的に並んでいると見受けられるものを柵列状遺構とした。出土遺物が無いため時期の特定はできないが、上層と同じ黒灰色粘質土で埋没しており、後述する古墳時代前期前葉の水田層に掘り込まれていることから古墳時代の範疇におさまると考えられる。（久保）

柵列状遺構７（第491・493・495・496図、図版26）

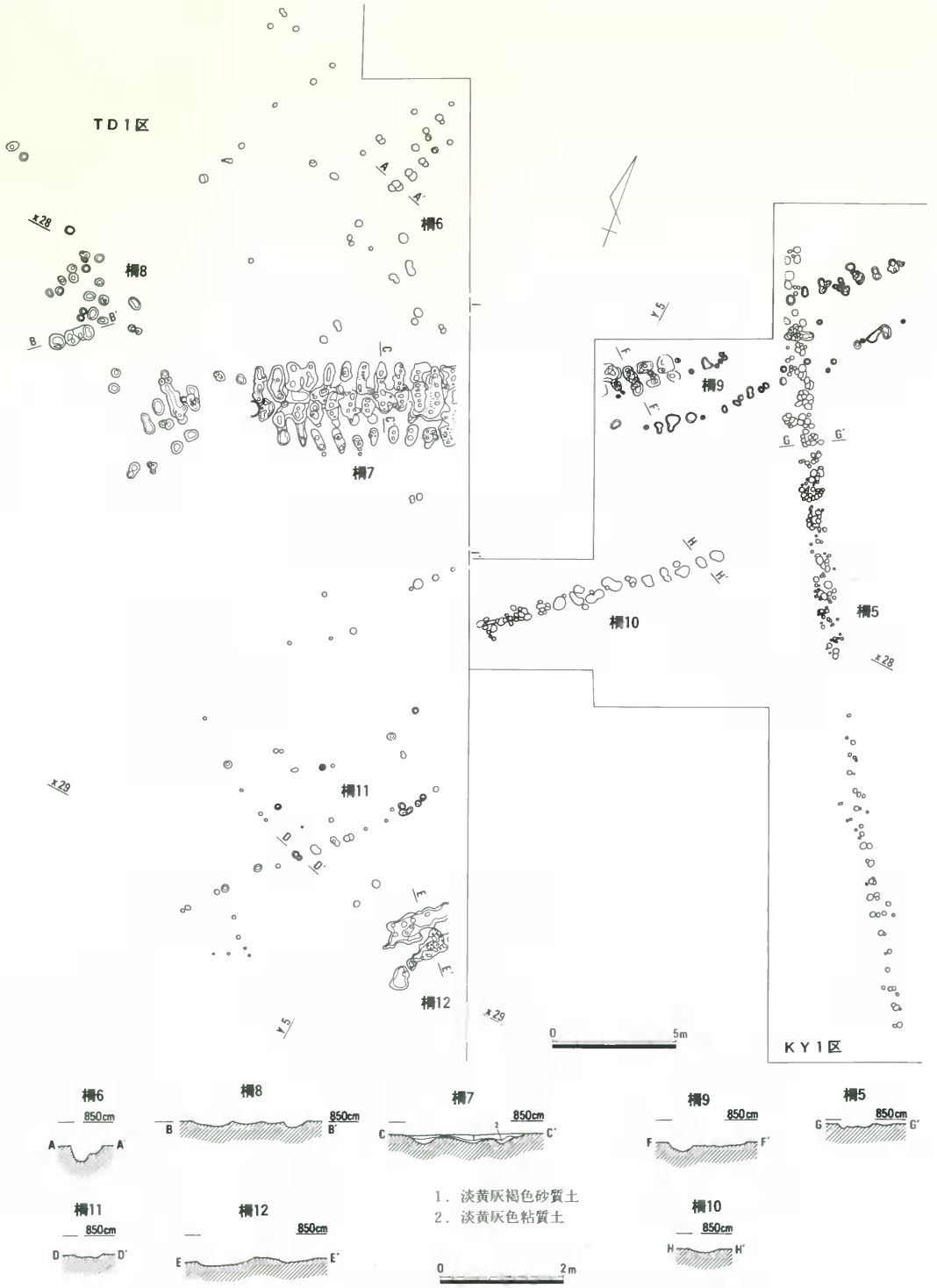
柵列状遺構６の南に位置する。東西方向に主軸をとっており、連続した部分での長さは約９ｍ、幅約3.5ｍを測る。少なくとも３列が重複しているようである。各列の最小単位は小さいもので50×30㎝、大きいもので115×60㎝の規模を有する南北に長い楕円形のくぼみで、中央部分では重複が激しいため独立していないが、南側の列では30～40㎝間隔で規則的に並んでいるようにみうけられる。深さは５㎝前後と浅いが、底中央にはそれぞれ２～４個の柱穴状のくぼみを持っており、この楕円形のくぼみも柱穴の重複した結果かもしれない。第496図の土層断面図では北側の列は８層に、中央以南は７層に対応しており、掘削時期に差があったことを示すが、同じ堆積層によって上下はさまれており、大きく隔絶するものではないと考えられる。また９層は後述する水田９の10層に対応し、上面で７世紀後半～８世紀前半の遺物が出土していることからそれ以前に埋没したと考えられる。（久保）

柵列状遺構８（第491・493・495図）

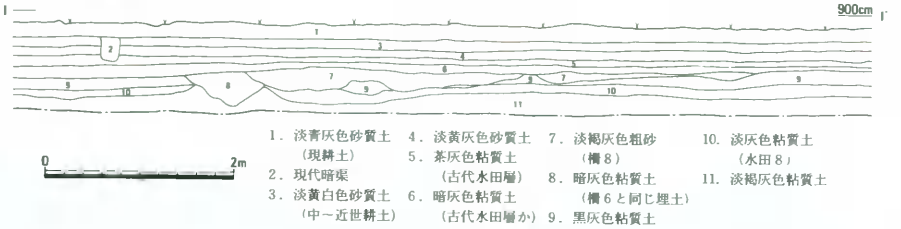
柵列状遺構７の西で検出された。あまりまとまりがみられないが、一部柵列状遺構７で認められた



第494図　構列状遺構3・4(1/200・1/80)



第495図　構列状遺構5・6・7・8・9・10・11・12（1/200・1/80）



第496図　柵列状遺構７断面図（1/60）

最小単位が確認されており、柵列状遺構とした。その埋土および形態は同様非常によく似ており、一連のものである可能性が高い。（久保）

柵列状遺構９（第491・495図、図版25・26）

ＫＹ１区の北西部に位置し、ＴＤ１区の柵列状遺構７の東延長に相当する。北東方向にやや弧を描き、幅３ｍの間に、西寄りの３列と東に1.2ｍ離れた１列を確認できる。柱穴状遺構は遺存状況の良いもので深さ15㎝程度で、芯心距離20㎝前後で一対となり、単位相互の間隔は50～70㎝を測る。埋土には粘性の低い微砂が認められる。（光永）

柵列状遺構10（第491・495図、図版25）

ＫＹ１区西端に位置し、Ａ地区水田８上面で、柵列状遺構９の南５ｍにほぼ平行して延長10ｍが検出された。単位を明確にできるものが少ないが、３列以上の重複と考えられ、単位相互の間隔は70㎝前後に想定される。埋土は水田８上層の包含層と同様で、柵列状遺構５と共通しており、古墳時代の遺構としてとらえられる。（光永）

柵列状遺構11（第491・493・495図）

柵列状遺構７の南の位置する。柵列状遺構11と同様の規模・形態を持つ柱穴群で埋土も同じである。検出状況からみても同時期に存在した同様の性格を持つものと考えられる。（久保）

柵列状遺構12（第491・493・495図）

柵列状遺構11の南に位置する。東西に細長い不整形の溝状遺構と、土壙状を呈するもので構成される。前者は２条あり、北側は長さ280㎝、最大幅115㎝、南側は長さ200㎝、最大幅100㎝を測る。検出面からの深さはいずれも５㎝足らずで、土壙状のものは前者の一部の可能性がある。調査区外にのびる部分が多いため全容は不明であるが、底に柱穴状の浅いくぼみを有し、柵列状遺構７と同じ土で埋没していることから同様のものとして柵列状遺構に含めた。（久保）

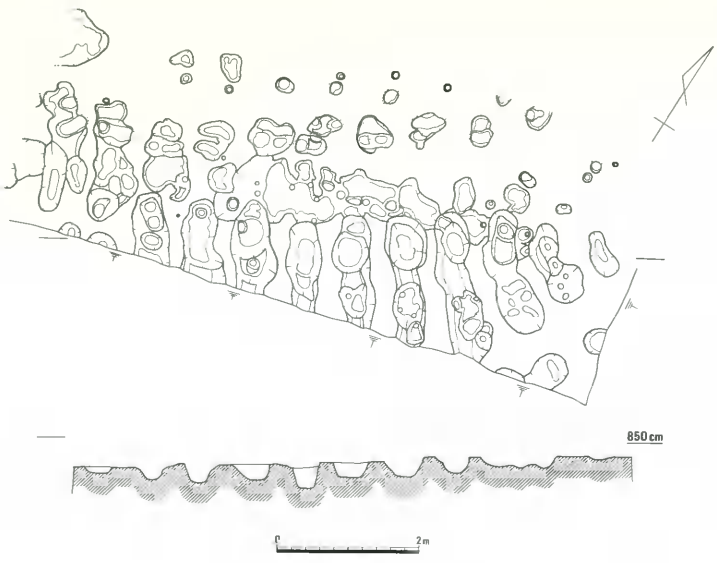
柵列状遺構13（第491・497図）

柵列状遺構12の南、Ｈ10区に位置する。柵列状遺構７と同じく複数列が重複しているものと考えられるが、それぞれの列で最小単位の形態が異なっており、全て同一の性格を有していたとは限らない。北側の２列においては樹皮や木質が出土しており、杭状のものを打ち込んだ可能性も考えられる。一番南側の列からは須恵器杯身片が出土しており、古墳時代後期に埋没したと考えられる。（久保）

柵列状遺構14・15（第491・493・498図）

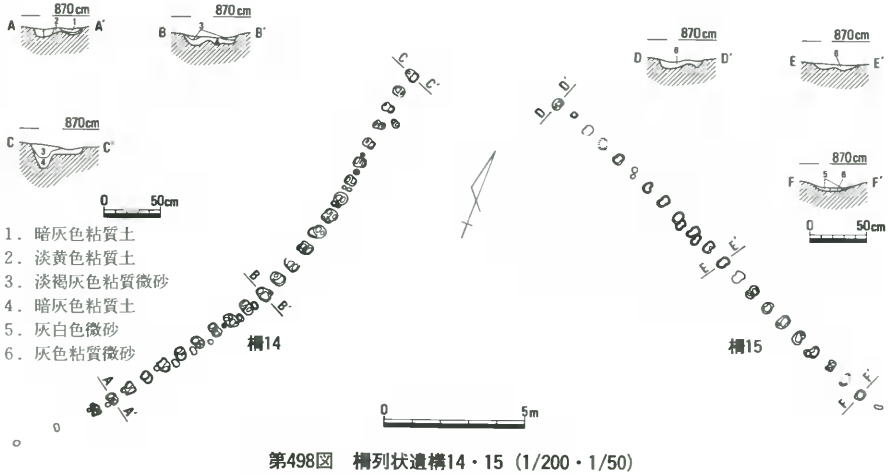
ＫＹ３区の中央部において検出した。北側は調査区外に続いていると考えられるが、南側については底のレベルが検出面から徐々に浅くなっており、後世の削平がなければもう少し続いていたものと考えられる。柵列状遺構14は、やや東西に蛇行して長さ約20ｍが検出できた。長軸約70～50㎝、短軸約20～50㎝の不整長楕円形の26個のピットが、約30～50㎝間隔で連なっている。この不整長楕円形の

ピットの多くは深さ10cm前後が残存しており、図示したように二つの円形のくぼみをもっている。埋土の状況はそれぞれ異なっているが、基本的には２層に分離することができ、上層には細かい微砂が堆積しているピットが多かった。二つの円形のくぼみが同時期のものか、あるいは切り合いがあるのかについては、断面観察によれば各ピットで状況が異なっており、どちらかには決め難かった。またこのくぼみの一部は柱穴の可能性も考えられるが、多くは柱穴や杭の痕跡とは考えにくい。



第497図　柵列状遺構13（1/80）

柵列状遺構15は、14と同様なピットが約40～50cm間隔で並んで、ほぼ直線状に約15m検出された。ただし14とは異なって、不整長楕円形のピットの中に円形のくぼみをもつものは少なく、また埋土も一層のものが多かった。これらの遺構の時期については、この調査区では中世よりは古く弥生時代よりは新しいと考えられるが、それ以上年代を特定することはできなかったが、他の調査区での状況から古墳時代のものと考えておきたい。（平井）



第498図　柵列状遺構14・15（1/200・1/50）

(4) 溝

溝58（第424・480図）

ＤＥ区南西隅に位置する後述する水田８の北端東肩口の緩斜面上にあたり、水田に沿って弧を描く。弥生時代中～後期に属する溝12～14と重複しており、その関係は第424図に図示している。３・４層が当遺構の埋土である。埋土中からは古墳時代前期前葉に属する土器細片が出土しており。水田８と大差ない時期に埋没したと考えられる。（久保）

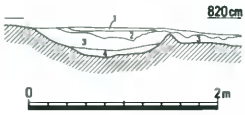
溝59・60（第499・500・507図）

Ｈ15区の南半部(溝59)およびＨ16区の南半部(溝60)において水田８の肩口に沿って検出した溝である。調査区の幅が狭かったため検出できた長さはわずかであるが、溝59は幅55～65㎝、深さ約30㎝、長さ約６ｍ、溝60は幅55㎝、深さ約20㎝、長さ3.5ｍを検出した。

水田８との関係については図示したように、水田８を覆っている黒灰色粘土が溝59・60も覆っている。また水田８の耕作土(図の３層)については、不明瞭ながらも溝の南側の肩で途切れて、溝59・60との間に幅10～20㎝の土手状の高まりがあるように観察できた。また溝59ではこの土手状の高まりの表面部分に鉄とマンガンの沈着が認められた(溝の断面の位置は第507図を参照)。

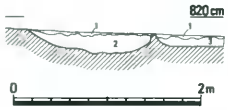
埋土中からはわずかではあるが弥生時代後期前葉から古墳時代前期前葉の土器が出土しており、水田８と同じく古墳時代前期前葉には埋没したものと考えられる。

このような水田８との土層関係や水田８の肩に沿って検出されていること及び出土遺物から、これらの溝は水田８に伴う用・排水路と考えられるのではなかろうか。またこれらの溝は、ＴＯ区の溝61と一連の溝と考えられる。（平井）



1．暗灰色粘土
2．淡灰色粘土
3．灰白色粘土（水田８）
4．灰白色微砂

第499図　溝59（1/30）



1．暗灰色粘土
2．灰白色微砂
3．灰白色粘土（水田８）

第500図　溝60（1/60）

溝61（第501・507図）

ＴＯ区の溝56の東肩部に重複して存在する、幅約２ｍ、深さ20～25㎝ほどの浅い溝である。埋土は１～２層にわかれ、なかに弥生時代前期～後期の磨滅した土器片と図示した土師器片を含む。土層的には、溝56が埋まったのちの自然流路の可能性もある。

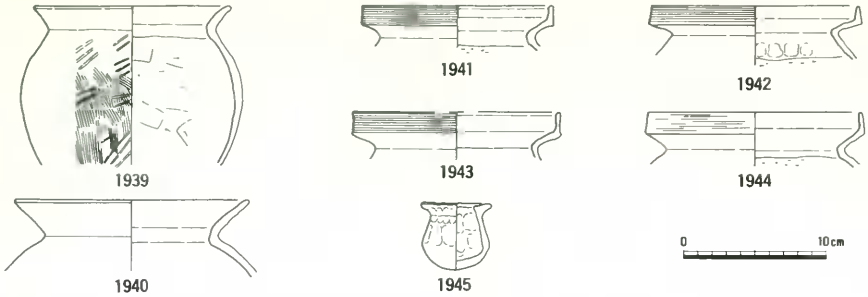
拡張させた口縁部外面に５～６条のクシ描き沈線を施す甕は、肩部の張りが少なく、古墳時代前期前葉の時期を示す。（柳瀬）

1．灰黄色土　2．暗灰褐色土

第501図　溝61（1/60）

溝62（第449・507図）

溝57と重複し、これを切る古墳時代の溝である。幅約110㎝で、深さは約15㎝である。第449図２・３層が溝62にあたる。埋土は灰色を基調とした微砂である。この溝の北側には古墳時代前期前葉の水田８(第449図１層)が広がる。調査範囲内では水口等は検出されなかったものの溝62は、この水田の縁辺部を走る用水路としての機能を果たしていたものと判断している。出土遺物は細片がほとんどであり図示していないが古墳時代前半と考えられる。また溝57とほぼ重複することから、溝62同様溝57を用水路と考えれば、水田の利用開始時期が溝57の時期まで遡る可能性は捨てきれない。（大橋）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1939	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部タタキのちハケメ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白　10YR8/1	
1940	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ナデ。	灰黄　2.5YR7/2	
1941	土師器	甕	口縁部クシ描き沈線、ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	淺黄橙　10YR8/3	
1942	土師器	甕	口縁部クシ描き沈線、ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	黒褐　2.5Y3/1	
1943	土師器	甕	口縁部クシ描き沈線、ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙　7.5YR7/4	
1944	土師器	甕	口縁部クシ描き沈線、ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい橙　5YR7/4	
1945	土師器	甕	ユビオサエ、ナデ。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　7.5YR8/1	手づくね

第502図　溝61出土遺物（1/4）

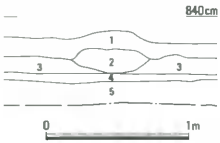
(5) 水　　田

水田８（Ａ地区）（第480・503・504図、図版27）

旧河道１上にその埋没過程で営まれた水田である。後述する古墳時代包含層とされる黒灰色粘質土を除去した段階で検出されている。水田７の上位にあたる。検出面の海抜高は両肩口で8.4ｍ前後、中央で8.2ｍ前後、と中央にレンズ状にたわんでおり、その傾斜に平行する南北方向の畦畔の方が明瞭に検出できた。畦畔の規模は幅50～70㎝、高さ５～10㎝でを測り、区画の完結している水田１枚の面積は約18～44㎡である。水田層の厚みは６～16㎝あり、２回に分けて掘り下げを進めた所、その間に帯状の鉄分の集積を検出した。幅20～30㎝の帯状を呈し、検出面の海抜高は8.15～8.2ｍである。平面図は第504図にトーンをかけて図示しているが、上面の畦畔とほぼ変わらぬ位置で検出され、重複している部分も認められた。上面の畦畔とこの鉄分集積部分の層位的な関係は第503図に示しているが、この部分ではほぼ真下に位置しており、畦畔の表面に集積した鉄分が何らかの理由で沈降したものとも考えられる。しかし、全ての位置が一致しているわけではなく、一段階古い水田に伴う可能性も考えられる。（久保）

水田８（Ｂ地区）（第270・271・453・505図、図版27・28）

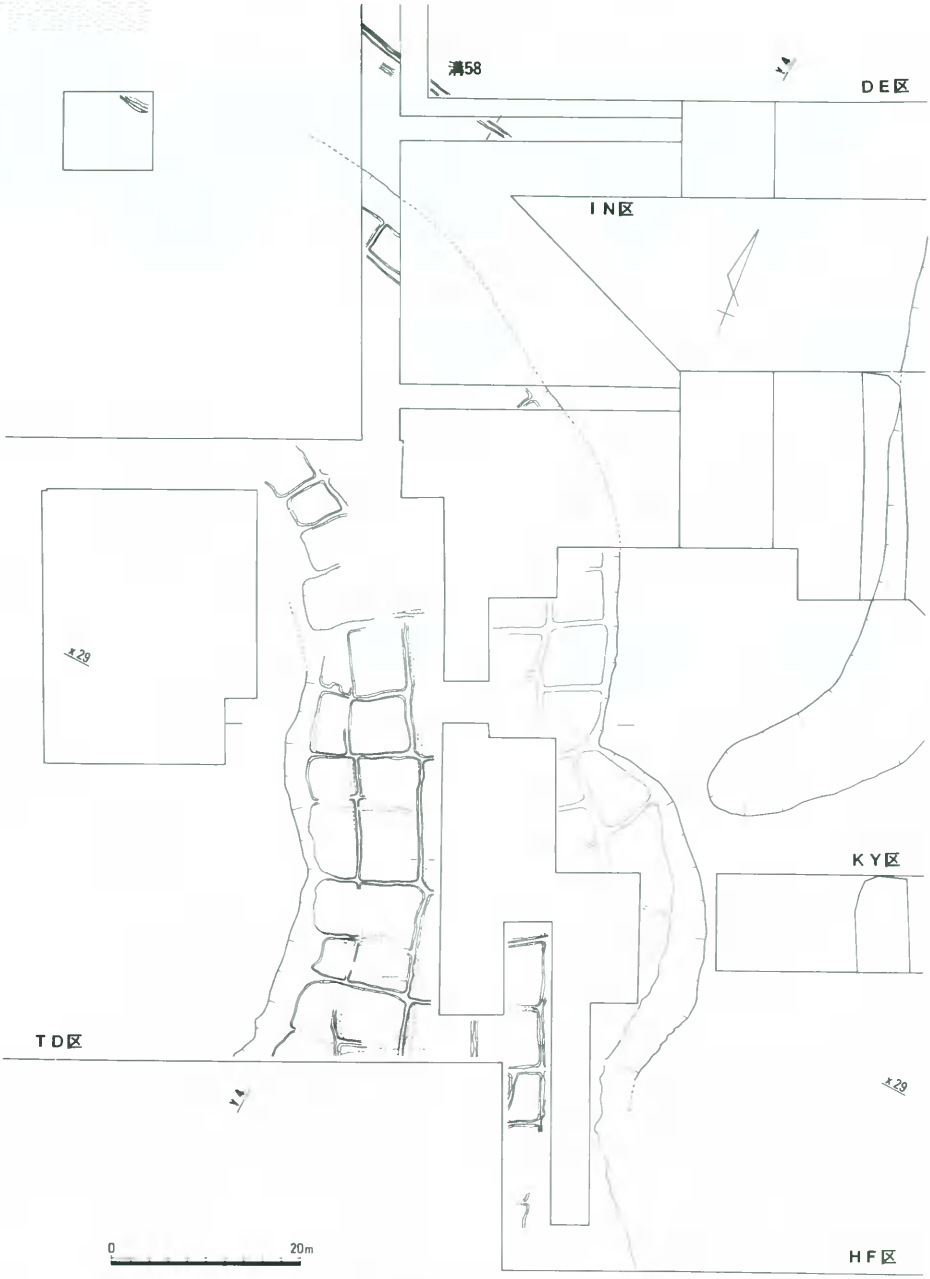
ＤＥ、ＪＹ、ＩＮ、ＫＹ１・２区で検出した水田である。水田の範囲は第505図に示したとおりで、南端部は角状に二手にわかれている。水田層は第270図Ｂ－Ｂ′断面の４層および第271図Ａ－Ａ′断面の12層に相当する。また第453図の上はＫＹ１・２区の、下はＫＹ２区の断面図で１層が水田８に相当する。検出した水田の総面積は約2340㎡である。水田面のレベルはＫＹ１・２区で海抜約8.50～8.55ｍ、ＩＮ区で8.40～8.45ｍ、ＪＹ区で8.30～8.40ｍで、北にむかって徐々に傾斜している。畦畔については水田上面において確認することができなかった。しかしながらＪＹ区とＩＮ区では、水田層



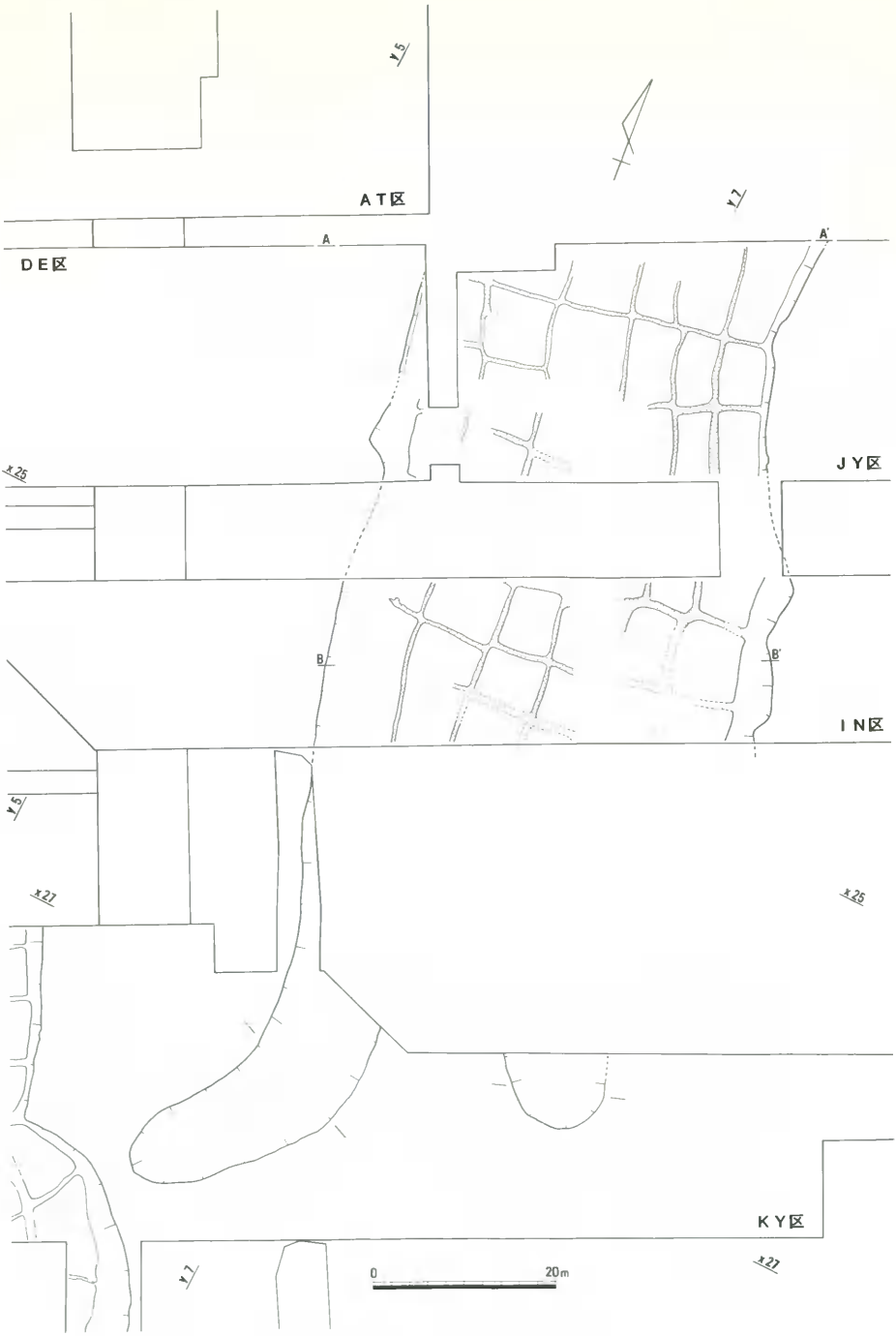
1．灰褐色粘質土　　4．暗灰褐色粘質土
2．鉄分沈着層　　5．黄灰褐色粘質微砂
3．灰茶褐色粘質土

第503図　水田８畦畔断面図（1/40）

を約５cm除去した段階で鉄分が沈着した部分が帯状に認められた。この部分を図示したのが第505図

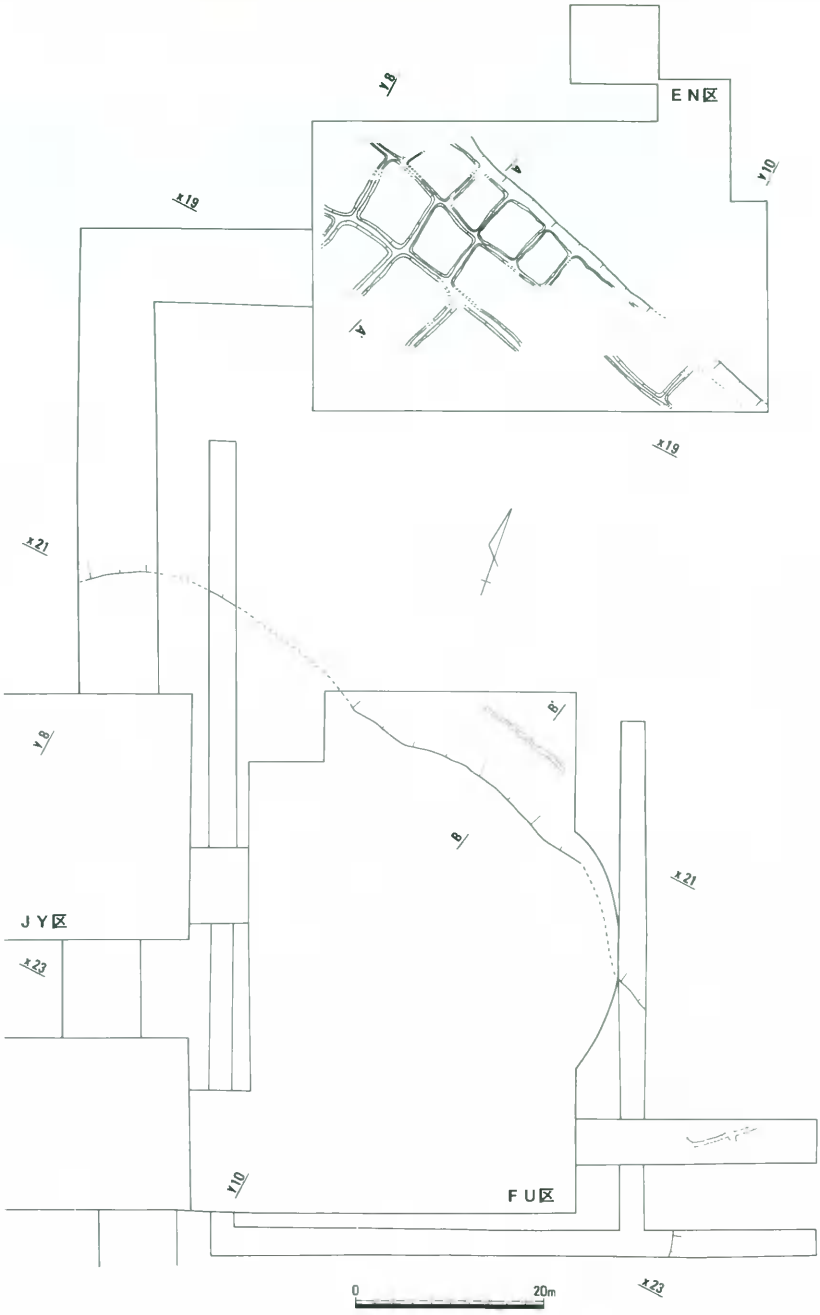


第504図　水田８（Ａ地区）（1/600）



第505図　水田８（Ｂ地区）（1/600）

のスクリーントーンの部分である。この鉄分が沈着した筋についてはその後ＴＤ区やＨ17区での調査

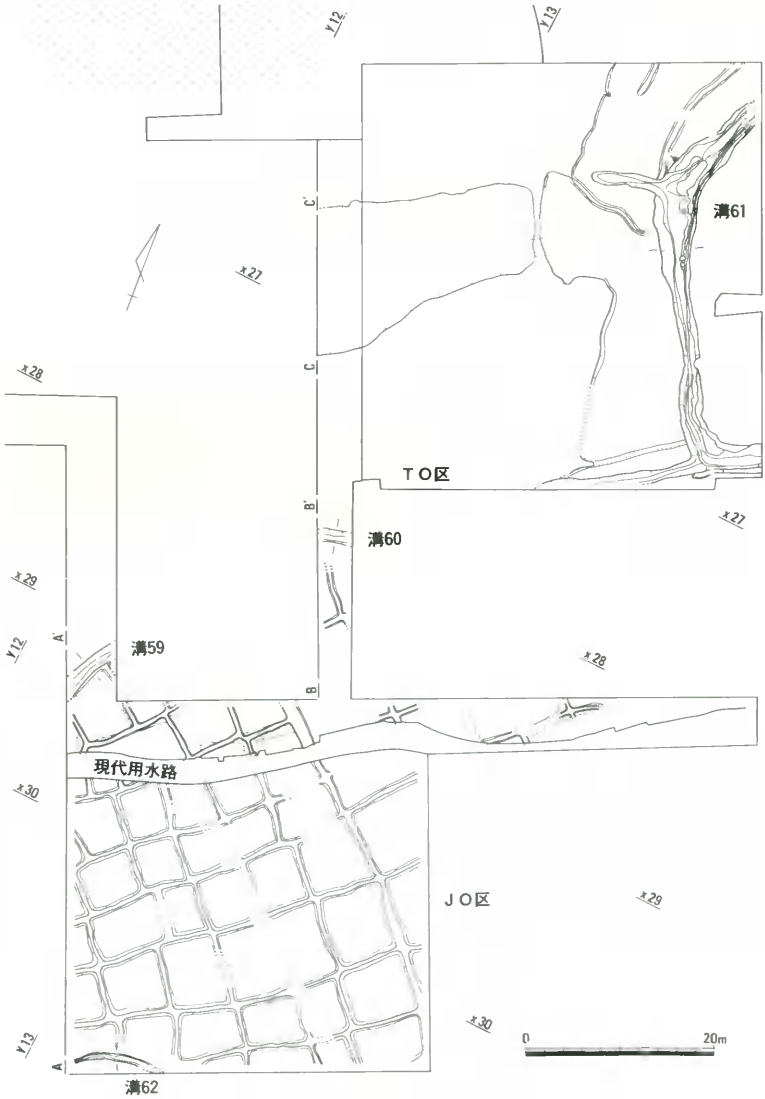


第506図　水田８（Ｃ地区）（1/600）

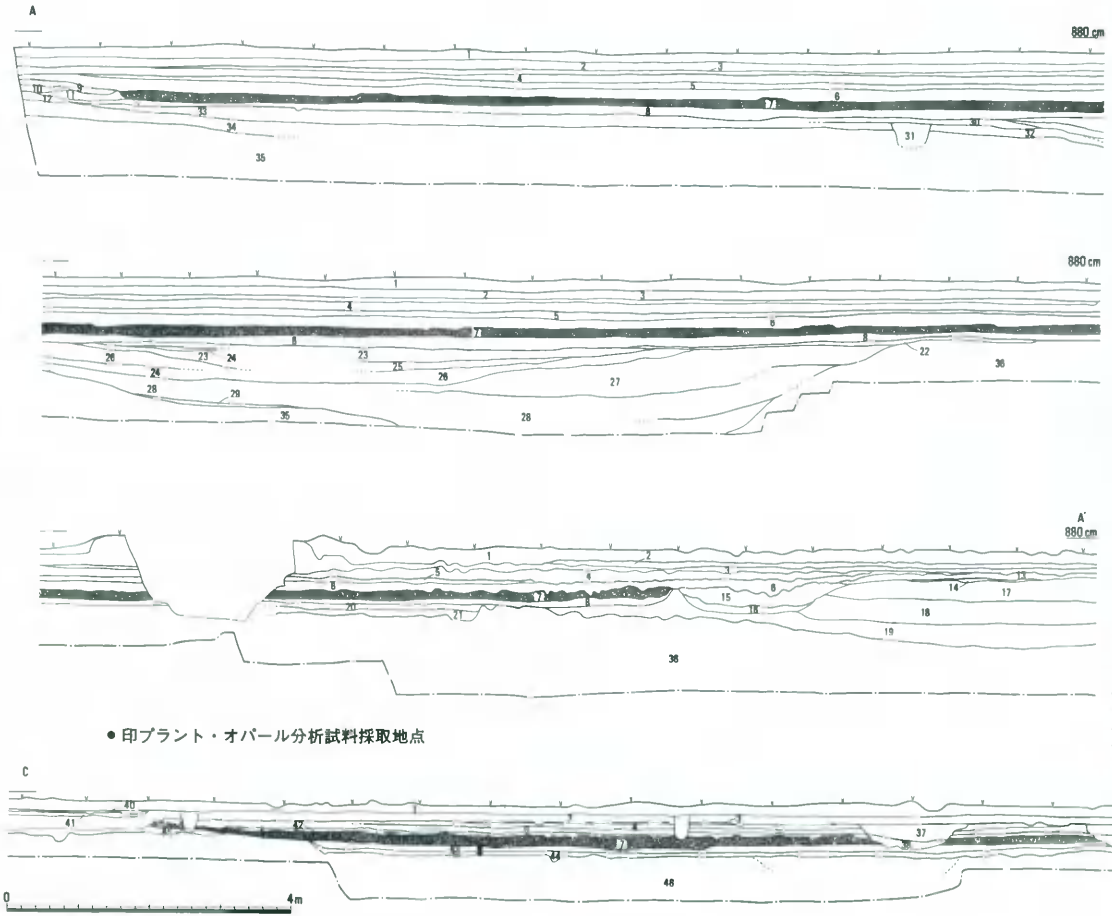
の結果、原因は明らかではないが本来の畦畔と多くが一致することが明らかになった。したがってＪＹ、ＩＮ区でみられた筋も本来の畦畔の位置に近いものと考えておきたい。そう考えるとＢ地区の水田は正方形あるいは長方形に小さく区画されており、推定できた小区画の面積は約31から57㎡を測る。ＩＮ区ではこの水田層の上面から古墳時代前期前葉の土器が少量ではあるが出土しており、水田の時期を決める根拠とした。（平井）

水田８（Ｃ地区）（第277・452・506図、図版28）

第３低位部に広がる水田で、ＥＮ・Ｋ１・Ｈ６・ＦＵ・Ｈ８・Ｋ４・Ｈ９の各区で検出され、調査



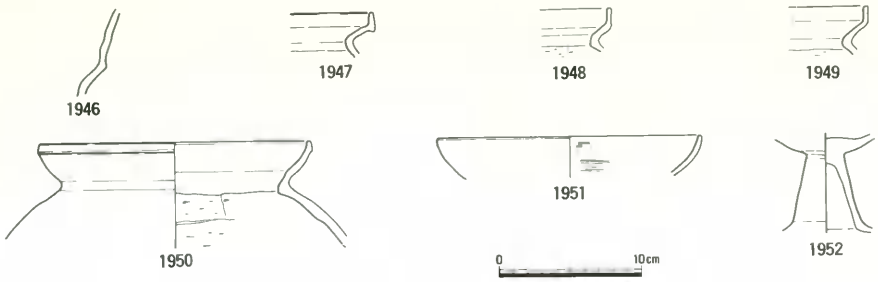
第507図　水田８（Ｄ地区）（1/600）



1．暗灰色粘質土（現耕作土）
2．明黄褐色砂質土（近世）
3．明灰褐色微砂まじり粘土（中世）
4．灰褐色微砂まじり粘土（古代）
5．暗灰褐色粘土（古代）
6．黒灰色粘土
7．灰白色粘土（水田8）
8．灰黄色粘質微砂（水田7）
9．暗灰色粘土と明灰褐色土の混層（溝62）
10．明灰黄色微砂、細砂（溝57）
11．暗褐色微砂
12．茶褐色微砂
13．淡灰色粘土
14．灰色粘土
15．淡灰色微砂（溝59）
16．淡褐灰色粘質土（溝49）
17．灰褐色砂質土
18．暗灰褐色粘質土
19．暗灰色粘土
20．灰褐色粘質土
21．灰褐色粘質土（黄褐色砂質土ブロック含む）
22．明黄灰色粘質微砂
23．黄灰色粘質微砂（河道2、弥生中期中葉～後葉）
24．暗青灰色粘土（〃）
25．青灰色粘質微砂（〃）
26．茶灰褐色粘質微砂（〃）
27．灰色微砂まじり粘土（河道2、弥生前～中期後葉）
28．灰オリーブ色微砂まじり粘土（〃）
29．黒色炭層（〃）
30．茶灰褐色粘質微砂
31．灰茶褐色粘質微砂
32．灰黄色微砂
33．明茶褐色微砂
34．暗茶褐色微砂
35．灰褐色粘質微砂
36．淡黄色粘質土
37．灰白色粘土と暗灰色粘土（中世溝）
38．灰白色粗砂（中世溝）
39．灰白色微砂（中世溝）
40．灰白色砂質土
41．暗褐灰色粘質土
42．灰色粘土
43．黄灰白色砂質土
44．暗灰色粘土
45．暗褐灰色粘質土
46．淡黄褐色微砂

●印プラント・オパール分析試料採取地点

第508図　D地区土層断面図（1/80）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1946	土師器	壺	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白　10YR8/1	
1947	土師器	甕	口縁部凹線？、ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白　10YR8/1	
1948	土師器	甕	口縁部クシ描き沈線、ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1949	土師器	甕	口縁部クシ描き沈線、ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰黄　2.5Y7/2	
1950	土師器	甕	口縁部ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。胴部ケズリ。	灰白　10YR8/2	
1951	土師器	椀	ヨコナデ。	ハケメのちナデ？。	にぶい黄橙　10YR7/2	
1952	土師器	高杯	脚部ミガキ？、	杯部ミガキ？　脚部ケズリ	白　2.5Y8/2	

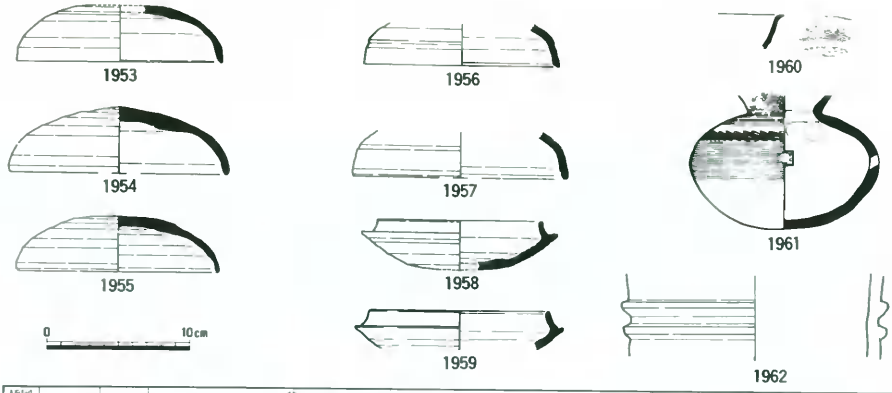
第509図　水田８関連出土遺物（1/4）

された面積は、1,880㎡に上る。検出された水田面は、低位部の地形に規制されてその中央部へ向けて両岸から徐々に下がっており、ＥＮ区に例をとると、水田北端の海抜高8.3ｍに対して、これから約20ｍ離れた水田面では8.1ｍで、20㎝下がっていることとなる。因みにＨ９区東端での海抜高は8.15ｍである。畦畔についてはＥＮ区で検出されている。上幅で20～60㎝、下幅で50～120㎝を測り、高さは５㎝までで、低位部を縦断する形となる東西方向の畦畔が優先し、その間を南北方向の畦畔で区切っている。いずれの方向の畦畔も低位部中央部にいくほどその間隔が広くなり、東西方向で北から５ｍ、６ｍ、７ｍ以上、南北方向で３ｍ、５ｍ、７ｍと変化している。それに伴って田１枚の面積も広くなり、具体的には、北端添いで20～27㎡に対して、その南側の列では30～45㎡という数字を示している。ＦＵ・Ｋ４の両区では、畦畔の痕跡と考えられる鉄分の沈着が認められ、縦断方向の畦畔は水田域の端部から４～５ｍの位置で検出されている。　（光永）

水田８（Ｄ地区）（第451・508図、図版28・29・30）

ＴＯ、Ｈ15・16・17、ＪＯ区において検出した水田である。水田層は第451図Ｂ－Ｂ′断面の12層、第508図Ａ－Ａ′、Ｃ－Ｃ′断面の７層に相当する。検出した水田の総面積は約2560㎡である。

ＴＯ区では溝61の西側に水田層が確認できたが、県立大学の発掘調査では最初に手掛けた調査区であったため、水田層としての十分な調査はできていない。この一部はかつては微高地であったと考えられ、他の水田とは状況が異なっているといえる。また畦畔状の高まりや鉄、マンガンの筋が図のように部分的に確認できたが、断定はできない状況であった。ＴＯ区とＨ15区の北の水田層のレベルは海抜約8.20～8.25ｍである。一方、Ｈ15・16・17とＪＯ区では幅30㎝前後で、高さ１～２㎝程度の小畦畔が検出できた。水田はこの小畦畔によって短形に区画されており、明らかにできたそれぞれの面積は18㎡～50㎡を測る。またＨ17区では水田層を約５㎝除去した段階でスリーントーンで示したような鉄、マンガンの筋が検出でき、ほぼ畦畔に一致することが確かめられた。この地区の水田面のレベルは約7.8～8.0ｍでＪＯ区の東中央部が最も深かった。時期については、Ｈ17区の水田層の上面において土器（**1949**）が出土しており、埋没時期を示すものと考えておきたい。なお溝59～62についてはこの水田層に伴う水路と考えられる。　（平井）



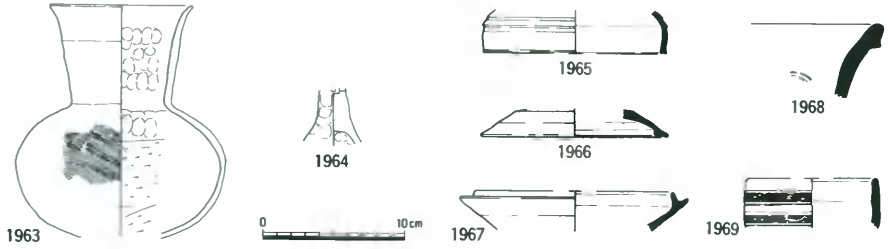
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1953	須恵器	杯蓋	口縁部ヨコナデ。天井部ケズリ左方向。	ヨコナデ。	青灰　5B6/1	口径14.2cm。
1954	須恵器	杯蓋	口縁部ヨコナデ。天井部ケズリ左方向。	口縁部ヨコナデ。天井部ユビオサエ、ナデ。	灰白　N8/0	口径15.0cm。
1955	須恵器	杯蓋	口縁部ヨコナデ。天井部ケズリ。	ヨコナデ。	明青灰　5BG7/1	口径13.9cm。
1956	須恵器	杯蓋	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白　N7/	口径13.6cm。
1957	須恵器	杯蓋	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白　N7/0	口径14.9cm。
1958	須恵器	杯身	口縁部ヨコナデ。底部ケズリ。	ヨコナデ。	灰白　7.5YR7/1	口径12.9cm。
1959	須恵器	杯身	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白　N8/	口径12.4cm。
1960	須恵器	甕	口縁部ヨコナデ、クシ描き波状文。	ヨコナデ。	灰白　N7/	1961と同一個体。
1961	須恵器	甕	頸部、胴部上半クシ描き波状文。胴部カキメ。穿孔。	ヨコナデ。底部ユビオサエ、ナデ。	灰白　N7/	
1962	土師器	器台？	ナデ　貼付突帯。	ナデ？　ケズリ？	浅黄　2.5Y7/3	

第510図　古墳時代黒灰色粘土層出土遺物（1/4）

(6)　その他の遺構・遺物

すでに述べた水田８の上層には、各地区とも黒灰色(各調査区で色調は若干異なる)粘土層が堆積していた(例えば第508図の６層)。この層の厚さは地点によって約５～30cmと異なっており、厚い部分では分層も可能であった。第510図はこの土層中から出土した遺物の一部で、５世紀後半から７世紀前半頃までの遺物を含んでいた。この土層については、湿地状態の時に堆積した土層或いはこの層自体が水田層である可能性などが考えられるが、いまのところ明確ではない。

また第511図は遺構に伴わなかったり、古代以降の遺構から出土した遺物である。　(平井)



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1963	土師器	直口壺	口縁部ヨコナデ。頸部ミガキ　胴部ハケメ。全面赤色顔料。	口縁部ヨコナデ　頸部ユビオサエ、ナデ。胴部上半ナデ、下半ケズリ。	赤褐　10R5/4	頸部内面赤色顔料。
1964	土師器	蛸壺	ユビオサエ、ナデ。穿孔。	ユビオサエ、ナデ。	黄灰　2.5Y6/1	
1965	須恵器	杯蓋	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰　N6/0	口径13.0cm。
1966	須恵器	杯蓋	ヨコナデ。天井部ケズリ。	ヨコナデ。	灰白　N7/	口径13.2cm。
1967	須恵器	杯身	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白　N7/0	口径14.0cm。
1968	須恵器	甕？	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白　2.5Y8/1	
1969	須恵器	提瓶？	ヨコナデ、カキメ。	ヨコナデ。	灰白　N7/1	

第511図　遺構に伴わない古墳時代の出土遺物（1/4）

第７節　古代・中世の遺構・遺物

１．概　　要

古代・中世と考えられる遺構は、掘立柱建物、土壙、柵列状遺構、溝、素掘溝群、土手状遺構、水田などが検出できた。

遺物を伴う遺構は少なく時期比定が困難なものが多いが、古代と考えられるのは掘立柱建物３棟と溝、素掘溝群、水田である。建物は大規模でなく、規格性も認められない。調査地北端部に重複する形で検出された溝は、現存する地割りに沿っている。素掘溝群は３か所で確認できた。畑作に関連する遺構ではないかと考えているが、明確ではない。また時期についても断定できるだけの資料はないが、古代末から中世頃ではないかと考えている。溝の方向は現存する地割りに沿っている。水田についてはＴＤ１区において畦畔が検出でき、畦畔中から「馬養」銘の入った須恵器壺と牛歯が出土しており何らかの祭祀の跡と考えられ注目される。古代の遺物は多くはないが、灰釉陶器や緑釉陶器、瓦、陶硯の出土は、遺跡の性格と考える上で重要であろう。

中世と考えられる遺構は掘立柱建物６棟、土壙、柵列状遺構、溝などがある。掘立柱建物はＡＴ区とＪＯ区で検出されているが、いずれも小規模である。溝は多数検出できたが、幹線水路と考えられる溝113・114は北西－南東方向に流走しており、古代の溝と方向は異なっている。　（平井）

２．遺構・遺物

(1) 建　　物

建物42（514・515図）

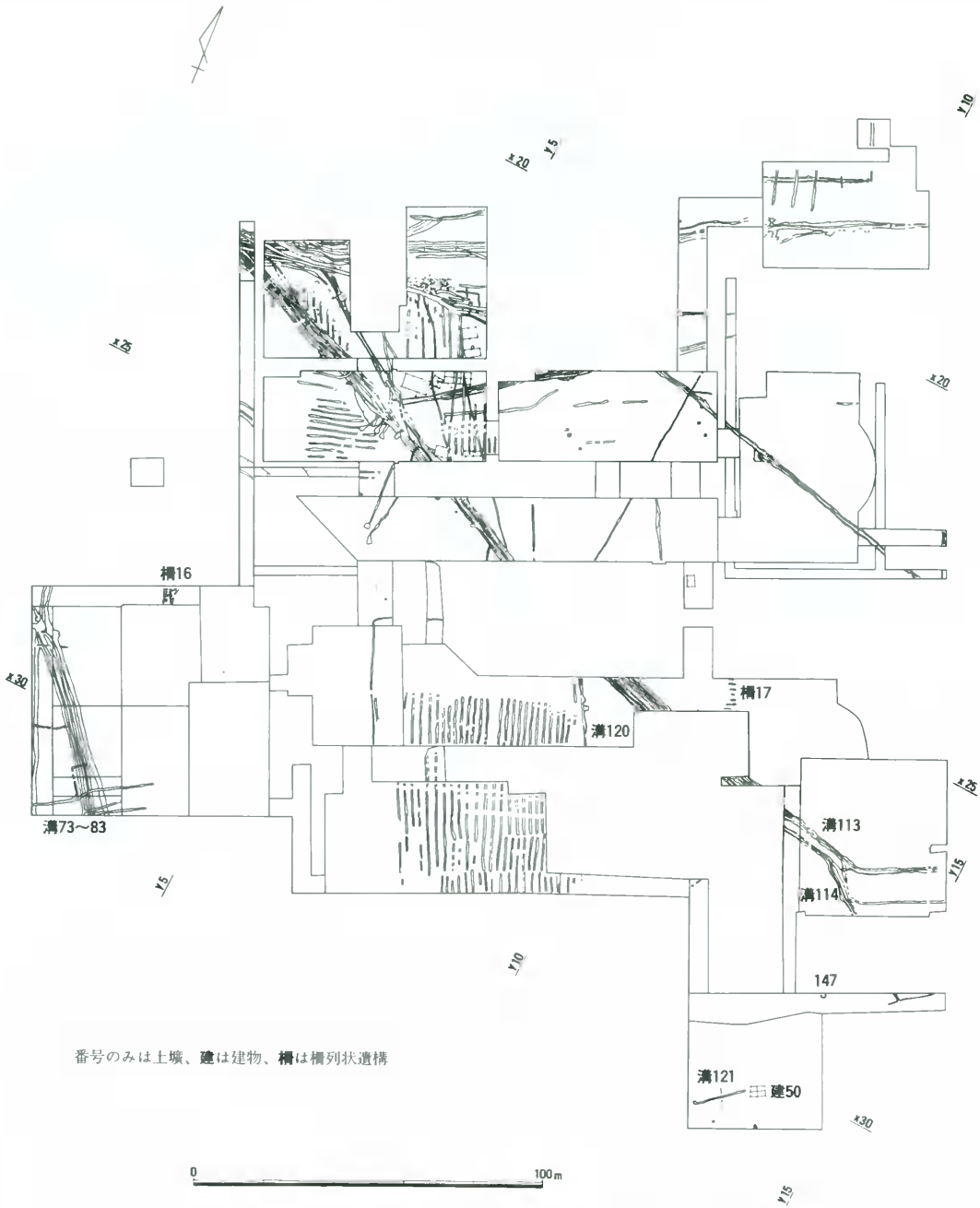
ＤＥ区北端の微高地上に位置する。４×１間の規模を有する。柱穴は径25～30㎝の円形を呈し、深さ20～30㎝、底面の海抜高は約8.2～8.3ｍを測る。柱痕はすべて確認され、径15㎝前後の円形を呈する。柱痕内埋土は検出時点で確認され、Ｐ７～９の柱痕内において土器が出土しており、抜き取りが行われた可能性が考えられる。**1971**はほぼ完形の土師器杯であり、Ｐ９の柱痕内から出土している。底面はヘラ起こし後未調整で、粘土紐巻き上げ痕を残している。Ｐ９～13の柱穴列は別の建物になる可能性も考えて精査をしたが対になる柱穴列は確認できなかった。柱穴間距離が不揃いであるが柱穴の埋土や規模に差がみられないこと、主軸方向に平行関係にあることから建物に付随する何らかの施設と考えた。平安時代中期頃に属すると考えられる。　（久保）

建物43（第516図、図版30）

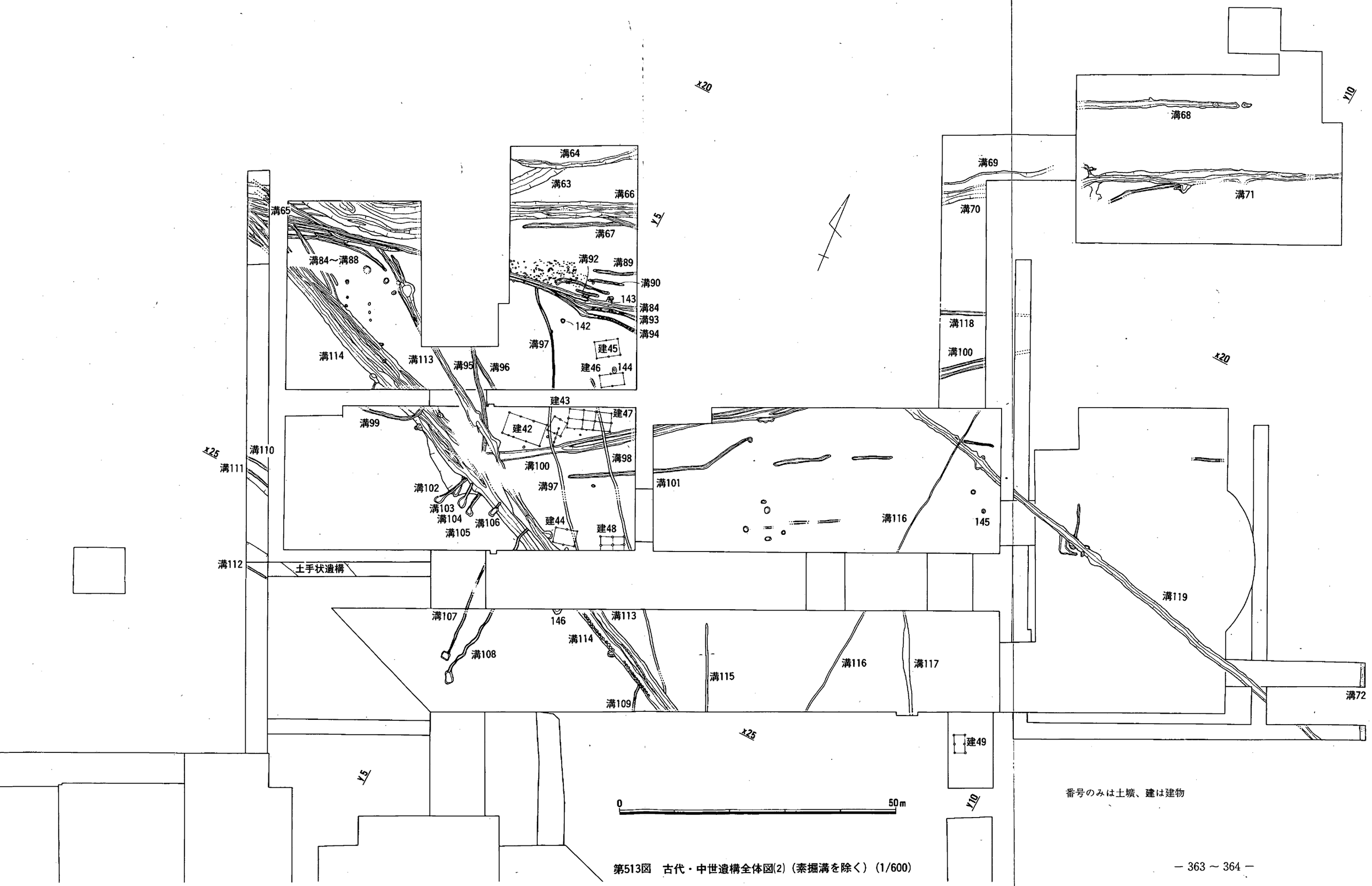
建物42の東において検出された、２×１間の建物である。床面積は約20㎡になる。柱穴の規模は径30㎝前後、深さ20～30㎝、底面の海抜高は8.2～8.3ｍを測る。柱痕はすべて確認され径約10㎝の円形を呈する。出土遺物がないため時期の特定はできないが、柱穴の形態や規模は建物42と類似しており、相前後する時期に存在していたと想定される。しかし、互いの占有範囲が重複しており、併存していたとは考えられない。　（久保）

建物44（第517図）

建物42の南、ＤＥ区の南東端に位置する。２×１間の建物で、Ｐ５が若干北へずれているが比較的

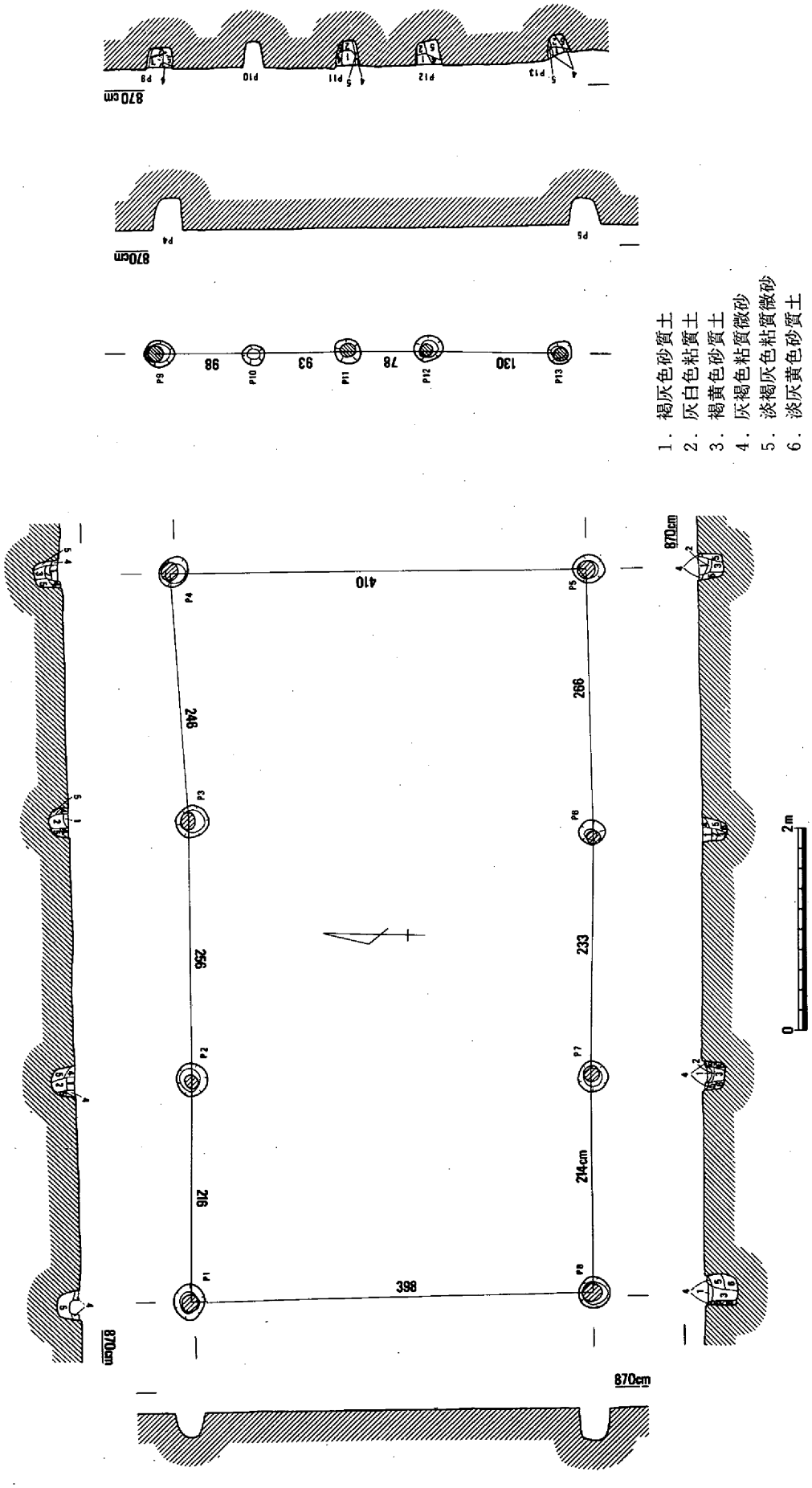


第512図　古代・中世遺構全体図(1)（水田を除く）（1/1500）

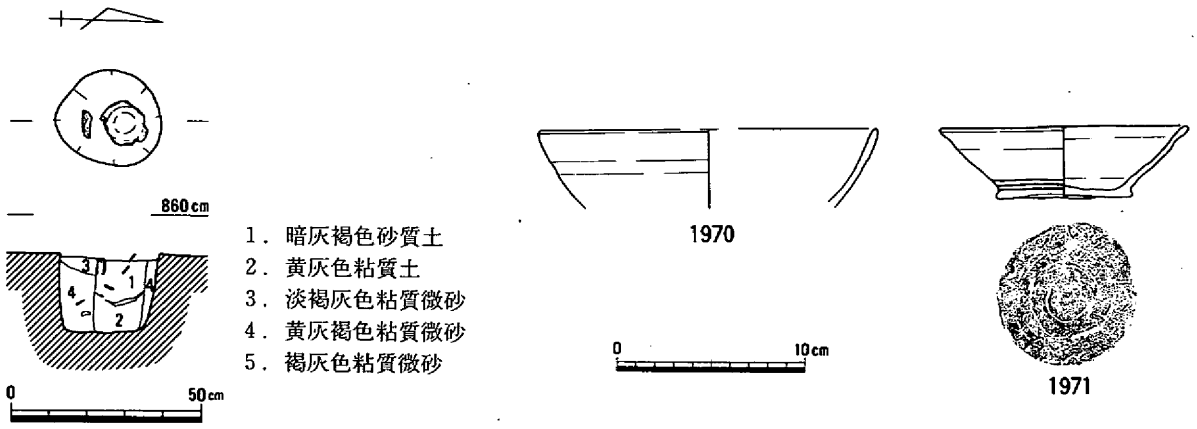


番号のみは土壙、建は建物

第513図　古代・中世遺構全体図(2)（素掘溝を除く）（1/600）



第514図　建物42（1/60）

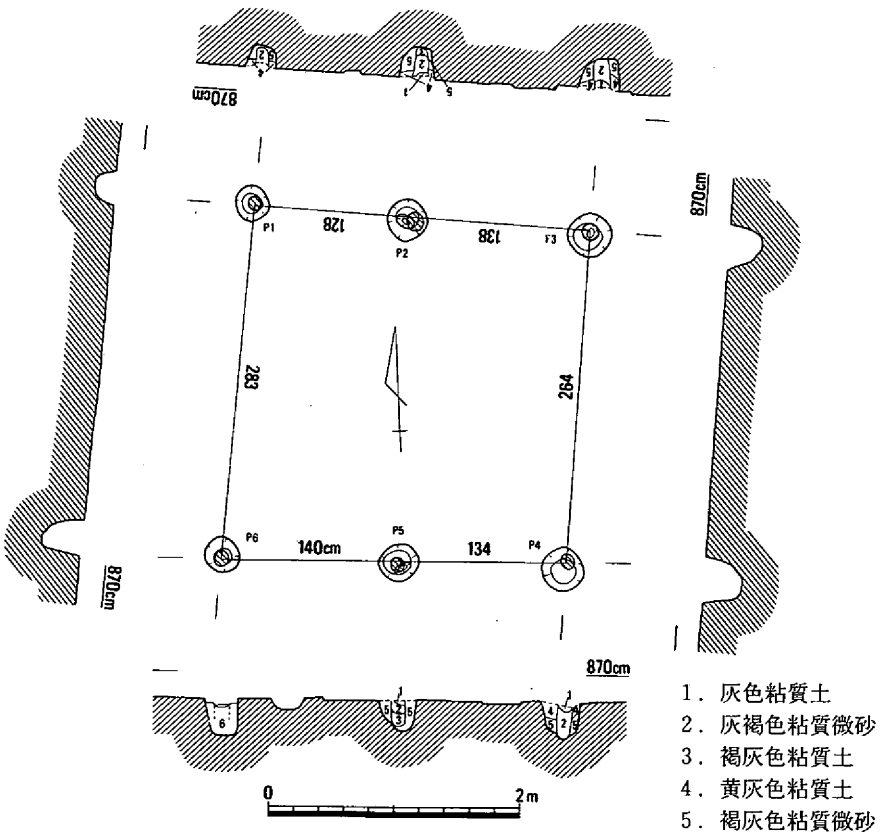


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1970	土師器	椀	ヨコナデ？。	ヨコナデ、ミガキ。	灰白　7.5YR8/2	内黒。
1971	土師器	杯	胴部ヨコナデ。底部側面沈線２本。底部ヘラキリ。	胴部ナデ。	にぶい黄橙　10YR7/3	

第515図　建物42、Ｐ１(1/20)・出土遺物（1/4)

整った平面形を有する。柱穴は不整円形をしており、Ｐ１・２は隅丸方形に近い。深さ40～50cm、底面の海抜高約7.9ｍを測る。柱穴の形態や規模、埋土の状況は建物42・43と大きく異なり、埋没時期の差を反映しているものと考えられる。しかしその前後関係を比較しうるだけの良好な遺物の出土はなく、包含層や他の遺構との関係から少なくとも弥生時代よりは新しく中世よりは古いといえ、古代に含めて考えた。

（久保）



第516図　建物43（1/60)

建物45（第518図、図版31）

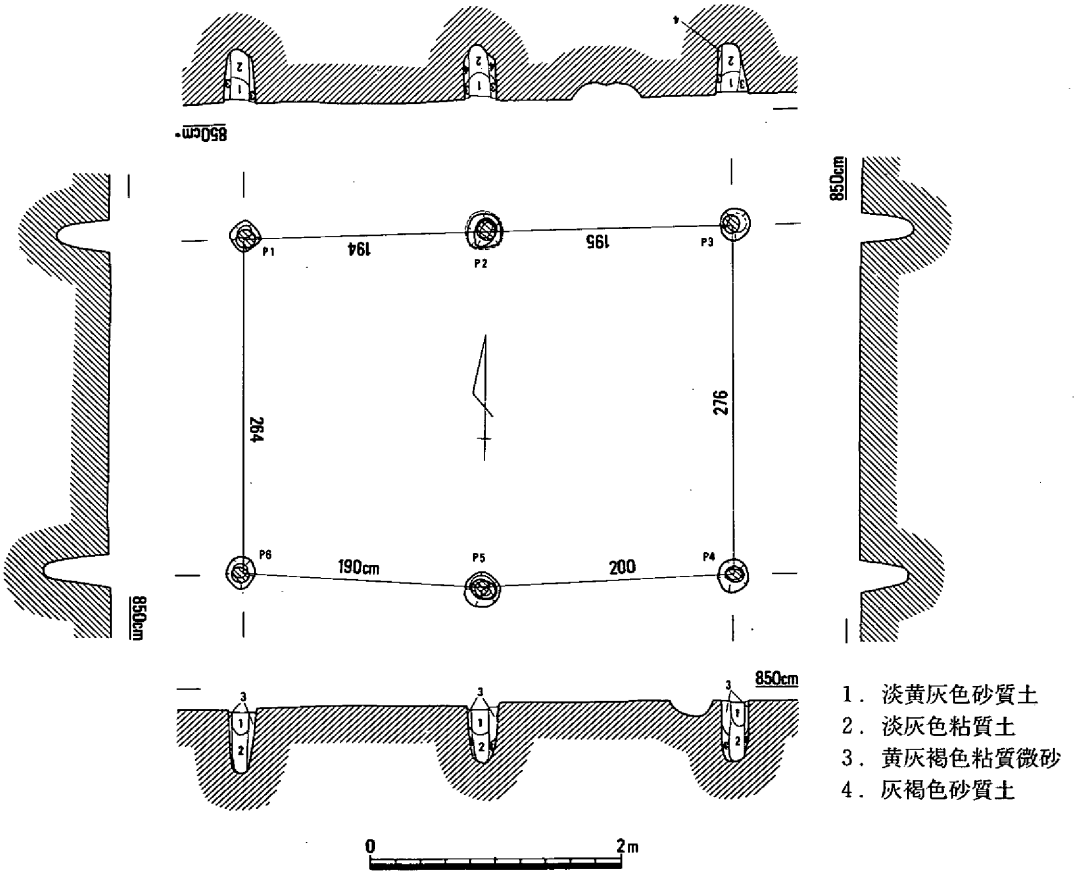
ＡＴ区南東隅に所在し、溝94との距離2.2ｍを測る。主軸をＮ－58°－Ｅにおく２×１間の掘立柱建物である。平面形はほぼ長方形で、規模は439×300cmを測り、柱間は桁行で207～229cm、梁間で294～300cmである。柱掘り方の平面形はいずれも楕円形で、長径20～40cmを測り、深さは16～51cmである。土層断面の観察からは各柱穴に径10cm前後の柱痕跡が認められ、Ｐ５およびＰ６の１層は抜き取りの痕跡とも考えられる。少量の土器が出土しているが、時期は中世の枠でとらえたい。　（光永）

建物46（第519図）

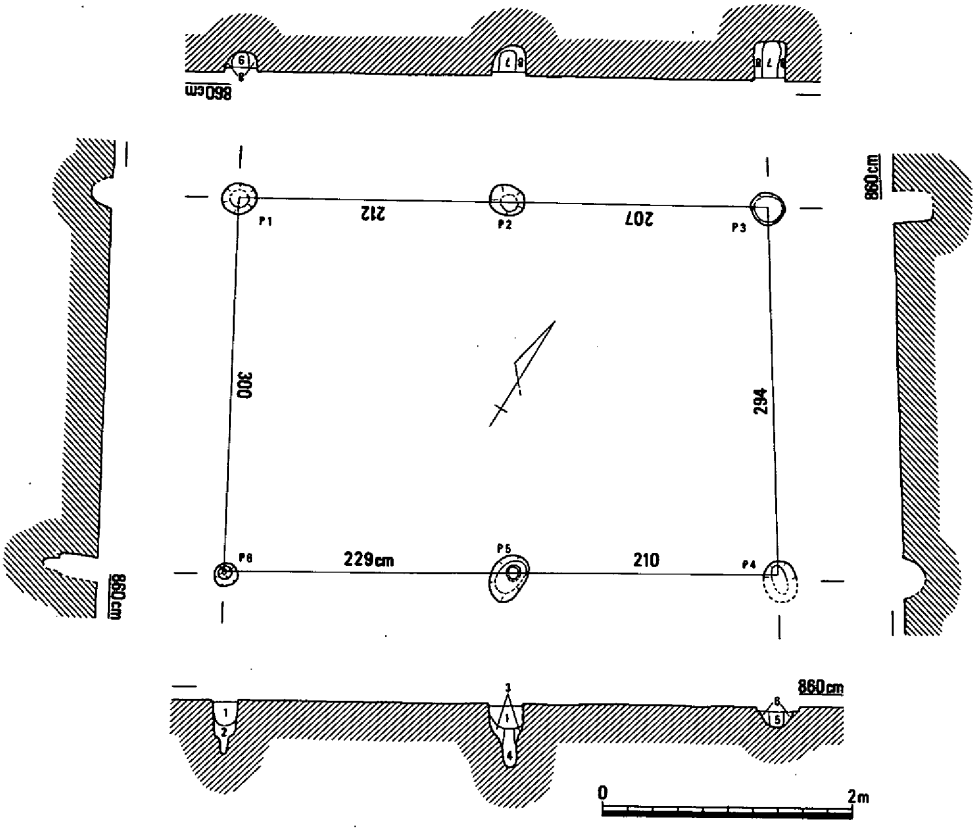
ＡＴ区南東隅に所在し、建物45と主軸方向を平行させ、両梁間を揃えている。建物間の距離は３ｍ強で、建物45の梁間よりもやや長い。Ｐ２がやや北へずれるものの、平面形はほぼ長方形を呈し、規模は423×223cmを測る。柱間は、桁行で192～231cm、梁間で209～223cmである。柱掘り方の平面形は円形に近い楕円形で、長径25～30cmを測り、深さは15～40cmである。少量の土器が出土しているが、時期を限定するには至らず、中世の枠でとらえられる。　（光永）

建物47（第520図）

ＤＥ区の北東端、建物43の東に位置する。３×２間の総柱の建物としているが中央部分で分かれ、ほぼ同規模の２×１間の建物が２棟になる可能性がある。Ｐ２・Ｐ14は柱穴の線上から南へずれており建物を構成する柱ではないかもしれないが、他の柱穴と同じ土で埋没していたので図示している。柱穴の規模は径20～26cmの円形で、深さ30～40cm、底面の海抜高8.1～8.2ｍを測る。柱穴の一つから橙白色を呈する土師質椀が出土しており、古代末～中世に属すると考えられる。検出面上面は中世水田層で覆われており、それ以前に埋没したと考えられるが、いつまで遡るかは不明である。（久保）

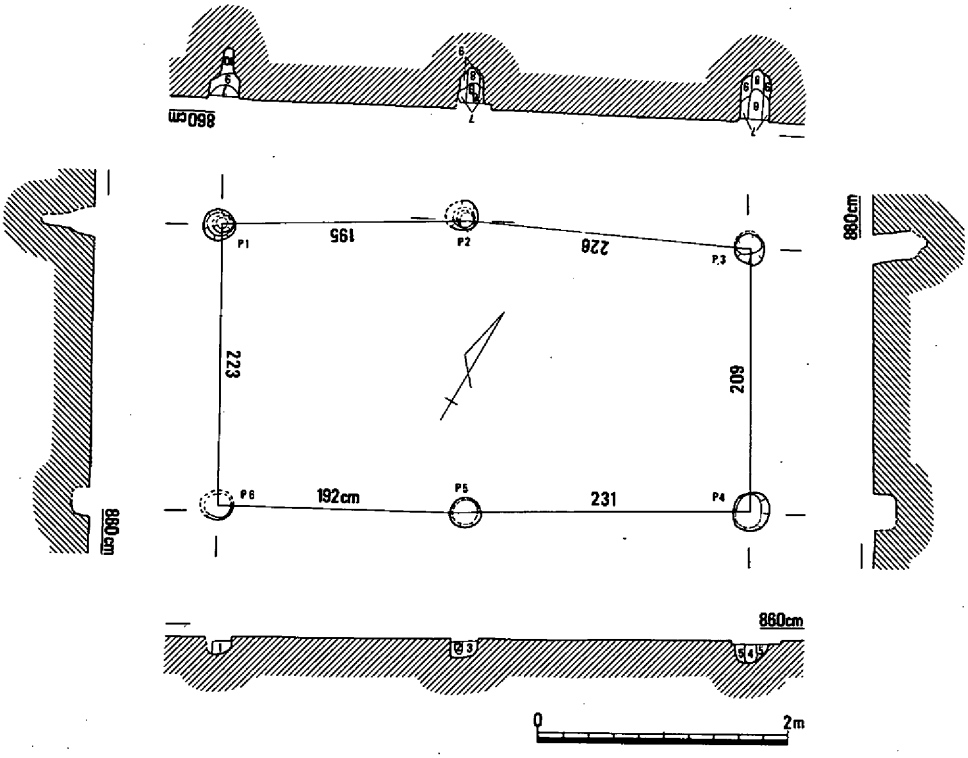


第517図　建物44（1/60）



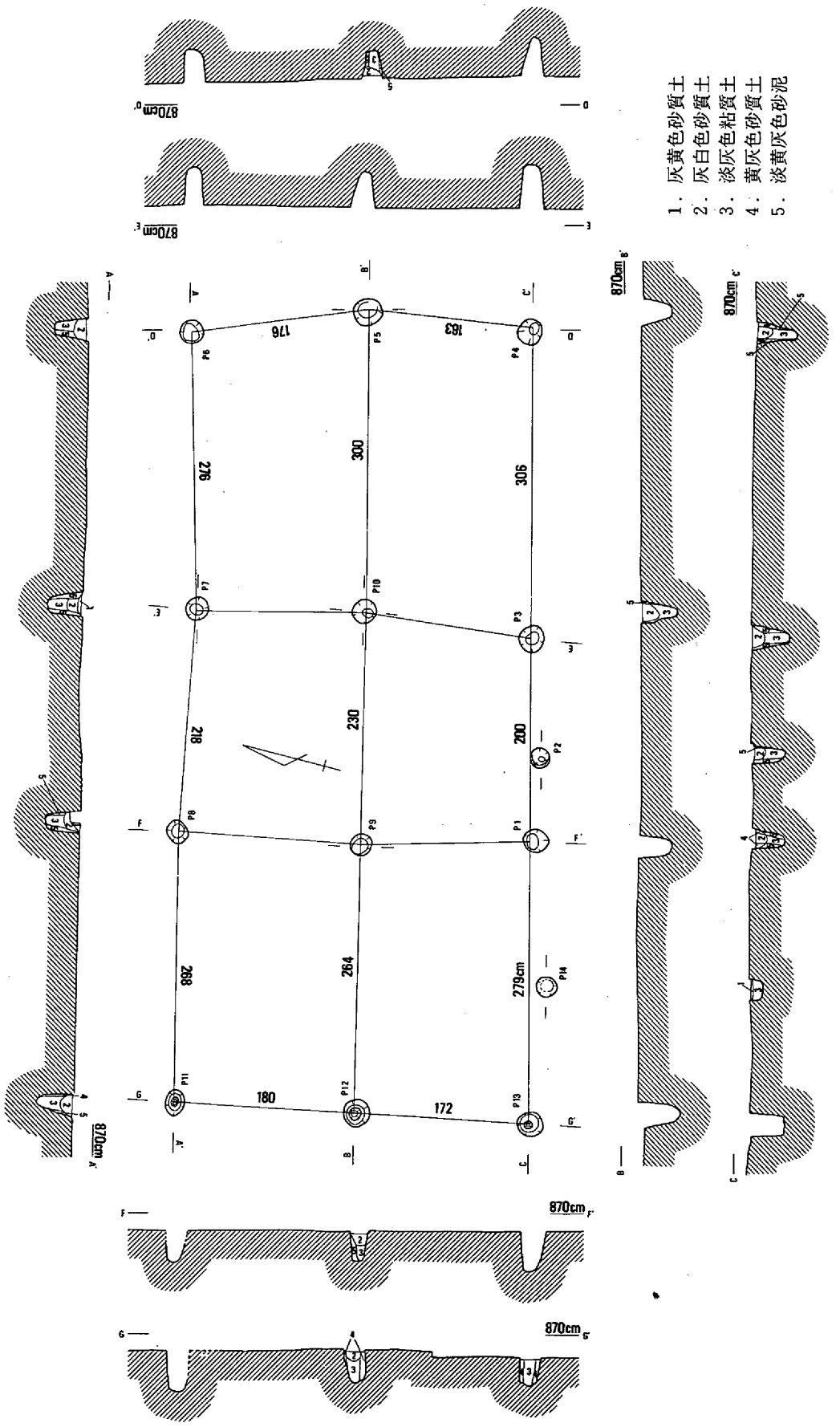
1．暗青灰黄褐色土
2．灰白粘土
　（黄色土まじり）
3．暗灰褐色土と青灰色粘土と黄色土の混合
4．青灰色粘土
　（黄色土まじり）
5．灰色粘土
　（焼土含む）
6．黄色土
　（灰色粘土まじり）
7．青灰黄褐色土
　（灰色粘質土まじり）
8．青灰黄褐色土
9．青灰黄色粘質土

第518図　建物45（1/60）



1．暗灰褐色土
　（焼土含む）
2．灰色粘土
3．青灰褐色土
4．青灰色粘質土と青灰褐色土の混合
5．青灰褐色土
　（黄色土まじり）
6．青灰黄褐色土
　（青灰色粘土まじり）
7．青灰黄褐色土
8．青灰色粘土
　（黄色土まじり）
9．青灰色粘土と黄色土の混合
10．青灰黄褐色土
　（青灰色粘土まじり）

第519図　建物46（1/60）



第520図　建物47（1/60）

建物48（第521図）

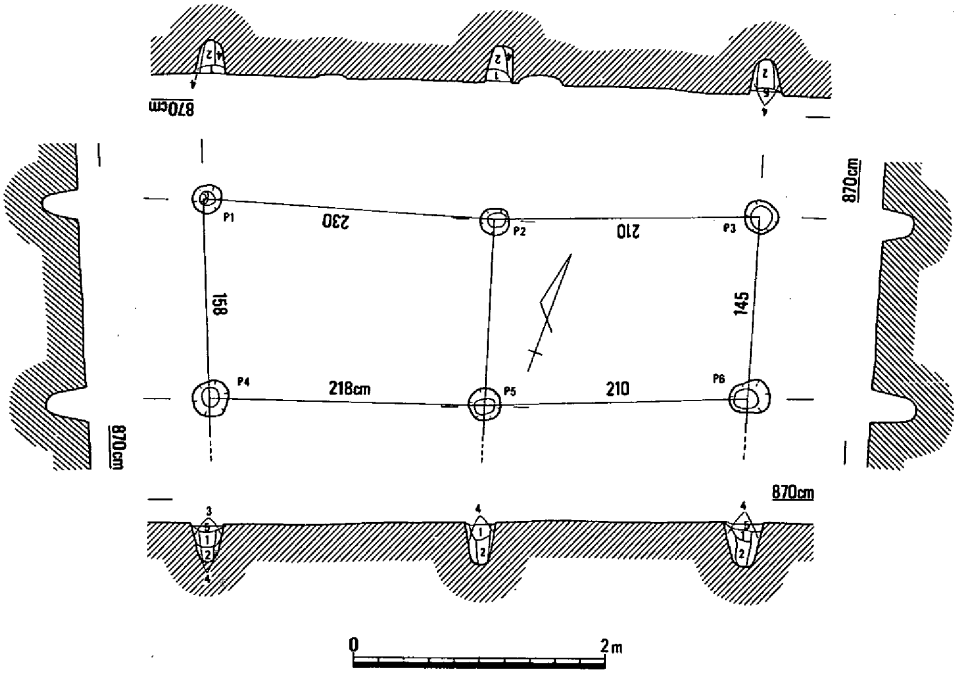
建物47の南に位置し、ほぼ平行関係にある。東西２間、南北１間分を検出しているが、さらに南にのび、総柱の建物となる可能性もある。柱穴の規模は径20～30cmの円形を呈し、深さ30cm前後、底面の海抜高8.2m前後を測る。柱穴内から土器の細片が出土しているが時期を特定しうるほど良好な資料ではなかった。建物47と同様の埋土で、上面を中世耕土に被覆されていることから古代末～中世に属すると考えた。（久保）

建物49（第522図）

調査区のほぼ中央、Ｋ５区に位置する。主軸を南北にもつ２×１間の建物である。柱穴の規模は径20～30cm、深さ50～70cm、底面の海抜高7.7～7.9mを測る。微高地上で削平が激しく、弥生時代以前の遺構と同一面で検出されている。埋土は上面を覆っている中世水田層に近い白っぽい粘質土であり、弥生時代以前とは明確に識別される。柱穴から土師質椀の高台細片が出土しており、鎌倉時代に埋没したと考えられる。（久保）

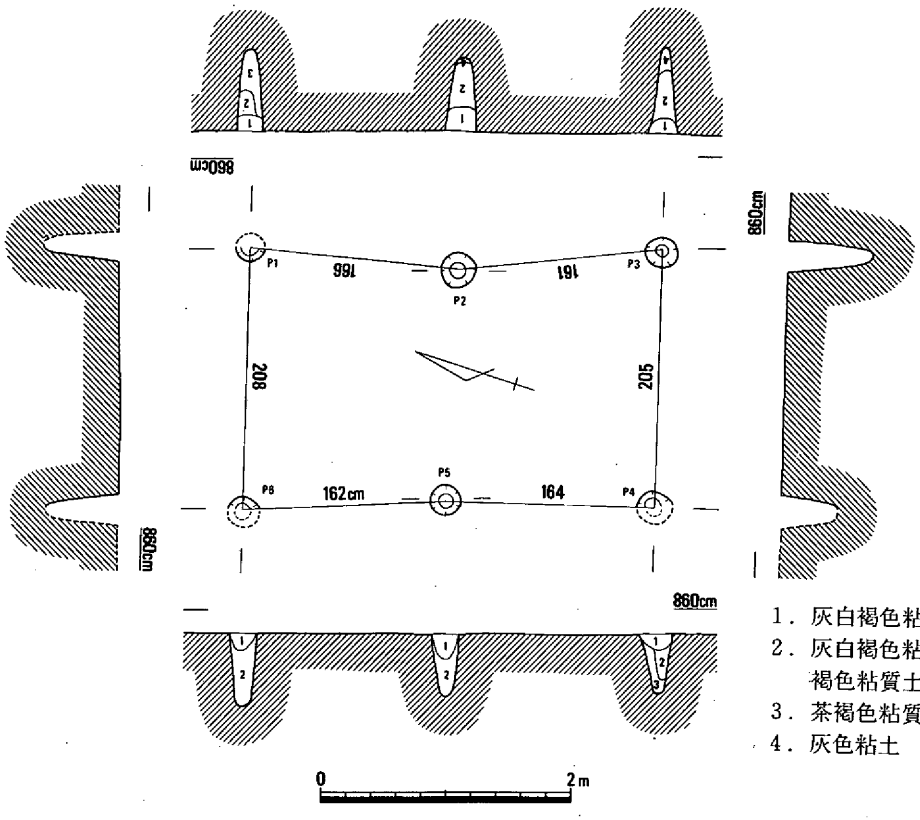
建物50（第523図）

ＪＯ区中央部で検出された桁行２間、梁間２間の東西棟の建物である。主軸は、Ｎ－65°－Ｗを指し、床面積は、13.6m²である。桁行は、北辺が西から186cm、255cm、南辺が205cm、248cmであり、梁間は、西辺が南から143cm、168cm、東辺が145cm、155cmと不揃いであり、柱が通っていない。また東柱と思われるＰ13も通りが悪く間仕切りとは考えられない。検出した柱穴は、いずれも小規模な方形を呈し、断面が三角形状をなすことから、これらは柱痕跡であり、角材の先端を尖らせたものを使用していたことが考えられる。埋土は黄灰色粘土である。柱穴の掘り方自体は、精査したが検出できず、角材を打ち込むことによって建てた可能性がある。遺物は出土していないため時期を判断することは困難であるが、埋土の色調と検出面等から大きく中世～近世の幅のなかを考えている。（大橋）

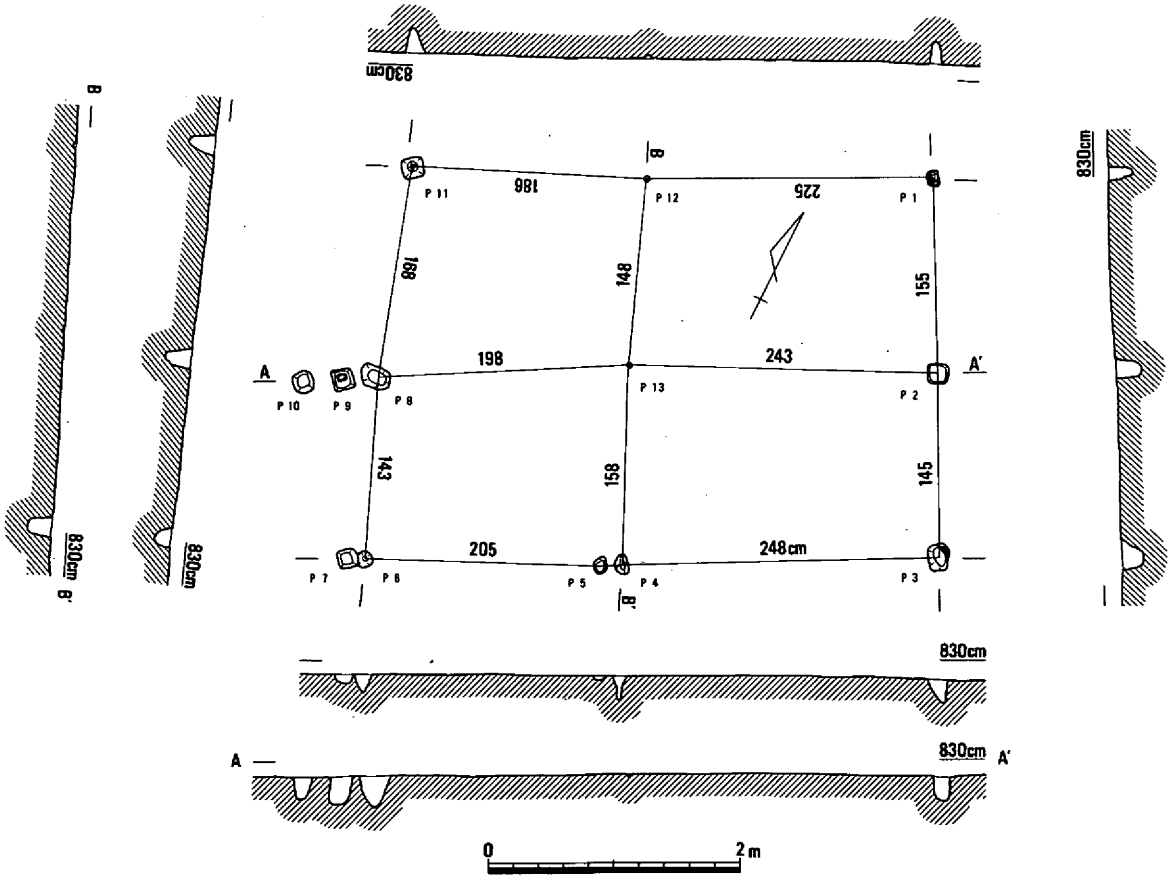


１．淡灰黄色粘質微砂　２．淡灰色粘質土　３．淡黄灰色砂質土　４．淡灰褐色砂質土　５．淡灰黄色砂質土

第521図　建物48（1/60）



第522図　建物49（1/60）



第523図　建物50（1/60）

(2) 土　　壙

土壙142（第524図）

ＡＴ区南東部に位置し、溝97との距離２ｍである。平面形は楕円形を呈し、長径75cm、短径67cm、深さ19cmを測り、凹凸のある底面の海抜高は8.41ｍである。少量の土器が出土しているが時期を限定するには至らず、埋土から中世の遺構と考えられる。（光永）

土壙143（第525図）

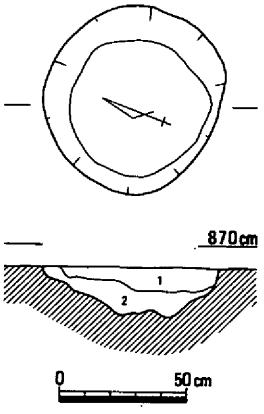
ＡＴ区南東部に位置し、南端を溝85に削られている。平面形は楕円形に復元され、現存の規模は長径102cm、短径82cmを測り、深さは13cmで、比較的平坦な底面の海抜高は8.38ｍである。遺物は出土していないが、埋土から中世に属すると考えられる。（光永）

土壙144（第526図）

ＡＴ区南東隅に位置し、建物46の北辺に接する。

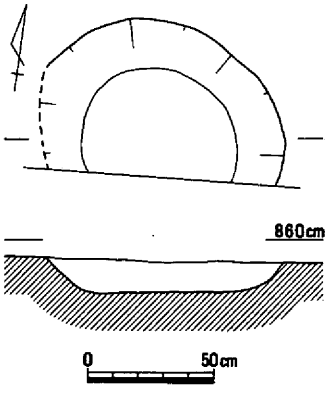
平面形は楕円形を呈し、長径115cm、短径66cm、深さ6cmを測る。断面形は凸レンズ状を呈し、底面の海抜高は8.46ｍである。

出土遺物はないが、埋土から中世の遺構と考えられる。（光永）

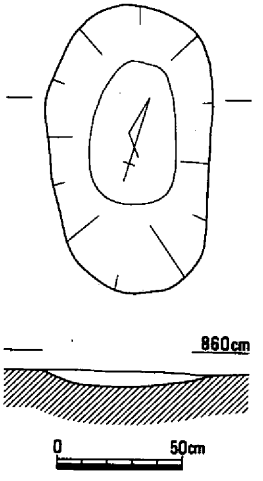


1．白灰淡黄褐色土
（褐色土まじり）
2．白灰淡黄褐色土

第524図　土壙142（1/30）



第525図　土壙143（1/30）



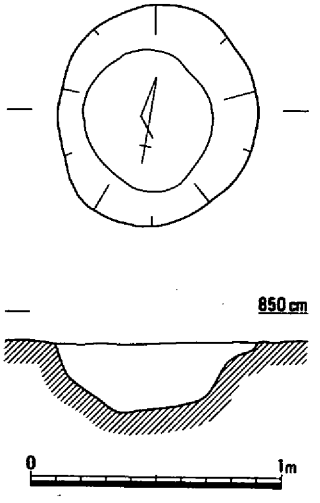
第526図　土壙144（1/30）

土壙145（第527図）

第２微高地(東)北部中央、ＪＹ区の東端に位置する平面不整円形の土壙である。径80×90cm、深さ30cmを測る。埋土は灰褐色粘質土からなる。遺物は磨滅の著しい甕片が２点出土するのみであったが、埋土の状況から当時期と判断した。（江見）

土壙146（第528図）

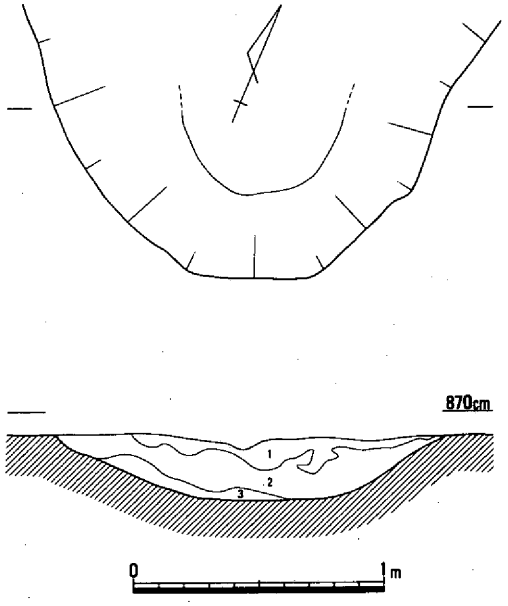
ＩＮ区の西半部において検出した。北側は調査区外にのびるため全体の形は不明である。深さは検出面から25cmが残存しており、埋土は３層に分離できた。検出された位置関係から溝102～105のように溝114に取り付く溝の可能性も考えられる。出土遺物はないが、埋土から中世と考えられる。（平井）

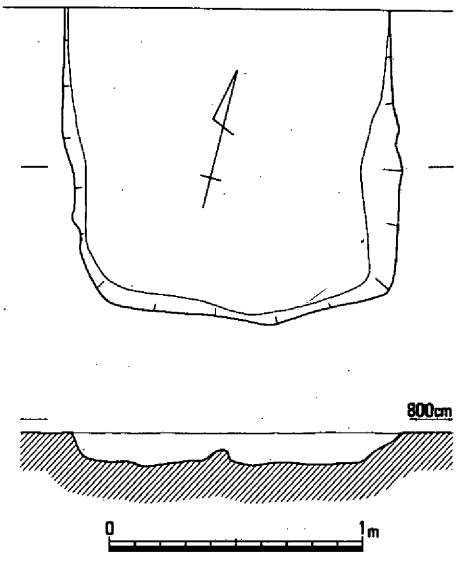


第527図　土壙145（1/30）

土壙147（第529図）

Ｈ17区の東半部において検出した。北側は調査区外にのびるため全体の形は不明である。深さは検出面から約13cmが残存しており、埋土は灰白色粘土と黒灰色粘土の混合層が一層のみであった。土器が少量出土しており、また埋土からも時期は中世と考えられる。（平井）





1．褐灰色粘質土　2．灰白色粘土　3．灰白色微砂まじり粘質土

第528図　土壙146（1/30）

第529図　土壙147（1/30）

(3)　柵列状遺構

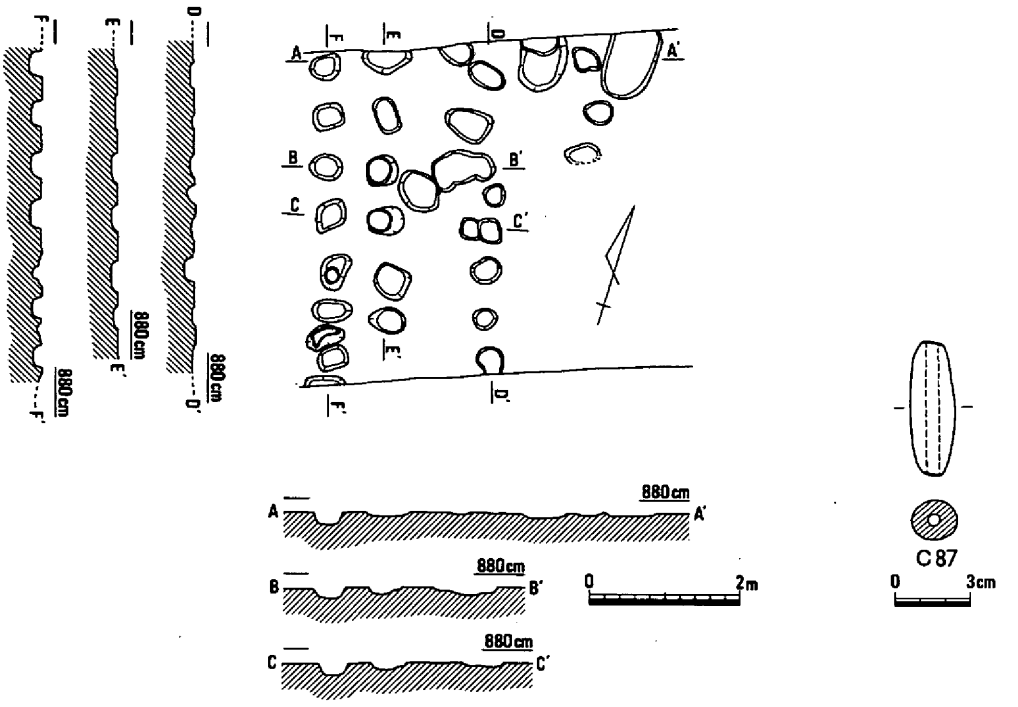
柵列状遺構16（第530図）

旧河道１北端の西肩口、Ｈ11区の東端に位置する。古代水田層を切り込んで掘削され、上面は中世水田層に覆われている。南東角は現代の遺構による削平をうけて消滅してしまっているが、現状で南北方向の柱穴列を４列確認している。各穴は単独で、掘り方の断面形は台形を呈する。平面形は不揃いで、円形から方形に近いものまである。若干切り合いもあるようだがすべて同じ灰白色粘質土で埋没しており、４列で一つの機能を果たしている可能性が高い。（久保）

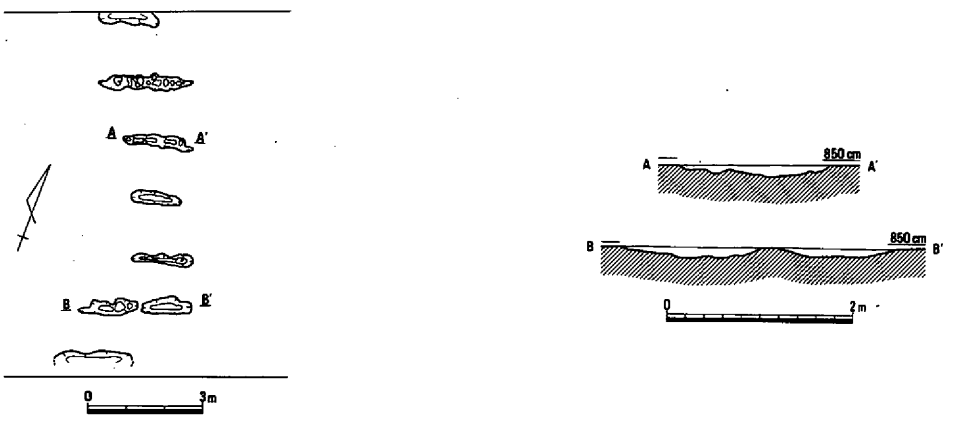
柵列状遺構17（第512・531図）

ＫＹ３区の東半部において検出した。現在の耕作土を除去した面で検出されており、削平によって本来の形が留められているとは言いがたいが、東西に細長い幅15～45cm、深さ10cm前後の溝状の遺構が、80～120cm間隔で、南北に約９ｍ確認できた。それぞれの溝状の遺構は肩はしっかりしておらず、舟底形の底面にはいくつかの窪みが認められた。これらのくぼみについては柱穴とは考え難い状況であった。埋土は灰白色粘質微砂が１層のみである。

この遺構の性格については柵列が何回か作り替えられた痕跡やあるいは南北に走る溝の底の部分が残存している、あるいは底面に横木を並べた道路の遺構などの可能性が考えられるが、いずれも決定的ではない。時期についても明確な出土遺物はなく、層位関係からは中世から近世までの幅が考えられるにすぎない。（平井）



第530図　柵列状遺構16（1/100）・出土遺物（1/3）

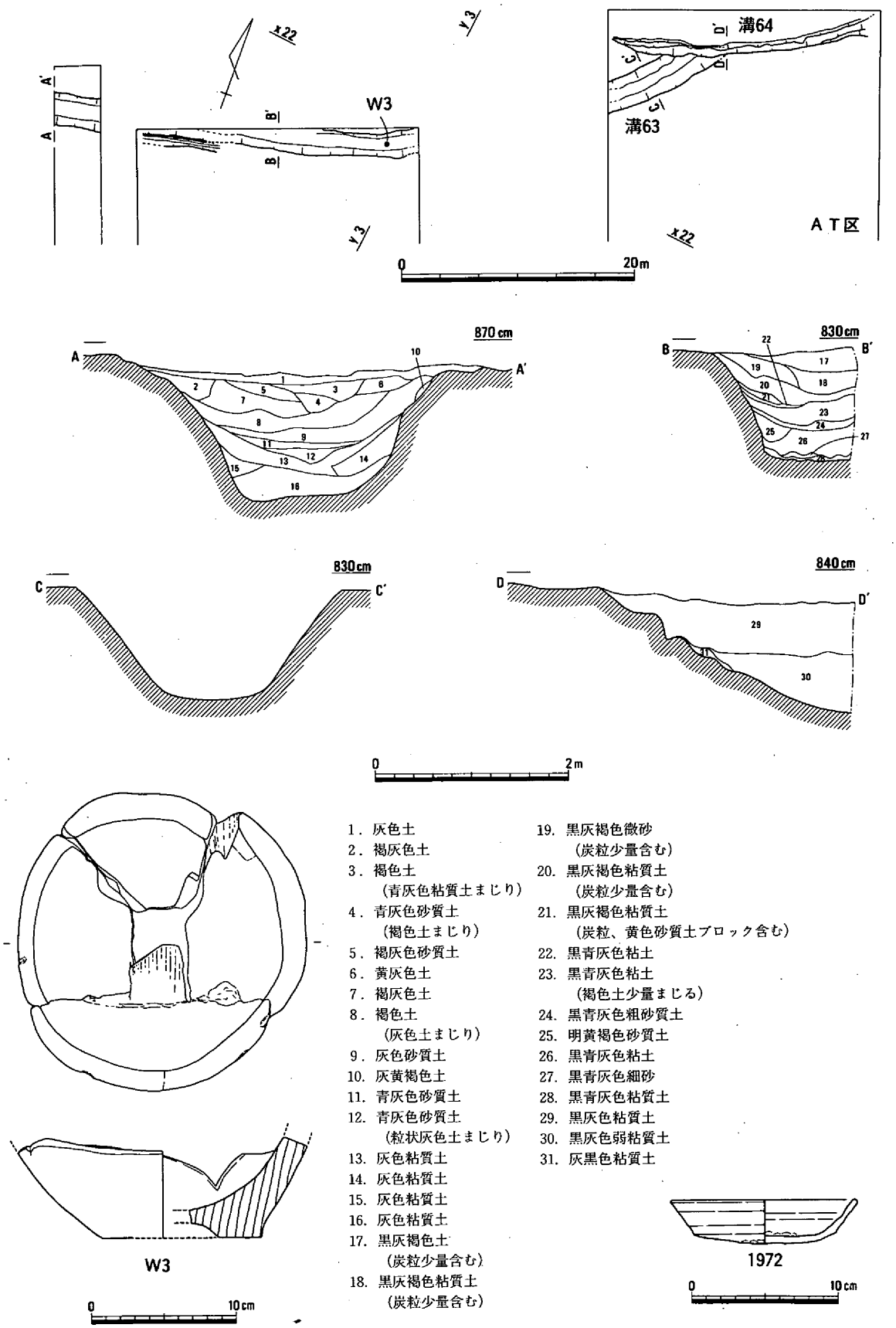


第531図　柵列状遺構17（1/200・1/80）

(4)　溝

溝63（第532図、図版31）

Ｈ１・ＡＴ両区のいずれも北端で検出されており、Ｈ１区では上層に溝85が、ＡＴ区北西部では上層に溝66がそれぞれ所在し、ＡＴ区北東部では溝64に削られている。流路を東西におき、比較的平坦に掘られた底面の海抜高をみると、Ｈ１区で7.1ｍ、ＡＴ区北東部で7.0ｍとなり、西から東へ流れたものと考えられる。平均的な規模は、上幅270cm、下幅110cm程度で、最大深さ150cmを測る。出土遺物には、内面に漆状の付着物をもつ土師器の杯**1972**や鉢形に刳られた木製品**W３**等があり、時期は平安時代前半に比定される。（光永）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1972	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部ヘラキリ、ユビオサエ。	口縁部ヨコナデ。底部ユビオサエ、ナデ。	にぶい橙　5YR7/4	底部内面ウルシ？。

第532図　溝63・64（1/500・1/60）・出土遺物（1/4）

溝64（第532・533図）

ＡＴ区北東部北端に位置し、流路を東西において西から東へ流れ、溝63を削っている。第532図に示すように、溝の南岸を検出できたのみで幅は不明であるが、Ｄ－Ｄ'断面から復元すれば、５ｍ以上に想定される。深さは120cm以上で、底面の海抜高は6.9ｍ程度と想定される。土師器の杯**1973**～**1978**、黒色土器**1979**の他に刀子Ｉ２等が出土しており、平安時代前半に比定される。　（光永）

溝65（第534図）

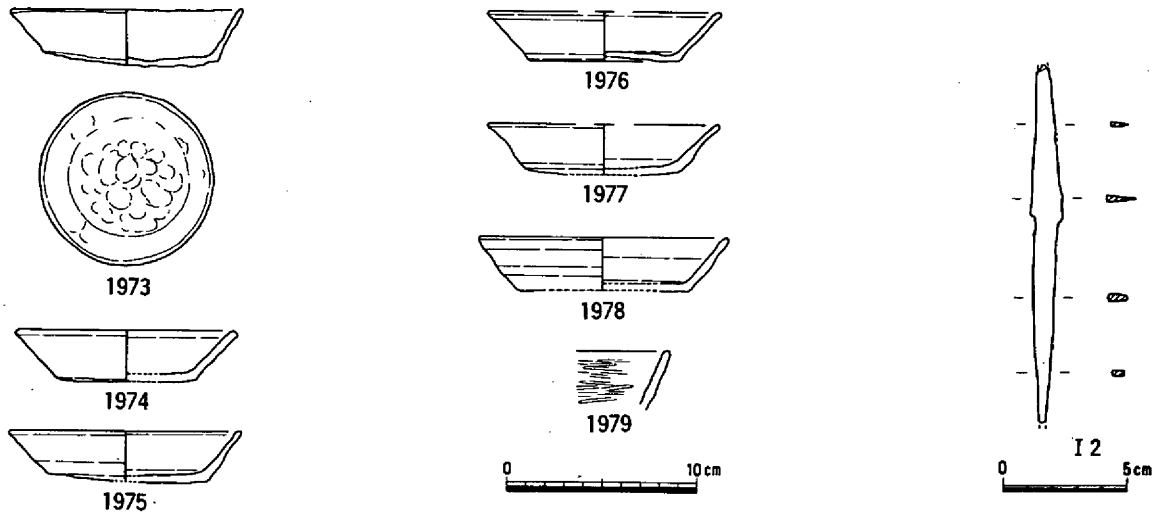
Ｈ１区からＡＴ区北西部で検出された東西方向の溝で、西端近くで溝84と重複し、東端は溝66に削られる。検出された最大幅は120cm程度で、断面形凸レンズ状を呈し、深さ10cm前後で、底面の海抜高は8.45ｍ前後となる。この溝の北50cmで平行する溝が検出されたが、北岸を検出できず、幅は不明である。溝63・66との関係から、平安時代に比定される。　（光永）

溝66（第534・535図）

ＡＴ区の北西部北端と北東部で検出された。北西部において流路を曲げ、北東部ではほぼ直進している。第534図Ｃ－Ｃ'断面によれば、４回以上の溝浚えないし掘り直しを確認することができ、北東部において図化できた幅は2.6ｍ前後であるが、最終流路の幅は180cm程度である。断面形は椀形を呈し、最低位部での底幅は80cm程度で、海抜高は北西部で8.05ｍ、北東部で7.9ｍとなる。出土遺物には、黒色土器の高台付椀**1980**、平瓦**1981**・**1982**等があり、平安時代に比定される。　（光永）

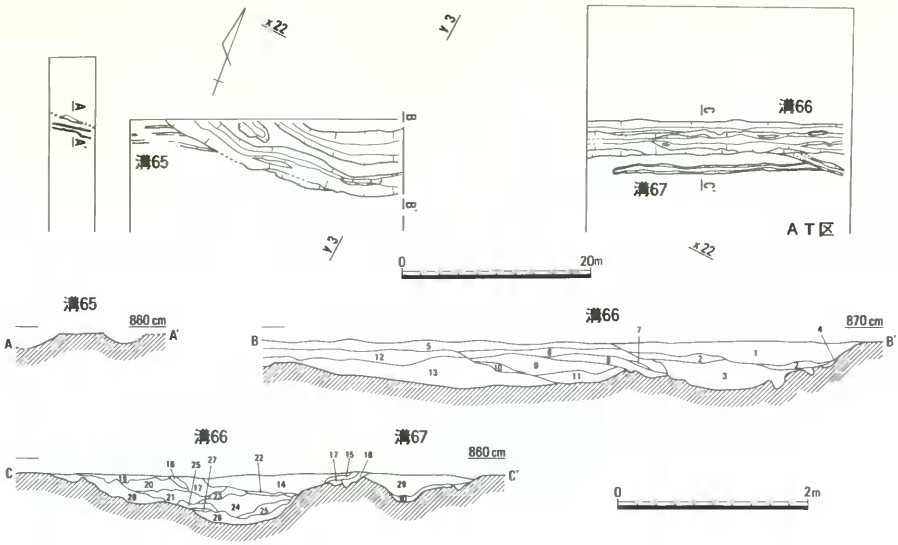
溝67（第534図）

ＡＴ区北東部で溝66の南１ｍにこれと平行して検出された。西端は調査区内で途切れ、東端は溝66から派生する枝溝と重複している。第534図Ｃ－Ｃ'断面によれば幅120cm、深さ30cm程度で、底幅20cm、海抜高8.15ｍ程度である。溝66との関係から、平安時代に比定される。　（光永）



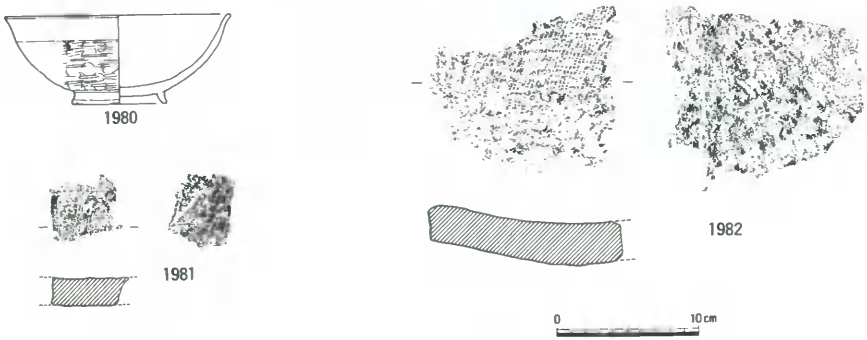
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1973	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部ヘラキリ、ユビオサエ。	口縁部ヨコナデ。底部ユビオサエ。	にぶい黄橙 7.5YR7/3	
1974	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部ヘラキリ、ナデ。	口縁部ヨコナデ。	にぶい橙 5YR7/4	
1975	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部ヘラキリ、ユビオサエ。	口縁部ヨコナデ。底部ユビオサエ、ナデ。	浅黄橙 7.5YR8/4	口唇部煤。
1976	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部ヘラキリ、ユビオサエ。	口縁部ヨコナデ。底部ユビオサエ？。	にぶい橙 5YR7/4	
1977	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部ヘラキリ。	口縁部ヨコナデ。	淡橙 5YR8/4	
1978	土師器	杯	口縁部ヨコナデ。底部ユビオサエ？。	口縁部ヨコナデ。	橙 5YR7/6	内外面丹塗り。
1979	土師器	椀	口縁部ヨコナデ。	内面ミガキ。	にぶい橙 7.5YR7/3	

第533図　溝64出土遺物（1/4・1/3）



1．灰茶色粘質土
2．灰色粘質土、微砂
3．淡灰褐色微砂、砂
4．暗灰色粘質土
5．灰褐色弱粘質土
6．淡灰褐色弱粘質微砂
7．黒灰茶色粘質土
8．淡灰褐色弱粘質土（微砂まじり）
9．淡灰茶色粘土
10．淡灰褐色砂
11．灰色粘質土
12．淡茶褐色粘質微砂
13．灰色粘土
14．灰茶褐色砂、細砂（含鉄分）
15．暗灰茶色砂質土
16．灰茶褐色土
17．暗灰褐色土
18．淡灰褐色細砂、微砂
19．灰茶褐色細砂
20．灰色弱粘質土
21．灰茶褐色砂
22．灰色弱粘質微砂
23．淡灰色微砂
24．灰褐色微砂、細砂（含鉄分）
25．灰色弱粘質土（微砂まじり）
26．灰色粘質土
27．淡褐色砂
28．黄灰茶褐色弱粘質微砂
29．黒灰茶色土（炭まじり）
30．暗灰色弱粘質土

第534図　溝65・66・67（1/600・1/60）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1980	土師器	椀	口縁部ヨコナデ　体部ユビオサエのちミガキ　底部ユビオサエ、ナデ	胴部ナデ、底部ユビオサエ。	黒　2.5Y2/1	黒色土器。貼付高台。
1981	瓦	平丸	ナデ	布目（幅1㎜前後）。	灰黄褐　10YR5/2	厚さ約20㎜。
1982	瓦	平丸	縄目タタキ°のちナデ。	布目（幅3㎜前後）。	暗灰黄　2.5Y5/2	厚さ約29㎜。

第535図　溝66出土遺物（1/4）

溝68（第536図）

EN 区において検出された東西方向の溝で、西から東へ流れたものと考えられる。検出された中で

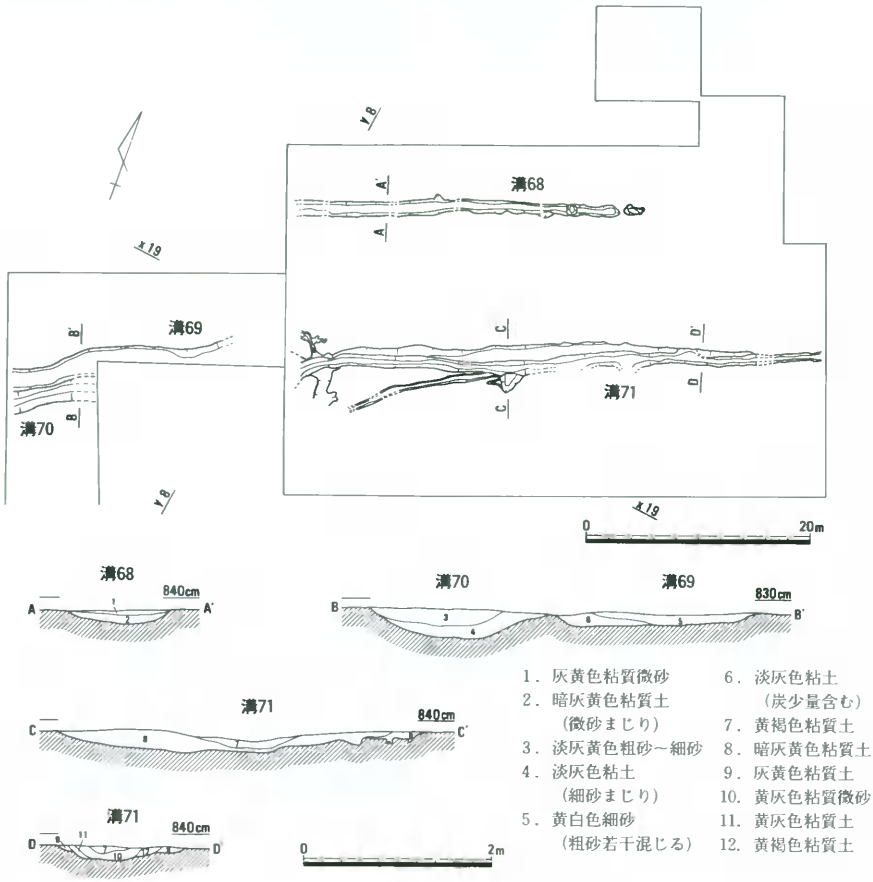
遺存状況の良い部分では、幅100cm、深さ15cm程度を測り、断面形は皿形を呈する。底面の海抜高は8.15m前後で、東端は浅く消滅する。少量の土器の出土と、溝71に平行する在り方から、平安時代の遺構と考えられる。（光永）

溝69・70（第536図）

溝68の南に位置し、Ｋ１区の北半を東西方向に流走する。水田８上面において検出された。切り合いから溝70が溝69より新しい。溝69は幅約220cm、深さ約15cm、溝70は幅190cm、深さ約30cmを測る。Ｋ１区とＥＮ区の間に用水路が通るため直接にはつながらないが埋土の状況から溝70が溝71と同一である可能性が高い。溝69の底面から須恵器甕片が出土しており古代に属すると考えられる。（久保）

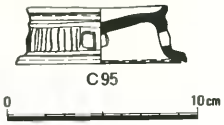
溝71（第536・537図、図版31）

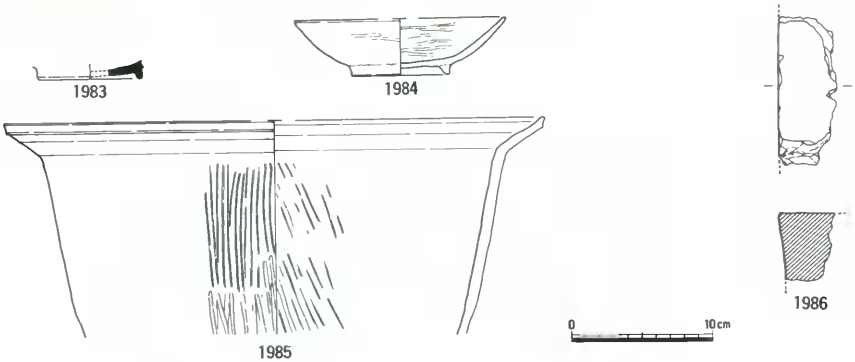
ＥＮ区南半を西から東へ流れる溝で、Ｋ１区の溝69・70の東延長上に位置する。溝68と平行し、相互の距離は約11ｍである。深さ15cm程度の遺存状況で、平面的に幅を限定することが困難で、0.7～



第536図　溝68・69・70・71（1/500・1/60）

３ｍの範囲で検出されている。底面の海抜高は8.2ｍを前後する数値で示される。南西方向から、幅70cm、深さ15cm程度の溝が合流するが、第536図Ｃ－Ｃ'断面によれば、この溝が新しい。出土遺物には、須恵器の高台付椀**1983**、黒色土器の高台付椀**1984**、土師器の鍋**1985**の他に、磚**1986**、須恵器の円面硯**C95**等があり、時期は平安時代に求められる。（光永）



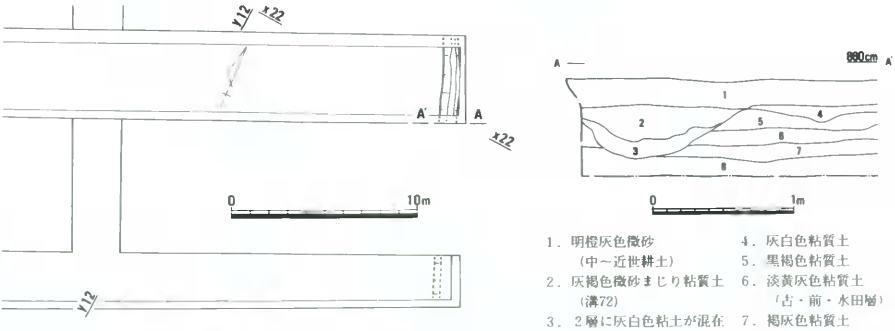


挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1983	須恵器	椀	底部ヘラきりのちナデ。	ユビオサエ、ナデ。	灰白　N8/	貼付高台。
1984	土師器	椀	体部ヨコミガキ？	体部ヨコミガキ。	灰黄褐　10YR4/2	傾き、口径不詳。
1985	土師器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部上半ハケメ、下半ミガキ。	口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。	灰褐　7.5YR7/2	外面煤
1986	瓦	磚	ヘズリ？、ナデ	ヘズリ？、ナデ	灰白　7.5YR8/1	

第537図　溝71出土遺物（1/3・1/4）

溝72（第538図）

調査区東端、Ｋ４区およびＨ９区において検出された。東側は調査区外になり、正確な規模は不明であるが底面の海抜高は約7.9ｍを測る。時期を特定しうる遺物は出土していないが、古墳時代前期水田層と中世水田層の間で検出されており、埋土が古代の遺構埋土と近いことから古代に属すると考えたい。（久保）



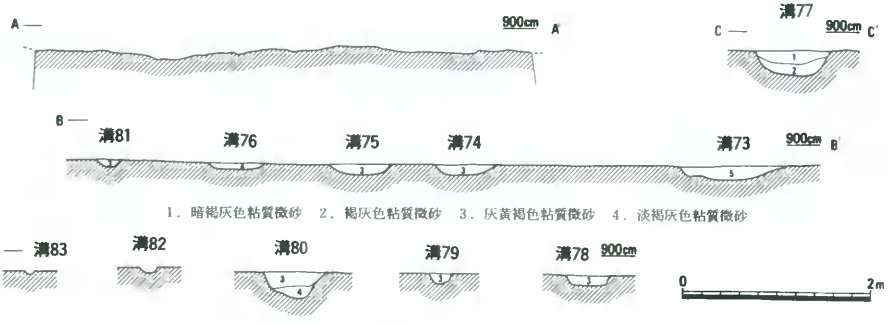
第538図　溝72（1/300・1/80）

溝73・74・75・76・77（第539・540図、図版32）

第１微高地と第１低位部の埋没後の上面にひろがる溝群である。北西隅で、いずれの溝も集まっている。この付近の溝の幅は広くなる。いくつも重なっていて、わずか10cm程の深さしか残存していないため、詳細は検討できなかったが、溝が集まった所には直径５～10cm程の杭穴が多数検出された。構造について追求したが、明確に出来なかったが、配水を目的とした井堰と推定される。

溝73は最も東側に位置し、北からの流れを井堰状の遺構から南東へ流走する。溝74・75は井堰状の遺構から２つに分かれて、溝73の西側に平行して流れる。溝76は溝77と重なるため不明確であるが、井堰状の遺構から先の３条の溝に平行し南東へのびる。溝77は最も西側に位置し、井堰状の遺構から先の４条の溝とは少し方向を変えて南へ流れている。溝の埋土は鉄分を含むため褐色を帯びた処もあるが、淡灰色粘質土～にぶい黄褐色粘質土である。溝の前後関係はわかりにくいが、溝74と溝75は同時に流れていた可能性が高く、他の溝も相前後して掘られたものと推測される。

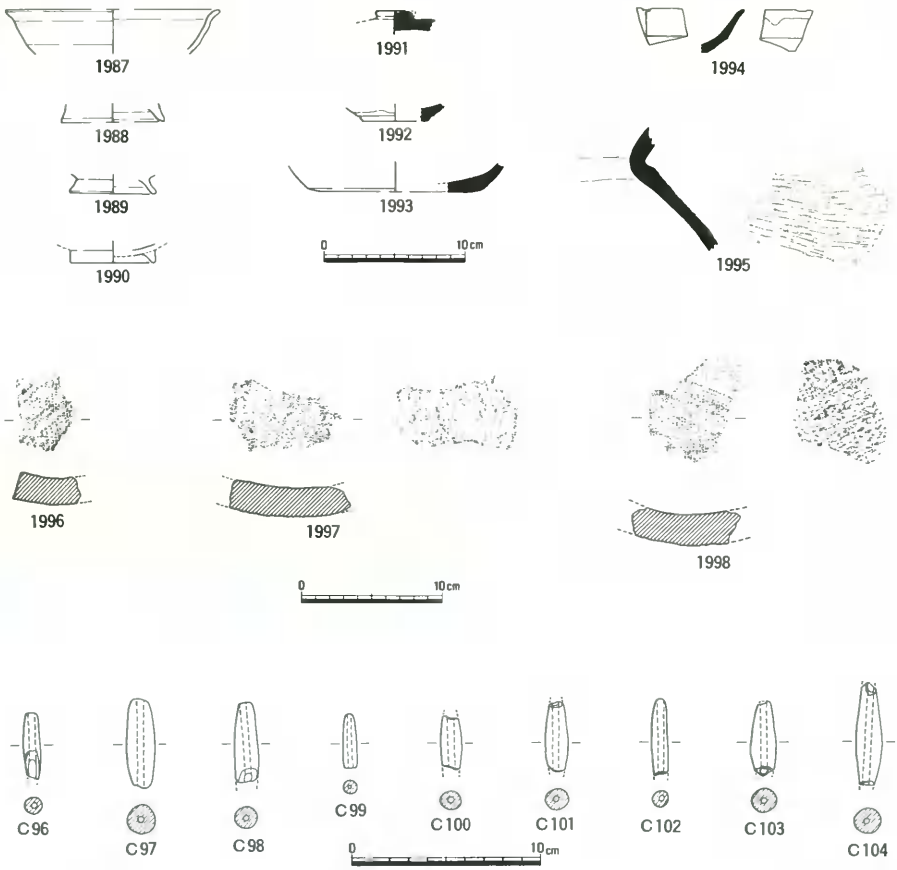
溝の埋土中からは、土師器の椀、白磁の皿、布目瓦、紡錘形の土錘等が出土した。時期は平安時代末から鎌倉時代に比定される。　（正岡）



第539図　溝73～83（1/500・1/60）

溝78・79・80・81・82・83（第539・540図）

溝71～77の上を東西に横断する一群である。一括して扱ったが溝78～80は幅50cm前後、溝81～83は幅20cm前後と規模に差があり、時期差を反映しているものと考えられる。溝78は溝73に、溝79は溝76にとりつき、溝80～83はそれらを切っているようであり、その関係が正しいとすると溝73～77は同時



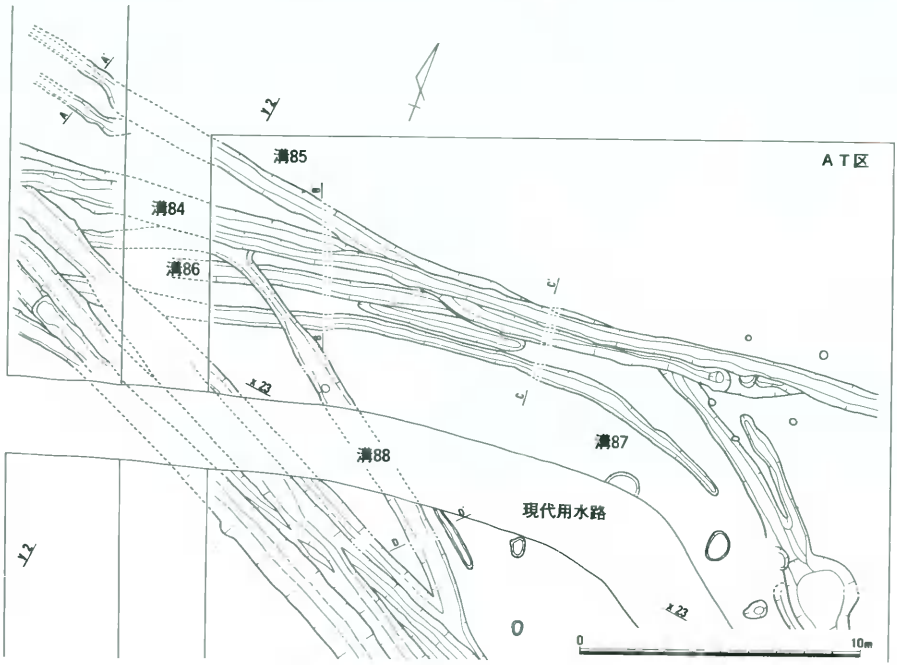
挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1987	土師器	椀	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白　10YR8/1	
1988	土師器	椀	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白　2.5Y8/2	貼付高台。
1989	土師器	椀	ヨコナデ。	ヨコナデ。	淡橙　5YR8/3	貼付高台。
1990	土師器	椀	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白　10YR8/2	貼付高台。
1991	須恵器	杯蓋	つまみヨコナデ　天井部ケズリ。	ナデ	浅黄　2.5Y7/4	
1992	白磁	碗	高台部露胎	砂目あと。	灰白　7.5Y7/2	
1993	須恵器	壺	ナデ。	ナデ。	灰白　N7/0	
1994	白磁	輪花皿	口縁部輪花。底部露胎	突線。	灰白　10Y8/1	
1995	備前焼	甕	口縁部ヨコナデ。胴部タタキ。	口縁部ヨコナデ　胴部同心円タタキのちナデ。	灰　N6/	
1996	瓦	平瓦	ナデ。	布目（幅３mm前後）。	灰　5Y4/1	厚さ約18mm。
1997	瓦	平瓦	縄目。タタキ。	布目（幅１mm前後）。	灰黄　2.5Y5/1	厚さ約21mm。
1998	瓦	平瓦	縄目　タタキ	布目（幅１－２mm）	灰黄褐　10YR6/2	厚さ約22mm。

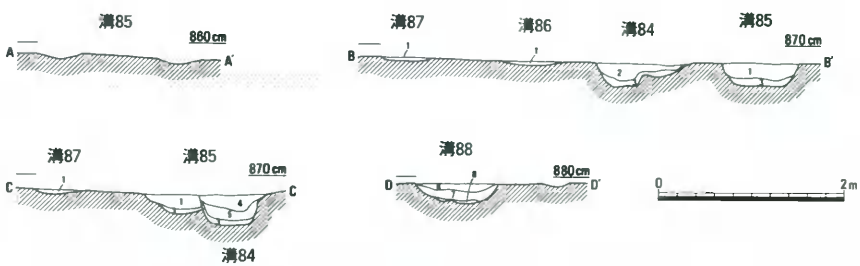
第540図　溝73・74・77・79出土遺物（1/4・1/3）

に存在したのではなく、西へ行くに従って新しくなっているといえる。これらの溝からも土師器椀の細片が少量出土しており、各溝の埋土が近似していることおよび同じ中世耕土で埋没していることから短期間に幾度も掘削されたと想定される。（久保）

溝84（第541・542図、図版32）

Ｈ１区およびＡＴ区で検出され、ＡＴ区の北西部では溝85・88を削っている。検出された平均的な規模は、上幅70cm前後、底幅40cm、深さ30cm程度で、断面形は逆台形を呈し、底面の海抜高は西端で8.3m、東端で8.1mである。少量の土器が出土しており、時期は中世の枠でとらえられる。（光永）





1．淡黄灰色粘質土
2．灰色粗砂
3．黄褐色粘質土
4．灰褐色砂質土
5．灰色粘質土（黄褐色砂質土まじり）
6．淡茶褐色微砂
7．茶褐色砂質土
8．茶褐色細砂、微砂

第541図　溝84・85・86・87・88（1/200・1/60）

溝85（第541・542図、図版32）

Ｈ１区からＡＴ区北西部で検出され、後者において溝84に削られている。幅80cm、深さ25cm前後の規模で、断面形は逆台形を呈し、底面の海抜高は8.4ｍである。中世に属すると考えられる。（光永）

溝86（第541・542図、図版32）

ＡＴ区北西部で、溝84の南30cmに平行して検出され、溝85・88に削られる。幅115cm、深さ３cm程度で、底面の海抜高は8.5ｍとなる。東に延長すると溝113に続く可能性がある。（光永）

溝87（第541・542図、図版32）

Ｈ１区からＡＴ区北西部において、溝86の南50cmで検出された。西半を溝88・114に削られ、東端は緩く南東方向へ曲がる。幅65cm、深さ３cm程度で、底面の海抜高は8.5ｍとなる。南東方向へ延長すると、溝113の西に接する溝に続く可能性が高い。（光永）

溝88（第541・542図、図版32）

Ｈ１区からＡＴ区北西部において検出された、幅70cm、深さ20cm程度の溝で、溝86・87を削り、溝84・114に削られる。底面の海抜高は8.55ｍ前後である。（光永）

溝89・90・91・92（第542・543図）

ＡＴ区南東部において、ほぼ平行して検出された溝状の遺構で、溝89の東端が不明な他はいずれも両端を閉じている。上幅は40cm前後で、北側の溝ほど深く、溝89で12cmを測り、底面の海抜高は、溝92で8.5ｍ、溝89で8.4ｍである。遺物は、溝91から少量の土器が出土したのみであるが、時期は中世の枠でとらえたい。（光永）

溝93・94（第542・543図）

ＡＴ区南東部に位置して、溝84から南に分流し、溝93が新しい。いずれも上幅50cm、深さ6cm程度で、底面の海抜高は8.5ｍを前後し、東半では底面に小さな柱穴が２列散見される。少量の土器の出土と、溝84との関係から、時期は中世の枠でとらえられる。（光永）

溝95（第542・543図）

ＤＥ区からＫ６区、ＡＴ区にかけて検出された南北方向の溝である。幅50～70cm、深さ20cm前後を測る。灰黄色微砂で埋没している。、北は調査区外にのび、南は現代用水路に切られているため他の溝との関係は不明である。遺物は出土しておらず、埋土から古代末～中世に属するとしかいえない。（久保）

溝96（第542・543図）

ＡＴ区南中央部において、流路を北西から南東において検出された。北端を溝95に削られ、溝113とは距離約５ｍで平行する。上幅50cm、深さ5cm程度で、断面形は凸レンズ状を呈し、底面の海抜高は8.57ｍ前後である。少量の土器が出土しており、時期は中世の枠でとらえられる。（光永）

溝97（第542・543図）

溝96の東、ＤＥ区とＡＴ区の東半を南北に走る溝である。幅30～40cm、深さ20cm弱を測る。南は未調査部分にかかるため溝113・114との関係は不明だが北端は溝94にとりつく可能性がある。埋土は溝94に近い白灰淡黄褐色土であり、古代末～中世に埋没したと考えられる。（久保）

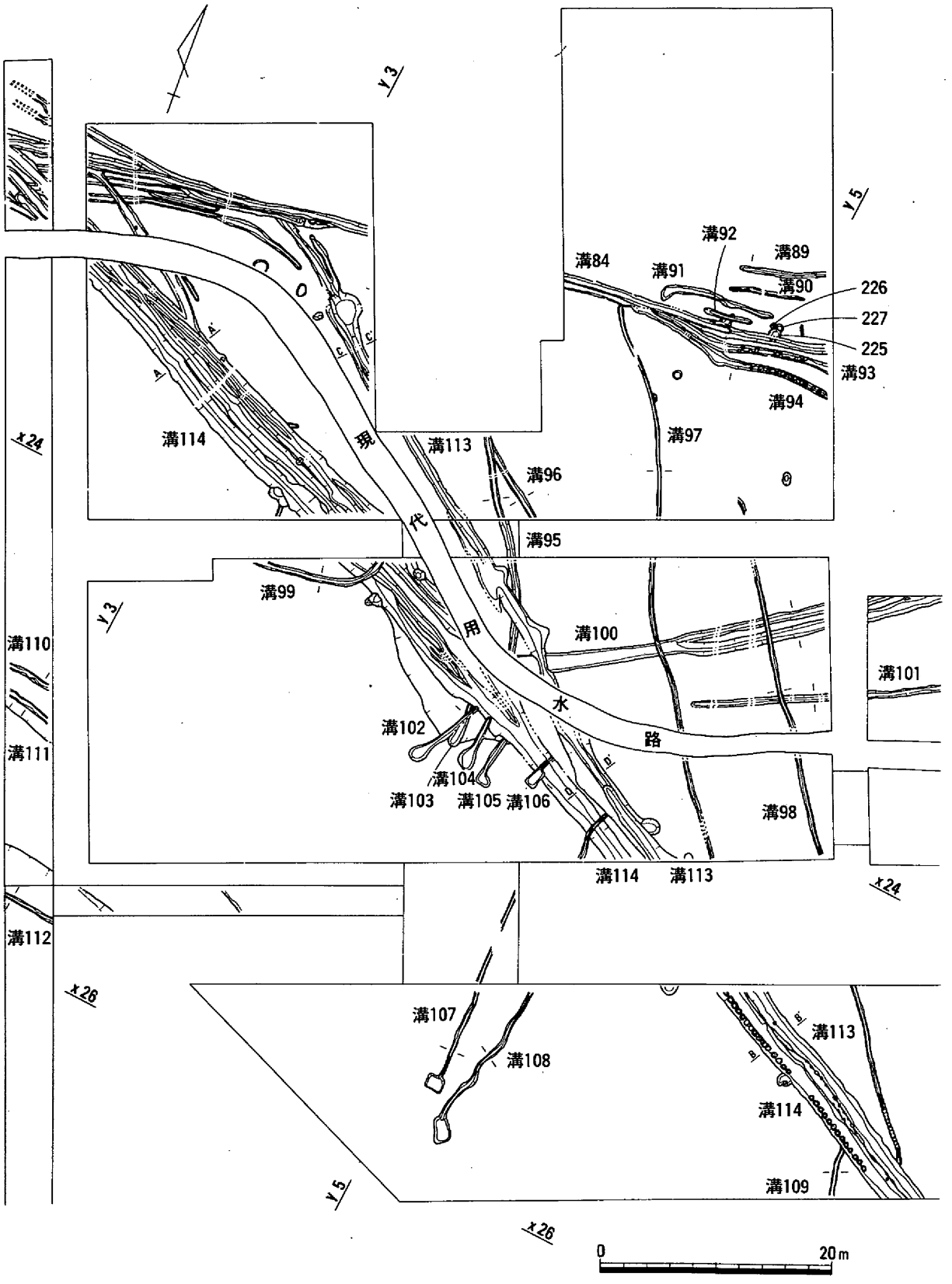
溝98（第542・543図）

ＡＴ区からＤＥ、ＩＮ区にかけてほぼ南北に検出された溝で、溝97に併行しており、規模も類似している。

検出できた幅は60cm前後で、深さは15cm前後が残存していた。底のレベルはほぼ一定していた。埋

土は部分的には二層認められた。

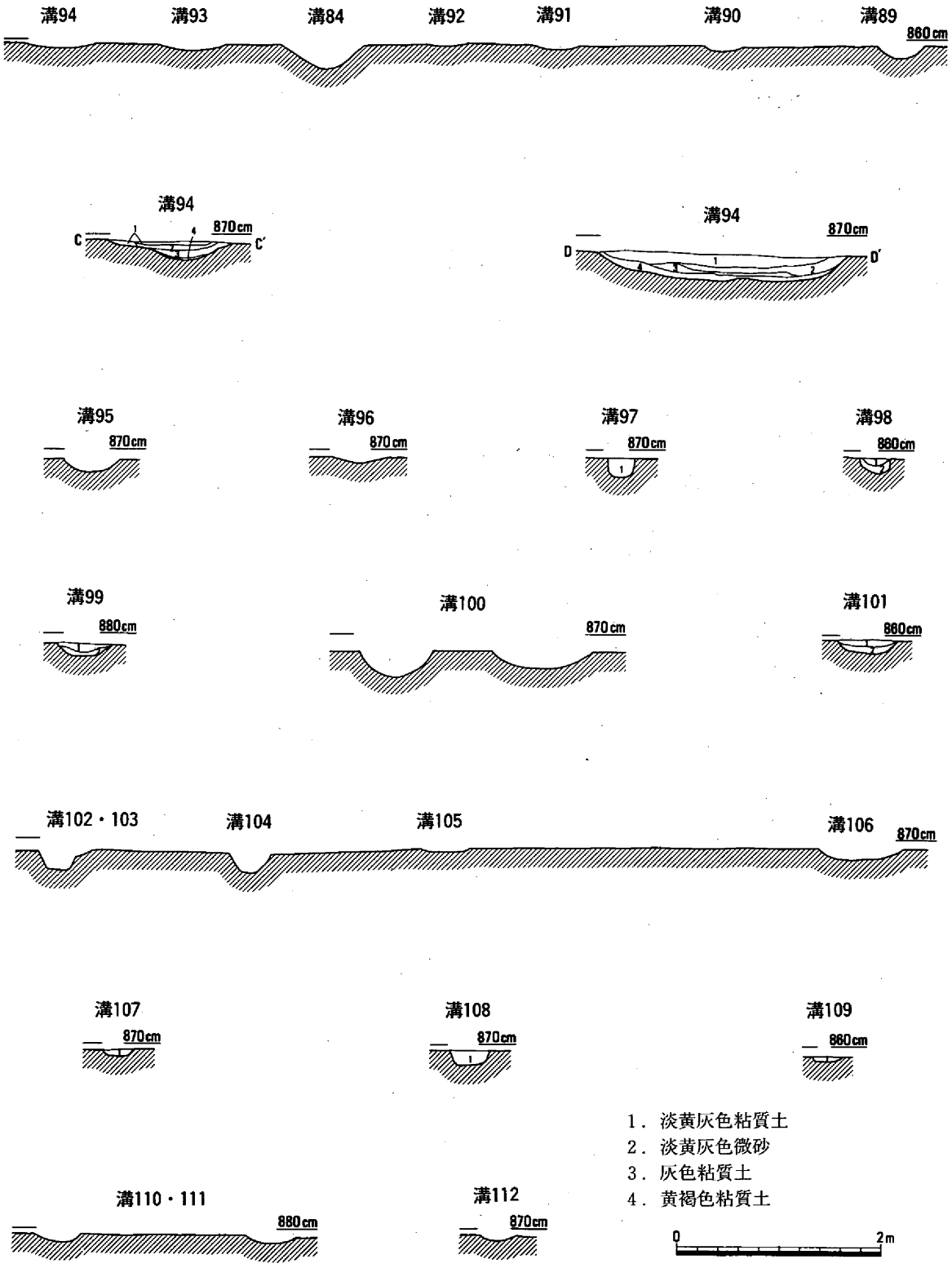
ＤＥ区では溝100・101を切っている。またＩＮ区では溝113に取り付いていることが確認できた。時期は中世で、鎌倉時代と考えられる。　（平井）



第542図　溝89～114（1/500）

溝99（542・543図）

ＤＥ区の西半、北壁際で検出された。弧を描いており、両端とも調査区外へのびるため全容は不明である。溝114を切っておりそれよりは新しいが、古代末～中世に埋没したと考えられる。　（久保）



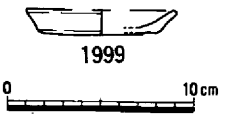
第543図　溝84・88～112断面図（1/60）

溝100（542・543図）

ＤＥ区の東半からＪＹ区の北西角を通ってＫ１区南端に検出された東西方向の溝である。溝113に切られており、それより古い。溝内からは中世土師器椀以外に古代と考えられる須恵器片も出土しており、その掘削が古代に遡る可能性が考えられる。（久保）

溝101（第542～544図）

溝100の南に、平行して東西方向に走る。東西両端とも完結しており、また幅約50cm、深さ10～20cmと後述する素掘溝と同程度の規模を測ることから、水路というよりは素掘溝のひとつである可能性は高い。埋土は灰白色から黄灰色の粘質微砂で、他の溝同様中世に埋没したと考えられる。（久保）



第544図　溝101出土遺物 (1/4)

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
1999	土師器	小皿	口縁部ヨコナデ。底部ヘラキリ。	ヨコナデ。	浅黄橙 7.5YR8/4	

溝102・103・104・105・106（第542・543図）

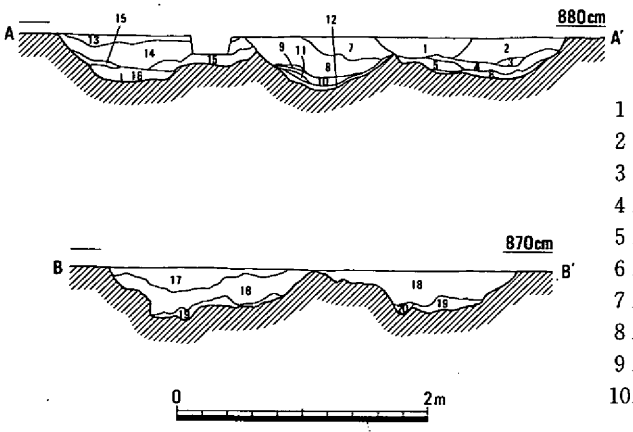
溝99の南、ＤＥ区の中央で検出された溝群である。溝102～105は不整形に、溝106は方形に先端がふくらんでおり、底面の海抜高も先端に向けて低くなっている。溝102～105は溝114にとりつくようであり、基幹水路からの取水を目的とした施設と推定される。溝106は溝114を横断しており、後述する溝108のように溝113に取り付くものと考えられる。先端の形状も溝107・108は長方形を呈しており、とりつく溝による差、つまりは時期差を反映するものとも考えられる。埋土は灰白色～淡灰色粘質微砂で、この溝群もまた中世に埋没したと考えられる。（久保）

溝107・108（第542・543図）

ＤＥ、Ｋ８、ＩＮ区においてほぼ南北に併行して検出された。これらの溝の特徴は南端部に溝107では約150×120cm、深さ約７cmの、溝108では約220×130cm、深さ約15cmの方形の土壙を伴っていることである。この土壙は水溜ではないかと考えられ、溝108では溝114を切って溝113から取水したものと考えられる。溝107については溝114に取り付いていた可能性が考えられる。時期はいずれも中世で鎌倉時代と考えられる。（平井）

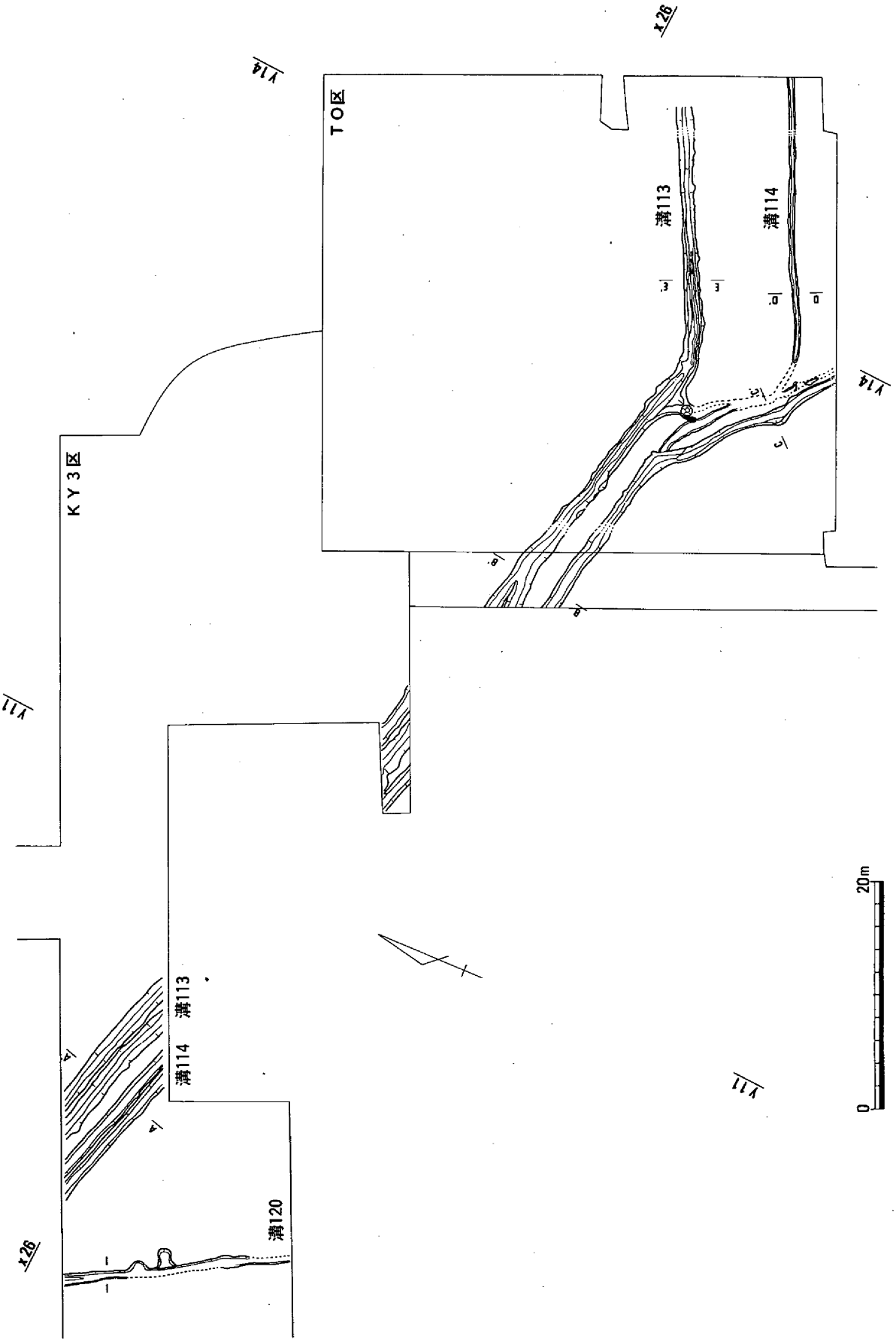
溝109（第542・543図）

ＩＮ区において検出した溝で、幅約30cm、深さ約５cmが残存していた。溝114に取り付いている。方向や規模などから本来、溝107・108と同様の性格の溝ではないかと考えられる。時期は中世で鎌倉時代と考えられる。（平井）



1．灰褐色粘質微砂
2．褐色粘質微砂
3．淡灰茶褐色微砂、細砂
4．淡灰褐色微砂
5．淡灰茶褐色微砂、細砂
6．黄茶褐色粘質土
7．淡灰褐色粘質微砂
8．暗灰茶褐色粘質微砂
9．灰褐色粘質土
10．灰茶褐色微砂、細砂
11．灰色粘質土
12．黄灰褐色粘質土
13．淡灰褐色粘質微砂
14．灰茶褐色粘質微砂
15．灰茶褐色微砂
16．茶褐色微砂、細砂
17．灰白色粘土と灰褐色粘質土の混合
18．灰白色粘土
19．橙褐色粗砂
20．灰白色微砂まじり粘土

第545図　溝113・114断面図(1) (1/60)



第546図　溝113・114・120（1/500）

溝110・111・112（第542・543図）

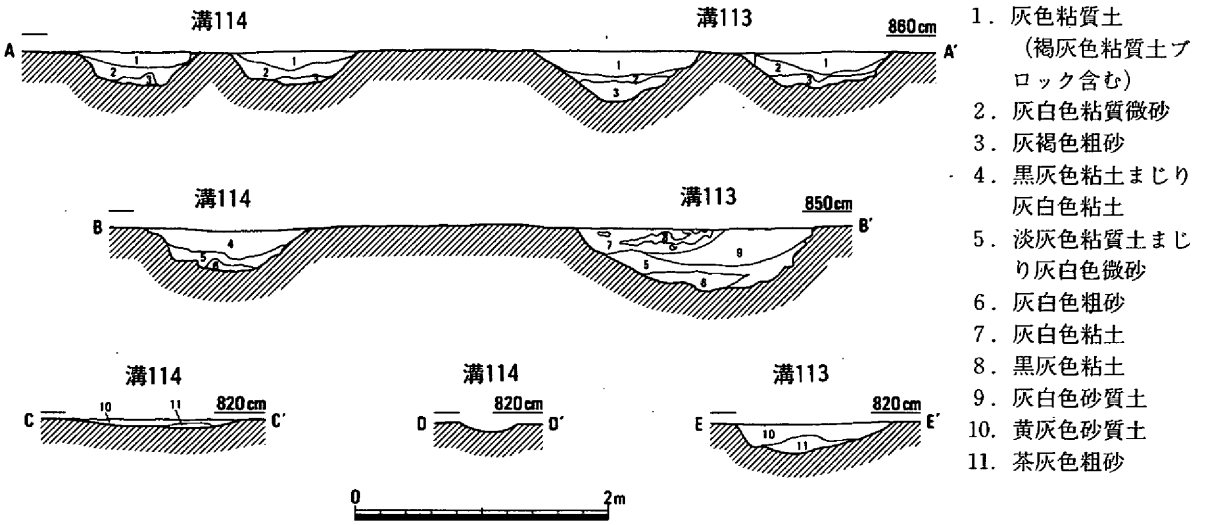
溝110・111はＨ２区、溝112はＨ３区においてそれぞれ検出された。いずれも流路を北西から南東方向へ向けており、後述する土手状遺構を挟んで平行する形となる。溝110と溝111の間隔は1.6ｍで、いずれも規模は上幅40～50cm、深さ６cm程度であり、断面形は凸レンズ状を呈し、底面の海抜高は8.7ｍ前後である。溝112は溝111との距離13ｍ程度を測り、上幅40cm、深さ８cmで、底面の海抜高は8.6ｍである。少量の土器が出土しており、中世に属すると考えられる。（光永）

溝113・114（第542・545～548図、図版32・33）

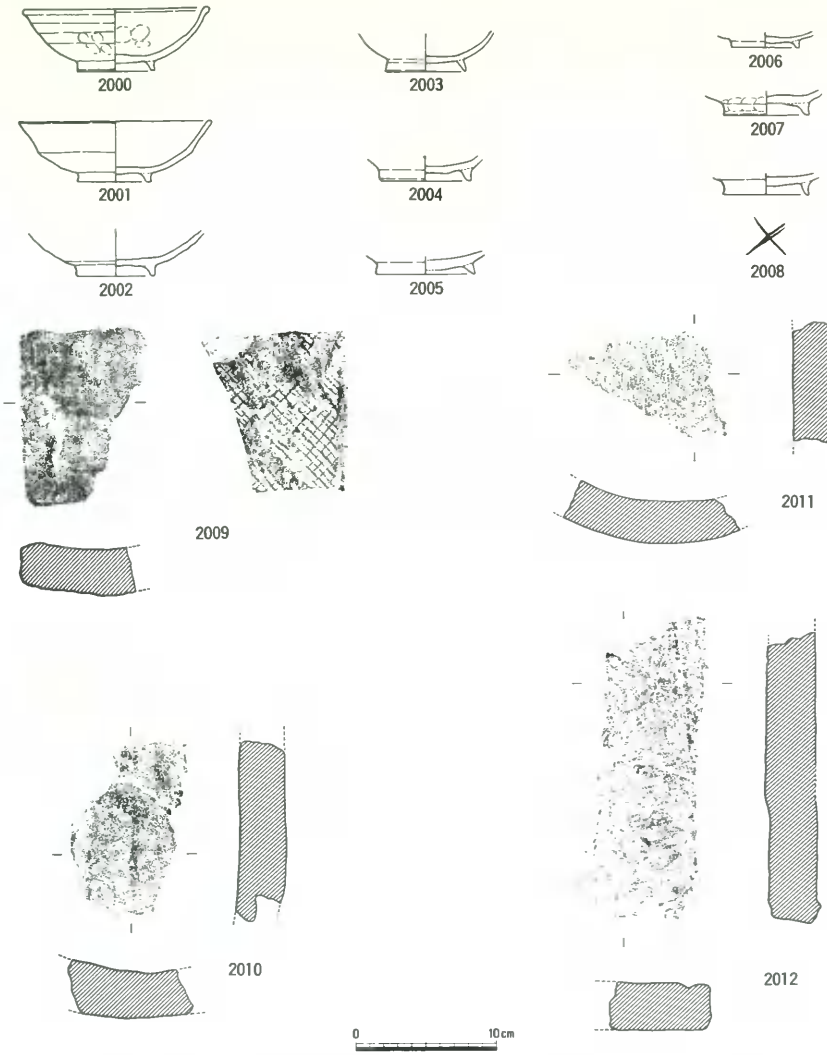
いずれもＨ１区からＴＯ区・H17区にかけて北西から南西に流走する溝である。直接的な切り合い関係は確認できなかったが、溝113に取り付くと考えられる溝108が溝114を切っていることなどから、溝113が新しいと考えたい。

溝114については１～２回の掘り直しの痕跡がＡＴ区およびＫＹ３区で確認できた。ＡＴ区での断面観察によれば南側の溝が最も古く、北側に順次２回掘り直しが行われているものと考えられる（第545図Ａ－Ａ'断面）。ＫＹ３区では、切り合い関係は不明ながらも１回の掘り直しが考えられた（第547図Ａ－Ａ'断面）。またＩＮ区では、南西の肩口に沿って30×40cm前後、深さ５～10cm前後の隅丸方形のくぼみが並んで検出できた。断定はできないが、この部分に柵などの何らかの施設があったのかも知れない。埋土の状況からみると、各地区で複雑な状況を示していたが、大きくは底面から20cmぐらいまでは粗砂・微砂を中心とする埋土で、上層には粘土・粘質土を中心とする埋土が堆積していた。したがって幹線的な水路として機能していたものが何らかの理由によって意識的に埋められたものと考えられる。一方溝113については、溝114の廃棄後、ＴＯ区でみられるように用水の目的地点を異にするかたちで新しく掘り直された溝と考えられる。この溝もＫＹ３区では１回の掘り直しが想定できた。埋土の状況は溝114に類似しており、最終的には意識的に埋められたものと考えられる。

これらの溝から出土した遺物は多くないが、古代の瓦および中世の土師器椀などがある。図示した遺物のうち**2000～2003**、**2007～2009**は溝113から、**2004～2006**、**2010～2012**はＩＮ区の溝113・114から**2013～2015**は溝114から出土している。時期については、溝113が廃棄されたのは鎌倉時代と考えられる。また溝114の掘削時期については、溝63～71などの古代の溝とは方向が異なっていることから、



第547図　溝113・114断面図(2)（1/60）



挿図番号	種別	器種	特徴		色調	備考
			外面	内面		
2000	土師器	椀	口縁部ヨコナデ。体部ユビオサエ、ナデ。	口縁部ヨコナデ、体部ユビオサエ、ナデ。	灰白　5Y8/2	貼付高台。
2001	土師器	椀	高台ヨコナデ。底部ナデ。	ナデ？。	淡黄橙　7.5YR8/4	貼付高台。
2002	土師器	椀	ユビオサエのちナデ？。	ミガキ？。	淡黄　2.5Y8/3	貼付高台。
2003	土師器	椀	高台ヨコナデ。底部ユビオサエのちナデ、	ミガキ？。	灰白　10YR8/1	貼付高台。
2004	土師器	椀	体部ナデ。高台ヨコナデ、底部ナデ。	ナデ。重ね焼き痕。	淡黄　2.5Y8/3	貼付高台。
2005	土師器	椀	体部ナデ，高台ヨコナデ、底部ナデ。	ナデ。	淡黄　2.5Y8/3	貼付高台。
2006	土師器	椀	高台ユビオサエ、ナデ。底部ナデ。	ユビオサエ、ナデ。	淡黄　2.5Y8/3	貼付高台。
2007	土師器	椀	体部ナデ、高台ヨコナデ、底部ナデ	ナデ	灰白　2.5Y8/2	貼付高台。
2008	土師器	椀	高台ヨコナデ。底部ヘラ描き文	ナデ。	灰黄　2.5Y7/2	貼付高台
2009	瓦	平瓦	格子タタキのち一部ナデ。	布目（幅１㎜前後）。	灰白　2.5Y8/1	厚さ約32㎜。
2010	瓦	平瓦	ナデ。	布目（幅１～２㎜）	淡黄　2.5Y8/3	厚さ約35㎜。
2011	瓦	平瓦	ナデ。	布目（幅１～２㎜）。	灰白　7.5Y8/1	厚さ約30㎜。
2012	瓦	平瓦	ナデ。	布目（幅１㎜前後）	灰白　7.5Y8/1	厚さ約35㎜

第548図　溝113出土遺物（1/4）

挿図番号	種別	器種	特徴 外	特徴 内	色調	備考
2013	土師器	椀	体部ナデ。高台ヨコナデ。底部ナデ。	ナデ。	灰白　2.5Y8/2	貼付高台。
2014	土師器	小皿	口縁部ヨコナデ。底部ヘラキリ。	ナデ。	浅黄橙　10YR8/3	
2015	備前焼	甕	ヨコナデ。	ヨコナデ。	明赤褐　2.5YR3/1	

第549図　溝114出土遺物（1/4）

古代末から中世初頭と考えておきたい。（平井）

溝115（第513・550図）

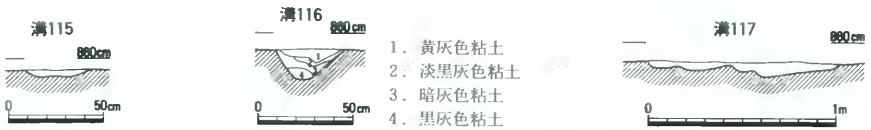
ＩＮ区の東半部において検出した溝で、幅約35cm、深さ５cm前後が残存していた。北端部は後世の削平によって途切れているが、まだ続いていた可能性が高い。埋土は灰白色粘土が一層のみである。出土遺物はなかったが埋土から時期は中世と考えられる。（平井）

溝116（第513・550・552図）

ＪＹ区およびＩＮ区の東半部において検出した。幅約35cm、深さ15cm前後が残存しており、ＪＹ区では溝119を切っていた。底のレベルは南に向かって低くなっており、溝113・114に取り付いていた可能性が考えられる。（平井）

溝117（第513・550・552図）

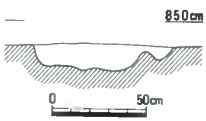
ＩＮ区の東半部において検出した。深さは８cm前後が残存していたにすぎない。肩はしっかりしておらず、底面は凹凸が著しかった。こうしたことからこの溝は、用・排水路とは考えにくい。埋土は淡灰褐色粘土が一層のみで、このことから時期は中世と考えておきたい。（平井）



第550図　溝115・116・117断面図（1/30）

溝118（第513・551図）

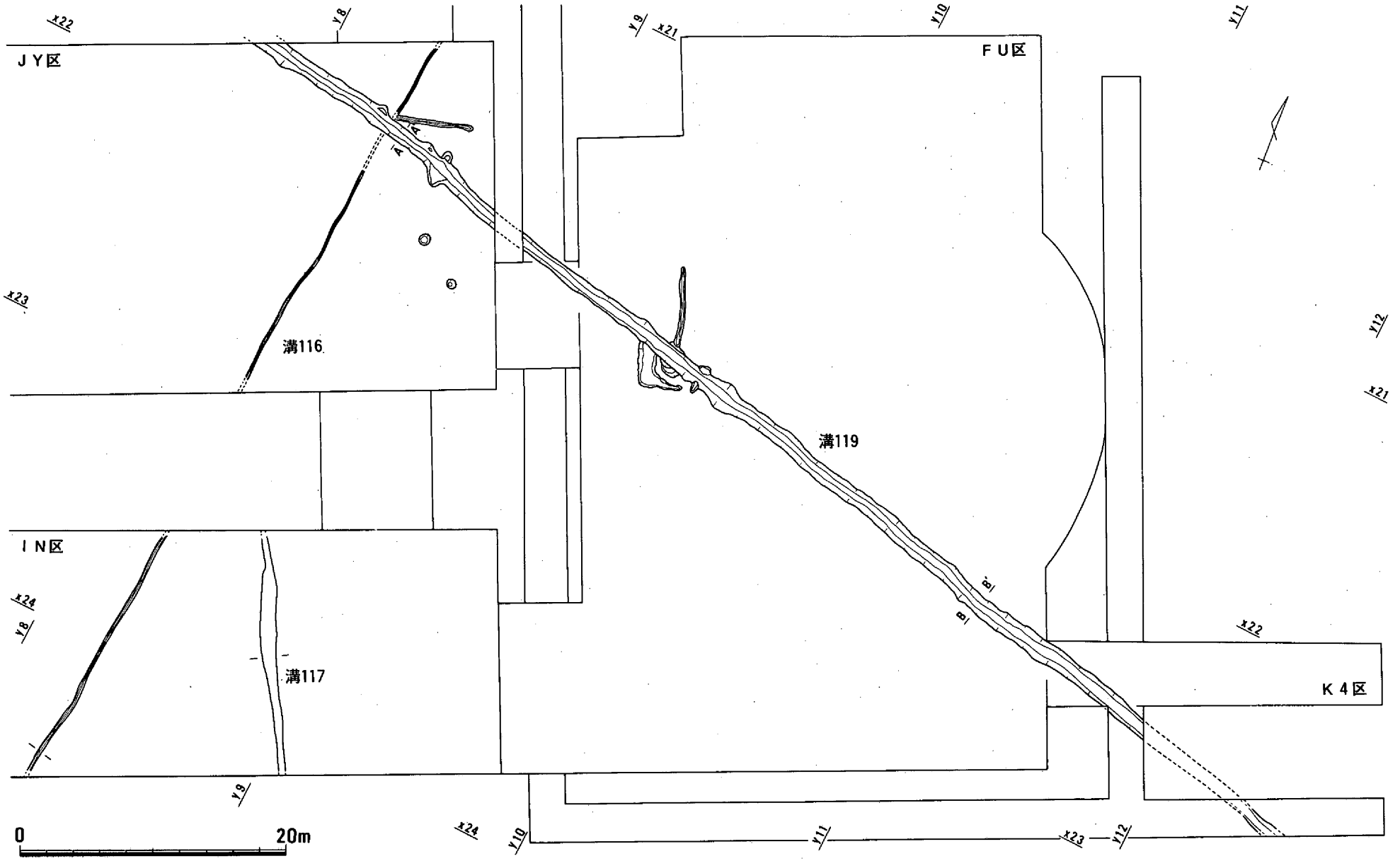
Ｋ１区中央で検出された東西方向の溝である。溝68～71の南になり、ほぼ平行している。幅60～80cm、深さ約15cmを測る。橙～橙灰褐色粘質微砂よって埋没しており、上面は中世水田層によって覆われている。埋土内からは土鍋の破片が出土しており、中世には埋没したと考えられる。（久保）



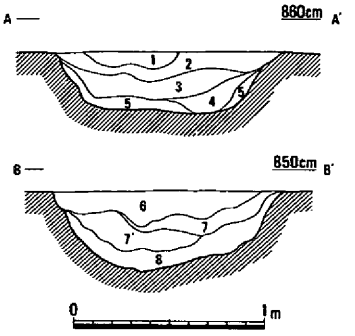
第551図　溝118断面図（1/30）

溝119（第552・553図、図版34）

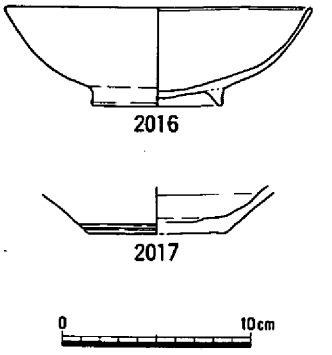
ＪＹ区からＦＵ区を横断し、Ｈ９区にぬける。溝113・114に平行して直線的に流走しており、基幹水路の一つと考えられる。幅は１～1.5m、検出面からの深さ30～40cmを測り、断面は逆台形を呈する。上面は中世水田層で被覆されており、水田耕作時には機能を停止していたようである。埋土の状況をみると最下層は褐灰～橙灰色の粘質土だが上層は褐灰色粘質土ブロックの多く混入した明灰～灰白色粘質土で、水田開発に際して意図的に埋められた可能性も考えられる。埋土内から土師器椀**2016・2017**が出土しており、鎌倉時代には埋没したと考えられる。（久保）



第552図　溝116・117・119（1/400）



1．明褐灰色粘質土
2．明灰色粘質土
3．明褐灰色粘質土
4．茶褐灰色粘質土
5．褐灰色粘質土
6．淡橙灰白色粘質土
7．淡褐灰白色粘質微砂
7′．７層にマンガン粒多く含む
8．橙灰色粘質土



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
2016	土師器	椀	口縁部、高台ヨコナデ。	ナデ。	灰白　2.5Y8/2	貼付高台。
2017	土師器	杯？	底部側面沈線２本。底部ヘラキリ？。	体部ヨコナデ。底部ナデ。	橙　5YR7/6	

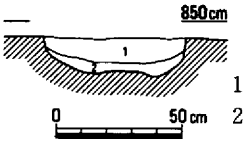
第553図　溝119断面図（1/40）・出土遺物（1/4）

溝120（第546・554図）

ＫＹ２区とＫＹ３区の境において検出した。側溝によって一部肩が切られてしまったが、幅50～100cm、深さ約15～20cmが残存していた。北端部では２条に分岐しており、また中央付近では東側に張り出し部が認められた。出土遺物はなかったが、埋土から中世と考えられる。また検出された位置・方向から、後に述べる素掘溝群２を囲む溝の可能性も考えられるが、断定はできなかった。　（平井）

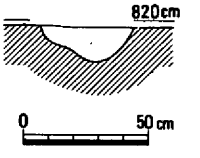
溝121（第512・555図）

ＪＯ区中央やや西寄り、建物50の西側で検出された南西から北東方向に向く溝である。幅約40cm、深さ約20cmを測る。出土遺物は無いが、検出面および、明灰色の粘土を埋土に持つことから建物50と同様中世から近世の時期を考えている。　（大橋）



1．灰白色粘質微砂
2．灰白色粘質土

第554図　溝120断面図（1/30）



第555図　溝121断面図（1/30）

(5) 素掘溝群

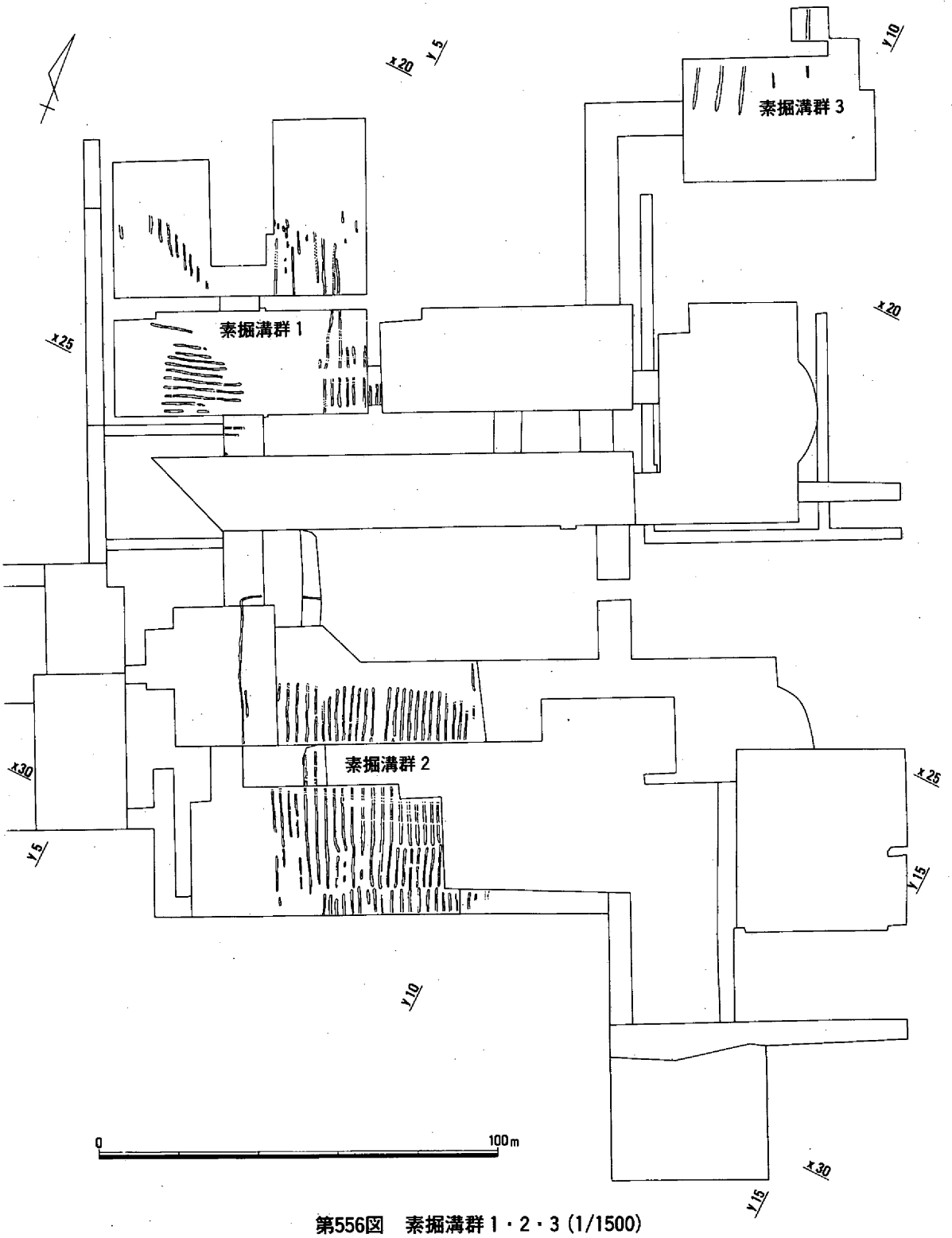
ここで報告する素掘溝群は、これまで「畝状遺構」、「中世素掘溝」などと呼称されていたものと同様の遺構である。今回報告する調査区では大きく３か所確認でき、幅30～50cm前後の溝が方向をそろえてほぼ等間隔にまとまりをもって検出された。

時期については特定できる資料がほとんどなく、またすべてが同時期でない可能性もあるが、埋土や切り合い関係などから古代末から中世段階と考えている。　（平井）

素掘溝群１（第556・557図、図版34）

ＡＴ区からＤＥ区にかけて検出された溝群である。幅30～40cm、検出面からの深さ10～20cmの溝が130～200cm間隔で平行して並び、一群を形成する。埋土は上下２層に分かれるが上層と下層の差は大きい。未調査部分が多いため明確でないが方向性やまとまりからＡＴ区の西半部と東半部、ＤＥ区の西半部と東半部の４つの小ブロックに分かれるようである。その中でもＤＥ西半部と、東半部および

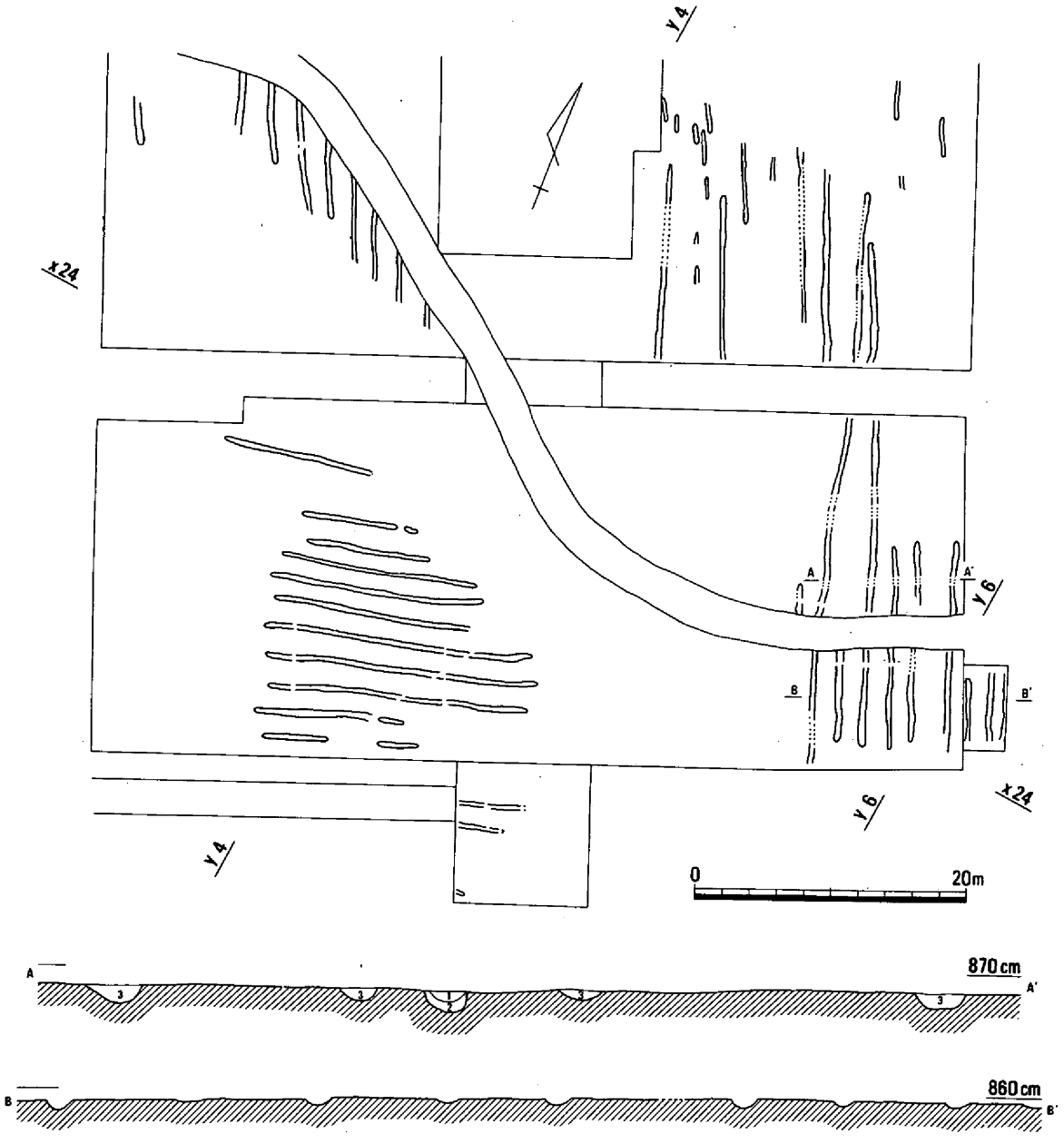
ＡＴ区では溝の主軸方向が90度違っているが両者の間には溝113・114が存在しており、この溝が水路としてのみ機能していたのではなく何等かの境界の役割も果していた可能性が考えられる。素掘溝群の埋土の状況も周囲の溝群と近似しており、また同じく中世水田層によって上面を被覆されていることから同時期に存在し、中世に埋没したと考えられる。（久保）



第556図　素掘溝群１・２・３（1/1500）

素掘溝群２（第556・558～560図、図版35）

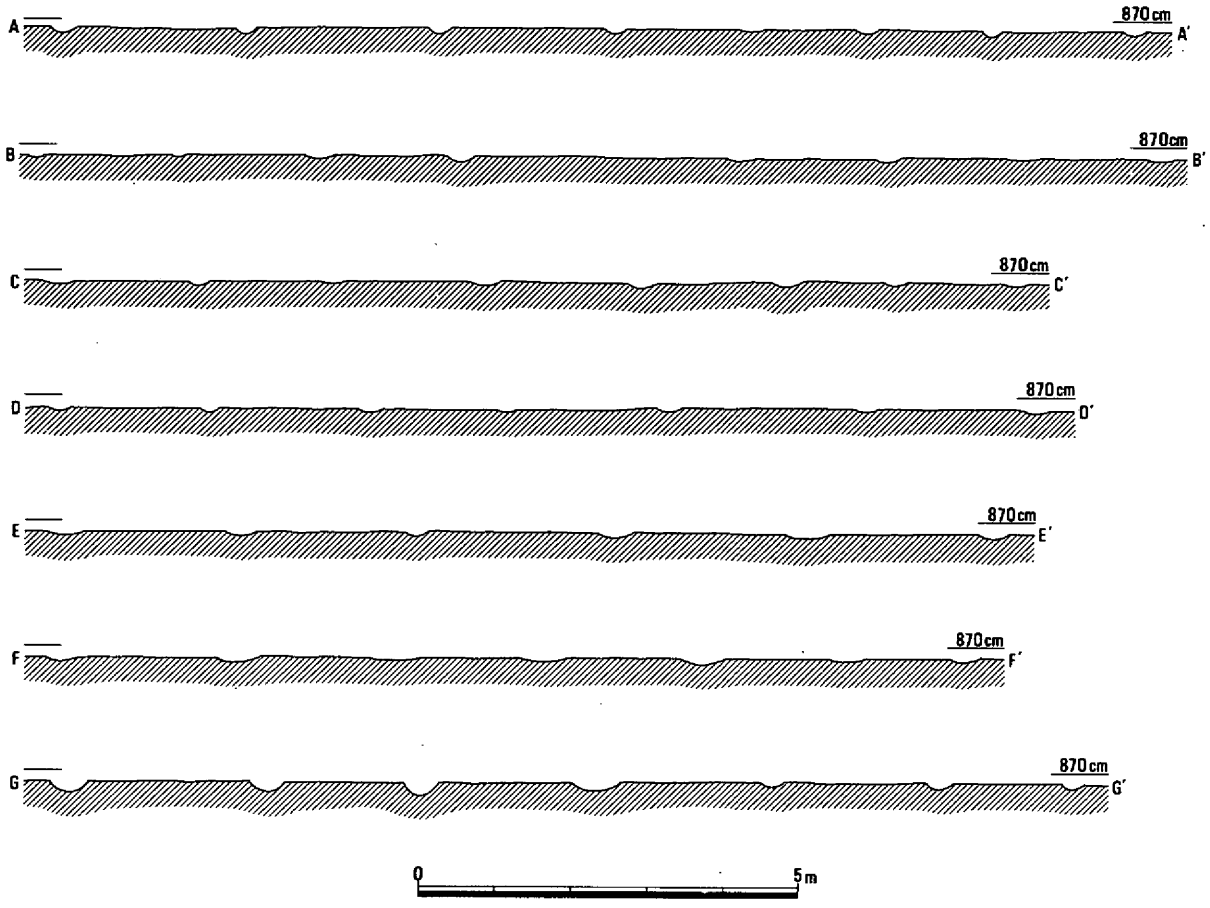
ＫＹ１・２区およびＨＦ区を中心として、現在の地割りに沿うかたちで検出された。南北の幅は不明であるが、東西はＫＹ１区、Ｋ９区、ＷＲ－Ａ区においてこれらの素掘溝を取り囲むような幅30cm前後、深さ10cm前後の溝が検出されていることから、約60ｍの幅のなかにおさまっている。各素掘溝の規模はほぼ同規模で、幅40～50cm、深さは５cm前後が残存していた。埋土は黄褐色、暗褐色粘質土ブロックを含む淡灰色粘土が多かった。間隔についてはいくらかの違いはあるが、ほぼ1.5～2.0ｍの間で共通しているといえる。長さについては未調査区があるため明確ではないが、長いもので約35ｍ、短いもので約10ｍを測る。またＫＹ２区では各素掘溝の北端がほぼ一定の所で途切れている。さらに



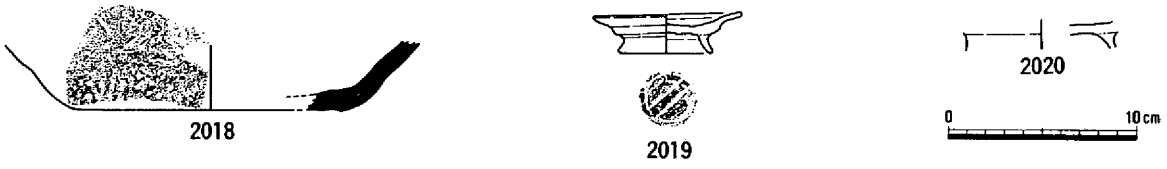
1．淡灰黄色粘質微砂　2．淡灰色粘質土　3．淡灰褐色砂質土　0　5m

第557図　素掘溝群１（1/500・1/100）

第558図　素掘溝群２(1/500)



第559図　素掘溝群２断面図（1/100）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
2018	亀山焼	壺	胴部格子目タタキ。	ナデ。	明オリーブ灰　2.5GY7/1	素堀溝群１
2019	土師器	高台付皿	口縁部、高台ヨコナデ。底部ヘラオコシ。	胴部ヨコナデ。底部ナデ。	灰白　10YR8/1	貼付高台。素堀溝群２。
2020	緑釉陶器	椀	全体にかすかに釉残存。	かすかに釉残存。	釉は淡青緑色、胎土は灰白色	周防産？。〃。

第560図　素掘溝群１・２出土遺物（1/4）

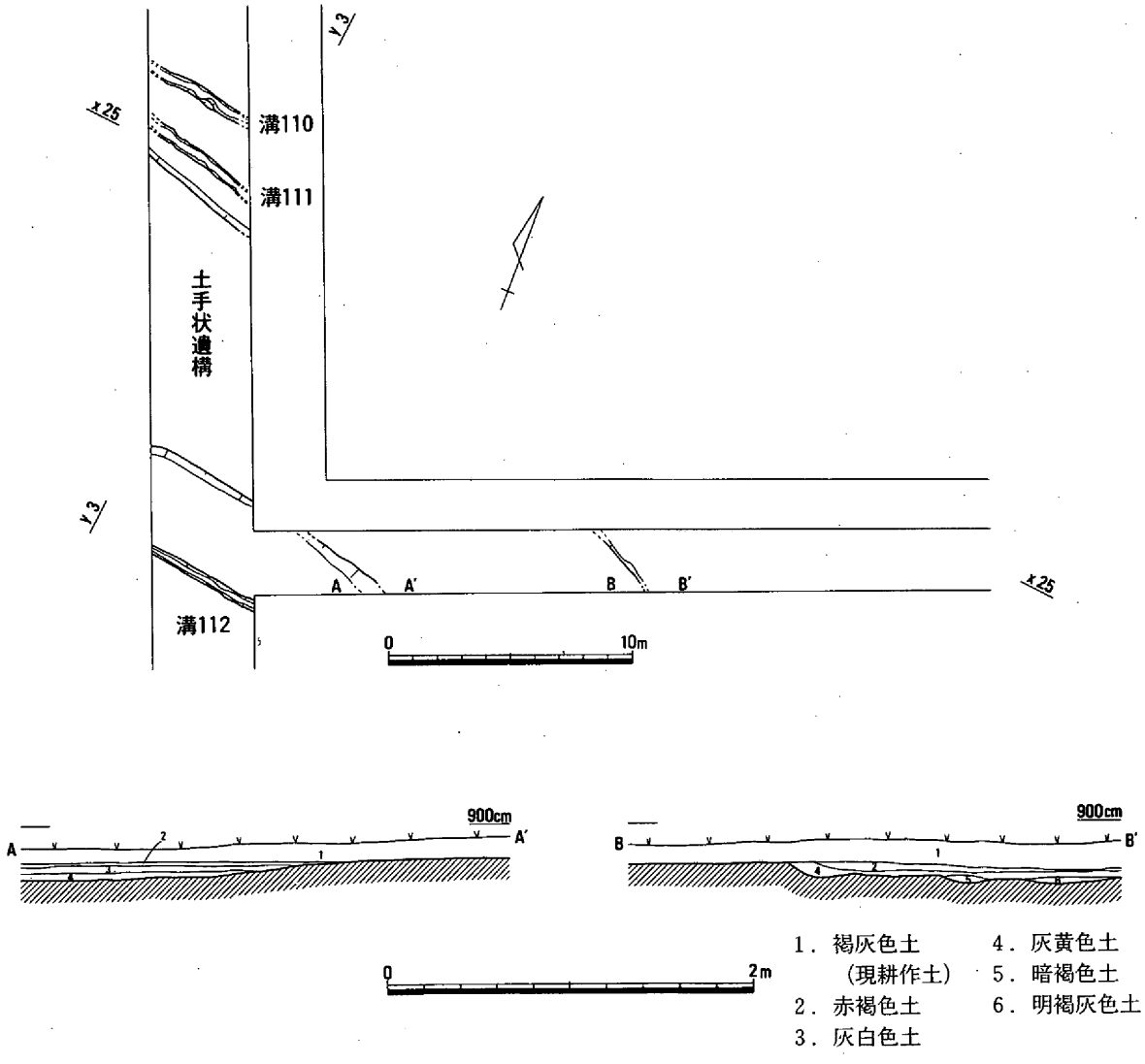
ＨＦ区では、調査区の南端から約５ｍの所で各素掘溝が途切れていることから、南北約50ｍ、東西約50ｍの範囲が一つのまとまりをもっているものと考えられる。そしてこの範囲のなかでも、南東部には南北約10ｍの小単位が存在していることがＨＦ区で想定できる。時期は明確ではないが、出土遺物に中世のものが含まれていなかったこと、および埋土が中世溝の埋土とは若干異なっていることから、古代末頃と考えておきたい。（平井）

素掘溝群３（第556図、図版31・36）

ＥＮ区及びＢＯ１区で検出された５本の素掘溝である。方向は北北東から南南西を示し、いずれも北端は調査対象外へ続き、西寄りの３本は南端を揃えている。溝の規模は、上幅60cm、深さ10cm未満で、断面形は凸レンズ状を呈し、底面の海抜高は8.7ｍ前後である。相互の間隔は約５ｍで、規模・間隔とも素掘溝群１・２とは異なる。少量の土器の出土により、中世に属すると考えられる。（光永）

(6)　土手状遺構（第561図）

Ｈ２区およびＨ４区において検出されたが、ＤＥ区およびＩＮ区では確認できなかった。検出された上幅は９ｍ前後とみなされ、その上面の海抜高は8.8ｍである。周辺の基盤層上面との比高差は15cm程度あり、基盤層を削り出すことによって形成されている。平面的には、やや南東方向へ弧を描いているように見え、後述する古代の水田範囲の東端に沿う在り方とみることもできる。時期的には、中世の枠で考えられるが、先の観点から古代に遡る可能性も残す。　（光永）



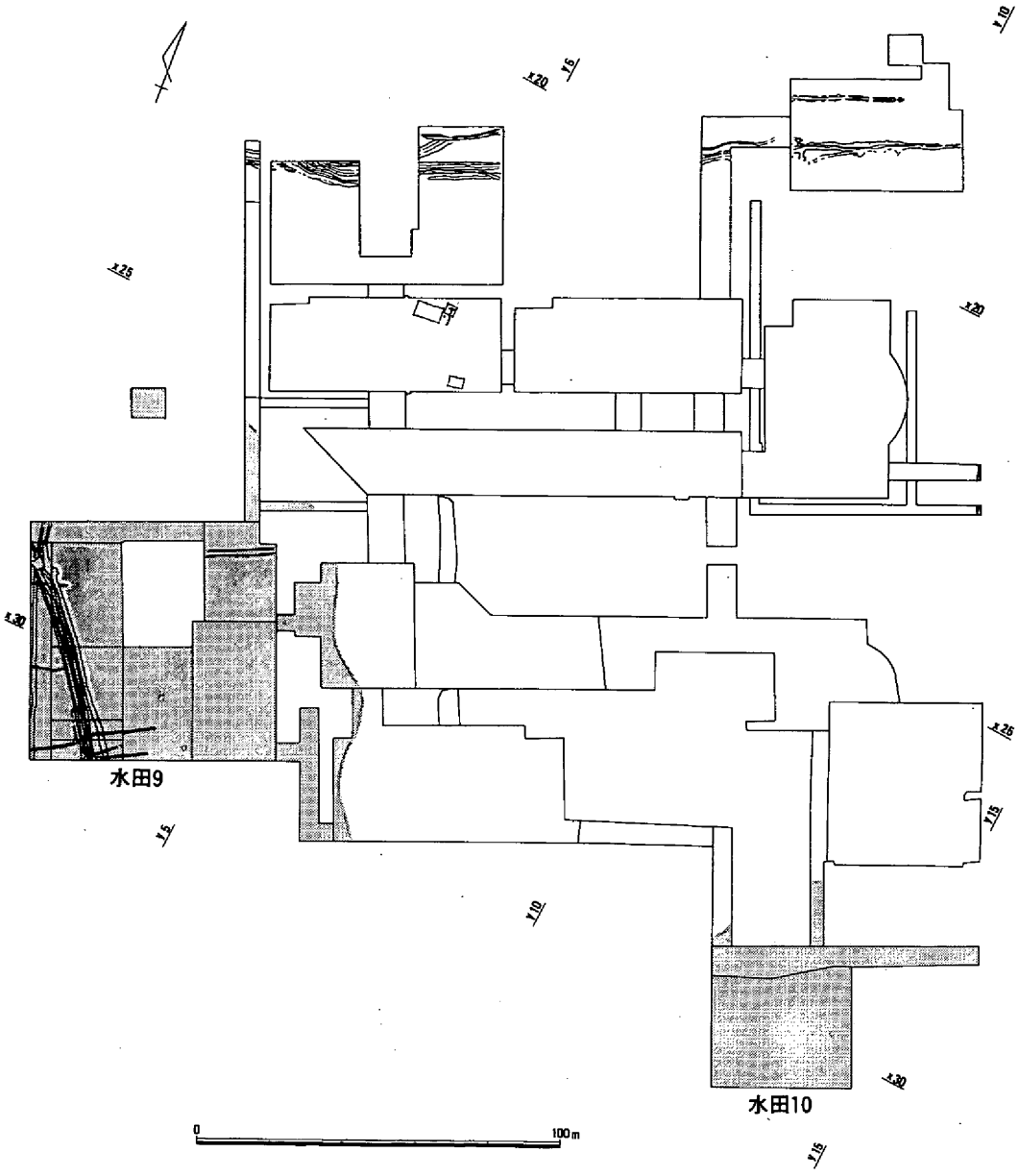
第561図　土手状遺構（1/300・1/80）

(7)　水　　田

水田９（第562～565図、図版36）

全調査区の南西にあたる。重機による表土剝ぎの段階で、上面がかなり削平されてしまったため水田面を検出し得たのは図示した水田域の東1/3程度であるが、土層断面の観察等から旧河道１より西の全域に拡がると考えられる。古墳時代前期前葉に埋没した水田８はおおよそ旧河道の範囲に留まっていたが、当期では西の微高地上も水田化が進んでいるようである。

畦畔はＴＤ１区において１条のみ確認されている。東西方向に一直線にのびる。規模は上面幅１ｍ、

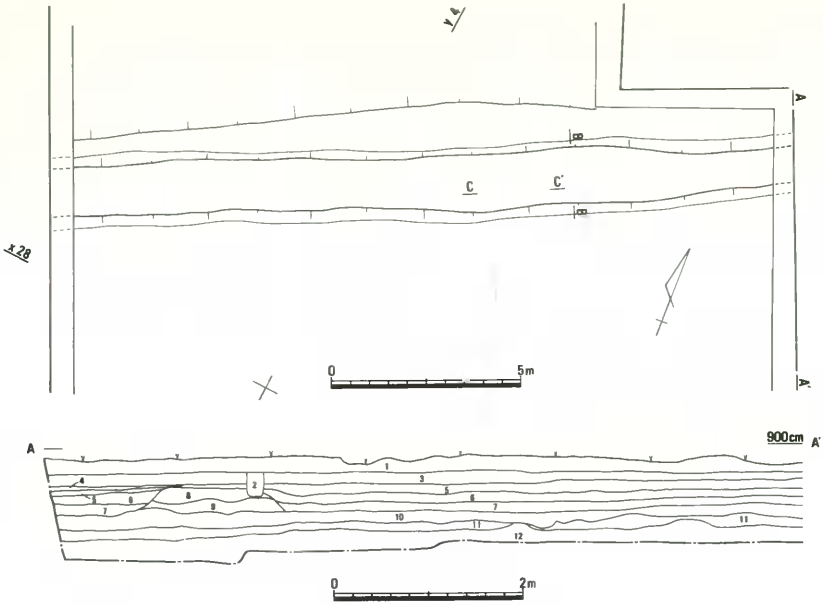


第562図　水田９・10と古代の建物・溝（1/2000）

基底部幅1.5ｍ、高さ約25cmを測る。柵列状遺構８の切り込まれていた包含層を基盤として構築されている。当畦畔に伴う水田層は第563図の６・７層で、７層は柵列状遺構８を被覆している。畦畔自体は８・９層にあたる。

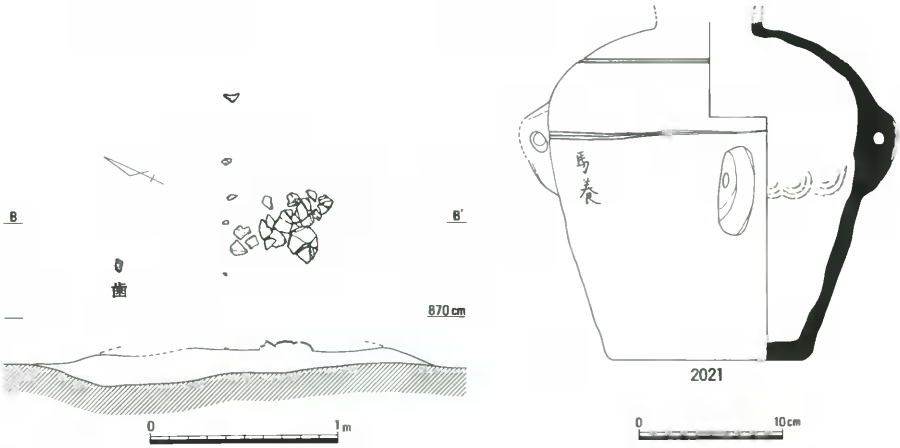
第564図では前述したように上面を削平されており、高さ約10cm程度しか残存していない。壺2021はその上面で、畦畔内に埋まった状態で出土している。口縁部を欠き、体部も全体の1/3から1/2程度しか残存していないが破片のほとんどが外面を上に向けていた。また銘の入った破片も字を上に向けてほぼ中央にあり、人為的に破砕して畦畔内に埋めこまれた可能性も高く、周囲には牛歯も散っており、農耕に関係する何らかの祭祀が行われたと想定される。平安時代のものと考えられる。第565図の土器は畦畔の下面で検出されたものである。下層の包含層に伴う可能性もあるが、これより少なくとも７世紀後半から８世紀前半以降に畦畔が構築されたと考えられる。

飛鳥時代から平安時代にかけて水田域内から土器が出土する類例は池島・福万寺遺跡で「土器埋納



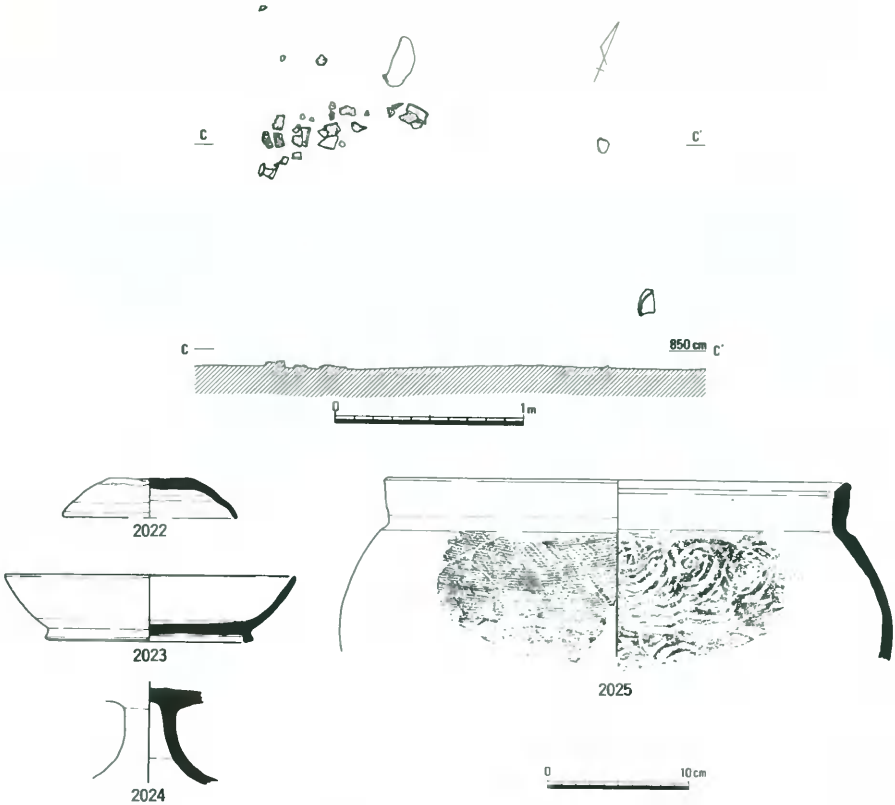
1．淡青灰色砂質土（現耕土）
2．
3．淡黄白色砂質土
（中～近世耕土）
4．淡灰色粘質微砂
5．淡黄灰色粘質土
6．茶灰色粘質土
7．暗灰色粘質土
8．橙灰褐色粘質微砂
9．淡橙灰色粘質微砂
10．黒灰色粘質土
11．淡灰色粘質土
12．淡褐灰色粘質土

第563図　水田９畦畔（1/150・1/60）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
2021	須恵器	三耳壺	肩部細く浅い沈線２本。胴部太い沈線１～３本、ヨコナデ、ナデ　底部ユビオサエ　ナデ。	頸部ヨコナデ　胴部同心円タタキのちヨコナデ。	灰白　N7/	

第564図　水田９畦畔内遺物出土状況（1/30）および出土遺物（1/4）



挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
2022	須恵器	蓋	口縁部ヨコナデ。天井部ヘラキリ本調整。	口縁部ヨコナデ。天井部ナデ。	灰白　2.5Y8/1	
2023	須恵器	杯身	杯部、高台ヨコナデ。底部ヘラキリ、中央部ナデ。	ヨコナデ。	暗灰　N3/	貼付高台。
2024	須恵器	高杯	ヨコナデ。	脚部ナデ、ヨコナデ。	灰　N6/0	
2025	須恵器	甕	口縁部ヨコナデ、胴部タタキのち[illegible]カキメ。	口縁部ヨコナデ、胴部同心円タタキ。	灰白　2.5Y7/1	

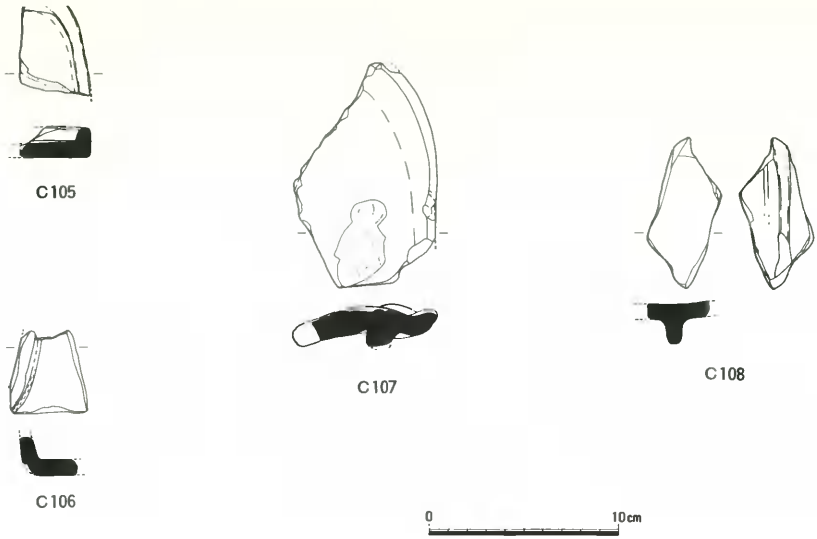
第565図　水田９畦畔除去後の遺物出土状況（1/30）および出土遺物（1/4）

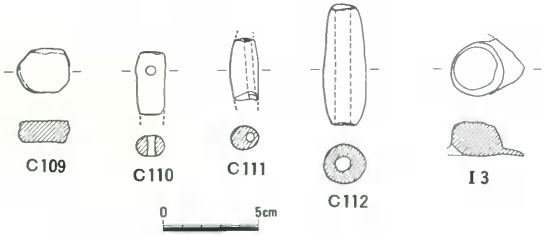
遺構」として報告されているが、条里水田の開発や再開発に伴って埋納されたものと位置づけられており(註)、そういった観点にも留意する必要があろう。　（久保）

（註） 江浦洋「条理型水田をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅶ』　財団法人大阪文化財センター　1992年

水田10（第562・566図）

第４低位部にひろがる水田層である。ほぼ、古墳時代前期前葉の水田層の範囲と重複する。畦畔などの構造物は検出できなかったが、土層観察によって水田層と判断した。第508図４層がこれに相当し、層の厚さ10cm前後、上面で海抜高8.25ｍ前後を測るほぼ水平堆積層である。土層は灰褐色を基調とする粘土層であり、層下面には鉄分の沈着が明瞭に観察できた。この層位の上位には、明るい黄褐色を





第566図　水田10関連の出土遺物（1/3）

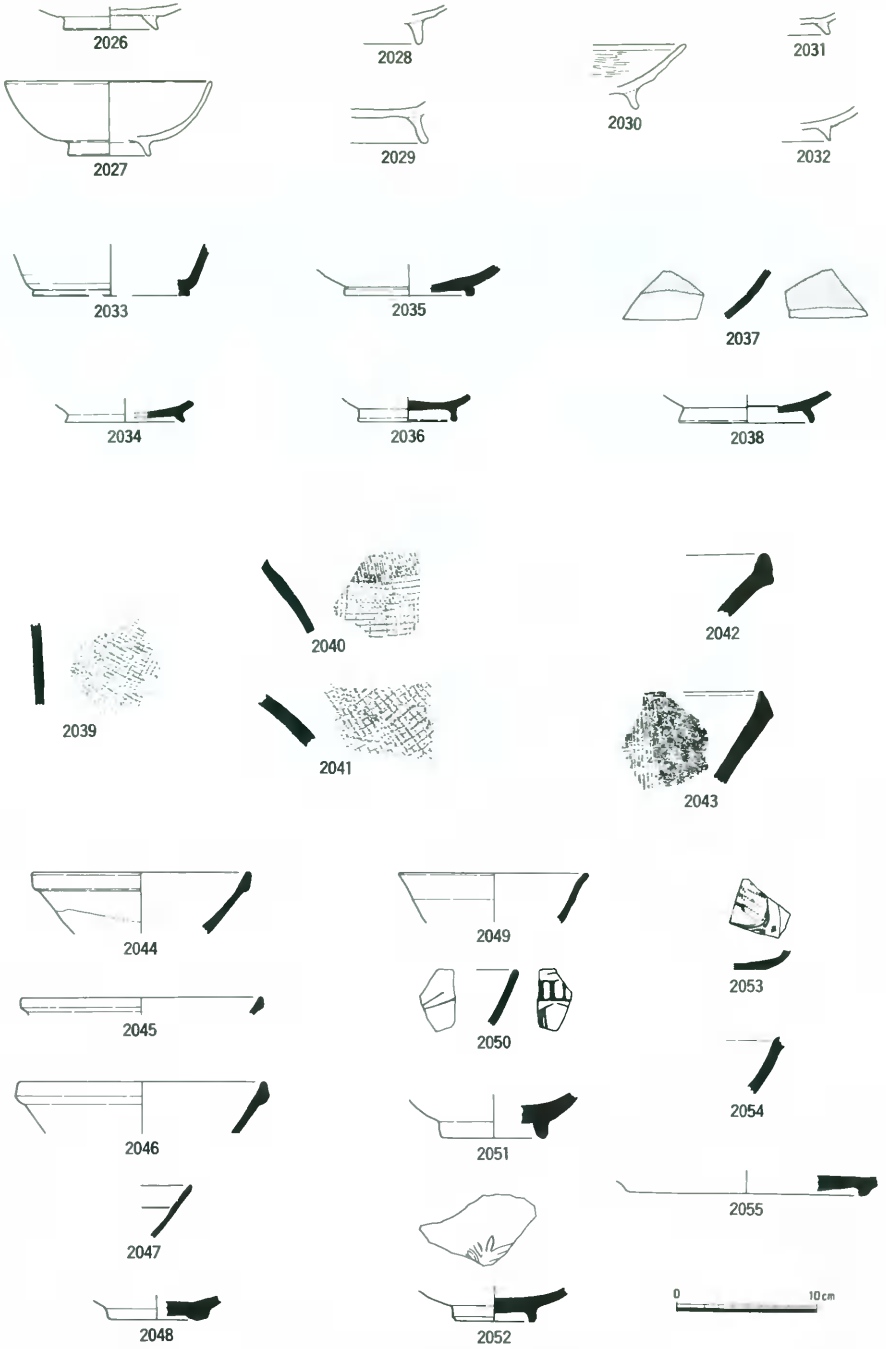
基調とした中世から近世にかけての水田層（水田11、２・３層）が広がり、下位には、奈良時代を中心とした時期が推測される暗灰褐色粘土層（５層）を挟んで黒灰褐色を基調とした６世紀末の須恵器を包含する粘土層（６層）がある。出土遺物は細片がほとんどであり、決定的な時期判定の材料は乏しいが風字硯（**C105～C108**）が特徴的にみられることと、層位関係から平安時代のなかにおさまると判断している。なおこの水田10は、層序関係からＴＤ区で検出された水田９と同一時期の可能性はあるが、地域的に離れており、連続性が認められなかったことから、ここでは断定は避けておく。出土遺物には、円板状土製品、土錘、不明鉄製品（**Ｉ３**）などを図示した。　（大橋）

水田11

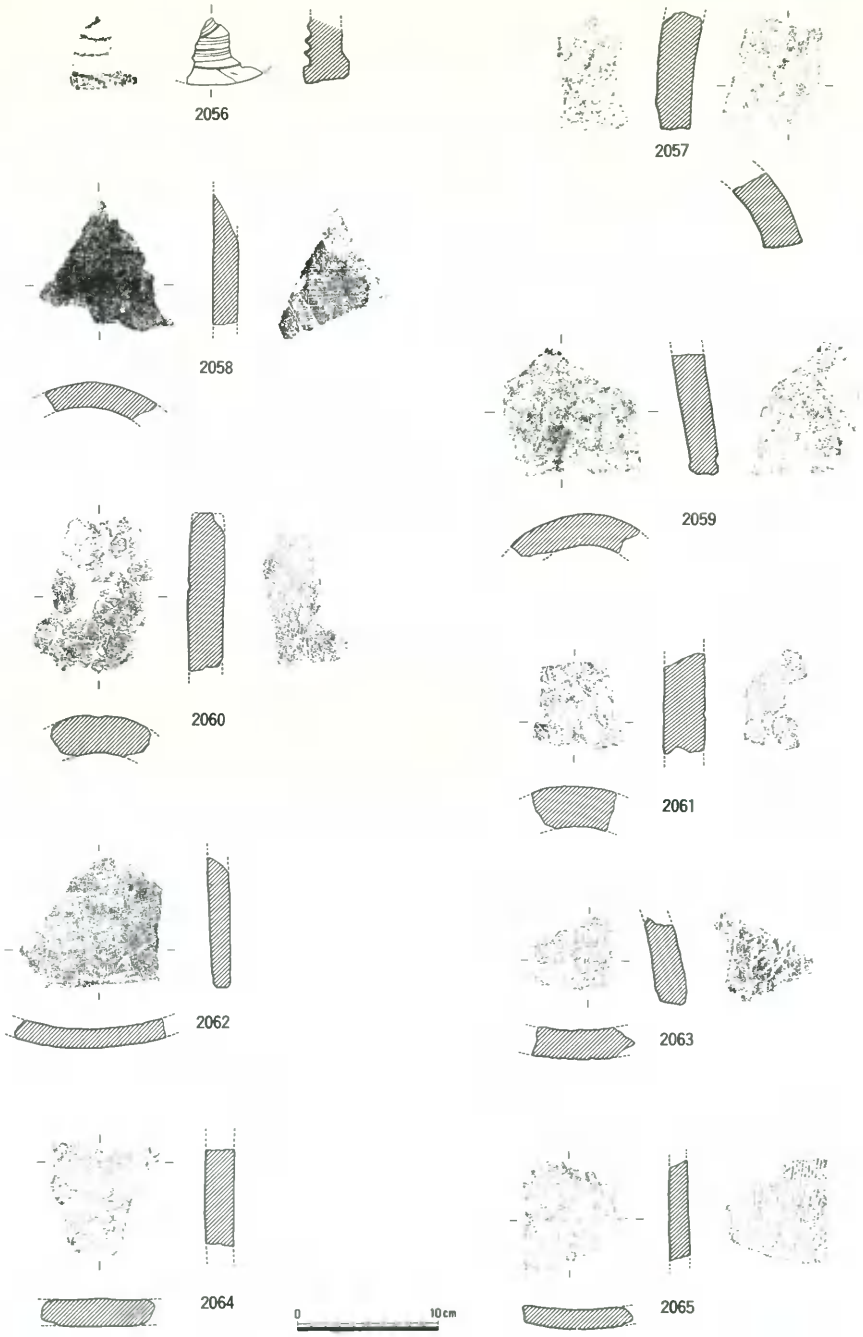
水田11としたのは中世の水田層である。この土層は後に述べる近世の水田層と考えられる現代水田耕土直下の土層の下層に認められた灰白色の粘土層である。例えば第451図の６層（Ｈ16区）などがこれに相当する。

この土層はすべての調査区において確認されているわけではなく、特に微高地部分では近世の水田層によって削平されてしまっている地区が多かった。厚さは５～10cm残存していたのみである。

この土層については、岡山県南部の発掘調査において数多く確認されている土層で、中世の水田層と考えられる。　（平井）



第567図　古代・中世の遺物(1)（1/4）



第568図　古代・中世の遺物(2)（1/4）

挿図番号	種別	器種	特徴 外面	特徴 内面	色調	備考
2026	土師器	椀	ヨコナデ。	体部ヨコナデ。底部ユビオサエ？。	橙　5YR6/6	貼付高台。
2027	土師器	椀	口縁部ヨコナデ。体部ユビオサエ、ナデ。高台ヨコナデ。	口縁部ヨコナデ。体部ミガキ？。	にぶい黄橙　10YR7/2	貼付高台。
2028	土師器	椀	高台ヨコナデ、底部ナデ。	ナデ。	灰黄　2.5Y6/2	貼付高台。
2029	土師器	椀	高台ヨコナデ、底部ナデ。	ナデ。	灰白　10Y8/2	貼付高台。
2030	土師器	椀	ヨコナデ。	ヨコミガキ。	灰白　10YR8/1	貼付高台。
2031	土師器	椀	体部、底部ナデ。高台ヨコナデ。	ナデ？。内黒。	浅黄　2.5Y8/3	貼付高台。
2032	土師器	椀	体部、底部ナデ。高台ヨコナデ。	ミガキ？。内黒。	浅黄　2.5Y8/3	貼付高台。
2033	須恵器	杯身	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白　N7/	
2034	須恵器	椀	体部、底部ナデ。高台ヨコナデ。	ナデ。	灰　N6/	貼付高台。
2035	灰釉陶器	椀	体部ケズリのちヨコナデ。底部ケズリ。高台ヨコナデ。	ナデ。灰釉。	灰白　5Y7/1	貼付高台。
2036	灰釉陶器	椀	体部、高台ヨコナデ、底部ヘラキリ？のちナデ。	ヨコナデ、見込み露胎。体部灰釉。	灰白　N8/0	貼付高台。
2037	灰釉陶器	椀	ケズリのちヨコナデ。一部灰釉。	ヨコナデ。一部灰釉。	灰白　7.5Y8/1	
2038	灰釉陶器	椀	体部ケズリのちヨコナデ。高台ヨコナデ。底部ケズリ。	底部沈線１本。うすく灰釉。	灰白　7.5Y8/1	貼付高台。
2039	亀山焼	甕	格子目タタキ。	ナデ。	灰白　N7/0	上下、傾き不詳。
2040	亀山焼	甕	頸部タテハケメ。胴部格子目タタキ。	タタキのちナデ？。	灰白　2.5Y7/1	
2041	亀山焼	甕	格子目タタキ。	同心円タタキのちナデ、ハケメ	灰　N6/	
2042	魚住焼	こね鉢	ヨコナデ。	ヨコナデ。	灰白　N7/	東播系須恵器。
2043	備前焼	擂鉢	ヨコナデ。	ヨコナデ。７条の卸目。	赤灰　7.5R5/1	
2044	白磁	碗	ケズリ。全面釉。	全面釉。	灰白　10Y7/1	白磁碗Ⅳ類。
2045	白磁	碗	全面釉。	全面釉。	灰白　10Y8/1	白磁碗Ⅳ類。
2046	白磁	碗	ケズリ。全面釉。	全面釉。	灰白　7.5Y7/2	白磁碗Ⅳ類。
2047	白磁	碗	全面釉。	細い沈線。全面釉。	灰白　7.5Y7/1	白磁碗Ⅷ類。
2048	白磁	碗	全面露胎。	見込み釉。	灰白　7.5Y7/1	白磁碗Ⅳ類。
2049	青磁	碗	全面釉。	全面釉。	オリーブ灰　10Y6/2	
2050	青磁	碗	全面釉。雷文帯蓮弁文。	全面釉。	オリーブ灰　10Y5/2	
2051	青磁	碗	全面釉。	全面釉。	オリーブ灰　10Y4/2	
2052	青磁	碗	体部釉。蓋付、底部露胎。	全面釉、見込みに印花文。	オリーブ灰　5G6/1	
2053	青磁	皿	体部釉。底部露胎。	全面釉。クシ描き文。	灰オリーブ　7.5Y6/2	同安窯系。
2054	青磁	碗	全面釉。	全面釉。	灰オリーブ　7.5Y5/2	
2055	青磁	盤	全面釉。	底面一部露胎	オリーブ灰　10Y4/2	
2056	瓦	軒丸瓦		ナデ。	灰　7.5Y4/1	
2057	瓦	丸瓦	ナデ。		黄灰　5Y4/1	厚さ約36mm。
2058	瓦	丸瓦	ナデ。	布目（幅１～２mm）。	灰白　10YR7/1	厚さ約18mm。
2059	瓦	丸瓦	ナデ。	布目（幅２mm前後）。	にぶい黄　2.5Y6/3	厚さ約21mm。
2060	瓦	丸瓦	ナデ。	布目（幅１mm前後）。	灰白　N7/	厚さ約25mm。
2061	瓦	丸瓦	ナデ。	布目（幅１mm前後）。	灰白　N7/	厚さ約28mm。
2062	瓦	平瓦	ケズリのちナデ。	布目（幅１mm前後）。	にぶい黄橙　10YR7/3	厚さ約15mm。
2063	瓦	平瓦	縄目タタキ。	布目（幅２mm前後）。	灰　N4/	厚さ約20mm。
2064	瓦	平瓦	ナデ。	布目（幅１mm前後）。	灰黄　2.5Y6/2	厚さ約20mm。
2065	瓦	平瓦	縄目タタキ。	布目（幅２mm前後）。	にぶい黄橙　10YR6/3	厚さ約14mm。
2066	瓦	平瓦	ナデ？。	布目（幅１mm前後）。	黄褐　10YR5/6	厚さ約28mm。
2067	瓦	丸瓦	ナデ。	布目（幅１～２mm）。	灰　5Y4/1	厚さ約20mm。
2068	瓦	平瓦	縄目タタキ？。	布目。	淡黄　2.5Y8/3	厚さ約23mm。
2069	瓦	平瓦	ナデ？。	布目。	灰黄　2.5Y7/2	厚さ約25mm。
2070	瓦	平瓦	ナデ。	布目（幅１～２mm）。	灰白　5Y8/2	厚さ約17mm。
2071	瓦	平瓦	ナデ。	布目（幅１mm前後）。	明黄褐　10YR6/6	厚さ約16mm。

第569図　古代・中世の遺物(3)（1/4）

(8)　その他の遺構・遺物

これまで述べてきた遺構以外には、土壙として扱わなかった土壙や土壙状の遺構、溝状遺構、柱穴などがある。土壙状遺構はＡＴ区およびＪＹ区において合計10数基が検出された。平面形が円形を呈し、深さ50cm前後のしっかりした土壙もいくつか認められたが、これらの多くは遺物は出土せず時期は不明瞭であった。柱穴状のピットは特にＡＴ区の東部分の溝85の北側約15×５ｍの範囲に集中して検出されたが、建物としてはまとまらなかった(第513図)。

遺構に伴わない遺物としては、土師器、須恵器、灰釉陶器、亀山焼、備前焼、青磁、白磁、瓦、土錘、鉄器、古銭および窯壁、鉄滓などが出土している。

第567～570図に示した遺物のうち**2026**～**2032**は土師器で、**2026**・**2027**は中世、**2028**～**2032**は古代後半のものと考えられる。

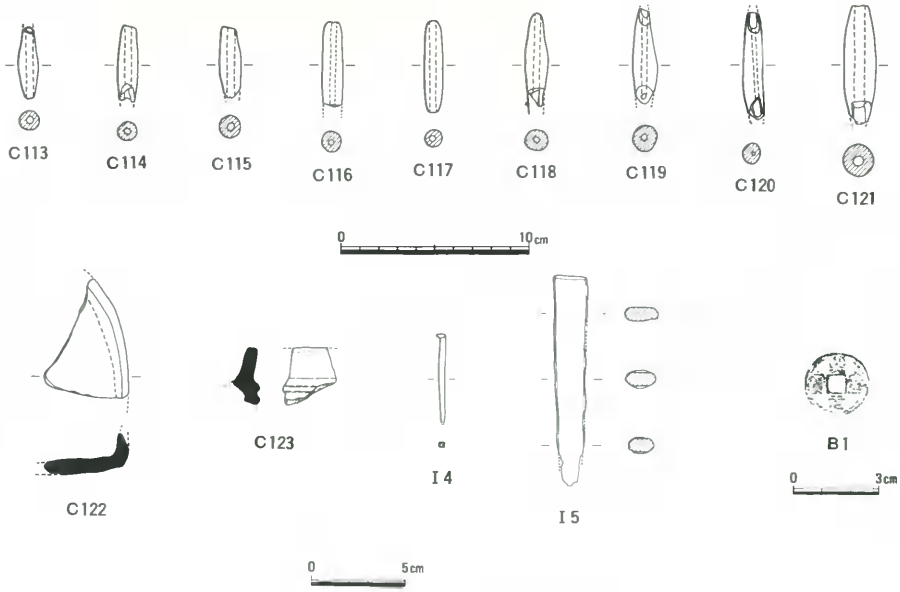
2033は奈良時代、**2034**は平安時代の須恵器で、**2035**～**2038**は灰釉陶器である。

2039～**2041**は亀山焼で13世紀代のものではなかろうか。**2042**は魚住焼、**2043**は備前焼で13～14世紀のものであろう。

2044～**2048**は白磁で12～13世紀と考えられる。**2049**～**2055**は青磁で、**2049**～**2051**は14世紀後半から15世紀前半、**2052**は14世紀前半、**2053**～**2055**は12～13世紀と考えられる。

2056～**2071**は瓦で、奈良時代の後半から平安時代前半のものではなかろうか。瓦は図示したものの他にも10数片出土しているが、いずれも小片である。

Ｃ113～**Ｃ121**は土錘、**Ｃ122**は風字硯、**Ｃ123**は円面硯、**Ｂ１**は「熙寧元寶」である。　　(平井)

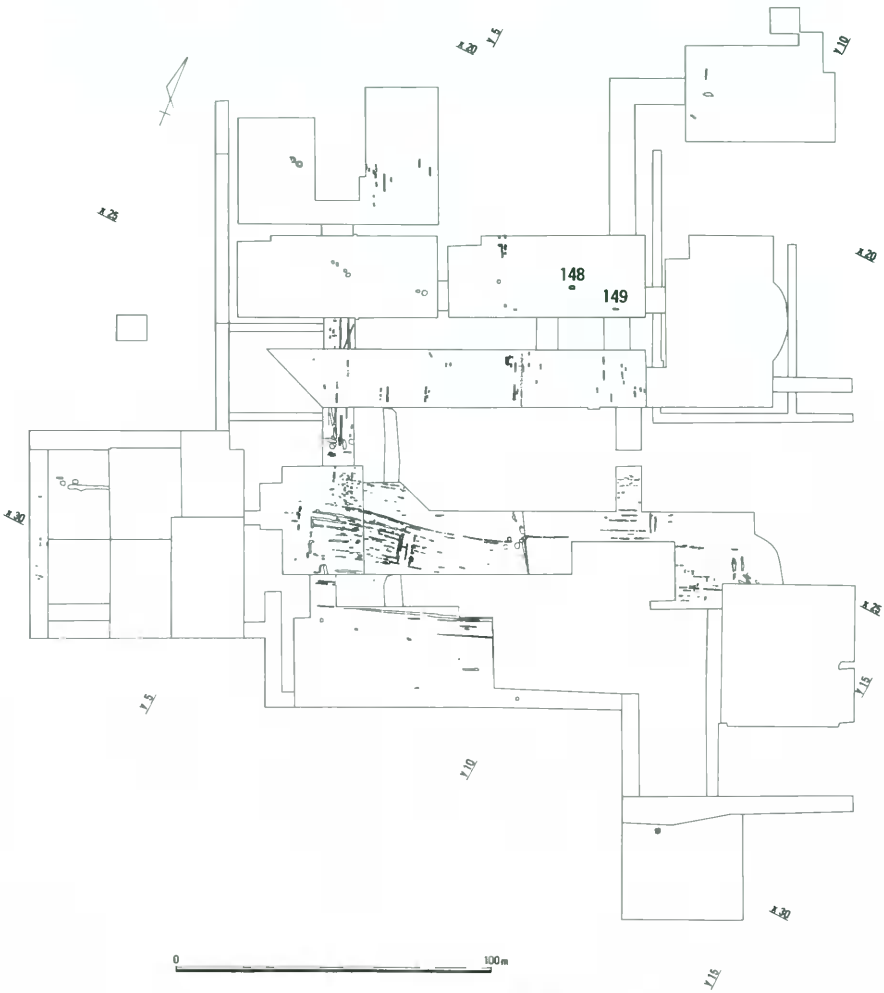


第570図　古代・中世の遺物(4)　(1/3・1/2)

第８節　近世以降の遺構・遺物

１．概　　要

近世以降と考えられる遺構としては、土壙、溝、水田が検出できた。土壙は２基のみを報告するが、これ以外にも不定形なものや肥料溜的な用途が考えられる土壙がいくつか確認できている。溝は耕作に伴うと考えられる浅く細い溝が多数検出されている。水田層は現水田耕作土直下に約20cm堆積しており、数枚の水田層が想定できる。（平井）



第571図　近世以降遺構全体図（1/1800）

２．遺構・遺物

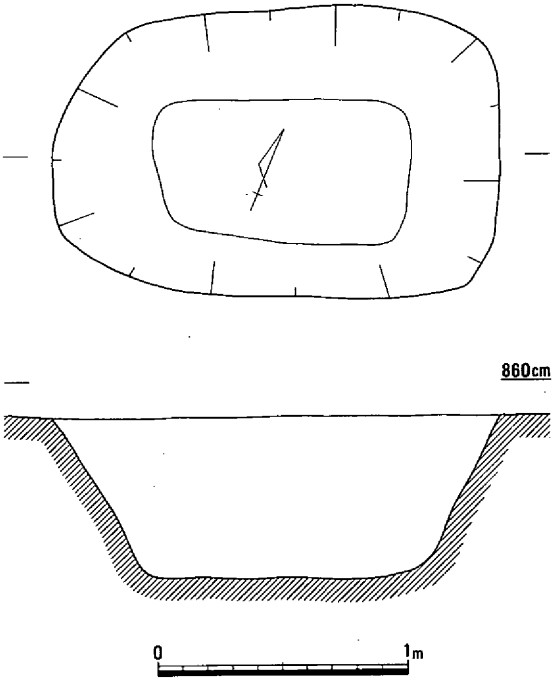
(1) 土　　壙

土壙148（第572図）

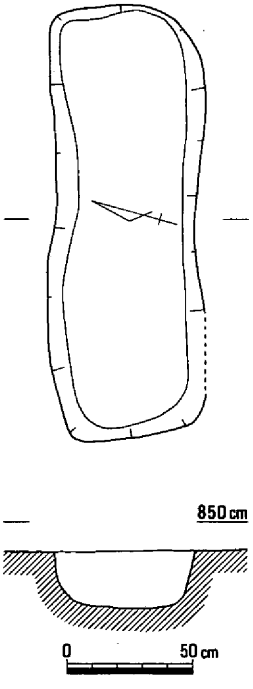
ＪＹ区の中央東寄りから検出された平面長方形、断面逆台形を呈す土壙で、主軸はほぼ東西方向に向く。規模は長軸180cm、短軸115cm、深さ65cmを測る。埋土は灰白色粘質土に茶灰色粘質土塊が混じるもので、底部に向かいグライ化の状況を呈していた。遺物は皆無であったが埋土の状況から近世の遺構と判断した。（江見）

土壙149（第573図）

ＪＹ区の東端から検出された、ややいびつながらも平面長方形の土壙で主軸はほぼ東西方向に向く。規模は長軸175cm、短軸60cm、深さ約20cmを測る。埋土は上記同様、灰白色粘質土に茶灰色粘質土塊が混入するものであった。遺物は弥生土器片が出土しているが、埋土の状況から当時期の遺構と判断した。（江見）



第572図　土壙148（1/30）



第573図　土壙149（1/30）

(2) その他の遺構・遺物

その他の遺構としては土壙として報告しなかった土壙あるいは土壙状遺構が10数基検出されている。性格はよくわからないものが多いが、肥料溜的な用途が考えられるものもある。その他に全調査区において現代水田耕作土の直下に約20cm堆積している土層がある。この土層は単一の土層ではなく、淡灰色粘土と黄灰色粗砂層が約５cmの幅で互層をなしている部分が多く、土層の境界には鉄、マンガンの沈着層がうすく認められた。こうしたことからこれらは数時期の水田層と考えられ、時期は部分的に近世陶磁器が少量出土していることから、一部は中世や近代の可能性があるものの基本的には近世段階のものと考えておきたい。さらには各調査区において浅い溝が多数検出されており、水田耕作に伴うスキ痕ではないかと考えている。（平井）

第4章 ま と め

第1節 発掘調査成果の概要

南溝手遺跡は岡山県の南西部の総社市南溝手に所在する。遺跡は、中国山地に連なる標高200～500m前後の丘陵部の南に拡がる平野部に位置しており、発掘調査前の状況は、おもに標高8.5～8.8m前後の水田地帯であった。

発掘調査地は古くから遺跡の存在が知られていた訳ではなく、1985年度から3か年にわたって実施された総社市教育委員会による「備中国府確認調査」によるトレンチ調査によって、部分的にではあるが弥生時代～中世に至る遺跡の存在が知られるようになった。

こうしたなかで第1章の調査の経緯で述べたように、当該地が岡山県立大学および岡山県立大学短期大学部の建設予定地に選定されたのに伴って、予定用地内における確認調査が行なわれ、その後その結果に基づいて約3年間にわたって全面調査が実施された。全面調査を実施した総面積は約60,000㎡で、調査の結果、縄文時代後期から中近世に至る数多くの遺構・遺物が検出された。なお遺跡名としては南溝手遺跡・窪木遺跡と呼称している。

発掘調査報告書は4分冊に分けて刊行することとし、今回報告する「南溝手遺跡1」は、全体の北西部にあたる調査区であり、縄文時代後期から中近世に至る遺構・遺物が検出されている。以下報告書の節立てに沿った形で、発掘調査成果についてのまとめを行いたい。

1．縄文時代後期の遺構・遺物

遺構は検出されなかったが、10個体あまりの土器片および石器2点が出土している。これらの土器や石器の出土状況については第3章第2節において述べているが、A・B・C地点における遺物は、岡山県南部の沖積地などの調査ではあまり類例をみない出土状況を示している。すなわち、A・C地点では、縄文時代晩期以降の基盤層となっている黄色砂質土中から出土しており、土層の断面観察においては明瞭な土質や色調の違いは認められなかった。遺物の出土した深さは、調査時点ではこの基盤層上面から約80～120cmであったが、この基盤層は後世に削平をうけており、弥生時代の竪穴住居や袋状土壙の残存状況から判断すれば、縄文時代晩期から弥生時代の生活面から約150cm前後下位に遺物は存在していたと考えられる。単純に考えれば、縄文時代後期後葉から晩期中葉までの間にこの地点では1m以上の土砂の堆積があったと考えられよう。

ところで岡山県南部における沖積地の形成については縄文時代晩期以降で、沖積地への集落の進出も晩期後葉以降で、このことが水稲農耕の開始とあわせて論じられることがあった。しかしながら近年の津島江道遺跡[(1)]や津島岡大遺跡[(2)]、百間川沢田遺跡[(3)]などの発掘調査によって、後期はじめには現在みられるような沖積地の大部分は形成されており、集落も立地していたことが明らかになりつつある[(4)]。

今回報告する南溝手遺跡の調査区では、遺物が少量出土したのみで、集落のあり方などは明らかにすることはできなかったが、こうした後期における総社市域での集落の存在を明らかにできた意義は大きいと考えられる。当地域における後期の集落の形成のもつ意味については、B地点で出土した籾

痕土器などから稲作を含む農耕の開始と関連するものと考えたいが、このことについては第２節で述べたい。

出土した土器は少量であるが、第２節で述べる籾痕土器の時期を考えるうえで参考になると思われるので、若干の検討を加えたい。**39**の籾痕土器以外の後期後葉の土器の特徴は以下のとおりである。

器種は深鉢と浅鉢(浅鉢としたもののなかには注口土器の可能性のあるものがある)とがある。深鉢には**36**のように口縁部が内側に屈曲し、口縁外面に巻貝による凹線文と扇状圧痕、そして胴部にも巻貝による３条の凹線文を施したものと、**40**のような胴部からゆるやかに口縁部が外反し、口縁端部内面に凹線を施し、胴部には３条の巻貝による凹線文をもつものとがある。この両者は器形以外に調整においても若干異なっている。まず外面の調整については、**36**が巻貝条痕とナデであるのに対して、**40**では巻貝条痕ののちに横方向に丁寧なミガキが施されている。内面は明瞭ではないが、**36**の口縁部が巻貝条痕、胴部が巻貝条痕のちナデ・ミガキで、**40**は磨滅のためはっきりしないが、最終的にはミガキ調整が施されたものと思われる。また、巻貝による凹線文については、**36**が巻貝の線条痕がそのまま残っているのに対して、**40**では巻貝の線条痕のうえをミガキで消すような調整が行われている。こうした相違点をもとに他の土器をみると、外面調整では巻貝条痕とナデでミガキを施していないのが**47**・**48**で、巻貝条痕ののちにミガキを施したものが**37**・**38**・**42**・**43**・**45**である。また、巻貝による凹線文のうち、巻貝の線条痕ののちミガキを施しているのが**43**、巻貝の線条痕をナデ消しているものが**37**・**48**である。さらに巻貝の圧痕については扇状圧痕のものが**36**・**37**・**44**で**47**は粘土塊を貼り付けたうえに腹縁を押圧している。また、**44**には円形の刺突文も施されている。底部はくぼみ底である(**38**・**45**)。

こうした特徴をもつ土器としては、岡山県内では、福田貝塚の福田ＫⅢ式[5]、広江・浜遺跡の後期Ｃ類土器[6]、舟津原遺跡の後期Ⅷ類土器[7]、阿津走出遺跡の後期Ⅵ類土器[8]があり、その他に広島県馬取遺跡５類土器[9]などが類似している。

本報告書ではこうした巻貝による条痕や凹線文、扇条圧痕などを特徴とした土器群を福田ＫⅢ式として捉えている。福田ＫⅢ式については、口縁端部内面や凹線文間の刻目の有無、凹線文間にミガキをくわえるかどうかなどによって新・古を考える意見があり[10]、舟津原遺跡後期Ⅷ類や阿津走出遺跡の後期Ⅵ類の土器群の様相からは、口縁端部内面や凹線文間に刻目をもつもの、あるいは巻貝凹線文内にミガキを加えるものについては、福田ＫⅢ式の中でも古い様相と考えることができる。このように考えるならば、今回出土した土器群については、刻目をもつものは出土していない。しかしながら凹線文内にはミガキを加えているものもあるが、**36**のように巻貝線条痕をそのまま残しているものや**37**・**48**のようにのちにナデを施しているものも存在している。したがって、今回出土した土器群については、大きくは福田ＫⅢ式の範疇でとらえ、その中では古・新の中間的な様相をもつものと考えておきたい。

２．縄文時代晩期の遺構・遺物

縄文時代晩期の遺構・遺物は中葉段階のものと後葉段階のものが検出された。後葉についてはいわゆる刻目突帯文土器の出現をもって区分している。

(1)晩期中葉

この時期の遺構としては、ＤＥ区において土器溜り１か所(土器溜り１)とＩＮ区において土壙２基(土壙３・４)が、また火処が24か所(火処１～24)検出できた。火処については、遺物を伴うものがなく時期は明確ではないが、すでに述べたような検出状況からその多くは土器溜り１とほぼ同時期と考えている。これらの遺構のうち土壙３については、わずかではあるが埋土の色調や土質が基盤層と異

なっており遺構と確認できたが、土器溜り1については、土色や土質から基盤層との違いを確認することはできなかった。また火処についても、掘り方などが確認できなかったものが多い。一方、晩期後葉の遺構については埋土の違いが明確なものも多く、こうした遺構検出状況の違いと土器型式の違いが対応する可能性が考えられる。いずれにせよ、河道2から出土した土器量などとも考えあわせると、晩期中葉段階にはこの地域にある程度の集落が形成されていたことは間違いないであろう。例えば、火処が多く検出され、また基盤層中から土器片も比較的多く出土した第1微高地の北端部から第2微高地(西)の北半部を一つの居住域と考えることができる。また、河道2から出土した土器については、この北側の地域では当該期の遺構・遺物はほとんど出土しておらず、第2分冊で報告予定の南側の地域に想定できる居住域からの廃棄と考えておきたい。

出土遺物には、土器・土製品、石器・石製品、種子などがあり、土器については第3節で、石器・石製品については第6節でまとめをおこなっており、また、河道2から出土した種子については第6表に示している。

(2)晩期後葉

晩期後葉の遺構はおもに第1微高地および第2微高地(西)の北半部で、土壙、火処、柱穴などが検出された。このうち土壙については、出土遺物もなく形状もはっきりしないものが多いが、土壙22・23・26についてはその形状から貯蔵穴である可能性が考えられる。

また土壙24からは人の歯[11]が検出できており、土壙墓と考えておきたい。こうしたことから、土壙24の周辺で検出できた土壙のうち土壙12～21については、大きさは必ずしも一定していないものの、基本的に平面形が長方形を呈し、底面がほぼ平らで、壁が垂直に近く立ち上がっていることから、土壙墓である可能性を指摘しておきたい。なお、これらの土壙群については、約30×25mの範囲に集中しており、大きくは北と南のグループに区分することができる。また長軸の方向は、ほぼ南北および東西のものに分かれるが、さきの北・南に分かれるグループとは対応していない。

出土遺物には土器・土製品、石器・石製品などがあるが、土器については第4節で、また石器・石製品については第6節でまとめをおこなっている。なお、**264**の口縁端部内面には明瞭な籾痕が確認できた(図版41－2)。

3．弥生時代前期～中期前葉の遺構・遺物

この時期の地形は第128図に示したように、3か所の微高地と4か所の低位部および河道1・2に区分できる。

(1)遺構

検出した遺構のうち竪穴住居は4軒、建物は1棟、溝は6条である。土壙については67基を報告しているが、これ以外にも土壙状の遺構は50基あまり検出できている。しかしながら遺物を全く伴っていなかったり、形状が不定形なものが多く個別の土壙としては報告していない。時期的には、土壙95が中期前葉で、その他の遺構はほとんど前期のものと考えられる。

竪穴住居4軒は40～50m以上離れて検出できている。これらの竪穴住居が同時期に存在していたかどうかについては土器からは明確にし得ないが、いずれも前期前葉～中葉のものとは考えられる。竪穴住居2以外については残存状態は良くないが、平面形はすべて円形を呈し、壁体溝は検出できなかった。規模については一定していないが、当地域の弥生時代の竪穴住居の規模と比較しても、竪穴住居3は大規模であり、竪穴住居4は小規模といえる。規模からのみでこれらの竪穴住居の性格を考

えるのは早計ではあるが、竪穴住居３については、床面上近くからサヌカイトの石製品とともに剝片が多く出土していることから、石器製作場としての機能を有していたものと考えられよう[12]。また竪穴住居２についても、前章で述べたように、管玉の未製品や玉砥石、あるいはサヌカイト製の石器や剝片が多量に出土していることから、玉作りを含む石器製作場として用いられていたと考えられる。しかしながら、これらの竪穴住居２・３が石器製作場としてのみ用いられていたのか、いわゆる住居と兼用していたのかについては明らかにすることはできなかった。竪穴住居４については、床面積が７㎡と非常に狭く、通常の住居とは考えにくいが、機能については特定できない。

ところで、今回検出した竪穴住居の形態上注目されるのは、竪穴住居２・４で確認できた中央欠の両脇に位置する２本の柱穴の存在である。こうした形態の竪穴住居については、近年「松菊里型住居」として注目されている[13]。竪穴住居２・４については時期的にも当地域の弥生時代前期でも古い段階のものであり、「松菊里型住居」の範疇で考えることもできるが、一方こうした形態の竪穴住居は県内では弥生時代中～後期にもいくつか存在しているため、なお検討が必要であろう。

掘立柱建物は１棟のみ検出した[14]。規模は５×２間で、平面形はややいびつな長方形を呈する。出土遺物がないため細かな時期は明らかではないが、高知県田村遺跡[15]や福岡県江辻遺跡[16]の例などから弥生時代前期のものと考えている。

土壙については、いわゆる廃棄壙と考えられる不定形なものが多い。しかしながら第２微高地(西)のＡＴ区で検出された土壙37～47・56・57については基本的に平面形が長方形を呈し、底面もほぼ平らで、壁もかなり強く立ち上がることから、土壙墓である可能性を指摘しておきたい[17]。なお、墓としては、これらの土壙群とは離れた場所で土器棺墓が１基検出できている。その他に、土壙55・58～61については、ＡＴ区の南東部においてまとまって検出できた。これらの土壙は、規模的には若干の大小があるものの、他の土壙に比べて大形である。また、図示したように、平面形はいずれも隅丸長方形を呈し、断面の形状および埋土の状況においても共通性が認められる。また、遺物をほとんど含んでいない点も共通している。したがって、これらの土壙は、特定の目的のために掘られ、また共通した埋め方をしたものと考えられるが、用途・機能については特定できない。今後の類例の増加をまって検討したい[18]。

溝については６条を報告しているが、これらは一連の溝である可能性がある。溝３は溝２を付け替えたものであろうし、溝４は溝５・６のまた溝５は溝６の付け替えと考えられる。

前期の水田については、すでに述べたように、発掘調査後にＥＮ区の低位部に堆積した土壌の分析から、イネのプラント・オパールが検出されたため考えたが、目的意識的な調査ができなかったため、不明な点が多い(第７節参照)。

(2)遺物

出土した遺物のうち、石器・石製品および竪穴住居２出土の玉作り関連遺物については、第６節でまとめをおこなっている。

土器は、竪穴住居や土壙からまとまって出土したものは少なく、多くは溝および低位部の包含層からの出土である。これらの土器については、すでに述べたように前期前葉から中葉段階のものが多い。前期前葉と中葉との区分については、本報告書では一応甕形土器におけるヘラ描き沈線の出現を指標としている。現在までにおける岡山県下の前期土器編年案との対比については第４表を作成したので参照されたい[19]。

本報告書に掲載した前期土器については、細かな分析は行っていないが、少量の前葉に遡りうる可

南溝手遺跡1	高橋(註19)	藤田(註20)	平井(註21)	秋山(註22)	高畑(註23)	正岡(註24)	甕		壺				
							段	ヘラ描き沈線	段	削出突帯	貼付突帯	ヘラ描き沈線	ヘラ描き沈線文
前葉	Ⅰa	前半a	Ⅰ期	第Ⅰ期	Ⅰ－1	Ⅰ－1						細	
	Ⅰb												
中葉	Ⅰc	前半b	Ⅱ期	第2期	Ⅰ－2			少				少	太
	Ⅱa	後半a	Ⅲ期	第3期	Ⅰ－3	Ⅰ－2							
後葉	Ⅱb	後半b	Ⅳ期	第4期	Ⅰ－4	Ⅰ－3		多				多	

第4表　弥生時代前期土器編年対比表

能性のあるものや、後葉の土器を除いて中葉段階の土器がまとまって出土しているのが特徴と言える。前期中葉については、表でも明らかなように、古・新に区分できるが、土壙79・80・90出土土器や溝4出土の大部分の土器は古段階と考えられ、これまで比較的資料の少ない時期であり注目できる。

ところで今回出土した前期土器のうちで注目されるもう一点は、**915**のような突帯を施した甕である。こうした突帯文の甕については、県内ではこれまで津島遺跡[26]や百間川沢田遺跡[27]で数点報告されているのみであるが、それらに比べ今回図示できたのが60点あまりで、量的には多く存在しているといえる。これらは小片のため傾き不詳の土器も多いが、タイプとしては、**915**・**1079**などのように如意形の口縁部に刻目突帯を施したもの(このタイプが最も多い)、**1084**・**1502**などのように直線的にのびる口縁部に刻目突帯を施したもの、**1107**・**1340**などのように内湾する口縁部に刻目突帯を施したもの、**1014**・**1082**のように外反する口縁部に太めの三角形の無刻目突帯を施したものなどがある。このうち共伴遺物から時期がある程度推定できるのは、土壙34や溝1・4出土土器で、おそらく前期前葉～中葉のものが多いように思われる。しかしながら、これらの土器については縄文時代晩期の突帯文土器の影響を残したものと考えるべきであろうが、編年的な位置付けや遺跡の性格との関連などについては明らかにし得なかった[28]。また、これらの土器に類似した前期の突帯を施した甕については、高知県田村遺跡[15]や香川県下川津遺跡[29]・大浦浜遺跡[30]、愛媛県中寺州尾遺跡[31]・朝美澤遺跡[32]などでも報告されており、時期的な併行関係を考えるうえで重要になると思われるが、今後の検討課題としておきたい[33]。

なお土器についてはこの他に**1213**の壺は、底部が薄く下方に張り出していることや、胴部下半が大きく外方に開き、肩が張るという形態や器壁が比較的薄いことなど、縄文時代晩期後葉の浅鉢の特徴を残していると考えられる。また、**1311**の壺は、口唇部にヘラ描き沈線と刻目を施し、口縁内面に刻目突帯をめぐらせており、中国地方西部から北部九州の前期後半の土器との類似点が認められる。

この他に、中期前葉の土壙95の埋土中から「ガラス溶滓」がごく少量出土している。第5表は出土した「ガラス溶滓」の蛍光X線分析結果である[34]。

4．弥生時代中期中葉～後期の遺構・遺物

この時期になると、縄文時代晩期から続いていた低位部のうち、第1低位部は微高地となり、第2

SiO_2	K_2O	MgO	CaO	Al_2O_3	Fe_2O_3	TiO_2
52.91	0.94	15.18	10.48	11.88	2.63	0.58

第5表　南溝手遺跡出土「ガラス溶滓」分析値（単位：%）
(分析装置は波長分散型蛍光X線分析装置で定量した。)

・3・4低位部についてはその大部分は水田として利用されるようになったものと考えられる。

(1)遺構

遺構はすべての微高地上で確認できた。時期はほとんどが中期後葉～後期前葉のもので、他に後期末葉のものがわずかに存在する。

検出できたおもな遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、井戸、土壙、土器棺墓、溝、水田などである。

竪穴住居は５軒で、竪穴住居７・８・９は中期後葉、竪穴住居５・６は後期前葉である。

中期後葉の竪穴住居はすべて第２微高地(東)で検出でき、それぞれの間隔は50ｍ離れており、出土土器からも同時期に存在していた可能性が高いといえる。また、竪穴住居９では周溝が確認できた。他の竪穴住居には認められず、構造上の問題なのか、竪穴住居の性格に関連するものなのかは明らかではないが注目される。

一方後期前葉の竪穴住居５・６は第２微高地(西)の北部のＡＴ区に位置し、この２軒は約６ｍと近接している。またこれらは規模・形態とも類似しており、いずれも床面積は６～７㎡と小規模である。一般の住居以外の機能も考えられるが、詳細は不明である。またこの２軒は、近接していること、および類似点が多いことから同時期に存在していたのではなく、建て替えの可能性の方が高いと考えておきたい。

掘立柱建物は確認できただけでも40棟検出できた。出土遺物から時期の明らかなものは中期後葉のものであるが、後期前葉の竪穴住居や井戸、土壙の存在から、後期前葉のものもあると考えられる。これらは切り合い関係をもつものや、近接するものがあり、同時期に存在していた棟数は少なくなるものの、竪穴住居の数に比べて対照的に多いのは確実であろう。こうしたあり方がこの時期の岡山県南部の平野部での一般的なあり方なのか特殊なのかどうかについては、現段階では明らかにできなかった[33]。

これらの掘立柱建物については、建物の軸線からはある程度の傾向はあるものの、同時併存やグルーピングを行うには不十分であった。また面積でみると、５㎡以下の小規模なものが分離できそうではあるが、他のものについては特に分類できるような傾向は認められなかった。なお桁行×梁間の関係については、１×１間が24棟で最も多く、全体の約76％を占めており、その他は２×１間が４棟、３×１間が２棟、３×２間が２棟、４×２間が１棟である[34](第５表)。

その他に第１微高地で検出された建物29～32については、桁行が２～３間で、規模も13.6～17.1㎡と大きく、他の建物とは区別できる。この周辺には、井戸６や土壙120などの後期前葉の遺構が存在しており、時期的な傾向を示すのかも知れない。

また、建物３・10・40では柱を抜き取った後に、柱痕内に土器が意識的に埋納されている状況が確認できている。

井戸と考えた遺構は、中期後葉３基、後期前葉４基、後期末葉１基が検出できた。このうち後期前葉の井戸６・８には多くの土器が廃棄されていた。また、中期後葉の井戸は第２微高地(東)においてのみ確認できており、竪穴住居や土壙のあり方とあわせて、この地区が中期後葉の集落の一つの中心地であったと考えられる。

土壙は46基を報告しているが、これら以外にも、遺物を伴わなかったり、形状のはっきりしない土壙状の遺構がいくつか存在していた。出土した土器によって時期が判明できたものでは、第２微高地(東)では中期後葉のものがほとんどで、第２微高地(西)では後期前葉のものが多いといえる。なお、

土壙118・122についてはその形状から貯蔵穴とも考えられるが、明確ではない。

土器棺墓は、1基のみではあるが、DE区で検出された。時期は中期後葉である。

水田については、調査後の土壌のプラント・オパール分析の結果などを根拠として、いくつかの土層を水田層として想定しているが、時期や範囲、畦畔などについては不明確な点も多い(第7節)。

溝は、水田に伴う用・排水路と考えられる溝と、水田耕作あるいは水田拡張の際にできたと思われる溝状の遺構を報告している。

河道については、中期後葉には機能しなくなり、その後は徐々に水田として利用されていったものと考えている。

(2)遺物

この時期の遺物としては、土器・土製品、石器・石製品などがある。

土器については、良好な出土状況を示すものは少ないが、井戸6・8、土壙120は高杯の形状その他において共通点をもっており、後期前葉のうちでも新しい段階の当地域の土器様相を考えるうえで貴重な資料になるであろう[37]。その他には中期後葉の脚部に矢羽根すかしを施した高杯1733・1913がある[38]。なお1583の線刻については、意識的なものかどうか明確ではない。

石器については、太型蛤刃石斧の未製品などが注目されるが、第6節でまとめをおこなっている。

4. 古墳時代の遺構・遺物

古墳時代の遺構は、それ以前に比べて少なく、井戸5基、土壙1基、および溝、柵列状遺構、水田が検出できた。

検出できた遺構は大きく2時期あり、前期前葉段階のものとしては、井戸1基と水田、および水田耕作のための用・排水路と考えられる溝である。前期後葉段階のものは、FU区において井戸が4基まとまって検出できたのみである。

このように、いずれの時期においても竪穴住居や掘立柱建物は確認できなかった。後世の削平もあるが、遺構密度が少ないのは事実であり、土地利用が変化したものと考えられる。

柵列状遺構については、本報告書以前においては「柱穴状遺構列」として報告していた遺構である[39]。形態や時期についてはすでに個別に説明を行っている。形態については、後世の削平によって残存状態が悪いものも多く、共通点とともに相違点も認められる。また時期についても、遺物や土層関係から古墳時代後半期と考えられるものもあるが、特定できないものもあり、古代に下る可能性も考えられる。

この遺構の性格についても、「柵列状遺構」という名称にしてはいるが、柵列かあるいは他の遺構であるのかについては現状では判断できていない。岡山県内で類似した遺構が報告されている遺跡としては、雄町遺跡の柵列1・2および条里制遺構[40]、百間川原尾島遺跡三ノ坪調査区の溝および柱穴列[41]、百間川沢田遺跡横田調査区の柵1[3]などがある。形態は全く同一ではないが、類似点が多い。また時期的には、6～7世紀と報告されているものが多い。遺構の性格としては、条里制に関連する遺構あるいは溝、柱穴列、柵列などが想定されている。岡山県以外でも類似した遺構は報告されている。例えば、香川県下川津遺跡で報告されている「ピット列Ⅲ01～05」は形態的には類似しており、時期は6世紀以降とされている[29]。一方、これらの他に近年「道路状遺構」として取り上げられている遺構のなかに、類似するものが認められる[42]。

いずれにせよ現段階では、柵列、溝、道路といった性格が考えられるが、岡山県立大学建設に伴う発掘調査では今後報告予定の調査区においても柵列状遺構が検出されており、それらを含めて更に検

討を加えたい。

５．古代・中世の遺構・遺物

古代・中世と考えられる遺構は、掘立柱建物、土壙、柵列状遺構、溝、素掘溝群、水田などが検出できた。遺物を伴う遺構は少なく、また古代と中世の遺構の埋土・土質が近似しているため、時期比定が困難なものも多いが、古代と考えたのは、掘立柱建物３棟と溝、素掘溝群、水田である。掘立柱建物は、３×１間と２×１間でいずれも大規模なものではない。時期については、建物42の柱を抜き取った穴に10世紀前半頃のほぼ完形の杯が埋納されていたのが参考になる。

古代の溝は、調査区の北端部において現在の地割りに沿うかたちで検出された。時期については、溝63・64からは９世紀前葉～中葉の遺物が出土している。

素掘溝群１・２・３として報告した遺構は、これまで「畝状遺構」[43]や「中世素掘溝」と呼称されている遺構[44]である。今回報告する調査区では３地点において確認でき、幅30～50cm前後の溝が、方向をそろえて、一定の間隔でまとまって検出できた。時期については、出土した少量の土器や土層および切り合い関係から、古代～中世と考えている。この遺構の性格については、永仁６(1298)年作成といわれる「備中国賀夜郡服部郷図」[45]に描かれている地割りの方向に基本的に一致することから、何らかの農地耕作に関連するものと考えられる。具体的には、畑作化に際しての排水のための溝[46]、あるいは耕土の地力回復のための耕起に伴うスキ痕[47]の可能性などが考えられるが、現段階では明確にはし難い[48]。

水田については２か所で確認しているが、ＴＤ１区で検出した水田９の畦畔中から「馬養」と線刻された須恵器壺と牛歯が出土しており、注目される（第８節参照）。

出土した古代の遺物は少量であるが、集落ではあまり出土しない灰釉陶器、緑釉陶器[49]、陶硯、瓦が出土している。発掘調査地は備中国府推定地の東に位置しているが、明確に国府に関連すると考えられる遺構は検出できなかった。

中世と考えられる遺構には、掘立柱建物６棟、土壙、柵列状遺構、溝などがある。掘立柱建物はＡＴ区とＪＯ区で検出できたが、小規模なものが多く、屋敷地などは想定できない。溝は多数検出できたが、幹線水路と考えられる溝113・114・119は北西―南東方向に流走しており、古代の溝とは方向を異にしている。

ところで、古代・中世の遺構について問題となるのは、先にふれた「備中国賀夜郡服部郷図」に描かれている条里の地割りとの関連である。平安時代と考えられる溝63～71や水田９の畦畔、および平安時代から鎌倉時代と考えられる素掘溝群の方位は一致するが、鎌倉時代に埋没したと考えた溝113・114・119などは一致していない。とくに溝64～71は条里境とほぼ一致しているが、それから約100ｍ南に位置する調査区には地割りに沿った古代・中世の溝は検出できなかった。また掘立柱建物については、すべてが地割りが意識されているとは言いがたい。

「備中国賀夜郡服部郷図」との関連については、第２分冊以降で報告する予定の古代・中世の遺構・遺物とあわせて、なお検討が必要であろ。　（平井）

註

(1)　「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』18　岡山県教育委員会　1988年

(2)　「津島岡大遺跡４」『岡山大学埋蔵文化財発掘調査報告』第７冊　岡山大学埋蔵文化財発掘調査センター　1994年

(3)　「百間川沢田遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84　岡山県教育委員会　1933年

(4)　この点については、すでに松崎寿和氏、間壁忠彦氏の指摘がある。

松崎寿和、間壁忠彦「縄文後期文化　西日本」『新版考古学講座3先史文化―無土器から縄文』雄山閣　1969年

(5) 具体的には、奈良国立文化財研究所で整理された福田貝塚出土資料のうちの第Ⅶ群23類を考えている。
「福田貝塚資料　山内清男考古資料2」『奈良国立文化財研究所資料』第32冊　奈良国立文化財研究所　1989年

(6) 『広江・浜遺跡』　倉敷市教育委員会　1979年

(7) 「舟津原遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』71　岡山県教育委員会　1988年

(8) 「阿津走出遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』71　岡山県教育委員会　1988年

(9) 馬取遺跡出土土器5類土器の特徴は、口縁端部内面に沈線や刻目を施したものが多く、これらは「馬取B式土器」として「福田KⅢ式」とは区別されている。
「松永市馬取遺跡調査報告」『広島県文化財調査報告』第4集　広島県教育委員会　1963年

(10) 例えば、西日本の縄文時代後期後葉の「凹線文土器」について、泉　拓良氏は「凹線文内を磨き、まだ刻目が残り、かつ巻貝を回転せずに押圧する第一期、凹線内を磨き、巻貝の扇状圧痕文が栄える第二期、凹線文内を磨かなくなる第三期」に区分できるとされている。
泉　拓良「西日本の縄文土器」『世界陶磁全集1　日本原始』　小学館　1979年

(11) 残存状態が悪く、人の歯であること以外には詳細は明らかにならなかった。鑑定については、小田嶋梧朗岡山大学歯学部名誉教授に依頼した。

(12) 竪穴住居3からは紡錘車および紡錘車の未製品が18点出土している。紡錘車については、玉作りにおいて穴をあけるための錐のはずみ車としての機能も考えられるため、竪穴住居2と同じく玉作りが行われていた可能性もあろう。

(13) 中間研志「松菊里型住居―我国稲作農耕受容期における竪穴住居の研究―」『東アジアの考古と歴史』中岡崎敬先生退官記念事業会　1987年

(14) 岡山県内における前期の掘立柱建物は、津島遺跡において3×2間、1×1間などの建物が報告されている。
『昭和44年岡山県津島遺跡調査概要』　昭和44年津島遺跡調査団　1969年

(15) 『田村遺跡群』　高知県教育委員会　1986年

(16) 新宅信久「渡来系稲作集落「江辻遺跡」で発見された大型建物について」『考古学ジャーナル』379号ニューサイエンス社　1994年

(17) ただし、弥生時代前期の土壙墓が報告されている百間川沢田遺跡では、土器が副葬されていたり、木棺痕跡が認められるものが多い。
「百間川沢田遺跡2、長谷遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59　岡山県教育委員会　1985年
「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84　岡山県教育委員会　1993年
『百間川沢田（市道）遺跡発掘調査報告』　岡山県教育委員会　1992年

(18) 弥生時代前期の類似した土壙としては、百間川沢田遺跡の土壙7がある。(註3の文献)

(19) 高橋　護「弥生土器―山陽1」『考古学ジャーナル』173号　ニューサイエンス社　1980年

(20) 藤田憲司「中部瀬戸内の前期弥生土器の様相」『倉敷考古館研究集報』第17号　倉敷考古館　1982年

(21) 平井　勝「弥生時代への移行」『吉備の考古学的研究』上　山陽新聞社 1992 年

(22) 秋山浩三「弥生前期土器」(前掲註21)

(23) 高畑知功「備中地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』　木耳社　1992年

(24) 正岡睦夫「備前地域」(前掲註22)

(25) 表でもわかるように、弥生時代前期土器については、4期に区分する意見が多いのが現状である。本報告書では、前・中・後の三区分で説明を加えているが、その妥当性については、今後報告予定の土器も含めて検討する必要があろう。

(26) 鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成本編1』　東京堂　1964年

(27) 『百間川沢田（市道）遺跡発掘調査報告』　岡山市教育委員会　1992年

(28) こうした甕をもつ遺跡が縄文的な要素を残した集落で、少ない集落はいち早く弥生化した集落といったとらえ方もできるかも知れないが、現状では判断し得なかった。

(29) 「下川津遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅶ　香川県教育委員会　1990年

(30) 「大浦浜遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅴ　香川県教育委員会　1988年

(31) 「中寺州尾遺跡」『一般国道196号今治道路埋蔵文化財調査報告書』　(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター　1989年

(32) 「朝美澤遺跡」『松山市文化財調査報告書』第29集　(財)松山市生涯学習振興財団、埋蔵文化財センター　1992年

(33) 北部九州においては、古くから「下城式」や「亀の甲式」が知られているが、今回の資料についてはそれとは別系統のものと考えている。

(34)　「ガラス溶滓」の蛍光Ｘ線分析については、岡山理科大学蒜山研究所の白石純氏に依頼した。

(35)　竪穴住居に比べて掘立柱建物が多い例としては、百間川原尾島遺跡の弥生時代後期の集落で指摘されている。
「百間川原尾島遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88　岡山県教育委員会　1994年

(36)　建物の規模や形態から機能を考えるのは難しいが、今回検出した建物のうち、１×１間の建物３・８～13・18・19・21・22・39・41のように柱穴の掘り方の大きいものはおそらく高床倉庫と考えられよう。それに対して、梁間が２間の建物20・34・35については、平地式あるいは高床式の住居の可能性が高いのではなかろうか。

(37)　高橋氏が百間川遺跡群出土土器を分析された編年では「上東式の古３期」に相当する資料と考えられ、備前と備中の違いを考えるうえで参考になるなるであろう。
高橋　護「上東式土器の細分編年基準」『研究報告』７　岡山県立博物館　1986年

(38)　矢羽すかしをもつ土器については、岡山県内では「川入遺跡」、「奥坂遺跡」、「百間川原尾島遺跡」で高杯と器台が出土している。

(39)　「県立大学建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』22　岡山県教育委員会　1992年
「岡山県立大学建設に伴う窪木遺跡・南溝手遺跡の発掘調査終了」『所報吉備』14号　岡山県古代吉備文化財センター　1993年

(40)　「雄町遺跡」『埋蔵文化財発掘調査報告』　岡山県教育委員会　1972年

(41)　「百間川原尾島遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56　岡山県教育委員会　1984年

(42)　近江俊秀「道路状遺構の構造に関する検討」『鴨神遺跡―第２次～第４次調査』　奈良県立橿原考古学研究所　1993年
渡部徹也「古道について―主に官道以外の事例から―」『古文化談叢』第33集　九州古文化研究所　1994年

(43)　百間川兼基遺跡では畑作に伴う「畝状遺構」として報告されている。
「百間川兼基遺跡１、今谷遺跡１」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』51　岡山県教育委員会　1982年

(44)　こうした遺構については、八尾博之氏の考察がある。
八尾博之「中近世素掘り小溝について」『矢部遺跡』　奈良県教育委員会　1986年

(45)　高重　進「中世村落の復元―服部郷図による農業経営の分析―」『史学研究』第73号　史学研究会　1959年

(46)　八尾氏は「用水不足と都市の存在に由来する夏季の畑作にともなう遺構」と考えられている。(前掲註43文献)

(47)　堅田　直「弥生水田の老朽化」『古代の水田を考える』　帝塚山考古学研究所　1994年

(48)　「備中国賀夜郡服部郷図」においては、素掘溝群の検出された調査区の周辺において「田」の他に「畠」表記がなされている。

(49)　2020の緑釉陶器については、胎土が灰白色で、釉は淡青緑色である。周防産の可能性があるが、断定はできない。

試料番号	出土地区	出土遺構	時　代	種　類
1	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	トチノキ（果実）
2	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	オニグルミ（核）
3	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	トチノキ（果実）
4	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	トチノキ（種子）
5	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	エゴノキ（核）
6	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	オニグルミ（核）
7	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	アカガシ亜属（果実）
8	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	アカガシ亜属（果実）
9	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	トチノキ（果実）
10	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	コナラ亜属（核斗）
11	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	トチノキ（種子）
12	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	オニグルミ（核）
13	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	コナラ属（果皮）
14	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	トチノキ（種子）
15	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	オニグルミ（核）
16	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	イヌガヤ（種子）
17	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	トチノキ（種子）
18	ＪＯ	河道２	縄文時代晩期中葉	オニグルミ（核）
19	ＴＤ１・２	河道１	弥生時代前期以前	トチノキ（果実）
20	ＴＤ１・２	河道１	弥生時代前期以前	クリ（果実）
21	Ｈ７	井戸４	弥生時代中期後葉	ヒョウタン類（種子）
22	ＫＹ２	井戸７	弥生時代中期後葉	モモ（核）
23	ＴＯ	井戸８	弥生時代後期前葉	ヒョウタン類（種子）
24	ＪＹ	井戸９	古墳時代前期前葉	モモ（核）

表６表　出土種子一覧表

- **イヌガヤ**　Cephalotaxus harringtonia (Knighit) K.Koch　イヌガヤ科
種子が検出された。黒褐色で側面観長卵形、上観面は凸レンズ型。大きさは縦1.7cm、幅１cm程度。種皮は堅く、表面に顆粒状の隆起がある。
- **オニグルミ**　Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana (Maxim) kitamura　クルミ科
核が検出された。褐灰色。大きさは2.5cm程度。側面の両側に縫合線が発達する。広卵形で、基部は丸くなっているが先端部は尖る。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走る。
- **コナラ属コナラ亜属**　Quercus subgen. Lepidobalanus sp.　ブナ科
核斗が検出された。大きさは径２cm程度で半球状。核斗の鱗片は瓦状に並び互いに強く合着する。
- **コナラ属アカガシ亜属**　(Quercus subgen.Cyclobalanopsis)　ブナ科
果実が検出された。大きさは２cm程度。無毛で側面観は楕円形、上面観は円形。先端部は突出し不明瞭な輪状紋がある。基部には穀斗がついていた円形の跡がある。果皮は薄くて堅く、縦方向に多くの筋が走る。
- **モモ**　Prunus parsica Batsch　バラ科
核（内果皮）が検出された。褐色。大きさは2.5cm程度。核の形は楕円形でやや扁平である。下端には丸く大きな臍点がある。一方の側面にのみ縫合線が顕著に見られ、表面は不規則な線状のくぼみがあり全体としてあらいしわ状に見える。
- **トチノキ**　Aesulus turbinata Blume.　トチノキ科
種子および果実が検出された。種子は黒褐色で、大きさは3.5cm程度。種皮は薄く堅い。果実は、褐色で大きさは３cm程度。種皮は厚くて柔らかく、弾力がある。
- **エゴノキ**　Styrax japonica Sieb.et Zicc　エゴノキ科
核が検出された。灰黒色。側面観は楕円形、上面観は円形。長さ１cm程度。下端に大きな「へそ」があり、表面に３本の浅い溝がある。核は厚く硬い。
- **ヒョウタン類**　Lagenaria siseraria Standlay　ウリ科
種子が検出された。種子は淡褐色。長さ1.5cm程度。長楕円形をしており、縦軸方向に深いしわが数本存在する。

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

第2節 縄文時代後期の稲作について

—籾痕土器とプラント・オパール分析結果から—

今回報告する南溝手遺跡の発掘成果の一つとして、縄文時代後期の稲作に関する資料が得られたことがあげられる。一つは籾痕土器であり(第28図39)、もう一つは土器の胎土分析によってイネのプラント・オパールが検出されたことである。以下この点について若干のまとめを行いたい。

(1)籾痕土器について

出土地点

籾痕土器が出土したのは、H15調査区である。土器はH15調査区の南半部において弥生時代前期の溝5を調査後、その下層を掘り下げ途中に出土した。現地表から約1.9mの深さである。土器は同一個体の破片が約100×60cmの範囲内の9か所から出土し、出土レベルには最大で約20cmの高低差があった。これらの土器は周辺を精査したものの遺構に伴っていたとは考えられず、西壁の断面観察からは、南に向かって傾斜する土層の肩部に堆積していたものと考えられた。

土器の特徴と時期

土器は約40片の破片として出土し、その一片に籾痕が確認できた。土器は最大径約40cmのやや肩の張った胴部として復元でき、籾痕はほぼ胴部最大径を測る部分の内面に位置する。復元できた大きさは約30×20cmである。(図版37)。

土器の外面下半部は一部表面が剝落しており、煤らしい付着物も認められた。外面の調整は、下半部約1/4には縦方向のケズリののち一部に細い線条痕（巻貝条痕かどうかはっきりしない）が認められた。それ以外は横および斜め方向のケズリののち一部に斜めの線条痕を施し、最終的には横方向のミガキで仕上げている。内面の調整は磨滅や剝落のため明らかではない。接合痕は一部で確認でき、内傾接合である。胎土はおもに1～2mmの長石、石英を多く含んでいる。

この土器の器種については壺ではないかと考えられるが、全体像が判明せず、また県内で類例を見出せなかったため明らかではない。

この土器の時期については、出土層位が今回A地点およびC地点出土の縄文時代後期土器として報告した土器が含まれる土層と同一の可能性が高いこと、および外面の最終調整が第30図40の土器と同じようにミガキ調整であることから、縄文時代後期後葉ではないかと考えた。しかしながら、土器そのものは他に類例を見なかったため調査担当者には判断できなかった。そのため当地方の縄文土器に詳しい(故)鎌木義昌氏、高橋護氏に実見していただき、縄文時代後期後葉、瀬戸内編年の福田KⅢ式に相当する土器であろうとのご教示をいただいた。また、この土器が他地域からの搬入品の可能性はないのかという点については、胎土に含まれる砂礫から現段階で地元産と考えている。

籾痕について

籾痕は当初9×8cmの土器片の内面に確認できたが、その後の他の土器片との接合・復元の結果、ほぼ胴部最大径を測る部分の内面に位置することが判明した。籾痕が何故残っていたかについては、その位置から考えて、成形後に外から押しつけられたものとは考えにくい。おそらく、土器の製作の最初の素地土を練る段階において何らかの理由で混入した籾が内面の器表面近くに位置したまま焼成されたものと考えられる。また、圧痕は鮮明に残存していることから、土器の使用中には現在確認できたような状況ではなく、発掘調査後に器表面が剝落したために観察できるようになったのであろう。

籾痕は穎(いわゆる籾殻)の表面が圧痕として黒く残存していた（巻頭図版２)。籾そのものはほとんど残存しておらず、かすかに灰化した穎の珪酸質が付着しているのが観察されている(高橋護氏の観察による)。また、籾痕は斜めに残っており、籾本来の大きさについてははっきりしなかった。ところで、この圧痕が籾痕であるのかどうかについては、調査担当者の判断では不十分であることから、渡部忠世氏(放送大学教授・京都大学名誉教授)に鑑定をお願いし、この圧痕は栽培イネの穎の圧痕であるとの鑑定結果をいただいた(詳細については付載１参照)。

(2)縄文時代後期土器のプラント・オパール分析結果について

(1)で述べたように南溝手遺跡から縄文時代後期後葉の土器に籾痕が確認できたことから、岡山県古代吉備文化財センターは、同じ遺跡内で出土している縄文時代後期の土器胎土についてのプラント・オパール分析を藤原宏志氏(宮崎大学教授)に依頼した[1]。

今回報告する調査区から依頼した資料は第28図**39**の籾痕の確認された土器片、およびその特徴から時期が特定できる資料である第27図**36**と第30図**40**の土器片の３点である。時期はいずれも縄文時代後期後葉、瀬戸内編年の福田ＫⅢ式に相当する。分析結果については付載２として掲載しているが、**39**からはイネ、ススキ、**40**からはイネ、タケ、ヨシ、ジュズダマ、モロコシ、キビ族、**36**からはヨシのプラント・オパールが検出されている。

(3)縄文時代後期の稲作について

日本列島においてイネがいつ頃から栽培され始めたかについては、現在では板付遺跡や菜畑遺跡で検出された水田跡によって、これまで縄文時代晩期後半とされていた時期には始まっていたことが明らかとなっている。それ以前については、水田跡などの耕作地については発見されていないが、籾痕土器や炭化米の出土、あるいはプラント・オパール分析などによってイネの栽培を実証しようとする試みが続けられている。

籾痕土器については、現在までのところ今回報告する土器が最古の資料であるが[2]、ほぼ同時期の籾痕土器が岡山県福田貝塚から出土している[3]。この土器は福田ＫⅢ式の底部で土器胎土中に含まれていた籾痕が器面がはじけたことによって露呈したと考えられている。

土器の胎土中から検出されたイネのプラント・オパールについては、今回報告する縄文時代後期後葉より古い資料が現在までのところ３例報告されている。最も古いのは岡山県姫笹原遺跡出土の土器で、時期は縄文時代中期中葉である[4]。他の２例は縄文時代後期中葉の土器で、岡山県津島岡大遺跡[5]と岡山県南溝手遺跡[1]において発掘調査によって出土している。

稲籾そのもののについては、後世の混入の可能性の問題があって時期の特定が困難な場合が多いが、青森県風張遺跡の縄文時代後期後葉の竪穴住居内から出土した炭化米については、放射性炭素年代測定が実施されている[6]。

さて、今回報告する南溝手遺跡では、籾痕土器の出土だけでは他地域から籾だけが搬入された可能性も考えられるが、イネのプラント・オパールは葉に形成されたもので、刈り取ったイネが他地域から持ち込まれた可能性は少ないと考えられる。したがって、南溝手遺跡内あるいはこの周辺でイネが栽培されており、その栽培地あるいは栽培地周辺の粘土を使って土器を作ったことによって、土器胎土中からイネのプラント・オパールが検出されたものと考えられる。

このように南溝手遺跡あるいはこの周辺において縄文時代後期にイネが栽培されていたのとの想定を行ったが、現段階では南溝手遺跡において縄文時代後期のイネの耕作地は明らかでない。したがっ

て、当時のイネが水田栽培であったのか、陸田栽培であったのかについては耕作地が検出されていない現状では不明とせざるを得ない。これまで縄文時代晩期前半の籾痕土器やイネのプラント・オパールが検出されている九州地方においては、それらの遺跡の立地などから焼畑による陸稲を想定する意見があるが、立地からいえば南溝手遺跡では水稲耕作は十分に可能である。南溝手遺跡におけるイネの栽培形態について高橋護氏は山麓扇状地の縁辺に形成された湿地帯を利用したものと考えられている。縄文時代後期の稲作についてはより原始的だと考えられている焼畑栽培のみを想定する必要はなく、むしろ小規模であれば栽培のし易い自然の湿地や天水によって容易に水が確保できるような土地を利用したと考えておきたい。[7]

なお、イネの栽培に関すると考えられる農耕具については、今回報告する調査区からは出土していない。

ところで、南溝手遺跡の所在する岡山県南部では、すでに指摘されていることではあるが縄文時代後期には沖積地に遺跡が形成されるようになる。これまで晩期の遺物が出土する遺跡は数多く知られていたが、近年の大規模な発掘調査によって後期には沖積地に人々が居住し始めたことが明らかになりつつある。例えばそうした遺跡として、百間川沢田遺跡や津島岡大遺跡があげられる。

百間川沢田遺跡では、後期中葉の多くの土器と石器とともに土壙や炉が検出されている。調査地は小面積であり遺跡の全体像は把握し難いが、出土した石器のなかに「石包丁状削器」や「石鎌状削器」があり、漁労、狩猟、植物質食物の採集以外の新たな食料獲得活動の可能性が指摘されている。[8]

津島岡大遺跡の第5次調査では、後期中葉の貯蔵穴群とともに多量の土器・石器が出土している。この遺跡からは、すでに述べたように、後期中葉の土器胎土中からイネ、モロコシ、ヒエのプラント・オパールが検出されている。また貯蔵穴の中の土中から抽出された種子の中にはホタルイなどの水田雑草が確認されており、イネや雑穀類の栽培起源が、中部瀬戸内においては少なくとも後期中葉まで遡ることが指摘されている。その他に出土した石器のなかには打製石鍬や「石包丁状のスクレイパー」なども含まれている。[5]

これまで述べてきたように、岡山県南部における縄文時代後期においては、南溝手遺跡と福田貝塚出土の籾痕土器、南溝手遺跡と津島岡大遺跡でのイネのプラント・オパールの検出、津島岡大遺跡で確認された水田雑草の種子、さらには南溝手遺跡や百間川沢田遺跡、津島岡大遺跡出土の石包丁あるいは石鎌状の石器や打製石鍬などを根拠としてイネの栽培が行われていたものと考えたい。しかしながら、津島岡大遺跡や百間川沢田遺跡ではドングリなどの貯蔵穴も検出さていることから、それまでの生業形態に新たに稲作が加わっているものの、のちの弥生時代以降にみられるような稲作が主要な役割を果たしているような段階ではないと考えるべきであろう。現段階では縄文時代後期において稲作の占める比重について具体的に考察できる資料はほとんど無く、また縄文時代晩期の稲作との関係についても今後の課題とせざるを得ない。

縄文時代におけるイネの栽培起源については今後の調査によってさらに遡っていくことは十分に考えられる。一方、イネ以外のオオムギ、アワ、ソバ、シソ、エゴマ、リョクトウ、アズキ、ヒョウタンなどの栽培植物についても縄文時代にすでに存在していたことが明らかとなっている。[9] これまでに考古学の側からは藤森栄一氏による縄文時代中期農耕論や賀川光夫氏による縄文時代後期農耕論が展開されていることは周知のとおりである。縄文時代の稲作を含む農耕については、今後の目的意識的な調査によって、栽培形態や規模、縄文社会の生業全体の中にしめる位置などについての、地域的・

時期的な解明が必要であろう。(10)(11)　（平井）

註

(1) この時点で依頼した資料は縄文時代後期中葉と後葉の６点の土器片で、このうちの後期中葉の土器片からもイネのプラント・オパールが検出されたため、1993年３月に報道機関に発表を行った。しかしながら、この後期中葉の土器については第２分冊において報告する予定になっており、今回は分析結果のみ付載２の一覧表に掲載している。

(2) 長崎県筏遺跡からは縄文時代後期後半から晩期初頭の籾痕土器が出土したとされているが、詳細は明らかでない。

(3) 高橋　護「縄文時代の籾痕土器」『考古学ジャーナル』335号　ニューサイエンス社　1992年

(4) 高橋　護「縄文稲作を考える」『古代の水田を考える』　帝塚山考古学研究所　1994年
高橋　護「縄文農耕と稲作」『東アジアの古代文化』81号　大和書房　1994年

(5) 「津島岡大遺跡４」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第７冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1994年

(6) Takehisa Kudou and A. C. D'Andrea「An Accelerator Radiocarbon Date on Rice from the Kazahari Site」『Project Seeds News No. 3』　プロジェクトシーズ　1991年。その他に縄文時代後期と考えられる稲籾は京都府桑飼下遺跡でも出土しているが時期は断定されていない。(『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館　1975年)

(7) なお、付載２において宮崎氏が指摘されているように、ジュズダマ・キビ族・モロコシのプラント・オパールが検出されていることから、何らかの畑作が行われていた可能性は考えられる。この点については、モロコシというより乾燥した気候に強い農作物を、水稲と組み合わせて栽培することによって、収穫の総量を保証したのではないかという高橋氏の指摘がある。(高橋護「縄文農耕と稲作」前掲註４)

(8) 「百間川沢田遺跡３」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84　岡山県教育委員会　1993年
また縄文時代後期の石包丁状の石器は香川県永井遺跡や高知県松ノ木遺跡で出土しており、九州地方についてはすでに高木正文氏の論考がある。
「永井遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第九冊　香川県教育委員会　1990年
「松ノ木遺跡Ⅰ」『本山町埋蔵文化財調査報告』第３集　本山町教育委員会　1992年
高木正文「九州縄文時代の収穫用石器―打製石包丁と打製石鎌について―」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』　鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会　1980年

(9) 佐々木高明・松山利夫編『畑作文化の誕生―縄文農耕論へのアプローチ』　日本放送出版協会　1988年

(10) いわゆる「縄文農耕論」については日本の考古学においては長い研究史をもっており、また論点も多岐にわたっている。近年ではフローティング法による植物遺体の検出や花粉分析、プラント・オパール分析、灰像分析など自然科学的方法による栽培植物の発見や考古学の側からは遺跡の立地、石器・土器組成の問題など様々な観点からの追求が行われている。今回縄文時代後期にイネが栽培されていたと考えたが、未だ解明すべき課題は多いと言える。
戸沢充則「縄文農耕」『縄文文化の研究２生業』　雄山閣　1983年
山崎純男「西日本後・晩期の農耕」『縄文文化の研究２生業』　雄山閣　1983年
能登　健「縄文農耕論」『論争・学説考古学３　縄文時代Ⅱ』　雄山閣　1987年
藤尾慎一郎「生業からみた縄文から弥生」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集　国立歴史民俗博物館　1993年

(11) 縄文時代の稲作については高橋護氏（ノートルダム清心女子大学教授）から様々なご教示を頂いた。深く感謝いたします。

第3節　縄文時代晩期中葉の土器について

晩期中葉の土器は、コンテナに20～30箱出土している。出土状況は、河道2からの出土が最も多く、その他は土器溜りや土壙、柱穴などの遺構や、基盤層中などから少量出土している。

以下、晩期中葉の土器について若干のまとめを行い、編年的な位置を考えてみたい。

まずおもな対象とした土器は、河道2および土器溜まり1出土の土器のうち実測図として掲載した土器である。なお、河道2出土土器については、第3章第2節で述べたような出土状況から、**339～365**を上層、**366～374**を中層、**375～481**を下層として、また**482～499**を土器溜りとして区別して分析を加えることとした。分析の方法は、深鉢について以下に述べるようなおもに4つの視点から比率を算出した。ただし、調整および器形の明らかでないものについては除外した。

(1)口唇部の刻目の有無について

河道2出土土器のうち、口唇部に刻目をもつものは土器溜りが5/6で83％、下層が35/41で85％、中層が3/5で60％、上層が8/10で80％で、河道2全体では51/62で82％である。一方土器溜り1では0％ですべて刻目を施していない。

口唇部刻目の有無については、器形との関連もあるようで、土器溜り1出土の**93・94**や河道2出土の**482**のような口縁部が「く」の字に外反し、胴部が丸く張ったもの(以下深鉢A類とする)には刻目はほとんど施されていないようである。ここでは、土器溜り1には口唇部に刻目をもつものがないのに対して、河道2には約8割存在していることに注目しておきたい。

(2)口頸部外面の調整について(以下調整については最終調整を分析基準にしている)

アルカ属貝条痕のものが、河道2では上層が4/10で40％、中層が4/7で57％、下層が28/47で60％、土器溜りが6/6で100％、全体では42/70で60％である。つぎにナデのものは、河道2の上層が6/10で60％、中層が2/7で29％、下層が14/47で30％、全体では22/70で31％である。その他にはケズリのものが、河道2全体で6/70の9％認められる。一方、土器溜り1ではアルカ属貝条痕とナデのものがあり、前者の割合が高い。

このように河道2では全体の約7割がアルカ属貝条痕であるが、ナデのものも約3割は存在しており、その中でも上層での比率が最も高いと言える。

(3)胴部外面の調整について

胴部の調整については、実測していない個体が数多くあるが、土器溜り1では、アルカ属貝条痕とケズリのものが各1点である。また、河道2では全体で、アルカ属貝条痕のものが10/37で27％、ケズリのものが25/37で68％、ナデのものが2/37で5％である。

ここでは、河道2においてケズリのものが6～7割存在していること、上層においてアルカ属貝条痕のものが存在しないこと、およびナデのものは全体で2点であるが、これらは上層および中層から出土していることに留意しておきたい。

(4)口頸部と胴部の外面調整の組み合わせについて

この点についても実測点数が少ないが、土器溜り1ではアルカ属貝条痕とケズリが1点、ナデとアルカ属貝条痕が1点である。一方、河道2では全体で、アルカ属貝条痕とアルカ属貝条痕が3/21で14％あるが、これらは深鉢A類やのちに述べる深鉢C類に限られている。アルカ属貝条痕とケズリの

ものは12/21で57％、ナデとケズリが4/21で19％である。

このように河道２において全体としてアルカ属貝条痕とケズリのものが６割近く認められる。河道２のなかの土器溜りでは、深鉢Ａ類はアルカ属貝条痕とアルカ属貝条痕であるが、**488**～**490**のような口頸部がＡ類よりも長くゆるやかに外方にのび、胴部が張らずに屈曲する器形(深鉢Ｂ類)ではアルカ属貝条痕とケズリであること、および下層・中層・上層では少量であるが**367**のようなナデとケズリで調整されたものも存在していることに注目しておきたい。

以上の４点以外には、深鉢の底部をみると、河道２ではいわゆるくぼみ底が６点で、平底が１点である。底部外面の調整はケズリ、ケズリのちナデ、ナデのものがあり、側面に指オサエやナデを施したものもある。また、**366**・**373**は底部外面中央部が使用によって磨滅している。

口頸部に文様を施したものは、河道２の下層と土器溜りに５点あり、**428**・**429**・**483**・**489**は縦位の刺突文、**430**は横位のＣ字刺突文である。

全体の器形のわかるものは少ないが、先に述べたＡ類とＢ類のほかに**370**のような砲弾形のＣ類がある。これらの割合については、土器溜り１ではＣ類が１点あるものの、ほかの多くはＡ類である。一方、河道２では、Ａ・Ｃ類が少なくＢ類が約８割を占めている。

浅鉢の器形については、おもには**108**・**449**・**456**のように胴部から口頸部がやるやかに外反しながらのびるもの(浅鉢Ａ類)、**451**～**454**のようにＡ類と同じく口頸部がゆるやかに外反するが、２㎝前後と短いもの(浅鉢Ｂ類)、**444**・**445**のように外反する短い口頸部と肩部が強く張り出した胴部をもつもの(浅鉢Ｃ類)、**357**のような皿形のもの(浅鉢Ｄ類) などがある。土器溜り１では、小片のものが多いが、Ａ類がほとんどである。河道２ではＡ～Ｄ類のすべてを含んでいる。

次に浅鉢Ａ～Ｃ類の口縁端部の形状に注目すると、大きくは**111**・**449**のように上方に短く強く屈曲して立ち上がるもの(ａ類)と、**110**・**112**のようにわずかに上方あるいは斜め上方に拡張しているもの(ｂ類)、**108**・**109**・**355**・**356**・**447**・**448**のように内面に抉りや沈線を施したもの(ｃ類)、**353**・**442**のように口唇部がわずかではあるがカマボコ状に肥厚しているもの(ｄ類) などがある。そして、土器溜り１では、ａ・ｂ・ｃ類が確認できるが、ａ・ｂ類の存在およびｄ類がないことが特徴的である。一方、河道２では、ａ・ｂ・ｃ・ｄ類がすべて確認できるが、多くはｃ類である。

これまでのべてきたことから考えられることを以下にまとめてみたい。

まず河道２出土土器の特徴は、深鉢においては、(1)器形としては「く」の字形のＡ類や砲弾形のＣ類が少なく、約８割をＢ類が占めていること、(2)口唇部に刻目を施すものが約８割を占めていること、(3)口頸部の調整では、Ａ・Ｂ類においては、アルカ属貝条痕のものが約６割で、ナデのものが約３割であること、(4)胴部調整では、アルカ属貝条痕のものが約３割でケズリのものが約７割であること、(5)口頸部と胴部の調整の組み合わせについては、アルカ属貝条痕とケズリのものが最も多く、全体の約６割を占めていること、(6)底部はほとんどがくぼみ底であること、(7)文様については、口頸部に縦および横の刺突文がわずかであるが出現していること指摘できる。また浅鉢については、(1)器形としてはＡ～Ｄ類がすべて存在しているが、比率については資料数が少なく明らかではない。(2)Ａ～Ｃ類の口縁端部の形状については、ｃ類が最も多い。

ところで、河道２における出土地点別の特徴については、資料点数による制約が大きいが、口頸部の調整においてのみ相違を認めることができた。すなわち、全体としては６割がアルカ属貝条痕、３割がナデであるが、土器溜りにおいてはすべてがアルカ属貝条痕であるのに対して、中・下層では約

6割がアルカ属貝条痕であるが、ナデのものが約3割出現している。それが上層においては比率が逆転し、アルカ属貝条痕よりもナデの方が多くなっている。しかしながら、他の要素においては明確な相違が認められないため、今回の報告では、河道2出土土器全体を一つの段階としてとらえ、その中では土器溜りがやや古く、次に中・下層が、そして上層に新しい傾向が認められると理解しておきたい。

河道2出土土器に対して土器溜り1出土土器の特徴としては、深鉢では、(1)A類が一定の割合を占めていること、(2)口唇部に刻目を施すものが認められないこと、(3)口頸部の調整はアルカ属貝条痕のものが多いこと、また浅鉢ではA類がほとんどであり、口唇部の形状については、a・b類が一定の割合存在していることなどが指摘できる。このことから、土器溜り1出土土器は河道2出土土器より古い段階のものとして考えたい。

土器溜り1出土土器については、資料数が少ないため、一つの段階として設定するにはなお不十分な点が多いことは明らかであるが、河道2とは出土地点が約200m離れていること、および**668・671～673**のような「く」の字形の器形や口唇部に刻目を施さない深鉢、および**691・698**のような口唇部形状がb類の浅鉢が、この土器溜り1の周辺であるAT・DE・K8・H4区で多く出土していることを考慮に入れて、河道2出土土器とは区別して考えておきたい。

これまでみてきた土器溜り1と河道2出土土器の編年的位置については、従来の瀬戸内編年では、「黒土B1式」[1]から「舟津原式」[2]に相当しそうであるが、「黒土B1式」では浅鉢の口唇部の形状が、ここで分類したa類やa類よりもさらに長く立ち上がるものが多い点から、南溝手遺跡の資料は、「黒土B1式」より新しく「舟津原式」に併行すると考えられる。そこでこれまでに紹介されている「舟津原式」の資料をここで分析したような視点からみると、土器溜り1と河道2で区分した基準で、少なくとも2段階には区分できると考えられる。そこで今回の報告では、土器溜り1出土土器を「舟津原式」の古段階、河道2出土土器を「舟津原式」の新段階としておきたい[3]。

近畿地方との関係では、家根氏の設定された「篠原式」[4]との関係についてみると、深鉢の器形や調整の変化においては瀬戸内地方との相違が認められるが[5]、浅鉢の特徴などから、河道2出土土器は「篠原式」の中段階に、土器溜り1については明確ではないが、深鉢口唇部に刻目を施さない点や浅鉢口唇部形状においてa・b類が主体である点などから、「篠原式」の古段階に対応するものと捉えておきたい。また恩智遺跡の土器集積1出土土器については、河道2出土土器に近いと考えている[6]。

ところで、岡山県内では、これまで述べた「舟津原式」の次の段階に谷尻遺跡[7]や宮の前遺跡[8]などの資料が設定されているが、今回の調査区では土壙3出土土器などが少量出土しているにすぎない。

最後に、河道2の下層から出土した炭化種子による放射性炭素年代測定を、社団法人日本アイソトープ協会に依頼したところ、B.P.2610±90年(B.P.2540±85年)という測定結果報告を受けている[9]。

(平井)

註

(1) 下記の文献に示されている「黒土BⅠ式」を指す。

鎌木義昌、江坂 進「岡山県御津町原遺跡」『瀬戸内考古学』第2号 瀬戸内考古学研究所 1958年

(2) 「舟津原式」という名称は、これまで鎌木氏などが公表された編年表には示されていない。ここでは、下記の文献に紹介されている資料を「舟津原式」として考えている。

(a)鎌木義昌、江坂 進「岡山県御津町原遺跡」(前掲註1)

(b)藤田憲司「倉敷市舟津原貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』第16号 1981年

(c)下記文献の「舟津原遺跡晩期Ⅱ類」・「阿津走出遺跡晩期Ⅱ類」

「舟津原遺跡の調査、阿津走遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』71　岡山県教育委員会　1988年

(3)　香川県永井遺跡で設定されている「永井X式」と「永井XI式」との関係では、河道2出土土器は「永井X式」に、土器溜り1出土土器は、浅鉢の口唇部の形態から「永井XI式」の一部をも含んでいると考えられる。

「永井遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第九冊　香川県教育委員会　1990年

(4)　家根祥多「篠原式の提唱―神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討―」『縄文晩期前葉―中葉の広域編年』北海道大学文学部　1994年

(5)　篠原式については、(a)深鉢の器形において、ここでA類としたもの、あるいはそれに近いものが古・中段階とも多いこと、(b)口頸部の調整において、古・中段階ともケズリとアルカ属貝条痕のものが主体を占めること、および(c)胴部調整において古・中段階ともケズリが多いことなどが、南溝手遺跡1出土土器とは異なっており、地域的な特色とも考えられる。

(6)　恩智遺跡土器集積1出土土器の特徴は、報告書からは、深鉢では口唇部に刻目を施すものと施さないものとが約半数ずつで、口頸部の調整ではケズリとナデが約4割ずつを占め、胴部調整はケズリが圧倒的に多く、口頸部と胴部の調整の組み合わせでは、ケズリとケズリのものとナデとケズリのものとが全体の約4割ずつを占めている。また浅鉢では、本報告書で分類したA～D類が認められるが、口唇部の形状ではa・b類は存在せず、c・d類およびd類よりもさらに肥厚したものも1点(報告書158)認められる。これらの特徴のうち、深鉢の外面調整については地域差を考慮にいれなければならないが、口頸部調整においてナデのものが多いこと、および浅鉢158の存在から、南溝手遺跡河道2よりやや新しく考えたいが、この点については今後検討したい。

『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅰ―恩智遺跡の調査―』　八尾市教育委員会　1987年

(7)　「谷尻遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11　岡山県教育委員会　1976年

(8)　「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12　岡山県教育委員会　1976年

(9)　日本アトソトープ協会からの報告には、以下のコメントがある。

「年代はC^{14}の半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（yearsBP.）として示しています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と計数管のガス封入圧力および温度の読取の誤差から計算されたもので、C^{14}年代がこの範囲に含まれる確率は約70％です。この範囲を2倍に拡げますと、確率は約95％となります。」

第4節 縄文時代晩期後葉の土器について

晩期後葉の土器が多く出土したのは、河道1および第1微高地・第1低位部(以下この節に限り包含層と呼ぶ)からである。ここでは、これら2地点出土の土器について下記の視点から分析を行いたい。ただし分析したのは実測図として掲載した晩期後葉の土器のみである。なお河道1出土の「孔列文土器」については、第5節でまとめを行っている。

(1)深鉢の口唇部における刻目の有無について

河道1では刻目の有るものが69/88で78%、無いものが19/88で22%である。また包含層では刻目の有るものが60/65で92%、無いものが5/65で8%である。両地点をあわせると、刻目の有るものが84%である。

(2)深鉢の口唇部の形態について

口唇部の形態については、刻目を施したものが多いため、刻目の方法や形態に左右されているものも多く、また磨滅などの条件によって明確に分類できないものも多いが、平坦面をもち角張るものをA類、先取りのものをC類、A・C類以外で丸みをもつものをB類とした。

河道1では、A類が24/88で27%、B類が43/88で49%、C類が21/88で24%である。包含層では、A類が40/63で63%、B類が17/63で27%、C類が6/63で10%である。両地点あわせるとA類が42%、B類が40%、C類が18%である。

(3)深鉢の口縁端部内面に沈線あるいは沈線状の抉りを施したもの。

河道1では31/88で35%、包含層では8/67で12%である。

(4)深鉢の口頸部外面の調整について(調整については最終調整を分析基準としている)

河道1ではアルカ属貝条痕のものが22/110で20%、ケズリのものが5/110で5%、ナデなものが83/110で75%である。包含層ではアルカ属貝条痕のものが17/77で22%、ケズリのものが1/77で1%、ナデのものが59/77で77%である。両地点をあわせると、アルカ属貝条痕ものが21%、ケズリのものが3%、ナデのものが76%である。

(5)深鉢の胴部外面の調整について

資料数は少ないが、河道1ではアルカ属貝条痕のものが2/28で7%、ケズリのものが23/28で82%、ナデのものが3/28で11%である。包含層ではアルカ属貝条痕のものが1/22で5%、ケズリのものが20/22で91%、ナデのものが1/22で5%である。

(6)深鉢の口頸部と胴部外面の調整の組み合わせについて

資料数は少ないが、河道1ではナデとケズリのものが16/30で53%、アルカ属貝条痕とケズリのものが5/30で17%、ナデとナデのものが3/30で10%、ケズリとケズリのものが3/30で10%で、その他にナデとアルカ属貝条痕のものが2点、アルカ属貝条痕とアルカ属貝条痕のものが1点存在している。包含層では、ナデとケズリのものが10/19で53%、アルカ属貝条痕とケズリのものが7/19で37%あり、その他にナデとナデ、ケズリとケズリのものが各1点存在している。

(7)深鉢の口縁部の刻目突帯の位置について

河道1では、口縁端部から0.5～1cm前後下がった位置についているものがすべてである。包含層では1点(**618**)のみ口縁端部に接しているが、その他は口縁端部から0.5～1cm前後下がった位置につ

いている。

(8)深鉢の口頸部外面の文様について

河道１では、ヘラ描き沈線文をほどこしたものが４点(**172・213・238・314**)出土している。包含層では、垂下する爪形文が１点(**575**)、ヘラ描き沈線文が２点(**526・614**)、刺突文が３点(**529・530・626**)出土している。

(9)深鉢の口頸部と胴部外面の境の文様について

逆「Ｃ」形やＤ字形、「コ」の字形の刺突文や押引文を施したものが、河道１では３点（**313・314・328**)、包含層では４点(**517・529・575・606**)、「Ｃ」字形や逆「コ」の字形の刺突文や押引文を施したものが河道１では８点(**168・169・220～223・306・329**)、包含層では６点(**532・587・589・628・629・631**)、横方向の１列および２列の列点文を施したものが河道１では３点(**139・175・224**)、包含層でも３点(**530・630・633**)、沈線や凹線あるいは下方向からの抉りを沈線状に施したものが河道１では12点、包含層では５点図示できている。

(10)深鉢の胴部に刻目突帯を施したもの

いわゆる二条突帯の深鉢になると考えられるが、河道１では８点、包含層では３点図示できている。

(11)深鉢の底部の形態について[1]

河道１では、くぼみ底４点、小さなくぼみ底２点、丸底１点、平底３点を、包含層では、くぼみ底４点、小さなくぼみ底３点、尖底２点、丸底１点、平底１点を図示している。

一方、浅鉢については、晩期中葉の混入品との区別が困難なものもあるが、器形の種類では、口縁部が逆「く」の字形を呈し、外方に開くもの(Ａ類、**244・256**など)や口縁部が逆「く」の字形を呈し、直立あるいは内傾しながら立ち上がるもので、口縁部の短いもの(Ｂ１類、**257・258**など)と長いもの(Ｂ２類、**622**など)、椀形のもの(Ｃ類、**275**など)、皿形のもの(Ｄ類、**265・266**など)がある。これらの比率については、資料数が少ないため明らかにし得ないものの、河道１および包含層ともＡ～Ｄ類すべてが存在している。また、いわゆる方形浅鉢については、両地点ともその存在が確認できている。

その他に、小片のため明確ではないが、小型の壺(**304**)や高杯(**305**)と考えられる土器が出土している。

以上のような分析結果から河道１と包含層出土の土器がほぼ同じ傾向を示していると考えられるので[2]、次に述べる他遺跡出土土器との比較や編年的位置づけについては、この両地点をまとめたかたちで南溝手遺跡１出土土器として考えていきたい。

岡山県における晩期後葉の土器については、近年いくつかの編年案が提示されている。ここでは、これまで分析した観点から他遺跡出土土器との比較を行いたい。比較の対象としたのは、南方前池遺跡[3]、広江・浜遺跡[4]、津島岡大遺跡[5]、百間川沢田遺跡[6]出土の土器である[7]。

まず晩期後葉の古い段階と考えられている南方前池遺跡と広江・浜遺跡出土土器との比較を行うと以下のようなことが指摘できる。深鉢についてみると、口唇部における刻目の有無については、南方前池遺跡で約８割、広江・浜遺跡では約９割が刻目を施しており、南溝手遺跡１でも約８割に刻目が施されていた。口唇部の形状については、ここで分類したＡ類(平坦面をもち角張るもの)が、南方前池遺跡ではほぼ10割、広江・浜遺跡では９割以上であるのに対して、南溝手遺跡１では約４割で、新しい要素であるＢ・Ｃ類がそれぞれ約４割と２割存在している。口頸部の調整については、南方前池遺跡では過半数、広江・浜遺跡ではほとんどがアルカ属貝条痕であるが、南溝手遺跡１では約２割が

アルカ属貝条痕であるものの、7～8割がナデである。口縁部の刻目貼付突帯の位置については、南方前池遺跡、広江・浜遺跡、南溝手遺跡1ともほとんどすべてが、1㎝前後下がった位置についており、共通している。

したがって南溝手遺跡1出土土器は、深鉢の口唇部形状や口頸部の調整において新しい傾向が認められること、および二条突帯の深鉢が伴っていることから、南方前池遺跡や広江、浜遺跡よりは新しい段階に位置づけられる。なお浅鉢についは、南方前池遺跡、広江・浜遺跡とも資料数が少なかったり、共伴関係が捉えにくいため比較しにくいが、少なくとも方形浅鉢やB2類は存在せず、逆にいわゆる鍵形の口縁部をもつものが一定量存在しており、南溝手遺跡1出土土器の方が新しいと考えられる。

次に、晩期後葉の新しい段階と考えられている百間川沢田遺跡出土土器との比較を行うと以下のような点が指摘できる。

百間川沢田遺跡出土土器の特徴は、深鉢についてみると、口唇部に刻目を施すものは約1割にすぎず、口唇部の形状は、先細りの形態であるC類が約8割を占めている。また口頸部外面の調整は、アルカ属貝条痕やケズリのものはほとんどなく、9割以上がナデであり、口縁部刻目突帯は約2割が口縁端部に接して貼り付けられている。浅鉢については、ここでA類とした口縁部が逆「く」の形で外方に開くものはほとんど存在していない。こうしたことから、南溝手遺跡1出土土器は、百間川沢田遺跡出土土器よりも古い段階のものと考えられる。

また百間川沢田遺跡より古い様相を示すと考えられている津島岡大遺跡出土土器との比較では以下の点が指摘できる。

津島岡大遺跡では、深鉢についてみると，口唇部に刻目を施すものは約2割で、口唇部の形状はA類が約4割、B類が約4割、C類が約2割であり、口頸部外面の調整はアルカ属貝条痕やケズリのものは少なく、9割以上がナデである[8]。また口縁端部の刻目突帯は、約2割が口唇部に接して貼り付けられており、二条突帯深鉢も存在している。浅鉢については、南溝手遺跡1でみられたA～D類のもの、および方形浅鉢が津島岡大遺跡でも認められる。以上のことから、両者は、深鉢の口唇部の形状や二条突帯深鉢の存在、あるいは浅鉢の器形の組み合わせなどに共通点がみられるものの、深鉢における口唇部刻みや口頸部外面の調整、および口縁部刻目突帯の位置などからは、南溝手遺跡1出土土器が津島岡大遺跡出土土器よりも古い様相を示していると考えられる。このことは、深鉢外面の口頸部と胴部の境の文様について、南溝手遺跡1では、南方前池遺跡や広江・浜遺跡など前段階で認められたような刺突文や押引文が存在しているのに対して、津島岡大遺跡ではほとんど認められないことからも言えるであろう。

以上述べてきた他遺跡との比較の結果、古い段階のものから南方前池遺跡・広江・浜遺跡→南溝手遺跡1→津島岡大遺跡→百間川沢田遺跡という時間的序列が想定できる。

ところで津島岡大遺跡出土土器については、報告書では難しい問題としながらも、「沢田式」とされている百間川沢田遺跡出土土器の中の古い段階として位置づけられているが、一方「沢田式」とは分離して一段階古い別の型式として捉える意見や、「沢田式」と一段階古い型式とが混在した資料と考える意見がある。そこで、今一度、南溝手遺跡1、津島岡大遺跡、百間川沢田遺跡出土土器との比較を行うと以下のような点が指摘できる。

まず津島岡大遺跡出土土器が百間川沢田遺跡出土土器と類似点が認められ、南溝手遺跡1出土土器との間に相違点があるのは、以下3点である。(1)深鉢の口唇部に刻目を施すものが、南溝手遺跡1で

は約８割あるのに対して、津島岡大遺跡では約２割、百間川沢田遺跡では約１割であること。(2)深鉢の口頸部外面の調整が、津島岡大遺跡と百間川沢田遺跡がいずれも９割以上がナデであるのに対して、南溝手遺跡１ではナデは７～８割で、アルカ属貝条痕のものが約２割存在していること。(3)深鉢外面の口頸部と胴部の境において、爪形の刺突文や押引文、列点部を施したものが、南溝手遺跡１では少量ではあるが存在しているのに対して、津島岡大遺跡と百間川沢田遺跡ではほとんど認められないことである。

一方、津島岡大遺跡と百間川沢田遺跡出土土器との相違点として、報告書で指摘されているのは、一つは、深鉢の口唇部の形状のうち先細りのもの（Ｃ類）の比率が、津島岡大遺跡では２割弱であるのに対して、百間川沢田遺跡では約８割を占めている点である。このＣ類は、南溝手遺跡１では２割弱存在しており、この点では、津島岡大遺跡との類似性が認められる。二つめは、深鉢口縁部の刻目突帯の位置について、口唇部に接するものが、津島岡大遺跡では約１割であるのに対して、百間川沢田遺跡では約２割を占めている点である。この点では、南溝手遺跡１ではほとんど認められないため、津島岡大遺跡と百間川沢田遺跡はまとめられて、南溝手遺跡１と対比することができる。三つめは、二条突帯深鉢の比率が、津島岡大遺跡よりも百間川沢田遺跡の方が高い点である。二条突帯深鉢については、南溝手遺跡１にも存在しており、存在しているという点では共通しているといえる。ただし、南溝手遺跡１で出土している二条突帯深鉢の**528**は、津島岡大遺跡や百間川沢田遺跡のものと比較して、口唇部に面をもっていること、口頸部外面の調整がアルカ属貝条痕であること、器形において肩の張りが強いことなど古い形態を示していると考えられる。四つめは、浅鉢の器形において、本報告書で分類したＡ・Ｂ類のいわゆる黒色磨研浅鉢の系譜を引くものが、百間川沢田遺跡ではほとんどない点である。浅鉢については、すでに述べたように、津島岡大遺跡と南溝手遺跡１では共通する要素が多いように考えられるが、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ類に**313**・**314**のような鍵形口縁に近いものが少量存在する南溝手遺跡１の段階、津島岡大遺跡の段階、黒色磨研土器の系譜を引く浅鉢が少なく、方形浅鉢も存在しない百間川沢田遺跡の３段階に区分して理解することができるのではなかろうか。

ところで、ここで行ったような分析方法である一定量の土器群の分析を行えば、それぞれが少しずつ異なった様相を示すのは当然である。したがって、土器編年として捉えようとするならば、より大きな変化を重視すべきである。今回、南溝手遺跡１の資料が提示できたことにより、津島岡大遺跡出土土器は百間川沢田遺跡とは一つのグループとしてまとめてとらえ、南溝手遺跡１との間に編年的な画期をもとめるべきであると考える。ただし、津島岡大遺跡出土土器は二つの型式のものが混在したものとする考え方については、その可能性も十分に考えられるが、そうした観点からは、南溝手遺跡１出土土器も、南方前池遺跡・広江・浜遺跡段階のものが混在していると考えることもできる。一般的に、「型式」を設定する際には、複雑な要素をもった資料群の組み合わせのなかから、純粋な資料を抽出する作業が不可欠である。津島岡大遺跡の古い様相の土器群を南溝手遺跡１の段階に、新しい様相の土器群を百間川沢田遺跡の段階に分離することも十分に可能だと思われるが、この点については、今後の資料の増加をまって、検討したい。

（平井）

註

(1)　底部形態については、晩期中葉のものが含まれている可能性がある。

(2)　ただし口唇部形状については、河道１と包含層とではＡ類とＢ類の比率が逆転しているが、この相違につい

ては、今回は両者ともA・B類がC類よりも多い点の方を重視しておきたい。

(3)　南方前池遺跡調査団「岡山県山陽町南方前池遺跡」『私たちの考古学』第7号考古学研究会1956年

(4)　『広江・浜遺跡』　倉敷市教育委員会　1979年

(5)　「津島岡大遺跡3」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告書』第5冊　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1992年

(6)　「百間川沢田遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59　岡山県教育委員会　1985年

(7)　これら比較した遺跡出土土器について以下の文章に記した比率については、報告書および下記の文献において示されている数値を用いている。

栄　一郎「縄文時代晩期土器について」『岡山大学津島地区遺跡群の調査』Ⅱ　岡山大学埋蔵文化財調査室　1986年

平井　勝「岡山における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備』第10集　古代吉備研究会　1988年

(8)　前掲註5の報告書に掲載された土器から算出した数値である。

第５節　「孔列文土器」について

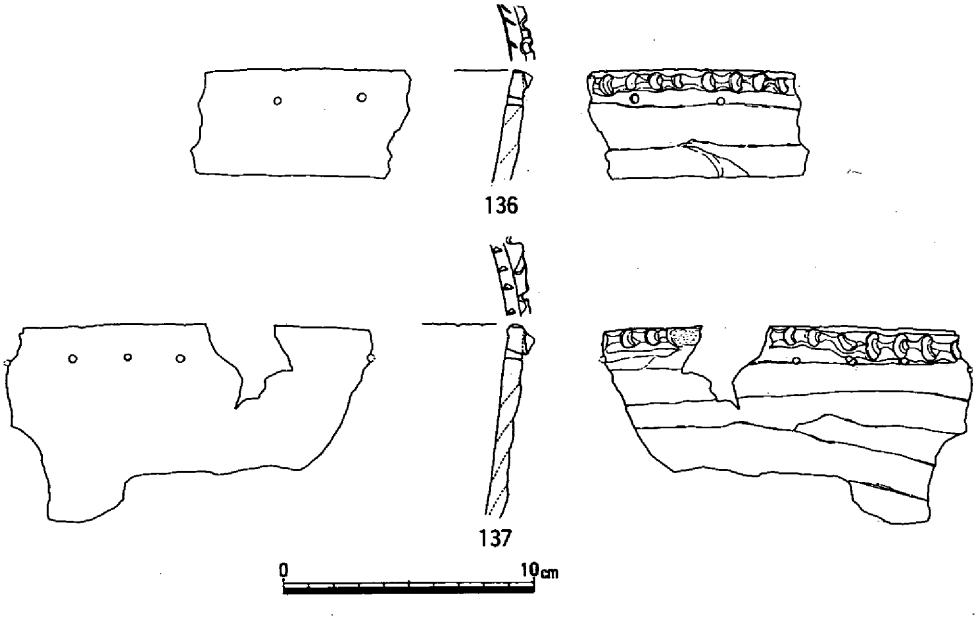
(1)　河道１出土土器の「孔列文土器」について

第３章第３節において報告したところの河道１から出土した縄文土器のうち、第79・574図**136**・**137**は同一個体であり、いわゆる「孔列文土器」[(1)]の範疇に属するものである。

口縁部の破片は図示した２点のみであるが、この他に同一個体と考えられながらも図示しえなかった胴部および底部の破片が８点ある。同一個体としての同定にあたっては、胎土・焼成等はもちろんのこととして、外面に粘土紐の痕跡を明瞭に残し、逆に内面には丁寧なナデを施すという整形・調整の技法が根拠となった。

器形は深鉢と考えられ、最大径は口縁部にあり、砲弾形に底部へ向かって、丸底となる。口径については破片が小さく復元が難しいが、あえて**137**によって推定すれば直径50cm近いものとなる。整形は、幅１～２cmの粘土紐を内傾接合させており、**137**の外面にはその繋ぎ目の部分が見られる。口縁部から胴部の外面はほとんど無調整で、粘土紐の接合痕が明瞭である。底部の外面にはケズリないし強いナデによる砂粒の移動が認められる。内面は丁寧にナデられており、接合痕は認められない。底部の内面については、繊維束によると思われる擦痕が認められる。胴部下半に相当すると考えられる破片の外面には、煤の付着も認められる。口縁端部外面には幅７～12mm、高さ４mm程度の突帯が貼り付けられ、三日月状の刻目が不規則に施されている。口縁端部上面にも、突帯に比べて鋭利な刺突が不規則に施されている。なお、突帯は口縁端部の１条のみと考えられる。

穿孔は、焼成前に行われており、７孔を確認できる。口縁端部から８～12mm下がった位置に内面から外面へ穿たれ、いずれも貫通して突帯の直下に開口している。孔径は３mmで、間隔は21～32mmと不規則である。突帯の下端を削るものもあることから、穿孔は突帯貼り付けの後に行われており、刻目との関係についても施文の後と考えられる。



第574図　河道１出土「孔列文土器」(1/3)

(2) 河道1出土土器の深鉢について

この「孔列文土器」が出土した河道1からは、第79～88図に示す晩期の縄文土器が出土している。その大半がＫＹ１区からの出土であり、**136・137**もこれに含まれる。これらは刻目突帯文土器として括りうるものであるが、従来の型式分類の指標に従えば、その中でも幅をもっているようである。南溝手遺跡出土の縄文時代晩期の土器については、別稿に詳しいのでこれに譲るとして、一部を概観すると次のようになる。

136・137を含む深鉢をみてみると、口縁部片にあって突帯をもたないものは**138・217～219**と少ない。突帯に刻目を施さないものも**160**のみで、大半が刻目突帯文土器である。突帯の位置については口縁端部からやや下がっており、**136・137**は例外となる。口唇部への刻目については、突帯をもたない**138**にも認められる他、**159・160**および第83図に示すものを除いて刻目をもつものが圧倒的に多い。口唇部に面をもつものと丸く納めるものとの比率は、刻目をもつものに前者が多く、刻目をもたないものに後者が多い。また、口縁端部内面の沈線については、面をもつ口唇部に刻目をもつものに多く施されている。器形については、頸部が緩く外反するものが多く、砲弾形を呈するものは少ない。前者にあっては、胴部との境に沈線・押引文を施すものが見られる他、二条突帯のものも認められる。以上の深鉢にみられる諸要素は、個別の土器についてみた場合には前池式から沢田式までの幅をもつものである。そして、**136・137**については、口唇部に面をもち、これに刻目を施していることから、古相の特徴を示しているものといえる。ただし、孔列をもつものはこの１個体だけであり、外面に粘土紐の痕跡を明瞭に残すものもこの１個体のみである。

(3) 「孔列文土器」の出土例について

「孔列文土器」は、管見の限りにおいて第７表のとおり、43遺跡で107例以上が出土している。今回はそのうちの13遺跡について資料が入手できていないが、地名表には掲載した。出土例のうちの41遺跡105例以上は九州地方での出土であり、現在の行政区画でみるならば、福岡県14遺跡34例、熊本県２遺跡４例、大分県１遺跡１例、宮崎県15遺跡42例、鹿児島県９遺跡24例となり、長崎県・佐賀県・沖縄県では出土例が無い。その他に中国地方の山口・岡山両県において各１遺跡１例が知られているのみである。

出土した遺跡の立地をみると、福岡県内の福岡市・北九州市に所在する遺跡の一部が平野部にあって沖積地内の低位な段丘上に立地するのを除くと、大半が台地・丘陵・段丘の上に立地している。もっとも、これはそれぞれの地域における縄文時代晩期の遺跡の在り方の通例ともいえる。遺跡内での出土状況については、貫・井出ケ本遺跡(福岡県北九州市)で土壙および粘土穴から出土している他、野多目遺跡(福岡県福岡市)・田村遺跡(福岡県福岡市)・貫川遺跡(福岡県北九州市)・カキ遺跡(福岡県北九州市)・門田遺跡(福岡県春日市)で溝あるいはそれに関連施設から出土している例を除いて、ほとんどが包含層からの出土である。また、１遺跡からの出土数をみると、田代ケ八重遺跡(宮崎県西諸県郡)での12例、榎木原遺跡(鹿児島県鹿児島市)での12例が最多出土例であり、カキ遺跡での８例、貫川遺跡での７例以上、城ケ尾遺跡(宮崎県北諸県郡)での６例がこれに続くものの、逆に１点のみの出土という例が多い。

器種についてみると、甕形土器とされるもの８点、浅鉢４点がある他は、深鉢が64点で全体の60％を占め、器種不明のものを除くと84％にあたる。さらに、深鉢および甕形土器のうち17例が刻目突帯をもつもので、その比率は24％である。17例のうち12例を第575図に示しているが、前原北遺跡(宮崎

１．前原北遺跡（文献21）　２．城ケ尾遺跡（文献23）　３．角上原地区遺跡（文献32）　４．吉母浜遺跡（文献３）
５・６．樋田遺跡（文献29）　７．榎木原遺跡（文献42）　８．貫川遺跡（文献５）　９．門田遺跡（文献13）
10．七又木地区遺跡（文献35）　11．カキ遺跡（文献８）　12．高原遺跡（文献14）

第575図　刻目突帯を有する「孔列文土器」(1/3)

県宮崎市)および城ケ尾遺跡出土例は、2条刻目突帯が確認された例で、その他は口縁部の1条のみが確認されたものである。後者のうち、角上原地区遺跡(宮崎県宮崎郡)・吉原浜遺跡(山口県下関市)・樋田遺跡(宮崎県東白杵郡)の例は、頸部が内傾あるいは緩く外反して胴部との境に稜をもつ器形が想定され、門田遺跡・七又木地区遺跡(宮崎県宮崎郡)・カキ遺跡・高原遺跡(福岡県甘木市)の例は砲弾形に想定しうるものである。口縁部の刻目突帯直下に穿孔される例がほとんどで、わずかに榎木原遺跡例が刻目突帯直上に穿孔されている。

穿孔の方向についてみると、福岡県内の出土例には内面から外面へ向けて穿たれるものが多く、いずれも貫通している。これに対して熊本・宮崎・鹿児島の各県出土例には外面から内面へ向けて穿たれるものが多く、貫通しないものも多い。

以上のような他県での出土例と、南溝手遺跡例を比較すると、遺跡の立地、穿孔の方向などにおいて福岡県における状況に近しいものをみることができる。

(4)　「孔列文土器」出土の意味するもの

九州における「孔列文土器」出土遺跡の時期についてみていくと、黒川式から夜臼式までの時間幅に納まるようである。さらに報告者にしたがって、晩期を刻み目突帯出現の前後で分けると、これに両者にまたがるものを加えた三者がほぼ同数となる。地域的にみても、黒川式段階から南北九州ともに出土例があり、前述のように刻目突帯文土器に孔列を伴う例も双方で知られている。

西日本における縄文時代晩期の土器研究は、稲作技術の伝播の問題、あるいは弥生文化の成立の問題を命題としながらすすめられている。中でも刻目突帯文土器をめぐる問題については、九州地方から東海地方までの広範囲における地域間の交流の問題としてとらえられている。一方、「孔列文土器」については、日本列島と朝鮮半島の交流を示すものとして注目されてきたところである。すなわち、縄文晩期土器に朝鮮無文土器の要素である孔列が施される現象は、両文化に属する人間の交流を物語るものと解される。この「孔列文土器」が黒川式段階から存在する九州地方に、日本列島内における地域間交流の結果として刻目突帯文土器が出現し、再び地域間交流によって2条刻目突帯文土器が稲作技術と共に伝えられるという考え方に従えば、南溝手遺跡出土の「孔列文土器」は後者の地域間交流を示すものとなろうか。　(光永)

註

(1)　こででは、朝鮮半島南部において無文土器にみられる口縁部直下に孔列を巡らせる技法を採用した縄文土器をさすものとする。

(2)　多くの研究者が論を起こしているが、今回は下記によるところが大きい。
家根祥多「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』4　雄山閣出版　1981年
平井　勝「縄文晩期における中・四国の地域性」『考古学研究』142　1989年
藤尾慎一郎「西部九州の刻目突帯文土器」『国立歴史民俗博物館研究報告』26　1990年
岩見和泰「刻目突帯文土器の成立と展開」『古代吉備』14　1992年

(3)　田中良之「縄文土器と弥生土器」『弥生文化の研究』3　1986年
武末純一「北九州市長行遺跡の孔列土器」『記録』24　1987年

第７表　「孔列文土器」出土地名表(1)

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	器種	形態・手法の特徴	孔数	孔径(mm)	方向	間隔(mm)	位置(mm)	個数	時期	文献
1	野多目遺跡	福岡県福岡市南区野多目字古古賀522他	水路(ＳＤ02)下層	甕形土器Ⅲ類	口唇部上面貝殻刻み、外面板状痕	1	6	内？外	22＋	17	1	夜臼Ⅰ～Ⅱａ式	1
2	田村遺跡	〃　〃　早良区田	溝状落込み(ＳＤ1000)	深鉢	口縁部横ナデ、外面条痕・煤付着、内面ナデ	3	6	内→外	8～12	8	2	晩期	2
			〃　(ＳＤ1002)		外面条痕、内面ナデ	2	5		9	7			
3	板付遺跡	〃　〃　博多区板付										２条刻目突帯文土器	3
4	貫川遺跡	〃　北九州市小倉南区貫1469-1他	第２地点Ｇ-3	粗製浅鉢Ｃ類	外面二枚貝条痕後ナデ、内面二枚貝条痕	5	6	内→外	2～7＋	5	6+1?	黒川Ⅲａ式(黒川式古)	4
			〃　Ｇ-4混土層下		外面擦痕、内面ナデ	5	7	内←外	16～20	15			
			西地区第二次第１地点包含層	深鉢	内外面二枚貝条痕後ナデ、断面三角形突帯二枚貝刻目	3	6		9～15	16		晩期	5
			No103～104杭列上層	無文深鉢	内外面ナデ	3	7		7～10	14			6
			No102中央Ⅶ層		外面二枚貝条痕後ナデ、内面ナデ	2	6	内→外	27	12			
			No103Ⅳ～Ⅵ層		内外面ナデ	2	6	内？外	21	10			
5	貫・井手ケ本遺跡	〃　〃　〃　中貫２丁目1613-1他	２号土壙	粗製深鉢	〃	2	3	内→外	20	13	4	黒川式	7
					内外面二枚貝条痕後ナデ	2	3		24	17			
			３号　〃		外面擦痕、内面ケズリ後ナデ	8	3		10～18	10～17			
			２号粘土穴		？	6	3		15～19	7～16			
6	カキ遺跡	〃　〃　〃　横代字カキ	Ⅶ区17層土器溜り	深鉢	ナデ	2	4	内→外	13	(8)	8	長行式(黒川式併行)	8
			〃　20層	粗製深鉢		2	4	内？外	25	10			
			〃　矢板列内		外面ナデ、内面条痕後ナデ	4	6		16～26	6～12			
			Ⅳ区Ｍ-2周辺		内外面条痕後ナデ	2	5	内→外	25	7			
			Ⅰ区表採		内面条痕後ナデ、外面ナデ	1	4		12＋	6			
			〃　４トレンチ１層			2	6		17				
			Ⅳ層北西部14層併行		内面ナデ、外面条痕後ナデ	1	4		18＋				
			Ⅶ区東側台地裾７層下層	深鉢	内外面条痕後ナデ、刻目突帯	4	5		15～21	9～12			
7	長行遺跡	〃　〃　〃　長行	Ｂ地区包含層	粗製浅鉢Ⅲ Ｂ 類(深鉢？)	外面横方向二枚貝条痕、内面二枚貝条痕後ナデ	4	4～5	内？外	14	19～23	2	黒川式	9 10
					外面条痕後ナデ	4	3～3.5		9～12	5～7			
8	長野・早田遺跡	〃　〃　〃　長野本町１丁目	第１地点包含層地山直上	粗製無文深鉢	外面二枚貝条痕、内面二枚貝条痕後ナデ	1	5	内→外	8＋	19	1	晩期中頃～後半期	11
9	黒崎貝塚	〃　〃　八幡西区黒崎５丁目43-3他	第４次調査包含層	深鉢	外面二枚貝条痕後ナデ、内面ナデ？	3		内→外			2	黒川式～夜臼式併行	12
						7	6		2～7	10～12			
10	永犬丸遺跡	〃　〃　〃										〃	12
11	門田遺跡	〃　春日市上白水字門田・辻田	大溝Ⅰ(Ｇ9-6区)	甕形土器	外面条痕、ヘラ状工具刻目突帯	2	5	内→外	13	7	1	夜臼式	10 13

第7表　「孔列文土器」出土地名表(2)

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	器種	形態・手法の特徴	孔数	孔径(mm)	方向	間隔(mm)	位置(mm)	個数	時期	文献
12	高原遺跡	福岡県甘木市屋永字高原	包含層	甕Ⅲ類	刻目突帯	2	2	内↔外	24	8	1	高原Ⅲ式＝曲り田(古・新)式	14
13	柳瀬遺跡	〃　浮羽郡浮羽町朝田字柳瀬	〃	深鉢	〃						1＋α		15
14	遠賀川床	〃　鞍手郡小竹町	表採	甕形土器	〃						1	2条刻目突帯文土器	3 10 16
15	アンモン山遺跡	熊本県人吉市下原田町瓜生田		深鉢	口縁部若干肥厚						3	黒川式	17 18
16	天道ケ尾遺跡	〃　〃　七地町天道ケ尾	R-12Ⅳ層	〃	内外面条痕	2	6	未←外	20	18	1	晩期後半	19
17	北原遺跡	大分県大分郡狭間町鬼崎	包含層	〃		6?					1?	晩期	20
18	前原北遺跡	宮崎県宮崎市熊野	土壙(SC5)混入	甕形土器	三角刻目二段突帯、口縁部内外面ナデ、外面胴部ヘラ磨き	5	3	未←外	15	15	1	夜臼Ⅱ式	21
19	平畑遺跡	〃　〃　熊野			突帯								22 23
20	新立遺跡	〃　西都市童子丸字新立		深鉢							2		24 25
21	中尾山遺跡	〃　都城市蓑原町1391			突帯								18 23 26
22	田代ケ八重遺跡	〃　西諸県郡須木村中原字田代八重	D-9区Ⅲ層		内面ミガキ、外面ナデ・煤付着	2	6	未←外	26	15	12	晩期	27
			〃　Ⅱ層		内面貝殻条痕、外面貝殻条痕・凹線文	4	2		10～16	15			
			C-10区Ⅲ層		内外面ナデ	3	5		12	12			
			C-9区Ⅱ層		内面ナデ、外面貝殻条痕	1	4		15＋	11			
			C-10区Ⅱ層		内外面ナデ	2	2		22	15			
			〃　Ⅲ層			1	4		12＋	12			
23	城ケ尾遺跡	〃　北諸県郡高城町石山字城ケ尾	A地区F-2	深鉢	内面粗ヨコナデ、外面ヨコナデ	4	3	未←外	10～20	14～21	6	晩期後半	23
			〃　F-1		内外面粗ヨコナデ	1?	6			15			
						13?	5		6～12	10～14			
			〃　D・E-2		刻目突帯二段、ナデ、山形口縁	7?	5	内←外	24～27	23～42			
			B地区		内面条痕後ナデ、外面条痕、口唇部肥厚	1	5	未←外	21＋	17			
					内面ナデ、外面ナデ後沈線・稜	2	2	内←外	15	6			
24	内野々遺跡	〃　東臼杵郡西郷村内野々		粗製深鉢Ⅸe類	内外面ナデ、貼付突帯	3	3	未←外	10～12	15	3	晩期(刻目突帯文出現前段階)	28
						1	2		10＋	16			
					内外面ナデ、貼付突帯・煤付着	1	3	内→未	14＋	13			
25	樋田遺跡	〃　〃　東郷町山陰丁字樋田	SA2	深鉢?	外面口縁下刻目突帯、内面貝殻条痕	2?	2	未←外	16＋	18	2	晩期	29
			C-2区包含層		内外面ナデ、低い刻目突帯	4	4		7～9				

第７表　「孔列文土器」出土地名表(3)

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	器種	形態・手法の特徴	孔数	孔径(mm)	方向	間隔(mm)	位置(mm)	個数	時期	文献
26	赤松遺跡	宮崎県東臼杵郡東郷町山陰仲深区赤松	包含層	粗製深鉢	内外面ヨコナデ、突帯？	1	3	未←外	26＋	26	2	晩期前半	23
						3	2		18	22＋			30
27	下水流遺跡	〃　〃　〃 下三ケ字下水流	〃 第Ⅳ層	〃 Ⅰb類	内面ナデ、外面ヨコナデ・口縁帯・煤付着	3	2	未←外	19～24	20	2	〃	23
													30
					内外面ナデ、口縁帯	3	4		18	25			
28	隠山遺跡	〃 宮崎郡佐土原町上田島字隠山	99	深鉢	平縁口縁下部三角形突帯、胴部は口縁部より広がる	2	3	未←外	9	6	2	晩期	31
			4トレンチ		平縁口縁下部三角形隆帯、胴部は口縁部より広がる	4	3		10～16	7			
29	角上原地区遺跡	〃　〃 清武町今泉角上	第9トレンチアカホヤ火山灰直上層	甕形土器	刻目突帯	8	4	未←外	15	18	1		32
30	祇園原遺跡	〃 児湯郡新富町祇園原	表採		口縁下突帯			未←外				晩期前半	23
													30
													33
32	七又木地区遺跡（八幡上遺跡？）	〃　〃　〃 新田	T-29・30									晩期	34
			T-6アカホヤ直上層		刻目突帯	5	4	未←外	6	10	1		23
													35
32	上別府遺跡	〃　〃 高鍋町持田				3		内？←			4		23
						1？		外					36
					突帯？	1？		未？←					
						2		外					
33	大滝遺跡	鹿児島県鹿児島市大滝町											25
													37
34	水の谷遺跡	〃 鹿屋市上祓川町水の谷		深鉢	口縁部肥厚せず	1		内？外			3	黒川式後半	18
						1							38
					「く」字屈曲、口縁部肥厚せず	4							
35	榎崎B遺跡	〃　〃 郷之原町榎崎	H-27区包含層Ⅲ層	粗製深鉢 B-Ⅰ類	口縁部幅広貼付突帯、内外面条痕、ナデ	2	3	内？外	15	18	3	黒川式	39
						2	2		19	15			
			H-32区　〃　〃	〃 浅鉢 H-Ⅰ類	内面条痕・ナデ、外面ナデ・研磨	2	4		30	9			
36	榎木原遺跡	〃　〃 高須町榎木原	包含層	深鉢Ⅲ類 B	幅広有帯	2	2	未←外	28	19	12	〃	18
					幅広有帯、口唇部山形、口縁部縦沈線	3	2			39			40
					幅広有帯、器面調整荒	2	4		21	22			
					幅広有帯	1	6		12	20			
						4	5		8～14	15～20			
					幅狭有帯	2	6	内？外	32	14			
						2			16	14			
						1	4		30＋	10			
						2	4		17	14			
						2	2		20	9			
			D4区Ⅵ層	深鉢	内面不明、外面ナデ・「く」字屈曲	1	4	内←外	38＋	24		〃	41
			F18区Ⅶ層		内外面ナデ、刻目突帯	2	1	内？外	12	4		山ノ寺式・夜臼式	42

第7表　「孔列文土器」出土地名表(4)

番号	遺跡名	所在地	出土遺構	器種	形態・手法の特徴	孔数	孔径(mm)	方向	間隔(mm)	位置(mm)	個数	時期	文献
37	柿窪遺跡	鹿児島県鹿屋市根木原町柿窪		甕形土器	刻目突帯	2		内？外			1		18 43
38	飛渡遺跡	〃　曽於郡志布志町帖飛渡											25
39	小迫遺跡	〃　〃 〃　田の浦字小迫		深鉢	口縁部肥厚せず	6？		未←外			1	黒川式後半	18 44
40	中之下一陣貝塚	〃　熊手郡南種子町中之下一陣											25
41	木落遺跡	〃　日置郡金峰町白川字木落	5トレンチⅢ層	深鉢	内外面ヨコ磨き	3	4	内←外	16	13	1	黒川式	45
42	吉母浜遺跡	山口県下関市吉母	T～V-2区西壁サブトレンチⅨc層	甕形土器	内外面ヘラケズリ後ナデ、ヘラ先細目刻目突帯	4	4	内？外	8～12	12	1	晩期後葉～弥生初頭	3 10
43	南溝手遺跡	岡山県総社市南溝手	河道1（KY1区）	深鉢	内面ナデ、外面粘土紐痕ママ、口唇部上面刻目、刻目突帯	5＋ 2	2～3 2～3	内→外	18～23 30	9～12 9～11	1 個体	晩期後葉	46 47

文献一覧

1　山崎純男「野多目遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第159集　福岡市教育委員会 1987年

2　林田憲三他「田村遺跡Ⅵ」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第200集　福岡市教育委員会 1989年

3　田中良之「Ⅴ出土遺物　1.縄文系土器」　村田多津江他『吉母浜遺跡』　下関市教育委員会 1985年

4　前田義人「貫川遺跡1」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第73集（財）北九州市教育文化事業団　1988年

5　前田義人「貫川遺跡3」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第92集（財）北九州市教育文化事業団　1990年

6　前田義人「貫川遺跡5」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第121集（財）北九州市教育文化事業団　1992年

7　前田義人「貫・井出ケ本遺跡」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第96集（財）北九州市教育文化事業団 1990年

8　木太久「カキ遺跡（縄文時代編）－九州縦貫自動車関係文化財調査報告33－」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第131集（財）北九州市教育文化事業団　1993年

9　山口信義他「長行遺跡」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第20集（財）北九州市教育文化事業団　1983年

10　武末純一「北九州市長行遺跡の孔列土器」『記録』第24冊　1987年（武末純一『土器からみた日韓交渉』　学生社　1991年　再録）

11　小方康宏「長野・早田遺跡（第1地点）－竹馬川都市小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告3－」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第137集（財）北九州市教育文化事業団　1993年

12　山口信義「黒崎貝塚」『北九州市埋蔵文化財調査報告書』第134集（財）北九州市教育文化事業団　1993年

13　荒武麗子他「Ⅵ 縄文・弥生時代の遺構と遺物」　井上裕弘『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第11集 福岡県教育委員会　1979年

14　木下修・伊崎俊秋「Ⅲ 高原遺跡」　木下・伊崎他『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』(31) 福岡県教育委員会　1994年

15　佐土原逸男「柳瀬遺跡概要」『浮羽町文化財調査報告』第8集　浮羽町教育委員会　1992年

16　小田富士雄・武末純一・田中良之「小竹町の先史・原史時代」『小竹町史』　1985年

17　『アンモン山遺跡』　人吉市教育委員会　1985年

18　下山学「南部九州出土のいわゆる「孔列土器」について」『鹿児島大学考古学会報』第5号　1987年

19　西住欣一郎「天道ケ尾遺跡（Ⅱ）」『熊本県文化財調査報告』第111集　熊本県教育委員会 1990年

20　大分合同新聞　1992年12月10日

21　北郷泰道「前原北遺跡」　永友良典『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集　宮崎県教育委員会　1988年

22　菅村和樹「平畑遺跡」　北郷泰道『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第２集　宮崎県教育委員会　1985年
23　長津宗重・寺師雄二「城ケ尾遺跡」『高城町文化財調査報告書』第１集　高城町教育委員会　1989年
24　「新立遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第17集　西都市教育委員会　1992年
25　福岡県小郡市教育委員会片岡宏二氏教示。
26　矢部喜多夫「都城市中尾山遺跡・馬渡遺跡発掘調査概要」『宮崎考古学会例会資料』　宮崎考古学会　1987年
27　吉本正典「田代ケ八重遺跡」『綾北川総合開発事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　宮崎県教育委員会　1992年
28　東憲章「内野々遺跡」『林業試験場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　宮崎県教育委員会　1992年
29　谷口武範「樋田遺跡」『県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　東郷町教育委員会　1991年
30　近藤協「赤松遺跡・下水流遺跡」『東郷町文化財調査報告書』第１集　東郷町教育委員会　1987年
31　木村明史「隠山遺跡概要報告書」『佐土原町文化財調査報告書』第８集　佐土原町教育委員会　１993年
32　近藤協「角上原地区遺跡」『昭和62年度農業基盤整備事業に伴う遺跡調査概要報告書』　宮崎県教育委員会　1988年
33　沢皇臣「宮崎県児湯郡新富町祇園原表採の遺物」『宮崎考古』３号　1977年
34　長津宗重「七又木地区遺跡」『昭和62年度農業基盤整備事業に伴う遺跡調査概要報告書』　宮崎県教育委員会　1988年
35　近藤協「七又木地区遺跡」『昭和63年度農業基盤整備事業に伴う遺跡調査概要報告書』　宮崎県教育委員会　1989年
36　日高正晴「上別府遺跡」『お染ケ丘地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』　宮崎県教育委員会　1979年
37　上村俊雄『大滝遺跡』　鹿児島市教育委員会
38　「水の谷遺跡」『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書』(5)　鹿屋市教育委員会　1986年
39　井ノ上秀文他「一般国道202号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書（Ⅶ）　榎崎Ｂ遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(4)　鹿児島県立埋蔵文化財センター　1993年
40　前迫亮一他「榎木原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(44)　鹿児島県教育委員会　1987年
41　牛ノ濱修・堂込秀人「榎木原遺跡Ⅱ」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(51)　鹿児島県教育委員会　1989年
42　堂込秀人・児玉健一郎「榎木原遺跡Ⅲ」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(53)　鹿児島県教育委員会　1990年
43　「柿窪遺跡・城ケ崎遺跡・大久保遺跡」『鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書』(7)　鹿屋市教育委員会　1987年
44　「山久保Ａ遺跡・山久保Ｂ遺跡・倉園遺跡・中迫遺跡・西中畑遺跡・小迫遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)　志布志町教育委員会　1986年
45　宮下貴浩「木落遺跡・高源寺遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(2)　金峰町教育委員会　1991年
46　平井泰男・川崎新太郎・久保恵里子「岡山県立大学建設に伴う窪木遺跡・南溝手遺跡の発掘調査終了」『所報　吉備』第14号　岡山県古代吉備文化財センター　1993年
47　平井泰男他「［６］県立大学建設に伴う発掘調査」　亀山行雄『岡山県埋蔵文化財報告』23　岡山県教育委員会　1993年

第6節　石器・石製品について

1．概要

当遺跡から出土した石製品の総数は、器種の判明したものだけでも900点余りをこえ、サヌカイトは破片を含めて重量にして約32kg出土している[1]。しかし半数以上は遺構から遊離した状態で検出され、時期の特定できないものが多い。それら遺構に伴わない一群のうち、本文中でも既述したように、基盤層から出土した資料は縄文時代晩期、主に低位部に堆積していた弥生時代前期と特定しうる包含層から出土した資料を弥生時代前期として扱った。弥生時代中期～後期については本文中では図示しうる資料のうち前二者を除いた全てを扱っていたが、実際には縄文時代晩期もしくは弥生時代前期のものの混入が多いと考えられ、ここでは遺構に伴うもの以外は時期不明として扱っている。この基準に従って作成した組成表を第8表に示している。総数は919点で、縄文時代後期2点、縄文時代晩期27点、弥生時代前期380点、弥生時代中～後期74点、古墳時代4点、時期不明332点である。

また、この報告書は全4分冊の第1分冊であり、同一集落域の調査報告書を今後刊行する予定であるので、ここではおもに今後の基礎資料として、主要な器種について形式分類をしていきたい。なお、分類基準はおもに菅生小学校裏山遺跡で行った平井典子氏の設定[2]に準拠しており、異なった点のみ説明を加えることとする。

第8表　出土石器・石製品一覧

	石鏃	石槍	環状石斧	打製石包丁	磨製石包丁	打製石鍬	磨耗有剝片	伐採石斧	加工石斧	石錐	楔形石器	スクレイパー	UR・FF	敲磨石	台石	砥石	石錘	その他	総数
縄文時代後期	1											1							2
縄文時代晩期	14	1		3		9	3	1	2	8	26	35	8	10	2	2	2	1	127
弥生時代前期	167					5	2	5	2	44	68	48	4	15	6	7	3	4	380
弥生時代中期～後期	19	1		1	3	1	1	1	1	6	17	8	5	2	3	4	1		74
古墳時代														3	1				4
時期不明	96			6	3	8	6	2		28	75	65	15	9	3	9	1	6	332
総数	297	2		10	6	23	12	9	5	86	186	157	32	39	15	22	7	11	919

石鏃

総数296点出土している。縄文時代後期のS7は先端部のみで型式不明である。縄文時代晩期ではⅠa類4点、Ⅱa類3点、Ⅱb類1点、Ⅲ類1点、Ⅳa類2点、Ⅴa類1点、不明2点、弥生時代前期ではⅠa類45点、Ⅱa類24点、Ⅱb類31点、Ⅱc類2点、Ⅲ類3点、Ⅳa類1点、Ⅴa類3点、Ⅶ類23点、不明31点が出土している。Ⅶ類は側縁の内湾具合によって、小さいものをⅦa類、内湾度が大きく特に脚部がふんばっているようなものをⅦb類とした。Ⅶa類14点、Ⅶb類9点となるが、Ⅶb類はすべて竪穴住居2から出土したものである。弥生時代中～後期ではⅠa類9点、Ⅱa類3点、Ⅱb類1点、Ⅴa類2点、Ⅶa類2点、Ⅷ類1点が出土している。時期不明では、Ⅰa類32点、Ⅰb類1点、Ⅱa類25点、Ⅱb類7点、Ⅲ類1点、Ⅴa類1点、Ⅴb類1点、Ⅶa類は4点、Ⅶb類は2

点、不明2点が出土している。各時期を通してⅠ・Ⅱ類は常に過半数を占め、最もポピュラーで実用的であったと考えられる。縄文時代晩期から弥生時代前期にかけてⅣ類は減少しているがⅤ類は一定量存在し、Ⅶ類が増加している。中期後葉にはⅧ類がみられる。一方、重量や大きさをみると、平均値では大きな変化は認められないものの弥生時代中期後葉では長さ4㎝をこえる大型品が出土しており、非日常的な一群の存在が認められる。松本武彦氏はこのような大型石鏃を「戦闘用石鏃」と位置付けており[(3)]、当遺跡周辺でも何らかの緊張関係が生じていたのかもしれない。

石錐

総数86点出土している。従来のⅠ～Ⅲ類に加えて、Ⅱ類とされてきたもののうち多角柱状の厚手の素材の先端を錐部として利用しているものをⅣ類とする。

縄文時代晩期ではⅠ類2点、Ⅱ類3点、Ⅲ類1点、Ⅳ類1点、不明1点、弥生時代前期ではⅠ類21点、Ⅱ類6点、Ⅲ類6点、Ⅳ類1点、不明10点、弥生時代中～後期ではⅠ類3点、Ⅱ類1点、Ⅲ類1点、Ⅳ類1点が出土している。不定形で錐部の短いⅡ類は減少するが、長く、ある程度の径のあるⅠ・Ⅲ類は増加している。

楔形石器

ここでいう楔形石器とは、素材の形態や大きさにかかわらず、相対する2辺に敲打痕もしくはつぶれを生じ、その両端から剥離が進行しているものを扱っている。ただ、スクレイパーの一部と判別しがたいものもあったので、明確に敲打痕のはっきりしないものは、例えば使用前のものや使用頻度が少なくつぶれが発達していないものなどがあるが、それらはスクレイパーに分類しているものもある。また、実測図において敲打位置が表現できないものについてはその位置を▼印で示している。総数で186点出土している。

従来のⅠ・Ⅱ類に加えて、敲打痕が2方向あるものをⅢ類とする。Ⅲ類の代表的なものは**S432**である。さらに裁断面の有無で、有るものをa類、ないものをb類と細分した。ただし、裁断面の有無が不明なものも多いため、一覧表ではa・bをいれているが、ここでは大きくⅠ～Ⅲ類に分けて説明を加えていきたい。

縄文時代晩期ではⅠ類4点、Ⅱ類6点、Ⅲ類1点、不明5点、弥生時代前期ではⅠ類40点、Ⅱ類22点、Ⅲ類3点、不明7点、弥生時代中～後期ではⅠ類11点、Ⅱ類3点、不明3点を数える。

楔形石器にはそのまま楔として用いるものと、石核として使用された結果となっているものの2者の用途が考えられているが[(4)]、残核もまた楔として利用されているようであり、両者の区別を明確にすることはできなかった。

スクレイパー

従来のⅠ・Ⅱ類に加えて、素材の3辺以上に調整を施すものをⅢ類とした。また、底辺の長い三角形を呈し、その底辺を刃部としているものをⅣ類とした。総数で157点出土している。

Ⅰ類は背部調整の有無でa・bに細分されているがいずれも不定形な剥片を素材としており、大きさや形態に明確な差を認めることはできなかったが、その背部には自然面を残すものが多い。

S340は「大形石包丁[(5)]」といわれるが単純に、刃部と背部のありようからⅠa類に含めた。また、

Ⅰb類には両端から剝離の進行しているものがあり、楔形石器とすべきものが含まれているかもしれない。

Ⅰa類は縄文時代晩期11点、弥生時代前期10点、弥生時代後期中葉～後葉1点、時期不明7点、Ⅰb類は縄文時代晩期5点、弥生時代前期12点、弥生時代中～後葉1点、時期不明11点出土している。いずれも比較的小さな剝片で、薄手のものが多い。

Ⅲ類は縄文時代晩期1点、弥生時代前期4点、時期不明1点出土している。

Ⅳ類は縄文時代晩期3点、弥生時代前期1点、時期不明6点出土している。縄文時代後期のS8もここに分類される。S57以外は全て刃部が外湾気味になっている。いずれも形態がよく似ており、刃部も比較的丁寧に作られており、Ⅰ～Ⅲ類が偶然得られた剝片を素材としているのに対し、意図的に製作されたのではないかと考えられる。S49は刃部付近が磨滅しており、打製石包丁と同様の機能をになっていた可能性も考えられる。

磨製石包丁

総数6点だが、用途不明のものにつくりかえられたS293・488、打製石包丁につくりかえられたS51を合わせると9点になる。いずれも欠損品で、形態による分類は行わなかった。石材は頁岩5点のほか砂岩、安山岩、粘板岩、緑色片岩各1点である。未製品は一切認められなかった。

打製石包丁

総数で10点出土している。磨製石包丁から作り替えられたS511が頁岩製であるのを除いて全てサヌカイト製である。完形品はなく、資料総数も少ないのでここでは分類は行わないが、S370以外は側縁にえぐりを有するものである。S516は背部にも手ずれと思われる磨滅が観察された。S6は特に刃部付近がよく磨滅しており、光沢を帯びていた。S511にはコーングロスらしき光沢が認められた。

磨製石斧

表では伐採用と加工用に分けているが、総数で14点出土している。

縄文時代晩期のうち完成品はS75のみで、小形の加工用と考えられる。ほか2点は基部しか残存していないが、弥生時代前期以降と比べて偏平な形をしている。

弥生時代前期以降のもののうち太型蛤刃石斧と考えられるのは6点出土している。安山岩、もしくは砂岩製であり、素材を選択していたようである。S342・434は刃部が面を成すほどつぶれており、頻繁な使用がうかがえる。S519は古墳時代前期中葉の井戸から出土しているが、敲石として利用されており、おそらく弥生時代のものを転用したのではないかと考えられる。S319・320はまだ研磨されていない未製品で、材質や形状から太型蛤刃石斧の未製品である可能性は高い。また、剝離面の大きさに対応するような安山岩の剝片も出土しており、集落内で製作を行っていたと考えられる。

S272・378は磨製の片刃石斧で、加工用石器であるが、S378は左側縁を再加工しているうえ線条痕が部分的に認められる。S294は方柱状に形を整えたうえに、一部研磨がなされており、柱状片刃石斧の未製品と考えられる。

打製石鍬

総数で23点出土している。時期不明の8点は全て第2微高地(西)から出土しているが、この微高地上は縄文時代晩期～弥生時代前期にかけての遺構密度が比較的高く、古墳時代以降の水田層を除去するとすぐ基盤層に達する地点で、縄文時代晩期から弥生時代前期のものである可能性が高い。サヌカイトを含めて安山岩製が最も多く15点を数え、流紋岩製が6点、頁岩、砂岩製が1点ずつある。

残存状況がよく、使用痕の観察できるものはS35・88・92・257・318・334・372で、磨滅範囲をスクリーントーンもしくは実線で示している。S92・257・334・372は特によく磨滅しており、線条痕も観察される。しかし個々の磨滅の度合に差はあるもののこれら7点は、この両面が同程度に磨滅しているのではなく、磨滅範囲および程度に差があるという特徴が認められる。このことは平井氏が指摘しているように、柄が鍬のように着装され、斜めに土中に打ち込まれたのではないかという使用状況を裏付けるものである。また、石鍬の縦断面をみると、片面は素材面を生かした突面であるが、もう片面は基部近くに剥離による平坦面を有しており、磨滅および線条痕は、突面側で発達している。

磨耗有剥片

広義のスクレイパーのうち、その表面が著しく磨耗(磨滅)しているものを仮称している。総数12点出土している。幅4～6㎝、長さ2.5～5㎝、厚さ6㎜前後の小さく薄いもので、U字形の刃部を有している。いずれも非常によく磨耗しており、S30・41・291・432では線条痕も認められるなど打製石鍬とよく似た使用状況が想定でき、高橋護氏からはカラスキの先端に着装したのではないかという指摘をうけた。

石錘

総数7点出土している。Ⅰa類4点、Ⅱa類1点、Ⅲa類1点、出土している。縄文時代晩期は2点ともⅠa類である。弥生時代前期は3点とも溝4から出土しているが、Ⅰa類、Ⅱa類、Ⅲa類が各1点出土している。

玉作り関連資料

緑色凝灰岩製およおびメノウ製の製品は竪穴住居2から出土したもののみである。

緑色凝灰岩製のものは管玉未製品2点、板状の剥片7点、研磨痕のある剥片5点が出土している。擦切り溝を有するものは皆無で、長瀬高浜遺跡[6]と同じく、原石→荒割→形割→穿孔→研磨といった工程で製作されたと考えられる。だが、S160や161をさらに分割してS155程度の大きさにしてから研磨を始めたのか、そのまま直に研磨に入ったのかは分からない。

メノウ製で、製品と考えられるのはS165～169の米粒状のもので、大阪府八雲遺跡で「石ノミ」や「尖頭器[7]」、京都府奈具岡遺跡で「小形錐状石器[8]」とされているものに類例を求めることができる。ただし、両遺跡で出土している針状の製品は出土していない。これは玉の穿孔具として位置付けられているが、共通した管玉製作技術を有する長瀬高浜遺跡でも同様のものが出土しており、またS164のような縦長の剥片が認められることから、竪穴住居2においても使用していた可能性が考えられる[9]。

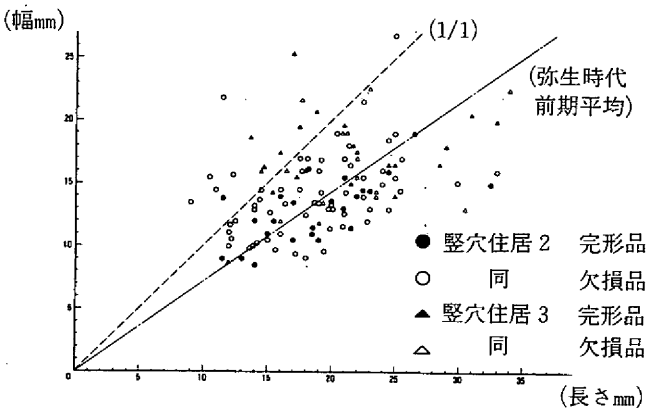
竪穴住居2からは砥石が2点出土しているが、幅1㎝前後の溝状の使用痕を残しており、玉の研磨に使われていたと考えられる。この2点以外に、第2低位部の包含層中から同じ様な研磨溝を有する

砥石S335が出土しており、これもまた玉の研磨に使われた可能性が高い。

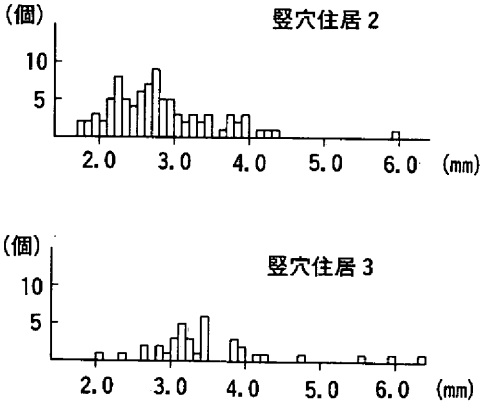
2．竪穴住居2について

今回報告された弥生時代前期に属する竪穴住居は4軒である。その中で竪穴住居4[10]を除く3軒の竪穴住居内からは量の差こそあれ、石製品に混じってサヌカイトのチップやフレイクが出土している。また、岡山市百間川沢田遺跡で検出された各竪穴住居[11]からもそれぞれ石製品やチップ・フレイクが出土しており、弥生時代前期においては各々の竪穴住居内で石器の製作を行っていたと考えられる。しかし具体的に竪穴住居内の石製品の検討をすることなく漠然と考えられているだけなので、今回、竪穴住居2および3からは大量の石製品が出土しており、この両竪穴住居出土資料を比較することでこの点について若干の考察を加えてみたい。

竪穴住居2および3から出土した石製品のうちで、その形態を比較できうる資料は、ある程度の数量が出土している石鏃しかない。竪穴住居2からは91点、竪穴住居3からは36点出土している。平面形態で分類すると、竪穴住居2からはⅠa類12点、Ⅰb類2点、Ⅱa類15点、Ⅱb類23点、Ⅱc類2点、Ⅲ類2点、Ⅴb類2点、Ⅶb類9点、竪穴住居3からはⅠa類19点、Ⅱa類7点、Ⅱb類2点、Ⅴa類2点、Ⅶa類2点出土している。基部の形状のみで大別すると竪穴住居2では平基式13.2%、凹基式62.7%、竪穴住居3では平基式58.4%、凹基式30.6%と逆転している。また、平均値で見た大



グラフ1 出土石鏃長幅比



グラフ2 出土石鏃厚み分布図

きさにも差が認められる(表1)。グラフ1は長幅比を示したもの、グラフ2は厚み[12]を計測したものである。グラフ1でいえば長さ2cm以下、グラフ2では厚さ3.5mm以下にあたる小形の一群に特に差が顕著に現れている。このことから、一方の竪穴住居で製作された石鏃が一方へ配付されたものではなく、個々に製作されたものであり、集落内の各々の竪穴住居内で製作がおこなわれていたことの傍証となろう。

しかし、竪穴住居2からサヌカイトが総重量約3.7kg出土したのに対し、次に出土量の多い竪穴住居3でも800g足らずしか出土しておらず、歴然とした差がある。この差は遺構の残存状況や調査精度の差だけでは説明しきれないほど大きい。石鏃については個々の竪穴住居内で製作されていることがいえるが、今回検証できなかった石製品などを特定の竪穴住居で他に供給する分まで製作した可能性までは否定できない。例えば石鏃のような日常的な消耗品[13]で、特殊な技術を要しないようなものに

ついては各住居で製作し、熟練した技術を要したり、また非日常的な性格を付加されたようなもの[14]については特定の場所で製作されたものたも考えられるのである。こう考えれるならば、竪穴住居2は当集落における石器製作の中心的存在と位置付けられ、集落内分業のひとつのあり方を示唆するものと捉えられる。

どのような遺物についてもそうであるが、製作者の特定や製品の移動を考えるには、その製作技術や手法に至る詳細な検討が必要になってくる。しかし、ここでは比較しうるだけの数が出土していないうえ筆者の力量不足に負う面が大きいのであるが、十分な検討を加えることができなかった。今回は竪穴住居2および3から出土した石鏃の違いから、各竪穴住居で石製品の製作が行われていたことを立証するにとどめ、今後の課題としたい。　（久保）

註

(1)　任意に抽出した2点について、白石紙氏に蛍光X線による産地同定を依頼したところ、香川県金山産であるという報告をうけた。

出　土　地　点	時　　期	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MgO	CaO	K_2O	Sr	Rb
河道2　第93図41層以下砂礫層内	縄文時代晩期	59.29	0.52	17.92	5.71	1.28	4.55	2.75	317	95
竪穴住居2　中央穴内	弥生時代前期前葉～中葉	58.70	0.51	16.63	5.57	1.25	4.49	2.68	322	107

南溝手遺跡出土サヌカイト製石器の分析結果（%）

(2)　「菅生小学校裏山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81　岡山県教育委員会　1993年

(3)　松木武彦「弥生時代の石製武器の発達と地域性－とくに打製石鏃について－」『考古学研究』第35巻第4号　1989年

(4)　(2)と同じ

(5)　平井勝『考古学ライブラリー64　弥生時代の石器』　ニューサイエンス社　1991年

(6)　『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅴ・Ⅵ』　鳥取県教育文化財団　1983年

(7)　『八雲遺跡発掘調査概要Ⅰ』　大阪府教育委員会　1987年

(8)　「奈具岡遺跡」『京都府遺跡調査概報』第55冊　㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター　1993年

(9)　田代弘氏に有益なご教示をいただいた。

(10)　土器小片が2・3片出土したのみで、サヌカイト片も出土していない。通常の竪穴住居と比べて規模も極端に小さく、また中央穴にも土堤を有するなど特殊な遺構と考えられる。

(11)　「百間川沢田遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59　岡山県教育委員会　1985年
「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84　岡山県教育委員会　1993年

(12)　石鏃の分析をするとき、長幅比や重量は完形品にのみ有効な手段であり、今回のように欠損品が多い場合は有効なデータを得るには不適当である。そこで、大きな石鏃を作ろうとすればそれなりに大きく、厚みのある剝片を必要とするであろうと考え、数値を計ってみた。もちろん薄くても大きな石鏃は作れるし、同じ厚みの剝片からでもその後の調整の具合で最終的な厚みは変わっていくが、ある程度は剝片の大きさに比例するものと考えている。

(13)　百間川沢田遺跡高縄手A地区竪穴住居6および7では同じタイプの石鏃が出土しており、石鏃の中でも一部については特定の場所で作られたものが配布された可能性がある。

(14)　管玉も特殊な技術を要し、また特別な性格を帯びた遺物のひとつである。

第７節　弥生時代および古墳時代前期の水田について

今回報告した弥生時代前期から古墳時代前期前葉の水田について紙幅の関係で詳しく述べられなかった点を中心にまとめを行いたい。

弥生時代前期～後期の水田１～７については、発掘調査後のプラント・オパール分析の結果をおもな根拠として想定した水田である。このため調査中においては水田層としての可能性は考えたものの、意識的な調査は不十分であり、面的な調査は部分的にしか実施できていない。特に、異なった調査区間における土層の対応関係については、十分には検討できていない。

土壌分析の結果イネのプラント・オパールが検出されたのは、ＥＮ区、ＫＹ２区、Ｈ16区、Ｈ17区の各土層である(付載５・６参照)。

水田１としたのは第３低位部(北)に位置するＥＮ区の谷状部分に堆積した弥生時代前期と考えられる土層で、第277図の21層に相当する。出土遺物および土色から弥生時代前期と考えられるのは、20、21、22、23層であり、イネのプラント・オパールは１ｇあたり20層から2600個、21層から4100個、22層から1700個、23層から700個という計数値が報告されている。この数値をどう理解するかという点については、4000個以上であれば水田層の可能性が高いという考え方に基づいて９層を水田層と考えた。

しかしながら問題点として、21層以外の20、22、23層についても比較的多くのプラント・オパールが検出されており、サンプリングなどの問題を考えれば、水田層ではないと言い切れないであろう。また逆にこれらの土層は低位部に堆積した土層で全くの水平堆積とは言い切れないため、検出されたプラント・オパールが周辺からの混入の可能性が考えられる。そう考えるならばこれらの土層は水田耕作土層ではないことになる。

今回の報告ではこうした問題点を含んではいるが21層を弥生時代前期の水田層とした。時期については20～23層の分層発掘はできなかったが、20～23層全体を掘り下げ中に弥生時代前期の土器(小片のため細かな時期ははっきりしないが、前期前葉～中葉の可能性が高い)が出土していること、およびこの上層の18層はＩＮ区との土層の対応関係から弥生時代中期前葉には堆積したものと考えられることなどから、弥生時代前期と判断している。

水田２～７は弥生時代中期～後期の水田である(第３章第５節(7)水田参照)。

水田２としたのはＨ16・17区で検出された土層で、第451図の24層が相当する。土壌分析の結果、イネのプラント・オパールは１ｇあたりの計数値で700個と少ないが、上下の土層からイネのプラント・オパールが全く検出されなかったことから水田層と考えた。畦畔は確認できていない。水田層の時期や広がりについてはすでに述べたとおりであるが、時期は弥生時代前期後半から中期前半で、第４低位部の肩部に沿った狭い範囲に存在していたと考えている。

水田３としたのはＨ16・17区で検出された土層で、第451図の21層が相当する。土壌分析の結果イネのプラント・オパールが１ｇあたりの計数値として4000個されたため水田層と考えた。畦畔は確認できなかった。この水田層については平面的な広がりや他の調査区の土層との対応関係は不明である。時期は弥生時代中期前半から後期前半頃としか言えない。

水田４～７については、ＥＮ区の第３低位部で実施した土壌分析の結果を基準として設定した。イネのプラント・オパールは１ｇあたりの計数値として第277図の16層から5000個、14層から4000個、13層か

ら11700個、４層から15100個検出されており、16層を水田４、14層を水田５、13層を水田６、４層を水田７として報告した。そしてＥＮ区以外の調査区については、後に述べる水田７の上層に堆積している水田８層を手がかりとして、土層の対応関係を考えていった。しかしながら，各調査区によって土色や土質が必ずしも一致しておらず、また厚さも様々であったため、確実な対応関係はつかめなかった。

水田４については、ＥＮ区以外の土層との対応関係がつかめなかったため、ＥＮ区の第３低位部周辺にのみ存在していた可能性もあるが、明確にはできなかった。時期は弥生時代中期から後期前半の幅でしか捉えられなかった。

水田５については、ＥＮ区以外の土層との対比から第450図に示したような水田の範囲を想定した。時期は弥生時代中期後半から後期前半と考えた。

水田６については、ＥＮ区以外では同じＣ地区のＦＵ区の第452図７層やＡ地区の第249図16層が対応すると考えられるが、広がりについては明らかにできなかった。時期は水田５より新しく、水田７より古いが、弥生時代中期後半から後期の幅でしか捉えられなかった。

水田７については、すでに前章で述べたように、Ａ～Ｄ地区のすべてに広がっていた可能性を考えた。時期は弥生時代後期後葉頃と考えられ、この時期に本格的な水田域の増大が計られたものと考えられる。このことは、今回報告する調査区において後期前葉より新しい遺構が水田以外にはほとんど検出されなかったことからも想定できよう。

以上水田２～８について述べてきたが、すでに述べたようにこれらはおもに土壌のプラント・オパール分析の結果に基づいて想定した水田であるため、サンプリングの仕方や上層からの混入といった問題を考慮に入れれば、これらすべてが水田層であるとは断定できないかも知れない。しかしながら本報告書ではあえてこれらすべてを水田層としてとらえ、考え得る範囲や時期について考察を行ったものである。

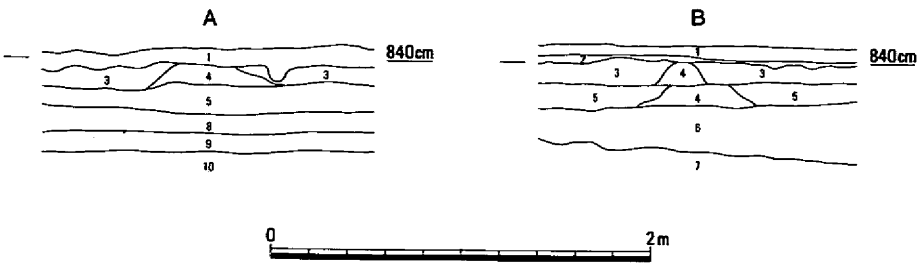
水田８については発掘調査時において水田層であるとの認識で面的な調査を行った。水田８とした土層は黒灰色(調査区によって色調は若干異なっている)粘土層の下に堆積している淡灰色～灰白色粘土層で、厚さは調査区によって異なっているが約10～15cm前後であった。

水田８の土層が確認できたのは、前章でのべたＡ～Ｄの４地区で、面積はＡ地区が約2200㎡、Ｂ地区が約2340㎡、Ｃ地区が約1880㎡、Ｄ地区が約2560㎡で、総面積は約8980㎡である。

畦畔については、この水田層の直上まで掘り下げると黒っぽい土層面に帯状に白い筋が確認できたため、これを畦畔と認識した(図版28－３)。この畦畔は、断面で確認しても、高さ１～２cmの低いものが多く、幅についても明確ではないが30～40cmのものが多かった。また、この畦畔はすべての調査区において確認できてはいない。畦畔の確認できていない調査区については、本来畦畔がなかったのではなく、検出が困難であったためで、おそらくＡ～Ｄ地区の水田はすべてこの畦畔によって小さく区画されていたものと考えられる。

検出できた畦畔で区画された水田は、図示したように矩形を呈している。また畦畔の方向については統一性はみられず、それぞれの地形に規制されたものと考えられる。このように小さく区画された水田の面積は、計測できたものでは約18～50㎡という幅があるが、30～50㎡前後のものが多い。

ところで、水田上面で検出できた畦畔とは別にＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄの各地区では水田層を約５cm掘り下げた面で、部分的に鉄分(マンガンも少量含む)が沈着・集積した幅30～50cmの帯状の筋が確認できた[1]。またＩＮ・Ｈ17区などでは、水田８の土層を除去した面においてもこの鉄分の沈着した帯状の筋を確



1．黒灰色粘土
2．暗灰色粘土
3．淡灰色粘土（水田８）
4．鉄分が多く沈着した部分
5．淡黄灰色粘土（水田７）
6．暗灰褐色粘土（弥生前期）
7．黄色砂質土（基盤層）
8．橙褐色粘質土（弥生中期）
9．橙灰褐色粘質土（弥生前期）
10．黒褐色粘質土（弥生前期）

第576図　Ｂ地区水田８層（ＩＮ区）断面図（1/40）

認することができた(第504～507図のスクリーントーン部分)。この帯状の筋はあたかも小区画水田の畦畔のようにつながっていた。また、ＴＤ１・２区、Ｈ10区・Ｈ17区では水田層上面で検出した畦畔とこの鉄分の沈着した筋とが一致する部分が多かったが、すべてが完全に一致している訳ではなく、ずれている部分もある。

この鉄分の沈着した部分は、断面では明確ではなく、また水田層との関係もすべてが同一の状況を示してはいなかった。第503図はＡ地区において畦畔との関係が明らかになった例であり、水田８の畦畔の下に凸状に認められた。その他にＩＮ区で確認できた第576図Ａでは水田８層中に、また第576図Ｂでは水田８層とその下層の水田層(水田７)の両方にわずかにずれて沈着していた。

なぜこのような鉄分の沈着が起きるのかについては、はっきりしないが、畦畔の部分が空気に触れる度合いが他と比べて高いため、土中の鉄分が酸化して、畦畔の下に沈着した可能性を考えてみたい[(2)]。したがって、第503図や第576図Ａでみられるような断面を示す鉄分の沈着した帯状の筋については、水田８の畦畔の位置を示すと考えられる。しかしながら水田８層を除去したのちに検出できた鉄分のこうした筋については、第503図の場合であれば水田８の畦畔の位置を示すと考えられるが、第576図Ｂの場合であれば一時期古い水田７の畦畔の位置を示す可能性が高い。

すでに述べたように、この鉄分の筋については水田８の上面で検出できた畦畔とずれる部分があることから、第504～507図に示した鉄分の筋についは水田８とそれより古い水田７の畦畔を示すものが混在している可能性が考えられる。しかしながら発掘調査段階では十分に区別できておらず詳細は不明とせざるを得ない。

この水田８に伴う用・排水路については溝59～61を想定した。これらは水田８の肩に沿って検出されていることをおもな根拠としている。また溝58についても水田８に伴う用・排水路の可能性が考えられるが、明確ではない。

水田８の時期については、以下にのべるような状況証拠から考えた。その第１は、各調査区においてこの水田層の上層に堆積している黒灰色粘土層中から５世紀後半～７世紀前半の須恵器が出土していることから、それより以前であることは明らかである。第２に、Ｂ地区のＫＹ２区では水田８の下の層から土器が50片あまり出土しており、これらは弥生時代後期末葉以前の土器ばかりであった(第454図)。第３にこの水田層の上面からは、点数は少ないが古墳時代前期前葉の土器片が出土している(第509図)。この土器片はある特定の土層に包含されているような出土状況ではなく、新しい時期の混入の可能性もあり、時期決定の直接的な証拠とはなりえない。しかしながら、部分的にではあるが黒灰色粘土層と水田層の間にうすく土層が１層確認できており、この層が古墳時代前期前葉の堆積層の可能性も考えられ、廃棄の時期を示すものと考えることができる。第４に水田８の用・排水路と考

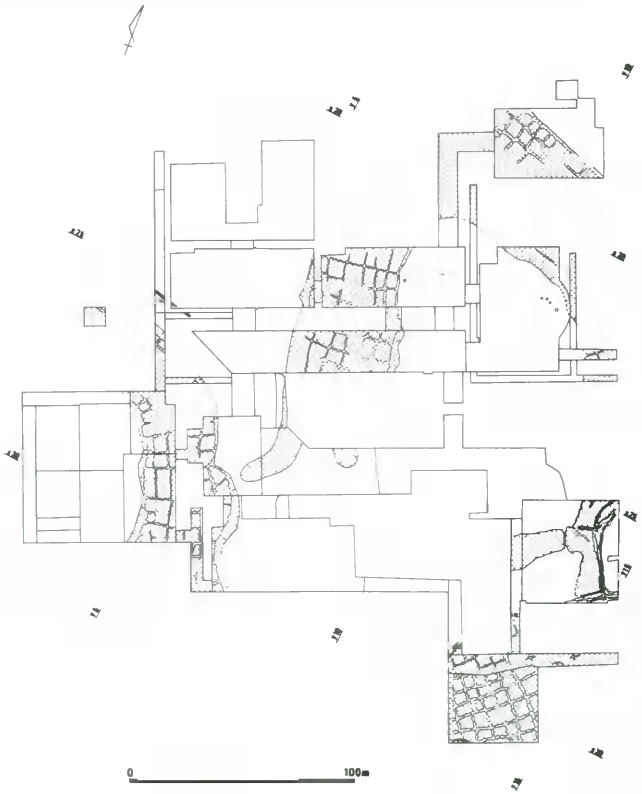
えられる溝61の埋土中から古墳時代前期前葉の土器が出土しており。須恵器を含む黒灰色粘土層はこの埋土の上に堆積していた。これらのことから水田８の時期については、弥生時代後期末葉以降に造田され古墳時代前期前葉には廃棄されたものと考えておきたい。

以上述べてきたように、今回報告する水田１から水田８については不確定要素が多いが、今後報告する予定の他の調査区で検出されている水田の状況を含めてさらに検討を加えていきたい。（平井）

註

(1)　こうした鉄分の沈着した帯状の筋についての理解にあたっては下記の文献を参考にした。
矢田　勝　「第五節　土壌層位と堆積層位―水のいたずら―」『研究紀要Ⅵ　水田跡調査の方法と研究』財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994年

(2)　しかしながら、岡山市の百間川遺跡群では、水田耕作土層の下面には鉄・マンガンの集積層がみられるが、畦畔部分には認められない場合が多い。



第577図　水田８全体図（1/2500）

第８節　「馬養」線刻土器について

今回の調査で、ＴＤ１区の古代の水田畦畔(水田９)から「馬養」の文字が線刻された須恵器の壺(2021)が牛歯とともに出土した[1]。県下では、これまで古墳時代から平安時代の土器・土製品に文字が線刻された資料は管見による限り９遺跡14例[2]に過ぎず、本例は新資料を追加したことになる。以下、これについて若干補足したい。

(1)　器形の特徴（第564図）

須恵器の壺である。頸部より上および体部の約1/3を欠き、現存で器高23.5㎝を測る。最大胴部23㎝、底部径は13㎝である。やや肉厚の器壁を持ち、肩部にヘラ描き沈線を２段に施している。耳部は段違いに２ケ所残存しており、その配置を考えあわせ三耳に復元できそうである。また、ややいびつな半円形をなす耳部には、円形の孔が穿かれているが、紐ずれなどの痕跡は認められない。内面はスリ消しが施され、部分的に当て具痕跡が観察できる。これに類似する器形は県内には報告例はなく、三耳壺としては二子御堂奥古窯址群出土の三耳水瓶[3]があるのみである。このため詳細な時期の検討はここでは避けるが、肩部の張り具合、耳部の形態などから大きく平安時代前半のなかにおさまるものと理解したい。なお、水田層共伴遺物、層位関係からみてもこの考えを妨げないものと思われる。

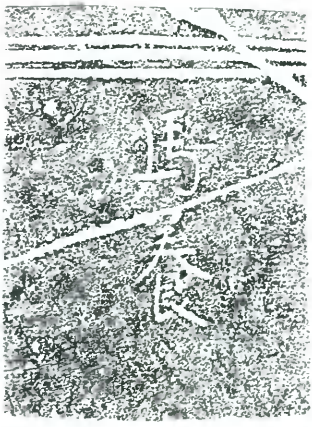
(2)　文字の特徴

第578図に文字の拓影と筆跡の切り合いを示した。筆幅からおおよそ幅１㎜のヘラ先を使用したものと思われる。筆順については、まず「馬」の文字は、横三筆が中央の縦より先行し、縦とよつてんの囲いが一筆で、また、よつてんが１筆で書かれている。「養」は、羊の部首を二点の後、横三筆に続いて、「人」の字を書く。このように現在の当用漢字とは、やや異なってはいるが、その筆遣いはかなりの熟練度を感じさせる。なお、「馬」の文字は、他の毎戸遺跡出土の土師器[4]にもみられるが、この例はやや稚拙な筆跡であり、本例とは異なった書体である。

(3)　県内の線刻文字資料

古墳時代から平安時代までの線刻文字資料を表１に示した。この中には、地名もしくはそれに関係すると推定される「大久」、「勝」、「郡」等の文字も見られる。

これら土器に線刻された文字は、墨書土器と異なり、製作段階に線刻されたものである。そのため製作時において何らかの要因によりその必要があったものと考えられる。言い換えれば、専門的な使用目的があったものと推測可能であろう。また、陶工自身の手によるものかどうかは不明であ



第578図　「馬養」拓影（原寸）

るが、いずれにしても製作段階における文字を知る人間の介入が確実である。特に、本例の「馬養」の文字は先に見たようにその優れた筆致から、模写・模倣ではなく書に十分に習熟した人間を想像させる。

第９表　岡山県下における文字線刻土器一覧

	遺跡名	所在地	文字	器種	遺構	時期
1	岡城が端古墳	勝田郡奈義町	「取」	須恵器・杯身天井部内面	横穴式石室	６Ｃ末～７Ｃ初頭
2	伝和気郡和気町大田原字藤原の古墳		「大久」	須恵器・平瓶体部	詳細不明	７Ｃ末～８Ｃ初頭
3	毎戸遺跡	小田郡矢掛町	「馬」	土師器・杯底部外面	土壙	奈良時代前半
4	美作国府	津山市	「有」	須恵器・杯身	包含層	奈良～平安時代初頭
			「ろ」	須恵器・耳皿底部外面	〃	〃
5	平遺跡	勝田郡勝央町	「勝」	須恵器	〃	奈良～平安時代
			「郡」	須恵器・杯	〃	〃
			「嵯」	灰釉底部外面	〃	平安時代
6	荒神風呂遺跡	真庭郡落合町	「大」	須恵器・杯蓋天井部内面	〃	平安時代初頭
			「中」	須恵器・平瓶底部外面	〃	〃
			「大□」	須恵器・平瓶底部外面	〃	〃
7	広江・浜遺跡	倉敷市福田	「□」	緑釉？	〃	〃
			「億」	土錘	〃	〃
8	南溝手遺跡	総社市南溝手	「馬養」	須恵器・三耳壺	水田	平安時代

(4)「馬養」の意味

「馬養」の文字が指し示す意味の可能性には、次の三つが考えられる。第１の可能性は地名である。これについては、岡山県下には文献による例は見いだせない。第２に職名である。職名に関しては、『日本書記』に「馬飼部」「馬甘部」が見られる。また、『養老令廐牧令』によればこの後身の左右馬寮所管の「馬戸」などの記録がある。『延喜式』には「飼戸」の記述がみあたるが、いずれにしても、岡山県下にはこれらをおいたという記録は残っておらず、不明といわざるをえない。また、「馬養」と「養」の字を当てはめることもない。第３に人名の可能性が考えられる。県下には、天平11年の備中国大税負死亡人帳が史料として残されているが、これにはこの人名は見あたらない。ただし、全国的に見れば、表２に示すようにこの文字が人名として用いられた例を探すことが出来る。現時点では、人名の可能性が高いとのみする以外にないが、なお、人名と職名が結びつくことは十分に考えられることであり、その視点に立てば史料は残されていないものの、この地における職制の設置と牧の存在を暗示すると考えることはあながち不可能とは思われない。

第10表　「馬養」を人名に持つ例

	人名	国など	史料
1	馬養造人上	播磨国賀古郡	続日本紀
2	伊余部連馬養	丹後国主	日本書紀　持統３年
3	出雲臣馬養	山背国愛宕郡	寧楽遺文　神亀３年
4	刑部臣馬養	出雲国神門郡	寧楽遺文　天平11年
5	賀茂朝臣馬養	造東大寺司司人	寧楽遺文
6	上村主馬養	河内国大県郡	寧楽遺文
7	藤原朝臣馬養(宇合)		続日本紀　霊亀２年
8	船木直馬養	若狭守	続日本紀
9	六人部馬養	美濃国方県郡	寧楽遺文
10	八坂馬養造鯖買	山背国愛宕郡	寧楽遺文

(5)　出土状況の意味

報告の中で詳細な出土状況については触れているが、牛歯が共伴し、水田畦畔から出土したことの意味について考え、小結と替えたい。

これについては、「日本書記」の以下の記述が参考になると思われる。

「皇極天皇元年六月、大いに旱りす、七月群臣相い語りていわく、村々の祝部の教える所に随い、牛

馬を殺して諸社の神を祭る」。このように日照り、早魃の原因が神の怒りにあり、これを鎮めるために牛・馬を殺して祭りを行っていることがわかる。このような殺牛祀は、漢に出自し、漢神を巡るものと考えられており、この地に渡来系氏族の存在、もしくは影響を強く見ることが出来る。また、「類聚三代格」には、殺牛して漢神を祭ることを禁じた記述が見受けられ、このような祭祀が広く一般的に行われていたことがわかる。以上のことから、本例は特に水田畦畔中から出土したことと考え合わせ、日照り、早魃を避け、作物の豊饒の願いを込めた祭祀が執り行われたことを示すと考えるのが妥当と思われる。さらに、この畦畔は幅約1.5mと規模も大きく、方向も正方位を指向するものであり、土地境を示すような主要畦畔をなすものと推察される。このことから、大阪池島・福万寺遺跡[5]で見られたように、本例も条理水田の開発・再開発に伴う祭祀という評価も加えて示しておきたい。

ところで、今回の出土状況において特徴的なことは、歯以外の骨が見受けられないことであり、この出土地点において、実際に殺牛が行われたかは不明である。祭祀自体はこの水田以外の集落の中で行われ、その際使用した土器を破砕し、これとともに歯のみを埋納したとも考えられる。あるいはまた、先に見た「類聚三代格」の殺牛禁止の記述を考え合わせれば、この時期にはすでに殺牛祀漢神が形骸化し・変容した内容であり、殺牛自体は執り行われず、他の原因により死亡した牛の歯のみを捧げたとも理解可能であろう。

（大橋）

註

(1) 平成3年7月の報道機関への発表時点では、この獣歯を馬歯として認識し、そのようにこの土器と関連づけて公表した。その後、平成5年に正式に鑑定を依頼したところ、牛歯との結果を得た。出土から公表までに時間が無く確認を怠り、関係各位に多大なご迷惑をおかけしたことをこの場を借りてお詫びし、これを正式報告とする。

(2) 表に挙げた14例以外に「大仗」と刻まれた岡山県立博物館所蔵の平瓶や北房町谷尻遺跡出土のものがあるが、いずれも詳細が不明なものである。

「館蔵品目録1」岡山県立博物館　1980年

「谷尻遺跡赤茂地区」『北房町埋蔵文化財発掘調査報告』4　北房町教育委員会　1986年

(3) 「二子御堂奥古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2　岡山県教育委員会　1974年

(4) 表－1　3．文献

(5) 江浦洋「条里型水田面をめぐる諸問題」『池島・福万寺遺跡発掘調査概要』Ⅵ　財団法人大阪文化財センター　1992年

参考文献

水野正好「漢礼－道教的世界の受容」『歴史考古学を考える（中）宗教の諸相』有斐閣選書

坂本太郎　平野邦夫監修『日本古代氏族人名辞典』吉川弘文館　1990年

表1引用文献

1．『岡城が端古墳発掘調査報告』岡山県奈義町教育委員会　1984年

2．和気郡史刊行会『和気郡史　通史編』1981年

間壁葭子　「「大久」銘の平瓶と二・三の問題」『倉敷考古館研究集報』19　倉敷考古館　1986年

3．「毎戸遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』5　岡山県教育委員会　1974年

4．「美作国府遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』6　岡山県教育委員会　1973年

5．「平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8　岡山県教育委員会　1975年

6．「荒神風呂遺跡　荒神風呂古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』76　岡山県教育委員会　1990年

7．「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』14　倉敷考古館　1979年

8．本書

付載１　土器片附着の圧痕について

放送大学教授・京都大学名誉教授
渡　部　忠　世

岡山県古代文化財センターから鑑定を依頼された土器片附着の圧痕について、それがイネ籾のものであるか否かを検討した。その結果は下記の通りである。

記

(1)　結論から言って、この圧痕は栽培イネ（*Oryza sativa*）の穎（部分）のものと考えられる。穎とは普通に言うところの籾殻のことである。

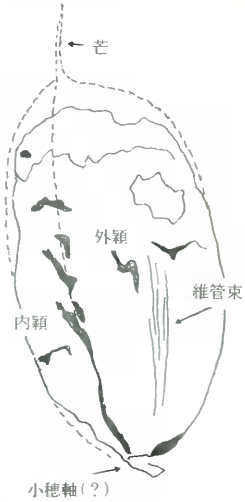
以下に、その理由を述べる。

(2)　文化財センターが撮影した光学顕微鏡による写真(1)は、次のような形態を示しているものと思われる。

略図を参照していただきたいが、写真は内・外穎の一部を示しているものである。先端部分および芒（があるとして）は欠損しており、また小穂軸のあたりも不鮮明で、護穎や毛茸などは明らかでない。内穎と外穎の境界と思われるところは陥没している。また、外穎のほぼ中央部には縦に維管束が走っているらしい跡がみえる。全面に円形突起（tubercle）が縦列している。

これを、栽培イネの穎の形態についての既往の研究（武岡，1976）と比較させてみると、一見して両者はよく類似していることが判明する。

(3)　しかし、上の円形突起に似た構造は、一部の野生イネの穎表面においても観察されている（Katayama, 1969）。従って、これを栽培イネと断定する前に、この部分のより微細な構造を走査電



写真(1)　光学顕微鏡による表面形態

子顕微鏡によって観察することも必要と考えたが、試料の作成に不安があって、これを取り止めた。念の為に言うと、電子顕微鏡による栽培イネの円形突起の微細構造については前田（1972）の報告が詳しい。

(4) そこで、この円形突起に焦点をあてて高倍率（×46）で光学顕微鏡写真を撮ってみた。そして、対照として現行の栽培品種である「コシヒカリ」、「亀ノ尾」（以上は水稲品種）、および「戦捷」（陸稲品種）の同一部分と同じ倍率で比較してみた。それらを写真(2)に示す。

これによると、それぞれが酷似していることが判るが、さらに写真上で突起の大きさを測定してみた。その結果を表(1)に示す。

	縦方向の長さ（μm）	横方向の長さ（μm）
水稲品種		
コシヒカリ	76.2±2.08	70.1±2.61
亀ノ尾	77.6±2.15	76.1±3.63
陸稲品種		
戦捷	76.8±2.27	72.0±2.53
土器圧痕	71.4±1.74	73.5±3.04

表(1) 外穎部分の円形突起の形状

これによってみると、土器圧痕に見られる円形突起は栽培イネのものと差がないと認めてよいであろう。

以上の諸結果は、土器圧痕が栽培イネのものであることをほぼ完全に証明するものと考えられた。

(5) ちなみに、この籾型から推定されるイネの生態型（亜種）のことについて考察を加えておきたい。

上述のように、一部が欠損しているために正確な籾長などを測定できない。しかし、写真(1)のところに示した模式図のように復元できるとして概略の値を示してみる。そして上掲の現行3品種の値と比較してみたのが表(2)である。

この結果は、土器圧痕の籾が、きわめてジャポニカの形質に近いことを示している。また、外穎幅が内穎幅よりもかなり大きいことも、この籾がジャポニカのものと類推させる証拠となる。

要するに、この圧痕の籾は生態型としてはジャポニカに最も近いと考えて間違いないであろう。

	籾長（mm）	籾幅（mm）	長／幅
水稲品種			
コシヒカリ	6.7	3.6	1.86
亀ノ尾	6.9	3.8	1.82
陸稲品種			
戦捷	7.6	3.8	2.00
土器圧痕	6.6～7.1	3.6～3.8	1.83～1.87

表(2)　籾外形の比較

引用文献

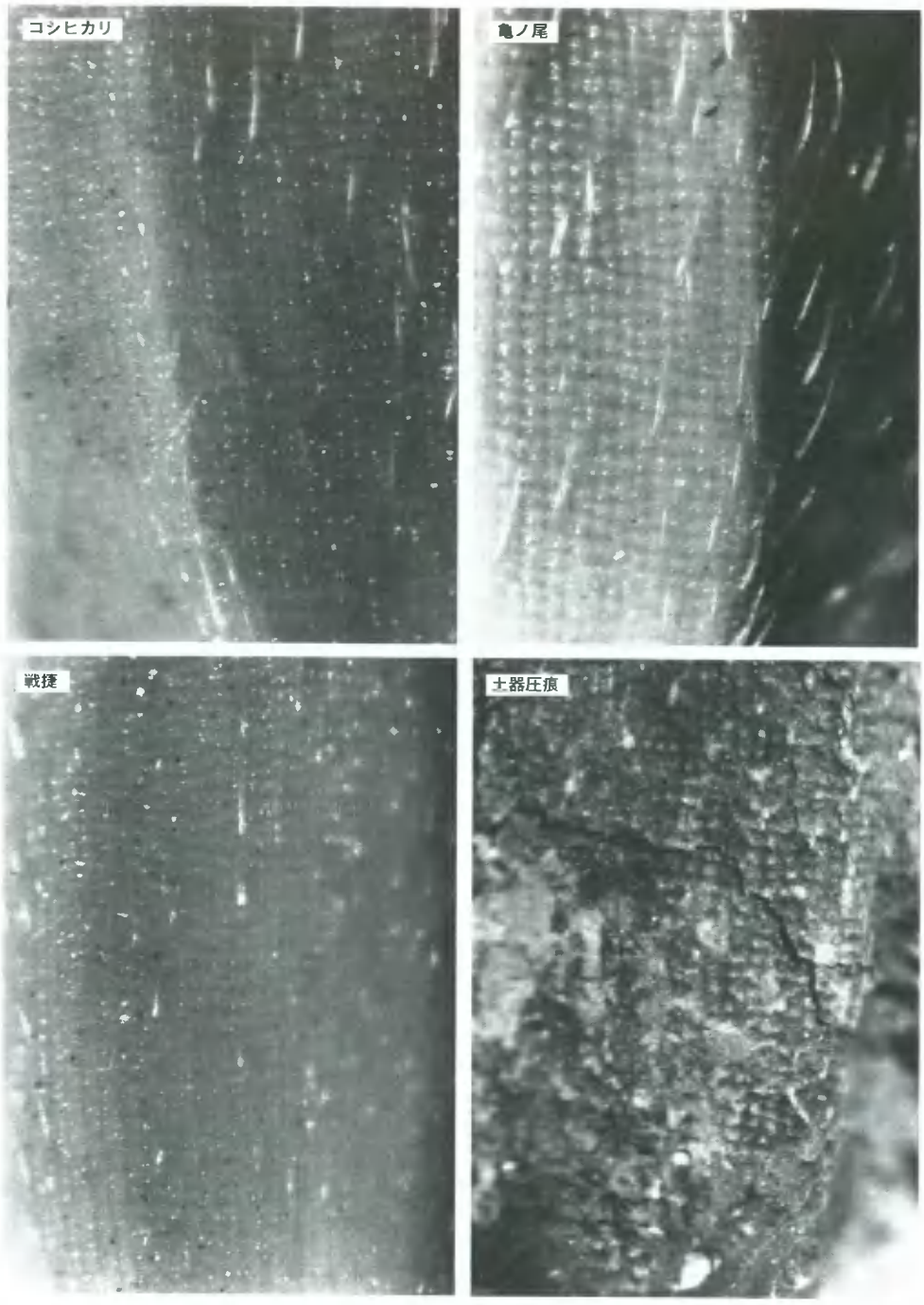
(1) Katayama,C.Tadao: Botanical Studies in the Genus Oryza I Morphological and Anatomical Investigations of Glume-and Leaf-Surfaces with the SUMP and Histological Method. Mem.Fac.Agr.,Kagoshima Univ.,Vol.Ⅶ, No1.1969

(2) 前田英三：走査顕微鏡によるイネ籾表面構造の観察．日作紀，Vol.41，No.4.1972

(3) 武岡洋治：日本型水稲における外穎の組織形成について．日作紀，Vol.45，No.4.1976

追記：写真の撮影については、武岡洋治氏（名古屋大学助教授）の協力をえた。

（1992年３月14日　記）



写真(2)　円形突起部分の比較（X46）

付載2　南溝手遺跡出土土器胎土のプラント・オパール分析結果について

宮崎大学　**藤　原　宏　志**

依頼されておりました南溝手遺跡出土土器胎土のプラント・オパール分析結果が出ましたので、下記のとおり御報告いたします。

記

岡山：南溝手遺跡出土土器胎土分析結果……別表

分析結果に関するコメント

1　試料番号1、2、5、および6の土器胎土からイネ（Oryza）のプラント・オパールが検出された。野生イネについては、現在、日本列島には存在せず、また、過去においても存在しなかったであろうとするのが定説である。

ここで検出されたプラント・オパールはいずれも量的に少なく、形状解析を行うことができない。したがって、検出されたイネについて、分析的に野生種と栽培種を判別することはできないが、野生種が存在しなかったとすれば、栽培にともなうものと判断するのが自然であろう。

2．試料番号2の土器胎土から、ジュズダマ（Coix）、モロコシ（Sorghum）およびキビ族（Paniceae）のプラント・オパールが検出された。ジュズダマの変種にハトムギがあり、キビ族の中にヒエ、キビなどが含まれることを考えるとモロコシ（タカキビ）とともに、何らかの畑作があったことを示唆するものと思われる。

岡山：南溝手遺跡出土土器胎土分析

試料番号	発掘区	検出プラント・オパール	土器の時期
1	H－15	イネ　ススキ	縄文時代後期後葉（福田KⅢ式）第28図**39**
2	H－16	イネ　タケ　ヨシ　ジュズダマ　モロコシ　キビ族	縄文時代後期後葉（福田KⅢ式）第30図**40**
3	H－15	ヨシ	縄文時代後期後葉（福田KⅢ式）第27図**36**
4	NC3	ヨシ　タケ	縄文時代後期中葉（彦崎KⅡ式）
5	NC3	イネ	縄文時代後期中葉（彦崎KⅡ式）
6	NC3	イネ　ヨシ　ススキ	縄文時代後期中葉（彦崎KⅡ式）

属（族）名　イネ：*Oryza*　タケ：*Bambusaceae*　ジュズダマ：*Coix*　ススキ：*Miscanthus*
キビ族：*Paniceae*　ヨシ：*Phragmites*　モロコシ：*Sorghum*

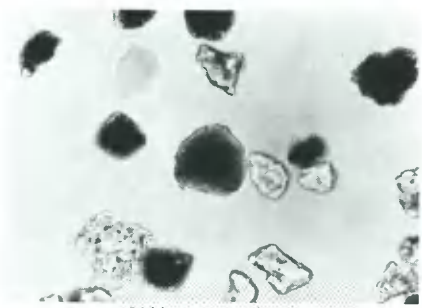
（編者註）なお、試料番号4～6の土器についての出土状況などについては第2分冊で報告予定である。

試料1　イ　　ネ

試料1　ス　ス　キ

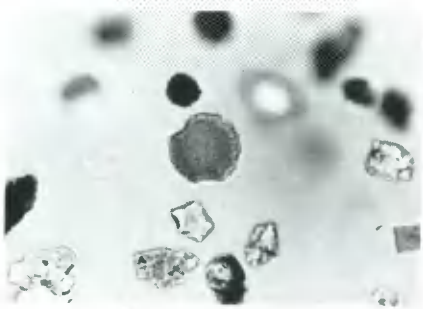
試料2　イ　　ネ

試料2　イ　　ネ



試料2　キ　ビ　族

試料2　モ　ロ　コ　シ

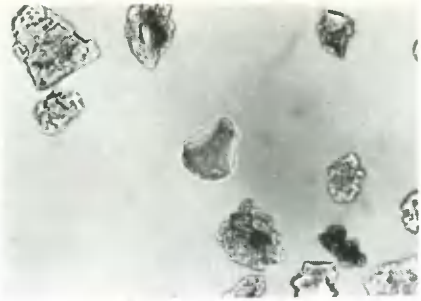


試料2　ジュズダマ

試料2　タ　　ケ

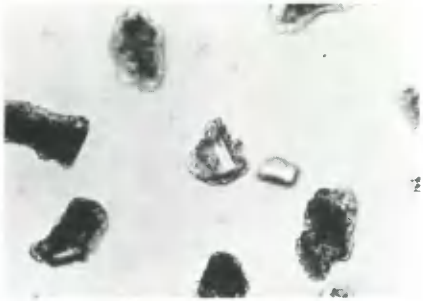
植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

試料3　ヨ　　シ

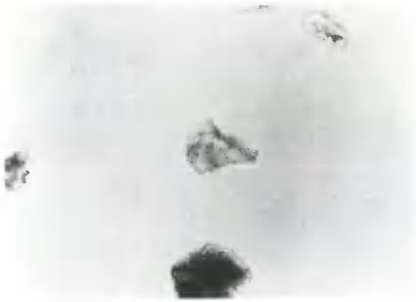


試料4　タ　　ケ

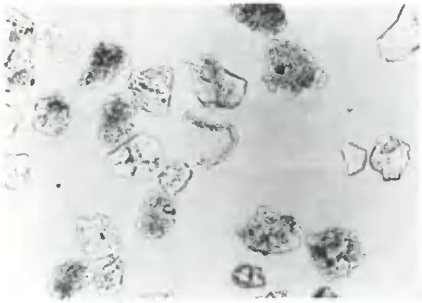
試料4　ヨ　　シ



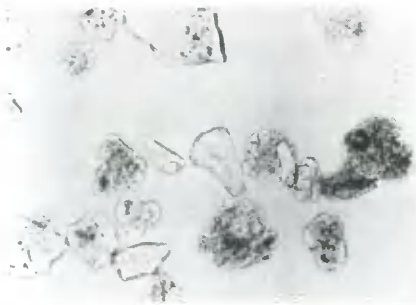
試料5　イ　　ネ



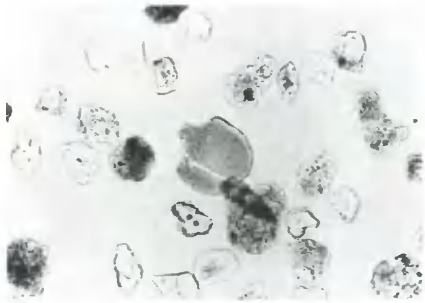
試料6　イ　　ネ



試料6　イ　　ネ



試料6　ス　ス　キ



試料6　ヨ　　シ

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

付載３　南溝手遺跡出土の玉材石片の産地分析

京都大学原子炉実験所　**藁科哲男、東村武信**

はじめに

遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉作り遺跡で加工されたかということを調査するのではなくて、何ケ所かあるヒスイまたは碧玉の原産地のうち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法[1]および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光Ｘ線分析で行う元素比法[2,3]が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析を系統的に行った研究では、蛍光Ｘ線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析をより正確に行った例[4]が報告されている。石鏃などの石器と玉類の製品はそれぞれの使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしも必要なものではない。勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った玉材石片は岡山県総社市南溝手遺跡の弥生時代前期前半の竪穴住居２（ＤＥ区－No55）出土の約15個の石片から大きな石片２個を選んで分析をおこなった。これら合計２個の遺物の分析結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組合せ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している非破壊で分析を行なう蛍光Ｘ線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光Ｘ線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地

を区別する指紋とした。碧玉製玉類はＥＳＲ法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。

碧玉原石の蛍光Ｘ線分析

碧玉の蛍光Ｘ線スペクトルの例として花仙山産原石を図１に示す。猿八、玉谷産の原石から検出される蛍光Ｘ線ピークも異同はあるものの図１でしめされるピークは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si 、K/Si 、Ca/K 、Ti/K 、K/Fe 、Rb/Fe 、Fe/Zr 、Rb/Zr 、Sr/Zr 、Y/Zr である。Mn/Fe 、Ti/Fe 、Nb/Zr の元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba 、La 、Ce のピークの高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いる。

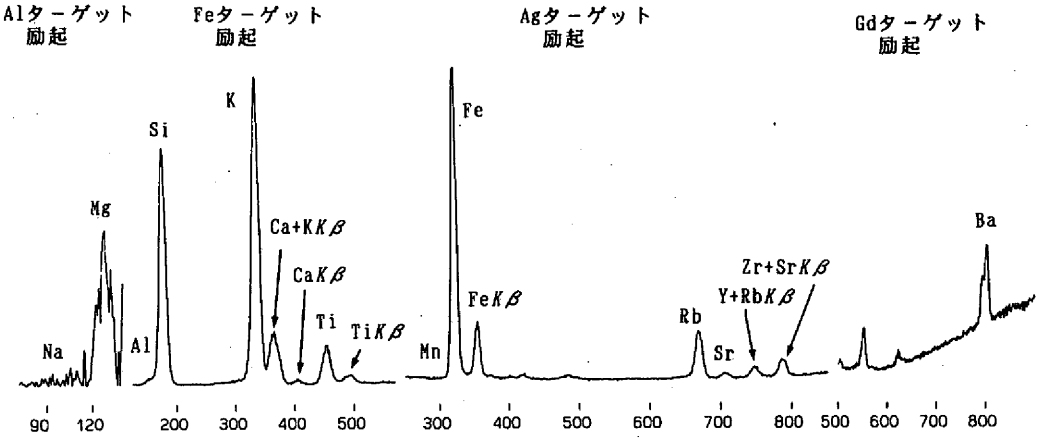


図１　花仙山産碧玉原石の蛍光Ｘ線スペクトル

碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉原石の原産地を図２に示す。猿八原産地は、(1)新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、産出する原石は、地元で青玉とよばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何ケ所か見られ、分析した原石は猿八の各地点から表採したものおよび地元で提供された原石などで、提供されたものの中には露頭から得られたものがありグリーンタフ層の間に約７cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6～2.5の間のものは31個、2.5～2.4の間は５個の合計36個で、この中には、茶色の碧玉も２個含まれている。原石の比重が2.6～2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶系色と緑系色の縞があるなど、多少色の違いがあっても組成上には反映されていない。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は(2)島根県八束郡玉湯町玉造温泉地域である。産出する原石は濃緑色から緑色の緻密で、剥離面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も

見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619～2.600の間のものは10個、2.599～2.500は18個、2.499～2.400は７個、2.399～2.300は11個、2.299～2.200は11個、2.199～2.104は３個の合計60個である。比重から考えると碧玉からグリーンタフまでの領域が分析されている。花仙山産原石は色の違い、比重の違いによる組成の差はみられなかった。玉谷原産地は、(3)兵庫県豊岡市辻、日高町玉谷地域で産出する碧玉の色、石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものもみられ、これは佐渡猿八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡猿八産原石より優れた感じのものもみられる。この様な良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した原石は、比重が2.644～2.600は23個、2.599～2.589は４個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷、石井、アンラクなどで採取できる。二俣原産地は(4)石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した４個の原石の中で３個は、同一塊から３分割したもので、１個は別の塊からのもので、前者の３個の比重は、2.42で後者は2.34である。元素組成は他の産地の組成と異なり区別できる。この４個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は(5)、富山県婦負郡細入村割山定座岩地区のグリーンタフの岩脈に団塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が非常に軽く、分析した８個は2.25～2.12で、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は(6)、愛知県土岐市地域で、赤色、黄色、緑色などが混

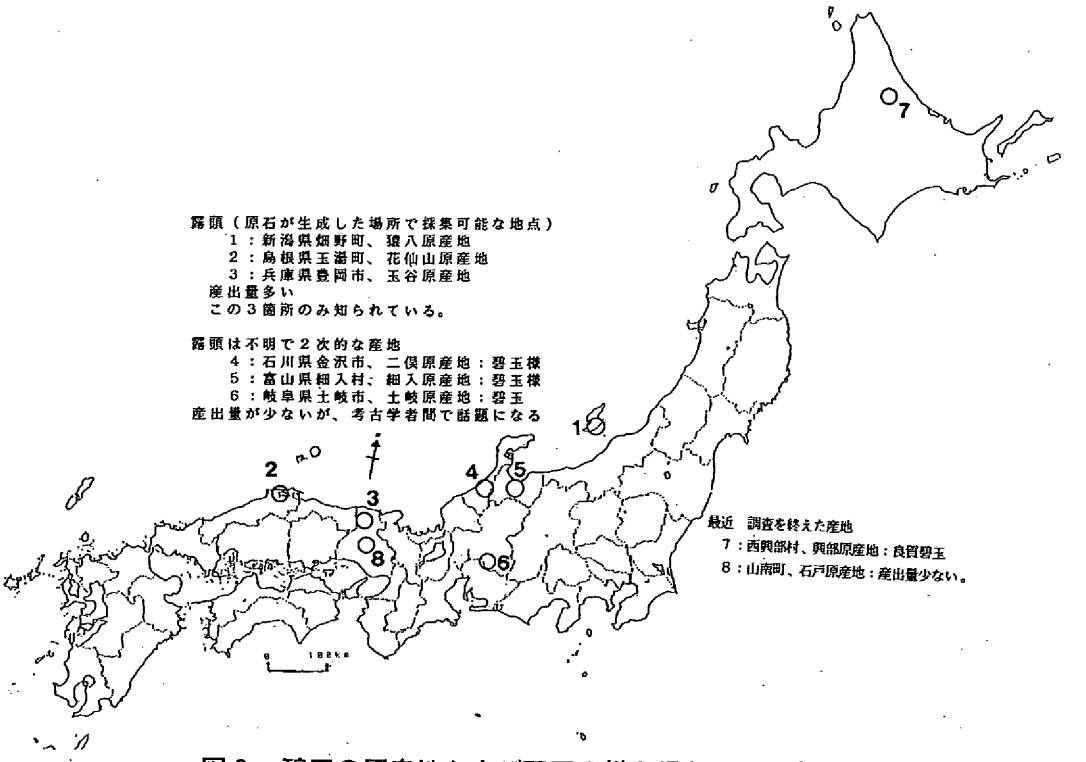


図２　碧玉の原産地および碧玉の様な緑色の石の産地

じり合った原石が産出し、このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62～2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。ここの原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地(7)北海道紋別郡西興部村の碧玉原石には鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地は(8)、兵庫県氷上郡山南町地区の安山岩

原石群名	分析個数	Al／Si $\overline{\chi}\pm\sigma$	K／Si $\overline{\chi}\pm\sigma$	Ca／K $\overline{\chi}\pm\sigma$	Ti／K $\overline{\chi}\pm\sigma$	K／Fe $\overline{\chi}\pm\sigma$
興部	31	0.011±0.003	0.580±0.320	0.123±0.137	0.061±0.049	0.022±0.006
猿八	36	0.046±0.007	3.691±0.548	0.049±0.038	0.058±0.011	0.370±0.205
土岐	11	0.010±0.001	0.404±0.229	0.090±0.074	0.057±0.035	0.027±0.007
玉谷	27	0.025±0.009	0.625±0.297	0.110±0.052	0.476±0.104	0.045±0.014
花仙山1	27	0.019±0.004	0.909±0.437	0.171±0.108	0.222±0.098	0.059±0.019
花仙山2	33	0.023±0.003	1.178±0.324	0.157±0.180	0.229±0.139	0.055±0.015
細入	8	0.019±0.003	0.534±0.284	0.991±0.386	0.372±0.125	0.031±0.008
二俣	4	0.043±0.001	2.644±0.183	0.337±0.079	0.158±0.009	0.312±0.069
石戸	4	0.019±0.004	0.601±0.196	0.075±0.022	0.086±0.038	0.154±0.072
女代南遺物群	68	0.045±0.016	3.115±0.445	0.042±0.024	0.107±0.036	0.283±0.099

原石群名	分析個数	Rb／Fe $\overline{\chi}\pm\sigma$	Fe／Zr $\overline{\chi}\pm\sigma$	Rb／Zr $\overline{\chi}\pm\sigma$	Sr／Zr $\overline{\chi}\pm\sigma$	Y／Zr $\overline{\chi}\pm\sigma$
興部	31	0.070±0.021	174.08±124.9	16.990±13.44	0.668±0.435	1.801±1.434
猿八	36	0.384±0.153	1.860±1.070	0.590±0.185	0.139±0.127	0.165±0.138
土岐	11	0.091±0.029	47.540±31.76	4.074±2.784	0.271±0.323	0.269±0.265
玉谷	27	0.151±0.020	6.190±1.059	0.940±0.205	0.192±0.170	0.158±0.075
花仙山1	27	0.225±0.028	10.633±3.616	2.345±0.693	0.476±0.192	0.098±0.052
花仙山2	33	0.219±0.028	12.677±2.988	2.723±0.519	0.472±0.164	0.132±0.071
細入	8	0.073±0.020	12.884±3.752	0.882±0.201	1.879±0.650	0.026±0.032
二俣	4	0.338±0.039	1.495±0.734	0.481±0.176	0.697±0.051	0.088±0.015
石戸	4	0.170±0.079	7.242±1.597	1.142±0.315	0.649±0.158	0.247±0.092
女代南遺物群	68	0.267±0.063	2.374±0.676	0.595±0.065	0.214±0.097	0.171±0.047

原石群名	分析個数	Mn／Fe $\overline{\chi}\pm\sigma$	Ti／Fe $\overline{\chi}\pm\sigma$	Nb／Zr $\overline{\chi}\pm\sigma$	比重 $\overline{\chi}\pm\sigma$
興部	31	0.004±0.003	0.001±0.001	0.455±0.855	2.626±0.032
猿八	36	0.003±0.001	0.018±0.010	0.032±0.014	2.543±0.049
土岐	11	0.001±0.001	0.001±0.001	0.261±0.242	2.607±0.009
玉谷	27	0.006±0.003	0.016±0.003	0.054±0.021	2.619±0.014
花仙山1	27	0.001±0.001	0.009±0.002	0.042±0.034	2.570±0.044
花仙山2	33	0.001±0.001	0.009±0.004	0.035±0.025	2.308±0.079
細入	8	0.003±0.002	0.008±0.002	0.021±0.344	2.169±0.039
二俣	4	0.007±0.002	0.043±0.010	0.043±0.023	2.440±0.091
石戸	4	0.007±0.001	0.009±0.002	0.227±0.089	2.598±0.008
女代南遺物群	68	0.011±0.004	0.026±0.009	0.034±0.016	2.554±0.019

$\overline{\chi}$：平均値、σ：標準偏差値
女代南遺物群：女代南遺跡（豊岡市）で使用されている原石産地不明の玉原材料で作った群

表1　各碧玉の原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値

に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。

これら原石を原産地ごとに統計処理を行い元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り表1に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒にして行い、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている碧玉製の玉の原材料で原産地は不明の遺物が出土している。同質の材料で作られた可能性がある玉類は北陸、近畿、中国地方に分布しているらしい。この分布範囲を明らかにし、原石産地を探索すると言う目的で女代南遺物群として原石群と同じように使用する。

この他、鳥取県の福部村たねが池、鳥取市つづらお岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。

南溝手遺跡出土の玉材石片と国内産碧玉原材との比較

遺跡から出土した玉類は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている。

遺物の原材産地の同定をするために、(1)蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2)また、ＥＳＲ分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推測する方法も応用した。

蛍光X線法による産地分析

これら遺物の蛍光X線分析の結果（図3、4）および比重（2.372、2.357）から原材料はグリーンタフ系の岩石として分類した。これら遺物の元素組成比および比重の結果を表2に示した。原石の数が多く分布された原産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリングT^2検定[8]により同定を行い結果を表3に示した。土岐、二俣、細入、石戸原産地は統計処理できるだけの原石の分析数が用意されていないが元素組成からこれらの産地の原石でないと推定された。また興部産地でないことは鉄の含有量から証明できる。比重の軽いグリーンタフ様の玉材は花仙山産原産地から採取でき、これらグリーンタフ原石の元素比組成は花仙山産碧玉と一致するため、比重の重い碧玉でつくられた原石群とグリーンタフ製の遺物を比較することには意味があり、一致した碧玉産地から採取されたグリーンタフ系玉材と推測できる。今回、分析した石片遺物の蛍光X線分析の結果から原石産地は特定されなかった。これら遺物の電子スピン共鳴(ＥＳＲ)分析から産地を特定することを試みた。

ＥＳＲ法による産地分析

ＥＳＲ分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ＥＳＲの測定は、Varian社のＥ－4型Ｘ－バンドスペクトロメーターで行う。試料は完全な

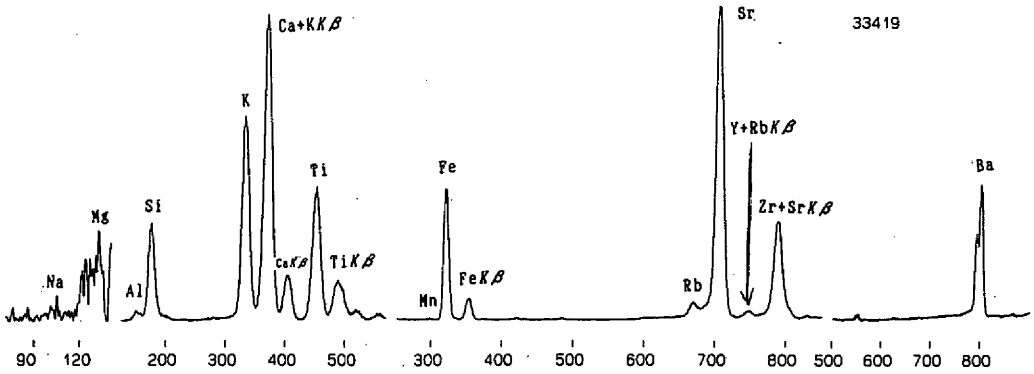


図3　DE区ーNo.55-33419、グリーンタフ製管玉の蛍光スペクトル

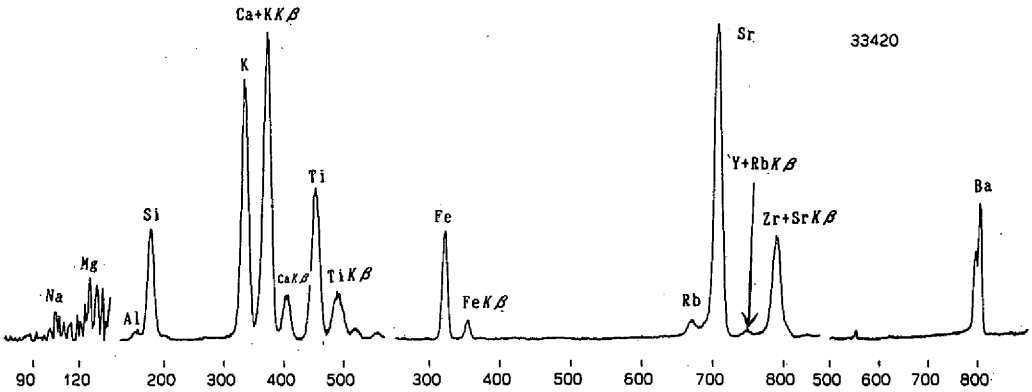


図4　DE区ーNo.55-33420、グリーンタフ製管玉の蛍光X線スペクトル

分析番号	元素比							
	Al／Si	K／Si	Ca／K	Ti／K	K／Fe	Rb／Fe	Fe／Zr	Rb／Zr
33419	.082	2.440	1.426	.699	.091	.189	1.744	.330
33420	.070	2.551	1.117	.677	.102	.249	1.323	.330
JG-1[a)]	.079	3.453	.754	.209	.131	.262	3.857	1.010

分析番号	元素比					重量　gr	比重
	Sr／Zr	Y／Zr	Mn／Fe	Ti／Fe	Nb／Zr		
33419	6.224	.018	.006	.049	.000	0.325	2.372
33420	5.741	.000	.006	.055	.024	0.297	2.357
JG-1	1.302	.200	.022	.023	.064		

a）：標準試料、Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974).
1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt.
Geochemical Journal, Vol.8 175-192.

表2　南溝手遺跡出土の玉材石片の分析結果

遺物番号	分析番号	碧玉製玉類蛍光X線分析法による帰属確率					ESR信号形	総合判定原石産地
		興部群	玉谷群	花仙山群	猿八群	女代(B)群		
石片55-1	33419	$1X10^{-14}$%	$1X10^{-18}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	不明1形	同じ原産地の原石？
〃 55-2	33420	$<10^{-13}$%	$1X10^{-17}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	$<10^{-25}$%	〃	

表3　南溝手遺跡出土の玉材石片の原石産地結果

非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析できる場合がある。図5－1のＥＳＲのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、ｇ値が4.3の小さな信号（Ⅰ）は鉄イオンによる信号で、ｇ値が２付近の幅の広い信号（Ⅱ）と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号（Ⅲ）で構成されている。図5－1では、信号（Ⅱ）より信号（Ⅲ）の信号の高さが高く、図5－2、－3の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。

今回分析した玉類の中で信号（Ⅱ）が信号（Ⅲ）より小さい場合は、二俣、細入産でないといえる。各原産地の原石の信号（Ⅲ）の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。図6－1に花仙山、猿八、玉谷、土岐および図6－2に興部、石戸、八代谷－4、女代（B）遺物群、八代谷の各原石の代表的な信号（Ⅲ）のスペクトルを示す。分析した石片の信号（Ⅲ）を図7に示す。グリーンタフ系とした石片の信号（Ⅲ）に一致する原石産地の信号（Ⅲ）はなく、遺物の原石産地を特定できなかった。

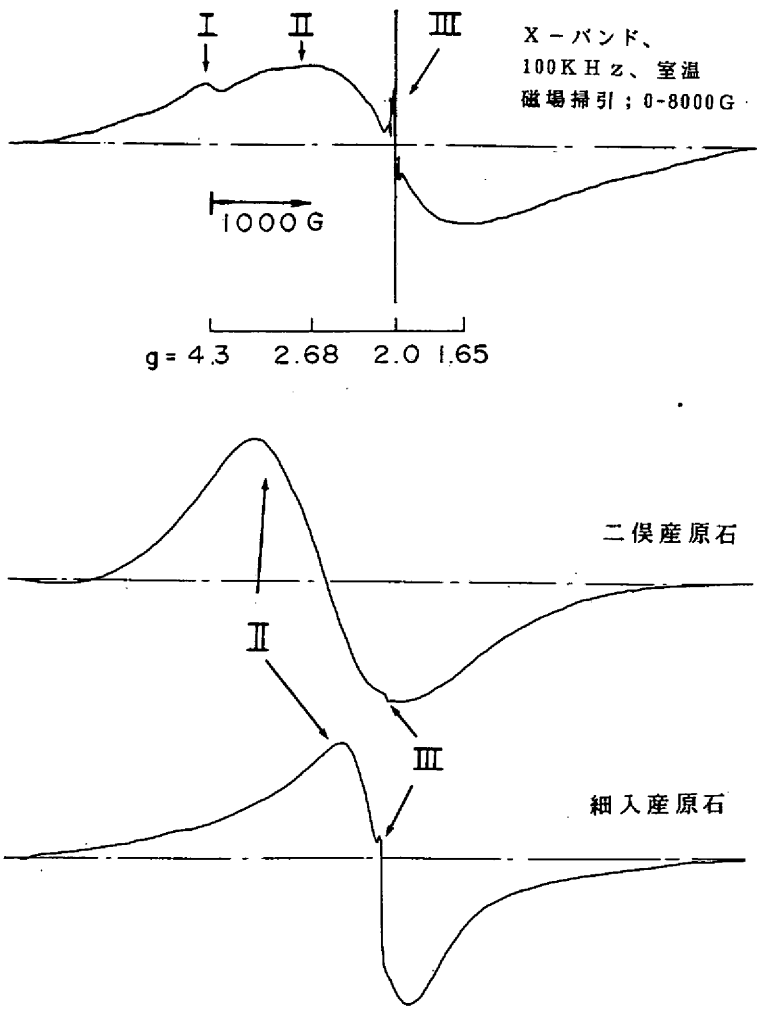


図5　碧玉原石のESRスペクトル（花仙山、玉谷、猿八、土岐）

結　論

グリーンタフ系とした玉材石片２個のグリーンタフ原産地は特定できなかったが、蛍光X線分析、ＥＳＲの両結果が一致するところから、同一個体からの石片または不明の共通の原産地からのそれ

ぞれの原石を入手していた可能性が推測される。

参考文献

1）茅原一也（1964)、長者が原遺跡産のヒスイ（翡翠）について（概報)。長者ケ原、新潟県糸魚川市教育委員会：63－73

2）藁科哲男・東村武信（1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要６：１－18

3）藁科哲男・東村武信（1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』，14：95－109

4） Tetsuo Warashina (1992)、 Alloction of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19：357－373

5）藁科哲男・東村武信（1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学、16：59－89

6）番場猛夫（1967)、北海道日高産軟玉ヒスイ。調査研究報告会講演要旨録No18：11－15

7）河野義礼（1939)、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質。岩石礦物鉱床学雑誌22：195－201

8）東村武信（1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、９：77－90

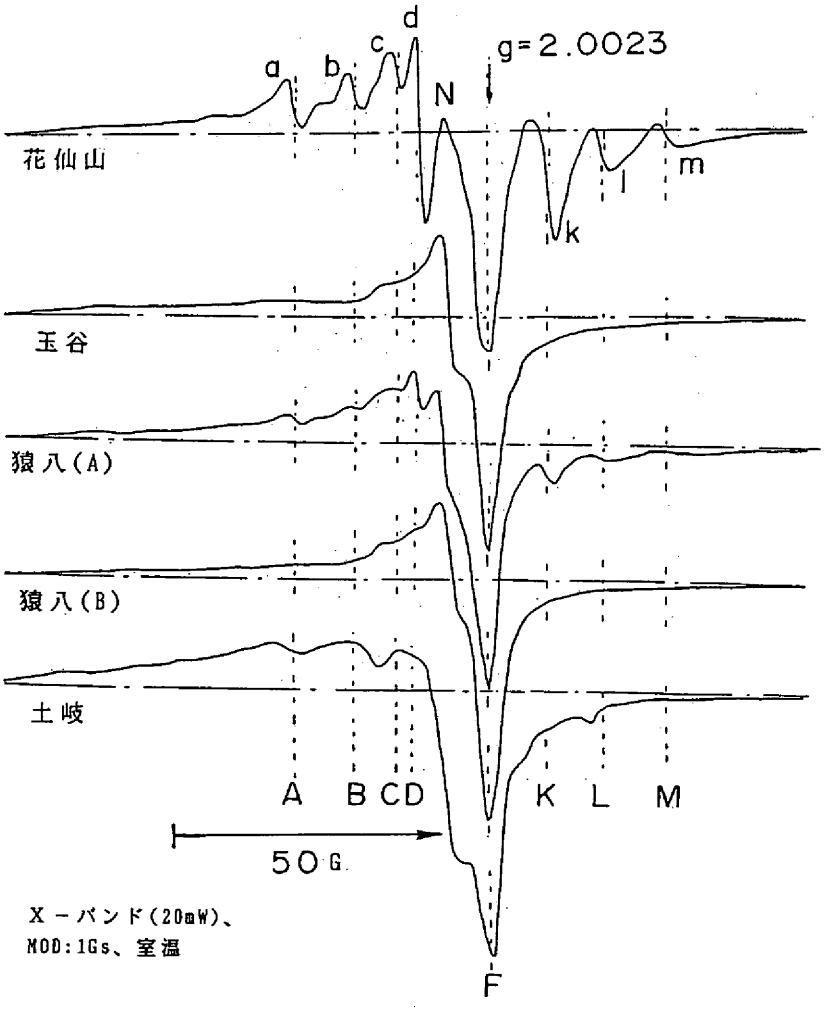


図６　(1)碧玉原石の信号Ⅲの ESR スペクトル

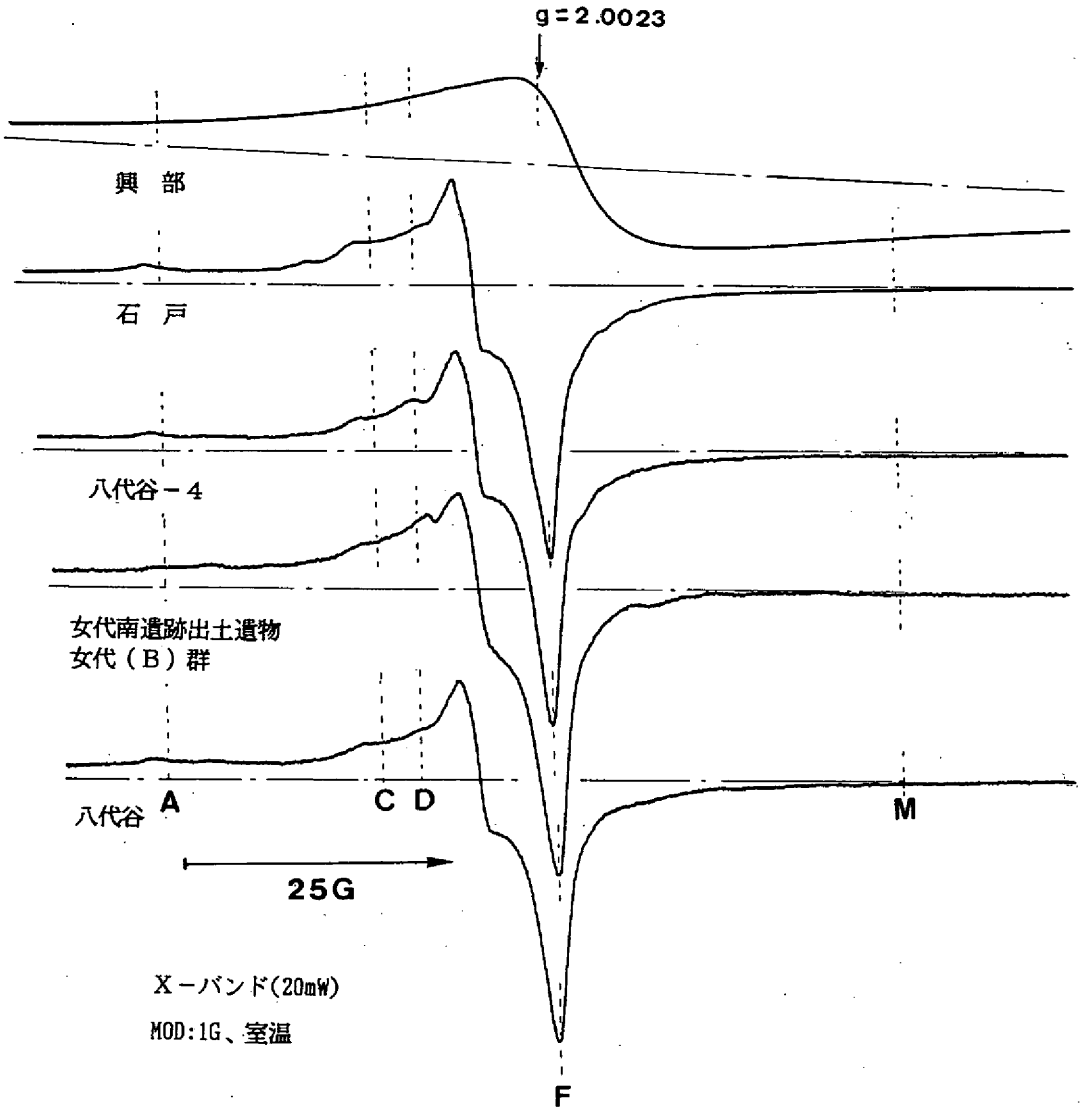


図6　(2)碧玉原石の信号Ⅲの ESR スペクトル

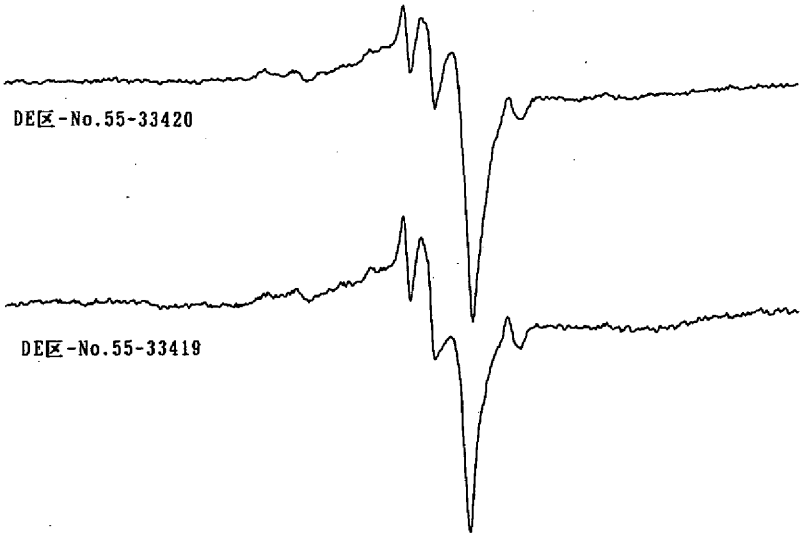


図7　南溝手遺跡出土玉材の信号Ⅲの ESR スペクトル

付載4　南溝手遺跡出土土器の赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター　**本　田　光　子**
宮内庁正倉院事務所　**成　瀬　正　和**

南溝手遺跡で出土した縄文時代晩期の赤色塗彩の土器1点の赤色顔料について顕微鏡観察とX線分析（蛍光X線分析・X線回折）を行い、赤色顔料の種類や特徴を調査した。墳墓出土例や土器・木器等の彩色例に関する現在までの知見に寄れば、出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄 Fe_2O_3 を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀HgSを主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここでは、これら三種類の赤色顔料を考えて調査を行った。分析結果及び推定される赤色顔料の種類を表に示した。

試料

一般に丹塗磨研土器と呼ばれる焼成前塗彩の赤彩の残りは良好であるが、縄文時代の赤彩の多くや弥生時代前期の彩文土器は焼成後塗彩のため、土器の赤色塗彩の残り具合いはその埋蔵環境に大きく左右される。試料の鉢形土器（第61図**83**）は焼成後塗彩のため赤色部分（口縁端部外面）の残りは非常に少ない。

顕微鏡観察

光学顕微鏡により透過光・反射光40～400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。古代の三種の赤色顔料（朱、ベンガラ、鉛丹）は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等の違いから検鏡により見極めがつく。

土器片はそのままで落射光により40～100倍で検鏡し、赤色顔料の有無、その種類、付着残存状態を観察した。また、赤色部分から針先に付く程度の量を採取しプレパラートを作成し、透過光・落射光40～400倍で検鏡した。

試料には漆塗膜の劣化した状態が観察され下層がベンガラで上層に朱粒子を認めた。ただし、断面観察でないためベンガラの下にさらに赤色顔料あるいは赤色顔料を含まない漆の層があるかどうかは不明である。また、ベンガラにはいわゆるパイプ状粒子と呼ばれている管状の粒子が含まれることがあり、産地を示すものかと論議を呼んでいるが、今回の試料には見い出せなかった。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したもので、土器片そのものを測定試料とした。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業㈱製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；40 kv、印加電流；20 mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲（2 θ）；10～65°の条件で行った。

試料には鉛が検出されなかったので、表には鉄と水銀の有無のみ記した。赤色顔料の主成分元素としては鉄と水銀が検出された。この他、マンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出さ

れるが、それらはみな主として胎土部分に由来するものなので、省略した。但し土器資料では鉄は胎土部分にも必ず含まれ、採取を行わない今回の分析では赤色顔料由来のものと区別は困難である。

X線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的としたものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機㈱製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；25 kV、印加電流；10 mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク（通路幅）；4 ㎜、ゴニオメーター走査範囲（2 θ）；30～66° の条件で行った。試料は土器片そのものを測定試料とした。表には辰砂（Cinnabar 赤色硫化水銀）、赤鉄鉱（Hematite 酸化第二鉄）の有無のみについて記した。赤色顔料の主成分鉱物として辰砂と赤鉄鉱は確認できなかった。この他、石英、長石などが確認されたが、それは主として胎土部分あるいは混入土砂に由来するものなので、やはり省略している。赤色顔料の付着量が少ないものについては、X線回折では赤色顔料に由来する鉱物が検出できない場合がある。

表　南溝手遺跡出土土器の赤色物の分析結果と推定される赤色顔料の種類

試料	蛍光X線分析		X線回折		顕微鏡観察	赤色顔料の種類	挿図
	鉄	水銀	赤鉄鉱	辰砂			
鉢形土器	＋	＋	－	－	ベンガラ＋朱（2層）	ベンガラ、朱	第61図83

（＋は検出、－は未検出）

まとめ

X線回折により主成分鉱物は確認できなかったが、顕微鏡観察と蛍光X線分析の結果から、赤色顔料の種類を推定した。

試料は赤色部分の残存している量（面積）は少ないが、異なる種類の赤色顔料である朱とベンガラが層状に重なり塗膜のように観察できることから、赤漆塗りであると判断した。今回の調査では表面観察なのでベンガラの下にさらにベンガラあるいは朱が塗られているか、赤色顔料を含まない漆の層があるのかは不明であるが、現在までの調査例から考えると、おそらく漆の下塗りがあり、その上にベンガラ、朱の順で塗り重ねられていたものと思われる。

今回調査の機会を頂きました岡山県古代吉備文化財センター平井勝氏、平井泰男氏に感謝致します。

付載５　岡山県南溝手遺跡における自然科学分析(1)

古環境研究所

南溝手遺跡のプラント・オパール分析

１．はじめに

植物珪酸体は、ガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が植物の細胞内に蓄積したものであり、植物が枯死した後も微化石(プラント・オパール)となって土壌中に半永久的に残っている。この微化石は植物によりそれぞれ固有の形態的特徴を持っていることから、これを土壌中より検出してその組成や量を明らかにすることで過去の植生環境の復元に役立てることができる。プラント・オパール(植物珪酸体)分析と呼ばれるこの方法は、とくに埋蔵水田跡の確認や探査において極めて有効であり、これまでに多くの実績をあげている。

ここでは、プラント・オパール分析を用いて、南溝手遺跡における稲作跡の探査を試みた結果について報告する。

２．分析試料採取地点（付載６．図１）

試料番号	調査区	採取土層	時　期	試料番号	調査区	採取土層	時　期
No.1	ＥＮ区	第277図３層	古墳時代前期前葉	No.10	ＥＮ区	第277図22層	弥生時代前期
No.2	ＥＮ区	第277図４層	弥生時代後期後葉	No.11	ＥＮ区	第277図23層	弥生時代前期
No.3	ＥＮ区	第277図13層	弥生時代中期後半～後期	No.12	Ｈ17区	第451図30層	弥生時代前期以前？
No.4	ＥＮ区	第277図14層	弥生時代中期後半～後期前半	No.13	ＫＹ２区	第453図１層	古墳時代前期前葉
No.5	ＥＮ区	第277図16層	弥生時代中期～後期前半	No.14	ＫＹ２区	第453図２層	弥生時代後期後葉？
No.6	ＥＮ区	第277図17層		No.15	ＫＹ２区	第453図３層	弥生時代中期後半～後期
No.7	ＥＮ区	第277図18層		No.16	Ｈ16区	第508図43層	弥生時代後期後葉？
No.8	ＥＮ区	第277図20層	弥生時代前期	No.17	Ｈ16区	第508図44層	弥生時代中期後半～後期
No.9	ＥＮ区	第277図21層	弥生時代前期				

３．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976)」をもとに、次の手順で行なった。

1）試料土の絶乾(105℃・24時間)、仮比重測定

2）試料土約１ｇを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40μｍ，約0.02ｇ)

　※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

3）電気炉灰化法による脱有機物処理

4）超音波による分散(300W・42 KHz・10分間)

5）沈低法による微粒子(20μｍ以下）除去、乾燥

6）封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成

7）検鏡・計数

検鏡は、おもに機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。なお、稲作跡の探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族(ススキやチガヤなどが含まれる)、キビ族(ヒエなどが含まれる)の主要な5分類群に限定した。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行なった。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数(資料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズの個数の比率を乗じて求める)に換算して示した。

4．分析結果

試料1g中のプラント・オパール個数を表1に示す。

(1) ＥＮ区

本地点では、試料No.1～No.11の11点が採取された。これらすべてについて分析を行った結果、イネは試料No.6を除く各試料から検出された。これらのうち、試料No.1、No.2、No.3、No.5では高い密度である。ヨシ属は試料No.2、No.4、No.6、No.8、No.9、No.10、No.11の各試料から検出された。密度はいずれも低い値である。タケ亜科はすべての試料から比較的高い密度で検出された。ウシクサ族は試料No.1、No.3、No.4、No.7、No.9の各試料から検出されたが、いずれも低い密度である。キビ族は検出されなかった。

(2) H17区

本地点では、試料No.12の1点が採取された。分析の結果、検出されたプラント・オパールはタケ亜科のみであった。密度は比較的高い値である。

(3) ＫＹ２区

本地点では、試料No.13、No.14、No.15の3点が採取された。分析の結果、イネはすべての試料から検出された。密度はいずれも低い値である。ヨシ属は試料No.13とNo.15から検出されたが、いずれも低い密度である。タケ亜科はすべての試料から検出された。ウシクサ族とキビ族は検出されなかった。

(4) H16区

本地点では、試料No.16、No.17の2点が採取された。分析の結果、イネは両試料から検出されたがいずれも低い密度である。ヨシ属は検出されなかった。タケ亜科は両試料から検出された。ウシクサ族は試料No.17から検出されたが密度は低い値である。キビ族は検出されなかった。

5．考察

(1) 稲作の可能性について

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

1）ＥＮ区

ここでは、試料No.６を除く各試料からイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの試料が採取された層準で稲作が行われていた可能性が考えられる。このうち、試料No.１、No.２、No.３、No.５の各層準ではプラント・オパール密度が5,000個／ｇ以上と高い値である。また、試料No.９でも密度が4,100個／ｇと比較的高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。なお、試料No.11では密度が700個／ｇと低い値であることから、上層あるいは他所からの混入の危険性も考えられる。

2）Ｈ17区

試料No.12について分析を行ったが、イネのプラント・オパールは検出されなかった。したがって、ここでも稲作が行われていた可能性は考えにくい。

3）ＫＹ２区

試料No.13、No.14、No.15について分析を行ったところ、すべての試料からイネのプラント・オパールが検出された。プラント・オパール密度は300～1,200個／ｇといずれも低い値である。したがって、これらの試料が採取された層準で稲作が行われていた可能性は考えられるが、他所からの混入の危険性も否定できない。

4）Ｈ16区

試料No.16、No.17について分析を行ったところ、両試料からイネのプラント・オパールが検出された。プラント・オパール密度は400個／ｇといずれも低いことから、これらの試料が採取された層準で稲作が行われていた可能性は考えられるものの、他所からの混入の危険性も否定できない。

(2) 古環境の推定（図４参照）

ネザサなどのタケ亜科植物は比較的乾いた土壌条件のところに生育し、ヨシは比較的湿った土壌条件のところに生育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって、土層の堆積環境（乾湿）を推定することができる。

本遺跡では、全体にタケ亜科が卓越しており、ヨシ属は比較的少量である。このことから、本調査区一帯は、縄文時代後期より現在にいたるまで、比較的乾燥した土壌条件であったものと推定される。

６．まとめ

南溝手遺跡においてプラント・オパール分析を行い、稲作跡の探査を試みた。その結果、ＥＮ区の試料No.１、No.２、No.３、No.４、No.５、No.７、No.８、No.９、No.10の層準で稲作が行われていた可能性が認められた。とくに、ＥＮ区の試料No.１、No.２、No.３、No.５、No.９の層準ではその可能性が高いと判断された。

参考文献

杉山真二・藤原宏志（1987）「川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析。赤山－古環境編－」『川口市遺跡調査会報告10』Ｐ281-298.

藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学９』Ｐ15-29.

藤原宏志（1979）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日

高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. satiba L.）生産総量の推定－」『考古学と自然科学12』P29-41.
藤原宏志・杉山真二（1984）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学17』P17-85.

表1　プラント・オパール分析結果

ＥＮ区地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
1	96	8	1.00	7,300	6.02	0	9,200	600	0
2	104	10	1.00	15,100	15.63	1,500	6,300	0	0
3	114	6	1.00	11,700	7.28	0	10,300	700	0
4	120	10	1.00	4,000	4.19	1,600	11,300	800	0
5	130	10	1.00	5,000	5.20	0	8,400	0	0
6	140	7	1.00	0	0.00	600	16,500	0	0
7	147	11	1.00	1,900	2.20	0	19,400	900	0
8	158	10	1.00	2,600	2.71	800	11,300	0	0
9	168	8	1.00	4,100	3.44	2,500	8,300	800	0
10	176	15	1.00	1,700	2.67	3,400	8,600	0	0
11	191	26	1.00	700	2.00	2,200	14,100	0	0

Ｈ17区地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
12	200	14	1.00	0	0.00	0	21,000	0	0

ＫＹ２区地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
13	44	8	1.00	1,200	1.01	800	3,600	0	0
14	52	10	1.00	700	0.73	0	1,400	0	0
15	62	11	1.00	300	0.39	300	6,800	0	0

Ｈ16区地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
16	90	10	1.00	400	0.47	0	7,300	0	0
17	100	7	1.00	400	0.31	0	8,100	400	0

付載6　岡山県南溝手遺跡における自然科学的分析調査(2)

古環境研究所

南溝手遺跡のプラント・オパール分析

1．はじめに

この調査は、プラント・オパール分析を用いて、南溝手遺跡における稲作跡の探査を行ったものである。

2．分析試料採取地点（図1）

試料番号	調査区	採取土層	時　期	試料番号	調査区	採取土層	時　期
No.18	H15区	第26図10層	縄文時代後期後葉	No.21	H17区	第451図23層	
No.19	J O区	第93図15層	縄文時代晩期中葉	No.22	H17区	第451図24層	弥生時代前期後半
No.20	H17区	第451図22層	弥生時代中期前半				～中期前半
			～後期前半	No.23	H17区	第451図25層	

3．分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原，1976)」をもとに、次の手順で行った。

(1)　試料土の絶乾(105℃・24時間)

(2)　試料土約1ｇを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40μｍ、約0.02ｇ)

　※電子分析天秤により1万分の1ｇの精度で秤量

(3)　電気炉灰化法による脱有機物処理

(4)　超音波による分散(300W・42 kHz・10分間)

(5)　沈低法による微粒子(20μｍ以下)除去、乾燥

(6)　封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成

(7)　検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1ｇ中のプラント・オパール個数を求めた。

4．分析結果

プラント・オパール分析の結果を表2に示す。なお、稲作跡の探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族(ススキやチガヤなどが含まれる)、キビ族(ヒエなどが含まれる)の主要な5分類群に限定した。

5．考察

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、イネのプラント・オパールが試料１ｇあたりおよそ5,000個以上と多量に検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、当該層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、稲作の可能性について検討を行った。

Ｈ15区西壁、ＪＯ区河道、Ｈ17区北壁の各地点で採取された試料について分析を行った。その結果、Ｈ17区北壁地点の試料No.20と試料No.22の２試料からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、前者ではプラント・オパール密度が4,000個／ｇと比較的高い値であることから、稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。後者では密度は700個／ｇと低い値であるが、直上の試料No.21からはまったく検出されないことから、上層から後代のプラント・オパールが混入した危険性は考えにくい。したがって、試料No20の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

その他の地点では、イネのプラント・オパールは検出されなかった。

6．まとめ

南溝手遺跡で採取された試料について、プラント・オパール分析を行った。その結果、Ｈ17区北壁地点の試料No.20と試料No.23の時期において稲作が行われていた可能性が認められた。なお、縄文時代後晩期とされる試料からはイネのプラント・オパールは検出されなかった。

参考文献

杉山真二・藤原宏志（1987）「川口市赤山陣屋敷跡遺跡におけるプラント・オパール分析．赤山－古環境編－」『川口市遺跡調査会報告10』Ｐ281-298.

藤原宏志（1976）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学９』Ｐ15-29.

藤原宏志（1979）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O.sativa L.）生産総量の推定－」『考古学と自然科学12』Ｐ29-41.

藤原宏志・杉山真二（1984）「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学17』Ｐ73-85.

表2　プラント・オパール分析結果

H15区西壁地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
No18	108	52	1.00	0	0.00	400	18,600	400	0

ＪＯ区河道２

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
No19	135	25	1.00	0	0.00	0	17,500	0	0

H17区北壁地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個／g	(籾総量) t／10a	ヨシ属 個／g	タケ亜科 個／g	ウシクサ族 個／g	キビ族 個／g
No20	103	20	1.00	4,000	8.24	0	12,000	0	0
No21	123	8	1.00	0	0.00	0	16,700	0	0
No22	131	12	1.00	700	0.87	700	14,700	700	0
No23	143	11	1.00	0	0.00	0	25,200	0	0

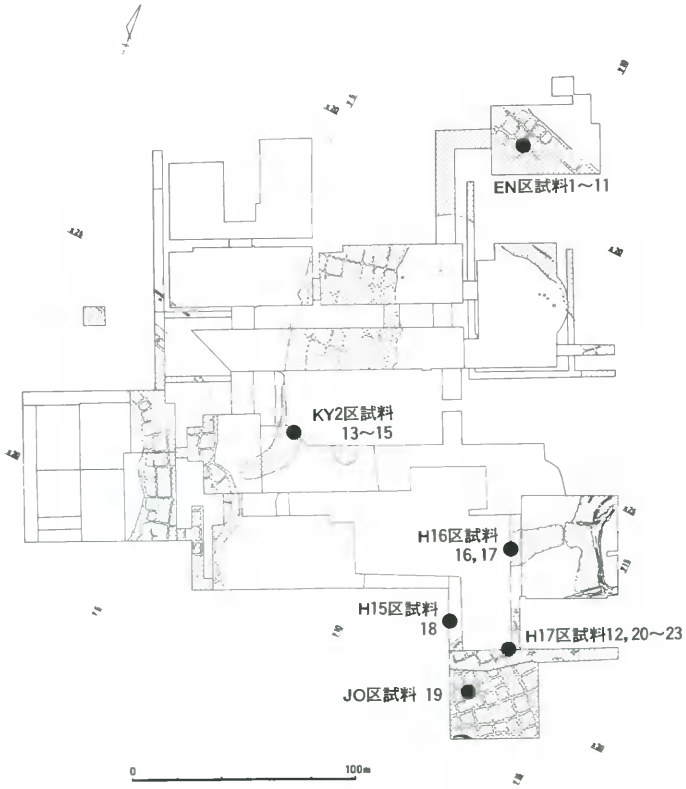


図1　プラント・オパール分析試料採取地点図（1/2500）

試料2　イ　　ネ

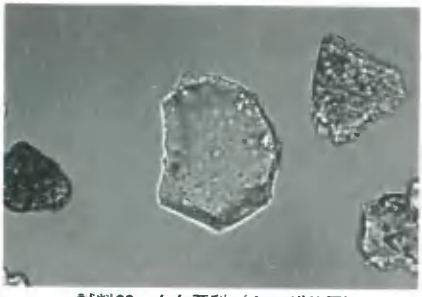
試料9　イ　　ネ

試料10　ヨ　シ　属

試料20　イ　　ネ

試料20　イ　　ネ

試料20　イネ（側面）



試料22　タケ亜科（クマザサ属）

試料22　タ ケ 亜 科

植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

第11表　竪穴住居一覧表

番号	平面形	規模cm (長軸×短軸)	床面積m²	主柱穴数	中央穴 形	中央穴 規模cm	中央穴 深さcm	焼土 面	壁体溝	時期
1	円	788×		6	楕円	76×54	25	0	無	弥生時代前期中葉
2	円	595×		(3)	円	75×74	42	2	無	弥生時代前期前葉～中葉
3	(長楕円)	(1050)×(950)	(77)	6↔8	楕円	80×67	30	3	無	弥生時代前期前葉～中葉
4	円	278×275	(6)	2	不整円	40×38	8	0	無	弥生時代前期
5	円	299×297	6.7	2	円	43×40	13	0	無	弥生時代後期前葉
6	円	282×280	5.9		楕円	48×40	19	1	有	弥生時代後期
7				4→6	不整円	147×122	45	2	―	弥生時代中期後葉
8	隅丸方	398×390	13.7	4	楕円	85×53	21	1	有	弥生時代中期後葉
9	(隅丸方)	(650)×(550)		4+2	隅丸方	62×54	29	0	―	弥生時代中期後葉

第12表　建物一覧表

番号	規模 (間)	柱間距離 桁cm	柱間距離 梁cm	桁行 cm	梁間 cm	面積 m²	柱穴形状	時期
1	5×2	80～177	180～198	650～680	314	25.0	円	弥生時代前期
2	1×1	318～350	253～266	318～350	253～266	9.5	楕円	弥生時代中期後葉
3	1×1	427～445	318～325	427～445	318～325	13.9	楕円	弥生時代後期前葉
4	1×1	408～427	305	408～427	305	12.7	楕円	弥生時代後期
5	1×1	214～215	198～200	214～215	198～200	4.3	円	弥生時代中期後葉～後期前葉
6	1×1	204～208	196	204～208	196	4.0	円	弥生時代中期後葉～後期前葉
7	3×	122～160		122～160			円	弥生時代中期後葉～後期前葉
8	1×1	338～344	254～260	338～344	254～260	8.9	円	弥生時代中期後葉～後期前葉
9	1×1	364	249～254	364	249～254	8.7	円	弥生時代中期後葉～後期前葉
10	1×1	308～320	249～254	308～320	249～254	7.9	円	弥生時代中期後葉
11	1×1	375～396	302～304	375～396	302～304	11.7	円	弥生時代中期後葉
12	1×1	448～470	288～294	448～470	288～294	13.3	円	弥生時代中期後葉～後期前葉
13	1×1	329～343	252～260	329～343	252～260	8.6	円	弥生時代後期前葉
14	1×1	218～228	202～225	218～228	202～225	4.7	円	弥生時代中期後葉～後期前葉
15	1×1	172～180	172～176	172～180	172～176	3.0	円	弥生時代中期後葉～後期前葉
16	1×1	207～210	198～216	207～210	198～216	4.3	円	弥生時代中期後葉～後期前葉
17	(2×1)	140～164	160				円	弥生時代中期後葉～後期前葉
18	1×1	273	200	273	200	6.0	楕円	弥生時代中期後葉
19	1×1	370～380	217～240	370～380	217～240	8.5	楕円	弥生時代中期後葉～後期前葉
20	4×2	128～150	147～155	553～557	300	16.7	円	弥生時代中期後葉～後期前葉
21	1×1	359～360	249～250	359～360	249～250	9.0	円	弥生時代中期後葉～後期前葉
22	1×1	297～300	185～203	297～300	185～203	5.8	楕円	弥生時代中期後葉～後期前葉
23	2×1	288～310	139～178	288～310	285～328	8.8～9.5	円	弥生時代中期後葉～後期前葉
24	1×1	154～168	160	154～168	160	2.6	円	弥生時代中期中葉～後期
25	1×1	150～156	141～152	150～156	141～152	2.2	円	弥生時代中期中葉～後期
26	1×1	184～189	184～191	184～189	184～191	3.5	円	弥生時代中期中葉～後期

番号	規模(間)	柱間距離 桁cm	柱間距離 梁cm	桁行 cm	梁間 cm	面積 m²	柱穴形状	時期
27	(1×1)	158	339	158			円	弥生時代中期後葉～後期前葉
28	(1×1)	136	271	136			円	弥生時代中期後葉～後期前葉
29	2×1	214～252	239～301	455	300	13.6	円	弥生時代後期前葉
30	3×1	134～169	294～306	456～464	294～306	13.8	円	弥生時代中～後期
31	2×1	256～270	326	526	326	17.1	円	弥生時代後期前葉
32	2×1	220～242	254～318	455～462	254～318	13.7	円	弥生時代中～後期
33	3×	166～226		606			円	弥生時代中期後葉
34	3×2	198～254	171～184	650～654	355	23.1	円	弥生時代中期後葉
35	1×1	297～298	272～274	297～298	272～274	8.1	円	弥生時代中期後葉
36	3×2	140～225	153～177	508～528	320～335	16.9	円	弥生時代中期後葉
37	×1		238		238		円	弥生時代中期後葉
38	×1		192		192		円	弥生時代中期後葉
39	1×1	266～275	219～221	266～275	219～221	6.0	楕円	弥生時代中期後葉
40	3×1	145～183	313～318	490	313～318	15.4	円	弥生時代中期後葉
41	1×1	288～298	288～298	288～298	288～298	5.9	円	弥生時代中期後葉
42	3×1	214～266	398～410	713～718	398～410	28.9	円	平安時代
43	2×1	128～140	264～283	166～174	264～283	4.7	円	平安時代
44	2×1	190～200	264～276	389	264～276	10.5	円	古代
45	2×1	207～229	294～300	419～439	294～300	12.7	円	中世
46	2×1	192～226	209～223	418～422	209～223	9.1	円	中世
47	3×2	200～300	163～180	780	340～352	27.8	円	古代末～中世
48	2×1	210～230	145～158	439			円	古代末～中世
49	2×1	162～166	205～208	325	205～208	6.7	円	鎌倉時代
50	2×2	186～248	143～168	410～453	300～310	13.6	円	近世

第13表　井戸一覧表

番号	平面形	長軸×短軸cm	深さcm	底海抜高m	時期
1	円	100×100	132	7.36	弥生時代後期前葉
2	楕円	106×94	105	7.58	弥生時代後期前葉
3	円	95×92	75	7.75	弥生時代後期末葉
4	不整円	193×182	130	7.02	弥生時代中期後葉
5	円	117×103	131	6.98	弥生時代中期後葉
6	不整円	224×204	108	7.43	弥生時代後期前葉
7	不整円	171×169	115	6.95	弥生時代中期後葉
8	円	180×169	166	6.5	弥生時代後期前葉
9	隅丸方	122×109	120以上	7.1以下	古墳時代前期中葉
10	隅丸方	60×50	78	7.56	古墳時代前期中葉
11	不整円	90×85	86	7.47	古墳時代前期中葉
12	楕円	85×75	47	7.86	古墳時代前期中葉
13	隅丸方	94×93	130以上	7.0以下	古墳時代前期前葉

第14表　石器・石製品一覧表

番号	出土地点	器　種	型式	石　材	残存率	長さ	幅	厚み	重量	備　考
1	第1次確認調査	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	22.5	15.5	5.1	1.5	
2	第1次確認調査	石錐		サヌカイト	欠	26.0	14.0	3.2	0.9	
3	第1次確認調査	石錐	Ⅰ	サヌカイト	完	41.0	21.0	7.5	6.3	
4	第1次確認調査	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	完	28.5	26.0	6.8	5.1	
5	第1次確認調査	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	欠	24.0	61.0	12.0	23.6	
6	第1次確認調査	打製石包丁		サヌカイト	完	91.0	58.5	15.5	99.3	磨耗有
7	縄文時代後期	石鏃		サヌカイト	欠	38.5	19.5	3.4	2.1	
8	縄文時代後期	スクレイパー	Ⅳ	サヌカイト	完	76.5	40.5	16.5	30.6	
9	土壙1	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	完	76.0	82.5	15.4	116.2	
10	土壙7	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	完	84.5	82.5	14.0	73.4	
11	土壙7	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	欠	104.5	153.0	20.0	311.9	
12	土壙17	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	19.0	12.0	2.2	0.6	
13	土壙23	石鏃	Ⅲ	サヌカイト	完	19.0	13.0	2.7	0.5	
14	土壙23	スクレイパー	Ⅰb	頁岩	欠	49.0	32.0	5.5	10.9	表面磨耗
15	土壙23	石錐	Ⅱ	サヌカイト	完	70.0	31.0	18.0	15.9	
16	土壙23	スクレイパー	Ⅲ	サヌカイト	完	36.0	74.0	13.0	42.1	
17	土器溜り1及びその周辺	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	欠	206.5	90.0	18.5	352.7	
18	土器溜り1及びその周辺	核→スクレイパー	Ⅰ?	サヌカイト	欠	170.0	121.0	24.0	432.2	
19	土器溜り1及びその周辺	打製石鍬		サヌカイト	欠	96.0	64.0	28.3	164.5	基部のみ
20	土器溜り1及びその周辺	磨製石斧		砂岩	欠	66.3	57.4	23.1	146.0	基部のみ
21	土器溜り1及びその周辺	敲石		玢岩	完	110.6	83.8	48.5	681.1	
22	河道1	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	36.0	23.5	4.0	2.3	
23	河道1	石錐	Ⅰ?	サヌカイト	欠	19.0	9.0	2.5	0.3	
24	河道1	石錐	Ⅲ	サヌカイト	完	51.5	14.0	5.0	3.8	
25	河道1	スクレイパー?	Ⅰb	サヌカイト	完	35.0	49.5	18.0	35.9	
26	河道1	スクレイパー?	Ⅰb	サヌカイト	完	60.0	51.0	13.0	46.8	
27	河道1	スクレイパー?	Ⅰb	サヌカイト	欠	48.0	58.0	16.0	41.6	
28	河道1	スクレイパー?	Ⅲ	サヌカイト	完	57.0	38.0	10.0	20.6	
29	河道1	楔形石器	Ⅰb	サヌカイト	完	81.5	46.5	9.8	36.1	
30	河道1	磨耗有剝片		サヌカイト	欠	24.0	38.5	8.0	5.1	線条痕、光沢有
31	河道1	スクレイパー	Ⅱ	サヌカイト	完	85.0	49.5	9.5	41.2	
32	河道1	R．F		サヌカイト	完	52.0	34.0	6.0	7.8	
33	河道1	打製石包丁?		サヌカイト	欠	43.5	36.5	6.3	8.8	
34	河道1	打製石包丁		サヌカイト	欠	41.0	43.5	6.0	10.8	磨耗有
35	河道1	打製石鍬	Ⅰ	安山岩	完	106.0	54.0	15.0	88.6	磨耗有
36	河道1	打製石鍬	Ⅱ	サヌカイト	欠	116.5	47.0	18.0	123.5	側片研磨
37	河道1	石鏃	Ⅴa	サヌカイト	完	29.0	12.5	4.5	1.3	
38	河道1	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	欠	46.0	30.0	12.0	17.8	
39	河道1	楔形石器	Ⅰb	サヌカイト	欠	63.5	33.5	6.0	14.4	
40	河道1	スクレイパー	Ⅱ	サヌカイト	完	43.0	38.5	7.5	13.1	
41	河道1	磨耗有剝片		サヌカイト	完?	37.0	25.0	5.0	5.8	磨耗、線条痕有
42	河道1	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	欠	89.0	42.0	8.5	33.6	
43	河道1	打製石鍬	Ⅰ	流紋岩	欠	158.0	66.5	23.0	264.7	
44	河道1	敲石	Ⅰa	安山岩	欠	63.0	90.1	49.4	336.0	
45	河道2	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	22.5	22.0	3.5	1.6	
46	河道2	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	24.0	16.0	3.2	0.9	
47	河道2	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	31.5	19.5	4.1	1.9	
48	河道2	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	44.0	23.0	9.4	12.4	
49	河道2	スクレイパー	Ⅳ	サヌカイト	完	11.0	58.0	8.6	48.2	磨耗有
50	河道2	石錘	Ⅰa	安山岩	完	79.4	61.9	13.8	99.8	
51	河道2	石錘?	Ⅰa	石英斑岩	完	136.7	99.3	64.6	1155.2	研磨面有
52	第1低位部及び第1微高地	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	32.5	12.5	4.2	1.3	
53	第1低位部及び第1微高地	石錐	Ⅰ	サヌカイト	完	41.0	17.5	4.8	2.8	
54	第Ⅰ低位部及び第Ⅰ微高地	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	28.0	19.5	6.1	3.5	
55	第1低位部及び第1微高地	楔形石器?	Ⅱa	サヌカイト	完	43.0	28.0	12.0	16.9	
56	第1低位部及び第1微高地	スクレイパー	Ⅱ	サヌカイト	欠	33.5	31.0	7.6	6.9	
57	第1低位部及び第1微高地	スクレイパー	Ⅳ	サヌカイト	完	85.5	60.0	10.5	34.2	
58	第1低位部及び第1微高地	打製石鍬	Ⅱ	流紋岩	欠	80.0	50.0	10.0	54.9	
59	第1低位部及び第1微高地	打製石鍬	Ⅰ	サヌカイト	欠	82.5	45.5	12.5	53.1	
60	第1低位部及び第1微高地	石斧未製品?		砂岩	欠	88.9	72.0	35.2	342.5	
61	第1低位部及び第1微高地	敲石		砂岩	欠	111.2	81.1	44.1	560.0	
62	第1低位部及び第1微高地	石鏃	Ⅳa	サヌカイト	完	20.5	17.5	4.5	1.5	
63	第1低位部及び第1微高地	スクレイパー→石錐	Ⅱ	サヌカイト	完	54.0	30.0	7.0	11.4	
64	第1低位部及び第1微高地	スクレイパー?	Ⅱb	サヌカイト	完	32.0	24.0	7.0	6.7	
65	第1低位部及び第1微高地	スクレイパー	Ⅲ	サヌカイト	欠	50.0	30.0	6.0	12.3	
66	第1低位部及び第1微高地	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	欠	81.0	54.0	14.1	53.1	
67	第1低位部及び第1微高地	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	完	93.0	69.0	14.0	106.5	
68	第1低位部及び第1微高地	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	完	83.5	50.0	15.0	58.7	
69	第1低位部及び第1微高地	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	完	40.0	22.5	17.0	9.6	
70	第1低位部及び第1微高地	石核?		サヌカイト	欠	103.5	87.0	18.0	175.9	
71	第1低位部及び第1微高地	スクレイパー?	Ⅱ	サヌカイト	完	87.0	90.5	19.0	139.1	
72	第1低位部及び第1微高地	核→スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	欠	104.0	76.5	24.0	185.6	
73	第1低位部及び第1微高地	R．F		サヌカイト	欠	65.5	42.5	6.3	17.1	
74	第1低位部及び第1微高地	磨耗有剝片		サヌカイト	完	37.0	56.0	6.0	15.6	線条痕有
75	第2微高地(西)	磨製石斧		流紋岩	完	69.1	34.5	11.0	43.1	使いべり有
76	第2微高地(西)	敲石		安山岩	欠	69.4	58.4	49.3	360.5	

番号	出土地点	器　種	型式	石　材	残存率	長さ	幅	厚み	重量	備　考
77	第2微高地(西)	凹み石兼敲石		細粒砂岩	完	92.4	78.5	42.8	421.0	研磨面有
78	第2微高地(西)	敲石		砂岩	完	142.3	66.8	42.9	525.0	
79	第2微高地(西)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	20.0	14.5	3.0	0.8	
80	第2微高地(西)	石鏃	Ⅳa	サヌカイト	完	37.0	15.0	3.5	2.2	
81	第2微高地(西)	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	24.5	41.0	12.0	14.3	
82	第2微高地(西)	楔形石器	Ⅲ	サヌカイト	欠	41.0	40.5	9.0	16.6	
83	第2微高地(西)	石錐	Ⅱ	サヌカイト	完	54.0	46.5	4.5	14.5	
84	第2微高地(西)	石錐	Ⅳ	サヌカイト	完	76.0	24.5	11.5	26.8	
85	第2微高地(西)	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	完	55.5	35.0	10.0	17.6	
86	第2微高地(西)	スクレイパー	Ⅳ	サヌカイト	完	80.0	46.0	6.5	19.8	
87	第2微高地(西)	スクレイパー	Ⅳ	サヌカイト	完	103.0	55.0	14.2	79.6	
88	第2微高地(西)	打製石鍬	Ⅱ	頁岩	欠	123.5	49.0	13.5	104.9	
89	第2微高地(西)	石槍？		サヌカイト	欠	57.5	24.5	7.8	12.0	
90	第2微高地(西)	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	完	234.0	175.5	49.0	1720.3	
91	第2微高地(西)	磨石兼敲石		石英斑岩	完	113.0	99.0	64.0	1067.4	
92	第3低位部	打製石鍬	Ⅰ	流紋岩	完	108.0	42.0	19.0	102.1	磨耗有
93	竪穴住居1	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	27.5	14.0	5.2	2.2	
94	竪穴住居1	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	13.5	37.0	9.0	5.6	
95	竪穴住居1	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	20.0	17.0	7.2	2.7	
96	竪穴住居2	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	完	53.0	49.5	7.3	18.7	
97	竪穴住居2	スクレイパー	Ⅳ	サヌカイト	欠	60.5	48.5	5.7	15.3	
98	竪穴住居2	R．F		サヌカイト	欠	71.5	55.0	13.8	42.3	
99	竪穴住居2	石核？（板状素材）		サヌカイト	完	102.5	105.0	20.8	172.9	
100	竪穴住居2	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	欠	98.0	66.0	22.2	146.1	
101	竪穴住居2	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	14.0	14.0	2.8	0.5	
102	竪穴住居2	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	17.5	17.0	3.8	0.8	
103	竪穴住居2	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	20.0	13.5	2.2	0.4	
104	竪穴住居2	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	21.5	11.5	2.6	0.7	
105	竪穴住居2	石鏃	Ⅰb	サヌカイト	欠	25.0	19.0	2.7	1.1	
106	竪穴住居2	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	12.0	10.0	2.4	0.2	
107	竪穴住居2	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	15.5	12.0	2.6	0.4	
108	竪穴住居2	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	21.0	13.0	2.8	0.7	
109	竪穴住居2	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	24.0	15.0	3.8	0.9	
110	竪穴住居2	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	26.5	19.0	2.8	1.0	
111	竪穴住居2	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	13.0	9.0	2.3	0.2	
112	竪穴住居2	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	15.0	10.5	2.3	0.3	
113	竪穴住居2	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	20.5	19.0	2.9	0.7	
114	竪穴住居2	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	21.5	16.5	3.9	0.8	
115	竪穴住居2	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	21.5	18.0	3.8	0.8	
116	竪穴住居2	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	完	22.5	14.5	3.3	0.8	
117	竪穴住居2	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	25.0	15.5	3.7	0.9	
118	竪穴住居2	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	完	24.5	16.0	2.8	0.9	
119	竪穴住居2	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	欠	24.5	18.5	4.0	1.2	
120	竪穴住居2	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	33.0	16.0	2.7	1.0	
121	竪穴住居2	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	16.0	11.0	2.0	0.3	
122	竪穴住居2	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	完	17.0	13.5	2.4	0.3	
123	竪穴住居2	石鏃	Ⅶb	サヌカイト	欠	17.5	14.5	2.7	0.5	
124	竪穴住居2	石鏃	Ⅶb	サヌカイト	欠	24.5	13.0	3.3	0.7	
125	竪穴住居2	石鏃	Ⅶb	サヌカイト	完	26.0	14.0	3.0	0.6	
126	竪穴住居2	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	欠	25.5	17.0	3.3	1.1	
127	竪穴住居2	石鏃	Ⅴb	サヌカイト	欠	19.0	17.0	2.7	0.6	
128	竪穴住居2	石鏃	？	サヌカイト	欠	22.5	21.5	2.3	1.2	
129	竪穴住居2	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	18.5	11.5	2.6	0.6	
130	竪穴住居2	石鏃	Ⅲ	サヌカイト	完	32.5	15.0	6.0	3.0	
131	竪穴住居2	石錐	Ⅲ	サヌカイト	完	25.0	6.5	4.6	0.5	
132	竪穴住居2	石錐	Ⅰ？	サヌカイト	欠	27.0	10.5	3.8	1.2	
133	竪穴住居2	石錐	Ⅲ	サヌカイト	完	25.0	7.0	3.2	0.6	
134	竪穴住居2	石錐	Ⅰ？	サヌカイト	欠	28.0	8.5	5.8	1.6	
135	竪穴住居2	石錐	Ⅰ？	サヌカイト	完	30.0	17.0	3.6	1.3	
136	竪穴住居2	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	25.5	15.0	3.6	1.2	
137	竪穴住居2	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	32.0	23.0	5.2	2.6	
138	竪穴住居2	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	36.0	16.5	5.8	1.9	
139	竪穴住居2	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	36.5	15.0	7.1	3.3	
140	竪穴住居2	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	51.5	13.0	4.5	2.1	
141	竪穴住居2	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	20.5	10.0	4.2	0.6	
142	竪穴住居2	石錐	Ⅱ	サヌカイト	完	18.0	12.5	2.7	0.5	
143	竪穴住居2	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	14.5	18.0	5.2	1.7	
144	竪穴住居2	楔形石器？	Ⅰa	サヌカイト	欠	22.5	22.5	7.3	4.3	
145	竪穴住居2	楔形石器？	Ⅰa	サヌカイト	完	22.0	24.0	5.6	3.4	
146	竪穴住居2	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	36.0	23.5	6.5	5.6	
147	竪穴住居2	楔形石器	Ⅲ	サヌカイト	完	43.5	30.0	10.2	14.2	
148	竪穴住居2	楔形石器	Ⅲ	サヌカイト	完	48.5	39.5	12.0	23.1	
149	竪穴住居2	スクレイパー？	Ⅰa	サヌカイト	完	77.0	70.0	13.5	74.0	
150	竪穴住居2	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	完	54.0	73.0	10.5	47.9	
151	竪穴住居2	打製石鍬		安山岩	欠	55.0	51.5	12.7	42.7	磨耗有
152	竪穴住居2	敲石		溶結凝灰岩	欠	45.4	78.2	46.0	217.0	

番号	出土地点	器　種	型式	石　材	残存率	長さ	幅	厚み	重量	備　考
153	竪穴住居 2	管玉		緑色凝灰岩	欠	8.5	7.8	6.9	0.54	
154	竪穴住居 2	管玉		緑色凝灰岩	欠	11.9	4.4	3.9	0.32	
155	竪穴住居 2	剝片		緑色凝灰岩		20.5	10.4	8.1	1.30	
156	竪穴住居 2	剝片		緑色凝灰岩		14.6	16.9	5.5	1.21	
157	竪穴住居 2	剝片		緑色凝灰岩		19.9	10.1	3.3	0.89	
158	竪穴住居 2	剝片		緑色凝灰岩		13.1	6.9	3.9	0.39	
159	竪穴住居 2	剝片		緑色凝灰岩		10.8	11.1	5.2	0.54	
160	竪穴住居 2	剝片		緑色凝灰岩		16.6	17.1	3.0	1.07	
161	竪穴住居 2	剝片		緑色凝灰岩		21.1	25.9	9.9	3.95	
162	竪穴住居 2	剝片		緑色凝灰岩		13.4	12.6	5.9	0.99	
163	竪穴住居 2	剝片		緑色凝灰岩		14.3	18.4	6.2	1.53	
164	竪穴住居 2	剝片		メノウ		22.7	4.8	2.5	0.36	
165	竪穴住居 2	錐？		メノウ		11.6	5.5	2.9	0.27	
166	竪穴住居 2	錐？		メノウ		9.2	2.3	2.8	0.08	
167	竪穴住居 2	錐？		メノウ		8.1	3.8	2.0	0.08	
168	竪穴住居 2	錐？		メノウ		8.0	3.7	2.3	0.07	
169	竪穴住居 2	錐？		メノウ		8.6	3.1	2.2	0.08	
170	竪穴住居 2	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	19.0	10.5	2.8	0.4	
171	竪穴住居 2	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	20.0	13.5	2.1	0.5	
172	竪穴住居 2	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	21.0	17.0	3.0	0.9	
173	竪穴住居 2	石鏃	Ⅰb	サヌカイト	完	21.0	15.5	2.8	0.6	
174	竪穴住居 2	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	17.0	10.5	2.8	0.3	
175	竪穴住居 2	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	18.5	11.0	2.2	0.4	
176	竪穴住居 2	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	21.0	13.5	2.2	0.6	
177	竪穴住居 2	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	22.0	14.0	1.8	0.4	
178	竪穴住居 2	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	22.5	14.0	2.9	0.7	
179	竪穴住居 2	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	23.0	14.5	2.9	0.8	
180	竪穴住居 2	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	11.5	9.0	1.8	0.1	
181	竪穴住居 2	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	12.5	12.0	2.1	0.2	
182	竪穴住居 2	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	完	15.0	11.0	2.6	0.4	
183	竪穴住居 2	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	完	15.5	12.0	3.2	0.4	
184	竪穴住居 2	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	18.0	12.5	2.8	0.4	
185	竪穴住居 2	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	19.0	16.0	3.0	0.6	
186	竪穴住居 2	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	24.0	16.0	2.3	0.7	
187	竪穴住居 2	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	完	14.0	12.0	2.7	0.3	
188	竪穴住居 2	石鏃	Ⅶb	サヌカイト	欠	16.0	14.5	2.8	0.4	
189	竪穴住居 2	石鏃	Ⅶb	サヌカイト	欠	10.5	15.5	2.7	0.4	
190	竪穴住居 2	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	14.0	8.5	2.3	0.3	
191	竪穴住居 2	石鏃	Ⅲ？	サヌカイト	完	13.0	9.0	3.4	0.4	
192	竪穴住居 2	石鏃	Ⅱc	サヌカイト	欠	11.0	14.5	2.5	0.3	
193	竪穴住居 2	楔形石器	Ⅰb	サヌカイト	完	18.0	15.5	4.2	1.2	
194	竪穴住居 2	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	完	20.0	21.0	4.5	2.4	
195	竪穴住居 2	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	23.0	15.0	4.2	1.4	
196	竪穴住居 2	石錐	Ⅳ	サヌカイト	欠	47.0	18.0	9.0	6.9	
197	竪穴住居 2	砥石		砂岩	完	500.7	236.8	106.4	17.5kg	研磨溝有
198	竪穴住居 2	敲石兼磨石		安山岩	完	66.0	96.5	62.5	608.9	
199	竪穴住居 2	砥石		半花崗岩	完	225.3	90.0	99.5	2129.0	研磨溝有
200	竪穴住居 3	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	24.5	16.5	3.2	1.1	
201	竪穴住居 3	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	22.0	15.5	3.5	1.1	研磨溝有
202	竪穴住居 3	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	21.5	17.5	4.0	1.2	
203	竪穴住居 3	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	21.5	19.0	3.5	1.3	
204	竪穴住居 3	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	23.0	22.5	3.3	1.5	
205	竪穴住居 3	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	28.5	16.5	3.9	1.6	
206	竪穴住居 3	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	30.5	18.0	3.5	1.8	
207	竪穴住居 3	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	33.0	20.0	4.9	2.0	
208	竪穴住居 3	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	34.0	25.5	6.5	3.9	
209	竪穴住居 3	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	欠	15.5	12.0	2.1	0.3	
210	竪穴住居 3	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	14.5	16.0	2.7	0.5	
211	竪穴住居 3	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	欠	17.5	19.5	3.1	0.8	
212	竪穴住居 3	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	完	21.5	15.0	2.4	0.6	
213	竪穴住居 3	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	22.0	17.0	3.3	1.0	
214	竪穴住居 3	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	23.5	14.0	2.7	0.8	
215	竪穴住居 3	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	29.0	18.0	4.2	1.3	
216	竪穴住居 3	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	31.0	20.5	5.6	2.7	
217	竪穴住居 3	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	25.0	16.5	6.0	2.5	
218	竪穴住居 3	石鏃	Ⅴa	サヌカイト	欠	16.5	16.0	2.9	0.6	
219	竪穴住居 3	石鏃	Ⅴa	サヌカイト	完	25.0	14.5	3.2	0.9	
220	竪穴住居 3	石錐	Ⅱ	サヌカイト	完	16.0	9.5	2.5	0.4	
221	竪穴住居 3	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	21.5	11..5	5.0	1.0	
222	竪穴住居 3	石錐	Ⅲ	サヌカイト	完	29.5	9.5	5.3	1.4	
223	竪穴住居 3	石錐	Ⅱ	サヌカイト	欠	31.5	18.5	5.5	3.0	
224	竪穴住居 3	石錐	Ⅰ	サヌカイト	完	38.5	15.0	4.8	2.0	
225	竪穴住居 3	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	59.5	28.0	6.1	7.7	
226	竪穴住居 3	U．F		サヌカイト	完	55.5	43.5	6.2	15.7	
227	竪穴住居 3	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	完	55.5	36.0	13.0	27.3	
228	竪穴住居 3	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	37.0	28.0	7.5	9.5	

番号	出土地点	器　種	型式	石　材	残存率	長さ	幅	厚み	重量	備　考
229	竪穴住居3	楔形石器	Ⅱb	サヌカイト	完	39.5	22.5	7.5	6.9	
230	竪穴住居3	磨石		角閃石玢岩	完	88.3	88.1	61.9	738.2	主要研磨面3有
231	土壙34	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	完	55.5	29.0	9.3	9.7	
232	土壙35	石鏃	Ⅳa	サヌカイト	欠	9.0	13.5	2.8	0.5	
233	土壙58	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	完	45.5	40.5	6.0	12.8	
234	土壙58	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	欠	53.5	30.5	5.7	10.2	
235	土壙62	砥石		細粒砂岩	欠	102.9	38.1	45.2	258.0	
236	土壙62	砥石		凝灰質砂岩	欠	65.0	35.2	27.0	53.5	
237	土壙62	敲石？		閃緑岩	欠	89.8	78.5	49.5	503.6	
238	土壙65	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	欠	52.0	37.0	9.3	18.2	
239	土壙72	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	完	47.0	27.0	6.8	8.5	
240	土壙79	石錐	Ⅲ	サヌカイト	欠	19.9	10.0	4.1	0.9	
241	土壙79	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	完	18.1	16.1	3.0	0.7	
242	土壙79	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	欠	25.4	14.5	3.1	0.9	
243	土壙79	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	20.8	19.1	6.1	3.0	
244	土壙79	スクレイパー	Ⅲ	サヌカイト	欠	33.0	48.7	4.9	9.4	
245	土壙83	スクレイパー？	Ⅰa	サヌカイト	欠	70.5	48.0	11.8	44.7	磨耗有
246	土壙95	楔形石器？	Ⅰb	サヌカイト	完	34.5	34.0	6.8	7.9	
247	土壙95	U・F		サヌカイト	完	45.5	30.5	5.9	8.7	
248	柱穴38	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	16.0	14.0	3.0	0.6	
249	柱穴40	石鏃	Ⅲ	サヌカイト	完	21.5	16.5	3.5	0.9	
250	柱穴45	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	26.5	20.5	4.5	2.2	
251	柱穴36	石錐	Ⅱ	サヌカイト	欠	16.5	15.0	3.3	0.7	
252	柱穴42	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	26.0	18.0	3.0	1.3	
253	柱穴41	石錐	Ⅲ	サヌカイト	完	30.0	11.0	5.0	1.4	
254	柱穴39	石錐	Ⅲ	サヌカイト	完	31.5	12.0	6.0	2.2	
255	柱穴24	楔形石器	Ⅲ	サヌカイト	完	47.0	35.0	12.0	19.8	
256	柱穴38	スクレイパー？	Ⅰa	サヌカイト	完	58.0	24.0	8.0	10.6	
257	柱穴43	打製石鏃	Ⅱ	砂岩	欠	91.0	54.0	13.0	90.1	磨耗・線状痕有
258	柱穴44	砥石？		石英斑岩	欠	62.4	60.1	35.7	165.0	
259	溝1	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	欠	21.0	18.5	3.8	1.1	
260	溝1	スクレイパー	Ⅲ	サヌカイト	完	35.5	46.5	5.3	10.6	
261	溝1	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	欠	77.5	50.0	6.8	29.7	
262	溝3	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	欠	23.0	14.0	2.7	0.5	
263	溝3	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	19.0	14.5	3.5	0.7	
264	溝3	太型蛤刃石斧		角閃石安山岩	欠	99.7	78.4	45.7	598.0	
265	溝3	台石			完	348.5	154.7	168.0	14kg	研磨面有
266	溝4	石鏃	Ⅳa	サヌカイト	欠	16.5	13.0	2.3	0.5	
267	溝4	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	17.0	11.5	4.0	0.6	
268	溝4	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	完	24.5	15.0	2.4	0.7	
269	溝4	石鏃	Ⅶb	サヌカイト	完	25.0	18.0	2.8	1.0	
270	溝4	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	欠	15.0	23.0	6.5	3.2	使用前の楔？
271	溝4	楔形石器？	Ⅰa	サヌカイト	欠	38.0	34.0	7.5	12.1	
272	溝4	柱状片刃石斧？		泥岩と砂岩の互層	欠	41.0	16.5	14.0	8.2	
273	溝4	石錘	Ⅰa	石英斑岩	欠	55.0	36.8	23.1	60.0	
274	溝4	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	21.5	15.0	4.0	1.1	
275	溝4	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	28.0	18.0	3.5	1.8	
276	溝4	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	22.0	15.5	3.5	1.0	
277	溝4	石鏃	Ⅴa	サヌカイト	欠	26.0	15.5	3.5	1.0	
278	溝4	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	欠	26.5	22.0	3.5	1.6	
279	溝4	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	欠	28.0	22.0	5.0	2.6	
280	溝4	石鏃	Ⅰ？	サヌカイト	欠	30.0	11.5	4.0	1.5	
281	溝4	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	37.0	18.0	5.7	3.6	
282	溝4	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	44.0	24.0	6.8	6.3	
283	溝4	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	30.0	23.0	5.0	4.0	
284	溝4	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	28.0	31.0	11.0	11.9	
285	溝4	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	39.0	35.0	10.5	13.2	
286	溝4	楔形石器	Ⅰb	サヌカイト	完	40.0	23.0	7.0	6.6	側面研磨面有
287	溝4	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	完	38.0	28.0	13.0	14.7	
288	溝4	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	完	27.0	31.0	9.0	9.0	
289	溝4	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	完	26.0	39.0	5.7	9.3	
290	溝4	楔形石器	Ⅰb	サヌカイト	完	40.0	36.0	8.0	13.2	
291	溝4	磨耗有剝片		サヌカイト	欠	29.0	43.0	6.5	7.3	
292	溝4	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	欠	63.5	45.0	10.5	21.0	
293	溝4	磨製石包丁→？		頁岩	欠	59.0	56.0	8.5	32.0	破面研磨、再加工
294	溝4	柱状片刃石斧未製品		流紋岩	完	85.5	21.0	20.0	59.2	
295	溝4	石錘	Ⅲa	斑れい岩	完	42.5	35.9	37.2	98.0	
296	溝4	石錘	Ⅱa	花崗斑岩	完	58.9	46.1	17.9	72.0	
297	溝6	石鏃	？	サヌカイト	欠	17.0	14.0	2.5	0.7	
298	溝6	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	24.0	17.5	4.5	1.3	
299	河道1	スクレイパー？	Ⅲ	サヌカイト	完	70.0	43.5	9.0	23.4	
300	河道1	楔形石器？	Ⅱb	サヌカイト，	欠	109.5	72.0	15.2	129.1	
301	河道1	石核		流紋岩	完	62.0	54.0	41.0	160.1	
302	第1低位部	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	23.0	15.5	4.2	1.2	
303	第1低位部	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	完	27.0	16.0	4.2	1.1	
304	第1低位部	打製石鍬		サヌカイト	完	67.0	64.5	29.5	108.7	

番号	出土地点	器　種	型式	石　材	残存率	長さ	幅	厚み	重量	備　考
305	第1低位部	台石→敲石or磨石		斑岩	完	155.1	100.8	67.6	1569.0	
306	第1低位部	敲石		花崗岩	欠	94.1	103.9	65.1	693.0	
307	第1微高地	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	18.5	11.0	2.8	0.5	
308	第1微高地	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	23.5	16.5	4.1	1.6	
309	第1微高地	石鏃	Ⅶb	サヌカイト	欠	25.0	16.0	3.5	0.8	
310	第1微高地	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	27.5	18.0	3.5	1.6	
311	第1微高地	石錐	Ⅳ	サヌカイト	欠	33.0	15.5	5.5	3.0	
312	第1微高地	石錐？	Ⅱ	サヌカイト	完	38.0	27.5	4.5	4.5	
313	第1微高地	楔形石器	Ⅲ	サヌカイト	完	58.0	40.5	12.7	38.0	
314	第1微高地	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	29.0	18.5	7.0	4.2	
315	第1微高地	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	完	83.0	51.5	27.5	107.0	
316	第1微高地	スクレイパー？	Ⅲ	サヌカイト	完	36.0	37.0	8.5	13.2	
317	第1微高地	スクレイパー？	Ⅰb	サヌカイト	完	46.5	32.5	10.4	12.6	
318	第1微高地	打製石鍬	Ⅱ	流紋岩	完	114.0	45.5	16.5	121.4	磨耗有
319	第1微高地	石斧未製品		安山岩	欠	121.0	71.0	50.8	656.2	
320	第1微高地	石斧未製品		安山岩	欠	54.0	63.0	55.0	251.8	
321	第2低位部	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	21.5	12.5	2.4	0.7	
322	第2低位部	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	21.0	12.5	3.5	0.7	
323	第2低位部	→石錐	Ⅱ	サヌカイト	完	33.5	19.5	5.2	2.8	磨製石器片利用
324	第2低位部	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	33.0	33.5	12.6	17.8	
325	第2低位部	楔形石器	Ⅲ	サヌカイト	欠	51.5	37.5	10.5	20.3	
326	第2低位部	スクレイパー		サヌカイト	完	33.5	25.0	12.0	9.2	
327	第2低位部	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	完	43.0	46.0	13.0	20.4	
328	第2低位部	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	完	36.0	63.5	19.5	47.2	
329	第2低位部	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	完	38.0	58.5	18.0	51.5	
330	第2低位部	スクレイパー	Ⅲ	サヌカイト	完	39.5	29.0	8.0	8.1	
331	第2低位部	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	欠	62.0	37.0	10.0	22.3	磨耗有
332	第2低位部	スクレイパー	Ⅳ	サヌカイト	欠	74.5	51.5	7.5	21.9	
333	第2低位部	スクレイパー	Ⅳ	サヌカイト	完	85.0	49.0	8.8	39.2	
334	第2低位部	打製石鍬	Ⅰ	サヌカイト	完	112.5	51.0	22.0	144.6	磨耗・線条痕有
335	第2低位部	砥石		半花崗岩	欠	72.0	63.0	32.0	199.6	研磨溝有
336	第3低位部	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	完	22.0	16.5	2.7	0.6	
337	第3低位部	石錐	Ⅰ	サヌカイト	完	31.0	14.0	3.6	1.3	
338	第3低位部	楔形石器	Ⅰb	サヌカイト	完	56.5	36.0	19.0	24.6	
339	第3低位部	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	28.0	44.0	11.0	13.6	
340	第3低位部	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	欠	270.4	97.0	14.0	324.0	大形石包丁？
341	第3低位部	敲石		安山岩	完	90.0	75.0	63.5	690.0	研磨面有
342	第3低位部	太型蛤刃石斧		安山岩	欠	95.7	68.0	47.4	480.0	
343	竪穴住居7	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	48.5	25.0	3.3	3.6	
344	竪穴住居9	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	28.5	15.5	3.5	1.8	
345	井戸2	台石（石皿？）		石英斑岩	完	136.5	166.3	38.2	1405.0	
346	井戸6	楔形石器？	Ⅰb	サヌカイト	完	45.5	28.5	5.6	7.0	
347	土壙103	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	完	23.5	18.0	3.8	0.8	
348	土壙122	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	32.5	15.0	4.5	2.6	
349	土壙128	石鏃？	Ⅶ	サヌカイト	欠	25.0	10.0	4.5	1.1	
350	土壙133	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	完	30.0	32.0	14.0	14.1	
351	土壙136	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	完	33.0	17.0	3.5	1.2	
352	溝25	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	22.5	21.0	5.0	2.8	
353	溝40	石鏃	Ⅴa	サヌカイト	欠	28.5	18.0	4.0	2.5	
354	溝56	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	16.0	16.0	3.0	0.6	
355	溝56	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	18.0	15.0	3.0	0.5	
356	溝56	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	21.0	15.0	3.0	1.2	
357	溝56	石鏃	Ⅴa	サヌカイト	欠	26.0	14.0	4.0	1.2	
358	溝56	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	25.5	12.0	3.5	1.0	
359	溝56	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	28.5	18.0	4.7	2.1	
360	溝56	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	26.0	13.0	4.0	1.3	
361	溝56	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	37.5	27.0	6.0	5.3	
362	溝56	石槍状石器		頁岩	完	109.0	22.0	6.0	21.2	局部研磨
363	弥生時代水田層	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	13.0	11.0	2.2	0.3	
364	弥生時代水田層	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	23.0	16.0	3.6	1.2	
365	弥生時代水田層	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	27.0	17.5	4.5	2.2	
366	弥生時代水田層	石錐	Ⅲ	サヌカイト	完	39.0	7.0	3.5	0.9	
367	弥生時代水田層	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	欠	27.5	27.0	6.5	5.8	磨耗有
368	弥生時代水田層	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	28.5	19.5	4.8	2.4	
369	弥生時代水田層	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	完	34.0	20.5	5.0	2.6	
370	水田7	打製石包丁		サヌカイト	欠	73.5	42.0	9.5	28.8	磨耗有
371	水田7	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	完	105.0	76.0	18.0	142.3	
372	水田7	打製石鍬	Ⅱ	流紋岩	完	103.5	42.0	17.0	94.2	磨耗有
373	凹地2	楔形石器？	Ⅰa	サヌカイト	完	39.0	35.5	10.5	15.0	
374	河道2	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	25.5	15.5	4.3	1.5	
375	河道2	楔形石器	Ⅱ	サヌカイト	完	44.0	32.0	12.7	24.1	
376	河道2	スクレイパー	Ⅱ	サヌカイト	完	60.0	56.5	6.7	17.5	
377	河道2	磨製石包丁		頁岩	欠	45.0	40.0	7.4	18.9	
378	河道2	扁平片刃石斧		頁岩か粘板岩	欠	53.0	53.0	16.0	52.3	線条痕有
379	河道2	太型蛤刃石斧		安山岩	欠	92.9	69.3	45.5	397.0	
380	河道2	砥石？		泥岩	欠	60.9	34.1	10.8	32.7	擦痕有

番号	出土地点	器　種	型式	石　材	残存率	長さ	幅	厚み	重量	備　考
381	河道2	礫石		花崗斑岩	欠	88.5	53.3	56.5	364.9	
382	第1微高地	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	9.0	13.5	2.5	0.4	
383	第1微高地	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	15.5	12.0	2.5	0.3	
384	第1微高地	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	16.5	13.5	1.9	0.3	
385	第1微高地	石鏃	Ⅵb	サヌカイト	完	16.5	12.5	2.6	0.4	
386	第1微高地	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	20.5	13.0	3.2	0.7	
387	第1微高地	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	19.5	12.0	2.2	0.4	
388	第1微高地	石鏃	Ⅰb	サヌカイト	完	20.0	15.5	3.2	0.7	
389	第1微高地	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	22.0	14.5	3.8	0.8	
390	第1微高地	石鏃	Ⅳa	サヌカイト	欠	24.0	20.0	3.3	1.2	
391	第1微高地	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	29.5	15.5	3.5	1.3	
392	第1微高地	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	35.0	19.5	4.4	3.2	
393	第1微高地	石錐	Ⅲ	サヌカイト	欠	23.5	9.5	4.2	1.1	
394	第1微高地	石錐	Ⅱ	サヌカイト	完	33.0	28.5	4.0	3.7	
395	第1微高地	石錐	Ⅱ	サヌカイト	完	38.5	27.5	5.0	4.5	
396	第1微高地	スクレイパー	Ⅲ	サヌカイト	完	53.0	36.0	6.2	10.0	
397	第1微高地	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	37.5	31.0	8.5	10.8	
398	第1微高地	R．F		サヌカイト	完	41.5	30.5	4.8	6.1	
399	第1微高地	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	欠	61.5	50.0	12.0	39.9	
400	第1微高地	?		サヌカイト	完	148.0	97.0	20.6	274.5	
401	第2微高地(西)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	14.0	13.0	3.4	0.5	
402	第2微高地(西)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	15.0	11.0	1.8	0.2	
403	第2微高地(西)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	19.5	14.5	3.5	0.9	
404	第2微高地(西)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	20.0	16.5	2.8	0.9	
405	第2微高地(西)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	20.5	13.5	2.3	0.7	
406	第2微高地(西)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	21.0	13.5	2.9	0.7	
407	第2微高地(西)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	21.5	15.0	3.5	1.0	
408	第2微高地(西)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	27.0	25.5	5.3	3.6	
409	第2微高地(西)	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	23.0	11.5	4.2	0.7	
410	第2微高地(西)	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	21.5	12.5	2.7	0.6	
411	第2微高地(西)	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	完	23.5	16.5	3.3	0.7	
412	第2微高地(西)	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	24.0	17.0	2.8	0.9	
413	第2微高地(西)	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	27.0	18.5	3.8	1.1	
414	第2微高地(西)	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	欠	27.0	15.5	2.7	0.6	
415	第2微高地(西)	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	欠	28.0	20.5	6.0	1.8	
416	第2微高地(西)	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	欠	23.5	18.0	4.2	1.0	
417	第2微高地(西)	石鏃	Ⅴa	サヌカイト	欠	25.0	15.5	3.0	1.0	
418	第2微高地(西)	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	28.0	12.0	3.3	1.1	
419	第2微高地(西)	石錐	Ⅳ	サヌカイト	完	68.0	26.5	8.5	15.4	
420	第2微高地(西)	尖頭器		サヌカイト	欠	62.5	44.0	11.5	23.8	
421	第2微高地(西)	楔形石器?		サヌカイト	完	44.5	37.0	22.0	41.6	
422	第2微高地(西)	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	完	40.0	23.0	10.7	10.8	
423	第2微高地(西)	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	39.5	35.5	10.3	13.5	
424	第2微高地(西)	楔形石器?		サヌカイト	欠	61.0	53.0	12.6	28.4	
425	第2微高地(西)	スクレイパー→楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	97.5	53.0	17.8	88.1	
426	第2微高地(西)	スクレイパー	Ⅳ	サヌカイト	欠	62.0	33.5	4.0	9.1	
427	第2微高地(西)	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	完	61.0	45.5	8.8	26.6	
428	第2微高地(西)	打製石鍬?		サヌカイト	完	70.0	69.5	14.8	69.7	
429	第2微高地(西)	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	完	103.5	53.5	11.5	72.9	
430	第2微高地(西)	スクレイパー	Ⅱ	サヌカイト	欠	86.0	40.0	10.6	30.0	
431	第2微高地(西)	打製石鍬?		サヌカイト	欠	20.0	26.0	13.0	5.9	線条痕、光沢有
432	第2微高地(西)	磨耗有剥片		サヌカイト	欠	46.5	50.0	9.7	24.6	
433	第2微高地(西)	打製石鍬		安山岩	欠	13.1	5.5	10.5	112.4	磨耗有
434	第2微高地(西)	太型蛤刃石斧	Ⅱ	安山岩	欠	79.6	66.8	47.0	353.0	
435	第2微高地(西)	円板状石製品		黒色片岩	欠	53.2	43.1	8.2	27.9	
436	第2微高地(東)	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	欠	24.0	22.0	3.0	1.8	
437	第2微高地(東)	R．F		サヌカイト	欠	45.0	32.0	4.0	5.8	
438	第2微高地(東)	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	欠	44.5	35.0	6.0	12.2	
439	第2微高地(東)	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	完	49.5	33.5	5.0	11.9	
440	第2微高地(東)	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	完	75.5	29.5	9.5	22.1	
441	第2微高地(東)	スクレイパー	Ⅰa	サヌカイト	完	88.0	48.0	18.0	57.6	
442	第2微高地(東)	打製石包丁	Ⅰb	サヌカイト	欠	66.0	37.0	9.0	24.7	
443	第2微高地(東)	磨製石包丁	Ⅴa	緑色片岩	欠	69.0	49.5	10.0	52.3	
444	第2微高地(東)	打製石鍬	Ⅰ	流紋岩	欠	60.5	46.0	14.5	51.0	著しく磨耗
445	第2微高地(東)	打製石鍬	Ⅰ?	サヌカイト	欠	88.0	53.0	12.5	80.1	
446	第2微高地(東)	石錘	Ⅰa	砂岩	欠	78.2	60.4	12.2	88.7	
447	第2微高地(東)	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	14.0	11.5	2.5	0.4	
448	第2微高地(東)	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	14.5	14.5	2.5	0.5	
449	第2微高地(東)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	22.0	12.5	3.2	0.8	
450	第2微高地(東)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	21.0	17.5	3.7	1.2	
451	第2微高地(東)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	22.0	17.5	3.7	1.2	
452	第2微高地(東)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	25.5	11.5	4.0	1.3	
453	第2微高地(東)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	22.5	17.0	4.3	1.7	
454	第2微高地(東)	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	完	26.0	16.5	3.5	0.9	
455	第2微高地(東)	石鏃	Ⅴb	サヌカイト	完	24.0	16.5	2.0	0.6	
456	第2微高地(東)	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	25.5	19.5	4.4	1.8	

番号	出土地点	器　種	型式	石　材	残存率	長さ	幅	厚み	重量	備　考
457	第2微高地(東)	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	28.5	18.0	5.0	1.7	
458	第2微高地(東)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	25.0	22.0	5.0	2.9	
459	第2微高地(東)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	30.0	14.0	4.0	1.9	
460	第2微高地(東)	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	26.0	31.0	4.5	3.4	
461	第2微高地(東)	石鏃	Ⅶa	サヌカイト	欠	32.0	26.0	4.6	3.5	
462	第2微高地(東)	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	40.0	26.0	7.5	7.0	
463	第2微高地(東)	石錐？	Ⅲ	サヌカイト	完	33.0	10.0	5.4	1.7	
464	第2微高地(東)	石錐	Ⅲ	サヌカイト	欠	20.5	9.0	3.8	0.7	
465	第2微高地(東)	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	27.0	11.0	4.5	1.2	
466	第2微高地(東)	石錐	Ⅰ	サヌカイト	欠	32.0	13.0	4.0	1.4	
467	第2微高地(東)	石錐	Ⅰ	サヌカイト	完	38.0	16.5	4.6	2.1	
468	第2微高地(東)	石錐	Ⅱ	サヌカイト	完	42.5	19.0	3.0	2.4	
469	第2微高地(東)	石錐	Ⅲ	サヌカイト	完	40.0	13.0	5.0	1.7	
470	第2微高地(東)	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	完	31.5	15.5	7.5	5.2	
471	第2微高地(東)	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	13.0	22.5	6.7	2.9	
472	第2微高地(東)	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	21.0	26.0	6.0	3.7	
473	第2微高地(東)	スクレイパー	Ⅲ	サヌカイト	完	38.0	50.0	6.5	12.6	
474	第2微高地(東)	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	欠	50.0	48.0	8.0	21.4	
475	第2微高地(東)	打製石包丁？		サヌカイト	欠	37.0	38.0	5.5	12.3	磨耗有
476	第2微高地(東)	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	39.0	34.5	15.0	22.6	
477	第2微高地(東)	楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	73.5	41.0	13.5	48.1	
478	第2微高地(東)	楔形石器？	Ⅲ	サヌカイト	完	44.5	44.5	19.5	54.8	
479	第2微高地(東)	楔形石器	Ⅲ	サヌカイト	完	60.0	47.5	20.5	52.2	
480	第2微高地(東)	楔形石器	Ⅰb	サヌカイト	完	53.0	59.5	12.0	44.4	
481	第2微高地(東)	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	欠	80.0	64.0	22.0	108.3	
482	第2微高地(東)	楔形石器	Ⅲ	サヌカイト	完	88.5	60.0	21.0	130.6	
483	第2低位部	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	24.0	16.5	4.5	1.9	
484	第2低位部	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	完	22.5	27.5	7.0	6.0	
485	第2低位部	楔形石器	Ⅱa	サヌカイト	完	81.5	32.5	9.5	28.9	
486	第2低位部	スクレイパー	Ⅰb	サヌカイト	完	69.5	52.0	8.3	31.7	
487	第2低位部	スクレイパー	Ⅳ	サヌカイト	完	66.0	40.0	6.8	17.1	
488	第2低位部	磨製石包丁→？		頁岩	欠	42.5	50.5	7.5	22.8	
489	第2低位部	磨製石包丁		砂岩	欠	45.5	46.0	8.2	15.9	
490	第3微高地	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	20.0	12.0	27.0	0.6	
491	第3微高地	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	24.0	18.0	5.0	1.6	
492	第3微高地	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	欠	27.0	18.0	4.7	2.0	
493	第3微高地	スクレイパー？		サヌカイト	完	30.0	24.0	4.0	3.7	
494	第3微高地	スクレイパー？	Ⅰb	サヌカイト	欠	119.5	56.5	16.3	124.0	
495	第3微高地	敲石		斑岩	完	98.6	75.4	54.0	682.0	
496	第3低位部	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	15.5	10.5	2.0	0.3	
497	第3低位部	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	欠	17.0	15.0	2.5	0.6	
498	第3低位部	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	18.0	12.5	2.5	0.4	
499	第3低位部	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	完	21.0	15.5	3.0	0.7	
500	第3低位部	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	完	23.5	15.0	3.2	1.1	
501	第3低位部	石鏃	Ⅱb	サヌカイト	完	23.0	21.0	4.0	1.4	
502	第3低位部	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	26.5	20.5	4.0	1.5	
503	第3低位部	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	13.0	10.5	2.5	0.3	
504	第3低位部	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	14.5	13.5	3.5	0.5	
505	第3低位部	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	完	22.5	14.5	3.2	1.1	
506	第3低位部	石鏃	Ⅰa	サヌカイト	欠	24.0	18.5	4.8	1.8	
507	第3低位部	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	26.0	21.0	6.0	2.3	
508	第3低位部	石錐	Ⅱ	サヌカイト	完	31.0	27.0	5.5	3.9	一部加工
509	第3低位部	石錐	Ⅳ	サヌカイト	欠	40.0	17.5	9.5	5.7	
510	第3低位部	石錐	Ⅱ	サヌカイト	完	29.0	45.0	5.0	8.7	
511	第3低位部	磨製石包丁→打製石包丁		頁岩	完	64.5	28.0	7.5	16.1	
512	第4低位部	石鏃	Ⅱa	サヌカイト	完	16.5	13.5	3.7	0.7	
513	第4低位部	石錐	Ⅲ	サヌカイト	欠	28.5	11.0	3.6	1.1	
514	第4低位部	石錐	Ⅲ？	サヌカイト	欠	30.0	13.5	5.0	2.4	
515	第4低位部	石包丁→楔形石器	Ⅰa	サヌカイト	完	34.0	50.5	10.5	29.5	磨耗有
516	第4低位部	打製石包丁		サヌカイト	欠	77.5	51.0	11.0	49.0	磨耗有
517	第4低位部	磨製石包丁		安山岩	欠	37.5	11.5	3.9	1.5	磨耗有
518	第4低位部	磨製石包丁		粘板岩	欠	39.0	41.5	8.3	15.2	整形時の擦痕有
519	井戸9	磨製石斧→敲石		砂岩	欠	70.3	79.2	56.7	455.6	
520	井戸11	石皿		玢岩	欠	82.2	132.3	51.0	649.0	

第15表　土製品一覧表

遺物番号	出土地区	遺構・土層名	器　種	計測最大値 (mm) 長さ	幅(径)	厚さ	重量(g)	時　期	備　考
C 1	確認調査	T14、下層	紡錘車	45.4	36.2	6.5	13.20		
C 2	確認調査	T44、3層	円板状土製品	49.0	38.3	7.9	19.60		
C 3	KY 1	土壙22	円板状土製品	37.2	32.1	7.0	9.91	縄文時代晩期後葉	
C 4	KY 1	河道 1	円板状土製品	34.2	30.9	6.9	8.29	縄文時代晩期後葉	
C 5	KY 1	河道 1	円板状土製品	42.0	37.6	6.4	12.84	縄文時代晩期後葉	
C 6	KY 1	河道 1	円板状土製品	49.3	31.0	4.3	8.12	縄文時代晩期後葉	
C 7	KY 1	河道 1	円板状土製品	53.0	51.3	6.4	15.14	縄文時代晩期後葉	
C 8	KY 1	河道 1	円板状土製品	66.7	35.7	8.0	18.98	縄文時代晩期後葉	
C 9	KY 1	河道 1	円板状土製品	59.7	58.8	6.5	25.96	縄文時代晩期後葉	
C 10	JO	河道 2	円板状土製品	37.4	31.1	5.5	8.17	縄文時代晩期中葉	
C 11	JO	河道 2	円板状土製品	63.8	57.7	4.9	20.85	縄文時代晩期中葉	
C 12	JO	河道 2	円板状土製品	91.3	86.1	8.5	87.96	縄文時代晩期中葉	
C 13	TD 4	第 1 低位部及び第 1 微高地	円板状土製品	42.5	30.6	6.7	9.79	縄文時代晩期	
C 14	AT	竪穴住居 1	紡錘車	37.0	35.0	5.5	7.43	弥生時代前期中葉	
C 15	AT	竪穴住居 1	紡錘車	27.0	28.0	6.5	5.01	弥生時代前期中葉	未製品？
C 16	DE	竪穴住居 2	紡錘車	43.0	26.5	7.0	9.10	弥生時代前期前葉～中葉	未製品？
C 17	DE	竪穴住居 2	紡錘車	41.9	27.3	8.5	8.11	弥生時代前期前葉～中葉	
C 18	JY	竪穴住居 3	紡錘車	43.0	28.2	11.0	11.82	弥生時代前期前葉～中葉	
C 19	JY	竪穴住居 3	紡錘車	44.2	44.0	7.2	15.73	弥生時代前期前葉～中葉	
C 20	JY	竪穴住居 3	紡錘車	49.5	49.0	7.5	20.59	弥生時代前期前葉～中葉	
C 21	JY	竪穴住居 3	紡錘車	31.5	31.0	7.5	9.17	弥生時代前期前葉～中葉	未製品
C 22	JY	竪穴住居 3	紡錘車	40.6	37.5	6.4	9.96	弥生時代前期前葉～中葉	未製品
C 23	JY	竪穴住居 3	紡錘車	36.9	35.8	11.0	17.40	弥生時代前期前葉～中葉	未製品
C 24	JY	竪穴住居 3	紡錘車	31.1	23.6	10.5	10.48	弥生時代前期前葉～中葉	未製品
C 25	JY	竪穴住居 3	紡錘車	38.2	29.0	7.2	5.80	弥生時代前期前葉～中葉	
C 26	JY	竪穴住居 3	紡錘車	40.1	25.8	6.5	7.65	弥生時代前期前葉～中葉	
C 27	JY	竪穴住居 3	紡錘車	38.2	24.9	8.2	7.46	弥生時代前期前葉～中葉	
C 28	JY	竪穴住居 3	紡錘車	38.8	37.0	5.6	7.50	弥生時代前期前葉～中葉	未製品？
C 29	JY	竪穴住居 3	紡錘車	39.0	37.5	6.2	11.67	弥生時代前期前葉～中葉	未製品？
C 30	JY	竪穴住居 3	紡錘車	32.0	29.0	6.5	6.68	弥生時代前期前葉～中葉	未製品？
C 31	JY	竪穴住居 3	紡錘車	33.8	30.1	7.2	7.40	弥生時代前期前葉～中葉	未製品？
C 32	JY	竪穴住居 3	紡錘車	41.2	32.2	7.0	9.77	弥生時代前期前葉～中葉	未製品？
C 33	JY	竪穴住居 3	紡錘車	34.2	18.6	6.5	4.87	弥生時代前期前葉～中葉	未製品？
C 34	JY	竪穴住居 3	紡錘車	35.5	19.9	7.0	4.95	弥生時代前期前葉～中葉	未製品？
C 35	JY	竪穴住居 3	紡錘車	35.1	16.1	7.0	3.88	弥生時代前期前葉～中葉	未製品？
C 36	AT	土壙32	円板状土製品	30.5	28.2	5.5	5.52	弥生時代前期	
C 37	FU	土壙79	円板状土製品	35.5	23.8	5.1	4.68	弥生時代前期前葉～中葉	
C 38	TO	土壙91		77.5	46.5	47.5	168.91	弥生時代前期中葉	
C 39	H11	火処29	円板状土製品	3.9	2.7	6.2	7.26	弥生時代前期前葉～中葉	
C 40	H12	柱穴35	円板状土製品	41.9	35.3	6.9	11.60	弥生時代前期中葉	
C 41	AT	溝 1	円板状土製品	55.5	58.0	9.0	37.64	弥生時代前期中葉	
C 42	TO	溝 4	土錘	55.8	42.7		105.93	弥生時代前期中葉～中期前葉	
C 43	TO	溝 4	紡錘車	38.9	31.0	16.0	12.71	弥生時代前期中葉～中期前葉	
C 44	TO	溝 4	紡錘車	39.9	22.7	7.5	6.56	弥生時代前期中葉～中期前葉	
C 45	TO	溝 4	紡錘車	38.9	30.0	7.5	7.98	弥生時代前期中葉～中期前葉	未製品
C 46	TO	溝 4	紡錘車	56.0	52.9	6.5	22.35	弥生時代前期中葉～中期前葉	未製品
C 47	TO	溝 4	紡錘車	51.0	50.0	13.0	32.98	弥生時代前期中葉～中期前葉	
C 48	TO	溝 5	紡錘車	46.6	44.9	14.1	30.46	弥生時代前期前葉～中葉	
C 49	TO	溝 5	紡錘車	55.0	54.8	11.5	37.73	弥生時代前期前葉～中葉	
C 50	TO	溝 6	紡錘車	56.3	55.6	12.0	39.18	弥生時代前期前葉～中葉	
C 51	JO	河道 2		50.7	35.6	39.2	42.92	弥生時代前期～中期前葉	
C 52	H12	第 1 低位部	円板状土製品	32.4	32.0	5.8	7.11	弥生時代前期～中期前葉	
C 53	H12	第 1 低位部	円板状土製品	37.3	34.8	6.9	10.46	弥生時代前期～中期前葉	
C 54	H12	第 1 低位部	円板状土製品	45.2	36.8	7.5	12.88	弥生時代前期～中期前葉	
C 55	H12	第 1 低位部	円板状土製品	38.5	37.8	9.1	17.49	弥生時代前期～中期前葉	
C 56	H12	第 1 低位部	円板状土製品	48.9	41.2	7.1	16.73	弥生時代前期～中期前葉	
C 57	H12	第 1 低位部	円板状土製品	52.8	51.9	5.6	17.30	弥生時代前期～中期前葉	
C 58	H12	第 1 低位部	円板状土製品	56.4	41.8	7.9	22.88	弥生時代前期～中期前葉	
C 59	H12	第 1 低位部	円板状土製品	63.7	60.5	8.0	30.39	弥生時代前期～中期前葉	
C 60	H12	第 1 低位部	円板状土製品	64.0	63.1	7.5	37.62	弥生時代前期～中期前葉	
C 61	TD 6	第 1 微高地	円板状土製品	43.5	31.8	7.1	10.19	弥生時代前期～中期前葉	

遺物番号	出土地区	遺構・土層名	器種	計測最大値 (mm) 長さ	幅(径)	厚さ	重量(g)	時期	備考
C 62	TD 3	第1微高地	円板状土製品	47.2	35.4	6.5	11.38	弥生時代前期～中期前葉	
C 63	H12	第1微高地	円板状土製品	48.6	44.1	7.6	16.79	弥生時代前期～中期前葉	
C 64	TD 4	第1微高地	円板状土製品	61.6	43.5	8.0	25.16	弥生時代前期～中期前葉	
C 65	TD 6	第1微高地	円板状土製品	45.2	42.0	6.3	14.13	弥生時代前期～中期前葉	
C 66	TD 4	第1微高地	紡錘車	43.9	26.8	6.5	9.40	弥生時代前期～中期前葉	
C 67	JY	第2低位部	円板状土製品	38.7	34.8	9.1	13.93	弥生時代前期～中期前葉	
C 68	JY	第2低位部	紡錘車	60.5	60.5	19.6	66.47	弥生時代前期～中期前葉	
C 69	TO	第3低位部	紡錘車	24.6	22.4	7.5	4.44	弥生時代前期～中期前葉	
C 70	TD 2	弥生時代水田層	分銅形土製品	55.7	35.0	10.7	18.38	弥生時代後期	
C 71	KY 1	弥生時代水田層	土錘	74.6	30.6		56.23	弥生時代後期	
C 72	TO	弥生時代水田層		64.8	25.3	14.0	17.01	弥生時代後期	
C 73	EN	弥生時代水田層	紡錘車	49.0	45.0	6.2	15.58	弥生時代後期	未製品
C 74	JY	凹地2	紡錘車	38.6	32.0	7.1	9.60	弥生時代中期後葉～後期	未製品
C 75	JO	河道2	紡錘車	43.1	41.4	5.0	9.76	弥生時代中期	
C 76	DE	第2微高地(西)	紡錘車	38.0	31.1	8.1	10.86	弥生時代中期中葉～後期	未製品
C 77	AT	第2微高地(西)	紡錘車	38.5	35.0	8.5	14.01	弥生時代中期中葉～後期	未製品？
C 78	AT	第2微高地(西)	紡錘車	44.0	40.4	8.1	17.36	弥生時代中期中葉～後期	未製品？
C 79	KY 1	第2微高地(西)	紡錘車	47.2	40.6	6.7	15.24	弥生時代中期中葉～後期	
C 80	AT	第2微高地(西)	紡錘車	39.9	18.9	10.6	7.03	弥生時代中期中葉～後期	
C 81	AT	第2微高地(西)	紡錘車	56.9	27.3	11.0	17.12	弥生時代中期中葉～後期	
C 82	AT	第2微高地(西)	紡錘車	44.8	22.2	13.8	15.77	弥生時代中期中葉～後期	
C 83	JY	第2微高地(西)	紡錘車	27.8	17.0	6.0	4.99	弥生時代中期中葉～後期	
C 84	JY	第2微高地(西)	紡錘車	33.1	10.3	8.0	6.56	弥生時代中期中葉～後期	
C 85	JY	第2微高地(西)	紡錘車	43.0	42.3	7.0	14.51	弥生時代中期中葉～後期	
C 86	JY	第2微高地(西)	紡錘車	55.9	55.9	11.0	41.22	弥生時代中期中葉～後期	
C 87	JY	第2低位部	紡錘車	41.1	37.5	8.1	14.00	弥生時代中期中葉～後期	未製品
C 88	JY	第2低位部	紡錘車	52.9	35.5	10.2	21.04	弥生時代中期中葉～後期	
C 89	EN	第3微高地	紡錘車	36.1	34.0	7.5	11.38	弥生時代中期中葉～後期	未製品
C 90	EN	第3微高地	紡錘車	37.3	34.9	8.0	10.74	弥生時代中期中葉～後期	未製品
C 91	TO	第3低位部	紡錘車	50.1	48.0	7.8	20.27	弥生時代中期中葉～後期	
C 92	TO	第3低位部	円板状土製品	48.4	48.1	10.5	31.39	弥生時代中期中葉～後期	
C 93	JO	第4低位部	円板状土製品	55.0	51.7	13.4	29.36	弥生時代中期中葉～後期	
C 94	H11	柵列状遺構16	土錘	53.3	18.4		15.43	中世	
C 95	EN	溝71	円面硯				90.69	平安時代	
C 96	TD 4	溝73	土錘	35.5	9.0		2.53	平安時代末～鎌倉時代	
C 97	H11	溝73	土錘	46.2	16.1		11.03	平安時代末～鎌倉時代	
C 98	TD 5	溝74	土錘	42.3	12.9		6.66	平安時代末～鎌倉時代	
C 99	H12	溝77	土錘	28.8	7.9		1.60	平安時代末～鎌倉時代	
C100	H12	溝77	土錘	28.4	11.5		3.50	平安時代末～鎌倉時代	
C101	H12	溝77	土錘	36.8	12.3		5.00	平安時代末～鎌倉時代	
C102	H12	溝77	土錘	41.0	8.5		2.93	平安時代末～鎌倉時代	
C103	H11	溝77	土錘	39.4	13.5		6.83	平安時代末～鎌倉時代	
C104	H11	溝77	土錘	54.8	13.5		8.56	平安時代末～鎌倉時代	
C105	JO	水田10	風字硯				27.10	古代	
C106	JO	水田10	風字硯				25.48	古代	
C107	JO	水田10	風字硯				143.74	古代	
C108	JO	水田10	風字硯				36.27	古代	
C109	JO	水田10	円板状土製品	27.7	22.5	11.7	8.96	古代	
C110	JO	水田10	土錘	33.0	15.1		7.41	古代	
C111	JO	水田10	土錘	32.8	14.1		7.60	古代	
C112	JO	水田10	土錘	63.4	21.8		27.42	古代	
C113	TD 1	包含層	土錘	37.9	10.6		2.93	古代～中世	
C114	TD 1	包含層	土錘	40.2	10.7		4.10	古代～中世	
C115	KY 2	包含層	土錘	38.2	11.7		4.68	古代～中世	
C116	TO	包含層	土錘	45.0	11.5		6.66	古代～中世	
C117	TD 1	包含層	土錘	49.0	9.9		4.54	古代～中世	
C118	TD 1	包含層	土錘	49.7	12.0		5.44	古代～中世	
C119	H 5	包含層	土錘	50.0	13.7		7.52	古代～中世	
C120	JO	包含層	土錘	56.9	11.6		7.26	古代～中世	
C121	TD 1	包含層	土錘	63.1	17.5		16.62	古代～中世	
C122	H 3	包含層	風字硯				26.58	古代	
C123	H 5	包含層	円面硯				7.29	古代	

第16表　新旧遺構名称対照表

新遺構名	調査区	旧遺構名	時期	新遺構名	調査区	旧遺構名	時期
竪穴住居1	AT	No54	弥生時代前期中葉	井戸3	IN	No31	弥生時代後期末葉
竪穴住居2	DE	No55	弥生時代前期前葉～中葉	井戸4	H7	No1	弥生時代後期後葉
竪穴住居3	JY	No43	弥生時代前期前葉～中葉	井戸5	FU	SE05	弥生時代中期後葉
竪穴住居4	KY3	No70	弥生時代前期	井戸6	TD4	SE01	弥生時代後期前葉
竪穴住居5	AT	No90	弥生時代後期前葉	井戸7	KY2	No46	弥生時代中期後葉
竪穴住居6	AT	No89	弥生時代後期	井戸8	TO	井戸1	弥生時代後期前葉
竪穴住居7	IN	No40	弥生時代中期後葉	井戸9	FU	SE01	古墳時代前期中葉
竪穴住居8	HF3	SH－1	弥生時代中期後葉	井戸10	FU	SE02	古墳時代前期中葉
竪穴住居9	KY3	No75、76	弥生時代中期後葉	井戸11	FU	SE03	古墳時代前期中葉
建物1	DE	No75	弥生時代前期	井戸12	FU	SE04	古墳時代前期中葉
建物2	AT	No52	弥生時代中期後葉	井戸13	JY	No27	古墳時代前期前葉
建物3	AT	No48	弥生時代後期	土壙1	AT	No103	縄文時代晩期中葉
建物4	AT	No53	弥生時代後期	土壙2	AT	No113	縄文時代晩期後葉
建物5	DE	No36	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙3	IN	No34	縄文時代晩期中葉
建物6	DE	No37	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙4	IN	No38	縄文時代晩期中葉
建物7	DE	No38	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙5	H11	土壙1	縄文時代晩期
建物8	DE	No40	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙6	TD1	No37	縄文時代晩期
建物9	DE	No56	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙7	TD1	No33	縄文時代晩期
建物10	DE	No52	弥生時代中期後葉	土壙8	TD1	No34	縄文時代晩期
建物11	DE	No41	弥生時代中期後葉	土壙9	TD1	No35	縄文時代晩期後葉
建物12	DE	No42	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙10	TD1	No30	縄文時代晩期後葉
建物13	K8	No6	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙11	TD3	No46	縄文時代晩期後葉
建物14	IN	No25	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙12	K9	No5	縄文時代晩期
建物15	IN	No26	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙13	KY1	No32	縄文時代晩期
建物16	IN	No27	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙14	KY1	No36	縄文時代晩期中葉～後葉
建物17	K1	No12	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙15	KY1	No21	縄文時代晩期中葉～後葉
建物18	IN	No33	弥生時代中期後葉	土壙16	KY1	No42	縄文時代晩期後葉
建物19	IN	No35	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙17	KY1	No34	縄文時代晩期後葉
建物20	IN	No46	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙18	KY1	No40	縄文時代晩期後葉
建物21	IN	No36	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙19	KY1	No39	縄文時代晩期後葉
建物22	IN	No37	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙20	KY1	No38	縄文時代晩期後葉
建物23	IN	No45	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙21	KY1	No37	縄文時代晩期中葉～後葉
建物24	FU	SB03	弥生時代中～後期	土壙22	KY1	No41	縄文時代晩期後葉
建物25	FU	SB02	弥生時代中～後期	土壙23	KY2	No45	縄文時代晩期後葉
建物26	FU	SB01	弥生時代中～後期	土壙24	KY2	No39	縄文時代晩期後葉
建物27	K5	No3	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙25	KY2	No43	縄文時代晩期後葉
建物28	K5	No2	弥生時代中期後葉～後期前葉	土壙26	KY2	No37	縄文時代晩期後葉
建物29	H11	建物1	弥生時代後期前葉	土壙27	KY2	No56	縄文時代晩期後葉
建物30	TD5	SB202	弥生時代中～後期	土壙28	AT	No43	弥生時代前期
建物31	TD5	SB200	弥生時代後期前葉	土壙29	AT	No60	弥生時代前期
建物32	TD5	SB203	弥生時代中～後期	土壙30	AT	No61	弥生時代前期
建物33	HF3	SB－1	弥生時代中期後葉	土壙31	AT	No58	弥生時代前期
建物34	HF4	SB－1	弥生時代中期後葉	土壙32	AT	No57	弥生時代前期
建物35	KY3	No86	弥生時代中期後葉	土壙33	AT	No122	弥生時代前期
建物36	KY3	No85	弥生時代中期後葉	土壙34	AT	No139	弥生時代前期前葉～中葉
建物37	KY3	No83	弥生時代中期後葉	土壙35	AT	No153	弥生時代前期前葉～中葉
建物38	KY3	No84	弥生時代中期後葉	土壙36	AT	No121	弥生時代前期中葉
建物39	KY3	No77	弥生時代中期後葉	土壙37	AT	No144	弥生時代前期
建物40	KY3	No80	弥生時代中期後葉	土壙38	AT	No143	弥生時代前期
建物41	KY3	No81	弥生時代中期後葉	土壙39	AT	No140	弥生時代前期
建物42	DE	No57、58	平安時代	土壙40	AT	No142	弥生時代前期
建物43	DE	No60	平安時代	土壙41	AT	No146	弥生時代前期
建物44	DE	No45	古代	土壙42	AT	No145	弥生時代前期
建物45	AT	No101	中世	土壙43	AT	No141	弥生時代前期
建物46	AT	No102	中世	土壙44	AT	No149	弥生時代前期
建物47	DE	No18	古代末～中世	土壙45	AT	No147	弥生時代前期
建物48	DE	No17	古代末～中世	土壙46	AT	No150	弥生時代前期
建物49	K5	No1	鎌倉時代	土壙47	AT	No148	弥生時代前期
建物50	JO	No6	近世	土壙48	AT	No120	弥生時代前期
井戸1	AT	No100	弥生時代後期前葉	土壙49	AT	No158	弥生時代前期中葉
井戸2	DE	No44	弥生時代後期前葉	土壙50	AT	No159	弥生時代前期

新遺構名	調査区	旧遺構名	時期	新遺構名	調査区	旧遺構名	時期
土壙51	AT	No98	弥生時代前期	土壙112	JY	No22	弥生時代後期
土壙52	AT	No109	弥生時代前期	土壙113	JY	No20	弥生時代中～後期
土壙53	AT	No116	弥生時代前期前葉～中葉	土壙114	IN	No39	弥生時代中期後葉
土壙54	AT	No108	弥生時代前期前葉～中葉	土壙115	IN	No32	弥生時代中期後葉
土壙55	AT	No92	弥生時代前期	土壙116	IN	No41	弥生時代中期後葉
土壙56	AT	No106	弥生時代前期	土壙117	IN	No44	弥生時代中～後期
土壙57	AT	No105	弥生時代前期	土壙118	FU	SK09	弥生時代中～後期
土壙58	AT	No94	弥生時代前期前葉～中葉	土壙119	FU	SK06	弥生時代中～後期
土壙59	AT	No93	弥生時代前期前葉～中葉	土壙120	TD5	SK201	弥生時代後期前葉
土壙60	AT	No95	弥生時代前期	土壙121	HF1	SK－2	弥生時代中～後期
土壙61	AT	No96	弥生時代前期	土壙122	KY2	No36	弥生時代中期後葉
土壙62	DE	No72	弥生時代前期	土壙123	KY2	No59	弥生時代中期後葉
土壙63	DE	No73	弥生時代前期前葉～中葉	土壙124	HF2	SK5	弥生時代中～後期
土壙64	DE	No77	弥生時代前期前葉～中葉	土壙125	HF2	SK4	弥生時代中～後期
土壙65	DE	No74	弥生時代前期中葉	土壙126	HF2	SK3	弥生時代中～後期
土壙66	DE	No64	弥生時代前期	土壙127	HF2	SK2	弥生時代中～後期
土壙67	DE	No65	弥生時代前期	土壙128	HF3	SK4	弥生時代中期後葉
土壙68	DE	No63	弥生時代前期	土壙129	HF3	SK5	弥生時代中期後葉
土壙69	DE	No76	弥生時代前期前葉～中葉	土壙130	HF3	SK3	弥生時代中期後葉
土壙70	DE	No66	弥生時代前期	土壙131	HF4	SK4	弥生時代中～後期
土壙71	DE	No69	弥生時代前期前葉～中葉	土壙132	HF4	SK3	弥生時代中～後期
土壙72	DE	No71	弥生時代前期中葉	土壙133	HF4	SK1	弥生時代中～後期
土壙73	JY	No30	弥生時代前期	土壙134	HF4	SK5	弥生時代中～後期
土壙74	IN	No23	弥生時代前期	土壙135	KY3	No82	弥生時代中期後葉
土壙75	JY	No24	弥生時代前期	土壙136	TO	Q－1	弥生時代後期
土壙76	FU	SK03	弥生時代前期前葉～中葉	土壙137	H16	No11	弥生時代中期後葉～後期前葉
土壙77	FU	SK04	弥生時代前期前葉～中葉	土壙138	JO	No20	弥生時代中～後期
土壙78	FU	SK05	弥生時代前期前葉～中葉	土壙139	JO	No19	弥生時代中期後半～後期前葉
土壙79	FU	SK07	弥生時代前期前葉～中葉	土壙140	JO	No18	弥生時代中期後半～後期前葉
土壙80	FU	SK08	弥生時代前期中葉	土壙141	JY	No21	古墳時代前半期
土壙81	TD5	SK227	弥生時代前期中葉	土壙142	AT	No82	中世
土壙82	TD3	No45	弥生時代前期	土壙143	AT	No84	中世
土壙83	H12	土壙4	弥生時代前期	土壙144	AT	No83	中世
土壙84	HF3	SK2	弥生時代前期中葉	土壙145	JY	No19	中世
土壙85	HF4	SK2	弥生時代前期	土壙146	IN	No6	中世
土壙86	KY3	No73	弥生時代前期	土壙147	H17	No2	中世
土壙87	KY3	No72	弥生時代前期	土壙148	JY	No16	近世
土壙88	TO	土壙5	弥生時代前期	土壙149	JY	No12	近世
土壙89	TO	土壙3	弥生時代前期中葉	火処1	H1	No14	縄文時代晩期
土壙90	TO	土壙2	弥生時代前期中葉	火処2	AT	No124	縄文時代晩期
土壙91	TO	土壙1	弥生時代前期中葉	火処3	AT	No125	縄文時代晩期
土壙92	TO	土壙7	弥生時代前期前葉～中葉	火処4	AT	No126	縄文時代晩期
土壙93	TO	土壙6	弥生時代前期中葉	火処5	AT	No127	縄文時代晩期
土壙94	TO	P－4	弥生時代前期中葉	火処6	AT	No128	縄文時代晩期
土壙95	H12	土壙3	弥生時代中期前葉	火処7	AT	No129	縄文時代晩期
土壙96	H2	No6	弥生時代中～後期	火処8	AT	No130	縄文時代晩期
土壙97	AT	No155	弥生時代後期	火処9	AT	No131	縄文時代晩期
土壙98	AT	No97	弥生時代後期	火処10	AT	No132	縄文時代晩期
土壙99	AT	No99	弥生時代後期前葉	火処11	AT	No133	縄文時代晩期
土壙100	DE	No46	弥生時代後期前葉	火処12	AT	No138	縄文時代晩期
土壙101	DE	No51	弥生時代中期後葉～後期前葉	火処13	DE	焼土H	縄文時代晩期
土壙102	DE	No53	弥生時代中～後期	火処14	DE	焼土D	縄文時代晩期
土壙103	H4	No4	弥生時代中～後期	火処15	DE	焼土G	縄文時代晩期
土壙104	IN	No19	弥生時代中期後葉	火処16	DE	焼土B	縄文時代晩期
土壙105	EN	No19	弥生時代中～後期	火処17	DE	焼土C	縄文時代晩期
土壙106	EN	No18	弥生時代中～後期	火処18	DE	焼土A	縄文時代晩期
土壙107	JY	No50	弥生時代中～後期	火処19	DE	焼土E	縄文時代晩期
土壙108	JY	No47	弥生時代後期	火処20	DE	焼土F	縄文時代晩期
土壙109	JY	No45	弥生時代後期	火処21	H11	火どころ1	縄文時代晩期
土壙110	JY	No44	弥生時代中～後期	火処22	H11	火どころ2	縄文時代晩期
土壙111	JY	No26	弥生時代中～後期	火処23	TD1	No36	縄文時代晩期

新遺構名	調査区	旧遺構名	時期	新遺構名	調査区	旧遺構名	時期
火処24	TD5	焼土壙	縄文時代晩期	柵列状遺構3	K9	No3	古墳時代後期
火処25	AT	No62	弥生時代前期	柵列状遺構3	IN	No15	古墳時代後期
火処26	K7	No3	弥生時代前期	柵列状遺構3	KY1	No6	古墳時代後期
火処27	K1	No10	弥生時代前期	柵列状遺構4	KY1	No5	古墳時代後期
火処28	H11	火どころ3	弥生時代前期	柵列状遺構5	KY1	No8・9	古墳時代
火処29	H11	火どころ4	弥生時代前期前葉～中葉	柵列状遺構6	TD1	No9	古墳時代
土器棺墓1	H2	No7	弥生時代前期中葉	柵列状遺構7	TD1	No8	古墳時代
土器棺墓2	DE	No43	弥生時代中期後葉	柵列状遺構8	TD1	No5－7	古墳時代
土器溜り1	DE	縄文時代晩期土器Aほか	縄文時代晩期中葉	柵列状遺構9	KY1	No7	古墳時代
柱穴1	DE	P51	縄文時代晩期後葉	柵列状遺構10	KY1	No9	古墳時代
柱穴2	TD5	P307	縄文時代晩期後葉	柵列状遺構11	TD2	No11	古墳時代
柱穴3	AT	P1754	縄文時代晩期中葉	柵列状遺構12	TD2	No12・13	古墳時代
柱穴4	DE	P168	縄文時代晩期後葉	柵列状遺構13	H10	柵列	古墳時代後期
柱穴5	DE	P7	縄文時代晩期中葉	柵列状遺構14	KY2	No26	古墳時代
柱穴6	DE	P9	縄文時代晩期中葉～後葉	柵列状遺構15	KY2	No27	古墳時代
柱穴7	DE	P157	縄文時代晩期中葉	柵列状遺構16	H11	柵列	中世
柱穴8	IN	P10	縄文時代晩期後葉	柵列状遺構17	KY3	No63	中世～近世
柱穴9	IN	P40	縄文時代晩期後葉	溝1	AT	No136	弥生時代前期中葉
柱穴10	IN	P31	縄文時代晩期後葉	溝2	K2	No4	弥生時代前期中葉
柱穴11	K3	P4	縄文時代晩期中葉～後葉	溝2	FU	SD05	弥生時代前期中葉
柱穴12	H11	P19	縄文時代晩期中葉	溝3	JY	No39	弥生時代前期中葉
柱穴13	H12	P38	縄文時代晩期後葉	溝3	K2	No3	弥生時代前期中葉
柱穴14	H12	P51	縄文時代晩期中葉～後葉	溝3	FU	SD04	弥生時代前期中葉
柱穴15	TD4	P52	縄文時代晩期後葉	溝4	TO	D4	弥生時代前期中葉～中期前葉
柱穴16	TD1	P5	縄文時代晩期後葉	溝5	H15	No4	弥生時代前期前葉～中葉
柱穴17	KY1	P2	縄文時代晩期後葉	溝5	H16	No16	弥生時代前期前葉～中葉
柱穴18	HF2	P89	縄文時代晩期後葉	溝5	TO	D9	弥生時代前期前葉～中葉
柱穴19	HF2	P434	縄文時代晩期後葉	溝6	H16	No15	弥生時代前期前葉～中葉
柱穴20	DE	No68	弥生時代前期前葉～中葉	溝6	TO	D8	弥生時代前期前葉～中葉
柱穴21	DE	No67	弥生時代前期前葉～中葉	溝7	AT	No135	弥生時代中～後期
柱穴22	AT	P996	弥生時代前期中葉	溝8	AT	No154	弥生時代中～後期
柱穴23	DE	P33	弥生時代前期前葉～中葉	溝9	DE	No47	弥生時代後期前葉～中葉
柱穴24	JY	P10	弥生時代前期	溝9	IN	No7	弥生時代後期前葉～中葉
柱穴25	K3	P10	弥生時代前期前葉～中葉	溝9	KY1	No15	弥生時代後期前葉～中葉
柱穴26	TD5	P1	弥生時代前期前葉～中葉	溝9	KY2	No29	弥生時代後期前葉～中葉
柱穴27	TD4	P61	弥生時代前期中葉	溝10	H1	No12	弥生時代後期前葉
柱穴28	TD4	P59	弥生時代前期中葉	溝10	AT	No45	弥生時代後期前葉
柱穴29	TD4	SB202-P2	弥生時代前期前葉～中葉	溝10	DE	No48	弥生時代後期前葉
柱穴30	TD4	P53	弥生時代前期中葉	溝11	H2	No11	弥生時代中～後期
柱穴31	H12	P40	弥生時代前期中葉	溝11	AT	No46	弥生時代中～後期
柱穴32	TD4	P19	弥生時代前期	溝11	DE	No49・50	弥生時代中～後期
柱穴33	HF3	P460	弥生時代前期前葉～中葉	溝11	IN	No8	弥生時代中～後期
柱穴34	KY3	P29	弥生時代中期前葉	溝11	KY1	No14－16	弥生時代中～後期
柱穴35	H12	P30	弥生時代前期中葉	溝11	KY2	No30	弥生時代中～後期
柱穴36	H2	P70	弥生時代前期	溝12	H2	No9	弥生時代中～後期
柱穴37	DE	P17	弥生時代前期	溝13	H2	No8	弥生時代中～後期
柱穴38	H11	P21	弥生時代前期	溝14	H4	No3	弥生時代中～後期
柱穴39	H11	土壙3	弥生時代前期	溝15	H3	No4	弥生時代中～後期
柱穴40	KY1	P17	弥生時代前期	溝16	IN	No14	弥生時代中～後期
柱穴41	KY1	P153	弥生時代前期	溝17	IN	No17	弥生時代中～後期
柱穴42	HF2	P180	弥生時代前期	溝18	IN	No13	弥生時代中～後期
柱穴43	HF2	P162	弥生時代前期	溝19	H05	No3	弥生時代中～後期
柱穴44	HF2	P356	弥生時代前期	溝20	H03	No3	弥生時代中～後期
柱穴45	HF2	P8	弥生時代前期	溝20	H05	No4	弥生時代中～後期
柱穴46	H12	P17	弥生時代後期前葉	溝20	KY1	No18～20、25－28	弥生時代中～後期
柱穴47	TD5	P204	弥生時代後期前葉	溝20	HF1	SD－3	弥生時代中～後期
柱穴48	H12	P22	弥生時代後期前葉	溝21	KY2	No31	弥生時代後期前葉～中葉
柱穴49	KY3	P25	弥生時代後期前葉	溝22	KY1	No13	弥生時代後期前葉～中葉
柵列状遺構1	EN	No10	古墳時代	溝22	KY2	No32・34・35	弥生時代後期前葉～中葉
柵列状遺構2	EN	No12	古墳時代	溝23	KY1	No13	弥生時代後期前葉～中葉
柵列状遺構3	H5	No2	古墳時代後期	溝23	KY2	No33	弥生時代後期前葉～中葉

新遺構名	調査区	旧遺構名	時期	新遺構名	調査区	旧遺構名	時期
溝24	TD 1	No17・18・22～26	弥生時代中～後期	溝70	K 1	No4	古代
溝24	TD 2	No38・39	弥生時代中～後期	溝71	EN	No3	平安時代
溝25	JY	No48・49	弥生時代中期後葉	溝72	K 4	No2	古代～中世
溝25	IN	No50	弥生時代中期後葉	溝72	H9	No4	古代～中世
溝26	IN	No51	弥生時代中期後葉	溝73	H11	溝 1	平安時代末～鎌倉時代
溝27	K 1	No8	弥生時代中～後期	溝73	H12	溝 1	平安時代末～鎌倉時代
溝27	JY	No40	弥生時代中～後期	溝73	H13	溝 6	平安時代末～鎌倉時代
溝28	H6	No4	弥生時代中～後期	溝73	TD 4	SD104B	平安時代末～鎌倉時代
溝29	H6	No5	弥生時代中～後期	溝73	TD 5	SD104B	平安時代末～鎌倉時代
溝30	H6	No2	弥生時代中～後期	溝73	TD 6	溝 6	平安時代末～鎌倉時代
溝30	FU	SD06	弥生時代中～後期	溝74	H12	溝 4	平安時代末～鎌倉時代
溝31	FU	SD07	弥生時代中～後期	溝74	H13	溝 5	平安時代末～鎌倉時代
溝32	BO 1	SD 4・SD 5	弥生時代中～後期	溝74	TD 4	SD104A	平安時代末～鎌倉時代
溝33	BO 1	SD 3	弥生時代中～後期	溝74	TD 5	SD104A	平安時代末～鎌倉時代
溝33	EN	No22	弥生時代中～後期	溝74	TD 6	溝 5	平安時代末～鎌倉時代
溝34	BO 1	SD 2	弥生時代中～後期	溝75	H12	溝 5	平安時代末～鎌倉時代
溝34	EN	No23	弥生時代中～後期	溝75	H13	溝 4	平安時代末～鎌倉時代
溝35	EN	No25・36	弥生時代中～後期	溝75	TD 4	SD104D	平安時代末～鎌倉時代
溝36	K 1	No9	弥生時代中～後期	溝75	TD 5	SD104D	平安時代末～鎌倉時代
溝37	K 4	No4	弥生時代中～後期	溝75	TD 6	溝 4	平安時代末～鎌倉時代
溝37	H9	No5	弥生時代中～後期	溝76	H12	溝 7	平安時代末～鎌倉時代
溝38	H11	溝 3	弥生時代中～後期	溝76	H13	溝 3	平安時代末～鎌倉時代
溝39	KY 2	No25	弥生時代中～後期	溝76	TD 4	SD104C	平安時代末～鎌倉時代
溝40	KY 2	No40	弥生時代中～後期	溝76	TD 5	SD104C	平安時代末～鎌倉時代
溝41	KY 3	No67	弥生時代中～後期	溝76	TD 6	溝 3	平安時代末～鎌倉時代
溝42	KY 3	No68	弥生時代中期後葉～後期末葉	溝77	H11	溝 2	平安時代末～鎌倉時代
溝43	KY 3	No69	弥生時代中期後葉	溝77	H12	土壙 1	平安時代末～鎌倉時代
溝44	KY 3	No74	弥生時代中～後期	溝77	H12	溝 2・3・6	平安時代末～鎌倉時代
溝45	HF 4	SD 7	弥生時代後期前葉	溝78	H13	溝 8	中世
溝45	H14	SD 4	弥生時代中～後期	溝78	TD 3	No41	中世
溝46	HF 4	SD 8	弥生時代中～後期	溝79	H13	溝 7	中世
溝46	H14	SD 6	弥生時代中～後期	溝79	TD 6	溝 1	中世
溝47	HF 4	SD 9	弥生時代中～後期	溝80	H12	番号なし	中世
溝47	H14	SD 5	弥生時代中～後期	溝80	H13	溝 1	中世
溝48	H15	No 1	弥生時代中～後期	溝80	TD 3	No40	中世
溝49	H15	No 3	弥生時代後期	溝81	H13	溝 2	中世
溝50	H16	No13	弥生時代後期	溝81	TD 4	番号なし	中世
溝51	H16	No8	弥生時代中期後葉	溝81	TD 6	溝 2	中世
溝51	TO	D 6	弥生時代中期後葉	溝82	H12	溝 9	中世
溝52	H16	No9	弥生時代後期	溝82	TD 4	番号なし	中世
溝53	H16	No10	弥生時代後期	溝83	H12	番号なし	中世
溝54	H16	No14	弥生時代後期	溝83	TD 5	番号なし	中世
溝55	TO	D 4	弥生時代中期後葉～後期前葉	溝84	H 1	No 1・2	中世
溝56	TO	D 3	弥生時代中期中葉～後葉	溝84	AT	No2	中世
溝57	JO	溝 8	弥生時代後期末	溝85	H 1	No3	中世
溝58	H2	No3	古墳時代前期前葉	溝85	AT	No5	中世
溝58	H4	No2	古墳時代前期前葉	溝86	AT	No7	中世
溝58	DE	No35	古墳時代前期前葉	溝87	H 1	No9	中世
溝59	H15	No 2	古墳時代前期前葉	溝87	AT	No9	中世
溝60	H16	No12	古墳時代前期前葉	溝88	H 1	No4	中世
溝61	TO	D 3	古墳時代前期前葉	溝88	AT	No6	中世
溝62	JO	溝 9	古墳時代前半	溝89	AT	No74	中世
溝63	H 1	No13	平安時代前半	溝90	AT	No73	中世
溝63	AT	No35・36・137	平安時代前半	溝91	AT	No80	中世
溝64	AT	No35	平安時代前半	溝92	AT	番号なし	中世
溝65	H 1	No10・11	平安時代	溝93	AT	No72	中世
溝65	AT	No4	平安時代	溝94	AT	No71	中世
溝66	AT	No1	平安時代	溝95	AT	No63	古代末～中世
溝67	AT	No75	平安時代	溝95	K 7	No1	古代末～中世
溝68	EN	No7	平安時代	溝95	DE	No13	古代末～中世
溝69	K 1	No5	古代	溝96	AT	No64	中世

新遺構名	調査区	旧遺構名	時期	新遺構名	調査区	旧遺構名	時期
溝97	AT	No67	古代末～中世	溝118	K1	No3	中世
溝97	DE	No8	古代末～中世	溝119	H06	No1	鎌倉時代
溝98	DE	No3	鎌倉時代	溝119	H09	No1	鎌倉時代
溝98	IN	No2	鎌倉時代	溝119	K2	No1	鎌倉時代
溝99	DE	No20	中世	溝119	K4	No1	鎌倉時代
溝100	DE	No10・11	古代～中世	溝119	JY	No15	鎌倉時代
溝100	JY	No1・2・11	古代～中世	溝119	FU	SD01	鎌倉時代
溝100	K1	No1・2	古代～中世	溝120	KY2	No51	中世
溝101	DE	No9	中世	溝121	JO	No5	中世～近世
溝101	JY	No3	中世	素掘溝群1	AT	No23～30・34・65・66・68～70・76～79	古代末～中世
溝102	DE	No23	中世				
溝103	DE	番号なし	中世	素掘溝群1	DE	No1・2・4～7・24～34	古代末～中世
溝104	DE	No22	中世	素掘溝群1	K6	No1～3	古代末～中世
溝105	DE	No21	中世	素掘溝群1	K8	No3～5	古代末～中世
溝106	DE	番号なし	中世	素掘溝群2	KY1	No2・3	古代末
溝107	K8	No2	鎌倉時代	素掘溝群2	KY2	No3～24・47～50	古代末
溝107	IN	No12	鎌倉時代	素掘溝群2	HF	SD1	古代末
溝108	DE	No16	鎌倉時代	素掘溝群2	H14	SD1・2	古代末
溝108	IN	No11	鎌倉時代	素掘溝群2	K9	番号なし	古代末
溝109	IN	No5	鎌倉時代	素掘溝群2	WR	番号なし	古代末
溝110	H2	No1	中世	素掘溝群3	EN	No4～9	中世
溝111	H2	No2	中世	素掘溝群3	BO1	SD1	中世
溝112	H3	No1	中世	土手状遺構	H2	No4	古代～中世
溝113	AT	No11・12	中世初頭	土手状遺構	H4	No1	古代～中世
溝113	DE	No12・14	中世初頭	水田1	EN	番号なし	弥生時代前期前葉～中葉
溝113	IN	No1	中世初頭	水田2	H15～17	番号なし	弥生時代前期中葉～中期前葉
溝113	KY3	No54・55・65・66	中世初頭	水田3	H15～17	番号なし	弥生時代中期後葉～後期前葉
溝113	H16	No1・2	中世初頭	水田4	EN	番号なし	弥生時代後期
溝113	TO	D2	中世初頭	水田5	EN,TD,FU	番号なし	弥生時代後期
溝114	AT	No31～33	中世初頭	水田6	EN	番号なし	弥生時代後期
溝114	DE	No19	中世初頭	水田7	EN	番号なし	弥生時代後期中葉～後葉
溝114	IN	No1	中世初頭	水田8		番号なし	古墳時代前期前葉
溝114	KY3	No52・53・64	中世初頭	水田9	TD	番号なし	古代
溝114	H16	No3	中世初頭	水田10	JO	番号なし	古代
溝114	H17	No1	中世初頭	水田11	JO	番号なし	中世
溝114	TO	D1	中世初頭	凹地1	AT	No91	弥生時代中～後期
溝115	IN	No3	中世	凹地2	JY	No38	弥生時代中期後葉～後期
溝116	JY	No13	中世	凹地2	K2	No2	弥生時代中期後葉～後期
溝116	IN	No28	中世	凹地2	FU	番号なし	弥生時代中期後葉～後期
溝117	IN	No29	中世				

遺跡周辺の地形（昭和６０年）

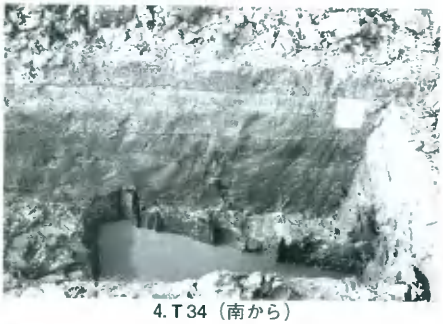
図版１

図版2

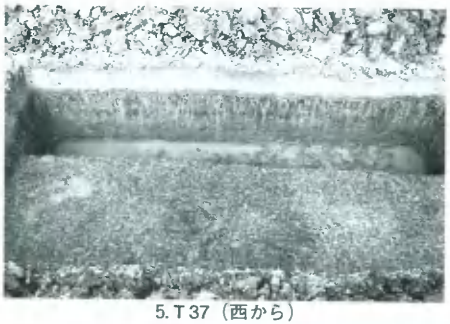
1. T 16（北西から）

2. T 24（西から）

3. T 28（北西から）



4. T 34（南から）



5. T 37（西から）

6. T 39（南から）

7. T 43（南東から）

8. T 45（東から）

第一次確認調査トレンチ

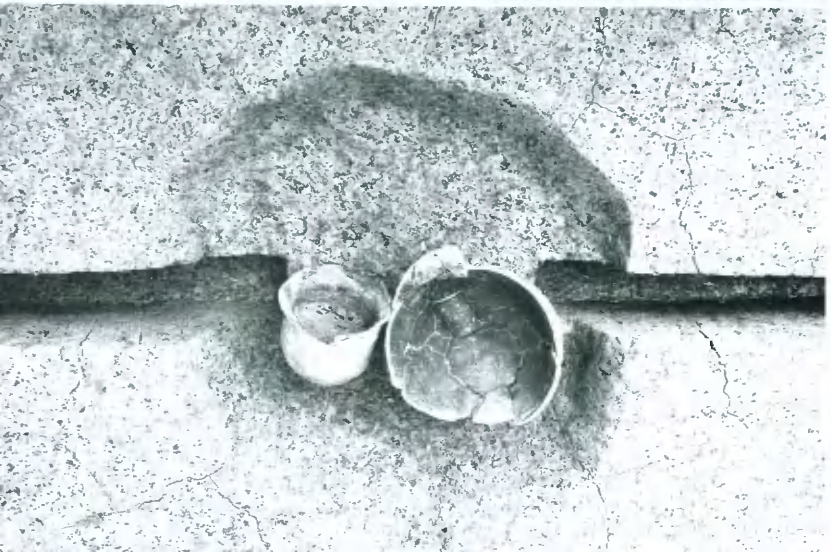
1．縄文時代後期土器
A地点出土状況
（H15区，東から）

2．縄文時代後期
籾痕土器出土地点
（H15区，北東から）

3．縄文時代後期
籾痕土器出土状況
（H15区，西から）

1．縄文時代後期土器
C地点出土状況
（H16区，南から）

2．土壙3
（IN区，南から）



3．土壙11
（TD3区，南から）

1．土壙23
（KY２区，南西から）

2．土壙25
（KY２区，西から）

3．火処18
（DE区，北から）

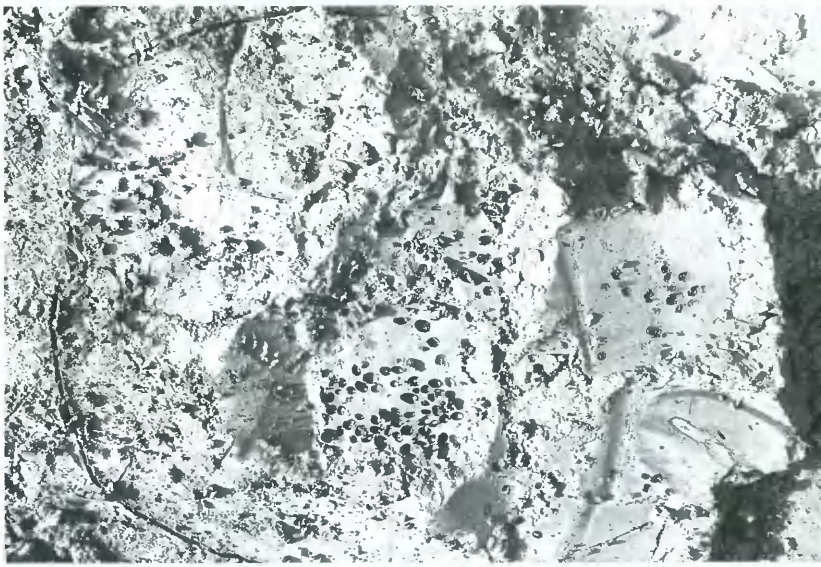
図版6

1．土器溜り1
（DE区，東から）

2．河道2（縄文時代晩期）
（JO区，南東から）

3．河道2南北土層断面
（JO区，西から）

1．河道２縄文時代晩期
土器出土状況
（JO区，北から）



2．河道２縄文時代晩期
種子出土状況
（JO区，西から）

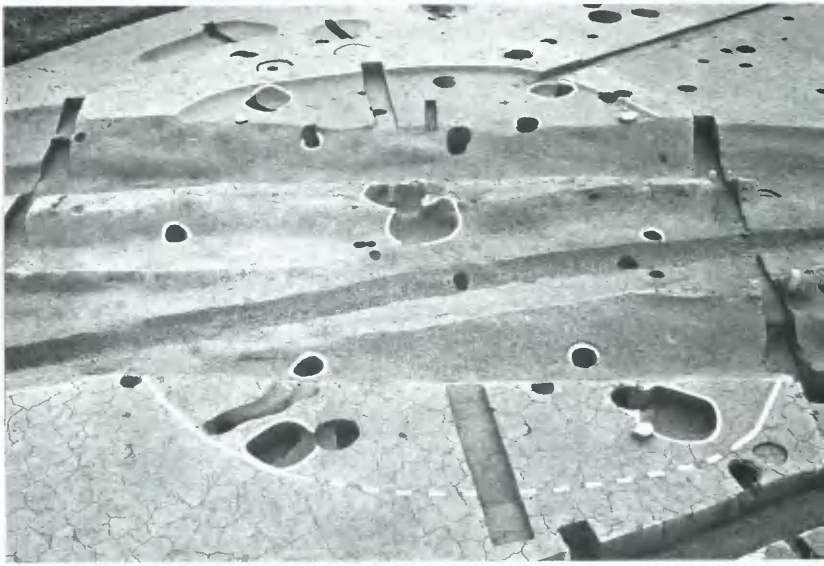
3．河道２縄文時代晩期
杭検出状況
（JO区，南東から）

1.弥生時代遺構全景
（AT・DE区，南東から）

2.弥生時代遺構全景
（AT・DE・JY・IN・FU区，
東から）

3.弥生時代遺構全景
（AT区，北西から）

1．弥生時代遺構全景
（KY 3 区，北から）



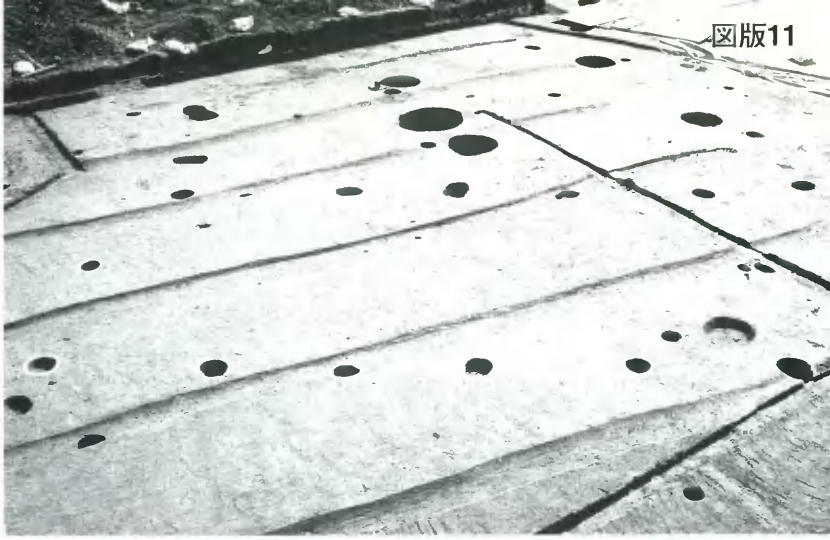
2．竪穴住居 1
（AT区，北から）

3．竪穴住居 2
（DE区，西から）

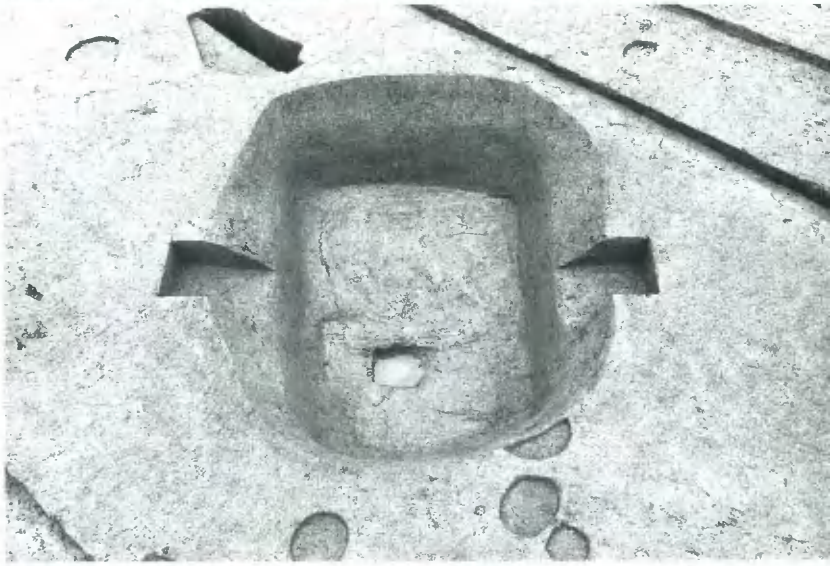
1.竪穴住居2中央穴
（DE区，南から）

2.竪穴住居3
（JY区，南から）

3.竪穴住居4
（KY3区，北から）



1．建物1
（DE区，北から）

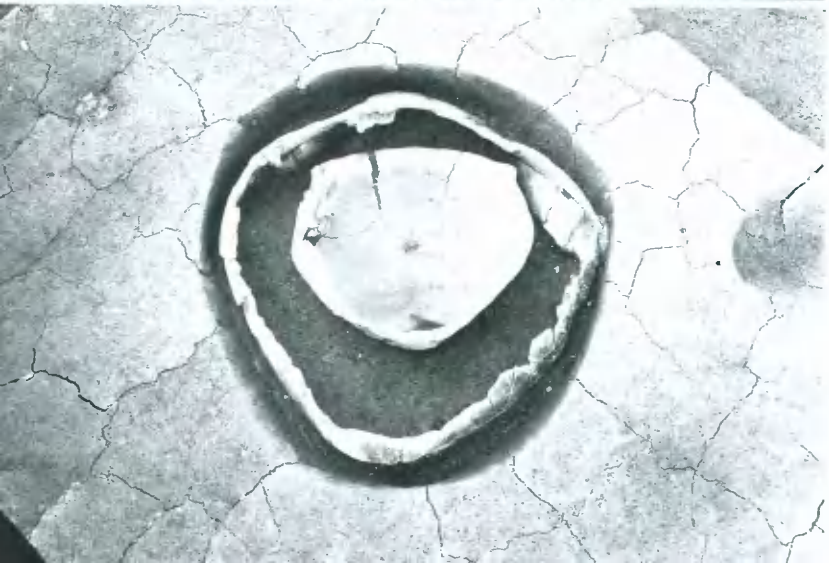


2．土壙55
（AT区，南西から）

3．土壙59土層断面
（AT区，南東から）

1．土壙70
（DE区，東から）

2．土壙79・80
（FU区，西から）



3．土器棺墓1
（H12区，南から）

1．溝2・3
（FU区，南東から）

2．溝4土層断面（B-B'）
（TO区，北から）

3．河道2（弥生時代前期）
（JO区，西から）

図版14

1．第１低位部土層断面
（H13区南壁，北西から）

2．第２低位部土層断面
（JY区北壁，南から）

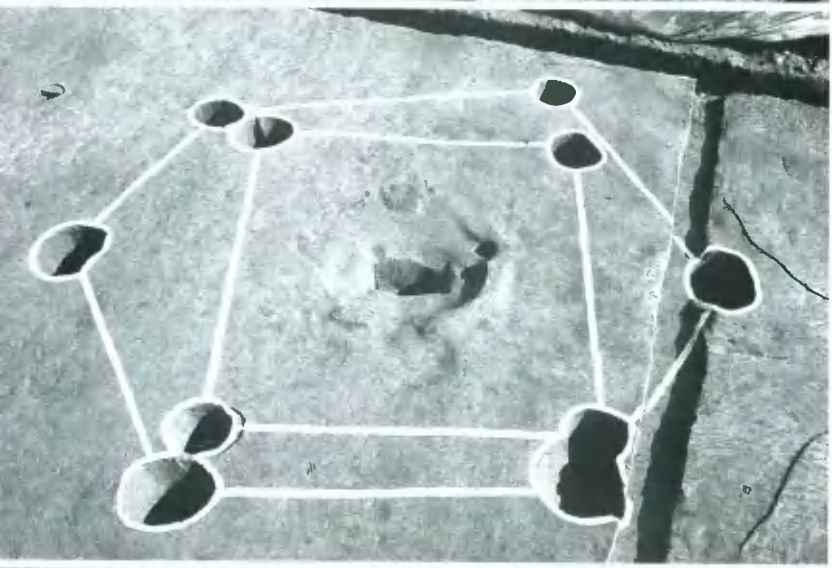
3．第３低位部(北)土層断面
（EN区，西から）

1.竪穴住居５
焼土・炭化材検出状況
（AT区，北から）

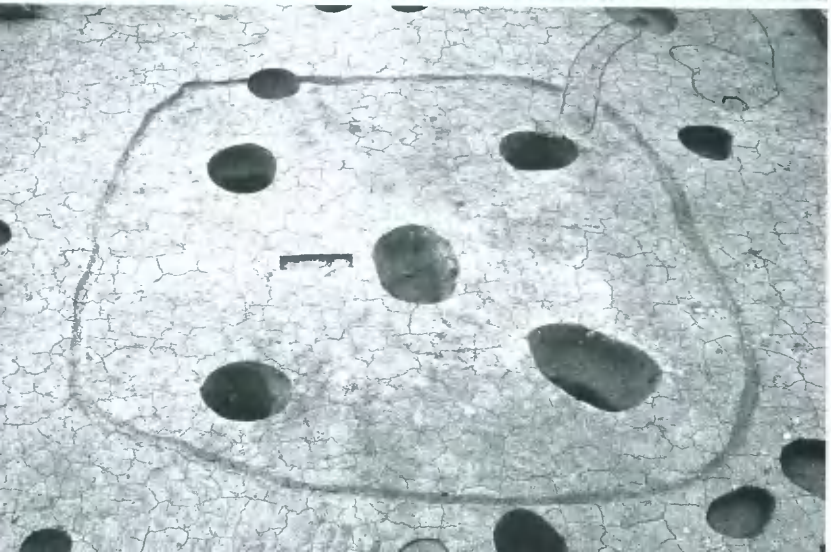
2.竪穴住居５
焼土除去後検出状況
（AT区，北から）

3.竪穴住居５
掘りあがり
（AT区，南から）

1. 竪穴住居 6
（AT区，北から）



2. 竪穴住居 7
（IN区，北西から）



3. 竪穴住居 8
（HF区，北から）

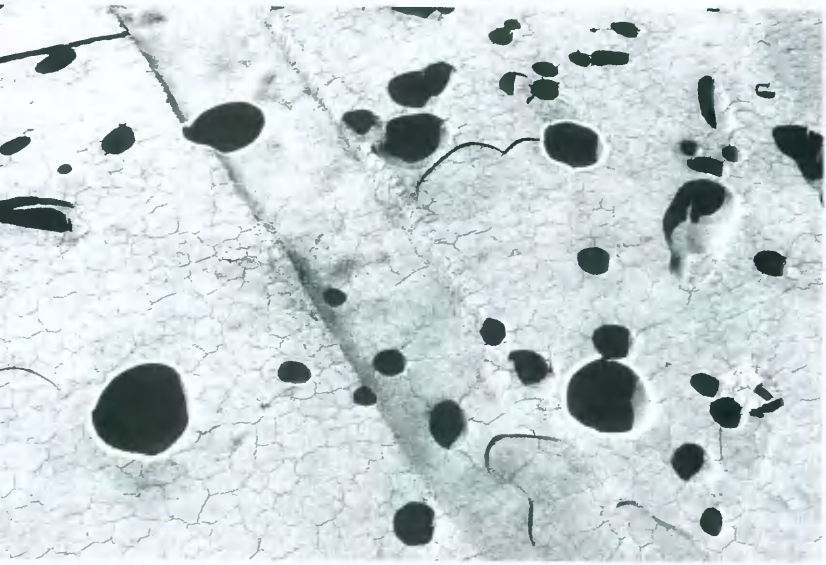
1．竪穴住居９
（KY３区，北東から）

2．建物３
（AT区，北から）

3．建物３
Ｐ１遺物出土状況
（AT区，北東から）

図版18

1．建物３
Ｐ２遺物出土状況
（AT区，南から）



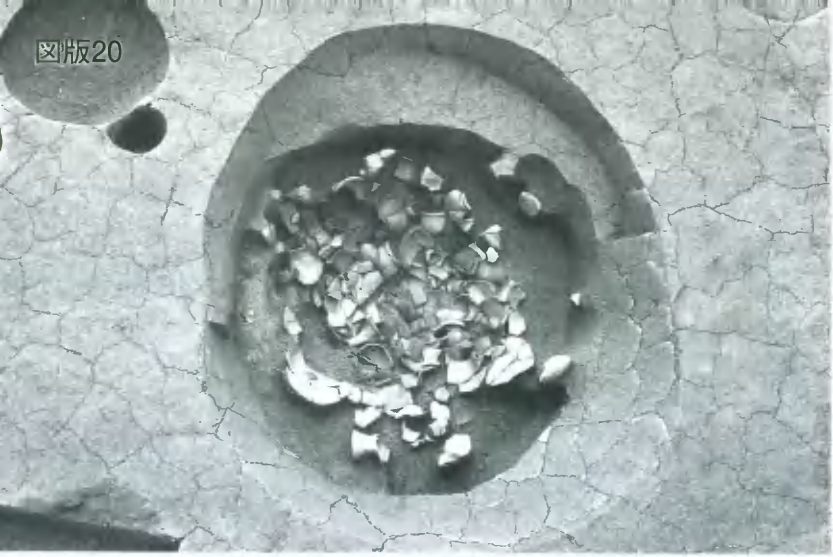
2．建物10
（DE区，東から）

3．建物31・32
（TD５区，北から）

1．建物35・36
（KY３区，西から）

2．井戸３
（IN区，南から）

3．井戸４
（H７区，東から）



1．井戸6
遺物出土状況
（TD4区，東から）

2．井戸8
遺物出土状況
（TO区，南から）

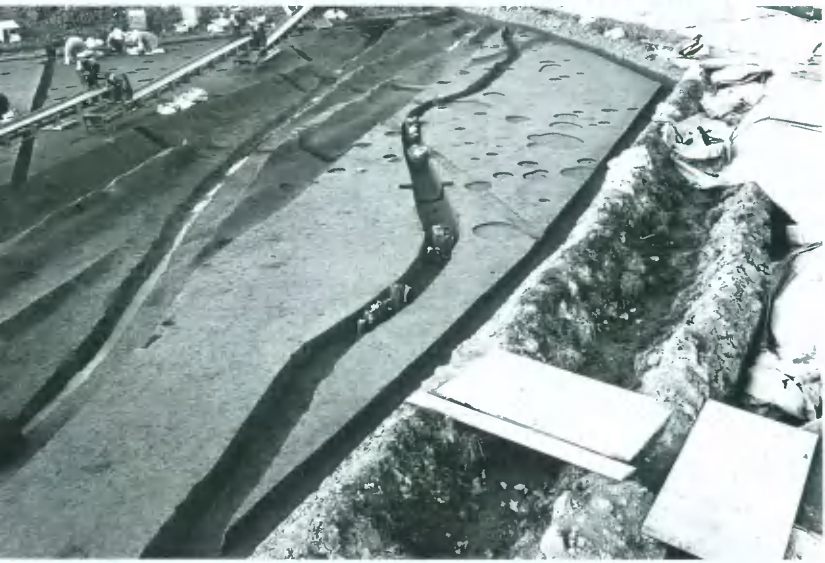
3．土壙99
（AT区，北から）

1．土壙120
（TD５区，北から）

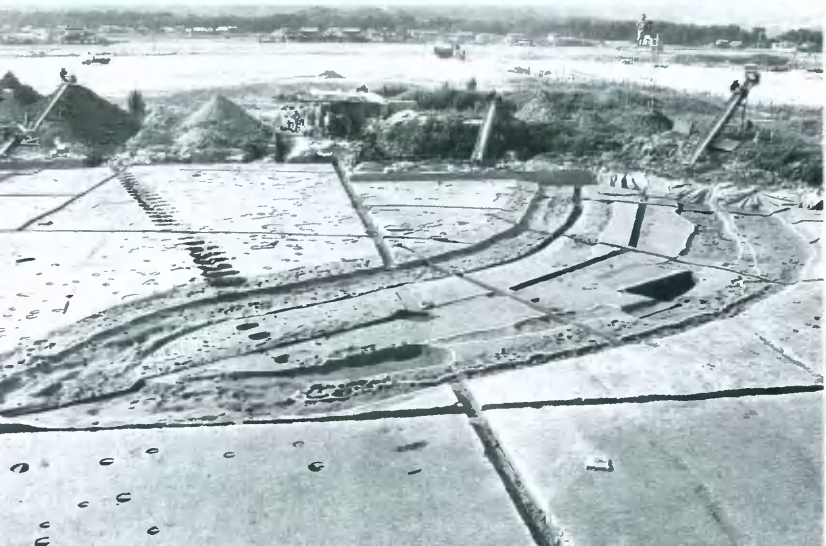
2．土壙128
（HF区，東から）

3．土器棺墓２
（DE区，東から）

1．溝9・11
（IN区，北から）



2．溝10
（AT区，北西から）

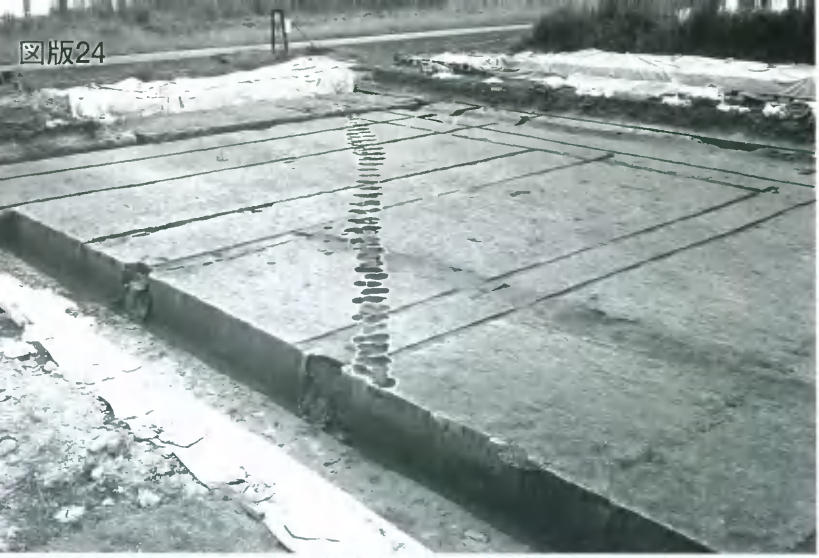


3．溝9・11・22・23
（KY1・2区，南東から）

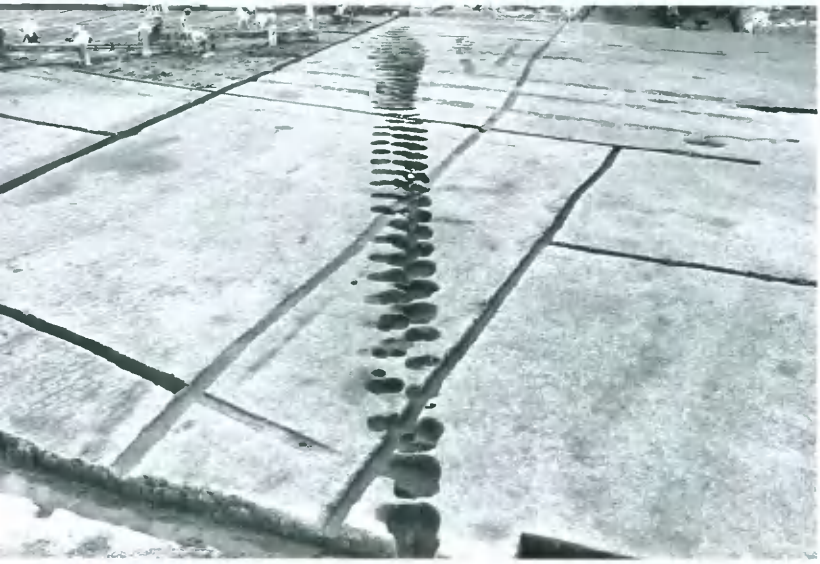
1．井戸10・11作業風景
（FU区，南から）

2．井戸10
遺物出土状況
（FU区，南から）

3．井戸11
上層遺物出土状況
（FU区，北から）

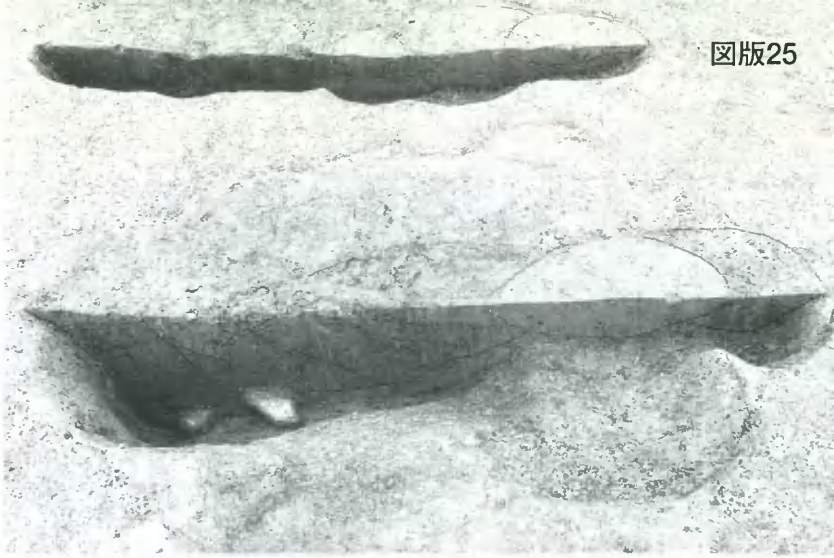


1．柵列状遺構 1・2
（EN区，北西から）



2．柵列状遺構 3
（KY 1 区，北西から）

3．柵列状遺構 3・4
（KY1区，北から）



1．柵列状遺構３
土層断面
（KY１区，南東から）

2．柵列状遺構３
土層断面
（KY１区，南東から）

3．柵列状遺構５・９・10
（KY１区，北から）

1．柵列状遺構 7
（TD 1 区，東から）

2．柵列状遺構 7
土層断面
（TD 1 区東壁，西から）

3．柵列状遺構 9
（KY 1 区，西から）

1．水田８、A地区
（TD１・２区，北西から）

2．水田８、A地区畦畔断面
（TD２区，南から）

3．水田８、B地区
（JY区，南から）

図版28

1.水田8、B地区
（KY1区，北から）

2.水田8、C地区
（EN区，東から）

3.水田8、D地区
畦畔検出状況
（白い帯状の筋）
（JO区，南東から）

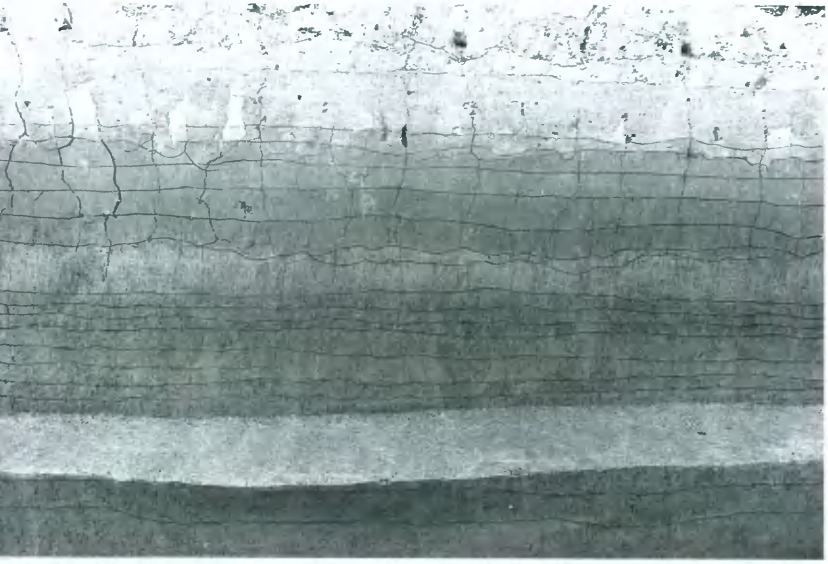
1．水田８、D地区
（JO区，南から）

2．水田８、D地区
（JO区，西から）

3．B地区水田
土層断面
（JY区，北壁）

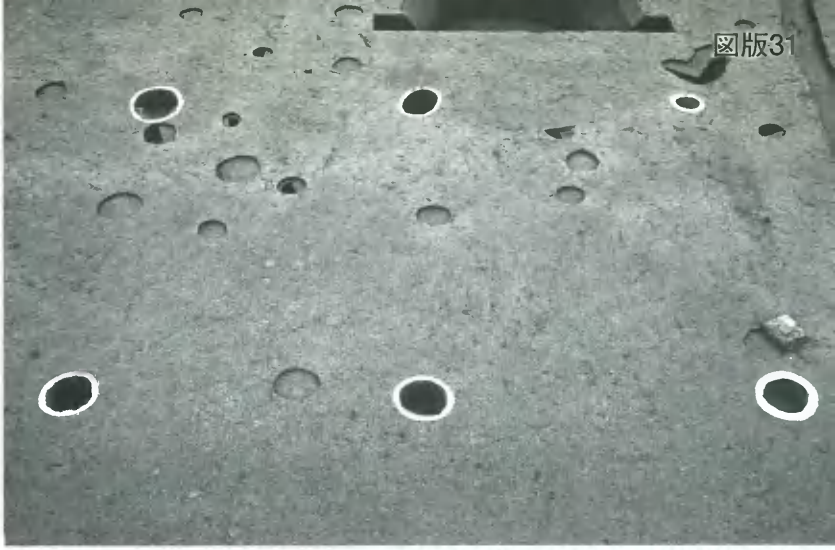
図版30

1．C地区水田
土層断面
（EN区中央トレンチ，南西から）



2．D地区水田
土層断面
（H16区，西壁）

3．建物43検出状況
（DE区，南から）

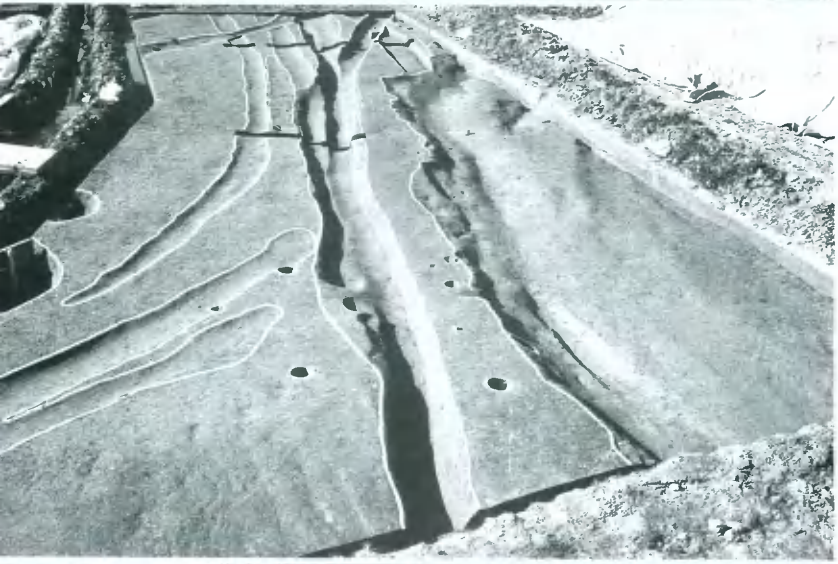


1．建物45
（AT区，北西から）

2．溝63
（AT区，東から）

3．素掘溝群３と溝71
（EN区，東から）

1．溝73～77北半
（H12区，南から）



2．溝84～88・113
（AT区，東から）

3．溝113・114
（AT区，北西から）

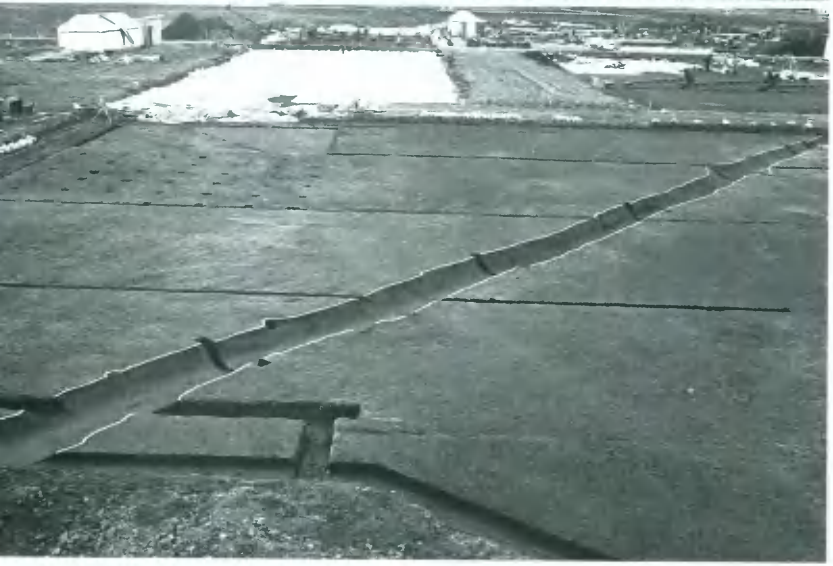
1．溝113・114
（IN区，南東から）

2．溝113・114
（TO区，西から）

3．溝113・114
土層断面
（AT区，東から）

図版34

1．溝119検出状況
（FU区，西から）



2．溝119
（FU区，東から）

3．素掘溝群1
（DE区，東から）

1．素掘溝群２
（KY２区，南から）

2．素掘溝群２
（KY２区，北西から）

3．素掘溝群２
（HF区，南から）

1．素掘溝群３
（EN区，西から）

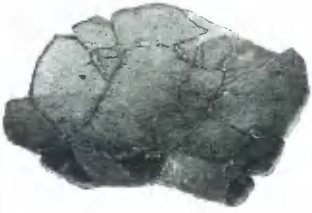
2．「馬養」線刻須恵器
出土状況（１）
（TD１区，北から）

3．「馬養」線刻須恵器
出土状況（２）
（TD１区，北から）

39

36

40


39

366

367

136

137

351

136

137

116

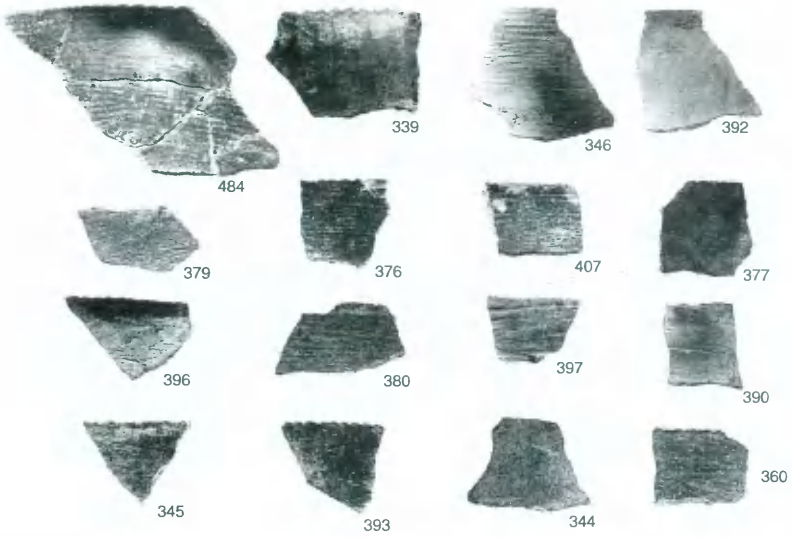
266

306

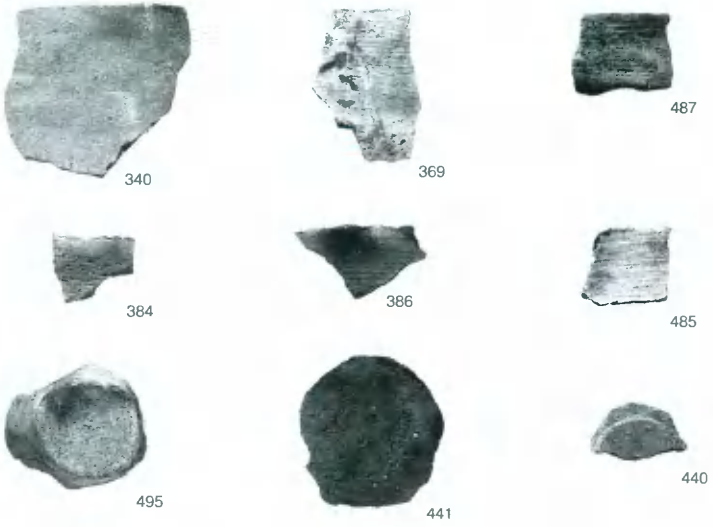
296

439

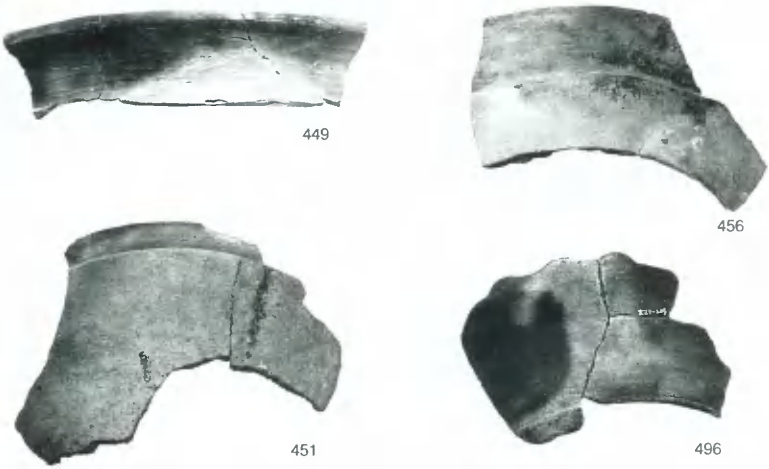
縄文時代後期・晩期土器



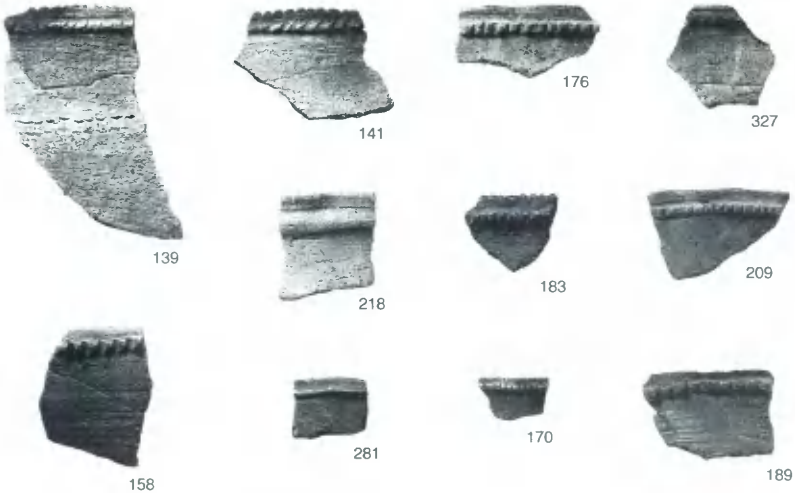
1．河道２出土縄文時代晩期土器（1）



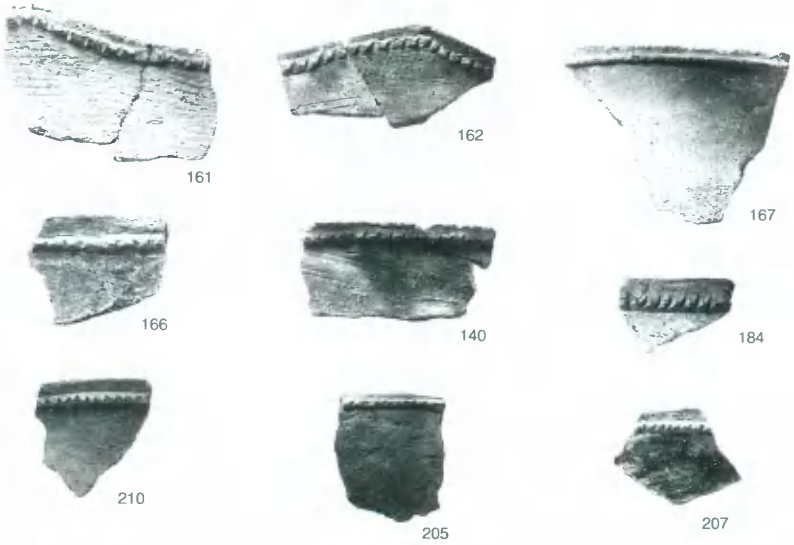
2．河道２出土縄文時代晩期土器（2）



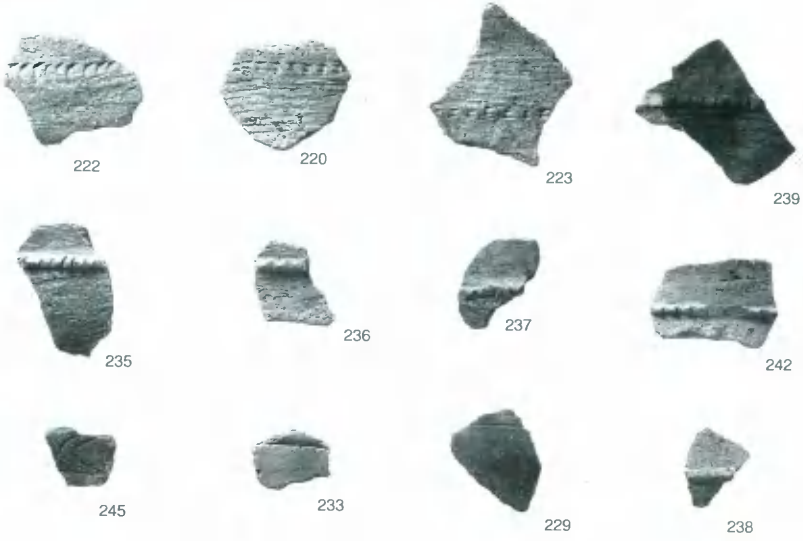
1. 河道２出土縄文時代晩期土器（3）



2. 河道１出土縄文時代晩期土器（1）

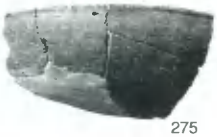


1．河道１出土縄文時代晩期土器（2）



2．河道１出土縄文時代晩期土器（3）

244


275

217

270

260

254

249

256

246

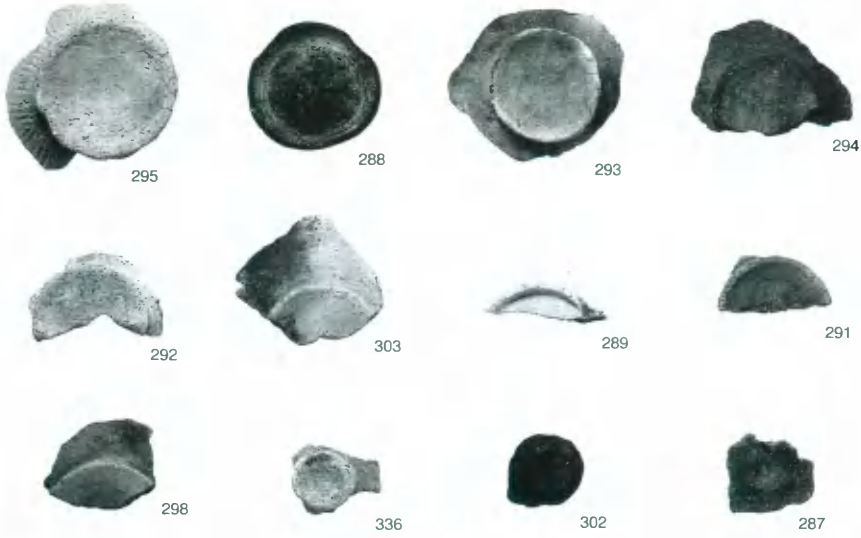
1．河道１出土縄文時代晩期土器（4）

264

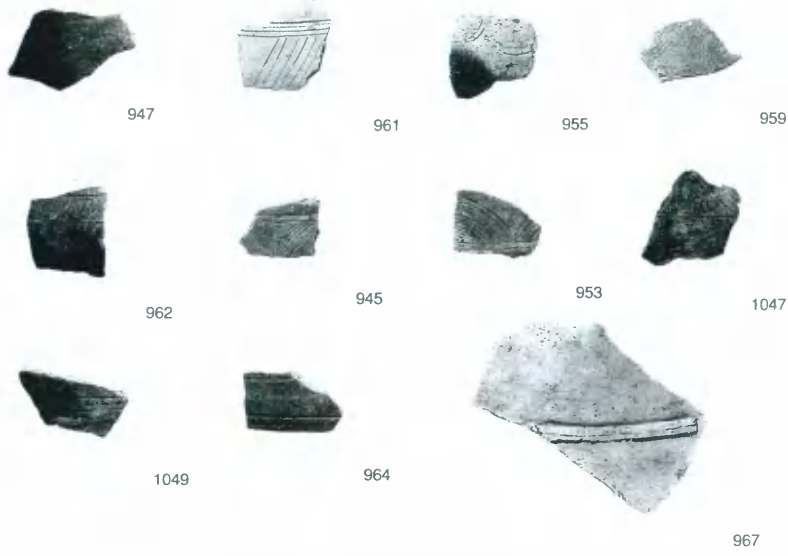
籾痕（顕微鏡写真）　264

264

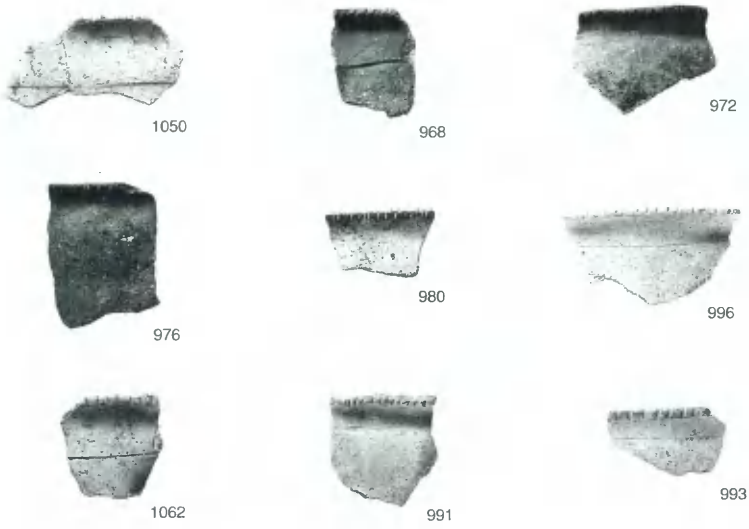
2．河道１出土縄文時代晩期籾痕土器



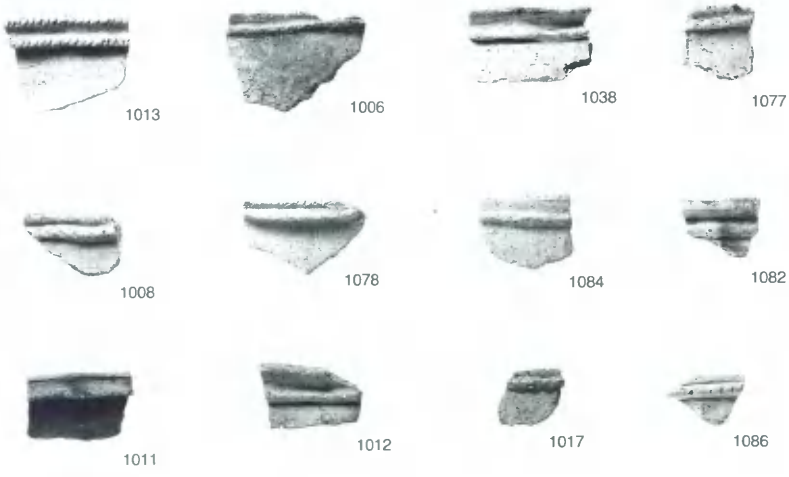
1．河道１出土縄文時代晩期土器（5）



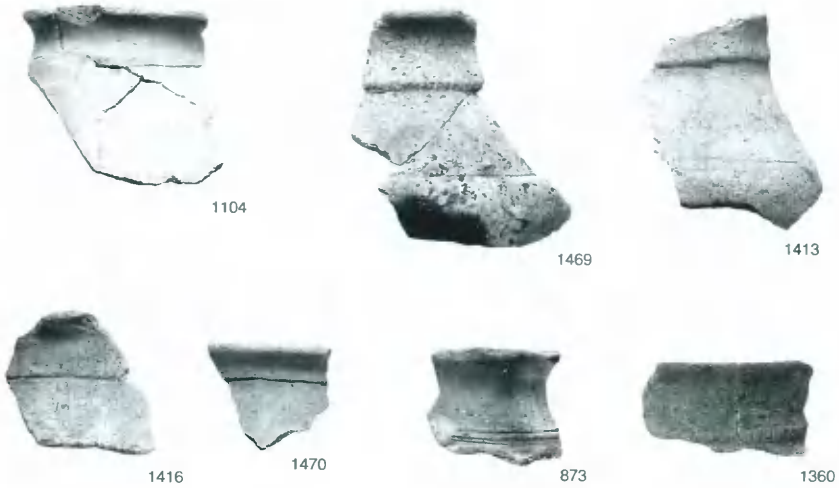
2．溝４出土弥生時代前期土器（1）



1．溝４出土弥生時代前期土器（2）



2．溝４出土弥生時代前期土器（3）



1. 弥生時代前期土器（1）

2. 弥生時代前期土器（2）

835

1120

817

842

831

816

869

872

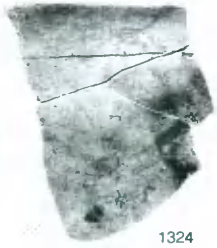
812

814

1388

1213

弥生時代前期土器（3）


1324

1440

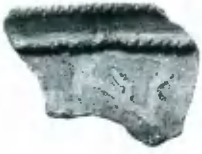
1441

1442

1443

1266

1．弥生時代前期土器（4）


915

918

1340

1107

717

1392

1500

1395

1339

916

1258

1257

2．弥生時代前期土器（5）

804

1184

1183

1386

880

1147

1．弥生時代前期土器（6）

1723

1528

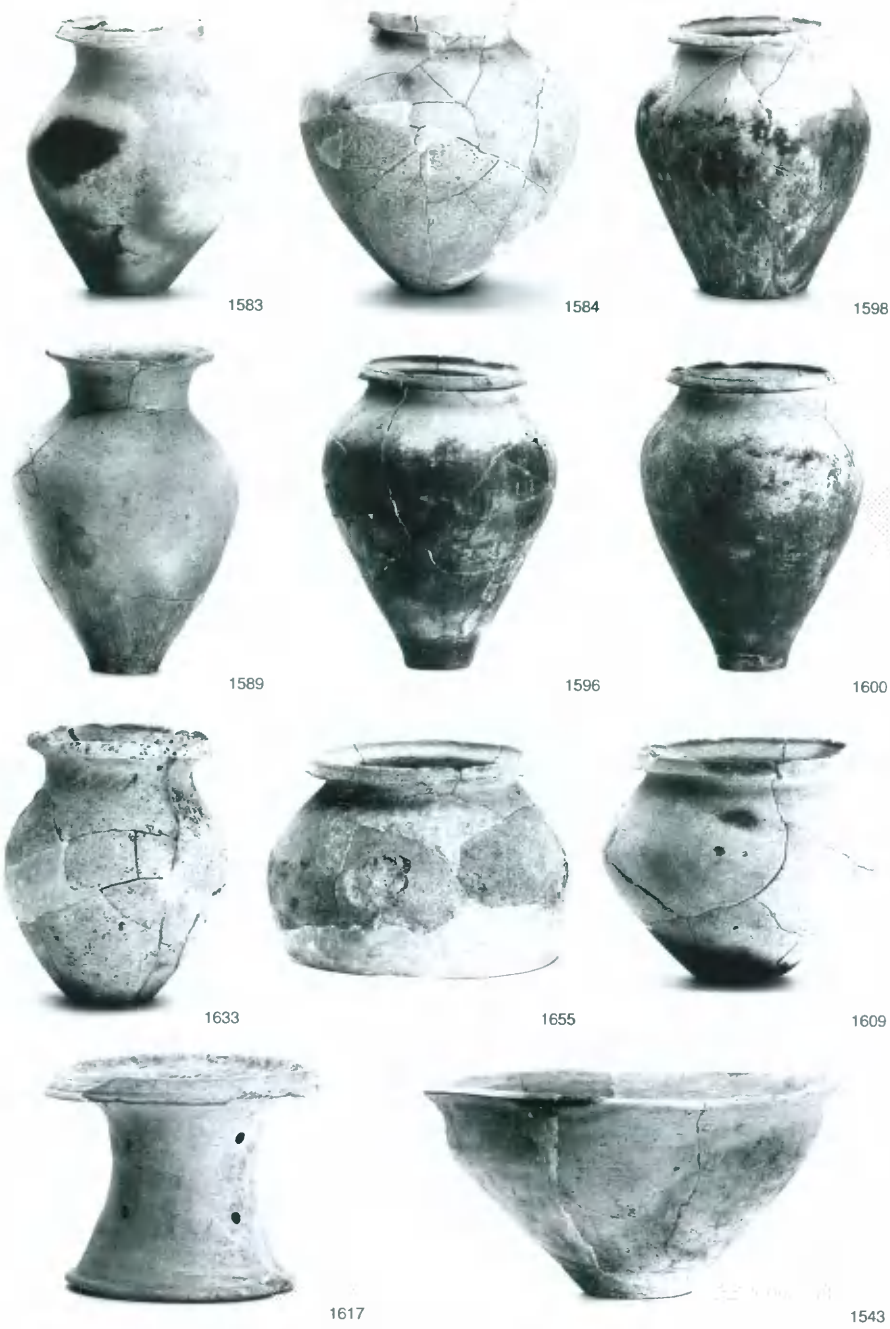
1577

1826

1905

1733

2．弥生時代中期土器



井戸 2（1543）・井戸 6 出土弥生時代後期土器

1625

1627

1630

1631

1632

1634

井戸 8 出土弥生時代後期土器（1）

1624

1623

1629

1637

1650

1636

1638

1669

井戸 8 出土弥生時代後期土器（2）

1664

1663

1668

1666

1．井戸８出土弥生時代後期土器（3）

1679

1682

1693

2．土壙120出土弥生時代後期土器

1544

1545

1546

1547

1548

1549

1550

1552

1553

1558

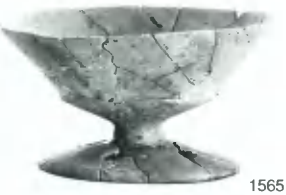
1559

1560

井戸 3 出土弥生時代後期土器（1）

1561

1563


1565

1．井戸３出土弥生時代後期土器（2）

1925

1929

1930

1931

1938

1935

2．井戸10･11･12出土古墳時代前期土器

1972

1973

1975

2000

1980

2009

2035

2038

2036

3．古代・中世の遺物（土器・灰釉陶器・瓦）

S11

S10

S90

1．土壙７（S10･11）と第２微高地出土縄文時代晩期石器

S17

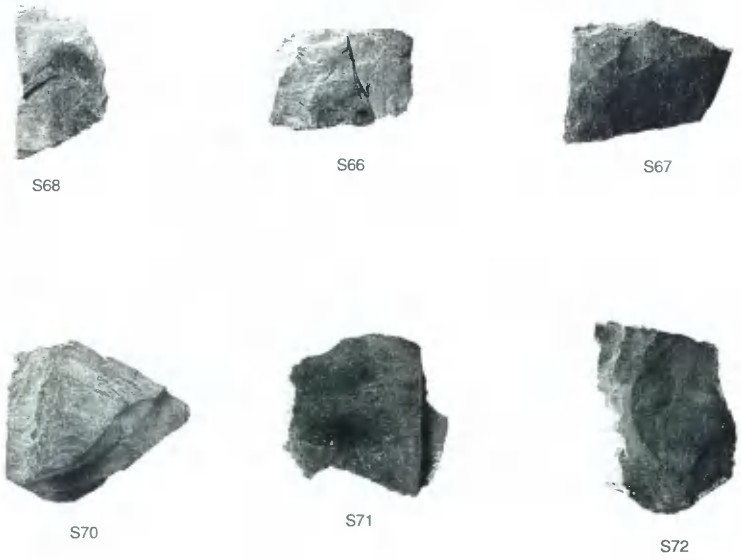
S19

S18

S20

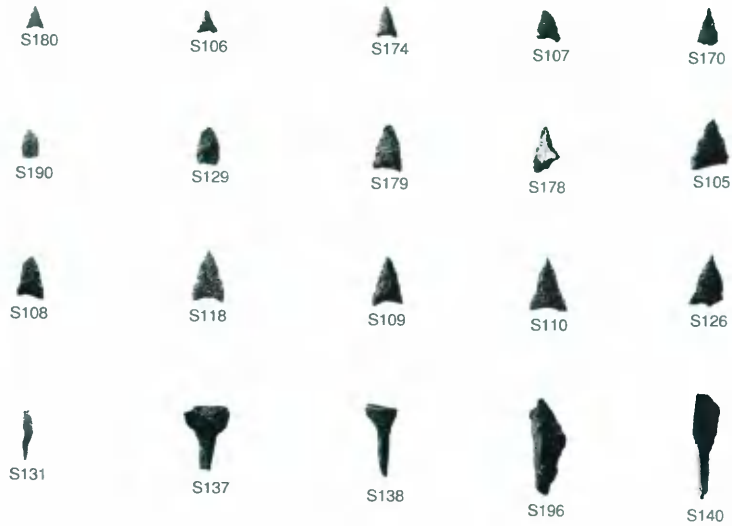
2．土器溜り１およびその周辺出土縄文時代晩期石器

1．河道１出土縄文時代晩期石器



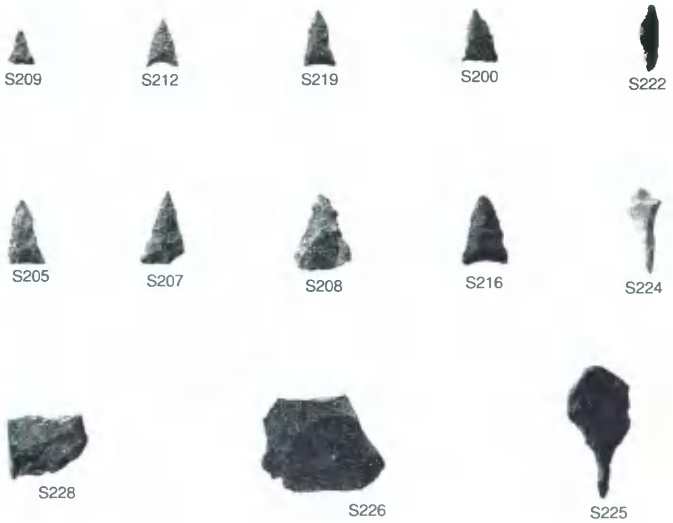
2．第１低位部および第１微高地出土縄文時代晩期石器

1. 竪穴住居 2 出土弥生時代前期石鏃

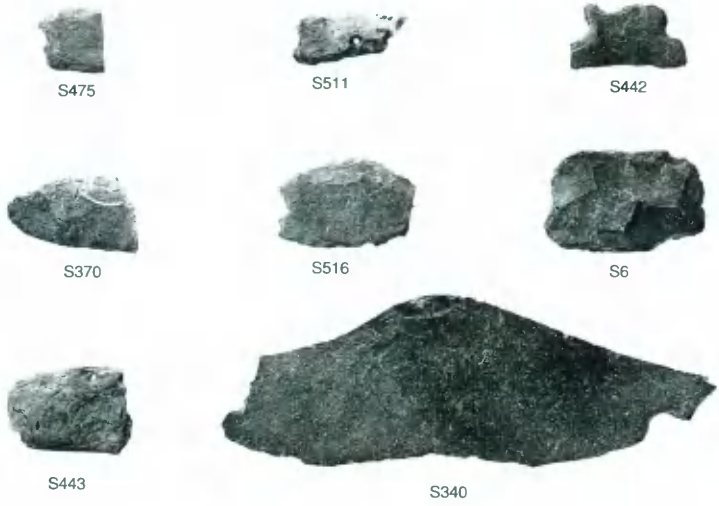


2. 竪穴住居 2 出土弥生時代前期石鏃・石錐

1. 竪穴住居 2 出土弥生時代前期石器



2. 竪穴住居 3 出土弥生時代前期石器



1. 出土石器（石包丁ほか）

2. 出土石器（石鏃）

S519

S434

S320

S379

S342

S319

1. 出土石器（太型蛤刃石斧）

S316

S434

S362

S294

S420

S335

S295

S296

S75

S235

2. 出土石器・石製品

C20

C19

C21

C28

C22

C26

C18

C86

C68

C88

C48

C47

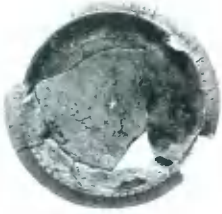
C49

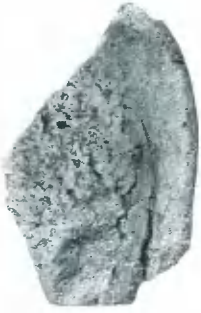
C50

C69

1．土製紡錘車

C51


C95


C108

C42

C95

2．土錘・土製品・陶硯

報告書抄録

ふりがな	みなみみぞていせき
書名	南溝手遺跡1
副書名	岡山県立大学建設に伴う発掘調査
巻次	I
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	100
編著者名	平井泰男・久保恵里子・葛原克人・正岡睦夫・松本和男・柳瀬昭彦・岡田博 江見正己・光永真一・大橋雅也・柴田英樹
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-01　岡山県岡山市西花尻1325-3　TEL. 086-293-3211
発行年月日	1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
南溝手遺跡（みなみみぞていせき）	岡山県（おかやまけん） 総社市（そうじゃし） 南溝手（みなみみぞて）	33208	——	34度 41分 10秒	133度 46分 30秒	19900301～ 19920313	約28000	岡山県立大学・岡山県立大学短期大学部建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南溝手遺跡	集落跡	縄文	土壙　27基	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器・石製品、土製品。	・縄文時代後期の籾痕土器 ・弥生時代前期の管玉未製品と玉砥石 ・古代の「馬養」線刻須恵器壺
		弥生	竪穴住居　9軒 掘立柱建物41棟 井戸　8基 土壙　113基 溝　57条		
		古墳	井戸　5基 水田		
		古代～中世	掘立柱建物9棟 水田		

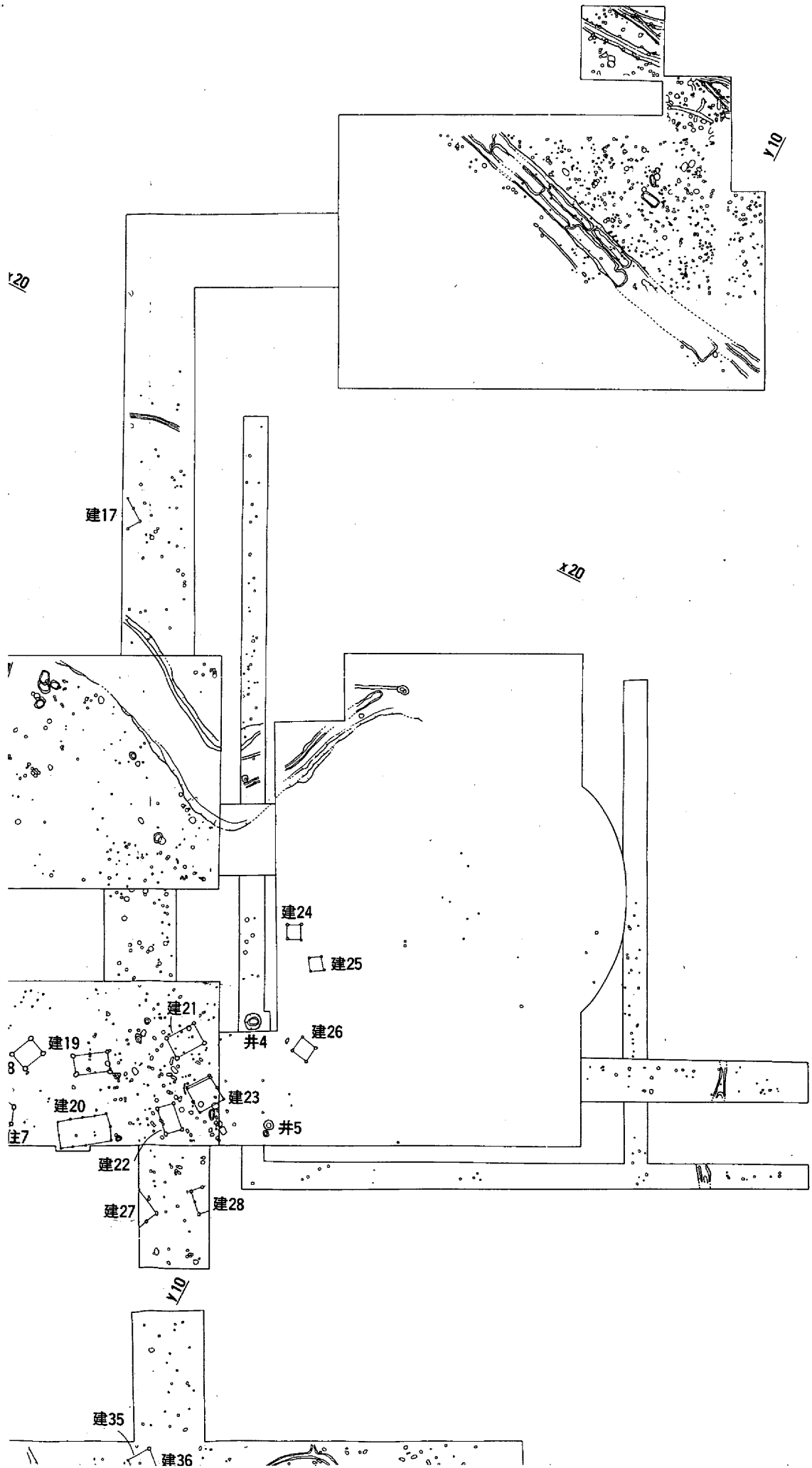
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100

南溝手遺跡 1

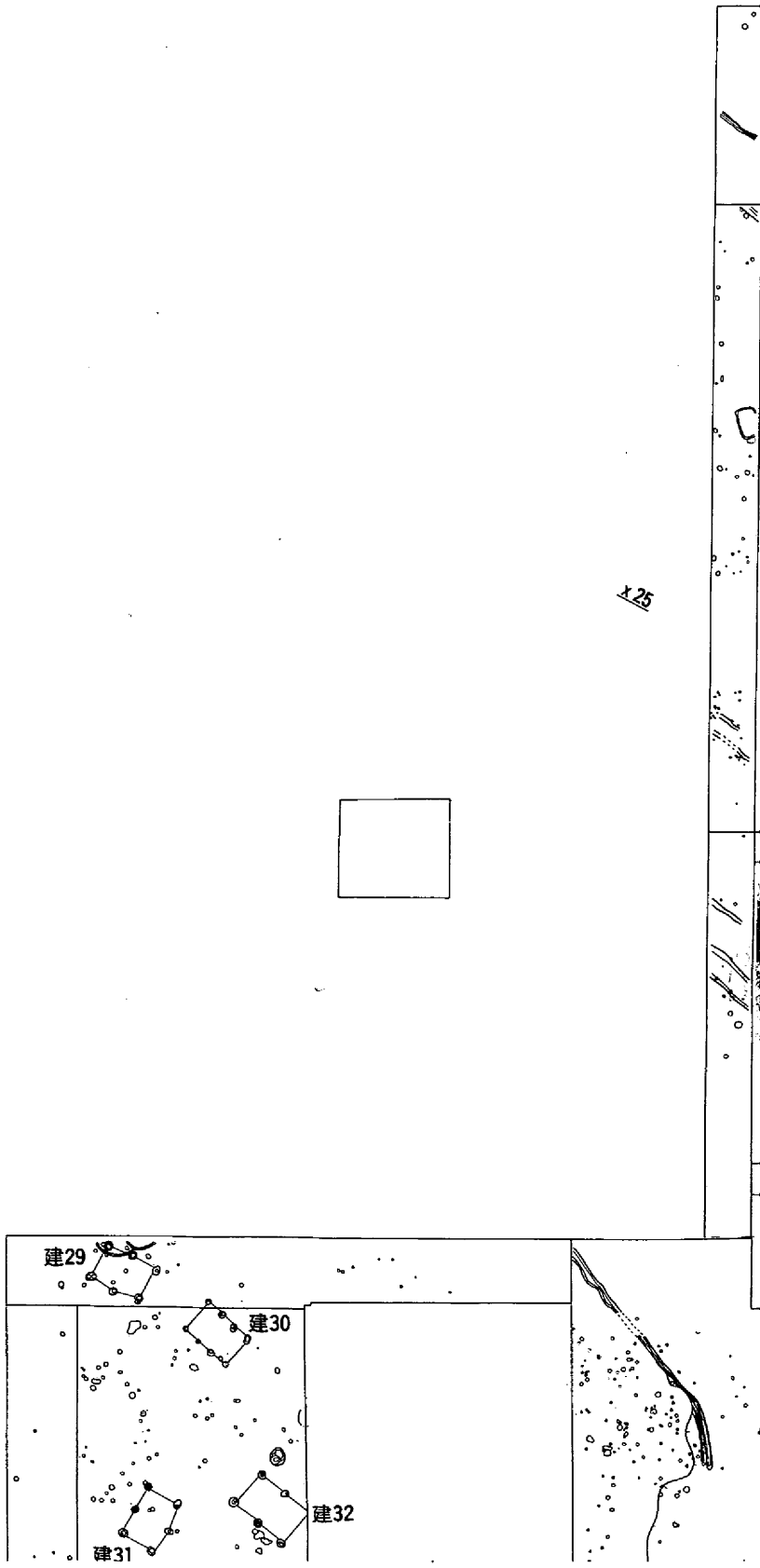
岡山県立大学建設に伴う発掘調査 I

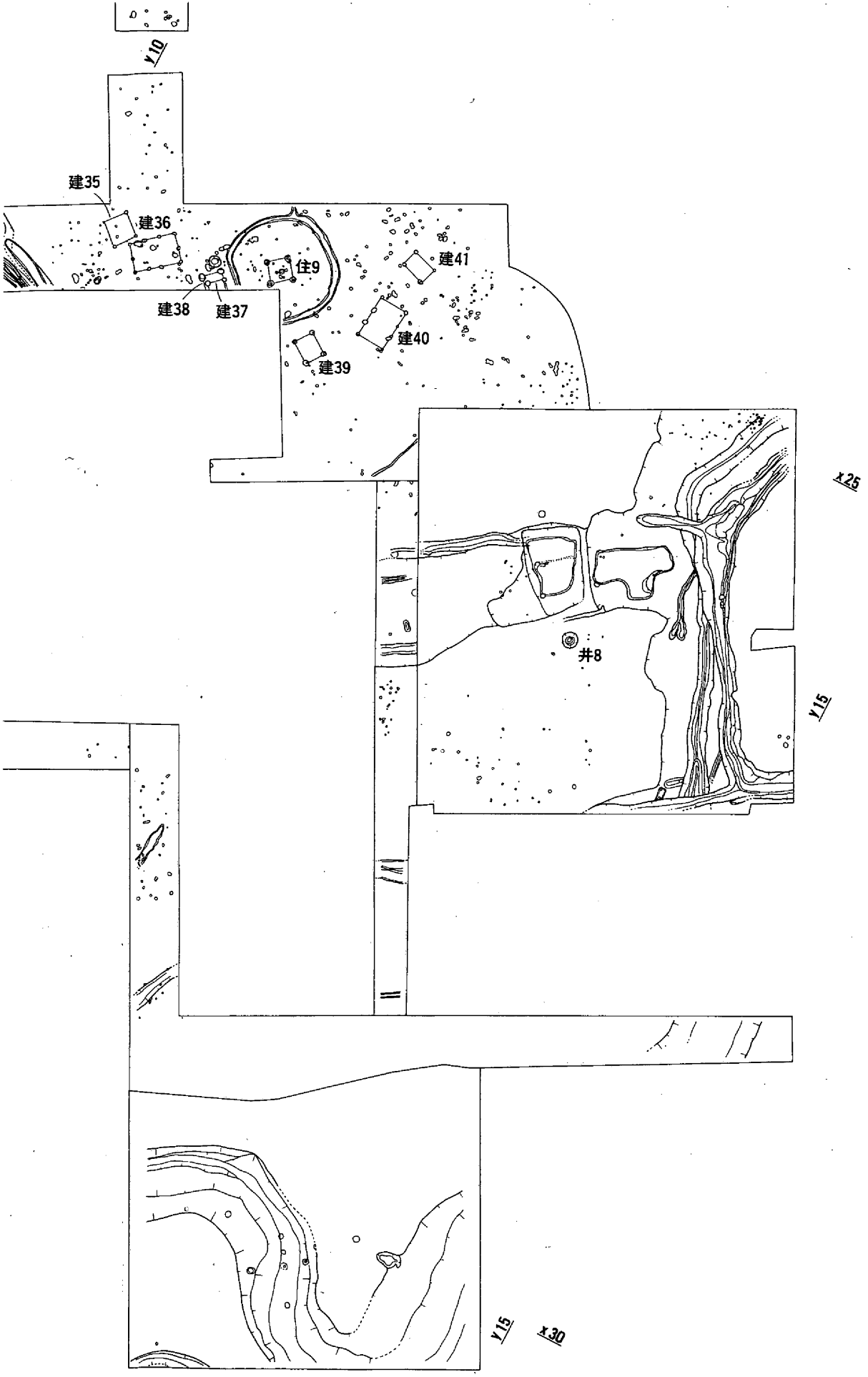
1995年 3 月20日　印刷
1995年 3 月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市西花尻1325-3
発　行　岡山県教育委員会
岡山市内山下2-4-6
印　刷　サンコー印刷株式会社

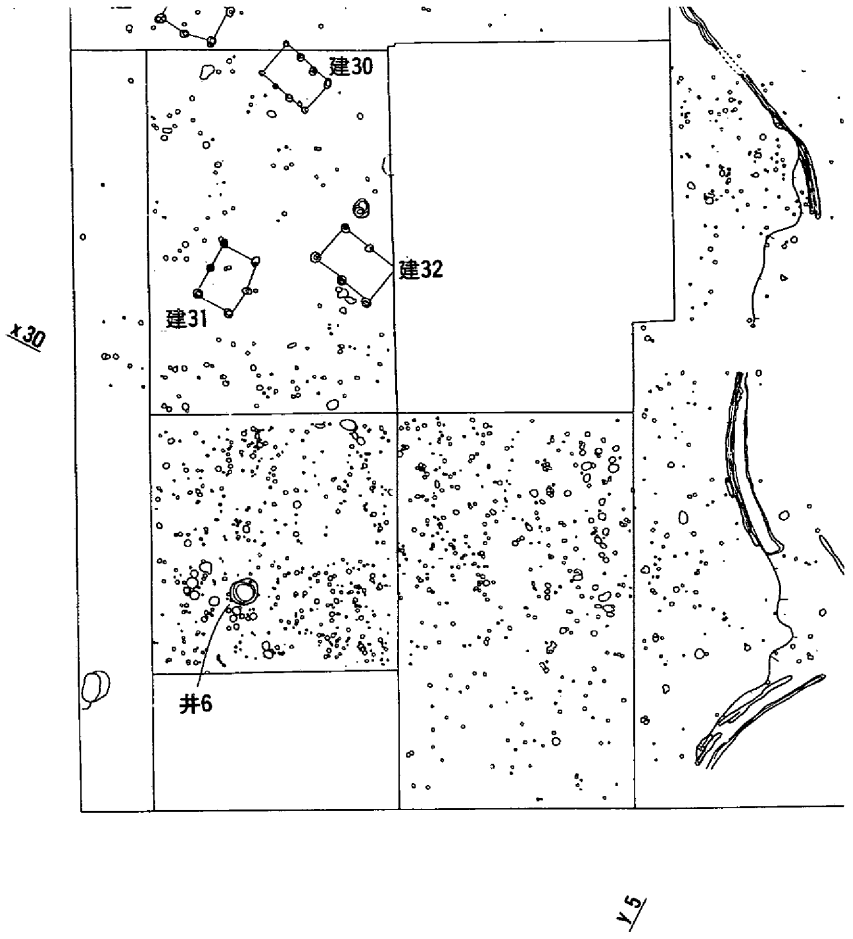

Y10
X20
建17
X20
建24
建25
建21
建19
井4
建26
建20
建23
井5
建22
建27
建28
Y10
建35
建36

x20
Y5
建2
住5
建3
井1
住6
建4
建7
建9
建5
建6
建8
建10
建11
井2
建12
建13
建15
建14
井3
建18
住7
建16
x25
Y5


x 25
建29
建30
建31
建32


Y10
建35
建36
住9
建41
建38
建37
建40
建39
X25
井8
Y15
Y15
X30

付図　弥生時代中期中葉～後期遺構全体図（水田を除く）（1/600）


建30
建32
建31
井6
X30
Y5